

**2019年度
大学院人文科学研究科
講義概要（シラバス）**



法政大学

科目一覽

最新版のシラバスは、法政大学 Web シラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

哲学専攻	[X0000]	言語分析哲学研究Ⅰ-1 [中釜 浩一] 春学期授業/Spring	1
哲学専攻	[X0001]	言語分析哲学研究Ⅰ-2 [中釜 浩一] 秋学期授業/Fall	1
哲学専攻	[X0002]	言語分析哲学研究Ⅱ-1 [松井 久] 春学期授業/Spring	2
哲学専攻	[X0003]	言語分析哲学研究Ⅱ-2 [松井 久] 秋学期授業/Fall	3
哲学専攻	[X0004]	形而上学研究Ⅰ-1 [齋藤 元紀] 春学期授業/Spring	4
哲学専攻	[X0005]	形而上学研究Ⅰ-2 [齋藤 元紀] 秋学期授業/Fall	5
哲学専攻	[X0008]	古代哲学史研究Ⅰ-1 [奥田 和夫] 春学期授業/Spring	6
哲学専攻	[X0009]	古代哲学史研究Ⅰ-2 [奥田 和夫] 秋学期授業/Fall	7
哲学専攻	[X0010]	古代哲学史研究Ⅱ-1 [奥田 和夫] 春学期授業/Spring	8
哲学専攻	[X0011]	古代哲学史研究Ⅱ-2 [奥田 和夫] 秋学期授業/Fall	9
哲学専攻	[X0012]	論理学研究Ⅰ-1 [安東 祐希] 春学期授業/Spring	10
哲学専攻	[X0013]	論理学研究Ⅰ-2 [安東 祐希] 秋学期授業/Fall	11
哲学専攻	[X0014]	論理学研究Ⅱ-1 [計良 隆世] 春学期授業/Spring	11
哲学専攻	[X0015]	論理学研究Ⅱ-2 [計良 隆世] 秋学期授業/Fall	12
哲学専攻	[X0016]	近代倫理学史研究Ⅰ-1 [菅沢 龍文] 春学期授業/Spring	13
哲学専攻	[X0017]	近代倫理学史研究Ⅰ-2 [菅沢 龍文] 秋学期授業/Fall	14
哲学専攻	[X0018]	近代倫理学史研究Ⅱ-1 [菅沢 龍文] 春学期授業/Spring	15
哲学専攻	[X0019]	近代倫理学史研究Ⅱ-2 [菅沢 龍文] 秋学期授業/Fall	16
哲学専攻	[X0020]	実践哲学研究Ⅰ-1 [山口 誠一] 春学期授業/Spring	17
哲学専攻	[X0021]	実践哲学研究Ⅰ-2 [山口 誠一] 秋学期授業/Fall	18
哲学専攻	[X0028]	現代哲学研究Ⅰ-1 [大池 惣太郎] 春学期授業/Spring	19
哲学専攻	[X0029]	現代哲学研究Ⅰ-2 [大池 惣太郎] 秋学期授業/Fall	20
哲学専攻	[X0030]	科学哲学研究Ⅰ-1 [安孫子 信] 春学期授業/Spring	21
哲学専攻	[X0031]	科学哲学研究Ⅰ-2 [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	22
哲学専攻	[X0032]	科学哲学研究Ⅱ-1 [安孫子 信] 春学期授業/Spring	23
哲学専攻	[X0033]	科学哲学研究Ⅱ-2 [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	24
哲学専攻	[X0034]	比較思想研究Ⅰ-1 [笠原 賢介] 春学期授業/Spring	25
哲学専攻	[X0035]	比較思想研究Ⅰ-2 [笠原 賢介] 秋学期授業/Fall	26
哲学専攻	[X0038]	近代西洋哲学研究Ⅰ-1 [古賀 祥二郎] 春学期授業/Spring	27
哲学専攻	[X0039]	近代西洋哲学研究Ⅰ-2 [古賀 祥二郎] 秋学期授業/Fall	28
哲学専攻	[X0040]	近代フランス哲学史研究Ⅰ-1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	29
哲学専攻	[X0041]	近代フランス哲学史研究Ⅰ-2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	30
哲学専攻	[X0042]	近代フランス哲学史研究Ⅱ-1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	31
哲学専攻	[X0043]	近代フランス哲学史研究Ⅱ-2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	32
哲学専攻	[X0046]	超越論哲学研究Ⅱ-1 [大森 一三] 春学期授業/Spring	33
哲学専攻	[X0047]	超越論哲学研究Ⅱ-2 [鶴澤 和彦] 秋学期授業/Fall	34
哲学専攻	[X0048]	ヨーロッパ精神史研究Ⅰ-1 [半田 勝彦] 春学期授業/Spring	35
哲学専攻	[X0049]	ヨーロッパ精神史研究Ⅰ-2 [半田 勝彦] 秋学期授業/Fall	36
哲学専攻	[X0050]	ヨーロッパ精神史研究Ⅱ-1 [長谷川 悦宏] 春学期授業/Spring	36
哲学専攻	[X0051]	ヨーロッパ精神史研究Ⅱ-2 [長谷川 悦宏] 秋学期授業/Fall	37
哲学専攻	[X0052]	法哲学研究 1 [内藤 淳] 春学期授業/Spring	37
哲学専攻	[X0053]	法哲学研究 2 [内藤 淳] 秋学期授業/Fall	38
哲学専攻	[X0054]	哲学ドイツ語研究 1 [笠原 賢介] 春学期授業/Spring	39
哲学専攻	[X0055]	哲学ドイツ語研究 2 [笠原 賢介] 秋学期授業/Fall	40
哲学専攻	[X0056]	哲学フランス語研究 1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	41
哲学専攻	[X0057]	哲学フランス語研究 2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	42
哲学専攻	[X0058]	哲学基礎研究Ⅰ [松井 久] 春学期授業/Spring	43
哲学専攻	[X0059]	哲学基礎研究Ⅱ [上野 修] 秋学期授業/Fall	44
哲学専攻	[X0060]	日本思想史研究Ⅰ-1 [西塚 俊太] 春学期授業/Spring	45
哲学専攻	[X0061]	日本思想史研究Ⅰ-2 [西塚 俊太] 秋学期授業/Fall	46
哲学専攻	[X0062]	日本思想史研究Ⅱ-1 [西塚 俊太] 春学期授業/Spring	47
哲学専攻	[X0063]	日本思想史研究Ⅱ-2 [西塚 俊太] 秋学期授業/Fall	48
哲学専攻	[X0064]	現象学研究Ⅰ-1 [君嶋 泰明] 春学期授業/Spring	49

哲学専攻	[X0065] 現象学研究 I - 2 [君嶋 泰明] 秋学期授業/Fall	50
哲学専攻	哲学特殊研究 1 [君嶋 泰明] 春学期授業/Spring	51
哲学専攻	哲学特殊研究 2 [君嶋 泰明] 秋学期授業/Fall	52
哲学専攻	哲学特殊研究 1 [安孫子 信] 春学期授業/Spring	53
哲学専攻	哲学特殊研究 2 [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	54
哲学専攻	[X0071] 哲学特殊研究 1 [山口 誠一] 春学期授業/Spring	55
哲学専攻	[X0072] 哲学特殊研究 2 [山口 誠一] 秋学期授業/Fall	56
哲学専攻	[X0073] 哲学特殊研究 1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	57
哲学専攻	[X0074] 哲学特殊研究 2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	58
哲学専攻	[X0075] 言語分析哲学特殊講義 1 [中釜 浩一] 春学期授業/Spring	59
哲学専攻	[X0076] 言語分析哲学特殊講義 2 [中釜 浩一] 秋学期授業/Fall	59
哲学専攻	[X0077] 古代哲学史特殊講義 1 [奥田 和夫] 春学期授業/Spring	60
哲学専攻	[X0078] 古代哲学史特殊講義 2 [奥田 和夫] 秋学期授業/Fall	61
哲学専攻	[X0079] 論理学特殊講義 1 [安東 祐希] 春学期授業/Spring	62
哲学専攻	[X0080] 論理学特殊講義 2 [安東 祐希] 秋学期授業/Fall	62
哲学専攻	[X0081] 近代倫理学史特殊講義 1 [菅沢 龍文] 春学期授業/Spring	63
哲学専攻	[X0082] 近代倫理学史特殊講義 2 [菅沢 龍文] 秋学期授業/Fall	64
哲学専攻	[X0083] 実践哲学特殊講義 1 [山口 誠一] 春学期授業/Spring	65
哲学専攻	[X0084] 実践哲学特殊講義 2 [山口 誠一] 秋学期授業/Fall	66
哲学専攻	[X0087] 科学哲学特殊講義 1 [安孫子 信] 春学期授業/Spring	67
哲学専攻	[X0088] 科学哲学特殊講義 2 [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	68
哲学専攻	[X0089] 比較思想特殊講義 1 [笠原 賢介] 春学期授業/Spring	69
哲学専攻	[X0090] 比較思想特殊講義 2 [笠原 賢介] 秋学期授業/Fall	70
哲学専攻	[X0091] 近代フランス哲学史特殊講義 1 [酒井 健] 春学期授業/Spring	71
哲学専攻	[X0092] 近代フランス哲学史特殊講義 2 [酒井 健] 秋学期授業/Fall	72
哲学専攻	[X0093] 法哲学特殊講義 1 [内藤 淳] 春学期授業/Spring	73
哲学専攻	[X0094] 法哲学特殊講義 2 [内藤 淳] 秋学期授業/Fall	74
哲学専攻	[X0095] 現象学特殊講義 1 [君嶋 泰明] 春学期授業/Spring	75
哲学専攻	[X0096] 現象学特殊講義 2 [君嶋 泰明] 秋学期授業/Fall	76
哲学専攻	[X0097] 日本思想史特殊講義 1 [西塚 俊太] 春学期授業/Spring	77
哲学専攻	[X0098] 日本思想史特殊講義 2 [西塚 俊太] 秋学期授業/Fall	78
日本文学専攻	[X0100] 日本文芸学 A [安藤 宏] 春学期授業/Spring	79
日本文学専攻	[X0101] 日本文芸学 B [安藤 宏] 秋学期授業/Fall	79
日本文学専攻	[X0102] 日本文芸批評史 A [田中 和生] 春学期授業/Spring	80
日本文学専攻	[X0103] 日本文芸批評史 B [田中 和生] 秋学期授業/Fall	81
日本文学専攻	[X0104] 日本古代文芸原典研究 A [坂本 勝] 春学期授業/Spring	82
日本文学専攻	[X0105] 日本古代文芸原典研究 B [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	83
日本文学専攻	[X0106] 日本古代文芸演習 A [加藤 昌嘉] 春学期授業/Spring	83
日本文学専攻	[X0107] 日本古代文芸演習 B [加藤 昌嘉] 秋学期授業/Fall	84
日本文学専攻	[X0110] 日本中世文芸原典研究 A [阿部 真弓] 春学期授業/Spring	84
日本文学専攻	[X0111] 日本中世文芸原典研究 B [阿部 真弓] 秋学期授業/Fall	85
日本文学専攻	[X0112] 日本中世文芸演習 A [伊海 孝充] 春学期授業/Spring	86
日本文学専攻	[X0113] 日本中世文芸演習 B [伊海 孝充] 秋学期授業/Fall	87
日本文学専攻	[X0114] 日本近世文芸原典研究 A [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	88
日本文学専攻	[X0115] 日本近世文芸原典研究 B [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	89
日本文学専攻	[X0116] 日本近世文芸演習 A [高木 元] 春学期授業/Spring	90
日本文学専攻	[X0117] 日本近世文芸演習 B [高木 元] 秋学期授業/Fall	91
日本文学専攻	[X0118] 日本近代文芸原典研究 A [山田 俊治] 春学期授業/Spring	92
日本文学専攻	[X0119] 日本近代文芸原典研究 B [山田 俊治] 秋学期授業/Fall	92
日本文学専攻	[X0120] 日本近代文芸演習 I A [藤村 耕治] 春学期授業/Spring	93
日本文学専攻	[X0121] 日本近代文芸演習 I B [藤村 耕治] 秋学期授業/Fall	94
日本文学専攻	[X0124] 日本言語学原典研究 A [間宮 厚司] 春学期授業/Spring	95
日本文学専攻	[X0125] 日本言語学原典研究 B [間宮 厚司] 秋学期授業/Fall	96
日本文学専攻	[X0126] 日本言語学演習 A [尾谷 昌則] 春学期授業/Spring	97
日本文学専攻	[X0127] 日本言語学演習 B [尾谷 昌則] 秋学期授業/Fall	98
日本文学専攻	[X0128] 日本語学特講 A [間宮 厚司] 春学期授業/Spring	99
日本文学専攻	[X0129] 日本語学特講 B [尾谷 昌則] 秋学期授業/Fall	100

日本文学専攻	[X0130]	沖縄文芸史A [竹内 重雄] 春学期授業/Spring	101
日本文学専攻	[X0131]	沖縄文芸史B [竹内 重雄] 秋学期授業/Fall	102
日本文学専攻	[X0132]	中国文学A [遠藤 星希] 春学期授業/Spring	103
日本文学専攻	[X0133]	中国文学B [遠藤 星希] 秋学期授業/Fall	104
日本文学専攻	[X0134]	日本文芸特講I A (文芸と音楽) [スティーヴン・G・ネルソン] 春学期授業/Spring	105
日本文学専攻	[X0135]	日本文芸特講I B (文芸と音楽) [スティーヴン・G・ネルソン] 秋学期授業/Fall	106
日本文学専攻	[X0136]	日本文芸特講II A (アートマネジメント研究) [中沢 けい] 春学期授業/Spring	107
日本文学専攻	[X0137]	日本文芸特講II B (アートマネジメント研究) [中沢 けい] 秋学期授業/Fall	107
日本文学専攻	[X0138]	国語と文芸教育法A [須貝 千里] 春学期授業/Spring	108
日本文学専攻	[X0139]	国語と文芸教育法B [須貝 千里] 秋学期授業/Fall	109
日本文学専攻	[X0140]	女性文学A [藤木 直実] 春学期授業/Spring	110
日本文学専攻	[X0141]	女性文学B [藤木 直実] 秋学期授業/Fall	111
日本文学専攻	[X0142]	文芸と視聴覚芸術A [越川 道夫] 春学期授業/Spring	112
日本文学専攻	[X0143]	文芸と視聴覚芸術B [越川 道夫] 秋学期授業/Fall	112
日本文学専攻	[X0144]	学際的文学論A (文学の境界領域、文学と宗教等) [リネベ・アンドレ] 春学期授業/Spring	113
日本文学専攻	[X0145]	学際的文学論B (文学の境界領域、文学と宗教等) [リネベ・アンドレ] 秋学期授業/Fall	114
日本文学専攻	[X0146]	文学と風土A [高橋 博史] 春学期授業/Spring	115
日本文学専攻	[X0147]	文学と風土B [高橋 博史] 秋学期授業/Fall	115
日本文学専攻	[X0148]	能楽作品研究A [山中 玲子] 春学期授業/Spring	116
日本文学専攻	[X0149]	能楽作品研究B [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	117
日本文学専攻	[X0152]	現代能楽論 [山中 玲子、観世 鏡之丞、観世 喜正、中司 由起子] 秋学期授業/Fall	118
日本文学専攻	[X0153]	日本語・日本文学の基礎A [竹林 一志] 春学期授業/Spring	119
日本文学専攻	[X0154]	日本語・日本文学の基礎B [竹林 一志] 秋学期授業/Fall	120
日本文学専攻	[X0157]	表現と社会 [内藤 裕之] 春学期授業/Spring	121
日本文学専攻	[X0158]	編集理論 [仲俣 暁生] 秋学期授業/Fall	122
日本文学専攻	[X0159]	作家特殊研究A [赤坂 真理] 春学期授業/Spring	123
日本文学専攻	[X0160]	作家特殊研究B [赤坂 真理] 春学期授業/Spring	124
日本文学専攻	[X0161]	文芸創作研究A [島田 雅彦] 春学期授業/Spring	125
日本文学専攻	[X0162]	文芸創作研究B [島田 雅彦] 秋学期授業/Fall	126
日本文学専攻	[X0163]	日本文芸特殊研究I A [坂本 勝] 春学期授業/Spring	127
日本文学専攻	[X0164]	日本文芸特殊研究I B [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	127
日本文学専攻	[X0165]	日本文芸特殊研究II A [小秋元 段] 春学期授業/Spring	128
日本文学専攻	[X0166]	日本文芸特殊研究II B [小秋元 段] 秋学期授業/Fall	128
日本文学専攻	[X0167]	日本文芸特殊研究III A [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	129
日本文学専攻	[X0168]	日本文芸特殊研究III B [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	129
日本文学専攻	[X0169]	日本文芸特殊研究IV A [スティーヴン・G・ネルソン] 春学期授業/Spring	130
日本文学専攻	[X0170]	日本文芸特殊研究IV B [スティーヴン・G・ネルソン] 秋学期授業/Fall	131
日本文学専攻	[X0171]	日本文学・国際日本学基礎演習 [阿部 亮太] 秋学期授業/Fall	132
日本文学専攻	[X0172]	日本文学・国際日本学論文作成基礎実習 [金子 広幸] 秋学期授業/Fall	133
日本文学専攻	[X0600]	日本文学特殊演習A [加藤 昌嘉] 春学期授業/Spring	134
日本文学専攻	[X0601]	日本文学特殊演習B [加藤 昌嘉] 秋学期授業/Fall	134
日本文学専攻	[X0602]	日本文学特殊演習A [坂本 勝] 春学期授業/Spring	135
日本文学専攻	[X0603]	日本文学特殊演習B [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	135
日本文学専攻	[X0606]	日本文学特殊演習A [伊海 孝充] 春学期授業/Spring	136
日本文学専攻	[X0607]	日本文学特殊演習B [伊海 孝充] 秋学期授業/Fall	137
日本文学専攻	[X0608]	日本文学特殊演習A [スティーヴン・G・ネルソン] 春学期授業/Spring	137
日本文学専攻	[X0609]	日本文学特殊演習B [スティーヴン・G・ネルソン] 秋学期授業/Fall	138
日本文学専攻	[X0610]	日本文学特殊演習A [山田 俊治] 春学期授業/Spring	139
日本文学専攻	[X0611]	日本文学特殊演習B [山田 俊治] 秋学期授業/Fall	140
日本文学専攻	[X0612]	日本文学特殊演習A [藤村 耕治] 春学期授業/Spring	140
日本文学専攻	[X0613]	日本文学特殊演習B [藤村 耕治] 秋学期授業/Fall	141
日本文学専攻	[X0614]	日本文学特殊演習A [山中 玲子] 春学期授業/Spring	142
日本文学専攻	[X0615]	日本文学特殊演習B [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	143
日本文学専攻	[X0618]	日本文学特殊演習A [田中 和生] 春学期授業/Spring	144
日本文学専攻	[X0619]	日本文学特殊演習B [田中 和生] 秋学期授業/Fall	145
日本文学専攻	[X0620]	日本文学特殊演習A [尾谷 昌則] 春学期授業/Spring	145
日本文学専攻	[X0621]	日本文学特殊演習B [尾谷 昌則] 秋学期授業/Fall	146

日本文学専攻	[X0622]	日本文芸学特殊研究A [安藤 宏] 春学期授業/Spring	147
日本文学専攻	[X0623]	日本文芸学特殊研究B [安藤 宏] 秋学期授業/Fall	148
日本文学専攻	[X0624]	日本文芸批評史特殊研究A [田中 和生] 春学期授業/Spring	148
日本文学専攻	[X0625]	日本文芸批評史特殊研究B [田中 和生] 秋学期授業/Fall	149
日本文学専攻	[X0626]	日本古代文芸特殊研究A [坂本 勝] 春学期授業/Spring	150
日本文学専攻	[X0627]	日本古代文芸特殊研究B [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	151
日本文学専攻	[X0628]	日本中世文芸特殊研究A [阿部 真弓] 春学期授業/Spring	152
日本文学専攻	[X0629]	日本中世文芸特殊研究B [阿部 真弓] 秋学期授業/Fall	153
日本文学専攻	[X0630]	日本近世文芸特殊研究A [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	154
日本文学専攻	[X0631]	日本近世文芸特殊研究B [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	155
日本文学専攻	[X0632]	日本近代文芸特殊研究A [山田 俊治] 春学期授業/Spring	156
日本文学専攻	[X0633]	日本近代文芸特殊研究B [山田 俊治] 秋学期授業/Fall	157
日本文学専攻	[X0634]	日本言語学特殊研究A [間宮 厚司] 春学期授業/Spring	157
日本文学専攻	[X0635]	日本言語学特殊研究B [間宮 厚司] 秋学期授業/Fall	158
英文学専攻	[X0202]	英文学思潮研究第二 (文化研究) A [若島 正] 春学期集中/Intensive(Spring)	159
英文学専攻	[X0203]	英文学思潮研究第二 (文化研究) B [若島 正] 秋学期集中/Intensive(Fall)	160
英文学専攻	[X0208]	英文学特殊研究第一 (British Fiction) A [丹治 愛] 春学期授業/Spring	161
英文学専攻	[X0209]	英文学特殊研究第一 (British Fiction) B [丹治 愛] 秋学期授業/Fall	162
英文学専攻	[X0212]	米文学特殊研究第一 (文学史) A [利根川 真紀] 春学期授業/Spring	163
英文学専攻	[X0213]	米文学特殊研究第一 (文学史) B [利根川 真紀] 秋学期授業/Fall	164
英文学専攻	[X0218]	英米文学演習第二 (American Fiction) A [宮川 雅] 春学期授業/Spring	165
英文学専攻	[X0219]	英米文学演習第二 (American Fiction) B [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	166
英文学専攻	[X0220]	英米文学演習第三 (British Fiction) A [丹治 愛] 春学期授業/Spring	167
英文学専攻	[X0221]	英米文学演習第三 (British Fiction) B [丹治 愛] 秋学期授業/Fall	168
英文学専攻	[X0224]	英語学演習 (英語史・言語変化理論) A [大沢 ふよう] 春学期授業/Spring	168
英文学専攻	[X0225]	英語学演習 (英語史・言語変化理論) B [大沢 ふよう] 秋学期授業/Fall	169
英文学専攻	[X0226]	言語学演習 (応用言語学) A [川崎 貴子] 春学期授業/Spring	170
英文学専攻	[X0227]	言語学演習 (応用言語学) B [川崎 貴子] 秋学期授業/Fall	171
英文学専攻	[X0228]	英語学特殊研究第一 (英文法・文体論・語用論) A [椎名 美智] 春学期授業/Spring	172
英文学専攻	[X0229]	英語学特殊研究第一 (英文法・文体論・語用論) B [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	173
英文学専攻	[X0233]	言語学特殊研究 (理論言語学・認知科学) B [石川 潔] 秋学期授業/Fall	174
英文学専攻	[X0234]	英語教育学研究A [印南 洋] 春学期授業/Spring	175
英文学専攻	[X0235]	英語教育学研究B [印南 洋] 秋学期授業/Fall	176
英文学専攻	[X0236]	英語発音法A [高橋 豊美] 春学期授業/Spring	177
英文学専攻	[X0237]	英語発音法B [高橋 豊美] 秋学期授業/Fall	178
英文学専攻	[X0238]	英語表現演習A [ニアル・ムルター] 春学期授業/Spring	179
英文学専攻	[X0239]	英語表現演習B [ニアル・ムルター] 秋学期授業/Fall	179
英文学専攻	[X0240]	Fiction 演習 I A [宮川 雅] 春学期授業/Spring	180
英文学専攻	[X0241]	Fiction 演習 I B [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	181
英文学専攻	[X0246]	文学方法論A [宮川 雅] 春学期授業/Spring	182
英文学専攻	[X0247]	文学方法論B [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	183
英文学専攻	[X0248]	英語音声・応用研究A [田嶋 圭一] 春学期授業/Spring	184
英文学専攻	[X0249]	英語音声・応用研究B [田嶋 圭一] 秋学期授業/Fall	185
英文学専攻	[X0250]	理論言語学・認知科学A [ブライアン・ウィスナー] 春学期授業/Spring	186
英文学専攻	[X0252]	応用言語学・理論研究A [熊澤 孝昭] 春学期授業/Spring	187
英文学専攻	[X0253]	応用言語学・理論研究B [熊澤 孝昭] 秋学期授業/Fall	188
英文学専攻	[X0256]	言語科学方法論A [石川 潔] 春学期授業/Spring	188
英文学専攻	[X0257]	言語科学方法論B [ブライアン・ウィスナー] 秋学期授業/Fall	189
英文学専攻	[X0258]	音声言語科学特論 [田嶋 圭一] 春学期授業/Spring	190
英文学専攻	[X0259]	音声言語科学演習 [田嶋 圭一] 秋学期授業/Fall	191
英文学専攻	[X0260]	比較文学研究A [山下 敦] 春学期授業/Spring	192
英文学専攻	[X0261]	比較文学研究B [山下 敦] 秋学期授業/Fall	193
英文学専攻	[X0264]	Academic English (Effective Writing) A [安部 義治] 春学期授業/Spring	194
英文学専攻	[X0265]	Academic English (Effective Writing) B [安部 義治] 秋学期授業/Fall	195
英文学専攻	[X0266]	Academic English (Oral Presentation) A [安部 義治] 春学期授業/Spring	196
英文学専攻	[X0267]	Academic English (Oral Presentation) B [安部 義治] 秋学期授業/Fall	197
英文学専攻	[X0272]	文学方法論特講A [宮川 雅] 春学期授業/Spring	198

英文学専攻	[X0273]	文学方法論特講B [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	199
英文学専攻	[X0274]	言語科学方法論特講A [石川 潔] 春学期授業/Spring	200
英文学専攻	[X0275]	言語科学方法論特講B [ブライアン・ウィスナー] 秋学期授業/Fall	201
英文学専攻	[X0276]	英米文学特講ⅠA [丹治 愛] 春学期授業/Spring	202
英文学専攻	[X0277]	英米文学特講ⅠB [丹治 愛] 秋学期授業/Fall	203
英文学専攻	[X0278]	英米文学特講ⅡA [丹治 愛] 春学期授業/Spring	204
英文学専攻	[X0279]	英米文学特講ⅡB [丹治 愛] 秋学期授業/Fall	205
英文学専攻	[X0280]	英米文学特講ⅢA [利根川 真紀] 春学期授業/Spring	205
英文学専攻	[X0281]	英米文学特講ⅢB [利根川 真紀] 秋学期授業/Fall	206
英文学専攻	[X0282]	英米文学特講ⅣA [宮川 雅] 春学期授業/Spring	207
英文学専攻	[X0283]	英米文学特講ⅣB [宮川 雅] 秋学期授業/Fall	208
英文学専攻	[X0284]	英米文学特講ⅤA [山下 敦] 春学期授業/Spring	209
英文学専攻	[X0285]	英米文学特講ⅤB [山下 敦] 秋学期授業/Fall	210
英文学専攻	[X0286]	言語科学特講ⅠA [椎名 美智] 春学期授業/Spring	211
英文学専攻	[X0287]	言語科学特講ⅠB [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	212
英文学専攻	[X0288]	言語科学特講ⅡA [大沢 ふよう] 春学期授業/Spring	213
英文学専攻	[X0289]	言語科学特講ⅡB [大沢 ふよう] 秋学期授業/Fall	214
英文学専攻	[X0291]	言語科学特講ⅢB [石川 潔] 秋学期授業/Fall	215
英文学専攻	[X0292]	言語科学特講ⅣA [川崎 貴子] 春学期授業/Spring	216
英文学専攻	[X0293]	言語科学特講ⅣB [川崎 貴子] 秋学期授業/Fall	217
英文学専攻	[X0294]	言語科学特講ⅤA [ブライアン・ウィスナー] 春学期授業/Spring	218
史学専攻	[X0300]	日本史学研究Ⅰ [小倉 慈司] 春学期授業/Spring	219
史学専攻	[X0301]	日本史学研究Ⅱ [及川 亘] 春学期授業/Spring	220
史学専攻	[X0302]	日本史学原典研究Ⅰ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	221
史学専攻	[X0303]	日本史学原典研究Ⅱ [大塚 紀弘] 秋学期授業/Fall	222
史学専攻	[X0304]	日本古代史特殊研究Ⅰ [山口 英男] 春学期授業/Spring	222
史学専攻	[X0305]	日本古代史特殊研究Ⅱ [山口 英男] 秋学期授業/Fall	223
史学専攻	[X0306]	日本中世史特殊研究Ⅰ [末柄 豊] 春学期授業/Spring	224
史学専攻	[X0307]	日本中世史特殊研究Ⅱ [末柄 豊] 秋学期授業/Fall	225
史学専攻	[X0308]	日本中世史特殊研究Ⅲ [仁平 義孝] 春学期授業/Spring	225
史学専攻	[X0309]	日本中世史特殊研究Ⅳ [仁平 義孝] 秋学期授業/Fall	226
史学専攻	[X0310]	日本近世史特殊研究Ⅰ [白川部 達夫] 春学期授業/Spring	226
史学専攻	[X0311]	日本近世史特殊研究Ⅱ [白川部 達夫] 秋学期授業/Fall	227
史学専攻	[X0312]	日本近世史特殊研究Ⅲ [西沢 淳男] 春学期授業/Spring	227
史学専攻	[X0313]	日本近世史特殊研究Ⅳ [西沢 淳男] 秋学期授業/Fall	228
史学専攻	[X0314]	日本近代史特殊研究Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	228
史学専攻	[X0315]	日本近代史特殊研究Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	229
史学専攻	[X0316]	日本近代史特殊研究Ⅲ [森田 貴子] 春学期授業/Spring	230
史学専攻	[X0317]	日本近代史特殊研究Ⅳ [森田 貴子] 秋学期授業/Fall	231
史学専攻	[X0318]	日本考古学特殊研究Ⅰ [阿部 朝衛] 春学期授業/Spring	231
史学専攻	[X0319]	日本考古学特殊研究Ⅱ [阿部 朝衛] 秋学期授業/Fall	232
史学専攻	[X0320]	日本考古学特殊研究Ⅲ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	233
史学専攻	[X0321]	日本考古学特殊研究Ⅳ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	234
史学専攻	[X0322]	日本古代史演習Ⅰ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	235
史学専攻	[X0323]	日本古代史演習Ⅱ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	236
史学専攻	[X0324]	日本古代史演習Ⅲ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	237
史学専攻	[X0325]	日本古代史演習Ⅳ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	238
史学専攻	[X0326]	日本中世史演習Ⅰ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	239
史学専攻	[X0327]	日本中世史演習Ⅱ [大塚 紀弘] 秋学期授業/Fall	240
史学専攻	[X0328]	日本近世史演習Ⅰ [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring	240
史学専攻	[X0329]	日本近世史演習Ⅱ [松本 剣志郎] 秋学期授業/Fall	241
史学専攻	[X0330]	日本近代史演習Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	241
史学専攻	[X0331]	日本近代史演習Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	242
史学専攻	[X0332]	日本考古学演習Ⅰ [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	243
史学専攻	[X0333]	日本考古学演習Ⅱ [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	244
史学専攻	[X0334]	日本古文書学研究Ⅰ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	245
史学専攻	[X0335]	日本古文書学研究Ⅱ [大塚 紀弘] 秋学期授業/Fall	246

史学専攻	[X0336]	日本古代史研究Ⅰ [春名 宏昭] 春学期授業/Spring	246
史学専攻	[X0337]	日本古代史研究Ⅱ [春名 宏昭] 秋学期授業/Fall	247
史学専攻	[X0338]	日本古代史料研究 [山口 英男] 春学期授業/Spring	248
史学専攻	[X0339]	日本中世史研究 [及川 亘] 秋学期授業/Fall	249
史学専攻	[X0340]	日本近世史料学研究Ⅰ [松本 劍志郎] 春学期授業/Spring	250
史学専攻	[X0341]	日本近世史料学研究Ⅱ [松本 劍志郎] 秋学期授業/Fall	251
史学専攻	[X0342]	日本近代史研究Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	251
史学専攻	[X0343]	日本近代史研究Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	252
史学専攻	[X0344]	沖縄学入門Ⅰ [マルコ・ティネッロ] 春学期授業/Spring	253
史学専攻	[X0345]	沖縄学入門Ⅱ [マルコ・ティネッロ] 秋学期授業/Fall	254
史学専攻	[X0346]	東洋史学特殊研究Ⅰ [塩沢 裕仁] 春学期授業/Spring	255
史学専攻	[X0347]	東洋史学特殊研究Ⅱ [塩沢 裕仁] 秋学期授業/Fall	255
史学専攻	[X0348]	東洋史学特殊研究Ⅲ [大島 誠二] 春学期授業/Spring	256
史学専攻	[X0349]	東洋史学特殊研究Ⅳ [大島 誠二] 秋学期授業/Fall	257
史学専攻	[X0350]	東洋史学演習Ⅰ [齋藤 勝] 春学期授業/Spring	258
史学専攻	[X0351]	東洋史学演習Ⅱ [齋藤 勝] 秋学期授業/Fall	258
史学専攻	[X0352]	東洋史学演習Ⅲ [水上 和則] 春学期授業/Spring	259
史学専攻	[X0353]	東洋史学演習Ⅳ [水上 和則] 秋学期授業/Fall	260
史学専攻	[X0354]	東洋史学演習Ⅴ [久野 美樹] 春学期授業/Spring	261
史学専攻	[X0355]	東洋史学演習Ⅵ [久野 美樹] 秋学期授業/Fall	261
史学専攻	[X0356]	東洋古代史研究Ⅰ [齋藤 勝] 春学期授業/Spring	262
史学専攻	[X0357]	東洋古代史研究Ⅱ [齋藤 勝] 秋学期授業/Fall	262
史学専攻	[X0361]	東洋近代史研究Ⅱ [芦沢 知絵] 秋学期授業/Fall	263
史学専攻	[X0362]	西洋史学特殊研究Ⅰ [松原 俊文] 春学期授業/Spring	263
史学専攻	[X0363]	西洋史学特殊研究Ⅱ [松原 俊文] 秋学期授業/Fall	264
史学専攻	[X0364]	西洋史学特殊研究Ⅲ [池本 今日子] 春学期授業/Spring	265
史学専攻	[X0365]	西洋史学特殊研究Ⅳ [池本 今日子] 秋学期授業/Fall	266
史学専攻	[X0366]	西洋史学特殊研究Ⅴ [宮崎 亮] 春学期授業/Spring	266
史学専攻	[X0367]	西洋史学特殊研究Ⅵ [宮崎 亮] 秋学期授業/Fall	267
史学専攻	[X0368]	西洋史学演習Ⅰ [後藤 篤子] 春学期授業/Spring	268
史学専攻	[X0369]	西洋史学演習Ⅱ [後藤 篤子] 秋学期授業/Fall	269
史学専攻	[X0370]	西洋史学演習Ⅲ [高澤 紀恵] 春学期授業/Spring	270
史学専攻	[X0371]	西洋史学演習Ⅳ [高澤 紀恵] 秋学期授業/Fall	271
史学専攻	[X0372]	西洋史学演習Ⅴ [中村 純] 春学期授業/Spring	271
史学専攻	[X0373]	西洋史学演習Ⅵ [中村 純] 秋学期授業/Fall	272
史学専攻	[X0374]	西洋古代史研究Ⅰ [後藤 篤子] 春学期授業/Spring	273
史学専攻	[X0375]	西洋古代史研究Ⅱ [後藤 篤子] 秋学期授業/Fall	274
史学専攻	[X0376]	西洋中世史研究Ⅰ [小沼 明生] 春学期授業/Spring	275
史学専攻	[X0377]	西洋中世史研究Ⅱ [小沼 明生] 秋学期授業/Fall	276
史学専攻	[X0378]	ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅰ [高澤 紀恵] 春学期授業/Spring	277
史学専攻	[X0379]	ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ [高澤 紀恵] 秋学期授業/Fall	278
史学専攻	[X0380]	アーカイブズ学Ⅰ [渡辺 浩一] 春学期授業/Spring	278
史学専攻	[X0381]	アーカイブズ学Ⅱ [渡辺 浩一] 秋学期授業/Fall	279
史学専攻	[X0382]	文書館管理研究Ⅰ [齋藤 勝、青木 直己、葦名 ふみ、新井 浩文、岩壁 義光、冨塚 一彦] 春学期授業/Spring	280
史学専攻	[X0383]	文書館管理研究Ⅱ [長井 純市、青木 陸、赤松 道子、石橋 崇雄、草野 佳矢子、山田 太 造、渡辺 浩一] 秋学期授業/Fall	281
史学専攻	[X0384]	記録史料学研究Ⅰ [松本 劍志郎] 春学期授業/Spring	282
史学専攻	[X0385]	記録史料学演習Ⅰ [松本 劍志郎] 秋学期授業/Fall	282
史学専攻	[X0386]	記録史料学研究Ⅱ [岩壁 義光] 春学期授業/Spring	283
史学専攻	[X0387]	記録史料学演習Ⅱ [岩壁 義光] 秋学期授業/Fall	284
史学専攻	[X0388]	外書講読Ⅰ [池本 今日子] 春学期授業/Spring	285
史学専攻	[X0389]	外書講読Ⅱ [池本 今日子] 秋学期授業/Fall	285
史学専攻	[X1302]	史学特殊演習AⅠ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	286
史学専攻	[X1303]	史学特殊演習AⅡ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	287
史学専攻	[X1304]	史学特殊演習AⅠ [大塚 紀弘] 春学期授業/Spring	288
史学専攻	[X1305]	史学特殊演習AⅡ [大塚 紀弘] 秋学期授業/Fall	288

史学専攻	[X1306]	史学特殊演習 A I	[松本 劍志郎]	春学期授業/Spring	289
史学専攻	[X1307]	史学特殊演習 A II	[松本 劍志郎]	秋学期授業/Fall	289
史学専攻	[X1308]	史学特殊演習 A I	[長井 純市]	春学期授業/Spring	290
史学専攻	[X1309]	史学特殊演習 A II	[長井 純市]	秋学期授業/Fall	291
史学専攻	[X1310]	史学特殊演習 A I	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	292
史学専攻	[X1311]	史学特殊演習 A II	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	293
史学専攻	[X1312]	日本史学特殊講義 A I	[阿部 朝衛]	春学期授業/Spring	294
史学専攻	[X1313]	日本史学特殊講義 A II	[阿部 朝衛]	秋学期授業/Fall	294
史学専攻	[X1314]	日本史学特殊講義 B I	[山口 英男]	春学期授業/Spring	295
史学専攻	[X1315]	日本史学特殊講義 B II	[山口 英男]	秋学期授業/Fall	296
史学専攻	[X1316]	日本史学特殊講義 C I	[末柄 豊]	春学期授業/Spring	297
史学専攻	[X1317]	日本史学特殊講義 C II	[末柄 豊]	秋学期授業/Fall	298
史学専攻	[X1318]	日本史学特殊講義 D I	[白川部 達夫]	春学期授業/Spring	298
史学専攻	[X1319]	日本史学特殊講義 D II	[白川部 達夫]	秋学期授業/Fall	299
史学専攻	[X1320]	日本史学特殊講義 E I	[森田 貴子]	春学期授業/Spring	299
史学専攻	[X1321]	日本史学特殊講義 E II	[森田 貴子]	秋学期授業/Fall	300
史学専攻	[X1322]	東洋史学特殊講義 A I	[大島 誠二]	春学期授業/Spring	300
史学専攻	[X1323]	東洋史学特殊講義 A II	[大島 誠二]	秋学期授業/Fall	301
史学専攻	[X1324]	東洋史学特殊講義 B I	[水上 和則]	春学期授業/Spring	302
史学専攻	[X1325]	東洋史学特殊講義 B II	[水上 和則]	秋学期授業/Fall	303
史学専攻	[X1326]	西洋史学特殊講義 A I	[松原 俊文]	春学期授業/Spring	304
史学専攻	[X1327]	西洋史学特殊講義 A II	[松原 俊文]	秋学期授業/Fall	305
史学専攻	[X1328]	西洋史学特殊講義 B I	[池本 今日子]	春学期授業/Spring	306
史学専攻	[X1329]	西洋史学特殊講義 B II	[池本 今日子]	秋学期授業/Fall	307
史学専攻	[X1330]	西洋史学特殊講義 C I	[宮崎 亮]	春学期授業/Spring	307
史学専攻	[X1331]	西洋史学特殊講義 C II	[宮崎 亮]	秋学期授業/Fall	308
史学専攻	[X1332]	史学特殊演習 A I	[小倉 淳一]	春学期授業/Spring	309
史学専攻	[X1333]	史学特殊演習 A II	[小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	310
史学専攻	[X1334]	史学特殊演習 B I	[大塚 紀弘]	春学期授業/Spring	310
史学専攻	[X1335]	史学特殊演習 B II	[大塚 紀弘]	秋学期授業/Fall	311
史学専攻	[X1336]	史学特殊演習 B I	[小口 雅史]	春学期授業/Spring	311
史学専攻	[X1337]	史学特殊演習 B II	[小口 雅史]	秋学期授業/Fall	312
史学専攻	[X1338]	史学特殊演習 B I	[小倉 淳一]	春学期授業/Spring	313
史学専攻	[X1339]	史学特殊演習 B II	[小倉 淳一]	秋学期授業/Fall	314
史学専攻	[X1340]	史学特殊演習 B I	[後藤 篤子]	春学期授業/Spring	314
史学専攻	[X1341]	史学特殊演習 B II	[後藤 篤子]	秋学期授業/Fall	315
史学専攻	[X1342]	史学特殊演習 B I	[長井 純市]	春学期授業/Spring	316
史学専攻	[X1343]	史学特殊演習 B II	[長井 純市]	秋学期授業/Fall	317
史学専攻	[X1344]	史学特殊演習 B I	[松本 劍志郎]	春学期授業/Spring	318
史学専攻	[X1345]	史学特殊演習 B II	[松本 劍志郎]	秋学期授業/Fall	319
地理学専攻	[X0400]	地形学研究 I	[前空 英明]	春学期授業/Spring	319
地理学専攻	[X0401]	地形学研究 II	[前空 英明]	秋学期授業/Fall	320
地理学専攻	[X0402]	地形学演習 I	[前空 英明]	春学期授業/Spring	320
地理学専攻	[X0403]	地形学演習 II	[前空 英明]	秋学期授業/Fall	321
地理学専攻	[X0404]	気候学研究 I	[山口 隆子]	春学期授業/Spring	322
地理学専攻	[X0405]	気候学研究 II	[山口 隆子]	秋学期授業/Fall	323
地理学専攻	[X0406]	気候学演習 I	[山口 隆子]	春学期授業/Spring	324
地理学専攻	[X0407]	気候学演習 II	[山口 隆子]	秋学期授業/Fall	324
地理学専攻	[X0408]	水文学研究 I	[小寺 浩二]	春学期授業/Spring	325
地理学専攻	[X0409]	水文学研究 II	[小寺 浩二]	秋学期授業/Fall	325
地理学専攻	[X0410]	水文学演習 I	[小寺 浩二]	春学期授業/Spring	326
地理学専攻	[X0411]	水文学演習 II	[小寺 浩二]	秋学期授業/Fall	327
地理学専攻	[X0412]	第四紀学研究 I	[藁谷 哲也]	春学期授業/Spring	328
地理学専攻	[X0413]	第四紀学研究 II	[藁谷 哲也]	秋学期授業/Fall	329
地理学専攻	[X0414]	自然地理学文献講読 I	[前空 英明]	春学期授業/Spring	330
地理学専攻	[X0415]	自然地理学文献講読 II	[前空 英明]	秋学期授業/Fall	331
地理学専攻	[X0420]	人文地理学研究 I	[伊藤 達也]	春学期授業/Spring	332

地理学専攻	[X0421]	人文地理学研究Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	333
地理学専攻	[X0422]	人文地理学演習Ⅰ [伊藤 達也]	春学期授業/Spring	334
地理学専攻	[X0423]	人文地理学演習Ⅱ [伊藤 達也]	秋学期授業/Fall	335
地理学専攻	[X0424]	社会経済地理学研究Ⅰ [小原 文明]	春学期授業/Spring	336
地理学専攻	[X0425]	社会経済地理学研究Ⅱ [小原 文明]	秋学期授業/Fall	337
地理学専攻	[X0426]	社会経済地理学演習Ⅰ [小原 文明]	春学期授業/Spring	338
地理学専攻	[X0427]	社会経済地理学演習Ⅱ [小原 文明]	秋学期授業/Fall	338
地理学専攻	[X0428]	文化地理学研究Ⅰ [中俣 均]	春学期授業/Spring	339
地理学専攻	[X0429]	文化地理学研究Ⅱ [中俣 均]	秋学期授業/Fall	339
地理学専攻	[X0430]	文化地理学演習Ⅰ [中俣 均]	春学期授業/Spring	340
地理学専攻	[X0431]	文化地理学演習Ⅱ [中俣 均]	秋学期授業/Fall	340
地理学専攻	[X0432]	地域社会論研究Ⅰ [片岡 義晴]	春学期授業/Spring	341
地理学専攻	[X0433]	地域社会論研究Ⅱ [片岡 義晴]	秋学期授業/Fall	341
地理学専攻	[X0434]	地域社会論演習Ⅰ [片岡 義晴]	春学期授業/Spring	342
地理学専攻	[X0435]	地域社会論演習Ⅱ [片岡 義晴]	秋学期授業/Fall	342
地理学専攻	[X0436]	空間構成論研究Ⅰ [山本 健兒]	春学期授業/Spring	343
地理学専攻	[X0437]	空間構成論研究Ⅱ [山本 健兒]	秋学期授業/Fall	344
地理学専攻	[X0438]	歴史地理学研究Ⅰ [米家 志乃布]	春学期授業/Spring	345
地理学専攻	[X0439]	歴史地理学研究Ⅱ [米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	346
地理学専攻	[X0440]	歴史地理学演習Ⅰ [米家 志乃布]	春学期授業/Spring	347
地理学専攻	[X0441]	歴史地理学演習Ⅱ [米家 志乃布]	秋学期授業/Fall	348
地理学専攻	[X0442]	人文地理学文献講読Ⅰ [中俣 均]	春学期授業/Spring	349
地理学専攻	[X0443]	人文地理学文献講読Ⅱ [中俣 均]	秋学期授業/Fall	349
地理学専攻	[X0446]	地理学現地研究Ⅰ [専任教員が担当]	年間授業	350
地理学専攻	[X0447]	地理学現地研究Ⅱ [専任教員が担当]	年間授業/Yearly	350
地理学専攻	[X0448]	地理学特別演習Ⅰ [前空 英明]	春学期授業/Spring	351
地理学専攻	[X0449]	地理学特別演習Ⅱ [前空 英明]	秋学期授業/Fall	352
心理学専攻	[X0500]	心理学研究法演習Ⅰ [吉村 浩一]	春学期授業/Spring	353
心理学専攻	[X0501]	心理学研究法演習Ⅱ [吉村 浩一]	秋学期授業/Fall	354
心理学専攻	[X0502]	心理学研究法演習Ⅰ [高橋 敏治]	春学期授業/Spring	355
心理学専攻	[X0503]	心理学研究法演習Ⅱ [高橋 敏治]	秋学期授業/Fall	356
心理学専攻	[X0504]	心理学研究法演習Ⅰ [渡辺 弥生]	春学期授業/Spring	357
心理学専攻	[X0505]	心理学研究法演習Ⅱ [渡辺 弥生]	秋学期授業/Fall	358
心理学専攻	[X0506]	心理学研究法演習Ⅰ [福田 由紀]	春学期授業/Spring	359
心理学専攻	[X0507]	心理学研究法演習Ⅱ [福田 由紀]	秋学期授業/Fall	360
心理学専攻	[X0508]	心理学研究法演習Ⅰ [鳥宗 理]	春学期授業/Spring	361
心理学専攻	[X0509]	心理学研究法演習Ⅱ [鳥宗 理]	秋学期授業/Fall	362
心理学専攻	[X0510]	心理学研究法演習Ⅰ [越智 啓太]	春学期授業/Spring	363
心理学専攻	[X0511]	心理学研究法演習Ⅱ [越智 啓太]	秋学期授業/Fall	364
心理学専攻	[X0512]	心理学研究法演習Ⅰ [藤田 哲也]	春学期授業/Spring	365
心理学専攻	[X0513]	心理学研究法演習Ⅱ [藤田 哲也]	秋学期授業/Fall	366
心理学専攻	[X0514]	心理学研究法演習Ⅰ [田嶋 圭一]	春学期授業/Spring	367
心理学専攻	[X0515]	心理学研究法演習Ⅱ [田嶋 圭一]	秋学期授業/Fall	368
心理学専攻	[X0516]	心理学研究法演習Ⅰ [荒井 弘和]	春学期授業/Spring	369
心理学専攻	[X0517]	心理学研究法演習Ⅱ [荒井 弘和]	秋学期授業/Fall	370
心理学専攻	[X0520]	学習心理特論 [藤田 哲也]	春学期授業/Spring	371
心理学専攻	[X0521]	音声言語科学特論 [田嶋 圭一]	春学期授業/Spring	372
心理学専攻	[X0522]	社会心理特論 [越智 啓太]	春学期授業/Spring	373
心理学専攻	[X0523]	読書心理特論 [平山 祐一郎]	秋学期授業/Fall	374
心理学専攻	[X0524]	教育心理特論 [平山 祐一郎]	秋学期授業/Fall	375
心理学専攻	[X0525]	犯罪心理特論 [越智 啓太]	秋学期授業/Fall	376
心理学専攻	[X0526]	学習指導特論 [藤田 哲也]	秋学期授業/Fall	377
心理学専攻	[X0527]	知覚運動論演習 [吉村 浩一]	秋学期授業/Fall	378
心理学専攻	[X0528]	音声言語科学演習 [田嶋 圭一]	秋学期授業/Fall	379
心理学専攻	[X0529]	精神生理特論 [高橋 敏治]	春学期授業/Spring	380
心理学専攻	[X0530]	認知学習過程演習 [藤田 哲也]	春学期授業/Spring	381
心理学専攻	[X0531]	臨床心理特論 [中村 玲子]	春学期授業/Spring	382

心理学専攻	[X0532]	発達心理特論 [渡辺 弥生] 秋学期授業/Fall	383
心理学専攻	[X0533]	障害児心理特論 [奥田 健次] 秋学期集中/Intensive(Fall)	384
心理学専攻	[X0534]	人格心理特論 [大森 美香] 春学期授業/Spring	385
心理学専攻	[X0535]	言語心理特論 [福田 由紀] 秋学期授業/Fall	386
心理学専攻	[X0536]	精神保健特論 [高橋 敏治] 秋学期授業/Fall	387
心理学専攻	[X0537]	学校カウンセリング演習 [渡辺 弥生] 春学期授業/Spring	388
心理学専攻	[X0538]	発達行動特論 [島宗 理] 春学期授業/Spring	389
心理学専攻	[X0539]	生徒指導特論 [小澤 真] 秋学期授業/Fall	390
心理学専攻	[X0540]	言語心理演習 [福田 由紀] 春学期授業/Spring	391
心理学専攻	[X0541]	学校コンサルテーション特論 [島宗 理] 秋学期授業/Fall	392
心理学専攻	[X0542]	心理教育アセスメント特論 [杉山 崇] 秋学期授業/Fall	393
心理学専攻	[X0543]	心理教育アセスメント演習 [熊 仁美] 春学期集中/Intensive(Spring)	394
心理学専攻	[X0544]	スポーツ心理特論 [雨宮 怜] 春学期授業/Spring	395
心理学専攻	[X0546]	心理研究法特論 [吉村 浩一] 春学期授業/Spring	396
心理学専攻	[X0547]	応用心理統計Ⅰ [山際 勇一郎] 春学期授業/Spring	397
心理学専攻	[X0548]	応用心理統計Ⅱ [山際 勇一郎] 秋学期授業/Fall	398
心理学専攻	[X0560]	心理学特殊研究Ⅰ [福田 由紀] 春学期授業/Spring	399
心理学専攻	[X0561]	心理学特殊研究Ⅱ [福田 由紀] 秋学期授業/Fall	400
心理学専攻	[X0562]	心理学特殊研究Ⅰ [島宗 理] 春学期授業/Spring	401
心理学専攻	[X0563]	心理学特殊研究Ⅱ [島宗 理] 秋学期授業/Fall	402
心理学専攻	[X0564]	心理学特殊研究Ⅰ [藤田 哲也] 春学期授業/Spring	403
心理学専攻	[X0565]	心理学特殊研究Ⅱ [藤田 哲也] 秋学期授業/Fall	404
心理学専攻	[X0566]	心理学特殊研究Ⅰ [高橋 敏治] 春学期授業/Spring	405
心理学専攻	[X0567]	心理学特殊研究Ⅱ [高橋 敏治] 秋学期授業/Fall	406
心理学専攻	[X0568]	心理学特殊研究Ⅰ [越智 啓太] 春学期授業/Spring	408
心理学専攻	[X0569]	心理学特殊研究Ⅱ [越智 啓太] 秋学期授業/Fall	409
心理学専攻	[X0570]	心理学特殊研究Ⅰ [田嶋 圭一] 春学期授業/Spring	410
心理学専攻	[X0571]	心理学特殊研究Ⅱ [田嶋 圭一] 秋学期授業/Fall	411
心理学専攻	[X0572]	心理学特殊研究Ⅰ [吉村 浩一] 春学期授業/Spring	412
心理学専攻	[X0573]	心理学特殊研究Ⅱ [吉村 浩一] 秋学期授業/Fall	413
心理学専攻	[X0574]	心理学特殊研究Ⅰ [荒井 弘和] 春学期授業/Spring	414
心理学専攻	[X0575]	心理学特殊研究Ⅱ [荒井 弘和] 秋学期授業/Fall	415
心理学専攻	[X0576]	大学教員心理学基礎講座 [藤田 哲也] 春学期授業/Spring	416
心理学専攻	[X0577]	心理学英語論文作成指導 [田嶋 圭一] 秋学期集中/Intensive(Fall)	417
心理学専攻	[X0580]	発達心理学特殊講義 [渡辺 弥生] 春学期集中/Intensive(Spring)	418
心理学専攻	[X0583]	犯罪心理学特殊講義 [越智 啓太] 春学期集中/Intensive(Spring)	419
心理学専攻	[X0584]	心理学特殊研究Ⅰ [渡辺 弥生] 春学期授業/Spring	419
心理学専攻	[X0585]	心理学特殊研究Ⅱ [渡辺 弥生] 秋学期授業/Fall	420
国際日本学インスティテュート	[X1000]	国際日本学演習Ⅰ [スティーヴン・G・ネルソン] 春学期授業/Spring	421
国際日本学インスティテュート	[X1001]	国際日本学演習Ⅱ [スティーヴン・G・ネルソン] 秋学期授業/Fall	422
国際日本学インスティテュート	[X1002]	国際日本学演習Ⅰ [坂本 勝] 春学期授業/Spring	423
国際日本学インスティテュート	[X1003]	国際日本学演習Ⅱ [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	424
国際日本学インスティテュート	[X1004]	国際日本学演習Ⅰ [小秋元 段] 春学期授業/Spring	424
国際日本学インスティテュート	[X1005]	国際日本学演習Ⅱ [小秋元 段] 秋学期授業/Fall	425
国際日本学インスティテュート	[X1006]	国際日本学演習Ⅰ [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	425
国際日本学インスティテュート	[X1007]	国際日本学演習Ⅱ [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	426
国際日本学インスティテュート	[X1008]	国際日本学演習Ⅰ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	426
国際日本学インスティテュート	[X1009]	国際日本学演習Ⅱ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	427
国際日本学インスティテュート	[X1010]	国際日本学演習Ⅰ [伊藤 達也] 春学期授業/Spring	428
国際日本学インスティテュート	[X1011]	国際日本学演習Ⅱ [伊藤 達也] 秋学期授業/Fall	429
国際日本学インスティテュート	[X1012]	国際日本学演習Ⅰ [米家 志乃布] 春学期授業/Spring	430
国際日本学インスティテュート	[X1013]	国際日本学演習Ⅱ [米家 志乃布] 秋学期授業/Fall	431
国際日本学インスティテュート	[X1014]	国際日本学演習Ⅰ [水野 和夫] 春学期授業/Spring	432
国際日本学インスティテュート	[X1015]	国際日本学演習Ⅱ [水野 和夫] 秋学期授業/Fall	433
国際日本学インスティテュート	[X1016]	国際日本学演習Ⅰ [島田 雅彦] 春学期授業/Spring	434
国際日本学インスティテュート	[X1017]	国際日本学演習Ⅱ [島田 雅彦] 秋学期授業/Fall	435
国際日本学インスティテュート	[X1018]	国際日本学演習Ⅰ [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring	436

国際日本学インスティテュート	[X1019]	国際日本学演習Ⅱ	[松本 剣志郎]	秋学期授業/Fall	437
国際日本学インスティテュート	[X1020]	国際日本学演習Ⅰ	[謝 荔]	春学期授業/Spring	437
国際日本学インスティテュート	[X1021]	国際日本学演習Ⅱ	[謝 荔]	秋学期授業/Fall	438
国際日本学インスティテュート	[X1022]	国際日本学演習Ⅰ	[小原 文明]	春学期授業/Spring	439
国際日本学インスティテュート	[X1023]	国際日本学演習Ⅱ	[小原 文明]	秋学期授業/Fall	439
国際日本学インスティテュート	[X1024]	国際日本学演習Ⅰ	[間宮 厚司]	春学期授業/Spring	440
国際日本学インスティテュート	[X1025]	国際日本学演習Ⅱ	[間宮 厚司]	秋学期授業/Fall	441
国際日本学インスティテュート	[X1026]	国際日本学演習Ⅰ	[川崎 貴子]	春学期授業/Spring	442
国際日本学インスティテュート	[X1027]	国際日本学演習Ⅱ	[川崎 貴子]	秋学期授業/Fall	443
国際日本学インスティテュート	[X1028]	国際日本学演習Ⅰ	[椎名 美智]	春学期授業/Spring	444
国際日本学インスティテュート	[X1029]	国際日本学演習Ⅱ	[椎名 美智]	秋学期授業/Fall	444
国際日本学インスティテュート	[X1030]	国際日本学演習Ⅰ	[尾谷 昌則]	春学期授業/Spring	445
国際日本学インスティテュート	[X1031]	国際日本学演習Ⅱ	[尾谷 昌則]	秋学期授業/Fall	446
国際日本学インスティテュート	[X1032]	国際日本学演習Ⅰ	[西塚 俊太]	春学期授業/Spring	447
国際日本学インスティテュート	[X1033]	国際日本学演習Ⅱ	[西塚 俊太]	秋学期授業/Fall	448
国際日本学インスティテュート	[X1034]	国際日本学演習Ⅰ	[安孫子 信]	春学期授業/Spring	449
国際日本学インスティテュート	[X1035]	国際日本学演習Ⅱ	[安孫子 信]	秋学期授業/Fall	450
国際日本学インスティテュート	[X1036]	国際日本学合同演習	[尾谷 昌則]	年間授業/Yearly	451
国際日本学インスティテュート	[X1037]	世界の日本論と日本学Ⅰ	[リネベ・アンドレ]	春学期授業/Spring	452
国際日本学インスティテュート	[X1038]	世界の日本論と日本学Ⅱ	[リネベ・アンドレ]	秋学期授業/Fall	453
国際日本学インスティテュート	[X1039]	アジアと日本Ⅰ	[王 敏]	春学期集中/Intensive(Spring)	454
国際日本学インスティテュート	[X1041]	国際日本学論文作成実習(英語)Ⅰ	[スティーヴン・G・ネルソン]	春学期授業/Spring	455
	[X1042]	国際日本学論文作成実習(英語)Ⅱ	[スティーヴン・G・ネルソン]	秋学期授業/Fall	456
国際日本学インスティテュート	[X1043]	国際日本学演習Ⅰ	[伊海 孝充]	春学期授業/Spring	457
国際日本学インスティテュート	[X1044]	国際日本学演習Ⅱ	[伊海 孝充]	秋学期授業/Fall	458
国際日本学インスティテュート	[X1045]	日本語論文作成実習Ⅰ	[山中 玲子]	春学期授業/Spring	458
国際日本学インスティテュート	[X1046]	日本語論文作成実習Ⅱ	[山中 玲子]	秋学期授業/Fall	459
国際日本学インスティテュート	[X1047]	日本語論文作成基礎AⅠ	[幸田 佳子]	春学期授業/Spring	460
国際日本学インスティテュート	[X1048]	日本語論文作成基礎AⅡ	[中島 久朱]	春学期授業/Spring	461
国際日本学インスティテュート	[X1049]	日本語論文作成基礎AⅢ	[幸田 佳子]	秋学期授業/Fall	462
国際日本学インスティテュート	[X1050]	日本語論文作成基礎AⅣ	[中島 久朱]	秋学期授業/Fall	463
国際日本学インスティテュート	[X1051]	日本語論文作成基礎BⅠ	[高野 愛子]	春学期授業/Spring	464
国際日本学インスティテュート	[X1052]	日本語論文作成基礎BⅡ	[中島 久朱]	春学期授業/Spring	465
国際日本学インスティテュート	[X1053]	日本語論文作成基礎BⅢ	[高野 愛子]	秋学期授業/Fall	466
国際日本学インスティテュート	[X1054]	日本語論文作成基礎BⅣ	[中島 久朱]	秋学期授業/Fall	467
国際日本学インスティテュート	[X1055]	日本語の性格Ⅰ	[滝浦 真人]	春学期授業/Spring	468
国際日本学インスティテュート	[X1056]	日本語の性格Ⅱ	[滝浦 真人]	秋学期授業/Fall	469
国際日本学インスティテュート	[X1057]	伝統文化と民衆世界Ⅰ	[URBANOVA Jana]	春学期授業/Spring	470
国際日本学インスティテュート	[X1058]	伝統文化と民衆世界Ⅱ	[横山 泰子]	秋学期授業/Fall	471
国際日本学インスティテュート	[X1059]	日本の思想・西欧の思想Ⅰ	[安孫子 信]	春学期授業/Spring	472
国際日本学インスティテュート	[X1060]	日本の思想・西欧の思想Ⅱ	[安孫子 信]	秋学期授業/Fall	473
国際日本学インスティテュート	[X1061]	国際日本学演習Ⅰ	[片岡 義晴]	春学期授業/Spring	474
国際日本学インスティテュート	[X1062]	国際日本学演習Ⅱ	[片岡 義晴]	秋学期授業/Fall	474
国際日本学インスティテュート	[X1063]	史料から読む琉球とアジアⅠ	[得能 壽美]	春学期授業/Spring	475
国際日本学インスティテュート	[X1064]	史料から読む琉球とアジアⅡ	[得能 壽美]	秋学期授業/Fall	476
国際日本学インスティテュート	[X1065]	戦後沖縄と対外関係Ⅰ	[明田川 融]	春学期授業/Spring	476
国際日本学インスティテュート	[X1066]	戦後沖縄と対外関係Ⅱ	[平良 好利]	秋学期授業/Fall	477
国際日本学インスティテュート	[X1067]	仏教思想と仏教美術Ⅰ	[高橋 悠介]	春学期授業/Spring	478
国際日本学インスティテュート	[X1068]	仏教思想と仏教美術Ⅱ	[高橋 悠介]	秋学期授業/Fall	479
国際日本学インスティテュート	[X1069]	越境時代の日本文化Ⅰ	[湯本 豪一]	春学期授業/Spring	480
国際日本学インスティテュート	[X1070]	越境時代の日本文化Ⅱ	[湯本 豪一]	秋学期授業/Fall	481
国際日本学インスティテュート	[X1071]	データ分析法Ⅰ	[田中 邦佳]	春学期授業/Spring	482
国際日本学インスティテュート	[X1072]	データ分析法Ⅱ	[田中 邦佳]	秋学期授業/Fall	483
国際日本学インスティテュート	[X1073]	サブカルチャー論Ⅰ	[岩川 ありさ]	春学期授業/Spring	483
国際日本学インスティテュート	[X1074]	サブカルチャー論Ⅱ	[岩川 ありさ]	秋学期授業/Fall	484
国際日本学インスティテュート	[X1075]	日本文学・国際日本学基礎演習	[阿部 亮太]	秋学期授業/Fall	485

国際日本学インスティテュート	[X1076]	日本文学・国際日本学論文作成基礎実習 [金子 広幸] 秋学期授業/Fall ..	486
国際日本学インスティテュート	[X1077]	近代の文芸批評Ⅰ [田中 和生] 春学期授業/Spring	487
国際日本学インスティテュート	[X1078]	近代の文芸批評Ⅱ [田中 和生] 秋学期授業/Fall	488
国際日本学インスティテュート	[X1079]	神話と歌Ⅰ [坂本 勝] 春学期授業/Spring	489
国際日本学インスティテュート	[X1080]	神話と歌Ⅱ [坂本 勝] 秋学期授業/Fall	490
国際日本学インスティテュート	[X1081]	平安時代の物語Ⅰ [加藤 昌嘉] 春学期授業/Spring	491
国際日本学インスティテュート	[X1082]	平安時代の物語Ⅱ [加藤 昌嘉] 秋学期授業/Fall	491
国際日本学インスティテュート	[X1083]	書誌学と文献学Ⅰ [阿部 真弓] 春学期授業/Spring	492
国際日本学インスティテュート	[X1084]	書誌学と文献学Ⅱ [阿部 真弓] 秋学期授業/Fall	493
国際日本学インスティテュート	[X1085]	能と楽劇Ⅰ [山中 玲子] 春学期授業/Spring	494
国際日本学インスティテュート	[X1086]	能と楽劇Ⅱ [山中 玲子] 秋学期授業/Fall	495
国際日本学インスティテュート	[X1087]	江戸の文芸と文化Ⅰ [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	496
国際日本学インスティテュート	[X1088]	江戸の文芸と文化Ⅱ [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	497
国際日本学インスティテュート	[X1089]	江戸の思想史Ⅰ [高木 元] 春学期授業/Spring	498
国際日本学インスティテュート	[X1090]	江戸の思想史Ⅱ [高木 元] 秋学期授業/Fall	499
国際日本学インスティテュート	[X1091]	日本語の歴史と現在Ⅰ [竹林 一志] 春学期授業/Spring	500
国際日本学インスティテュート	[X1092]	日本語の歴史と現在Ⅱ [竹林 一志] 秋学期授業/Fall	501
国際日本学インスティテュート	[X1093]	現代日本語のしくみⅠ [間宮 厚司] 春学期授業/Spring	502
国際日本学インスティテュート	[X1094]	現代日本語のしくみⅡ [尾谷 昌則] 秋学期授業/Fall	503
国際日本学インスティテュート	[X1095]	沖縄文芸史Ⅰ [竹内 重雄] 春学期授業/Spring	504
国際日本学インスティテュート	[X1096]	沖縄文芸史Ⅱ [竹内 重雄] 秋学期授業/Fall	505
国際日本学インスティテュート	[X1099]	女性文学Ⅰ [藤木 直実] 春学期授業/Spring	506
国際日本学インスティテュート	[X1100]	女性文学Ⅱ [藤木 直実] 秋学期授業/Fall	507
国際日本学インスティテュート	[X1101]	文学と映画Ⅰ [越川 道夫] 春学期授業/Spring	508
国際日本学インスティテュート	[X1102]	文学と映画Ⅱ [越川 道夫] 秋学期授業/Fall	508
国際日本学インスティテュート	[X1103]	文学と風土Ⅰ [高橋 博史] 春学期授業/Spring	509
国際日本学インスティテュート	[X1104]	文学と風土Ⅱ [高橋 博史] 秋学期授業/Fall	509
国際日本学インスティテュート	[X1105]	表現と社会 [内藤 裕之] 春学期授業/Spring	510
国際日本学インスティテュート	[X1106]	編集理論 [仲俣 暁生] 秋学期授業/Fall	511
国際日本学インスティテュート	[X1107]	英語発音法Ⅰ [高橋 豊美] 春学期授業/Spring	512
国際日本学インスティテュート	[X1108]	英語発音法Ⅱ [高橋 豊美] 秋学期授業/Fall	513
国際日本学インスティテュート	[X1109]	行動科学方法論Ⅰ [石川 潔] 春学期授業/Spring	514
国際日本学インスティテュート	[X1110]	西欧比較文学Ⅰ [山下 敦] 春学期授業/Spring	515
国際日本学インスティテュート	[X1111]	西欧比較文学Ⅱ [山下 敦] 秋学期授業/Fall	516
国際日本学インスティテュート	[X1112]	国際日本学演習Ⅰ [遠藤 星希] 春学期授業/Spring	517
国際日本学インスティテュート	[X1113]	国際日本学演習Ⅱ [遠藤 星希] 秋学期授業/Fall	518
国際日本学インスティテュート	[X1114]	西欧の思想Ⅰ [松井 久] 春学期授業/Spring	519
国際日本学インスティテュート	[X1115]	西欧の思想Ⅱ [上野 修] 春学期集中/Intensive(Spring)	520
国際日本学インスティテュート	[X1116]	東北アジアの文化伝播Ⅰ-1 [阿部 朝衛] 春学期授業/Spring	520
国際日本学インスティテュート	[X1117]	東北アジアの文化伝播Ⅰ-2 [阿部 朝衛] 秋学期授業/Fall	521
国際日本学インスティテュート	[X1118]	東北アジアの文化伝播Ⅱ-1 [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	522
国際日本学インスティテュート	[X1119]	東北アジアの文化伝播Ⅱ-2 [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	523
国際日本学インスティテュート	[X1120]	東北アジアの文化伝播Ⅲ-1 [小倉 淳一] 春学期授業/Spring	524
国際日本学インスティテュート	[X1121]	東北アジアの文化伝播Ⅲ-2 [小倉 淳一] 秋学期授業/Fall	525
国際日本学インスティテュート	[X1122]	東アジアの律令文化Ⅰ-1 [小口 雅史] 春学期授業/Spring	526
国際日本学インスティテュート	[X1123]	東アジアの律令文化Ⅰ-2 [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	527
国際日本学インスティテュート	[X1124]	東アジアの律令文化Ⅱ-1 [小口 雅史] 春学期授業/Spring	528
国際日本学インスティテュート	[X1125]	東アジアの律令文化Ⅱ-2 [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	529
国際日本学インスティテュート	[X1126]	王権の政治文化Ⅰ [春名 宏昭] 春学期授業/Spring	530
国際日本学インスティテュート	[X1127]	王権の政治文化Ⅱ [春名 宏昭] 秋学期授業/Fall	531
国際日本学インスティテュート	[X1130]	日本の歴史と宗教 [及川 亘] 春学期授業/Spring	532
国際日本学インスティテュート	[X1131]	古文書から読む江戸社会・入門編Ⅰ [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring ..	533
国際日本学インスティテュート	[X1132]	古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ [松本 剣志郎] 秋学期授業/Fall	534
国際日本学インスティテュート	[X1133]	江戸の地方文化Ⅰ [西沢 淳男] 春学期授業/Spring	534
国際日本学インスティテュート	[X1134]	江戸の地方文化Ⅱ [西沢 淳男] 秋学期授業/Fall	535
国際日本学インスティテュート	[X1135]	日本文化と西洋文化Ⅰ [森田 貴子] 春学期授業/Spring	535
国際日本学インスティテュート	[X1136]	日本文化と西洋文化Ⅱ [森田 貴子] 秋学期授業/Fall	536

国際日本学インスティテュート	[X1137]	日本の近代と国際社会Ⅰ [長井 純市] 春学期授業/Spring	536
国際日本学インスティテュート	[X1138]	日本の近代と国際社会Ⅱ [長井 純市] 秋学期授業/Fall	537
国際日本学インスティテュート	[X1139]	沖縄学入門Ⅰ [マルコ・ティネッロ] 春学期授業/Spring	538
国際日本学インスティテュート	[X1140]	沖縄学入門Ⅱ [マルコ・ティネッロ] 秋学期授業/Fall	539
国際日本学インスティテュート	[X1141]	アーカイブズ学Ⅰ [渡辺 浩一] 春学期授業/Spring	540
国際日本学インスティテュート	[X1142]	アーカイブズ学Ⅱ [渡辺 浩一] 秋学期授業/Fall	540
国際日本学インスティテュート	[X1143]	文書館管理研究Ⅰ [齋藤 勝、青木 直己、葦名 ふみ、新井 浩文、岩壁 義光、冨塚 一彦] 春学期授業/Spring	541
国際日本学インスティテュート	[X1144]	文書館管理研究Ⅱ [長井 純市、青木 睦、赤松 道子、石橋 崇雄、草野 佳矢子、山田 太造、渡辺 浩一] 秋学期授業/Fall	542
国際日本学インスティテュート	[X1145]	記録史科学研究Ⅰ [松本 剣志郎] 春学期授業/Spring	543
国際日本学インスティテュート	[X1146]	記録史科学演習Ⅰ [松本 剣志郎] 秋学期授業/Fall	544
国際日本学インスティテュート	[X1147]	記録史科学研究Ⅱ [岩壁 義光] 春学期授業/Spring	544
国際日本学インスティテュート	[X1148]	記録史科学演習Ⅱ [岩壁 義光] 秋学期授業/Fall	545
国際日本学インスティテュート	[X1149]	日本の環境論Ⅰ [伊藤 達也] 春学期授業/Spring	546
国際日本学インスティテュート	[X1150]	日本の環境論Ⅱ [伊藤 達也] 秋学期授業/Fall	547
国際日本学インスティテュート	[X1151]	日本の産業風土Ⅰ [小原 文明] 春学期授業/Spring	548
国際日本学インスティテュート	[X1152]	日本の産業風土Ⅱ [小原 文明] 秋学期授業/Fall	549
国際日本学インスティテュート	[X1153]	地図の文化誌Ⅰ [米家 志乃布] 春学期授業/Spring	550
国際日本学インスティテュート	[X1154]	地図の文化誌Ⅱ [米家 志乃布] 秋学期授業/Fall	551
国際日本学インスティテュート	[X1155]	国際日本学研究Ⅰ [スティーヴン・G・ネルソン] 春学期授業/Spring	552
国際日本学インスティテュート	[X1156]	国際日本学研究Ⅱ [スティーヴン・G・ネルソン] 秋学期授業/Fall	553
国際日本学インスティテュート	[X1161]	国際日本学研究Ⅰ [伊藤 達也] 春学期授業/Spring	554
国際日本学インスティテュート	[X1162]	国際日本学研究Ⅱ [伊藤 達也] 秋学期授業/Fall	555
国際日本学インスティテュート	[X1163]	国際日本学研究Ⅰ [小口 雅史] 春学期授業/Spring	555
国際日本学インスティテュート	[X1164]	国際日本学研究Ⅱ [小口 雅史] 秋学期授業/Fall	556
国際日本学インスティテュート	[X1165]	国際日本学研究Ⅰ [椎名 美智] 春学期授業/Spring	557
国際日本学インスティテュート	[X1166]	国際日本学研究Ⅱ [椎名 美智] 秋学期授業/Fall	558
国際日本学インスティテュート	[X1171]	国際日本学研究Ⅰ [水野 和夫] 春学期授業/Spring	559
国際日本学インスティテュート	[X1172]	国際日本学研究Ⅱ [水野 和夫] 秋学期授業/Fall	560
国際日本学インスティテュート	[X1173]	国際日本学研究Ⅰ [小林 ふみ子] 春学期授業/Spring	561
国際日本学インスティテュート	[X1174]	国際日本学研究Ⅱ [小林 ふみ子] 秋学期授業/Fall	562
国際日本学インスティテュート	[X1175]	国際日本学研究Ⅰ [小秋元 段] 春学期授業/Spring	562
国際日本学インスティテュート	[X1176]	国際日本学研究Ⅱ [小秋元 段] 秋学期授業/Fall	563
国際日本学インスティテュート	[X1177]	国際日本学研究Ⅰ [安孫子 信] 春学期授業/Spring	563
国際日本学インスティテュート	[X1178]	国際日本学研究Ⅱ [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	564
国際日本学インスティテュート	[X1179]	国際日本学研究Ⅰ [尾谷 昌則] 春学期授業/Spring	565
国際日本学インスティテュート	[X1180]	国際日本学研究Ⅱ [尾谷 昌則] 秋学期授業/Fall	566
国際日本学インスティテュート	[X1181]	国際日本学特殊講義AⅠ [王 敏] 春学期集中/Intensive(Spring)	567
国際日本学インスティテュート	[X1182]	国際日本学特殊講義BⅠ [滝浦 真人] 春学期授業/Spring	568
国際日本学インスティテュート	[X1183]	国際日本学特殊講義BⅡ [滝浦 真人] 秋学期授業/Fall	569
国際日本学インスティテュート	[X1184]	国際日本学特殊講義CⅠ [URBANOVA Jana] 春学期授業/Spring	570
国際日本学インスティテュート	[X1185]	国際日本学特殊講義CⅡ [横山 泰子] 秋学期授業/Fall	571
国際日本学インスティテュート	[X1186]	国際日本学特殊講義DⅠ [安孫子 信] 春学期授業/Spring	571
国際日本学インスティテュート	[X1187]	国際日本学特殊講義DⅡ [安孫子 信] 秋学期授業/Fall	572
国際日本学インスティテュート	[X1188]	国際日本学特殊講義EⅠ [得能 壽美] 春学期授業/Spring	573
国際日本学インスティテュート	[X1189]	国際日本学特殊講義EⅡ [得能 壽美] 秋学期授業/Fall	574
国際日本学インスティテュート	[X1190]	国際日本学特殊講義FⅠ [明田川 融] 春学期授業/Spring	575
国際日本学インスティテュート	[X1191]	国際日本学特殊講義FⅡ [平良 好利] 秋学期授業/Fall	576
国際日本学インスティテュート	[X1192]	国際日本学特殊講義GⅠ [高橋 悠介] 春学期授業/Spring	577
国際日本学インスティテュート	[X1193]	国際日本学特殊講義GⅡ [高橋 悠介] 秋学期授業/Fall	578
国際日本学インスティテュート	[X1194]	国際日本学特殊講義HⅠ [湯本 豪一] 春学期授業/Spring	579
国際日本学インスティテュート	[X1195]	国際日本学特殊講義HⅡ [湯本 豪一] 秋学期授業/Fall	580
国際日本学インスティテュート	[X1196]	国際日本学特殊講義JⅠ [田中 邦佳] 春学期授業/Spring	581
国際日本学インスティテュート	[X1197]	国際日本学特殊講義KⅠ [田中 邦佳] 秋学期授業/Fall	582
国際日本学インスティテュート	[X1198]	国際日本学特殊講義LⅠ [岩川 ありさ] 春学期授業/Spring	583
国際日本学インスティテュート	[X1199]	国際日本学特殊講義LⅡ [岩川 ありさ] 秋学期授業/Fall	584

PHL600B1

言語分析哲学研究 I - 1

中釜 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の心の哲学の特徴は、心理学や脳科学、あるいはコンピュータサイエンス等の成果を積極的に活用しながら、心の正体を精緻に分析していくところにある。この授業では、近年の代表的な論文の読解と検討を通して、心に関する現代的アプローチを習得する。

【到達目標】

現代の心の哲学の基本的な概念、議論、分析方法に習熟する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講師による現代の心の哲学の特徴の説明の後、現代の代表的論文を輪読する。担当者はあらかじめレジュメを作成して、参加者全員に授業前に配布し、授業ではそれに基づいて解釈・検討・批判を与えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	講師による現代の心の哲学の解説
第 2 回	Kim, Mental Causation(1)	学生による発表とディスカッション
第 3 回	Kim, Mental Causation(2)	学生による発表とディスカッション
第 4 回	Kim, Mental Causation(3)	学生による発表とディスカッション
第 5 回	Kim, Mental Causation(4)	学生による発表とディスカッション
第 6 回	Lowe, Dualism(1)	学生による発表とディスカッション
第 7 回	Lowe, Dualism(2)	学生による発表とディスカッション
第 8 回	Lowe, Dualism(3)	学生による発表とディスカッション
第 9 回	Lowe, Dualism(4)	学生による発表とディスカッション
第 10 回	Baker, Non-reductive Materialism(1)	学生による発表とディスカッション
第 11 回	Baker, Non-reductive Materialism(2)	学生による発表とディスカッション
第 12 回	Baker, Non-reductive Materialism(3)	学生による発表とディスカッション
第 13 回	Baker, Non-reductive Materialism(4)	学生による発表とディスカッション
第 14 回	まとめ	講師による解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員テキストを精読し、発表者は担当箇所のレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, eds.by B.P.McLaughlin et.al.
Oxford Univ.Press, 2009
コピーを配布する。

【参考書】

John Searle, MInd,
Jaegon Kim, Supervenience and Mind
など。
適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業目標の達成度を、レジュメの作成（40%）、議論への参加（40%）最終レポートの提出（20%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

従来の方法で特別な問題は生じていない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語哲学、心の哲学、形而上学、イギリス経験論
<研究テーマ> パースペクティヴィズムの形而上学
<主要研究業績> 自然観の闘争（岩波書店） 哲学の歴史 8（中央公論新社）など

【Outline and objectives】

A characteristic feature of contemporary Philosophy of Mind is to approach to Human mind by positively using recent achievements of Psychology, Brain Sciences, and Computer Sciences. In this course, we learn modern ways of thinking about Mind by reading some papers of recent philosophers of Mind.

PHL600B1

言語分析哲学研究 I - 2

中釜 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語分析哲学 1-1 の授業に引き続き、近年の代表的な心の哲学関係の論文の読解と検討を通して、現代的な手法を習得する。

【到達目標】

言語分析的哲学的な議論の方法に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講師による現代形而上学の特徴の説明の後、現代の代表的論文を輪読する。担当者はあらかじめレジュメを作成して、参加者全員に授業前に配布し、授業ではそれに基づいて解釈・検討・批判を与えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	講師による全般的解説
第 2 回	Perry, Subjectivity(1)	学生による発表とディスカッション
第 3 回	Perry, Subjectivity(2)	学生による発表とディスカッション
第 4 回	Perry, Subjectivity(3)	学生による発表とディスカッション
第 5 回	Perry, Subjectivity (4)	学生による発表とディスカッション
第 6 回	Tye, Representationalist Theories of Consciousness (1)	学生による発表とディスカッション
第 7 回	Tye, Representationalist Theories of Consciousness (2)	学生による発表とディスカッション
第 8 回	Tye, Representationalist Theories of Consciousness (3)	学生による発表とディスカッション
第 9 回	Tye, Representationalist Theories of Consciousness(4)	学生による発表とディスカッション
第 10 回	Chalmers, The Two-dimensional Argument Against Materialism (1)	学生による発表とディスカッション
第 11 回	Chalmers, The Two-dimensional Argument Against Materialism (2)	学生による発表とディスカッション
第 12 回	Chalmers, The Two-dimensional Argument Against Materialism (3)	学生による発表とディスカッション
第 13 回	Chalmers, The Two-dimensional Argument Against Materialism (4)	学生による発表とディスカッション
第 14 回	まとめ	講師による解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員がテキストを精読し、発表者はレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, eds.by B.P.McLaughlin et.al.
Oxford Univ.Press, 2009
コピーを配布する

【参考書】

John Searle, MInd,
Jaegon Kim, Supervenience and Mind
など。
適宜指示する

【成績評価の方法と基準】

授業目標の達成度を、レジュメの作成（40%）、議論への参加（40%）最終レポートの提出（20%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

従来の方法で特別な問題は生じていない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語哲学、心の哲学、形而上学、イギリス経験論
 ＜研究テーマ＞パースペクティヴィズムの形而上学
 ＜主要研究業績＞自然観の闘争（岩波書） 哲学の歴史 8（中央公論新社）
 など

【Outline and objectives】

A characteristic feature of contemporary Philosophy of Mind is to approach to Human mind by positively using recent achievements of Psychology, Brain Sciences, and Computer Sciences. In this course, we learn modern ways of thinking about Mind by reading some papers of recent philosophers of Mind.

PHL500B1

言語分析哲学研究Ⅱ－1

松井 久

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の科学・分析哲学の大きな潮流であるプラグマティズムの源泉のひとつである、ウィリアム・ジェームズの最初の著作 *The Principles of Psychology* を精読し、彼の心理学の哲学の今日性を明らかにする。

【到達目標】

哲学の原典の精読。ジェームズの心理学の哲学を歴史的・今日的に評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

一文ずつ日本語に翻訳しながら内容を検討する。セクションごとに担当を決め、まとめの発表をしてもらう。議論では、哲学史、科学史の中にジェームズを位置づけるとともに、彼が取り組んだ問題が今日どう扱われるかを明らかにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに	授業の進め方、評価の仕方の説明。 ジェームズ哲学、プラグマティズムの概説。
第 2 回	Preface	参加者による翻訳と議論
第 3 回	Ch. I. The Scope of the Psychology (1)	参加者による翻訳と議論
第 4 回	Ch. I. The Scope of the Psychology (2)	参加者による翻訳と議論
第 5 回	一章まとめ	担当者による発表と議論
第 6 回	Ch. II. The Functions of the Brain(1)	参加者による翻訳と議論
第 7 回	Ch. II. The Functions of the Brain(2)	参加者による翻訳と議論
第 8 回	Ch. II. The Functions of the Brain(3)	参加者による翻訳と議論
第 9 回	二章中間発表	担当者による発表と議論
第 10 回	Ch. II. The Functions of the Brain(4)	参加者による翻訳と議論
第 11 回	Ch. II. The Functions of the Brain(5)	参加者による翻訳と議論
第 12 回	Ch. II. The Functions of the Brain(6)	参加者による翻訳と議論
第 13 回	Ch. II. The Functions of the Brain(7)	参加者による翻訳と議論
第 14 回	二章まとめ	担当者による発表と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの精読

【テキスト（教科書）】

William James, *The Principles of Psychology* (1890), 2 vols., Dover, 1950.

【参考書】

伊藤邦武編『哲学の歴史 8』（中央公論社）
 伊藤邦武『プラグマティズム入門』（ちくま新書）

【成績評価の方法と基準】

授業の到達目標をどれだけ達成できたかを、担当箇所の翻訳と議論への参加（40 %）、発表（30 %）、学期末のレポート（30 %）によって評価。

【学生の意見等からの気づき】

本講義初年度につきなし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞生物学の哲学、19 世紀哲学
 ＜研究テーマ＞生物学における個性性、環境概念の歴史的考察
 ＜主要研究業績＞
 論文

« L'individualité biologique chez Bergson », *Implications philosophiques, Bergson ou la science* (Ebook), 2013, p. 8-26.

« La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », *Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », *フランス哲学・思想研究* 22 号, 2017, p. 231-241.

翻訳

ベルクソン『創造的進化』（合田正人氏と共訳）、筑摩書房、2010 年
 バディウ『推移的存在論』（近藤和敬氏と共訳）、水声社、2018 年

【Outline and objectives】

This course studies "The Principles of Psychology" of William James, one of the founders of the pragmatism. Its aim is to help students understand the actuality of his philosophy of psychology.

PHL500B1

言語分析哲学研究Ⅱ－2

松井 久

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語分析哲学研究Ⅱ－1に引き続き、現代の科学・分析哲学の大きな潮流であるプラグマティズムの源泉のひとつである、ウィリアム・ジェームズの最初の著作 *The Principles of Psychology* を精読し、彼の心理学の哲学の今日性を明らかにする。

【到達目標】

哲学の原典の精読。ジェームズの心理学の哲学を歴史的・今日的に評価する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

一文ずつ日本語に翻訳しながら内容を検討する。セクションごとに担当を決め、まとめの発表をしてもらう。哲学史、科学史の中にジェームズを位置づけるとともに、彼が取り組んだ問題が今日どう扱われるかを明らかにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	Ch. III. On Some General Conditions of Brain-activity (1)	参加者による翻訳と議論
第2回	Ch. III. On Some General Conditions of Brain-activity (2)	参加者による翻訳と議論
第3回	三章まとめ	担当者による発表と議論
第4回	Ch. IV. Habit (I)	参加者による翻訳と議論
第5回	Ch. IV. Habit (2)	参加者による翻訳と議論
第6回	四章まとめ	担当者による発表と議論
第7回	Ch. V. The Automation-theory (1)	参加者による翻訳と議論
第8回	Ch. V. The Automation-theory (2)	参加者による翻訳と議論
第9回	五章まとめ	担当者による発表と議論
第10回	Ch. VI. The Mind-stuff Theory (1)	参加者による翻訳と議論
第11回	Ch. VI. The Mind-stuff Theory (2)	参加者による翻訳と議論
第12回	Ch. VI. The Mind-stuff Theory (3)	参加者による翻訳と議論
第13回	Ch. VII. The Method and Snares of Psychology	参加者による翻訳と議論
第14回	六章、七章まとめ	担当者による発表と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの精読

【テキスト（教科書）】

William James, *The Principles of Psychology* (1890), 2 vols., Dover, 1950.

【参考書】

伊藤邦武編『哲学の歴史 8』（中央公論社）
伊藤邦武『プラグマティズム入門』（ちくま新書）

【成績評価の方法と基準】

授業の到達目標をどれだけ達成できたかを、担当箇所の翻訳と議論への参加（40%）、発表（30%）、学期末のレポート（30%）によって評価。

【学生の意見等からの気づき】

初年度につきなし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>生物学の哲学、19世紀哲学
<研究テーマ>生物学における個性、環境概念の歴史的考察
<主要研究業績>
論文

« L'individualité biologique chez Bergson », *Implications philosophiques, Bergson ou la science* (Ebook), 2013, p. 8-26.

« La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle », *Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu », *フランス哲学・思想研究* 22号, 2017, p. 231-241.

翻訳

ベルクソン『創造的進化』（合田正人氏と共訳）、筑摩書房、2010年
バディウ『推移的存在論』（近藤和敬氏と共訳）、水声社、2018年

【Outline and objectives】

This course studies "The Principles of Psychology" of William James, one of the founders of the pragmatism. Its aim is to help students understand the actuality of his philosophy of psychology.

PHL600B1

形而上学研究 I - 1

齋藤 元紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』(M. Heidegger, *Sein und Zeit*) の読解をとおして、学生が批判的な思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】

この授業では、ハイデガーの著『存在と時間』の精密な読解とそれをめぐる討論をとおして、学生が(1) 哲学的文章を原文で読み解き、(2) 彼の存在論・現象学・解釈学についての理解を深め、(3) 西洋哲学史上のさまざまな知識に習熟するとともに、(4) 自ら哲学的な批判的考察ができるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ハイデガーの著『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をとおして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の精密な読解をとおして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語(日・英・仏)による参加にも配慮する。春学期は、『存在と時間』第一部第二編「現存在と時間性」第45節から読み進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の全体像
第2回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第3回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第4回	第45節の読解①	現存在の準備的基礎分析の成果——実存の具体的構成について
第5回	第45節の読解②	現存在の実存論的分析の非根源性——その批判的考察について
第6回	第45節の読解③	存在論的解釈の根源的遂行の必要性——実存的分析の解釈学的状況と第一部第二編の概要
第7回	第46節の読解①	見かけの上での現存在の全体存在不可能性
第8回	第46節の読解②	現存在の全体存在と死の連関、第一部第二編第一章の概要
第9回	第47節の読解①	他者の死の経験可能性
第10回	第47節の読解②	他者の死の経験可能性と現存在の全体存在
第11回	第47節の読解③	他者の死の経験可能性と現存在の全体存在の把握可能性
第12回	第48節の読解①	未済について
第13回	第48節の読解②	終わりについて
第14回	第48節の読解③	全体性について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.

原佑・渡邊二郎訳『存在と時間 II』中公クラシックス、2003年。

細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994年。

熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013年。

高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013年。

【参考書】

①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000年。

②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000年。

③齋藤元紀『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・回復』法政大学出版局、2012年。

④齋藤元紀(共編著)『始まりのハイデガー』見洋書房、2015年。

⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011年。

⑥A. Luckner, *Martin Heidegger: » Sein und Zeit «*, 2. Aufl., Schöningh 2001.

⑦ M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.

⑧ T. Rentsch(hrsg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.

⑨ Mark A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.

【成績評価の方法と基準】

上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の割合 (35 %)、貢献度 (35 %) に加え、レポート (30 %) を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

厳密な読解と徹底した議論をとおして哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】

ドイツ語辞書 (紙・電子媒体いずれでもよい) を持参のこと。ただし初級用ではなく、『独和大辞典』(小学館) クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

哲学・倫理学・思想史。

<研究テーマ>

ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。

<主要研究業績>

「存在論の神話」(『現代思想』青土社、2018年2月臨時増刊号)、「気遣いぬもの」(ハイデガー研究会編『Zuspiel』第1号、2017年)『終わりにきデリダ——ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』(共編著、法政大学出版局、2016年)、『21世紀の哲学をひらく——現代思想の最前線への招待』(共編著、ミネルヴァ書房、2016年)、『ハイデガー哲学は反ユダヤ主義か——黒ノートをめぐる討議』(共編著、水声社、2015年)、『現代日本の四つの危機』(編著、講談社選書メチエ、2015年)、『始まりのハイデガー』(共編著、見洋書房、2015年)、『ハイデガー読本』(共著、法政大学出版局、2015年)『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』(法政大学出版局、2012年)、『科学と技術への問い——ハイデガー研究会第三論集』(共編著、理想社、2012年)、『概説 現代の哲学・思想』(共編著、ミネルヴァ書房、2012年)、『ヨーロッパ現代哲学への招待』(共編著、梓出版社、2009年)、『ハイデッガー『存在と時間』の現在 刊行80周年記念論集』(共著、南窓社、2007年)、『ハイデッガーと思索の将来——哲学への〈寄与〉』(共著、理想社、2006年)。「ギュンター・フィガール『問いと答え——ハイデガーについて』(監訳、法政大学出版局、2017年)、「ユルゲン・トラバント『フンボルトのグラマトロジー——言語の本性への斬新な洞察』(共訳、『思想』第7号、2009年)、「トム・ロックモア『カントの航跡のなかで——二十世紀の哲学』(共訳、法政大学出版局、2008年)。

【Outline and objectives】

The aim of this class is to know important theories in western philosophy, especially ontology, phenomenology and hermeneutics, and to learn to think critically and philosophically by reading Martin Heidegger's *Sein und Zeit* (Being and Time).

PHL600B1

形而上学研究 I - 2

齋藤 元紀

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

この授業では、マルティン・ハイデガー著『存在と時間』(M. Heidegger, *Sein und Zeit*) の読解をとおして、学生が批判的な思考力を獲得することを目指す。

【到達目標】

この授業では、ハイデガーの著『存在と時間』の精密な読解とそれをめぐる討論をとおして、学生が (1) 哲学的文章を原文で読み解き、(2) 彼の存在論・現象学・解釈学についての理解を深め、(3) 西洋哲学史上のさまざまな知識に習熟するとともに、(4) 自ら哲学的な批判的考察ができるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ハイデガーの著『存在と時間』は、従来のさまざまな哲学思想を引き受けながら、西洋哲学に対する抜本的批判を企てた書物である。そこには、古代ギリシア哲学にはじまり、中世神学、近世・近代哲学、そして現象学や解釈学をはじめとする当時の同時代の哲学思想との対決が織り込まれている。またその対決をとおして展開された彼の思想は、哲学のみならず、現代の諸学問に今なお甚大な影響を与えている。この授業では、ドイツ語原文の正確な読解をとおして、上述のような多様な位相にわたるハイデガーの存在論的思考の本質を見極めてゆくことに努める。理解を深めるため、ディスカッション、関連文献の読解、研究報告等も適宜織り交ぜる。ドイツ語以外の言語 (日・英・仏) による参加にも配慮する。秋学期は、『存在と時間』第一部第二編「現存在と時間性」第49節から読み進める。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション①	授業の進め方の説明・ハイデガー哲学の概要
第2回	イントロダクション②	『存在と時間』の全体像
第3回	イントロダクション③	『存在と時間』の基本思想
第4回	第49節の読解①	死の実存論的分析とその他の死の現象との区別
第5回	第49節の読解②	死の実存論的分析と諸学問における死の分析との相違
第6回	第49節の読解③	諸学問における死の分析に対する死の実存論的分析の先行性
第7回	第50節の読解①	死の現象と実存・事実性・頽落との連関
第8回	第50節の読解②	死の固有性
第9回	第50節の読解③	関心に基づく死
第10回	第51節の読解①	日常性における死
第11回	第51節の読解②	死の回避
第12回	第51節の読解③	死の回避と頽落の諸相
第13回	第51節の読解④	死に臨む存在と日常性の連関
第14回	まとめ	『存在と時間』の射程と制約

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

事前にテキストを精読したうえで参加すること。また事典や関連文献を参考に、主要な概念や術語の意義についても確認しておくこと。

【テキスト (教科書)】

Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen 1927.
Martin Heidegger, *Sein und Zeit*(Gesamtausgabe Bd. 2), Vittorio Klostermann, 1977.

原佑・渡邊二郎訳『存在と時間 II』中公クラシックス、2003年。

細谷貞夫訳『存在と時間』ちくま学芸文庫、1994年。

熊野純彦訳『存在と時間』岩波文庫、2013年。

高田珠樹訳『存在と時間』作品社、2013年。

【参考書】

①木田元『存在と時間の構築』岩波現代文庫、2000年。

②細川亮一『ハイデガー哲学の射程』創文社、2000年。

③齋藤元紀『存在の解釈学——ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』法政大学出版局、2012年。

④齋藤元紀 (共編著)『始まりのハイデガー』見洋書房、2015年。

⑤渡邊二郎編『ハイデガー『存在と時間』入門』講談社学術文庫、2011年。

⑥A. Luckner, *Martin Heidegger: » Sein und Zeit «*, 2. Aufl., Schöningh 2001.

⑦ M. King(Author), J. Llewelyn(ed.), *A Guide to Heidegger's Being and Time*, SUNY Press, 2001.

⑧ T. Rentsch(hrsg.), *Sein und Zeit*, 2. Aufl., Akademie Verlag 2008.

⑨ Mark A. Wrathall(ed.), *The Cambridge Companion to Heidegger's 'Being and Time'*, Cambridge University Press, 2013.

【成績評価の方法と基準】

上記「到達目標」で示した達成度を授業中の参加の度合(35%)、貢献度(35%)に加え、レポート(30%)を考慮し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

厳密な読解と徹底した議論をおとして哲学的思考を深める講義は例年好評を得ている。本年も基本的にその形式を踏襲し、ハイデガー存在論のさらなる理解を進めてゆく予定。積極的な授業参加を期待する。

【その他の重要事項】

ドイツ語辞書(紙・電子媒体いずれでもよい)を持参のこと。ただし初級用ではなく、『独和大辞典』(小学館)クラスが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

哲学・倫理学・思想史。

<研究テーマ>

ハイデガーをはじめとする現代哲学・現象学・解釈学・実存哲学の研究。環境思想や身体論等の応用哲学・応用倫理学研究。哲学対話をはじめとする哲学教育研究。

<主要研究業績>

『存在論の神話』(『現代思想』青土社、2018年2月臨時増刊号)、「気遣いぬもの」(ハイデガー研究会編『Zuspiel』第1号、2017年)『終わりなきデリダ—ハイデガー、サルトル、レヴィナスとの対話』(共編著、法政大学出版局、2016年)、『21世紀の哲学をひらく—現代思想の最前線への招待』(共編著、ミネルヴァ書房、2016年)、『ハイデガー—哲学は反ユダヤ主義か—黒ノートをめぐる討議』(共編著、水声社、2015年)、『現代日本の四つの危機』(編著、講談社選書メチエ、2015年)、『始まるハイデガー』(共編著、晃洋書房、2015年)、『ハイデガー読本』(共著、法政大学出版局、2015年)『存在の解釈学—ハイデガー『存在と時間』の構造・転回・反復』(法政大学出版局、2012年)、『科学と技術への問い—ハイデガー研究会第三論集』(共編著、理想社、2012年)、『概説 現代の哲学・思想』(共編著、ミネルヴァ書房、2012年)、『ヨーロッパ現代哲学への招待』(共編著、梓出版社、2009年)、『ハイデガー—存在と時間』の現在 刊行80周年記念論集』(共著、南窓社、2007年)、『ハイデガーと思索の将来—哲学への〈寄与〉』(共著、理想社、2006年)。「ギュンター・フィガール『問いと答え—ハイデガーについて』(監訳、法政大学出版局、2017年)、「ユルゲン・トラバント『フンボルトのグラマトロジー—言語の本性への斬新な洞察』(共訳、『思想』第7号、2009年)、「トム・ロックモア『カントの航跡のなかで—二十世紀の哲学』(共訳、法政大学出版局、2008年)。

【Outline and objectives】

The aim of this class is to know important theories in western philosophy, especially ontology, phenomenology and hermeneutics, and to learn to think critically and philosophically by reading Martin Heidegger's *Sein und Zeit* (Being and Time).

PHL600B1

古代哲学史研究 I - 1

奥田 和夫

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作(論文集)が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度春学期は第9巻第1章 1046a19 から第9巻第10章までを講読する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考方がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式です。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	春学期イントロダクション	デユナミス(能力、可能性)の諸相
第2回	第9巻第1章の精読・検討・理解	非理性的な能力と理性的な能力
第3回	第9巻第2章の精読・検討・理解	デユナミス否定論への反論、可能態
第4回	第9巻第3章の精読・検討・理解	可能、不可能
第5回	第9巻第4章の精読・検討・理解	デユナミスの獲得と現実化
第6回	第9巻第5章の精読・検討・理解	エネルゲイアとデユナミス、エンテレケイア
第7回	第9巻第6章の精読・検討・理解	他のものの可能態、質料
第8回	承前	承前
第9回	第9巻第7章の精読・検討・理解	現実態は可能態よりも先なるものである
第10回	承前	承前
第11回	第9巻第8章の精読・検討・理解	善の現実態、悪の現実態
第12回	第9巻第9章の精読・検討・理解	真としての「ある」、複合体と非複合体の真、偽
第13回	承前	承前
第14回	まとめ	当学期の学習内容の確認と整理

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する(訳読を準備し、疑問点、課題点を明確にする)。「形而上学」全体の構成をつねに確認する。

【テキスト(教科書)】

1. Aristotle/Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W.Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristoteis Metaphysica, Recognovit Brevi que Adnotatione Critica Instravit W.Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出隆訳『形而上学』(岩波文庫 上・下 第9巻以下は下巻に収録)。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポート内容、によって評価する（各25%ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報を履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅰ-2（秋学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
 <研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
 <主要研究業績> 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快樂論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）
 「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006年）
 「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）
 「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年 所収）
 「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we start to read from Book 9, ch. 1, 1046a19 to the end of the book. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL600B1

古代哲学史研究Ⅰ-2

奥田 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度秋学期は第10巻第1章から第10巻第10章までを読解する。

【到達目標】

上のべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考法がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式です。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	秋学期イントロダクション	秋学期イントロダクション〈一〉について
	第10巻第1章の精読・検討・理解	
第2回	承前	承前
第3回	第10巻第2章の精読・検討・理解	〈一〉は普遍的述語である
第4回	第10巻第3章の精読・検討・理解	〈一〉と〈多〉
第5回	承前	承前
第6回	第10巻第4章の精読・検討・理解	反対性
第7回	第10巻第5章の精読・検討・理解	大、小、等
第8回	承前	承前
第9回	第10巻第6章の精読・検討・理解	一と多の対立、少と多の対立
第10回	第10巻第7章の精読・検討・理解	反対のものにおける中間のもの
第11回	第10巻第8章の精読・検討・理解	種における差異
第12回	第10巻第9章の精読・検討・理解	種における差異をもたらず反対性
第13回	第10巻第10章の精読・検討・理解	消滅的なもの、永遠的なもの、イデア論批判
第14回	まとめ	当学期の学習内容の確認、整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する（訳読を準備し、疑問点、課題点を明確にする）。『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle 'Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W. Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. Aristoteis Metaphysica, Recognovit Breviisque Adnotatione Critica Instravit W. Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出陣訳『形而上学』（岩波文庫 上・下 第9巻以下は下巻に収録）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポートの内容、によって評価する（各25%ずつ）。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究 I - 1（春学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学

<研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。

<主要研究業績>

「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）

「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））研究成果報告書 所収 2006年）「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年 所収）「哲人王の行方」補説（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we start to read from Book 9, ch.1, 1046a19 to the end of the book. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL500B1

古代哲学史研究Ⅱ－1

奥田 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

プラトンの初期作品『ソクラテスの弁明』を読解し、ソクラテスが哲学として問うている事柄を正確に理解することを目的とする。これは同時に、哲学が誕生した当時における「哲学のモデル」を確認し評価する作業でもある。

【到達目標】

上に述べた「目的」を念頭におきつつ、第一に『弁明』において（プラトンが描写する）ソクラテスが提示するひとつひとつの議論を正確に把握すること、第二には、彼が全体としてどのような思想を提示しているのかを考察することが目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式です。具体的には、履修者による「担当箇所の内容要旨・問題点・考察」の発表および発表者と参加者との討議によりすすめる。発表者は発表にあたり、次の点に留意すること。1. 内容要旨の作成にあたっては正確さを旨とする。2. 問題点の指摘については、不明な点を明確にし、必要に応じて関連情報の収集をおこなう。3. うえの1. 2. を基礎に、担当箇所の内容に関する考察は、まず自分で考え、自分の言葉で説明することに留意する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	プラトン著作における『弁明』の位置づけとその特徴、使用する訳本
第2回	『弁明』第1－4章の精読・検討・理解	弁明の始まり。ソクラテスの古き訴人
第3回	第5－8章の精読・検討・理解	神託事件
第4回	第9－11章の精読・検討・理解	善美なるものと無知の自覚と問答活動
第5回	第12－15章の精読・検討・理解	メレトスとの問答
第6回	第16－17章の精読・検討・理解	愛知
第7回	第18－21章の精読・検討・理解	アプのたとえと非政治的活動
第8回	第22－24章の精読・検討・理解	大言壮語？ 第1回判決
第9回	第25－28章の精読・検討・理解	刑量の申し出
第10回	第29－33章の精読・検討・理解	最終判決と談話 『弁明』全体の確認、整理
第11回	ソクラテスの哲学 考察1	関連文献の検討・報告1 愛知の目的
第12回	ソクラテスの哲学 考察2	関連文献の検討・考察2 魂のあり方
第13回	ソクラテスの哲学 考察3	関連文献の検討・考察3 愛知と社会、政治
第14回	まとめ	考察の報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

『弁明』を通読し全体の構成を理解すること。授業計画にもとづき、各回の問題点、疑問点を明確にすること。

【テキスト（教科書）】

プラトン『ソクラテスの弁明』（田中美知太郎訳：中公クラシックス『プラトン』または新潮文庫版その他）。必要に応じて、ギリシア語/英訳対訳本その他を参照するが、その際は担当教員が用意する。

【参考書】

田中美知太郎『ソクラテス』（岩波新書）
加来彰俊『ソクラテスはなぜ死んだのか』（岩波書店）など。
その他はその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記したソクラテスの哲学についての理解度、担当箇所のレジュメ作成・発表・その内容、討論への貢献度、期末レポートの内容、を勘案して評価する。（各25%ずつ）

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅱ-2 と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
 <研究テーマ> 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
 <主要研究業績> 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快樂論の意味—」(『法政大学文学部紀要』第48号 2003年)
 「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」(『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14~17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 所収 2006年)
 「自然と人間—プラトンの自然思想から」(共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収)「哲人王の行方」(日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年 所収)「哲人王の行方」補説(『西洋古典研究会論集』第21号 2012年)

【Outline and objectives】

In this class we read Plato's "Apology of Socrates". Our objects are to have accurate ideas about what Socrates said in the court and to understand what philosophy is by nature.

PHL500B1

古代哲学史研究Ⅱ-2

奥田 和夫

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

プラトンの初期作品『クリトン』を読解し、ソクラテスが哲学にもとづく生き方として問うている事柄を正確に理解することを目的とする。これは同時に、哲学が誕生した当時における「正義と倫理のモデル」を確認し評価する作業でもある。

【到達目標】

上に述べた「目的」を念頭におきつつ、第一に『クリトン』において(プラトンが描写する)ソクラテスが提示するひとつひとつの議論を正確に把握すること、第二には、彼が脱獄を拒否することによって全体としてどのような思想を提示しているのかを考察することが目標である

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式です。具体的には、履修者による「担当箇所の内容要旨・問題点・考察」の発表および発表者と参加者との討議によりすすめる。発表者は発表にあたり、次の点に留意すること。1. 内容要旨の作成にあたっては正確さを旨とする。2. 問題点の指摘については、不明な点を明確にし、必要に応じて関連情報の収集をおこなう。3. うえの1. 2. を基礎に、担当箇所の内容に関する考察は、まず自分で考え、自分の言葉で説明することに留意する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	プラトン著作における『クリトン』の位置づけとその特徴、使用する訳本
第2回	『クリトン』第1-2章の精読・検討・理解	夜明け前の牢獄
第3回	『クリトン』第3-5章の精読・検討・理解	脱獄のすすめ
第4回	『クリトン』第6-8章の精読・検討・理解	反論
第5回	『クリトン』第9-11章の精読・検討・理解	反論(続)
第6回	『クリトン』第12-14章の精読・検討・理解	国家、国法との問答
第7回	『クリトン』第15-16章の精読・検討・理解	国家、国法との問答(続)
第8回	『クリトン』第17章の精読・検討・理解	脱獄の拒否
第9回	ソクラテスの生き方 考察1	『クリトン』全体の確認、整理 関連文献の検討・報告1 大衆と知識人
第10回	ソクラテスの生き方 考察2	関連文献の検討・報告2 社会と知識
第11回	ソクラテスの生き方 考察3	関連文献の検討・報告3 国民の義務
第12回	ソクラテスの生き方 考察4	関連文献の検討・報告4 国家、国法
第13回	ソクラテスの生き方 考察5	関連文献の検討・報告5 正義
第14回	まとめ 考察の報告	まとめ 考察の報告

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

『クリトン』を通読し全体の構成を理解すること。授業計画にもとづき、各回の問題点、疑問点を明確にすること。

【テキスト(教科書)】

プラトン『クリトン』(田中美知太郎訳:中公クラシック『プラトン』または新潮文庫版その他)。必要に応じて、ギリシア語/英訳対訳本その他を参照するが、その際は担当教員が用意する。

【参考書】

田中美知太郎『ソクラテス』(岩波新書)
 加来彰俊『ソクラテスはなぜ死んだのか』(岩波書店)など。その他はその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記したソクラテスの哲学についての理解度、担当箇所へのレジュメ作成・発表・その内容、討論への貢献度、期末レポートの内容、を勘案して評価する。(各25%ずつ)

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

古代哲学史研究Ⅱ-1 と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学 〈研究テーマ〉現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。〈主要研究業績〉「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」(『法政大学文学部紀要』第48号 2003年)「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」(『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14~17年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 所収 2006年)「自然と人間—プラトンの自然思想から—」(共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収)「哲人王の行方」(日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年 所収)「哲人王の行方」補説」(『西洋古典研究会論集』第21号 2012年)

【Outline and objectives】

In this class we read Plato's "Crito". Our objects are to have accurate ideas about why Socrates refused to break prison and to understand concept of his justice and his way of life.

PHL600B1

論理学研究Ⅰ-1

安東 祐希

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

ゲンツェンの基本定理の証明を学ぶ。

【到達目標】

基本定理の証明を細部にわたり理解し、自ら証明を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	証明の方針	論文(III:3.1 前文)部分
第2回	自由変数の付け替え	論文(III:3.10)部分
第3回	左上式が公理	論文(III:3.111-112)部分
第4回	左上式が右弱化	論文(III:3.113.1-2)部分
第5回	上式が左右連言等	論文(III:3.113.31-32)部分
第6回	上式が左右全称等	論文(III:3.113.33-36)部分
第7回	右階数が1より大	論文(III:3.121 前文)部分
第8回	Iが左構造規則	論文(III:3.121.21)部分
第9回	Iの上式が一つ	論文(III:3.121.22)部分
第10回	Iの上式が二つ	論文(III:3.121.23)部分
第11回	右階数が1	論文(III:3.122)部分
第12回	NJにおける切断	論文(III:3.21)部分
第13回	階数が2	論文(III:3.231)部分
第14回	階数が2より大	論文(III:3.232)部分

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト(教科書)】

G. Gentzen, Untersuchungen über das logische Schließen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳、Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

・Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
・A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容(60%)において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答(40%)において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学(証明論)

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

・Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

・A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講究録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with the proof of Gentzen's Hauptsatz.

PHL600B1

論理学研究 I - 2

安東 祐希

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ゲンツェンの基本定理の応用例を学ぶ。合わせて、複数の体系に関する同等性を学ぶ。

【到達目標】

直観主義命題論理の決定問題などに対して基本定理を応用できて、基本定理で使用される体系と他の体系との同等性を証明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	命題論理の無矛盾性	論文 (IV:1.1) 部分
第2回	直観主義の決定問題	論文 (IV:1.2) 部分
第3回	排中律	論文 (IV:1.3) 部分
第4回	強い形の基本定理	論文 (IV:2.1) 部分
第5回	強い定理の証明	論文 (IV:2.2) 部分
第6回	定理の他の強め方	論文 (IV:2.3) 部分
第7回	算術の体系	論文 (IV:3.1) 部分
第8回	帰納法無しの算術	論文 (IV:3.2) 部分
第9回	体系の拡張	論文 (IV:3.3) 部分
第10回	同等性と既存体系	論文 (V:§1-2) 部分
第11回	LHJ から NJ	論文 (V:§3) 部分
第12回	NJ から LJ	論文 (V:§4) 部分
第13回	LJ から LHJ	論文 (V:§5) 部分
第14回	LHK, NK と LK	論文 (V:§6) 部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト（教科書）】

G. Gentzen, Untersuchungen uber das logische Schliesen, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳, Investigations into logical deduction, in *The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

・Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
 ・A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容（60%）において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答（40%）において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

（専門領域）

数理論理学（証明論）

（研究テーマ）

証明図の正規化手続きに関する諸性質

（主要研究業績）

・Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

・A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

・Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講義録 2083『証明論と証明活動』（2018）pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with some applications of Gentzen's Hauptsatz and with the equivalence of related logical systems.

PHL500B1

論理学研究 II - 1

計良 隆世

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インド仏教思想における真理説・レトリック（説得方法）・真理説論証・真理観。インド初期仏教は自らが示す真理説を聞き手に納得させるためにどのようなレトリックを用いたのか、またインド大乘仏教は真理説を根拠付け合理的に正当化するためにどのような論証を行ったのか、そのレトリックと論証方法を、初期経典の『無我相経』等、大乘経典の『稲苾経』とそれに対する後期中観派の注釈、『中論』等の大乘論書の原典からの英訳または和訳を輪読しながら、分析し理解していく。他方、インド仏教の真理観について、その特徴と西洋の哲学思想における真理観との差異とを、比較思想的方法を用いることにより、理解する。加えて最後に、仏教の言語観・言語理論（アポーハ論）を取り上げ、文献資料を用いながら、仏教の真理観と言語観との関係、アポーハ論と仏教論理学との関係、自身の言語観に基づくとも考えられる仏陀の教育指導法とその論理、そして大乘仏教の真理説論証（法無我・無自性性論証）で用いられる、帰謬法・自立論証等の論証方法についても学習し、理解する。

【到達目標】

・インド仏教が提示する三法印等の真理説の論理的構造を理解する。
 ・真理説を聞き手に納得させるために初期仏教が用いたレトリック、そして真理説を根拠付けるために大乘仏教が採用した論証方法を理解する。
 ・仏教思想における真理観の特徴を理解する。
 ・仏教の言語観と言語理論（アポーハ論）、そしてアポーハ論と仏教論理学との関係を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は講義と演習の両形態を採る。基本的には、各回、まずテーマについて概説し、文献資料と一緒に読み（もしくは担当者に訳文を発表してもらい）、その後で、学生に意見・感想を述べてもらう、という形になるが、仏教の基本思想や関連する西洋哲学思想について、しばしば課題を出す予定である。担当者は課題について調べたことを授業内に発表してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	仏教思想の出発点（1）	東西両哲学思想の比較研究の可能性、ウパニシャッドの哲学
第2回	仏教思想の出発点（2）	プラフマニズムへの不信心、絶対神・創造神の否定
第3回	仏教の真理説「諸行無常」（1）	無常性の根拠、「諸行無常」から導出されること、無常性の解釈と根拠付け
第4回	仏教の真理説「諸行無常」（2）	「諸行無常」の真理観、西洋の真理観との比較
第5回	仏教の真理説「諸行無常」（3）	西洋の真理観との比較（続き）、ニーチェの仏教評価
第6回	仏教の真理説「一切皆苦」（1）	苦と苦の根拠、四諦説（苦諦・集諦）、十二支縁起
第7回	仏教の真理説「一切皆苦」（2）	苦の滅と苦の滅に至る方法、四諦説（滅諦・道諦）、八支聖道、中道、「苦からの解放」についてのニーチェの評価、苦滅と生の充実
第8回	仏教の真理説「諸法無我」（1）	我（アートマン）説、『無我相経』講説、非我と無我、無我説の説得方法（レトリック）
第9回	仏教の真理説「諸法無我」（2）	大乘仏教の無我解釈、中観思想（縁起・空・中）、中観派が提示する法無我の論理的根拠とその根拠の論理的構造
第10回	大乘仏教の縁起思想（1）	『稲苾経』・『稲苾経註』英訳講読（1）、外縁起と内縁起、縁起の二種観察法
第11回	大乘仏教の縁起思想（2）	『稲苾経』・『稲苾経註』英訳講読（2）、刹那滅論証、刹那滅と縁起・此縁性
第12回	大乘仏教の縁起思想（3）	『稲苾経』・『稲苾経註』英訳講読（3）、真理説に関する大乘仏教と小乗仏教との思想的差異、世俗と勝義の関係、これまでのまとめ
第13回	仏教の言語観・言語理論	インド版普遍論争、仏教の言語理論と仏教論理学
第14回	仏教の教育指導法とその論理	仏陀の対機説法と論理、帰謬法、自立論証と帰謬論証、否定対象と否定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前学習：文献資料の熟読、仏教専門用語の理解。授業内で出された課題の発表用意（担当者のみ）。

授業後学習：参考文献の熟読。

【テキスト（教科書）】

『スッタニパータ』：中村元訳『ブッダのこぼし』、岩波文庫、東京、1958年。
『ダンマパダ』：中村元訳『真理のこぼし・感興のこぼし』、岩波文庫、東京、1978年。
『大パリニッパナ経』：中村元訳『ブッダ最後の旅』、岩波文庫、東京、1980年。
『無我相経』：中村元監修、及川・羽矢・平木訳『原始仏典 II 相应部経典第三卷』、春秋社、東京、2012年。
『稲牟経』・『稲牟経註』：Jeffrey Schoening, *ZAlistambasUtra and its Indian commentaries*, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 1995。
『ミリンダ王経』：長尾雅人監修、服部・宇野・大地原・その他訳『世界の名著 1 パラモン教典・原始仏典』、中央公論社、東京、1969年。

【参考書】

・高崎直道監修、桂・齋藤・下田・その他編集『シリーズ大乘仏教9 認識論と論理学』、春秋社、東京、2012年。
・桜部・上山『仏教の思想2 存在の分析・アビダルマ』、角川文庫ソフィア、東京、1996年。
・桂紹隆『概念：アポーハ論を中心に』、『岩波講座・東洋思想10 インド仏教3』、岩波書店、東京、1989年。
・御牧克己『利那滅論証』、『講座大乘仏教9 認識論・論理学』、春秋社、東京、1984年。
・齋藤明『中観思想の成立と展開：ナーガールジュナの位置づけを中心として』、『シリーズ大乘仏教6 空と中観』、春秋社、東京、2012年、pp. 3-41。

【成績評価の方法と基準】

評価方法：ゼミでの発表・訳読・質疑応答（30%）、議論への参加度・授業への貢献度（30%）、学期末レポート（40%）
評価基準：主として、「到達目標」に掲げた事柄の理解度による。
その他、授業前学習・授業後学習をきちんと行っているかどうかとも基準に含める。

【学生の意見等からの気づき】

仏教知識論を学んだことのない学生がほとんどなので、丁寧な指導・解説を心掛けたいと思います。

【その他の重要事項】

必要な文献資料は授業支援システムにおいて配布する予定。履修者は授業前日までにダウンロードし、文献資料に目を通していただくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> インド哲学・仏教思想
<研究テーマ> インド後期中観思想
<主要研究業績>

- Ryusei Keira, *Madhyamika and Epistemology: A Study of KamalazIla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the MadhyamakAloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.
- Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: KamalazIla's way of adopting scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』、山喜房仏書林、東京、2006年、pp. 177-192.
- Ryusei Keira, The description of niHsvabhAvatA and its intentional meaning: KamalazIla's solution for the doctrinal conflict between MAdhyamika and YogAcAra, *Acta Tibetica et Buddhica 2*, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.
- 計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」、『シリーズ大乘仏教6 空と中観』、春秋社、東京、2012年、pp. 89-112.
- 計良龍成, 「『中観光明論』(MadhyamakAloka) 後主張第1章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究(1)：和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica 9*, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

【Outline and objectives】

This is a course to gain basic knowledge of Indian Buddhist epistemology and logic.

The aim of this course is to give participants an analysis of the logical structure of the Indian Buddhist theory of the truth and an understanding of the characteristics of the rhetoric or reasoning which rationally justifies the theory.

PHL500B1

論理学研究Ⅱ-2

計良 隆世

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中観思想と認識論・論理学；
インド大乘仏教後期中観派の学者 KamalazIla は、自身の中観思想の確立のために、仏教論理学者 DharmakIrti の認識論・論理学をどのように受け入れ、解釈したのか。

【到達目標】

・經典の權威に関する DharmakIrti と KamalazIla の立場と、KamalazIla の經典解釈法を理解する。
・後期中観派の法無我・無自性性論証（真理説論証）の構造と特色とを理解する。
・法無我という真理の直観知はどのようにして成立するのか、その知の成立構造を理解する。
・後期中観派が示す「瞑想の階梯」から見て、中観思想はどのような哲学思想と言い得るか、その哲学思想としての本質について、自分の考えを纏めてみる。
・後期中観派が説く、菩薩の生き方・人生観を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

まず、仏教の基礎知識として、仏教の世界観、その特徴、初期・部派仏教と大乘仏教の間では、思想・教義の変化に応じて世界観がどのように変化したのか、これらについて概説する。次に、KamalazIla の中観思想とそれを最も特徴付けている DharmakIrti の認識論・論理学とを、KamalazIla が著した中観仏教習得実践マニュアル『修習次第初編』(First BhAvanAkrama (=BK I)) の原典英訳(和訳参照可)を輪読しながら、理解していく。そのテキストの輪読の途中、經典の權威に関する DharmakIrti と KamalazIla の立場、KamalazIla の經典解釈法、KamalazIla の無自性性論証の論理については、論文講読を行い、中観思想と仏教論理学についての深い知識を習得する。後期中観派が提示する「瞑想の階梯」についてテキストを読解した後、中観思想の哲学思想としての本質について議論を行う。最後に、仏教徒の生き方・実践知の確立にとって最も重要な手がかり・手段となる「中道」と「中道の確立方法」とをテキストを通して学習してから、後期中観思想が説く、菩薩の人生観について考え、理解する。

授業は、概説・講義の回もあるが、基本的に演習形式である。担当者を決め、テキストや英語論文の訳文を発表してもらう。また課題を出し、担当者に授業内に発表してもらうこともある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	仏教の世界観とその変遷	『俱舍論』が説く世界観、大乘仏教の世界観
第2回	慈悲の修習	BK I, §1-§2, pp. 187, 1-190, 12.
第3回	慈悲心と中道	BK I, §5-§8, pp. 193, 13-198, 7.
第4回	無自性性論証と經典の權威	BK I, §9-§10, pp. 198, 8-200, 13.
第5回	後期中観派の經典解釈法	英語論文講読1： The description of niHsvabhAvatA and its intentional meaning.
第6回	仏教論理学の基礎知識	遍充論、推理論、正しい論証因、誤謬論
第7回	DharmakIrti の論理学と無自性性論証	知覚不可能なもの否定は可能か、論証因の成立・不成立、基体不成立
第8回	KamalazIla による無自性性論証の整理	BK I, §10-§11, pp. 200, 13-204, 9.
第9回	無自性性論証の論理(1)	正しい認識手段の成立、主張命題の構造と解釈
第10回	無自性性論証の論理(2)	DharmakIrti の無知覚理論(英語論文講読)
第11回	無自性性論証の論理(3)	KamalazIla による無知覚理論の解釈(BK I, §16-§18, pp. 210, 5-217, 14.)
第12回	瞑想の階梯	ヨーガ行者の直接知覚、法無我という真理の直観智
第13回	中道の確立	BK I, §20-§21, pp. 219, 21-223, 5.
第14回	菩薩の人生観	智慧と方便の双運道

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前学習：テキスト該当箇所の精読・訳文準備、論文等文献資料の熟読
授業後学習：参考文献の熟読

【テキスト（教科書）】

『修習次第初編』：

・G.Tucci, *Minor Buddhist Texts, part 2: First BhAvanAkrama of KamalazIla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary*. Serie Orientale Rome IX 2, Rome 1958.
 ・Martin T. Adam, *Meditation and the Concept of Insight in KamalazIla's BhAvanAkramas*. A Thesis submitted to McGill University in partial fulfillment of the requirements of the degree of Doctor of Philosophy, Montreal 2002.

【参考書】

・桜部・上山『仏教の思想2 存在の分析・アビダルマ』, 角川文庫ソフィア, 東京, 1996年
 ・Ryusei Keira, *MAdhyamika and Epistemology: A Study of KamalazIla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the MadhyamakAloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.
 ・Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: KamalazIla's way of adopting scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006年, pp. 177-192.
 ・Ryusei Keira, The description of niHsvabhAvatA and its intentional meaning: KamalazIla's solution for the doctrinal conflict between MAdhyamika and YogAcAra, *Acta Tibetica et Buddhica 2*, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.
 ・計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012年, pp. 89-112.
 ・計良龍成, 「『中観光明論』(MadhyamakAloka) 後主張第1章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究(1): 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica 9*, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

【成績評価の方法と基準】

評価方法: 訳読・質疑応答(60%)、
 議論への参加度・授業への貢献度(40%)
 評価基準: 主として、「到達目標」に掲げた事柄の理解度による。
 その他、授業前学習・授業後学習をきちんと行っているかどうかとも基準に含める。

【学生の意見等からの気づき】

始どの学生にとって、インド後期中観思想を学ぶのは初めての機会でしょうから、丁寧な指導・解説を心掛けたいと思います。

【その他の重要事項】

必要な文献資料は授業支援システムにおいて配布する予定。履修者は授業前日までにダウンロードし、文献資料に目を通しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> インド哲学・仏教思想
 <研究テーマ> インド後期中観思想
 <主要研究業績>

- ① Ryusei Keira, *MAdhyamika and Epistemology: A Study of KamalazIla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the MadhyamakAloka*. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, Wien, 2004.
- ② Ryusei Keira, The proof of voidness and scriptural authority: KamalazIla's way of adopting scriptures. 『法華経と大乘仏教の研究』, 山喜房仏書林, 東京, 2006年, pp. 177-192.
- ③ Ryusei Keira, The description of niHsvabhAvatA and its intentional meaning: KamalazIla's solution for the doctrinal conflict between MAdhyamika and YogAcAra, *Acta Tibetica et Buddhica 2*, Monobusan University, Minobu, 2009, pp. 1-24.
- ④計良龍成, 「カマラシーラの中観思想」, 『シリーズ大乘仏教6 空と中観』, 春秋社, 東京, 2012年, pp. 89-112.
- ⑤計良龍成, 「『中観光明論』(MadhyamakAloka) 後主張第1章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究(1): 和訳・註解・チベット語訳校訂テキスト」, *Acta Tibetica et Buddhica 9*, Monobusan University, Monobu, 2016, pp. 1-121.

【Outline and objectives】

This is a course to gain basic knowledge of Indian Buddhist epistemology and MAdhyamika philosophy.
 The main aim of this course is to give participants an understanding of how KamalazIla, a later MAdhyamika philosopher, interpreted DharmakIrti's epistemology in order to establish his own MAdhyamika philosophy.

PHL600B1

近代倫理学史研究 I - 1

菅沢 龍文

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

カント『人間学』を読む
 —「人間とは何か」という問題を考える—

カントの『実用的見地における人間学』では、経験的な側面での人間存在について語られるのであり、そこからは好奇心に溢れるカントの人間知についても窺い知られる。これによりカントの批判哲学がさらに経験的な知の側から補われ、ようやく十全な人間が知られる。春学期は、第一部・第一編「認識能力について」のなかでも「外的感官」、「内的感官」、「構想力(想像力)」に関する箇所を読み進めて、多様な観点で検討する。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
 (1) 一次資料へ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
 (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
 (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
 (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
 (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝える。
 (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解く。
 (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- (1) カントの『人間学』ドイツ語原典の訳読を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、内容の理解を深める。
- (2) 毎回、テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (3) ドイツ語の初学者も、プロトコル(前回のまとめ)やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (4) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	(1)ゼミの方式、テキスト等について (2)カントの『人間学』の背景・全体像 (3)これから読む箇所の位置づけ カント『人間学』原典テキスト 51-52
第2回	味覚と嗅覚——煙草について——	同上 52-53 頁
第3回	内的感官の現象における夢想狂および視靈狂	同上 53-54 頁
第4回	外的感覚の強度が増減する原因: 1. 対照	同上 54-55 頁
第5回	同上: 2. 新鮮	同上 55-56 頁
第6回	同上: 3. 交替	同上 56-57 頁
第7回	同上: 4. 充足に至るまでの漸増	同上 57-58 頁
第8回	感官能力の抑止、衰弱、全面喪失: 酩酊	同上 58-60 頁
第9回	睡眠、感官諸器官の麻痺	同上 60-61 頁
第10回	失神と死	同上 61-62 頁
第11回	創造的構想力(想像力)と回想的構想力	同上 62-63 頁
第12回	構想力(想像力)と感覚	同上 63-64 頁
第13回	Sinnの多義性について	同上 64-65 頁
第14回	酔いの諸相	同上 64-65 頁

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト(教科書)】

I. Kant, *Anthropologie in pragmatischer Hinsicht*, Herausgegeben von Reinhard Brandt, Felix Meiner Verlag.
 (邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第15巻、理想社版・第十四巻など。
 (英訳書)ケンブリッジ版 I. Kant, "Anthropology, History, and Education" (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) など。

【参考書】

<カントの著作>
 『美と崇高の感情にかんする観察』1764年

【脳病試論】1764年
 『世界市民的見地における普遍史の理念』1784年
 『人種の概念の規定』1785年
 <関連性の高い研究書(和書)>
 ミシェル・フーコー『カントの人間学』王寺賢太訳、新潮社
 中島義道『カントの人間学』講談社現代新書
 太田直道『カントの人間哲学』晃洋書房
 渋谷久『カント哲学の人間学的研究』西田書店
 高坂正顕『カント』理想社
 その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

- (1) プロトコル(前回のまとめ)発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
 (2) レポート課題で確認される到達目標達成度
 (1)を70%、(2)を30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。
 定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 西洋近代の哲学・倫理学
 <研究テーマ>
 カント哲学・倫理学
 <主要研究業績>
 『世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——』『法政大学文学部紀要』第76号、2018年
 『ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——』『法政大学文学部紀要』第70号、2015年
 (欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.
 (翻訳:共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』(春風社)、2017年

【Outline and objectives】

Reading Kant's "Anthropology": What is a human being?
 Kant's "Anthropology from a pragmatic point of view" treats a human being as empirically observed and tells us Kant's strong curiosity to know a human being. This compensates Kant's critical philosophy with empirical observations and at last the perfect knowledge about the human being will be achieved. In our Spring semester we examine and discuss through Kant's original German text mainly the 'five senses', 'inner sense' and 'the power of imagination'.

PHL600B1

近代倫理学史研究 I - 2

菅沢 龍文

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

カント『人間学』を読む
 ——「人間とは何か」という問題を考える——
 カントの『実用的見地における人間学』では、経験的な側面での人間存在について語られるのであり、そこから好奇心に溢れるカントの人間知についても窺い知られる。これによりカントの批判哲学がさらに経験的な知の側から補われ、ようやく十全な人間が知られる。春学期は、第一部・第一編「認識能力について」のなかでも「外的感官」、「内的感官」、「構想力(想像力)」に関する箇所を読み進めて、多様な観点で検討する。

【到達目標】

- カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。
 (1) 一次資料へ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
 (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
 (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
 (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較検討できる。
 (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝える。
 (6) ドイツ語テキストの訳読をする参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解く。
 (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- (1) カントの『人間学』の訳解を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、内容の理解を深める。
 (2) 毎回、テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
 (3) ドイツ語の初學者も、プロトコル(前回のまとめ)やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
 (4) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	醜聞	カント『人間学』原典テキスト 65-66頁
第2回	飲酒	同上 66-67頁
第3回	構想力(想像力)による独創	同上 67-68頁
第4回	構想力(想像力)による期待	同上 68-69頁
第5回	構想力(想像力)と思考	同上 69-70頁
第6回	工芸家の創作能力(Dichtungsvermögen)	同上 70-71頁
第7回	睡眠と夢	同上 71-72頁
第8回	連想の感性的創作能力	同上 72-73頁
第9回	親和の感性的創作能力	同上 73-74頁
第10回	悟性と感性	同上 74-75頁
第11回	構想力(想像力)の強さによる錯覚	同上 75-76頁
第12回	構想力(想像力)による共感	同上 76-77頁
第13回	空想、構想力(想像力)と情念	同上 77-78頁
第14回	創作する構想力(想像力)	同上 78-79頁

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト(教科書)】

I. Kant, Anthropologie in pragmatischer Hinsicht, Herausgegeben von Reinhard Brandt, Felix Meiner Verlag.
 (邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第15巻、理想社版・第十四巻など。
 (英訳書)ケンブリッジ版 I. Kant, "Anthropology, History, and Education" (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) など。

【参考書】

<関連性の高いカントの著作>
 『美と崇高の感情にかんする観察』1764年

【脳病試論】1764年
 『世界市民的見地における普遍史の理念』1784年
 『人種の概念の規定』1785年
 <関連性の高い参考書(和書)>
 ミシェル・フーコー『カントの人間学』王寺賢太訳、新潮社
 中島義道『カントの人間学』講談社現代新書
 太田直道『カントの人間哲学』晃洋書房
 渋谷久『カント哲学の人間学的研究』西田書店
 高坂正顕『カント』理想社
 その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

- (1) プロトコル(前回のまとめ)発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
 (2) レポート課題で確認される到達目標達成度
 (1)を70%、(2)を30%で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。
 定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 西洋近代の哲学・倫理学
 <研究テーマ>
 カント哲学・倫理学
 <主要研究業績>
 『世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——』『法政大学文学部紀要』第76号、2018年
 『ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——』『法政大学文学部紀要』第70号、2015年
 (欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in; Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.
 (翻訳:共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』(春風社)、2017年

【Outline and objectives】

Reading Kant's "Anthropology": What is a human being?
 Kant's "Anthropology from a pragmatic point of view" treats a human being as empirically observed and tells us Kant's strong curiosity to know a human being. This compensates Kant's critical philosophy with empirical observations and at last the perfect knowledge about the human being will be achieved. In our Autumn semester we examine and discuss through Kant's original German text mainly 'the power of imagination'.

PHL600B1

近代倫理学史研究Ⅱ－1

菅沢 龍文

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

カント『実践理性批判』を読む

— カント道徳哲学の原点 —

カントの『実践理性批判』の前半の「分析論」では『道徳形而上学の基礎づけ』(『人倫の形而上学の基礎づけ』)の第三章と並んで、カントの道徳原理である定言命法と自由の根拠付けの問題が追究されている。これらの議論を検討することにより、カントの道徳論がどれだけの深みと広がりを持つのか考える。春学期は主に「原因性の概念、および善悪の概念」について検討することになる。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 一次資料へ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝える。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解く。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- (1) 前年秋学期に引き続きカントの『実践理性批判』原典の「分析論」の理解を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、内容の理解を深める。
- (2) 毎回、テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (3) ドイツ語の初学者も、プロトコル(前回のまとめ)やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (4) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ゼミへのイントロダクション	①ゼミのテーマと目標、方式について ②『実践理性批判』について ③これまでに読み進めた箇所について
第2回	数学と懐疑論——ヒューム批判	『実践理性批判』原典テキスト 70-71 頁
第3回	原因の概念が「習慣」によること	同上 71-72 頁
第4回	原因の概念がアプリアリであること	同上 72-73 頁
第5回	原因の概念を物自体に関係づけること	同上 73-74 頁
第6回	純粹意志は純粹実践理性に他ならないこと	同上 74-75 頁
第7回	ヌーメノンの原因の概念について	同上 75-76 頁
第8回	原因性の概念の現実的な適用について	同上 76-77 頁
第9回	理性の意志に対する関係における諸カテゴリーの实在性	同上 77-78 頁
第10回	行為の道徳的可能性	同上 78-79 頁
第11回	善の概念が実践的法則の根拠となる場合	同上 79-80 頁
第12回	善・悪の二義性	同上 80-81 頁
第13回	善悪と幸不幸	同上 81-82 頁
第14回	善悪と理性	同上 82-83 頁

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト(教科書)】

I. Kant, Kritik der praktischen Vernunft, Felix Meiner Verlag.

(翻訳書)『カント全集』岩波書店版・第7巻、理想社版・第七巻など。単行本では、以文社版、岩波文庫版、光文社古典新訳文庫版、作品社版など。(英訳:ケンブリッジ版など)。

【参考書】

H・J・ペイトン『定言命法』(杉田聡訳、行路社)

L・W・ベック『カント『実践理性批判』の注解』（藤田昇吾訳、新地書房）
中島義道『悪への自由 カント倫理学の深層文法』（勁草書房）
その他の関連する入門書や解説書や研究文献をゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
(2) レポート課題で確認される到達目標達成度
(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。
定期どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年
「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in: Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

(翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017 年

【Outline and objectives】

Reading Kant's "Critique of practical reason": Crucial points of Kant's moral philosophy

Beside the Section III of the "Groundwork of the Metaphysics of morals", in the 'Analytik of pure practical reason', the first half of the "Critique of practical reason", Kant investigates into the moral 'categorical imperative' and justifies our moral freedom. Considering these Kant's investigations, we elucidate the depth and the range of Kant's moral investigations. In our Spring semester we examine and discuss through Kant's original German text mainly the concepts of the causation and the good and evil.

PHL600B1

近代倫理学史研究Ⅱ－2

菅沢 龍文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『実践理性批判』を読む

— カント道徳哲学の原点 —

カントの『実践理性批判』の前半の「分析論」では『道徳形而上学の基礎づけ』（『人倫の形而上学の基礎づけ』）の第三章と並んで、カントの道徳原理である定言命法と自由の根拠付けの問題が追究されている。これらの議論を検討することにより、カントの道徳論がどれだけの深みと広がりを持つのか考える。秋学期は、道徳法則を行為へ適用することを考えるにあたって、善悪の概念、および道徳法則の「範型 (Typus)」についてのカントの議論を考察する。

【到達目標】

カントの古典的テキストに関して、次のような態度・技能・知識を身につける。

- (1) 一次資料へ立ち返り、思想家の思想そのものを掘り起こす。
- (2) 対象について、疑問点を発見、調査、考察して、理解を深める。
- (3) 他人の意見も参照して、いっそう説得力のある意見を形成する。
- (4) テキストから掘り起こした思想と他の思想とを比較対照できる。
- (5) レポートにおいて、内容を分かりやすく、しかも正しく伝える。
- (6) ドイツ語テキストを訳読する参加者は、ドイツ語原典を正確に読み解く。
- (7) 翻訳書での参加者は、翻訳語や翻訳文の意味を適切に理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- (1) 春学期に引き続き『実践理性批判』の「分析論」の途中から訳解を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、内容の理解を深める。
- (2) 毎回、テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。
- (3) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。
- (4) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	理性と幸福	『実践理性批判』 原典テキスト 83-84 頁
第 2 回	それ自体での善悪	同上 84-85 頁
第 3 回	実践理性批判における方法の逆説	同上 85-86 頁
第 4 回	善悪の概念と道徳法則	同上 86-87 頁
第 5 回	最高善	同上 87-88 頁
第 6 回	自由の法則と行為	同上 88-89 頁
第 7 回	自由のカテゴリー	同上 89-90 頁
第 8 回	自由のカテゴリー表	同上 90-91 頁
第 9 回	純粹実践理性の判断力	同上 91-92 頁
第 10 回	法則そのものの（いわば）図式	同上 92-93 頁
第 11 回	道徳法則の範型	同上 93-94 頁
第 12 回	自由の法則の範型としての自然法則	同上 94-95 頁
第 13 回	実践理性の経験論の防止	同上 95-96 頁
第 14 回	実践理性の神秘主義の防止	同上 96-97 頁

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, Kritik der praktischen Vernunft, Felix Meiner Verlag.

(翻訳書)『カント全集』岩波書店版・第 7 巻、理想社版・第七巻など。単行本では、以文社版、岩波文庫版、光文社古典新訳文庫版、作品社版など。(英訳：ケンブリッジ版など)。

【参考書】

H・J・ペイトン『定言命法』（杉田聡訳、行路社）

L・W・ベック『カント『実践理性批判』の注解』（藤田昇吾訳、新地書房）

中島義道『悪への自由 カント倫理学の深層文法』（勁草書房）

その他の関連する入門書や解説書や研究文献をゼミで適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

- (1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度
(2) レポート課題で確認される到達目標達成度

(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。
定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年
「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年

(欧文) Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in: Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.

(翻訳) マンフレッド・キューン『カント伝』(春風社)、2017 年

【Outline and objectives】

Reading Kant's "Critique of practical reason": Crucial points of Kant's moral philosophy

Beside the Section III of the "Groundwork of the Metaphysics of morals", in the 'Analytik of pure practical reason', the first half of the "Critique of practical reason", Kant investigates into the moral 'categorical imperative' and justifies our moral freedom. Considering these Kant's investigations, we elucidate the depth and the range of Kant's moral investigations. In our Autumn semester we examine and discuss through Kant's original German text the concepts of the good and evil and the 'type' of the moral law to think about the application of the moral law to the action.

PHL600B1

実践哲学研究 I - 1

山口 誠一

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

ニーチェの言語論関連文書を主としてドイツ語で精読する。邦語訳での参加も認める。

【到達目標】

ニーチェを基本的に理解できる。

ニーチェの言語論とその影響を受けた現代思想を概観できる。

そのことよって、これまでのニーチェ研究の限界を解明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

原書テキスト講読と邦語訳テキスト講読を組み合わせながら、関連文献講読や講義も実施する。

社会人学生には、邦語テキストによる参加も許可する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ニーチェの言語論についての案内	ニーチェの隠喩論が、ニーチェの中心であることを解説する。
第 2 回	N・ボルツのニーチェ言語論解釈	ニーチェの隠喩論が、ドイツ近世哲学から生まれたことを検討する。
第 3 回	G・ゲルバーの転移論	科学的なレトリック論をニーチェが受容していたことを解明する。
第 4 回	ニーチェ「道徳外の意味における真理と虚偽について」(1) 一隠喩	ニーチェの言語論が隠喩の生成を中心としていることを検討する。
第 5 回	ニーチェ「道徳外の意味における真理と虚偽について」(2) 一形而上学批判	隠喩中心の立場から概念中心の形而上学を批判する。
第 6 回	ニーチェ「レトリック講義」(1) 一修辞と認識	ニーチェ哲学の中心が修辞にあることを検討する。
第 7 回	ニーチェ「レトリック講義」(2) 一隠喩	ニーチェの修辞論の中心が隠喩にあることを検討する。
第 8 回	ニーチェ「レトリック講義」(3) 一律動論	ニーチェは、言語の意味よりは、律動を重視したことを検討する。
第 9 回	ニーチェ「レトリック講義」(4) 一文体論	ニーチェが新しい文体を創出したことを解明する。
第 10 回	アナトール・フランスの形而上学批判	形而上学批判という点でのアナトール・フランスとニーチェの関係について検討する。
第 11 回	デリダの「空白の神話」	レトリック論を中心にデリダがニーチェを受容したことを解明する。
第 12 回	第 12 回: R・グレイのニーチェ言語論解釈	ニーチェの言語論が擬人観を前提していることを検討する。
第 13 回	K・フィーバークの転移論	隠喩という点で、ニーチェとヘーゲルの関係について検討する。
第 14 回	ヘーゲルの言語論	ヘーゲルの概念を重視する言語論について検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

テキストを事前に読む

【テキスト (教科書)】

テキストは、受講者にはプリントで配布する

Friedrich Nietzsche, Über Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne(1873). Im KSA 1, S. 893ff.

Friedrich Nietzsche, Darstellung der antiken Rhetorik(1874). In: KGW II/4, S. 412ff.

Gustav Gerber, Die Sprache als Kunst. Bd. 1, Mittler'sche Buchhandlung, Bromberg, 1871.

J. Derrida, La mythologie blanche. In: Poétique. Nr. 5, Paris, 1971, pp.1-52.

N. Bolz, Eine kurze Geschichte des Scheins. Wilhelm Fink Verlag, München, 1991.

K. Vieweg/R. T. Gray, Hegel und Nietzsche. Eine literarisch-philosophische Begegnung. Bauhaus-Universität Weimar, 2007.

邦語訳

N・ボルツ『仮象小史』、法政大学出版局

ニーチェ「道徳外の意味における真理と虚偽について」、『哲学者の書』(ちくま学芸文庫) 所収

ニーチェ『レトリック講義』、知泉書館

アナトール・フランス『エビクロスの園』(岩波文庫)

デリダ「白い神話」、『哲学の余白(下)』所収、法政大学出版局
ヘーゲル『論理学』第2版序説、『大論理学(上巻の一)』所収、岩波書店

【参考書】

山口誠一『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

【成績評価の方法と基準】

ニーチェの言語論とその影響を受けた現代思想に関するゼミでの発表・訳読・研究発表(60%)、質疑応答(40%)を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

ニーチェとヘーゲルの関係について理解が深まるように工夫をします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、*Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001)*、Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Nietzsche's linguistic philosophy, with texts drawn from German and Japanese.

PHL600B1

実践哲学研究 I - 2

山口 誠一

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

弁証法哲学の観点からドイツ哲学について検討する。ドイツ哲学ということでシェリング、ヘーゲル、ニーチェを射程に収める。

【到達目標】

『精神現象学』序説精読から弁証法哲学について基礎から理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と原典講読の両面から『精神現象学』序説を手引きにして授業を進める。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】あり/Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	弁証法哲学総説	弁証法哲学についての案内をする。
第2回	『精神現象学』序説総説Ⅰ	ヘーゲルの『精神現象学』序説関連年譜についての案内
第3回	『精神現象学』序説総説Ⅱ	『精神現象学』序説梗概の案内
第4回	『精神現象学』序説総説Ⅲ	『精神現象学』序説の主題の案内
第5回	精神による時代形成について	『精神現象学』序説第11節の検討
第6回	世界精神の諸形態から意識の諸形態へ	『精神現象学』序説第12節の検討
第7回	新たな世界の出現と意識との関係について	『精神現象学』序説第13節の検討
第8回	哲学的形成陶冶について	『精神現象学』序説第14節の検討
第9回	シェリング派の形式主義について	『精神現象学』序説第15節の検討
第10回	形式主義の絶対者について	『精神現象学』序説第16節の検討
第11回	『精神現象学』の洞察について	『精神現象学』序説第17節の検討
第12回	生きた実体としての主体の真理について	『精神現象学』序説第18節の検討
第13回	形式の自己運動としての主体について	『精神現象学』序説第19節の検討
第14回	真なるものは全体である	『精神現象学』序説第20節の検討

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

テキストの下調べと参考文献の熟読

【テキスト(教科書)】

邦語訳

ヘーゲル『精神現象学(上)』、榎山欽四郎訳、平凡社ライブラリー

原典

G.W.F.Hegel, *Phänomenologie des Geistes*. Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.

【参考書】

山口誠一『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、2016年(オンデマンド)

【成績評価の方法と基準】

弁証法哲学理解という目標に関するゼミでの発表・訳読・研究発表(60%)と応答(40%)を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

ドイツ語力の向上と哲学的思考力の統合を重視する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——《精神現象学》の問いの解明』、法政大学出版局、2016、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with a dialectical understanding of German philosophy (especially Shelling, Hegel and Nietzsche), with texts drawn from German and Japanese.

PHL600B1

現代哲学研究 I - 1

大池 惣太郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの哲学者ジャック・デリダの著書を講読し、彼の哲学的言語観ないし言語論のエッセンスを学びます。デリダが、文字の発明・習得の有無に関わらず、言語が根本的に〈書かれたもの〉としての性質を有すると考えるのはなぜか。また、そのことは、私たちの思考と経験、そしてそこにおける他者の存在（または不在）に関して、どのような条件と制約を与えていると考えられるか。授業では、これらの問いを講読とディスカッションを通じて深め、検討していきます。いわゆる「言語論的転回」のなかでデリダの哲学が占める特異な位置と重要性を理解することが、授業の目的です。

【到達目標】

- (1)デリダの哲学的言語観について、一定程度の水準で批評的な考察ができるようになること。
- (2)発表やディスカッションを通じて、自分の疑問点や発見を全体と共有しつつ、考察を深める方法を学ぶこと。
- (3)単に読んだ本の知識をそのままとめるのではなく、それを授業で学んだ視点によって組み立て、自分の考察を含んだレポートを作成できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は、参加者が事前に読み込んだテキストと一緒に検討し、ディスカッションする形で進みます。参加者は、毎回指定された著作や文献をあらかじめ読んで授業に出席します。初回二回はガイダンスとして、言語に対するデリダの特徴的な捉え方を教員が概説します。第三回からはテーマを四つに分け、(1)デリダと現象学的方法的違い、(2)デリダ哲学における「エクリチュール」という概念の射程、(3)デリダの哲学的言語観の帰結として捉えた、法、責任、他者といった倫理的テーマ群の問題、および(4)人間／動物の分節をめぐる問題を扱います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ワイトゲンシュタインとデリダ	デリダの哲学的言語観の特徴
第2回	デリダのソシュール批判	構造主義のなかのデリダ
第3回	デリダの現象学批判(1)	「指標」について
第4回	デリダの現象学批判(2)	「表象」について
第5回	デリダの現象学批判(3)	「代補」の論理
第6回	エクリチュールの問題(1)	『言語起源論』の批判的読解
第7回	エクリチュールの問題(2)	レヴィエーストロース批判
第8回	エクリチュールの問題(3)	言語の根源的文学性
第9回	その哲学的言語観の帰結として見たデリダの倫理の射程(1)	「法」について
第10回	その哲学的言語観の帰結として見たデリダの倫理の射程(2)	「責任」について
第11回	その哲学的言語観の帰結として見たデリダの倫理の射程(3)	「他者」について
第12回	哲学的トボスとしての動物(1)	フランス哲学における「動物の経験」というトボス
第13回	哲学的トボスとしての動物(2)	人間の視線／動物の視線
第14回	哲学的トボスとしての動物(3)	動物と souveraineté (主権／至高性)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、毎回、指定された著作や文献をあらかじめよく読んでくれることが求められます（邦訳で構いません）。予習で理解が及ばなかった点や疑問に思った点について、あらかじめ整理した上で授業にのぞみます。

【テキスト（教科書）】

ジャック・デリダ『声と現象』（ちくま学芸文庫、2005）、『グラマトロジーについて』（現代思潮新社、1972）、『エクリチュールと差異』（法政大学出版局、2013）、『法の力』（法政大学出版局、2011）、『動物を追う、ゆえに私は（動物で）ある』（筑摩書房、2014）

【参考書】

授業内で指示します。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表・参加（70%）と学期末のレポート（30%）で総合的に評価します。

評価は以下の基準で行います。

- (1)デリダの哲学的言語観について、一定程度の水準で批評的な考察ができてるか。
- (2)発表やディスカッションにおいて、自分の疑問点や発見を全体と共有しつつ、考察を深められているか。
- (3)レポートにおいて、単に読んだ本の要約をするだけでなく、授業で学んだ視点によって自分で問題を再構築し、批評的な考察ができてるか。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【Outline and objectives】

The aim of this seminar is to study Jacques Derrida's philosophical point of view on the human language. Reading some of his essential works about this theme, we will examine certain fundamental conditions and constraints that our language would impose, according to Derrida, on our thought and experience, especially those of the other as other, so as to learn the importance and the particularity of his critical thought in the context after the so-called "Linguistic turn".

PHL600B1

現代哲学研究 I - 2

大池 惣太郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの哲学者ジャック・デリダの著書 *Donner le temps* (Galilée, 1991) を読みます。原著の講読を通じて著者の独特のエクリチュールに触れながら、同書が問題にする贈与とエコノミーのアポリアについて、デリダの哲学的言語観との関係から理解を深めます。フランス語で講読する能力を高めると同時に、「贈与」という主題においてデリダが提起する責任の問題、その現代的な意義を理解することが、授業の目的です。

【到達目標】

- (1)デリダにおける「贈与」のアポリアの論点について、一定程度の水準で批評的な考察ができるようになること。
- (2)フランス語で書かれた哲学分野のテキストを、一定程度の水準で自力で読み、理解できるようになること。
- (3)単に読んだ本の知識をそのままとめるのではなく、それを授業で学んだ視点によって組み立て、自分の考察を含んだレポートを作成できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

最初にフランス思想における「贈与」という主題について、モース、バタイユ、マリオンを参照しつつ理解を深めます。四回目から *Donner le temps* の講読に入ります。毎回、次回授業で重点的に読む箇所が指定されるので、参加者はあらかじめその部分を精読し、論点や疑問点を整理したうえで授業にのぞみます。授業では、該当箇所を中心にした論点の概説を聞いたのち、予習箇所の検討およびディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	「贈与」の問題(1)	「贈与」と「交換」どちらが先か（モース）
第 2 回	「贈与」の問題(2)	人間的エコノミーの限界（バタイユ）
第 3 回	「贈与」の問題(3)	「贈与」の条件について（マリオン）
第 4 回	<i>Donner le temps</i> を読む(1)	第 1 章「王の時間」22 頁までの論旨・論点の検討
第 5 回	<i>Donner le temps</i> を読む(2)	第 1 章「王の時間」50 頁までの論旨・論点の検討
第 6 回	<i>Donner le temps</i> を読む(3)	第 2 章「経済的理性の狂気」62 頁までの論旨・論点の検討
第 7 回	<i>Donner le temps</i> を読む(4)	第 2 章「経済的理性の狂気」72 頁までの論旨・論点の検討
第 8 回	<i>Donner le temps</i> を読む(5)	第 2 章「経済的理性の狂気」94 頁までの論旨・論点の検討
第 9 回	中間まとめ	言語のメタファーとしての「贖金」という主題
第 10 回	<i>Donner le temps</i> を読む(6)	第 3 章「タバコの詩学」121 頁までの論旨・論点の検討
第 11 回	<i>Donner le temps</i> を読む(7)	第 3 章「タバコの詩学」138 頁までの論旨・論点の検討
第 12 回	<i>Donner le temps</i> を読む(8)	第 4 章「贈与と反対贈与」171 頁までの論旨・論点の検討
第 13 回	<i>Donner le temps</i> を読む(9)	第 4 章「贈与と反対贈与」191 頁までの論旨・論点の検討
第 14 回	<i>Donner le temps</i> を読む(10)	第 4 章「贈与と反対贈与」217 頁までの論旨・論点の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、毎回、指定されたフランス語のテキスト（1-2 頁程度）を自分で調べて読んでくることが求められます。予習で理解が及ばなかった点や疑問に思った点について、あらかじめ整理した上で授業にのぞみます。

【テキスト（教科書）】

Jacques Derrida, *Donner le temps* (Galilée, 1991)

【参考書】

マルセル・モース『贈与論』（ちくま学芸文庫、2009 年）、ジョルジュ・バタイユ『呪われた部分』（ちくま学芸文庫、2018 年）、ジャン＝リュック・マリオン『存在なき神』（法政大学出版局、2010 年）、岩野卓二『贈与の哲学』（明治大学出版会、2014 年）

【成績評価の方法と基準】

授業での発表（60%）と学期末のレポート（40%）で総合的に評価する。評価は以下の基準で行います。

- (1)デリダにおける「贈与」のアポリアの論点について、一定程度の水準で批評的な考察ができてるか。

(2)フランス語で書かれた哲学分野のテキストを、一定程度の水準で自力で読み、理解できているか。

(3)レポートにおいて、単に読んだ本の要約をするだけでなく、授業で学んだ視点によって自分で問題を再構築し、批評的な考察ができているか。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【Outline and objectives】

The aim of this seminar is to study Jacques Derrida's philosophical point of view on the human language. Reading Donner le temps, we will learn what the author call "the aporia of the Gift inherent in responsibility, as to examine certain fundamental conditions and constraints that our language would impose, according to Derrida, on our thought and experience, especially those of the other as other.

PHL600B1

科学哲学研究 I - 1

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン (Bergson1859 - 1941) の最初の主著である『意識に直接与えられたものについての試論』(『時間と自由』) (Essai sur les données immédiates de la conscience1889) の読解を通じて、著者の「持続」(durée) の主張の理解を図ります。昨年度秋学期からの続きで、春学期は「自由」を扱う第3章の終盤からです。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をしてもらい、全員で検討を行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第2回	真の持続と因果性 (1)	訳解と討論
第3回	真の持続と因果性 (2)	訳解と討論
第4回	真の持続と因果性 (3)	訳解と討論
第5回	自由の問題の起源 (1)	訳解と討論
第6回	自由の問題の起源 (2)	訳解と討論
第7回	自由の問題の起源 (3)	訳解と討論
第8回	常識への帰還 (1)	訳解と討論
第9回	常識への帰還 (2)	訳解と討論
第10回	常識への帰還 (3)	訳解と討論
第11回	カントの誤謬 (1)	訳解と討論
第12回	カントの誤謬 (2)	訳解と討論
第13回	カントの誤謬 (3)	訳解と討論
第14回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, édition « Quadrige », PUF, 2007 (Worms の序文と、Bouaniche の注がついた、新しい版が望ましい)。

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕 150 年』(岩波書店)
久米・中田・安孫子 (編) 『ベルクソン読本』(法政大学出版局)
平井・藤田・安孫子 (編) 『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』(書肆心水)
平井・藤田・安孫子 (編) 『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』(書肆心水)
平井・藤田・安孫子 (編) 『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』(書肆心水)

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（40%）と議論への参加（30%）、および学期末レポート（30%）で評価します。なおそれぞれの方法において、5つの到達目標への到達度は、フランス語力 20%、テキスト理解 20%、ベルクソン理解 20%、哲学史・科学史理解 20%、現代性理解 20%の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていきたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

-フランス哲学

〈研究テーマ〉

-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料にして行っています。

〈主要研究業績〉

-『ベルクソン読本』（編著、2006 年、法政大学出版局）

-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012 年、OLMS)

-Annales bergsoniennes (編著、2013 年、PUF)

-Tout ouvert :l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015 年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016 年、書肆心水）

-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016 年、書肆心水)

-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017 年、書肆心水）

-Mécanique et mystique (編著、2018 年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018 年、書肆心水）

【Outline and objectives】

Through the first main work of Bergson (1859-1941), "An Essay on the immediate Data of Consciousness" ("Time and Freedom"), we will try to understand his claims of durée. We will read the end of chapter 3 in the spring semester.

PHL600B1

科学哲学研究 I - 2

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン (Bergson1859 - 1941) の第 2 の名著である『物質と記憶』(Mitière et mémoire 1896) 第 4 章の読解を通じて、著者による「物質」と「精神」との究極的な関係づけの主張の理解を図ります。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をしてもらい、全員で検討を行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第 2 回	二元論の難問 (1)	訳読と討論
第 3 回	二元論の難問 (2)	訳読と討論
第 4 回	二元論の難問 (3)	訳読と討論
第 5 回	とるべき道 (1)	訳読と討論
第 6 回	とるべき道 (2)	訳読と討論
第 7 回	とるべき道 (3)	訳読と討論
第 8 回	知覚と物質 (1)	訳読と討論
第 9 回	知覚と物質 (2)	訳読と討論
第 10 回	知覚と物質 (3)	訳読と討論
第 11 回	持続と緊張度 (1)	訳読と討論
第 12 回	持続と緊張度 (2)	訳読と討論
第 13 回	持続と緊張度 (3)	訳読と討論
第 14 回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, Mitière et mémoire, édition 《Quadrige》, PUF, 2008 (Worms)の序文と、Riquierの注がついた、新しい版が望ましい)

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕 150 年』（岩波書店）

久米・中田・安孫子（編）『ベルクソン読本』（法政大学出版局）

平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（書肆心水）

平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）

平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（書肆心水）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（40％）と議論への参加（30％）、および学期末レポート（30％）で評価します。なおそれぞれの方法において、5つの到達目標への到達度は、フランス語力20％、テキスト理解20％、ベルクソン理解20％、哲学史・科学史理解20％、現代性理解20％の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていきたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

-フランス哲学

〈研究テーマ〉

-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス19世紀思想史を材料にして行っています。

〈主要研究業績〉

-『ベルクソン読本』（編著、2006年、法政大学出版局）

-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012年、OLMS)

-Annales bergsoniennes (編著、2013年、PUF)

-Tout ouvert :l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016年、書肆心水）

-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016年、書肆心水)

-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017年、書肆心水）

-Mécanique et mystique (編著、2018年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018年、書肆心水）

【Outline and objectives】

Through the reading of Chapter 4 of "Matter and Memory" (Mitière et mémoire 1896), the second main work of Bergson (1859-1941), we will try to understand his claim of the ultimate relationship between "matter" and "spirit".

PHL600B1

科学哲学研究Ⅱ－1

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

■アランの人間についての思想を学びます。

アラン (Alain 1868-1951) の短文形式の「プロボ」を、科学の精神、理性の立場から行われた人間についての議論とみなして検討していきます。

■とくにアラン『人間論』を学びます。

【到達目標】

a. アランのフランス語原文を正確に日本語に訳せるようになる。

b. アランの一つ一つの議論を、各プロボでの論理的一貫性の中で正確に捉えられるようになる。

c. アランの一つ一つの議論を、今日の文明と社会の問題、さらには自分自身の問題と結びつけて解釈できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって訳を準備してきた参加者が、順に一文一文を担当し、輪読の形で訳読を進めます。その際、一文一文で、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。一つのプロボを3回に分けて読んでいきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、アランの人と思想について説明を行います。
第2回	驚くべき私たちの幼時(1)	訳解と討論
第3回	驚くべき私たちの幼時(2)	訳解と討論
第4回	驚くべき私たちの幼時(3)	訳解と討論
第5回	家庭(1)	訳解と討論
第6回	家庭(2)	訳解と討論
第7回	家庭(3)	訳解と討論
第8回	神託(1)	訳解と討論
第9回	神託(2)	訳解と討論
第10回	神託(3)	訳解と討論
第11回	種族主義(1)	訳解と討論
第12回	種族主義(2)	訳解と討論
第13回	種族主義(3)	訳解と討論
第14回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業に先立って、当該テキスト箇所訳の作成と、その箇所での語学的・哲学的問題の検討を準備として行います。

【テキスト（教科書）】

Alain, Esquisses de l'homme (1938, Gallimard) (授業ではコピーを用意します)

【参考書】

アラン『人間論』（原亨吉訳、1978、白水社）

アンドレ・モロワ『アラン』（佐貫健訳、1964、みすず書房）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（50％）と議論への参加（25％）、および数回のレジュメ発表（25％）で評価します。到達目標達成度との関係では、3つの評価方法のそれぞれで、語学力50％、テキストの内的理解25％、テキストの外的コンテクストからの理解25％の割合で勘案を行います。

【学生の意見等からの気づき】

哲学の問題以上に、語学の問題にこだわって読んでいきます。良い意味でフランス語の授業にしていくことができたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

-フランス哲学

〈研究テーマ〉

-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料に行っています。

〈主要研究業績〉

-『ベルクソン読本』（編著、2006 年、法政大学出版局）

-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著、2012 年、OLMS)

-Annales bergsoniennes (編著、2013 年、PUF)

-Tout ouvert :l'évolution créatrice en tous sens(編著、2015 年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016 年、書肆心水）

-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著、2016 年、書肆心水)

-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017 年、書肆心水）

-Mécanique et mystique(編著、2018 年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018 年、書肆心水）

【Outline and objectives】

We will learn the thought of Alan (1868-1951) about human beings.

We will consider "Propos" of Alan as discussions about human beings conducted from the standpoint of reason and will.

PHL600B1

科学哲学研究Ⅱ－2

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

■アランの人間についての思想を学びます。

アラン (Alain 1868-1951) の短文形式の「プロボ」を、科学の精神、理性的立場から行われた人間についての議論とみなして検討していきます。

■とくにアラン『人間論』を学びます。

【到達目標】

a. アランのフランス語原文を正確に日本語に訳せるようになる。

b. アランの一つ一つの議論を、各プロボでの論理的一貫性の中で正確に捉えられるようになる。

c. アランの一つ一つの議論を、今日の文明と社会の問題、さらには自分自身の問題と結びつけて解釈できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって訳を準備してきた参加者が、順に一文一文を担当し、輪読の形で訳読を進めます。その際、一文一文で、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。一つのプロボを 3 回に分けて読んでいきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方を確認し、アランの人と思想について説明を行います。
第 2 回	農民的構造 (1)	訳解と討論
第 3 回	農民的構造 (2)	訳解と討論
第 4 回	農民的構造 (3)	訳解と討論
第 5 回	教えさとす海 (1)	訳解と討論
第 6 回	教えさとす海 (2)	訳解と討論
第 7 回	教えさとす海 (3)	訳解と討論
第 8 回	虚栄心 (1)	訳解と討論
第 9 回	虚栄心 (2)	訳解と討論
第 10 回	虚栄心 (3)	訳解と討論
第 11 回	気質と性格 (1)	訳解と討論
第 12 回	気質と性格 (2)	訳解と討論
第 13 回	気質と性格 (3)	訳解と討論
第 14 回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業に先立って、当該テキスト箇所の訳の作成と、その箇所での語学的・哲学的問題の検討を準備として行います。

【テキスト（教科書）】

Alain, Esquisses de l'homme (1938, Gallimard) (授業ではコピーを用意します)

【参考書】

アラン『人間論』（原亨吉訳、1978、白水社）

アンドレ・モロワ『アラン』（佐貫健訳、1964、みすず書房）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（50 %）と議論への参加（25 %）、および数回のレジュメ発表（25 %）で評価します。到達目標達成度との関係では、3 つの評価方法のそれぞれで、語学力 50 %、テキストの内的理解 25 %、テキストの外的コンテキストからの理解 25 % の割合で勘案を行います。

【学生の意見等からの気づき】

哲学の問題以上に、語学の問題にこだわって読んでいきます。良い意味でフランス語の授業にしていくことができると思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

-フランス哲学

〔研究テーマ〕

-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料にして行っています。

(主要研究業績)

-『ベルクソン読本』(編著, 2006 年, 法政大学出版局)

-Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson(編著, 2012 年, OLMS)

-Annales bergsoniennes (編著, 2013 年, PUF)

-Tout ouvert :l'évolution créatrice en tous sens(編著, 2015 年, OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』(編著, 2016 年, 書肆心水)

-Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle(編著, 2016 年, 書肆心水)

-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』(編著, 2017 年, 書肆心水)

-Mécanique et mystique (編著, 2018 年, OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』(編著, 2018 年, 書肆心水)

〔Outline and objectives〕

We will learn the thought of Alan (1868-1951) about human beings.

We will consider "Propos" of Alan as discussions about human beings conducted from the standpoint of reason and will.

PHL600B1

比較思想研究 I - 1

笠原 賢介

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

ハイデガー『ニーチェ』(1961 年)を前年度に引き続いて原文で精読します。このテキストは、ハイデガーがニーチェを西洋形而上学の最終段階にある哲学者ととらえ、それと対決する思考の歩みを記したものです。そこにはニーチェを哲学の破壊者としてではなく、あくまでも哲学者と捉えるハイデガーの洞察、および、プラトンからニーチェに至る西洋哲学の問題点をハイデガーがどのようにとらえたのかが示されています。今学期読む箇所では、この点が技術、芸術、美をめぐる問題と結び合わされて展開されます。テキストの精読によって、ニーチェ哲学そのものの可能性も視野に入れながら、提示されている論点の現代的意義と問題点を考えます。

【到達目標】

ハイデガーのニーチェとの対決の論点を把握し、洞察を深める。同時にニーチェ自身の思考世界とその可能性についての理解を深める。それらによって各人の思考の方向付けをおこなう。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目と力で読み出し、討論によって客観化しながら考える能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ハイデガー『ニーチェ』の原文を、毎回担当者を決めてゼミ形式で読み進めます。

テキストの精読と質疑応答、討論をおこなって進めます。討論は、ハイデガーを秘教化せず、異なった論点を相互に提示しながら、自由に進めてゆきます。

必要に応じてハイデガーやニーチェ、また、関連する哲学者のテキストのプリントを配布し、背景や事柄の連関についてのレクチャーや討論を行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入的なレクチャー、前年度のゼミで明らかになった論点の整理。以下の進捗は目安です。	ゼミの進め方について。ハイデガーとゼミ・テキスト『ニーチェ』についての基本的な事柄。前年度のゼミで明らかになった論点の整理。
第 2 回	テキスト S.80 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討します。
第 3 回	テキスト S.81 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出します。関連するプリントの配布とレクチャー。
第 4 回	テキスト S.82 の精読と討論。	当該箇所について、テキストの精読に基づいて討論します。
第 5 回	テキスト S.83 の精読と討論。	テキストの精読に基づいて、論点を取り出し、質疑応答、討論をおこないます。
第 6 回	テキスト S.84 の精読と討論。	〈テクネー〉についてのハイデガーの論点の整理。
第 7 回	テキスト S.85 の精読と討論。	当該箇所について、テキストを精読し、論点を取り出します。関連プリントの配布とレクチャー。
第 8 回	テキスト S.86 の精読と討論。	当該箇所について、テキストを精読し、論点を取り出し、質疑応答と討論をおこないます。
第 9 回	ゼミ参加者の研究発表と討論。	ゼミ参加者の研究発表と討論。
第 10 回	テキスト S.87 の精読と討論。	当該箇所を精読し、質疑応答、討論をおこないます。
第 11 回	テキスト S.88 の精読と討論。	当該箇所について、精読します。関連プリントの配布とレクチャー。
第 12 回	テキスト S.89 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出し、質疑応答、討論をおこないます。
第 13 回	テキスト S.90 の精読と討論。	当該箇所について、テキストを精読し、討論をおこないます。美学、芸術、〈テクネー〉についてのハイデガーの論点の整理。
第 14 回	まとめ	春学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこないます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回のテキストの精読箇所を予習すること。各回の担当者は、当該箇所について、プリントを予め作成すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、授業内に配布したプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げること。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, Nietzsche, Bd. I, Stuttgart: Klett-Cotta, 2008. テキストについては、初回授業時に説明をします。

【参考書】

1. ハイデッガー（細谷貞雄監訳）『ニーチェ』I・II、平凡社ライブラリー、1997年。
2. ピヒト（青木隆嘉訳）『ニーチェ』法政大学出版局、1991年。
3. 渡辺二郎『ハイデッガーの実存思想』勁草書房、1985年。
4. 渡辺二郎『ハイデッガーの存在思想』勁草書房、1985年。
5. スタイナー（生松敬三訳）『ハイデッガー』岩波書店、1992年。
6. 小田部胤久『西洋美学史』東京大学出版会、2009年。
7. ハーバーマース（三島憲一他訳）『近代の哲学的ディスクルス』全2冊、岩波書店、1990年。
8. クリッチリー/シューマン（申田純一訳）『ハイデッガー『存在と時間』を読む』法政大学出版局、2017年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。平常点 50%、発表 50%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め積極的に質問、討論をおこなってください。テキスト、レクチャー、討論の内容を正確に把握してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化
 <研究テーマ>近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。
 <主要研究業績>アドルノ『本来性という隠語—ドイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未來社、ポイエシス叢書、1992年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010年。『和辻哲郎『風土』とヘルダー』（論文、『思想』2016年5月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界—クニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未來社、2017年。『レッシング『賢者ナータン』再読』（論文、『思想』2018年2月号。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Martin Heidegger's "Nietzsche"(1961) and discussion about the text. Key words: Heidegger's confrontation with Nietzsche's philosophy and the western philosophical tradition; Platonic tradition and aesthetic; beauty, art and truth.

PHL600B1

比較思想研究 I - 2

笠原 賢介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

今学期からは、カント『判断力批判』（1790年）を原文で精読します。序文・序論からはじめ、美と芸術を扱った第一部へと読み進めます。『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義について考えます。英訳での参加も可能です。

【到達目標】

『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義についての理解を深める。それによって自らの思考の方向付けを行う。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目と力で読み出し、それを討議のなかで客観化して思考する能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

カント『判断力批判』の原文を、毎回担当者を決めてゼミ形式で読み進めます。英訳での参加も可能です。

テキストの精読と質疑応答、討論をおこなって進めます。

必要に応じて関連する資料のプリントを配布し、背景や事柄の連関についてのレクチャーや討論を行ないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス。 以下の進度は目安です。	ゼミの進め方について。『判断力批判』についての概括的なレクチャー。
第2回	テキスト S.3 の精読と討論。	当該箇所の精読に基づいて、論点を取り出し、質疑応答と討論をおこないます。
第3回	テキスト S.4 の精読と討論。	テキストを精読と討論。関連プリントの配布とレクチャー。
第4回	テキスト S.5 の精読と討論。	テキストを精読し、討論によって論点を取り出します。
第5回	テキスト S.6 の精読と討論。	テキストの精読。カント哲学の基本論点の整理。
第6回	ゼミ参加者の研究発表と討論。	ゼミ参加者の研究発表と討論。
第7回	テキスト S.7 の精読と討論。	テキストの精読。関連プリントの配布とレクチャー。
第8回	テキスト S.8 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して検討し質疑応答をおこないます。
第9回	テキスト S.9 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して検討します。
第10回	テキスト S.10 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して検討し質疑応答をおこないます。
第11回	テキスト S.11 の精読と討論。	テキストの精読。関連プリントの配布とレクチャー。
第12回	テキスト S.12 の精読と討論。	テキストを精読し、これまでの論点を検討します。
第13回	テキスト S.13 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して検討し、質疑応答をおこないます。
第14回	まとめと討論。	秋学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこないます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回のテキストの精読箇所を予習すること。各回の担当者は、当該箇所について、プリントを予め作成すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、授業内に配布したプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げること。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft, Hamburg: Meiner, 2009 (Philosophische Bibliothek Bd. 507) を用います。テキストについては、初回授業時に説明をします。英訳については初回授業時に指示します。

【参考書】

1. カッシーラー（浜田義文他監修）『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年。
2. 小田部胤久『西洋美学史』東京大学出版会、2009年。
3. アーレント（浜田義文監訳）『カント政治哲学の講義』法政大学出版局、1987年。
4. 宇都宮芳明『訳注・カント『判断力批判』上』以文社、1994年。
5. 佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代』岩波書店、2005年。
6. 小田部胤久『象徴の美学』東京大学出版会、1995年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準として、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。平常点 50%、発表 50%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め、積極的に質問、討議をおこなってください。テキスト、レクチャー、討議の内容を正確にとらえてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化
 ＜研究テーマ＞近代西欧哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。
 ＜主要研究業績＞アドルノ『本来性という隠語－ドイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未来社、ポイエシス叢書、1992年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016年5月号。「ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界－クニッゲ、レッシング、ヘルダー」（著書）、未来社、2017年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018年2月号。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Immanuel Kant's "Critique of Judgement"(1790) and discussion about the text. Key words: systematic position of "Critique of Judgement" within the Kantian philosophy; beauty and ethics; relation to contemporary philosophical discussions.

PHL600B1

近代西洋哲学研究 I - 1

古賀 祥二郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近代合理主義者の中でも難解で知られるライプニッツの哲学を『モナドロジー』を読むことによって理解する。これはライプニッツが自分の哲学を体系的に展開した最期の作品である。小品ではあるが、非常に密度の濃い内容なので、ゆっくり読みたい。ライプニッツは非常に総合的な学者であるが、その全体を統一する直感の把握に努めたい。充足理由律がその鍵になるであろう。基礎から考え直すつもりで、ゆっくりとテキストを読んでいきたい。

【到達目標】

- ① 近代合理主義哲学の代表者の一人であるライプニッツの哲学の概要を理解する。
- ② 哲学の古典を正確に読めるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

『モナドロジー』(la monadologie)を毎回1ページ程度読む。テキストはフランス語であるが、英訳と日本語訳も参照しながら、フランス語の苦手な人でも内容を理解できるようにして進めていくつもりである。単に表面的に読むのではなく、内容に関する議論をしながら理解を深めたい。前期はテキストの前半を読む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	授業の進め方	ライプニッツについての基礎的説明をし、テキストの紹介をする
第2回	第1節から第6節を読む	モナドの定義と基本的性質について
第3回	第7節を読む	モナドには窓が無い
第4回	第8・9節を読む	モナドの個性について
第5回	第10から第13節を読む	モナドの内的変化について
第6回	第14節を読む	表象について
第7回	第15節を読む	欲求について
第8回	第16・17節を読む	表象を機械論的に説明することはできない
第9回	第18・19節を読む	モナドとエンテレケイアと魂について
第10回	第20・21節を読む	意識と無意識について
第11回	第22節から第25節を読む	表象から表象が生まれる
第12回	第26節から第30節を読む	記憶と理性について
第13回	第31節から第36節を読む	矛盾律と充足理由律
第14回	まとめ	これまでの内容をまとめて議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの予習をして、語学的な調べをするだけでなく、さらに内容の理解に努め、疑問点を整理しておき、授業中の議論に参加できるようにする。

【テキスト（教科書）】

Michel Fichant が編集した"Discours de Métaphysique, Monadologie" Gallimard,2004 を使う。コピーを授業の始めに配布する。

【参考書】

ライプニッツ、『単子論』、河野与一訳、岩波文庫、1951
 G.W.Leibniz "Discourse on Metaphysics and Monadology" translated by G.R.Montgomery, Dover Publications,2005

【成績評価の方法と基準】

到達目標①については期末レポートによって、学生の見解が総合的に表現されているかどうかをみる。(50%)

到達目標②については授業中の訳読と議論への参加度によって評価する。(50%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞デカルトを中心とした近代哲学
 ＜研究テーマ＞近代科学的世界観における人間の位置
 ＜主要研究業績＞
 「デカルトにおける外界の存在証明」（『思想』869号、1996）

【Outline and objectives】

We read "The Monadology" of Leibniz. In this tiny work Leibniz outlines his philosophy matured through his life. Succinctly written, the work is very hard to comprehend. We will read very slowly and try to understand the intuition under his apparently queer metaphysical system. His famous 'principle of sufficient reason' will play a key role.

PHL600B1

近代西洋哲学研究 I - 2

古賀 祥二郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

前期に引き続き、ライプニッツの『モノドロジー』を読み進む。神と被造物の関係が論じられる。先入観を捨てて基礎から考え直すつもりで、ゆっくりとテキストを読んでいきたい。

【到達目標】

- ①近代合理主義哲学の代表者の一人であるライプニッツの哲学の概要を理解する。
- ②哲学の古典を正確に読めるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

『モノドロジー』の後半を読む。前期同様、文法や語彙の意味を正確に捉えながらゆっくりと読んでいきたい。テキストはプリントで配布する。日本語訳や英訳も参照する。毎回テキストを1ページ程度ずつ読む。語学的に正確に読めるようにすることと同時に、哲学的問題意識を持って内容の検討をすることが大事である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	前期のまとめ	『モノドロジー』前半の復習
第2回	第3 7節から第4 2説を読む	神の存在証明
第3回	第4 3節から第4 5節を読む	神は存在の源泉でありかつ本質の源泉でもある
第4回	第4 6節を読む	永遠真理は神の悟性の中にある
第5回	第4 7節から第5 2節を読む	モノド間の関係は神を仲立ちにする
第6回	第5 3節から第5 9節を読む	神は最善の世界を創る
第7回	第6 0節から第6 2節を読む	モノドが世界を表象する仕方について
第8回	第6 3節から第7 0節を読む	有機体について
第9回	第7 1節から第7 8節を読む	生物の変態について
第10回	第7 9・8 0節を読む	精神と物体との結合は予定調和による
第11回	第8 1節から第8 3節を読む	理性的精神の優越について
第12回	第8 4節から第8 9節を読む	神の国について
第13回	第9 0節を読む	神との結び付き
第14回	まとめ	ライプニッツ哲学の特徴について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で訳読する予定のテキストは必ず予習をして、分からない単語がないようにする。また内容に関しても、問題点を把握し、授業中に議論に参加できるようにする。

【テキスト（教科書）】

Michel Fichant の注解本 "Discours de Métaphysique, Monadologie" Gallimard, 2004 を使う。コピーを授業の始めに配布する。

【参考書】

ライプニッツ、『单子論』、河野与一訳、岩波文庫、1951
G.W.Leibniz "Discourse on Metaphysics and Monadology" translated by G.R.Montgomery, Dover Publications, 2005

【成績評価の方法と基準】

到達目標①については期末のレポートによって、学生の見解が整合的に表現されているかどうかをみる。(50%)
到達目標②については授業中の訳読と議論への参加度によって評価する。(50%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉デカルトを中心とした近代哲学
〈研究テーマ〉近代科学的世界観における人間の位置
〈主要研究業績〉
「デカルトにおける外界の存在証明」(『思想』869号、1996)
「自然学の基礎づけ」(『デカルト読本』法政大学出版局、1998)

【Outline and objectives】

We continue to read Leibniz's "Monadology". The content concerns God and the creatures. Through slow reading and discussing we will try to understand his principal thoughts.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究 I - 1

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかりと押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。

②とりわけ『至高性』第 2 部を中心に精読していく。

③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	『至高性』第 1 回	バタイユと『至高性』の概要説明
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 1 部第 3 章第 4 節「至高の諸瞬間の統一性と根源的な主観性」の解説
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 1 部第 4 章第 1 節「有用な客体と至高の主体」の解説
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 1 部第 4 章第 2 節「至高者が他の人々と異なるのは主体が客体への労働作業と異なるのと同じである」の解説
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 1
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 2
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 3
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 4
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 1 部第 4 章第 5 節「革命」の解説
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 1 部第 4 章第 6 節「サド侯爵あるいは至高の反逆者」解説その 1
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 1 部第 4 章第 6 節「サド侯爵あるいは至高の反逆者」解説その 2
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 1 部第 4 章第 6 節「サド侯爵あるいは至高の反逆者」解説その 3
第 14 回	『至高性』第 13 回	院生による発表。「至高性」と「聖なるもの」の関係について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユならびに現代思想に関心を持って読書を進めてほしい。とくに参考書にあげた文献は読んでおいてほしい。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）、湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）、バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50％）

②学期末の発表（50％）

《到達目標との対応》

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想

＜研究テーマ＞バタイユ研究

＜主要研究業績＞

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :*Souveraineté* < /I > . That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究 I - 2

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続きフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかりと押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。

②とりわけ『至高性』第 2 部を中心に精読していく。

③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第 2 回	『至高性』第 1 回	第 2 部第 1 章第 1 節「共産主義の動乱によって生まれた視界から見える至高性」
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 2 部第 1 章第 2 節「共産主義が最終的なありようを知る事のむづかしさ」と時宜性」
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 2 部第 1 章第 3 節「初期マルクス主義の展望と現代の展望の違い」
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 2 部第 1 章第 4 節「1917 年以前のスターリンの見解」
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 2 部第 1 章第 5 節「1917 年以降のスターリンとスターリン的な見方」
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 2 部第 1 章第 6 節「封建制の諸形態の破壊に限定された至高性」
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 2 部第 2 章第 1 節「行動から得られた明晰性の限界」
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 2 部第 2 章第 2 節「至高の権力の転覆として考察された革命」
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 2 部第 2 章第 3 節「封建制 (1)」
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 2 部第 2 章第 4 節「封建制 (2)」
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 2 部第 2 章第 3 節「封建制 (3)」
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 2 部第 2 章第 3 節「封建制 (4)」
第 14 回	『至高性』第 13 回	まとめと出席者による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユおよびフランス現代思想の著作に親しんでおくこと。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

『バタイユ入門』ちくま新書、酒井健著

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50％）

②学期末の発表（50％）

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

①毎回の訳出（50％）

②学期末の発表（50％）

《到達目標との対応》

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランス現代思想

<研究テーマ>バタイユ研究

<主要研究業績>

『バタイユ入門』ちくま新書

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :Souveraineté < /I > . That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅱ－1

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジャック・デリダ（1930-2004）の後期の思想を理解する。作品としては1999年発表の『死を与える』第2部「秘儀の文学」を対象にする。デリダの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】**【修士課程】**

①「宗教」「文学」などに対するデリダの基本的な考え方を知って、現代思想への理解を深めていく。

②とりわけ『死を与える』第2部を中心に精読していく。

③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いデリダの理解へ達する。たとえば「記号論」「正義論」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。原書でデリダの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	今期の授業の概要の説明。デリダに関する院生の研究発表
第2回	『死を与える』第1回	テキスト 161-162 頁の解読。
第3回	『死を与える』第2回	テキスト 163-164 頁解読
第4回	『死を与える』購読第3回	テキスト 165-166 頁解読
第5回	『死を与える』第4回	テキスト 167-168 頁解読
第6回	『死を与える』第5回	テキスト 169-170 頁解読
第7回	『死を与える』第6回	テキスト 171-172 頁解読
第8回	『死を与える』第7回	テキスト 173-174 頁解読
第9回	『死を与える』第8回	テキスト 175-176 頁解読
第10回	『死を与える』第9回	テキスト 177-178 頁解読
第11回	『死を与える』第10回	テキスト 179-180 頁解読
第12回	『死を与える』第11回	テキスト 181-182 頁解読
第13回	『死を与える』第12回	授業内容に関する院生の研究発表
第14回	試験、まとめ	まとめと復習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

デリダの入門書や翻訳書などを読んでおくこと。

たとえば

『ジャック・デリダ入門講義』仲正昌樹著、作品社

『ポジション』デリダ著、高橋允昭訳、青土著

【テキスト（教科書）】

Jacques Derrida, Donner la mort, Galilée, 1999

【参考書】

デリダ著『死を与える』広瀬浩司・林好雄訳、ちくま学芸文庫

高橋哲哉著『デリダ』（講談社）等

【成績評価の方法と基準】**【修士課程】**

①毎回の訳出（50%）

②学期末の発表（50%）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50%）

②学期末の発表（50%）

≪ 到達目標との対応 ≫

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランス現代思想

<研究テーマ>バタイユ研究

<主要研究業績>

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Jacques Derrida, especially of one of his last works : < I > Donner la mort < /I > . That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

近代フランス哲学史研究Ⅱ－2

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジャック・デリダ（1930-2004）の後期の思想を理解する。作品としては1999年発表の『死を与える』第2部「秘儀の文学」を対象にする。デリダの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

①「宗教」「文学」などに対するデリダの基本的な考え方を知って、現代思想への理解を深めていく。

②とりわけ『死を与える』第2部を中心に精読していく。

③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いデリダの理解へ達する。たとえば「記号論」「正義論」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。フランス語原文でデリダの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	『死を与える』第1回	今期の授業の概要の説明。デリダに関する院生の研究発表
第2回	『死を与える』第2回	テキスト 183-184 頁解説
第3回	『死を与える』第3回	テキスト 185-186 頁解説
第4回	『死を与える』第4回	テキスト 187-188 頁解説
第5回	『死を与える』第5回	テキスト 189-190 頁解説
第6回	『死を与える』第6回	テキスト 191-192 頁解説
第7回	『死を与える』第7回	テキスト 193-194 頁解説
第8回	『死を与える』第8回	テキスト 195-196 頁解説
第9回	『死を与える』第9回	テキスト 197-200 頁解説
第10回	『死を与える』第10回	テキスト 201-203 頁解説
第11回	『死を与える』第11回	テキスト 204-207 頁解説
第12回	『死を与える』第12回	テキスト 208-209 頁解説
第13回	『死を与える』第13回	授業内容に関する院生の発表
第14回	まとめ	復習をかねて院生による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

春学期に指示した文献を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, PUF, 1967

【参考書】

高橋哲哉著『デリダ』（講談社）等

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出（50%）

②学期末の発表（50%）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50%）

②学期末の発表（50%）

≪ 到達目標との対応 ≫

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特にない。

【学生が準備すべき機器他】

特にない。

【その他の重要事項】

特にない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランス現代思想

<研究テーマ>ジョルジュ・バタイユ研究

<主要研究業績>近刊の訳書に『呪われた部分・全般経済学試論・蕩尽』（バタイユ著、ちくま学芸文庫）がある。

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Jacques Derrida, especially of one of his last works :< I > Donner la mort < /I > . That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL600B1

超越論哲学研究Ⅱ－1

大森 一三

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業の概要及び目的は、Immanuel Kant 著、Kritik der Urteilkraft を原典で精読することによって、カント哲学の真髄と批判哲学の特徴や思考方法を理解し、その美学及び目的論上の思想史的意義を学ぶことである。また、同時に批判哲学の体系的意義や現代的意義と課題を検証し、確定することを学んでゆく。

【到達目標】

学生が、カントの批判期哲学の体系的意義や今日的課題を把握し、具体的に説明できるようになること。また学生は、カントの判断力批判の哲学史的意義と今日的意義の両者の結びつきを正確に示し、美学や目的論における判断力の働きの役割の射程を正確に指摘し、討論できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

カントは、近代哲学の完成者であり、現代にいたるまで理論哲学、実践哲学、美学、目的論、宗教哲学、歴史哲学、平和論などの領域でも、きわめて大きな影響を与えている。本年度春学期は、『純粹理性批判』『実践理性批判』に続く第三の批判書『判断力批判』の第一部第1節から講読する。『判断力批判』の固有性および批判哲学上の体系的意義の考察とともに、理論と実践、自然と自由との統合という主要テーマの理解とその現代的意義をカント固有の技術論の意義を探索する。授業では、毎回報告者を決めて、内容考察のレポートやドイツ語テキストの精読を担当していただき、相互の質疑応答により、内容理解と目的達成に努める。また、適宜、受講生にリアクションペーパーの提出を求め、それを授業内容や方法に活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	カント批判哲学の概要	批判哲学の哲学史上の位置付け
第2回	『判断力批判』の固有性	批判哲学の課題と『判断力批判』の意義
第3回	『判断力批判』の主要課題	『判断力批判』の成立過程と構成の内容理解
第4回	主要参考文献の解釈史	解釈史の論争点の把握と問題点の正確な理解
第5回	主要論争の概観	最新研究動向の理解
第6回	趣味判断についての考察	『判断力批判』の基本的な用語、概念の理解
第7回	「美学」という言葉の問題についての考察	『判断力批判』の成立史
第8回	自然の合目的性と自然の技巧	主観的合目的性の意義
第9回	美感的判断と実践的判断の関連	二種の判断の相違と関係の理解
第10回	趣味判断と目的論的判定	趣味判断と目的論的判定の意味理解
第11回	形式的技巧と実在的技巧	技巧の多義性の正確な理解
第12回	自然目的の役割	自然の目的との相違の把握
第13回	自然目的論と道徳目的論の差異	目的論の多義性と制限について
第14回	反省的判断力の体系的意義の確認	批判哲学の体系的課題の共有

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1. 指定の参考文献を読む
2. 哲学史上の諸学説の理解
3. 他の批判書の基礎的理解
4. 文献解読の主要課題の把握
5. 研究書の読解力の準備
6. 基本概念についての予習
7. 取り上げる言葉について概念的考察を行う
8. 批判的美学及び目的論の系譜の学習
9. 美学及び目的論の伝統の予備考察
10. 判断の諸様式の基礎理解
11. 判断と判定の差異の学習
12. 美と有機体の体系的理解
13. 目的論についての比較考察
14. 批判哲学の体系の学習

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, Kritik der Urteilkraft. Meiner, (PHB 39a.), (Amazonにて、約 2000 円)。 岩波書店版『カント全集』第 8 巻 (牧野英二訳・解説、5200 円)。

【参考書】

高峯一愚『カント判断力批判注釈』（論創社、1990 年）。『崇高の哲学—情感豊かな理性の構築に向けて』（法政大学出版局、2007 年）、牧野英二編『カントを学ぶ人のために』（世界思想社、2012 年）『カントを読む—ポストモダンズム以降の批判哲学』（岩波人文書セレクション、2014 年）、『持続可能性の哲学への道』（法政大学出版局、2013 年）、『新・カント読本』（法政大学出版局、2018 年）いずれも牧野英二著・編。大森一三『文化の進歩と道徳性—カント哲学の「隠されたアンチノミー」』（法政大学出版局、2019 年）。

【成績評価の方法と基準】

訳読及び内容の報告・疑問点の提示を含む発表 50%(発表数及び内容の適切さや独創性の評価を含む)、質疑応答 20%(討論参加の回数、その努力や説得力の判定・評価)。春学期末提出のレポート (30%)。以上による総合的評価 (合計 100%)

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【その他の重要事項】

初回の授業の際に、細かい説明や受講者からの要望を受けての調整を行います。幅広い関心を持った学生の参加を期待しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

【<専門領域>】

哲学、倫理学、教育思想、環境倫理

【<研究テーマ>】

教育哲学、文化・文明論についての哲学的考察等

【<主要研究業績>】

『文化の進歩と道徳性—カント哲学の隠されたアンチノミー』（法政大学出版局、2019 年）、「世界市民教育としての哲学」（『哲学の返還と知の越境：伝統的思考法を問直すための手引き』法政大学出版局、2019 年）、「純粋理性宗教と歴史的信仰の相克」（牧野英二編『新・カント読本』、法政大学出版局、2018 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to understand Kant's critical philosophy and to grasp its peculiarity. You should read "Critique of Judgement" in Germany on this course, and talk about your opinion. It doesn't matter if you have ever read and touched "Critique of Judgement" or Kant's philosophy. Please join this class if you have any interests about his philosophy class.

PHL600B1

超越論哲学研究Ⅱ－2

鶴澤 和彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、現象学・解釈学・政治哲学の基本文献の精読と講義を通じて、自己・他者・共同体に関する理解の生成過程とその意義を捉えることを目的とする。その際、フッサール現象学における自己と他者、間主観性、共同精神の概念を取り上げ、次に、ディルタイ解釈学から作用連関としての精神的世界の概念を考察する。さらに、アーレントの政治哲学から多数性および活動的生活 *vita activa* の概念を論じ、公共的領域や他者との共生がどのようにして成立するかを把握する。

【到達目標】

- ①近代哲学から現代哲学への移行の中で「超越論的自我」の概念の発展を理解し、自己と他者及び世界に関する思想を説明することができる。
- ②社会や共同体における人格的関係、たとえば、愛・友愛、あるいは、抑圧・暴力などの問題について、原理的に考察できる視点を獲得できる。
- ③ドイツ語原文の音読、文法、表現に関する疑問を解決していくことで、テキストを正確に読み、翻訳する能力を習得できる。
- ④哲学の諸概念をそのギリシア語やラテン語の語源から理解することで、根源的意義と概念的連関を説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

原典購読と講義ならびに質疑応答により、テキストの内容理解に努めていく。なお、ドイツ語を履修していない受講生を配慮して、テキストの邦訳（参考書の欄を参考）による参加も可とする。また、ドイツ語原典のコピーは、第 1 回目の授業時に配布する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	フッサールの現象学	超越論的自我と他者の構成
第 2 回	フッサールの現象学	超越論的還元と間主観性の関係
第 3 回	フッサールの現象学	間主観性の現象学における共同精神の概念
第 4 回	フッサールの現象学	自己・他者・共同体に関する現象学的考察のまとめと議論
第 5 回	ディルタイの生の解釈学	生の概念とその客観化
第 6 回	ディルタイの生の解釈学	精神世界の概念
第 7 回	ディルタイの生の解釈学	作用連関及び構造連関の概念
第 8 回	ディルタイの生の解釈学	自己・他者・共同体に関する解釈学的考察のまとめと議論
第 9 回	アーレントの政治哲学	人間の条件としての労働、仕事、活動の諸概念
第 10 回	アーレントの政治哲学	政治哲学の原理としての多数性の概念
第 11 回	アーレントの政治哲学	公共的領域と他者との共生
第 12 回	アーレントの政治哲学	自己・他者・共同体に関する政治哲学的考察のまとめと議論
第 13 回	現象学、解釈学、政治哲学の諸概念の整理とまとめ	上述の三つのアプローチの共通点と相違点
第 14 回	現象学、解釈学、政治哲学の諸概念の整理とまとめ	個別研究発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生は、各授業で扱うテキストの該当箇所を精読し、疑問点や問題点を整理しておく。

【テキスト（教科書）】

- ① *Edmund Husserl, Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge, in: Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke. Band I, Haag 1963.*
- ② *Wilhelm Dilthey, Der Aufbau der geschichtlichen Welt in den Geisteswissenschaften, Stuttgart 1968.*
- ③ *Hannah Arendt, Vita activa oder Vom tätigen Leben, München 1967.*

【参考書】

- ① エトムント・フッサール（著）、浜渦辰二（訳）、『デカルト的省察』（岩波文庫、2001 年）
- ② エトムント・フッサール（著）、浜渦辰二（訳）、『間主観性の現象学』（I～III、ちくま学芸文庫、I 巻 2012 年、II 巻 2013 年、III 巻 2015 年）
- ③ ディルタイ『精神科学における歴史的世界の構成』、ディルタイ全集第 4 巻（法政大学出版局、2010 年）
- ④ アーレント『人間の条件』（ちくま学芸文庫、1994 年）

【成績評価の方法と基準】

①毎回の授業での訳の準備と内容理解は、成績全体の 50%、②ドイツ語原文の音読・文法・表現に関する説明は 25%、③概念の語源的意義と概念的連関の理解は 25%とする。なお、ドイツ語を履修していない受講生については、課題レポートの評価 50%、コメント及び議論への参加 50%とする。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミ参加者の研究テーマに配慮しながら、現象学・解釈学・政治哲学の諸概念を理解しやすく解説する。また、ドイツ語の読み方や文法の説明も併せて行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

オフィスアワーについては、授業終了後に質問を受け付ける。なお、随時、メールでの質問も受け付ける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>カントを中心とする近現代ドイツ哲学
<研究テーマ>意味論、構想論、心の哲学、解釈学、生命・医療倫理学
<主要研究業績>

(共著) *Die japanische Edition von Kants Gesammelten Schriften, in: Kant-Studien, 2013, Band 104, Heft 3. S. 386-394.* ヴィルヘルム・ディルタイ著『アカデミー版カント全集・前文』翻訳及び解説(日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』第 25 号、2014 年)、p.98-117。「編集者としてのディルタイ・アカデミー版カント全集の歴史的経緯からの考察」(日本ディルタイ協会『ディルタイ研究』第 26 号、2015 年)、p.56-72。「カテゴリーの演繹論と図式論—超越論的真理概念をめぐって」(牧野英二編『新・カント読本』、2018 年)、「生命・医療倫理とゲシュタルトクライス—現代の論争点として仁恵原則を問う」(『哲学の変換と知の境界』2019 年)

【Outline and objectives】

他者とは何か、また、共同体はどのようにして成り立つのか、といった問題を現象学、解釈学、そして、政治哲学の三つの始点から考察していく。

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究 I - 1

半田 勝彦

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

「人間は本性上ボリス的(国家を持つ)動物である」という命題で夙に知られるアリストテレスの『政治学』を講読する。これは、西洋政治思想史において非常に大きな影響力を有する著作である。人間は自らの可能性(本性)を実現する為に国家を必要とする、とアリストテレスは考えた。本書の読解を通じて、国家の本質や目的、正義、法、最善の国制、その他政治に関する基本的な概念を考察することができる。

【到達目標】

ギリシア語原典を正確に読解することができる。原文の内容を正しく理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ギリシア語原典を講読する者がいれば、まずその者が訳読し、次にその箇所の英訳をその他の者が訳読していく。ギリシア語講読者がいなければ、英訳を輪読形式で読み進めていく。必要に応じて、研究論文も読みながら、アリストテレスの考えの意義や問題点などを検討する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方
第 2 回	『ニコマコス倫理学』第 1 巻第 9 章	倫理学から政治学へ
第 3 回	『政治学』第 1 巻第 1 章	共同体
第 4 回	『政治学』第 1 巻第 2 章	国家の自然性
第 5 回	『政治学』第 1 巻第 2 章	ボリス的動物
第 6 回	『政治学』第 2 巻第 1 章	第 2 巻の目的
第 7 回	『政治学』第 2 巻第 2 章	プラトン『国家』批判(国の統一)
第 8 回	『政治学』第 2 巻第 3 章	プラトン『国家』批判(妻子共有)
第 9 回	『政治学』第 2 巻第 4 章	プラトン『国家』批判(妻子共有)
第 10 回	『政治学』第 2 巻第 5 章	プラトン『国家』批判(私有財産の禁止)
第 11 回	『政治学』第 2 巻第 6 章	プラトン『法律』批判
第 12 回	『政治学』第 2 巻第 7 章	パレアスの国制論批判
第 13 回	研究論文の講読	論文の精読
第 14 回	総括	春学期のまとめ

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

丹念に辞書を引いてテキストを精読し、問題点を整理して自分の考えをまとめておくこと。

【テキスト(教科書)】

Oxford Classical Texts. 英訳はコピーを配布する。

【参考書】

『政治学』の邦訳は、岩波文庫、岩波版『アリストテレス全集』(新・旧)、西洋古典叢書(京都大学学術出版会)にあるので、各自用意すること。

【成績評価の方法と基準】

訳読 70% (原文を文法的に正しく読解できているか) と、討論・質疑応答 30% (原文の内容を正確に理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判できているか) を勘案して総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの内容を正確に理解したうえで、研究論文を批判的に読めるようにする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ギリシア哲学
<研究テーマ>プラトンとアリストテレスの政治・倫理思想
<主要研究業績>①「内乱の原因——アリストテレス『政治学』第 2 巻第 7 章・第 5 巻——」(『西洋古典研究会論集』第 13 号、2004 年)
②『自然と人間』(共著、梓出版社、2006 年)
③「大衆の主権と政治参与——アリストテレスにおける「衆知の論」をめぐって——」(『倫理学年報』第 61 集、2012 年)

【Outline and objectives】

'Man is by nature a political animal. We read Aristotle's Politics. It is one of the most influential texts in the history of political thought. Aristotle believed that the state is needed by man to fulfil his potential. By reading the Politics, we can study the nature of political organization, the aims of the state, justice, law, the best constitution, and other basic political concepts.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅰ－2

半田 勝彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「人間は本性上ポリスの（国家を持つ）動物である」という命題で夙に知られるアリストテレスの『政治学』を講読する。これは、西洋政治思想史において非常に大きな影響力を有する著作である。人間は自らの可能性（本性）を実現する為に国家を必要とする、とアリストテレスは考えた。本書の読解を通じて、国家の本質や目的、正義、法、最善の国制、その他政治に関する基本的な概念を考察することができる。

【到達目標】

ギリシア語原典を正確に読解することができる。原文の内容を正しく理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ギリシア語原典を講読する者がいれば、まずその者が訳読し、次にその箇所の英訳をその他の者が訳読していく。ギリシア語講読者がいなければ、英訳を輪読形式で読み進めていく。必要に応じて、研究論文も読みながら、アリストテレスの考えの意義や問題点などを検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方
第2回	第3巻第1章	国家と市民
第3回	第3巻第2章	市民の定義
第4回	第3巻第3章	国家の同一性
第5回	第3巻第4章	よき人とよき市民
第6回	第3巻第5章	市民の範囲
第7回	第3巻第6章	正しい国制
第8回	第3巻第7章	国制の分類
第9回	第3巻第8章	寡頭制と民主制
第10回	第3巻第9章	国家の正しさと目的
第11回	第3巻第10章	国家の主権の所在
第12回	第3巻第11章	衆知の論
第13回	研究論文の講読	論文の精読
第14回	総括	秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

丹念に辞書を引いてテキストを精読し、問題点を整理して自分の考えをまとめておくこと。

【テキスト（教科書）】

Oxford Classical Texts. 英訳はコピーを配布する。

【参考書】

『政治学』の邦訳は、岩波文庫、岩波版『アリストテレス全集』（新・旧）、西洋古典叢書（京都大学学術出版会）にあるので、各自用意すること。

【成績評価の方法と基準】

訳読 70%（原文を文法的に正しく読解できているか）と、討論・質疑応答 30%（原文の内容を正確に理解したうえで、アリストテレスの考えを適切に擁護、ないしは、批判できているか）を勘案して総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

テキストの内容を正確に理解したうえで、研究論文を批判的に読めるようになる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 古代ギリシア哲学

<研究テーマ> プラトンとアリストテレスの政治・倫理思想

<主要研究業績> ①「内乱の原因——アリストテレス『政治学』第2巻第7章・第5巻——」（『西洋古典研究会論集』第13号、2004年）

②『自然と人間』（共著、梓出版社、2006年）

③「大衆の主権と政治参与——アリストテレスにおける「衆知の論」をめぐって——」（『倫理学年報』第61集、2012年）

【Outline and objectives】

'Man is by nature a political animal.' We read Aristotle's Politics. It is one of the most influential texts in the history of political thought. Aristotle believed that the state is needed by man to fulfil his potential. By reading the Politics, we can study the nature of political organization, the aims of the state, justice, law, the best constitution, and other basic political concepts.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－1

長谷川 悦宏

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ミルの『代議制統治論』を第三章より精読し、代議制の持つ問題点や、それが満たさねばならない諸条件について考察する。

【到達目標】

ミルの政治・社会哲学が持つ意義に関して考察する。ミルの思想と現代思想とを比較考察し、その特徴を述べる事が出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

第三章より輪読形式で読み進める。重要概念については、ミルの哲学及び政治思想史上の位置づけについて説明を加える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	講義概要、ミル解説	諸注意、自由主義
2	善良な専制君主	テキスト 399-41 頁
3	国民自身による改良	テキスト 401-3 頁
4	市民自身による統治	テキスト 403-6 頁
5	民衆政治優越の根拠	テキスト 406-7 頁
6	道徳的卓越性	テキスト 407-10 頁
7	活動的助的的性格	テキスト 410-12 頁
8	代議制拒否のケース	テキスト 413-14 頁
9	国民に遂行意志・能力がないケース	テキスト 414-15 頁
10	服従という教科	テキスト 415-17 頁
11	障害としての地方精神	テキスト 417-18 頁
12	少数者統治について	テキスト 418-20 頁
13	権力について	テキスト 420-21 頁
14	第三・四章の総括	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを精読し（特に構文を正確に読み取る）、文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する。

【テキスト（教科書）】

第一回授業の時にコピー（トロント大学版）を配布する。

【参考書】

邦訳は J・S・ミル『代議制統治論』（水田洋訳、岩浪書店、1997）がある。その他は必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

訳読 60%、討論参加 30%、レポート 10% の割合で評価する（討論及びレポートのテーマはミル政治思想の現代における意義と制限）。

【学生の意見等からの気づき】

他分野との関連に関する解説も可能な限り行う予定です。

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 19世紀実証主義思想

<研究テーマ> コントと J.S. ミルの思想の比較考察

<主要研究業績>

①『自然と人間』（共著、梓出版、2006）

②「J.S. ミルの宗教思想—希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか—」（『法政大学文学部紀要』第57号、2008）

③「ミル経験主義とプラグマティズム序論」（『法政哲学』第14号、2018）

【Outline and objectives】

We would read carefully chapter III and IV in Mill's Considerations on Parliamentary Reform. You would study the problems of the representative government in this lecture.

PHL600B1

ヨーロッパ精神史研究Ⅱ－2

長谷川 悦宏

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ミルの『代議制統治論』を第五章より精読し、代議制の持つ問題点や、それが満たさねばならない諸条件について考察する。

【到達目標】

ミルの政治・社会哲学が持つ意義に関して考察する。ミルの思想と現代思想とを比較考察し、その特徴を述べる事が出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

第五章より輪読形式で読み進める。重要概念に関しては説明を加えるとともに、随時参加者によるレポートも行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	講義概要、ミル解説	諸注意、代議制
2	代議制と国家構造	テキスト 422-24 頁
3	代議制と行政	テキスト 424-26 頁
4	行政官、内閣の指名	テキスト 426-28 頁
5	代議制と立法	テキスト 428-32 頁
6	代議合議体の任務	テキスト 432-34 頁
7	統治の欠陥	テキスト 435-36 頁
8	官僚政治	テキスト 436-38 頁
9	官僚制と代議制	テキスト 438-41 頁
10	君主制、貴族制下の利害	テキスト 441-42 頁
11	民主制下の利害	テキスト 442-44 頁
12	悪性向と権力	テキスト 444-46 頁
13	利害関心と階級	テキスト 446-47 頁
14	第五・六章の総括	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを精読し（特に構文を正確に読み取る）、文法や内容に関する疑問点などのメモを作成する。

【テキスト（教科書）】

第一回授業の時にコピー（トロント大学版）を配布する。

【参考書】

邦訳は J・S・ミル『代議制統治論』（水田洋訳、岩浪書店、1997）がある。その他は必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

訳読 60%、討論参加 30%、レポート 10% の割合で評価する（討論及びレポートのテーマはミル政治思想の現代における意義と制限）。

【学生の意見等からの気づき】

他分野との関連に関する解説も可能な限り行う予定です。

【担当教員の専門分野】

<専門領域> 19世紀実証主義思想

<研究テーマ> コントと J.S. ミルの思想の比較考察

<主要業績>

①『自然と人間』（共著、粹出版、2006）

②『J.S. ミルの宗教思想－希望の神学は人間性の宗教に何を付け加えたのか－』（『法政大学文学部紀要』第 57 号、2008）

③『ミル経験主義とプラグマティズム序論』（『法政哲学』第 14 号、2018）

【Outline and objectives】

We would read carefully chapter V and VI in Mill's *Considerations on Paliamentary Reform*. You would study the problems of the representative government in this lecture.

PHL600B1

法哲学研究 1

内藤 淳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

哲学史における利己主義と道徳の対立を論じた Alison Hills, *The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism*, Oxford University Press, 2010 を精読する。なぜ道徳に従わなければならないか、道徳を無視して利己的に振舞うと何がいけないのかといった「道徳の理由」は、倫理学や哲学の基本問題のひとつである。この問題に関して、歴史の中の代表的思想を踏まえて、利己主義に基づく道徳批判を整理し、それに対抗する道徳擁護論を検討しているのがテキストの内容である。毎回担当者を決め、テキストの担当箇所の日語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。

【到達目標】

①思想史の中で利己主義に位置づけられる主要な考え方を把握し、それらの特徴や相互関係を理解する。

②利己主義に基づく道徳への批判の内容を理解し、道徳の矛盾や問題点を把握する。

③それらを通じて、道徳の意義や基礎（なぜ道徳を守らねばならないか）について自分なりの考えを持ち、議論ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回担当者を決め、テキストの担当箇所の日語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第 2 回	利己主義とは	テキスト第 2 章第 1 節 pp.11-13
第 3 回	道徳の権威	テキスト第 2 章第 1 節 pp.11-13
第 4 回	利己主義からの道徳批判 1	テキスト第 2 章第 2 節 pp.13-14
第 5 回	利己主義からの道徳批判 2	テキスト第 2 章第 2 節 pp.14-15
第 6 回	理性による道徳批判 1	テキスト第 2 章第 3 節 pp.15-17
第 7 回	理性による道徳批判 2	テキスト第 2 章第 3 節 pp.17-19
第 8 回	標準的利己主義 1	テキスト第 2 章第 4 節 pp.19-20
第 9 回	標準的利己主義 2	テキスト第 2 章第 4 節 pp.20-21
第 10 回	利己主義と道徳の関係	テキスト第 2 章第 5 節 pp.22-24
第 11 回	利己主義と道徳の関係 2	テキスト第 2 章第 6 節 pp.25-27
第 12 回	道徳の擁護 1	テキスト第 2 章第 7 節 pp.29-31
第 13 回	道徳の擁護 2	テキスト第 2 章第 8 節 pp.31-32
第 14 回	本章の結論	テキスト第 2 章第 8 節 pp.33-34

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確かつ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Alison Hills, *The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism*, Oxford University Press, 2010

【参考書】

Jan Österberg. *Self and Others: A Study of Ethical Egoism*, Kluwer Academic Publishers, 1988

Rbert Shaver, *Rational Egoism: A Selected and Critical History*, Cambridge University Press, 1999

安彦一恵・大庭健・溝口宏平編『道徳の理由－ Why be moral?』昭和堂、1992 年

永井均『倫理とは何か－猫のインジヒトの挑戦』産業図書、2003 年

その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80%。それ以外での授業での議論内容：20%。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 哲学

<研究テーマ> 人権や憲法の基礎についての研究

<主要研究業績>

「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要 75 号、2017 年

「平和は『絶対に』求めるべきか？：ホプズを進化心理学で修正する」(1) (2・完) 法政大学文学部紀要 71 号・72 号、2015 年

「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完) 一橋法学 12 巻 2 号・3 号、2013 年

「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012 年

「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位 5）』法律文化社、2010 年

「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第 8 号、2010 年

【Outline and objectives】

This course introduces egoism in philosophical history. The main aim of this course is to help students understand the foundation of morality by studying the challenge to morality from egoism. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on "why be moral?" and explain them rationally.

PHL600B1

法哲学研究 2

内藤 淳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に続き、哲学史における利己主義と道徳の対立を論じた *Alison Hills, The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism, Oxford University Press, 2010* を精読する。なぜ道徳に従わなければならないか、道徳を無視して利己的に振る舞うと何がいけないのかといった「道徳の理由」は、倫理学や哲学の基本問題のひとつである。この問題に関して、歴史の中の代表的思想を踏まえて、利己主義に基づく道徳批判を整理し、それに対抗する道徳擁護論を検討しているのがテキストの内容である。毎回担当者を決め、テキストの担当箇所日本語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。

【到達目標】

- ①思想史の中で利己主義に位置づけられる主要な考え方を把握し、それらの特徴や相互関係を理解する。
- ②利己主義に基づく道徳への批判の内容を理解し、道徳の矛盾や問題点を把握する。
- ③それらを通じて、道徳の意義や基礎（なぜ道徳を守らねばならないか）について自分なりの考えを持ち、議論ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回担当者を決め、テキストの担当箇所の日本語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第 2 回	カントと利己主義	テキスト第 3 章第 1 節 pp.35-36
第 3 回	幸福とは 1	テキスト第 3 章第 2 節 pp.36-39
第 4 回	幸福とは 2	テキスト第 3 章第 2 節 pp.40-41
第 5 回	カントと利己主義	テキスト第 3 章第 3 節 pp.41-43
第 6 回	カント的反利己主義 1	テキスト第 3 章第 4 節 pp.43-45
第 7 回	カント的反利己主義 2	テキスト第 3 章第 4 節 pp.45-48
第 8 回	自己への義務	テキスト第 3 章第 5 節 pp.48-51
第 9 回	合理性原理	テキスト第 3 章第 6 節 pp.51-52
第 10 回	合理性原理と価値 1	テキスト第 3 章第 7 節 pp.53-55
第 11 回	合理性原理と価値 2	テキスト第 3 章第 7 節 pp.56-59
第 12 回	カント的利己主義 1	テキスト第 3 章第 8 節 pp.59-61
第 13 回	カント的利己主義 2	テキスト第 3 章第 8 節 pp.61-63
第 14 回	本章の結論	テキスト第 3 章第 9 節 pp.63-64

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Alison Hills, The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism, Oxford University Press, 2010

【参考書】

Jan Österberg, Self and Others: A Study of Ethical Egoism, Kluwer Academic Publishers, 1988

Rbert Shaver, Rational Egoism: A Selected and Critical History, Cambridge University Press, 1999

安彦一恵・大庭健・溝口宏平編『道徳の理由―― Why be moral?』昭和堂、1992 年

永井均『倫理とは何か――猫のインジヒトの挑戦』産業図書、2003 年

その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80%。それ以外での授業での議論内容：20%。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞法哲学

＜研究テーマ＞人権や憲法の基礎についての研究

＜主要研究業績＞

「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要 75 号、2017 年

「平和は『絶対に』求めるべきか？：ホプブズを進化心理学で修正する」(1) (2・完) 法政大学文学部紀要 71 号・72 号、2015 年

「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完) 一橋法学 12 巻 2 号・3 号、2013 年

「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012 年
「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位 5）』法律文化社、2010 年

「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第 8 号、2010 年

【Outline and objectives】

This course introduces egoism in philosophical history. The main aim of this course is to help students understand the foundation of morality by studying the challenge to morality from egoism. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on "why be moral?" and explain them rationally.

PHL500B1

哲学ドイツ語研究 1

笠原 賢介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ドイツ語で書かれた原典や研究文献を読むことを目標として、ドイツ語の基礎を第一歩から学びます。研究の前提となる基礎力を養うことが目標です。ドイツ語の未習者、および、既習者で知識を深めたいと思う者を対象とします。

【到達目標】

ドイツ語の文法をその第一歩から学び、基礎的な文法の全体を把握し、身につけることを目指す。それをもとにドイツ語で書かれたテキストの読解の初歩を目指す。読解の際のテキストは、ニーチェのアフォリズムを用いる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

【新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）】（同学社）を教科書として用います。毎回、文法の説明の後、練習問題によって理解を確認します。復習のための練習問題を参加者にあてておき、次回に理解を確認します。文法の学習の終了の後は、ニーチェの短いアフォリズムを輪読形式で読む予定です。テキストはコピーで配布します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス。発音。	授業の進め方、内容、成績評価。テキストを原典で読むことの意義。ドイツ語の発音の基礎を学びます。以下の進度は目安です。
第 2 回	発音の復習。第一課「動詞の現在人称変化 (1)」	発音の復習をし、動詞の現在人称変化の基礎を学びます。
第 3 回	第二課「動詞の現在人称変化 (2)・格と人称代名詞」	第一課の復習をし、不規則な動詞の変化の一部、および人称代名詞の変化を学びます。
第 4 回	第三課「冠詞・名詞の単数形」	第二課の復習をし、定冠詞と不定冠詞の変化を名詞の単数形に関して学びます。
第 5 回	第四課「動詞の現在人称変化 (3)・話法の助動詞・文と文成分」	第三課の復習をし、不規則な動詞の変化の一部、および話法の助動詞の変化を学びます。
第 6 回	第五課「不定冠詞類の格変化・前置詞と格支配・配語法 (1)」	第四課の復習をし、不定冠詞類の格変化、前置詞、配語法の一部を学びます。
第 7 回	第六課「名詞の複数形」	第五課の復習をし、名詞の複数形のパターンを学びます。
第 8 回	第七課「定冠詞類の格変化・動詞の現在人称変化 (4)・未来時称」	第六課の復習をし、定冠詞類の格変化と動詞の不規則な人称変化の一部を学びます。
第 9 回	第八課「形容詞の格変化」	第七課の復習をし、形容詞の格変化を学びます。
第 10 回	第九課「動詞の三基本形と過去人称変化・数詞」	第八課の復習をし、動詞の三基本形、過去人称変化、数の表現を学びます。
第 11 回	第十課「完了時称・配語法 (2)」	第九課の復習をし、現在完了形および語順の規則を学びます。
第 12 回	第十一課「接続詞・配語法 (3)」	第十課の復習をし、接続詞の種類と用法を学びます。
第 13 回	第十二課「所有代名詞・不定代名詞・疑問代名詞・形容詞の名詞的用法」	第十一課の復習をし、所有代名詞、不定代名詞、疑問代名詞、形容詞の名詞的用法を学びます。
第 14 回	第十三課「分離動詞・不定詞の用法・分詞とその用法」	第十二課の復習をし、分離動詞、不定詞と分詞の用法を学びます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、予習と復習を行ってください。

【テキスト（教科書）】

【新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）】同学社、2016 年（2000 円）を教科書として用います。

【参考書】

橋本文夫『詳解ドイツ大文法』三修社、2002 年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、平常点 50 %、課題への取り組み 50 %で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、予習と復習を欠かさないこと。

【学生が準備すべき機器他】

市販の独和辞典のいずれかを所持すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ思想史、ドイツ現代哲学・思想、比較文学比較文化
<研究テーマ>近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたのか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。

<主要研究業績>

アドルノ『本来性という隠語』（訳書）、未來社、ポイエシス叢書、1992年。
『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016年5月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界—クニツゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未來社、2017年。「レッシング『賢者ナータン』再読』（論文）、『思想』2018年2月号。

【Outline and objectives】

Study on philosophical German language. Key words: grasping grammatical structure of German language; broadening basic competence for academic research in the field of philosophy.

PHL500B1

哲学ドイツ語研究 2

笠原 賢介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ドイツ語で書かれた原典や研究文献を読むことを目指して、ドイツ語の基礎を学び、基礎的文法の全体を捉えます。それを踏まえて、ドイツ語で書かれた原典読解の基礎的な演習を行います。それらによって研究の前提となる基礎力を養うことを目標とします。ドイツ語の未習者、および、既習者で知識を深めたいと思う者を対象とします。

【到達目標】

ドイツ語の文法の基礎を学び、文法の全体を把握し、身につけることを目指す。それを踏まえて、ドイツ語で書かれた原典の読解の初歩を目指す。読解の際のテキストは、ニーチェのアフォリズムを用いる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI」に関連

【授業の進め方と方法】

【新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）】（同学社）を教科書として用います。毎回、文法の説明の後、練習問題によって理解を確認します。復習のための練習問題を参加者にあてておき、次回に理解を確認します。文法の学習の終了の後は、ニーチェの短いアフォリズムを輪読形式で読みます。テキストはコピーで配布します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス、春学期の復習。第十四課「形容詞と副詞の比較・形容詞の補足成分・語構成（2）」	春学期の学習の要点を復習します。それを踏まえて、形容詞と副詞の比較を学びます。以下の進捗は目安です。
第2回	第十四課（続き）	前回の形容詞と副詞の比較を復習します。形容詞の補足成分とドイツ語の語構成について学びます。
第3回	第十五課「指示代名詞・再帰代名詞・再帰動詞」	第十四課の内容の復習を行い、指示代名詞、再帰代名詞、再帰動詞について学びます。
第4回	第十六課「関係代名詞・単一文と複合文」	第十五課の内容を復習し、関係代名詞、単一文と複合文の違いについて学びます。
第5回	第十七課「非人称動詞・受動態・配語法（4）」	第十六課の内容を復習し、非人称動詞、受動態を学び、配語法をまとめます。
第6回	第十八課「語法について・命令法・接続法の形態」	第十七課の内容を復習し、語法の概念、命令法と接続法の形態について学びます。
第7回	第十九課「接続法の時称・接続法の用法（1）」	第十八課の内容を復習し、接続法の時称と用法の基礎を学びます。
第8回	第二十課「接続法の用法（2）」	第十九課の内容を復習し、接続法の用法を学びます。
第9回	学習内容のまとめと補足。	春学期から学んできたドイツ語の文法の要点を振り返り、学び残された点を補います。
第10回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習（1）	ニーチェの『人間的、あまりに人間的』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第11回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習（2）	引き続き『人間的、あまりに人間的』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第12回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習（3）	ニーチェの『曙光』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第13回	ニーチェのアフォリズムによる読解演習（4）	ニーチェの『悦ばしき知』からいくつかのアフォリズムを選んで輪読します。
第14回	まとめ	輪読したテキストを振り返り、原文を読むことの意義を確認します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、予習と復習を行ってください。

【テキスト（教科書）】

【新訂・岩崎・平尾・初歩ドイツ文法（新正書法対応）】同学社、2016年（2000円）を教科書として用います。

【参考書】

橋本文夫『詳解ドイツ大文法』三修社、2002年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして平常点50%、課題への取り組み50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、予習と復習を欠かさないこと。

【その他の重要事項】

市販のいずれかの独和辞典を持参のこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化
<研究テーマ>近代ヨーロッパ哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。

<主要研究業績>

アドルフ『本来性という隠語』（訳書）、未來社、ポイエシス叢書、1992年。
『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016年5月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界—クニツゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未來社、2017年。「レッシング『賢者ナタン』再読」（論文）、『思想』2018年2月号。

【Outline and objectives】

Study on philosophical German language. Key words: grasping grammatical structure of German language; broadening basic competence for academic research in the field of philosophy.

PHL500B1

哲学フランス語研究 1

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語で哲学書を読めるようにフランス語の読解能力をつける。基本的な文法事項を確認しながら、哲学の主要テーマにそってフランス語原文にあたってあらたに中級文法の復習と習得につとめる

【到達目標】**【修士課程】**

- ①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。
- ②さらに中級文法へ理解を高める。
- ③哲学者の原文を読めるように語学力をアップする。

【博士後期課程】

上記①と②と③においてより高度の見聞への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

一回の授業の前半では、毎回の授業時に配布する文法の問題集をこなし、後半では近現代のフランス人哲学者の文章の訳読にチャレンジする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第2回	文法事項・冠詞と実存主義論のテキスト第1回	冠詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトル）
第3回	文法事項・所有形容詞と実存主義論のテキスト第2回	所用形容詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその2）
第4回	文法事項・形容詞と実存主義論のテキスト第3回	形容詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその3）
第5回	文法事項・不定形容詞と実存主義論のテキスト第4回	不定形容詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその4）
第6回	文法事項・関係代名詞第1回と実存主義論のテキスト第5回	関係代名詞に関する文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその5）
第7回	文法事項・関係代名詞第2回と実存主義論のテキスト第6回	関係代名詞に関するより高度な文法問題と実存主義に関する近代のテキストの読解（サルトルその6）
第8回	文法事項・関係代名詞第3回と実存主義論のテキスト第7回	関係代名詞に関するよりいっそう高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュ）
第9回	文法事項・中性代名詞第1回と実存主義論のテキスト第8回	中性代名詞に関する文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュその2）
第10回	文法事項・中性代名詞第2回と実存主義論のテキスト第9回	中性代名詞に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュその3）
第11回	文法事項・受動態第1回と実存主義論のテキスト第10回	受動態に関する文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（カミュ）
第12回	文法事項・受動態第2回と実存主義論のテキスト第11回	受動態に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（ナンシー）
第13回	文法事項・疑問文第1回と実存主義論のテキスト第12回	疑問文に関するより高度な文法問題と実存主義に関する現代のテキストの読解（ナンシーその2）
第14回	文法事項・疑問文第2回と実存主義論のテキスト第13回	受動態に関するより高度な文法問題と他者に関する現代のテキストの読解（ナンシーその3）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日ごろからフランス語の文法問題集をこなし、仏検を目指すこと。

【テキスト（教科書）】

『新初等フランス語教本 文法編』
京都大学フランス語教室編 白水社

【参考書】

『フランス語文法問題集』白水社

【成績評価の方法と基準】**【修士課程】**

- ①毎回の訳出（50%）
- ②毎回の練習問題の対応度（50%）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

①毎回の訳出 (50%)

②毎回の練習問題の対応度 (50%)

≪ 到達目標との対応 ≫

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。受講者からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランス現代思想

<研究テーマ> バタイユ研究

<主要研究業績>

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the fundamental of French grammar and the reading of French philosophical text.

PHL500B1

哲学フランス語研究 2

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランス語の基礎を学びながら、フランス哲学の原典の平易な文章を読んでいく。フランス語で哲学書を読めるようにフランス語の読解能力をつける。

【到達目標】

【修士課程】

①初級文法を復習して確実にフランス語の基盤を作る。

②さらに中級文法へ理解を高める。

③哲学書の原典を読めるように語学力をアップする。

【博士後期課程】

上記①と②と③においてより高度の知見への到達をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

一回の授業の前半では、毎回の授業時に配布する文法の問題集をこなし、後半では近現代のフランス人哲学者の文章の訳読にチャレンジする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第2回	文法事項・過去時制と共同体論のテキスト第1回	過去時制に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソー）
第3回	文法事項・過去時制と共同体論のテキスト第2回	過去時制に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーのその2）
第4回	文法事項・未来時制と共同体論のテキスト第3回	未来時制に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーその3）
第5回	文法事項・未来時制と共同体論のテキスト第4回	未来時制に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ルソーその4）
第6回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第5回	条件法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（カミュ）
第7回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第6回	条件法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（サルトル）
第8回	文法事項・条件法と共同体論のテキスト第7回	条件法に関するより高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（サルトルその2）
第9回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第8回	間接話法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユ）
第10回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第9回	間接話法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユのその2）
第11回	文法事項・間接話法と共同体論のテキスト第10回	間接話法に関するさらに高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（バタイユのその3）
第12回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第11回	接続法に関する文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ブランシヨのその1）
第13回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第12回	接続法に関するさらなる文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ブランシヨのその2）
第14回	文法事項・接続法と共同体論のテキスト第13回	接続法に関するさらびに高度な文法問題と共同体に関する近代のテキストの読解（ナンシー）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日ごろからフランス語の文法問題集をこなし、仏検を目指すこと。共同体論に関する問題に関心をもって、他の授業にのぞむこと。

【テキスト（教科書）】

『新初等フランス語教本 文法編』京都大学フランス語教室編、白水社

【参考書】

『フランス語文法問題集』白水社

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

①毎回の訳出 (50%)

②学期末の発表 (50%)

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
 ②学期末の発表（50 %）
 《到達目標との対応》

《到達目標との対応》

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

概ね良好であった。学生からの要望には随時対応するので、気軽に伝えてほしい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランス現代思想

<研究テーマ>バタイユ研究

<主要研究業績>

『バタイユ入門』ちくま新書

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the fundamental of French grammar and the reading of French philosophical text.

PHL500B1

哲学基礎研究 I

松井 久

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、古代から近現代にいたる、西洋の主要な哲学者たちの思想を学ぶ。専門的な哲学研究のための基礎的知識の修得が目的である。

【到達目標】

西洋哲学が取り組んできた諸問題とそれらに対する様々な解答を理解する。哲学の基礎概念を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

哲学専攻「哲学基礎研究 I」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「西欧の思想 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生との議論を重視しながら、講義形式で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに	授業の概要と進め方
第 2 回	古代ギリシアの哲学 (1)	ソクラテスとプラトン (1)
第 3 回	古代ギリシアの哲学 (2)	ソクラテスとプラトン (2)
第 4 回	古代ギリシアの哲学 (3)	アリストテレス
第 5 回	中世の哲学	アウグスティヌスとトマス・アクィナス
第 6 回	近世の哲学 (1)	デカルト
第 7 回	近世の哲学 (2)	スピノザ
第 8 回	近世の哲学 (3)	ライプニッツ
第 9 回	イギリス経験論	ロック、バークリー、ヒューム
第 10 回	批判哲学とドイツ観念論	カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル
第 11 回	実証哲学	コント、ミル、リトレ
第 12 回	生成の哲学	ニーチェ、ベルクソン、ドゥルーズ
第 13 回	現代の科学哲学	分析哲学、フランスのエピステモロジー
第 14 回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

原典、参考書等を読んで適宜準備。

【テキスト（教科書）】

資料を配布。

【参考書】

さしあたり以下の入門書、事典をあげておくが、授業内で適宜紹介する。

入門書

伊藤邦武『物語 哲学の歴史 自分と世界を考えるために』、中公新書、2012 年

熊野純彦『西洋哲学史—古代から中世へ』、岩波新書、2006 年

熊野純彦『西洋哲学史—近代から現代へ』、岩波新書、2006 年

哲学事典

『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、1998 年

【成績評価の方法と基準】

授業内で扱った問題についてのレポートを学期末に提出してもらう。上記「到達目標」で示した達成度を、授業での議論への参加（30 %）、学期末レポート（70 %）によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>生物学の哲学、19 世紀哲学

<研究テーマ>生物学における個性、環境概念の歴史的考察

<主要研究業績>

論文

« *L'individualité biologique chez Bergson* », *Implications philosophiques, Bergson ou la science (Ebook)*, 2013, p. 8-26.

« *La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle* », *Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« *Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu* », *フランス哲学・思想研究* 22 号, 2017, p. 231-241.

翻訳

ベルクソン『創造的進化』（合田正人氏と共訳）、筑摩書房、2010 年

バタイユ『推移的存在論』（近藤和敬氏と共訳）、水声社、2018 年

【Outline and objectives】

This course introduces the history of philosophy. Its aim is to help students acquire the basic concepts and principles of philosophy indispensable to the specialized research.

PHL500B1

哲学基礎研究Ⅱ

上野 修

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋一七世紀近世哲学の合理論プロジェクトを紹介します。具体的にはデカルト、ホッブズ、スピノザ、ライプニッツの哲学を扱います。近現代哲学の黎明期に存在したさまざまな試みの持つポテンシャルに気づくことが目的です。

【到達目標】

哲学史的教養をふまえた哲学の基礎的なセンスを持てるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

哲学専攻「哲学基礎研究Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「西欧の思想Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と討議

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	一七世紀と哲学
第2回	デカルト（1）	確実性を求めて：『方法序説』『規則論』
第3回	デカルト（2）	方法的懐疑：『省察』
第4回	ホッブズ（1）	仮言推論（シミュレーション）の哲学：『物体論』
第5回	ホッブズ（2）	「契約」の論理：『市民論』『リヴァイアサン』
第6回	スピノザ（1）	真理の中で目覚める：『知性改善論』『短論文』
第7回	スピノザ（2）	外なき現実：『エチカ』
第8回	スピノザ（3）	倫理と道徳：『神学政治論』
第9回	ホッブズとスピノザ	国家論：反ユートピア論の二つの形態
第10回	ライプニッツ（1）	上の三人との対決
第11回	ライプニッツ（2）	充足理由：『形而上学叙説』
第12回	ライプニッツ（3）	表現システムとしての世界：『モノドロジー』
第13回	17世紀哲学と様相	現実概念の諸相：可能・不可能・必然・偶然
第14回	まとめと討議	近世哲学のポテンシャルについて討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の配布資料による予習と復習。最終レポートの準備。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

上野修『哲学者たちのワンダーランド—様相の十七世紀』（講談社 2013 年）

【成績評価の方法と基準】

最終レポート「近世哲学のポテンシャル」（100%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>哲学哲学史
<研究テーマ>西洋近世哲学
<主要研究業績>

『デカルト、ホッブズ、スピノザ—哲学する十七世紀』（講談社学術文庫）、『スピノザ『神学政治論』を読む』（ちくま学芸文庫）、『哲学者たちのワンダーランド 様相の十七世紀』（講談社）

【Outline and objectives】

Introduction to the 17th century philosophy. To understand various forms of Rationalism: Descartes, Hobbes, Spinoza and Leibniz.

PHL500B1

日本思想史研究 I - 1

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三木清の著作『哲学的人間学』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・三木清の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

哲学専攻「日本思想史研究 I - 1」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に三木清の『哲学的人間学』の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は担当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	三木清『哲学的人間学』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	『哲学的人間学』「人間学の概念」①	第一章「人間学の概念」の検討の第一回目 pp.127-147（『三木清全集』18巻の頁数表記）
第 3 回	「人間学の概念」②	「人間学の概念」の検討の第二回目 pp.138-161 （前週の復習も含めての検討）
第 4 回	「人間学の概念」③	「人間学の概念」の検討の第三回目 pp.161-175
第 5 回	「人間学の概念」④	「人間学の概念」の検討の第四回目 pp.175-186
第 6 回	『哲学的人間学』「人間存在の歴史性」①	第二章「人間存在の歴史性」の検討の第一回目 pp.187-213
第 7 回	「人間存在の歴史性」②	「人間存在の歴史性」の検討の第二回目 pp.214-229
第 8 回	「人間存在の歴史性」③	「人間存在の歴史性」の検討の第三回目 pp.229-246
第 9 回	『哲学的人間学』「人間存在の状況性」①	第三章「人間存在の状況性」の検討の第一回目 pp.247-266
第 10 回	「人間存在の状況性」②	「人間存在の状況性」の検討の第二回目 pp.266-296
第 11 回	『哲学的人間学』「人間存在の表現性」①	第四章「人間存在の表現性」の検討の第一回目 pp.297-330
第 12 回	「人間存在の表現性」②	「人間存在の表現性」の検討の第二回目 pp.330-345
第 13 回	「人間存在の表現性」③	「人間存在の表現性」の検討の第三回目 pp.345-355 第四章全体のまとめも含む
第 14 回	『哲学的人間学』「人間存在の社会性」	第四章「人間存在の社会性」の検討と、全体の総まとめ pp.356-386

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の担当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

三木清『哲学的人間学』（『三木清全集』第十八巻）

現在、古本屋などで安価で入手可能であるので出来る限り各自入手することが望ましいが、入手できなかった場合でもコピーを講義担当教員が準備する。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、三木清の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては赤松常弘『三木清——哲学的思索の軌跡』（ミネルヴァ書房、1994年）が三木の思想の全体像を把握するに際しては有益である。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。

講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に担当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。
紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究
<主要研究業績>

- ① 「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第 2 号』、2014）
- ② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
- ③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第 24 輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of the concept "philosophical anthropology" through reading thoroughly "Philosophical anthropology" by Miki Kiyoshi. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

PHL500B1

日本思想史研究 I - 2

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三木清の著作『構想力の論理』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。今年度は第三章「技術」の序盤までの検討を予定している。

【到達目標】

- ・三木清の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

哲学専攻「日本思想史研究 I - 2」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 II」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に三木清の『構想力の論理』の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	三木清『構想力の論理』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第 2 回	『構想力の論理』第一章「神話」①	「序」および第一章「神話」の検討の第一回目 pp.3-19（『三木清全集』8巻の頁数表記）
第 3 回	「神話」②	「神話」の検討の第二回目 pp.19-36
第 4 回	「神話」③	「神話」の検討の第三回目 pp.36-55
第 5 回	「神話」④	「神話」の検討の第四回目 pp.55-74
第 6 回	「神話」⑤	「神話」の検討の第五回目 pp.74-98 第一章の総まとめ
第 7 回	『構想力の論理』第二章「制度」①	『構想力の論理』第二章「制度」の検討の第一回目 pp.99-119
第 8 回	「制度」②	「制度」の検討の第二回目 pp.120-136
第 9 回	「制度」③	「制度」の検討の第三回目 pp.137-150
第 10 回	「制度」④	「制度」の検討の第四回目 pp.151-164
第 11 回	「制度」⑤	「制度」の検討の第五回目 pp.164-184 第二章の総まとめ
第 12 回	『構想力の論理』第三章「技術」①	『構想力の論理』第三章「技術」の検討の第一回目 pp.185-202
第 13 回	「技術」②	「技術」の検討の第二回目 pp.203-221
第 14 回	「技術」③	「技術」の検討の第三回目と、全体の総まとめ pp.221-238

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

三木清『構想力の論理』（『三木清全集』第八巻）

現在、古本屋などで安価で入手可能であるので出来得る限り各自入手することが望ましいが、入手できなかった場合でもコピーを講義担当教員が準備する。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、三木清の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては赤松常弘『三木清——哲学的思索の軌跡』（ミネルヴァ書房、1994年）が三木の思想の全体像を把握するに際しては有益である。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。

講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものと見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

- ① 「「ひと」であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
- ② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
- ③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要 第24輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of the concept "Einbildungskraft (in German)" in other words "imagination (in English)" ,through reading thoroughly "The logic of imagination" by Miki Kiyoshi. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

PHL500B1

日本思想史研究Ⅱ－1

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西田幾多郎の著作『善の研究』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。この講義では「第二編 実在」の終わりまで読み進めていく予定である。

【到達目標】

- ・西田幾多郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に西田幾多郎の『善の研究』の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	西田幾多郎『善の研究』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『善の研究』「第一編 純粹経験」第一章 純粹経験	『善の研究』「第一編 純粹経験」第一章 純粹経験」の発表と検討 pp.13-24（頁表記は岩波文庫版による）
第3回	「第一編第二章 思惟」	「第一編第二章 思惟」の発表と検討 pp.24-36
第4回	「第一編第三章 意志」	「第一編第三章 意志」の発表と検討 pp.37-50
第5回	「第一編第四章 知的直観」	「第一編第四章 知的直観」の発表と検討 pp.51-57
第6回	「第二編 実在」「第一章 考究の出立点」および「第二章 意識現象が唯一の実在である」	「第二編 実在」「第一章 考究の出立点」および「第二章 意識現象が唯一の実在である」の発表と検討 pp.59-72
第7回	「第二編第三章 実在の真景」	「第二編第三章 実在の真景」の発表と検討 pp.73-78 (前回の復習も含めて)
第8回	「第二編第四章 真実在は常に同一の形式を有っている」	「第二編第四章 真実在は常に同一の形式を有っている」の発表と検討 pp.79-83
第9回	「第二編第五章 真実在の根本的形式」	「第二編第五章 真実在の根本的形式」の発表と検討 pp.84-89
第10回	「第二編第六章 唯一実在」	「第二編第六章 唯一実在」の発表と検討 pp.90-95
第11回	「第二編第七章 実在の分化発展」	「第二編第七章 実在の分化発展」の発表と検討 pp.96-101
第12回	「第二編第八章 自然」	「第二編第八章 自然」の発表と検討 pp.102-109
第13回	「第二編第九章 精神」	「第二編第九章 精神」の発表と検討 pp.110-119
第14回	「第二編第十章 実在としての神」	「第二編第十章 実在としての神」の発表と検討 pp.120-126

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

西田幾多郎『善の研究』（岩波文庫）

教科書指定しておくので、出席者は必ず入手しておくこと。

【参考書】

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては小坂国継『善の研究（全注釈）』が講談社学術文庫から出ている。きわめて質の高い注釈であるが、その分、注釈に「頼りすぎてしまう」ことにならないよう、まずは参考書などを参照せず、西田幾多郎の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものと見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

- ①「「ひと」であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
- ②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
- ③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第24輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese modern philosophy through reading thoroughly "An Inquiry into Good" by Nishida Kitaro. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

PHL500B1

日本思想史研究Ⅱ－2

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西田幾多郎の著作『善の研究』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。春学期開講の「日本思想史研究Ⅱ-1」では「第一編」と「第二編」を扱ったが、この講義では「第三編 善」から終わりまで読み進めていく予定である。

【到達目標】

- ・西田幾多郎の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に西田幾多郎の『善の研究』の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は担当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	西田幾多郎『善の研究』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『善の研究』「第三編 善」 「第一章 行為上」「第二章 行為下」	『善の研究』「第三編 善」第一章「行為上」および「行為下」 pp.127-137（頁表記は岩波文庫版による）
第3回	「第三編第三章 意志の自由」	「第三編第三章 意志の自由」の発表と検討 pp.138-145
第4回	「第三編第四章 価値的研究」	「第三編第四章 価値的研究」の発表と検討 pp.146-149
第5回	「第三編第五章 倫理学の諸説 その一」および「第六章 倫理学の諸説 その二」	および、ここまでのまとめ 「第三編第五章 倫理学の諸説 その一」および「第六章 倫理学の諸説 その二」の発表と検討 pp.150-160
第6回	「第三編第七章 倫理学の諸説 その三」および「第八章 倫理学の諸説 その四」	「第三編第七章 倫理学の諸説 その三」および「第八章 倫理学の諸説 その四」の発表と検討 pp.161-175
第7回	「第三編第九章 善（活動説）」	「第三編第九章 善（活動説）」の発表と検討 pp.176-182
第8回	「第三編第十章 人格的善」	「第三編第十章 人格的善」の発表と検討 pp.183-188
第9回	「第三編第十一章 善行為の動機（善の形式）および「第十二章 善行為の目的（善の内容）」	「第三編第十一章 善行為の動機（善の形式）および「第十二章 善行為の目的（善の内容）」の発表と検討 pp.189-201
第10回	「第三編第十三章 完全なる善行」	「第三編第十三章 完全なる善行」の発表と検討 pp.202-207
第11回	「第四編 宗教」第一章 宗教的要求」および「第二章 宗教の本質」	第三編の総まとめを含む 「第四編 宗教」第一章 宗教的要求」および「第二章 宗教の本質」の発表と検討 pp.209-220
第12回	「第四編第三章 神」	「第四編第三章 神」の発表と検討 pp.221-233
第13回	「第四編第四章 神と世界」	「第四編第四章 神と世界」の発表と検討 pp.234-241
第14回	「第四編第五章 知と愛」	「第四編第五章 知と愛」の発表と検討 pp.242-246
		全体の総まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は該当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

西田幾多郎『善の研究』（岩波文庫）

教科書指定しておくので、出席者は必ず入手しておくこと。

【参考書】

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては小坂国継『善の研究（全注釈）』が講談社学術文庫から出ている。きわめて質の高い注釈であるが、その分、注釈に「頼りすぎてしまう」ことにならないよう、まずは参考書などを参照せず、西田幾多郎の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものと見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

- ①「「ひと」であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐる一—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
- ②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
- ③「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要 第24輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of Japanese modern philosophy through reading thoroughly "An Inquiry into Good" by Nishida Kitaro. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

PHL500B1

現象学研究 I - 1

君嶋 泰明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1927 年に行った講義『現象学の根本諸問題』をドイツ語原文で読みます。ハイデガーの哲学の特徴の一つは、それが西洋哲学史にたいする彼独自の解釈を前提しているということにあります。そのことは、同じ 1927 年に出版された彼の著『存在と時間』からも窺えることです。同書では、個々の哲学者についての解釈はあまりなされていません。これにたいして今回取り上げる講義では、いくつかの哲学の基本概念をめぐって、カントをはじめとする何人かの古典的哲学者についての解釈が展開されます。学生は講義を読むことで、哲学の概念が特定の歴史を背負っていることに注意を払うことができるようになりますとともに、その歴史に分け入っていくことが一つの「現象学」の実践となりうることを学ぶことができます。春学期はカントのテーゼ「存在はレアルな述語ではない」をめぐる議論を扱います。

【到達目標】

- (A) ハイデガーのドイツ語原文を正確に訳せるようになる。
 (B) ハイデガーのいわんとすることを自分の言葉で噛み砕いて説明できるようになる。
 (C) 以上を通じて、哲学のテキストの読み方に習熟する。
 (D) いくつかの哲学の基本概念の背景にある歴史を理解する。
 (E) 現象学とは哲学するうえでのどのような態度を指すのかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者は、事前にテキストの担当箇所の (1) 日本語訳を作成し、(2) 不明瞭な箇所には自分なりの解釈を与え、(3) わからなかった点についてはまとめておき、それらを報告します。授業ではこの報告に基づき、(1) (2) (3) それぞれについて参加者全員で討議します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方の説明、テキストの先行部分の解説
第 2 回	カントのテーゼ「存在はレアルな述語ではない」をめぐって	担当者による報告と参加者全員での討議
第 3 回	テーゼの内容の理解①	報告と討議
第 4 回	テーゼの内容の理解②	報告と討議
第 5 回	テーゼの内容の理解③	報告と討議
第 6 回	テーゼの内容の理解④	報告と討議
第 7 回	テーゼの内容の理解⑤	報告と討議
第 8 回	テーゼの内容の理解⑥	報告と討議
第 9 回	カントの「存在」概念の現象学的解明①	報告と討議
第 10 回	カントの「存在」概念の現象学的解明②	報告と討議
第 11 回	カントの「存在」概念の現象学的解明③	報告と討議
第 12 回	カントの「存在」概念の現象学的解明④	報告と討議
第 13 回	カントの「存在」概念の現象学的解明⑤	報告と討議
第 14 回	カントの「存在」概念の現象学的解明⑥	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者は上記 (1) 日本語訳、(2) 解釈、(3) 疑問点をまとめたレジュメを作成して授業に臨みます。

参加者は討議に積極的に参加できるよう、あらかじめテキストの当該箇所を熟読しておきます。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Die Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe Bd. 24, Vittorio Klostermann, 1975.*

希望者には当該箇所のコピーを配布しますので、必ずしも購入する必要はありません。

【参考書】

・M. ハイデガー著・溝口純一・松本長彦・杉野祥一・S. ミュラー訳、『現象学の根本諸問題』、創文社、2001 年。

・M. ハイデガー著・木田元・平田裕之・迫田健一訳、『現象学の根本諸問題』、作品社、2010 年。

前者は上記テキストの翻訳です。後者は聴講者のノートを翻訳したもので、上記テキストと厳密に一致するわけではありません。ただし後者の方が翻訳としては読みやすいです。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 70%、参加者としての評価が 30%です。前者はレジュメの内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とします。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より新任につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture course of 1927, *The Basic Problems of Phenomenology, in the German original*. One of the characteristics of his philosophy is that it presupposes his own interpretation of the history of western philosophy. This is apparent from his major work *Being and Time (1927)*, but from it we can't learn much about how he interprets individual philosophers. In contrast, the above mentioned lecture course develops interpretation of some classical philosophers like Kant, with regard to some basic philosophical concepts. By reading it students will learn to pay attention to history of philosophical concepts and understand how it could be that interpreting that history is a way of "doing phenomenology."

現象学研究 I - 2

君嶋 泰明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1927 年に行った講義『現象学の根本諸問題』をドイツ語原文で読みます。ハイデガーの哲学の特徴の一つは、それが西洋哲学史にたいする彼独自の解釈を前提しているということにあります。そのことは、同じ 1927 年に出版された彼の著書『存在と時間』からも窺えることですが、同書では、個々の哲学者についての解釈はあまりなされていません。これにたいして今回取り上げる講義では、いくつかの哲学の基本概念をめぐって、カントをはじめとする何人かの古典的哲学者についての解釈が展開されます。学生は講義を読むことで、哲学の概念が特定の歴史を背負っていることに注意を払うことができるようになるとともに、その歴史に分け入っていくことが一つの「現象学」の実践となりうることを学ぶことができます。秋学期はアリストテレスに由来する「本質」と「存在」の区別をめぐめる議論を扱います。

【到達目標】

- (A) ハイデガーのドイツ語原文を正確に訳せるようになる。
 (B) ハイデガーのいわんとすることを自分の言葉で噛み砕いて説明できるようになる。
 (C) 以上を通じて、哲学のテキストの読み方に習熟する。
 (D) いくつかの哲学の基本概念の背景にある歴史を理解する。
 (E) 現象学とは哲学するうえでどのような態度を指すのかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者は、事前にテキストの担当箇所の (1) 日本語訳を作成し、(2) 不明瞭な箇所には自分なりの解釈を与え、(3) わからなかった点についてはまとめておき、それらを報告します。授業ではこの報告に基づき、(1) (2) (3) それぞれについて参加者全員で討議します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方の説明とテキストの先行部分の解説
第 2 回	「本質」と「存在」の区別をめぐって	担当者による報告と参加者全員での討議
第 3 回	区別の内容の理解①	報告と討議
第 4 回	区別の内容の理解②	報告と討議
第 5 回	区別の内容の理解③	報告と討議
第 6 回	区別の内容の理解④	報告と討議
第 7 回	区別の内容の理解⑤	報告と討議
第 8 回	区別の内容の理解⑥	報告と討議
第 9 回	区別の由来と問題点の現象学的説明①	報告と討議
第 10 回	区別の由来と問題点の現象学的説明②	報告と討議
第 11 回	区別の由来と問題点の現象学的説明③	報告と討議
第 12 回	区別の由来と問題点の現象学的説明④	報告と討議
第 13 回	区別の由来と問題点の現象学的説明⑤	報告と討議
第 14 回	区別の由来と問題点の現象学的説明⑥	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者は上記 (1) 日本語訳、(2) 解釈、(3) 疑問点をまとめたレジュメを作成して授業に臨みます。参加者は討議に積極的に参加できるように、あらかじめテキストの当該箇所を熟読しておきます。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Die Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe Bd. 24, Vittorio Klostermann, 1975.*

希望者には当該箇所のコピーを配布しますので、必ずしも購入する必要はありません。

【参考書】

- ・M. ハイデガー著・溝口純一・松本長彦・杉野祥一・S. ミュラー訳、『現象学の根本諸問題』、創文社、2001 年。
 - ・M. ハイデガー著・木田元・平田裕之・迫田健一訳、『現象学の根本諸問題』、作品社、2010 年。
- 前者は上記テキストの翻訳です。後者は聴講者のノートを翻訳したもので、上記テキストと厳密に一致するわけではありません。ただし後者の方が翻訳としては読みやすいです。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 70%、参加者としての評価が 30%です。前者はレジュメの内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこの発言を評価の対象とします。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より新任につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

- ・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。
- ・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。
- ・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture course of 1927, *The Basic Problems of Phenomenology, in the German original*. One of the characteristics of his philosophy is that it presupposes his own interpretation of the history of western philosophy. This is apparent from his major work *Being and Time (1927)*, but from it we can't learn much about how he interprets individual philosophers. In contrast, the above mentioned lecture course develops interpretation of some classical philosophers like Kant, with regard to some basic philosophical concepts. By reading it students will learn to pay attention to history of philosophical concepts and understand how it could be that interpreting that history is a way of "doing phenomenology."

PHL700B1

哲学特殊研究 1

君嶋 泰明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが1935/36年に行った講義『物への問い』をドイツ語原文で読みます。ハイデガーは同講義で、古代ギリシア哲学と近代哲学の違いを「物とは何か」にたいする答え方の違いとして説明しています。そして、カントの『純粋理性批判』を、この問いを近代哲学の立場から根本的に問い直そうとした著作として解釈しようとしています。講義を読むことで、学生はハイデガーの導きのもと、デカルトに始まる近代哲学の主要な特徴とは何かを考え、その光のもとで『純粋理性批判』を理解することができます。春学期は主にガリレイ、デカルト、ニュートンをめぐる議論を扱います。

【到達目標】

- (A) ハイデガーのドイツ語原文を正確に訳せるようになる。
 (B) ハイデガーのいわんとすることを自分の言葉で噛み砕いて説明できるようになる。
 (C) 以上を通じて、哲学のテキストの読み方に習熟する。
 (D) ガリレイやニュートンの仕事を踏まえ、デカルト哲学の意義を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者は、事前にテキストの担当箇所の(1)日本語訳を作成し、(2)不明瞭な箇所には自分なりの解釈を与え、(3)わからなかった点についてはまとめておき、それらを報告します。授業ではこの報告に基づき、(1)(2)(3)それぞれについて参加者全員で討議します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の説明とテキストの先行部分の解説
第2回	近代自然科学の特徴①	担当者による発表と参加者全員での討議
第3回	近代自然科学の特徴②	報告と討議
第4回	近代自然科学の特徴③	報告と討議
第5回	アリストテレス的運動観とニュートンの運動観①	報告と討議
第6回	アリストテレス的運動観とニュートンの運動観②	報告と討議
第7回	アリストテレス的運動観とニュートンの運動観③	報告と討議
第8回	アリストテレス的運動観とニュートンの運動観④	報告と討議
第9回	ガリレイの落下実験①	報告と討議
第10回	ガリレイの落下実験②	報告と討議
第11回	デカルト哲学の意義①	報告と討議
第12回	デカルト哲学の意義②	報告と討議
第13回	デカルト哲学の意義③	報告と討議
第14回	デカルト哲学の意義④	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者は上記(1)日本語訳、(2)解釈、(3)疑問点をまとめたレジュメを作成して授業に臨みます。参加者は討議に積極的に参加できるように、あらかじめテキストの当該箇所を熟読しておきます。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Die Frage nach dem Ding: Zu Kants Lehre von den transzendentalen Grundsätzen*, Gesamtausgabe Bd. 41, Vittorio Klostermann, 1984.

希望者には当該箇所のコピーを配布しますので、必ずしも購入する必要はありません。

【参考書】

・M. ハイデガー著・高山守・K. オビリーク訳、『物への問い——カントの超越論的原則論に向けて』, 創文社, 1989年。
 上記テキストの翻訳です。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が70%、参加者としての評価が30%です。前者はレジュメの内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とします。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より新任につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26号, 2018年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41号, 2014年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20号, 2012年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture course of 1935/36, *The Question Concerning the Thing*, in the German original. In this lecture course, Heidegger explains the difference between ancient and modern philosophy as the difference in the way of answering the question 'what is a thing', and attempts to interpret Kant's *Critique of Pure Reason* as intended to radically reconsider the question from the standpoint of modern philosophy. In reading this lecture course students will think about the characteristic of modern philosophy since Descartes under the guidance of Heidegger, and understand *Critique of Pure Reason* in light of that consideration.

PHL700B1

哲学特殊研究2

君嶋 泰明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが1935/36年に行った講義『物への問い』をドイツ語原文で読みます。ハイデガーは同講義で、古代ギリシア哲学と近代哲学の違いを「物とは何か」にたいする答え方の違いとして説明しています。そして、カントの『純粋理性批判』を、この問いを近代哲学の立場から根本的に問い直そうとした著作として解釈しようとしています。講義を読むなかで、学生はハイデガーの導きのもと、デカルトに始まる近代哲学の主要な特徴とは何かを考え、その光のもとで『純粋理性批判』を理解することになります。秋学期はハイデガーの『純粋理性批判』解釈を扱います。

【到達目標】

- (A) ハイデガーのドイツ語原文を正確に訳せるようになる。
 (B) ハイデガーのいわんとすることを自分の言葉で噛み砕いて説明できるようになる。
 (C) 以上を通じて、哲学のテキストの読み方に習熟する。
 (D) 近代哲学の特徴を踏まえ、『純粋理性批判』の意図を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者は、事前にテキストの担当箇所の(1)日本語訳を作成し、(2)不明瞭な箇所には自分なりの解釈を与え、(3)わからなかった点についてはまとめておき、それらを報告します。授業ではこの報告に基づき、(1)(2)(3)それぞれについて参加者全員で討議します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の説明とテキストの先行部分の解説
第2回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈①	担当者による発表と参加者全員での討議
第3回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈②	報告と討議
第4回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈③	報告と討議
第5回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈④	報告と討議
第6回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑤	報告と討議
第7回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑥	報告と討議
第8回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑦	報告と討議
第9回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑧	報告と討議
第10回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑨	報告と討議
第11回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑩	報告と討議
第12回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑪	報告と討議
第13回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑫	報告と討議
第14回	ハイデガーの『純粋理性批判』解釈⑬	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者は上記(1)日本語訳、(2)解釈、(3)疑問点をまとめたレジュメを作成して授業に臨みます。参加者は討議に積極的に参加できるように、あらかじめテキストの当該箇所を熟読しておきます。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Die Frage nach dem Ding: Zu Kants Lehre von den transzendentalen Grundsätzen*, Gesamtausgabe Bd. 41, Vittorio Klostermann, 1984.

希望者には当該箇所のコピーを配布しますので、必ずしも購入する必要はありません。

【参考書】

・M. ハイデガー著・高山守・K. オビリーク訳、『物への問い——カントの超越論的原則論に向けて』、創文社、1989年。
 上記テキストの翻訳です。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が70%、参加者としての評価が30%です。前者はレジュメの内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とします。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より新任につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26号、2018年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41号、2014年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20号、2012年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture course of 1935/36, *The Question Concerning the Thing, in the German original*. In this lecture course, Heidegger explains the difference between ancient and modern philosophy as the difference in the way of answering the question 'what is a thing', and attempts to interpret Kant's *Critique of Pure Reason* as intended to radically reconsider the question from the standpoint of modern philosophy. In reading this lecture course students will think about the characteristic of modern philosophy since Descartes under the guidance of Heidegger, and understand *Critique of Pure Reason* in light of that consideration.

PHL700B1

哲学特殊研究 1

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

恩恵と脅威の両面で、今日、人間のあり方にますます大きな影響力を行使している科学ですが、オーギュスト・コント『実証哲学講義』の訳解を通じて、科学と人間の関係について、徹底した考察を行います。

【到達目標】

- ・哲学の古典を原文で読む力、そしてそれを正確でわかりやすい日本語に移しかえる力を養います。
- ・哲学の古典をテーマと時代のふたつの文脈に沿って理解する力を養います。
- ・哲学の古典を自分の研究テーマとの兼ね合いで理解する力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回段落ごとに担当者を定め、その担当者が用意して来る訳解を手がかりに、訳について、内容について、段落ごとに徹底して議論をしつつ、読み進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の説明を行います。
第2回	『実証哲学講義』 51課 (1)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第3回	『実証哲学講義』 51課 (2)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第4回	『実証哲学講義』 51課 (3)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第5回	『実証哲学講義』 51課 (4)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第6回	『実証哲学講義』 51課 (5)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第7回	『実証哲学講義』 51課 (2)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第8回	『実証哲学講義』 51課 (6)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第9回	『実証哲学講義』 51課 (7)	社会動学と社会の発展法則について理解を深めます。
第10回	『実証哲学講義』 52課 (1)	神学的段階のフェティシズムについて理解を深めます。
第11回	『実証哲学講義』 52課 (2)	神学的段階のフェティシズムについて理解を深めます。
第12回	『実証哲学講義』 52課 (3)	神学的段階のフェティシズムについて理解を深めます。
第13回	『実証哲学講義』 52課 (4)	神学的段階のフェティシズムについて理解を深めます。
第14回	総括	セメスター全体の議論の総括を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・自分の担当段落について前もって日本語訳をつくり、それを訳稿プリントとして用意します。
- ・そこで問題になる諸点を前もって選び出して、自分なりの解釈と意見を用意します。
- ・授業後には、授業で指摘された訳への問題提起を踏まえて、訳稿の自分なりの完成版を用意します。

【テキスト（教科書）】

Auguste Comte, "Cours de philosophie positive" (Anthropho 版) を用います。コピープリントを配布します。

【参考書】

- ・Mary Pickering, "Auguste Comte - An intellectual biography" (3 volumes, Cambridge University Press)
- ・Robert C. Schreff, "Comte after Positivism" (Cambridge University Press)

【成績評価の方法と基準】

自分の担当箇所訳の準備とその発表を50%、より一般的に授業での議論への参加を30%、授業後の自分の訳稿の修正書き直しを20%の割合で勘案して、成績評価を行います。到達目標との関係では、基本的な訳読を40%、外的なコンテキストに置いての理解で30%、自分の問題関心との突き合わせでの理解で30%の割合で勘案して、成績評価を行います。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけコンスタントな速度を保って、訳読を進めて行きたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

-フランス哲学

〈研究テーマ〉

-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料に行っています。

〈主要研究業績〉

-『ベルクソン読本』（編著、2006 年、法政大学出版局）

-*Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson* (編著、2012 年、OLMS)

-*Annales bergsoniennes* (編著、2013 年、PUF)

-*Tout ouvert : l'évolution créatrice en tous sens* (編著、2015 年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016 年、書肆心水）

-*Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle* (編著、2016 年、書肆心水)

-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017 年、書肆心水）

-*Mécanique et mystique* (編著、2018 年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018 年、書肆心水）

【Outline and objectives】

In terms of both benefits and threats, the science exercises great influence on the way human beings are. We will do a thorough consideration of the relationship between science and humans, through thorough translation of Auguste Comte's "Cours de philosophie positive".

PHL700B1

哲学特殊研究2

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

恩恵と脅威の両面で、今日、人間のあり方にますます大きな影響力を行使している科学ですが、オーギュスト・コント『実証哲学講義』の訳解を通じて、科学と人間の関係について、徹底した考察を行います。

【到達目標】

- ・哲学の古典を原文で読む力、そしてそれを正確でわかりやすい日本語に移しかえる力を養います。
- ・哲学の古典をテーマと時代のふたつの文脈に沿って理解する力を養います。
- ・哲学の古典を自分の研究テーマとの兼ね合いで理解する力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回段落ごとに担当者を定め、その担当者が用意して来る訳解を手がかりに、訳について、内容について、段落ごとに徹底して議論をしつつ、読み進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の説明を行います。
第2回	『実証哲学講義』5 3 課 (1)	神学的段階の多神教について理解を深めます。
第3回	『実証哲学講義』5 3 課 (2)	神学的段階の多神教について理解を深めます。
第4回	『実証哲学講義』5 3 課 (3)	神学的段階の多神教について理解を深めます。
第5回	『実証哲学講義』5 3 課 (4)	神学的段階の多神教について理解を深めます。
第6回	『実証哲学講義』5 4 課 (1)	神学的段階の一神教について理解を深めます。
第7回	『実証哲学講義』5 4 課 (2)	神学的段階の一神教について理解を深めます。
第8回	『実証哲学講義』5 4 課 (3)	神学的段階の一神教について理解を深めます。
第9回	『実証哲学講義』5 4 課 (4)	神学的段階の一神教について理解を深めます。
第10回	『実証哲学講義』5 5 課 (1)	形而上学的段階について理解を深めます。
第11回	『実証哲学講義』5 5 課 (2)	形而上学的段階について理解を深めます。
第12回	『実証哲学講義』5 5 課 (3)	形而上学的段階について理解を深めます。
第13回	『実証哲学講義』5 5 課 (4)	形而上学的段階について理解を深めます。
第14回	総括	セメスター全体の議論の総括を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・自分の担当段落について前もって日本語訳をつくり、それを訳稿プリントとして用意します。
- ・そこで問題になる諸点を前もって選び出して、自分なりの解釈と意見を用意します。
- ・授業後には、授業で指摘された訳への問題提起を踏まえて、訳稿の自分なりの完成版を用意します。

【テキスト（教科書）】

Auguste Comte, "Cours de philosophie positive" (Anthropho 版) を用います。コピープリントを配布します。

【参考書】

- ・Mary Pickering, "Auguste Comte - An intellectual biography" (3 volumes, Cambridge University Press)
- ・Robert C. Schreff, "Comte after Positivism" (Cambridge University Press)

【成績評価の方法と基準】

自分の担当箇所訳の準備とその発表を50%、より一般的に授業での議論への参加を30%、授業後の自分の訳稿の修正書き直しを20%の割合で勘案して、成績評価を行います。到達目標との関係では、基本的な訳読を40%、外的なコンテキストに置いての理解で30%、自分の問題関心との突き合わせでの理解で30%の割合で勘案して、成績評価を行います。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけコンスタントな速度を保って、訳読を進めて行きたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

-フランス哲学

〈研究テーマ〉

-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス19世紀思想史を材料に行っています。

〈主要研究業績〉

-『ベルクソン読本』（編著、2006年、法政大学出版局）

-*Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson* (編著、2012年、OLMS)

-*Annales bergsoniennes* (編著、2013年、PUF)

-*Tout ouvert : l'évolution créatrice en tous sens* (編著、2015年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016年、書肆心水）

-*Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle* (編著、2016年、書肆心水)

-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017年、書肆心水）

-*Mécanique et mystique* (編著、2018年、OLMS)

-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018年、書肆心水）

【Outline and objectives】

In terms of both benefits and threats, the science exercises great influence on the way human beings are. We will do a thorough consideration of the relationship between science and humans, through thorough translation of Auguste Comte's "Cours de philosophie positive".

PHL700B1

哲学特殊研究 1

山口 誠一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヘーゲルにおける行為論について、ヘーゲル哲学の根本的構えの解釈という問題と関連付けることによって、その現代的意義を十全に示すこと

【到達目標】

ヘーゲル哲学の根本的構えの解釈という課題には、ヘーゲル哲学の思想的背景への問いが含まれるので、この問いとヘーゲル哲学のアクチュアリティの発掘とが本研究においては連動する。このことによって、ヘーゲル哲学と現代を思想的文脈において深い次元で結びつけ、ヘーゲル研究が半ば等閑に付されていた時期を経た現代を反省する端緒を開こうとするものである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

- a. ヘーゲルと現代哲学の対話の議論を整理し検討する。ミュンスター学派、英米現代哲学、マルクスガブリエルなど。また国内で近年多く出されている諸研究を把握する。英米現代哲学のテキストにも目を通す。
- b. ヘーゲルにおける運命の問題に関する議論と背景の整理。主にヘルダーリンなどの影響を考察。ベケラーやヤメなどをはじめとする研究をふまえる。ギリシア悲劇の研究にも目を通す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業オリエンテーション	受講者の研究計画書の吟味
第2回	ヘーゲルと古典ブラグマティズムの方法	パース説の検討
第3回	ヘーゲルと古典ブラグマティズムの真理論	ジェイムズ説の検討
第4回	ヘーゲルと古典ブラグマティズム	デュエイ説の検討
第5回	古典ブラグマティズムの解明	上記各説の関連
第6回	古典ブラグマティズムにおける行為の問題	上記各説における行為の定義
第7回	ミュンスター学派の出発点	ジーブ説の検討
第8回	ミュンスター学派の展開	クヴァンテ説の検討
第9回	ヘーゲルにおける運命概念のルーツ	ヘルダーリンの運命概念検討
第10回	ヘーゲルにおける運命概念の哲学的源泉	シェリングの悲劇論の検討
第11回	ヘーゲルの運命概念に関する研究	ベケラー説の検討
第12回	ヘーゲルにおける運命概念に関する解釈	ヤメ説の検討
第13回	初期ヘーゲルの行為	初期ヘーゲル断片群の概観
第14回	前期のまとめ	上記諸説の関連付け

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究計画と授業計画に従って、ヘーゲルの原典テキストを自分なりに訳して理解しておくこと

【テキスト（教科書）】

教科書を指定しない。

【参考書】

参考書を指定しない。

【成績評価の方法と基準】

授業各回の(50%)と討論(50%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Hegel's theory of action, with texts drawn from German and English.

PHL700B1

哲学特殊研究2

山口 誠一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ヘーゲルにおける行為論について、ヘーゲル哲学の根本的構えの解釈という問題と関連付けることによって、その現代的意義を十全に示すことを目指す。

【到達目標】

ヘーゲル哲学と現代を思想的文脈において深い次元で結びつけ、ヘーゲル研究が半ば等閑に付されていた時期を経た現代を反省する端緒を開こうとするものである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

a. ヘーゲル哲学の発展の整理。ヘーゲルのテキストを精査し、精神現象学に至るまでの展開、精神現象学と論理学との関係などの問題を考察。ノールやハリス、イエシュケなどをはじめとする諸研究や、最新の議論の状況を踏まえる。実体-主体説への理解を深め、行為および運命の問題と結びつける論証を構築する。

b. ヤコービやラインホルト、ゲーテ、ハーマンなどの思想を含めたヘーゲルの問題意識の背景を複眼的に押さえる。そのことにより、従来主流であった「ドイツ観念論路線」での解釈では引き出せなかったヘーゲル哲学の論点を引き出す。特にヤコービの影響については重要であるにもかかわらず国内における注目の不十分さが目立つので、重点を置く。ヤコービの主要テキスト、ヘーゲルによる言及、またドイツで行われている諸研究を押さえる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1回	後期授業オリエンテーション	受講者の研究計画書再吟味
2回	初期ヘーゲルの実践概念	道徳性・愛・宗教
3回	初期ヘーゲルの愛概念	道徳性・愛・宗教（続き）
4回	初期ヘーゲルの存在概念	信じることと存在すること
5回	初期ヘーゲルとヘルダーリン	ヘンリヒ説の検討
6回	初期ヘーゲルの合一説	「愛」の初稿検討 合一と愛について「愛」(Text 49a)の改稿と「ユダヤ人の歴史」「愛と宗教」を検討
7回	初期ヘーゲルの愛概念	「愛」の改稿「愛と宗教」を検討
8回	ユダヤ人の歴史と初期ヘーゲル	「愛と宗教」検討
9回	『キリスト教の精神』腹案1	テキスト 52「イエスがユダヤ民族のもとに登場してきたとき[...]」検討
10回	『キリスト教の精神』腹案2	テキスト 53「B 道徳…」検討
11回	イエスの道徳	テキスト 54「イエスが現れた[...]」検討
12回	イエスの愛	テキスト 55「徳には実定性が[...]」だけでなく」検討
13回	イエスの宗教：愛と反省の合一	テキスト 56「最も興味深いことは、……」検討
14回	後期授業のまとめ	初期ヘーゲル草稿群の展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究計画と授業計画に従って、初期ヘーゲルのテキストを自分なりに訳して理解しておくこと

【テキスト（教科書）】

アカデミー版ヘーゲル全集第2巻

【参考書】

国内外の関連研究書

【成績評価の方法と基準】

授業各回の(50%)と討論(50%)

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学史的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版社、*Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie.* Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版社、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Hegel's philosophy, with texts drawn from German.

PHL700B1

哲学特殊研究 1

酒井 健

<主要研究業績> 『バタイユから生の深淵へ』青土社

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Jacques Derrida, especially his several important concept such as *écriture*, *différance*. That is for the students of doctor course.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジャック・デリダの哲学を対象にした博士論文の制作を念頭において既存のデリダ論を熟読玩味する。

【到達目標】

デリダの基本となる概念をしっかりと把握する。

とくに

- 1) 脱構築
- 2) 差延
- 3) エクリチュール

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

G.C. スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を熟読玩味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業の概要説明	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』の紹介
第2回	デリダ論 1	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 10 頁まで読む。
第3回	デリダ論 2	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 20 頁まで読む。
第4回	デリダ論 3	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 30 頁まで読む。
第5回	デリダ論 4	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 40 頁まで読む。
第6回	デリダ論 5	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 50 頁まで読む。
第7回	デリダ論 6	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 60 頁まで読む。
第8回	デリダ論 7	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 70 頁まで読む。
第9回	デリダ論 8	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 80 頁まで読む。
第10回	デリダ論 9	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 90 頁まで読む。
第11回	デリダ論 10	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 100 頁まで読む。
第12回	デリダ論 11	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 110 頁まで読む。
第13回	デリダ論 12	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 120 頁まで読む。
第14回	まとめ	今学期の内容に即した発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回 10 頁読むので、事前に少なくともその分だけ内容を把握し、発表できるようにしておくこと。

【テキスト（教科書）】

スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』平凡社ライブラリー

【参考書】

『現代思想 2015 年二月臨時増刊号 総特集デリダ』

【成績評価の方法と基準】

脱構築、差延、エクリチュールなどのデリダの基本概念をどれだけしっかり理解しているかを基準にして成績をつける。平常点 50 %、期末のまとめの発表 50 % の割合を一つの目安とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランス現代思想

<研究テーマ> バタイユ研究

PHL700B1

哲学特殊研究2

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文を制作するための院生に開かれた授業です。デリダ論を読んでいきます。

【到達目標】

デリダの思想をよりいっそう深く理解する。研究者の優れた論文を手掛かりにして、新たなデリダ読解の可能性を探る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

春学期に続いて G.C. スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を熟読玩味する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業の概要説明	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』の紹介
第2回	デリダ論 1	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 120 頁から 130 頁まで読む。
第3回	デリダ論 2	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 135 頁まで読む。
第4回	デリダ論 3	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 140 頁まで読む。
第5回	デリダ論 4	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 145 頁まで読む。
第6回	デリダ論 5	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 150 頁まで読む。
第7回	デリダ論 6	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 155 頁まで読む。
第8回	デリダ論 7	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 160 頁まで読む。
第9回	デリダ論 8	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 165 頁まで読む。
第10回	デリダ論 9	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 170 頁まで読む。
第11回	デリダ論 10	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 175 頁まで読む。
第12回	デリダ論 11	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 180 頁まで読む。
第13回	デリダ論 12	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』を 190 頁まで読む。
第14回	まとめと復習	スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』の総括的な発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回一定の分量を読むので、事前に少なくともその分だけ内容を把握し、発表できるようにしておくこと。

【テキスト（教科書）】

スピヴァク『デリダ論 - 『グラマトロジー』について』平凡社ライブラリー

【参考書】

『現代思想 2015 年二月臨時増刊号 総特集デリダ』

【成績評価の方法と基準】

脱構築、差延、エクリチュールなどのデリダの基本概念をどれだけしっかり理解しているかを基準にして成績をつける。平常点 50 %、期末のまとめの発表 50 % の割合を一つの目安とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> フランス現代思想

<研究テーマ> バタイユ研究

<主要研究業績> 『バタイユから生の深淵へ』青土社

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Jacques Derrida, especially his several important concept such as écriture, différance. That is for the students of doctor course.

PHL500B1

言語分析哲学特殊講義 1

中釜 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の心の哲学の特徴は、心理学や脳科学、あるいはコンピュータサイエンス等の成果を積極的に活用しながら、心の正体を精緻に分析していくところにある。この授業では、近年の代表的な論文の読解と検討を通して、心に関する現代的アプローチを習得する。

【到達目標】

現代の心の哲学の基本的な概念、議論、分析方法に習熟する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

学生による発表と討論、教員による解説による。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	講師による解説・説明
第2回	Kim, <i>Mental Causation(1)</i>	学生による発表とディスカッション
第3回	Kim, <i>Mental Causation(2)</i>	学生による発表とディスカッション
第4回	Kim, <i>Mental Causation(3)</i>	学生による発表とディスカッション
第5回	Kim, <i>Mental Causation(4)</i>	学生による発表とディスカッション
第6回	Lowe, <i>Dualism(1)</i>	学生による発表とディスカッション
第7回	Lowe, <i>Dualism(2)</i>	学生による発表とディスカッション
第8回	Lowe, <i>Dualism(3)</i>	学生による発表とディスカッション
第9回	Lowe, <i>Dualism(4)</i>	学生による発表とディスカッション
第10回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(1)</i>	学生による発表とディスカッション
第11回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(2)</i>	学生による発表とディスカッション
第12回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(3)</i>	学生による発表とディスカッション
第13回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(4)</i>	学生による発表とディスカッション
第14回	まとめ	講師による解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員テキストを精読し、発表者はレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, eds. by B.P. McLaughlin et al.

Oxford Univ. Press, 2009

コピーを配布する。

【参考書】

John Searle, *MInd*,

Jaegwon Kim, *Supervenience and Mind*

など。

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業目標の達成度を、レジュメの作成（40%）、議論への参加（40%）最終レポートの提出（20%）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

従来の方法で特別な問題は生じていない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語哲学、心の哲学、形而上学、イギリス経験論

<研究テーマ>パースペクティヴィズムの形而上学

<主要研究業績>自然観の闘争（岩波書店） 哲学の歴史 8（中央公論新社）など

【Outline and objectives】

A characteristic feature of contemporary Philosophy of Mind is to approach to Human mind by positively using recent achievements of Psychology, Brain Sciences, and Computer Sciences. In this course, we learn modern ways of thinking about Mind by reading some papers of recent philosophers of Mind.

PHL500B1

言語分析哲学特殊講義 2

中釜 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の心の哲学の特徴は、心理学や脳科学、あるいはコンピュータサイエンス等の成果を積極的に活用しながら、心の正体を精緻に分析していくところにある。この授業では、近年の代表的な論文の読解と検討を通して、心に関する現代的アプローチを習得する。

【到達目標】

現代の心の哲学の基本的な概念、議論、分析方法に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

学生による発表と討論、教員による解説による。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	講師による解説
第2回	Kim, <i>Mental Causation(1)</i>	学生の発表と議論
第3回	Kim, <i>Mental Causation(2)</i>	学生の発表と議論
第4回	Kim, <i>Mental Causation(3)</i>	学生の発表と議論
第5回	Kim, <i>Mental Causation(4)</i>	学生の発表と議論
第6回	Lowe, <i>Dualism(1)</i>	学生の発表と議論
第7回	Lowe, <i>Dualism(2)</i>	学生の発表と議論
第8回	Lowe, <i>Dualism(3)</i>	学生の発表と議論
第9回	Lowe, <i>Dualism(4)</i>	学生の発表と議論
第10回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(1)</i>	学生の発表と議論
第11回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(2)</i>	学生の発表と議論
第12回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(3)</i>	学生の発表と議論
第13回	Baker, <i>Non-reductive Materialism(4)</i>	学生の発表と議論
第14回	まとめ	講師によるまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員がテキストを精読し、発表者はレジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】

The Oxford Handbook of Philosophy of Mind, eds. by B.P. McLaughlin et al.

Oxford Univ. Press, 2009

コピーを配布する。

【参考書】

John Searle, *MInd*,

Jaegwon Kim, *Supervenience and Mind*

など。

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業目標の達成度を、レジュメの作成（40%） 議論への参加（40%） 期末のレポート提出（30%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

従来の方法で特別な問題は生じていない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語哲学、形而上学、イギリス経験論

<研究テーマ>パースペクティヴィズムの形而上学

<主要研究業績>自然観の闘争（岩波書店） 哲学の歴史 8（中央公論新社）など

【Outline and objectives】

A characteristic feature of contemporary Philosophy of Mind is to approach to Human mind by positively using recent achievements of Psychology, Brain Sciences, and Computer Sciences. In this course, we learn modern ways of thinking about Mind by reading some papers of recent philosophers of Mind.

PHL500B1

古代哲学史特殊講義 1

奥田 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度春学期は第9巻第1章 1046a19 から第9巻第10章までを講読する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考法がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式です。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	春学期イントロダクション 第9巻第1章の精読・検討・理解	デュナミス（能力、可能性）の諸相
第2回	第9巻第2章の精読・検討・理解	非理性的な能力と理性的な能力
第3回	第9巻第3章の精読・検討・理解	デュナミス否定論への反論、可能態
第4回	第9巻第4章の精読・検討・理解	可能、不可能
第5回	第9巻第5章の精読・検討・理解	デュナミスの獲得と現実化
第6回	第9巻第6章の精読・検討・理解	エネルギーとデュナミス、エンテレア
第7回	第9巻第7章の精読・検討・理解	他のものの可能態、質料
第8回	承前	承前
第9回	第9巻第8章の精読・検討・理解	現実態は可能態よりも先なるものである
第10回	承前	承前
第11回	第9巻第9章の精読・検討・理解	善の現実態、悪の現実態
第12回	第9巻第10章の精読・検討・理解	真としての「ある」、複合体と非複合体の真、偽
第13回	承前	承前
第14回	まとめ	当学期の学習内容の確認と整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する（訳読を準備し、疑問点、課題点を明確にする）。『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. Aristotle *Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary* by W. Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924. (ギリシア語原典訳読用)
2. *Aristoteis Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit*, W. Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957. (ギリシア語原典訳読用)
3. *The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition*, Oxford at the Clarendon Press, 1928. (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出陣訳『形而上学』（岩波文庫上・下 第9巻以下は下巻に収録）。その他は、適宜、紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポート内容、によって評価する（各25%ずつ）。いずれの点においても、博士課程在籍者にふさわしい学識に裏付けられていることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

古代哲学史特殊講義2（秋学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
 ＜研究テーマ＞ 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
 ＜主要研究業績＞ 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快楽論の意味—」（『法政大学文学部紀要』第48号 2003年）「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（I））研究成果報告書 所収 2006年）「自然と人間—プラトンの自然思想から」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年 所収）「哲人王の行方」補説」（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we start to read from Book 9, ch. 1, 1046a19 to the end of the book. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL500B1

古代哲学史特殊講義2

奥田 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アリストテレス『形而上学』を講読する。西洋哲学史上きわめて重要な著作であり、難解な著作である。注意深く精読をすすめ、アリストテレスの思考法、重要概念の内容を正確に理解することが目標である。さらに、この著作（論文集）が伝えるアリストテレスの思想を把握したうえで、可能であれば、その有効性にまで考察をおよぼすことが最終的な目的である。今年度秋学期は第10巻第1章から第10巻第10章までを読解する。

【到達目標】

上にのべたように、内容の正確な理解を得ることが目標である。アリストテレスには世界や事象を認識するにあたり彼独特の思考法がある。この思考法はさまざまなテーマについて多様な仕方でも繰り返される。正確な理解を得るためには、その思考法のパターンとその基礎にある概念やその使用法を理解し習熟することが第一の目標となる。アリストテレスの『形而上学』は西洋哲学史上、広大な影響力を有しているだけに、本書について正確な理解を得ることは、後代の哲学の理解に際しても重要である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古典ギリシア語原典を訳読できる履修者が出席する場合、その者がまず原典を訳読し、次にそれ以外の履修者が英訳テキストを訳読する、という形式です。精読を旨とする。訳読の他に、授業では毎回、内容要約と内容の検討をおこない理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	秋学期イントロダクション 第10巻第1章の精読・検討・理解	秋学期イントロダクション 〈一〉について
第2回	承前	承前
第3回	第10巻第2章の精読・検討・理解	〈一〉は普遍的述語である
第4回	第10巻第3章の精読・検討・理解	〈一〉と〈多〉
第5回	承前	承前
第6回	第10巻第4章の精読・検討・理解	反対性
第7回	第10巻第5章の精読・検討・理解	大、小、等
第8回	承前	承前
第9回	第10巻第6章の精読・検討・理解	一と多の対立、少と多の対立
第10回	第10巻第7章の精読・検討・理解	反対のものにおける中間のもの
第11回	第10巻第8章の精読・検討・理解	種における差異
第12回	第10巻第9章の精読・検討・理解	種における差異をもたらす反対性
第13回	第10巻第10章の精読・検討・理解	消滅的なもの、永遠的なもの、イデア論批判
第14回	まとめ	当学期の学習内容の確認、整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業計画にもとづき、次回の授業が対象とする範囲を予習する（訳読を準備し、疑問点、課題点を明確にする）。『形而上学』全体の構成をつねに確認する。

【テキスト（教科書）】

1. *Aristotle's Metaphysics, A Revised Text with Introduction and Commentary by W. Ross, volume II, Oxford at the Clarendon Press, 1924.* (ギリシア語原典訳読用)
2. *Aristoteis Metaphysica, Recognovit Brevique Adnotatione Critica Instravit, W. Jaeger, Oxford Classical Texts, 1957.* (ギリシア語原典訳読用)
3. *The Works of Aristotle translated into English under the Editorship of Sir David Ross, volume viii Metaphysica, second Edition, Oxford at the Clarendon Press, 1928.* (英訳読用 出席者にはコピーを配布する。)

【参考書】

出陣訳『形而上学』（岩波文庫上・下 第9巻以下は下巻に収録）。その他は、適宜、紹介する

【成績評価の方法と基準】

「到達目標」に記した内容理解度、毎回の英語訳の完成度、討論への貢献度、まとめのレポート内容、によって評価する（各25%ずつ）。いずれの点においても、博士課程在籍者にふさわしい学識に裏付けられていることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】

可能なかぎり最新研究の情報をも履修者と共有したい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

古代哲学史特殊講義1（春学期）と併せて履修することが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ ソクラテス、プラトンを中心とする古代ギリシア哲学
 ＜研究テーマ＞ 現在の持続的テーマはプラトンの政治哲学である。
 ＜主要研究業績＞ 「正しい人の快楽—プラトン『国家』第九巻における快樂論の意味—」（『法政大学文学部紀』第48号 2003年）「プラトンの人間観—『国家』における国家と人間の類型論を中心に—」（『プラトニズムにおける人間観の変遷』平成14～17年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（I））研究成果報告書 所収 2006年）「自然と人間—プラトンの自然思想から—」（共編著『自然と人間』梓出版社 2006年 所収）「哲人王の行方」（日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第59号 岩波書店 2011年 所収）「哲人王の行方」補説」（『西洋古典研究会論集』第21号 2012年）

【Outline and objectives】

In this class we read Aristotle's "Metaphysics". In the term we start to read from Book 9, ch. 1, 1046a19 to the end of the book. The objects of the class are careful reading, understanding of the way the author thinks and estimation of his thoughts.

PHL500B1

論理学特殊講義 1

安東 祐希

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ゲンツェンの基本定理の証明を学ぶ。

【到達目標】

関連分野への影響も踏まえながら、基本定理の証明を細部にわたり理解し、自ら証明を書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担任して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	証明の方針	論文 (III.3.1 前文) 部分
第2回	自由変数の付け替え	論文 (III.3.10) 部分
第3回	左上式が公理	論文 (III.3.111-112) 部分
第4回	左上式が右弱化	論文 (III.3.113.1-2) 部分
第5回	上式が左右連言等	論文 (III.3.113.31-32) 部分
第6回	上式が左右全称等	論文 (III.3.113.33-36) 部分
第7回	右階数が1より大	論文 (III.3.121 前文) 部分
第8回	I が左構造規則	論文 (III.3.121.21) 部分
第9回	I の上式が一つ	論文 (III.3.121.22) 部分
第10回	I の上式が二つ	論文 (III.3.121.23) 部分
第11回	右階数が1	論文 (III.3.122) 部分
第12回	NJ における切断	論文 (III.3.21) 部分
第13回	階数が2	論文 (III.3.231) 部分
第14回	階数が2より大	論文 (III.3.232) 部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト（教科書）】

G. Gentzen, *Untersuchungen über das logische Schließen*, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳、*Investigations into logical deduction, in The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

- ・ Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
- ・ A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (50%) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (50%) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

- ・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

- ・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

- ・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講義録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with the proof of Gentzen's Hauptsatz.

PHL500B1

論理学特殊講義 2

安東 祐希

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ゲンツェンの基本定理の応用例を学ぶ。合わせて、複数の体系に関する同等性を学ぶ。

【到達目標】

関連分野への影響も踏まえながら、直観主義命題論理の決定問題などに対して基本定理を応用できて、基本定理で使用される体系と他の体系との同等性を証明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

原論文の英訳に従い、省略されている詳細部分も含め、証明の内容を履修者が分担任して発表し、それに対して教員および参加者により質疑応答を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	命題論理の無矛盾性	論文 (IV.1.1) 部分
第2回	直観主義の決定問題	論文 (IV.1.2) 部分
第3回	排中律	論文 (IV.1.3) 部分
第4回	強い形の基本定理	論文 (IV.2.1) 部分
第5回	強い定理の証明	論文 (IV.2.2) 部分
第6回	定理の他の強め方	論文 (IV.2.3) 部分
第7回	算術の体系	論文 (IV.3.1) 部分
第8回	帰納法無しの算術	論文 (IV.3.2) 部分
第9回	体系の拡張	論文 (IV.3.3) 部分
第10回	同等性と既存体系	論文 (V.1-2) 部分
第11回	LHJ から NJ	論文 (V.3) 部分
第12回	NJ から LJ	論文 (V.4) 部分
第13回	LJ から LHK	論文 (V.5) 部分
第14回	LHK, NK と LK	論文 (V.6) 部分

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文に書かれた証明の各段階において、具体的な例を考え、証明図を実際に紙に書きながら十分に考察する。

【テキスト（教科書）】

G. Gentzen, *Untersuchungen über das logische Schließen*, *Mathematische Zeitschrift*, 39 (1935) の M. E. Szabo による英訳、*Investigations into logical deduction, in The collected papers of Gerhard Gentzen*, North-Holland Publishing Company, 1969

【参考書】

- ・ Jon Barwise (ed.), *Handbook of Mathematical Logic*, Elsevier, 1977
- ・ A. S. Troelstra and H. Schwichtenberg, *Basic Proof Theory Second Edition*, Cambridge University Press, 2000

【成績評価の方法と基準】

到達目標に関する問題の提示・解題能力を担当箇所の発表内容 (50%) において、さらに、目標の問題全般にわたる理解度を他者担当時の質疑応答 (50%) において評価する。

【学生の意見等からの気づき】

具体例への適用に関してより多くの時間が取れるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

数理論理学（証明論）

〈研究テーマ〉

証明図の正規化手続きに関する諸性質

〈主要研究業績〉

- ・ Church-Rosser property of a simple reduction for full first-order classical natural deduction, *Annals of Pure and Applied Logic* 119 (2003) pp225-237, Elsevier.

- ・ A representation of essential reductions in sequent calculus (abstract), *The Bulletin of Symbolic Logic* 11 (2005) pp265-265, The Association for Symbolic Logic.

- ・ Gentzen's unpublished normalization theorem and its successors, 数理解析研究所講義録 2083『証明論と証明活動』(2018) pp146-149, 京都大学数理解析研究所.

【Outline and objectives】

This course deals with some applications of Gentzen's Hauptsatz and with the equivalence of related logical systems.

PHL500B1

近代倫理学史特殊講義 1

菅沢 龍文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『人間学』を読む

——「人間とは何か」という問題を考える——

カントの『実用的見地における人間学』では、経験的な側面での人間存在について語られるのであり、そこからは好奇心に溢れるカントの人間知についても窺い知られる。これによりカントの批判哲学がさらに経験的な知の側から補われ、ようやく十全な人間が知られる。春学期は、第一部・第一編「認識能力について」のなかでも「外的感官」、「内的感官」、「構想力（想像力）」に関する箇所を読み進めて、多様な観点で検討する。

【到達目標】

(1) カントの古典的テキストの読解に参加することにより、テキストの読み方や、カントの思想への理解を深めて、自らの専門研究に役立て、研究の幅を広げる。

(2) カントの人間分析を追究しつつ、人間理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

(1) 『法論』の訳解を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、内容の理解を深める。

(2) 毎回、テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。

(3) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。

(4) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	(1) ゼミの方式、テキスト等について (2) カントの『人間学』の背景・全体像 (3) これから読む箇所の位置づけ
第2回	味覚と嗅覚——煙草について——	カント『人間学』原典テキスト 51-52 頁
第3回	内的感官の現象における夢想狂および視霊狂	同上 52-53 頁
第4回	外的感覚の強度が増減する原因：1. 対照	同上 53 - 54 頁
第5回	同上：2. 新鮮	同上 54-55 頁
第6回	同上：3. 交替	同上 55-56 頁
第7回	同上：4. 充足に至るまでの漸増	同上 56-57 頁
第8回	感官能力の抑止、衰弱、全面喪失：酩酊	同上 57-58 頁
第9回	睡眠、感官諸器官の麻痺	同上 58-60 頁
第10回	失神と死	同上 60-61 頁
第11回	創造的構想力（想像力）と回想的構想力	同上 61-62 頁
第12回	構想力（想像力）と感覚	同上 62-63 頁
第13回	Sinn の多義性について	同上 63-64 頁
第14回	酔いの諸相	同上 64-65 頁

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, Anthropologie in pragmatischer Hinsicht, Herausgegeben von Reinhard Brandt, Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第15巻、理想社版・第十四巻など。
(英訳書)ケンブリッジ版 *I. Kant, "Anthropology, History, and Education"* (The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant) など。

【参考書】

<カントの著作>

『美と崇高の感情にかんする観察』1764年

『脳病試論』1764年

『世界市民的見地における普遍史の理念』1784年

『人種の概念の規定』1785年

<関連性の高い研究書（和書）>

ミシェル・フーコー『カントの人間学』王寺賢太訳、新潮社

中島義道『カントの人間学』講談社現代新書

太田直道『カントの人間哲学』晃洋書房

渋谷久『カント哲学の人間学的研究』西田書店

高坂正顕『カント』理想社

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度

(2) レポート課題で確認される到達目標達成度

(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第76号、2018年

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第70号、2015年

(欧文) *Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in: Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.*

(翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017年

【Outline and objectives】

Reading Kant's "Anthropology": What's a human being?

Kant's "Anthropology from a pragmatic point of view" treats the human being as empirically observed and tells us Kant's strong curiosity to know a human being. This compensates Kant's critical philosophy with empirical observations and at last the perfect knowledge about the human being will be achieved. In our Spring semester we examine and discuss through Kant's original German text mainly the 'five senses', 'inner sense' and 'the power of imagination'.

PHL500B1

近代倫理学史特殊講義 2

菅沢 龍文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

カント『人間学』を読む

——「人間とは何か」という問題を考える——

カントの『実用的見地における人間学』では、経験的な側面での人間存在について語られるのであり、そこからは好奇心に溢れるカントの人間知についても窺い知られる。これによりカントの批判哲学がさらに経験的な知の側から補われ、ようやく十全な人間が知られる。春学期は、第一部・第一編「認識能力について」のなかでも「外的感覚」、「内的感覚」、「構想力（想像力）」に関する箇所を読み進めて、多様な観点で検討する。

【到達目標】

(1) カントの古典的テキストの読解に参加することにより、テキストの読み方や、カントの思想への理解を深めて、自らの専門研究に役立て、研究の幅を広げる。

(2) カントの人間分析を追究しつつ、人間理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

(1) カントの『人間学』ドイツ語原典の訳解を進め、適宜参考資料も用いて、質疑応答により、内容の理解を深める。

(2) 毎回、テキストに秘められた思想を読み取って話し合い、その思想について考えを深める。

(3) ドイツ語の初学者も、プロトコル（前回のまとめ）やレポート発表などで積極的に参加できるようにする。

(4) 初めてカントのテキストに挑戦する人にも内容がよく分かるように解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	酩酊	カント『人間学』原典テキスト 65-66 頁
第 2 回	飲酒	同上 66 - 67 頁
第 3 回	構想力（想像力）による 独創	同上 67 - 68 頁
第 4 回	構想力（想像力）による 期待	同上 68 - 69 頁
第 5 回	構想力（想像力）と思考	同上 69 - 70 頁
第 6 回	工芸家の創作能力 (<i>Dichtungsvermögen</i>)	同上 70-71 頁
第 7 回	睡眠と夢	同上 71 - 72 頁
第 8 回	連想の感性的創作能力	同上 72 - 73 頁
第 9 回	親和の感性的創作能力	同上 73 - 74 頁
第 10 回	悟性と感性	同上 74 - 75 頁
第 11 回	構想力（想像力）の強さ による錯覚	同上 75 - 76 頁
第 12 回	構想力（想像力）による 共感	同上 76 - 77 頁
第 13 回	空想、構想力（想像力） と情念	同上 77 - 78 頁
第 14 回	創作する構想力（想像力）	同上 78 - 79 頁

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の内容を復習すること。次回テキストの内容の全体を把握しておくこと。そして疑問点や問題点について調べておくこと。ドイツ語原典の訳読担当者は訳読の準備をし、プロトコル担当者は前回のまとめのプリントを用意すること。

【テキスト（教科書）】

I. Kant, Anthropologie in pragmatischer Hinsicht, Herausgegeben von Reinhard Brandt, Felix Meiner Verlag.

(邦訳書)『カント全集』岩波書店版・第 15 巻、理想社版・第十四巻など。

(英訳書)ケンブリッジ版 *I. Kant, "Anthropology, History, and Education"* (*The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant*) など。

【参考書】

<関連性の高いカントの著作>

『美と崇高の感情にかんする観察』1764 年

『脳病試論』1764 年

『世界市民的見地における普遍史の理念』1784 年

『人種の概念の規定』1785 年

<関連性の高い参考書（和書）>

ミシェル・フーコー『カントの人間学』王寺賢太訳、新潮社

中島義道『カントの人間学』講談社現代新書

太田直道『カントの人間哲学』見洋書房

渋谷久『カント哲学の人間学的研究』西田書店

高坂正顕『カント』理想社

その他、ゼミで適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) プロトコル（前回のまとめ）発表、テキスト読解や質疑応答で観察される到達目標達成度

(2) レポート課題で確認される到達目標達成度

(1) を 70 %、(2) を 30 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

言葉を明瞭に発音するように心がける。

定刻どおりに終わるように心がける。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

西洋近代の哲学・倫理学

<研究テーマ>

カント哲学・倫理学

<主要研究業績>

「世界平和と基本的人権、その指標としての「訪問権」——カントによる世界市民権概念について——」『法政大学文学部紀要』第 76 号、2018 年

「ヨブの幸福とカント——最高善概念を手がかりに——」『法政大学文学部紀要』第 70 号、2015 年

(欧文) *Kant und das Problem des Lügens. Über Nebeneinanderbestehen der moralischen Pflichten, in: Kant und die Philosophie in weltbürgerlicher Absicht, Akten des XI. Internationalen Kant-Kongresses Bd. 3, Berlin, De Gruyter, 2013.*

(翻訳：共訳) マンフレッド・キューン『カント伝』（春風社）、2017 年

【Outline and objectives】

Reading Kant's "Anthropology": What's a human being?

Kant's "Anthropology from a pragmatic point of view" treats a human being as empirically observed and tells us Kant's strong curiosity to know a human being. This compensates Kant's critical philosophy with empirical observations and at last the perfect knowledge about the human being will be achieved. In our Autumn semester we examine and discuss through Kant's original German text mainly 'the power of imagination'.

PHL500B1

実践哲学特殊講義 1

山口 誠一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ニーチェの言語論関連文書を主としてドイツ語で精読する。邦語訳での参加も認める。

【到達目標】

ニーチェの言語論とその影響を受けた現代思想を概観できる。
そのことによって、これまでのニーチェ研究の限界を解明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

原書テキスト講読と邦語訳テキスト講読を組み合わせながら、関連文献講読や講義も実施する。

社会人学生には、邦語テキストによる参加も許可する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ニーチェの言語論についての案内	ニーチェの隠喩論が、ニーチェの中心であることを解説する。
第2回	N・ホルツのニーチェ言語論解釈	ニーチェの隠喩論が、ドイツ近世哲学から生まれたことを検討する。
第3回	G・ゲルバーの転移論	科学的なレトリック論をニーチェが受容していたことを解明する。
第4回	ニーチェ「道徳外の意味における真理と虚偽について」(1) 一隠喩	ニーチェの言語論が隠喩の生成を中心としていることを検討する。
第5回	ニーチェ「道徳外の意味における真理と虚偽について」(2) 一形而上学批判	隠喩中心の立場から概念中心の形而上学を批判する。
第6回	ニーチェ「レトリック講義」(1) 一修辞と認識	ニーチェ哲学の中心が修辞にあることを検討する。
第7回	ニーチェ「レトリック講義」(2) 一隠喩	ニーチェの修辞論の中心が隠喩にあることを検討する。
第8回	ニーチェ「レトリック講義」(3) 一律動論	ニーチェは、言語の意味よりは、律動を重視したことを検討する。
第9回	ニーチェ「レトリック講義」(4) 一文法論	ニーチェが新しい文体を創出したことを解明する。
第10回	アナートル・フランスの形而上学批判	形而上学批判という点でのアナートル・フランスとニーチェの関係について検討する。
第11回	デリダの「空白の神話」	レトリック論を中心にデリダがニーチェを受容したことを解明する。
第12回	第12回：R・グレイのニーチェ言語論解釈	ニーチェの言語論が擬人観を前提していることを検討する。
第13回	K・フィーバーの転移論	隠喩という点で、ニーチェとヘーゲルの関係について検討する。
第14回	ヘーゲルの言語論	ヘーゲルの概念を重視する言語論について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを事前に読む

【テキスト（教科書）】

テキストは、受講者にはプリントで配布する

Friedrich Nietzsche, Über Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinne(1873). Im KSA I, S. 893ff.

Friedrich Nietzsche, Darstellung der antiken Rhetorik(1874). In: KGW II /4, S. 412ff.

Gustav Gerber, Die Sprache als Kunst. Bd. 1, Mittler'sche Buchhandlung, Bromberg, 1871.

J. Derrida, La mythologie blanche. In: Poétique. Nr. 5, Paris, 1971, pp.1-52.

N. Bolz, Eine kurze Geschichte des Scheins. Wilhelm Fink Verlag, München, 1991.

K. Vieweg/R. T. Gray, Hegel und Nietzsche. Eine literarisch-philosophische Begegnung. Bauhaus-Universität Weimar, 2007.

邦語訳

N・ホルツ『仮象小史』、法政大学出版局

ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽について』、『哲学者の書』（ちくま学芸文庫）所収

ニーチェ『レトリック講義』、知泉書館

アナートル・フランス『エピクロス園』（岩波文庫）

デリダ『白い神話』、『哲学の余白（下）』所収、法政大学出版局

ヘーゲル『論理学』第2版序説、『大論理学（上巻の一）』所収、岩波書店

【参考書】

山口誠一『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

【成績評価の方法と基準】

ニーチェの言語論とその影響を受けた現代思想に関するゼミでの発表・訳読・研究発表（60%）、質疑応答（40%）を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

ニーチェとヘーゲルの関係について理解が深まるように工夫をします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

<研究テーマ>

弁証法哲学の哲学的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編集、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

<主要研究業績>

『ヘーゲル哲学の根源——〈精神現象学〉の問いの解明』、法政大学出版局、*Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013* (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with an essential understanding of Nietzsche's linguistic philosophy, with texts drawn from German and Japanese.

PHL500B1

実践哲学特殊講義 2

山口 誠一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

弁証法哲学の観点からドイツ哲学について検討する。ドイツ哲学ということでシェリング、ヘーゲル、ニーチェを射程に収める。

【到達目標】

『精神現象学』序説精読から弁証法哲学について最先端から理解できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と原典講読の両面から『精神現象学』序説を手引きにして授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	弁証法哲学総説	弁証法哲学についての案内をする。
第2回	『精神現象学』序説総説Ⅰ	ヘーゲルの『精神現象学』序説関連年譜についての案内
第3回	『精神現象学』序説総説Ⅱ	『精神現象学』序説梗概の案内
第4回	『精神現象学』序説総説Ⅲ	『精神現象学』序説の主題の案内
第5回	精神による時代形成について	『精神現象学』序説第11節の検討
第6回	世界精神の諸形態から意識の諸形態へ	『精神現象学』序説第12節の検討
第7回	新たな世界の出現と意識との関係について	『精神現象学』序説第13節の検討
第8回	哲学的形成陶冶について	『精神現象学』序説第14節の検討
第9回	シェリング派の形式主義について	『精神現象学』序説第15節の検討
第10回	形式主義の絶対者について	『精神現象学』序説第16節の検討
第11回	『精神現象学』の洞察について	『精神現象学』序説第17節の検討
第12回	生きた実体としての主体の真理について	『精神現象学』序説第18節の検討
第13回	形式の自己運動としての主体について	『精神現象学』序説第19節の検討
第14回	真なるものは全体である	『精神現象学』序説第20節の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの下調べと参考文献の熟読

【テキスト（教科書）】

邦語訳

ヘーゲル『精神現象学（上）』、樫山欽四郎訳、平凡社ライブラリー

原典

G.W.F.Hegel, *Phänomenologie des Geistes*. Hrsg. v. H.-F. Wessels u. H. Clairmont, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1988.

【参考書】

山口誠一『ヘーゲル哲学の根源——《精神現象学》の問いの解明』、法政大学出版局、2016年（オンデマンド）

【成績評価の方法と基準】

弁証法哲学理解という目標に関するゼミでの発表・訳読・研究発表（60%）と応答（40%）を基準とする平常点評価

【学生の意見等からの気づき】

ドイツ語力の向上と哲学的思考力の統合を重視する。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

ニーチェ/ヘーゲルを中心とするドイツ近現代哲学、新プラトン主義の影響史的解明、日本における西洋哲学受容の解明、国際ヘーゲル研究誌 *Jahrbuch für Hegelforschung* 国際顧問

＜研究テーマ＞

弁証法哲学の哲学的研究、ヘーゲル『精神現象学』序説の註解、新訳ヘーゲル全集の編纂、ヘーゲル日本語文献目録国際版の編纂、現代日本におけるニヒリズムの解明など。

＜主要研究業績＞

『ヘーゲル哲学の根源——《精神現象学》の問いの解明』、法政大学出版局、2016、

Die japanischsprachige Hegel-Rezeption(1878-2001). Eine Bibliographie. Peter Lang Edition, 2013 (共編著)

『ニーチェ《古代レトリック講義》訳解』、知泉書館、2011年

『ニーチェとヘーゲル—ディオニュソス哲学の地下通路』、法政大学出版局、2010年

『ヘーゲル《新プラトン主義哲学》註解』、知泉書館、2005年

『ヘーゲルのギリシア哲学論』、創文社、1998年

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide students with a dialectical understanding of German philosophy(especially Shelling, Hegel and Nietzsche), with texts drawn from German and Japanese.

PHL500B1

科学哲学特殊講義 1

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン（Bergson 1859 – 1941）の最初の名著である『意識に直接与えられたものについての試論』（『時間と自由』）（*Essai sur les données immédiates de la conscience* 1889）の読解を通じて、著者の「持続」（*durée*）の主張の理解を図ります。昨年度秋学期からの続きで、春学期は「自由」を扱う第3章の終盤からです。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をしてもらい、全員で検討を行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第2回	真の持続と因果性（1）	訳解と討論
第3回	真の持続と因果性（2）	訳解と討論
第4回	真の持続と因果性（3）	訳解と討論
第5回	自由の問題の起源（1）	訳解と討論
第6回	自由の問題の起源（2）	訳解と討論
第7回	自由の問題の起源（3）	訳解と討論
第8回	常識への帰還（1）	訳解と討論
第9回	常識への帰還（2）	訳解と討論
第10回	常識への帰還（3）	訳解と討論
第11回	カントの誤謬（1）	訳解と討論
第12回	カントの誤謬（2）	訳解と討論
第13回	カントの誤謬（3）	訳解と討論
第14回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, édition « *Quadrige* », PUF, 2007（*Worms* の序文と、*Bouaniche* の注がついた、新しい版が望ましい）。

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕 150 年』（岩波書店）
久米・中田・安孫子（編）『ベルクソン読本』（法政大学出版局）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）
平井・藤田・安孫子（編）『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（書肆心水）

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備（40%）と議論への参加（30%）、および学期末レポート（30%）で評価します。なおそれぞれの方法において、5つの到達目標への到達度は、フランス語力 20%、テキスト理解 20%、ベルクソン理解 20%、哲学史・科学史理解 20%、現代性理解 20%の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていききたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
-フランス哲学
〈研究テーマ〉
-科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料にして行っています。
〈主要研究業績〉
-『ベルクソン読本』（編著、2006 年、法政大学出版局）
-*Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson*（編著、2012 年、OLMS）
-*Annales bergsoniennes*（編著、2013 年、PUF）
-*Tout ouvert : l'évolution créatrice en tous sens*（編著、2015 年、OLMS）
-『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』（編著、2016 年、書肆心水）
-*Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle*（編著、2016 年、書肆心水）
-『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』（編著、2017 年、書肆心水）
-*Mécanique et mystique*（編著、2018 年、OLMS）
-『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』（編著、2018 年、書肆心水）

【Outline and objectives】

Through the first main work of Bergson (1859-1941), "An Essay on the immediate Data of Consciousness" ("Time and Freedom"), we will try to understand his claims of *durée*. We will read the end of chapter 3 in the spring semester.

PHL500B1

科学哲学特殊講義 2

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ベルクソン (*Bergson 1859 – 1941*) の第 2 の主著である『物質と記憶』(*Mitière et mémoire 1896*) 第 4 章の読解を通じて、著者による「物質」と「精神」との究極的な関係づけの主張の理解を図ります。

【到達目標】

- ベルクソンの原文を正確に読めるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を本書の論理の中で正確に捉えられるようになります。
- ベルクソンの個々の議論をベルクソン思想全体の中で理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を哲学史・科学史の背景を踏まえて理解できるようになります。
- ベルクソンの個々の議論を今日のわれわれの問題と結びつけて解釈できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって訳の準備をしてきた参加者が、一文一文を担当し、輪読で訳読を進めます。その際、訳について、解釈について、必要な議論を行っていきます。テキストの切れ目では、当番の人に、当該テキスト部分についての問題提起をしてもらい、全員で検討を行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方を確認し、テキストの先行部分の説明を行います。
第 2 回	二元論の難問 (1)	訳読と討論
第 3 回	二元論の難問 (2)	訳読と討論
第 4 回	二元論の難問 (3)	訳読と討論
第 5 回	とるべき道 (1)	訳読と討論
第 6 回	とるべき道 (2)	訳読と討論
第 7 回	とるべき道 (3)	訳読と討論
第 8 回	知覚と物質 (1)	訳読と討論
第 9 回	知覚と物質 (2)	訳読と討論
第 10 回	知覚と物質 (3)	訳読と討論
第 11 回	持続と緊張度 (1)	訳読と討論
第 12 回	持続と緊張度 (2)	訳読と討論
第 13 回	持続と緊張度 (3)	訳読と討論
第 14 回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に先立って、毎回の当該テキスト箇所の訳を作成し、同時にその箇所での哲学問題の検討を行います。

【テキスト（教科書）】

Henri Bergson, *Mitière et mémoire, édition 《 Quadrige 》*, PUF, 2008 (Worms の序文と, Riquier の注がついた, 新しい版が望ましい)

【参考書】

『思想—ベルクソン生誕 150 年』(岩波書店)
 久米・中田・安孫子 (編)『ベルクソン読本』(法政大学出版局)
 平井・藤田・安孫子 (編)『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』(書肆心水)
 平井・藤田・安孫子 (編)『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』(書肆心水)
 平井・藤田・安孫子 (編)『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』(書肆心水)

【成績評価の方法と基準】

毎回の授業での訳の準備 (40%) と議論への参加 (30%)、および学期末レポート (30%) で評価します。なおそれぞれの方法において、5 つの到達目標への到達度は、フランス語力 20%、テキスト理解 20%、ベルクソン理解 20%、哲学史・科学史理解 20%、現代性理解 20% の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

できるだけ議論の時間を取っていききたいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
 -フランス哲学
 〈研究テーマ〉
 -科学に対する哲学の側からの抵抗の問題の検討を、オーギュスト・コントからベルクソンに至るフランス 19 世紀思想史を材料にして行っています。
 〈主要研究業績〉
 -『ベルクソン読本』(編著, 2006 年, 法政大学出版局)
 -*Dissémination de l'évolution créatrice de Bergson*(編著, 2012 年, OLMS)
 -*Annales bergsoniennes* (編著, 2013 年, PUF)
 -*Tout ouvert : l'évolution créatrice en tous sens*(編著, 2015 年, OLMS)
 -『ベルクソン「物質と記憶」を解剖する』(編著, 2016 年, 書肆心水)
 -*Considérations inactuelles : Bergson et la philosophie française du XIXe siècle*(編著, 2016 年, 書肆心水)
 -『ベルクソン「物質と記憶」を診断する』(編著, 2017 年, 書肆心水)
 -*Mécanique et mystique* (編著, 2018 年, OLMS)
 -『ベルクソン「物質と記憶」を再起動する』(編著, 2018 年, 書肆心水)

【Outline and objectives】

Through the reading of Chapter 4 of "Matière et Mémoire" (*Mitière et mémoire 1896*), the second main work of Bergson (1859-1941), we will try to understand his claim of the ultimate relationship between "matter" and "spirit".

PHL500B1

比較思想特殊講義 1

笠原 賢介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ハイデガー『ニーチェ』（1961年）を前年度に引き続いて原文で精読します。このテキストは、ハイデガーがニーチェを西洋形而上学の最終段階にある哲学者ととらえ、それと対決する思考の歩みを記したものです。そこにはニーチェを哲学の破壊者としてではなく、あくまでも哲学者と捉えるハイデガーの洞察、および、プラトンからニーチェに至る西洋哲学の問題点をハイデガーがどのようにとらえたのかが示されています。今学期読む箇所では、この点が技術、芸術、美をめぐる問題と結び合わされて展開されます。テキストの精読によって、ニーチェ哲学そのものの可能性も視野に入れながら、提示されている論点の現代的意義と問題点を考えます。

【到達目標】

ハイデガーのニーチェとの対決の論点を把握し、洞察を深める。同時にニーチェ自身の思考世界とその可能性についての理解を深める。それらによって各人の思考の方向付けを行う。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目と力で読み出し、討論によって客観化しながら考える能力を養う。これらを通して、学術論文制作のための基礎力を広げる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ハイデガー『ニーチェ』の原文を、毎回担当者を決めてゼミ形式で読み進めます。

テキストの精読と質疑応答、討論をおこなって進めます。討論は、ハイデガーを秘教化せず、異なった論点を相互に提示しながら、自由に進めてゆきます。

必要に応じてハイデガーやニーチェ、また、関連する哲学者のテキストのプリントを配布し、背景や事柄の連関についてのレクチャーや討論を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入的なレクチャー、前年度のゼミで明らかになった論点の整理。以下の進度は目安です。	ゼミの進め方について。ハイデガーとゼミ・テキスト『ニーチェ』についての基本的な事柄。前年度のゼミで明らかになった論点の整理。
第2回	テキスト S.80 の精読と討論。	当該箇所を精読し、論点を取り出して検討します。
第3回	テキスト S.81 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出します。関連するプリントの配布とレクチャー。
第4回	テキスト S.82 の精読と討論。	当該箇所について、テキストの精読に基づいて討論します。
第5回	テキスト S.83 の精読と討論。	テキストの精読に基づいて、論点を取り出し、質疑応答、討論をおこないます。
第6回	テキスト S.84 の精読と討論。	〈テクネー〉についてのハイデガーの論点の整理。
第7回	テキスト S.85 の精読と討論。	当該箇所について、テキストを精読し、論点を取り出します。関連プリントの配布とレクチャー。
第8回	テキスト S.86 の精読と討論。	当該箇所について、テキストを精読し、論点を取り出し、質疑応答、討論をおこないます。
第9回	ゼミ参加者の研究発表と討論。	ゼミ参加者の研究発表と討論。
第10回	テキスト S.87 の精読と討論。	当該箇所を精読し、質疑応答、討論をおこないます。
第11回	テキスト S.88 の精読と討論。	当該箇所について、精読し討論をおこないます。関連プリントの配布とレクチャー。
第12回	テキスト S.89 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出し、質疑応答、討論をおこないます。
第13回	テキスト S.90 の精読と討論。	当該箇所について、テキストを精読し、討論をおこないます。美学、芸術、〈テクネー〉についてのハイデガーの論点の整理。
第14回	まとめと討論。	春学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこないます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回のテキストの精読箇所を予習すること。各回の担当者は、当該箇所について、プリントを予め作成すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、授業内に配布したプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げる。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Nietzsche, Bd. I*, Stuttgart: Klett-Cotta, 2008. テキストについては、初回授業時に説明をします。

【参考書】

1. ハイデッカー（細谷貞雄監訳）『ニーチェ』I・II、平凡社ライブラリー、1997年。
2. ビヒト（青木隆嘉訳）『ニーチェ』、法政大学出版局、1991年。
3. 渡辺二郎『ハイデッカーの実存思想』、勁草書房、1985年。
4. 渡辺二郎『ハイデッカーの存在思想』、勁草書房、1985年。
5. スタイナー（生松敬三訳）『ハイデガー』、岩波書店、1992年。
6. 小田部胤久『西洋美学史』、東京大学出版会、2009年。
7. ハーバースマ（三島憲一他訳）『近代の哲学的ディスクルス』I・II、岩波書店、1990年。
8. クリッチリー/シューマン（申田純一訳）『ハイデガー『存在と時間』を読む』、法政大学出版局、2017年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。加えて、発表に基づいたレポートの提出を期末に求めます。平常点 20%、発表 40%、レポート 40%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め積極的に質問、討議をおこなってください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化
 ＜研究テーマ＞ヨーロッパ近代哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。
 ＜主要研究業績＞アドルノ『本来性という隠語ードイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未來社、ポイエーシス叢書、1992年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010年。『和辻哲郎『風土』とヘルダー』（論文）、『思想』2016年5月号。『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界ークニッゲ、レッシング、ヘルダー』（著書）、未來社、2017年。『レッシング『賢者ナータン』再読』（論文）、『思想』2018年2月号。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Martin Heidegger's "Nietzsche"(1961) and discussion about the text. Key words: Heidegger's confrontation with Nietzsche's philosophy and the western philosophical tradition; Platonic tradition and aesthetic; beauty, art and truth.

PHL500B1

比較思想特殊講義 2

笠原 賢介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

今学期からは、カント『判断力批判』（1790年）を原文で精読します。序文・序論からはじめ、美と芸術を扱った第一部へと読み進めます。『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義について考えます。

【到達目標】

『判断力批判』のカント体系のなかでの位置、カントの提示している美・倫理をめぐる問題、『判断力批判』の現代的意義についての理解を深める。それによって自らの思考の方向付けを行う。哲学者の思考世界をオリジナル・テキストから各自の目と力で読み出し、それを討議のなかで客観視して思考する能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

カント『判断力批判』の原文を、毎回担当者を決めてゼミ形式で読み進めます。

テキストの精読と質疑応答、討論をおこなって進めます。

必要に応じて関連する資料のプリントを配布し、背景や事柄の連関についてのレクチャーや討論をおこないます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス。以下の進度は目安です。	ゼミの進め方について。概括的なレクチャー。
第2回	テキスト S.3 の精読と討論。	当該箇所の精読に基づいて、論点を取り出し、質疑応答と討論をおこないます。
第3回	テキスト S.4 の精読と討論。	テキストの精読と討論。関連プリントの配布とレクチャー。
第4回	テキスト S.5 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して討論をおこないます。
第5回	テキスト S.6 の精読と討論。	テキストの精読と討論。カント哲学の基本論点の整理。
第6回	ゼミ参加者の研究発表と討論。	ゼミ参加者の研究発表と討論。
第7回	テキスト S.7 の精読と討論。	テキストの精読と討論。関連プリントの配布とレクチャー。
第8回	テキスト S.8 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して質疑応答をおこないます。
第9回	テキスト S.9 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して検討します。
第10回	テキスト S.10 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して質疑応答をおこないます。
第11回	テキスト S.11 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して検討します。関連プリントの配布とレクチャー。
第12回	テキスト S.12 の精読と討論。	テキストを精読し、これまでの論点を整理します。
第13回	テキスト S.13 の精読と討論。	テキストを精読し、論点を取り出して質疑応答をおこないます。
第14回	まとめと討論。	秋学期の内容を総括し、総合的に質疑応答と討論をおこないます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回のテキストの精読箇所を予習すること。各回の担当者は、当該箇所について、プリントを予め作成すること。毎回の精読・討論で焦点となった論点につき、授業内に配布したプリントを再読し、授業内で示した文献に当たって論点を確認・掘り下げること。

【テキスト（教科書）】

Immanuel Kant, *Kritik der Urteilkraft*, Hamburg: Meiner, 2009 (*Philosophische Bibliothek Bd. 507*) を用います。テキストについては、初回授業時に説明をします。

【参考書】

- カッシーラー（浜田義文他監修）『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年。
- 小田部胤久『西洋美学史』東京大学出版会、2009年。
- アレント（浜田義文監訳）『カント政治哲学の講義』法政大学出版局、1987年。
- 宇都宮芳明『訳注・カント『判断力批判』上』以文社、1994年。
- 佐藤康邦『カント『判断力批判』と現代』岩波書店、2005年。
- 小田部胤久『象徴の美学』東京大学出版会、1995年。

【成績評価の方法と基準】

到達目標を基準にして、テキスト理解の正確さ・掘り下げ、質疑応答、討論への参加を総合して評価します。加えて、発表に基づいたレポートの提出を期末に求めます。平常点 20%、発表 40%、レポート 40%。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的事項を含め、積極的に質問、討議をおこなってください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ思想史、ドイツ現代思想・哲学、比較文学比較文化
<研究テーマ>西欧近代哲学・思想は非ヨーロッパ世界をどのようにとらえたか、ニーチェと現代思想、感性論・芸術論。

<主要研究業績>アドルノ『本来性という隠語ードイツ的なイデオロギーについて』（訳書）、未來社、ポイエシス叢書、1992年。『社会思想史』（共著）、法政大学通信教育部、2010年。カッシーラー『象徴形式の形而上学』（共訳書）、法政大学出版局、2010年。「和辻哲郎『風土』とヘルダー」（論文）、『思想』2016年5月号。「ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界ークニッゲ、レッシング、ヘルダー」（著書）、未來社、2017年。「レッシング『賢者ナータン』再読」（論文）、『思想』2018年2月号。

【Outline and objectives】

Intensive reading of Immanuel Kant's "Critique of Judgement"(1790) and discussion about the text. Key words: systematic position of "Critique of Judgement" within the Kantian philosophy; beauty and ethics; relation to contemporary philosophical discussions.

PHL500B1

近代フランス哲学史特殊講義 1

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては 1950 年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかり押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。
- ②とりわけ『至高性』第 2 部を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士後期課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業紹介	春学期の予定を説明する。
第 2 回	『至高性』第 1 回	バタイユと『至高性』の概要説明
第 3 回	『至高性』第 2 回	第 1 部第 3 章第 4 節「至高の諸瞬間の統一性と根源的な主観性」の解説
第 4 回	『至高性』第 3 回	第 1 部第 4 章第 1 節「有用な客体と至高の主体」の解説
第 5 回	『至高性』第 4 回	第 1 部第 4 章第 2 節「至高者が他の人々と異なるのは主体が客体への労働作業と異なるのと同じである」の解説
第 6 回	『至高性』第 5 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 1
第 7 回	『至高性』第 6 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 2
第 8 回	『至高性』第 7 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 3
第 9 回	『至高性』第 8 回	第 1 部第 4 章第 3 節「ある人を至高者だと認知する人にとってその至高者とはどのようなものなのか」解説その 4
第 10 回	『至高性』第 9 回	第 1 部第 4 章第 5 節「革命」の解説
第 11 回	『至高性』第 10 回	第 1 部第 4 章第 6 節「サド侯爵あるいは至高の反逆者」解説その 1
第 12 回	『至高性』第 11 回	第 1 部第 4 章第 6 節「サド侯爵あるいは至高の反逆者」解説その 2
第 13 回	『至高性』第 12 回	第 1 部第 4 章第 6 節「サド侯爵あるいは至高の反逆者」解説その 3
第 14 回	『至高性』第 13 回	院生による発表。「至高性」と「聖なるもの」の関係について

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユならびに現代思想に関心を持って読書を進めてほしい。とくに参考書にあげた文献は読んでおいてほしい。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

酒井健著『バタイユ入門』（ちくま新書）、湯浅博雄『消尽』（講談社学術文庫）、バタイユ著『呪われた部分、全般経済学試論・蕩尽』（酒井健訳、ちくま学芸文庫）

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50 %）
- ②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士後期課程】

①毎回の訳出（50 %）

②学期末の発表（50 %）

≪ 到達目標との対応 ≫

≪ 到達目標との対応 ≫

上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランス現代思想

<研究テーマ>バタイユ研究

<主要研究業績>

『夜の哲学 バタイユから生の深淵へ』（青土社、2016 年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :Souveraineté < /I > . That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL500B1

近代フランス哲学史特殊講義2

酒井 健

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に引き続きフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（1897-1962）の後期の思想を理解する。作品としては1950年代の未発表草稿『至高性』を対象にする。バタイユの基本から理解していき、フランス現代思想との点を探る。

【到達目標】

【修士課程】

- ①「呪われた部分」「蕩尽」など基本的な概念をしっかり押さえて後期バタイユの重要概念「至高性」を理解する。
- ②とりわけ『至高性』第2部を中心に精読していく。
- ③各自の修士論文テーマとの関連を考えていく。

【博士課程】

より一層深いバタイユの理解へ達する。たとえば「交流」「共同体」の問題をフランス現代思想の視点に立って理解していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

ゼミ形式の講読の授業。原書でバタイユの文章を読んでいく。適宜、受講生の発表を交えていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業紹介	秋学期授業の内容紹介とテキスト紹介
第2回	『至高性』第1回	第2部第1章第1節「共産主義の動乱によって生まれた視界から見える至高性」
第3回	『至高性』第2回	第2部第1章第2節「共産主義が最終的なありようを知る事のむづかしさと時宜性」
第4回	『至高性』第3回	第2部第1章第3節「初期マルクス主義の展望と現代の展望の違い」
第5回	『至高性』第4回	第2部第1章第4節「1917年以前のスターリンの見解」
第6回	『至高性』第5回	第2部第1章第5節「1917年以降のスターリンとスターリン的な見方」
第7回	『至高性』第6回	第2部第1章第6節「封建制の諸形態の破壊に限定された至高性」
第8回	『至高性』第7回	第2部第2章第1節「行動から得られた明晰性の限界」
第9回	『至高性』第8回	第2部第2章第2節「至高の権力の転覆として考察された革命」
第10回	『至高性』第9回	第2部第2章第3節「封建制（1）」
第11回	『至高性』第10回	第2部第2章第4節「封建制（2）」
第12回	『至高性』第11回	第2部第2章第3節「封建制（3）」
第13回	『至高性』第12回	第2部第2章第3節「封建制（4）」
第14回	『至高性』第13回	まとめと出席者による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

バタイユおよびフランス現代思想の著作に親しんでおくこと。

【テキスト（教科書）】

La Souveraineté in Œuvres Complètes de Georges Bataille, tome VIII, Gallimard

【参考書】

『バタイユ入門』ちくま新書、酒井健著

【成績評価の方法と基準】

【修士課程】

- ①毎回の訳出（50%）
 - ②学期末の発表（50%）
- ≪到達目標との対応≫
上記①と②を通して、修士課程「到達目標」の①と②と③を確認していく。

【博士課程】

- ①毎回の訳出（50%）
 - ②学期末の発表（50%）
- 《到達目標との対応》
≪到達目標との対応≫
上記①と②を通して、博士後期課程の「到達目標」を確認していく。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞フランス現代思想
＜研究テーマ＞ジョルジュ・バタイユ研究
＜主要研究業績＞近刊の訳書に『呪われた部分・全般経済学試論・蕩尽』（バタイユ著、ちくま学芸文庫）がある。

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to continue to learn the thought of Georges Bataille, especially of one of his last works :Souveraineté < /I > . That is mainly by the reading of original French text of this work.

PHL500B1

法哲学特殊講義 1

内藤 淳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

哲学史における利己主義と道徳の対立を論じた *Alison Hills, The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism, Oxford University Press, 2010* を精読する。なぜ道徳に従わなければならないか、道徳を無視して利己的に振る舞うと何がいけないのかといった「道徳の理由」は、倫理学や哲学の基本問題のひとつである。この問題に関して、歴史の中の代表的思想を踏まえて、利己主義に基づく道徳批判を整理し、それに対抗する道徳擁護論を検討しているのがテキストの内容である。毎回担当者を決め、テキストの担当箇所日本語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。

【到達目標】

- ①思想史の中で利己主義に位置づけられる主要な考え方を把握し、それらの特徴や相互関係を理解する。
- ②利己主義に基づく道徳への批判の内容を理解し、道徳の矛盾や問題点を把握する。
- ③それらを通じて、道徳の意義や基礎（なぜ道徳を守らなければならないか）について自分なりの考えを持ち、議論ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回担当者を決め、テキストの担当箇所の日本語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	利己主義とは	テキスト第2章第1節 pp.11-13
第3回	道徳の権威	テキスト第2章第1節 pp.11-13
第4回	利己主義からの道徳批判1	テキスト第2章第2節 pp.13-14
第5回	利己主義からの道徳批判2	テキスト第2章第2節 pp.14-15
第6回	理性による道徳批判1	テキスト第2章第3節 pp.15-17
第7回	理性による道徳批判2	テキスト第2章第3節 pp.17-19
第8回	標準的利己主義1	テキスト第2章第4節 pp.19-20
第9回	標準的利己主義2	テキスト第2章第4節 pp.20-21
第10回	利己主義と道徳の関係	テキスト第2章第5節 pp.22-24
第11回	利己主義と道徳の関係2	テキスト第2章第6節 pp.25-27
第12回	道徳の擁護1	テキスト第2章第7節 pp.29-31
第13回	道徳の擁護2	テキスト第2章第8節 pp.31-32
第14回	本章の結論	テキスト第2章第8節 pp.33-34

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回のテキスト該当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所の日本語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Alison Hills, The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism, Oxford University Press, 2010

【参考書】

Jan Osterberg, Self and Others: A Study of Ethical Egoism, Kluwer Academic Publishers, 1988

Rbert Shaver, Rational Egoism: A Selected and Critical History, Cambridge University Press, 1999

安彦一恵・大庭健・溝口宏平編『道徳の理由――Why be moral?』昭和堂、1992年

永井均『倫理とは何か――猫のインジヒトの挑戦』産業図書、2003年

その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80%。それ以外での授業での議論内容：20%。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>法哲学

<研究テーマ>人権や憲法の基礎についての研究

<主要研究業績>

「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要 75号、2017年

「平和は『絶対に』求めるべきか? : ホッブズを進化心理学で修正する」(1)

(2・完) 法政大学文学部紀要 71号・72号、2015年

「憲法学は立憲の憲法を正当化できるか?」(1)(2・完) 一橋法学 12巻2号・3号、2013年

「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012年

「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位5）』法律文化社、2010年

「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容を持ちうるか」

『新世代法政策学研究』第8号、2010年

『新世代法政策学研究』第8号、2010年

【Outline and objectives】

This course introduces egoism in philosophical history. The main aim of this course is to help students understand the foundation of morality by studying the challenge to morality from egoism. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on "why be moral?" and explain them rationally.

PHL500B1

法哲学特殊講義2

内藤 淳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期に続き、哲学史における利己主義と道徳の対立を論じた *Alison Hills, The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism, Oxford University Press, 2010* を精読する。なぜ道徳に従わなければならないか、道徳を無視して利己的に振る舞うと何がいけないのかといった「道徳の理由」は、倫理学や哲学の基本問題のひとつである。この問題に関して、歴史の中の代表的思想を踏まえて、利己主義に基づく道徳批判を整理し、それに対抗する道徳擁護論を検討しているのがテキストの内容である。毎回担当者を決め、テキストの担当箇所日本語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。

【到達目標】

- ①思想史の中で利己主義に位置づけられる主要な考え方を把握し、それらの特徴や相互関係を理解する。
- ②利己主義に基づく道徳への批判の内容を理解し、道徳の矛盾や問題点を把握する。
- ③それらを通じて、道徳の意義や基礎（なぜ道徳を守らねばならないか）について自分なりの考えを持ち、議論ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回担当者を決め、テキストの担当箇所日本語訳を作成し、訳文の吟味・検討を行う。併せて、内容上の疑問点・論点・問題点の検討を行う。具体的な講読箇所は、受講生の理解度や開講後の議論状況を踏まえて柔軟に設定していくが、開講前の予定は下記の通り。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方やねらいについての説明
第2回	カントと利己主義	テキスト第3章第1節 pp.35-36
第3回	幸福とは1	テキスト第3章第2節 pp.36-39
第4回	幸福とは2	テキスト第3章第2節 pp.40-41
第5回	カントと利己主義	テキスト第3章第3節 pp.41-43
第6回	カント的反利己主義1	テキスト第3章第4節 pp.43-45
第7回	カント的反利己主義2	テキスト第3章第4節 pp.45-48
第8回	自己への義務	テキスト第3章第5節 pp.48-51
第9回	合理性原理	テキスト第3章第6節 pp.51-52
第10回	合理性原理と価値1	テキスト第3章第7節 pp.53-55
第11回	合理性原理と価値2	テキスト第3章第7節 pp.56-59
第12回	カント的利己主義1	テキスト第3章第8節 pp.59-61
第13回	カント的利己主義2	テキスト第3章第8節 pp.61-63
第14回	本章の結論	テキスト第3章第9節 pp.63-64

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回のテキスト担当箇所を熟読し、内容を理解すると共に、疑問点や問題点を（なんとなくではなく）正確且つ具体的に特定しておく。訳文担当者は、関連する知識や理論、背景事情等を十分に調査し予習した上で、担当箇所日本語訳を作成する。

【テキスト（教科書）】

Alison Hills, The Beloved Self: Morality and the Challenge from Egoism, Oxford University Press, 2010

【参考書】

Jan Osterberg, Self and Others: A Study of Ethical Egoism, Kluwer Academic Publishers, 1988

Rbert Shaver, Rational Egoism: A Selected and Critical History, Cambridge University Press, 1999

安彦一恵・大庭健・溝口安平編『道徳の理由－ Why be moral?』昭和堂、1992年

永井均『倫理とは何か－猫のアインジヒトの挑戦』産業図書、2003年

その他の参考書は授業の中で随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況）と、それに関する授業での質疑応答・議論内容により、上記「到達目標」で示した①～③の達成度を評価する。担当箇所の訳文内容（文章の適切さ、関連知識の下調べ状況、それに関する授業での質疑応答を含む）の評価：80%。それ以外での授業での議論内容：20%。

【学生の意見等からの気づき】

訳文の正確な作成を通じて、内容理解のみならず英文読解力の重点的な鍛錬を図りたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>法哲学

<研究テーマ>人権や憲法の基礎についての研究

<主要研究業績>

「心理的利己主義の更新：ベンサムを進化心理学で改訂する」法政大学文学部紀要 75号、2017年

「平和は『絶対に』求めるべきか？：ホッブズを進化心理学で修正する」(1)(2・完)法政大学文学部紀要 71号・72号、2015年

「憲法学は立憲的憲法を正当化できるか？」(1)(2・完)一橋法学 12巻2号・3号、2013年

「一夫一婦制と『憲法の目的』」屋敷二郎編『夫婦』国際書院、2012年

「人間本性論を回避して人権を語り得るか」井上達夫編『人権論の再構築（講座 人権論の再定位5）』法律文化社、2010年

「人間科学と自然法論と法実証主義：法規範はいかなる内容をも持ちうるか」『新世代法政策学研究』第8号、2010年

【Outline and objectives】

This course introduces egoism in philosophical history. The main aim of this course is to help students understand the foundation of morality by studying the challenge to morality from egoism. At the end of this course, participants are expected to have their own opinions on "why be moral?" and explain them rationally.

PHL500B1

現象学特殊講義 1

君嶋 泰明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが 1927 年に行った講義『現象学の根本諸問題』をドイツ語原文で読みます。ハイデガーの哲学の特徴の一つは、それが西洋哲学史にたいする彼独自の解釈を前提しているということにあります。そのことは、同じ 1927 年に出版された彼の著『存在と時間』からも窺えることです。同書では、個々の哲学者についての解釈はあまりなされていません。これにたいして今回取り上げる講義では、いくつかの哲学の基本概念をめぐって、カントをはじめとする何人かの古典的哲学者についての解釈が展開されます。学生は講義を読むことで、哲学の概念が特定の歴史を背負っていることに注意を払うことができるようになりますとともに、その歴史に分け入っていくことが一つの「現象学」の実践となりうることを学ぶことができます。春学期はカントのテーゼ「存在はレアルな述語ではない」をめぐる議論を扱います。

【到達目標】

- (A) ハイデガーのドイツ語原文を正確に訳せるようになる。
 (B) ハイデガーのいわんとすることを自分の言葉で噛み砕いて説明できるようになる。
 (C) 以上を通じて、哲学のテキストの読み方に習熟する。
 (D) いくつかの哲学の基本概念の背景にある歴史を理解する。
 (E) 現象学とは哲学するうえでのどのような態度を指すのかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者は、事前にテキストの担当箇所の (1) 日本語訳を作成し、(2) 不明瞭な箇所には自分なりの解釈を与え、(3) わからなかった点についてはまとめておき、それらを報告します。授業ではこの報告に基づき、(1) (2) (3) それぞれについて参加者全員で討議します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方の説明、テキストの先行部分の解説
第 2 回	カントのテーゼ「存在はレアルな述語ではない」をめぐって	担当者による報告と参加者全員での討議
第 3 回	テーゼの内容の理解①	報告と討議
第 4 回	テーゼの内容の理解②	報告と討議
第 5 回	テーゼの内容の理解③	報告と討議
第 6 回	テーゼの内容の理解④	報告と討議
第 7 回	テーゼの内容の理解⑤	報告と討議
第 8 回	テーゼの内容の理解⑥	報告と討議
第 9 回	カントの「存在」概念の現象学的解明①	報告と討議
第 10 回	カントの「存在」概念の現象学的解明②	報告と討議
第 11 回	カントの「存在」概念の現象学的解明③	報告と討議
第 12 回	カントの「存在」概念の現象学的解明④	報告と討議
第 13 回	カントの「存在」概念の現象学的解明⑤	報告と討議
第 14 回	カントの「存在」概念の現象学的解明⑥	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者は上記 (1) 日本語訳、(2) 解釈、(3) 疑問点をまとめたレジュメを作成して授業に臨みます。

参加者は討議に積極的に参加できるよう、あらかじめテキストの当該箇所を熟読しておきます。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Die Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe Bd. 24, Vittorio Klostermann, 1975.*

希望者には当該箇所のコピーを配布しますので、必ずしも購入する必要はありません。

【参考書】

・M. ハイデガー著・溝口純一・松本長彦・杉野祥一・S. ミュラー訳、『現象学の根本諸問題』、創文社、2001 年。

・M. ハイデガー著・木田元・平田裕之・迫田健一訳、『現象学の根本諸問題』、作品社、2010 年。

前者は上記テキストの翻訳です。後者は聴講者のノートを翻訳したもので、上記テキストと厳密に一致するわけではありません。ただし後者の方が翻訳としては読みやすいです。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が 70%、参加者としての評価が 30%です。前者はレジュメの内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこでの発言を評価の対象とします。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より新任につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26 号、2018 年。

・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41 号、2014 年。

・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20 号、2012 年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture course of 1927, *The Basic Problems of Phenomenology, in the German original*. One of the characteristics of his philosophy is that it presupposes his own interpretation of the history of western philosophy. This is apparent from his major work *Being and Time (1927)*, but from it we can't learn much about how he interprets individual philosophers. In contrast, the above mentioned lecture course develops interpretation of some classical philosophers like Kant, with regard to some basic philosophical concepts. By reading it students will learn to pay attention to history of philosophical concepts and understand how it could be that interpreting that history is a way of "doing phenomenology."

PHL500B1

現象学特殊講義2

君嶋 泰明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

マルティン・ハイデガーが1927年に行った講義『現象学の根本諸問題』をドイツ語原文で読みます。ハイデガーの哲学の特徴の一つは、それが西洋哲学史にたいする彼独自の解釈を前提しているということにあります。そのことは、同じ1927年に出版された彼の著書『存在と時間』からも窺えるのですが、同書では、個々の哲学者についての解釈はあまりなされていません。これにたいして今回取り上げる講義では、いくつかの哲学の基本概念をめぐって、カントをはじめとする何人かの古典的哲学者についての解釈が展開されます。学生は講義を読むことで、哲学の概念が特定の歴史を背負っていることに注意を払うことができるようになるとともに、その歴史に分け入っていくことが一つの「現象学」の実践となりうることを学ぶことができます。秋学期はアリストテレスに由来する「本質」と「存在」の区別をめぐる議論を扱います。

【到達目標】

- (A) ハイデガーのドイツ語原文を正確に訳せるようになる。
 (B) ハイデガーのいわんとすることを自分の言葉で噛み砕いて説明できるようになる。
 (C) 以上を通じて、哲学のテキストの読み方に習熟する。
 (D) いくつかの哲学の基本概念の背景にある歴史を理解する。
 (E) 現象学とは哲学するうえでどのような態度を指すのかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の担当者は、事前にテキストの担当箇所の(1)日本語訳を作成し、(2)不明瞭な箇所には自分なりの解釈を与え、(3)わからなかった点についてはまとめておき、それらを報告します。授業ではこの報告に基づき、(1)(2)(3)それぞれについて参加者全員で討議します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の説明とテキストの先行部分の解説
第2回	「本質」と「存在」の区別をめぐって	担当者による報告と参加者全員での討議
第3回	区別の内容の理解①	報告と討議
第4回	区別の内容の理解②	報告と討議
第5回	区別の内容の理解③	報告と討議
第6回	区別の内容の理解④	報告と討議
第7回	区別の内容の理解⑤	報告と討議
第8回	区別の内容の理解⑥	報告と討議
第9回	区別の由来と問題点の現象学的説明①	報告と討議
第10回	区別の由来と問題点の現象学的説明②	報告と討議
第11回	区別の由来と問題点の現象学的説明③	報告と討議
第12回	区別の由来と問題点の現象学的説明④	報告と討議
第13回	区別の由来と問題点の現象学的説明⑤	報告と討議
第14回	区別の由来と問題点の現象学的説明⑥	報告と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者は上記(1)日本語訳、(2)解釈、(3)疑問点をまとめたレジュメを作成して授業に臨みます。参加者は討議に積極的に参加できるように、あらかじめテキストの当該箇所を熟読しておきます。

【テキスト（教科書）】

Martin Heidegger, *Die Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe Bd. 24, Vittorio Klostermann, 1975.*

希望者には当該箇所のコピーを配布しますので、必ずしも購入する必要はありません。

【参考書】

・M. ハイデガー著・溝口純一・松本長彦・杉野祥一・S. ミュラー訳、『現象学の根本諸問題』、創文社、2001年。
 ・M. ハイデガー著・木田元・平田裕之・迫田健一訳、『現象学の根本諸問題』、作品社、2010年。
 前者は上記テキストの翻訳です。後者は聴講者のノートを翻訳したもので、上記テキストと厳密に一致するわけではありません。ただし後者の方が翻訳としては読みやすいです。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての評価が70%、参加者としての評価が30%です。前者はレジュメの内容と討議での応答を、後者は討議への積極的な参加とそこの発言を評価の対象とします。そのさい、上記の到達目標がどれだけ達成されているかが主な評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より新任につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現象学・解釈学

<研究テーマ>

ハイデガーの西洋哲学史観の批判的検討

<主要研究業績>

- ・「信仰と哲学——ハイデガーのアウグスティヌス解釈について」、『アルケー』26号、2018年。
- ・「ハイデガーのデカルト解釈について」、『哲学論叢』41号、2014年。
- ・「不断の逸れに抗して真正な道を歩むこと——ハイデガー初期フライブルク講義に見る「形式的告示」が持つ含意」、『アルケー』20号、2012年。

【Outline and objectives】

We will read Martin Heidegger's lecture course of 1927, *The Basic Problems of Phenomenology, in the German original*. One of the characteristics of his philosophy is that it presupposes his own interpretation of the history of western philosophy. This is apparent from his major work *Being and Time* (1927), but from it we can't learn much about how he interprets individual philosophers. In contrast, the above mentioned lecture course develops interpretation of some classical philosophers like Kant, with regard to some basic philosophical concepts. By reading it students will learn to pay attention to history of philosophical concepts and understand how it could be that interpreting that history is a way of "doing phenomenology."

PHL500B1

日本思想史特殊講義 1

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三木清の著作『哲学的人間学』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け入れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

・三木清の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に三木清の『哲学的人間学』の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は担当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	三木清『哲学的人間学』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『哲学的人間学』「人間学の概念」①	第一章「人間学の概念」の検討の第一回目 pp.127-147（『三木清全集』18巻の頁数表記）
第3回	「人間学の概念」②	「人間学の概念」の検討の第二回目 pp.138-161 （前週の復習も含めての検討）
第4回	「人間学の概念」③	「人間学の概念」の検討の第三回目 pp.161-175
第5回	「人間学の概念」④	「人間学の概念」の検討の第四回目 pp.175-186
第6回	『哲学的人間学』「人間存在の歴史性」①	第二章「人間存在の歴史性」の検討の第一回目 pp.187-213
第7回	「人間存在の歴史性」②	「人間存在の歴史性」の検討の第二回目 pp.214-229
第8回	「人間存在の歴史性」③	「人間存在の歴史性」の検討の第三回目 pp.229-246
第9回	『哲学的人間学』「人間存在の状況性」①	第三章「人間存在の状況性」の検討の第一回目 pp.247-266
第10回	「人間存在の状況性」②	「人間存在の状況性」の検討の第二回目 pp.266-296
第11回	『哲学的人間学』「人間存在の表現性」①	第四章「人間存在の表現性」の検討の第一回目 pp.297-330
第12回	「人間存在の表現性」②	「人間存在の表現性」の検討の第二回目 pp.330-345
第13回	「人間存在の表現性」③	「人間存在の表現性」の検討の第三回目 pp.345-355 第四章全体のまとめも含む
第14回	『哲学的人間学』「人間存在の社会性」	第四章「人間存在の社会性」の検討と、全体の総まとめ pp.356-386

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の担当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

三木清『哲学的人間学』（『三木清全集』第十八巻）
現在、古本屋などで安価で入手可能であるので出来る限り各自入手することが望ましいが、入手できなかった場合でもコピーを講義担当教員が準備する。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、三木清の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては赤松常弘『三木清——哲学的思索の軌跡』（ミネルヴァ書房、1994年）が三木の思想の全体像を把握するに際しては有益である。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。
講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものと見なさないの、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。
紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【その他の重要事項】

修士課程「日本思想史研究Ⅰ-1」と合同での実施となる。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近代哲学・日本思想史
＜研究テーマ＞京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

＜主要研究業績＞

- ① 「「ひと」であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
- ② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
- ③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第24輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of the concept "philosophical anthropology" through reading thoroughly "Philosophical anthropology" by Miki Kiyoshi. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

PHL500B1

日本思想史特殊講義2

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三木清の著作『構想力の論理』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。今年度は第三章「技術」の序盤までの検討を予定している。

【到達目標】

・三木清の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

(1) 受講者全員に三木清の『構想力の論理』の担当箇所を割り当てる。
(2) 担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
(3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	三木清『構想力の論理』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『構想力の論理』第一章「神話」①	「序」および第一章「神話」の検討の第一回目 pp.3-19（『三木清全集』8巻の頁数表記）
第3回	「神話」②	「神話」の検討の第二回目 pp.19-36
第4回	「神話」③	「神話」の検討の第三回目 pp.36-55
第5回	「神話」④	「神話」の検討の第四回目 pp.55-74
第6回	「神話」⑤	「神話」の検討の第五回目 pp.74-98 第一章の総まとめ
第7回	『構想力の論理』第二章「制度」①	『構想力の論理』第二章「制度」の検討の第一回目 pp.99-119
第8回	「制度」②	「制度」の検討の第二回目 pp.120-136
第9回	「制度」③	「制度」の検討の第三回目 pp.137-150
第10回	「制度」④	「制度」の検討の第四回目 pp.151-164
第11回	「制度」⑤	「制度」の検討の第五回目 pp.164-184 第二章の総まとめ
第12回	『構想力の論理』第三章「技術」①	『構想力の論理』第三章「技術」の検討の第一回目 pp.185-202
第13回	「技術」②	「技術」の検討の第二回目 pp.203-221
第14回	「技術」③	「技術」の検討の第三回目と、全体の総まとめ pp.221-238

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

三木清『構想力の論理』（『三木清全集』第八巻）

現在、古本屋などで安価で入手可能であるので出来る限り各自入手することが望ましいが、入手できなかった場合でもコピーを講義担当教員が準備する。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、三木清の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては赤松常弘『三木清——哲学的思索の軌跡』（ミネルヴァ書房、1994年）が三木の思想の全体像を把握するには有益である。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。

講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないで、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。
紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。
パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【その他の重要事項】

修士課程の「日本思想史研究Ⅰ-2」と合同での実施となる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史
<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

- ① 「「ひと」であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）
- ② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）
- ③ 「『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—」（『倫理学紀要第24輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of the concept "Einbildungskraft (in German)" in other words "imagination (in English)" ,through reading thoroughly "The logic of imagination" by Miki Kiyoshi. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

LIT500B2

日本文学A

安藤 宏

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代において、「小説」というジャンルがどのように形成されたのかを、表現史的な展開とともに明らかにすることを目的とする。

【到達目標】

岩波新書「私」をつくる 近代小説」の各章をそれぞれレポーターが担当し、論旨をまとめた上で、自分の考えや調査結果を発表する。それによって、日本語で書かれた「小説」というジャンルの特質について理解を深めることができる。また、これらの作業を通して、文学史、表現史への理解を含め、近代文学研究の基本的な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

一般論について教員が講述する回と、それを踏まえた上で、参加者がテキストの章をそれぞれ分担し、レポーターをつとめる回とからなる。いずれも講述、発表後に自由討論形式で授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の打ち合わせと、近代小説についての基本的な考え方の説明。
第2回	「猿ヶ島」研究	太宰治「猿ヶ島」を題材に、教員が講義を行う。
第3回	芥川龍之介「地獄変」研究	当該作をサンプルに、共同で読解のトレーニングを行う。
第4回	言文一致	テキストの第一章を素材に検討を行う。
第5回	人称	テキストの第二章を素材に検討を行う。
第6回	読者	テキストの第三章を素材に検討を行う。
第7回	回想	テキストの第四章を素材に検討を行う。
第8回	小説の小説	テキストの第五章を素材に検討を行う。
第9回	幻想性	テキストの第六章を素材に検討を行う。
第10回	共同性	テキストの第七章を素材に検討を行う。
第11回	私小説	テキストの第八章を素材に検討を行う。
第12回	舞姫	森鷗外の「舞姫」を例に、実践的な読解を行う。
第13回	和解	志賀直哉の「和解」を例に、実践的な読解を行う。
第14回	総括	近代小説の表現史について、扱った題材をもとに総括的な討論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

検討の対象となる作品を予め読んできて自分なりの着眼点を用意する。

【テキスト（教科書）】

安藤宏「私」をつくる 近代小説の試み」（岩波新書、2015年）

【参考書】

安藤宏「近代小説の表現機構」（岩波書店、2012年）

【成績評価の方法と基準】

授業における発表内容 40% レポート 60%

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学

<研究テーマ> 近代小説

<主要研究業績> 『近代小説の表現機構』（2012年、岩波書店） 『自意識の昭和文学』（1994年、至文堂）

【Outline and objectives】

In light of the distinctive modes of expression used in modern novels, this class focuses on textual features and presents key points that demonstrate the characteristics typical of modern Japanese novels in a broad and easy-to-understand manner.

LIT500B2

日本文学B

安藤 宏

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代において、「小説」というジャンルがどのように形成されたのかを、表現史的な展開とともに明らかにすることを目的とする。

【到達目標】

近代の代表的な小説を、一回につき一作品、時代を追って検討していく。これらの作業を通して、文学史、表現史への理解を含め、近代文学研究の基本的な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

予め打ち合わせた小説を読み合わせ、毎回、レポーターが研究発表を行い、質疑応答、討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の打ち合わせと近代小説についての基本的な考え方の説明。
第2回	樋口一葉「十三夜」	樋口一葉「十三夜」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第3回	泉鏡花「化銀杏」	泉鏡花「化銀杏」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第4回	森鷗外「沈黙の塔」	森鷗外「沈黙の塔」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第5回	森鷗外「かのやうに」	森鷗外「かのやうに」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第6回	夏目漱石「文鳥」	夏目漱石「文鳥」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第7回	永井荷風「狐」	永井荷風「狐」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第8回	芥川龍之介「舞踏会」	芥川龍之介「舞踏会」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第9回	芥川龍之介「蟹気楼」	芥川龍之介「蟹気楼」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第10回	志賀直哉「范の犯罪」	志賀直哉「范の犯罪」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第11回	志賀直哉「焚火」	志賀直哉「焚火」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第12回	佐藤春夫「F・O・U」	佐藤春夫「F・O・U」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第13回	谷崎潤一郎「小さな王国」	谷崎潤一郎「小さな王国」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第14回	葉山嘉樹「淫売婦」	葉山嘉樹「淫売婦」を題材に、「小説」の分析を実践する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

検討の題材となる作品を予め読んできて自分なりの着眼点を用意する。

【テキスト（教科書）】

時間ごとに打ち合わせ、プリントを用いる。

【参考書】

安藤宏「近代小説の表現機構」（岩波書店、2012年）

【成績評価の方法と基準】

授業における発表内容 40% レポート 60%

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学

<研究テーマ> 近代小説

<主要研究業績> 『近代小説の表現機構』（岩波書店、2012年）

【Outline and objectives】

In light of the distinctive modes of expression used in modern novels, this class focuses on textual features and presents key points that demonstrate the characteristics typical of modern Japanese novels in a broad and easy-to-understand manner.

LIT500B2

日本文芸批評史A

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸批評史A」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「近代の文芸批評I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第2回	坪内逍遙と二葉亭四迷	坪内逍遙「小説神髓」と二葉亭四迷「小説総論」を読み、その意義を理解します。
第3回	島崎藤村と自然主義の誕生	島崎藤村「千曲川のスケッチ」を読み、日本における自然主義文学のはじまりについて解説します。
第4回	北村透谷『透谷選集』を読む	本の文芸批評の出発点として、北村透谷『北村透谷選集』について発表してもらいます。
第5回	1910年と石川啄木	日本の近代文学史における1910年の状況を解説し、石川啄木「時代閉塞の現状」を読みます。
第6回	佐藤春夫の評論文を読む	印象批評の例として、佐藤春夫の評論文について発表してもらいます。
第7回	平塚らいてうと与謝野晶子	平塚らいてう「元始女性は太陽であった」と与謝野晶子「母性偏重を排す」を読み、その意義を理解します。
第8回	小林秀雄の出版	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第9回	白樺派の登場と私小説の完成	生田長江「自然主義前派の跳梁」と武者小路実篤「新しき村に就て」を読み、その意義を理解します。
第10回	中野重治の批評	プロレタリア文学以降のもっとも重要な成果の一つである、中野重治の評論文について発表してもらいます。
第11回	谷崎潤一郎と芥川龍之介	谷崎潤一郎「饞舌録（抄）」と芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な（抄）」を読み、その意義を理解します。
第12回	平野謙の登場	戦後文学の代表的な文芸時評家である、平野謙の評論文について発表してもらいます。
第13回	中村光夫と1945年	中村光夫「『近代』への疑惑」を読み、1945年の敗戦にいたるまでの日本文学の状況を概括します。
第14回	江藤淳の出版	戦後文学を問い直す視点を提示しつづけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇] および[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本文芸批評史B

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸批評史B」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「近代の文芸批評Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。
まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第2回	伊藤整と横光利一	伊藤整「新心理主義文学」と横光利一「純粋小説論」を読み、その意義を理解します。
第3回	萩原朔太郎と保田與重郎	萩原朔太郎「日本への回帰」と保田與重郎「文明開化の論理の終焉について」を読み、その意義を理解します。
第4回	吉本隆明の登場	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしてつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第5回	川端康成と三島由紀夫	敗戦による1945年の断絶に注意しつつ、川端康成「横光利一弔辞」と三島由紀夫「重症者の兇器」を読みます。
第6回	福田恒存の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、福田恒存の評論文について発表してもらいます。
第7回	戦後文学の空間と戦後派の登場	敗戦後に登場した戦後派の作家たちについて概括し、戦後文学のあり方の特徴を理解します。
第8回	秋山駿の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、秋山駿の評論文について発表してもらいます。
第9回	第三の新人と戦後文学批判	戦後文学のあり方に抵抗するように登場した第三の新人について概括し、吉本隆明や江藤淳による戦後文学批判の視点を理解します。
第10回	柄谷行人の出発	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、柄谷行人の評論文について発表してもらいます。
第11回	構造主義とテキスト論	20世紀後半以降の構造主義思想の意義について考察し、その文学版であるテキスト論に対する理解を深めます。
第12回	加藤典洋の登場	江藤淳を批判しつつ戦後文学を相対化する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第13回	フェミニズム文学論	1980年代以降の日本のフェミニズム思想について考察を加え、その文学的意義を理解します。
第14回	現代文学の批評	現代文学に対して重要な論点を提供しているものを選び、その評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取りあげられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点4割、発表およびレポート6割で総合的に評価します。まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができていないか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論

〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特徴を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本古代文芸原典研究 A

坂本 勝

【Outline and objectives】

In this course, we will explore the writing systems of old Japanese. Their impact on the development of literature and Japanese culture would also be examined.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代日本語の文字表記の状況を理解する。文字と出会うことで文学はどのように展開していったのか、日本の文化にとってどのような意味があったのかなどを理解する。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸原典研究A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「神話と歌Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

古事記、日本書紀を資料に、古代日本のことばと文字の出会いの意味を考察する。

古代日本においてどのように〈やまと的〉〈日本的〉なものが生まれ展開していったのかを、具体的な資料に即して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	講義概説	古事記、日本書紀の成立について検討する。
第2回	古事記冒頭神話論	古事記冒頭の神話の特長について文体論的に検討する。
第3回	古事記冒頭ムスヒ神論	古事記冒頭の神話の形成過程を検討する。ムスヒ神の独自性を文体論的に検討する。
第4回	古事記冒頭高天原神話論	古事記における高天原の意味について文体論的に検討する。
第5回	イザナキ、イザナミ神話論	古事記におけるイザナキ、イザナミ神話の意味について文体論的に検討する。
第6回	国生み神話論	古事記における国生み神話の意味について文体論的に検討する。
第7回	アマテラス、ツクヨミ、スサノヲ神話論	古事記における3貴子誕生の意味について文体論的に検討する。
第8回	アマテラス・スサノヲ神話論	古事記における当該2神の意味について文体論的に検討する。
第9回	ウケヒ神話論	アマテラスとスサノヲの問題を文体論的に検討する。
第10回	岩屋戸神話論	同前。
第11回	ヲロチ神話論	古事記における出雲神話の問題を文体論的に検討する。
第12回	大国主神話論	同前。
第13回	根の国神話論	同前。
第14回	まとめ	上記の検討を踏まえ、古事記・日本書紀のことばと文字の関係を文学成立の問題として確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

古事記上巻、日本書紀巻1・2を活字テキストによって読み進める。

【テキスト（教科書）】

古事記、日本書紀（ともに日本古典文学大系、岩波文庫その他、原文のついているもの）

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%

「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

実施していない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥—万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

LIT500B2

日本古代文芸原典研究 B

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代日本語の文字表記の状況を理解する。文字と出会うことで文学はどのように展開していったのか、日本の文化にとってどのような意味があったのかなどを理解する。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸原典研究 B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「神話と歌Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

万葉集を資料に、古代日本のことばと文字の出会いの意味を考察する。古代日本においてどのように〈やまと的〉〈日本的〉なものが生まれ展開していったのかを、具体的な資料に即して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	万葉集の成立について検討する。
第 2 回	初期万葉	初期万葉の特徴について文体論的に検討する。
第 3 回	同前	同前。
第 4 回	同前	同前。
第 5 回	同前	同前。
第 6 回	柿本人麻呂と持統朝	柿本人麻呂を中心に持統朝の文学状況について検討する。
第 7 回	同前	同前。
第 8 回	同前	同前。
第 9 回	同前	同前。
第 10 回	同前	同前。
第 11 回	柿本人麻呂歌集	柿本人麻呂歌集の特徴について文体論的に検討する。
第 12 回	同前	同前。
第 13 回	同前	同前。
第 14 回	まとめ	初期万葉と持統朝の文学状況を文字化の問題を中心に確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

初期万葉作品、柿本人麻呂を中心とする持統朝の作品を活字テキストによって読み進める。

【テキスト（教科書）】

万葉集（講談社文庫、塙書房版万葉集本文編その他、原文のついているもの）

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%

「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集巻一・六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

In this course, we will explore the writing systems of old Japanese. Their impact on the development of literature and Japanese culture would also be examined.

LIT500B2

日本古代文芸演習 A

加藤 昌嘉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

◆『源氏物語』の精読&注釈

◆『源氏物語』「夢浮橋」巻を、写本の影印を使って精読します。

【到達目標】

◆以下の 5 点を身に付けることが目標です。

A、くずし字（変体仮名）を解説する力

B、古文を正確に訳出する力

C、語法や典拠を調査する力

D、明快なプレゼンテーションをおこなう力

E、問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸演習 A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「平安時代の物語Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

◆保坂本「夢浮橋」巻（鎌倉時代写）を注釈してゆきます。

◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。それを元に、全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	「夢浮橋」	薫、帰京
2	「夢浮橋」	使者小君
3	「夢浮橋」	小君、来訪
4	「夢浮橋」	僧都の手紙①
5	「夢浮橋」	僧都の手紙②
6	「夢浮橋」	浮舟の反応①
7	「夢浮橋」	浮舟の反応②
8	「夢浮橋」	薫の手紙①
9	「夢浮橋」	薫の手紙②
10	「夢浮橋」	論文検討①
11	「夢浮橋」	論文検討②
12	「夢浮橋」	浮舟の反応①
13	「夢浮橋」	浮舟の反応②
14	「夢浮橋」	巻末

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

◆「浮舟」「蜻蛉」「手習」巻を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

◆保坂本『源氏物語』：WEB サイト《e 国宝》

【参考書】

◆以下の現代語訳・注釈書を推薦します。

◎大塚ひかり 訳『源氏物語（6）』（ちくま文庫）

◎『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夢浮橋』（至文堂）

【成績評価の方法と基準】

◆発表の出来 70%。ディスカッション参加度 30%。

◆上記【到達目標】の 5 点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

◆専門領域：日本古典文学

◆研究テーマ：平安時代の物語

◆主要研究業績：著書『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT500B2

日本古代文芸演習B

加藤 昌嘉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』の精読&注釈
- ◆『源氏物語』『澁標』巻を、写本の影印を使って精読します。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
- A、くずし字（変体仮名）を精読する力
- B、古文を正確に訳出する力
- C、語法や典拠を調査する力
- D、明快なプレゼンテーションをおこなう力
- E、問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸演習B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「平安時代の物語Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- ◆飯島本「澁標」巻（室町時代写）を注釈してゆきます。
- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。それを元に、全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	「澁標」	光源氏、復権
2	「澁標」	朱雀院
3	「澁標」	朧月夜
4	「澁標」	冷泉帝
5	「澁標」	政権交代
6	「澁標」	頭中将
7	「澁標」	夕霧
8	「澁標」	明石の姫君
9	「澁標」	宿曜の予言
10	「澁標」	相人の言
11	「澁標」	論文検討
12	「澁標」	乳母選定
13	「澁標」	乳母、明石へ
14	「澁標」	紫の上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「須磨」「明石」巻を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

- ◆池田和臣 編『飯島本源氏物語（3）』（笠間書院）

【参考書】

- ◆以下の現代語訳・注釈書を推薦します。
- ◎林望 訳『謹訳源氏物語（3）』（祥伝社文庫）
- ◎『源氏物語の鑑賞と基礎知識 澁標』（至文堂）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT500B2

日本中世文芸原典研究A

阿部 真弓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目標とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、日本人にとっては身近でなじみの深い、しかし今なお謎の多い歌集『百人一首』を注釈し、鑑賞します。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辭等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世以降、『百人一首』がどのように享受、解釈されてきたか、理解する。
- ③簡単なくずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本中世文芸原典研究A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「書誌学と文献学Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

写本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首』を精読します。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。編者・歌人の問題や歴史的背景、また研究史等についても勘案しながら、日本文芸史上、この作品がどのように位置付けられるか、考察を深めていきます。また『百人一首』の古注釈を参照し、中世・近世ではどのように解釈されていたかについても検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業計画の説明をし、発表順序等を決定する
2	作品の概要について	『百人一首』に関する問題を整理し、説明する
3	編者、歌人について	『百人一首』編者の問題や、記載された和歌の作者たちについて解説する
4	『百人一首』研究史について	中世から現代に至るまでの研究史を概観する
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する
6	変体仮名について	変体仮名について解説する
7	変体仮名解読練習	変体仮名解読の練習を行う
8	受講生による発表と討論	翻刻について
9	受講生による発表と討論	歌人について
10	受講生による発表と討論	注釈について
11	受講生による発表と討論	解釈について
12	受講生による発表と討論	歴史的背景について
13	受講生による発表と討論	文学史上の問題について
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密な準備を行うこと。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞむこと。発表後は、討論によって得た課題もあわせて、さらに考察を深め、レポートにまとめて下さい。

【テキスト（教科書）】

笠間文庫 04 <影印シリーズ> 『百人一首 宮内庁書陵部蔵』（樋口芳麻呂編、笠間書院、2005年）
その他、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布します。

【参考書】

『日本文学新史 中世』（小山弘志編、至文堂、1990年）
ちくま新書 182 『百人一首への招待』（吉海直人、筑摩書房、1998年）
『百人一首 王朝和歌から中世和歌へ』（井上宗雄、笠間書院、2004年）
角川ソフィア文庫『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 百人一首（全）』（谷知子、角川学芸出版、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、レポート、討論への参加度を考慮し、総合的に判断します。
なお、配分は発表内容 40%（到達目標①②③④）、レポート 40%（到達目標①②⑤）、討論への参加度 20%（到達目標⑤）とします。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、くずし字を読む練習を行います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本古典文学

<研究テーマ>日記文学、鎌倉期の歌壇

<主要研究業績>『「とはずがたり」の恋一物語る二条』（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論一糾える言葉の連鎖一」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「嵯峨のかよひち」考—藤原為家の涙—」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline and objectives】

This course deals with the waka anthology Hyakunin Isshu (one hundred waka poems by one hundred poets). The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.

LIT500B2

日本中世文芸原典研究B

阿部 真弓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目標とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は春学期Aに引き続き、『百人一首』を一首ずつ注釈し、鑑賞します。また、そうした精読作業を踏まえた上で、『百人一首』をめぐる問題を検討し、和歌史にどのように位置づけられる作品であるのか考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辞等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世以降、『百人一首』がどのように享受、解釈されてきたか、理解する。
- ③研究テーマを見出し、文学作品・諸事象を分析する力、論理的に考察する能力を身につける。
- ④くずし字を読むことができる。
- ⑤プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑥ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本中世文芸原典研究B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「書誌学と文献学Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

春学期A同様、写本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、中世文芸作品を精読します。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳します。編者・歌人の問題や歴史的背景、また研究史等についても勘案しながら、日本文芸史上、その作品がどのように位置づけられるか、考察を深めていきます。

その他、希望があれば、受講者が注釈作業を通して発見した問題点について研究した成果を発表してもらい回も設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業計画の説明をし、発表順序等を決定する
2	作品をめぐる問題	『百人一首』成立に大きく関わる『百人秀歌』について考察する
3	編者をめぐる問題	中世・近世の『百人一首』解釈や、「和歌の家」の問題について考察する
4	中世文芸史上の問題	『百人一首』が後世に与えた影響等について考察する
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する
6	くずし字について	変体仮名や漢字のくずし字について説明する
7	くずし字解読練習	変体仮名や漢字のくずし字を読む練習をする
8	受講生による発表と討論	翻刻について
9	受講生による発表と討論	歌人について
10	受講生による発表と討論	注釈について
11	受講生による発表と討論	解釈について
12	受講生による発表と討論	歴史的背景について
13	受講生による発表と討論	文芸史上の問題について
14	まとめ	秋学期の内容に関する総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密な準備を行うこと。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞむこと。発表後は、討論によって得た課題もあわせて、さらに考察を深め、レポートにまとめて下さい。

【テキスト（教科書）】

笠間文庫 04 <影印シリーズ> 『百人一首 宮内庁書陵部蔵』（樋口芳麻呂編、笠間書院、2005年）

その他、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布します。

【参考書】

『日本文学新史 中世』（小山弘志編、至文堂、1990年）

ちくま新書 182 『百人一首への招待』（吉海直人、筑摩書房、1998年）

『百人一首 王朝和歌から中世和歌へ』（井上宗雄、笠間書院、2004年）

角川ソフィア文庫『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 百人一首（全）』（谷知子、角川学芸出版、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、レポート、討論への参加度を考慮し、総合的に判断します。

なお、配分は発表内容 40%（到達目標①②③④⑤）、レポート 40%（到達目標①②③⑥）、討論への参加度 20%（到達目標⑥）とします。

【学生の意見等からの気づき】

一首ずつ丁寧に読み進めます。秋学期 B では、「百人一首」以外の資料も用いて、くずし字解読練習を行います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古典文学

<研究テーマ> 日記文学、鎌倉期の歌壇

<主要研究業績> 『「とはずがたり」の恋一物語る二条』（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論一糾える言葉の連鎖一」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひち』考一藤原為家の涙一」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline and objectives】

This course deals with the waka anthology Hyakunin Isshu (one hundred waka poems by one hundred poets). The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.

LIT500B2

日本中世文芸演習 A

伊海 孝充

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、江戸時代までに編まれた能（謡曲）の注釈書を読んでいく。能の作品研究をしていくためには、様々な能楽資料を使いこなさなければならない。また、能の詞章（謡本）だけを吟味するだけではなく、現代までの注釈書類も参照する必要がある。これらの中には言葉の解釈だけでなく、作品の趣向に関わるような興味深い問題提起も含まれている。この資料を通して、能の作品研究の基礎を学んでいく。

【到達目標】

本講義では、能（謡曲）の注釈書の詳細な分析を通して、能楽の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本中世文芸演習 A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第 2 回	能の作品研究概説	主要な作品研究の先行論文を読み、研究手法を概説する。
第 3 回	能楽資料概説①	能の作品研究に用いる資料を概説する（謡本編）。
第 4 回	能楽資料概説②	能の作品研究に用いる資料を概説する（注釈書編）。
第 5 回	「養老」①	担当者による資料分析。
第 6 回	「養老」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 7 回	「頼政」①	担当者による資料分析。
第 8 回	「頼政」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 9 回	「野宮」①	担当者による資料分析。
第 10 回	「野宮」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 11 回	「班女」①	担当者による資料分析。
第 12 回	「班女」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 13 回	「野守」①	担当者による資料分析。
第 14 回	「野守」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に能楽鑑賞に行くことを勧める。能楽だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってもよい。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%

講義での発言 30%

レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

能楽研究は特殊な知識を必要とするが、専門外の学生もついてこられるようフォローしていく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学。特に能楽。

<研究テーマ> 能の作品研究。謡本研究。

<主要研究業績>

『切合能の研究』（檜書店、2011年）。「玉屋謡本の研究（4）玉屋謡本の節付表記をめぐる試論」（『能楽研究』42号、2018年3月）

【Outline and objectives】

In this lecture, we will read the commentary on Noh (Kayo) that was edited by the Edo period. In order to do research on the work of Noh, we have to master various Noh play materials. Moreover, it is necessary not only to examine only the lyric chords of Noh (utaibon), but also to refer to annotation documents up to the present age. Among these, not only interpretation of words but also interesting questions related to ideas of the work are included. Through this material, we will learn the fundamentals on study of Noh.

LIT500B2

日本中世文芸演習 B

伊海 孝充

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様に江戸時代までに編まれた能（謡曲）の注釈書を用いた能の作品研究を行っていく。秋学期からの出席者を考慮し、まず前期に学んだ能の作品研究の基礎を確認した上で、当該資料を用いた作品研究を行っていく。

【到達目標】

本講義では、春学期同様に能（謡曲）の注釈書の詳細な分析を通して、能楽の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とするが、それが一定程度身に付いた出席者には他の資料も紹介し、主要な能楽資料に関する知識も広げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本中世文芸演習 B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行っていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第 2 回	「蟻通」①	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 3 回	「蟻通」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 4 回	「清経」①	担当者による資料分析。
第 5 回	「清経」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 6 回	「西行桜」①	担当者による資料分析。
第 7 回	「西行桜」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 8 回	「盛久」①	担当者による資料分析。
第 9 回	「盛久」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 10 回	「鞍馬天狗」①	担当者による資料分析。
第 11 回	「鞍馬天狗」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 12 回	「舟弁慶」①	担当者による資料分析。
第 13 回	「舟弁慶」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第 14 回	総括	謡曲の注釈書のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に能楽鑑賞に行くことを勧める。能楽だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってみよう。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表	50%
講義での発言	30%
レポート	20%

【学生の意見等からの気づき】

注釈書だけでなく、できる限り多くの能楽資料を紹介する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学。特に能楽。
<研究テーマ> 能の作品研究。謡本研究。
<主要研究業績>

『切合能の研究』（檜書店、2011年）。「玉屋謡本の研究（4）玉屋謡本の節付表記をめぐる試論」（『能楽研究』42号、2018年3月）

【Outline and objectives】

As well as the spring semester we will do research on annotations of Noh edited by the Edo period. Considering attendees from the fall semester, we will first conduct a work research using the materials after confirming the fundamentals of the work of Noh studied in the previous term.

日本近世文芸原典研究 A

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、18世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙 I 作品を取りあげ、読み解く。本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら、江戸の人びとの感覚に迫りたい。春学期は中国の仙人尽くしを趣向とした山東京伝『艶哉女遷人』（寛政元・1789年刊）をとりあげる予定。

最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。注釈はないので、一からの解説となる。

【到達目標】

- (1) 作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読む力をつける。
- (2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本近世文芸原典研究 A」においては「DP2」「DP3」に関連する国際日本学インスティテュート「江戸の文芸と文化 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	時代状況と出版界、黄表紙とは
第 2 回	講義 1	作者と画工について
第 3 回	講義 2	注釈の基本・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、次回のテキストを読んでくる。

発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

『山東京伝全集』第 2 巻（ベリかん社、1993）から『艶哉女仙人』をコピーで配布する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ> 大田南畝・江戸狂歌・戯作

<著書>

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

『吉原狂歌本三種』（太平書屋 2002）

【共著】

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

『江戸見立本の研究』（汲古書院 2006）

LIT500B2

日本近世文芸原典研究B

小林 ふみ子

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、18世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙1作品を取りあげ、読み解く。本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら、江戸の人びとの感覚に迫りたい。秋学期は、仙人尽くしに異国めぐりの趣向を絡めた山東京伝『福徳果報兵衛伝』（寛政5・1793年刊）を取りあげる。最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。注釈はないので、一からの解説となる。

【到達目標】

- (1) 作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読む力をつける。
- (2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本近世文芸原典研究B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「江戸の文芸と文化II」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	概説	寛政期の黄表紙の変質
第2回	講義1	異国めぐりの趣向の系譜について
第3回	講義2	注釈の基本のみなおし・序文を読む
第4回	学生の発表	上巻1
第5回	学生の発表	上巻2
第6回	学生の発表	上巻3
第7回	学生の発表	中巻1
第8回	学生の発表	中巻2
第9回	学生の発表	中巻3
第10回	学生の発表	下巻1
第11回	学生の発表	下巻2
第12回	学生の発表	下巻3
第13回	学生の発表	補足
第14回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

『山東京伝全集』第3巻（ベリかん社、2001年）よりコピーで配付する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告70%、授業中の質疑などの参加態度30%によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<近年の論文・その他書き物>

【論文】『書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から一』『京都語文』26号 2018

【一般誌】『江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した』『歴史REAL 大江戸の都市力』洋泉社MOOK 2018

【論文】『山東京伝の地方読者へのまなざし』『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【一般誌】『歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸』『別冊太陽 歌麿決定版』2016

【一般誌】『国芳時代の絵師ビジネス』『芸術新潮』2016年4月号

【研究ノート】『欲望のありがちな矛盾―男が詠う春本の女歌』『アジア遊学』195号 2016

【論文】『江戸狂歌の地方普及』『日本文学誌要』91号 2015

LIT500B2

日本近世文芸演習 A

高木 元

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本十九世紀文学
＜研究テーマ＞絵入小説史の書誌学的研究
＜主要研究業績＞『江戸読本の研究 - 十九世紀小説様式攷 -』（べりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。 <https://fumikura.net> 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である注釈的読解に必要な参考資料群を紹介しつつ、具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見識を育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読し、固有名詞を中心とした語句の注釈が適切に出来るようになる。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと云う点の解明に及ぶ必要がある。これらの、原テキストに拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本近世文芸演習 A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「江戸の思想史 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

年度始めに受講生の顔ぶれとその専攻する分野を見きわめつつ、採り上げるに相応しいテキストを複数提示する。その後、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第 2 回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第 3 回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第 4 回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第 5 回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 6 回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第 7 回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 8 回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第 9 回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 10 回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第 11 回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 12 回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第 13 回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 14 回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを読んでおくことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えておく。発表者の注釈の可否については事前に調べておかないと論じられない。

また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業の進み具合を受講者の理解度にそくして、適宜かえてみる。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

LIT500B2

日本近世文芸演習 B

高木 元

<研究テーマ> 絵入小説史の書誌学的研究

<主要研究業績> 『江戸読本の研究 - 十九世紀小説様式攷 -』 (べりかん社 1995/10)、『中本型読本集』 (国書刊行会 1988/1) ほか。 <https://fumikura.net> 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見通しを育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読力をつける。参考図書を活用して語句の注釈が適切に出来るようにする。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけでなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと云う点の解明に及ぶ必要がある。これらの原本に拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

日本文学専攻「日本近世文芸演習 B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「江戸の思想史Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生の専攻する分野を見きわめつつ、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的な位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第 2 回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第 3 回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第 4 回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第 5 回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 6 回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第 7 回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 8 回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第 9 回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 10 回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第 11 回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 12 回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第 13 回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第 14 回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

テキストを読むことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないことと論じられない。

また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト (教科書)】

テキストが決定的次第、原本 (板本) のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する (100%)。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の理解度を見ながら授業の進行速度を調整する。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本十九世紀文学

LIT500B2

日本近代文芸原典研究 A

山田 俊治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代文学を研究する受講生各自の研究に資するよう、小説テキストの分析などの能力を養成する。

【到達目標】

日本近代文学を形成する言語、文体を把握し、テキスト分析の方法などを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

テキスト分析の方法についてその概略を説明した上で、各自が担当した小説作品を分析して発表してテキスト分析の力を養成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	テキスト分析の方法について。
第2回	明治期の文体	文語体と言文一致体について。
第3回	人称の問題	語りの構造について。
第4回	坪内逍遙「細君」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第5回	坪内逍遙「細君」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第6回	嵯峨の屋おむろ「くされたまご」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第7回	山田美妙「この子」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第8回	山田美妙「この子」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第9回	森鷗外「舞姫」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第10回	森鷗外「舞姫」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第11回	尾崎紅葉「拈華微笑」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第12回	清水紫琴「こわれ指輪」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第13回	樋口一葉「わかれ道」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第14回	まとめ	文体と物語内容について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に当該小説を読み、その粗筋、問題点をレポートする。

【テキスト（教科書）】

『日本近代短篇小説選 明治篇1』（岩波文庫）

【参考書】

授業時に随時発表するため、記入事項なし。

【成績評価の方法と基準】

発表及び討論への参加（50%）、期末レポート（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度よりの担当のため記入事項なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学研究

<研究テーマ>

近代文学成立期の研究—19世紀文化論

<主要研究業績>

『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会。2002.11

【Outline and objectives】

to develop the ability to analyze japanese modern literatures.

LIT500B2

日本近代文芸原典研究 B

山田 俊治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代文学を研究する受講生各自の研究に資するよう、小説テキストの分析などの能力を養成する。

【到達目標】

日本近代文学を形成する言語、文体を把握し、テキスト分析の方法などを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

テキスト分析の方法についてその概略を説明した上で、各自が担当した小説作品を分析して発表してテキスト分析の力を養成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	古典的文章体について。
第2回	幸田露伴「対鶮籠」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第3回	幸田露伴「対鶮籠」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第4回	幸田露伴「対鶮籠」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第5回	斎藤緑雨「かくれんぼ」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第6回	斎藤緑雨「かくれんぼ」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第7回	斎藤緑雨「かくれんぼ」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第8回	泉鏡花「龍潭譚」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第9回	泉鏡花「龍潭譚」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第10回	国木田独歩「武蔵野」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第11回	国木田独歩「武蔵野」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第12回	広津柳浪「雨」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第13回	広津柳浪「雨」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第14回	まとめ	明治文学について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に当該小説を読み、その粗筋、問題点をレポートする。

【テキスト（教科書）】

『日本近代短篇小説選 明治篇1』（岩波文庫）

【参考書】

授業時に随時発表するため、記入事項なし。

【成績評価の方法と基準】

発表及び討論への参加（50%）、期末レポート（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度よりの担当のため記入事項なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学研究

<研究テーマ>

近代文学成立期の研究—19世紀文化論

<主要研究業績>

『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会。2002.11

【Outline and objectives】

to develop the ability to analyze japanese modern literatures.

LIT500B2

日本近代文芸演習 I A

藤村 耕治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
2. 発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品について論文形式の発表用資料を作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は三回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。Semester末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。

なお、下記授業計画における時代区分は便宜的なものであり、受講者の研究対象によって変更がありうる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究について	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①（明治の文学 I）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②（同 2）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者1による発表・報告③（同 3）	結論と今後の課題についての報告。
第5回	担当者2による発表・報告①（同 4）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第6回	担当者2による発表・報告②（同 5）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第7回	担当者2による発表・報告③（同 6）	結論と今後の課題についての報告。
第8回	担当者3による発表・報告①（大正の文学 I）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第9回	担当者3による発表・報告②（同 2）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第10回	担当者3による発表・報告③（同 3）	結論と今後の課題についての報告。
第11回	担当者4による発表・報告①（同 4）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第12回	担当者4による発表・報告②（同 5）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第13回	担当者4による発表・報告③（同 6）	結論と今後の課題についての報告。
第14回	各発表担当者による総括	各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回 2000 字から 4000 字程度の報告用資料を作成する。担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行って行くこと。単に通り眼を通すのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように十分な準備をしていく必要がある。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらう。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容（40%）
2. 総括レポートとしての論文の内容（30%）
3. 担当時以外の小レポートの内容（10%）
4. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20%）

【学生の意見等からの気づき】

各人の修士論文の一部を構成しうるような高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学

〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。

〈近年の主要な研究業績〉

- ①「清岡卓行と大連」（『国際日本学研究叢書 14 多文化共生としての日本研究』勉誠出版、2012 年刊）
- ②「国民文学論争と歴史社会学派」（近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会共編「近藤忠義 人と学問 第二集・第三集合併号」2012 年）
- ③「笠原淳論序説」（日本文学誌要第 93 号、2016 年）
- ④「高橋和巳 未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018 年刊）

【Outline and objectives】

We will analyze and examine Japanese contemporary literature, especially literary works since the syowa period.

LIT500B2

日本近代文芸演習 I B

藤村 耕治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して研究報告としての発表用資料を論文形式で作成し、発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く緻密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作品の、作家の全業績における位置づけ及び文学史全体における位置づけを明確にし、作家論的な視点と歴史的な視点の双方を導入することによって、より幅広い文学的な視野と知見を身につける。
2. 発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、最終的にはその成果を学術論文・修士論文にまとめられる高度な文章力・論理構成力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする日本近・現代の作家・評論家・詩人等の作品について発表用資料を論文形式で作成して発表、他の受講者を交えて討議する形で行う。受講者の人数によって若干異なるが、担当回数は三回程度を目処とする。そのため、取り上げる具体的な作品に関しては、受講者の関心・研究テーマによって決定する。Semester末には、発表・討議を通しての考察を踏まえた、総括的な成果報告を行う。

なお、下記授業計画における時代区分は便宜的なものであり、受講者の研究対象によって変更がありうる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究について	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマについて聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①（昭和の文学 I）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②（同 2）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者1による発表・報告③（同 3）	結論と今後の課題についての報告。
第5回	担当者2による発表・報告①（同 4）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第6回	担当者2による発表・報告②（同 5）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第7回	担当者2による発表・報告③（同 6）	結論と今後の課題についての報告。
第8回	担当者3による発表・報告①（戦後の文学 I）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第9回	担当者3による発表・報告②（同 2）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第10回	担当者3による発表・報告③（同 3）	結論と今後の課題についての報告。
第11回	担当者4による発表・報告①（同 4）	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第12回	担当者4による発表・報告②（同 5）	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第13回	担当者4による発表・報告③（同 6）	結論と今後の課題についての報告。
第14回	各発表担当者による総括	各自の発表・報告・討議に基づいた総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、主題・動機・時代背景・人物・構造・文体等についても目を配りながら、毎回 2000 字から 4000 字程度の報告用レジュメを作成する。

担当者以外の受講者も、当該作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこよう。単に通り眼を通すというのではなく、担当者と互角に討議し、適確な批評が可能となるように十分な準備をしてこよう必要がある。また、担当者以外の受講生にも、当該作品に関する小レポートを提出してもらおう。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメとプレゼンテーションの内容（40%）
2. 総括レポートとしての論文の内容（30%）
3. 担当時以外の小レポートの内容（10%）
4. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20%）

【学生の意見等からの気づき】

各人の修士論文の一部を構成しようような高度な論文を年間に一本は完成させることを目指せるよう指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学

〈研究テーマ〉特に第二次大戦後の戦後派文学および彼らの文学精神・意識を継承した作家・作品。

〈近年の主要な研究業績〉

- ①「清岡卓行と大連」（『国際日本学研究叢書 14 多文化共生としての日本研究』勉誠出版、2012）
- ②「国民文学論争と歴史社会学派」（近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会共編「近藤忠義 人と学問 第二集・第三集合併号」2012）
- ③「笠原淳論序説」（日本文学誌要第 93 号、2016）
- ④「高橋和巳 未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018 年刊）

【Outline and objectives】

We will analyze and examine Japanese contemporary literature, especially literary works since shoyowa period.

LIN500B2

日本語学原典研究 A

間宮 厚司

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語学原典研究A」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

春学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の受講生が、年々多くなっているので、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』(笠間書院、2005年)

『万葉異説』(森話社、2011年)

『沖縄古語の深層/増補版』(森話社、2014年)

LIN500B2

日本語学原典研究B

間宮 厚司

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語学原典研究B」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつと紹介します。

【成績評価の方法と基準】

秋学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の受講生が、年々多くなっているため、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』(笠間書院、2005年)

『万葉異説』(森話社、2011年)

『沖繩古語の深層 / 増補版』(森話社、2014年)

LIN500B2

日本語学演習A

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知言語学の入門として様々な基礎概念を概観しながら、「捉え方」がいかに言語に反映されているのかということ学ぶ。また、それらがどう言語分析に活かせるのかを皆で検討しながら授業を進めていく。

【到達目標】

この授業では、言語学一般および認知言語学の基礎概念を紹介し、受講生がそれらの概念を用いて日本語の様々な文法・意味に関する問題についての確に説明できるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語学演習A」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本語学演習I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

入門的な内容も多く盛り込んだが、基本的には演習形式で行う。発表者はレジュメを準備し、それ以外の者は、分かりにくい点を容赦なく質問する。発表者はそれに答えられるよう、常に十分な準備をして望むこと。徹底的に議論してもらうため、リアクションペーパーは用いない。質問はその場で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	認知言語学研究の流れと現在	言語学史における認知言語学の位置づけについて
第2回	カテゴリー化とプロトタイプ	言語知識とカテゴリー化について
第3回	メタファー	認知能力の反映としてのメタファーについて
第4回	メトニミーとシネクドキー	認知能力の反映としてのメトニミーおよびシネクドキーについて
第5回	イメージ・スキーマ	ことばの意味についてイメージスキーマの観点から考える
第6回	類像性	ことばの意味について類像性の観点から考える
第7回	文法化	言語変化と文法化について考える
第8回	主体化	言語変化と主体化について考える
第9回	品詞の捉え方	品詞の定義とその境界について考える
第10回	構文（1）	構成性の原理について考える
第11回	構文（2）	構文のネットワークについて考える
第12回	認知言語学とコーパス（1）	コーパスの種類と利用法について紹介する
第13回	認知言語学とコーパス（2）	コーパスを用いた事例研究を紹介する
第14回	まとめ	総括を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

『日本語研究のための認知言語学』（梶山洋介著、研究社、2014年）を毎週1章ずつ読み、分からない概念・用語などを先に調べておくこと（2時間程度）。さらに、A4容姿1枚の要約を作成・提出すること（1時間程度）。加えて、発表担当者となっている者は、発表用のレジュメを作成すること（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

『日本語研究のための認知言語学』（梶山洋介著、研究社、2014年）

【参考書】

参考書・参考資料等

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
 『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
 『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
 『言語学大辞典』（三省堂）
 『日本語文法大辞典』（山口明徳・秋本守英編著、明治書院）
 『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
 『語用論キータム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）
 『日本語研究のための認知言語学』（梶山洋介著、研究社）
 『認知意味論: 言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
 『認知意味論のしくみ』（梶山洋介著、研究社）
 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
 『概念化と意味の世界—認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一郎著、研究社）

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート（40%）、小レポート（30%）、プレゼンテーション（30%）

【学生の意見等からの気づき】

留学生が多いので、日本語の用例が多いテキストを採用した。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）

『構文ネットワークと文法—認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline and objectives】

The objectives of this class are to understand the basic concepts of Cognitive Linguistics and to understand how conceptualizer's "construal" is reflected in the language expressions we usually use.

LIN500B2

日本語学演習B

尾谷 昌則

『構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ』(共著、研究社、2011年)

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

この授業では、(認知)言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でレポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】

- (1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してレポートができるようになる。
- (2) 言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

日本文学専攻「日本語学演習B」においては「DPI」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本語学演習II」においては「DPI」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく伝える。それ以外の受講者は、論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文レポート(1)	名詞の多義について
第2回	論文レポート(2)	動詞の多義について
第3回	論文レポート(3)	形容詞の多義について
第4回	論文レポート(4)	接続詞の多義について
第5回	論文レポート(5)	言いさし文と文法化について
第6回	論文レポート(6)	モダリティ副詞と文法化について
第7回	論文レポート(7)	接続詞の文法化について
第8回	論文レポート(8)	談話標識について
第9回	論文レポート(9)	若者言葉と対話表現について
第10回	論文レポート(10)	待遇表現について
第11回	論文レポート(11)	活用の変化について
第12回	論文レポート(12)	新語の発生について
第13回	論文レポート(13)	コーパスについて
第14回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと(2時間程度)。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと(1時間程度)。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく(1時間程度)。

【テキスト(教科書)】

使用しない。(必要に応じて、教員が資料を配付する。)

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』(辻幸夫、研究社)
『ことばの認知科学事典』(辻幸夫編集、大修館書店)
『日本語学キーワード事典』(小池清治ほか編著、朝倉書店)
『言語学大辞典』(三省堂)
『日本語文法大辞典』(山口明徳・秋本守英編著、明治書院)

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート(40%)、小レポート(30%)、プレゼンテーション(30%)

【学生の意見等からの気づき】

論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったため、今年度の実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」+肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年)

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年)

「接続詞ケドの手続き的意味」(『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年)

LIN500B2

日本語学特講 A

間宮 厚司

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は演習形式で、日本語研究の様々な問題点について考え、学びます。

【到達目標】

日本語とは、どのような言語なのか。敬語・語彙・語義・表記・方言・文法という点から、日本語を論理的に考える思考力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語学特講 A」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「現代日本語のしくみ I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

日本語に関する諸問題についてプリントを使用し、受講生全員に課題について考え、答えてもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	日本語の敬語の問題について (1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 3 回	日本語の敬語の問題について (2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 4 回	日本語の語彙について (1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 5 回	日本語の語彙について (2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 6 回	日本語の語義について (1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 7 回	日本語の語義について (2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 8 回	日本語の表記について (1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 9 回	日本語の表記について (2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 10 回	日本語の方言について (1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 11 回	日本語の方言について (2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 12 回	日本語の文法について (1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 13 回	日本語の文法について (2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第 14 回	まとめ	春学期の授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、日本語研究に関する本を多く読みましょう。必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、プリントを配布して、授業を行います。

【参考書】

町田健編『日本語学のしくみ』（研究社、2001年）
前田直子ほか『やさしい日本語のしくみ』（くろしお出版、2003年）
加藤重広・吉田朋彦『日本語を知るための 51 題』（研究社、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 % で、評価します。

【学生の意見等からの気づき】

初めて担当する授業のため、ありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005年）

『万葉異説』（森話社、2011年）

『沖縄古語の深層 / 増補版』（森話社、2014年）

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to learn about the problems of Japanese Language Studies.

LIN500B2

日本語学特講 B

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語の文法および意味の研究について知識を獲得することを目的とする。論文を講読することで具体的な研究方法を学び、全体でのディスカッションを通じてその理解を深める。

【到達目標】

日本語の文法論・意味論に関する学術論文が読み、主張とその根拠だけでなく問題点も指摘できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語学特講 B」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「現代日本語のしくみⅡ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

学生による発表（プレゼンテーション）に基づいて進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション、資料の配付	授業の進め方・履修要件などについての確認、および参考資料の配付を行う。
第 2 回	論文講読・要約およびプレゼンテーションのポイント	論文講読・要約およびプレゼンテーションの方法について、説明し、練習を行う。
第 3 回	論文講読「日本語の発見構文」	論文「日本語の発見構文」についてのプレゼンテーションを行う。
第 4 回	「日本語の発見構文」に関する討議	論文「日本語の発見構文」の内容に関して討議を行う。
第 5 回	論文講読「日本語恩恵構文の意味の拡がり」	論文「日本語恩恵構文の意味の拡がり」についてのプレゼンテーションを行う。
第 6 回	「日本語恩恵構文の意味の拡がり」に関する討議	論文「日本語恩恵構文の意味の拡がり」の内容に関して討議を行う。
第 7 回	論文講読「受益構文の意味拡張」	論文「受益構文の意味拡張」についてのプレゼンテーションを行う。
第 8 回	「受益構文の意味拡張」に関する討議	論文「受益構文の意味拡張」の内容に関して討議を行う。
第 9 回	論文講読「構文推意の成立と拡張」	論文「構文推意の成立と拡張」についてのプレゼンテーションを行う。
第 10 回	「構文推意の成立と拡張」に関する討議	論文「構文推意の成立と拡張」の内容に関して討議を行う。
第 11 回	論文講読「イ落ち構文における主語の有無」	論文「イ落ち構文における主語の有無」についてのプレゼンテーションを行う。
第 12 回	論文講読「イ落ち構文における主語の有無」	論文「イ落ち構文における主語の有無」についての討議を行う。
第 13 回	論文講読「構文としての日本語連体修飾構造」と討議	論文「構文としての日本語連体修飾構造」についてのプレゼンテーションおよび討議を行う。
第 14 回	本学期的まとめ	本学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最終レポートについて議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文中の知らなかった概念について、事前に全て調べておく。（参考書欄の書籍を参照してください。）さらに、発表担当者は、担当箇所の発表準備（2～4時間）。また、発表担当者以外の学生にも、毎回、論文要約の課題が与えられる（1～2時間程度）。

【テキスト（教科書）】

天野みどり・早瀬尚子（編）『構文の意味と拡がり』くろしお出版、3700 円（+税）、ISBN: 978-4-87424-744-0

【参考書】

- ・『言語学大辞典（第 6 巻 術語編）』（三省堂）
- ・『日本語文法大辞典』（明治書院）
- ・『日本語大事典』（朝倉書店）
- ・『日本語学研究事典』（明治書院）
- ・『語用論キータム事典』（開拓社）
- ・『意味論キータム事典』（開拓社）
- ・『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
- ・『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
- ・『新編 認知言語学キーワード事典』（研究社）
- ・『現代日本語文法 1～7 巻』（くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート（25 %）、論文内容発表（25 %）、発言・質問（25 %）、期末レポート（25 %）

【学生の意見等からの気づき】

グループ・ディスカッションによるピア・ラーニングが好評なので、できるだけ頻度を増やしたいと思っています。できる限り休まず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析（『言葉と認知のメカニズム』 pp.103-115. ひつじ書房、2008 年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第 11 巻、pp.25-43. 2006 年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第 7 号、pp.17-30. 2005 年）

「構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ」（共著、研究社、2011 年）

【Outline and objectives】

We will read some papers on Japanese syntax and semantics to study the way we analyze language structures and semantic properties.

LIT500B2

沖縄文芸史 A

竹内 重雄

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

折口信夫『古代研究（国文学篇）』と沖縄古代文学（民俗）との関係を丁寧に読み解き、考えていく。

方法としては1994（平成6）年刊行の『折口博士記念古代研究所紀要 別冊資料集 第二輯』収録の「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分（1）を題材として、新たな局面を切り開いていく。このメモは折口信夫が構想していたとされる『日本文学の発生』を書くためのものとされているが、折口の戦前に行った3回の沖縄調査と東京での沖縄出身研究者からの取材・調査、ならびに『古代研究』（国文学篇、民俗篇）の内容とからなる。折口の文学発生論が組みあがっていく過程を考える重要な手掛かりになると考えられる資料でもあり、古代文学史を研究するための大きな手掛かりになるはずである。

【到達目標】

・日本古代文学史研究の原点ともされる折口信夫の文学理論の組み立てを考察する。

・「日本古代の鏡」と考えられていた沖縄の文学・文化に対する評価・批判ができるようにする。

・現代の沖縄文学・文化研究の正確な位置付けをできるようにすることで、自らの文学・文化研究の参考とする。

・折口以降の古代文学史研究の足跡を追うことで、自らの文学史構築の方法を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「沖縄文芸史A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「沖縄文芸史I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

・講義を中心に行う。

・問題点については受講者とともに考え、討議する。

・意見の相違は、次のステップにつながるものであるため、自由に語り合える環境を大事にする。

・問題理解が容易なように映像等の資料を用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	沖縄文学概観	沖縄文学の概説
第2回	沖縄文学史・研究史概観	沖縄文学史・研究史について民俗学研究と合わせて概説する。
第3回	折口信夫の沖縄学研究概説	前後3回の沖縄調査、東京での沖縄出身研究者との交流を考える。
第4回	折口信夫『古代研究』の中の沖縄文学影響調査1	『古代研究』国文学篇講読
第5回	折口信夫『古代研究』の中の沖縄文学影響調査2	『古代研究』国文学篇講読
第6回	折口信夫『古代研究』の中の沖縄文学影響調査3	『古代研究』国文学篇講読
第7回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討1	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第8回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討2	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第9回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討3	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第10回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討4	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第11回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討5	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第12回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討6	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第13回	受講生研究発表1	受講生のテーマに基づく研究発表
第14回	受講生研究発表2	受講生のテーマに基づく研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・折口信夫『古代研究』は各自揃えること。

・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分については、入手困難なためコピーして配布。各回のゼミで取り上げる部分については、各自検討して参加すること。

【テキスト（教科書）】

・折口信夫『古代研究』

・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のコピー（配布）

【参考書】

授業開始後指示します。

【成績評価の方法と基準】

・自己の研究課題と当ゼミの研究内容との整合性をつけること（100%）。

・評価は「受講者研究発表」の内容に基づいて行う。

【学生の意見等からの気づき】

・沖縄文学の特殊性が理解できるように、授業の流れを意識して組み立てて行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代文学と沖縄文学との比較研究

<研究テーマ>

古事記と沖縄文学との比較研究

日本古代歌謡と南島古謡との比較研究

<主要研究業績>

①「おもろさうしの叙事性」（法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』42号 2015年3月）

②「鷲の皮の衣服を着けた神－少名毘古那神、『礼記』『冊封』との関わりから－」（沖縄文化協会『沖縄文化』44巻2号 2010年11月）

③「古代田植え歌謡の姿－古代歌謡と南島歌謡との比較研究－」（沖縄学研究所紀要『沖縄学』第2号 1998年4月）

【Outline and objectives】

In this course we will read and analyze Orikuchi Shinobu's "Kodai kenkyuu" and study about Okinawan ancient literature and folklore. Then, we will compare ancient Japanese literature and ancient Okinawan literature(epic songs).

Analyzing Orikuchi's work we will learn about his thought about the origins of literature, which he half got from its analysis of the ancient Okinawan literature and folklore.

I will provide you with Orikuchi Shinobu's research notes copy(published), where he discussed openly about his thoughts on the origin of literature.

LIT500B2

沖縄文芸史 B

竹内 重雄

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

折口信夫『古代研究（国文学篇）』と沖縄古代文学（民俗）との関係を丁寧に読み解き、考えていく。

方法としては1994（平成6）年刊行の『折口博士記念古代研究所紀要 別冊資料集 第二輯』収録の「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分（1）を題材として、新たな局面を切り開いていく。このメモは折口信夫が構想していたとされる『日本文学の発生』を書くためのものとされているが、折口の戦前に行った3回の沖縄調査と東京での沖縄出身研究者からの取材・調査、ならびに『古代研究（国文学篇、民俗篇）』の内容とからなる。折口の文学発生論が組みあがっていく過程を考える重要な手掛かりになると考えられる資料でもあり、古代文学史を研究するための大きな手掛かりになるはずである。

【到達目標】

- ・日本古代文学史研究の原点ともされる折口信夫の文学理論の組み立てを考察する。
- ・「日本古代の鏡」と考えられていた沖縄の文学・文化に対する評価・批判ができるようにする。
- ・現代の沖縄文学・文化研究の正確な位置付けをできるようにすることで、自らの文学・文化研究の参考とする。
- ・折口以降の古代文学史研究の足跡を追うことで、自らの文学史構築の方法を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「沖縄文芸史B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「沖縄文芸史II」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- ・講義を中心に行う。
- ・問題点については受講者とともに考え、討議する。
- ・意見の相違は、次のステップにつながるものであるため、自由に語り合える環境を大事にする。
- ・問題理解が容易なように映像等の資料を用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	沖縄文学概観	沖縄文学の概説
第2回	沖縄文学史・研究史概観	沖縄文学史・研究史について民俗学研究と合わせて概観する。
第3回	春学期に引き続き、「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討7	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第4回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討8	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第5回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討9	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第6回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討10	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第7回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討11	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第8回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討12	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第9回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察1	沖縄叙事文学史構築を構想する
第10回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察2	沖縄叙事文学史構築を構想する
第11回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察3	沖縄叙事文学史構築を構想する

第12回 「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察4

第13回 受講生研究発表1 受講生の研究テーマに基づく研究発表

第14回 受講生研究発表2 受講生の研究テーマに基づく研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・折口信夫『古代研究』は各自揃えること。
- ・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分については、入手困難なためコピーして配布。各回のゼミで取り上げる部分については、各自検討して参加すること。

【テキスト（教科書）】

- ・折口信夫『古代研究』
- ・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のコピー（配布）

【参考書】

授業開始後指示します。

【成績評価の方法と基準】

- ・自己の研究課題と当ゼミの研究内容との整合性をつけること（100%）。
- ・評価は「受講者研究発表」の内容に基づいて行う。

【学生の意見等からの気づき】

- ・沖縄文学の特殊性が理解できるように、授業の流れを意識して組み立てを行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代文学と沖縄文学との比較研究

<研究テーマ>

古事記と沖縄文学との比較研究

日本古代歌謡と南島古謡との比較研究

<主要研究業績>

- ①「おもしろさうしの叙事性」（法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』42号 2015年3月）
- ②「鶯の皮の衣服を着けた神—少名毘古那神、『礼記』『冊封』との関わりから—」（沖縄文化協会『沖縄文化』44巻2号 2010年11月）
- ③「古代田植え歌謡の姿—古代歌謡と南島歌謡との比較研究—」（沖縄学研究所紀要『沖縄学』第2号 1998年4月）

【Outline and objectives】

In this course we will read and analyze Orikuchi Shinobu's "Kodai kenkyuu" and study about Okinawan ancient literature and folklore. Then, we will compare ancient Japanese literature and ancient Okinawan literature(epic songs).

Analyzing Orikuchi's work we will learn about his thought about the origins of literature, which he half got from its analysis of the ancient Okinawan literature and folklore.

I will provide you with Orikuchi Shinobu's research notes copy(published), where he discussed openly about his thoughts on the origin of literature.

LIT500B2

中国文学A

遠藤 星希

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『史記』精読】

司馬遷の『史記』を精読する。『史記』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、『源氏物語』にもその影響が色濃く見えるのみならず、その後の日本文学にも影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（三家注や瀧川資言『史記會注考證』等）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ、『史記』巻八十六「刺客列伝」を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深め、そこに描かれた人々の英知を吸収すると同時に、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『史記』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に類出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『史記』本文を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「中国文学A」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『史記』の本文を数行ずつ区切ってそれぞれ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『史記』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	ガイダンス（3）	「史」とは何か——『史記』から窺える本来の「史」観
第4回	『史記』精読（1）	担当者による発表と討論（1）
第5回	『史記』精読（2）	担当者による発表と討論（2）
第6回	『史記』精読（3）	担当者による発表と討論（3）
第7回	『史記』精読（4）	担当者による発表と討論（4）
第8回	『史記』精読（5）	担当者による発表と討論（5）
第9回	『史記』精読（6）	担当者による発表と討論（6）
第10回	『史記』精読（7）	担当者による発表と討論（7）
第11回	『史記』精読（8）	担当者による発表と討論（8）
第12回	『史記』精読（9）	担当者による発表と討論（9）
第13回	『史記』精読（10）	担当者による発表と討論（10）
第14回	『史記』精読（11）	担当者による発表と討論（11）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・点校本二十四史修訂本『史記』（中華書局、2014）
 - ・瀧川資言『史記會注考證』（松雲堂、1935）
 - ・吉田賢抗〔ほか〕著『史記』1-15（明治書院、1973-2014）
 - ・小川環樹〔ほか〕訳『史記列伝』（岩波文庫、1975）
 - ・小竹文夫、小竹武夫訳『列伝』1-4（ちくま学芸文庫、1995）
 - ・武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（講談社文芸文庫、1997）
 - ・宮崎市定『史記を語る』（岩波文庫、1996）
- その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、講義内容の一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

中国古典文学

＜研究テーマ＞

時間意識・空間意識という側面からの分析を通した、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討

＜主要研究業績＞

『唐代伝奇「定婚店」をめぐる一考察』（『青山語文』46号、2016・3）

『遣臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代』（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

『李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死』（『日本中國學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read Sima Qian's Shiji (The Records of the Grand Historian). Shiji is one of the most familiar Chinese classics that not only exerted strong influence on the Tale of Genji but also had enduring effects on the subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in literary Chinese (So-called Sanjia Zhu — three standard commentaries — and Shiki kaichu kosho by Sukenobu Takigawa). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and absorb wisdom of people described therein through close reading of Chapter 86, Biographies of Assassins, of Shiji, and develop basic skills for close reading of Chinese classic writings.

LIT500B2

中国文学B

遠藤 星希

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『文選』精読】

梁の昭明太子が編纂した『文選』所収の詩を精読する。『文選』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、その後も日本文学に影響力を持続けた。本授業では、漢文で書かれた注（李善注や五臣注など）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ『文選』所収の詩を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深めつつ、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『文選』所収の詩を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「中国文学B」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収の詩の中から比較的有名なものを精選し、一首ずつ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『文選』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『文選』精読（1）	漢高祖「大風歌」
第4回	『文選』精読（2）	班婕妤「怨歌行」
第5回	『文選』精読（3）	謝靈運「登江中孤嶼」
第6回	『文選』精読（4）	「古詩十九首」より
第7回	『文選』精読（5）	曹操「短歌行」
第8回	『文選』精読（6）	陶淵明「雜詩」
第9回	『文選』精読（7）	潘岳「悼亡詩」より
第10回	『文選』精読（8）	阮籍「詠懷詩」
第11回	『文選』精読（9）	鮑照「東武吟」
第12回	『文選』精読（10）	謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」
第13回	『文選』精読（11）	無名氏「長歌行」
第14回	『文選』精読（12）	曹植「箜篌引」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめる。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・『文選』（上海古籍出版社、1986）
 - ・『文選』（中華書局、1977）
 - ・『六臣注文選』（浙江古籍出版社、1999）
 - ・小尾鄭一・花房英樹『文選』（集英社、1974-1976）
 - ・内田泉之助・網祐次〔ほか〕『文選』（明治書院、1963-2001）
 - ・斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房、1963）
 - ・興膳宏・川合康三『文選』（角川書店、1988）
 - ・高橋忠彦・神塚淑子『文選』（学習研究社、1985）
- その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいうような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、講義内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

中国古典文学

＜研究テーマ＞

時間意識・空間意識という側面からの分析を通じた、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討

＜主要研究業績＞

「唐代伝奇『定婚店』をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）

「遺臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中国學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read poetry contained in the anthology Wen Xuan, which was compiled by Xiao Tong, a Crown Prince of the Chinese Liang Dynasty. Wen Xuan was one of the most familiar Chinese classics for aristocrats in the Heian period and has been influential in subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in Literary Chinese (Li Shan and Commentaries by Five Officials). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and while developing basic skills for reading Chinese classical writings through close reading of poetry contained in Wen Xuan.

ART500B2

日本文芸特講 I A (文芸と音楽)

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

テーマ：『平家物語』と音楽

授業のテーマに含まれる事柄は：1) 音楽 (語り物) としての『平家物語』；2) 『平家物語』における音楽 (演奏場面など)；3) 『平家物語』と同時代 (12世紀) の音楽史；4) 『平家物語』が後世の日本古典音楽・芸能に及ぼした影響 (能、幸若舞、浄瑠璃、歌舞伎など)。

【到達目標】

語り物としての『平家物語』(平家語り)の成立事情と音楽的諸特徴を理解すること。

『平家物語』の音楽場面を正しく読めるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は、教員等による講義・解説、学生による発表、全員での討論を織り交ぜて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の意味を確認する 自己紹介 (全員)、教員による授業の進め方の説明、発表予定の調整
第2回	『平家物語』の解題	『平家物語』の成立・作者・諸本に関する、教員等による解説
第3回	『平家物語』の内容①	平家の栄華と清盛の死
第4回	『平家物語』の内容②	義仲と義経の活躍
第5回	『平家物語』の内容③	平家の滅亡
第6回	『平家物語』関係の音楽研究の方法	基本文献の調べ方・有形無形の検索ツール等を、図書館等を利用して学ぶ
第7回	平家語りの歴史①	平家語りの成立事情 (琵琶法師、雅楽の琵琶、講式など)
第8回	平家語りの歴史②	中世の平家語り 隆盛から当道座の成立まで
第9回	平家語りの歴史③	近世～近代の平家語り 晴眼者の平家語り受容、当道座の廃止など
第10回	平家語りの音楽①	平家語りの音楽構造
第11回	平家語りの音楽②	平家琵琶とその奏法
第12回	院生の「『平家物語』と音楽」①	院生の個人発表開始 以後数人ずつ発表
第13回	院生の「『平家物語』と音楽」②	院生の個人発表
第14回	秋学期に向けて	これまでの個人発表についての講評等

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。

以後 取り上げられる本文、解説、研究等を予め読んでおくとともに、各自の発表に備えて計画的に調査・研究する。

【テキスト (教科書)】

三弥井古典文庫『平家物語』上・下 (佐伯真一校注、三弥井書店)

校注古典叢書『平家物語』上・下 (山下宏明校注、明治書院)

【参考書】

法政大学図書館蔵本及び担当教員の研究室に保管されている文学部資料室蔵本等を活用する。特に重要なものを以下に列挙する。

・富倉徳次郎注釈『平家物語全注釈』(角川書店、1965-68年)

・奥村三雄『平曲譜本の研究』(桜楓社、1981年)

・五味文彦『平家物語、史と説話』(平凡社選書、1987年)

・村上学編『平家物語と語り』(三弥井書店、1992年)

・山下宏明『語りとしての平家物語』(岩波書店、1994年)

・兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』(吉川弘文館、2000年)

・山下宏明編『軍記語りと芸能』(汲古書院、2000年)

・時田アリソン、藤田治子編『日本の語り物』(国際日本文化研究センター、2002年)

・藤田治子『平家の音楽 一当道の伝統一』(第一書房、2003年)

・『日本音楽教育事典』(音楽之友社、2004年)の関連項目

・別冊太陽『雅楽』(平凡社、2004年)

・今井勉(平家琵琶)、藤田治子(解説)『琵琶法師の世界 平家物語』(CV/DVD、Ebisu-13-19、2009年)

・『平家物語大事典』(東京書籍、2010年)

【成績評価の方法と基準】

個人発表の内容 40%、出席・討論への参加等の平常点 20%、前期提出レポート (研究文献解題) の内容 40%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式 (漢文訓読体の声明の一種) と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌/唱歌～越殿楽謡物～浄組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績> 『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの

① (研究ノート) 『『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について ー古楽譜研究者の立場からー』(『日本文学誌要』92、2015年)

② 『『源氏物語』の音楽を読む ー現実と虚構、準拠と創作ー』(芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、源氏物語千年紀委員会、2009年)

③ 『平家語りの成り立ち ー平家語りの音楽生成論へ向けてー』(明治学院大学教養教育センター付属研究所編『カルチュラル』3、2006年)

【Outline and objectives】

This postgraduate class deals with the music of and music in *The Tale of the Heike*. This includes: 1. *The Tale of the Heike* as a genre of narrative music (*heike-gatari*); 2. the depiction of music in the tale; 3. its relationship to the music history of the time it depicts (12th century); and 4. the influence of the tale and its music on later genres of performing arts, including *nô*, *kôwaka-mai*, *jôruri* and *kabuki*.

ART500B2

日本文芸特講 I B (文芸と音楽)

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

テーマ：『平家物語』と音楽 (続)

授業のテーマに含まれる事柄は：1) 音楽 (語り物) としての『平家物語』；2) 『平家物語』における音楽 (演奏場面など)；3) 『平家物語』と同時代 (12世紀) の音楽史；4) 『平家物語』が後世の日本古典音楽・芸能に及ぼした影響 (能、幸若舞、浄瑠璃、歌舞伎など)。

【到達目標】

語り物としての『平家物語』(平家語り)の成立事情と音楽的諸特徴を理解すること。

『平家物語』の音楽場面を正しく読めるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は、教員等による講義・解説、学生による発表、全員での討論を織り交ぜて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回の際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	院生全員による夏期休暇中の研究成果発表会
第2回	『平家物語』と音楽① 例えば巻第一、「殿上聞討」の五節	担当院生による発表、質疑応答
第3回	『平家物語』と音楽② 例えば巻第二、「徳大寺殿鳥詣」における殿島の芸能	担当院生による発表、質疑応答
第4回	『平家物語』と音楽③ 例えば巻第三、「大臣流罪」の藤原師長、琵琶と朗詠	担当院生による発表、質疑応答
第5回	『平家物語』と音楽④ 例えば巻第四、以仁王の笛	担当院生による発表、質疑応答
第6回	『平家物語』と音楽⑤ 例えば巻第六、「月見」における『源氏物語』の余韻	担当院生による発表、質疑応答
第7回	『平家物語』と音楽⑥ 例えば巻第六、「小督」の《想夫恋》	担当院生による発表、質疑応答
第8回	『平家物語』と音楽⑦ 例えば巻第七、琵琶弾きの経正	担当院生による発表、質疑応答
第9回	『平家物語』と音楽⑧ 例えば巻第九、「敦盛最期」	担当院生による発表、質疑応答
第10回	『平家物語』と音楽⑨ 例えば巻第十、「千手前」の宴会場面	担当院生による発表、質疑応答
第11回	『平家物語』と音楽⑩ 例えば巻第十一、「鏡」と神楽	担当院生による発表、質疑応答
第12回	個人発表のまとめ①	各自の発表の補遺、修正報告 (前半)
第13回	個人発表のまとめ②	各自の発表の補遺、修正報告 (後半)
第14回	まとめ	教員による『平家物語』と音楽のまとめ

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

第1回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。

以後 各自『平家物語』と音楽 研究の個人発表の準備・レジュメ作成。

第12・13回 各自、発表の際に受けた質問、意見について、修正報告の準備をしてくる。

第14回 個人発表をまとめた論文を提出する。

【テキスト (教科書)】

三弥井古典文庫『平家物語』上・下 (佐伯真一校注、三弥井書店)

校注古典叢書『平家物語』上・下 (山下宏明校注、明治書院)

【参考書】

法政大学図書館蔵本及び担当教員の研究室に保管されている文学部資料室蔵本等を活用する。特に重要なものを以下に列挙する。

・富倉徳次郎注釈『平家物語全注釈』(角川書店、1965-68年)

・奥村三雄『平曲譜本の研究』(桜楓社、1981年)

・五味文彦『平家物語、史と説話』(平凡社選書、1987年)

・村上学編『平家物語と語り』(三弥井書店、1992年)

・山下宏明『語りとしての平家物語』(岩波書店、1994年)

・兵藤裕己『平家物語の歴史と芸能』(吉川弘文館、2000年)

・山下宏明編『軍記語りと芸能』(汲古書院、2000年)

・時田アリソン、藤田治子編『日本の語り物』(国際日本文化研究センター、2002年)

・藤田治子『平家の音楽 一当道の伝統一』(第一書房、2003年)

・『日本音楽教育事典』(音楽之友社、2004年)の関連項目

・別冊太陽『雅楽』(平凡社、2004年)

・今井勉(平家琵琶)、藤田治子(解説)『琵琶法師の世界 平家物語』(CV/DVD、Ebisu-13~19、2009年)

・『平家物語大事典』(東京書籍、2010年)

【成績評価の方法と基準】

個人発表の内容 40%、出席・討論への参加等の平常点 20%、後期提出論文の内容 40%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式 (漢文訓読体の声明の一種) と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌/唱歌~越殿楽謡物~箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績> 『源氏物語』・『平家物語』と音楽関連のもの

① <研究ノート> 『源氏物語』における絃楽器の曲種と調絃について 一古楽譜研究者の立場から一 (『日本文学誌要』92、2015年)

② 『源氏物語』の音楽を読む 一現実と虚構、準拠と創作一 (芳賀徹企画・総監修、伊井春樹監修『源氏物語国際フォーラム集成』、源氏物語千年紀委員会、2009年)

③ 『平家語りの成り立ち 一平家語りの音楽生成論へ向けて一』(明治学院大学教養教育センター付属研究所編『カルチュラル』3、2006年)

【Outline and objectives】

This postgraduate class deals with the music of and music in The Tale of the Heike. This includes: 1. The Tale of the Heike as a genre of narrative music (heike-gatari); 2. the depiction of music in the tale; 3. its relationship to the music history of the time it depicts (12th century); and 4. the influence of the tale and its music on later genres of performing arts, including nô, kôwaka-mai, jôruri and kabuki.

LIT500B2

日本文芸特講Ⅱ A（アートマネジメント研究）

中沢 けい

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【到達目標】

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回		
第2回		
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回		
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		
第14回		

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【テキスト（教科書）】

【参考書】

【成績評価の方法と基準】

【学生の意見等からの気づき】

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

LIT500B2

日本文芸特講Ⅱ B（アートマネジメント研究）

中沢 けい

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【到達目標】

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回		
第2回		
第3回		
第4回		
第5回		
第6回		
第7回		
第8回		
第9回		
第10回		
第11回		
第12回		
第13回		
第14回		

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【テキスト（教科書）】

【参考書】

【成績評価の方法と基準】

【学生の意見等からの気づき】

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
<研究テーマ>
<主要研究業績>

LIT500B2

国語と文芸教育法 A

須貝 千里

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中学校・高等学校で取り上げられている、具体的な教材に即し、学習者の反応、学習課題、授業の実際を取り上げ、検討していく。特に、教材研究方法論に焦点を当てて、文学作品の教材価値について、読むことの根拠、読むことの方法論について探究していく。そのことによって、文学と教育の背馳という事態を、国語科教育を豊かにしていくための可能性にいかにか転回させていくことができるのか、を学んでいく。

【到達目標】

中学校・高等学校の『学習指導要領』の内容を理解し、教材研究に取り組み、授業構想を立てることができる能力を養うことを到達目標とする。特に、文学教材に即しつつ、言語に関する「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力を育むための教材研究力の向上を図ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

- ①取り上げる教材は事前に予告するので、学生は問いをもって授業に臨む。
- ②講義ではレジュメを配布するので、学生は振り返って考える。
- ③学生の疑問を聴き、答える。学生の意見を聴き、対話する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	国語科教育の歴史と課題	「近代社会」において、なぜ、「国語科教育」がなされるのか、探究する
第2回	中学校・高等学校の国語科学習指導要領（1）	国語科の「目標」とはどのようなことか、探究する。
第3回	中学校・高等学校の国語科学習指導要領（2）	国語科の「知識・技能」とはどのようなことか、探究する。
第4回	中学校・高等学校の国語科学習指導要領（3）	国語科の「思考力・判断力・表現力等」とはどのようなことか、探究する。
第5回	中学校・高等学校の国語科学習指導要領（4）	国語科の「学びに向かう力・人間性等」とはどのようなことか、探究する。
第6回	法政大学の国語科教員養成の歴史	古田紘・益田勝実・太田正夫が国語科教育についてどのような問題提起をしたのか、学ぶ。
第7回	「国語と文芸教育論」という課題	文学作品の教材価値とは何か、探究する。
第8回	文学作品を「読むこと」の根拠とは？	正解主義と正解主義批判を同時に超えるという課題について、探究する。
第9回	文学作品の教材研究方法論（1）	構成・出来事・語り手と登場人物を読むとはどのようなことなのか、探究する。
第10回	文学作品の教材研究方法論（2）	物語の表現を読むとはどのようなことなのか、探究する。
第11回	文学作品の教材研究方法論（3）	小説の表現を読むとはどのようなことなのかについて、探究する。
第12回	文学作品の教材研究方法論（4）	詩の表現を読むとはどのようなことなのか、探究する。
第13回	文学作品の教材研究方法論（5）	〈語り手〉と〈語り手を超えるもの〉、〈作者〉を読むとはどのようなことなのかについて、探究する。
第14回	提出されたレポートに対する講評	学生の疑問に対して答える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①講義で取り上げる教材について、問いをもって授業に臨む。
- ②講義時に配布したレジュメによって、講義内容の振り返りをし、教師に疑問を問う。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて、プリントを配布する。

【参考書】

- ①『〈第三項〉理論が拓く文学研究／文学教育』（田中実・須貝千里・難波博孝編、明治図書）
- ②『文学の力×教材の力』全10巻（須貝千里ほか編、教育出版）
- ③『〈あたらしい作品論〉へ、〈あたらしい教材論〉へ』全14巻（須貝千里ほか編、右文書院）
- ④『「これからの文学教育」のゆくえ』（須貝千里ほか編、右文書院）
- ⑤『文学が教育にできること』（須貝千里ほか編、教育出版）
- ⑥『中学校・高等学校 国語科学習指導要領』及び解説書（文部科学省）

【成績評価の方法と基準】

レポート（80%）と授業への積極的貢献度（20%）

【学生の意見等からの気づき】

文学作品の教材価値とその引き出し方がよく分かった。
読むことの根拠に関わる問題の重要性を理解することができた。
国語科教師の仕事がよく分かった。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

国語教育学

<研究テーマ>

国語教育史、文学教育論

<主要研究業績>

- ①『「目次」・「単元」・「学習の手引き」——ポスト・ポストモダンと国語教科書の課題』p p. 54 - 80（『山梨大学 国語・国文と国語教育』19号）山梨大学国語国文学会 平成24年8月
- ②『「語り手」という「学習用語」の登場——定番教材『少年の日の思い出』（ヘルマン・ヘッセ）にて』p p. 65 - 78（『日本文学』61巻8月号）日本文学協会 平成24年8月
- ③『「国語科」の壊し方について——国語・教科書と文学・作品』p p. 21 - 36（『日本文学』64巻4号）日本文学協会 平成27年4月

【Outline and objectives】

Kokugo education(Japanese education) and literature education

LIT500B2

国語と文芸教育法B

須貝 千里

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中学校・高等学校で取り上げられている、具体的な教材に即し、学習者の反応、学習課題、授業の実際を取り上げ、検討していく。特に、授業構想論に焦点を当てて、教材研究をいかに具体化していくかについて探究していく。そのことによって、国語科における「主体的・対話的で深い」実際について学んでいく。

【到達目標】

中学校・高等学校の『学習指導要領』の内容を理解し、教材研究に取り組み、授業構想を立てることができる能力を養うことを到達目標とする。特に、文学教材に即しつつ、言語に関する「知識・技能」、思考力・判断力・表現力等、「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力を育むための授業構想力の向上を図ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

- ①取り上げる教材は事前に予告するので、学生は問いをもって授業に臨む。
- ②講義ではレジュメを配布するので、学生は振り返って考える。
- ③学生の疑問を聴き、答える。学生の意見を聴き、対話する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	文学教材の授業構想論	「学習者の抱く〈謎〉と向き合っ、授業を構想する」とは、どのようなことか。
第2回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（1）	ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」の場合で、探究する。
第3回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（2）	太宰治「走れメロス」の場合で、探究する。
第4回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（3）	魯迅「故郷」の場合で、探究する。
第5回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（4）	芥川龍之介「羅生門」の場合で、探究する。
第6回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（5）	中島敦「山月記」の場合で、探究する。
第7回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（6）	森鴎外「舞姫」の場合で、探究する。
第8回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（7）	夏目漱石「こころ」の場合で、探究する。
第9回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（8）	村上春樹「鏡」の場合で、探究する。
第10回	文学教材の授業史と新しい授業の構想（9）	川上弘美「神様」の場合で、探究する。
第11回	学習目標と学習評価（1）	国語科授業における「知識・技能」の「資質・能力」に焦点化して、探究する。
第12回	学習目標と学習評価（2）	国語科授業における「思考力・判断力・表現力」の「資質・能力」に焦点化して、探究する。
第13回	学習目標と学習評価（3）	第13回：国語科授業における「学びに向かう力・人間性等」の「資質・能力」に焦点化して、探究する。
第14回	提出されたレポートの対する講評。	学生の疑問に対して答える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①講義で取り上げる教材について、問いをもって授業に臨む。
- ②講義時に配布したレジュメによって、講義内容の振り返りをし、教師に疑問を問う。

【テキスト（教科書）】

必要に応じて、プリントを配布する。

【参考書】

参考書・参考資料等

- ①『〈第三項〉理論が拓く文学研究／文学教育』（田中実・須貝千里・難波博孝編、明治図書）
- ②『文学の力×教材の力』全10巻（須貝千里ほか編、教育出版）
- ③『〈あたらしい作品論〉へ、〈あたらしい教材論〉へ』全14巻（須貝千里ほか編、右文書院）
- ④『「これからの文学教育」のゆくえ』（須貝千里ほか編、右文書院）
- ⑤『文学が教育にできること』（須貝千里ほか編、教育出版）
- ⑥『中学校・高等学校 国語科学習指導要領』及び解説書（文部科学省）

【成績評価の方法と基準】

レポート（80%）と授業への積極的貢献度（20%）

【学生の意見等からの気づき】

文学作品の教材価値とその引き出し方がよく分かった。
読むことの根拠に関わる問題の重要性を理解することができた。
国語科教師の仕事がどのようなものかよく分かった。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

国語教育学

<研究テーマ>

国語教育史、文学教育論

<主要研究業績>

①「『すきとほつたほんたうのたべもの』は『幸福』の『糧』——『注文の多い料理店』（宮沢賢治）における『国語』の軌み、『日本語』との抗い」p.p. 1 - 48（『山梨大学 国語・国文と国語教育』第21号）山梨大学国語国文学会 平成28年3月

②「世界観認識として、『予測困難な時代』を問い質して——『資質・能力』としての〈第三項〉論と『故郷』（魯迅）の『学習課題』の転換——」p.p. 35 - 50（『日本文学』66巻8号）日本文学協会 平成29年8月号

③「『この話、おもしろいところあるでしょ』と訊かれた時に——『心意伝承の国語教育』の〈死〉と〈蘇り〉——」p.p. 1 - 18（『国語教育思想研究』第15号）国語教育思想研究会 平成29年10月

【Outline and objectives】

Kokugo education(Japanese education) and literature education

LIT500B2

女性文学A

藤木 直実

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問いつつ作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「女性文学A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「女性文学I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説
第2回	河野多恵子「蟹」①	担当者による報告と受講生による討議
第3回	河野多恵子「蟹」②	前回明らかになった課題の検討
第4回	田辺聖子「感傷旅行」①	担当者による報告と受講生による討議
第5回	田辺聖子「感傷旅行」②	前回明らかになった課題の検討
第6回	津村節子「玩具」①	担当者による報告と受講生による討議
第7回	津村節子「玩具」②	前回明らかになった課題の検討
第8回	大庭みな子「三匹の蟹」①	担当者による報告と受講生による討議
第9回	大庭みな子「三匹の蟹」②	前回明らかになった課題の検討
第10回	吉田知子「無明長夜」①	担当者による報告と受講生による討議
第11回	吉田知子「無明長夜」②	前回明らかになった課題の検討
第12回	郷静子「れくいえむ」①	担当者による報告と受講生による討議
第13回	郷静子「れくいえむ」②	前回明らかになった課題の検討
第14回	まとめ	春学期の学修内容と各自の課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する。

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50%）に加えて、報告の内容と水準（30%）、授業中の貢献度（20%）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評
<研究テーマ>森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績>『(妊婦)アート論』(共編著)、『日本文学の「女性性」』(共著)

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

LIT500B2

女性文学B

藤木 直実

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問いつつ作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テクストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「女性文学B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「女性文学Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説、春学期の振り返り
第2回	山本道子「ベティさんの庭」①	担当者による報告と受講生による討議
第3回	山本道子「ベティさんの庭」②	前回明らかになった課題の検討
第4回	林京子「祭りの場」①	担当者による報告と受講生による討議
第5回	林京子「祭りの場」②	前回明らかになった課題の検討
第6回	重兼芳子「やまあいの煙」①	担当者による報告と受講生による討議
第7回	重兼芳子「やまあいの煙」②	前回明らかになった課題の検討
第8回	森禮子「モッキングバードのいる町」①	担当者による報告と受講生による討議
第9回	森禮子「モッキングバードのいる町」②	前回明らかになった課題の検討
第10回	吉行理恵「小さな貴婦人」①	担当者による報告と受講生による討議
第11回	吉行理恵「小さな貴婦人」②	前回明らかになった課題の検討
第12回	加藤幸子「夢の壁」①	担当者による報告と受講生による討議
第13回	加藤幸子「夢の壁」②	前回明らかになった課題の検討
第14回	まとめ	秋学期の学修内容と各自の課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する。

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50%）に加えて、報告の内容と水準（30%）、授業中の貢献度（20%）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ>森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績>『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

ART500B2

文芸と視聴覚芸術 A

越川 道夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて。映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、参考作品を鑑賞し、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文芸と視聴覚芸術A」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と映画Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	内容の概説
第2回	講義1／現場からの報告①	講師による講義
第3回	講義2／現場からの報告②	講師による講義
第4回	講義3／現場からの報告③	講師による講義
第5回	講義4／現場からの報告④	講師による講義
第6回	参考作品①／鑑賞	参考作品①の鑑賞
第7回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第8回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第9回	講義5／現場からの報告⑤	講師による講義
第10回	参考作品②／鑑賞	参考作品②の鑑賞
第11回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第12回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第13回	講義6／現場からの報告⑥	講師による講義
第14回	春学期のまとめ	春学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要に応じて提示する。授業で指示した映画作品を見ること。

【テキスト（教科書）】

講師が選定する。授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて提示する。資料としてのプリント等を配布する。

【成績評価の方法と基準】

研究発表（50%）、授業参加度等（50%）によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>映画

<研究テーマ>映画

<主要研究業績>『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白夜夜船』など多くの映画を制作する。

ART500B2

文芸と視聴覚芸術 B

越川 道夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて。映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、参考作品を鑑賞し、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文芸と視聴覚芸術B」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と映画Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	講義1／現場からの報告①	講師による講義
第2回	研究発表に関するディスカッション	第3回から始まる研究発表と課題について対話、討論する
第3回	研究発表①	研究発表とディスカッション
第4回	研究発表②	研究発表とディスカッション
第5回	研究発表③	研究発表とディスカッション
第6回	講義2／現場からの報告②	講師による講義
第7回	研究発表④	研究発表とディスカッション
第8回	研究発表⑤	研究発表とディスカッション
第9回	研究発表⑥	研究発表とディスカッション
第10回	講義3／現場からの報告③	講師による講義
第11回	参考作品①／鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第12回	参考作品①／ディスカッション	参考作品①についてのディスカッション
第13回	講義4／現場からの報告④	講師による講義
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要に応じて提示する。授業で指示した作品、またはそれぞれの研究対象となる作品を見ておくこと。

【テキスト（教科書）】

講師が選定する。授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて提示する。資料のプリント等を配布する。

【成績評価の方法と基準】

研究発表（50%）、授業参加度等（50%）によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>映画

<研究テーマ>映画

<主要研究業績>『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白夜夜船』など多くの映画を制作する。

LIT500B2

学際的文学論 A（文学の境界領域、文学と宗教等）

リネペ・アンドレ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋の日本論における著名な文献をもとに、日本論の歴史と、キーとなるコンセプトを検討する。そのうえで現代の日本学の可能性を考える。春学期にはルース・ベネディクトの名著『菊と刀』を精読し、ベネディクトの「文化の型」という方法論を検討する。

【到達目標】

- ・国際日本論のコンセプトとそのコンセプトの歴史を理解できる
- ・現代の日本学の可能性と、現代的な意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・授業内の講読（「close reading」の方法による）
- ・授業内の発表
- ・レポート提出

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要、学習方法の説明
第2回	背景（1）	日本論の研究へのアプローチ
第3回	背景（2）	日本論の歴史
第4回	文献講読（1）	ベネディクトの『菊と刀』の評判と批判について；「菊と刀」を読む：第1章
第5回	文献講読（2）	『菊と刀』を読む：第2章
第6回	文献講読（3）	『菊と刀』を読む：第3章
第7回	文献講読（4）	『菊と刀』を読む：第4章
第8回	文献講読（5）	『菊と刀』を読む：第5－6章
第9回	文献講読（6）	『菊と刀』を読む：第7－8章
第10回	文献講読（7）	『菊と刀』を読む：第9章
第11回	文献講読（8）	『菊と刀』を読む：第10－11章
第12回	文献講読（9）	『菊と刀』を読む：第12章
第13回	文献講読（10）	『菊と刀』を読む：第13章
第14回	総括	レポートの締め切り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・授業内で指示した文献を読み、歴史的・思想史的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する
- ・授業の出席前に前回の授業のノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

- ・『菊と刀』の英語の原文はコピーを配布
- ・ベネディクト、ルース；長谷川松治・訳（2005）『菊と刀－日本文化の型』、講談社（講談社学術文庫 1708）。

【参考書】

- ・エドワード・W・サイード（1993）『オリエンタリズム』平凡社。
- ・Bayoumi, M.; Rubin, A.(ed.). *The Edward Said Reader. New York: Vintage 2000.*
- ・船曳健夫（2003）『「日本人論」再考』NHK出版。
- ・青木保『「日本文化論」の受容－戦後日本の文化とアイデンティティ－』中央公論新社。
- ・Benedict, Ruth. *Patterns of Culture. Mariner Books 2013.*
- ・ルース・ベネディクト（2008）『文化の型』講談社。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点（30％）
- ・授業内でのプレゼンテーション（20％）
- ・レポート（50％）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

- ・授業計画はあくまで計画であるため、適宜変更する可能性がある
- ・春学期・秋学期合わせての履修を推奨する

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世政治思想史
<研究テーマ> 日本政治思想史

<主要研究業績> Sorais "Mitschlichkeit" (jin). Ein Auszug aus dem Benmei (1717). Übersetzt und annotiert, in: *Japonica Humboldtiana*, vol. 13 (2009): 5-25. ; "Yamaga Soko on Urban Planning. Political Theory and the Challenge of Urban Government in Early Modern Japan" (submitted)

【Outline and objectives】

This course offers students an introduction into classical writings of Western Japanese studies. It is designed to give an overview of key concepts of Western discourses about Japanese culture and thought in historical perspective.

The summer course will focus on book "The Chrysanthemum and the Sword" (1946) by Ruth Benedict (1887-1948).

LIT500B2

学際的文学論 B（文学の境界領域、文学と宗教等）

リネペ・アンドレ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋の日本論における著名な文献をもとに、日本論の歴史と、キーとなるコンセプトを検討する。そのうえで現代の日本学の可能性を考える。
秋学期には新渡戸稲造（にとべいなぞう）の名著『*Bushido-The Spirit of Japan*』（1900）を精読し、日本近代の武士道論とその西洋の受容について検討する。

【到達目標】

- ・国際日本論のコンセプトとそのコンセプトの歴史を理解できる
- ・現代の日本学の可能性と、現代的な意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- ・授業内の講読（「close reading」の方法による）
- ・授業内の発表
- ・レポート提出

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概念、学習方法の説明
第2回	文献講読(1)	「序」と第1章
第3回	文献講読(2)	第2章
第4回	文献講読(3)	第3~4章
第5回	文献講読(4)	第5~6章
第6回	文献講読(5)	第7章
第7回	文献講読(6)	第8章
第8回	文献講読(7)	第9章
第9回	文献講読(8)	第10~11章
第10回	文献講読(9)	第12章
第11回	文献講読(10)	第13~14章
第12回	文献講読(11)	第15章
第13回	文献講読(12)	第16~17章
第14回	総括	総まとめ；レポートの締め切り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・授業内で指示した文献を読み、歴史的思想史的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する
- ・授業の出席前に前回の授業のノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

- ・『*Bushido*』の英語の原文はコピーを配布
- ・新渡戸稲造；矢内原忠雄・訳（2018）『*武士道*』岩波書店（岩波文庫・青1181-1）。

【参考書】

- 苅部直・片山龍（2010）『日本思想ハンドブック』
- 和辻哲郎（2011）『日本倫理思想史』、4巻、岩波書店。
- 丸山眞男（2012）『忠誠と反逆』筑摩書房。
- 相楽亨（2004）『武士の思想』ぺりかん社。
- 山本博文（2001）『『葉隠』の武士道—誤解された「死狂ひ」の思想』PHP新書。
- 官能覚明（2006）『武士道の逆襲』講談社現代新書。
- 笠谷和比古（1997）『士（さむらい）の思想—日本型組織と個人の自立』岩波書店。
- 佐伯真一（2004）『戦場の精神史—武士道という幻景』日本放送出版協会。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点（30%）
- ・授業内でのプレゼンテーション（20%）
- ・レポート（50%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

- ・授業計画はあくまで計画であるため、適宜変更する可能性がある
- ・春学期・秋学期合わせての履修を推奨する

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世政治思想史
<研究テーマ>日本政治思想史
<主要研究業績>

Sorais "Mitmenschlichkeit" (jin). Ein Auszug aus dem Benmei (1717). Übersetzt und annotiert, in: Japonica Humboldtiana, vol. 13 (2009): 5-25. ; "Yamaga Soko on Urban Planning. Political Theory and the Challenge of Urban Government in Early Modern Japan" (submitted)

【Outline and objectives】

This course offers students an introduction into classical writings of Western Japanese studies. It is designed to give an overview of key concepts of Western discourses about Japanese culture and thought in historical perspective.

The winter course will focus on the book "Bushido - The Spirit of Japan" (1900) by Nitobe Inazo (1862-1933) and examines the conceptual foundations of the modern discourse about samurai ethics in Japan and in the West.

LIT500B2

文学と風土 A

高橋 博史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

さまざまな場所を舞台とした作品（短編小説）をいくつか選んで、その土地の風土との関わりに注意しながら、読み進めていく。それぞれの作品について、受講者全員で討論しながら、読みを深める。
本文を緻密に読み込んでいくことで、作品の奥行きを浮かび上がらせ、作品についての論を構築する力を養う。また、互いの読みを交換しあうことを通じてコミュニケーション能力を身につける。

【到達目標】

受講者各自が授業で取り上げる作品について自身の論を用意し、討論を通じて深めた後、論文としてまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文学と風土A」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と風土I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式。割り振られた作品について、発表者が自分の作品理解を示し（レジュメを配布する）、発表をもとに受講者がそれぞれの読みを聞かせる。一つの作品におおむね2回の授業をあてる予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方についてのガイダンスと、受講者それぞれがどんな問題意識を持っているか、共有する。担当する作品を割り振る。
第2回	さまざまな土地の光景	国木田独歩「忘れ得ぬ人」(1)
第3回	さまざまな土地の光景	国木田独歩「忘れ得ぬ人」(2)
第4回	都市の変貌	田山花袋「少女病」(1)
第5回	都市の変貌	田山花袋「少女病」(2)
第6回	都会の光景	夏目漱石「変な音」(1)
第7回	都会の光景	夏目漱石「変な音」(2)
第8回	京都の街	梶井基次郎「檸檬」(1)
第9回	京都の街	梶井基次郎「檸檬」(2)
第10回	江戸の町	谷崎潤一郎「刺青」(1)
第11回	江戸の町	谷崎潤一郎「刺青」(2)
第12回	江戸時代の京都	森鷗外「高瀬舟」(1)
第13回	江戸時代の京都	森鷗外「高瀬舟」(2)
第14回	まとめ	授業全体を総括する全体討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回作品を読み込み、各自の作品理解を準備した上で授業に臨むこと。各自が発表者の立場になり、先行研究等を参照しつつ、自説を練り上げることが望ましい。
最終的には論文（30～40枚）たり得るレポートを最低1本を提出する。

【テキスト（教科書）】

取り上げる作品を網羅した書籍はない。文庫本等で、各自取り上げる作品を入手すること（入手方法については、必要があれば相談に応じる）。

【参考書】

必要に応じてその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業時の討論（30%）、発表（30%）、レポート（40%）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より担当するため記載すべきことはない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学。特に20世紀前半の小説
<研究テーマ> 日本近代文学に描かれた労働
<主要研究業績> 『芥川文学の達成と摸索』（至文堂）、「蟹工船」論（『国語と国文学』）

【Outline and objectives】

We'll discuss several novels set in various places.

LIT500B2

文学と風土 B

高橋 博史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

さまざまな場所を舞台とした作品（短編小説）をいくつか選んで、その土地の風土との関わりに注意しながら、読み進めていく。それぞれの作品について、受講者全員で討論しながら、読みを深める。
本文を緻密に読み込んでいくことで、作品の奥行きを浮かび上がらせ、作品についての論を構築する力を養う。また、互いの読みを交換しあうことを通じてコミュニケーション能力を身につける。

【到達目標】

受講者各自が授業で取り上げる作品について自身の論を用意し、討論を通じて深めた後、論文としてまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文学と風土B」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と風土II」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式。割り振られた作品について、発表者が自分の作品理解を示し（レジュメを配布する）、発表をもとに受講者がそれぞれの読みを聞かせる。一つの作品におおむね2回の授業をあてる予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業全体についてのガイダンス
第2回	地方都市の外れ	宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」(1)
第3回	地方都市の外れ	宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」(2)
第4回	江戸川のはとり	伊藤左千夫「野菊の墓」(1)
第5回	江戸川のはとり	伊藤左千夫「野菊の墓」(2)
第6回	蜜柑畑のある村	芥川龍之介「トロッコ」(1)
第7回	蜜柑畑のある村	芥川龍之介「トロッコ」(2)
第8回	北海道の原野	有島武郎「カインの末裔」(1)
第9回	北海道の原野	有島武郎「カインの末裔」(2)
第10回	山峡の工事現場	葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」(1)
第11回	山峡の工事現場	葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」(2)
第12回	半島	川端康成「伊豆の踊子」(1)
第13回	半島	川端康成「伊豆の踊子」(2)
第14回	まとめ	授業全体を総括する全体討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回作品を読み込み、各自の作品理解を準備した上で授業に臨むこと。各自が発表者の立場になり、先行研究等を参照しつつ、自説を練り上げることが望ましい。
最終的には論文（30～40枚）たり得るレポートを最低1本を提出する。

【テキスト（教科書）】

取り上げる作品を網羅した書籍はない。文庫本等で、各自取り上げる作品を入手すること（入手方法については、必要があれば相談に応じる）。

【参考書】

必要に応じてその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業時の討論（30%）、発表（30%）、レポート（40%）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より担当するため記載すべきことはない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学。特に20世紀前半の小説
<研究テーマ> 日本近代文学に描かれた労働
<主要研究業績> 「芥川文学の達成と摸索」（至文堂）、「蟹工船」論（『国語と国文学』）

【Outline and objectives】

We'll discuss several novels set in various places.

能楽作品研究 A

山中 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本最古の演劇である能楽についての基本情報・基本文献を紹介し、特に観阿弥・世阿弥時代の能作品に注目してその劇構造・レトリック・演出上の工夫などがどのように作られていったのかを考える。能の作品研究の方法を身につけるとともに、作品の魅力や特色を深く理解することをめざす。

【到達目標】

- ①古写謄本の翻刻や小段分けなど、能の作品研究に必要な基礎作業に習熟する。
- ②能の作品研究をする際に確認すべき項目やそのために参照すべき資料について習熟する。
- ③現在では当たり前のように見える能独特の構造や演出上の工夫が、どのように形成されてきたのかを考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「能楽作品研究 A」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「能と楽劇 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本事項に関する講義（第 1～3 回）の後、能楽研究所蔵の文献資料を利用したワークショップ形式ですすめていく。作業の分担を通して諸本校合や小段分けの技術はしっかり身につけてもらうが、テキストの精読・解釈については教員側で対応のサポートをする。通常の演習のように各担当者が責任をもってひとまとまりの発表をするような形はとらない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業のガイダンス。能楽概説。	授業の進め方について説明し、必要があれば現代の能に関する基本情報を確認する。
第 2 回	基本文献および能楽研究所資料の紹介	能楽作品研究の基本文献および能楽研究所の古写本利用法の紹介。
第 3 回	古作の能の一覧と概説	世阿弥以前の作品にどのようなものがあるか、概観する。
第 4 回	世阿弥自筆本〈雲林院〉 (1) 自筆本をめぐる問題	世阿弥自筆本〈雲林院〉のテキストを写真で読み、自筆本をめぐる問題点を確認する。
第 5 回	世阿弥自筆本〈雲林院〉 (2) 古作の鬼能	世阿弥自筆本〈雲林院〉における鬼の描かれ方を確認し、古作の鬼能について考える。
第 6 回	世阿弥自筆本〈雲林院〉 (3) 改作をめぐる諸問題	後場の改作、自筆本の紙継ぎなどをめぐる諸説を見渡し問題点を整理する。
第 7 回	ワークショップ：現行 〈雲林院〉の検討 (1) 諸本の校合	現行版〈雲林院〉後場を対象に、古写謄本の翻刻・校合の仕方を学ぶ
第 8 回	ワークショップ：現行 〈雲林院〉の検討 (2) 後場の精読・解釈	自筆本と大きく異なる後場の詞章を精読・解釈。
第 9 回	ワークショップ：〈松山鏡〉 の古写本翻刻	古作鬼能の影響が大きい〈松山鏡〉の古写本を分担して翻刻する。
第 10 回	ワークショップ：〈松山鏡〉 の諸本校合 (前場)	〈松山鏡〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、前場の校訂本文を作成する。
第 11 回	ワークショップ：〈松山鏡〉 の諸本校合 (後場)	〈松山鏡〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、後場の校訂本文を作成する。
第 12 回	ワークショップ：〈松山鏡〉 の精読 (前場)	完成した校訂本文により〈松山鏡〉の詞章を精読し、分担して前場各小段の注釈を行う。
第 13 回	ワークショップ：〈松山鏡〉 の精読 (後場)	前回と同様に〈松山鏡〉の後場の各小段について、分担して注釈を行う。
第 14 回	まとめ	現在残る古作の能作品と、推定される鬼能との関係について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指定された関連論文を次回までに読んで、疑問点があればまとめておく。

授業で扱う作品について、能楽研究所蔵の古写謄本の翻刻や注釈などを分担して準備する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは用いず、能研蔵の資料を利用する。

【参考書】

日本古典文学大系（旧版）『謡曲集 上（下）』（岩波書店）

新潮日本古典集成『謡曲集 上（中・下）』（新潮社）

【成績評価の方法と基準】

ワークショップで担当した翻刻・注釈等の基礎作業の達成度（60%）と、他人の発表の際の質問やコメント（40%）等、授業への貢献度を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度の授業では能楽の魅力を広く伝えることに重きを置きすぎた結果、レベルの低下を招いたとの実感があるので、今年度は、能の作品研究に必要な技術、とくに古写謄本の記号の読み方や小段分けの方法などをしっかり身につけてもらうことを目指しつつ、古作の能についての知識を増やしていくようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究

<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐる—」・『文学』16 巻 2 号・2015 年 3 月

★「天女舞」応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞— 『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）

★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著）繪書店 2009 年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is

1) to acquire many different techniques of studying Noh plays

2) to understand the characteristic feature of Noh plays.

LIT500B2

能楽作品研究B

山中 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本最古の演劇である能楽についての基本情報・基本文献を紹介し、特に同じ素材による複数の作品の関係について考える。能の作品研究の方法を身につけるとともに、作品の魅力や特色を深く理解することをめざす。

【到達目標】

- ①古写謄本の翻刻や小段分けなど、能の作品研究に必要な基礎作業に習熟する。
- ②能の作品研究をする際に確認すべき項目やそのために参照すべき資料について習熟する。
- ③同じエピソードや人物を素材にしながらまったくことなつた形で演じられる複数の能作品が存在することの意味を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「能楽作品研究B」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「能と楽劇Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本事項や関連作品に関する講義と能楽研究所蔵の文献資料を利用したワークショップを合わせてすすめていく。作業の分担により、諸本校合や小段分けの技術は身につけてもらうが、通常の演習のように各自の責任でまとまりのある発表をするような形にはしない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	井阿弥の作風	井阿弥の作風に関する先行研究および、〈静〉が現行どの作品にあたるのか、諸説の紹介。
第2回	ワークショップ：〈吉野静〉の古写本翻刻	井阿弥作〈静〉の候補の一つである〈吉野静〉の古写本を分担して翻刻する。
第3回	ワークショップ：〈吉野静〉の諸本校合（前場）	〈吉野静〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、前場の校訂本文を作成する。
第4回	ワークショップ：〈吉野静〉の諸本校合（後場）	同じく〈吉野静〉後場の校訂本文を作成する。
第5回	ワークショップ：〈吉野静〉の精読（前場）	完成した校訂本文により〈吉野静〉の詞章を精読し、前場各小段を解釈する。
第6回	ワークショップ：〈吉野静〉の精読（後場）	同じく〈吉野静〉の後場各小段につき、解釈していく。
第7回	〈二人静〉と〈吉野静〉	井阿弥作の〈静〉と両作品の関係を考える。
第8回	音阿弥の演じた能	記録に残る音阿弥関係の能や音阿弥の活動歴を確認する。
第9回	ワークショップ：〈安達静〉の古写本翻刻（前場）	室町後期の作と思われる〈安達静〉の古写本を分担して翻刻する。
第10回	ワークショップ：〈安達静〉の諸本校合（前半）	〈安達静〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、前半の校訂本文を作成する。
第11回	ワークショップ：〈安達静〉の諸本校合（後半）	同じく〈安達静〉後半の校訂本文を作成する。
第12回	ワークショップ：〈安達静〉の精読（前半）	完成した校訂本文により〈安達静〉の詞章を精読し、前場各小段の注釈を行う。
第13回	ワークショップ：〈安達静〉の精読（後場）	前回と同様に〈安達静〉の後場の各小段について、分担して注釈を行う。
第14回	まとめ	類似のエピソードによる複数の作品が存在する他の例についても触れる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指定された関連論文を次回までに読んで、疑問点があればまとめておく。

授業で扱う作品について、能楽研究所蔵の古写謄本の翻刻や注釈などを分担して準備する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは用いず、能研蔵の資料を利用する。

【参考書】

日本古典文学大系（旧版）『謡曲集上（下）』（岩波書店）

新潮日本古典集成『謡曲集上（中・下）』（新潮社）

【成績評価の方法と基準】

ワークショップで担当した翻刻・注釈等の基礎作業の達成度（60%）と、他人の発表の際の質問やコメント（40%）等、授業への貢献度を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度、広く能の魅力伝えることに重点を置きすぎ、レベルの低下を招いたとの実感があるので、今年度は、能楽研究所の資料を活かし、実際に論文作成に役立つ基礎作業の方法をしっかりと学ぶことをめざす。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究

<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐって—」・『文学』16巻2号・2015年3月

★「天女舞」応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞— 『中世文学と隣接諸学』7（竹林舎 2012年）

★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著） 檜書店 2009年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is

1) to acquire many different techniques of studying Noh plays

2) to understand the characteristic feature of Noh plays.

ART500B2

現代能楽論

山中 玲子、観世 鏡之丞、観世 喜正、中司 由起子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本が世界に誇る伝統芸能である能について基本的な知識を身につけるとともに、現在の能をとりまく環境や新しい可能性について考える。

【到達目標】

- 1) 能について、参考書に出ているような知識に頼るだけではなく、自分の言葉で説明できる。
- 2) 能の謡や所作の基本、舞台や装束の特性等を、経験によって知り、伝えることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

オムニバス方式の授業である。1) 映像資料も用いながら能についての基礎知識を学ぶ授業と、2) 第一線で活躍中の能楽師による、「役者の身体やその基礎となる稽古」「現代における能の公演形態の問題等を考える授業」とを組み合わせて、現代の能楽に関する総合的な知見を身につけていく。能楽堂における実地授業（4コマ分）もおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	9月23日。ガイダンス（山中・中司）	講義および実習についてのガイダンス。受講に必要な最低限の基礎知識を得る。
第2回	9月30日。現代の能楽師（観世喜正）	家元制度や内弟子制度など、現代に生きる能楽師の暮らし（活動の内容）について知る。
第3回	10月7日。能の興行（観世喜正）	能の興行がどのようにおこなわれるのか、計画の段階から当日までの流れを知る。
第4回	10月21日。江戸時代の能楽（中司由起子）	幕府によって式楽と定められた能楽の状況と能楽師の活動について知る。
第5回	10月28日。明治以降の観世鏡之丞家（観世鏡之丞）	鏡之丞家の人々と歴史を通して、芸を伝承していくことの意義について知る。
第6回	11月11日。9時30分～12時30分。実習①（観世鏡之丞・山中・中司）	青山の鏡仙会能舞台にて実習。能舞台上を歩く。能の謡・舞の体験。第7回と連続授業。
第7回	11月11日。9時30分～12時30分。実習②（観世鏡之丞・山中・中司）	青山の鏡仙会能舞台にて実習。装束付けの体験と見学。能面の見学。第6回と連続授業。
第8回	11月18日。能の動き（中司）	実習のふりかえり。能の動きの特色と上演形態の様々を知る。
第9回	11月25日。9時30分～12時30分。実習①（観世喜正・山中・中司）	矢来能楽堂での実習。能舞台の特徴。能舞台上を歩く。能の謡と所作の体験。第10回と連続授業。
第10回	11月25日。9時30分～12時30分。実習②（観世喜正・山中・中司）	矢来能楽堂での実習。能装束に実際に触れ、その扱いを学ぶ。第9回と連続授業。
第11回	12月2日。能の演目（中司）	能の演目の豊かさや演目の調べ方を学ぶ。能装束の特色を知る。
第12回	12月9日。能の新しい試み（観世鏡之丞）	海外公演や新作能の取り組みと、それらに対する能楽師自身の言葉を聞く。
第13回	12月16日。能の普及（観世喜正）	国内での普及活動と海外への発信の状況を通して、能の普及の実態と今後の展開を考える。
第14回	1月13日。レポート発表とディスカッション（中司）	各自のレポートを発表し、討議をおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講期間中に必ず実際に能楽堂へ足を運んで能を見、その経験をレポートに生かしてもらうことになる。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いない。適宜プリントを配布する。

【参考書】

受講前に、市販のガイドブックや宣伝チラシなど、何でも良いので自分なりに能についての情報を得ておいてほしい。

「文化デジタルライブラリー」にも基本情報を載せてある。

<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>

【成績評価の方法と基準】

レポート（30%）。課題、能楽堂で実際に能を鑑賞したうえで、能の感想と能会の改善点に関する提案、2回の実習への参加（50%）、平常点（20%）を総合して決める。

【学生の意見等からの気づき】

文系・理系の学生が混ざる珍しいクラスなので、最終回に出席者が互いの意見を聞き合う機会を設けた。最終回に限らず、通常の授業中でも、ちょっとした感想、小さな疑問など、遠慮せず、積極的に発言してほしい。

【学生が準備すべき機器他】

実習時には足袋が必要となります。入手方法はガイダンスの際に伝えます。

【その他の重要事項】

★第一線で活躍中の能楽師を講師に招いての授業なので、授業日程が多少変動的になっています。特に2回の実地授業は、学外の施設にて、1限・2限の時間帯2コマ分を使っての授業ですが、単位取得のためには2回の実地授業出席は必須としますので、よく考えて受講計画をたててください。

★単位取得を目的としない聴講・実習参加は認めていない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

LIN500B2

日本語・日本文学の基礎A

竹林 一志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということ学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語・日本文学の基礎A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本語の歴史と現在I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに講義形式で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える
第2回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する
第3回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する
第4回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』『春歌上』の和歌（特に16番歌）について先行研究の論を検討する
第5回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』『春歌上』の和歌（特に16番歌）の表現を解析する
第6回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する
第7回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する
第8回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する
第9回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する
第10回	『徒然草』第89段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第89段について先行研究の論を検討する
第11回	『徒然草』第89段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第89段の表現を解析する
第12回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する
第13回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する
第14回	テスト	本授業の要点の理解度を確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009年、2,200円（税別）

【参考書】

『徒然草抜書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

テスト（上記の到達目標に関連する問題を出す）：60%
平常点（提出物・受講姿勢）：40%

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本語における文の原理』くろしお出版、2008年

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年

『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』いのちのことは社、2014年

【Outline and objectives】

In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.

LIN500B2

日本語・日本文学の基礎B

竹林 一志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『伊勢物語』第1段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。

2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語・日本文学の基礎B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本語の歴史と現在Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、『伊勢物語』第1段～第15段を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに演習形式で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える
第2回	古典文法（助詞・助動詞）	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する
第3回	第1段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の表現を解析する
第4回	第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の表現を解析する
第5回	第2段・第3段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第2段・第3段の表現を解析する
第6回	第4段・第5段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第4段・第5段の表現を解析する
第7回	第6段～第8段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第6段～第8段の表現を解析する
第8回	第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する
第9回	第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する
第10回	第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の表現を解析する
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する
第12回	第13段～第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段～第15段の表現を解析する
第13回	総括	本授業のまとめを行う
第14回	テスト	本授業の要点の理解度を確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院

『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表・提出物・受講姿勢）：60%

テスト（上記の到達目標に関連する問題を出す）：40%

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在Ⅰ」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本語における文の原理』くろしお出版、2008年

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年

『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』いのちのことば社、2014年

【Outline and objectives】

In this class we carefully read 'The tale of Ise' (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in kana and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.

LIT500B2

表現と社会

内藤 裕之

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「偉大なる創造は模倣から生まれる」。この言葉の真の意味を理解し、先行する表現者の成果の上に、後進の者として何を積み上げることが、新たなる創造につながるのかを考える。何を守り、何に注意しなければならないのか、実際の表現例や知的財産をめぐる訴訟例を検討しながら、正解を求めるのではなく、考える道筋を獲得することを重視する。

【到達目標】

知的財産としての「創作」物について、①編集者、会社員、②研究者、③創作者、の三つの立場から検討し、先行する創作者、創作物に対する尊敬の念と、知的財産を保護する姿勢を身につける。「盗用」「剽窃」「盗作」など、知的財産権の侵害につながる危険のあるものは、さまざまな「差別」と同様に、語彙や表現の類似に目を奪われてしまうと、本質部分を見逃してしまう。表層的な部分に惑わされることなく、意味するところの本質を理解する姿勢との能力を身につけ、社会生活において、危険回避出来る考え方を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「表現と社会」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「表現と社会」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

概念や定義を講義の後、実際に判決の出ている知的財産権侵害の裁判に対する院生による発表形式を取る。判例に顕れた課題点提出、疑義、解析、と、自身が裁判官であると仮定して、どのような視点から、どういった判決を出すのかをシュミレートする。これを受けての補足説明、全体討議。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	知的財産	知的財産とは何か？ 著作権、著作 者人格権とは何か？
第2回	知的財産と関わる三つの 立場	知的財産を守るため、創作者、編集者 (会社員)、研究者の三つの立場からア プローチする。
第3回	著作権侵害はなぜ起こ る？	創作における資料・史料とは何か。 「盗作」「盗用」「剽窃」の差異。「公刊 された事実」と「選択された事実」
第4回	体験した事例から考察す る。	法律論ではなく、編集者としての体験 から表現と著作権について考える。
第5回	表現と社会①――週刊誌 編集者としての体験から	FRIDAY編集者としての実例か ら、表現と社会を考える。
第6回	表現と社会②――男性 ヴィジュアル総合誌編集 者としての体験から	PENTHOUSE編集者としての実 例から、表現と社会を考える。
第7回	表現と社会③――文芸誌 編集者としての体験から	「群像」「小説現代」、単行本、文庫本編 集者としての体験から。
第8回	表現と社会④――文芸分 野責任者としての体験か ら	現場の立場と責任の取り方を例とし て、何が守られるべきかについて考察 する。
第9回	知的財産をめぐる訴訟例 を検討する。	実例の分析。写真表現、立体表現、絵 画表現、言語表現など表現方法・分野 による差異を考える。
第10回	院生①による解析	関心を持った知的財産訴訟について、 担当者①が課題や疑問点の提出。判決 への賛否、分析、説明、討論。
第11回	院生②による解析	関心を持った知的財産訴訟について、 担当者②が賛否、分析、説明、討論。
第12回	院生③による解析	関心を持った知的財産訴訟について、 担当者③が賛否、分析、説明、討論。
第13回	SNS 時代の新たな危険	電子書籍、SNS と知的財産権。SNS に潜む危険。 犯罪者とならないために。
第14回	総括	知的財産を守る立場での総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講座後半においての院生発表に向けて、知的財産権裁判の中から自身の関心のある事例探し。

【テキスト（教科書）】

特に使用しません。

【参考書】

参考書は指定しません。インターネット、TV、新聞等で、知的財産に養するニュース、記事について関心を持ち、よく理解して注意深く考える。ヘッドラインのみでなく、記事本文を読み込み、判らない単語、知識について、調べておく。日常生活の中にある、さまざまな知的財産を見つけ出す。

【成績評価の方法と基準】

平常点30点、発表50点、発表や討議における積極的な参加20点。

【学生の意見等からの気づき】

座学に陥らないよう注意し、常に問いかけを行う。

【学生が準備すべき機器他】

自宅その他のインターネット環境。

【その他の重要事項】

週刊誌や総合ビジュアル誌の編集者、文芸・文庫分野の現場、あるいは編集責任者として、数々の著作権侵害、知的財産権や差別表現等の現場を経験しており、法律家とは違った現場での対応や判断とその基準を示すことが出来る。これはメディア業界はもとより、一般企業においても、現場レベルから求められる日常的な判断力の育成について指針を示すことが出来、法律論から来る判断とはしばしば対立する企業としての論理、決断について、伝えることで、社会人としての第一歩に資することが出来る。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域（現職）> 日本文化を海外に発信するべく、若い世代の文化交流と海外の日本語教育の普及、支援に努める公益財団法人国際文化フォーラム代表理事 常務理事。

前職は文芸分野（フィクション）を統括する講談社文芸局長。

<主要研究業績（経歴）>

群像編集部、PENTHOUSE 編集部、FRIDAY 副編集長、小説現代副編集長、文庫出版部次長、文庫出版部長、文芸局次長兼文芸図書第二出版部長、文芸局長、文芸局長兼文芸文庫出版部長、文芸局長兼群像編集長。

【Outline and objectives】

Pablo Picasso, who is the one of great artist, painter, said " Good artists copy, Great artists steal". Can we say, that we understand what his meaning. We must respect the author and writer, in their expression methods they already have done and the word they have chosen. What is a plagiarism ?

In the expression, which is it to steal ? I don't want you to learn the correct answer. We should study the process of thinking, how not to infringe on rights in literature, in scenario, in photo, in music, in painting, etc.

LIT500B2

編集理論

仲俣 暁生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「編集」という行為がもつ創造的機能をさまざまな現代日本の雑誌の事例をもとに理解する。

【到達目標】

「編集」という行為の価値を理解することを通して、日本における出版メディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「編集理論」においては「DPI」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「編集理論」においては「DPI」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第2回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第3回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（ <i>editor</i> ）」が担うさまざまな機能を理解する。
第4回	「雑誌」のケーススタディ①～文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第5回	「雑誌」のケーススタディ②～ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第6回	「雑誌」のケーススタディ③～ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第7回	「雑誌」のケーススタディ④～ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第8回	「雑誌」における編集についての中間まとめと討議	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第9回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第10回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①～ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としてのWWWのもつ意義を理解する。
第11回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②～ウェブ2.0以後	「ウェブ2.0」以後に起きたWWWの変質について「編集」という観点から理解する。
第12回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③～ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。
第13回	あらたな「編集」に向けての討議	これまでの講義を受けて、現在のメディア環境のなかでどのような「編集」が可能かを討議する。
第14回	総まとめ	講義全体のまとめとレポートについてのガイダンスを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】

必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】

・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
 ・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
 ・野中モモ、ばるぼら『日本のZINEについて知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史1960～2010年代』（誠文堂新光社、2017）

・赤田祐一、ばるぼら『20世紀エディトリアル・オデッセイ：時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）

・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

・岡本真、仲俣暁生編『ブックビジネス2.0～ウェブ時代の新しい本の生態系』（実業之日本社、2010）

【成績評価の方法と基準】

講義に対する姿勢＝30%、自主課題への取り組み＝30%、最終レポート＝40%

【学生の意見等からの気づき】

今季からの講義のため現時点ではなし。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>出版論、メディア論

<研究テーマ>雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論

<主要研究業績>

①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

②編著『「電子社会」誕生～日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）

③『極西文学論』（晶文社、2004年）

【Outline and objectives】

To understand the creative function of "editorship" through the case studies of various magazines in modern Japan.

LIT500B2

作家特殊研究 A

赤坂 真理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実作者と対話できることは、創作や研究を志す人にとって、まれな機会です。利用してほしいと思います。

講師は、大きな物語と小さな（個人的な）物語をつなぐことを旨としてきました。それらは、従来、排他的に（論理は論理、感情は感情、というように）扱われることが多かったと講師は感じ、新しい作風を模索してきました。学生のみなさんが、新たな視座を得る助けになりたいと思います。

【到達目標】

学生が新たな視点で、自分や他者や社会を見られるようになること。
表現によって自己を発見し、統合して、より生きやすくなること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講師の作品を研究したい者に対しては、それを助けます。それを創作に活かしたい者に対しては、それを助けます。研究もしくは創作、その発表、そしてそのフィードバックが主です。講義よりは、演習や発表が多くなります。講義があるとしたら、学生から出てきたものを受けて行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	自己紹介という表現	「この自己紹介で自分をわかってもらわなければいけない！」と思ったら、どういうふうに関心を表現しますか？ いい内容を言おうとする必要や、うまく言おうとする必要はありません。あなたは自分を他者に伝えたい。どう表現しますか？ 他者の人もよく聞いてください。
第2回	ガイダンス	講師が何をしてきたか、この講義で何をしたいか、などをお話します。
第3回	作家との対話1	受講生と講師による対話
第4回	対象を決めて発表する	第1回、第2回、第3回を受けて、自分のしたいことを出します。途中で変わってもかまいませんから一度決めます。
第5回	インタビュー	インタビューの仕方について研究する
第6回	作家との対話2	受講生と講師による対話
第7回	テーマ設定	テーマの立て方
第8回	中間発表	中間発表
第9回	インタビュー	インタビューの仕方について研究する
第10回	作家との対話3	受講生と講師による対話
第11回	作家との対話4	受講生と講師による対話
第12回	特別授業	ロールプレイング等、学生の課題に沿った授業
第13回	作家との対話5	作家との対話5
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講師の著書『東京プリズン』『箱の中の天皇』『愛と暴力の戦後とその後』はお読みください。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

必要に応じて指示します。個別に勧める参考書などもあります。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業に臨む姿勢と発表の内容）100%。

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本年度はじめて授業を担当するため）

【その他の重要事項】

授業内容は学生と話し合ったうえで変更となる可能性があります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>小説、批評

<主要研究業績>

小説

『ヴァイブレータ』

『東京プリズン』

『箱の中の天皇』

批評

『肉体と読書』

『愛と暴力の戦後とその後』

【アクティブラーニングについて】

この授業ではアクティブラーニングを行います。講師と仲間の両方がいる状況というのは、とてもいいものです。ぜひ、両方と、よく対話をしてほしいと思います。表現を介すると、他者と深くつながることができます。そこは嘘がつけない場だからです。発表する時間、他者の表現を知る時間、互いにフィードバックし合う時間を、大切にします。

【フィールドワークについて】

学生のニーズにもよりますが、そのときに湧いた問題系に対して、適当な場所や人があれば、紹介したいと考えています（たとえば展覧会や興味深い人など）。

また、講師はアート系雑誌の編集者のキャリアがあります。また、現時点で文学のパフォーマンスをしています。そういう観点から、学生に紹介したい別ジャンルの表現もあるかもしれません。

【Outline and objectives】

You will have better understating and relationship with yourself and the world around you through what you do in this class.

LIT500B2

作家特殊研究 B

赤坂 真理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期開講科目（実作者と対話できることは、創作や研究を志す人にとって、まれな機会です。利用してほしいと思います。

講師は、大きな物語と小さな（個人的な）物語をつなぐことを旨としてきました。それらは、従来、排他的に（論理は論理、感情は感情、というように）扱われることが多かったと講師は感じ、新しい作風を模索してきました。学生のみなさんが、新たな視座を得る助けになりたいと思います。

【到達目標】

学生が新たな視点で、自分や他者や社会を見られるようになること。
表現によって自己を発見し、統合して、より生きやすくなること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講師の作品を研究したい者に対しては、それを助けます。それを創作に活かしたい者に対しては、それを助けます。研究もしくは創作、その発表、そしてそのフィードバックが主です。講義よりは、演習や発表が多くなります。講義があるとしたら、学生から出てきたものを受けて行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	夏季休暇の成果を話し合う	夏季休暇中に各自が行った活動について話し合う。
第2回	各自のアプローチ方法	何にどうアプローチしたか？の発表
第3回	インタビューの相手	誰にインタビューしたか？の発表
第4回	インタビューの仕方3	具体的なインタビューの仕方3
第5回	構成	構成の仕方の研究
第6回	中間発表1	各自の活動に関する発表
第7回	中間発表2	各自の活動に関する発表
第8回	特別講義	学生のリクエストによる特別授業の予定
第9回	受講生による発表と討論	各自のテーマについて
第10回	受講生により発表と討論	各自のテーマについて
第11回	成果発表	成果を発表する
第12回	まとめ①	授業と各自の成果発表に関する振り返り
第13回	まとめ②	授業と各自の成果発表に関する振り返り
第14回	フィードバック	各自の成果に対して講師からのコメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講師の著書『東京プリズン』『箱の中の天皇』『愛と暴力の戦後とその後』はお読みください。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

必要に応じて指示します。個別に勧める参考書などもあります。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業に臨む姿勢と発表の内容）100%。

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本年度はじめて授業を担当するため）

【その他の重要事項】

授業内容は学生と話し合ったうえで変更となる可能性があります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>小説、批評

<主要研究業績>

小説

『ヴァイブレータ』

『東京プリズン』

『箱の中の天皇』

批評

『肉体と読書』

『愛と暴力の戦後とその後』

【アクティブラーニングについて】

この授業ではアクティブラーニングを行います。講師と仲間の両方がいる状況というのは、とてもいいものです。ぜひ、両方と、よく対話をしてほしいと思います。表現を介すると、他者と深くつながることができます。そこは嘘がつけない場だからです。発表する時間、他者の表現を知る時間、互いにフィードバックし合う時間を、大切にします。

【フィールドワークについて】

学生のニーズにもよりますが、そのときに湧いた問題系に対して、適当な場所や人があれば、紹介したいと考えています（たとえば展覧会や興味深い人など）。

また、講師はアート系雑誌の編集者のキャリアがあります。また、現時点で文学のパフォーマンスをしています。そういう観点から、学生に紹介したい別ジャンルの表現もあるかもしれません。

【Outline and objectives】

You will have better understating and relationship with yourself and the world around you through what you do in this class.

LIT500B2

文芸創作研究 A

島田 雅彦

傾国子女 文藝春秋2013
 ニッチを探して 新潮社2013
 往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014
 暗黒寓話集 文藝春秋2014
 虚人の星 講談社2015

【Outline and objectives】

Rebuild the relationship between the senses and words and extend the expression skill. While aiming at practical guidance that creation and criticism become sellable products in various forms such as novels, poetry, images, cartoons, etc. While conducting verification on how major works have been drawn, we will activate creative abilities and learn skills while writing.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

五感と言葉の関係を構築し直し、表現能力を拡張する。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指す。表現手段は小説、詩、映像、漫画などさまざまな形態が考えられよう。古今東西の主要作品がどのように描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】

春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、共同で作品の映像化を試みたり、現代文学の批評を試みたりする。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講義とワークショップを交互に行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方ABCを論じる。また映像化された古典や文学作品を研究し、文章表現の映像化のプロセスを検証し、実際にシナリオ化、撮影を試みる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	文学とはどんな営みか？	日本語とはどういう言語か？ 書く動機
2	ジャンル論	ロマンスと小説の違い 漱石の試み
3	小説の構成	起承転結とストーリー
4	一人称	人称の研究 私語り。日記私小説
5	140字から始める	実践編 他者としての私
6	三人称	語り手の発明
7	神話の活用	素材と方法の組み合わせ 神話を現代化する。
8	夢の活用1	漱石「夢十夜」の研究
9	夢の活用2	夢を素材にショートショートを書く
10	小説のトポロジー1	場所論 小説の舞台。上京小説。ロードノベル
11	小説のトポロジー2	フィールドワーク 場所を描く 都内のある場所を選び、その印象、空間を描写してみる。
12	描写の手法	古今東西の優れた描写のサンプリング とテーマを決め、描写の腕を磨くワークショップ
13	小説のテーマの研究1	労働を描く 奇妙な仕事 エキスパートの世界
14	短編小説	各人のテーマと題材による短編執筆指導

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。

【テキスト（教科書）】

『小説作法ABC』島田雅彦著 新潮選書 2009

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

【参考書】

授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席、各回の課題の消化具合、 Semester末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題 80%、平常点 20%とする。

【学生の意見等からの気づき】

遅刻厳禁

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法ABC 新潮選書2008

徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009

悪貨 講談社2010

LIT500B2

文芸創作研究 B

島田 雅彦

【Outline and objectives】

Rebuild the relationship between the senses and words and extend the expression skill. While aiming at practical guidance that creation and criticism become sellable products in various forms such as novels, poetry, images, cartoons, etc. While conducting verification on how major works have been drawn, we will activate creative abilities and learn skills while writing.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

五感と言葉の関係を構築し直し、表現能力を拡張する。創作、批評がそのまま商品となるような実践的な指導を目指す。表現手段は小説、詩、映像、漫画などさまざまな形態が考えられよう。古今東西の主要作品がどのように描かれてきたかの検証を行いつつ、より能動的に創作活動を行い、書きつつ学ぶ。

【到達目標】

春学期・秋学期一編ずつの短編もしくは通年で一本の中編を仕上げる。その作業は各自で行うが、共同である作品の映像化を試みたり、現代文学の批評を試みる。文芸誌の新人賞獲得を目指し、さらには書き手としての実践的ノウハウを身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講義とワークショップを交互に行う。個々のテーマによる創作は、随時発表の機会を作る。書くことと読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説の書き方ABCを論じる。また映像化された古典や文学作品を研究し、文章表現の映像化のプロセスを検証し、実際にシナリオ化、撮影を試みる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	小説の時間 1	過去とどう向き合うか 歴史上の人物、過去の出来事とどう向き合うか
2	小説の時間 2	記憶、時間軸、回想
3	小説のテーマの研究 2	愛の形 異性愛、同性愛 変態性欲
4	写生文	漱石の散文理論のリサイクル
5	キャラクター作り 1	魅力的な人物造型の実践 競作
6	キャラクター作り 2	魅力的な人物造型の実践 競作
7	小説のテーマの研究 3	死のデザイン あの世の研究 自殺 病氣小説
8	小説のテーマの研究 4	交換 経済と文学 贋金づくり 詐欺というフィクション
9	創作	素材選び、プロット作り
10	創作	細部の検討、構成
11	鑑賞 1	文芸批評の実践
12	鑑賞 2	映画評、音楽評
13	創作中間発表	進行状況の報告
14	個人面談	細部のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指示したテキストを読み込んでくること。文芸誌の新人賞への応募。ゼミ主催のウェブマガジンへの発表。

【テキスト（教科書）】

『小説作法ABC』島田雅彦著 新潮選書 2009

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017

【参考書】

授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席、各回の課題の消化具合、セメスター末に提出が義務づけられている創作の出来で評価する。評価基準はレポート課題 80 %、平常点 20 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

遅刻厳禁

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史

<研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究

<主要研究業績>

小説作法ABC 新潮選書2008

徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009

悪貨 講談社2010

傾国子女 文藝春秋2013

ニッチを探して 新潮社2013

往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014

暗黒寓話集 文藝春秋2014

OTR600B2

日本文芸特殊研究 I A

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<日本>をキーワードに多様な人文的アプローチを行う。

【到達目標】

上記のテーマにそって、学生一人一人が各自の学問的関心を深め論文作成の基礎を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究 I A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初に上記テーマの意味を概説し、その後は学生各自の学問的関心によって演習形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	<日本>研究の意味と課題	<日本>研究の方法と視点について概説する。
第2回	同前	同前
第3回	同前	同前
第4回	各自個別研究の課題	各自の個別研究の課題を確認する。
第5回	同前	同前
第6回	発表演習	各自の個別研究課題にそって演習発表を行う。
第7回	同前	同前
第8回	同前	同前
第9回	同前	同前
第10回	同前	同前
第11回	同前	同前
第12回	同前	同前
第13回	同前	同前
第14回	まとめ	<日本>研究の意義と春学期到達点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究課題にそって基礎資料の収集、分析を行う。

【テキスト（教科書）】

特に定めない。

【参考書】

必要に応じて授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%
「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学
<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究
<主要研究業績>
『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

We will take various humanities research methods with a focus on Japan.

OTR600B2

日本文芸特殊研究 I B

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<日本>をキーワードに多様な人文的アプローチを行う。

【到達目標】

上記のテーマにそって、学生一人一人が各自の学問的関心を深め論文作成を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究 I B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 II」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初に上記テーマの意味を概説し、その後は学生各自の学問的関心によって演習形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	<日本>研究の意味と課題	<日本>研究の方法と視点について概説する。
第2回	同前	同前
第3回	同前	同前
第4回	各自個別研究の課題	各自の個別研究の課題を確認する。
第5回	同前	同前
第6回	発表演習	各自の個別研究課題にそって演習発表を行う。
第7回	同前	同前
第8回	同前	同前
第9回	同前	同前
第10回	同前	同前
第11回	同前	同前
第12回	同前	同前
第13回	同前	同前
第14回	まとめ	<日本>研究の意義と秋学期到達点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究課題にそって基礎資料の収集、分析を行う。

【テキスト（教科書）】

特に定めない。

【参考書】

必要に応じて授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%
「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学
<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究
<主要研究業績>
『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

We will take various humanities research methods with a focus on Japan.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅱ A

小秋元 段

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は長門本『平家物語』を扱う。

【到達目標】

長門本『平家物語』を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究Ⅱ A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

この授業は、読み本系『平家物語』の一異本、長門本をテキストとして、履修者が各種の工具書、資史料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は麻原美子ほか編『長門本平家物語一』（勉誠出版、2004年）より1頁を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	作品解説1	『平家物語』の成立について講義する。
第2回	作品解説2	『平家物語』の諸本について講義する。
第3回	作品講読1	長門本巻一「二代后事」前半の講読。
第4回	作品講読2	長門本巻一「二代后事」後半の講読。
第5回	作品講読3	長門本巻一「額打論事」の講読。
第6回	作品講読4	長門本巻一「清水寺炎上事」前半の講読。
第7回	作品講読5	長門本巻一「清水寺炎上事」後半の講読。
第8回	作品講読6	長門本巻一「殿下乗合事」前半の講読。
第9回	作品講読7	長門本巻一「殿下乗合事」後半の講読。
第10回	作品講読8	長門本巻一「成親謀叛事」前半の講読。
第11回	作品講読9	長門本巻一「成親謀叛事」後半の講読。
第12回	作品講読10	長門本巻一「鹿谷酒宴事」前半の講読。
第13回	作品講読11	長門本巻一「鹿谷酒宴事」後半の講読。
第14回	作品講読12	長門本巻二「師高焼払温泉寺事」の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

麻原美子ほか編『長門本平家物語一』（勉誠出版、2004年）

【参考書】

延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈第一本（巻一）』（汲古書院、2005年）
大津雄一ほか編『平家物語大辞典』（東京書籍、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70%）、討論への貢献（30%）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【Outline and objectives】

In this course, we will read Nagatobon Heike-Monogatari.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅱ B

小秋元 段

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は『古今著聞集』を扱う。

【到達目標】

『古今著聞集』を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究Ⅱ B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

この授業は、『古今著聞集』をテキストとして、履修者が各種の工具書、資史料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	作品解説1	『古今著聞集』の概要について講義する。
第2回	作品解説2	『古今著聞集』の研究法について講義する。
第3回	作品講読1	p.509～p.512の講読。
第4回	作品講読2	p.513～p.516の講読。
第5回	作品講読3	p.517～p.520の講読。
第6回	作品講読4	p.521～p.524の講読。
第7回	作品講読5	p.525～p.528の講読。
第8回	作品講読6	p.529～p.532の講読。
第9回	作品講読7	p.533～p.536の講読。
第10回	作品講読8	p.537～p.540の講読。
第11回	作品講読9	p.541～p.544の講読。
第12回	作品講読10	p.49～p.52の講読。
第13回	作品講読11	p.53～p.56の講読。
第14回	作品講読12	p.57～p.60の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

永積安明・島田勇雄校注、日本古典文学大系『古今著聞集』（岩波書店、1966年）

【参考書】

西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集』上・下（新潮社、1983・86年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70%）、討論への貢献（30%）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世文学、書誌学

<研究テーマ>筆記物語、古活字版

<主要研究業績>小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）、小秋元段『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）

【Outline and objectives】

In this course, we will read Kokonchomonju.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅲ A

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では文献を通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸～明治時代をおもな対象とし、文学・美術・芸能・思想など諸分野の論考を取りあげる。

【到達目標】

- (1) 各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点を考える。
(2) 文献から論点を採し、研究を進展させる視点を見出す力をきたえる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究Ⅲ A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

毎回、教員指定の文献または学生推薦の文献を素材とする。各自が事前に読んでくることを前提とし、担当者が文献について内容と論点をまとめて発表し、全員でその論点について、また当該分野の研究アプローチの特徴について討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究とは	学際研究の課題
第2回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第3回	文献講読1 A	文学篇①
第4回	文献講読1 B	同上
第5回	文献講読2 A	文学篇②
第6回	文献講読2 B	同上
第7回	文献講読3 A	美術篇
第8回	文献講読3 B	同上
第9回	文献講読4 A	芸能篇
第10回	文献講読4 B	同上
第11回	文献講読5 A	思想篇
第12回	文献講読5 B	同上
第13回	文献講読6 A	歴史篇
第14回	文献講読6 B	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前の週に配られた文献を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

コピーを配布する。

【参考書】

渡辺浩『日本政治思想史 十七～十九世紀』（東京大学出版会 2010年）
矢内賢二編『明治、このフシギな時代1～3』（新典社、2016・17・19年）

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化
<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究
<近年の主要著書>

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル 2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（共著 笠間書院 2014）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編 共著 笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編 共著 笠間書院 2014）

『別冊太陽 歌麿決定版』（共著 平凡社 2016）

【Outline and objectives】

Learning diffrence of disciplines to approach Tokugawa-Meiji period cultures by reading essays from various fields including literature, art history, performing arts, history etc.

OTR600B2

日本文芸特殊研究Ⅲ B

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、学際的な日本研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】

- (1) 日本近世・近代文化研究の広がりや視点のさまざまを身近な事例から学ぶ。
(2) 受講生が広い視野で自らの研究の位置づけを見なおす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究Ⅲ B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第2回	文献講読	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（1）
第3回	先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（2）
第4回	文献講読	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（3）
第5回	先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（4）
第6回	文献講読	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（5）
第7回	先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（6）
第8回	中間まとめ	「いい論文」「いい研究」とは？ 討論
第9回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論1
第10回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論2
第11回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論3
第12回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論4
第13回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論5
第14回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配付された文献を読んでおくようにしましょう。

【テキスト（教科書）】

適宜配付します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・文化
<研究テーマ>近世中期文学・文化の研究
<近年の主要論文>

「書籍を模倣する遊び—「見立絵本」にかんする疑問、から—」『京都語文』26号 2018

「奇々羅金鶏=実在の艶次郎論」『山東京伝全集第13巻月報』べりかん社 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

「鈴木芙蓉の唐土憧憬」『太平詩文』70号 2016

「近世日本の異国絵本の愉楽と陥穽」『文学（隔月刊）』16巻6号 2015

「江戸狂歌の地方普及」『日本文学誌要』91号 2015

【Outline and objectives】

Thinking how to attach significance to your inter-disciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies

OTR600B2

日本文芸特殊研究ⅣA

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明
第2回	研究課題の紹介（2年次生）①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告
第3回	研究課題の紹介（2年次生）②	同上
第4回	研究課題の紹介（2年次生）③	同上
第5回	関心対象の紹介（1年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える
第6回	関心対象の紹介（1年次生）②	同上
第7回	修士課程の中間報告（2年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第8回	修士課程の中間報告（2年次生）②	同上
第9回	研究動向の確認（1年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討
第10回	先行研究の論旨の整理（2年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討
第11回	先行研究の論旨の整理（2年次生）②	同上
第12回	先行研究の論旨の整理（1年次生）①	同上
第13回	先行研究の論旨の整理（1年次生）②	同上
第14回	夏期休暇中の作業計画立案	各自が行うべき作業の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～浄土歌の系譜、「源氏物語」・「平家物語」の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏・篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「工尺譜の起源をめぐって—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR600B2

日本文芸特殊研究ⅣB

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は秋学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	修士論文構想の報告（2年次生）①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第3回	修士論文構想の報告（2年次生）②	同上
第4回	先行研究の紹介と整理（1年次生）①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）②	同上
第6回	修士課程の中間報告（1年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第7回	修士課程の中間報告（1年次生）②	同上
第8回	修士論文の中間報告（2年次生）①	修士論文執筆の進捗状況に関する報告
第9回	修士論文の中間報告（2年次生）②	同上
第10回	修士論文の構想発表（1年次生）①	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第11回	修士論文の構想発表（1年次生）②	同上
第12回	修士論文提出前の総点検（2年次生）	論文構成、要旨、英文要旨、参考文献などについて点検を行う
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ	1年次生は春季休暇中の作業課題に関する計画を示し、2年次生は提出論文について報告し、講評を受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 夏期休暇中の研究成果をまとめる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

BSP500B2

日本文学・国際日本学基礎演習

阿部 亮太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養う。

【到達目標】

- 1、日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、その内容・着眼点・意義等について理解する。
- 2、文献の内容を要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
- 3、自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書けるようにする。
- 4、修士論文執筆のための研究計画を具体的にし、文章化する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学・国際日本学基礎演習」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本文学・国際日本学基礎演習」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

まず日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読みます。そして、その内容を400字程度の文章で要約し、自分自身の見解を800字程度の小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。

また、履修者は修士論文執筆に向けた研究計画書の作成を行います。

なお、履修者が執筆した要約・小論文・研究計画書には、担当教員がすべて添削を行い、返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業の進め方	授業の進め方について説明する。
第2回	図書館の利用法・文献検索の方法	法政大学市ヶ谷図書館の利用法・文献の検索方法等を学ぶ。
第3回	課題論文A1（日本語）	課題論文Aを読み、要約する。
第4回	課題論文A2	課題論文Aに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第5回	課題論文A3	課題論文A2で書いた小論文をもとに、履修者同士で討論を行う。
第6回	課題論文B1（日本史）	課題論文Bを読み、要約する。
第7回	課題論文B2	課題論文Bに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第8回	課題論文B3	課題論文B2で書いた小論文をもとに、履修者同士で討論を行う。
第9回	課題論文C1（日本文化）	課題論文Cを読み、要約する。
第10回	課題論文C2	課題論文Cに関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第11回	課題論文C3	課題論文C2で書いた小論文をもとに、履修者同士で討論を行う。
第12回	研究計画の検討1	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第13回	研究計画の検討2	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第14回	研究計画の発表	履修者による研究計画の発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

宿題として作文を課す場合があります。また、第12回（履修者の研究計画の検討）までに、各自でA4用紙3枚以上の研究計画書を準備する必要があります。

【テキスト（教科書）】

プリントを配付します。

【参考書】

授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物：50%

研究計画書の内容：50%

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

この科目は外国人留学生を対象とします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中世文学

<研究テーマ>軍記物語

<主要研究業績>「崇徳関連話群の再検討—延慶本『平家物語』の編集意図—」（大橋直義氏編『アジア遊学 根来寺と延慶本『平家物語』』勉誠出版 2017年6月）、「認識としての「保元・平治」—物語は院政期の動乱をいかに捉え直すか—」（『国語と国文学』94巻4号 2017年4月）、「天理本『梅松論』と古活字本『平家物語』—行誉の編集を考える—」（『太平記』国際研究集会編『太平記をとらえる』笠間書院 2014年11月）、「古活字本『保元物語』編者考—『壺囊鈔』を用いた評論群を中心に—」（『文学・語学』207号 2013年11月）

【Outline and objectives】

Reading various literatures on Japan, summarizing the contents, and summarizing your own opinion on it in essay-style sentences, develop the basic abilities required for Japanese studies.

BSP500B2

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子 広幸

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、研究活動における手法・手順・発表などを学ぶ。あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導く。

【到達目標】

1. 研究の方向性を明確化する。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようにする。
2. 研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3. 自らの研究課題などを他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学・国際日本学論文作成基礎実習」においては「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本文学・国際日本学論文作成基礎実習」においては「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 研究課題・計画を精緻化する。
2. 先行研究の文献・研究手法についての発表をする。
3. 学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、方向性を探る材料とする。
4. 後半日程には、研究の進捗について成果の発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第2回	私の研究課題1	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第3回	私の研究課題2	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する。
第4回	私の研究課題3	【自らの日本語の問題点を探る】 研究課題を振りかえて何が学べたかを総括する。 【発表時に必要な日本語について模索する】 【参考文献の引用などの扱い方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第5回	研究手法1	研究の過程で必要な手法について学ぶ。
第6回	研究手法2	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【研究・調査時に必要な日本語について学ぶ。連絡のメールや、調査依頼など】
第7回	研究手法3	研究の過程で必要な手法について学ぶ。【ミニ調査のガイダンス】
第8回	先行研究発表1	各自が探した先行研究について発表する。 【要旨をまとめる時の日本語の使い方を学ぶ】
第9回	先行研究発表2	各自が探した先行研究について発表する。
第10回	先行研究発表3	【スライドの作り方を学ぶ】 各自が探した先行研究について発表する。
第11回	先行研究発表4	【ミニ調査の進捗状況・テーマを確認する】 各自が探した先行研究について発表する。
第12回	先行研究発表5	【調査報告書への反映】 各自が探した先行研究について発表する。
第13回	成果発表1	【スライドの作り方を学ぶ】 本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。【研究論文の目次を作ってみる】これは最終課題となる。
第14回	成果発表2 今後の課題を意識化する	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【前週に発表が終わっているものは反映点を明らかにする】

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1. 研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるように要点をまとめておくこと。
2. クラスでは問題を共有し、積極的に手法等について工夫を重ねること。

3. 日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。

【テキスト（教科書）】

研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】

金子広幸（2014）『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』
<http://www.ask-books.com/books/?p=174>
敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学習として使用してください。大学図書館の資料を参照のこと。

【成績評価の方法と基準】

提出物（研究計画書 発表時のレジュメ 他日本語に関する宿題など）30 %
発表参加 20 %
発表完成度 20 %
日本語小試験（2 回程度実施）10 %
平常点 20 %
成績評価は 100 点満点で採点。60 点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の皆さんへ。

- 毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。準備をお願いします。
- 参加人数にもよりますが、1 学期あたり、4 回程度の発表があります。
- スライドやレジュメの作成、先行研究を探ることなど、様々な課題があります。
- 準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるように、教師といっしょに方法を探しましょう。もちろん自宅での発表の練習をしてください。

【学生が準備すべき機器他】

クラスでは多くの回でスライドなどを使用します。プロジェクターの準備などを進んで協力してください。

【その他の重要事項】

日本語が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。
オフィスワークの時間は、金曜日の 16 時 30 分から 17 時 30 分は、相談の時間として設定しています。連絡はメールで、予約を取ってください。
他なんでも相談してください。

hiroyuki.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】

<専門領域>日本語教育学 社会言語学 地理学 歴史学 日本文化
<研究テーマ>敬語など待遇表現 日本語クラス活動 地域日本語支援 留学生相談業務 日中言語比較
<主要研究業績>

- ①『初級が終わったら始めよう にほんご敬語トレーニング』（アスク 2006 年）
- ②『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』（アスク 2014 年）
- ③『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』（アスク 2005 年）
- ④『日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索』基礎研究その 1（『日中学院紀要教学』 2008 年）
- ⑤『初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析』（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文 2012 年）

【Outline and objectives】

The students clarify their research tasks from viewing previous research and learn methods, procedures, presentation skills etc. in research activities. And together, they lead solutions on their own Japanese language problems in that process.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

加藤 昌嘉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』の精読&注釈
- ◆『源氏物語』『夢浮橋』巻を、写本の影印を使って精読します。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
- A、くずし字（変体仮名）を精読する力
- B、古文を正確に訳出する力
- C、語法や典拠を調査する力
- D、明快なプレゼンテーションをおこなう力
- E、問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- ◆保坂本「夢浮橋」巻（鎌倉時代写）を注釈してゆきます。
- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。それを元に、全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	「夢浮橋」	薫、帰京
2	「夢浮橋」	使者小君
3	「夢浮橋」	小君、来訪
4	「夢浮橋」	僧都の手紙①
5	「夢浮橋」	僧都の手紙②
6	「夢浮橋」	浮舟の反応①
7	「夢浮橋」	浮舟の反応②
8	「夢浮橋」	薫の手紙①
9	「夢浮橋」	薫の手紙②
10	「夢浮橋」	論文検討①
11	「夢浮橋」	論文検討②
12	「夢浮橋」	浮舟の反応①
13	「夢浮橋」	浮舟の反応②
14	「夢浮橋」	巻末

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「浮舟」「蜻蛉」「手習」巻を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

- ◆保坂本『源氏物語』：WEB サイト《e国宝》

【参考書】

- ◆以下の現代語訳・注釈書を推薦します。
- ◎大塚ひかり 訳『源氏物語（6）』（ちくま文庫）
- ◎『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夢浮橋』（至文堂）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『源氏物語』前後左右（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

加藤 昌嘉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』の精読&注釈
- ◆『源氏物語』『滯標』巻を、写本の影印を使って精読します。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
- A、くずし字（変体仮名）を精読する力
- B、古文を正確に訳出する力
- C、語法や典拠を調査する力
- D、明快なプレゼンテーションをおこなう力
- E、問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

- ◆飯島本「滯標」巻（室町時代写）を注釈してゆきます。
- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。それを元に、全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	「滯標」	光源氏、復権
2	「滯標」	朱雀院
3	「滯標」	朧月夜
4	「滯標」	冷泉帝
5	「滯標」	政権交代
6	「滯標」	頭中将
7	「滯標」	夕霧
8	「滯標」	明石の姫君
9	「滯標」	宿曜の予言
10	「滯標」	相人の言
11	「滯標」	論文検討
12	「滯標」	乳母選定
13	「滯標」	乳母、明石へ
14	「滯標」	紫の上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「須磨」「明石」巻を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

- ◆池田和臣 編『飯島本源氏物語（3）』（笠間書院）

【参考書】

- ◆以下の現代語訳・注釈書を推薦します。
- ◎林望 訳『謹訳源氏物語（3）』（祥伝社文庫）
- ◎『源氏物語の鑑賞と基礎知識 滯標』（至文堂）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成のために、論文執筆の基礎を学び、実際に博士論文作成の作業を行う。

【到達目標】

博士論文作成の基礎的学力を身につけ、論文作成のための研究計画を現実なものとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

先行研究の検討と論文作成のための基礎資料を収集する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	概説1	博士論文の意義
第2回	概説2	博士論文の意義
第3回	先行研究の調査1	先行論文の検討
第4回	先行研究の調査2	先行論文の検討
第5回	先行研究の調査3	先行論文の検討
第6回	基礎資料の収集と分析1	基礎資料の分析と問題点の析出
第7回	基礎資料の収集と分析2	基礎資料の分析と問題点の析出
第8回	基礎資料の収集と分析3	基礎資料の分析と問題点の析出
第9回	論文骨子の作成1	論文の全体像を検討する
第10回	論文骨子の作成2	論文の全体像を検討する
第11回	論文骨子の作成3	論文の全体像を検討する
第12回	論文骨子の作成4	論文の全体像を検討する
第13回	論文骨子の作成	論文の全体像を検討する
第14回	まとめ	春学期における博士論文作成段階の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

先行研究の収集と分析。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

論文作成の到達度をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文作成には長期の研究計画が必要であり、そのことを意識して指導する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代日本文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集

<主要研究業績> 「亡き人に逢える鳥一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群について」（『日本文学誌要』2008年）「都市の物主」（『日本文学誌要』2011年）

【Outline and objectives】

We would study the basics of doctoral thesis writing and actually write doctoral thesis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成のために、論文執筆の基礎を学び、実際に博士論文作成の作業を行う。

【到達目標】

博士論文作成の基礎的学力を身につけ、論文作成のための研究計画を現実なものとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

先行研究の検討と論文作成のための基礎資料を収集する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	概説1	博士論文の意義
第2回	概説2	博士論文の意義
第3回	先行研究の調査1	先行論文の検討
第4回	先行研究の調査2	先行論文の検討
第5回	先行研究の調査3	先行論文の検討
第6回	基礎資料の収集と分析1	基礎資料の分析と問題点の析出
第7回	基礎資料の収集と分析2	基礎資料の分析と問題点の析出
第8回	基礎資料の収集と分析3	基礎資料の分析と問題点の析出
第9回	論文骨子の作成1	論文の全体像を検討する
第10回	論文骨子の作成2	論文の全体像を検討する
第11回	論文骨子の作成3	論文の全体像を検討する
第12回	論文骨子の作成4	論文の全体像を検討する
第13回	論文骨子の作成	論文の全体像を検討する
第14回	まとめ	秋学期における博士論文作成段階の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

先行研究の収集と分析。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて提示する。

【成績評価の方法と基準】

論文作成の到達度をもとに評価する。

【学生の意見等からの気づき】

博士論文作成には長期の研究計画が必要であり、そのことを意識して指導する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代日本文学

<研究テーマ> 古事記、万葉集

<主要研究業績> 「亡き人に逢える鳥一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008年）「鴨山と石川の詩心ー柿本人麻呂臨死自傷歌群について」（『日本文学誌要』2008年）「都市の物主」（『日本文学誌要』2011年）

【Outline and objectives】

We would study the basics of doctoral thesis writing and actually write doctoral thesis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

伊海 孝充

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、江戸時代までに編まれた能（謡曲）の注釈書を読んでいく。能の作品研究をしていくためには、様々な能楽資料を使いこなさなければならない。また、能の詞章（謡本）だけを吟味するだけではなく、現代までの注釈書類も参照する必要がある。これらの中には言葉の解釈だけでなく、作品の趣向に関わるような興味深い問題提起も含まれている。この資料を通して、能の作品研究の基礎を学んでいく。

【到達目標】

本講義では、能（謡曲）の注釈書な分析を通して、論文執筆の方法を確認していく。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第2回	能の作品研究概説	主要な作品研究の先行論文を読み、研究方法を概説する。
第3回	能楽資料概説①	能の作品研究に用いる資料を概説する（謡本編）。
第4回	能楽資料概説②	能の作品研究に用いる資料を概説する（注釈書編）。
第5回	「養老」①	担当者による資料分析。
第6回	「養老」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第7回	「頼政」①	担当者による資料分析。
第8回	「頼政」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第9回	「野宮」①	担当者による資料分析。
第10回	「野宮」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第11回	「班女」①	担当者による資料分析。
第12回	「班女」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第13回	「野守」①	担当者による資料分析。
第14回	「野守」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に能楽鑑賞に行くことを勧める。能楽だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってもいい。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%
講義での発言 30%
レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

能楽研究は特殊な知識を必要とするが、専門外の学生もついてこられるようフォローしていく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学。特に能楽。

<研究テーマ> 能の作品研究。謡本研究。

<主要研究業績>

『切合能の研究』（檜書店、2011年）。『玉屋謡本の研究（4）玉屋謡本の節付表記をめぐる試論』（『能楽研究』42号、2018年3月）

【Outline and objectives】

In this lecture, we will read the commentary on Noh (Kayo) that was edited by the Edo period. In order to do research on the work of Noh, we have to master various Noh play materials. Moreover, it is necessary not only to examine only the lyric chords of Noh (utaibon), but also to refer to annotation documents up to the present age. Among these, not only interpretation of words but also interesting questions related to ideas of the work are included. Through this material, we will learn the fundamentals on study of Noh.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

伊海 孝充

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様に江戸時代までに編まれた能（謡曲）の注釈書を用いた能の作品研究を行っていく。秋学期からの出席者を考慮し、まず前期に学んだ能の作品研究の基礎を確認した上で、当該資料を用いた作品研究を行っていく。

【到達目標】

本講義では、春学期同様に春学期同様に能（謡曲）の注釈書の詳細な分析を通して、能楽の研究手法を確認することを目標とするが、授業での発表をもとに論文を一本作成することを最終目標とした。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行っていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第2回	「蟻通」①	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第3回	「蟻通」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第4回	「清経」①	担当者による資料分析。
第5回	「清経」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第6回	「西行桜」①	担当者による資料分析。
第7回	「西行桜」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第8回	「盛久」①	担当者による資料分析。
第9回	「盛久」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第10回	「鞍馬天狗」①	担当者による資料分析。
第11回	「鞍馬天狗」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第12回	「舟弁慶」①	担当者による資料分析。
第13回	「舟弁慶」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第14回	総括	謡曲の注釈書のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に能楽鑑賞に行くことを勧める。能楽だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%
講義での発言 30%
レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

注釈書だけでなく、できる限り多くの能楽資料を紹介する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学。特に能楽。

<研究テーマ> 能の作品研究。謡本研究。

<主要研究業績>

『切合能の研究』（榎書店、2011年）。「玉屋謡本の研究（4）玉屋謡本の節付表記をめぐる試論」（『能楽研究』42号、2018年3月）

【Outline and objectives】

As well as the spring semester we will do research on annotations of Noh edited by the Edo period. Considering attendees from the fall semester, we will first conduct a work research using the materials after confirming the fundamentals of the work of Noh studied in the previous term.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程1年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程2・3年次はそれぞれ秋学期と春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明
第2回	研究課題の紹介（2・3年次生）①	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告
第3回	研究課題の紹介（2・3年次生）②	同上
第4回	研究課題の紹介（2・3年次生）③	同上
第5回	関心対象の紹介（1年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える
第6回	関心対象の紹介（1年次生）②	同上
第7回	博士後期課程の中間報告（2・3年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第8回	修士課程の中間報告（2・3年次生）②	同上
第9回	研究動向の確認（1年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討
第10回	先行研究の論旨の整理（2・3年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討
第11回	先行研究の論旨の整理（2・3年次生）②	同上
第12回	先行研究の論旨の整理（1年次生）①	同上
第13回	先行研究の論旨の整理（1年次生）②	同上
第14回	夏期休暇中の作業計画立案	各自が行うべき作業の検討案

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。

以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌／越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

＜主要研究業績＞

- ①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
 ②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏・篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
 ③「工尺譜の起源をめぐって—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

LIT700B2

日本文学特殊演習B

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程1年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程2・3年次生はそれぞれ秋学期、春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	博士論文構想の報告（2・3年次生）①	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第3回	博士論文構想の報告（2・3年次生）②	同上
第4回	博士論文構想の報告（2・3年次生）③	同上
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第6回	先行研究の紹介と整理（1年次生）②	同上
第7回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第8回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）②	同上
第9回	博士論文の中間報告（2年次生）①	博士論文執筆の進捗状況に関する報告
第10回	博士論文の中間報告（2年次生）②	同上
第11回	博士論文の構想発表（1年次生）①	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第12回	博士論文の構想発表（1年次生）②	同上
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ	春季休暇中の作業課題に関する計画を示す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日は一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆ワローラ、2009年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

山田 俊治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代文学の文学史的展開を把握して、受講生各自の博士論文作成に資する。

【到達目標】

受講生各自の博士論文作成の実践が学ばれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生各自の博士論文についての中間発表を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	本授業の運営について。
第 2 回	研究史の把握	受講生各自の研究テーマの研究史の確認。
第 3 回	研究史の把握	受講生各自の研究テーマの研究史の確認。
第 4 回	研究史の把握	受講生各自の研究テーマの研究史の確認。
第 5 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 6 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 7 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 8 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 9 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 10 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 11 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 12 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 13 回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第 14 回	まとめ	受講生各自の反省と展望。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生各自の研究、研究状況を予め準備する。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布する。

【参考書】

授業時に指示するので記入事項なし。

【成績評価の方法と基準】

発表及び討論への参加（50%）、期末レポート（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度よりの担当のため記入事項なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学研究

<研究テーマ>

近代文学成立期の研究—19世紀文化論

<主要研究業績>

『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会。2002.11

【Outline and objectives】

to develop the ability to write doctoral thesis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

山田 俊治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代文学の文学史的展開を把握して、受講生各自の博士論文作成に資する。

【到達目標】

受講生各自の博士論文作成の実際が学ばれる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生各自の博士論文についての中間発表を実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	本授業の運営について。
第2回	研究史の把握	受講生各自の研究テーマの研究史の確認。
第3回	研究史の把握	受講生各自の研究テーマの研究史の確認。
第4回	研究史の把握	受講生各自の研究テーマの研究史の確認。
第5回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第6回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第7回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第8回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第9回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第10回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第11回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第12回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第13回	博士論文中間発表	受講生各自の研究テーマの現在を発表する。
第14回	まとめ	受講生各自の反省と展望。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講生各自の研究、研究状況を予め準備する。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布する。

【参考書】

授業時に指示するので記入事項なし。

【成績評価の方法と基準】

発表及び討論への参加（50%）、期末レポート（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度よりの担当のため記入事項なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学研究

<研究テーマ>

近代文学成り立ち期の研究—19世紀文化論

<主要研究業績>

『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会。2002.11

【Outline and objectives】

to develop the ability to write doctoral thesis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

藤村 耕治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を発表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
3. 博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえて、新しい、独自の観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
2. 発表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の発表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第2回	担当者1による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第3回	担当者1による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第4回	担当者1による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第5回	担当者2による発表・報告①	第2回に同じ。
第6回	担当者2による発表・報告②	第3回に同じ。
第7回	担当者2による発表・報告③	第4回に同じ。
第8回	担当者3による発表・報告①	第2回に同じ。
第9回	担当者3による発表・報告②	第3回に同じ。
第10回	担当者3による発表・報告③	第4回に同じ。
第11回	担当者4による発表・報告①	第2回に同じ。
第12回	担当者4による発表・報告②	第3回に同じ。
第13回	担当者4による発表・報告③	第4回に同じ。
第14回	総括①	各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回2000字から4000字程度の発表用資料を作成する。

担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこよう。担当者と互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしておく必要がある。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80%）
2. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20%）

【学生の意見等からの気づき】

各人の博士論文の一部を構成しうるような論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近・現代文学

<研究テーマ>特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。

<近年の主要研究業績>

- ①「清岡卓行と大連」（国際日本学叢書 15、2012 年刊）
- ②「国民文学論争と歴史社会学派」（近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会共編「近藤忠義 人と学問 第二・三集合併号、2012 年）
- ③「笠原淳論序説」（日本文学誌要 93 号、2016 年）
- ④「高橋和巳 未完の可能性」（『高橋和巳の文学と思想』コールサック社、2018 年刊）

【Outline and objectives】

We will analyze and examine Japanese contemporary literature, especially literary works since the showa period.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

藤村 耕治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 日本近・現代文学の文芸作品（小説・評論・詩等）についての分析・検討をテーマとする。特に昭和期以降現在に至るまでの作家・作品を中心に扱う。
2. 受講者は自身の研究テーマに即して、研究報告を发表用資料として論文形式で作成し、それを基に発表を行い、他の受講者との討議を通じて、より深く厳密な理解・分析・解釈・評価の力を身につける。
3. 博士論文執筆のための高度な文章力・論理構成力を身につける。

【到達目標】

1. 受講者が選択した作家・作品について、従来の研究成果を十分に踏まえて、新しい、独自の観点から分析・検討を行い、博士論文の一部を構成する論文を執筆すること。
2. 发表用資料の作成・相互討議などを通じて自身の学問的な方法論を獲得するとともに、学会発表などに耐えうる客観的で高度な研究の力を身につけること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

各回の発表担当者が、自身のテーマとする作家・作品について論文形式の发表用資料を作成して発表し、他の受講者を交えて討議する形で行う。発表者は討議内容を踏まえて、自身の発表における不備や再考を要する点などを十分に検討し、精度を高めていき、最終的には学会誌等に投稿可能な論文に練り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	近現代文学研究についての概説	近現代の文学研究に関する概説及び受講者各自の研究テーマと現時点での展望について聞く。
第 2 回	担当者 1 による発表・報告①	発表者の研究テーマに即した形での問題提起。
第 3 回	担当者 1 による発表・報告②	討議を踏まえての自己の考察の深化・発展の報告。
第 4 回	担当者 1 による発表・報告③	結論と今後の課題についての報告。
第 5 回	担当者 2 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 6 回	担当者 2 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 7 回	担当者 2 による発表・報告③	第 4 回に同じ。
第 8 回	担当者 3 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 9 回	担当者 3 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 10 回	担当者 3 による発表・報告③	第 4 回に同じ。
第 11 回	担当者 4 による発表・報告①	第 2 回に同じ。
第 12 回	担当者 4 による発表・報告②	第 3 回に同じ。
第 13 回	担当者 4 による発表・報告③	第 4 回に同じ。
第 14 回	総括①	各自の発表・討議に基づいた研究の総括的報告。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者は、選択した作家・作品について、自身の研究テーマに即した形での問題提起を行うとともに、毎回 2000 字から 4000 字程度の发表用資料を作成する。

担当者以外の受講者も、当該作家・作品について各自の問題意識に沿って分析・検討を行ってこよう。担当者と互角に討議し、的確な批評が可能となるように十分な準備をしてこよう必要がある。

【テキスト（教科書）】

各自の研究テーマによって選択された作品。

【参考書】

必要に応じて、適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

1. 発表・報告時におけるレジュメ（論文形式）とプレゼンテーションの内容（80 %）
2. 討議の場における積極的な参加態度及び発言（20 %）

【学生の意見等からの気づき】

各人の博士論文の一部を構成しようとする論文を年間に少なくとも一本は完成させることを目指して指導に当たる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近・現代文学

<研究テーマ>特に第二次大戦後の戦後派文学およびその継承者たちの作品。

<近年の主要研究業績>

- ①「清岡卓行と大連」(国際日本学叢書 15、2012 年刊)
- ②「国民文学論争と歴史社会学派」(近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会共編「近藤忠義 人と学問 第二・三集合併号、2012 年)
- ③「笠原淳論序説」(日本文学誌 93 号、2016 年)
- ④「高橋和巳 未完の可能性」(「高橋和巳の文学と思想」 コールサック社、2018 年刊)

【Outline and objectives】

We will analyze and examine Japanese contemporary literature, especially literary works since the showa period.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

山中 玲子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

能楽に関する博士論文の執筆に向けて、必要な先行研究の整理や要約、自分のアイデアを論理的な文章にすること等を、実地を通して学ぶ。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②先行研究を十分に把握する。
- ③自分の発見やアイデアを論文としてまとめる技術を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評ができるようになる。
- ⑤留学生の場合、論文を書くための正確な日本語を磨く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生の研究内容についての発表、先行論文の輪読、個人指導による論文添削等を組み合わせていく。能楽に関する論文を執筆しようとしている学生を対象とした演習である。基本的には、留学生一名を念頭に置いているが、ほかの学生が参加した場合には、研究発表を交代にするなどの工夫をする。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究計画の確認	前年度の成果を確認し、博士論文の構想を再検討して本年度の研究計画を立てる。
第 2 回	先行研究の把握と問題点の抽出 (1) リスト作成	博士論文の一章を構成する予定の作品に関し、先行研究リストを作成。
第 3 回	先行研究の把握と問題点の抽出 (2) 先行文献の論評	先行研究リスト中で特に重要な先行文献を読み論評する。
第 4 回	先行研究の把握と問題点の抽出 (3) テーマの決定	先行研究を踏まえてそこに自分が何を付け加えるべきかを明らかにする。
第 5 回	論文執筆にむけた研究発表と討議 (1)	作品研究論文の構成に添った形での研究発表。
第 6 回	論文執筆にむけた研究発表と討議 (2)	前回の問題点の修正や不足分の追加。
第 7 回	論文ドラフトの執筆と添削・修正 (1)	研究発表に添って論文のドラフトを書き、検討する。
第 8 回	論文ドラフトの執筆と添削・修正 (2)	前回の修正に基づく第 2 ドラフトの確認と修正。
第 9 回	作品の精読 (1) 前半	新たな作品研究の対象となる作品を精読する。諸注釈にも目を配る。
第 10 回	作品の精読 (2) 後半	引き続き、作品研究の対象となる作品を精読し、問題点を抽出する。
第 11 回	先行研究の把握と問題点の抽出 (3) リスト作成	対象作品に関する先行研究を集めるとともに、そのリストを作成する。
第 12 回	先行研究の把握と問題点の抽出 (4) 先行文献の論評	先行研究リスト中で特に重要な先行文献を読み論評する。
第 13 回	先行研究の把握と問題点の抽出 (5) 論文テーマの決定	作品精読と先行研究の成果を踏まえて、何を付け加えられるかを考える。
第 14 回	論文執筆にむけた研究発表と討議 (3)	論文の構成を考え、それに添った簡単な研究発表をおこなう。問題点は夏期休暇中に調査。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。論文のドラフトを書けるところまで書く。

【テキスト (教科書)】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

持参する論文ドラフトの内容および持参頻度 (50%)、論文の達成度 (50%) を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生が論文をある程度書き上げるまで待つのではなく、一行も書けなければ本演習にてそれを報告し授業中に一行でも書き進むための場とする。日本語の添削指導にも力を入れる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究
 <研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
 <主要研究業績>

- ★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93巻3号・2016年3月
- ★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐって—」『文学』16巻2号・2015年3月
- ★「〔天女舞〕応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞—」『中世文学と隣接諸学7』（竹林舎 2012年）
- ★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著）檜書店 2009年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to learn many techniques necessary to write a doctoral dissertation.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

山中 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

能楽に関する博士論文の執筆に向けて、必要な先行研究の整理や要約、自分のアイデアを論理的な文章にすること等を、実地を通して学ぶ。

【到達目標】

- ①博士論文の完成に向けて研究テーマや執筆計画を明確にする。
- ②先行研究を十分に把握する。
- ③自分の発見やアイデアを論文としてまとめる技術を習得する。
- ④他人の研究発表や論文について建設的な論評ができるようになる。
- ⑤留学生の場合、論文を書くための正確な日本語を磨く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生の研究内容についての発表、先行論文の輪読、個人指導による論文添削等を組み合わせていく。研究のための確定テキストがない曲について、本文を校合・校訂する作業も行う。能楽に関する論文を執筆しようとしている学生を対象とした演習である。基本的には、現在抱えている留学生一名を念頭に置いているが、他の学生が受講する場合は、研究発表を交代にするなどの工夫をする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	後期の研究計画の確認	夏期休暇中の研究の進捗状況を報告し、後期の具体的な研究計画を確認する。
第2回	論文執筆にむけた研究発表と討議（1）	夏期休暇中に進めた研究に基づき、発表・討議をおこなう。
第3回	論文執筆にむけた研究発表と討議（2）	前回発表の追加・修正。
第4回	論文ドラフトの執筆と修正	研究発表の成果を日本語でまとめる。日本語については教員が個人的に指導する。
第5回	論文第二ドラフトの執筆と修正	引き続き、受講生の書いた論文ドラフトに基づき、問題点の修正・日本語の添削等をおこなう。
第6回	論文の完成と論評	作品研究の論文を完成させる。
第7回	確定本文がない作品のテキスト校合作業	確定本文が無い能〈三笑〉につき、現存諸本を校合する。
第8回	確定本文がない作品の小段・段構成確定作業	諸本校合・校訂結果を踏まえ、〈三笑〉の小段構成等を確定する。
第9回	論文執筆にむけた研究発表と討議（3）本文前半の精読・解釈	能〈三笑〉のテキスト前半を精読・解釈し、問題点を抽出する。
第10回	論文執筆にむけた研究発表と討議（4）本文後半の精読・解釈	能〈三笑〉のテキスト後半を精読・解釈し、問題点を抽出する。
第11回	論文執筆にむけた研究発表と討議（5）能〈三笑〉先行研究の検討	能〈三笑〉の先行研究をリストアップし、重要な論点をまとめる。
第12回	論文執筆にむけた研究発表と討議（6）能〈三笑〉の素材と文化的背景	能〈三笑〉の文化的背景や素材等について、先行研究を踏まえながらまとめる。
第13回	論文ドラフトの執筆と修正	能〈三笑〉作品研究のドラフトを書き、検討する。文章については教員が個人指導を行う。
第14回	論文第二ドラフトの執筆と修正	能〈三笑〉作品研究第二ドラフトの作成と論評。文章については教員が個人指導を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要な文献を読み、発表の準備を計画的に進める。論文のドラフトを書けるところまで書く。

【テキスト（教科書）】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【参考書】

なし。先行研究等、読むべき文献は授業中に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

持参する論文ドラフトの内容および持参頻度（50%）、論文の達成度（50%）を総合して判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生が論文をある程度書き上げるまで待つのではなく、一行も書けなければ本演習にてそれを報告し授業中に一行でも書き進むための場とする。日本語の添削指導にも重点を置く。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究
<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
<主要研究業績>

- ★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93 卷 3 号・2016 年 3 月
- ★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐる—」『文学』16 卷 2 号・2015 年 3 月
- ★「「天女舞」応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞—」『中世文学と隣接諸学 7』（竹林舎 2012 年）
- ★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著）檜書店 2009 年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to learn many techniques necessary to write a doctoral dissertation.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】

受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	文学研究の方法 (1)	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第 2 回	受講者 1 による発表 a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第 3 回	受講者 1 による発表 b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第 4 回	受講者 1 による発表 c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第 5 回	受講者 2 による発表 a	第 2 回と同じ
第 6 回	受講者 2 による発表 b	第 3 回と同じ
第 7 回	受講者 2 による発表 c	第 4 回と同じ
第 8 回	文学研究の方法 (2)	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第 9 回	受講者 3 による発表 a	第 2 回と同じ
第 10 回	受講者 3 による発表 b	第 3 回と同じ
第 11 回	受講者 3 による発表 c	第 4 回と同じ
第 12 回	受講者 4 による発表 a	第 2 回と同じ
第 13 回	受講者 4 による発表 b	第 3 回と同じ
第 14 回	受講者 4 による発表 c	第 4 回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】

受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表 6 割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近・現代文学、文芸評論
<研究テーマ>

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

<主要研究業績>

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えて—日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代以降の文学作品について、専門的な知見を駆使して精読を行い、博士論文を書くために必要となる能力を身につけます。

【到達目標】

受講者が選択したテーマ、作家、作品について、先行する研究成果を踏まえてオリジナリティのある問題意識から、博士論文の一部となりうる内容について発表し、批判的検討を加えて論文執筆に結びつけます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者自身の発表を中心とし、参加者全員で討議を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	文学研究の方法 (1)	文学研究の方法について概説し、受講者が採用する方法を検討します。
第2回	受講者1による発表 a	受講者が選択したテーマについて、オリジナリティのある問題提起を行います。
第3回	受講者1による発表 b	自らの問題提起に批判的検討を加え、テーマについての考察を深めます
第4回	受講者1による発表 c	考察できたことと今後の課題を整理し、研究の展望を提示します
第5回	受講者2による発表 a	第2回と同じ
第6回	受講者2による発表 b	第3回と同じ
第7回	受講者2による発表 c	第4回と同じ
第8回	文学研究の方法 (2)	受講者の発表を踏まえ、文学研究の方法について考察します
第9回	受講者3による発表 a	第2回と同じ
第10回	受講者3による発表 b	第3回と同じ
第11回	受講者3による発表 c	第4回と同じ
第12回	受講者4による発表 a	第2回と同じ
第13回	受講者4による発表 b	第3回と同じ
第14回	受講者4による発表 c	第4回と同じ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は、自らが選択したテーマ、作家、作品について、発表が可能となるような研究を行います。また他の受講者のテーマ、作家、作品についても理解を深めることで、文学研究者としての専門的な知見を身につけます。

【テキスト（教科書）】

受講者のテーマに応じた文学作品を選びます。

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点4割、発表6割で総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近・現代文学、文芸評論
<研究テーマ>

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。

<主要研究業績>

- 『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001年
- 『あの戦場を越えてー日本現代文学論』（講談社）2005年
- 『新約太宰治』（講談社）2006年
- 『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014年
- 『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017年

【Outline and objectives】

Obtain the necessary skills to write a doctoral thesis through reading of Japanese modern literature, using specialized knowledges.

LIT700B2

日本文学特殊演習 A

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2) それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	論文について	論文の構成について
第2回	論文レポート1 名詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第3回	論文レポート2 動詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第4回	論文レポート3 形容詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第5回	論文レポート4 接続詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第6回	論文レポート5 語用論と意味論	受講生による発表・討論
第7回	論文レポート6 語用論推論	受講生による発表・討論
第8回	論文レポート7 ポライトネス	受講生による発表・討論
第9回	論文レポート8 インボライトネス	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート9 対人的モダリティ	受講生による発表・討論
第11回	論文レポート10 対事的モダリティ	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート11 若者ことば	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート12 文末表現	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート13 ネットトスラング	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明徳・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キータム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

発表30% 発言等受講態度30% 期末レポート40%

【学生の意見等からの気づき】

博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げるよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
<研究テーマ>
認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『「全然」+肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年)

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年)

「接続詞ケドの手続き的意味」(『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年)

「構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ」(共著、研究社、2011年)

[Outline and objectives]

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

LIT700B2

日本文学特殊演習 B

尾谷 昌則

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2) 意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第2回	論文リポート1 多義	受講生による発表・討論
第3回	論文リポート2 メタ	受講生による発表・討論
第4回	論文リポート3 メトニミー	受講生による発表・討論
第5回	論文リポート4 スキーマとプロトタイプ	受講生による発表・討論
第6回	論文リポート5 意味ネットワーク	受講生による発表・討論
第7回	論文リポート6 拡張と動的用法基盤モデル	受講生による発表・討論
第8回	論文リポート7 文法化と意味変化	受講生による発表・討論
第9回	論文リポート8 主体化と文法化	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート9 語用論的強化と文法化	受講生による発表・討論
第11回	論文リポート10 接続詞と文法化	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート11 接尾辞と文法化	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート12 否定表現の拡張	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート13 コーパスと定量的分析	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと(2時間程度)。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと(1時間程度)。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく(1時間程度)。

【テキスト (教科書)】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『認知言語学研究の方法―内省・コーパス・実験』(辻幸夫監修、ひつじ書房)
『日本語教育のためのコーパス調査入門』(李在鎬・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版)

『新編 認知言語学キーワード事典』(辻幸夫、研究社)

『ことばの認知科学事典』(辻幸夫編集、大修館書店)

『日本語学キーワード事典』(小池清治ほか編著、朝倉書店)

『言語学大辞典』(三省堂)

『日本語文法大辞典』(山口明徳・秋本守英編著、明治書院)

『日本語学研究事典』(飛田良文ほか編著、明治書院)

『語用論キータム事典』(今井邦彦監訳、開拓者)

【成績評価の方法と基準】

発表 30% 発言等受講態度 30% 期末レポート 40%

【学生の意見等からの気づき】

論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語(意味)変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定』に関する語用論的分析」(『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年)

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」(『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年)

「接続詞ケドの手續きの意味」(『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年)

「構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ」(共著、研究社、2011年)

[Outline and objectives]

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

LIT500B2

日本文学特殊研究A

安藤 宏

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

日本の近代において、「小説」というジャンルがどのように形成されたのかを、表現史的な展開とともに明らかにすることを目的とする。

【到達目標】

岩波新書「私」をつくる 近代小説の各章をそれぞれレポーターが担当し、論旨をまとめた上で、自分の考えや調査結果を発表する。それによって、日本語で書かれた「小説」というジャンルの特質について理解を深めることができる。また、これらの作業を通して、文学史、表現史への理解を含め、近代文学研究の方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

一般論について教員が講述する回と、それを踏まえた上で、参加者がテキストの章をそれぞれ担当し、レポーターをつとめる回とからなる。いずれも講述、発表後に自由討論形式で授業を進める。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

なし / No

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方の打ち合わせと近代小説についての基本的な考え方の説明
第2回	「猿ヶ島」研究	太宰治「猿ヶ島」を題材に、教員が講義を行う。
第3回	「地獄変」研究	芥川龍之介「地獄変」を題材に、共同で読解のトレーニングを行う。
第4回	言文一致	テキストの第一章を素材に検討を行う。
第5回	人称	テキストの第二章を素材に検討を行う。
第6回	読者	テキストの第三章を素材に検討を行う。
第7回	回想	テキストの第四章を素材に検討を行う。
第8回	小説の小説	テキストの第五章を素材に検討を行う。
第9回	幻想性	テキストの第六章を素材に検討を行う。
第10回	共同性	テキストの第七章を素材に検討を行う。
第11回	私小説	テキストの第八章を素材に検討を行う。
第12回	「舞姫」研究	森鷗外の「舞姫」を例に、実践的な読解を行う。
第13回	「和解」研究	志賀直哉の「和解」を例に、実践的な読解を行う。
第14回	総括	近代小説の表現史について、扱った題材をもとに総括的な討論を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

検討の対象となる作品を予め読んできて自分なりの着眼点を用意する。

【テキスト (教科書)】

安藤宏「私」をつくる 近代小説の試み (岩波新書、2015年)

【参考書】

安藤宏「私」をつくる 近代小説の試み (岩波新書、2015年)

【成績評価の方法と基準】

授業における発表内容 40% レポート 60%

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学

<研究テーマ> 近代小説

<主要研究業績> 『近代小説の表現機構』(2012年、岩波書店)、『自意識の昭和文学』(1994年、至文堂)

【Outline and objectives】

In light of the distinctive modes of expression used in modern novels, this class focuses on textual features and presents key points that demonstrate the characteristics typical of modern Japanese novels in a broad and easy-to-understand manner.

LIT500B2

日本文学特殊研究 B

安藤 宏

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代において、「小説」というジャンルがどのように形成されたのかを、表現史的な展開とともに明らかにすることを目的とする。

【到達目標】

近代の代表的な小説をそれぞれレポーターが担当し、論旨をまとめた上で、自分の考えや調査結果を発表する。それによって、日本語で書かれた「小説」というジャンルの特質について理解を深めることができる。また、これらの作業を通して、文学史、表現史への理解を含め、近代文学研究の方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

予め打ち合わせた小説を読み合わせ、毎回、レポーターが研究発表を行い、質疑応答、討論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方の打ち合わせと近代小説についての基本的な考え方の説明。
第 2 回	樋口一葉「十三夜」	樋口一葉「十三夜」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 3 回	泉鏡花「化銀杏」	泉鏡花「化銀杏」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 4 回	森鷗外「沈黙の塔」	森鷗外「沈黙の塔」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 5 回	森鷗外「かのやうに」	森鷗外「かのやうに」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 6 回	夏目漱石「文鳥」	夏目漱石「文鳥」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 7 回	永井荷風「狐」	永井荷風「狐」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 8 回	芥川龍之介「舞踏会」	芥川龍之介「舞踏会」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 9 回	芥川龍之介「巖気楼」	芥川龍之介「巖気楼」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 10 回	志賀直哉「范の犯罪」	志賀直哉「范の犯罪」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 11 回	志賀直哉「焚火」	志賀直哉「焚火」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 12 回	佐藤春夫「F・O・U」	佐藤春夫「F・O・U」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 13 回	谷崎潤一郎「小さな王国」	谷崎潤一郎「小さな王国」を題材に、「小説」の分析を実践する。
第 14 回	葉山嘉樹「淫売婦」	葉山嘉樹「淫売婦」を題材に、「小説」の分析を実践する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

検討の対象となる作品を予め読んできて自分なりの着眼点を用意する。

【テキスト（教科書）】

時間ごとに打ち合わせ、プリントを用いる。

【参考書】

安藤宏「近代小説の表現機構」（岩波書店、2012年）

【成績評価の方法と基準】

授業における発表内容 40% レポート 60%

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学

<研究テーマ> 近代小説

<主要研究業績> 安藤宏「近代小説の表現機構」（岩波書店、2012年）

【Outline and objectives】

In light of the distinctive modes of expression used in modern novels, this class focuses on textual features and presents key points that demonstrate the characteristics typical of modern Japanese novels in a broad and easy-to-understand manner.

LIT500B2

日本文学批評史特殊研究 A

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第 2 回	坪内逍遙と二葉亭四迷	坪内逍遙「小説神髓」と二葉亭四迷「小説総論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	島崎藤村と自然主義の誕生	島崎藤村「千曲川のスケッチ」を読み、日本における自然主義文学のはじまりについて解説します。
第 4 回	北村透谷『透谷選集』を読む	本の文芸批評の出発点として、北村透谷『北村透谷選集』について発表してもらいます。
第 5 回	1910 年と石川啄木	日本の近代文学史における 1910 年の状況を解説し、石川啄木「時代閉塞の現状」を読みます。
第 6 回	佐藤春夫の評論文を読む	印象批評の例として、佐藤春夫の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	平塚らいてうと与謝野晶子	平塚らいてう「元始女性は太陽であつた」と与謝野晶子「母性偏重を排す」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	小林秀雄の出版	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	白樺派の登場と私小説の完成	生田長江「自然主義前派の跳梁」と武者小路実篤「新しき村に就て」を読み、その意義を理解します。
第 10 回	中野重治の批評	プロレタリア文学以降のもっとも重要な成果の一つである、中野重治の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	谷崎潤一郎と芥川龍之介	谷崎潤一郎「饒舌録（抄）」と芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な（抄）」を読み、その意義を理解します。
第 12 回	平野謙の登場	戦後文学の代表的な文芸時評家である、平野謙の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	中村光夫と 1945 年	中村光夫『「近代」への疑惑』を読み、1945 年の敗戦にいたるまでの日本文学の状況を概括します。
第 14 回	江藤淳の出版	戦後文学を問い直す視点を提示しつづけた、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇] および [昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。
まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができてきているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。
〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本文芸批評史特殊研究 B

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組みあわせて進めます。
まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	伊藤整と横光利一	伊藤整「新心理主義文学」と横光利一「純粋小説論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	萩原朔太郎と保田與重郎	萩原朔太郎「日本への回帰」と保田與重郎「文明開化の論理の終焉について」を読み、その意義を理解します。
第 4 回	吉本隆明の登場	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	川端康成と三島由紀夫	敗戦による 1945 年の断絶に注意しつつ、川端康成「横光利一弔辞」と三島由紀夫「重症者の兇器」を読みます。
第 6 回	福田恒存の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、福田恒存の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	戦後文学の空間と戦後派の登場	敗戦後に登場した戦後派の作家たちについて概括し、戦後文学のあり方の特徴を理解します。
第 8 回	秋山駿の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、秋山駿の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	第三の新人と戦後文学批判	戦後文学のあり方に抵抗するように登場した第三の新人について概括し、吉本隆明や江藤淳による戦後文学批判の視点を理解します。
第 10 回	柄谷行人の出発	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、柄谷行人の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	構造主義とテキスト論	20 世紀後半以降の構造主義思想の意義について考察し、その文学版であるテキスト論に対する理解を深めます。
第 12 回	加藤典洋の登場	江藤淳を批判しつつ戦後文学を相対化する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	フェミニズム文学論	1980 年代以降の日本のフェミニズム思想について考察を加え、その文学的意義を理解します。
第 14 回	現代文学の批評	現代文学に対して重要な論点を提供しているものを選び、その評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。
 まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができてきているか、を授業態度から判断します。
 また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
 〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。
 〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B2

日本古代文芸特殊研究 A

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代日本語の文字表記の状況を理解する。文字と出会うことで文学はどのように展開していったのか、日本の文化にとってどのような意味があったのかなどを理解する。

【到達目標】

博士後期課程コースワーク科目として、日本語の歴史を文字と音声の関係として理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古事記、日本書紀を資料に、古代日本のことばと文字の出会いの意味を考察する。
 古代日本においてどのように〈やまと的〉〈日本的〉なものが生まれ展開していったのかを、具体的な資料に即して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	古事記、日本書紀の成立について検討する。
第 2 回	古事記冒頭神話論	古事記冒頭の神話の特長について文体論的に検討する。
第 3 回	古事記冒頭ムスヒ神話論	古事記冒頭の神話の形成過程を検討する。ムスヒ神の独自性を文体論的に検討する。
第 4 回	古事記冒頭高天原神話論	古事記における高天原の意味について文体論的に検討する。
第 5 回	イザナキ、イザナミ神話論	古事記におけるイザナキ、イザナミ神話の意味について文体論的に検討する。
第 6 回	国生み神話論	古事記における国生み神話の意味について文体論的に検討する。
第 7 回	アマテラス、ツクヨミ、スサノヲ神話論	古事記における 3 貴子誕生の意味について文体論的に検討する。
第 8 回	アマテラス、スサノヲ神話論	古事記における当該 2 神の意味について文体論的に検討する。
第 9 回	ウケヒ神話論	アマテラスとスサノヲの問題を文体論的に検討する。
第 10 回	岩屋戸神話論	同前。
第 11 回	ヲロチ神話論	古事記における出雲神話の問題を文体論的に検討する。
第 12 回	大国主神話論	同前。
第 13 回	根の国神話論	同前。
第 14 回	まとめ	上記の検討を踏まえ、古事記、日本書紀のことばと文字の関係を文学成立の問題として確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

古事記上巻、日本書紀巻 1・2 を活字テキストによって読み進める。

【テキスト（教科書）】

古事記、日本書紀（ともに日本古典文学大系、岩波文庫その他、原文のついでにあるもの）

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30 % リポート 30 %
 「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

実施していない。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞上代文学
 ＜研究テーマ＞古事記・万葉集を中心とする上代文学研究
 ＜主要研究業績＞

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥—万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）要研究業績＞

【Outline and objectives】

In this course, we will explore the writing systems of old Japanese. Their impact on the development of literature and Japanese culture would also be examined.

LIT500B2

日本古代文芸特殊研究B

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代日本語の文字表記の状況を理解する。文字と出会うことで文学はどのように展開していったのか、日本の文化にとってどのような意味があったのかなどを理解する。

【到達目標】

博士後期課程コースワーク科目として、日本語の歴史における文字と音声の関係を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

万葉集を資料に、古代日本のことばと文字の出会いの意味を考察する。古代日本においてどのように〈やまと的〉〈日本的〉なものが生まれ展開していったのかを、具体的な資料に即して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	講義概説	万葉集の成立について検討する。
第2回	初期万葉	初期万葉の特徴について文体論的に検討する。
第3回	初期万葉のことば	初期万葉の特徴について文体論的に検討する。
第4回	初期万葉のことばと表記	初期万葉の特徴について文体論的に検討する。
第5回	初期万葉の文学史	初期万葉の特徴について文体論的に検討する。
第6回	柿本人麻呂	柿本人麻呂作歌の特徴について文体論的に検討する。
第7回	柿本人麻呂のことば	柿本人麻呂作歌の特徴について文体論的に検討する。
第8回	柿本人麻呂のことばと文字	柿本人麻呂作歌の特徴について文体論的に検討する。
第9回	柿本人麻呂と人麻呂歌集	柿本人麻呂作歌の特徴について文体論的に検討する。
第10回	人麻呂歌集のことば	柿本人麻呂作歌の特徴について文体論的に検討する。
第11回	人麻呂歌集のことばと文字	柿本人麻呂歌集の特徴について文体論的に検討する。
第12回	人麻呂歌集の影響	柿本人麻呂歌集の特徴について文体論的に検討する。
第13回	柿本人麻呂の文学史	古代和歌における人麻呂の意義について検討する。
第14回	まとめ	上記の検討を踏まえ、初期万葉と柿本人麻呂を中心に上代日本におけることばと文字の問題について確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

初期万葉作品、柿本人麻呂作歌と歌集の作品を活字テキストによって読み進める。

【テキスト（教科書）】

万葉集（講談社文庫、塙書房版萬葉集本文編その他、原文のついているもの）

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%

「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

実施していない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥一万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心－柿本人麻呂臨死自傷歌群について－」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

In this course, we will explore the writing systems of old Japanese. Their impact on the development of literature and Japanese culture would also be examined.

LIT500B2

日本中世文芸特殊研究A

阿部 真弓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目標とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、日本人にとっては身近でなじみの深い、しかし今なお謎の多い歌集『百人一首』を注釈し、鑑賞します。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辭等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世以降、『百人一首』がどのように享受、解釈されてきたか、理解する。
- ③簡単なくずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

写本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首』を精読します。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。編者・歌人の問題や歴史的背景、また研究史等についても勘案しながら、日本文芸史上、この作品がどのように位置付けられるか、考察を深めていきます。また『百人一首』の古注釈を参照し、中世・近世ではどのように解釈されていたかについても検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業計画の説明をし、発表順序等を決定する
2	作品の概要について	『百人一首』に関する問題を整理し、説明する
3	編者、歌人について	『百人一首』編者の問題や、収載された和歌の作者たちについて解説する
4	『百人一首』研究史について	中世から現代に至るまでの研究史を概観する
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する
6	変体仮名について	変体仮名について解説する
7	変体仮名解読練習	変体仮名解読の練習を行う
8	受講生による発表と討論	翻刻について
9	受講生による発表と討論	歌人について
10	受講生による発表と討論	注釈について
11	受講生による発表と討論	解釈について
12	受講生による発表と討論	歴史的背景について
13	受講生による発表と討論	文学史上の問題について
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密な準備を行うこと。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞむこと。発表後は、討論によって得た課題もあわせて、さらに考察を深め、レポートにまとめて下さい。

【テキスト（教科書）】

笠間文庫 04 <影印シリーズ> 『百人一首 宮内庁書陵部蔵』（樋口芳麻呂編、笠間書院、2005年）

その他、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布します。

【参考書】

『日本文学新史 中世』（小山弘志編、至文堂、1990年）
ちくま新書 182 『百人一首への招待』（吉海直人、筑摩書房、1998年）
『百人一首 王朝和歌から中世和歌へ』（井上宗雄、笠間書院、2004年）
角川ソフィア文庫『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 百人一首（全）』（谷知子、角川学芸出版、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、レポート、討論への参加度を考慮し、総合的に判断します。なお、配分は発表内容 40%（到達目標①②③④）、レポート 40%（到達目標①②⑤）、討論への参加度 20%（到達目標⑤）とします。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、くずし字を読む練習を行います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本古典文学

<研究テーマ>日記文学、鎌倉期の歌壇

<主要研究業績>『「とはずがたり」の恋一物語る二条』（『文学』8巻5号、2007年9月）、「『弁内侍日記』論一糾える言葉の連鎖一」（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、「『嵯峨のかよひち』考一藤原為家の涙一」（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline and objectives】

This course deals with the waka anthology Hyakunin Isshu (one hundred waka poems by one hundred poets). The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.

LIT500B2

日本中世文芸特殊研究B

阿部 真弓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目標とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は春学期Aに引き続き、『百人一首』を一首ずつ注釈し、鑑賞します。また、そうした精読作業を踏まえた上で、『百人一首』をめぐる問題を検討し、和歌史にどのように位置づけられる作品であるのか考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辭等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世以降、『百人一首』がどのように享受、解釈されてきたか、理解する。
- ③研究テーマを見出し、文学作品・諸事象を分析する力、論理的に考察する能力を身につける。
- ④くずし字を読むことができる。
- ⑤プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑥ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

春学期A同様、写本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、中世文芸作品を精読します。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳します。編者・歌人の問題や歴史的背景、また研究史等についても勘案しながら、日本文芸史上、その作品がどのように位置付けられるか、考察を深めていきます。

その他、希望があれば、受講者が注釈作業を通して発見した問題点について研究した成果を発表してもらい方も設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業計画の説明をし、発表順序等を決定する
2	作品をめぐる問題	『百人一首』成立に大きく関わる『百人秀歌』について考察する
3	編者をめぐる問題	中世・近世の『百人一首』解釈や、「和歌の家」の問題について考察する
4	中世文芸史上の問題	『百人一首』が後世に与えた影響等について考察する
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する
6	くずし字について	変体仮名や漢字のくずし字について説明する
7	くずし字解読練習	変体仮名や漢字のくずし字を読む練習をする
8	受講生による発表と討論	翻刻について
9	受講生による発表と討論	歌人について
10	受講生による発表と討論	注釈について
11	受講生による発表と討論	解釈について
12	受講生による発表と討論	歴史的背景について
13	受講生による発表と討論	文芸史上の問題について
14	まとめ	秋学期の内容に関する総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密な準備を行うこと。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞむこと。発表後は、討論によって得た課題もあわせて、さらに考察を深め、レポートにまとめて下さい。

【テキスト（教科書）】

笠間文庫 04 <影印シリーズ> 『百人一首 宮内庁書陵部蔵』（樋口芳麻呂編、笠間書院、2005年）

その他、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布します。

【参考書】

『日本文学新史 中世』（小山弘志編、至文堂、1990年）

ちくま新書 182 『百人一首への招待』（吉海直人、筑摩書房、1998年）

『百人一首 王朝和歌から中世和歌へ』（井上宗雄、笠間書院、2004年）

角川ソフィア文庫『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 百人一首（全）』（谷知子、角川学芸出版、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、レポート、討論への参加度を考慮し、総合的に判断します。

なお、配分は発表内容 40%（到達目標①②③④⑤）、レポート 40%（到達目標①②③⑥）、討論への参加度 20%（到達目標⑥）とします。

【学生の意見等からの気づき】

一首ずつ丁寧に読み進めます。後期 B では、『百人一首』以外の資料も用いて、くずし字解読練習を行います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本古典文学

<研究テーマ>日記文学、鎌倉期の歌壇

<主要研究業績>『「とはすがたり」の恋一物語る二条』（『文学』8巻5号、2007年9月）、『「弁内侍日記」論一糾える言葉の連鎖一』（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、『「嵯峨のかよひち」考—藤原為家の涙—』（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline and objectives】

This course deals with the waka anthology Hyakunin Isshu (one hundred waka poems by one hundred poets). The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry,

LIT500B2

日本近世文芸特殊研究 A

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、18世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙 1 作品を取りあげ、読み解く。本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら、江戸の人びとの感覚に迫りたい。春学期は中国の仙人尽くしを趣向とした山東京伝『艶哉女選人』（寛政元・1789 年刊）をとりあげる予定。

最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。注釈はないので、一からの解読となる。

【到達目標】

- (1) 作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読み、分析する力をつける。
- (2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献について発展的に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	時代状況と出版界、黄表紙とは
第 2 回	講義 1	作者と画工について
第 3 回	講義 2	注釈の基本・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

『山東京伝全集』第 2 巻（ベリかん社、1993）から『艶哉女仙人』をコピーで配布する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70%、授業中の質疑などの参加態度 30% によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<著書>

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

『吉原狂歌本三種』（太平書屋 2002）

【共著】

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

『江戸見立本の研究』（汲古書院 2006）

『狂文宝合記』の研究（汲古書院 2000）

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B2

日本近世文芸特殊研究B

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、18世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙 I 作品を取りあげ、読み解く。本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら、江戸の人びとの感覚に迫りたい。秋学期は、仙人尽くしに異国めぐりの趣向を絡めた山東京伝『福徳果報兵衛伝』（寛政 5・1793 年刊）を取りあげる。最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。注釈はないので、一からの解説となる。

【到達目標】

(1) 作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読み、分析する力をつける。
(2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献について発展的に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	寛政期の黄表紙の変質
第 2 回	講義 1	異国めぐりの趣向の系譜について
第 3 回	講義 2	注釈の基本のみなおし・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

『山東京伝全集』第 3 巻（ペリかん社、2001 年）よりコピーで配付する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で読む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<近年の論文・その他書き物>

【論文】「書籍を模倣する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―」『京都語文』26号 2018

【一般誌】「江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した」『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018

【論文】「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

【一般誌】「歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸」『別冊太陽 歌麿決定版』2016

【一般誌】「国芳時代の絵師ビジネス」『芸術新潮』2016年4月号

【研究ノート】「欲望のありがちな矛盾―男が詠う春本の女歌」『アジア遊学』195号 2016

【論文】「江戸狂歌の地方普及」『日本文学誌要』91号 2015

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

LIT500B2

日本近代文芸特殊研究A

山田 俊治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代文学を研究する受講生各自の研究に資するよう、小説テキストの分析などの能力を養成する。

【到達目標】

日本近代文学を形成する言語、文体を把握し、テキスト分析の方法などを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

テキスト分析の方法についてその概略を説明した上で、各自が担当した小説作品を分析して発表してテキスト分析の力を養成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	テキスト分析の方法について。
第2回	明治期の文体	文語体と言文一致体について。
第3回	人称の問題	語りの構造について。
第4回	坪内逍遙「細君」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第5回	坪内逍遙「細君」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第6回	嵯峨の屋おむろ「くされたまご」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第7回	山田美妙「この子」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第8回	山田美妙「この子」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第9回	森鷗外「舞姫」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第10回	森鷗外「舞姫」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第11回	尾崎紅葉「拈華微笑」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第12回	清水紫琴「こわれ指輪」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第13回	樋口一葉「わかれ道」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第14回	まとめ	文体と物語内容について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に当該小説を読み、その粗筋、問題点をレポートする。

【テキスト（教科書）】

『日本近代短篇小説選 明治篇1』（岩波文庫）

【参考書】

授業時に随時発表するため、記入事項なし。

【成績評価の方法と基準】

発表及び討論への参加（50%）、期末レポート（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度よりの担当のため記入事項なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学研究

<研究テーマ>

近代文学成立期の研究—19世紀文化論

<主要研究業績>

『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会。2002.11

【Outline and objectives】

to develop the ability to analyze japanese modern literatures.

LIT500B2

日本近代文芸特殊研究 B

山田 俊治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近代文学を研究する受講生各自の研究に資するよう、小説テキストの分析などの能力を養成する。

【到達目標】

日本近代文学を形成する言語、文体を把握し、テキスト分析の方法などを習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

テキスト分析の方法についてその概略を説明した上で、各自が担当した小説作品を分析して発表してテキスト分析の力を養成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	古典的文章体について。
第 2 回	幸田露伴「対鶴鶴」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 3 回	幸田露伴「対鶴鶴」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 4 回	幸田露伴「対鶴鶴」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 5 回	斎藤緑雨「かくれんぼ」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 6 回	斎藤緑雨「かくれんぼ」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 7 回	斎藤緑雨「かくれんぼ」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 8 回	泉鏡花「龍潭譚」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 9 回	泉鏡花「龍潭譚」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 10 回	国木田独歩「武蔵野」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 11 回	国木田独歩「武蔵野」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 12 回	広津柳浪「雨」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 13 回	広津柳浪「雨」	粗筋の抽出と問題点の検討。
第 14 回	まとめ	明治文学について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に当該小説を読み、その粗筋、問題点をレポートする。

【テキスト（教科書）】

『日本近代短篇小説選 明治篇 1』（岩波文庫）

【参考書】

授業時に随時発表するため、記入事項なし。

【成績評価の方法と基準】

発表及び討論への参加（50%）、期末レポート（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度よりの担当のため記入事項なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近代文学研究

<研究テーマ>

近代文学成立期の研究—19世紀文化論

<主要研究業績>

『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会。2002.11

【Outline and objectives】

to develop the ability to analyze japanese modern literatures.

LIN500B2

日本言語学特殊研究 A

間宮 厚司

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。博士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心にを行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 3 回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 4 回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 5 回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 6 回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 7 回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 8 回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 9 回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 10 回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 11 回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 12 回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 13 回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第 14 回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

参考書は研究テーマにそって、そのつど提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（30%）・質疑応答の発言（30%）・レポート（40%）を勘案して、総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程の受講生が履修している場合には、修士の受講生との違いを考慮するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005年）

『万葉異説』（森話社、2011年）

『沖縄古語の深層 I 増補版』（森話社、2014年）

[Outline and objectives]

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

LIN500B2

日本語学特殊研究 B

間宮 厚司

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的とした授業です。博士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心にを行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第 2 回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 3 回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 4 回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 5 回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 6 回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 7 回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 8 回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 9 回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第 10 回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第 11 回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第 12 回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第 13 回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第 14 回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

参考書は各自の研究テーマにそって、そのつと提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表の内容（30%）・質疑応答の発言（30%）・レポート（40%）を勘案して、総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程の受講生が履修している場合には、修士の受講生との違いを考慮するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005年）

『万葉異説』（森話社、2011年）

『沖縄古語の深層 / 増補版』（森話社、2014年）

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

LIT500B3

英文学思潮研究第二（文化研究）A

若島 正

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講義では、*Edith Wharton* の *The Age of Innocence* を、精読と速読を併用して読み切る。*Wharton* の文章は熟読に堪えるだけの骨のあるものであり、まず精読にあたっては、一語一語を精査しながら正しく読む態度を身につけ、速読の際にも、精読で養われた細部への目配りを忘れないようにすることが大切である。また、この長篇小説は主に 1870 年代のニューヨーク社交界を描いたものであるが、大きなテーマとしては主人公たちが翻弄される「時代の推移」がある。19 世紀後半から 20 世紀へと向かうこの時代は、さまざまなレベルで大変革が起こった興味深い時期であり、この講義ではそうした社会文化的な側面にもスポットライトを当てて読みたい。

<講義題目： *The Age of Innocence*(1920) を読む>

【到達目標】

精読と速読を併用して、一冊の小説を読み切ることにより、使われている言葉に細心の注意を払いながら、小説全体の大きな図柄も読み取るという、求心的かつ遠心的な読みの技術の獲得を目標にする。さらに、社会文化史の大きなコンテキストに目を向ける態度を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

前半はテキストの精読、後半では速読。速読に際しては、あらかじめ発表当番を決めておき、その当番による発表およびそれについてのディスカッションで授業を進める。発表当番は、A4 で 1-2 ページ程度のメモを用意して行うこと。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	テキスト精読 (1)	(第 1 章)
第 2 回	テキスト精読 (2)	(第 2 章)
第 3 回	テキスト精読 (3)	(第 3 章)
第 4 回	テキスト精読 (4)	(第 4 章)
第 5 回	テキスト精読 (5)	(第 5 章)
第 6 回	テキスト速読 (1)	(第 6-8 章)
第 7 回	テキスト速読 (2)	(第 9 章～第 11 章)
第 8 回	テキスト速読 (3)	(第 12 章～第 14 章)
第 9 回	テキスト速読 (4)	(第 15 章～第 17 章)
第 10 回	テキスト速読 (5)	(第 18 章～第 20 章)
第 11 回	テキスト速読 (6)	(第 21 章～第 24 章)
第 12 回	テキスト速読 (7)	(第 25 章～第 27 章)
第 13 回	テキスト速読 (8)	(第 28 章～第 30 章)
第 14 回	テキスト速読 (9)	(第 31 章～第 34 章)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを必ず事前に読んでくること。また、発表当番は A4 で 1-2 ページ程度のメモを用意して行くこと。

【テキスト（教科書）】

Edith Wharton, The Age of Innocence (Penguin Twentieth-Century Classics)

ISBN:978-0140189704

【参考書】

Martin Scorsese による映画化 *The Age of Innocence* は、原作にかなり忠実であり、作品を理解するうえで助けになると思われるので、可能なら観ておくことが望ましい。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献度 50% + レポート 50% で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 英米小説

<研究テーマ> *Vladimir Nabokov* 研究

<主要研究業績> 『ロリータ、ロリータ、ロリータ』（作品社）、『乱視読者の英米短篇講義』（研究社）など。

【Outline and objectives】

This course will help students acquire the basic skill of close reading by using Edith Wharton's The Age of Innocence as a textbook. Special attention will be paid to the social/cultural context of the old New York society in the 1870s which this novel depicts through the ironic viewpoint of the author.

LIT500B3

英文学思潮研究第二（文化研究）B

若島 正

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

20 世紀に屹立する多言語作家 Vladimir Nabokov が初めて英語で書いた長篇小説である *The Real Life of Sebastian Knight (1941)* を読む。*Nabokov* の独特の文章に触れ、可能なかぎり細部にこだわりながら、彼の主要なテーマ群に対する理解を深めつつ、この不思議な小説を通読することによって、*Nabokov* 文学への導入としたい。なお、速読の授業にあたっては、あらかじめ発表当番を指名し、その担当者による発表とそれに対する質疑応答という形式をとる。

<講義題目： *The Real Life of Sebastian Knight (1941)* を読む>

【到達目標】

精読と速読を併用して、一冊の小説を読み切ることにより、使われている言葉に細心の注意を払いながら、小説全体の大きな図柄も読み取るという、求心的かつ遠心的な読みの技術の獲得を目標にする。また、*Nabokov* 文学に関する基礎的な知識を習得することもテーマとなる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

前半はテキストの精読、後半では速読。速読に際しては、あらかじめ発表当番を決めておき、その当番による発表およびそれについてのディスカッションで授業を進める。発表当番は、A4 で 1~2 ページ程度のメモを用意して行うこと。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	(<i>Vladimir Nabokov</i> について)
第 2 回	テキスト精読 (1)	(第 1 章)
第 3 回	テキスト精読 (2)	(第 2 章)
第 4 回	テキスト精読 (3)	(第 3 章)
第 5 回	テキスト精読 (4)	(第 4 章)
第 6 回	テキスト精読 (5)	(第 5 章)
第 7 回	テキスト速読 (1)	(第 6 章~第 7 章)
第 8 回	テキスト速読 (2)	(第 8 章~第 9 章)
第 9 回	テキスト速読 (3)	(第 10 章~第 11 章)
第 10 回	テキスト速読 (4)	(第 12 章~第 13 章)
第 11 回	テキスト速読 (5)	(第 14 章~第 15 章)
第 12 回	テキスト速読 (6)	(第 16 章~第 17 章)
第 13 回	テキスト速読 (7)	(第 18 章~第 19 章)
第 14 回	テキスト速読 (8)	(第 20 章)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを必ず事前に読んでくること。また、発表当番は A4 で 1~2 ページ程度のメモを用意してこよう。

【テキスト（教科書）】

Vladimir Nabokov, The Real Life of Sebastian Knight (Penguin Modern Classics, Vintage International など、どのペーパーバック版でもいいから、各自で入手しておくこと。)

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献度 50% + レポート 50% で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 英米小説

<研究テーマ> Vladimir Nabokov 研究

<主要研究業績> 『ロリータ、ロリータ、ロリータ』（作品社）、『乱視読者の英米短篇講義』（研究社）など。

【Outline and objectives】

This course will help the basic skill of close reading by using Vladimir Nabokov's The Real Life of Sebastian Knight as a textbook. The course will also offer the introductory knowledge of how to read (often enigmatic) Nabokov's works. Special attention will be paid to the densely thematic web of the text.

LIT600B3

英文学特殊研究第一 (British Fiction) A

丹治 愛

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

本授業は、田園こそがイングランドの本質的なナショナル・アイデンティティであるという田園主義的イングリッシュネス概念の構築と脱構築の歴史を背景として、それに関連する代表的なイギリス小説を読んでいくものである。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的なものを考える力、文学作品を解釈する能力、作品のコンテキストをリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

＜講義題目＞：イギリス小説における田園の表象とナショナル・アイデンティティ

【到達目標】

- ・文学作品を論理的に分析することができる。
- ・文学作品およびその批評について他人と議論することができる。
- ・それぞれの作家の文学的立場について記述することができる。
- ・イギリス小説における田園の表象の特徴について説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

イギリス小説における田園の表象の変容を講義形式でたどりながら、個々の作品の読解は演習形式で進める。演習においては、それぞれの作品を精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていくことが求められる。そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	イングリッシュネス・スタディーズ序説
②	ジェイン・オースティン以前	ピクチャレスクな風景の発見とロマン派
③	Austen, 映画 <i>Sense and Sensibility</i>	映画の解釈 (1)
④	Austen, <i>Northanger Abbey</i>	ゴシックとピクチャレスク
⑤	Austen, <i>Emma</i>	イングランド的風景の発見
⑥	まとめと質疑応答 (1)	質問と議論で授業のまとめをする。
⑦	Dickens, <i>Oliver Twist</i>	都市の影、田園の光
⑧	Brontë, 映画 <i>Wuthering Heights</i>	映画の解釈 (2)
⑨	Brontë, <i>Wuthering Heights</i>	南と北の田園風景
⑩	Eliot, <i>Adam Bede</i>	反牧歌の伝統 (1)
⑪	Hardy, 映画 <i>Tess of the D'Urbervilles</i>	映画の解釈 (3)
⑫	Hardy, <i>Tess of the D'Urbervilles</i>	反牧歌の伝統 (2)
⑬	Morris, <i>News from Nowhere</i>	田園のヘリテージ化
⑭	まとめと質疑応答 (2)	質問と議論で授業のまとめをする。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

・授業中の討議に参加できるよう、指定されたテキストを授業前に精読し、自分の意見をまとめてくる。

【テキスト (教科書)】

Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles*, (Norton Critical Editions)

【参考書】

レイモンド・ウィリアムズ『都会と田舎』

Patrick Parrinder, *Nation and Novel: The English Novel from Its Origins to the Present Day* (Oxford UP)

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 50% (準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること)
- ・4000 字程度の期末レポート 50% (自分なりの主題を発見し、それについて論理的に述べること)

【学生の意見等からの気づき】

・精読する作品、ペース配分など、可能なところは学生と相談しながら決める。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

イギリス文学

＜研究テーマ＞

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

＜主要研究業績＞

(分担執筆)

『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009 年 2 月、『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解—都市退化論と「土地に還れ」運動』、pp. 115-134、『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解への不満—貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い』、pp. 135-155。

『イギリス小説の愉しみ』塩谷清人、富山太佳夫編、音羽書房鶴見書店、2009 年 6 月、『「ドラキュラ」、ゴシック小説、心霊研究』、pp. 240-58。

『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学教養学部編、東京大学出版会、2010 年 3 月、『「タイム・マシン」の歴史主義的解釈—文学作品の思想的歴史的文脈』、pp. 86-101。

【Outline and objectives】

In this class students study the history of the construction and deconstruction of the concept of rural Englishness that the country is the essential national identity of England, and read some of the representative British novels against the background of the history. They are expected to improve the ability to read critically, the ability to think logically, the ability to interpret literary works in the original way, the ability to research the context of works, and the ability to present, discuss and write a paper.

LIT600B3

英文学特殊研究第一 (British Fiction) B

丹治 愛

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

本授業は、田園こそがイングランドの本質的なナショナル・アイデンティティであるという田園主義的イングリッシュネス概念の構築と脱構築の歴史を背景として、それに関連する代表的なイギリス小説を読んでいくものである。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的なものを考える力、文学作品を解釈する能力、作品のコンテクストをリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

<講義題目>：イギリス小説における田園の表象とナショナル・アイデンティティ

【到達目標】

- ・文学作品を論理的に分析することができる。
- ・文学作品およびその批評について他人と議論することができる。
- ・それぞれの作家の文学的立場について記述することができる。
- ・イギリス小説における田園の表象の特徴について説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

イギリス小説における田園の表象の変容を講義形式でとりながら、個々の作品の読解は演習形式で進める。演習においては、それぞれの作品を精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていくことが求められる。そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	イングリッシュネス・スタディーズ序説
②	<i>Gissing, The Private Papers of Henry Ryecroft</i>	田園主義的イデオロギーの拡大
③	<i>Forster, 映画 Howards End</i>	映画の解釈 (1)
④	<i>Forster, Howards End</i>	都市退化論と田園回帰
⑤	<i>Forster, Maurice</i>	国民国家のなかの緑林
⑥	まとめと質疑応答 (1)	質問と議論で授業のまとめをする。
⑦	<i>Woolf, 映画 Mrs. Dalloway</i>	映画の解釈 (2)
⑧	<i>Woolf, Mrs. Dalloway</i>	遊歩者の都市
⑨	<i>Woolf, Between the Acts</i>	田園概念の脱構築
⑩	<i>Country House Novels</i>	カントリーハウスのヘリテージ化 (1)
⑪	<i>Waugh, Brideshead Revisited</i>	カントリーハウスのヘリテージ化 (2)
⑫	<i>Ishiguro, 映画 The Remains of the Day</i>	映画の解釈 (3)
⑬	<i>Ishiguro, The Remains of the Day</i>	カントリーハウスのヘリテージ化 (3)
⑭	まとめと質疑応答 (2)	質問と議論で授業のまとめをする。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

・授業中の討議に参加できるように、指定されたテキストを授業前に精読し、自分の意見をまとめてくる。

【テキスト (教科書)】

E. M. Forster, Maurice (Penguin Books)

【参考書】

レイモンド・ウィリアムズ『都会と田舎』

Patrick Parrinder, Nation and Novel: The English Novel from Its Origins to the Present Day (Oxford UP)

【成績評価の方法と基準】

・平常点 50% (準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること)
・4000 字程度の期末レポート 50% (自分なりの主題を発見し、それについて論理的に述べること)

【学生の意見等からの気づき】

・精読する作品、ペース配分など、可能なところは学生と相談しながら決める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

イギリス文学

<研究テーマ>

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

<主要研究業績>

(分担執筆)

『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009 年 2 月、『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解—都市退化論と「土地に還れ」運動』、pp. 115-134、『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解への不満—貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い』、pp. 135-155。

『イギリス小説の愉しみ』塩谷清人、富山太佳夫編、音羽書房鶴見書店、2009 年 6 月、『「ドラキュラ」、ゴシック小説、心霊研究』、pp. 240-58。

『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学教養学部編、東京大学出版会、2010 年 3 月、『「タイム・マシン」の歴史主義的解釈—文学作品の思想的歴史的文脈』、pp. 86-101。

【Outline and objectives】

In this class students study the history of the construction and deconstruction of the concept of rural Englishness that the country is the essential national identity of England, and read some of the representative British novels against the background of the history. They are expected to improve the ability to read critically, the ability to think logically, the ability to interpret literary works in the original way, the ability to research the context of works, and the ability to present, discuss and write a paper.

LIT500B3

米文学特殊研究第一（文学史）A

利根川 真紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

< 講義題目 > アメリカ女性文学の系譜

この授業では、19世紀末から20世紀末のアメリカ女性作家たちの短編作品を読み、各作家作品について理解を深めていきます。アメリカ社会における女性のあり方がいかに変化したのか、女性作家たちが互いにどのように意識・影響しあいながら作品を書いていたのか、また彼女たちの作品には、男性作家とはどのように異なる作風やテーマが見い出されるのか、という点についても検討します。

【到達目標】

1. アメリカ女性作家による作品を読み、それぞれの作家・作品について理解を深める。
2. アメリカ女性文学史の流れの中に、各作品を位置づける。
3. 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

アメリカ女性作家たちによる短編小説を文学史的コンテキストを補いつつ担当者を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、教員による補足説明、参加者全体によるディスカッションという形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第2回	1880年代	Sarah Orne Jewett など、ローカル・カラーの文学
第3回	1890年代	Charlotte Perkins Gilman など、ニュー・ウーマンの時代の文学
第4回	1900年代	Gertrude Stein など、モダニズムの文学
第5回	1910年代	Willa Cather など、ジェンダーを超える文学
第6回	1920年代・1930年代	Zora Neale Hurston など、ハーレム・ルネサンスの文学
第7回	1940年代	Hisaye Yamamoto など、第二次大戦と文学
第8回	1950年代・1960年代	Flannery O'Connor など、公民権運動と文学
第9回	1970年代	フェミニズム文学批評について
第10回	1970年代	Toni Morrison など、キャンノンを問い直す文学
第11回	1980年代	Bobbie Ann Mason など、母と娘の文学
第12回	1990年代	Jhumpa Lahiri など、越境と文学 & ペーパーの提出
第13回	プレゼンテーション	ペーパーに基づく口頭発表とディスカッション
第14回	まとめ	ペーパーおよび口頭発表へのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、人数分コピーを用意してください。

【テキスト（教科書）】

初回の授業時に指示します。

【参考書】

Showalter, Elaine. *A Jury of Her Peers: Celebrating American Women Writers from Anne Bradstreet to Annie Proulx*. Vintage, 2010.

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、発表（40%）、4000字程度のペーパー（30%）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > アメリカ文学

< 研究テーマ > 南部文学、女性文学

< 主要研究業績 >

①「『目覚め』におけるエドナの不在の母をめぐる——<海><草原><音楽>を手がかりに」。『言語と文化』（2019年）

②「白人娘たちの「物語記憶」——ミンローズ・グイン、キャスリン・ストケット、ハーバー・リーと公民権運動」『言語と文化』（2018年）

③「オコナーの『The Geranium』モチーフへの取り組み——南部娘にとってのホームと黒人」『言語と文化』（2016年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to understand the literary history of American women writers. We will read their short stories chronologically from the late nineteenth century through the late twentieth century. While paying special attention to women's changing roles in society as well as women writers' mutual interactions with each other, we will also consider specific themes and strategies unique to American women writers. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers.

LIT500B3

米文学特殊研究第一（文学史） B

利根川 真紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> ショパンの『目覚め』とアメリカ女性文学史
この授業では、春学期に扱ったアメリカ女性文学史の流れを意識しつつ、アメリカ女性作家による代表的な長編小説としてケイト・ショパンの『目覚め』（1899）およびそれについて書かれた批評論文を読んでいきます。この作品は、出版当初その内容が過激だとして受け入れられず、その後半世紀ほど忘れられ、1950年代・60年代になってようやく評価の兆しが芽生え、70年代のフェミニズム批評の興隆と連動する形でアメリカ文学のキャンソンの仲間入りを果たすことになりました。セント・ルイスで育ったショパンにとって、ニューオーリンズがどのような土地として意識されていたのかについても検討します。

【到達目標】

1. 小説『目覚め』を精読し、作品・作家について理解する。
2. アメリカ女性文学史の流れの中に、作品を位置づける。
3. 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

小説『目覚め』および関連する研究論文を担当者を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、教員による補足説明、参加者全体によるディスカッションという形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第2回	<i>The Awakening</i> 読解	1章からⅦ章について検討
第3回	<i>The Awakening</i> 読解	Ⅷ章からXⅢ章について検討
第4回	<i>The Awakening</i> 読解	XⅣ章からXⅨ章について検討
第5回	<i>The Awakening</i> 読解	XⅩ章からXⅩⅤ章について検討
第6回	<i>The Awakening</i> 読解	XⅩⅥ章からXⅩⅩⅢ章について検討
第7回	<i>The Awakening</i> 読解	XⅩⅩⅣ章からXⅩⅩⅨ章について検討
第8回	ペーパーの途中経過報告	計画書の提出と検討
第9回	批評文献の読解	地域・時代関連の批評について検討
第10回	批評文献の読解	人種関連の批評について検討
第11回	批評文献の読解	女性・フェミニズム関連の批評について検討
第12回	批評文献の読解	その他の批評について検討 & ペーパーの提出
第13回	プレゼンテーション	ペーパーに基づく口頭発表とディスカッション
第14回	まとめ	ペーパーおよび口頭発表へのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、人数分コピーを用意してください。

【テキスト（教科書）】

Norton Critical Edition の *Third Edition* を使用します。
Chopin, Kate. The Awakening: An Authoritative Text, Biographical and Historical Contexts, Criticism. Ed. Margo Culley. Norton, 2017.

【参考書】

Chopin, Kate. Complete Novels and Stories. Ed. Sandra M. Gilbert. Library of America, 2002.
Toth, Emily. Unveiling Kate Chopin. UP of Mississippi, 1999.

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、発表（40%）、4000字程度のペーパー（30%）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>アメリカ文学
<研究テーマ>南部文学、女性文学
<主要研究業績>

- ①「『目覚め』におけるエドナの不在の母をめぐって——<海><草原><音楽>を手がかりに」、『言語と文化』（2019年）
- ②「白人娘たちの『物語記憶』——ミンローズ・グイン、キャスリン・ストケット、ハーバー・リーと公民権運動」、『言語と文化』（2018年）
- ③「オコナーの『The Geranium』モチーフへの取り組み——南部娘にとってのホームと黒人」、『言語と文化』（2016年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to understand Kate Chopin's The Awakening (1899) with special attention to its place in the literary history of American women writers. By reading closely the novel itself as well as various kinds of literary criticism written on it, we will examine why the novel was neglected when it was first published and why it took more than half a century before it was regarded as one of America's major works. We will also consider Kate Chopin's relationships with New Orleans and how she depicted the region. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers.

LIT600B3

英米文学演習第二 (American Fiction) A

宮川 雅

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

Charles Brockden Brown 研究

アメリカ小説の父と呼ばれてきたチャールズ・ブロックデン・ブラウンの長篇小説を読む。教室では最初の長篇 *Wieland* (1798) を精読する。

(1) レポーター制による発表・質疑応答により、

①英文テキストを分析・解釈する営みを身につけるとともに、

②読んだ内容・情報を自らのことばでまとめる能力を養い、

③論理的思考力を養う。

(2) レポーター以外も積極的に予習をして、

④辞書を丁寧に引く習慣を身につけるとともに、

⑤議論に参加する積極性を養う。

(3) アメリカ作家とその作品について知識を得る。

<講義題目> Charles Brockden Brown 研究

【到達目標】

①アメリカン・ゴシックの歴史と特徴についてある程度の知識を得る ②ゴシックの美学的背景について理解している ③一見して雑然とした散文を読んでも重要な要素や重視したい箇所を自身の判断で指摘・抽出できる ④読むため・理解するために調べること、とくに固有名詞や歴史的・社会的背景について調べたことを面倒だと思わずできる。⑤ゴシックの理論について知識を持つ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって担当を決めた箇所を順番にレポーター形式で発表・質疑応答する。レポーターは、①《梗概 (要約)》②《注意すべき語句や表現》③《コメント》をまとめたハンドアウトを用意し、担当箇所について意見交換のたたき台を用意する。レポーター以外の参加者も自身の予習に基づいて質問したり意見を述べる必要がある。担当の割り振りについては、第一ラウンドは初回に決める予定。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	文学におけるゴシックについて／参考文献リスト配布／レポーター割り振り
第2回	Advertisement	ゴシック小説の特徴と美学的背景—— <i>the beautiful, the sublime, the picturesque</i>
第3回	Chapter 1 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換①
第4回	Chapter 2 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換②
第5回	Chapter 3 の分析と解釈	短篇小説論の検討／レポーターによる発表および意見交換③
第6回	Chapter 4 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換④
第7回	Chapter 5 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑤
第8回	Chapter 6 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑥
第9回	Chapter 7 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑦
第10回	Chapter 8 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑧
第11回	Chapter 9 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑨
第12回	Chapter 10 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑩
第13回	Chapter 11 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑪
第14回	Chapters 12, 13 の分析と解釈／前半のまとめ	レポーターによる発表および意見交換⑫

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

辞書を引いて予習する。読み取った情報や気になる点をノートに書き留める、あるいはプリントに書き込む。固有名詞や背景事情等について必要ならばネット検索をして調べる。他の作品や参考文献などを随時読む。

翻訳を参考にしてもらってかまわないが、演習各回ではあくまでテキスト原文を精読するため、レポーターに限らず各回の準備を怠らないようにする。

【テキスト (教科書)】

Emory Elliott, ed., *Wieland; or The Transformation, and Memoirs of Carwin, the Biloquist* (Oxford UP, 1998). pbk.

【参考書】

教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

レポーター発表 (内容及びプレゼンテーションに対する評価) 40 パーセント
授業への積極的参加度 (予習と参加の度合い) 30 パーセント
期末ペーパー (試験に代替する可能性もある) 30 パーセント
以上の合計を百点法換算して 60 点以上で合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

学生がさぼらぬようにきちんと指導する。

【Outline and objectives】

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Broune's gothic romance, *Wieland*, first published in 1798. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about the aesthetic background.

LIT600B3

英米文学演習第二 (American Fiction) B

宮川 雅

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

- ① ブラウンの長篇小説の検討
 - ② ゴシック小説の多様性を探る
 - ③ 多様な解釈の可能性の検討
- <講義題目> Charles Brockden Brown 研究

【到達目標】

- ① ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② チャールズ・ブロッケン・ブラウンの作家としての営みを概観して概嘆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。
「英米文学演習第二 (American Fiction) A」に続いて、チャールズ・ブロッケン・ブラウンの『ウィーランド』を読む。続篇『腹話術師カーウインの回想』を余裕があったら読む。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Chapter 14: "Three days have elapsed since this occurrence"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 2 回	Chapter 15: "Before I reached the city it was dark"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 3 回	Chapter 16: "As soon as I arrived in sight of the front of the house, my attention was excited by a light"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	Chapter 17: "I had no inclination nor power to move from this spot"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	Chapter 18: "I had imperfectly recovered my strength"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	Chapter 19: "Theodore Wieland, the prisoner at the bar, was now called upon for his defence"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	Chapter 20: "Will you wonder that I read no farther?"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 8 回	Chapter 21: "Such, for some time, was the course of my meditations"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	Chapter 22: "The inhabitants of the Hut received me"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	Chapter 23: "My morals will appear to you far from rigid . . ."	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	Chapter 24: "Deeply did I ruminate on the occurrences that had just passed. . ."	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	Chapter 25: "A few words more and I lay aside the pen for ever"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	Chapter 26: "My right hand, grasping the unseen knife, was still disengaged"	レポーターによる発表と質疑応答と議論

第 14 回 Chapter 27: [Written three years after the foregoing, and dated at Montpellier:] I imagined that I had forever laid aside the pen

レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】
研究書を読むことと辞書を引いて予習すること。

【テキスト (教科書)】

Emory Elliott, ed., *Wieland; or The Transformation, and Memoirs of Carwin, the Biloquist* (Oxford UP, 1998). pbk.

【参考書】

A 参照

【成績評価の方法と基準】

レポーター発表 (内容及びプレゼンテーションに対する評価) 40 パーセント
授業への積極的参加度 (予習と参加の度合い) 30 パーセント
期末ペーパー (試験に代替する可能性もある) 30 パーセント
以上の合計を百分法換算して 60 点以上で合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond におけるピクチャレスな意匠をめぐって」『英文学誌』47 号 (2005 年 3 月): 27-44、「ポーの宇宙論と錬金術 (十) 第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書 (その二)」『法政大学文学部紀要』50 号 (2005 年 3 月): 91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか?」(『法政大学文学部紀要』51 号 (2005 年 9 月): 1-13、「疑似科学と科学の境」(八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.

【Outline and objectives】

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Brown's gothic romance, *Wieland*, first published in 1798. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about the aesthetic background.

LIT600B3

英米文学演習第三 (British Fiction) A

丹治 愛

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文学批評とは、第一義的に、文学作品 (文学テキスト) を解釈する行為である。解釈とはテキストを読むための特定のコンテキストを定めて、テキストの意味を確定していく行為である。それは感想文とどう違うのかという点で異なるのかといった問いをとおして、文学解釈が成立するための要素を学習したのち、具体的にテキスト (イギリス小説) を、文化的社会的コンテキストに関連づけながら分析していく。そのプロセスで、小説を分析するために必要な基本的な概念群・キーワード群を学習する——物語 (ストーリー/プロット/デイスコース)、キャラクター、語り手 (ナレーター) と視点人物、イメージとシンボルとアレゴリーなど。最終的に、教材となった文学作品についての個々の学生の解釈を確認する。

【到達目標】

この授業は文学作品を解釈するための具体的な方法を学習することを目的とする。文学批評とはどのような行為なのかをはじめに学習したうえで、ひとつの作品 (イギリス小説) を選び、それを対象として具体的に精読を進めていく。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的にものを考える力、作品の文化的社会的背景をリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習なので、原則、学生のプレゼンテーションとディスカッションとで進める。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	文学批評とは何か——テキストの多義性と解釈	文学批評とはなにかを議論する。
第2回	論証と精読 (批判的読解) とリサーチ	論証と精読 (批判的読解) とリサーチの方法について議論する。
第3回	作品の分析——物語 (ストーリーとプロットとデイスコース)	物語 (ストーリーとプロットとデイスコース) に注目して、作品を分析する。
第4回	作品の分析——キャラクター (中心人物と周辺の人物)	キャラクターに注目して、作品を分析する。
第5回	作品の分析——ナレーターと視点人物 (誰が見ているか、誰が語っているか)	ナレーターと視点人物に注目して作品を分析する。
第6回	作品の分析——イメージ、シンボル、アレゴリー	イメージ、シンボル、アレゴリーに注目して、作品を分析する。
第7回	これまでのまとめ——質問とディスカッション	これまでのまとめ。教員への質問と学生どうしの議論を行う。
第8回	批評作品の読解——物語とキャラクター	物語とキャラクターを論じている具体的な作品論を読む。
第9回	批評作品の読解——ナラトロジー (語り手と視点)	語り手と視点を論じている具体的な作品論を読む。
第10回	批評作品の読解——イメージ、シンボル、アレゴリー	イメージ、シンボル、アレゴリーを論じている具体的な作品論を読む。
第11回	批評作品の読解——文学史的背景	文学史的背景を論じている具体的な作品論を読む。
第12回	批評作品の読解——文化社会的背景	文化社会的背景を論じている具体的な作品論を読む。
第13回	作品解釈口頭発表 (1) ——プレゼンテーション	授業であつてきた作品について学生が自分の解釈を口頭発表しあう。
第14回	作品解釈口頭発表 (2) ——プレゼンテーション	授業であつてきた作品について学生が自分の解釈を口頭発表しあう。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

事前にテキストを読み、自分の意見をまとめる。

【テキスト (教科書)】

D. H. Lawrence, "England, My England" in England, My England and Other Stories (Cambridge UP)

【参考書】

丹治愛・山田広昭編『文学批評への招待』(放送大学教育振興会)

デイヴィッド・ロッジ『小説の技法』(白水社)

Abrams & Harpham, A Glossary of Literary Terms

【成績評価の方法と基準】

1. 文学批評のプロセスを理解している。

2. 文学批評のキー概念を理解し、それを正しく活用することができる。

3. 授業であつてきた作品について自分なりの解釈を提示できる。

授業への貢献度 50%

期末レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

演習らしい演習になるよう、学生各自に積極的な授業参加をうながす。

【Outline and objectives】

Literary criticism is primarily an act of interpreting literary works (literary texts). Interpretation is an act of fixing a specific context for reading a text and defining the meaning of the text. After learning the elements for making a literary interpretation through questions such as how it differs from a book report, students concretely analyze a text (a British novel) in relation to some cultural and social context. In that process, students learn the basic concepts and keywords necessary to analyze a novel - stories (plots and discourses), characters, narrators and focalizers, images, symbols and allegories, etc. Finally, students discuss one another's interpretations of the literary work treated in class.

LIT600B3

英米文学演習第三（British Fiction） B

丹治 愛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業の目的は、文学批評とはどのようなものか、どのようなプロセスで進めていくものかを学習することである。この授業では、文学作品の解釈にとって有用な、さまざまな批評理論を中心に学習する。それぞれの批評理論の理論的基盤、それに関連する基本的な概念群・キーワード群を学習し、さらに具体的な作品群を精読し、批評理論を作品解釈に活用する訓練をする。
 <講義題目> 文学批評の方法論

【到達目標】

この授業は文学批評のための批評理論を学習することを目的とする。批評理論とはどのような機能をもっているかをはじめに学習し、個々の批評理論の理論と方法論、概念とキーワードなどを学習したうえで、それぞれの批評理論に応じてイギリス小説を選び、それを対象として批評作品を具体的に読んでいく。その精読のプロセスをおとして、英語の読解力、批判的読解（クリティカル・リーディング）をおとして論理的にものを考える力、リサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

原則、学生のプレゼンテーションとディスカッションで進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	本授業の目的、前学期の授業の概要および今学期の授業の概要について説明する。
第 2 回	ジャンル論	ジャンル論の解釈を読む。
第 3 回	ジャンル論とは何か？	ジャンル論について講義する。
第 4 回	ナラトロジー——作者と語り手	ナラトロジー的解釈を読む。
第 5 回	ナラトロジーとは何か	ナラトロジーについて講義する。
第 6 回	マルクス主義批評——階級とイデオロギー	マルクス主義的解釈を読む。
第 7 回	マルクス主義批評とは何か？	マルクス主義批評について講義する。
第 8 回	精神分析批評——無意識	精神分析的解釈を読む。
第 9 回	精神分析批評とは何か？	精神分析批評について講義する。
第 10 回	フェミニズム批評	フェミニズム的解釈を読む。
第 11 回	フェミニズム批評とは何か？	フェミニズム批評について講義する。
第 12 回	新歴史主義・文化研究——宗教と唯物論	新歴史主義的・文化研究的解釈を読む。
第 13 回	新歴史主義とは何か、文化研究とは何か？	新歴史主義・文化研究について講義する。
第 14 回	まとめ	授業全体をまとめ、理解度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、指定の文献を読む。プレゼンテーションのときには、わかりやすいハンドアウトの作成など、じゅうぶんな準備をする。

【テキスト（教科書）】

Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden* (Norton Critical Editions)

【参考書】

丹治愛・山田広昭編『文学批評への招待』（放送大学教育振興会）
 丹治愛編『批評理論』（講談社選書メチエ）
 ピーター・バリー『文学理論講義』（ミネルヴァ書房）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（授業にたいする積極的参加）
 期末レポート 50%（授業内容の理解度）

【学生の意見等からの気づき】

学生の発表・議論の機会を増やす。

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to learn what literary criticism is and what kind of process to proceed. In this class, students learn mainly about various critical theories useful for the interpretation of literary works. They learn the theoretical foundation of each critical theory, basic concepts and keywords related to it, and carefully read concrete interpretations and learn to utilize critical theories for concrete interpretations of literary works.

LIN600B3

英語学演習（英語史・言語変化理論） A

大沢 ふよう

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語の変化の概論的知識を獲得する。単に英語の変化をなぞるだけでなく、常に現代英語と比較しつつ、英語の変化についての知識を得る。その上で、統語構造の分析に関して必要な理論の基礎的知識を得る。分析は一定の立場にたたないことが不可能であり、理論的知識は研究にとって不可欠なものである。
 <講義題目> 英語の統語構造の通時的変化の理論的分析

【到達目標】

英語史における統語構造の変化に関して先行研究を踏まえ、独自の分析を提案することをめざす。学生は、単に先行研究を学ぶだけではなく、批判点をも見つけるように学ぶことを目指す。最終的には生成文法理論の基本的な概念を使って個々人が疑問に思った英語の変化についての疑問点を解くことができるようになることが目標である。生成文法のいくつかの原理を使って、ある構造が何故古英語では許されなかったかを説明することをめざす。具体的には例えば、下のような大きな疑問点に対して、自らの仮説を構築していくことができるような、知識、理論的水準が獲得できることを目指す。
 ・何故、古英語では、現代英語のような冠詞が存在しなかったのか。
 ・現代英語のような冠詞体系が出現したのはなぜか。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は、学生が研究論文や専門書の中のいくつかの章の担当を決め、単に英語を訳すだけではなく、内容について考え自分で調べて授業で発表する形式で進んでいく。従って初めから教員が要領よく内容を解説してくれてそれを単に書き写したり、覚えるという形式はとらない。研究論文の内容についての議論・批判が中心になるので、毎回活発に発言することが必要である。しかし専門性が高い、難解な部分に関しては教員が解説を行い、理解が進むように工夫する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	春学期授業の紹介を行う。授業の進め方や大体的内容について説明する。必要な文献へどのようにアクセスするかも解説する。
第 2 回	英語の歴史について	英語の歴史についてのイントロダクション。英語がどのように変化してきたかの説明を初歩的な専門書を通して理解させる。
第 3 回	理論言語学について	理論とは何かについて、理解できるようわかりやすく解説する。
第 4 回	生成文法の基本的考え方	生成文法とは何かについて論文を読ませて、まとめをさせ、また議論させる。
第 5 回	生成理論の変遷	標準理論から拡大標準理論への変化について論文を読ませて議論させる。
第 6 回	生成理論の変遷－G B 理論	G B 理論の意味について論文を読み、理解させる。
第 7 回	生成理論の変遷－ミニマリスト・プログラム	最新の理論についても知識が得られるようにする。
第 8 回	語彙範疇と機能範疇	語彙範疇と機能範疇はどう違うのかという問題を実際の論争を紹介して、考えさせる。
第 9 回	機能範疇は普遍的か	機能範疇はパラメータ的の違いがあるということを理解するために、いくつかの論文を読む。
第 10 回	様々な構文の分析	構文分析について具体的に紹介し、理解させる。
第 11 回	名詞句の分析：D P 仮説について	D P 仮説の紹介
第 12 回	名詞句の分析：D P と N P の違い	名詞句にも幾つか種類があることを理解する。
第 13 回	D P について	D P について理解ができたか確認するためにいくつかの質問をして理解度をチェックする。
第 14 回	DP shell とは何か	DP とはつまりは shell 構造である、ということを理解させる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教員が指定した研究書は、もちろん、それ以外の本や研究論文は自分でどんどん、読み進める。ほとんどが英語で書かれたものである。高いレベルの英語力が必要とされる。英語力の研鑽にも励むことが必要である。自分が担当でない部分でも必ず担当者と同じ準備をして毎回授業に臨む。予習をきちんと行うように、授業時間のはじめに内容についての簡単な質問への答えを書かせることでどの程度予習してきたかを把握する試みも行う予定である。正解を書かせるというより、論文が何について書かれているか、といった程度の質問である。

【テキスト（教科書）】

1冊のテキストではなく、次の主要な文献を読み、それらに基づいて分析・議論する。また授業の進行具合に応じて、適宜必要な文献を追加指定していく予定である。

次の2冊は必ず準備することが必要である。

Denison, David (1993) *English Historical Syntax*, London: Longman.

Lyons, Christopher (1999) *Definiteness*, Cambridge University Press.

【参考書】

Alexiadou, Artemis. (2004) "On the Development of Possessive Determiners," In *Diachronic Clues to Synchronic Grammar*, ed. by Eric Fußand Carola Trips, 31-58. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Allen, Cynthia(2008) *Genitives in Early English: Typology and Evidence*, Oxford: Oxford University Press.

Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge: Cambridge University Press.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory 2nd*. Blackwell

Osawa, Fuyo (2000) "The Historical Emergence of DP in English" *English Linguistics*. 17.1. 51- 79.

Osawa, Fuyo (2007) "The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition," *Nominal Determination: Typology, Context Constraints, and Historical Emergence*, ed. by Elizabeth Stark, Elizabeth Leiss and Werner Abraham, 311-337. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Osawa, Fuyo (2009) "The Emergence of DP in the History of English: The Role of the Mysterious Genitive," *Historical Linguistics 2007*, ed. by Monique Dufresne, Fernande Dupuis and Etleva Vocaj, 135-148. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rosenbach, Anette (2002) *Genitive Variation in English: Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Berlin and Hawthorne, NY: Mouton de Gruyter.

Taylor, John R. (1996) *Possessives in English: An Explanation in Cognitive Grammar*, Oxford and New York: Oxford University Press.avid

【成績評価の方法と基準】

授業における活動・発言 30%、ターム・ペーパー 70%で評価する。ターム・ペーパーが最も重要であり、自分で問いを設定し、かつ方法論を踏まえて先行研究を評価し批判し、その上になつて自分独自の分析を提示しているかを採点する。上記のことが初めから完璧にできることは求めないが、ある程度これらの要求を満たしていることが大学院生が書くレポートには必要である。

【学生の意見等からの気づき】

常に学生の理解度をチェックし、柔軟に対応できるようにする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・統語論・歴史言語学

<研究テーマ>

英語の統語構造の通時的変化を、統語理論を使って分析する。

<研究業績>

Grammaticalization as Economy. 2007

掲載誌名 近代英語研究 (*Studies in Modern English*) (近代英語協会) 23号
The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition. 2007

掲載書名 *Nominal Determination*.

出版社 John Benjamins.

Recursion in Language Change.

掲載書名 *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*. 2008
(*Studies in English Medieval Language and Literature Series*. Vol. 22)

出版社 Peter Lang Publishing.

【Outline and objectives】

This course covers the main events in the historical development of the English language. Some theoretical aspects of the language changes is also included. Through studying the history of English students can achieve a variety of aims both theoretical and philological.

LIN600B3

英語学演習（英語史・言語変化理論）B

大沢 ふよう

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語の変化の概論的知識を獲得し、統語構造の分析に関して理論の基礎的知識を得る。さらに実際に起こった英語の言語変化を理論的に説明する。目的は現代英語との違いを知ることにより、何故現代英語が今日のようなあり方をしているのかを系統だてて理解するためである。

<講義題目> 英語の統語構造の通時的変化の理論的分析

【到達目標】

春学期の成果にたつた、より深い理解と分析をめざす。秋学期は、英語の統語構造の中でも、英語史における名詞句の構造の変化に関して先行研究を踏まえ、独自の分析を提案することをめざす。具体的な例を提示すると、例えば学生は初期の英語において何故現代英語のような冠詞が存在していなかったのかの理論的説明に取り組むことができる。自分独自の仮説を組み立てることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

秋学期も基本的には春学期と同じ方法で授業は進行するが、学生が研究論文を担当して内容について発表するだけでなく、自分が疑問に思う課題を幾つか見つけて、その解決を考えるという作業に取り組む機会を増やすようにする。そうした内容について授業時間内に発表してもらい、それぞれの研究について議論し合う時間を増やしたい。

随時、学生に反応をリアクションペーパーなども活用して求める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	秋学期授業の紹介と進め方についての解説
第2回	春学期の復習と、課題についての講評	課題について、評価を行う。
第3回	英語の変化	英語史の変化の概説を行う。
第4回	古英語：概観	古英語の統語構造についてまとめた解説を行う。
第5回	中英語：概観	中英語の統語構造についてまとめる。
第6回	近代英語：概観	近代英語の統語構造についてまとめる。
第7回	英語の変化とは	英語の変化は他の言語に比べてどのような違いがあるのか、論文を読みながら検討する。
第8回	英語史における格	初期英語における格について基本的知識を学ぶ。
第9回	G B理論における格理論についての議論	格と生成理論について基本的な事柄を学ぶ。
第10回	ミニマリストにおける格理論についての議論	解釈不可能な格とは何かについて学習する。
第11回	機能範疇	古英語において機能範疇は存在したか、という問題を検討する。
第12回	古英語における名詞句	名詞句構造はどのように変化してきたかを学ぶ。
第13回	名詞句と冠詞	何故冠詞は英語において出現したのか、という問題を検討する。
第14回	総括	英語はどのように変化してきたか、を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

春学期よりさらに、高いレベルの英語を読みこなす力と、英語で、まとまった思考を表すことができるようになるために、授業時間内に扱う論文以外に指定した論文を授業時間外の学習課題として指定する予定である。自分の研究課題が見つけれられるような、研究書の読み方を心がけてほしい。

【テキスト（教科書）】

1冊のテキストではなく、次の主要な文献を読み、それらに基づいて分析・議論する。また授業の進行具合に応じて、適宜必要な文献を追加指定していく予定である。

次の2冊は必ず準備することが必要である。

Denison, David (1993) *English Historical Syntax*, London: Longman.

Lyons, Christopher (1999) *Definiteness* Cambridge University Press.

【参考書】

Alexiadou, Artemis (2004) "On the Development of Possessive Determiners," In *Diachronic Clues to Synchronic Grammar*, ed. by Eric Fußand Carola Trips, 31-58. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Allen, Cynthia (2008) *Genitives in Early English: Typology and Evidence*, Oxford: Oxford University Press.

Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge: Cambridge University Press.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory 2nd*. Blackwell

Osawa, Fuyo (2000) "The Historical Emergence of DP in English" *English Linguistics*. 17.1. 51-79.

Osawa, Fuyo (2007) "The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition," *Nominal Determination: Typology, Context Constraints, and Historical Emergence*, ed. by Elizabeth Stark, Elizabeth Leiss and Werner Abraham, 311-337. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Osawa, Fuyo (2009) "The Emergence of DP in the History of English: The Role of the Mysterious Genitive," *Historical Linguistics 2007*, ed. by Monique Dufresne, Fernande Dupuis and Eileva Vocaj, 135-148. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rosenbach, Anette (2002) *Genitive Variation in English: Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Berlin and Hawthorne, NY: Mouton de Gruyter.

Taylor, John R. (1996) *Possessives in English: An Explanation in Cognitive Grammar*, Oxford and New York: Oxford University Press.

【成績評価の方法と基準】

授業における活動・発言 30 %、ターム・ペーパー 70 % で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の理解度をチェックし、柔軟に対応する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・統語論・歴史言語学

<研究テーマ>

英語の統語構造の通時的変化を、統語理論を使って分析する。

<主要研究業績>

Recursion in Language Change.

Fuyo Osawa

掲載書名 *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*. 2008

(*Studies in English Medieval Language and Literature Series*. Vol. 22)

出版社 Peter Lang Publishing.

The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition. 2007

Fuyo Osawa

掲載書名 *Nominal Determination*. 311-337. 査読有

出版社 John Benjamins

Grammaticalization as Economy. 2007

大澤ふよう

掲載誌名 *近代英語研究 (Studies in Modern English)* (近代英語協会) 23号. 147-155. 査読有

【Outline and objectives】

This course covers the main events in the historical development of the English language. Some theoretical aspects of the language changes is also included. Through studying the history of English students can achieve a variety of aims both theoretical and philological.

LIN600B3

言語学演習 (応用言語学) A

川崎 貴子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

英文学専攻「言語学演習 (応用言語学) A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論していく。言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	人の言語能力	第一言語習得
3	言語習得研究 1	第一言語習得と第二言語習得
4	言語習得研究 2	L2 研究の歴史
5	言語獲得と言語習得	Learning & Acquisition
6	研究計画発表 1	修士 2 年生による究計画発表・進捗状況の報告
7	研究計画発表 2	修士 1 年生による研究テーマ発表
8	エラーに関する研究 1	transfer エラー・ developmental エラー
9	エラーに関する研究 2	Error Analysis
10	学びと注意 1	暗示的・明示的学び
11	学びと注意 2	気づき仮説
12	学生による発表 1	レビュー論文
13	学生による発表 2	実験による仮説検証
14	研究法	研究手法比較と研究計画の作成

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト (教科書)】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内にてその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

<修士課程学生>

授業参加点：40%

授業内発表：30%

研究計画書：30%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の基礎知識、興味の内容が大きく異なるため、それぞれの興味に応じて扱う題材を調整していきたいと思っています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 音韻論、第二言語習得

<研究テーマ> 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

<主要研究業績>

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」
白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版。(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

LIN600B3

言語学演習（応用言語学）B

川崎 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の研究を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる第二言語習得の理論、研究方法を学ぶ。

【到達目標】

一音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法を学ぶ。
一 SLA の音韻習得・語彙習得の論文を読み、習得・音韻理論への理解を深める。
一自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の形にすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「言語学演習（応用言語学）B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりませながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション 第一言語習得と第二言語習得	授業内容の説明・母語の影響
2	修士2年生の研究発表	研究の進捗状況発表（2年生）
3	修士1年生・研修生の研究発表	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）
4	習得理論 1	Noticing
5	習得理論 2	input と output
6	習得順序 1	処理可能性理論
7	習得順序 2	セリエンス
8	第二言語習得の研究手法	学生による実験論文の発表
9	データの分析・可視化 1	データ分析・統計処理
10	データの分析・可視化 2	データ分析・統計処理（ハンズオンデータによる実習）
11	論文構成	論文の構成・書式について学ぶ
12	1年生による修論計画発表	1年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表。
13	2年生による修論発表	2年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

<修士課程>

授業発表....40%

授業内での発言・議論への貢献....30%

学期末アブストラクト....30%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 音韻論、第二言語習得

<研究テーマ> 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

<主要研究業績>

川崎貴子・田中邦佳「L2英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第65号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第二言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第63号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

LIN600B3

英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論）A

椎名 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には英語で書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をする。しかし、その場合の「スタイル」の定義とはなんだろうか？ その定義を出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していく。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とする。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論）A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テキストは担当者を決めて、発表してもらいます。その後で、みんなでコメントを交換し、ディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	「文体・スタイル」とは何か？
第2回	文体と選択 (1)	文体の領域、文体と中身
第3回	文体と選択 (2)	文体の意味
第4回	文体、テキスト、頻度 (1)	スタイルの計測
第5回	文体、テキスト、頻度 (2)	規範と逸脱
第6回	文体の分析方法 (1)	言語学的・文体論的チェックリスト
第7回	文体の分析方法 (2)	文体のバリエーション
第8回	分析方法の例 (1)	D.H. ロレンス、J. コンラッドの小説の分析の練習
第9回	分析方法の例 (2)	ヘンリー・ジェイムズの小説の分析の練習
第10回	文体のレベル (1)	認知的コードとしての言語について
第11回	文体のレベル (2)	メッセージと現実のモデル
第12回	文体のレベル (3)	意味論的レベルと統語論的レベル
第13回	文体のレベル (4)	書記的レベルと音韻論的レベル
第14回	文体論的分析の方法論についてのまとめ	これまで読んできたことをふりかえってまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者でなくても、かならずテキストを読んで予習をしてきてください。

【テキスト（教科書）】

Geoffrey Leech and Mick Short (2007) *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose, second edition, New York: Routledge.*

【参考書】

適宜、指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート（50%）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50%）を考慮し、総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】

面談が評判がよいので、指導は授業と面談とのコンビネーションで進めていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、コミュニケーション論
<研究テーマ> 英語の呼称について、日本語のベネファクティブとポライトネスについて
<主要研究業績> 「させていただく」という問題系『日本語語用論フォーラム』2017, ひつじ書房、他

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

LIN600B3

英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論）B

椎名 美智

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には英語で書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をする。しかし、その場合の「スタイル」の定義とはなんだろうか？その定義を出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していく。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とする。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「英語学特殊研究第一（英文法・文体論・語用論）B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

担当者がテキストについて発表し、その後、みんなでコメントを交わしてディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	文体分析の方法について
第2回	文体の2つのアスペクト	言語と虚構の世界
第3回	文体の2つのアスペクト(1)	現実のスピーチと虚構におけるスピーチ
第4回	マインド・スタイル(1)	3つのマインドスタイル
第5回	マインド・スタイル(2)	通常とは異なるマインドスタイル
第6回	テキストのレトリック(1)	テキストとディスコースのレトリック
第7回	テキストのレトリック(2)	文の単純さと複雑さ
第8回	ディスコースとディスコース・シチュエーション(1)	文学におけるディスコース・シチュエーション
第9回	ディスコースとディスコース・シチュエーション(2)	視点の問題
第10回	小説における会話(1)	スピーチ・アクトとインプリカチャー
第11回	小説における会話(2)	語用論
第12回	スピーチと思考の表現方法(1)	スピーチの表現方法
第13回	スピーチと思考の表現方法(2)	思考の表現方法
第14回	文体論的研究の今後の課題	タームを振り返って、問題点などを議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者もそれ以外の人も、全員、テキストを読んで予習をして来てください。

【テキスト（教科書）】

Geoffrey Leech and Mick Short (2007) *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose, second edition, New York: Routledge.*

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

レポート（50%）に加え、授業中の参加の度合、貢献度（50%）を考慮し、総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】

面談が指導に有効で良かったと言われているので、授業に並行して、定期的な面談を行い、一人一人の論文作成を進めていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、コミュニケーション論

<研究テーマ> 英語の呼称問題、日本語のベネファクティブとボライトネス
<主要研究業績> 「させていただく」という問題系、『日本語語用論フォーラム 2』（ひつじ書房）2017 他

LIN600B3

言語学特殊研究（理論言語学・認知科学）B

石川 潔

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

外国語教育や音声学は昔から実験科学分野だが、近年は統語論研究においても実験研究への志向が見られる。しかし、実験計画法や（実験データの処理のための）統計学は、日本の言語学教育の一部になっているとはいえない。よって、教育・音声・統語解析・理論言語学を専門とする皆様のために、実験データ分析の中級レベルの導入を行いたい。
 <講義題目>心理言語学データの分析法（中級編）

【到達目標】

本来このような大学院科目は、履修者のニーズに応じて内容自体を変えるべきであり、具体的に何を指すかは履修者の希望と照らし合わせて決定する。しかしここでは、担当者の守備範囲の例示として、混合効果一般化線形モデルの入門を挙げておく。その場合の到達目標は以下の通り：
 ・正規分布しないデータ（特定の選択肢の「選択率」やコーパスでのカウント数など）を一般化混合モデルで分析できるようになること。
 ・伝統的な分散分析では扱えない、実験参加者に加えて言語刺激についても一般化が必要になる通常の心理言語学実験のデータを、混合効果モデルで分析できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

以下の授業計画は、混合効果一般化線形モデルの入門の例。但し、その場合でも、具体的な進捗・内容は例示に過ぎない。いずれにせよ、輪読形式にはならない予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	環境整備	統計環境 R の導入
2	モデルの構築という考え方	線形回帰、およびその統計量の意味
3	線形回帰モデルの構築法	最小二乗法、最尤法
4	重回帰分析の基礎 1	複数の変数による予測
5	重回帰分析の基礎 2	モデル全体としての予測と、個々の予測変数の寄与度との、違い
6	重回帰分析の基礎 3	モデル間の比較による、個々の予測変数の寄与度の評価
7	重回帰分析の基礎 4	分布に関する前提
8	線形モデル	伝統的な分散分析や t 検定の、線形回帰モデルとしての表現
9	選択率データの分布	2項分布、 <i>arcsine square-root transformation</i> 、 <i>logit transformation</i>
10	ロジスティック回帰 1	ロジット及びロジスティック関数、線形予測子、リンク関数、 <i>separation</i>
11	混合効果モデル 1	固定因子および変数因子の概念
12	混合効果モデル 2	<i>subject analysis</i> と <i>item analysis</i>
13	混合効果モデル 3	変数因子にもとづく傾き・切片
14	混合効果モデル 4	モデル選択

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい（わからない箇所は教員または周囲に尋ねること）。

また、上記の授業計画の場合は、

・実験技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみる。

・統計技法を学んだら、同じ（または似た）技法を使った他の論文を自分で読んでみたり、自分の手持ち（または架空）のデータを分析してみる。

といった作業を行うと良いでしょう。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

久保拓弥 (2012). 『データ解析のための統計モデリング入門—

一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC』

東京：岩波書店。

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、学期末試験 50 %（混合効果一般化線形モデルの場合：重回帰 10 %、一般化線形モデル 20 %、混合効果モデル 20 %）

【学生の意見等からの気づき】

N/A.

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムには、自分が普段アクセスするメールアドレスを登録しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ> 音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An intermediate-level course on statistical analysis of experimental data.

LIN500B3

英語教育学研究 A

印南 洋

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> *Second language acquisition and pedagogy*
This course introduces some stimulating issues on second language acquisition and pedagogy. In particular, it focuses on the questions that people often have about language learning.

【到達目標】

In this course, students will learn about (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of second language education and its application to pedagogy better, based on empirical evidence.

By the end of this course, students will be able to better understand (1) second language acquisition and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in second language acquisition and pedagogy. Students are assigned readings from the textbook chapters.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	Overview of the course and presentation schedule
第 2 回	Literature search	Literature search using digital and library resources
第 3 回	Myth 1: Children learn languages quickly and easily while adults are ineffective in comparison.	Language learning and age; the Critical Period Hypothesis
第 4 回	Myth 2: A true bilingual is someone who speaks two languages perfectly.	Bilingualism
第 5 回	Interim report on in-class student presentations	Report and feedback
第 6 回	Myth 3: You can acquire a language simply through listening or reading.	Input, output, and interaction
第 7 回	Myth 4: Practice makes perfect.	Attention and noticing
第 8 回	Interim report on in-class student presentations	Report and feedback
第 9 回	Myth 5: Language students learn (and retain) what they are taught.	Explicit and implicit learning; developmental sequences; interaction
第 10 回	Myth 6: Language learners always benefit from correction.	Correction and recasts
第 11 回	Myth 7: Individual differences are a major, perhaps the major, factor in SLA.	Individual differences
第 12 回	Myth 8: Language acquisition is the individual acquisition of grammar	Social approaches: Pragmatics, emergentism, sociocultural approaches, language socialization
第 13 回	Student presentation	Presentation and feedback
第 14 回	Student presentation	Presentation and feedback

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】

Steven Brown and Jenifer Larson-Hall. (2012). Second language acquisition myths: Applying second language research to classroom teaching. University of Michigan Press. ISBN: 978-0-472-03498-7

【参考書】

Joy Reid with Keith S. Folse, Cynthia M. Schuemann, Pat Byrd and John Bunting, Ken Hyland, Dana Ferris, Susan Conrad, Sharon Cavusgil, & Paul Kei Matsuda. (2008). Writing myths: Applying second language research to classroom teaching. ISBN 978-0-472-03257-0

Keith S. Folse. (2004). Vocabulary myths: Applying second language research to classroom teaching. ISBN 978-0-472-03029-3

望月昭彦、磐崎弘貞、卯城祐司、久保田章（著）。（2010）。『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』。大修館書店。ISBN: 978-4469245585

Patsy M. Lightbown & Nina Spada. (2013). How languages are learned (4th edition.). Oxford University Press.

Steven Brown. (2011). Listening myths: Applying second language research to classroom teaching. ISBN 978-0-472-03459-8

【成績評価の方法と基準】

Reaction paper (40%); Chapter presentation (10%); Student project (30%); Writing portfolio (20%)

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation

<研究テーマ>

Test method effects on test performance

Construct validation study of a test/instrument/questionnaire

Meta-analytic inquiry into the variability of effects

Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation

Secondary analysis of survey and administrative datasets

Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)

<主要研究業績>

In'nami, Y., & Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development, pp.925 - 943). New York: Wiley-Blackwell.

卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著（第 5 章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87] を担当）。平成 24 年 9 月。研究社。

竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著（第 14 章 SEM 入門 [pp. 194-206]、第 16 章 メタ分析入門 [pp. 227-239] を担当）。平成 24 年 5 月。松柏社。

LIN500B3

英語教育学研究 B

印南 洋

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> *Language testing and assessment*

This course is mainly provided for student teachers to give an insight into how to evaluate learner knowledge and performance in L2 education. The course also introduces some stimulating issues on second language testing and assessment. In particular, it focuses on the questions that people often have about language testing and assessment. The students will also examine, discuss, and create types of assessing practices in L2 situations.

【到達目標】

In this course, students will learn about (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context. Through discussions after reading the course textbook and handouts, students will acquire a deeper understanding of these two issues. Repeating this process throughout the semester will help students develop their understanding of language testing and assessment and its relationship with pedagogy better, based on empirical evidence.

By the end of this course, students will be able to better understand (1) language testing and assessment and (2) its role in English-as-a-foreign/second language context.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

Most classes consist of lectures, group discussions, and student presentations on topics in language testing and assessment. Students are assigned readings from the textbook chapters.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	<i>Introduction; Literature search</i>	<i>Overview of the course and presentation schedule; Literature search using digital and library resources</i>
第 2 回	<i>Introduction and Myth 1: Assessment is just writing tests and using statistics.</i>	<i>What we should know about assessment</i>
第 3 回	<i>Myth 2: A comprehensive final exam is the best way to evaluate students.</i>	<i>Formative and summative assessments; dynamic assessment</i>
第 4 回	<i>Myth 3: Scores on performance assessments are preferable because of their accuracy and authenticity.</i>	<i>Various issues on performance (speaking and writing) assessments</i>
第 5 回	<i>Myth 4: Multiple choice tests are inaccurate measures of language but are easy to write.</i>	<i>Various issues on multiple choice items</i>
第 6 回	<i>Myth 5: We should test only one skill at a time.</i>	<i>Integrated tasks</i>
第 7 回	<i>Myth 6: A test's validity can be determined by looking at it.</i>	<i>Validity, aspects of validity, and validation</i>
第 8 回	<i>Myth 7: Issues of fairness are not a concern with standardized testing.</i>	<i>Fairness issues in standardized, high-stakes testing</i>
第 9 回	<i>Myth 8: Teachers should not be involved in preparing students for tests.</i>	<i>Learning and assessment</i>
第 10 回	<i>Conclusion: Conclusion and review</i>	<i>Conclusion and review of each chapter</i>
第 11 回	<i>Test development</i>	<i>Exercise on developing a test</i>
第 12 回	<i>Item analysis</i>	<i>Distractor analysis and scoring multiple-choice items in Excel</i>

第 13 回 *Student project presentation* *Presentation and feedback*第 14 回 *Student project presentation* *Presentation and feedback*

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Before attending the class every week, students are required to read the assigned chapter of the textbook and write a reaction paper.

【テキスト（教科書）】

Assessment myths: Applying second language research to classroom teaching by Lia Plakans and Atta Gebriel. University of Michigan Press. 2015.

【参考書】

J. Charles Anderson, Caroline Clapham, and Dianne Wall. (2001). Language test construction and evaluation. Cambridge University Press. ISBN: 978-0521478298

小泉利恵、印南洋、深澤真 (編著). (2017). 『実例でわかる英語テスト作成ガイド』. 大修館書店. ISBN: 978-4469246100

望月昭彦、深澤真、印南洋、小泉利恵 (編著). (2015). 『英語 4 技能評価の理論と実践: CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで』. 大修館書店. ISBN: 978-4469245912

【成績評価の方法と基準】

Reaction paper (40%); Chapter presentation (10%); Student project (30%); Writing portfolio (20%)

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

Feel free to ask questions. I look forward to working with you.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Applied linguistics, language education, language testing, and program evaluation

<研究テーマ>

Test method effects on test performance

Construct validation study of a test/instrument/questionnaire

Meta-analytic inquiry into the variability of effects

Longitudinal measurement of change in language proficiency and program evaluation

Secondary analysis of survey and administrative datasets

Application of measurement models to language test data (especially, meta-analysis and structural equation modeling)

<主要研究業績>

In'nami, Y., & Koizumi, R. (2013). Statistics and software for test revisions. In A. Kunnan (ed.), Companion to language assessment (Vol. II: Approaches and Development, Part 7: Assessment Development, pp.925 - 943). New York: Wiley-Blackwell.

卯城祐司編著。『英語リーディングテストの考え方と作り方』。共著 (第 5 章 テスト得点解釈の留意点 [pp. 78-87] を担当)。平成 24 年 9 月。研究社。

竹内理・水本篤編著。『外国語教育研究ハンドブック：研究手法のより良い理解のために』。共著 (第 14 章 SEM 入門 [pp. 194-206]、第 16 章 メタ分析入門 [pp. 227-239] を担当)。平成 24 年 5 月。松柏社。

LIN500B3

英語発音法 A

高橋 豊美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「英語発音法 A/B」・「英語発音法 I/II」の目的は、個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶことである。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

この「英語発音法 A」・「英語発音法 I」では、分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- ・分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
- ・発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
- ・発音記号を適切な発音で読むことができる。
- ・与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「英語発音法 A」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「英語発音法 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響的特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。

配付資料を使用して理論の解説を行い、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聴き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 01 回	授業案内	授業の概要／参考文献
第 02 回	音声の基礎	発声・聴覚・音響の仕組み
第 03 回	母音と子音	音素論／母音の調音的特徴／子音の調音的特徴／音声の分類
第 04 回	音節の機能	分節音と超分節音／リズムの基本単位／分節音現象の構造記述
第 05 回	音節構造	音声変化／押韻／リズム
第 06 回	音節配列	音節構造と音声分布／音節区分
第 07 回	音節の変化	音節子音／音節圧縮
第 08 回	母音の変化	弱化／中和／短縮
第 09 回	弱形	引用形と弱形／弱形の種類
第 10 回	連結と脱落	語境界を挟む音のつながり／子音の連続における発音の簡略化
第 11 回	交替と挿入	語境界を挟む子音の同化／歯茎破裂音の挿入
第 12 回	地域的な音声変化	母音体系／声門音化／r の現れ方
第 13 回	総括	前回までの授業内容のまとめと考察
第 14 回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。

この授業では、10 回の課題が設けられている。この課題は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに応用力を伸ばすことを目的とする。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用して丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聴き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary* (third edition). London: Longman.

・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English* (8th edition). London: Routledge.

・BBC Learning English: Pronunciation Tips < <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/> >

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) を基準とし総合的に成績を評価する。

・授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題では、授業で学んだ基礎を進展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

授業中に課題へのフィードバックの時間が十分にとれなかったため、次年度は事前に音声教材を配信して、反転授業の形式を部分的に取り入れることを考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育

<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・Toyomi Takahashi (2008). Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). *Constraint interaction in Aranda stress*. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

Together with English Pronunciation B (English Pronunciation II), English Pronunciation A (English Pronunciation I) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

英語発音法 B

高橋 豊美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「英語発音法 A/B」・「英語発音法 I / II」の目的は、個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶことである。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

この「英語発音法 B」・「英語発音法 II」では、韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- ・音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。
- ・発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。
- ・発音記号を適切な発音で読むことができる。
- ・与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「英語発音法 B」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「英語発音法 II」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語（*Received Pronunciation*）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。

配付資料を使用して理論の解説を行い、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聞き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業案内/語・句強勢	授業概要/参考文献/強勢の音声的特徴/複合語と句の強勢
第 2 回	文強勢（理論）	強勢移動/文強勢の配置/韻脚
第 3 回	文強勢（実践）	文強勢モデルの記述と実践
第 4 回	イントネーション概説	イントネーションの形式と機能/音調アクセント
第 5 回	イントネーション理論 (1)：声調	イントネーション句の構成/核声調
第 6 回	イントネーション理論 (2)：調性	イントネーション句の機能
第 7 回	イントネーション理論 (3)：核配置	イントネーション句の焦点/核配置と焦点領域
第 8 回	イントネーション理論 (4)：音調曲線	イントネーション句の頭部と核声調の組合せ
第 9 回	イントネーションの意味 (1)：下降声調	下降声調の表す意味と用法
第 10 回	イントネーションの意味 (2)：非下降声調	非下降声調の表す意味と用法
第 11 回	イントネーションの連続	複文・重文の音調曲線/対照的な要素を含む文の音調曲線
第 12 回	イントネーションの定型	慣習的な音調曲線
第 13 回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践
第 14 回	展望	課題と試験の解説/韻律のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。この授業では、10 回の課題が設けられている。この課題は発音モデルの作成をおして知識の定着を図るとともに応用力を伸ばすことを目的とする。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用して丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聞き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
 ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
 ・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
 ・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み (35%)、課題 (35%)、試験 (30%) を基準とし総合的に成績を評価する。

・授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

授業中に課題へのフィードバックの時間が十分にとれなかったため、本年度は事前に音声教材を配信して、反転授業の形式を部分的に取り入れることを考えている。

【その他の重要事項】

この授業は「英語発音法 A」・「英語発音法 I」の内容を前提としている。「英語発音法 A」・「英語発音法 I」を履修していない場合は、授業が始まるまでに、参考書に挙げた Tench (2011) の Part 1 をよく読んで理解しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育

<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). *Constraint interaction in Aranda stress*. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

Together with English Pronunciation A (English Pronunciation I), English Pronunciation B (English Pronunciation II) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

BST500B3

英語表現演習 A

ニアル・ムルター

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Development of writing skills in English

【到達目標】

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

Using non-fiction articles, students will learn how to express ideas and opinions. Each week students will read and discuss a topic in class and then write a short report or essay outlining their reactions.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	Course outline
第2回	Text book outline	Background to text book content and author
第3回	Text book themes for academic writing	Reading of text book passages
第4回	Text book themes for literary writing	Summarizing text book passages
第5回	Developing ideas	Linking ideas from stories to experience
第6回	Thinking about your readers	The message you wish to convey
第7回	Organizing ideas	Sequencing of topics
第8回	Advanced topics	Writing style
第9回	Complex topics	Structure of essays
第10回	Academic subjects	Avoiding redundancy
第11回	News topics	Clarity and consistency
第12回	Essay topic selection	Generic or specific theme
第13回	Evaluation criteria	Impact and effect of writing
第14回	Conclusion	Summary of course

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will write short essays to be reviewed in class each week.

【テキスト（教科書）】

Articles will be provided in class.

【参考書】

Internet dictionary: <https://www.alc.co.jp/>

The Elements of Style, William Strunk, Jr., 50th Anniversary Edition, Pearson Longman, 2009

【成績評価の方法と基準】

Grades will be based on written essays to be submitted each week(100%). Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

【学生の意見等からの気づき】

Techniques for minimizing errors in written English will be explained. Discussions and student opinions are encouraged.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Ontologies and knowledge representation.

<研究テーマ>

Translation memory tools.

<主要研究業績>

Artificial Intelligence in Japan, Centre for AI Research, Oxford (UK), 1997.

【Outline and objectives】

The objective of the course is to enable students to polish their writing skills to a high level. Reference will be made to articles provided in class to enable improvement in writing structure and content.

BST500B3

英語表現演習 B

ニアル・ムルター

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Development of writing skills in English

【到達目標】

Students will learn to write clear and grammatically correct English with a high level of competency.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

Using non-fiction articles, students will learn how to express ideas and opinions. Each week students will read and discuss a topic in class and then write a short report or essay outlining their reactions.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	Course outline
第2回	Foundations of writing: structure	Introduction to selected writing structure
第3回	Foundations of writing: themes	Reading of selected writing themes
第4回	Foundations of writing: impact	Summarizing of selected writing impact
第5回	Developing ideas	Linking ideas from stories to experience
第6回	Thinking about your readers	Expectation fulfillment
第7回	Flow of narrative	Connecting paragraphs
第8回	Stylistic conventions	Keywords and phrases
第9回	Domains of discourse	Essay requirements
第10回	Application to general writing themes	Impact of essay
第11回	Application to academic writing themes	Constraints of academia
第12回	Application to novel writing themes	Free writing
第13回	Student essay	Evaluation: comparison with other writing
第14回	Conclusions	Ideas for future study

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will write short descriptions to be reviewed in class each week.

【テキスト（教科書）】

Articles will be provided in class.

【参考書】

Internet dictionary: <https://www.alc.co.jp/>

The Elements of Style, William Strunk, Jr., 50th Anniversary Edition, Pearson Longman, 2009

【成績評価の方法と基準】

Grades will be based on written essays (100%). Course credits will not be given where a student is absent three or more times in a semester without submitting a reason.

【学生の意見等からの気づき】

Techniques for minimizing errors in written English will be explained. Discussions and student opinions are encouraged.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

Ontologies and knowledge representation.

<研究テーマ>

Translation memory tools.

<主要研究業績>

Artificial Intelligence in Japan, Centre for AI Research, Oxford (UK), 1997.

Configuration Design Tool as a Customizable Web Service, International Journal of Knowledge-based Systems, (Elsevier), Vol. 8, No. 3, 2004.

【Outline and objectives】

The objective of the course is to enable students to polish their writing skills to a high level. Reference will be made to articles provided in class to enable improvement in writing structure and content.

LIT600B3

Fiction 演習 I A

宮川 雅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アメリカ小説に関する古典的研究や文学史の本を複数参照しながら、歴史的に正典とされてきた小説作品を読んで議論する。小説家 (novelist) の小説 (novel) だけでなく、短編小説 (short story) も考察の対象とする。のみならず思想的な背景の知識を探ることも必要となる。また、小説理論についての研究書もとりあげる。

<講義題目> アメリカ小説論研究

【到達目標】

アメリカ小説を歴史的・構造的に理解し、作品読解の力を身につける。前期 (春学期) の具体的目標として、アメリカ小説に則して――

- (1) novel と romance の対概念を理解している。
- (2) story と plot の対概念を理解している。
- (3) round character と flat character の対概念を理解している。
- (4) American gothic の特性について理解している。
- (5) the beautiful, the sublime, the picturesque の美学について歴史的に理解している。
- (6) 描出話法・中間話法について理解している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたなどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

本年度はアメリカ小説論の古典の一冊である *Leslie Fiedler, Love and Death in the American Novel, 2nd ed. (OUP, 1966)* を中心にして、フィードラーの議論を読み、とりあげられた作品を読み、あわせて議論を進める形式をとる。レポーター制だが、レポーター以外も作品と批評を読んで積極的に議論に参加することが求められる。同時に小説の諸相について短い講義をおこなって小説論の理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション： American fiction のリアリズム——現実とは何か	レポーターの担当を決められるだけ決める／辞書・レファレンス類についてのプリント配布
第2回	アメリカ小説のはじまり	感傷小説とゴシック小説
第3回	Charles Brockden Brown	Wieland ——アメリカン・ゴシックの誕生
第4回	James Fenimore Cooper	サブライムの美学とピクチャレスクの美学
第5回	Washington Irving	小説の枠構造と時間と語り
第6回	Edgar Allan Poe (1)	小説論
第7回	Nathaniel Hawthorne (1)	The Scarlet Letter
第8回	Nathaniel Hawthorne (2)	The Blithedale Romance
第9回	Edgar Allan Poe (2)	plot と story
第10回	Ralph Waldo Emerson	アメリカ的ロマン主義の思想的背景
第11回	Herman Melville (1)	Typee
第12回	Herman Melville (2)	Moby-Dick (1)
第13回	Herman Melville (3)	Moby-Dick (2)
第14回	まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書などを駆使した予習、ならびに参考論文・研究書・アメリカ文学作品の自主的な読み。

【テキスト（教科書）】

Charles Brockden Brown, *Wieland*
Edgar Allan Poe, *Tales of the Grotesque and Arabesque*
Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*; *The Blithedale Romance*
Herman Melville, *Moby-Dick*

【参考書】

Richard Chase, *The American Novel and Its Tradition* (OUP, 1957).
Charles Feidelson, *Symbolism and American Literature* (U of Chicago P, 1953)
Leslie Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (OUP, 1960; 1966).
D. H. Lawrence, *Studies in Classic American Literature* (1923).
E. M. Forster, *Aspects of the Novel* (1927).

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社, 2010）。

その他、教室で提示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント

「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生間の議論を、有意義なかたちで、いかに形づくることにいかに協力できるか、提案中。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神祕学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文学誌』47号 (2005年3月)：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号 (2005年3月)：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか?」(『法政大学文学部紀要』51号 (2005年9月)：1-13、「疑似科学と科学の境」(八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』(研究社、2009) 251-67.

【Outline and objectives】

This course attempts a historical survey of American novel through reading Leslie Fiedler's *Love and Death in the American Novel*. Attempting an exercise in synthesis, we will read and discuss and write, and comment on each other.

LIT600B3

Fiction 演習 I B

宮川 雅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アメリカ小説に関する古典的研究や文学史の本を複数参照しながら、歴史的に正典とされてきた小説作品を読んで議論する。小説家 (novelist) の小説 (novel) だけでなく、短篇小説 (short story) も考察の対象とする。のみならず思想的な背景の知識を探ることも必要となる。また、小説理論についての研究書もとりあげる。

<講義題目> アメリカ小説論研究

【到達目標】

アメリカ小説を歴史的・構造的に理解し、作品読解の力を身につける。後期(秋学期)の具体的目標として、アメリカ小説に則して――

- (1) 視点の概念を理解している。
- (2) 語りの枠構造を理解している。
- (3) 自然主義の意義を理解している。
- (4) 語りの技法を理解している。
- (5) 「意識の流れ」について知識を持つ。

<講義題目>

アメリカ小説論研究

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

本年度は *Leslie Fiedler, Love and Death in the American Novel, 2nd ed. (OUP, 1966)* を中心にして、フィードラーの議論を読み、とりあげられた作品を読み、あわせて議論を進める形式をとる。レポーター制だが、レポーター以外も作品と批評を読んで積極的に議論に参加することが求められる。同時に小説の諸相について短い講義をおこなって小説論の理解を深める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション： <i>American fiction</i> のリアリズム	南北戦争と小説のリアリズム
第2回	<i>Samuel Clemens</i>	国際 (international) テーマのはじまり
第3回	<i>Mark Twain (1)</i>	<i>Adventures of Huckleberry Finn</i>
第4回	<i>Mark Twain (2)</i>	<i>American vernacular</i> と小説の語り
第5回	<i>William Dean Howells</i>	<i>The Rise of Silas Lapham</i>
第6回	<i>Henry James (1)</i>	視点の問題
第7回	<i>Henry James (2)</i>	<i>The Portrait of a Lady</i> と幽霊小説
第8回	<i>Henry James (3)</i>	ホーソーンの <i>The Marble Faun</i> とロマンスの限界
第9回	<i>Frank Norris</i>	アメリカの自然主義 (1)
第10回	<i>Stephen Crane</i>	アメリカの自然主義 (2)
第11回	<i>F. Scott Fitzgerald</i>	<i>The Great Gatsby</i>
第12回	<i>William Faulkner (1)</i>	<i>The Sound and the Fury (1)</i>
第13回	<i>William Faulkner (2)</i>	<i>The Sound and the Fury (2)</i>
第14回	<i>Willa Cather</i> —— 「家具を取り払った小説」	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書などを駆使した予習、ならびに参考論文・研究書・アメリカ文学作品の自主的な読み。

【テキスト（教科書）】

Samuel Clemens, Adventures of Huckleberry Finn.

Henry James, The Portrait of a Lady.

Frank Norris, McTeague.

Stephen Crane, The Red Badge of Courage.

F. Scott Fitzgerald, The Great Gatsby.

William Faulkner, The Sound and the Fury.

【参考書】

Richard Chase, The American Novel and Its Tradition (OUP, 1957).

Charles Feidelson, Symbolism and American Literature (U of Chicago P, 1953)

Leslie Fiedler, Love and Death in the American Novel (OUP, 1960; 1966).

D. H. Lawrence, Studies in Classic American Literature (1923).

E. M. Forster, Aspects of the Novel (1927).

平石貴樹『アメリカ文学史』（松柏社, 2010).

その他、教室で提示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席を前提とした上での授業への積極的な参加度 70 パーセント、期末レポート 30 パーセント

「評価基準」：レポーター時の発表の内容とまとまり度と努力、非レポーター時の発言による参加の積極性、期末レポートの内容、以上を数値化して合計したうえで総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生間の議論を、有意義なかたちで、いかに形づくることにいかに協力できるか、提案中。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神祕学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond」におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文学誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Rip」の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】

This course attempts a historical survey of American novel through reading Leslie Fiedler's *Love and Death in the American Novel*.

LIT500B3

文学方法論 A

宮川 雅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テクストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】

英文学テクストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3作品の原文テクストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション： "Armed Vision" (S. Hyman)	いかにテクストにむかうか
第2回	テクストとは何か	テクスト概念の変容
第3回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第4回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第5回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第6回	フォルマリズム	形式主義的批評とテクスト分
第7回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第8回	文化人類学と文学	神話批評
第9回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第10回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第11回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第12回	注釈	釈義学から解釈学へ
第13回	その実践	レポーターによる発表と討論
第14回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

批評の対象となる作品テクストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, "Young Goodman Brown"
Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*
Shakespeare, *Hamlet*

W・L・ゲーリン 『文学批評入門』、青木健・日下洋右 訳、彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳 『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳 『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆 『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマル・セルデン、鈴木良平訳 『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一 『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか 『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度30パーセント、レポート40パーセント、試験30パーセントで総合的に評価す

【学生の意見等からの気づき】

本年度より担当

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond におけるピクチャレスクな意匠をめぐって」『英文學誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

LIT500B3

文学方法論 B

宮川 雅

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。Bの過半は学生自身の実践的発表と質疑が主となる。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	分析と解釈の実践（1）	イメージ、シンボル、アレゴリー
第2回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第3回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第4回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第5回	中間まとめ	中間報告の反省
第6回	ニューヒストリシズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980年代からの流れ
第7回	ポストコロニアリズム	プリント講読
第8回	フェミニズム批評	プリント講読
第9回	ジェンダー理論	プリント講読
第10回	ナラトロジー理論	プリント講読
第11回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第12回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第13回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第14回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, "Young Goodman Brown"

Samuel Clemens, Adventures of Huckleberry Finn

Shakespeare, Hamlet

W・L・ゲーリン 『文学批評入門』・青木健・日下洋右 訳 彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, The Art of Fiction, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳 『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳 『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆 『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマール・セルデン、鈴木良平訳 『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一 『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか 『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度30パーセント、レポート40パーセント、試験30パーセントで総合的に評価する

【学生の意見等からの気づき】

本年より担当。学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 『Ormond におけるピクチャレスクな意匠をめぐって』

『英文学誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）

第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての

覚え書（その二）』『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、

『Re: Rip の妻はいつ死んだのか？』（『法政大学文学部紀要』51号（2005年

9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・ア

ラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67。

LIN500B3

英語音声・応用研究 A

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

調音音声学の基礎を学ぶ。

【到達目標】

人と人とのコミュニケーションの主たる媒体である音声言語 (*spoken language*) がどのような仕組みで産出されるのかを理解し、音声学の基礎的な概念を習得することを本授業の目的とする。音声学の中でも特に調音音声学 (*articulatory phonetics*) に焦点を当てる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

言語音の調音の仕組み、言語音の表記方法、英語や日本語の母音・子音・リズム・イントネーション、音の素性などについて、順を追って理解を深めてゆく。欧米の音声学の授業などでは古典とされる *Peter Ladefoged* 著 *A Course in Phonetics* をテキストとし、受講者による担当箇所の発表および全員での内容の議論を中心に授業を進める予定。授業は以下の授業計画に沿って進める予定だが、受講生の要望などによって変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入、言語学と音声学	シラバスの説明、言語学における音声学の位置づけ
2	言語音とその調音	音声産出、音波、母音・子音の調音的記述、韻律
3	音声表記と音韻論	子音と母音の表記方法、音韻論
4	英語の子音	閉鎖音、摩擦音、鼻音、接近音、英語の子音異音変化規則
5	英語の母音	母音の表記法、母音の音色、聴覚的母音空間、二重母音、弱母音、緊張・弛緩母音など
6	分節音に関わる演習	<i>Praat</i> を使った分節音の分析
7	英語の語と文の特徴	連続音声の中の単語、強勢、リズム、イントネーション
8	呼気流と発声の仕組み	声門の状態、 <i>VOT</i>
9	子音の調音	調音動作の標的、調音動作の種類、調音様式
10	音響音声学	音源フィルタ理論、音響分析、子音の音響的特徴、スペクトログラムの見方
11	母音	基本母音、諸言語の母音、R音化母音、母音の鼻音化、半母音
12	音節と韻律	音節、強勢、長さ、タイミング、強勢・声調・ピッチアクセント言語
13	韻律に関わる演習	<i>Praat</i> を使った韻律の分析
14	言語学的音声学、総括	「個人」と「社会」の音声学、国際音声字母、素性階層、音声と記憶、授業のまとめと振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(1) 毎回指定範囲を読み、授業での討論に備えること、(2) 発表担当の場合、事前に発表用資料などを準備し、授業にてディスカッションをリードすること、(3) 学期中に 2-3 回出題される演習課題を行うこと。

【テキスト（教科書）】

以下をテキストとして使用する予定。

Ladefoged, P. & Johnson, K. (2010). A Course in Phonetics, international edition. Heinle.

【参考書】

参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40%、発表 40%、課題 20% の割合で評価する。指定範囲をよく読み、理解しておくことはもちろん、疑問点を考えたり、他の文献を調査したり、積極的な参加姿勢を特に重視する。原則として、出席が授業回数の 2/3 に満たない場合、発表を怠った場合、または演習課題を提出しなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート未実施につき該当なし

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 「音声分析ソフトウェア *Praat* を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御」『日本音響学会誌』, 67, 345-350.
田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). *Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basics of articulatory phonetics.

LIN500B3

英語音声・応用研究B

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

音響・聴覚音声学の基礎を学ぶ。

【到達目標】

音声言語がどのような特徴を持ち、人間がどのような仕組みで音声言語を産出・知覚するのかを理解し、音声学の基礎的な概念や研究スキルを習得することを本授業の目的とする。音声学の中でも特に音響音声学（*acoustic phonetics*）および聴覚音声学（*auditory phonetics*）に焦点を当てる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

音響学の基礎、音声をPC上で扱う際の基礎知識、聴覚と音声知覚、音声産出の音響理論、様々な母音や子音の音響的特徴などについて、順を追って理解を深めてゆく。音響音声学と聴覚音声学を扱うテキストとして *Keith Johnson* 著 *Acoustic and Auditory Phonetics* を用い、受講者による担当箇所の発表および全員での内容の議論を中心に授業を進める予定。授業の後半では、音声知覚実験を行うための知識やノウハウを実践的に学ぶ予定。授業は以下の授業計画に沿って進める予定だが、受講生の要望などによって変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入、調音音声学	シラバスの説明、調音音声学の復習
2	音響学の基礎とフィルタ	音の感覚、単純周期音、複合周期音、非周期音、音響フィルタ
3	音声のデジタル信号処理	デジタル信号とアナログ信号、標本化と量子化、様々な音声分析
4	聴覚の基礎	聴覚末梢系、ラウドネス、音声の聴覚的表象
5	音声知覚	音声知覚実験、知覚的距離と知覚的写像
6	音声産出と音響理論	有声化、声道フィルタ、母音フォルマント、LPC
7	母音	母音産出の音響管理論、摂動理論、音響的母音空間、言語間での母音知覚
8	摩擦音	乱流、摩擦音の調音点、摩擦音の知覚的次元
9	閉鎖音と破擦音	閉鎖音と破擦音の音源特性、閉鎖音の声道特性
10	鼻音と側音	帯域幅、鼻音、鼻音化、側音、鼻音の知覚
11	音声知覚実験	実験の概要、実験刺激の作成
12	知覚実験の実施	刺激提示の制御方法、実験要因計画法
13	実験データの分析と解釈	データの処理、記述統計と推測統計
14	発表の仕方、総括	研究のまとめ方、論文の書き方、授業のまとめと振り返り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(1) 毎回指定範囲を読み、授業での討論に備えること、(2) 発表担当の場合、事前に発表用資料などを準備し、授業にてディスカッションをリードすること、(3) 学期後半の実験課題を毎回段階的に行い実験プロジェクトを完成させること。

【テキスト（教科書）】

以下をテキストとして使用する予定。

Johnson, K. (2003). Acoustic and Auditory Phonetics. Malden, MA:Blackwell Publishing.

【参考書】

参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40%、発表 40%、課題 20%の割合で評価する。指定範囲をよく読み、理解しておくことはもちろん、疑問点を考えたり、他の文献を調査したり、積極的な参加姿勢を特に重視する。原則として、出席が授業回数の 2/3 に満たない場合、発表を怠った場合、または実験課題を提出しなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート未実施につき該当なし

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 「音声分析ソフトウェア *Praat* を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御」『日本音響学会誌』, 67, 345-350.
田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 「依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して」『法政大学文学部紀要』, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. Journal of the Acoustical Society of America, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basics of acoustic and auditory phonetics.

LIN600B3

理論言語学・認知科学 A

ブライアン・ウィスナー

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 *Second Language Acquisition*

【到達目標】

Through this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following:

1. *Explain the core issues in L2 acquisition research*
 2. *Examine the connection between L2 research and pedagogy*
- In addition to 1 and 2, doctoral students are expected to be able to do the following:*
3. *Conduct research on instructed L2 learning, and relate the findings to L2 learning and teaching in Japan*

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	<i>Introduction to the course</i>	<i>Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching</i>
第 2 回	<i>First language acquisition</i>	<i>How do people learn an L1?</i>
第 3 回	<i>Second language acquisition</i>	<i>How do adults learn an L2?</i>
第 4 回	<i>Age and L2 acquisition</i>	<i>How does age affect L2 acquisition?</i>
第 5 回	<i>Interaction in L2 classrooms</i>	<i>Does interaction lead to L2 acquisition?</i>
第 6 回	<i>Focus on form</i>	<i>Attending to meaning and form in L2 learning</i>
第 7 回	<i>Acquisition of L2 grammar</i>	<i>How is L2 grammar acquired?</i>
第 8 回	<i>Acquisition of L2 vocabulary</i>	<i>Issues related to L2 vocabulary acquisition</i>
第 9 回	<i>Contexts of instructed second language acquisition</i>	<i>In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?</i>
第 10 回	<i>Foreign language aptitude</i>	<i>Does language aptitude influence L2 learning?</i>
第 11 回	<i>Motivation</i>	<i>To what extent does motivation affect L2 learning?</i>
第 12 回	<i>Affect and other individual differences</i>	<i>What other variables play a role in L2 learning?</i>
第 13 回	<i>Research presentations</i>	<i>Research project presentations</i>
第 14 回	<i>Feedback on research presentations and final exam</i>	<i>Discussion of and feedback on students' research projects and final exam</i>

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト（教科書）】

Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2013). How languages are learned. Oxford University Press. Approximately 4,200 yen.

【参考書】

Shawn Loewen. (2015). Introduction to instructed second language acquisition. Routledge.
Lourdes Ortega. (2009). Understanding second language acquisition. Hodder Education.
Rod Ellis. (2008). The study of second language acquisition (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy (3rd edition). Longman.

H. Douglas Brown. (2006). Principles of language learning and teaching (5th edition). Longman.

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

*In-class presentations: 50%**Written report: 25%**Final exam: 25%*

< Doctoral Students >

*In-class presentations: 25%**Written report: 25%**Research proposal: 25%**Final exam: 25%*

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments and a final exam. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for missing an assignment (i.e., presentation, report, or test) or for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】

Students commented that they benefited from conducting research and preparing presentations on the course content. I plan to allot more time for students to reflect on the course content and to conduct research for their presentations.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』共著 2013 年 3 月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』共著 2012 年 8 月 研究社

LIN500B3

応用言語学・理論研究A

熊澤 孝昭

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は応用言語学で扱われているテーマに関連した学術論文を精読することと、その問題点等を議論することを主な目的とする。また、応用言語学で用いられている研究手法についても学習する。

【到達目標】

授業目標は次の3点である：1. 応用言語学の研究手法についての知識を得る。そして、実践を積む。2. 論文を読むスキルおよび理解するための知識を身につける。3. 論文の内容を発表することにより発表スキルを身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

担当者が研究手法についての講義を行う。そして、履修者は扱われた研究手法が用いられた論文を精読したうえで、その要旨等の発表を行う。その後、問題点などを議論することを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入と応用言語学とは	シラバス説明および講義
第2回	文法	文法とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第3回	語彙	語彙とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第4回	談話分析	談話分析とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第5回	語用論	語用論とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第6回	第二言語習得	第二言語習得とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第7回	心理言語学	心理言語学とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第8回	社会言語学	社会言語学とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第9回	学習者要因	学習者要因とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第10回	リスニング	リスニングとはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第11回	スピーキングと発音	スピーキングと発音とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第12回	リーディング	リーディングとはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第13回	ライティング	ライティングとはについて講義を行い、関連論文の発表を行う
第14回	評価	評価とはについて講義を行い、関連論文の発表を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定教科書および論文を読むこと。また、発表担当者はレジュメ作成等の準備をすること。

【テキスト（教科書）】

指定教科書：初回に知らせる。

指定論文は配布する。

【参考書】

適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

50点（平常点・発表）、50点（期末テスト）

【学生の意見等からの気づき】

履修生にとってためになる授業を提供できればと思う。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

応用言語学、英語教育学、言語テスト、第二言語習得

<研究テーマ>

応用言語学の分野でも特に英語教育学を専門とする。特に、第二言語習得の観点からみた動機付けや信条などの教育心理、教授法、および言語テストに興味がある。

<主要研究業績>

(2016). *Factors affecting multiple-choice cloze test score variance: A perspective from generalizability theory. International Journal of Language Studies, 10.*

(2013). 「英語教育学の量的研究で用いられる統計について」. 『コンピュータ&エデュケーション』, 34.

(2013). 「学内開発ブレイスメントテスト得点解釈と使用の妥当性の評価について」. *JALT Journal, 35.*

(2011). *Systematic criterion-referenced test development in an English-language program. (Doctoral Dissertation).*

(2010). 「多肢選択式項目の項目形式が文法テストパフォーマンスに与える影響について」. *JALT Journal, 32.*

(2009). *Revision of a criterion-referenced vocabulary test using generalizability theory. JALT Journal, 31.*

【Outline and objectives】

本科目の目的は以下の通りとする。

- ・学術論文を精読することによって、自らのテーマについての理解を深めることができる。
- ・研究手法について理解し、さらに実際に用いることによって実践を積むことができる。

LIN500B3

応用言語学・理論研究B

熊澤 孝昭

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は応用言語学で扱われているテーマに関連した学術論文を精読することと、その問題点を議論することを主な目的とする。また、応用言語学で用いられている研究手法についても学習する。

【到達目標】

到達目標は次の3点である：1. 応用言語学の研究手法についての知識を得る。そして、実践を積む。2. 論文を読むスキルおよび理解するための知識を身につける。3. 論文の内容を発表することにより発表スキルを身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

担当者が研究手法についての講義を行う。そして、履修者は扱われた研究手法が用いられた論文を精読したうえで、その要旨等の発表を行う。その後、問題点などを議論することを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入（シラバス説明等）	シラバスおよび授業運営について説明を行う
第2回	学習方略	関連論文についての発表および議論を行う
第3回	学習信条	関連論文についての発表および議論を行う
第4回	評価	関連論文についての発表および議論を行う
第5回	教材	関連論文についての発表および議論を行う
第6回	教授法	関連論文についての発表および議論を行う
第7回	リーディング	関連論文についての発表および議論を行う
第8回	リスニング	関連論文についての発表および議論を行う
第9回	ライティング	関連論文についての発表および議論を行う
第10回	スピーキング	関連論文についての発表および議論を行う
第11回	文法	関連論文についての発表および議論を行う
第12回	語彙	関連論文についての発表および議論を行う
第13回	発音	関連論文についての発表および議論を行う
第14回	まとめ	到達度合いを確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定教科書および論文を精読する

【テキスト（教科書）】

指定教科書は第1回目目知らせる。指定論文は配布する。

【参考書】

適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表、参加度合い）50%、試験50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 応用言語学

<研究テーマ> SLA, Languange Testing, TESOL

<主要研究業績>

【Outline and objectives】

授業目標は次の3点である：1. 応用言語学の研究手法についての知識を得る。そして、実践を積む。2. 論文を読むスキルおよび理解するための知識を身につける。3. 論文の内容を発表することにより発表スキルを身につける。

LIN500B3

言語科学方法論A

石川 潔

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。
・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
・実験設計およびデータの統計処理
<講義題目> 言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようになること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「言語科学方法論A」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「行動科学方法論I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義および（パソコン）実習

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること
第4回	統計学の必要性	注目していない要因の効果の除去
第5回	統計学的検定の基本1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel, ANOVA4, SPSS, R, etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t検定（その1）	被験者間要因の場合
第11回	t検定（その2）	1サンプルのt検定
第12回	t検定（その3）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。わからない箇所は教員や周囲に質問すること。
また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つけなおして見ること。

【テキスト（教科書）】

授業支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.

大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.

Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology.*

(6th ed.) Wadsworth.

Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS.* Sage.

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data.* Cambridge University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100%

【学生の意見等からの気づき】

「有益な内容なので履修してよかった」と言っていただけなのは、授業の設置趣旨から言ってもありがたかったです。理解度をもっと上げられるように頑張ります。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムには、自分が普段アクセスするメールアドレスを登録しておくこと。

【その他の重要事項】

この授業は英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An introduction to research methodology in linguistic sciences, covering:

- Scientific construction and evaluation of theories
- Experimental design and statistical data analysis

LIN500B3

言語科学方法論 B

ブライアン・ウィスナー

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 *Research Methods in the Linguistic Sciences*

【到達目標】

Through this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, SPSS, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

Additionally, doctoral students are expected to be able to design a research study, collect data, and report the results of statistical analyses.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第 2 回	Variables & levels of measurement	Classification and measurement of variables
第 3 回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第 4 回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第 5 回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第 6 回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第 7 回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第 8 回	Multiple regression	Calculating and interpreting multiple regression
第 9 回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test and an independent samples t-test
第 10 回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第 11 回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第 12 回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第 13 回	Factor analysis	Background of factor analysis
第 14 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course. Course materials will be distributed in class or online through H'etudes.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2010). A guide to doing statistics in second language research using SPSS. Routledge.

Andy Field. (2013). Discovering statistics using SPSS (4th edition). Sage.

Fred L. Perry, Jr. (2011). *Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer*. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

< Doctoral Students >

Presentations: 25%; Research Report: 25%; Final Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Doctoral students will also submit a research report. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Class time will be allotted for the analysis and discussion of students' research projects.

【その他の重要事項】

Students should have already taken 言語科学方法論 A or an equivalent course.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・『MY WAY: English Communication I』共著 2013年3月 三省堂

・『MY WAY: English Expression I』共著 2013年3月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』共著 2012年8月 研究社

PSY500B3

音声言語科学特論

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語学の基礎を学ぶ。

【到達目標】

母語話者として言葉を操るには、その言語の音（音声学、音韻論）、語彙（形態論）、文の作り方（統語論）、語句の意味（意味論）、他者との対話の中の言葉づかい（語用論）など、様々な知識が必要である。この言語知識を科学的な観点から追究する言語学の諸分野について、基礎概念を学び、問題を解く能力を身に付けることを本授業の目標とする。授業では言語学を初めて学ぶ学生を想定しているが、受講生の既有知識に応じて進度を適宜調整する。授業終了時には、言語に関する様々な現象や疑問について吟味・解決できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「音声言語科学特論」においては「DP1」「DP2」に関連、心理学専攻「音声言語科学特論」においては「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連する。

【授業の進め方と方法】

人間に特有の能力とされる言語がどのような原理によって成立しているのかを科学的に追究する言語学について概観する。言語学の諸分野の中でも音声学、音韻論、形態論、統語論の中から適宜重要なトピックを取り上げる予定である。日本語や英語などの諸言語から様々な具体例を検討し、問題を実際に解く作業を通して、言語学の基礎概念や分析方法を身に付ける。また、音声学分野で広く利用されているフリーソフト *Praat* の実習を行う。授業は、教員による講義と、出題された問題に対する回答についての討論とを織り交ぜながら進める予定である。授業後半では、言語に関係する学術論文を学生が自ら選定し、その内容を授業にて発表する機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入、言語と言語学	シラバスの説明、言語学とは？、言語学の諸分野、二種類の言語
2	形態論：形態素、語形成	心内辞書と一般辞書、形態論と形態素、形態素の種類、偶発的な語形成、少し規則的な語形成
3	形態論：複合、派生	主要部、複合語の種類、複合語の意味、派生語の樹形図
4	形態論：屈折、形態素解析	屈折と活用、形態素解析の方法、練習問題
5	統語論：導入、カテゴリー、意味役割、マージ	構成素、句構造、句の主要部、文を作り上げるための材料：カテゴリー、項と意味役割、文を組み立てる仕組み：マージ、様々な種類の句
6	統語論：文の組み立て	英語の文・日本語の文の組み立て、動詞句の組み立て、屈折辞と格、一般的な句の構造
7	統語論：補文	動詞句の拡張、補部と指定部、文の中の文＝補文
8	音声学・音韻論：母音と子音	発話のメカニズム、母音、子音
9	音声学・音韻論：音素	音素、音素分析
10	実験音声学：音声分析	<i>Praat</i> を使った音声の録音・可視化・編集・分析・ラベリング
11	実験音声学：音声合成	<i>Praat</i> を使った音声の再合成
12	実験音声学：音声知覚	<i>Praat</i> を使った音声知覚実験
13	論文発表 (1)	言語に関わる学術論文の発表
14	論文発表 (2)、総括	言語に関わる学術論文の発表、授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(1) 毎回、テキストの指定範囲を読み、課題に取り組み、次回の授業で議論をするための準備をすること。(2) 学期の後半では言語に関わる学術論文を各自選定し、学期末にその内容について発表すること。

【テキスト（教科書）】

以下の文献の一部を授業で使用する予定。

西光義弘（編集）（1999）. 日英語対照による英語学概論：増補版 くろしお出版.

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 音声学を学ぶ人のための *Praat* 入門 ひつじ書房.

【参考書】

参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 35%、課題 30%、発表 35%の割合で評価する。言語学は知識の段階的な学習とともに、問題を解く能力の習得が求められるので、出席と課題を重視する。原則として、出席・課題の提出が授業回数の 2/3 に満たない場合、または論文発表を行わなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2018 年度春学期は、回答者 4 名全員が「履修してよかったか」「工夫されていたか」「理解できたか」という間に「4」か「5」で回答してくれました。授業外学習時間については「週 1~2 時間」が 2 名、「週 2~3 時間」が 2 名でした。コメント欄への記入はあまりありませんでしたが、「Praat の使い方が身につけてよかった」という感想をいただきました。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 音声分析ソフトウェア Praat を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.

田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. Journal of the Acoustical Society of America, 123:397-413.

【Outline and objectives】

This course introduces students to the fundamentals of linguistics.

PSY500B3

音声言語科学演習

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間は言語を「話す」または「聞く」能力を 3-4 歳までにある程度習得するが、「読む」または「書く」能力はより時間と労力を要する。また、人間同様に流暢に会話ができるコンピュータは未だ完成していない。これはなぜだろうか？ 本授業ではこのような疑問を出発点に、音声言語の認知処理過程について学ぶ。

【到達目標】

音声言語が話し手にどのように産出され、音としてどのような特徴を持ち、聞き手にどのように知覚されるのかについて、説明できるようになることが目標である。また、音声分析ソフトを使って音声言語の特徴を分析できるようになることも目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「音声言語科学演習」においては「DP1」「DP2」に関連、心理学専攻「音声言語科学演習」においては「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連する。

【授業の進め方と方法】

音声言語の発話と知覚の仕組み、音声の物理的な特徴、乳幼児による母国語の知覚能力の発達、成人による外国語音声の学習などについて、言語心理学や音声学の知見を学ぶ。授業は基本的に講義形式で行うが、音声分析ソフト Praat を使った課題や演習を盛り込む予定である。授業の内容や進め方については受講生の人数や理解度・要望に応じて変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes**【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】**

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、音声言語と文字言語、「言葉の鎖」
2	音声とは	音声の現実性と速さ、音声産出のメカニズム、母音と子音
3	音響音声学の基礎 (1)	音の正体、音の種類、音を可視化する方法、音声のデジタル化
4	音声の音響分析	Praat を使った音声の録音・可視化・編集・分析
5	音響音声学の基礎 (2)	フィルタ、音声産出の音源フィルタ理論、基本周波数、フォルマント周波数
6	母音の知覚	聴覚器官、母音の特徴と知覚、母音の正規化
7	子音の知覚 (1)	音響的不変性の欠如、ローカス理論、音声の符号化
8	音声の再合成	Praat を使った音声の録音・分析・再合成
9	子音の知覚 (2)、カテゴリー知覚	調音点の知覚、声の有無の知覚、分節音と韻律、カテゴリー知覚とは、同定と弁別
10	音声知覚の実験	同定課題と弁別課題の演習
11	音声知覚の発達	生得と学習、乳児の音声知覚、満 1 歳までに起こる変化
12	外国語の音声知覚	成人による外国語音の学習、知覚と産出の関係、外国語音の知覚的同化
13	文脈の影響	トップダウン処理とボトムアップ処理、音声知覚と単語認知のモデル
14	音声知覚言語と社会的認知、総括	話し方と対人認知の関係、授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業にて指示されたテキストの範囲を読み、復習問題に回答し、次の授業にて提出すること。また、音声分析用フリーソフト Praat を使った課題を学期中に数回課すので、課題を行い成果を提出すること。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

ジャック・ライアルズ (著)、今富撰子他 (訳) (2003). 音声知覚の基礎 海文堂、石川圭一 (2005). ことばと心理 くろしお出版。

川崎恵里子 (編著) (2005). ことばの実験室 プレーン出版。

重野 純 (2003) 「音の世界の心理学」ナカニシヤ出版。

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳 (2017). 音声学を学ぶ人のための Praat 入門 ひつじ書房。

【成績評価の方法と基準】

平常点 20%、課題 40%、期末レポート 40%の割合で評価する予定。原則として、出席が授業の 2/3 に満たない場合、期末レポートの提出がなかった場合、あるいは *Praat* を使った課題の提出がなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2017 年度秋学期は、「積極的な工夫がされていた」「理解できた」「受講してよかった」のいずれも 2 名とも「5」と回答してくれ、大変嬉しく思います。授業外学習の時間は 2 名とも「週 2 時間以上 3 時間未満」という回答でした。自由記述はありませんでした。

【その他の重要事項】

授業の内容や運営方法の詳細について説明しますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学
<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 音声分析ソフトウェア *Praat* を用いた聴取実験：*F0* 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123.397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn about the cognitive mechanisms that underlie the processing of spoken language.

LIT500B3

比較文学研究 A

山下 敦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> “世界文学”をめぐると考察
近年において音楽における“ワールド・ミュージック”観念の文学版として成立した“世界文学”とは、いかなる概念であるのかをまず把握する。そして、地球規模に広範な文学作品を受容するために把握すべき様々な心得を見出す。また、多くの地域で成立した文学作品に共通する背景及び構造の基本型を把握する方法を考察し、実例としての作品の講読を通じてそれらを確認する試みを行なう。

【到達目標】

この授業は、英語圏を含む外国の文学を世界文学という観点から読み解き、文学を通じて様々な国・地域のもつ文化の多様性を理解する能力を育成することを目的とする。そのために、文学作品を解釈するために知るべき基礎的な考察の方法と、実際の解釈の仕方について、実例の精読とともに学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「比較文学研究 A」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「西欧比較文学 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業開始時に受講生間で担当を決めて、担当はその箇所の内容の正確な理解に努め、レジュメとともに報告をする。受講生は各自の理解に基づいて互いに検討を加える。その上で、著者の思考をより包括的に理解する。なお、扱うテキストは日本語訳による。いわば教員・受講者の協同作業を通じた日本語による立体的な“読書”を試みる。

なお授業全体の把握と理解のために比較文学研究 A・B を通年で履修することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes**【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No****【授業計画】****春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキストの紹介とテーマ、授業の進め方についての説明
第 2 回	世界文学の概念	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』の紹介
第 3 回	世界文学と流通	『ギルガメシュ叙事詩』をめぐると考察
第 4 回	世界文学と翻訳	メヒティルト『神性の流れる光』をめぐると考察
第 5 回	世界文学と生産	パヴィイチ『ハザール事典』をめぐると考察
第 6 回	世界文学と 21 世紀	ダムロッシュ講演録
第 7 回	外国文学の読み方	神話・聖書・童話
第 8 回	英語文学読解のヒント 1	シェイクスピア劇の影
第 9 回	英語文学読解のヒント 2	洗礼・水と死と再生
第 10 回	世界文学に関する論のあり方	[対談] 世界は文学でできている
第 11 回	世界文学を読んでみる 1	受講生による世界文学作品解釈 1
第 12 回	世界文学を読んでみる 2	受講生による世界文学作品解釈 2
第 13 回	世界文学を読んでみる 3	受講生による世界文学作品解釈 3
第 14 回	まとめ	受講生による解釈の検討と反省

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に扱うテキストを熟読し、内容を把握した上で、それぞれが自身の理解を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』国書刊行会
トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』白水社
沼野充義『世界は文学でできている』光文社
辻原登『東京大学で世界文学を学ぶ』集英社文庫

【成績評価の方法と基準】

授業中の参加の度合い (30%) と期末レポート (70%) による

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ドイツ語圏の文学と芸術
<研究テーマ> 世紀転換期ウィーンの文化
<主要研究業績> 「アドルフ・ロースの感性 — ウィーン世紀末建築家の内包した現代感覚と装飾 - 付: 《翻訳》アドルフ・ロース『装飾と犯罪』」(共立女子大学総合文化研究所神田分室『研究叢書』2001 年 2 月)

【Outline and objectives】

The students study the “world literature”. We read the several chapters of David Damrosch *What is world literature? intensively to understand this concept “world literature”, and then discuss about the thema, how to accept the foreign literatures in translation. The purpose of the class is to understand the diversity of the world-cultures through literary works.*

LIT500B3

比較文学研究 B

山下 敦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> “世界文学”をめぐるとの考察

“世界文学”とはいかなる概念であるのかをまず把握し、翻訳によって出会う文学への対処と意義を考察する。そして、広範な文学作品を受容するための心得を見出し、多くの地域で成立した文学作品に共通する背景及び構造の基本型を把握する方法を考察する。その後、実例としての作品の講読を通じてそれらを確認する試みを行なう。

【到達目標】

この授業は、英語圏を含む外国の文学を世界文学という観点から読み解き、文学を通じて様々な国・地域のもつ文化の多様性を理解する能力を育成することを目的とする。そのために、文学作品を解釈するために知るべき基礎的な考察の方法と、実際の解釈の仕方について、実例の精読とともに学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「比較文学研究 B」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「西欧比較文学Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業開始時に受講生間で担当を決めて、担当者はその箇所の内容の正確な理解に努め、レジュメとともに報告をする。受講生は各自の理解に基づいて互いに検討を加える。その上で、著者の思考をより包括的に理解する。なお、扱うテキストは日本語訳による。いわば教員・受講者の協同作業を通じて日本語による立体的な“読書”を試みる。
なお授業全体の把握と理解のために比較文学研究 A・B を通年で履修することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方についての説明
第 2 回	翻訳文学の時間と空間	ダムロッシュ「ありあまるほどの世界と時間」
第 3 回	世界文学と流通	カノンの拡大
第 4 回	世界文学と翻訳	カフカの変容
第 5 回	世界文学と生産	世界の中の英語
第 6 回	外国文学の読み方 1	リービ英雄 × 沼野充義：越境文学の冒険
第 7 回	外国文学の読み方 2	リービ英雄『ヘンリー たけし レウィツキーの夏の紀行』
第 8 回	英語文学読解のヒント 1	地理・南・季節
第 9 回	英語文学読解のヒント 2	階級・アイロニー
第 10 回	世界文学に関する論	多和田葉子『エクソフォニー』
第 11 回	世界文学を読んでみる 1	受講生による世界文学解釈 1
第 12 回	世界文学を読んでみる 2	受講生による世界文学解釈 2
第 13 回	世界文学を読んでみる 3	受講生による世界文学解釈 3
第 14 回	まとめ	受講生による解釈の検討と反省

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に扱うテキストを熟読し、内容を把握した上で、それぞれが自身の理解を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

未定

【参考書】

デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』国書刊行会
トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』白水社
沼野充義『世界は文学でできている』光文社
辻原登『東京大学で世界文学を学ぶ』集英社文庫
多和田葉子『エクソフォニー』岩波書店

【成績評価の方法と基準】

授業中の参加の度合い（30%）と期末レポート（70%）による

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ドイツ語圏の文学と芸術

<研究テーマ> 世紀末ウィーンの文化

<主要研究業績> 「アドルフ・ロースの感性 — ウィーン世紀末建築家の内包した現代感覚と装飾 - 付:《翻訳》アドルフ・ロース『装飾と犯罪』」(共立女子大学総合文化研究所神田分室『研究叢書』2001年2月)

【Outline and objectives】

The students study the “world literature”. We read the several chapters of David Damrosch *What is world literature? intensively to understand this concept “world literature”, and then discuss about the thema, how to accept the foreign literatures in translation. The purpose of the class is to understand the diversity of the world-cultures through literary works.*

LIN500B3

Academic English (Effective Writing) A

安部 義治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセイが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセイを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセイを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	<i>Skills and Strategies(1): Identifying Main Ideas</i>	問題演習
第2回	<i>The State of the World's Health: Reading</i>	問題演習
第3回	<i>The State of the World's Health: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第4回	<i>Changing Attitudes Toward Cardiovascular Disease: Reading</i>	問題演習
第5回	<i>Changing Attitudes Toward Cardiovascular Disease: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第6回	<i>Skills and Strategies(2): Cause and Effect</i>	問題演習
第7回	<i>Medicine and Genetic Research: Reading</i>	問題演習
第8回	<i>Medicine and Genetic Research: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第9回	<i>Malaria: Portrait of a Disease: Reading</i>	問題演習
第10回	<i>Malaria: Portrait of a Disease: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第11回	<i>Skills and Strategies(3): Managing Unknown Vocabulary</i>	問題演習
第12回	<i>The Health Care Divide: Reading</i>	問題演習
第13回	<i>The Challenge of Diversity: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第14回	<i>Making Connections</i>	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あるトピックに関するエッセイを各ユニット毎に書いてきてもらう。

【テキスト（教科書）】

Pakenham, Kenneth, et al. Making Connections 3. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>第二言語習得、TESOL

<研究テーマ>第二言語学習者による項構造の習得

<主要研究業績>日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月 *Second Language. vol.9, pp.19-48.*

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinion through a short essay and presentation.

LIN500B3

Academic English (Effective Writing) B

安部 義治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセイが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセイを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセイを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	<i>Skills and Strategies(4): Continuing Ideas</i>	問題演習
第2回	<i>The Age of Immigration: Reading</i>	問題演習
第3回	<i>The Age of Immigration: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第4回	<i>Who are Today's Immigrants?: Reading</i>	問題演習
第5回	<i>Who are Today's Immigrants?: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第6回	<i>Skills and Strategies(5): Point of View</i>	問題演習
第7回	<i>The Meeting of Cultures: Reading</i>	問題演習
第8回	<i>The Meeting of Cultures: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第9回	<i>One World: One Culture?: Reading</i>	問題演習
第10回	<i>One World: One Culture?: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第11回	<i>Skills and Strategies(6): Reduced Relative Clauses</i>	問題演習
第12回	<i>The Challenge of Diversity: Reading</i>	問題演習
第13回	<i>The Challenge of Diversity: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第14回	<i>Making Connections</i>	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あるトピックに関するエッセイを各ユニット毎に書いてきてもらう。

【テキスト（教科書）】

Pakenham, Kenneth, et al. Making Connections 3. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>第二言語習得、TESOL

<研究テーマ>第二言語学習者による項構造の習得

<主要研究業績>日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月

Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinion through a short essay and presentation.

LIN500B3

Academic English (Oral Presentation) A

安部 義治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセーが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセーを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセーを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	<i>Skills and Strategies(7): Identifying the Thesis of a Reading</i>	問題演習
第2回	<i>When Does Language Learning Begin?: Reading</i>	問題演習
第3回	<i>When Does Language Learning Begin?: Discussion</i>	エッセー、プレゼンテーション
第4回	<i>Learning a Language as an Adult: Reading</i>	問題演習
第5回	<i>Learning a Language as an Adult: Discussion</i>	エッセー、プレゼンテーション
第6回	<i>Skills and Strategies(8): Definition and Classification</i>	問題演習
第7回	<i>Rules of Speaking: Reading</i>	問題演習
第8回	<i>Rules of Speaking: Discussion</i>	エッセー、プレゼンテーション
第9回	<i>Languages in Contact: Reading</i>	問題演習
第10回	<i>Languages in Contact: Discussion</i>	エッセー、プレゼンテーション
第11回	<i>Skills and Strategies(9): Passive sentences</i>	問題演習
第12回	<i>The Advantages of Multilingualism: Reading</i>	問題演習
第13回	<i>The Advantages of Multilingualism: Discussion</i>	エッセー、プレゼンテーション
第14回	<i>Making Connections</i>	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あるトピックに関するエッセーを各ユニット毎に書いてきてもらう。

【テキスト（教科書）】

Pakenham, Kenneth, et al. Making Connections 3. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>第二言語習得、TESOL

<研究テーマ>第二言語学習者による項構造の習得

＜主要研究業績＞日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について－有標性と転移の問題に関する考察－. 2010年12月
Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinion through a short essay and presentation.

LIN500B3

Academic English (Oral Presentation) B

安部 義治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

様々なトピックについて書かれた読み物を読み、そのトピックに関する背景知識や問題意識を持ったうえで、自分なりの考えを文章にして、それを下地に簡単なプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

英米圏の大学で必要とされる英語レベルでエッセイが書けるようになることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

ユニット前半の授業ではテキスト中の英文を読み、問題演習を行う。宿題として、指定されたトピックについてのエッセイを書いてもらう。ユニット後半の授業では宿題で書いてきたエッセイを教員と共に推敲し、出来上がった原稿をもとにプレゼンテーションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	<i>Skills and Strategies(10): Problem-Solution Texts</i>	問題演習
第2回	<i>Ecology, Overpopulation, and Economic Development: Reading</i>	問題演習
第3回	<i>Ecology, Overpopulation, and Economic Development: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第4回	<i>The Aral Sea: An Environmental Crisis: Reading</i>	問題演習
第5回	<i>The Aral Sea: An Environmental Crisis: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第6回	<i>Skills and Strategies(11): Graphic Material</i>	問題演習
第7回	<i>Biodiversity and Tropical Rainforests: Reading</i>	問題演習
第8回	<i>Biodiversity and Tropical Rainforests: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第9回	<i>The Water Crisis: Reading</i>	問題演習
第10回	<i>The Water Crisis: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第11回	<i>Skills and Strategies(12): Nominalization in Subjects</i>	問題演習
第12回	<i>Managing Earth's Greenhouse: Reading</i>	問題演習
第13回	<i>Managing Earth's Greenhouse: Discussion</i>	エッセイ、プレゼンテーション
第14回	<i>Making Connections</i>	問題演習

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あるトピックに関するエッセイを各ユニット毎に書いてきてもらう。

【テキスト（教科書）】

Pakenham, Kenneth, et al. Making Connections 3. CUP, 2013.

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

偶数回の授業で行うプレゼンテーション (50%) と授業での貢献度 (50%) で評価する

【学生の意見等からの気づき】

読解力をもう少し身につけたいという受講者が意外に多いので、その点に配慮する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>第二言語習得、TESOL
 <研究テーマ>第二言語学習者による項構造の習得
 <主要研究業績>日本人英語学習者による英語の所格動詞の習得について - 有標性と転移の問題に関する考察 - 2010年12月
Second Language. vol.9, pp.19-48.

【Outline and objectives】

Students are expected to read texts written on a wide variety of topics. It is also expected that they are to express their own opinion through a short essay and presentation.

LIT500B3

文学方法論特講 A

宮川 雅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション： "Armed Vision" (S. Hyman)	いかにテキストにむかうか
第2回	テキストとは何か	テキスト概念の変容
第3回	テクスチュアル・クリティシズム	本文校訂または批評以前の批評
第4回	印象批評とは何か	作家・作品・読者の三角形
第5回	印象批評の実践	レポーターによる発表と討論
第6回	フォルマリズム	形式主義的批評とテキスト分
第7回	フォルマリズム批評の実践	レポーターによる発表と討論
第8回	文化人類学と文学	神話批評
第9回	神話批評の実践	レポーターによる発表と討論
第10回	文学と心理分析	フロイト、ユング、その後
第11回	精神分析批評の実践	レポーターによる発表と討論
第12回	注釈	釈義学から解釈学へ
第13回	その実践	レポーターによる発表と討論
第14回	ディコンストラクションからニューヒストリシズムへ	前期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

批評の対象となる作品テキストを読み進めること。自身の研究を進めて、批評理論の応用を考えること。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, "Young Goodman Brown"
 Samuel Clemens, *Adventures of Huckleberry Finn*
 Shakespeare, *Hamlet*

W・L・ゲーリン『文学批評入門』青木健・日下洋右訳 彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマール・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度30パーセント、レポート40パーセント、試験30パーセントで総合的に評価す

【学生の意見等からの気づき】

本年度より担当

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 <研究テーマ>
 <主要研究業績>

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

LIT500B3

文学方法論特講 B

宮川 雅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

リサーチのツールの知識を得るとともに、批評理論について歴史的に概観する。具体的な英米の文学テキストを素材として、どのようなアプローチが可能であるか、実践例を研究し、意見を交換しながら、意義と限界を検討する。Bの過半は学生自身の実践的発表と質疑が主となる。

【到達目標】

英文学テキストへの多様なアプローチを理解し、自身の研究テーマへの応用を試みる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

プリントを使用して批評理論について学ぶ。3作品の原文テキストを各自用意して読み進めるとともに、批評理論を3作品に応用したプリントを読む。各自の研究テーマを応用し、意見交換する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	分析と解釈の実践（1）	イメージ、シンボル、アレゴリー
第2回	分析と解釈の実践（2）	比喩と脱比喩
第3回	分析と解釈の実践（3）	プロットの構築
第4回	分析と解釈の実践（4）	キャラクター分析
第5回	中間まとめ	中間報告の反省
第6回	ニューヒストリズムからカルチュラル・スタディーズへ	1980年代からの流れ
第7回	ポストコロニアリズム	プリント講読
第8回	フェミニズム批評	プリント講読
第9回	ジェンダー理論	プリント講読
第10回	ナラトロジー理論	プリント講読
第11回	分析と解釈の実践（5）	視点と声
第12回	分析と解釈の実践（6）	ナラトロジー
第13回	分析と解釈の実践（7）	ソース・スタディー
第14回	総まとめ	まとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの下調べ。自身の研究テーマの探求。

【テキスト（教科書）】

Nathaniel Hawthorne, "Young Goodman Brown"
Samuel Clemens, Adventures of Huckleberry Finn
Shakespeare, Hamlet

W・L・ゲーリン『文学批評入門』青木健・日下洋右訳 彩流社、1986 ならびにその後の原書の改訂版プリント

David Lodge, *The Art of Fiction*, rev. ed. Penguin Books, 1992

【参考書】

テリー・イーグルトン、大橋洋一訳『文学とは何か——現代批評理論への招待』（岩波書店、1985）

フレドリック・ジェイムソン、大橋洋一ほか訳『政治的無意識——社会的象徴行為としての物語』（平凡社、1989）

筒井康隆『文学部唯野教授』（岩波書店、1990）

ラマル・セルデン、鈴木良平訳『現代の文学批評——理論と実践』（彩流社、1994）

大橋洋一『新文学入門』（岩波書店、1995）

丹治愛ほか『知の教科書 批評理論』（講談社選書メチエ、2003）

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度30パーセント、レポート40パーセント、試験30パーセントで総合的に評価する

【学生の意見等からの気づき】

本年より担当。学生の積極的な参加を促せるようにつとめたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【Outline and objectives】

Students learn various approaches to literary text. We will read a short story, a novel, and a drama, and read critical approaches applied to them.

LIN500B3

言語科学方法論特講 A

石川 潔

【Outline and objectives】

An introduction to research methodology in linguistic sciences, covering:
 - Scientific construction and evaluation of theories
 - Experimental design and statistical data analysis

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。
 ・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法
 ・実験設計およびデータの統計処理
 <講義題目>言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようになること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義および（パソコン）実習

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること
第4回	統計学の必要性	注目していない要因の効果の除去
第5回	統計学的検定の基本1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel, ANOVA, SPSS, R, etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t検定（その1）	被験者間要因の場合
第11回	t検定（その2）	1サンプルのt検定
第12回	t検定（その3）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。わからない箇所は教員や周囲に質問すること。
 また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしてみる。

【テキスト（教科書）】

授業支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.

大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.

Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology.* (6th ed.) Wadsworth.

Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS.* Sage.

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data.* Cambridge University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100 %

【学生の意見等からの気づき】

「有益な内容なので履修してよかった」と言っていただけなのは、授業の設置趣旨から言ってもありがたかったです。理解度をもっと上げられるように頑張ります。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムには、自分が普段アクセスするメールアドレスを登録しておくこと。

【その他の重要事項】

この授業は英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

LIN500B3

言語科学方法論特講 B

ブライアン・ウィスナー

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This course examines the role of research methods and statistics in the linguistic sciences.

<講義題目>

言語科学の研究に必要な方法論の修得 *Research Methods in the Linguistic Sciences*

【到達目標】

Through this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following: (a) define and describe quantitative research methods commonly used in the linguistic sciences; (b) perform statistical analyses using Excel, SPSS, and R; (c) input data and apply an appropriate method of analysis; and (d) report the results of statistical analyses in APA format.

Additionally, doctoral students are expected to be able to design a research study, collect data, and report the results of statistical analyses.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions and lectures on research methods and statistical analyses. Time will be allotted for students to perform statistical analyses in the computer lab. The course content and examples presented in class will focus on general topics and second language research. This course is conducted in English.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Research methods in the linguistic sciences	Introduction to why research is conducted and the concepts covered in this course
第 2 回	Variables & levels of measurement	Classification and measurement of variables
第 3 回	Visual descriptive statistics	Creating graphs and plots
第 4 回	Statistical assumptions	Methods of addressing statistical assumptions
第 5 回	Correlation	Background and calculation of Pearson's correlation coefficient
第 6 回	Other methods of correlation	Calculation of Spearman's correlation coefficient
第 7 回	Linear regression	Background and calculation of linear regression
第 8 回	Multiple regression	Calculating and interpreting multiple regression
第 9 回	T-tests and research design	Background of t-tests and calculation of a paired-samples t-test and an independent samples t-test
第 10 回	ANOVA, planned comparisons, and post-hoc tests	Background and calculation of ANOVA
第 11 回	Factorial ANOVA	Background and calculation of factorial ANOVA
第 12 回	Repeated-measures ANOVA	Background and calculation of repeated-measures ANOVA
第 13 回	Factor analysis	Background of factor analysis
第 14 回	Applying factor analysis	Factor analyzing data

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Reading assignments will be given for each class. Students should complete the reading assignments before each class and be prepared to discuss the content of the readings.

【テキスト（教科書）】

There is no required textbook for this course. Course materials will be distributed in class or online through Htetudes.

【参考書】

Jenifer Larson-Hall. (2010). A guide to doing statistics in second language research using SPSS. Routledge.

Andy Field. (2013). Discovering statistics using SPSS (4th edition). Sage.

Fred L. Perry, Jr. (2011). Research in applied linguistics: Becoming a discerning consumer. Routledge.

Publication Manual of the American Psychological Association (APA Manual)

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

Presentations: 50%; Final Data Analysis Assignment: 50%

< Doctoral Students >

Presentations: 25%; Research Report: 25%; Final Data Analysis Assignment: 50%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on a data analysis assignment. A highly evaluated presentation shows synthesis and clear explanation of the relevant material. The data analysis assignment will be assessed on the accuracy and thoroughness of the statistical results and the format in which they are presented. Doctoral students will also submit a research report. Details will be given in class.

【学生の意見等からの気づき】

Class time will be allotted for the analysis and discussion of students' research projects.

【その他の重要事項】

Students should have already taken 言語科学方法論 A or an equivalent course.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

・[MY WAY: English Communication I] 共著 2013 年 3 月 三省堂

・[MY WAY: English Expression I] 共著 2013 年 3 月 三省堂

・『英語教育学の実証的研究法入門』 共著 2012 年 8 月 研究社

LIT500B3

英米文学特講 I A

丹治 愛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、田園こそがイングランドの本質的なナショナル・アイデンティティであるという田園主義的イングリッシュネス概念の構築と脱構築の歴史を背景として、それに関連する代表的なイギリス小説を読んでいくものである。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的にものを考える力、文学作品を解釈する能力、作品のコンテキストをリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

【到達目標】

- ・文学作品を論理的に分析することができる。
- ・文学作品およびその批評について他人と議論することができる。
- ・それぞれの作家の文学的立場について記述することができる。
- ・イギリス小説における田園の表象の特徴について説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

イギリス小説における田園の表象の変容を講義形式でたどりながら、個々の作品の読解は演習形式で進める。演習においては、それぞれの作品を精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていくことが求められる。そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	イングリッシュネス・スタディーズ序説
②	ジェイン・オースティン以前	ピクチャレスクな風景の発見とロマン派
③	Austen, 映画 <i>Sense and Sensibility</i>	映画の解釈（1）
④	Austen, <i>Northanger Abbey</i>	ゴシックとピクチャレスク
⑤	Austen, <i>Emma</i>	イングランドの風景の発見
⑥	まとめと質疑応答（1）	質問と議論で授業のまとめをする。
⑦	Dickens, <i>Oliver Twist</i>	都市の影、田園の光
⑧	Brontë, 映画 <i>Wuthering Heights</i>	映画の解釈（2）
⑨	Brontë, <i>Wuthering Heights</i>	南と北の田園風景
⑩	Eliot, <i>Adam Bede</i>	反牧歌の伝統（1）
⑪	Hardy, 映画 <i>Tess of the D'Urbervilles</i>	映画の解釈（3）
⑫	Hardy, <i>Tess of the D'Urbervilles</i>	反牧歌の伝統（2）
⑬	Morris, <i>News from Nowhere</i>	田園のヘリテージ化
⑭	まとめと質疑応答（2）	質問と議論で授業のまとめをする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・授業中の討議に参加できるよう、指定されたテキストを授業前にを精読し、自分の意見をまとめてくる。

【テキスト（教科書）】

Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles* (A Norton Critical Edition)

【参考書】

レイモンド・ウィリアムズ『都会と田舎』
Patrick Parrinder, *Nation and Novel: The English Novel from Its Origins to the Present Day* (Oxford UP)

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
- ・4000 字程度の期末レポート 50%（自分なりの主題を発見し、それについて論理的に述べること）

【学生の意見等からの気づき】

・精読する作品、ベース配分など、可能なところは学生と相談しながら決める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
イギリス文学
<研究テーマ>
19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化
<主要研究業績>

(分担執筆)

『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009 年 2 月、『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解—都市退化論と「土地に還れ」運動』、pp. 115-134, 『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解への不満—貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い』、pp. 135-155.

『イギリス小説の愉しみ』塩谷清人、富山太佳夫編、音羽書房鶴見書店、2009 年 6 月、『「ドラキュラ」、ゴシック小説、心霊研究』、pp. 240-58.

『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学教養学部編、東京大学出版会、2010 年 3 月、『「タイム・マシン」の歴史主義的解釈—文学作品の思想的歴史的文脈』、pp. 86-101.

【Outline and objectives】

In this class students study the history of the construction and deconstruction of the concept of rural Englishness that the country is the essential national identity of England, and read some of the representative British novels against the background of the history. They are expected to improve the ability to read critically, the ability to think logically, the ability to interpret literary works in the original way, the ability to research the context of works, and the ability to present, discuss and write a paper.

LIT500B3

英米文学特講 I B

丹治 愛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、田園こそがイングランドの本質的なナショナル・アイデンティティであるという田園主義的イングリッシュネス概念の構築と脱構築の歴史を背景として、それに関連する代表的なイギリス小説を読んでいくものである。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的にものを考える力、文学作品を解釈する能力、作品のコンテクストをリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

【到達目標】

- ・文学作品を論理的に分析することができる。
- ・文学作品およびその批評について他人と議論することができる。
- ・それぞれの作家の文学的立場について記述することができる。
- ・イギリス小説における田園の表象の特徴について説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

イギリス小説における田園の表象の変容を講義形式でたどりながら、個々の作品の読解は演習形式で進める。演習においては、それぞれの作品を精読し、学生個人個人がその作品のなかにある主題を発見し、相互に解釈を発表しあいながら、作品への理解を深めていくことが求められる。そのうえで 4000 字程度の期末レポートを書く。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
①	イントロダクション	イングリッシュネス・スタディーズ序説
②	<i>Gissing, The Private Papers of Henry Ryecroft</i>	田園主義的イデオロギーの拡大
③	<i>Forster, 映画 Howards End</i>	映画の解釈（1）
④	<i>Forster, Howards End</i>	都市退化論と田園回帰
⑤	<i>Forster, Maurice</i>	国民国家のなかの緑林
⑥	まとめと質疑応答（1）	質問と議論で授業のまとめをする。
⑦	<i>Woolf, 映画 Mrs. Dalloway</i>	映画の解釈（2）
⑧	<i>Woolf, Mrs. Dalloway</i>	遊歩者の都市
⑨	<i>Woolf, Between the Acts</i>	田園概念の脱構築
⑩	<i>Country House Novels</i>	カントリーハウスのヘリテージ化（1）
⑪	<i>Waugh, Brideshead Revisited</i>	カントリーハウスのヘリテージ化（2）
⑫	<i>Ishiguro, 映画 The Remains of the Day</i>	映画の解釈（3）
⑬	<i>Ishiguro, The Remains of the Day</i>	カントリーハウスのヘリテージ化（3）
⑭	まとめと質疑応答（2）	質問と議論で授業のまとめをする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・授業中の討議に参加できるよう、指定されたテキストを授業前に精読し、自分の意見をまとめる。

【テキスト（教科書）】

E. M. Forster, Maurice (Penguin Books)

【参考書】

レイモンド・ウィリアムズ『都会と田舎』
Patrick Parrinder, Nation and Novel: The English Novel from Its Origins to the Present Day (Oxford UP)

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点 50%（準備をしたうえで、積極的に討議に参加すること）
- ・4000 字程度の期末レポート 50%（自分なりの主題を発見し、それについて論理的に述べること）

【学生の意見等からの気づき】

- ・精読する作品、ペース配分など、可能なところは学生と相談しながら決める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

イギリス文学

<研究テーマ>

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリス文学および文化

<主要研究業績>

(分担執筆)

『英米小説の読み方』林文代編、岩波書店、2009 年 2 月、『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解—都市退化論と「土地に還れ」運動』、pp. 115-134、『「ハワーズ・エンド」の文化研究的読解への不満—貧困と帝国主義をめぐる人間主義的問い』、pp. 135-155。

『イギリス小説の愉しみ』塩谷清人、富山太佳夫編、音羽書房鶴見書店、2009 年 6 月、『「ドラキュラ」、ゴシック小説、心霊研究』、pp. 240-58。

『高校生のための東大授業ライブ 熱血編』東京大学教養学部編、東京大学出版会、2010 年 3 月、『タイム・マシン』の歴史主義的解釈—文学作品の思想的歴史的文脈』、pp. 86-101。

【Outline and objectives】

In this class students study the history of the construction and deconstruction of the concept of rural Englishness that the country is the essential national identity of England, and read some of the representative British novels against the background of the history. They are expected to improve the ability to read critically, the ability to think logically, the ability to interpret literary works in the original way, the ability to research the context of works, and the ability to present, discuss and write a paper.

LIT500B3

英米文学特講Ⅱ A

丹治 愛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文学批評とは、第一義的に、文学作品（文学テキスト）を解釈する行為である。解釈とはテキストを読むための特定のコンテキストを定めて、テキストの意味を確定していく行為である。それは感想文とどう違う点で異なるのかといった問いをとおして、文学解釈が成立するための要素を学習したのち、具体的にテキスト（イギリス小説）を、文化的社会的コンテキストに関連づけながら分析していく。そのプロセスで、小説を分析するために必要な基本的な概念群・キーワード群を学習する——物語（ストーリー／プロット／デイスコース）、キャラクター、語り手（ナレーター）と視点人物、イメージとシンボルとアレゴリーなど。最終的に、教材となった文学作品についての個々の学生の解釈を確認する。

【到達目標】

この授業は文学作品を解釈するための具体的な方法を学習することを目的とする。文学批評とはどのような行為なのかをはじめに学習したうえで、ひとつの作品（イギリス小説）を選び、それを対象として具体的に精読を進めていく。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解をとおして論理的にもの考える力、作品の文化的社会的背景をリサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

原則、学生のプレゼンテーションとディスカッションとで進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	文学批評とは何か——テキストの多義性と解釈	文学批評とはなにかを議論する。
第2回	論証と精読（批判的読解）とリサーチ	論証と精読（批判的読解）とリサーチの方法について議論する。
第3回	作品の分析——物語（ストーリーとプロットとデイスコース）	物語（ストーリーとプロットとデイスコース）に注目して、作品を分析する。
第4回	作品の分析——キャラクター（中心人物と周辺の人物）	キャラクターに注目して、作品を分析する。
第5回	作品の分析——ナレーターと視点人物（誰が見ているか、誰が語っているか）	ナレーターと視点人物に注目して作品を分析する。
第6回	作品の分析——イメージ、シンボル、アレゴリー	イメージ、シンボル、アレゴリーに注目して、作品を分析する。
第7回	これまでのまとめ——質問とディスカッション	これまでのまとめ。教員への質問と学生どうしの議論を行う。
第8回	批評作品の読解——物語とキャラクター	物語とキャラクターを論じている具体的な作品論を読む。
第9回	批評作品の読解——ナラトロジー（語り手と視点）	語り手と視点を論じている具体的な作品論を読む。
第10回	批評作品の読解——イメージ、シンボル、アレゴリー	イメージ、シンボル、アレゴリーを論じている具体的な作品論を読む。
第11回	批評作品の読解——文学史的背景	文学史的背景を論じている具体的な作品論を読む。
第12回	批評作品の読解——文化社会的背景	文化社会的背景を論じている具体的な作品論を読む。
第13回	作品解釈口頭発表（1）——プレゼンテーション	授業であつてきた作品について学生が自分の解釈を口頭発表しあう。
第14回	作品解釈口頭発表（2）——プレゼンテーション	授業であつてきた作品について学生が自分の解釈を口頭発表しあう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前にテキストを読み、自分の意見をまとめる。

【テキスト（教科書）】

D. H. Lawrence, "England, My England" in England, My England and Other Stories (Cambridge UP)

【参考書】

丹治愛・山田昭編『文学批評への招待』（放送大学教育振興会）

デイヴィッド・ロッジ『小説の技法』（白水社）

Abrams & Harpham, A Glossary of Literary Terms

【成績評価の方法と基準】

1. 文学批評のプロセスを理解している。

2. 文学批評のキー概念を理解し、それを正しく活用することができる。

3. 授業であつてきた作品について自分なりの解釈を提示できる。

授業への貢献度 50%

期末レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

学生各自に積極的な授業参加をうながす。

【Outline and objectives】

Literary criticism is primarily an act of interpreting literary works (literary texts). Interpretation is an act of fixing a specific context for reading a text and defining the meaning of the text. After learning the elements for making a literary interpretation through questions such as how it differs from a book report, students concretely analyze a text (a British novel) in relation to some cultural and social context. In that process, students learn the basic concepts and keywords necessary to analyze a novel - stories (plots and discourses), characters, narrators and focalizers, images, symbols and allegories, etc. Finally, students discuss one another's interpretations of the literary work treated in class.

LIT500B3

英米文学特講Ⅱ B

丹治 愛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業の目的は、文学批評とはどのようなものか、どのようなプロセスで進めていくのかを学習することである。この授業では、文学作品の解釈にとって有用な、さまざまな批評理論を中心に学習する。それぞれの批評理論の理論的基盤、それに関連する基本的な概念群・キーワード群を学習し、さらに具体的な作品群を精読し、批評理論を作品解釈に活用する訓練をする。

【到達目標】

この授業は文学批評のための批評理論を学習することを目的とする。批評理論とはどのような機能をもっているかをはじめに学習し、個々の批評理論の理論と方法論、概念とキーワードなどを学習したうえで、それぞれの批評理論に応じてイギリス小説を選び、それを対象として批評作品を具体的に読んでいく。その精読のプロセスをとおして、英語の読解力、批判的読解（クリティカル・リーディング）をとおして論理的なものを考える力、リサーチする能力、プレゼンテーションとディスカッションとライティングの能力の養成をめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

原則、学生のプレゼンテーションとディスカッションで進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の目的、前学期の授業の概要および今学期の授業の概要について説明する。
第2回	ジャンル論	ジャンル論的解釈を読む。
第3回	ジャンル論とは何か？	ジャンル論について講義する。
第4回	ナラトロジー——作者と語り手	ナラトロジー的解釈を読む。
第5回	ナラトロジーとは何か	ナラトロジーについて講義する。
第6回	マルクス主義批評——階級とイデオロギー	マルクス主義的解釈を読む。
第7回	マルクス主義批評とは何か？	マルクス主義批評について講義する。
第8回	精神分析批評——無意識	精神分析的解釈を読む。
第9回	精神分析批評とは何か？	精神分析批評について講義する。
第10回	フェミニズム批評	フェミニズム的解釈を読む。
第11回	フェミニズム批評とは何か？	フェミニズム批評について講義する。
第12回	新歴史主義・文化研究——宗教と唯物論	新歴史主義的・文化研究的解釈を読む。
第13回	新歴史主義とは何か、文化研究とは何か？	新歴史主義・文化研究について講義する。
第14回	まとめ	授業全体をまとめ、理解度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、指定の文献を読む。プレゼンテーションのときには、わかりやすいハンドアウトの作成など、じゅうぶんな準備をする。

【テキスト（教科書）】

Frances Hodgson Burnett, *The Secret Garden* (Norton Critical Editions)

【参考書】

丹治愛・山田広昭編『文学批評への招待』（放送大学教育振興会）

丹治愛編『批評理論』（講談社選書メチエ）

ピーター・バリー『文学理論講義』（ミネルヴァ書房）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%（授業にたいする積極的参加）

期末レポート 50%（授業内容の理解度）

【学生の意見等からの気づき】

学生の発表・議論の機会を増やす。

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to learn what literary criticism is and what kind of process to proceed. In this class, students learn mainly about various critical theories useful for the interpretation of literary works. They learn the theoretical foundation of each critical theory, basic concepts and keywords related to it, and carefully read concrete interpretations and learn to utilize critical theories for concrete interpretations of literary works.

LIT500B3

英米文学特講Ⅲ A

利根川 真紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> アメリカ女性文学の系譜

この授業では、19世紀末から20世紀末にかけてのアメリカ女性作家たちの短編作品を読み、各作家作品について理解を深めていきます。アメリカ社会における女性のあり方がいかに変化したのか、女性作家たちが互いにどのように意識・影響しあいつつながら作品を書いていたのか、また彼女たちの作品には、男性作家とはどのように異なる作風やテーマが見出されるのか、という点についても検討します。

【到達目標】

1. アメリカ女性作家による作品を読み、それぞれの作家・作品について理解を深める。
2. アメリカ女性文学史の流れの中に、各作品を位置づける。
3. 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身につける。
4. オリジナリティのある解釈を提示できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

アメリカ女性作家たちによる短編小説を文学史的コンテクストを補いつつ担当者を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、教員による補足説明、参加者全体によるディスカッションという形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第2回	1880年代	Sarah Orne Jewett など、ローカル・カラーの文学
第3回	1890年代	Charlotte Perkins Gilman など、ニュー・ウーマンの時代の文学
第4回	1900年代	Gertrude Stein など、モダニズムの文学
第5回	1910年代	Willa Cather など、ジェンダーを超える文学
第6回	1920年代・1930年代	Zora Neale Hurston など、ハーレム・ルネサンスの文学
第7回	1940年代	Hisaye Yamamoto など、第二次大戦と文学
第8回	1950年代・1960年代	Flannery O'Connor など、公民権運動と文学
第9回	1970年代	フェミニズム文学批評について
第10回	1970年代	Toni Morrison など、キャンオンを問い直す文学
第11回	1980年代	Bobbie Ann Mason など、母と娘の文学
第12回	1990年代	Jhumpa Lahiri など、越境と文学
第13回	プレゼンテーション	& ペーパーの提出 ペーパーに基づく口頭発表とディスカッション
第14回	まとめ	ペーパーおよび口頭発表へのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、人数分コピーを用意してください。

【テキスト（教科書）】

初回の授業時に指示します。

【参考書】

Shoualter, Elaine. *A Jury of Her Peers: Celebrating American Women Writers from Anne Bradstreet to Annie Proulx*. Vintage, 2010.

【成績評価の方法と基準】

平常点 (30%)、発表 (40%)、6000字程度のペーパー (30%) を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> アメリカ文学

<研究テーマ> 南部文学、女性文学

<主要研究業績>

①『「目覚め」におけるエドナの不在の母をめぐる——海>> 草原>> 音楽>を手がかりに』、『言語と文化』（2019年）

- ②「白人娘たちの「物語記憶」——ミンローズ・グイン、キャスリン・ストケット、ハーバー・リーと公民権運動」『言語と文化』（2018年）
- ③「オコナーの『The Geranium』モチーフへの取り組み——南部娘にとってのホームと黒人」『言語と文化』（2016年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to understand the literary history of American women writers. We will read their short stories chronologically from the late nineteenth century through the late twentieth century. While paying special attention to women's changing roles in society as well as women writers' mutual interactions with each other, we will also consider specific themes and strategies unique to American women writers. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers.

LIT500B3

英米文学特講Ⅲ B

利根川 真紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> ショパンの『目覚め』とアメリカ女性文学史
この授業では、春学期に扱ったアメリカ女性文学史の流れを意識しつつ、アメリカ女性作家による代表的な長編小説としてケイト・ショパンの『目覚め』（1899）およびそれについて書かれた批評論文を読んでいきます。この作品は、出版当初その内容が過激だとして受け入れられず、その後半世紀ほど忘れられ、1950年代・60年代になってようやく評価の兆しが芽生え、70年代のフェミニズム批評の興隆と連動する形でアメリカ文学のキャンソンの仲間入りを果たすことになりました。セント・ルイスで育ったショパンにとって、ニューオーリンズがどのような土地として意識されていたのかについても検討します。

【到達目標】

1. 小説『目覚め』を精読し、作品・作家について理解する。
2. アメリカ女性文学史の流れの中に、作品を位置づける。
3. 効果的なプレゼンテーションのしかた、ペーパーの書き方を身につける。
4. オリジナリティのある解釈を提示できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

小説『目覚め』および関連する研究論文を担当者を決めて読みます。あらかじめ指名された院生による発表、教員による補足説明、参加者全体によるディスカッションという形で進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の内容と進め方の説明
第2回	<i>The Awakening</i> 読解	I章からVII章について検討
第3回	<i>The Awakening</i> 読解	VIII章からXIII章について検討
第4回	<i>The Awakening</i> 読解	XIV章からXIX章について検討
第5回	<i>The Awakening</i> 読解	XX章からXXV章について検討
第6回	<i>The Awakening</i> 読解	XXVI章からXXXIII章について検討
第7回	<i>The Awakening</i> 読解	XXXIV章からXXXIX章について検討
第8回	ペーパーの途中経過報告	計画書の提出と検討
第9回	批評文献の読解	地域・時代関連の批評について検討
第10回	批評文献の読解	人種関連の批評について検討
第11回	批評文献の読解	女性・フェミニズム関連の批評について検討
第12回	批評文献の読解	その他の批評について検討 & ペーパーの提出
第13回	プレゼンテーション	ペーパーに基づく口頭発表とディスカッション
第14回	まとめ	ペーパーおよび口頭発表へのフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

あらかじめ課題を読んで授業に臨むようにしてください。発表担当者はハンドアウトを作成し、人数分コピーを用意してください。

【テキスト（教科書）】

Norton *Critical Edition* の *Third Edition* を使用します。
Chopin, Kate. The Awakening: An Authoritative Text, Biographical and Historical Contexts, Criticism. Ed. Margo Culley. Norton, 2017.

【参考書】

Chopin, Kate. Complete Novels and Stories. Ed. Sandra M. Gilbert. Library of America, 2002.
Toth, Emily. Unveiling Kate Chopin. UP of Mississippi, 1999.

【成績評価の方法と基準】

平常点（30%）、発表（40%）、6000字程度のペーパー（30%）を総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>アメリカ文学
<研究テーマ>南部文学、女性文学
<主要研究業績>

- ①「『目覚め』におけるエドナの不在の母をめぐる——<海><草原><音楽>を手がかりに」、『言語と文化』（2019年）
- ②「白人娘たちの「物語記憶」——ミンローズ・グイン、キャスリン・ストケット、ハーバー・リーと公民権運動」『言語と文化』（2018年）

③「オコナーの『*The Geranium*』モチーフへの取り組み——南部娘にとつてのホームと黒人」『言語と文化』（2016年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to understand Kate Chopin's *The Awakening* (1899) with special attention to its place in the literary history of American women writers. By reading closely the novel itself as well as various kinds of literary criticism written on it, we will examine why the novel was neglected when it was first published and why it took more than half a century before it was regarded as one of America's major works. We will also consider Kate Chopin's relationships with New Orleans and how she depicted the region. The course also enhances students' skills in close reading of texts and in effective oral presentations and academic papers.

LIT500B3

英米文学特講ⅣA

宮川 雅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Charles Brockden Brown 研究

アメリカ小説の父と呼ばれてきたチャールズ・ブロックデン・ブラウンの長篇小説を読む。教室では最初の長篇 *Wieland* (1798) を精読する。

- (1) レポーター制による発表・質疑応答により、
①英文テキストを分析・解釈する営みを身につけるとともに、
②読んだ内容・情報を自らのことばでまとめる能力を養い、
③論理的思考力を養う。
(2) レポーター以外も積極的に予習をして、
④辞書を丁寧に引く習慣を身につけるとともに、
⑤議論に参加する積極性を養う。
(3) アメリカ作家とその作品について知識を得る。
<講義題目> Charles Brockden Brown 研究

【到達目標】

- ①アメリカン・ゴシックの歴史と特徴についてある程度の知識を得る ②ゴシックの美学的背景について理解している ③一見して雑然とした散文を読んでも重要な要素や重視したい箇所を自身の判断で指摘・抽出できる ④読むため・理解するために調べること、とくに固有名詞や歴史的・社会的背景について調べたことを面倒だと思わずできる。⑤ゴシックの理論について知識を持つ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

前もって担当を決めた箇所を順番にレポーター形式で発表・質疑応答する。レポーターは、①《梗概（要約）》②《注意すべき語句や表現》③《コメント》をまとめたハンドアウトを用意し、担当箇所について意見交換のたたき台を用意する。レポーター以外の参加者も自身の予習に基づいて質問したり意見を述べる必要がある。担当の割り振りについては、第一ラウンドは初回に決める予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	文学におけるゴシックについて／参考文献リスト配布／レポーター割り振り
第2回	Advertisement	ゴシック小説の特徴と美学的背景—— <i>the beautiful, the sublime, the picturesque</i>
第3回	Chapter 1 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換①
第4回	Chapter 2 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換②
第5回	Chapter 3 の分析と解釈	短篇小説論の検討／レポーターによる発表および意見交換③
第6回	Chapter 4 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換④
第7回	Chapter 5 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑤
第8回	Chapter 6 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑥
第9回	Chapter 7 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑦
第10回	Chapter 8 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑧
第11回	Chapter 9 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑨
第12回	Chapter 10 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑩
第13回	Chapter 11 の分析と解釈	レポーターによる発表および意見交換⑪
第14回	Chapters 12, 13 の分析と解釈／前半のまとめ	レポーターによる発表および意見交換⑫

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

辞書を引いて予習する。読み取った情報や気になる点をノートに書き留める、あるいはプリントに書き込む。固有名詞や背景事情等について必要ならばネット検索をして調べる。他の作品や参考文献などを随時読む。

翻訳を参考にしながら読むが、演習各回ではあくまでテキスト原文を精読するため、レポーターに限らず各回の準備を怠らないようにする。

【テキスト（教科書）】

Emory Elliott, ed., *Wieland; or The Transformation, and Memoirs of Carwin, the Biloquist* (Oxford UP, 1998). pbk.

【参考書】

教室で指示する。初回に *CBB Bibliography* を配布する予定。

【成績評価の方法と基準】

レポーター発表（内容及びプレゼンテーションに対する評価） 40 パーセント
授業への積極的参加度（予習と参加の度合い） 30 パーセント
期末ペーパー（試験に代替する可能性もある） 30 パーセント
以上の合計を百分法換算して 60 点以上で合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

学生がさぼらぬようにきちんと指導する。

【Outline and objectives】

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Browne's gothic romance, Wieland, first published in 1798. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about the aesthetic background.

LIT500B3

英米文学特講ⅣB

宮川 雅

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ① ブラウンの長篇小説の検討
 - ② ゴシック小説の多様性を探る
 - ③ 多様な解釈の可能性の検討
- <講義題目> *Charles Brockden Brown* 研究

【到達目標】

- ① ゴシック・ロマンスの主題や方法についての概観的知識を得ること。
- ② チャールズ・ブロッケン・ブラウンの作家としての営みを概観して概嘆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

レポーター制によるアメリカ文学テキストの精読。
「英米文学演習第二 (*American Fiction*) A」に続いて、チャールズ・ブロッケン・ブラウンの『ウィーランド』を読む。続編『腹話術師カーウィンの回想』を余裕があったら読む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Chapter 14: "Three days have elapsed since this occurrence"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 2 回	Chapter 15: "Before I reached the city it was dark"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 3 回	Chapter 16: "As soon as I arrived in sight of the front of the house, my attention was excited by a light"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 4 回	Chapter 17: "I had no inclination nor power to move from this spot"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 5 回	Chapter 18: "I had imperfectly recovered my strength"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 6 回	Chapter 19: "Theodore Wieland, the prisoner at the bar, was now called upon for his defence"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 7 回	Chapter 20: "Will you wonder that I read no farther?"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 8 回	Chapter 21: "Such, for some time, was the course of my meditations"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 9 回	Chapter 22: "The inhabitants of the Hut received me"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 10 回	Chapter 23: "My morals will appear to you far from rigid . . ."	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 11 回	Chapter 24: "Deeply did I ruminate on the occurrences that had just passed. . . ."	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 12 回	Chapter 25: "A few words more and I lay aside the pen for ever"	レポーターによる発表と質疑応答と議論
第 13 回	Chapter 26: "My right hand, grasping the unseen knife, was still disengaged"	レポーターによる発表と質疑応答と議論

第 14 回 Chapter 27: [Written three years after the foregoing, and dated at Montpellier.] I imagined that I had forever laid aside the pen

レポーターによる発表と質疑応答と議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】
研究書を読むことと辞書を引いて予習すること。

【テキスト（教科書）】

Emory Elliott, ed., *Wieland; or The Transformation, and Memoirs of Carwin, the Biloquist* (Oxford UP, 1998). pbk.

【参考書】

初回に *Bibliography* を配布する。

【成績評価の方法と基準】

レポーター発表（内容及びプレゼンテーションに対する評価）40 パーセント
授業への積極的参加度（予習と参加の度合い）30 パーセント
期末ペーパー（試験に代替する可能性もある）30 パーセント
以上の合計を百分法換算して 60 点以上で合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート実施せず。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 近代アメリカ文学

<研究テーマ> アメリカ文学史と宗教と神秘学、小説の語りと技法

<主要研究業績> 「Ormond におけるビクチャレスクな意匠をめぐって」『英文学誌』47号（2005年3月）：27-44、「ポーの宇宙論と錬金術（十）第五章 ポーと現代——ゴシック、ロマン主義、オカルト、近代芸術についての覚え書（その二）」『法政大学文学部紀要』50号（2005年3月）：91-110、「Re: Rip の妻はいつ死んだのか？」（『法政大学文学部紀要』51号（2005年9月）：1-13、「疑似科学と科学の境」（八木敏雄・巽孝之編『エドガー・アラン・ポーの世紀』（研究社、2009）251-67.

【Outline and objectives】

Students learn to carry to a higher level the skillful analysis of language and text, by close reading of Charles Brockden Browne's gothic romance, *Wieland*, first published in 1798. Students also obtain knowledge about literary gothicism and about the aesthetic background.

LIN500B3

英米文学特講 V A

山下 敦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“世界文学”をめぐる考察

近年において音楽における“ワールド・ミュージック”観念の文学版として成立した“世界文学”とは、いかなる概念であるのかをまず把握する。そして、地球規模に広範な文学作品を受容するために把握すべき様々な心得を見出す。また、多くの地域で成立した文学作品に共通する背景及び構造の基本型を把握する方法を考察し、実例としての作品の講読を通じてそれらを確認する試みを行なう。

【到達目標】

この授業は、英語圏を含む外国文学を世界文学という観点から読み解き、文学を通じて様々な国・地域の持つ文学の多様性を理解する能力を育成することを目的とする。そのために、これまでの英文学研究によって得た文学研究法の基礎に基づいて、英語圏以外の文学を翻訳によって読み解く場合の実際の解釈の仕方を、作品の精読とともに学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業開始時に受講生間で担当を決めて、担当はその箇所の内容の正確な理解に努め、レジュメとともに報告をする。受講生は各自の理解に基づいて互いに検討を加える。その上で、著者の思考をより包括的に理解する。なお、扱うテキストは日本語訳による。いわば教員・受講者の協同作業を通じた日本語による立体的な“読書”を試みる。
なお授業全体の把握と理解のために“英米文学特講 V A・B”を通年で履修することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキストの紹介とテーマ、授業の進め方についての説明
第 2 回	世界文学の概念	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』の紹介
第 3 回	世界文学と流通	『ギルガメシュ叙事詩』をめぐる考察
第 4 回	世界文学と翻訳	メヒティルト『神性の流れる光』をめぐる考察
第 5 回	世界文学と生産	パヴィイチ『ハザール事典』をめぐる考察
第 6 回	世界文学と 21 世紀	ダムロッシュ講演録
第 7 回	外国文学の読み方	神話・聖書・童話
第 8 回	英語文学読解のヒント 1	シェイクスピア劇の影
第 9 回	英語文学読解のヒント 2	洗礼・水と死と再生
第 10 回	世界文学に関する論のあり方	[対談] 世界は文学でできている
第 11 回	世界文学を読んでみる 1	受講生による世界文学作品解釈 1
第 12 回	世界文学を読んでみる 2	受講生による世界文学作品解釈 2
第 13 回	世界文学を読んでみる 3	受講生による世界文学作品解釈 3
第 14 回	まとめ	受講生による解釈の検討と反省

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に扱うテキストを熟読し、内容を把握した上で、それぞれが自身の理解を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』国書刊行会
トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』白水社
沼野充義『世界は文学でできている』光文社
辻原登『東京大学で世界文学を学ぶ』集英社文庫

【成績評価の方法と基準】

授業内プレゼンテーションの成果（20%）と期末小論文（80%）による

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ドイツ語圏の文学と芸術

<研究テーマ> 世紀転換期ウィーンの文化

<主要研究業績> 「アドルフ・ロースの感性 — ウィーン世紀末建築家の内包した現代感覚と装飾 - 付:《翻訳》アドルフ・ロース『装飾と犯罪』」(共立女子大学総合文化研究所神田分室『研究叢書』2001年2月)

【Outline and objectives】

The students study the “world literature”. We read the several chapters of David Damrosch *What is world literature? intensively to understand this concept “world literature”, and then discuss about the thema, how to accept the foreign literatures in translation. The purpose of the class is to understand the diversity of the world-cultures through literary works.*

LIN500B3

英米文学特講V B

山下 敦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

“世界文学”をめぐる考察
 “世界文学”とはいかなる概念であるのかをまず把握し、翻訳によって出会う文学への対処と意義を考察する。そして、広範な文学作品を受容するための心得を見出し、多くの地域で成立した文学作品に共通する背景及び構造の基本型を把握する方法を考察する。その後、実例としての作品の講読を通じてそれらを確認する試みを行なう。

【到達目標】

この授業は、英語圏を含む外国文学を世界文学という観点から読み解き、文学を通じて様々な国・地域の持つ文学の多様性を理解する能力を育成することを目的とする。そのために、これまでの英文学研究によって得た文学研究法の基礎に基づいて、英語圏以外の文学を翻訳によって読み解く場合の実際の解釈の仕方、作品の精読とともに学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業開始時に受講生間で担当を決めて、担当者はその箇所の内容の正確な理解に努め、レジュメとともに報告をする。受講生は各自の理解に基づいて互いに検討を加える。その上で、著者の思考をより包括的に理解する。なお、扱うテキストは日本語訳による。いわば教員・受講者の協同作業を通じた日本語による立体的な“読書”を試みる。
 なお授業全体の把握と理解のために比較文学研究 A・B を通年で履修することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方についての説明
第2回	翻訳文学の時間と空間	ダムロッシュ「ありあまるほどの世界と時間」
第3回	世界文学と流通	カノンの拡大
第4回	世界文学と翻訳	カフカの変容
第5回	世界文学と生産	世界の中の英語
第6回	外国文学の読み方1	リービ英雄 × 沼野充義：越境文学の冒険
第7回	外国文学の読み方2	リービ英雄『ヘンリー たけし レウィツキーの夏の紀行』
第8回	英語文学読解のヒント1	地理・南・季節
第9回	英語文学読解のヒント2	階級・アイロニー
第10回	世界文学に関する論	多和田葉子『エクソフォニー』
第11回	世界文学を読んでみる1	受講生による世界文学解釈1
第12回	世界文学を読んでみる2	受講生による世界文学解釈2
第13回	世界文学を読んでみる3	受講生による世界文学解釈3
第14回	まとめ	受講生による解釈の検討と反省

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に扱うテキストを熟読し、内容を把握した上で、それぞれが自身の理解を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』国書刊行会
 トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』白水社
 沼野充義『世界は文学でできている』光文社
 辻原登『東京大学で世界文学を学ぶ』集英社文庫
 多和田葉子『エクソフォニー』岩波書店

【成績評価の方法と基準】

授業内プレゼンテーションの成果（20%）と期末小論文（80%）による

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ語圏の文学と芸術
 <研究テーマ>世紀末ウィーンの文化
 <主要研究業績>「アドルフ・ロースの感性 — ウィーン世紀末建築家の内包した現代感覚と装飾 - 付:《翻訳》アドルフ・ロース『装飾と犯罪』」(共立女子大学総合文化研究所神田分室『研究叢書』2001年2月)

【Outline and objectives】

The students study the “world literature”. We read the several chapters of David Damrosch *What is world literature? intensively to understand this concept “world literature”, and then discuss about the thema, how to accept the foreign literatures in translation. The purpose of the class is to understand the diversity of the world-cultures through literary works.*

LIN500B3

言語科学特講 I A

椎名 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

語用論関連の最新の文献を読み、批判的読解をしながら、自分の論文に反映させていきます。

<講義題目>

談話分析と文体論の手法を学ぶ

【到達目標】

自分が博士論文で扱うテキストのジャンルを選択し、そのジャンルに適した分析方法の基礎的技術が身に付けられる文献を読みます。また、パイロットスタディーとして、そのテキストのサンプルを分析し、その分析結果を発表します。発表についての他の人からのフィードバックを受けて、分析のレベルを向上させながら、博士論文の完成を目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

完全な個人指導によって、学生のニーズに合わせた授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	教員による授業の解説、受講生の研究テーマの発表により今後の発表分担の決定
2	テキストにそって2チャプターずつ進みます。 A1: Context and co-text B1: Analysing the discourse in context	担当の受講生による発表とディスカッション
3	C1: Context D1: Context, knowledge, repetition, reference	担当の受講生による発表とディスカッション
4	A2: Speech acts B2: Using speech acts	担当の受講生による発表とディスカッション
5	C2: Exploring speech acts D2: Speech acts and power	担当の受講生による発表とディスカッション
6	A3: Conversation B3: The pragmatics of conversation	担当の受講生による発表とディスカッション
7	C3: The analysis of conversation D3: Conversation and race	教員による論文の中間指導 各自の研究テーマの中間発表
8	学生による研究の中間発表	学生による研究発表と教員による論文指導
9	A4: The cooperative principle B4: Cooperation and relevance	担当の受講生による発表とディスカッション
10	C4: Following the cooperataive principle D4: Relevance and indirectness	担当の受講生による発表とディスカッション
11	A5: Politeness B5: The principle of politeness	担当の受講生による発表とディスカッション
12	C5: Applying politeness D5: Reading in politeness	担当の受講生による発表とディスカッション
13	A6: Corpora and communities B6: Corpora and communities	担当の受講生による発表とディスカッション
14	C6: Corpora and communities D6: Corpora and language teaching	担当の受講生による発表とディスカッション、および総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の研究テーマについて中間発表を繰り返しながら、論文完成を目指す。関連学会で学会発表をして、フィードバックをもらい、論文の内容を向上させる。

【テキスト（教科書）】

Joan Cutting (2008) *Pragmatics and discourse: A resource book for students (2nd edition)*, London and New York: Routledge.

テキストは、受講生と相談して最終的に決定するので、ガイダンスが終わるまでは購入しないでください。

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況で評価します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

論文の進捗状況が受講生によってかなり異なるため、全員に同じ指導をしても有効ではないので、なるべく多くの機会に、論文の中間発表をしてもらうことにしています。また、一人の学生に必要な文献をみんなで読んだりもしています。

今年度も、この中間発表によって自分がどこまでできているのか、今後何をすべきかなどについて、きちんと把握できるようにしていきます。

自分の研究テーマについて深く考え、他の受講生からのフィードバックも参考にしながら、期末レポートに反映し、ひいては修士論文完成につながるようにしていきます。

【学生が準備すべき機器他】

論文の提出は基本的にはハードコピーをお願いします。その他の場合は、こちらで各自に指示を出しますので、それに従ってください。

【その他の重要事項】

日本英文学会、日本英語学会、日本英語教育学会、日本語用論学会、日本英語コーパス学会などの学会への参加をお勧めします。法政大学英文学会での発表も積極的に行うとよいと思います。

オフィスアワーは月曜日5限ですが、授業後の時間も可能です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡しておいてもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、社会言語学、

<研究テーマ> 近代英語の歴史語用論的研究

<主要研究業績>

(1) 「呼びかけ語」の機能——歴史語用論的アプローチ（2010）、川端朋広他編『秋元実治教授退職記念論文集』、ひつじ書房。

(2) 「歴史語用論の新展開:方法と課題」（2009）『月刊言語』2009年2月号、大修館書店 pp. 66-73.

(3) 'Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics', (2008) *Bulletin of the Faculty of Letters, No. 56, Hosei University, pp. 29-48.*

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

LIN500B3

言語科学特講 I B

椎名 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分のテーマにそったテキスト分析をし、學術論文を書きあげることを目指します。自分のテーマに沿って論文を執筆し、中間発表をしながら、セメスター終了時には論文の何章かが仕上がることを目標とします。

<講義題目>

談話分析と文体論の基本的概念とテキスト分析の手法を学ぶ

【到達目標】

自分が博士論文で扱うテキストのジャンルに適した分析方法の基礎的技術が身に付けられる文献を読みます。また、パイロットスタディーとして、サンプルテキストを分析し、その分析結果を発表します。発表についての他の人からのフィードバックを受けて、分析のレベルを向上させながら、博士論文の完成を目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

全て個人指導によって、他の研究者の論文を読んだり、面談によって論文の指導をしたり、添削指導をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	教員による授業の解説、受講生の研究テーマの発表により今後の発表分担の決定
2	Introduction	担当の受講生による発表とディスカッション
3	Style and choice (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
4	Style and choice (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
5	Style, text and frequency (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
6	Style, text and frequency (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
7	学生による中間発表	学生による研究の中間発表と、教員による論文指導
8	A method of analysis and some examples (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
9	A method of analysis and some examples (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
10	Levels of style (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
11	Levels of style (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
12	Language and the fictional world (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
13	Language and the fictional world (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
14	Mind style	担当の受講生による発表とディスカッション、および総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

セメスターを通じて、以下に留意して授業に臨んでください。

1：各自の過去の學術論文、研究のまとめと今後の研究計画を立てる。

2：自分の担当した箇所をきちんと読み、プレゼンテーションができるように予習・準備をする。

3：自分に必要な参考文献を集めて、読む。

4：各自、自分の研究テーマについて中間発表を繰り返しながら、論文完成を目指す。

【テキスト（教科書）】

Geoffrey Leech and Mick Short (2007) *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose, Second edition*, London: Pearson Longman.

テキストは、受講生と相談して最終的に決定するので、ガイダンスが終わるまでは購入しないでください。

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況、内容によって評価します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

論文の進捗状況が受講生によってかなり異なるため、全員に同じ指導をしても有効ではないので、昨年度から、なるべく多くの機会に、論文の中間発表をしてもらうことになっています。また、自分に必要な文献をみんなで読んだりもしています。

今年度も、この中間発表によって、自分がどこまでできているのか、これから何をすべきかなどについて、きちんと把握できるようにしていきます。自分の研究テーマについて深く考え、他の受講生からのフィードバックも参考にしながら、期末レポートに反映し、ひいては修士論文完成につながるようにしていきます。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出は基本的にはハードコピーをお願いします。その他の場合は、こちらで各自に指示を出しますので、それに従ってください。

【その他の重要事項】

日本英文学会、日本英語学会、日本英語教育学会、日本語用論学会、日本英語コーパス学会などの学会への参加をお勧めします。法政大学英文学会での発表も積極的に行うとよいと思います。

オフィスアワーは月曜日5限、または授業後の時間です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡してもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、社会言語学、

<研究テーマ> 近代英語の歴史語用論的研究

<主要研究業績>

(1) 「呼びかけ語」の機能——歴史語用論的アプローチ」(2010)、川端朋広他編『秋元実治教授退職記念論文集』、ひつじ書房。

(2) 「歴史語用論の新展開:方法と課題」(2009)『月刊言語』2009年2月号、大修館書店 pp. 66-73。

(3) 'Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics',

(2008) *Bulletin of the Faculty of Letters, No. 56, Hosei University, pp. 29-48.*

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

LIN500B3

言語科学特講Ⅱ A

大沢 ふよう

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語の変化の概論的知識を獲得する。単に英語の変化をなぞるだけではなく、常に現代英語と比較しつつ、英語の変化についての知識を得る。その上で、統語構造の分析に関して必要な理論の基礎的知識を得る。分析は一定の立場にたたないと不可能であり、理論的知識は研究にとって不可欠なものである。<講義題目> 英語の統語構造の通時的変化の理論的分析

【到達目標】

英語史における統語構造の変化に関して先行研究を踏まえ、独自の分析を提案することをめざす。学生は、単に先行研究を学ぶだけではなく、批判点も見つけるように学ぶことを目指す。最終的には生成文法理論の基本的な概念を使って個々人が疑問に思った英語の変化についての疑問点を解くことができるようになることが目標である。生成文法のいくつかの原理を使って、ある構造が何故古英語では許されなかったかを解明することをめざす。従来の先行研究とは違う独自分析を構築することを目指す。

具体的には、

文法化現象が何故起きたのか。

文法化現象が通言的に観察されるのは、何故か。

英語の変化の独自性

といった問題を論じることができるような研究能力、分析能力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は、学生が研究論文や専門書の中のいくつかの章の担当を決め、単に英語を訳すだけではなく、内容について考え自分で調べて授業で発表する形式で進んでいく。従って初めから教員が要領よく内容を解説してくれてそれを単に書き写したり、覚えるという形式はとらない。研究論文の内容についての議論・批判が中心になるので、毎回活発に発言することが必要である。しかし専門性が高い、難解な部分に関しては教員が解説を行い、理解が進むように工夫する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	春学期授業の紹介を行う。授業の進め方や大体的内容について説明する。必要な文献へどのようにアクセスすることも解説する。
第2回	英語の歴史について	英語の歴史についてのイントロダクション。英語がどのように変化してきたかの説明を初歩的な専門書を通して理解させる。
第3回	理論言語学について	理論とは何かについて、理解できるようわかりやすく解説する。
第4回	生成文法の基本的考え方	生成文法とは何かについて論文を読ませて、まとめをさせ、また議論させる。
第5回	生成理論の変遷	標準理論から拡大標準理論への変化について論文を読ませて議論させる。
第6回	生成理論の変遷－GB理論	GB理論の意味について論文を読み、理解させる。
第7回	生成理論の変遷－ミニマリスト・プログラム	最新の理論についても知識が得られるようにする。
第8回	語彙範疇と機能範疇	語彙範疇と機能範疇はどう違うのかという問題を実際の論争を紹介して、考えさせる。
第9回	機能範疇は普遍的か	機能範疇はパラメータ的の違いがあるということを理解するために、いくつかの論文を読む。
第10回	様々な構文の分析	構文分析について具体的に紹介し、理解させる。
第11回	名詞句の分析：DP仮説について	DP仮説の紹介
第12回	名詞句の分析：DPとNPの違い	名詞句にも幾つか種類があることを理解する。
第13回	DPについて	DPについて理解ができたか確認するためにいくつかの質問をして理解度をチェックする。
第14回	DP shell とは何か	DP とはつまりは shell 構造である、ということを理解させる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教員が指定した研究書は、もちろん、それ以外の本や研究論文は自分でどんどん、読み進める。ほとんどが英語で書かれたものであるので高いレベルの英語力が必要とされる。英語力の研鑽にも励むことが必要である。自分が担当でない部分でも必ず担当者と同じ準備をして毎回授業に臨む。予習をきちんと行うように、授業時間のはじめに内容についての簡単な質問への答えを書かせることでどの程度予習してきたかを把握する試みも行う予定である。正解を書かせるというより、論文が何について書かれているか、といった程度の質問である。

【テキスト（教科書）】

I 冊のテキストではなく、次の主要な文献を読み、それらに基づいて分析・議論する。また授業の進行具合に応じて、適宜必要な文献を追加指定していく予定である。

次の2冊は必ず準備することが必要である。

Denison, David (1993) *English Historical Syntax*, London: Longman.

Lyons, Christopher (1999) *Definiteness*, Cambridge University Press.

【参考書】

Alexiadou, Artemis. (2004) "On the Development of Possessive Determiners," In *Diachronic Clues to Synchronic Grammar*, ed. by Eric Fußand Carola Trips, 31-58. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Allen, Cynthia(2008) *Genitives in Early English: Typology and Evidence*, Oxford: Oxford University Press.

Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge: Cambridge University Press.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory 2nd*. Blackwell

Osawa, Fuyo (2000) "The Historical Emergence of DP in English" *English Linguistics*. 17.1. 51- 79.

Osawa, Fuyo (2007) "The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition," *Nominal Determination: Typology, Context Constraints, and Historical Emergence*, ed. by Elizabeth Stark, Elizabeth Leiss and Werner Abraham, 311-337. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Osawa, Fuyo (2009) "The Emergence of DP in the History of English: The Role of the Mysterious Genitive," *Historical Linguistics 2007*, ed. by Monique Dufresne, Fernande Dupuis and Etleva Vocaj, 135-148. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Rosenbach, Anette (2002) *Genitive Variation in English: Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Berlin and Hawthorne, NY: Mouton de Gruyter.

Taylor, John R. (1996) *Possessives in English: An Explanation in Cognitive Grammar*, Oxford and New York: Oxford University Press.avid

【成績評価の方法と基準】

授業における活動・発言 30%、ターム・ペーパー 70%で評価する。ターム・ペーパーが最も重要であり、自分で問いを設定し、かつ方法論を踏まえて先行研究を評価し批判し、その上にとって自分独自の分析を提示しているかを採点する。

従って、ただ、先行研究をまとめたようなペーパーは評価されない。また、独自の仮説、主張を含まないようなペーパーも評価されない。

【学生の意見等からの気づき】

常に学生の理解度をチェックし、柔軟に対応できるようにする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・統語論・歴史言語学

<研究テーマ>

英語の統語構造の通時的変化を、統語理論を使って分析する。

<研究業績>

Grammaticalization as Economy. 2007

掲載誌名 近代英語研究 (*Studies in Modern English*) (近代英語協会) 23号
The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition. 2007

掲載書名 *Nominal Determination*.

出版社 John Benjamins.

Recursion in Language Change.

掲載書名 *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*. 2008
(*Studies in English Medieval Language and Literature Series*. Vol. 22)

出版社 Peter Lang Publishing.

【Outline and objectives】

This course covers the main events in the historical development of the English language. Some theoretical aspects of the language changes is also included. Through studying the history of English students can achieve a variety of aims both theoretical and philological.

LIN500B3

言語科学特講Ⅱ B

大沢 ふよう

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語の変化の概論的知識を獲得し、統語構造の分析に関して理論の基礎的知識を得る。さらに実際に起こった英語の言語変化を理論的に説明する。目的は現代英語との違いを知ることにより、何故現代英語が今日のようなあり方をしているのかを系統だてて理解するためである。

<講義題目> 英語の統語構造の通時的変化の理論的分析

【到達目標】

英語史における統語構造の変化に関して先行研究を踏まえ、独自の分析を提案することをめざす。学生は、単に先行研究を学ぶだけではなく、批判点も見つけるように学ぶことを目指す。最終的には生成文法理論の基本的な概念を使って個々が疑問に思った英語の変化についての疑問点を解くことができるようになることが目標である。生成文法のいくつかの原理を使って、ある構造が何故古英語では許されなかったかを解明することをめざす。従来の先行研究とは違う独自分析を構築することを目指す。

具体的には、

文法化現象が何故起きたのか。

文法化現象が通言語的に観察されるのは、何故か。

英語の変化の独自性

といった問題を論じることができるような研究能力、分析能力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

秋学期も基本的には春学期と同じ方法で授業は進行するが、学生が研究論文を担当して内容について発表するだけではなく、自分が疑問に思う課題を幾つか見つけて、その解決を考えるという作業に取り組み機会を増やすようにする。そうした内容について授業時間内に発表してもらい、それぞれの研究について議論し合う時間を増やしたい。

随時、学生に反応をリアクションペーパーなども活用して求める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	秋学期授業の紹介と進め方についての解説
第2回	春学期の復習と、課題についての講評	課題について、評価を行う。
第3回	英語の変化	英語史の変化の概説を行う。
第4回	古英語：概観	古英語の統語構造についてまとめた解説を行う。
第5回	中英語：概観	中英語の統語構造についてまとめる。
第6回	近代英語：概観	近代英語の統語構造についてまとめる。
第7回	英語の変化とは	英語の変化は他の言語に比べてどのような違いがあるのか、論文を読みながら検討する。
第8回	英語史における格	初期英語における格について基本的知識を学ぶ。
第9回	GB理論における格理論についての議論	格と生成理論について基本的な事柄を学ぶ。
第10回	ミニマリストにおける格理論についての議論	解釈不可能な格とは何かについて学習する。
第11回	機能範疇	古英語において機能範疇は存在したか、という問題を検討する。
第12回	古英語における名詞句	名詞句構造はどのように変化してきたかを学ぶ。
第13回	名詞句と冠詞	何故冠詞は英語において出現したのか、という問題を検討する。
第14回	総括	英語はどのように変化してきたか、を考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

春学期よりさらに、高いレベルの英語を読みこなす力と、英語で、まとまった思考を表すことができるようになるために、授業時間内に扱う論文以外に指定した論文を授業時間外の学習課題として指定する予定である。自分の研究課題が見つけれられるような、研究書の読み方を心がけてほしい。

【テキスト（教科書）】

I 冊のテキストではなく、次の主要な文献を読み、それらに基づいて分析・議論する。また授業の進行具合に応じて、適宜必要な文献を追加指定していく予定である。

次の2冊は必ず準備することが必要である。

Denison, David (1993) *English Historical Syntax*, London: Longman.

Lyons, Christopher (1999) *Definiteness* Cambridge University Press.

【参考書】

- Alexiadou, Artemis (2004) "On the Development of Possessive Determiners," In *Diachronic Clues to Synchronic Grammar*, ed. by Eric Fußband Carola Trips, 31-58. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Allen, Cynthia (2008) *Genitives in Early English: Typology and Evidence*, Oxford: Oxford University Press.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to Government and Binding Theory 2nd*. Blackwell
- Osawa, Fuyo (2000) "The Historical Emergence of DP in English" *English Linguistics*. 17.1. 51- 79.
- Osawa, Fuyo (2007) "The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition," *Nominal Determination: Typology, Context Constraints, and Historical Emergence*, ed. by Elizabeth Stark, Elizabeth Leiss and Werner Abraham, 311-337. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Osawa, Fuyo (2009) "The Emergence of DP in the History of English: The Role of the Mysterious Genitive," *Historical Linguistics 2007*, ed. by Monique Dufresne, Fernande Dupuis and Etleva Vocaj, 135-148. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Radford, Andrew (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosenbach, Anette (2002) *Genitive Variation in English: Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Berlin and Hawthorne, NY: Mouton de Gruyter.
- Taylor, John R. (1996) *Possessives in English: An Explanation in Cognitive Grammar*, Oxford and New York: Oxford University Press.

【成績評価の方法と基準】

授業における活動・発言 30 %、ターム・ペーパー 70 %で評価する。ターム・ペーパーが最も重要であり、自分で問いを設定し、かつ方法論を踏まえて先行研究を評価し批判し、その上にとって自分独自の分析を提示しているかを採点する。

従って、ただ、先行研究をまとめたようなペーパーは評価されない。また、独自の仮説、主張を含まないようなペーパーも評価されない。

【学生の意見等からの気づき】

学生の理解度をチェックし、柔軟に対応する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

英語学・統語論・歴史言語学

<研究テーマ>

英語の統語構造の通時的変化を、統語理論を使って分析する。

<主要研究業績>

Recursion in Language Change.

Fuyo Osawa

掲載書名 *Historical Englishes in Varieties of Texts and Contexts*. 2008 (*Studies in English Medieval Language and Literature Series*. Vol. 22)

出版社 Peter Lang Publishing.

The Emergence of DP from a Perspective of Ontogeny and Phylogeny: Correlation between DP, TP and Aspect in Old English and First Language Acquisition. 2007

Fuyo Osawa

掲載書名 *Nominal Determination*. 311- 337. 査読有

出版社 John Benjamins

Grammaticalization as Economy. 2007

大澤ふよう

掲載誌名 近代英語研究 (*Studies in Modern English*) (近代英語協会) 23

号. 147-155. 査読有

【Outline and objectives】

This course covers the main events in the historical development of the English language. Some theoretical aspects of the language changes is also included. Through studying the history of English students can achieve a variety of aims both theoretical and philological.

LIN500B3

言語科学特講Ⅲ B

石川 潔

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

外国語教育や音声学は昔から実験科学分野だが、近年は統語論研究においても実験研究への志向が見られる。しかし、実験計画法や(実験データの処理のための)統計学は、日本の言語学教育の一部になっているとはいえない。よって、教育・音声・統語解析・理論言語学を専門とする皆様のために、実験データ分析の中級レベルの導入を行いたい。

<講義題目>心理言語学データの分析法(中級編)

【到達目標】

本来このような大学院科目は、履修者のニーズに応じて内容自体を変えるべきであり、具体的に何を指すかは履修者の希望と照らし合わせて決定する。しかしここでは、担当者の守備範囲の例示として、混合効果一般化線形モデルの入門を挙げておく。その場合の到達目標は以下の通り：

- ・正規分布しないデータ(特定の選択肢の「選択率」やコーパスでのカウント数など)を一般化混合モデルで分析できるようになること。
- ・伝統的な分散分析では扱えない、実験参加者に加えて言語刺激についても一般化が必要になる通常の心理言語学実験のデータを、混合効果モデルで分析できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

以下の授業計画は、混合効果一般化線形モデルの入門の例。但し、その場合でも、具体的な進捗・内容は例示に過ぎない。

いずれにせよ、輪読形式にはならない予定。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	環境整備	統計環境 R の導入
2	モデルの構築という考え方	線形回帰、およびその統計量の意味
3	線形回帰モデルの構築法	最小二乗法、最尤法
4	重回帰分析の基礎 1	複数の変数による予測
5	重回帰分析の基礎 2	モデル全体としての予測と、個々の予測変数の寄与度との、違い
6	重回帰分析の基礎 3	モデル間の比較による、個々の予測変数の寄与度の評価
7	重回帰分析の基礎 4	分布に関する前提
8	線形モデル	伝統的な分散分析や t 検定の、線形回帰モデルとしての表現
9	選択率データの分布	2 項分布、 <i>arcsine square-root transformation</i> 、 <i>logit transformation</i>
10	ロジスティック回帰 1	ロジット及びロジスティック関数、線形予測子、リンク関数、 <i>separation</i>
11	混合効果モデル 1	固定因子および変数因子の概念
12	混合効果モデル 2	<i>subject analysis</i> と <i>item analysis</i>
13	混合効果モデル 3	変数因子にもとづく傾き・切片
14	混合効果モデル 4	モデル選択

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい(わからない箇所は教員または周囲に尋ねること)。

また、上記の授業計画の場合は、

・実験技法を学んだら、同じ(または似た)技法を使った他の論文を自分で読んでみる。

・統計技法を学んだら、同じ(または似た)技法を使った他の論文を自分で読んでみたり、自分の手持ち(または架空)のデータを分析してみる。

といった作業を行うと良いでしょう。

【テキスト(教科書)】

なし。

【参考書】

Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge University Press.

久保拓弥 (2012). 『データ解析のための統計モデリング入門—

一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC』

東京：岩波書店。

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、学期末試験 50 % (混合効果一般化線形モデルの場合：重回帰 10 %、一般化線形モデル 20 %、混合効果モデル 20 %)

【学生の意見等からの気づき】

N/A.

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムには、自分が普段アクセスするメールアドレスを登録しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）
 ＜研究テーマ＞ 音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

＜主要研究業績＞

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An intermediate-level course on statistical analysis of experimental data

LIN500B3

言語科学特講ⅣA

川崎 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論していく。言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	人の言語能力	第一言語習得
3	言語習得研究 1	第一言語習得と第二言語習得
4	言語習得研究 2	L2 研究の歴史
5	言語獲得と言語習得	Learning & Acquisition
6	研究計画発表 1	修士 2 年生による研究計画発表・進捗状況の報告
7	研究計画発表 2	博士後期課程学生による研究計画発表・修士 1 年生による研究テーマ発表
8	エラーに関する研究 1	transfer エラー・developmental エラー
9	エラーに関する研究 2	Error Analysis
10	学びと注意 1	暗示的・明示的学び
11	学びと注意 2	気づき仮説
12	学生による発表 1	レビュー論文
13	学生による発表 2	実験による仮説検証
14	研究法	研究手法比較と研究計画の作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の文献・論文を読むこと。そして、担当箇所については、十分な調査を各自行い、他人にわかりやすく発表すること。発表の準備は十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内にてその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

＜博士後期課程学生＞

授業参加点：30%

授業内発表：30%

Squib(論文)：40%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の基礎知識、興味の内容が大きく異なるため、それぞれの興味に応じて扱う題材を調整していきたいと思っています。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」
白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

[Outline and objectives]

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

HIS500B4

言語科学特講ⅣB

川崎 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の研究を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる第二言語習得の理論、研究方法を学ぶ。

【到達目標】

一音韻論、及び SLA の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法を学ぶ。

一 SLA の音韻習得・語彙習得の論文を読み、習得・音韻理論への理解を深める。

一自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の形にすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所のコアになるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりまぜながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション 第一言語習得と第二言語習得	授業内容の説明・母語の影響
2	修士2年生の研究発表	研究の進捗状況発表（2年生）
3	修士1年生・研修生の研究発表	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）
4	習得理論 1	<i>Noticing</i>
5	習得理論 2	<i>input</i> と <i>output</i>
6	習得順序 1	処理可能性理論
7	習得順序 2	セイリエンス
8	第二言語習得の研究手法	学生による実験論文の発表
9	データの分析・可視化 1	データ分析・統計処理
10	データの分析・可視化 2	データ分析・統計処理（ハンズオンデータによる実習）
11	論文構成	論文の構成・書式について学ぶ
12	1年生による修論計画発表	1年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表。
13	2年生による修論発表	2年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

＜博士後期課程＞

授業発表...30%

授業内での発言・議論への貢献...30%

Squib(論文)40%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 音韻論、第二言語習得

＜研究テーマ＞ 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

＜主要研究業績＞

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第二言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」
白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフィーズ)』くろしお出版.(2017)

[Outline and objectives]

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

HIS500B4

言語科学特講V A

ブライアン・ウィスナー

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

This course examines key concepts in second language (L2) acquisition theory, research, and pedagogy. Students examine and classify theories of L2 learning and apply the findings to the development of principled approaches to L2 pedagogy.

<講義題目>

第二言語習得 *Second Language Acquisition*

【到達目標】

Through this course, M.A. and doctoral students are expected to be able to do the following:

1. *Explain the core issues in L2 acquisition research*

2. *Examine the connection between L2 research and pedagogy*

In addition to 1 and 2, doctoral students are expected to be able to do the following:

3. *Conduct research on instructed L2 learning, and relate the findings to L2 learning and teaching in Japan*

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

Most classes will consist of group discussions, presentations, and lectures on topics in L2 acquisition and pedagogy. Students then apply this knowledge by conducting research, presenting findings, and discussing these topics.

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction to the course	Presentation of key concepts in second language acquisition and teaching
第2回	First language acquisition	How do people learn an L1?
第3回	Second language acquisition	How do adults learn an L2?
第4回	Age and L2 acquisition	How does age affect L2 acquisition?
第5回	Interaction in L2 classrooms	Does interaction lead to L2 acquisition?
第6回	Focus on form	Attending to meaning and form in L2 learning
第7回	Acquisition of L2 grammar	How is L2 grammar acquired?
第8回	Acquisition of L2 vocabulary	Issues related to L2 vocabulary acquisition
第9回	Contexts of instructed second language acquisition	In what ways does the linguistic environment influence L2 acquisition?
第10回	Foreign language aptitude	Does language aptitude influence L2 learning?
第11回	Motivation	To what extent does motivation affect L2 learning?
第12回	Affect and other individual differences	What other variables play a role in L2 learning?
第13回	Research presentations	Research project presentations
第14回	Feedback on research presentations and final exam	Discussion of and feedback on students' research projects and final exam

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

Students should complete reading assignments before the class in which they are discussed. Presentations should be prepared outside of class—this entails meeting and coordinating with your group members.

【テキスト (教科書)】

Patsy M. Lightbown, and Nina Spada. (2013). How languages are learned. Oxford University Press. Approximately 4,200 yen.

【参考書】

Shawn Loewen. (2015). Introduction to instructed second language acquisition. Routledge.

Lourdes Ortega. (2009). Understanding second language acquisition. Hodder Education.

Rod Ellis. (2008). The study of second language acquisition (2nd edition). Oxford University Press.

H. Douglas Brown. (2007). *Teaching by principles: An interactive approach to language pedagogy (3rd edition)*. Longman.

H. Douglas Brown. (2006). *Principles of language learning and teaching (5th edition)*. Longman.

【成績評価の方法と基準】

< M.A. Students >

In-class presentations: 50%

Written report: 25%

Final exam: 25%

< Doctoral Students >

In-class presentations: 25%

Written report: 25%

Research proposal: 25%

Final exam: 25%

Students will be evaluated based on in-class presentations related to the content covered in class and their performance on writing assignments and a final exam. Highly evaluated presentations and reports demonstrate synthesis of the course content and follow academic presentation and writing conventions. Details will be given in class. Students are expected to attend every class. A grade of "E" will be given for missing an assignment (i.e., presentation, report, or test) or for being absent from four or more classes.

【学生の意見等からの気づき】

Students commented that they benefited from conducting research and preparing presentations on the course content. I plan to allot more time for students to reflect on the course content and to conduct research for their presentations.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 第二言語習得・英語教育学

<研究テーマ> 第二言語習得におけるメタ言語的知識の役割、言語テストの妥当性

<主要研究業績>

- ・『MY WAY: English Communication I』共著 2013年3月 三省堂
- ・『MY WAY: English Expression I』共著 2013年3月 三省堂
- ・『英語教育学の実証的研究法入門』共著 2012年8月 研究社

HIS500B4

日本史学研究 I

小倉 慈司

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『類聚三代格』から検討する日本古代史。『類聚三代格』を題材に古代法制史料を独力で読解できるようにし、大学院生にふさわしい研究能力・論文執筆能力を身につける。

【到達目標】

古代法制史料を独力で読解できるようにする。文字の異同も含めた本文検討ができるようにする。史料をもとに先行研究を把握し、自ら課題を発掘して研究を進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代史の基本的な法制史料である『類聚三代格』を一点ずつ取り上げ、読解を行ない当該史料の歴史的意義や先行研究、問題点について報告する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	『類聚三代格』の研究史	ガイダンス
第2回	『類聚三代格』巻1 和銅4年4月20日詔・天平10年4月22日勅(1)	左記史料の検討
第3回	『類聚三代格』巻1 和銅4年4月20日詔・天平10年4月22日勅(2)	左記史料の検討
第4回	『類聚三代格』巻1 寛平9年4月10日官符(1)	左記史料の検討
第5回	『類聚三代格』巻1 寛平9年4月10日官符(2)	左記史料の検討
第6回	『類聚三代格』巻1 寛平5年3月2日官符(1)	左記史料の検討
第7回	『類聚三代格』巻1 寛平5年3月2日官符(2)	左記史料の検討
第8回	『類聚三代格』巻1 弘仁2年2月6日官符(1)	左記史料の検討
第9回	『類聚三代格』巻1 弘仁2年2月6日官符(2)	左記史料の検討
第10回	『類聚三代格』巻1 斉衡2年5月21日官符(1)	左記史料の検討
第11回	『類聚三代格』巻1 斉衡2年5月21日官符(2)	左記史料の検討
第12回	『類聚三代格』巻1 貞観17年3月28日官符(1)	左記史料の検討
第13回	『類聚三代格』巻1 貞観17年3月28日官符(2)	左記史料の検討
第14回	『類聚三代格』巻1 寛平6年11月11日官符	左記史料の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、次回の授業範囲を予習する。特に発表担当者は担当史料の読解や問題点を調べ、レジュメを作成する。

【テキスト（教科書）】

新訂増補国史大系『類聚三代格』前篇（吉川弘文館）

【参考書】

神道大系『類聚三代格』（神道大系編纂会 1993年）
関見監修『狩野文庫本類聚三代格』（吉川弘文館 1989年）
尊経閣善本影印集成『類聚三代格』1～3（八木書店 2005年）
米田雄介編『類聚三代格総索引』（高科書店 1991年）
他、参考文献は適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

配分：平常点（50%）および発表内容（50%）

評価基準：授業参加と発表における取り組み、史料の理解度

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古代史、史料学

<研究テーマ> 古代神祇祭祀制度、延喜式、禁裏公家文庫研究など

<主要研究業績>

（共著）天皇の歴史9『天皇と宗教』（講談社学術文庫 2018年）

「高松宮家伝来禁裏本」の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 178 集（2013 年）
 「『本朝皇胤紹運録』写本の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 163 集（2011 年）

[Outline and objectives]

The aim of this course is to help students acquire the necessary skills and knowledge to write articles on academic journal concerning the Japanese ancient history.

HIS500B4

日本史学研究Ⅱ

及川 亘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世後期の貴族の旅行記を読む。

【到達目標】

中世人の旅行について学ぶとともに、古記録を読む基礎的な能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本史学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の歴史と宗教」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

「言継卿記」弘治二年（1556）の読解を輪読によって進める。参加者に担当箇所を割り当て、担当者の準備した史料読解や解説について討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業方法と使用テキストとに関する説明。輪読担当箇所の決定。
第 2 回	「言継卿記」弘治二年九月十一日条を読む	担当者による報告と討論
第 3 回	「言継卿記」弘治二年九月十一日条を読む（続き）	担当者による報告と討論
第 4 回	「言継卿記」弘治二年九月十二日条を読む	担当者による報告と討論
第 5 回	「言継卿記」弘治二年九月十三・十四日条を読む	担当者による報告と討論
第 6 回	「言継卿記」弘治二年九月十五・十六日条を読む	担当者による報告と討論
第 7 回	「言継卿記」弘治二年九月十七・十八日条を読む	担当者による報告と討論
第 8 回	小括	第 7 回までの読解について討論
第 9 回	「言継卿記」弘治二年九月十九・二十日条を読む	担当者による報告と討論
第 10 回	「言継卿記」弘治二年九月二十一日条を読む	担当者による報告と討論
第 11 回	「言継卿記」弘治二年九月二十二日条を読む	担当者による報告と討論
第 12 回	「言継卿記」弘治二年九月二十三日条を読む	担当者による報告と討論
第 13 回	「言継卿記」弘治二年九月二十四日条を読む	担当者による報告と討論
第 14 回	まとめ	まとめの討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当者は、担当箇所について語彙や背景知識を十分に調査検討し、表面的な読解にとどまらず、論理的に踏み込んだ解釈を試みる事が求められる。もちろん担当者以外も予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

刊本『言継卿記』第三（続群書類従完成会）

※必要箇所については初回にプリントを配布する。

【参考書】

『静岡県史』資料編 7・8、高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世 史料の機能、日本とヨーロッパ』（東京大学出版会、2017 年）、今谷明『言継卿記』（そして、1980 年）、同『戦国大名と天皇』（講談社学術文庫、2001 年）

【成績評価の方法と基準】

平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

単に大体の内容が分かるという大雑把な解釈ではなく、一語一語を大切に丁寧に丁寧な解釈を行うとともに、関連史料の紹介などを通じて、史料に記述された内容の社会的な背景までイメージできるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本中・近世史

<研究テーマ>

中世・近世の都市・流通史研究、中近世移行期の社会経済変動の研究

<主要研究業績>

論文「旅行者と通行証—関所通過のメカニズム」高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世—史料の機能、日本とヨーロッパ—』（東京大学出版会、2017 年）
 編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告 2015-3、2016 年
 論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学 5 戦争と平和』竹林舎、2014 年）

論文「町の経済―算用帳にみる京都の人的結合―」（高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市―史料の魅力、日本とヨーロッパ―』東京大学出版会、2009年）
論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政―戦国時代の寺院史料を読む―』山川出版社、2004年）

【Outline and objectives】

Reading of a Travel Journal Written by an Aristocrat in Medieval Japan

HIS500B4

日本史学原典研究 I

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百練抄』を講読する。中世の漢文史料を訓読し、内容を深く理解する力を養成する。『百練抄』のうち、平安時代後期の部分を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『吉記』『明月記』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』さらには『平家物語』などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	『百練抄』とは	履修のガイダンス
第2回	『百練抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第3回	『百練抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『百練抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第6回	『百練抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第7回	研究発表（2）	報告と議論
第8回	『百練抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第9回	『百練抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第10回	論文批評（1）	報告と議論
第11回	『百練抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第12回	『百練抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	『百練抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集し、レジュメを用意する。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 日本紀略（後篇）百練抄』（吉川弘文館、2007年）
講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史
<研究テーマ>日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS500B4

日本史学原典研究Ⅱ

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

鎌倉時代後期に編纂された公家の歴史書である『百練抄』を講読する。中世の漢文史料を訓読し、内容を深く理解する力を養成する。春学期に引き続き『百練抄』のうち、鎌倉時代前期の部分を取り上げ、本文を訓読・現代語訳し、内容を理解する。その際、同時代の公家日記である『玉葉』『吉記』『明月記』『玉葉』、鎌倉幕府の『吾妻鏡』さらには古文書などの史料や先行研究を参照し、当該記事に関する史実について議論する。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

講読・研究発表や議論、レポート執筆を通じて、中世の国家・政治や社会について研究する方法、研究成果を公表する方法を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	『百練抄』とは	履修のガイダンス
第2回	『百練抄』講読（1）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第3回	『百練抄』講読（2）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『百練抄』講読（3）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第6回	『百練抄』講読（4）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『百練抄』講読（5）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第9回	『百練抄』講読（6）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『百練抄』講読（7）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第12回	『百練抄』講読（8）	本文の読解と関連史実をめぐる議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	『百練抄』と公家の日記	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読する記事について予習しておく。担当者は担当範囲を読解し、関係する史料や研究論文を収集し、レジュメを用意する。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 日本紀略（後編）百練抄』（吉川弘文館、2007年）講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%に合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史
<研究テーマ>日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS500B4

日本古代史特殊研究Ⅰ

山口 英男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史特殊研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「天皇制と地方支配—王権の諸相—Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代の変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式で行います。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組み合わせる場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第3回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第4回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第5回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第6回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第7回	行政関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第8回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第9回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第10回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第11回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第12回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します
第13回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第14回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編
『訳注延喜式』上・中・下
『駒牽関係史料』（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）
『駒牽と相撲』（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

2019年度より授業担当者交代のため該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史（奈良・平安時代史）

<研究テーマ>

古代史科学（正倉院文書の〈書類学〉）

古代の社会と行政機構

牧と駒牽をめぐる諸問題

<主要研究業績>

『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年

「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』

吉川弘文館、2018年）

「正倉院文書と古代史科学」（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本古代史特殊研究Ⅱ

山口 英男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史特殊研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「天皇制と地方支配—玉権の諸相—Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式で行います。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組み合わせる場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第4回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第6回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第7回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第8回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第12回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第13回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第14回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編

『訳注延喜式』上・中・下

『駒牽関係史料』（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）

『駒牽と相撲』（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

2019年度より授業担当者交代のため該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史（奈良・平安時代史）

<研究テーマ>

古代史科学（正倉院文書の〈書類学〉）

古代の社会と行政機構

牧と駒牽をめぐる諸問題

<主要研究業績>

『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年

『正倉院文書に見える「口状」について』（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』

吉川弘文館、2018年）

『正倉院文書と古代史科学』（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本中世史特殊研究 I

末柄 豊

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明2年（1470）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第2回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松園斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論

<主要研究業績>

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

「畠山義総と三条西実隆・公条父子—紙背文書から探る—」（『加能史料研究』22号、2010年）

【Outline and objectives】

Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅱ

末柄 豊

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明2年（1470）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松岡斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論

<主要研究業績>

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

「畠山義経と三条西実隆・公条父子—紙背文書から探る—」（『加能史料研究』22号、2010年）

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅲ

仁平 義孝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会、文化について考察する。

【到達目標】

中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

参加者による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。今年度は正和4年（1315）6月17日条から講読する。報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。また、参加者の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方法の説明、分担の決定
第2回	史料講読1	担当者の報告、質疑・討論
第3回	史料講読2	担当者の報告、質疑・討論
第4回	史料講読3	担当者の報告、質疑・討論
第5回	史料講読4	担当者の報告、質疑・討論
第6回	研究発表1	個人研究の発表
第7回	史料講読5	担当者の報告、質疑・討論
第8回	史料講読6	担当者の報告、質疑・討論
第9回	史料講読7	担当者の報告、質疑・討論
第10回	研究発表2	個人研究の発表
第11回	史料講読8	担当者の報告、質疑・討論
第12回	史料講読9	担当者の報告、質疑・討論
第13回	史料講読10	担当者の報告、質疑・討論
第14回	まとめ	春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十全な準備をする。

【テキスト（教科書）】

『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】

授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）

【学生の意見等からの気づき】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>鎌倉時代政治史

<主要研究業績>「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45集、1992年）

「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003年）

「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79号、2013年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to research the society in the later Kamakura period by reading a diary of Saionji Kinhira.

HIS500B4

日本中世史特殊研究Ⅳ

仁平 義孝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西園寺公衡の日記『公衡公記』を講読し、鎌倉時代後期の政治や社会、文化について考察する。

【到達目標】

中世記録史料の読解力や、鎌倉時代の政治・社会、とくに公家社会に関する研究に必要な方法論を習得することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

参加者による輪番報告を中心に進め、報告に対する質疑・討論を通して条文の理解を深めていきたい。春学期に講読した条文に続けて読み進めていく。報告者は、担当条文から読み取った事柄について詳細に報告し、その報告内容に関して参加者全員で討論する。また、参加者の個人研究発表の機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	史料講読1	担当者の報告、質疑・討論
第2回	史料講読2	担当者の報告、質疑・討論
第3回	史料講読3	担当者の報告、質疑・討論
第4回	史料講読4	担当者の報告、質疑・討論
第5回	研究発表1	個人研究の発表
第6回	史料講読5	担当者の報告、質疑・討論
第7回	史料講読6	担当者の報告、質疑・討論
第8回	史料講読7	担当者の報告、質疑・討論
第9回	史料講読8	担当者の報告、質疑・討論
第10回	研究発表2	個人研究の発表
第11回	史料講読9	担当者の報告、質疑・討論
第12回	史料講読10	担当者の報告、質疑・討論
第13回	史料講読11	担当者の報告、質疑・討論
第14回	まとめ	一年間のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当条文について詳細に調べ、関連史料や先行研究などを精査して十全な準備をする。

【テキスト（教科書）】

『公衡公記』（史料纂集）

【参考書】

授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）

【学生の意見等からの気づき】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>鎌倉時代政治史

<主要研究業績>「執権政治期の幕政運営について」（『国立歴史民俗博物館研究報告』45集、1992年）

「鎌倉幕府発給文書にみえる年号裏書について」（中野栄夫編『日本中世の政治と社会』吉川弘文館、2003年）

「執権時頼・長時期の幕政運営について」（『法政史学』79号、2013年）

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to research the society in the later Kamakura period by reading a diary of Saionji Kinshira.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅰ

白川部 達夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近世社会は、明治維新以後、急速な近代化を達成した歴史的前提を蓄積した時代でした。本講義はこうした近世社会の特徴を東アジアの近世と比較しながら学ぶようにします。

【到達目標】

日本の近世社会の特徴を東アジアと比較しながら説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では、参考文献を読み、これを要約して発表することで、論文の読み方を学びます。また各自のテーマの研究発表、教員の講義などを交えて行い、これについてディスカッションしながら進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方の説明、発表順の確定など
第2回	須田努他編『比較史的にみた近世日本』（東京堂出版、2011年）第1章の講読	深谷克己「東アジアにおける近代移行期の君主・神観念」
第3回	同上、第2章の講読	宮嶋博史「東アジア世界における日本の『近世化』」
第4回	同上、第3章の講読	宮嶋博史「朝鮮史からみた『近世』日本」
第5回	同上、第4章の講読	深谷克己「東アジア世界の再序列化と近世日本」
第6回	同上、第5章の講読	若尾政希「近世日本の思想史的位置」
第7回	学生の研究発表	参加学生の研究の発表と討論を行います。
第8回	同上、第6章の講読	藪田貫「『女大学』のなかの『中国』」
第9回	同上、第7章の講読	久留島浩他「幕末維新期の武士」
第10回	同上、第8章の講読	井上勝生「幕末・維新変革とアジア」
第11回	同上、第9章の講読	須田努「江戸時代中期 民衆の心性と社会文化の特質」
第12回	同上、第10章の講読	山田賢「東アジア『近世化』の比較史的検討」
第13回	同上、第11章の講読	趙景達「朝鮮の民本主義と民衆運動」
第14回	教員の講義	近世日本の百姓の所持と東アジア

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読文献を必ず読むこと、また復習としてレジュメなどを読んでまとめること。

【テキスト（教科書）】

須田努他『比較史的にみた近世日本』（東京堂出版、2011年）

【参考書】

とくにありません。

【成績評価の方法と基準】

論文講読の担当によるレジュメ作成能力（40%）、発表能力（20%）、討論の積極性（20%）、研究発表（20%）として評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィールドバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

とくにありません。

【担当教員の専門分野等】

<日本近世史>

<近世民衆社会意識論>

<『近世質地請戻し慣行の研究』塙書房、2012年>

【Outline and objectives】

In this lecture we will examine the society of the Tokugawa period compared with East Asia.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅱ

白川部 達夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近世社会は、明治維新以後、急速な近代化を達成した歴史的前提を蓄積した時代でした。本講義では、明治維新の思想と社会について検討します。

【到達目標】

明治維新の思想と社会について説明できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では、参考文献を読み、これを要約して発表することで、論文の読み方を学びます。また各自のテーマの研究発表、教員の講義などを交えて行い、これについてディスカッションしながら進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の説明および担当の割り当て
第2回	明治維新研究会編『講座明治維新・10巻、明治維新と思想・社会』（有志舎、2016年）総論の講読・討論	明治維新の思想と社会研究の現状
第3回	同上、第1章の講読・討論	若尾政希「近世後期の政治常識」
第4回	同上、第2章の講読・討論	桐原健真「『帝国』言説と幕末日本」
第5回	同上、第3章の講読・討論	谷山正道「幕末の社会情勢と地域知識人」
第6回	同上、第4章の講読・討論	斉藤洋一「維新前後の身分意識をめぐる葛藤」
第7回	学生の研究発表	学生の研究発表と討論
第8回	講義と討論	近世民衆社会意識論の意義
第9回	講義と討論	百姓の世界意識の構造
第10回	同上、第5章の講読・討論	白川部達夫「世直しと土地所有意識の変容」
第11回	同上、第6章の講読・討論	八嶽友広「民衆教育における明治維新」
第12回	同上、第7章の講読・討論	石居人也「衛生観の生成と医学・医療の近代化」
第13回	講義と討論	百姓の世界の解体—窮民の成立
第14回	講義と討論	世直しと貧富の観念

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義文献を必ず読むこと、また復習としてレジュメなどを読んでまとめること。

【テキスト（教科書）】

明治維新研究会編『講座明治維新・10巻、明治維新と思想・社会』（有志舎、2016年）

【参考書】

とくにありません。

【成績評価の方法と基準】

論文講読の担当によるレジュメ作成能力（40%）、発表能力（20%）、討論の積極性（20%）、研究発表（20%）として評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィールドバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

とくにありません。

【担当教員の専門分野等】

<日本近世史>

<近世民衆社会意識論>

<『近世實地請戻し慣行の研究』塙書房、2012年>

【Outline and objectives】

In this lecture we will examine the thought and society of the Meiji Restoration period.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅲ

西沢 淳男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である関東代官竹垣直道の日記を講読します。個人の日記の中から幕臣としての多様な交遊や社会・文化を読み解いていきます。

【到達目標】

日本近世史社会における幕臣の諸様相を学びながら、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近世史特殊研究Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「江戸の地方文化Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

幕末期の江戸幕府代官であった竹垣直道の日記を講読します。江戸在住の関東代官であった直道を通して、江戸時代における幕臣の交流や社会・文化を読み解いていきます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	代官竹垣直道と竹垣日記	教員による代官制度と竹垣直道及び日記についての概要講義
第3回	「竹垣直道日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第4回	「竹垣直道日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第5回	「竹垣直道日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第6回	「竹垣直道日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第7回	「竹垣直道日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第8回	「竹垣直道日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第9回	「竹垣直道日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第10回	「竹垣直道日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第11回	「竹垣直道日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第12回	「竹垣直道日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第13回	「竹垣直道日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第14回	「竹垣直道日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日記の講読は、各々の分担について、①原本と校合、②日記上の人物・事項の解説、③史料解釈、④関連研究の紹介、⑤史料内容の発展です。十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男「関東代官竹垣直道日記」(4)(高崎経済大学『地域政策研究』第17巻第1号、2014年) < CiNii PDF オープンアクセス >、西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)

【参考書】

「大坂代官竹垣直道日記」1~4

(www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book07.pdf、

[/book10.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book10.pdf)、[/book15.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book15.pdf)、[/book20.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book20.pdf))

その他は、別途授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加（50%）、レポート（30%）、平常点（20%）

【学生の意見等からの気づき】

少人数のため特にはありませんが、より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

特にはありません。

【その他の重要事項】

受講生の能力と意欲により、「竹垣直道日記」(東京大学史料編纂所)の原本を読みます。

【担当教員の専門分野等】

<http://www.tcue.ac.jp/college/rp/faculty/nishizawa.html>

【Outline and objectives】

I read the Diary of Naomichi Takegaki, Local Magistrate of the Kanto Region.

I read and decipher a variety of association and community, culture.

HIS500B4

日本近世史特殊研究Ⅳ

西沢 淳男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である関東代官竹垣直道の日記を講読します。個人の日記の中から幕臣としての多様な交遊や社会・文化を読み解いて行きます。

【到達目標】

日本近世史社会における幕臣の諸様相を学びながら、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近世史特殊研究Ⅳ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「江戸の地方文化Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

幕末期の江戸幕府代官であった竹垣直道の日記を講読します。江戸在住の関東代官であった直道を通して、江戸時代における幕臣の交流や社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	代官竹垣直道と竹垣日記（省略する場合があります）	教員による代官制度と竹垣直道及び日記についての概要講義
第3回	「竹垣直道日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第4回	「竹垣直道日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第5回	「竹垣直道日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第6回	「竹垣直道日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第7回	「竹垣直道日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第8回	「竹垣直道日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第9回	「竹垣直道日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第10回	「竹垣直道日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第11回	「竹垣直道日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第12回	「竹垣直道日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第13回	「竹垣直道日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第14回	「竹垣直道日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日記の講読は、各々の分担について、①原本と校合、②日記上の人物・事項の解説、③史料解釈、④関連研究の紹介、⑤史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男「関東代官竹垣直道日記」(5)(高崎経済大学『地域政策研究』第18巻第1号、2015年) <NiNii PDF オープンアクセス>、西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)

【参考書】

「大坂代官竹垣直道日記」1~4
(www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book07.pdf、
[/book10.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book10.pdf)、[/book15.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book15.pdf)、[/book20.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book20.pdf))
その他は、別途授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加 (50%)、レポート (30%)、平常点 (20%)

【学生の意見等からの気づき】

少人数のため特にはありませんでしたが、日記の内容がより理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

受講生の能力と意欲により、「竹垣直道日記」(東京大学史料編纂所)の原本を読みます。

【担当教員の専門分野等】

<http://www.tcue.ac.jp/college/rp/faculty/nishizawa.html>

【Outline and objectives】

I read the Diary of Naomichi Takegaki, Local Magistrate of the Kanto Region.

I read and decipher a variety of association and community, culture.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅰ

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史研究に関する活字史料およびくずし字史料について理解を深め、論文作成に応用する能力を養成し、高める。史料に基づいて歴史像を再構成し、ディスカッションする能力を養成し、高める。日本近現代政治史に関する幅広い知識と理解を深める。

【到達目標】

日本近代史に関する論文作成スキルを向上させる。日本近代史研究に関する批判的思考力と幅広い知識、特に政治史に関する知識を獲得すると共に、最先端の研究状況を把握する。さらに、日本近代史に関する学術的コミュニケーション能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

原則として講義形式である。ただし、受講生自ら史料（配付資料）を読み、解説し、それに応じて教員と全受講生が質疑応答を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業概要の説明と質疑応答。
2	草書体史料の読解 (1)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「渡辺千秋関係文書」所収書翰史料の読解と関連する知識および研究状況の解説。
3	草書体史料の読解 (2)	同上。
4	草書体史料の読解 (3)	同上。
5	草書体史料の読解 (4)	同上。
6	草書体史料の読解 (5)	同上。
7	草書体史料の読解 (6)	同上。
8	草書体史料の読解 (7)	同上。
9	草書体史料の読解 (8)	同上。
10	草書体史料の読解 (9)	同上。
11	草書体史料の読解 (10)	同上。
12	草書体史料の読解 (11)	同上。
13	草書体史料の読解 (12)	同上。
14	まとめ	本学期的授業全体を振り返り、受講生の成果について、受講生の自己評価と教員の講評を中心に、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第一に簡便なくくずし字辞典の使い方をトレーニングし、授業中に効率よく使いこなせるようにする。第二にテキスト史料を事前配付するので、予習をすること。第三に授業後に史料テキストの読み方を復習し、参考文献・ウェブサイトなどによって関連する知識の拡充と研究状況の把握に努めること。

【テキスト（教科書）】

国立国会図書館憲政資料室所蔵「渡辺千秋関係文書」所収書翰史料コピー版、それが終わった場合には、同「関屋貞三郎関係文書」所収書翰史料コピー版を使用する。

【参考書】

佐々木隆『明治人の力量日本の歴史 21』講談社
伊藤之雄『政党政治と天皇日本の歴史 22』講談社
有馬学『帝国の昭和日本の歴史 23』講談社
季武嘉也『対象社会と改造の潮流日本の時代史 24』吉川弘文館

【成績評価の方法と基準】

テキスト史料の読み方のスキル向上の度合い、授業への参加度（出席回数を含む）を勘案して総合的に成績評価を下す（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の事前調査結果の発表（ショート・プレゼンテーション）など受講生のアクティブな学習活動をいっそう促進する。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板を利用することができる電子機器。

【その他の重要事項】

・「日本近代史研究Ⅱ」（秋学期）との継続履修が望ましい。
・オフィスアワーは、毎週月曜日 13 時 30 分～14 時 50 分長井研究室（ポアソナード・タワー 15 階 1505 室）。複数の申し込みがある場合には、スケジュールの調整を行うことがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本近現代政治史
<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」(『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月)

「田中光顕関係文書紹介」(一)～(十三続)(『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年)

「山県有朋関係文書」第 1～3 巻(山川出版社、2004～2007 年)

「木戸孝允関係文書」第 1～4 巻(東京大学出版会、2006～2009 年)

「河野広中」吉川弘文館(2009 年)、

「河野広中覚書(上)(下)」(『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月)

「韓国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月)

「中国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月)

「棚橋小虎日記・昭和 20 年」(法政大学大原社会問題研究所、2009 年)

「棚橋小虎日記・昭和 17 年」(法政大学大原社会問題研究所、2011 年)

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」(『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月)

「A Year in America」(『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月)

「明治日本と日本人」(独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」、2018 年)

【Outline and objectives】

This class has three main points. The first point is to study old documents, through handouts, written in the prewar period by political leaders and in cursive style. The second one is to study how to make use of those documents in an academic thesis. The third one is to obtain and enhance the skill of an academic discussion on the topics of the Japanese modern history.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅱ

長井 純市

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

日本近現代史研究に関する活字史料およびくずし字史料について理解を深め、論文作成に応用する能力を養成し、高める。史料に基づいて歴史像を再構成し、ディスカッションする能力を養成し、高める。日本近現代政治史に関する幅広い知識と理解を深める。

【到達目標】

日本近代史に関する論文作成スキルを向上させる。日本近代史研究に関する批判的思考力と幅広い知識、特に政治史に関する知識を獲得すると共に、最先端の研究状況を把握する。さらに、日本近代史に関する学術的コミュニケーション能力を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

原則として講義形式である。ただし、受講生自ら史料(配付資料)を読み、解説し、それに応じて教員と全受講生が質疑応答を行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業概要の説明と質疑応答。
2	草書体史料の読解(1)	国立国会図書館憲政資料室所蔵「渡辺千秋関係文書」所収書翰史料の読解と関連する知識および研究状況の解説。
3	草書体史料の読解(2)	同上。
4	草書体史料の読解(3)	同上。
5	草書体史料の読解(4)	同上。
6	草書体史料の読解(5)	同上。
7	草書体史料の読解(6)	同上。
8	草書体史料の読解(7)	同上。
9	草書体史料の読解(8)	同上。
10	草書体史料の読解(9)	同上。
11	草書体史料の読解(10)	同上。
12	草書体史料の読解(11)	同上。
13	草書体史料の読解(12)	同上。
14	まとめ	本学期的授業全体を振り返り、受講生の教員について、受講生の自己評価と教員の講評を中心に、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

第一に簡便なくずし字辞典の使い方をトレーニングし、授業中に効率よく使いこなせるようにする。第二にテキスト史料を事前配付するので、予習をすること。第三に授業後に史料テキストの読み方を復習し、参考文献・ウェブサイトなどによって関連する知識の拡充と研究状況の把握に努めること。

【テキスト(教科書)】

国立国会図書館憲政資料室所蔵「渡辺千秋関係文書」所収書翰史料コピー版、それが終わった場合には、同「関屋貞三郎関係文書」所収書翰史料コピー版を使用する。

【参考書】

佐々木隆『明治人の力量日本の歴史 21』講談社

伊藤之雄『政党政治と天皇日本の歴史 22』講談社

有馬学『帝国の昭和日本の歴史 23』講談社

季武嘉也『対象社会と改造の潮流日本の時代史 24』吉川弘文館

【成績評価の方法と基準】

テキスト史料の読み方のスキル向上の度合い、授業への参加度(出席回数を含む)を勘案して総合的に成績評価を下す(100%)。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の事前調査結果の発表(ショート・プレゼンテーション)など受講生のアクティブな学習活動をいっそう促進する。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板を利用することができる電子機器。

【その他の重要事項】

春学期の「日本近代史研究Ⅰ」との継続履修が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」(『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月)
「田中光顕関係文書紹介」(一)～(十三続)(『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年)
「山県有朋関係文書」第 1～3 巻(山川出版社、2004～2007 年)
「木戸孝允関係文書」第 1～4 巻(東京大学出版会、2006～2009 年)
「河野広中」吉川弘文館(2009 年)、
「河野広中覚書(上)(下)」(『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月)
「韓国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月)
「中国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月)
「棚橋小虎日記・昭和 20 年」(法政大学大原社会問題研究所、2009 年)
「棚橋小虎日記・昭和 17 年」(法政大学大原社会問題研究所、2011 年)
「杉原夷山宛田中光顕書翰について」(『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月)
「A Year in America」(『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月)
「明治日本と日本人」(独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」、2018 年)

【Outline and objectives】

This class has three main points. The first point is to study old documents, through handouts, written in the prewar period by political leaders and in cursive style. The second one is to study how to make use of those documents in an academic thesis. The third one is to obtain and enhance the skill of an academic discussion on the topics of the Japanese modern history.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅲ

森田 貴子

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について検討し、史料から論点を構成する。

【到達目標】

明治期の日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②関連する文献を読み、研究史を理解する能力、③論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

史学専攻「日本近代史特殊研究Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本文化と西洋文化Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第 1 回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第 2 回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第 2 回	史料読解と研究発表	近代天皇制(1)
第 3 回	史料読解と研究発表	近代天皇制(2)
第 4 回	史料読解と研究発表	官僚制(1)
第 5 回	史料読解と研究発表	官僚制(2)
第 6 回	史料読解と研究発表	軍隊(1)
第 7 回	史料読解と研究発表	軍隊(2)
第 8 回	史料読解と研究発表	教育(1)
第 9 回	史料読解と研究発表	教育(2)
第 10 回	史料読解と研究発表	教育(3)
第 11 回	史料読解と研究発表	経済(1)
第 12 回	史料読解と研究発表	経済(2)
第 13 回	史料読解と研究発表	経済(3)
第 14 回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

【テキスト(教科書)】

教場で、適宜プリントを配布する。

【参考書】

教場で、適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度(50%)、報告内容(50%)。

【学生の意見等からの気づき】

時間割を変更しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代史

<研究テーマ>土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』(槇書房、2007 年)

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』(山川出版社、2011 年)

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」(高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004 年)

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」(伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市 3 インフラ』東京大学出版会、2010 年)

【Outline and objectives】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various points.

HIS500B4

日本近代史特殊研究Ⅳ

森田 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について検討し、史料から論点を構成する。

【到達目標】

明治期の日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②関連する文献を読み、研究史を理解する能力、③論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近代史特殊研究Ⅳ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本文化と西洋文化Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第2回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第4回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第5回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第6回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第7回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第8回	史料読解と研究発表	教育（1）
第9回	史料読解と研究発表	教育（2）
第10回	史料読解と研究発表	教育（3）
第11回	史料読解と研究発表	経済（1）
第12回	史料読解と研究発表	経済（2）
第13回	史料読解と研究発表	経済（3）
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

【テキスト（教科書）】

教場で、適宜プリントを配布する。

【参考書】

教場で、適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

演習への参加度（50%）、報告内容（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

時間割を変更しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近現代史

<研究テーマ> 土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子『華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合』（高村直樹編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子『不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容』（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various points.

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅰ

阿部 朝衛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を理解し、各自が保有する資料へ適用し、課題・問題点の把握を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅰ-Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料に方法を適用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第2回	編年研究の基礎1	型式学的前提、属性の抽出と操作方法
第3回	編年研究の基礎2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第4回	編年研究の基礎3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第5回	実践的研究の検討1	モンテリウスの研究1
第6回	実践的研究の検討2	モンテリウスの研究2
第7回	実践的研究の検討3	セリエーション1
第8回	実践的研究の検討4	セリエーション2
第9回	論文の検討1	旧石器時代論文
第10回	論文の検討2	縄文時代論文
第11回	論文の検討3	弥生時代・他論文
第12回	資料の検討1	旧石器時代資料
第13回	資料の検討2	縄文時代資料
第14回	資料の検討3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 *The Theory and Practice of Archaeology*. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 *Archaeology: Theories, Methods, and Practice*. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50%）とレポート（50%）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼を置いて検討する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

『旧石器時代人の利き手の研究法』『日本考古学』23号 2007年

『道具の原材料と組織化』『考古学ジャーナル』560号 2007年

『石器のメンテナンス』『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

『石器製作の技能』『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

『遺跡形成における子供の役割』『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年 新潟県考古学会

『新潟県南部における石器材料資源環境』『帝京史学』25号 2010年

『子ども考古学の誕生』上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of the chronology in the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to make chronology of their own archaeological materials.

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅱ

阿部 朝衛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理、方法を理解し、それを各自が保有する資料に十分適用できる能力の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅰ-2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	春学期の課題・方法の整理
第2回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第3回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第4回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第5回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第6回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第7回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第8回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第9回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第10回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第11回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第12回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第13回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第14回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50%）とレポート（50%）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年 新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年
「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

【Outline and objectives】

This course deals with the chronological and typological methods and theories of the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to understand many kinds of the methods and theories, and apply them to the participants' materials.

HIS500B4

日本考古学特殊研究Ⅲ

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅱ-1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

- 1) 考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討
- 2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第3回	資料整理の実践（1）	土器の拓本
第4回	資料整理の実践（2）	土器の断面実測
第5回	資料整理の実践（3）	写真撮影
第6回	資料整理の実践（4）	事実記載
第7回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第1章）講読（1）
第8回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第1章）講読（2）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第2章）講読（1）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第2章）講読（2）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第3章）講読（1）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第3章）講読（2）
第13回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 自己の実習計画の立案
- 第2回 選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ
- 第3回～第6回 実習内容の復習 用具・用材の特性の理解
- 第7回～第12回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
- 第13回 見学対象資料についての事前学習
- 第14回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30%（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」『法政考古学』第30集（法政考古学会 2004年）

「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第61号（法政大学史学会 2004年）

「小シールと日本考古学の黎明期」『小シールと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会 2014年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会 2017年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS500B4

日本考古学特殊研究IV

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようにする。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究IV」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅱ-2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1) 考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討

2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第3回	資料整理の実践（1）	土器の実測
第4回	資料整理の実践（2）	石器の実測
第5回	資料整理の実践（3）	資料のトレース
第6回	資料整理の実践（4）	デジタルトレースの概要と実技
第7回	資料整理の実践（5）	挿図・図版の構成
第8回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第4章）講読（1）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第4章）講読（2）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第5章）講読（1）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第5章）講読（2）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第6章）講読（1）
第13回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第6章）講読（2）
第14回	成果（レポート）提出と	実習成果レポートの提出、授業の総括講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 自己の実習計画の立案

第2回 発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ

第3回～第4回 実習内容の復習

第5回～第7回 トレースの復習と図化の完了

第8回～第13回 テキスト指定箇所精読と発表資料の作成

第14回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20%（実習・講読への積極的な参加・平常点）

個別発表の水準 30%（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）

討論の成果 20%（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30%（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」『法政考古学』第 30 集（法政考古学会 2004 年）

「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第 61 号（法政大学史学会 2004 年）

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS600B4

日本古代史演習 I

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる実例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけでなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化 I - 1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

春学期は第 21 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (1)	田令第 21 条六年一班条集解 A 部分の論理展開
第 3 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (2)	田令第 21 条六年一班条集解 B 部分の論理展開
第 4 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (3)	田令第 21 条六年一班条集解 C 部分の論理展開
第 5 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (4)	田令第 21 条六年一班条集解 D 部分の論理展開
第 6 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (5)	田令第 21 条六年一班条集解の条文構成の検討
第 7 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (6)	田令第 21 条六年一班条集解古記による大宝令の復原をめぐる (1)
第 8 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (7)	田令第 21 条六年一班条集解古記による大宝令の復原をめぐる (2)
第 9 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (8)	「六年一班」の解釈をめぐる (1)
第 10 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (9)	「六年一班」の解釈をめぐる (2)
第 11 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (10)	条里制の施行をめぐる
第 12 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (11)	班田制施行の実態
第 13 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (12)	虎尾説と明石説の比較検討
第 14 回	班田収授法のまとめ	半年間の講読を踏まえて班田制とは何かについて意見交換を行う。修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）

鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館 蔵 貴重典籍叢書〈歴史篇〉 第一巻～第六巻『令集解』。

その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

(専門領域)

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

(研究テーマ)

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

(主要研究業績)

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』(編著)、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B4

日本古代史演習Ⅱ

小口 雅史

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料(律や類聚三代格)、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけでなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

史学専攻「日本古代史演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化Ⅰ－Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

秋学期は第22条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】
なし / No

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	田令集解第22条還公田条講読(1)	田令第22条還公田条集解A部分の論理展開
第3回	田令集解第22条還公田条講読(2)	田令第22条還公田条集解古記による大宝令の復原
第4回	田令集解第22条還公田条講読(3)	田令第22条還公田条の意味
第5回	田令集解第23条班田条講読(1)	田令第23条班田条集解A部分の論理展開
第6回	田令集解第23条班田条講読(2)	田令第23条班田条集解B部分の論理展開
第7回	田令集解第23条班田条講読(3)	田令第23条班田条集解C部分の論理展開
第8回	田令集解第23条班田条講読(4)	田令第23条班田条集解D部分の論理展開
第9回	田令集解第23条班田条講読(5)	田令第23条班田条集解古記による大宝令の復原
第10回	田令集解第23条班田条講読(6)	校田とは何か
第11回	田令集解第24条授田条講読(1)	田令集解第24条授田条集解A部分の論理展開
第12回	田令集解第24条授田条講読(2)	田令集解第24条授田条集解古記による大宝令の復原
第13回	田令集解第24条授田条講読(3)	課役とは何か
第14回	班田収授法のまとめ(2)	半年間の講読を踏まえて班田制とは何かについて意見交換を行う。修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。

【テキスト(教科書)】

『新訂増補国史大系 令集解』(吉川弘文館)

鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』(岩波書店)、国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書(歴史篇) 第一巻～第六巻『令集解』。

その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

(専門領域)

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

(研究テーマ)

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

(主要研究業績)

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』(編著)、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文书研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録]のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B4

日本古代史演習Ⅲ

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度との比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公開された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史演習Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化Ⅱ－1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本年度は田令集解第21条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説。修論にむけての準備も含まれます。
第2回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（1）	日本田令第21条相当条文の比定と配列（1）
第3回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（2）	日本田令第21条相当条文の比定と配列（2）
第4回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（3）	日本田令第21条相当条文の比定と配列（3）
第5回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（4）	日本田令第21条相当条文の比定と配列（4）
第6回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（5）	日本田令第21条相当条文と対応しない理由（1）
第7回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（6）	日本田令第21条相当条文と対応しない理由（2）
第8回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（7）	日本田令第21条相当条文と対応しない理由（3）
第9回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（8）	日本田令第21条相当条文と対応しない理由（4）
第10回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（9）	均田制との比較（1）
第11回	天聖田令（日本令第21条相当）講読（10）	均田制との比較（2）
第12回	天聖田令（日本令第14条相当）講読（11）	均田制との比較（3）
第13回	天聖田令（日本令第14条相当）講読（12）	武徳霊、開元7年令と均田制
第14回	春学期の総括	唐代均田制と日本古代班田制の比較についての討論。修論テーマとの関わりについても指導します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）

唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）

その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表70%、討論への参加30%。

発表が中心となるが、天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているの
で頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2008年、『エミシ・エブ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後 - FileMaker
による Database の Web 公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying
with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS600B4

日本古代史演習Ⅳ

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度のとの比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公刊された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史演習Ⅳ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化Ⅱ-2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本年度は田令集解第22条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（1）	日本田令第22条相当条文の比定と配列
第3回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（2）	日本田令第22条相当条文の読解
第4回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（3）	日本田令第22条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第5回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（1）	日本田令第23条相当条文の比定と配列
第6回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（2）	日本田令第23条相当条文の読解（1）
第7回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（3）	日本田令第23条相当条文の読解（2）
第8回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（4）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（1）
第9回	天聖田令（日本令第223条相当）講読（5）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（2）
第10回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（6）	日本田令第23条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論完成にむけての報告会を兼ねます。
第11回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（1）	日本田令第24条相当条文の比定と配列
第12回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（2）	日本田令第24条相当条文の読解
第13回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（3）	日本田令第24条相当条文と武徳令・開元7年令との比較
第14回	秋学期の総括	唐代の田種と吐魯番文書にみえる田制実例との比較を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）

唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）

その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20%、発表 50%、討論への参加 30%。

発表が中心となるが、天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文書書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文書世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS600B4

日本中世史演習 I

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三条西実隆の日記『実隆公記』の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世の日記を読解する力を養成するとともに、中世の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

中世の漢文史料を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。戦国時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についてのレジュメを用意して発表した後、その内容に基づいて全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	『実隆公記』とは	履修のガイダンス
第2回	『実隆公記』講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	『実隆公記』講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	『実隆公記』講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	『実隆公記』講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	『実隆公記』講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	『実隆公記』講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	『実隆公記』講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	『実隆公記』講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究報告（2）	報告と議論
第14回	戦国時代の貴族と京都	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意する。発表後、レジュメを修正して全員に配布する。

【テキスト（教科書）】

講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本中世史

〈研究テーマ〉日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS600B4

日本中世史演習Ⅱ

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

戦国時代の古文書の講読を中心とし、担当者の読解・考察についての報告を基に全員で議論する。中世の古文書を読解する力を養成するとともに、中世の国家・社会・文化等について批判的に研究する方法を習得することを目的とする。また、日本中世史に関係する論文批評や研究発表の機会を設ける。

【到達目標】

中世の漢文史料を正しく訓読した上で、語句を調べ、内容を正確に理解し、現代語訳することができる。所定の事項を満たしたレジュメを作成し、発表することができる。関連史料や先行研究を収集・読解・整理し、自分なりの論点を提示することができる。戦国時代を中心に、日本中世史に関する事柄について、自身の見解を提示あるいは発言することができる。所定の条件を満たしたレポートを書くことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。担当者が担当範囲についての発表レジュメを用意して発表した後、発表内容に基づいて全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	戦国時代の古文書	履修のガイダンス
第2回	古文書の講読（1）	読解・考察の報告と議論
第3回	古文書の講読（2）	読解・考察の報告と議論
第4回	論文批評（1）	報告と議論
第5回	古文書の講読（3）	読解・考察の報告と議論
第6回	古文書の講読（4）	読解・考察の報告と議論
第7回	研究発表（1）	報告と議論
第8回	古文書の講読（5）	読解・考察の報告と議論
第9回	古文書の講読（6）	読解・考察の報告と議論
第10回	論文批評（2）	報告と議論
第11回	古文書の講読（7）	読解・考察の報告と議論
第12回	古文書の講読（8）	読解・考察の報告と議論
第13回	研究発表（2）	報告と議論
第14回	戦国社会と古文書	講読内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全員が事前に講読する部分の訓読文を作成する。担当者は担当部分を読解し、関係する論文や史料を収集・読解・整理し、発表レジュメを用意する。発表後、レジュメを修正して全員に配布する。

【テキスト（教科書）】

講読する部分のコピーを配布する。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

議論が活発になるように努める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史
<研究テーマ>日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Read the medieval Chinese texts and train the ability to understand the contents deeply.

HIS600B4

日本近世史演習Ⅰ

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①研究論文を理解することができる。
- ②史料を理解することができる。
- ③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学会発表をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料探訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をもて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

HIS600B4

日本近世史演習Ⅱ

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をもて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

HIS600B4

日本近代史演習Ⅰ

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関する受講生各自の研究と発表、そして担当教員の講評や受講生同士の質疑応答を通して研究の改善・向上について、また学術的コミュニケーションについて学ぶ。

【到達目標】

日本近現代史に関する研究を行う能力・スキルを養成し高めることであり、日本近現代史に関する現在の研究動向を把握することである。また、研究発表（プレゼンテーション）および質疑応答（ディスカッション）を行うことにより学術的なコミュニケーション能力を養成し高めることである。さらに、日本近現代史研究に関する幅広い知識と深い理解を身につけることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は、毎回、発表形式で行われる。受講生各自の研究関心に基づく発表を原則とする。発表者は発表内容に関する資料を作成し、参加者に配布、発表を行う。そのうち、教員を含む参加者全員の講評および質疑応答を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第2回	自由研究発表（1）	発表者の研究関心に基づき論文を予定している発表。
第3回	書評あるいは論文批評（1）	発表者の研究関心に基づき最新刊の学術文献に対する論評。
第4回	史料紹介（1）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介。
第5回	歴史系展示批評（1）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評。
第6回	学会動向紹介（1）	発表者の研究関心に基づき参加した最近の研究大会等の概要紹介。
第7回	自由研究発表（2）	発表者の研究関心に基づき論文を予定している発表。
第8回	書評あるいは論文批評（2）	発表者の研究関心に基づき最新刊の学術文献に対する論評。
第9回	史料紹介（2）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介。
第10回	歴史系展示批評（2）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評。
第11回	学会動向紹介（2）	発表者の研究関心に基づき参加した最近の研究大会等の概要紹介。
第12回	自由研究発表（3）	発表者の研究関心に基づき論文を予定している発表。
第13回	書評あるいは論文批評（3）	発表者の研究関心に基づき最新刊の学術文献に対する論評。
第14回	まとめ	全体総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予告された発表者のテーマに関連する文献を読んでおくこと。他の受講生の発表を自分の発表に活用するための参考事項をまとめておくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。毎回、発表者が印刷物を配布する。

【参考書】

『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全6巻。アジア歴史資料センター。その他、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点100%として成績評価を行う。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

講評（コメント）の中に、学術性を有する配布資料の作成要領や学術的コミュニケーションとしての質疑応答の在り方についても指摘し、注意を喚起する発言を含める。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板上に、毎回授業の要点を記すので、それを参照するIT機器（PC、スマートフォン、タブレットなど）。

【その他の重要事項】

・「日本近代史演習Ⅱ」（秋学期）との継続履修が望ましい。

・オフィスアワーは、毎週月曜日 13 時 30 分～14 時 50 分長井研究室（ボアソナー・ドタワー 15 階 1505 室）、複数の申し込みがある場合には、スケジュールを調整することがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

「山県有朋関係文書」第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

「木戸孝允関係文書」第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

「河野広中」吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

「棚橋小虎日記・昭和 20 年」（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

「棚橋小虎日記・昭和 17 年」（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」2018 年）

【Outline and objectives】

This class has two main points. The first point is that every student has to make his/her presentation based on his/her research of the Japanese modern history and on lately published book or the exhibition of a museum related to the Japanese modern history. The second one is that every student has to be a participant of the discussion among classmates and enhance the skill of an academic discussion on the topics about the Japanese modern history.

HIS600B4

日本近代史演習Ⅱ

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関する受講生各自の研究と発表、そして担当教員の講評や受講生同士の質疑応答を通して研究の改善・向上について、また学術的コミュニケーションについて学ぶ。

【到達目標】

日本近現代史に関する研究を行う能力・スキルを養成し高めることであり、日本近現代史に関する現在の研究動向を把握することである。また、研究発表（プレゼンテーション）および質疑応答（ディスカッション）を行うことにより学術的なコミュニケーション能力を養成し高めることである。さらに、日本近現代史研究に関する幅広い知識と深い理解を身につけることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】
ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は、毎回、発表形式で行われる。受講生各自の研究関心に基づく発表を原則とする。発表者は発表内容に関する資料を作成し、参加者に配布、発表を行う。そのうち、教員を含む参加者全員の講評および質疑応答を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第 2 回	自由研究発表（1）	発表者の研究関心に基づき論文文化を予定している発表。
第 3 回	書評あるいは論文批評（1）	発表者の研究関心に基づく最新刊の学術文献に対する論評。
第 4 回	史料紹介（1）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介。
第 5 回	歴史系展示批評（1）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評。
第 6 回	学会動向紹介（1）	発表者の研究関心に基づき参加した最近の研究大会等の概要紹介。
第 7 回	自由研究発表（2）	発表者の研究関心に基づき論文文化を予定している発表。
第 8 回	書評あるいは論文批評（2）	発表者の研究関心に基づく最新刊の学術文献に対する論評。
第 9 回	史料紹介（2）	発表者の研究関心に基づき取り組んでいる史料の概要紹介。
第 10 回	歴史系展示批評（2）	発表者の研究関心に基づき見学した最近の展示への論評。
第 11 回	学会動向紹介（2）	発表者の研究関心に基づき参加した最近の研究大会等の概要紹介。
第 12 回	自由研究発表（3）	発表者の研究関心に基づき論文文化を予定している発表。
第 13 回	書評あるいは論文批評（3）	発表者の研究関心に基づく最新刊の学術文献に対する論評。
第 14 回	まとめ	全体総括と質疑応答。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予告された発表者のテーマに関連する文献を読んでおくこと。他の受講生の発表を自分の発表に活用するための参考事項をまとめておくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。毎回、発表者が印刷物を配布する。

【参考書】

『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全 6 巻。アジア歴史資料センター。その他、授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 % として成績評価を行う。なお、特別な事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

講評（コメント）の中に、学術性を有する配布資料の作成要領や学術的コミュニケーションとしての質疑応答の在り方についても指摘し、注意を喚起する発言を含める。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板上に、毎回授業の要点を記すので、それを参照する IT 機器（PC、スマートフォン、タブレットなど）。

【その他の重要事項】

・「日本近代史演習Ⅰ」（春学期）との継続履修が望ましい。

・オフィスアワーは、毎週月曜日 13 時 30 分～14 時 50 分長井研究室（ボアソナー・ドタワー 15 階 1505 室）、複数の申し込みがある場合には、スケジュールを調整することがあります。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

日本近現代政治史

＜研究テーマ＞

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

＜主要研究業績＞

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

「山県有朋関係文書」第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

「木戸孝允関係文書」第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

「河野広中」吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

「棚橋小虎日記・昭和 20 年」（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

「棚橋小虎日記・昭和 17 年」（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」2018 年）

【Outline and objectives】

This class has two main points. The first point is that every student has to make his/her presentation based on his/her research of the Japanese modern history and on lately published book or the exhibition of a museum related to the Japanese modern history. The second one is that every student has to be a participant of the discussion among classmates and enhance the skill of an academic discussion on the topics about the Japanese modern history.

HIS600B4

日本考古学演習 I

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。

考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。

先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅲ-1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなるところにあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。

また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。

上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 3 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 4 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 5 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 11 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 12 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 13 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 自己の学習計画の立案

第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末レポート（成果報告） 30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」『法政考古学』第 30 集（法政考古学会 2004 年）
「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第 61 号（法政大学史学会 2004 年）
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS600B4

日本考古学演習Ⅱ

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。
考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。
先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅲ-2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。

次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語らせるための準備を充分に行うことを期待する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 3 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 4 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 5 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 11 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 12 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 13 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 自己の学習計画の立案
第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習
第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末レポート（成果報告） 30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。
※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「宮ノ台式土器にみる回転節文の分布と変遷」『法政考古学』第 30 集（法政考古学会 2004 年）
「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第 61 号（法政大学史学会 2004 年）
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS500B4

日本古文書学研究 I

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本古代（奈良時代から平安時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、読解力を養成することを目的とする。

【到達目標】

律令に規定された公式様文書、公式様文書から派生した公家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解説することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

教科書の内容に沿いつつ、配布プリントを基に講義を進める。古文書について解説した後、参加者に訓読してもらう。また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらう機会を設ける。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。引き続き秋学期に「日本古文書学研究Ⅱ」を履修することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	古文書学とは	履修のガイダンス
第 2 回	検非違使別当宣	古文書に親しむ
第 3 回	紛失状	古文書に親しむ
第 4 回	公式様文書 宣命・詔	様式・機能の解説と訓読
第 5 回	公式様文書 符（1）	様式・機能の解説と訓読
第 6 回	公式様文書 符（2）	様式・機能の解説と訓読
第 7 回	公式様文書 移	様式・機能の解説と訓読
第 8 回	公式様文書 牒	様式・機能の解説と訓読
第 9 回	公式様文書 解	様式・機能の解説と訓読
第 10 回	公式様文書 宣旨	様式・機能の解説と訓読
第 11 回	公家様文書 官宣旨	様式・機能の解説と訓読
第 12 回	公家様文書 院庁下文	様式・機能の解説と訓読
第 13 回	公家様文書 撰関家政所 下文	様式・機能の解説と訓読
第 14 回	公式様文書と公家様文書	授業内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書を用いて予習し、配布プリントを用いて復習する。

【テキスト（教科書）】

佐藤進一『新版 古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）

【参考書】

日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』（吉川弘文館、1983年）
久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く 1 中世文書の流れ』（山川出版社、2006年）

苅米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』（吉川弘文館、2015年）

【成績評価の方法と基準】

学期末試験の点数100%で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

次回取り上げる文書を予告する。

【Outline and objectives】

Learn Japanese archaeological studies systematically and acquire the basic ability of reading old documents.

HIS500B4

日本古文書学研究Ⅱ

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「日本古文書学Ⅰ」から継続し、教科書を基に日本古文書学を体系的に学ぶとともに、古文書読解の基礎的な能力を身につける。日本中世（平安時代から室町時代）に成立した代表的な古文書の様式・機能について理解し、読解力を養成することを目的とする。

【到達目標】

公家様文書および公家様文書から派生した武家様文書の機能と様式について理解することができる。教科書に取り上げられた古文書や関連する古文書を正確に訓読し、内容の概要を読み取ることができる。また、簡単な崩し字を解説することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

教科書の内容に沿って、配布プリントを基に講義を進める。古文書について解説した後、参加者に訓読してもらい、また、古文書写真のプリントを配布し、参加者に翻刻してもらい機会を設ける。漢文訓読の基礎知識を有することを前提に進める。春学期に「日本古文書学研究Ⅰ」を履修することを必須とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	古文書学とは	履修のガイダンス
第2回	公家様文書 国司庁宣	様式・機能の解説と訓読
第3回	公家様文書 繪旨	様式・機能の解説と訓読
第4回	公家様文書 院宣	様式・機能の解説と訓読
第5回	公家様文書 御教書	様式・機能の解説と訓読
第6回	武家様文書 下文（1）	様式・機能の解説と訓読
第7回	武家様文書 下文（2）	様式・機能の解説と訓読
第8回	武家様文書 下知状（1）	様式・機能の解説と訓読
第9回	武家様文書 下知状（2）	様式・機能の解説と訓読
第10回	武家様文書 鎌倉幕府の御教書	様式・機能の解説と訓読
第11回	武家様文書 室町幕府の奉書	様式・機能の解説と訓読
第12回	武家様文書 室町幕府の直状	様式・機能の解説と訓読
第13回	起請文・売券・譲状	様式・機能の解説と訓読
第14回	公家様文書と武家様文書	授業内容の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教科書を用いて予習し、配布プリントを用いて復習する。

【テキスト（教科書）】

佐藤進一『新版 古文書学入門』（法政大学出版局、2003年）

【参考書】

日本歴史学会編『概説古文書学 古代・中世編』（吉川弘文館、1983年）
久留島典子・五味文彦編『史料を読み解く1 中世文書の流れ』（山川出版社、2006年）
薙米一志『日本史を学ぶための古文書・古記録訓読法』（吉川弘文館、2015年）

【成績評価の方法と基準】

学期末試験の点数100%で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

次回取り上げる文書を予告する。

【Outline and objectives】

Learn Japanese archaeological studies systematically and acquire the basic ability of reading old documents.

HIS500B4

日本古代史研究Ⅰ

春名 宏昭

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】

平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけることができます。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになるでしょう。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「王権の政治文化Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

平安前期の改革の時代から平安中期の王朝貴族の時代への移行期間に関しては、嵯峨天皇・藤原良房・藤原基経・宇多天皇に注目して国家・政治のあり方の変化を見ていきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない貴族たちのあり方を見ていきます。

講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組む必要があります。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要の説明
第2回	平安前期の改革	光仁朝～嵯峨朝
第3回	もうワンランク上の国家	新しい国家の目指すもの
第4回	官人の性格変化	摂関政治への序奏
第5回	嵯峨天皇（1）	良吏政治
第6回	嵯峨天皇（2）	太上天皇制の改変
第7回	藤原良房（1）	摂関政治
第8回	藤原良房（2）	安定の時代へ
第9回	藤原基経（1）	陽成天皇の廃位
第10回	藤原基経（2）	光孝天皇の擁立
第11回	藤原基経（3）	阿衡の紛議
第12回	摂関時代（1）	貴族の時代
第13回	摂関時代（2）	推移と展開
第14回	平安時代概観	これまでの授業をふまえて平安時代の概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要です。奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解が必要です。それらを得るためには、どれでもいいですから参考書（該当巻）を読んでみましょう。ただし、著者の理解・興味関心によって内容は必ずしも異なります。

この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということ述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。また、講義の対象とする嵯峨朝の前の時代を知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第5巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』（新書）、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。

基準は平常点30%、レポート70%です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことになっていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史
〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制
〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』(吉川弘文館)

『平城天皇』(吉川弘文館)

【Outline and objectives】

This lecture is attended under the heading of "The Heian period and the aristocracy". We try to understand how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period when the political innovation was extensively carried out.

HIS500B4

日本古代史研究Ⅱ

春名 宏昭

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『続日本紀の史科学』と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】

続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を習得することができる。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能を身につけられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「王権の政治文化Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組む必要があります。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の概要の説明
第2回	天平二年の太政官奏(1)	続日本紀の3つのテキスト
第3回	天平二年の太政官奏(2)	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第4回	天平二年の太政官奏(3)	関連史料の検討
第5回	税司主鑑(1)	大宝令施行直後の地方政治
第6回	税司主鑑(2)	大宝二年二月乙丑条の紹介
第7回	税司主鑑(3)	関連史料の検討
第8回	皇太妃と中宮職(1)	大宝元年七月壬辰条の紹介
第9回	皇太妃と中宮職(2)	天皇のキサキ(妃と夫人・嬪)
第10回	慶雲元年の公廩銀(1)	慶雲元年七月庚子条の紹介
第11回	慶雲元年の公廩銀(2)	関連史料の検討
第12回	衛士の代易(1)	和銅四年九月甲戌条の紹介
第13回	衛士の代易(2)	関連史料の検討
第14回	奈良時代史概観	これまでの授業内容をふまえて奈良時代を概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、現在の通説的理解がいかにも不十分（言葉足らず）かということ述べていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に一般啓蒙書として、中央公論社(文庫)・小学館(文庫)・集英社・講談社(文庫)から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。基準は平常点30%、レポート70%です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史
〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制
〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』(吉川弘文館)
『平城天皇』(吉川弘文館)

【Outline and objectives】

This lecture is attended under the heading of “The world of Shokunihongi”. In the way of taking up some descriptions of Shokunihongi, we were to learn how to grapple with problems in order to understand how Japan changed in the ancient regime.

HIS500B4

日本古代史料研究

山口 英男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

正倉院文書と木簡を中心に、日本古代史料研究の課題、古代史料の特徴、歴史情報抽出の方法を学び考えます。史料のどこに注目したらよいかを知ること、史料の背後の世界へと視野が広がります。

日本古代史を研究するための材料となる史料は、他の時代に比べて数が限定されている印象が強く、新たな検討の余地は少ないように思われがちです。しかし、周知の史料でありながら十全な検討がなされていないものや、研究の進展に応じた再調査・再検討が必要となっている史料が意外に多くあります。何よりも、正倉院文書や木簡など、当時の実務の現場で用いられた書面が大量に残されていることが、日本古代史料の特質です。現代に引きつけていえば、お役所の内部書類が外部に流出したようなものです。まさに「宝の山」といってよい史料群であり、分析されることを待っている情報がまだまだたくさんあります。

これらをどのように分析するのか。記載内容（文字）を読み取るだけでなく、史料を「もの」として分析することで、古代史科学・古文書学の新たな知見が蓄積されて来ています。より多くの情報を史料から抽出することで、古代史研究の地平をさらに広げていくことが期待できます。本講義では、古代史料の「すがた・かたち」を検討しながら、史料の分類と分析の視角・手法を考え、古代史研究の新たな視野を展望します。

【到達目標】

古代史料研究の課題について理解する。

古代史料の特徴を知り、歴史情報を抽出するための視角と分析手法を身につける。

尋ね方を知らなくては近づけない、史料の持つ豊かで多様な情報に接することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は講義形式で進めます。

配布した史料プリントを使いながら、史料の分析とはどういう作業であるのか、その結果何がわかるのか、具体的な例を挙げながら解説します。

2～4回程度の講義のまとめごとに、小レポートを提出してもらうことで、理解と認識の深まりを確かめながら進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義のねらいと進め方
第2回	古代史科学の課題と視角①	古代史料の概要と史料批判
第3回	古代史科学の課題と視角②	古代史料の特徴と分析視角
第4回	正倉院文書の世界①	写経所文書という世界
第5回	正倉院文書の世界②	奈良時代の書類管理
第6回	古代史料に見る情報の定着と移動①	文書と記録
第7回	古代史料に見る情報の定着と移動②	「しごと」の進行と書面の履歴
第8回	木簡と帳簿①	木簡と古代史科学の関係
第9回	木簡と帳簿②	出納業務と木簡
第10回	木簡と帳簿③	「食口」という方法と木簡
第11回	口頭伝達と書面の関係①	宣旨（命令）を受け取る・伝える
第12回	口頭伝達と書面の関係②	書面の背後に見える口頭伝達
第13回	口頭伝達と書面の関係③	口頭伝達による業務進行と書面の「成長」
第14回	まとめ	歴史情報の抽出と史科学

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

配布するテキストに目を通しておいてください。また、講義の内容を、自分なりに文章に整理しておくことをおすすめします。参考書や、講義中に紹介した研究文献にもできるだけ目を通してください。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布するので、講義に必ず持参してください。教科書は使用しません。

【参考書】

山口英男『日本古代の地域社会と行政機構』（吉川弘文館、2019年）

山口英男「正倉院文書に見える「口状」について」（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』吉川弘文館、2018年）
 山口英男「写経所の機構」（犬飼隆編『古代の文字文化』竹林舎、2017年）
 山口英男「正倉院文書と古代史料学」（『岩波講座日本歴史』22、岩波書店、2016年）
 山口英男「正倉院文書から見た「間食」の意味について」（『正倉院文書研究』13、2013年）
 東京大学史料編纂所編『日本史の森を行く』（中公新書、2014年）
 山口英男「正倉院文書に見える文字の世界」（国立歴史民俗博物館他編『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』大修館書店、2014年）
 石上英一編『日本の時代史・30 歴史と素材』（吉川弘文館、2004年）
 石上英一ほか編『古代文書論』（東京大学出版会、1999年）
 正倉院文書マルチ支援（多角的解析支援）データベース *SHOMUS*（東京大学史料編纂所 *SHIPS* データベース <http://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/db.html>）
 奈良文化財研究所 木簡庫データベース <http://mokkanko.nabunken.go.jp/en/>

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、期間中に提出してもらう複数の小レポートの内容によって行います。講義の進行に合わせて課題を出します。小レポートでは、講義の受講を前提に、講義内容の整理とその批判的論評を求めます。理解力（40%）、調査・考察力（30%）、文章力・独創性（30%）を基準に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

小レポートは、提出の翌週にコメントと評価を付して返却しますので、次のレポート作成の参考にしてください。これを繰り返すことで、文章のレベルや内容、説得力が確実にアップします。

【その他の重要事項】

インターネット等から文章を「剽窃」したレポートに対しては厳格な措置を取ります。他人の文章を盗み、あたかも自分の文章であるかのように人を欺く行為が許されないことを十分認識してください。

【Outline and objectives】

Learn research subjects on ancient historical materials in Japan, features of ancient historical documents, and the method of historical information extraction, focusing on Shosoin Document and Wooden Tablet.

HIS500B4

日本中世史研究

及川 亘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中世の京都を題材として、都市のかたち（都市空間・都市景観）を「洛中洛外図」などの画像史料やその他の文献史料を用いて読み解く。また都市固有の諸問題、それに対応するために構成された社会集団について、文書・記録などの文献史料を用いて考察する。

【到達目標】

現代人の生活はしばしば「都市的」と形容される。生活の都市化によって、われわれは都市を基軸とする社会的分業がもたらす様々な日常の便利さや快適さを楽しむとともに、都市ならではの問題にも直面する。日本列島で初めてそれらを民衆レベルまで含めて体験することになったのは、中世の人々であるといえるであろう。われわれの先人が発展させた都市社会の構造・かたちはどのようなものであったのか、近世への展望を含めて考えたい。この授業では、日本中世の都市に関する史料を実際に読み解くことを通じて、史料を自分で読むための基礎的な技能を身につけ、日本中世史に関する基礎的な知識や概念を理解し、説明することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

第2回以降、あらかじめ利用する史料のプリントを配布し、それを読解することによって授業を進めるので、受講者は予習が必要である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方、高校地歴の教育との関連などについて説明する。
第2回	中世都市の類型学	中世都市の諸カテゴリーについて解説する。
第3回	平安京から中世京都へ	中世都市京都の成立について解説する。
第4回	中世京都の都市のかたち	中世都市京都の構成的特徴と戦国期にかけての変容について解説する。
第5回	「洛中洛外図」をよむ①	「洛中洛外図屏風」（歴博甲本）から都市のかたちを読み解く。
第6回	「洛中洛外図」をよむ②	「洛中洛外図屏風」（歴博甲本）から都市のかたちを読み解く。（続き）
第7回	「洛中洛外図」をよむ③	「洛中洛外図屏風」（上杉本）から都市のかたちを読み解く。
第8回	「洛中洛外図」をよむ④	「洛中洛外図屏風」（舟木本）から都市のかたちを読み解く。
第9回	近世京都の成立	京都の近世都市化について解説する。
第10回	「洛中洛外図」をよむ⑤	「洛中洛外図屏風」（林原本）から都市のかたちを読み解く。
第11回	都市共同体の成立	都市的課題とそれに対応して都市民が構成した様々な社会集団について解説する。
第12回	都市共同体の運営	主に都市共同体の最小ユニットである「町（チョウ）」の運営について解説する。
第13回	都市共同体の財政	主に都市共同体の最小ユニットである「町（チョウ）」の財政について解説する。
第14回	エビローグー中世から近世へ	中世都市から近世都市への展望について解説する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に史料（文研・絵画など）を配布し、それに基づいて授業を進めるので、史料読解の予習が必須である。

【テキスト（教科書）】

特に教科書は定めず、レジユメと史料プリントを利用する。

【参考書】

笠松宏至・佐藤進一・百瀬今朝雄編『日本思想体系 22 中世政治社会思想下』岩波書店、1981年
 高橋康夫・吉田伸之ほか編『図集日本都市史』東京大学出版会、1993年
 京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形象』淡交社、1997年
 高橋慎一朗・千葉敏之編『中世の都市 史料の魅力、日本とヨーロッパ』東京大学出版会、2009年
 『日本都市史・建築史事典』丸善出版、2018年

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度 50 %、試験 50 % で評価する。授業への参加度は出席回数だけでなく、史料読解の予習や授業中の発言なども評価する。史料読解の予習では、自分なりの解釈で構わないので史料にまじめに向き合う態度はプラスに評価する。試験では講義の中で開設した概念や用語に関する理解度と史料読解（単なる解釈ではなくそこから何が分かるか）について評価する。

【学生の意見等からの気づき】

歴史学では必ずしも一つの答えが見つかるわけではないが、史料読解や論理展開にいくつかの可能性がある場合も、それらなるべく分かりやすく整理して解説したい。また画像史料を用いるなど当時の社会のあり方をイメージしやすいように留意したい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本中・近世史

〈研究テーマ〉

中世・近世の都市・流通史研究、中近世移行期の社会経済変動の研究

〈主要研究業績〉

論文「旅行者と通行証—関所通過のメカニズム」高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世—史料の機能、日本とヨーロッパ—』（東京大学出版会、2017年）
編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告 2015-3、2016年
論文「中世の戦争と商人」（高橋典幸編『生活と文化の歴史学 5 戦争と平和』竹林舎、2014年）

論文「町の経済—算用帳にみる京都の人的結合—」（高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ—』（東京大学出版会、2009年）
論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政—戦国時代の寺院史料を読む—』山川出版社、2004年）

【Outline and objectives】

Under the theme of Kyoto in the Medieval, we consider the shape of the city (urban space / urban landscape) by using "Rakuchu-Rakugai-zu" etc. In addition, we discuss issues related to cities and their social groups by using document materials.

HIS500B4

日本近世史料学研究 I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究において、くずし字の読解能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。

【到達目標】

- ①くずし字の読解能力を身につける。
- ②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近世史料学研究 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「古文書から読む江戸社会・入門編 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピーを配布するので、まずは自力で読解に取り組む。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書し、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第 2 回	古文書解読入門	近世史料学講義
第 3 回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第 4 回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第 5 回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第 6 回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第 7 回	領地宛行状読解	大名家領の安堵
第 8 回	年貢割付状読解	年貢請求書
第 9 回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第 10 回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第 11 回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第 12 回	変体仮名読解	俳句をよむ
第 13 回	金子借用証文読解	年貢滞納
第 14 回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。

【テキスト（教科書）】

なし。プリントを配布する。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90 %）、平常点（10 %）

【学生の意見等からの気づき】

まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】

学部合同科目であり、文学部史学科専門科目「日本近世史料学 I」と同一内容である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史

〈研究テーマ〉都市論、記憶論

〈主要研究業績〉「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83 巻 1 号、2017 年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88 号、2017 年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B4

日本近世史科学研究Ⅱ

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解説すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。

【到達目標】

- ①くずし字を解説することができる。
- ②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近世史科学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業は日本近世史科学研究Ⅰを履修済みであることを前提として授業を進める。古文書読解の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ペリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領地替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。

【テキスト（教科書）】

なし。プリントを配布する。

【参考書】

『新編古文書読解辞典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90％）、平常点（10％）

【学生の意見等からの気づき】

筆の動きをみることで、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】

学部合同科目であり、文学部史学科専門科目「日本近世史科学Ⅱ」と同一内容である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史
<研究テーマ>都市論、記憶論
<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B4

日本近代史研究Ⅰ

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日露戦争後の明治時代の政治史を学ぶ。20世紀初頭の日露戦争での勝利を経て、世界の列強の注目する軍事力を有ることとなったが、その一方、経済・産業・生活における後進性の克服に努める日本の姿を学ぶ。

【到達目標】

日露戦争後の政治、とりわけ桂閣体制と称される政治状況について知識を得る。次に、当該期の経済・産業・文化・生活の発展・向上に関わる知識を得る。さらに、そうした知識習得を通して今日の日本の在り方に連続するもの、あるいはそれと断絶するものを見出し、20世紀の日本全体を歴史的に考察する手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近代史研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の近代と国際社会Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義形式である。ただし、授業中に配付する資料に記載されている史料を受講生に読ませ、当該期の理解に必要な史料の読解スキル修得を促す。また、取り上げる史実に関する質問を発生し、受講生の応答、グループでの討議・応答を促す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要紹介。
第2回	帝国議会と国会	帝国議会開設から今日の国会までの歴史を理解するビデオの視聴。
第3回	第22回帝国議会の状況	第22回帝国議会の状況・争点。
第4回	第22回帝国議会後の社会情勢	第22回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第5回	第23回帝国議会の状況	第23回帝国議会の状況・争点。
第6回	第23回帝国議会後の社会情勢	第23回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第7回	第24回帝国議会の状況	第24回帝国議会の状況・争点。
第8回	第24回帝国議会後の社会情勢	第24回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第9回	第25回帝国議会の状況	第25回帝国議会の状況・争点。
第10回	第25回帝国議会後の社会情勢	第25回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第11回	第26回帝国議会の状況	第26回帝国議会の状況・争点。
第12回	第26回帝国議会後の社会情勢	第26回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第13回	第27回帝国議会の状況と明治時代の終焉	第27回帝国議会の状況・争点と明治末年の諸情勢
第14回	期末試験	期末試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習として事前に配布された資料を読んでおき、質問事項を考えておく。復習として配布資料を読み直し、次回の授業における質問を考えておき、また参考文献などを利用して自ら疑問点の解消を図ると共に、知識や理解の拡充・深化に努める。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）に代わるものとして、印刷物を配付する。

【参考書】

佐々木隆『日本の歴史21 明治人の力量』（講談社）
小風秀雅『日本の時代史23 アジアの帝国国家』（吉川弘文館）
飯塚一幸『日本近代の歴史3日清・日露戦争と帝国日本』（吉川弘文館）
宮田昌明『英米世界秩序と東アジアにおける日本』（錦正社）

【成績評価の方法と基準】

平常点40％、期末試験60％。特別な事情がなく授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受験しない場合には、不合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

日本近代史に関する基礎的な知識が十分でない受講生がいることから、授業内容の理解に資する質疑応答を積極的に行い、受講生の授業参加の動機付けや積極性を引き出すことに努める。

【学生が準備すべき機器他】

WEB 授業支援システムの掲示板に、毎回の授業の要点や質問事項に対する応答を記述するので、それを利用することが出来る機器。

【その他の重要事項】

学部合同科目（「日本近代史」）である。秋学期の「日本近代史研究Ⅱ」（学部合同科目「日本近代史料学」）との継続履修が望ましい。

【Outline and objectives】

This class has two main points. The first point is to study the politics of Japan in the early 20th century, from the end of the Russo-Japanese War to the end of the Meiji Era. The second one is to study how Japan developed economy, industry, or life style in the above period as one of the Great Powers.

HIS500B4

日本近代史研究Ⅱ

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマは、史料を通して日本近代史の諸相を学ぶことである。毎回、日本近代史研究上の史料に関するトピックを取り上げ解説する。

【到達目標】

日本近代史研究に関わる史料について、史料所蔵機関及び古文書（複写物）を通して学び、史料の調査・収集及び読解の技法を習得する。また、それを通して日本近代史における政治・経済・外交・軍事・社会についての理解を深め、さらに自ら史料所蔵機関を利用し、学習を深める姿勢を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近代史研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の近代と国際社会Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義形式である。受講生の能動的学習を促すために、質疑応答や作業学習、グループディスカッションを採り入れ、双方向的な授業運営に努める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第2回	独立行政法人国立公文書館	機能と所蔵史料の解説。
第3回	外務省外交史料館	機能と所蔵史料の解説。
第4回	防衛省防衛研究所戦史研究センター	機能と所蔵史料の解説。
第5回	アジア歴史資料センター	機能と所蔵史料の解説
第6回	国立国会図書館憲政資料室	電子展示と所蔵史料の解説。
第7回	古文書読解（1）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第8回	古文書読解（2）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第9回	古文書読解（3）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第10回	古文書読解（4）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第11回	古文書読解（5）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第12回	古文書読解（6）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング
第13回	英文史料読解	米国国立公文書館の機能とインターネット公開史料の利用解説。
第14回	期末試験	期末試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、受講前に授業テーマに関するウェブサイトを見たり、配布資料を読んだりしておくこと。また、授業後には配布資料をもう一度読み直し、授業中に得た知識の定着を図ること、さらに授業中に示された参考文献や、その他の関連文献を読むこと。その上で、授業中の質疑応答の際の質問を考慮しておくこと。授業内容については、主に復習用として、授業支援システムの掲示板に毎回要点やコメントなどを記すので、読むようにすること。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）に代わる印刷物を配布する。

【参考書】

『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全6巻
各史料所蔵機関および日本アーカイブズ学会のウェブサイト

【成績評価の方法と基準】

平常点 40%、期末試験 60%として成績評価を行う。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的な知識の不足や古文書読解スキルの不足を感じる受講生がいることから、受講生との質疑応答を活用し、受講生の基礎的な理解の度合いやスキルのレベルに合わせた授業の進行・運営を図るようにする。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板に、毎回授業の要点を記すので、それを参照するIT機器（PC、スマートフォン、タブレットなど）。

【その他の重要事項】

春学期の「日本近代史」との継続履修が望ましい。

【Outline and objectives】

This class has three main points. The first point is to get a basic knowledge about Japanese modern archives. The second one is to get an academic skill for reading old documents written in cursive style of Chinese characters. The third is to study the Japanese modern history through reading those old documents.

CUA500B4

沖縄学入門 I

マルコ・ティネッロ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、世界史における琉球・沖縄の歴史と文化（近現代）について学ぶ。14世紀以降の東アジアにおける琉球国の成立と貿易活動をはじめ、琉球・沖縄と中国・日本との伝統的な関係を学ぶことで、中心＝大国（中国・日本）だけではなく、その周辺（琉球・沖縄）の視点からも東アジアの歴史を認識する。特に、琉球・沖縄の歴史と文化をより国際的な観点から考察するために、沖縄の歴史と韓国やサンマリノ、ハワイなどの歴史との比較を行い、明治政府による琉球併合（「琉球処分」）をグローバルな観点で捉えなおし、世界的な角度から沖縄の基地問題をみるアプローチも行う。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身に付ける。沖縄をはじめ日本・中国・東アジアの歴史を国際的・グローバルな視点から考察し、説明することができる。自分が生まれた国の歴史・文化の知識の重要性を理解した上で、他国の歴史・文化を理解し、それを自分の研究のために生かすことができる。現代日本が諸隣国と直面する領土問題などを歴史的な文脈に即して考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「沖縄学入門 I」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「沖縄学入門 I」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に講義形式で進めるが、各授業の後半において紹介した課題に関する議論のための時間も設けたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概要と目的・到達目標・評価方法等について説明し、講義の全体像を紹介する。
第 2 回	グローバルの中の東アジア	世界史的な視点から東アジアの世界秩序を検討する。
第 3 回	琉球・沖縄の文化	日本の中でも個性的な地域の一つである沖縄について、その文化の特徴を紹介する。
第 4 回	琉球統一国家の成立と文化	先史・グスク・三山時代について考察する。
第 5 回	琉球と中国の関係	琉球と中国の朝貢関係について検討する。
第 6 回	琉球と日本との関係	近世時代における琉球と日本（薩摩藩と徳川幕府）の関係について考察する。
第 7 回	琉球使節の江戸参府	琉球・薩摩・幕府のそれぞれの視点から琉球使節の江戸参府を検討する。
第 8 回	近世東アジアの行列	琉球使節の江戸参府、朝鮮通信使、参勤交代の大名行列などをとりあげ、東アジアの外交について検討する。
第 9 回	琉日関係の隠蔽政策	近世時代における清朝に対する琉球と日本との関係の隠蔽政策について考察する。
第 10 回	米国・仏国・蘭国（西欧列強）と琉球の開国	幕末において米・仏・蘭国と「修好条約」が締結された際の琉球側の対応について検討する。
第 11 回	日本の開国	国際的な視点から日本の開国をとりあげる。
第 12 回	日本の開国と琉球	琉球に対する幕府の外交政策の変化について説明する。
第 13 回	明治維新と琉球所属問題	ヨーロッパの舞台から琉球の所属問題について考察する。
第 14 回	まとめ及び補足	まとめ、また補足を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読む

【テキスト（教科書）】

「参考書」

【参考書】

沖縄の怒：日米への抵抗、ガバン・マコーマック、乗松聡子著、京都：法律文化社、2013年

【成績評価の方法と基準】

平常点（40%）、実証レポート（60%）

【学生の意見等からの気づき】

得になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【日本史】

近世史

徳川幕府と明治政府の外交

『世界史からみた「琉球処分」』榕樹書林、2017年。

【Outline and objectives】

This course presents an overview of Japanese-Ryukyuan relations from both an East Asian and global perspectives. It examines the Sinocentric interstate system in East Asia and its collapse after the arrival of the Western powers in the mid-19th century. We will also explore the changing nature of Japanese diplomacy toward Ryukyu and East Asia from the premodern time to the contemporary era.

CUA500B4

沖縄学入門Ⅱ

マルコ・ティネッロ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、世界史における琉球・沖縄の歴史と文化（近現代）について学ぶ。14世紀以降の東アジアにおける琉球国の成立と貿易活動をはじめ、琉球・沖縄と中国・日本との伝統的な関係を学ぶことで、中心＝大国（中国・日本）だけではなく、その周辺（琉球・沖縄）の視点からも東アジアの歴史を認識する。特に、琉球・沖縄の歴史と文化をより国際的な観点から考察するために、沖縄の歴史と韓国やサンマリノ、ハワイなどの歴史との比較を行い、明治政府による琉球併合（「琉球処分」）をグローバルな観点で捉えなおし、世界的な角度から沖縄の基地問題をみるアプローチも行う。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身に付ける。沖縄をはじめ日本・中国・東アジアの歴史を国際的・グローバルな視点から考察し、説明することができる。自分が生まれた国の歴史・文化の知識の重要性を理解した上で、他国の歴史・文化を理解し、それを自分の研究のために生かすことができる。現代日本が諸隣国と直面する領土問題などを歴史的な文脈に即して考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「沖縄学入門Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「沖縄学入門Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に講義形式で進めるが、各授業の後半において紹介した課題に関する議論のための時間も設けたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要と目的・到達目標・評価方法等について説明し、講義の全体像を紹介する。
第2回	琉球処分	琉球併合（「琉球処分」）について考察する。
第3回	サンマリノと沖縄	サンマリノの歴史から「琉球処分」を先行研究と異なる視点から考察する。
第4回	ハワイ・サイパン・グアム・朝鮮と沖縄	ハワイ・サイパン・グアム・韓国の歴史と沖縄の歴史について比較することで、「琉球処分」の特徴について検討する。
第5回	1872年の琉球国王の「藩王」任命	西洋列強の史料から1872年の明治天皇による琉球国王の「藩王」任命について考察する。
第6回	台湾出兵と琉球の進貢問題	国際的な角度から1874年の台湾出兵と1875年の琉球の進貢問題を検討する。
第7回	1878年の西洋列強に対する琉球側の請願書	1878年の東京滞在琉球人による各国公使への請願書と米・仏公使の対応について考察する。
第8回	前米大統領グラントの調停役割	グローバルな視点からグラントの調停役割について検討する。
第9回	近代の沖縄	明治政府の沖縄県に対する政策について考察する。
第10回	沖縄戦	沖縄戦への道、沖縄戦の経過などについて検討する。
第11回	アメリカ統治時代	米軍支配下の沖縄について考察する。
第12回	沖縄の基地問題	国際的な視点から沖縄の基地問題を考察する。
第13回	尖閣・Diaoyu問題	歴史的な視点から尖閣問題を検討する。
第14回	沖縄の未来を考える	沖縄の歴史、沖縄の文化、沖縄学、沖縄の基地問題などという課題から沖縄の未来について議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読む

【テキスト（教科書）】

参考書

【参考書】

沖縄の怒：日米への抵抗、ガバン・マコーマック、乗松聡子著、京都：法律文化社、2013年

【成績評価の方法と基準】

平常点（40%）、実証レポート（60%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【日本史】

近世史

徳川幕府と明治政府の外交

『世界史からみた「琉球処分」』榕樹書林、2017年。

【Outline and objectives】

This course presents an overview of Japanese-Ryukyuan relations from both an East Asian and global perspectives. It examines the Sinocentric interstate system in East Asia and its collapse after the arrival of the Western powers in the mid-19th century. We will also explore the changing nature of Japanese diplomacy toward Ryukyu and East Asia from the medieval times to the contemporary era.

HIS600B4

東洋史学特殊研究Ⅰ

塩沢 裕仁

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国考古学資料の解説

【到達目標】

近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえば河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には春学期は洛陽市文物管理局が編纂した『古都洛陽』を読み進めていく。春学期は三代といわれる夏・殷（商）・周を中心に報告資料の講読と考古資料の検討を行いたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国考古学の状況と考古学報告活用の意味
第2回	夏代の洛陽Ⅰ	夏都の変遷と二里头宮殿遺址
第3回	夏代の洛陽Ⅱ	夏代の奴隸制国家機構
第4回	夏代の洛陽Ⅲ	夏代洛陽地区の経済と科学技術
第5回	商代早期の都城—西亳Ⅰ	商湯の討夏と偃師商城遺址の発見
第6回	商代早期の都城—西亳Ⅱ	商代の奴隸制国家
第7回	商代早期の都城—西亳Ⅲ	商代洛陽地区の経済と科学技術
第8回	西周の洛陽Ⅰ	洛邑成周の造営
第9回	西周の洛陽Ⅱ	成周の所在、規模、位置付け
第10回	西周の洛陽Ⅲ	西周墓葬と車馬坑
第11回	西周の洛陽Ⅳ	成周の農業と手工業
第12回	東周の洛陽Ⅰ	東周の成立と周王室の衰退
第13回	東周の洛陽Ⅱ	東周国都の王城と成周城の建設規模
第14回	東周の洛陽Ⅲ	東周の貴族墓葬、陪葬坑、車馬坑

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応ができればよい。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

【成績評価の方法と基準】

【評価配分（%）】 発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国考古学・中国古代歴史地理
<研究テーマ>漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。

<主要研究業績>

『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年
『漢魏洛陽城の都市空間』『史潮』新67号、2010年
『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年
『漢魏洛陽城穀水水文考』『東洋史研究』71-2、2012年
『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年
『函谷関遺跡考証—四つの函谷関遺跡について—』『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年
『城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址』『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史学的研究』2017年

【Outline and objectives】

On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

HIS600B4

東洋史学特殊研究Ⅱ

塩沢 裕仁

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国考古学資料の解説

【到達目標】

近年膨大な資料が提示されている中国考古学の現状を理解するとともに研究資料としての中国考古学報告を読み進めるための力を養成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

東アジア文化の発達やその変遷を探索しようとするならば必然的にその淵源たる中国古代文化を研究する必要がある。その方法としては第一に文献を理解することが求められるが、宗教・思想や社会状態の推移を探究するためには物質・環境考証というアプローチもまた不可欠な手法である。古代中国文化の中心地といえば河南洛陽である。本講座では洛陽地域における考古学報告を用い、その読解を通して中国物質文化への理解を深めていきたいと思う。具体的には秋学期は洛陽市文物管理局が編纂した『古都洛陽』を読み進めていく。秋学期は後漢・魏晉・北魏という日本古代とも関連の深い時代の報告資料の講読と考古資料の検討を行いたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	後漢の洛陽Ⅰ	後漢洛陽の規模と宮殿・苑囿
第2回	後漢の洛陽Ⅱ	後漢帝陵と洛陽刑徒墓
第3回	後漢の洛陽Ⅲ	後漢洛陽の商業・経済・対外交渉
第4回	後漢の洛陽Ⅳ	後漢洛陽の科学文化
第5回	後漢の洛陽Ⅴ	高山の漢闕
第6回	後漢の洛陽Ⅵ	中国最古の仏教古刹白馬寺
第7回	魏晉の洛陽Ⅰ	魏晉の洛陽城
第8回	魏晉の洛陽Ⅱ	魏晉の帝陵
第9回	魏晉の洛陽Ⅲ	魏晉の重要墓葬
第10回	魏晉の洛陽Ⅳ	蜀の名将関羽の墓—関林
第11回	北魏の洛陽Ⅰ	北魏孝文帝の洛陽遷都と漢化政策
第12回	北魏の洛陽Ⅱ	北魏の洛陽城
第13回	北魏の洛陽Ⅲ	北魏の帝陵
第14回	北魏の洛陽Ⅳ	仏教寺院の興隆と龍門石窟の開鑿

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は中国語であるが、読解という点からみれば辞書を活用することで中国語を学んだことがなくとも十分に対応ができればよい。積極的な予習を期待する。また、資料の読解と内容への理解を深めるため、博物館や展示会には頻繁に出掛け自分の目で遺物を観察してもらいたい。

【テキスト（教科書）】

授業中に使用する資料は随時配布する。

【参考書】

塩沢裕仁『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年

【成績評価の方法と基準】

【評価配分（%）】 発表内容：50、討論への参加姿勢：50

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国考古学・中国古代歴史地理
<研究テーマ>漢より唐にいたる古代都城遺跡とそれを取り巻く地域の生態環境。

<主要研究業績>

『千年帝都洛陽—その遺跡と人文・自然環境—』雄山閣、2010年
『漢魏洛陽城の都市空間』『史潮』新67号、2010年
『関野貞大陸調査と現在Ⅰ・Ⅱ』東京大学東洋文化研究所、2012年、2014年
『漢魏洛陽城穀水水文考』『東洋史研究』71-2、2012年
『後漢魏晉南北朝都城境域研究』雄山閣、2013年
『函谷関遺跡考証—四つの函谷関遺跡について—』『東京大学東洋文化研究所紀要』169冊、2016年
『城壁・烽火台遺構よりみた潼関城址』『国際シンポジウム・前近代中国における交通路と関津に関する環境史学的研究』2017年

【Outline and objectives】

On reading the Chinese archaeological reports, we will be able to understand the study situation of Chinese Archaeology and cultivate our ability to research on the Chinese archaeological data.

HIS500B4

東洋史学特殊研究Ⅲ

大島 誠二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。今回は、偃師商城と殷墟の部分を輪読する。どのように都市が形成されたのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

考古学資料による分析方法を身につける。
中国古代社会の成立過程を理解する。
中国古代における都市の形態と役割、発展について考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式。参加者に資料を割り当てて、発表して授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	古代中国の都市の機能と発展	古代中国において都市の機能と役割について問い直す。
第2回	偃師商城考古発現①	「偃師商城的晩期大城遺址」を読み、偃師商城遺跡の規模を確認する。
第3回	偃師商城考古発現②	「偃師商城的早期大城遺址」を読み、偃師商城の成立過程を理解する。
第4回	偃師商城考古発現③	「宮城東部的宮廟建築遺址」を読み、偃師商城の中核施設の状況を理解する。
第5回	偃師商城考古発現④	「宮城西部的宮廟建築遺址」を読み、偃師商城の中核施設の状況を理解する。
第6回	偃師商城考古発現⑤	「居民区和手工業遺址」を読み、偃師商城内の住民の居住区と工房の分布を確認する。
第7回	偃師商城的布局形制①	「偃師商城第一期布局形制」を読み、偃師商城の形成過程を考える。
第8回	偃師商城的布局形制②	「偃師商城第二期布局形制」「偃師商城第三期布局形制」を読み、偃師商城の変遷過程を考える。
第9回	関于宮城布局形制变化問題①	「関于宮城布局形制变化問題」を読み、中国各時代の宮城の配置との比較をおこなう。
第10回	関于宮城布局形制变化問題②	「関于宮城布局形制变化問題」を読み、偃師商城における宮城配置の特質を考える。
第11回	殷墟発掘簡史①	「中国近代考古学的産生」を読み、中国考古学史の中で殷墟発掘が果たした役割について考える。
第12回	殷墟発掘簡史②	「甲骨文的発現及殷墟的考証」を読み、殷墟の時代同定の中で甲骨文の果たした役割を考える。
第13回	殷墟発掘簡史③	「殷墟考古歷程」を読み、中華民国時代の殷墟発掘過程をたどる。
第14回	殷墟発掘簡史④	「殷墟考古歷程」を読み、中華人民共和国成立以降の殷墟発掘過程をたどる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016年1月

最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003年（2011年重印）

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50%、レポート 50%

【学生の意見等からの気づき】

できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国古代史、中国考古学

<研究テーマ>秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究

<主要研究業績>

「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部 2005年

「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008年

【Outline and objectives】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Yanshi Shengcheng" and "Yinxu". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

HIS500B4

東洋史学特殊研究Ⅳ

大島 誠二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現研究』上巻を用いる。後期は、「殷墟都邑布局」を輪読する。どのように殷墟が構成され成立したのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

考古学資料による分析方法を身につける。
中国古代社会の成立過程を理解する。
中国古代における都市の形態と役割、発展について考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式。受講者の発表によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	殷墟都邑布局①	「殷墟的自然環境」を読み、殷墟が成立した時代の自然環境の復元を考察する。
第2回	殷墟都邑布局②	「殷墟の布局」を読み、殷墟遺跡の全体像を把握する。
第3回	殷墟都邑布局③	「殷墟宮殿宗廟区」「a. 建築基址」を読み、中核となる建物群の位置と構造を理解する。
第4回	殷墟都邑布局④	「殷墟宮殿宗廟区」「b. 池苑遺址」を読み、宮殿宗廟区内の水利について理解する。
第5回	殷墟都邑布局⑤	「殷墟宮殿宗廟区」「c. 作坊遺址」を読み、宮殿宗廟区内の製作工房について理解する。
第6回	殷墟都邑布局⑥	「殷墟宮殿宗廟区」「d. 小屯宮殿宗廟区内発現的墓葬」を読み、宮殿宗廟区内の墓葬の分布について理解する。
第7回	殷墟都邑布局⑦	「殷墟宮殿宗廟区」「e. 宮殿宗廟区内的甲骨坑」を読み、宮殿宗廟区内での甲骨の出土状況について理解する。
第8回	殷墟都邑布局⑧	「王陵区」を読み、大墓群の分布と付属する陪葬坑、祭祀坑の状況について理解する。
第9回	殷墟都邑布局⑨	「一般族邑」を読み、殷墟周辺の集落址の分布と全体像を把握する。
第10回	殷墟都邑布局⑩	「一般族邑」「a. 居住址群」を読み、殷墟周辺の集落址の具体像を理解する。
第11回	殷墟都邑布局⑪	「一般族邑」「b. 灰坑、水井、窖穴等生活施設」を読み、生活施設の分布状況と内容を把握する。
第12回	殷墟都邑布局⑫	「一般族邑」「c. 家族墓地」を読み、殷墟周辺の墓地の分布とその内容を理解する。
第13回	殷墟都邑布局⑬	「殷墟手工業作坊の分布」「a. 鑄銅作坊」を読み、殷墟における青銅器生産の状況を把握する。
第14回	殷墟都邑布局⑭	「殷墟手工業作坊の分布」「b. 製骨作坊」を読み、殷墟における骨器生産の状況を把握する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現研究』上巻 社会科学文献出版社 2016年1月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003年（2011年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表50%、レポート作成50%

【学生の意見等からの気づき】

映像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国古代史、中国考古学
<研究テーマ>秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究

<主要研究業績>

「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』刀水書房 1996年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部 2005年

「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓群の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008年

【Outline and objectives】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.

As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Yinxu". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

HIS600B4

東洋史学演習 I

齋藤 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】

中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『三国志』
第3回	前回の史料についての検討	『三国志』の成書と内容について
第4回	漢文史料を読む	講読 『晋書』
第5回	前回の史料についての検討	『晋書』の成書と内容について
第6回	漢文史料を読む	講読 『世説新語』
第7回	前回の史料についての検討	『世説新語』の成書と内容について
第8回	歴史評論を読む	講読 『日知録』
第9回	『日知録』を理解するために	顧炎武とその時代について
第10回	『日知録』を読むために	典故について
第11回	『日知録』を考える	講読 『日知録』についての諸研究
第12回	これまでの整理	これまで読んできたものについての比較検討
第13回	参加者各自の問題意識と先行研究	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史

<研究テーマ> 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

<主要研究業績>

「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年

「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS600B4

東洋史学演習 II

齋藤 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史研究の展開
自分の研究をより良いものにするために、文献史料・先行研究と向き合う。

【到達目標】

中国の古代の歴史がいかに記述され、論じられてきたかについて理解を深める。研究の背景にある時代性を認識する。自分と自分の研究の関係について考えていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料や中国古代史に関する研究論文（日本語・中国語）についての講読、整理発表を行い、それをもとに議論を行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	概論	授業の趣旨と進め方
第2回	漢文史料を読む	講読 『資治通鑑』
第3回	前回の史料についての検討	『資治通鑑』の成書と内容について
第4回	研究文献を読む	講読 陳垣『通鑑胡注表微』
第5回	前回の文献についての検討	陳垣とその時代について
第6回	前回の文献に関する補足	胡三省とその時代について
第7回	研究文献を読む	講読 桑原隲蔵の諸論文
第8回	前回の文献についての検討	桑原隲蔵とその時代について
第9回	研究文献を読む	講読 陳垣の諸論文
第10回	研究の比較	桑原隲蔵と陳垣の比較検討
第11回	研究文献を読む	講読 陳寅恪の諸論文
第12回	研究の比較	陳寅恪と陳垣の比較検討
第13回	参加者各自の問題意識の提示	講読 参加者任意の文献
第14回	参加者各自のテーマに基づく問題意識の深化	参加者各自による研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者には各回とも指示した文献の講読もしくは要点整理をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史

<研究テーマ> 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

<主要研究業績>

「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年

「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS500B4

東洋史学演習Ⅲ

水上 和則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶磁史と関連する東アジア交易

【到達目標】

唐から元代にかけて、中国陶磁の名品を生み出した諸窯について学び、陶磁器の鑑賞能力を獲得する。また、わが国で“茶の湯”文化が生まれることで、新たに福建地域へ発注が行われた例など、中国陶磁が東アジアに向けて広く交易されていた事を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代よりわが国への貿易陶磁の中心は、中国であった。

またその多くが、茶文化と深く関わった茶器から始まっており、近世に到り食器類が増加する。中国からの輸入先を俯瞰すると、中心となった生産窯は、現在の浙江省越窯、湖南省長沙窯、福建省建窯、江西省景德鎮窯と推移し、この間に河北省定窯、磁州窯などが並行輸入されている。

以上にあげた諸窯を中心に実物瓷片等から理解を深めてゆく。さらに古窯址の発掘報告書、中国の関係古文書、わが国での研究成果を著した書籍類を読んでゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国陶磁史と東アジア交易入門
第2回	唐代の陶磁	唐三彩と白瓷の完成 河南省白瓷窯としての鞏県窯と、河北省ケイ州窯を出土品の化学分析から違いを理解する。
第3回	宋代の陶磁	宋代は諸窯が林立し、大量生産の始まる時期であった。 宋代名窯の古窯跡探査の紹介と、各窯の製品伝搬を出土品から理解する。
第4回	越州窯 1	越州窯の青瓷生産と秘色瓷 唐代秘色瓷と宋代秘色瓷を、両者の違いを文献から推察し、各地出土品から検証してゆく。
第5回	越州窯 2	青瓷の発展と甌窯・越窯 浙江省青瓷生産の中心地としての甌窯と越窯を、出土品から両窯の違いを学ぶ。
第6回	越州窯 3	諸外国への技法伝搬と周辺諸窯 朝鮮や日本、ベトナムに貿易された越窯製品は、現地に陶磁文化を開花させる。
第7回	長沙窯 1	湖南省長沙窯は、内陸にあるにも関わらず、唐代には大量の瓷器を生産し、国内のみならず海外にも貿易した。古窯址から実態を探る。
第8回	長沙窯 2	長沙窯とイスラム文化系諸国との関係は、唐代から密接なものが見いだせる。ここでは文様を中心に調べてゆく。
第9回	学外見学	東京国立博物館・東京藝術大学陶芸科など、学習にかかわる施設の見学を行う。
第10回	耀州窯 1	華北の青瓷生産と耀州窯 職人移動が確認できる唯一の窯としての耀州窯を学び、技法伝搬の具体的姿を学ぶ。
第11回	耀州窯 2	石炭燃料使用と徳応侯碑 窯神廟と徳応侯碑について学び、当時の生産組織を共に考え推察してゆく。
第12回	定窯 1	定窯窯址の発見について 小山富士夫によって発見された定窯窯址の最新発掘成果を紹介し、理解を深める。
第13回	定窯 2	定窯白瓷の装飾技法 陶磁の装飾法について理解し、その発展を装飾法の伝搬から学んでゆく。
第14回	定窯 3	定窯白瓷と遼の白瓷 遼の白瓷生産は未だ謎のままである。ここでは流通経路から、その謎を追ってゆく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予め講義資料の配布を行うので、授業に関係する箇所を読んでおくことを求める。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

【参考書】

越窯関係
『上林湖越窯』
定窯関係
小山富士夫『定窯窯址の発見について』
詳細は、授業の進行に沿って随時伝える。

【成績評価の方法と基準】

平常の学習意欲を小テスト等で評価（40%）し、あわせて期末学修レポート（60%）の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

東京藝術大学への陶芸実技見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶磁史

<研究テーマ>

唐宋時代の陶磁技法の研究

<主要研究業績>

- (1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002年
- (2)「宋元代景德鎮窯業における素地土配合の研究」『亜州古陶磁研究Ⅳ』2009年
- (3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97号』2015年
- (4)「景德鎮調査原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018年
- (5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第90号』法政大学史学会・2018年

【Outline and objectives】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

HIS500B4

東洋史学演習IV

水上 和則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶磁史と関連する東アジア交易

【到達目標】

唐から元代にかけて、中国陶磁の名品を生み出した諸窯について学び、諸窯における生産品の特徴を区別して理解する。合わせて陶磁器の鑑賞能力を獲得する。

わが国で“茶の湯”文化が生まれることで、新たに福建地域へ発注が行われた例など、中国陶磁が東アジアに向けて広く交易されていた事を学び、茶器を含む陶磁生産が中国からもたらされた技術であることを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代よりわが国への貿易陶磁の中心は、中国であった。

またその多くが、茶文化と深く関わった茶器から始まっており、近世に到り食器類が増加する。中国からの輸入先を俯瞰すると、中心となった生産窯は、現在の浙江省越窯、湖南省長沙窯、福建省建窯、江西省景德鎮窯と推移し、この間に河北省定窯、磁州窯などが並行輸入されている。

以上にあげた諸窯を中心に実物瓷片等から理解を深めてゆく。さらに古窯址の発掘報告書、中国の関係古文書、わが国での研究成果を著した書籍類を読んでゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	磁州窯 1	民衆に好まれた磁州窯製品 磁州窯製品の幅広い生産内容と他窯への影響力を、磁州窯系と呼ばれる諸窯を紹介することで理解する。
第2回	磁州窯 2	漳河の氾濫と巨鹿城 現地出土品の様々な陶磁器を取り上げ、観台鎮磁州窯の生産品を推察する。
第3回	北宋官窯 1	清凉寺窯址の発見と官窯青瓷 汝官窯と呼ばれる青瓷の美しい色合いと、名宝と呼ばれる理由を学ぶ。
第4回	北宋官窯 2	汝官窯と秘色瓷の系譜 官窯には伝統の色合いがある。六朝期に始まり南宋官窯に繋がる青瓷の伝統の色合いを理解する。
第5回	北宋官窯 3	耀州窯と高麗青磁 越窯・耀州窯から北宋官窯・高麗青磁までを、貿易品を中心に港岸遺址や沈船遺物から学ぶ。
第6回	建窯 1	建窯窯址と J. M. プラマー 水吉建窯窯址の発見と出土する天目碗を、調査発掘の報告書から学んでゆく。
第7回	建窯 2	進謙・供御の茶碗 杭州出土の曜変天目から、南宋宮廷と強く結びつく生産窯について学ぶ。
第8回	景德鎮窯 1	景德鎮窯と青白瓷生産 景德鎮窯を紹介し、宋代までの景德鎮製品を学んでゆく。
第9回	景德鎮窯 2	原料枯渇と工房移転 景德鎮は独自の生産組織を生み出してゆく。ここではその理由を、共に考えてゆく。
第10回	景德鎮窯 3	青花瓷生産と貿易陶磁 青花瓷生産の始まりと、貿易発展の様子を歴史資料から学ぶ。
第11回	景德鎮窯 4	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく
第12回	景德鎮窯 5	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく
第13回	景德鎮窯 6	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく
第14回	景德鎮窯 7	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予め講義資料の配布を行うので、授業に関係する箇所を読んでおくことを求める。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

【参考書】

建窯関係
『建窯窯址発掘初探』
景德鎮窯関係
ダントルコール『中国陶磁見聞録』東洋文庫
その他授業の進行に沿って随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常の学習意欲を提出物等で評価（40%）し、あわせて期末レポート課題（60%）の合計で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

博物館・美術館への中国陶磁器見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶磁史

<研究テーマ>

唐宋時代の陶磁技法の研究

<主要研究業績>

- (1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002年
- (2)「宋元代景德鎮窯業における素地土配合の研究」『亜州古陶磁研究 IV』2009年
- (3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97号』2015年
- (4)「景德鎮調査原料の成形性不良と胴糺ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018年
- (5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第90号』法政大学史学会・2018年

【Outline and objectives】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

HIS500B4

東洋史学演習 V

久野 美樹

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

北魏仏教美術史

【到達目標】

仏教美術史の基本を身につけ、物質文化研究の方法及び北魏の仏教美術を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

基本は各自分担任して論文購読、発表。各項目の導入において適宜教員が講義。受講者の研究内容により授業内容変更あり。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の主旨と進め方
第2回	仏教・仏教美術の基本	釈迦の生涯とその美術
第3回	仏教・仏教美術の基本	大乘仏教の基本
第4回	五胡十六国時代の仏教美術	石窟美術の始まり
第5回	北涼の滅亡と平城の関係	敦煌莫高窟初期窟
第6回	『魏書積老志の研究』	北魏建国から涼州の仏教
第7回	濱田瑞美「莫高窟初期窟の図像と窟内構想」	濱田瑞美「莫高窟初期窟の図像と窟内構想」
第8回	『魏書積老志の研究』	廢仏から雲岡石窟造営
第9回	雲岡石窟	雲岡石窟概説
第10回	雲囉五窟論	雲岡石窟大仏像について
第11回	北方民族と漢民族の様式	北方民族と漢民族の様式
第12回	『魏書積老志の研究』	洛陽遷都と龍門石窟造営
第13回	龍門石窟北魏窟1	久野「龍門石窟北魏窟」
第14回	龍門石窟北魏窟2	久野「龍門石窟北魏窟」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

美術館・博物館に行き実物を観察する。

【テキスト（教科書）】

学習する論文は事前にプリント配布。

【参考書】

授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、討論への参加 50 %。物質資料についての正確な理解と研究者としての論理の構築ができているかをみる。

【学生の意見等からの気づき】

仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がける。

【その他の重要事項】

事前配布する論文プリントは当該授業までに読み、議論の準備をする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国仏教美術史、石窟美術研究
 <研究テーマ> 5c. 頃から 8c. 頃の石窟美術にみられる浄土観、仏身観
 <主要研究業績> 「龍門石窟北魏窟」『アジア仏教美術論集 東アジア I』中央公論美術出版、2017 年
 「鴻慶寺石窟第一窟について」『法政史学』第 84 号、2015 年

【Outline and objectives】

Buddhist Art History of Northern Wei Dynasty

HIS500B4

東洋史学演習 VI

久野 美樹

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

唐代仏教美術史

【到達目標】

物質文化研究の方法及び唐を中心とした仏教美術を理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

基本は各自分担任して論文購読、発表。受講者の研究内容により授業内容変更あり。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	中国人の昇天思想	馬王堆墓出土物
第2回	莫高窟西魏窟	莫高窟第 285 窟
第3回	龍門石窟	中国伝統文化からみた龍門
第4回	世俗王権と仏教美術	肥田「一州一寺制と皇帝等身像」
第5回	唐代龍門の大仏像	大仏像の尊格
第6回	唐代龍門奉先寺洞像	唐代龍門奉先寺洞像
第7回	日本への唐文化の影響	奈良の造形
第8回	世俗王権と仏教美術	優填王像の流行と意義
第9回	唐代龍門の一仏多菩薩像	久野「一仏多菩薩像」
第10回	敦煌莫高窟の絵画史	画卷形式から大画面形式へ
第11回	阿弥陀信仰の造形	西方浄土変
第12回	敦煌莫高窟の絵画史	大画面の雲・山岳表現
第13回	唐代龍門の触地印像	唐代龍門の触地印像
第14回	釈迦であり阿弥陀である仏像	釈迦であり阿弥陀である仏像

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

美術館・博物館に行き実物を観察する。

【テキスト（教科書）】

学習する論文は事前にプリント配布。

【参考書】

授業内で随時紹介。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、討論への参加 50 %。物質資料についての正確な理解と研究者としての論理の構築ができているかをみる。

【学生の意見等からの気づき】

仏教美術の基本が理解できるよう丁寧な指導を心がける。

【その他の重要事項】

事前配布する論文プリントは当該授業までに読み、議論の準備をする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国仏教美術史、石窟美術研究
 <研究テーマ> 5c. 頃から 8c. 頃の石窟美術にみられる浄土観、仏身観
 <主要研究業績> 「唐代龍門石窟の研究」中央公論美術出版、2011 年

【Outline and objectives】

Buddhist Art History of Tang Dynasty

HIS500B4

東洋古代史研究Ⅰ

齋藤 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史の基礎史料の講読
中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】

中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	儒家の文献を読む	講読 『論語』
第2回	儒家の文献を読む	講読 『孟子』
第3回	儒家の文献を読む	講読 『荀子』
第4回	儒家の文献を読む	講読 『春秋左氏伝』
第5回	儒家の文献を読む	講読 『春秋公羊伝』
第6回	墨家の文献を読む	講読 『墨子』
第7回	道家の文献を読む	講読 『老子』
第8回	道家の文献を読む	講読 『莊子』
第9回	法家の文献を読む	講読 『管子』
第10回	法家の文献を読む	講読 『商君書』
第11回	法家の文献を読む	講読 『韓非子』
第12回	史書を読む	講読 『史記』
第13回	史書を読む	講読 『漢書』
第14回	史書を読む	講読 『資治通鑑』

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史

<研究テーマ> 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

<主要研究業績>

「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年

「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS500B4

東洋古代史研究Ⅱ

齋藤 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国古代史の基礎史料の講読
中国古代史研究に必要な漢文史料の読解力を高める。

【到達目標】

中国古代史研究に用いる漢文史料を多読し、自力で研究を進めていくために必要な漢文読解力を向上させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、課題となる漢文史料についての講読を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	漢文の文献を読む	講読 『塩鉄論』本議
第2回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』力耕
第3回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』通有
第4回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』錯幣
第5回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』禁耕
第6回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』復古
第7回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』非鞅
第8回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』晁錯
第9回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』刺權
第10回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』刺復
第11回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』論儒
第12回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』憂辺
第13回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』園池
第14回	漢代の文献を読む	講読 『塩鉄論』輕重

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者には各回とも指示した文献の講読をしてもらいます。

【テキスト（教科書）】

授業計画参照。適宜、配布します。

【参考書】

随時、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100 %

発表内容によって評価します。適切な読解・整理が出来ているかが評価基準となります。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 中国古代史

<研究テーマ> 唐代を中心とした中国世界・文化の形成と変容

<主要研究業績>

「唐・回鶻絹馬交易再考」『史学雑誌』108-10、1999年

「9・10世紀敦煌の牧羊代行業について」『歴史学研究』796、2004年

「唐代内附異民族への賦役規定と辺境社会」『史学雑誌』117-3、2008年

【Outline and objectives】

Improving skills and critical minds to study the history of ancient China

HIS500B4

東洋近代史研究Ⅱ

芦沢 知絵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は「近現代の中国経済史」をテーマとする。中国の経済発展は今や目覚ましい。一方、中国がなぜこれほど急速な発展を遂げたのか、また中国経済の実態や構造はどのようなものなのか、疑問を持つ人も多いであろう。そもそも歴史を振り返ってみれば、近代以前の中国は、政治的にも経済的にもアジアの中心であった。しかし、近代以降は列強の進出や戦争の影響により、中国経済は「停滞」したとされる。もっとも、近年の研究では、上海などの沿海都市部における、近代産業の発展的側面も明らかにされつつある。

本授業では、こうした最新の研究成果や諸資料をもとに、中国がどのような過程を経て今日の経済発展に至ったのか概観する。その上で、現在にも通じる中国経済の特質・問題点とは何か、歴史的な視点から共に考えていきたい。

【到達目標】

近現代における中国経済の変遷をたどり、中国近現代史及び中国経済史に関する知識や理解を深めるとともに、歴史的視点からみた中国経済の特質・問題点について、主体的に考察する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的には講義形式をとり、毎回授業後にリアクションペーパーを提出する。また、授業内で文献・史料の読解を行うため、ある程度の子習が必要となる場合もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	中国経済史入門	中国経済史を学ぶ意義・方法
第2回	前近代の中国経済	伝統的商業秩序の形成
第3回	清末の近代化①	開港と外国資本
第4回	清末の近代化②	洋務運動と殖産興業
第5回	民国期の産業勃興①	新興資本家の出現
第6回	民国期の産業勃興②	軍閥と地方財政
第7回	国民政府の経済政策①	中央集権化と幣制改革
第8回	国民政府の経済政策②	戦時下の動員・統制
第9回	戦後の香港・台湾経済	冷戦期の華人資本
第10回	社会主義計画経済①	集団化と国有化
第11回	社会主義計画経済②	政治運動と混乱・停滞
第12回	改革開放と経済成長①	市場経済への移行
第13回	改革開放と経済成長②	WTO加盟とグローバル化
第14回	現在の中国経済	発展と社会矛盾

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で紹介した参考文献や配布プリントをもとに知識と理解を深める。また、中国経済に関するニュースや新聞・雑誌記事にも自主的に目を通し、問題意識を高める。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

主な概説書は以下。その他は授業内で紹介する。

岡本隆司編『中国経済史』名古屋大学出版会、2013年。（第4・5章）
久保亨・高島潤・木越義則『統計でみる中国近現代経済史』東京大学出版会、2016年。
丸川知雄『現代中国経済』有斐閣、2013年。

【成績評価の方法と基準】

① 平常点 30%

毎回授業後のリアクションペーパーの提出を評価する。

② 期末レポート 70%

授業内容に関するテーマをもとにレポートを執筆し提出する。

【学生の意見等からの気づき】

初學者にも理解しやすい講義を心がけ、写真や映像などの視覚的な資料も多く用いる。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムを利用する場合がある。

【Outline and objectives】

This course introduces the history of the modern Chinese economy. The aim of this course is to help students acquire an understanding of the historical process and problems of China's economic growth.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅰ

松原 俊文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。文章と文章のつながりを読み取り、論旨と文脈を正確に捉えることができる。古代ローマ史上の問題とそれに関する近年の研究動向を理解する。以上を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを予習し、内容を把握しておく必要があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第2回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第3回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第4回	文献講読 3	第一節講読
第5回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第6回	文献講読 5	第二節講読
第7回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第8回	文献講読 7	第三節講読
第9回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第10回	文献講読 9	第四節講読
第11回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第12回	文献講読 11	第五節講読
第13回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第14回	春学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定された英文テキストの箇所を十分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。*Blackwell Companions to the Ancient World* シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストをプリントして配布します。

【参考書】

Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), Oxford Classical Dictionary (4th ed.), Oxford, 2012.

Bagnall, R. S., et al. (eds.), The Encyclopedia of Ancient History, Malden, MA, 2012.

Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), Brill's New Pauly, Leiden, 2002-2010.

パウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994年

松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（予習を前提とした授業参加度 50%、英文読解の精度と内容理解度 50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回英和辞書を持っていくこと。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

古代ローマ史

<研究テーマ>

ギリシア・ローマの歴史叙述

<主要研究業績>

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.
2. 「プルタルコス『英雄伝』のコンテキスト」、『西洋古典学研究 LXIV』日本西洋古典学会、2016 年
3. (翻訳) ヘイドン・ホワイト「歴史的な出来事」、ヘイドン・ホワイト／上村忠男監訳『実用的な過去』、岩波書店、2017 年

[Outline and objectives]

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅱ

松原 俊文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。文章と文章のつながりを読み取り、論旨と文脈を正確に捉えることができる。古代ローマ史上の問題とそれに関する近年の研究動向を理解する。以上を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを予習し、内容を把握しておく必要があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	秋学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定された英文テキストの箇所を十分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストをプリントして配布します。

【参考書】

Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), *Oxford Classical Dictionary* (4th ed.), Oxford, 2012.

Bagnall, R. S., et al. (eds.), *The Encyclopedia of Ancient History*, Malden, MA, 2012.

Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), *Brill's New Pauly*, Leiden, 2002-2010.

パウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（予習を前提とした授業参加度 50%、英文読解の精度と内容理解度 50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回英和辞書を持ってくること。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
- 古代ローマ史
- <研究テーマ>
- ギリシア・ローマの歴史叙述
- <主要研究業績>

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of Kodai, 2015.

2. 「プルタルコス『英雄伝』のコンテキスト」、『西洋古典学研究 LXIV』日本西洋古典学会、2016年

3. (翻訳) ヘイドン・ホワイト「歴史的な出来事」、ヘイドン・ホワイト／上村忠男監訳『実用的な過去』、岩波書店、2017年

[Outline and objectives]

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅲ

池本 今日子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア・東欧史の諸問題とその研究方法を学ぶ。

【到達目標】

ロシア・東欧・北欧史に関する理解を深める。
論文作成に必要な、外国語文献の読解能力を高める。
論文作成の準備をする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読と論文作成に向けた研究報告。講読と報告の回数柔軟に対応する。テキストは、ロシア・北欧・東欧に関するロシア語、英語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。たとえば、次のような文献を候補にしているが、柔軟に対応する。
Hugh Ragsdale(ed.), Imperial Russian foreign policy, Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 1993.

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの決定など
第2回	講読①	講読、質疑、解説
第3回	講読②	講読、質疑、解説
第4回	報告①	報告、質疑応答
第5回	講読③	講読、質疑、解説
第6回	講読④	講読、討論
第7回	報告②	報告、質疑、応答
第8回	講読⑤	講読、質疑、解説
第9回	講読⑥	講読、質疑、解説
第10回	報告③	報告、質疑、応答
第11回	講読⑦	講読、質疑、解説
第12回	講読⑧	講読、質疑、解説
第13回	報告④	報告、質疑、応答
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読テキストの予習。報告の準備。各人の専門分野について広く文献を渉猟する。外国語運用能力を身につける。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講読テキストは教員が準備する。

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ロシア史

<研究テーマ>外交、憲法、ポーランド問題

<主要研究業績>『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To learn the problems of Russian and East European history and the research methods.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅳ

池本 今日子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア・東欧史の諸問題とその研究方法を学ぶ。

【到達目標】

ロシア史に関する理解を深める。
論文作成に必要な、外国語文献の読解能力を高める。
論文作成の準備をする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読と論文作成へ向けた研究報告。講読と報告の回数は柔軟に対応する。テキストについては、ロシア・北欧・東欧に関するロシア語や英語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。たとえば、次のような文献を候補にしているが、柔軟に対応する。*Hugh Ragsdale(ed.), Imperial Russian foreign policy, Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 1993.*

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの決定など
第2回	講読①	講読、質疑、解説
第3回	講読②	講読、質疑、解説
第4回	報告①	報告、質疑応答
第5回	講読③	講読、質疑、解説
第6回	講読④	講読、討論
第7回	報告②	報告、質疑、応答
第8回	講読⑤	講読、質疑、解説
第9回	講読⑥	講読、質疑、解説
第10回	報告③	報告、質疑、応答
第11回	講読⑦	講読、質疑、解説
第12回	講読⑧	講読、質疑、解説
第13回	報告④	報告、質疑、応答
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読テキストの予習。報告の準備。各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講読テキストは教員が準備する。

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ロシア史
<研究テーマ>外交、憲法、ポーランド問題
<主要研究業績>『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To learn the problems of Russian and East European history and learn the research methods.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅴ

宮崎 亮

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では前4世紀の二つの法廷弁論、すなわちアンドキデース『弁論』第1番およびリュシアース『弁論』第6番を取り上げ、演習形式で読み進める。二次文献（研究文献）ではなく一次文献（原史料）に当たることによって、受講者各人はアテナーイ社会に接近するための自分なりの確かな足場を作ってもらいたい。

【到達目標】

前4世紀アテナーイの法廷弁論を原語（ギリシア語）で読み、ギリシア語の読解力をつけるとともに当時の民主政社会、さらにはボリス社会についての理解を深めること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式でギリシア語テキストを読み進める。訳読はアト・ランダムに指名する。また文法事項についても質問するから、十分に予習してくる。さらに、テキストから当時のアテナーイ社会について何が読み取れるか、報告者を指名して発表してもらう回を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の説明；テキストの配布
第2回	テキスト読解(1)：アンドキデース『弁論』第1番	ペロポネーソス戦争末期のアテナーイ
第3回	テキスト読解(2)：アンドキデース『弁論』第1番	エレウシースの秘儀と秘儀冒瀆事件
第4回	テキスト読解(3)：アンドキデース『弁論』第1番	ヘルメース柱像破壊事件
第5回	テキスト読解(4)：アンドキデース『弁論』第1番	アンドキデースの密告について
第6回	テキスト読解(5)：アンドキデース『弁論』第1番	大赦令について：その実効性
第7回	テキスト読解(6)：アンドキデース『弁論』第1番	引用部分の信憑性；近年の議論
第8回	テキスト読解(7)：アンドキデース『弁論』第1番	何を記憶し、何を忘却するのか、という問題について
第9回	テキスト読解(8)：アンドキデース『弁論』第1番	市民団の和解・融合；いかにして可能か
第10回	小報告	希望するテーマに沿って30分程度の報告をしてもらう。
第11回	テキスト読解(9)：リュシアース『弁論』第6番	アンドキデースの相手側について；告発の意図
第12回	テキスト読解(10)：リュシアース『弁論』第6番	市民的倫理と大赦令
第13回	テキスト読解(11)：リュシアース『弁論』第6番	宗教的要素の強調
第14回	まとめ	ペロポネーソス戦争末期から前4世紀初頭のアテナーイ社会についてのディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業は参加者がギリシア語テキストを毎回事前に読んできていることを前提に進める。ギリシア語の文法的な事項から書かれている内容についてまで、可能な限り下調べをすること。個人差はあろうが、1回の授業につき、予習には最低でも5時間は必要であろう。

【テキスト（教科書）】

M.R. Dilts and D.J. Murphy (eds.), *Antiphontis et Andocidis Orationes* (Oxford, 2018)

C. Carey (ed.), *Lysiae Orationes cum Fragmentis* (Oxford, 2007)

D.M. MacDowell (ed.), *Andokides: On the Mysteries* (Oxford, 1962)

いずれも購入の必要はない。

【参考書】

膨大である。授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献度、すなわち訳読のできばえ = 40% (どれだけ予習してきたか)、報告のできばえ = 40%、ディスカッションへの参加の割合 = 20%の3点から総合的に判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

ギリシア語の読解にかなりの不安を感じているものの、参加を希望する者は、授業初日に担当講師に申し出ること。事情を聞いた上で判断を下す。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 古代ギリシア社会史

<研究テーマ> ギリシア・ポリスにおける規範・規律と社会、その身体性

<主要研究業績> 「シュコファンテスをどう捉えるか」『歴史学研究』661 (1996)

【Outline and objectives】

This seminar class aims at providing opportunities to enhance the reading skill of Greek as well as to learn about the Athenian society in the classical period. Students are required to read the Greek text (i.e. the Attic Orators) prior to the class and participate in discussion.

HIS500B4

西洋史学特殊研究Ⅵ

宮崎 亮

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

本授業では前4世紀アテナイの法廷弁論代作者イサイオスの作品を取り上げ、演習形式で読み進める。二次文献(研究文献)ではなく一次文献(原史料)に当たることによって、受講者各人はアテナイ社会に接近するための自分なりの確かな足場を作ってもらいたい。

【到達目標】

前4世紀アテナイの法廷弁論を原語(ギリシア語)で読み、ギリシア語の読解力をつけるとともに当時の民主政社会、さらにはポリス社会についての理解を深めること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式でギリシア語テキストを読み進める。訳読はアト・ランダムに指名する。また文法事項についても質問するから、十分に予習してくること。さらに、テキストから当時のアテナイ社会について何が読み取れるか、報告者を指名して発表してもらう回を設ける。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の説明; テキストの配布
第2回	テキスト読解(1): イサイオス『弁論』第3番	相続訴訟の全般的特徴
第3回	テキスト読解(2): イサイオス『弁論』第3番	アンキステアとは何か
第4回	テキスト読解(3): イサイオス『弁論』第3番	ディアディカシア裁判とディアマルテュリア
第5回	テキスト読解(4): イサイオス『弁論』第3番	結婚と嫁資
第6回	テキスト読解(5): イサイオス『弁論』第3番	養子縁組(生前養子と死後養子)をめぐる問題
第7回	テキスト読解(6): イサイオス『弁論』第3番	社会結合体としてのオイコス、フラトリア、区(デーモス)
第8回	テキスト読解(7): イサイオス『弁論』第3番	相続問題における女子の位置
第9回	小報告	テキストの内容に関し、希望のテーマで30分程度の小報告を行なってもらう。
第10回	テキスト読解(8): イサイオス『弁論』第5番	葬儀と相続権
第11回	テキスト読解(9): イサイオス『弁論』第5番	「悪女」というレトリック
第12回	テキスト読解(10): イサイオス『弁論』第5番	富裕市民とアテナイ民主政
第13回	テキスト読解(11): イサイオス『弁論』第5番	ポリスが相続に介入することの意味: オイコスは誰のもの?
第14回	まとめ	アテナイは訴訟社会か? (ディスカッション)

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

授業は参加者がギリシア語テキストを毎回事前に読んできていることを前提に進める。ギリシア語の文法的な事項から書かれている内容についてまで、可能な限り下調べをすること。個人差はあろうが、1回の授業につき、予習には最低でも5時間は必要であろう。

【テキスト(教科書)】

Th. Thalheim (ed.), Isaeus. Orationes (Leipzig, 1903).

W. Wyse, The Speeches of Isaeus (Cambridge, 1904).

いずれも購入の必要はない。

【参考書】

膨大である。授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献度、すなわち訳読のできばえ = 40% (どれだけ予習してきたか)、報告のできばえ = 40%、ディスカッションへの参加の割合 = 20%の3点から総合的に判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

ギリシア語の読解にかなりの不安を感じているものの、参加を希望する者は、授業初日に担当講師に申し出ること。事情を聞いた上で判断を下す。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ギリシア社会史

<研究テーマ>ギリシア・ポリスにおける規範・規律と社会、その身体性

<主要研究業績>「シュコファンテスをどう捉えるか」『歴史学研究』661 (1996)

【Outline and objectives】

This seminar class aims at providing opportunities to enhance the reading skill of Greek as well as to learn about the Athenian society in the classical period. Students are required to read the Greek text (i.e. the Attic Orators) prior to the class and participate in discussion.

HIS600B4

西洋史学演習 I

後藤 篤子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋古代・中世史の修士論文を書く上で必須のラテン語史料の読解能力を身につけ、向上させるために、ラテン語史料を精読する。合わせて当該史料の読解に資する英語文献も講読する。また、修士論文作成に向けて各自の研究の現状報告も行う。

【到達目標】

(1) 英語文献の読解能力を向上させ、筆者の論理展開を批判的に追えるようになる。

(2) *Oxford Latin Dictionary* の用例の見方に慣れ、大羅英辞典を独力で使いこなせるようになる。

(3) ラテン語辞典や文法書を参照しつつ、ラテン語史料を正確に逐語訳できるようにする。

以上の3点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

最初にラテン語史料読解に役立つ英語文献について、受講生にその内容を報告してもらう。その後は昨年度に引き続きラテン語史料を精読する。その際、文法事項に関する質問にも答えられるよう、受講生は十二分な予習をしておく必要がある。夏期休暇に入る前には、受講生各自に修士論文作成に向けた研究内容の発表をしてもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	各受講生の研究テーマ紹介と、英語やラテン語を「精読」するための注意
第2回	英語文献の内容報告(1)	『ガリア戦記』Loeb版のAppendix Aを読んで内容を報告する(1)
第3回	英語文献の内容報告(2)	同Appendix Aを読んで内容を報告する(2)
第4回	ラテン語史料精読に向けて	ラテン語の予習の仕方と『ガリア戦記』1巻1-22節の概要。
第5回	ラテン語史料精読(1)	カエサル『ガリア戦記』1巻23-24節の読解と質疑応答
第6回	ラテン語史料精読(2)	カエサル『ガリア戦記』1巻25節の読解と質疑応答
第7回	ラテン語史料精読(3)	カエサル『ガリア戦記』1巻26節の読解と質疑応答
第8回	ラテン語史料精読(4)	カエサル『ガリア戦記』1巻27-28節の読解と質疑応答
第9回	ラテン語史料精読(5)	カエサル『ガリア戦記』1巻29-30節の読解と質疑応答
第10回	ラテン語史料精読(6)	カエサル『ガリア戦記』1巻31節前半の読解と質疑応答
第11回	ラテン語史料精読(7)	カエサル『ガリア戦記』1巻31節後半の読解と質疑応答
第12回	ラテン語史料精読(8)	カエサル『ガリア戦記』1巻32-33節の読解と質疑応答
第13回	修士論文作成に向けて(1)	受講生による研究の現状報告と質疑応答(1)
第14回	修士論文作成に向けて(2)	受講生による研究の現状報告と質疑応答(2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

英語文献については各自で読解し、授業でその内容を報告するための準備をする。

ラテン語史料読解については、*Oxford Latin Dictionary* や羅和辞典、および文法書を参照しつつ、正確な逐語訳ができるよう十分に予習する。授業後には、当日読み進んだ部分に不明箇所が残っていないか、必ず自分でテキストを読み直してみる。

並行して、修士論文作成に向けて各自の研究も進める。

【テキスト（教科書）】

Caesar, *The Gallic Wars*, tr. by H. J. Edwards (Loeb Classical Library 72).

【参考書】

カエサル『ガリア戦記』、國原吉之助訳、講談社学術文庫、1994年。

ガイウス・ユリウス・カエサル『ガリア戦記』、石垣憲一訳、平凡社ライブラリー、2009年。

『カエサル戦記集 ガリア戦記』、高橋宏幸訳、岩波書店、2015年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（英語・ラテン語の予習度 30 %、英語・ラテン語読解の精度 50%、質疑応答・討議への参加など授業への積極的取組 20 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史

<研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

① *The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, Studia Patristica, Vol.XCIII (2017).*

② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012年

③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91編10号(1982年10月)

【Outline and objectives】

In order to acquire and improve the ability to read and comprehend the historical sources written in Latin, students are required to translate the Latin text into Japanese, and to read the correlated academic articles written in English.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅱ

後藤 篤子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋古代・中世史で修士論文を作成する上で必要となるラテン語史料の読解力を向上させるとともに、自分の研究成果を公表する能力を習得する。

【到達目標】

(1) ラテン語辞典や文法書を参照しつつ、ラテン語史料を正確に逐語訳できるようにする。

(2) 各自のプレゼンテーション能力を向上させる。

以上の2点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

西洋史演習Ⅰに引き続きカエサル『ガリア戦記』の講読を進める。また、受講生による修士論文作成に向けた研究発表と、質疑応答・討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	春学期の復習	カエサル『ガリア戦記』1巻 1-33節の概要と、そこに窺えるカエサルの自己正当化について
第2回	ラテン語史料精読(1)	カエサル『ガリア戦記』1巻 34-35節の読解と質疑応答
第3回	ラテン語史料精読(2)	カエサル『ガリア戦記』1巻 36節の読解と質疑応答
第4回	ラテン語史料精読(3)	カエサル『ガリア戦記』1巻 37-38節の読解と質疑応答
第5回	ラテン語史料精読(4)	カエサル『ガリア戦記』1巻 39節の読解と質疑応答
第6回	ラテン語史料精読(5)	カエサル『ガリア戦記』1巻 40節前半の読解と質疑応答
第7回	ラテン語史料精読(6)	カエサル『ガリア戦記』1巻 40節後半の読解と質疑応答
第8回	ラテン語史料精読(7)	カエサル『ガリア戦記』1巻 41-42節の読解と質疑応答
第9回	ラテン語史料精読(8)	カエサル『ガリア戦記』1巻 43節の読解と質疑応答
第10回	ラテン語史料講読(9)	カエサル『ガリア戦記』1巻 44節前半の読解と質疑応答
第11回	ラテン語史料精読(10)	カエサル『ガリア戦記』1巻 44-45節の読解と質疑応答
第12回	修士論文作成に向けて(1)	受講生による研究発表と質疑応答・討議(1)
第13回	修士論文作成に向けて(2)	受講生による研究発表と質疑応答・討議(2)
第14回	まとめ	ラテン語史料講読および研究発表に関する全体講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回ラテン語の辞書・文法書を参照して、ラテン語史料読解の予習を十分に行う。予習段階の不明箇所を中心に、授業での解説を踏まえて授業後に必ずもう一度ラテン語テキストを自分で読み直してみる。また、自分の研究発表に向けた準備をふだんから進めておく。

【テキスト（教科書）】

Caesar, The Gallic Wars, tr. by H. J. Edwards (Loeb Classical Library 72).

【参考書】

カエサル『ガリア戦記』の邦訳書（『西洋史学演習Ⅰ』の本欄参照）。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（ラテン語の予習度 20 %、ラテン語読解の精度 50 %、研究発表の内容 20 %、質疑応答・討議への参加など授業への積極的取組 10 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史

<研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

① *The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, Studia Patristica, Vol.XCIII (2017).*

- ② (分担執筆・史料邦訳) 歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエンと地中海世界』、岩波書店、2012年
③ シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91編10号(1982年10月)

[Outline and objectives]

In order to improve the ability to read and comprehend the historical sources written in Latin, students are required to translate the Latin text into Japanese. Students are also required to make a presentation concerning their own research.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅲ

高澤 紀恵

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

西洋近現代史に関する英語論文を読み、内容について議論する。西洋史を学ぶ上で必須である外国語文献の読解力を養うとともに、報告を行うことでプレゼンテーション能力、また参加者とのやり取りで議論する力を培う。

【到達目標】

- ・外国語を読解し、日本語で表現し、考察する力を持つようにする。
- ・歴史、特に西洋近現代に関わる外国語文献を読むことで歴史を比較する力を養うことができる。
- ・報告することでプレゼンテーション力をつけることができる。
- ・議論することで他者と双方向で思考することができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献の和訳を分担して担当し、各自がレジュメを作成して報告する。これに対して参加者の意見を受けて正確な理解に努める。演習形態である。単に和訳を作成するだけでなく、内容について歴史研究においてどう考えるかを議論するようにする。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	趣旨説明。使用文献の決定、配布。各回担当者の決定。
第2回	報告、発表、議論(1)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第3回	報告、発表、議論(2)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第4回	報告、発表、議論(3)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第5回	報告、発表、議論(4)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第6回	報告、発表、議論(5)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第7回	小括(1)	これまでの内容を振り返り、内容を確認する。
第8回	報告、発表、議論(6)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第9回	報告、発表、議論(7)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第10回	報告、発表、議論(8)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第11回	報告、発表、議論(9)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第12回	報告、発表、議論(10)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第13回	報告、発表、議論(11)	順番に従い、作成されたレジュメをもとに発表し、内容について議論する。
第14回	小括(2)	これまでの内容を振り返り、内容を確認する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

担当分以外の部分も、全員辞書を丹念にひいて自分で和訳する。

【テキスト (教科書)】

参加者の意見を聞いて決定し、配布する。

【参考書】

その都度参考になる文献を指示する。

【成績評価の方法と基準】

報告のレベルと討論への参加の熱心さによる (100%)。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【Outline and objectives】

This course aims to improve the reading ability of English articles on European modern history. Attendants are expected to read assignments in advance and participate in the discussion.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅳ

高澤 紀恵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋近現代に関わる外国語文献を読み、現代世界の諸問題の歴史的理解を深める。また研究者としての素養を深めると共に各専門分野に関わる外国語文献・史料の読解能力を高める。

【到達目標】

大学院生として自分の問題関心を明確に言葉に表し、自立的に研究活動を行えるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献・史料の読解能力を高めること、研究者としての基礎能力の向上を目指すことを主眼とする。同時に現代世界と歴史的研究の関わりを認識を深めることを目指す。文献については最初の授業で受講者の希望を聞いて決定したい。各人の研究発表を適宜行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	希望によるテキスト選定、割当	受講者の希望を聞く
第2回	テキスト講読①	質疑、講読
第3回	テキスト講読②	質疑、講読
第4回	テキスト講読③	質疑、講読
第5回	研究発表①	各受講者の研究発表
第6回	研究発表②	各受講者の研究発表
第7回	テキスト講読④	質疑、講読
第8回	討論	質疑、講読
第9回	テキスト講読⑤	質疑、講読
第10回	テキスト講読⑥	質疑、講読
第11回	テキスト講読⑦	質疑、講読
第12回	テキスト講読⑧	質疑、講読
第13回	研究発表③	各受講者の研究発表
第14回	研究発表④	各受講者の研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

配布する。

【参考書】

特に定めない。

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行と発表、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【Outline and objectives】

This course aims to improve the reading ability of English articles on European modern history. Attendants are expected to read assignments in advance and participate in the discussion.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅴ

中村 純

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

演習形式で、受講生の選んだ文献を題材として、研究史上の位置づけや評価などを含めて、広い意味で、いくつかの論文を読み解いていくことを通して、読解の進行に伴って具体的に表れてくる諸問題を、他の受講生とともに検討することによって、論文作成に必要な作業の一つ一つを確認しながら、体得していく。

【到達目標】

古代ギリシア宗教史、および古典期アテネ政治史の分野を題材として、論文作成作業の一端となる、テーマ設定のための文献渉猟や史料の探索から、研究史の整理、さまざまな研究成果の吸収などの作業に実際にあたることによって、当該分野の研究に寄与しうる成果を上げる方法を学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式です。

受講生に毎回の課題について発表なり訳読なりをしてもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	古代ギリシア宗教史研究；受講生による最新の研究動向の紹介	宗教史を研究課題とする受講生による学会動向報告
第2回	古典期アテネ政治史研究；受講生による最新の研究動向の紹介	古典期アテネ政治史を研究課題とする受講生による学会動向報告
第3回	日本における蓄積に学ぶ古典期の宗教と社会の研究	宗教史を研究課題とする受講生による日本の学会における研究状況の報告
第4回	日本における蓄積に学ぶ古典期アテネ民主政研究	アテネ民主政を研究課題とする受講生による日本の学会における研究状況の報告
第5回	古典史料と古代ギリシアの宗教事情	宗教史を研究課題とする受講生による古代ギリシアの宗教事情を知るのに有用な古典史料の紹介と検討
第6回	碑文史料と古代ギリシアの宗教事情	宗教史を研究課題とする受講生による古代ギリシアの宗教事情を知るのに有用な碑文史料の紹介と検討
第7回	古典史料とアテネ民主政	アテネ民主政を研究課題とする受講生によるアテネ民主政関連の古典史料の紹介と検討
第8回	碑文史料とアテネ民主政	アテネ民主政を研究課題とする受講生によるアテネ民主政関連の碑文史料の紹介と検討
第9回	ギリシア宗教史研究における最新論文を読む①；テーマの学説史上の位置づけ	受講生が選んだ宗教史に関する論文を読み合わせ、その論文の学説史上の意義について検討する。
第10回	同上②；論理展開、史料の捌き、結論の妥当性とその意義の検討	受講生が選んだ宗教史関連の論文を読み合わせ、その論文の論理構成、説得性、結論の妥当性などについて検討する。
第11回	古典期アテネ政治史研究における最新論文を読む①；テーマの学説史上の位置づけ	受講生が選んだアテネ民主政関係の論文を読み合わせ、その論文の学説史上の意義について検討する。
第12回	同上②；論理展開、史料の捌き、結論の妥当性とその意義の検討	受講生が選んだアテネ民主政関係の論文を読み合わせ、その論文の論理構成、説得性、結論の妥当性などについて検討する。
第13回	ギリシア宗教史研究；受講生による学会動向の概要まとめ	現在のギリシア宗教史研究の状況を整理し、今後の課題を展望する
第14回	古典期アテネ政治史研究；受講生による学会動向の概要まとめ	現在のアテネ政治史研究の状況を整理し、今後の課題を展望する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

課題となっている史料の訳読の準備。

あるいは課題となっているテーマについてのリサーチ。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を授業にて配布。

【参考書】

The Greek Polis and the Invention of Democracy, J.P.Arnason & K.A.Raaflaub ed., Wiley-Blackwell 2013.
Fear and Loathing in Ancient Athens, R.Alexander, Routledge 2014.

【成績評価の方法と基準】

演習ですので平常点となります（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

ありません。

【その他の重要事項】

ありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ギリシア政治史
 <研究テーマ>古代ギリシア政治史
 <主要研究業績>

「アテネ民主政と戦争（2）—シチリア遠征」、『言語と文化』11、法政大学言語・文化センター 2014年1月
 「アテネ民主政と戦争—ミュティレネ叛乱とピュロス遠征」、『言語と文化』10、法政大学言語・文化センター 2013年1月
 「デーモス、デマゴグそしてデモクラシー—前5世紀後半のアテネ民主政について」、『西洋史研究』34、西洋史研究会 2005年11月

【Outline and objectives】

This seminar presents an introduction to the basic conceptual and theoretical tools for research and analysis in the field of the ancient greek history. The students will develop research skills and knowledge and conduct a qualitative research project of their own.

HIS600B4

西洋史学演習Ⅵ

中村 純

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

参考文献に挙げた文献の中から、適宜題材を選んで、史料の来歴、性質などに注意を払いながら具体的に読む作業にあたりながら、その時々によろこび上がってくる問題を受講生の間で議論し、検討する演習形式で行う授業となる。

【到達目標】

碑文史料、パピルス史料、あるいは古典史料と呼ばれるような、散文、韻文史料を、宗教史の分野から、あるいは政治史の分野からそれぞれいくつかの材料を取り上げて読み解くことを通して、西洋古代史研究のために必要な、史料批判の技術を身につけることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式です。

受講生に毎回の課題について発表なり訳読なりをしてもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	古代ギリシアの宗教と社会；古典期の状況 受講生からの問題提起	宗教史を研究する受講生が修論のテーマとして考えていることの紹介
第2回	古代ギリシアの政治と社会；古典期の状況 受講生からの問題提起	政治史を研究する受講生が修論のテーマとして考えていることの紹介
第3回	史料批判の方法① 前6世紀以前の碑文	参考文献の中から前6世紀以前の碑文を選んで読解と分析を行う。
第4回	史料批判の方法② 前5世紀の碑文；アテネ以外の地域から	宗教史、ないしは政治史の分野で有用と思われるアテネ以外の地域の碑文を読む。
第5回	史料批判の方法③ 前5世紀の碑文；アテネから	宗教史、ないしは政治史の分野で有用と思われるアテネの碑文を読む。
第6回	史料批判の方法④ 前4世紀以降の碑文	参考文献の中から前4世紀以降の碑文を選んで読解と分析を行う。
第7回	史料批判の方法⑤ <i>The Greek Dialects</i>	参考文献に挙げた本を参照して、主要な方言について学ぶ
第8回	史料批判の方法⑥ <i>papyrus</i> 史料について	<i>papyrus</i> 史料の性格とその使い方の概要を学ぶ
第9回	史料批判の方法⑦ 古典史料；歴史	いわゆる古典史料と呼ばれるものについて。歴史書の場合。
第10回	史料批判の方法⑧ 古典史料；政治的パンフレット	政治的パンフレットを読んでみる
第11回	史料批判の方法⑨ 法廷弁論	有用さについては定評のある法廷弁論を読む
第12回	史料批判の方法⑩ 悲劇、喜劇、哲学書ほか	文学書、哲学書などの利用の仕方
第13回	ギリシアの宗教と社会；古典期の状況 受講生による中間総括	史料を読むことから浮かんでくる宗教史にかかわるテーマについての検討
第14回	ギリシアの政治と社会；古典期の状況 受講生による中間総括	史料を読むことから浮かんでくる政治史にかかわるテーマについての検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

課題となっている史料の訳読の準備。
 あるいは課題となっているテーマについてのリサーチ。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を授業にて配布。

【参考書】

A Selection of Greek Historical Inscriptions, R.Meiggs & D.Lewis ed., Oxford 1969.
Greek Historical Inscriptions, M.N.Tod ed., Area Publishers Inc. 1985.
Introduction to the Study of the Greek Dialects, C.D.Buck, Forgotten Books 2017.
Hellenica Oxyrhynchia, McKechnie & Kern, Aris & Phillips Ltd. 1993.

【成績評価の方法と基準】

演習ですので平常点となります（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

ありません。

【その他の重要事項】

ありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ギリシア政治史
 <研究テーマ>古代ギリシア政治史
 <主要研究業績>

「アテネ民主政と戦争（2）—シチリア遠征」、『言語と文化』11、法政大学言語・文化センター 2014年1月

「アテネ民主政と戦争—ミュティレネ叛乱とピュロス遠征」、『言語と文化』10、法政大学言語・文化センター 2013年1月

「デーモス、デマゴグそしてデモクラシー—前5世紀後半のアテネ民主政について」、

『西洋史研究』34、西洋史研究会 2005年11月

【Outline and objectives】

This seminar presents an introduction to the basic conceptual and theoretical tools for research and analysis in the field of ancient Greek history. The students will develop research skills and knowledge and conduct a qualitative research project of their own.

HIS500B4

西洋古代史研究 I

後藤 篤子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ローマ属州ガリアを事例として、「外国支配」への抵抗と同化、異文化接触による社会と文化の変容など、現代世界にも通じる諸問題について学びます。

【到達目標】

ガリアのケルト社会がローマの支配下に組み込まれていく歴史的過程を説明できる。ガリアの社会と文化がローマとの接触によりどのように変容したかを考察できる。

1～2世紀のガリア社会と3世紀のガリア社会が置かれた歴史的状況を対比して説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

ヨーロッパの古層を成すケルト文化の概要、ローマ属州ガリアの成立、パクス＝ローマーナ（ローマの平和）期のガリア社会、いわゆる「3世紀の危機」がガリア社会に及ぼした影響について講述します。講義形式の授業ですが、毎回、前回の授業内容に関する質疑応答の時間を設けます。また、「外国支配」へのさまざまな対応をめぐるディスカッションの時間も設ける予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ハルシュタット期のケルト人
第2回	ケルト時代のガリア (1)	ラ・テーヌ文化の形成と発展
第3回	ケルト時代のガリア (2)	ラ・テーヌ期のガリア社会とその変化
第4回	ローマ属州ガリアの成立 (1)	「プロウインキア」成立前後の状況
第5回	ローマ属州ガリアの成立 (2)	『ガリア戦記』に見るガリア社会とカエサルによる征服
第6回	ローマ支配の確立	アウグストゥスによる属州ガリアの組織化
第7回	ローマ支配への同化と抵抗	1世紀のガリア社会概観と、ローマ支配への対応をめぐるディスカッション
第8回	ガロ＝ローマ文化の出現 (1)	都市景観に見るローマ化の進展とガリア的特徴
第9回	ガロ＝ローマ文化の出現 (2)	農村地帯の状況
第10回	ガロ＝ローマ文化の出現 (3)	ケルト人の宗教世界と「ローマ風解釈」
第11回	「パクス＝ローマーナ」期のガリア社会	2世紀のガリア社会と経済
第12回	「3世紀の危機」とガリア (1)	3世紀の対外的危機
第13回	「3世紀の危機」とガリア (2)	「ガリア帝国」および3世紀末の「バグダエ」をめぐる
第14回	春学期のまとめ	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業で使用するプリントは原則として1週間前に配布するので、事前に目を通し、知らない人名や事項については『世界史辞典』（角川書店）等の参考図書類、プリント記載の参考文献などで下調べをしておく。授業後は講義内容について復習し、理解が不十分と思われる点や疑問点について、まず自分で講義時にとったノートや参考文献を利用して調べてみる。それでも解決しない場合は、次回授業の質疑応答の時間に必ず質問して解決するようにする。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。授業時に講義内容のレジュメと関連史料を記載したプリントを配布します。

【参考書】

後藤篤子「ローマ属州ガリア」、『世界歴史大系・フランス史1』（山川出版社、1995年）第2章。その他の参考文献は、授業の進行に合わせて随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

期末に行う筆記試験 90%、平常点（質問やディスカッションへの参加等、授業への積極的取り組み）10%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

2018年度は授業の進行状況の関係で授業内にアンケートを実施できなかったため回答率が低く、また、2019年度とは授業内容を変えますので、2018年度のアンケート結果はあまり参考にできないと考えます。2019年度は授業内のアンケート実施を心がけます。

【Outline and objectives】

This course deals with the history and society of Roman Gaul till the third century, through which such problems as the resistance to and acceptance of the Roman dominance and the acculturation in Roman Gaul would be considered.

HIS500B4

西洋古代史研究Ⅱ

後藤 篤子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ローマ帝政後期のガリアの歴史と社会について、歴史上の人物を通して学び、ガリアに見る「ローマ帝国のキリスト教化」の問題、学界で論議となった「バガウダエ」の問題、「ローマ」と「ゲルマン」の関係等について考察します。

【到達目標】

4～5世紀のガリアが置かれた歴史的状況の概略を説明できる。
「バガウダエ」や「ゲルマン大侵入」の実態等、ローマ帝政後期のガリアに関する学界での論争点について、諸家の見解を対比して自らの考察を述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

4～5世紀のガリアに生きた、あるいは深い関わりを持った人物を通して、帝政後期のガリアの歴史と社会について講述し、学界における主要な論争点について解説します。講義形式の授業ですが、毎回、前回の授業内容に関する質疑応答の時間を設けます。また、学界で論争となっている問題に関するディスカッションの時間も設ける予定です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	1～3世紀のガリア社会概観
第2回	ガリアへのキリスト教の伝播	2世紀後半の「リヨンの迫害」
第3回	「背教者」ユリアヌス帝	4世紀ガリアの政治史概観
第4回	アウソニウス	4世紀ガリアにおける社会的流動性とガリア=セナトール貴族層の形成
第5回	トゥールのマルティヌス	ガリアにおけるキリスト教の発展
第6回	皇女ガッラ=ブラキディアと將軍アエティウス	5世紀前半のガリアの政治史
第7回	マルセイユ司祭サルウィアヌスとベッラのパウリヌス	同時代史料に見る「蛮族大侵入」と、その実態をめぐる諸説の検討と討議
第8回	帝政後期の「バガウダエ」をめぐる(1)	同時代史料に見る帝政後期の「バガウダエ」
第9回	帝政後期の「バガウダエ」をめぐる(2)	「バガウダエ」をめぐる諸説の検討と討議
第10回	シドニウス=アポリナリス(1)	5世紀後半のガリアの政治史
第11回	シドニウス=アポリナリス(2)	「ローマ」と「ゲルマン」の関係をめぐって
第12回	シドニウス=アポリナリス(3)	ローマ支配の終焉とガリア=セナトール貴族層の動向
第13回	司教たちのネットワーク	西ローマ帝国「滅亡」後のガリア
第14回	秋学期のまとめ	到達度の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業で使用するプリントは原則として1週間前に配布するので、事前に目を通し、知らない人名や事項については『世界史辞典』（角川書店）等の参考図書類、プリント記載の参考文献などで下調べしておく。
授業後は講義内容について復習し、理解が不十分と思われる点や疑問点について、まず自分で講義時にとったノートや参考文献を利用して調べてみる。それでも解決しない場合は、次回授業の質疑応答の時間に必ず質問して解決するようにする。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。授業時に講義内容のレジュメと関連史料を記載したプリントを配布します。

【参考書】

後藤篤子「古代末期のガリア社会」、『岩波講座・世界歴史7』（岩波書店、1997年）所収。その他の参考文献は、授業の進行に合わせて随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

期末に行う筆記試験 90%、平常点（質問やディスカッションへの参加等、授業への積極的取り組み）10%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

2018年度は授業の進行状況の関係で授業内にアンケートを実施できなかったため回答率が低く、また、2019年度は2018年度とは授業内容を変えますので、2018年度のアンケート結果はあまり参考にできないと考えます。2019年度は授業内のアンケート実施を心がけます。

【Outline and objectives】

This course deals with the history and society of late Roman Gaul, focusing on some important figures such as Ausonius, Martin of Tours, and Sidonius Apollinaris. It also deals with such topics as the "Christianization" of Roman Gaul, the relations between "Romans" and "Germans", and the end of Roman rule in Gaul.

HIS500B4

西洋中世史研究 I

小沼 明生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の国際社会を理解するために不可欠な知識を中心に、古代ローマ世界の終わりから15世紀までを扱います。巨大な文明の崩壊後、新しい世界の萌芽となる古代末から、キリスト教ヨーロッパの基礎を築いた中世初期、現代の国際関係のもととなる国民意識を生みだした中世後期の世界までを概観します。現代世界に通じる部分と異質な部分を合わせ持つ近代の西洋世界の歴史を学ぶことを通じて、今の自分自身が置かれた位置を広い視野で考えてほしいと思います。

【到達目標】

この授業には二つの目的を設定します。一つ目は、異文化や異世界に対する理解と、自らの文化や世界に対する相対的な見方、そして歴史的なものの考え方を身につけることです。二つ目は、文献を収集、比較・分析し、そこから自分の見解を導きだし、表現できるようになることです。前者については授業内容で、後者についてはレポートの作成を通じて学んでいきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では一回に一つのトピックを取り上げ、時代の流れの中に位置づけながら解説します。現代を生きる上でぜひ知っておいてほしい事件やことから厳選して紹介していきます。各授業の終わりに、日本語に訳された史料、つまり歴史を書く際に証拠として使われてきたテキストや画像、音楽などを取り上げ、その時代背景や作者の情報、意図などを自由に想像して考えてもらいます。続く授業でその史料の内容と背景を解説し、そこからどのような歴史像が作られてきたかを学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	西洋前近代の歴史を学ぶこと
第2回	ローマ世界の終焉	民族大移動と古代の終わり
第3回	フランク王国の成立と発展	カールの戴冠と西ヨーロッパ世界
第4回	ローマカトリックの伝播	聖歌の成り立ちから見る典礼の成立
第5回	聖職叙任権闘争	カノッサの屈辱から見えること
第6回	十字軍	西ヨーロッパの拡大とその目的
第7回	中世の世界観	地図から見る世界観の変遷
第8回	サンチャゴ巡礼とレコンキスタ	巡礼の書と巡礼地の発展
第9回	教会建築の変化	ゴシック建築の誕生
第10回	黒死病と死の舞踏	パンデミックとその原因・結果
第11回	百年戦争	中世的国家の変質
第12回	中世の終焉とルネサンス	ルネサンスの源流を探る
第13回	宗教改革	ウイクリフから、フス、ルターまで
第14回	まとめとレポート講評	テキストを批判的に読むこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の最後に次回の授業で使う課題を渡します。課題の中のキーワードなどを参考に予習しておくことを勧めます。また、レポートの作業を分割して進めますので、毎週1～2時間ほどの準備時間を用意してください。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業ごとにプリントを用意します。

【参考書】

木下康彦ほか編『改訂版詳説世界史研究』山川出版社、2008年

【成績評価の方法と基準】

学期中に簡単な小レポートを二回、そしてそれを踏まえた形で学期末にレポートを提出してもらいます。合計三回のレポートの評価と、出席状況および授業への参加を合計して最終的な評価を行います。なお、授業への参加については、授業内での課題への回答を見て評価します。配点は以下の通りです：

出席と授業参加：30

レポートA：10

レポートB：20

レポートC：40

【学生の意見等からの気づき】

引き続き1限の開講となってしまいましたが、遅刻のないよう最後までがんばりましょう。

【学生が準備すべき機器他】

必須ではありませんが、課題の内容に限定して、授業中にスマートフォンなどでの検索を許可しますので、ネットにつながる状態で用意しておくとういでしょう。

【Outline and objectives】

This is the lecture about western history focused on the middle ages. It begins with the post-roman era and ends with 15th century and based on the basic knowledge of the world-history. You will get a historical point of view and technique of the critical reading of the historical text through the class.

HIS500B4

西洋中世史研究Ⅱ

小沼 明生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期の西洋中世史では有名な事件やトピックを中心に紹介しましたが、後期のこの講義では西洋中世の社会構造や思考・行動の在り方を中心に見ていきます。時系列ではなく、社会を構成していた要素、つまり皇帝、国王、貴族、聖職者、都市、農民などに注目していきます。授業ごとに紹介する史料から、過去の社会を想像することを通じて理解を深めていきます。

【到達目標】

この授業には二つの目的を設定します。一つ目は西洋文化の基礎を作った時代である中世の歴史的知識を、またそれを通じて歴史的な見方・考え方を身につけます。二つ目は文献を収集、比較・分析し、そこから自分の見解を導きだし、表現できるようになることです。前者については授業内容で、後者についてはレポートの作成を通じて学んでいきます

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では一回に一つのトピックを取り上げ、時代の流れの中に位置づけながら解説します。現代を生きる上でぜひ知っておいてほしい事件やことがらを厳選して紹介していきます。各授業の終わりに、日本語に訳された史料、つまり歴史を書く際に証拠として使われてきたテキストや画像、音楽などを取り上げ、その時代背景や作者の情報、意図などを自由に想像して考えてもらいます。続く授業でその史料の内容と背景を解説し、そこからどのような歴史像が作られてきたかを学びます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	異世界としての中世・ルーツとしての中世
第2回	国王と皇帝と教皇	中世的世界の成立とその本質
第3回	ヴァイキングの侵入	ヴァイキングとは誰か、その目的と影響
第4回	農業革命と神の平和	生産力の発達とそのきっかけ
第5回	騎士と貴族の世界	貴族的な社会と文化の成立と発達
第6回	修道院と修道士	修道院の始まりとその発展
第7回	都市と修道士	托鉢修道会の成立と発展
第8回	ローマカトリック教会と聖職者	教会の構造とその発達
第9回	教会の変質	教会分裂と公会議
第10回	都市の成立と発展	西洋における都市とは何か
第11回	都市と手工業	手工業と手工業者の発展
第12回	農村の世界	農村と農民、そして領主
第13回	大量貧困と救貧	近代社会の萌芽
第14回	まとめとレポート講評	テキストを批判的に読むこと

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業の最後に次回の授業で使う課題を渡します。課題の中のキーワードなどを参考に予習をしておくことを勧めます。

また、レポートの作業を分割して進めますので、毎週1～2時間ほどの準備時間を用意してください。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業ごとにプリントを用意します。

【参考書】

木下康彦ほか編『改訂版詳説世界史研究』山川出版社、2008年
甚野尚志『中世の異端者たち』世界史リブレット20、山川出版社、1996年

朝倉文市『修道院にみるヨーロッパの心』世界史リブレット21、山川出版社、1996年

河原温『中世ヨーロッパの都市世界』世界史リブレット23、山川出版社、1996年

堀越宏一『中世ヨーロッパの農村世界』世界史リブレット24、山川出版社、1997年など

【成績評価の方法と基準】

学期中に簡単な小レポートを二回、そしてそれを踏まえた形で学期末にレポートを提出してもらいます。合計三回のレポートの評価と、出席状況および授業への参加を合計して最終的な評価を行います。なお、授業への参加については、授業内での課題への回答を見て評価します。配点は以下の通りです：

出席と授業参加：30

レポートA：10

レポートB：20

レポートC：40

【学生の意見等からの気づき】

引き続き1限の開講となってしまいましたが、遅刻のないよう最後まで頑張りましょう。

【学生が準備すべき機器他】

必須ではありませんが、課題の内容に限定して、授業中にスマートフォンなどでの検索を許可しますので、ネットにつながる状態で用意しておくでしょう。

【Outline and objectives】

This is the lecture about western history focused on the middle ages. Its time scope is between 5th and 15th century and we will work on the society and culture of each classes in this era; emperors, kings and nobles, the clergy and monks, citizens and farmers. You will get a historical point of view and technique of the critical reading of the historical text through the class.

POL500B4

ヨーロッパ近現代政治史研究 I

高澤 紀恵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世西ヨーロッパ社会の基底で起こった変化を、「生存の条件」「社会的結合関係」「文化変容」「緊張と排除」という4つの視角から検討する。対象とする時期は16世紀から18世紀とする。あらかじめ配布した資料をもちいて小グループでディスカッションする機会をもうけるなど、学生の主体的参加を求める。

【到達目標】

近世ヨーロッパ社会史をテーマとするこの授業は、三つの到達目標をもつ。ひとつは、16世紀以降のヨーロッパの歴史を基底でゆっくり変化する人々の生活・宗教・意識の変化から追ひ、近代ヨーロッパの理解を深めることである。二つ目は、日常性に着目する社会史の方法と成果を学ぶことを通して、私たちの生きる時代と社会を相対化し、その歴史的特質を理解することである。第三は、自分の選んだ課題について調査し、明快に報告する大学院生としての能力を高めることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

講義、学生による報告、ディスカッションを組み合わせたクラスである。リアクション・ペーパーは毎回提出を求める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	社会史とはなにか
第2回	映画『帰ってきたマルタン・ゲール』	次回、感想文を提出のこと
第3回	生存の条件	他者としての過去との出会い
第4回	社会的結合関係（1）	血縁的な結合
第5回	ディスカッション	婚姻と家をめぐって
第6回	社会的結合関係（2）	教的結合と職能的結合
第7回	社会的結合関係（3）	地縁的結合
第8回	文化変容（1）	宗教改革とカトリック改革
第9回	文化変容（2）	民衆文化と時間・空間意識
第10回	文化変容（3）	文字文化の浸透
第11回	緊張と排除（1）	魔女
第12回	緊張と排除（2）	放浪者・貧民
第13回	緊張と排除（3）	ユダヤ人
第14回	まとめ	啓蒙のゆくえ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講学生は、テーマの一つを選び、報告（30分）を準備すること。ディスカッションに際しては、事前に配布された資料について課題に対する自分の考えをA4一枚程度のレポートにまとめて持参すること。レポートはディスカッション終了後に提出すること。

【テキスト（教科書）】

とくに定めず

【参考書】

ナタリー・ゼーモン・デーヴィス『帰ってきたマルタン・ゲール——16世紀フランスの偽亭主事件』平凡社ライブラリー、1993年ほか。参考文献表を配布する。

【成績評価の方法と基準】

担当テーマに関する報告（40%）
ディスカッションへの参加・提出物などによる平常点（20%）、
エッセイ形式の期末試験（40%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【Outline and objectives】

Social history is not a simply branch of history but a critical history in its own right. By grasping the society as a whole on the level of everyday experience, it illuminates almost any aspect of social life considered meaningful to each historian. In this course, participants are expected to make a presentation on a topic which is previously provided by the professor, and engage in discussion.

POL500B4

ヨーロッパ近現代政治史研究Ⅱ

高澤 紀恵

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

都市は、政治・社会・経済・宗教の変動の最先端にあり、新たな統治技術が生まれる場でもあった。2019年度においては、パリという具体的な都市の歴史に即して、そのトポグラフィックな特徴、ポリス（秩序維持）、信仰、労働の四点から中・近世における変化を分析する。あらかじめ配布した資料をもちいて小グループでディスカッションする機会をもうけるなど、学生の主体的参加を求める。

【到達目標】

中・近世都市の歴史をテーマとするこの授業は、三つの到達目標をもつ。ひとつは、「市民」、「公共性」、「代表」、「ポリス」といった概念が、どのような歴史的現実の中で生まれ、変容してきたかを理解することである。二つ目は、都市史研究の成果と方法を学び、自分の生活空間を学問的に検討する力を養うことである。三つめは、自分の課題意識に応じたレポート作成の技術を高めることである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

このコースは、講義を中心とするが、グループ・ディスカッションも行う。その場合は、事前に配布された資料をよく読み、A4一枚程度に考えをまとめてレポートを作成すること。このレポートをディスカッションに持参し、提出のこと。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	福澤論吉から考える都市
第2回	パリの3つの顔（1）	シテ島の中心性
第3回	パリの3つの顔（2）	右岸と市民
第4回	パリの3つの顔（3）	左岸と大学
第5回	都市のポリス（1）	多様なアクター
第6回	都市のポリス（2）	対立と改革
第7回	ディスカッション	空間の統治をめぐる
第8回	都市の信仰（1）	聖なる都市と暴力
第9回	都市の信仰（2）	信仰の内面化とグローバル化
第10回	都市の信仰（3）	葛藤と世俗化
第11回	都市の労働（1）	ギルド
第12回	都市の労働（2）	もぐりの職人
第13回	都市の労働（3）	排除・包摂・規律化
第14回	まとめ	都市を考える、都市から考える

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義中心のクラスであるが、ディスカッションに際しては事前に配布された資料を熟読の上、課題に答えるA4一枚程度のレポートを用意し、これを基にディスカッションを行う。

【テキスト（教科書）】

とくになし

【参考書】

吉田伸之・伊藤毅（編）『伝統都市 全四巻』東京大学出版会、2010年。
高澤紀恵『近世パリに生きる——ソシアリティと秩序』岩波書店、2007年。

【成績評価の方法と基準】

ディスカッションへの参加・提出物などによる平常点（40%）、レポート（60%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【Outline and objectives】

This course aims to understand the social and spatial transformation in early modern Paris, focusing on the following four topics; Topographie, police, religion, and labor. This course consists of lectures and discussions. Attendants are expected to read assignments in advance.

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅰ

渡辺 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文書館で実務を行なうための前提として、アーカイブズ学の考え方を学ぶ。アーカイブズとは、組織や個人が活動していくなかで授受作成し蓄積した記録のなかで、永久に保存し公開される文書を意味する。あるいはアーカイブズを管理・公開する組織や施設のことを意味する。

【到達目標】

アーカイブズ学の基本概念を理解する。特に歴史学との根本的な違いを理解し、アーカイブズ学としての思考ができる基礎を築く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「アーカイブズ学Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「アーカイブズ学Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

アーカイブズ学総論、アーカイブズ認識論、アーカイブズ管理論。講義と質問。最後の授業で、自らの研究で分析している史料が含まれる史料群全体について、概要記述を個々に発表してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	アーカイブズ学とは何か
第2回	アーカイブズ学総論1	記録のライフサイクル
第3回	アーカイブズ学総論2	記録連続体論
第4回	認識論1	現代における記録管理—日本政府と市民団体
第5回	認識論2	日本における伝統的記録管理—古代から近世まで
第6回	認識論3	日本近世における個別町の記録管理
第7回	認識論4	日本近世における組合町・株仲間・講の記録管理
第8回	認識論5	記録管理の近代への移行
第9回	管理論1	アーカイブズの記述と編成—国際標準
第10回	管理論2	アーカイブズの記述と編成—シリーズとサブ・フォンド
第11回	管理論3	アーカイブズ構造論—日本政府と地方自治体
第12回	管理論4	アーカイブズ構造論—近現代個人文書
第13回	管理論5	アーカイブズ構造論—近世・近代の家文書
第14回	管理論6	フォンドレベルの概要記述

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第14回の授業では、各自が文書群を選んでそれぞれにアーカイブズ記述の国際標準に従って文書群の概要記述を発表してもらうため、その準備にはかなりの時間を要することになる。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003年）
国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』（思文閣出版、2013年）
渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）、特に授業最後の質疑、および第14回の発表内容。

【学生の意見等からの気づき】

明確にしゃべる。

【学生が準備すべき機器他】

講義ではパワーポイントを多用する予定。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>社会的結合、災害

<主要研究業績>

渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）、『近世日本の都市と民衆—住民結合と序列意識—』（吉川弘文館、2000年）、「災害対応と文書行政—江戸の二つの水害から」（『歴史評論』760,2013年）、「災害復興をめぐる近世都市政策と地域社会」（『歴史評論』797,2016年）

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅱ

渡辺 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学の体系的理解とは何かを考える。

【到達目標】

アーカイブズ学の基本概念を用いて思考できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「アーカイブズ学Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「アーカイブズ学Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テキストを輪読し討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の方法を説明し、報告の担当を決める。また、テキストの序論を説明する。
第2回	アーカイブズ機関における編成記述の動向と課題	都道府県文書館の目録と検索システムの状況
第3回	アーカイブズ編成・記述の原則再考	オーストラリアからのシリーズ・システムの可能性
第4回	日本近世・近代在地記録史料群の階層構造分析方法について	原則の柔軟な適用について考える
第5回	商家文書の史料群構造分析	松代八田家文書について検索手段の編成を考える
第6回	名主家文書における文書認識と目録編成	分散管理と情報共有の視点から考える
第7回	近現代個人文書の特性と編成記述	可変的なシリーズ設定のあり方について考える
第8回	組織体の機能構造とアーカイブズ編成	大学アーカイブズを事例として考える
第9回	転封にみる領知支配と目録	近世大名家文書の編成記述のための歴史学的アプローチの可能性について考える
第10回	近現代組織体の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第11回	海外の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第12回	近世組織体の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第13回	中世組織体の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第14回	正倉院文書に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

輪番で報告の準備。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2013年

【参考書】

国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ—地域の持続へ向けて—』勉誠出版、2017年

【成績評価の方法と基準】

報告と討論（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

歴史学の議論にならないように気を付けること。

【その他の重要事項】

教科書は、受講者の専門の構成によっては参考文献に変更する可能性がある。また、2019年8月までに、より適切な図書が刊行された場合、変更の可能性がある。

さらに、後半数回で輪読する論文は例示である。例えば、日本古代史専門の大学院生が受講者のなかにいない場合には「正倉院文書」に関する論文は取り上げない。なお、いうまでもなく外国史の大学院生も歓迎する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>社会的結合、災害

<主要研究業績>

渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）、『近世日本の都市と民衆—住民結合と序列意識—』（吉川弘文館、2000年）、『江戸の『六ヶ所』高札場と都市社会』（『日本歴史』745、2010年）、『災害対応と文書行政—江戸の二つの水害から』（『歴史評論』760、2013年）

CUM500B4

文書館管理研究 I

齋藤 勝、青木 直己、葦名 ふみ、新井 浩文、岩壁 義光、冨塚 一彦

【Outline and objectives】

Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below. (1) What's an archives? (2) What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4) What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本および各国の文書館の歴史と現在について学びます。なお、この授業は、文書館管理研究Ⅱ（秋学期）と連続して受講することを必須とします。

【到達目標】

日本の文書館管理制度について、アーキビストに相応しい知識と認識を深めます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「文書館管理研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「文書館管理研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は、文書館の成立から現在に至る歴史、ならびに、現在における史料の収集・保存・管理・閲覧、また、対象とした文書館に特徴的な事業について講義し、文書館の仕事についての認識を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション (04/10)	授業の計画と心構え
第2回	宮内庁書陵部 1 (04/17 岩壁義光)	「皇室」アーカイブズの概要
第3回	宮内庁書陵部 2 (04/24 岩壁義光)	公文書の構造と公開
第4回	宮内庁書陵部 3 (05/08 岩壁義光)	歴史的資料の保存
第5回	外務省外交史料館 1 (05/15 冨塚一彦)	外交史料館所蔵記録の概要と記録公開の現状
第6回	外務省外交史料館 2 (05/22 冨塚一彦)	外務省記録および日本外交文書の歴史的利用
第7回	国立国会図書館憲政資料室 1 (05/29 葦名ふみ)	憲政資料室の概要（歴史と現状）
第8回	国立国会図書館憲政資料室 2 (06/05 葦名ふみ)	憲政資料室の実務
第9回	とらや文庫 1 (06/12 青木直己)	企業アーカイブズの歴史
第10回	とらや文庫 2 (06/19 青木直己)	企業における記録史料の収集と管理
第11回	とらや文庫 3 (06/26 青木直己)	企業アーカイブズの利用
第12回	埼玉県立文書館 1 (07/03 新井浩文)	概論：公立文書館の歴史と運営
第13回	埼玉県立文書館 2 (07/10 新井浩文)	公文書等の保存と運営
第14回	埼玉県立文書館 3 (07/17 新井浩文)	公文書等の公開と活用

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

可能な限り、近隣の公立文書館を訪れてみてください。その他は各々の授業の際に指示します。

【テキスト（教科書）】

授業の当日、資料ないしプリントを配布します。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985年）
高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997年）
安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館、1998年）
青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50% 試験（レポート） 50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

〈現職〉

青木直己・元とらや文庫研究主幹
葦名ふみ・国立国会図書館利用者サービス部政治史料課憲政資料係長
新井浩文・埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸主幹
岩壁義光・元宮内庁書陵部編修課長
冨塚一彦・外務省外交史料館課長補佐

CUM500B4

文書館管理研究Ⅱ

長井 純市、青木 睦、赤松 道子、石橋 崇雄、草野
佳矢子、山田 太造、渡辺 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本および各国における文書館の歴史と現在、そして実務を学ぶ。

【到達目標】

文書館管理制度の実務に関する知識を習得し、アーキビストとして必要とされる基礎・基盤を確立する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「文書館管理研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「文書館管理研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

文書館の歴史、史料の収集・保存・管理・展示・利用などの実務、さらに文書館特有の事業について複数の教員が講義形式（オムニバス形式）で解説する。担当教員と受講生との質疑応答を利用し、授業の活性化に努め、受講生の能動的学習をはかる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	秋学期の授業について (09/25 長井純市)	イントロダクション～授業の概要と受講上の諸注意～
2	東京大学史料編纂所1 (10/02 山田太造)	史料編纂所とコンピュータシステム～総論～
3	東京大学史料編纂所2 (10/09 山田太造)	史料編纂所のDB・テキスト系DBとメタデータ
4	東京大学史料編纂所3 (10/16 山田太造)	史料編纂所のDB・複製史料の画像系DB
5	中国の文書館1 (10/23 石橋崇雄)	中国の図書館と檔案館(1)
6	中国の文書館2 (10/30 石橋崇雄)	中国の図書館と檔案館(2)
7	ロシアの文書館1 (11/06 赤松道子)	ロシアの文書管理と資料の分類①連邦アルヒーフ
8	ロシアの文書館2 (11/13 赤松道子)	ロシアの文書管理と資料の分類②外交文書館など
9	ロシアの文書館3 (11/20 草野佳矢子)	ロシアの文書資料の検索と利用
10	アーカイブズ記述編成の方法 (11/27 渡辺浩一)	ISAD(G)「記録史料記述の国際標準」を学ぶ
11	アーカイブズ記述編成の実際 (12/04 渡辺浩一)	日本近世の文書を対象にISAD(G)を実際に使ってみる
12	国文学研究資料館1 (12/11 青木睦)	戦後の史料保存運動と史料保存の原則
13	国文学研究資料館2 (12/18 青木睦)	史料のための保存環境と劣化の予防
14	国文学研究資料館3 (01/08 青木睦)	アーカイブズ建築・設備と災害対策

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

可能な限り、史料所蔵機関を訪ね、調査・利用し、その管理に関する実務に触れてみる。その他、担当各教員が授業中に指示する。

【テキスト（教科書）】

授業の当日、資料プリントを配布する。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985年）
高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997年）
安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館、1998年）
青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、試験（レポート）50%を基準として、成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

双方向型授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期授業科目「文書館管理研究Ⅰ」との継続履修が強く望まれる。

【担当教員の専門分野等】

< 現職 >

青木 睦・国文学研究資料館准教授
赤松（梶）道子・法政大学大学院兼任講師
石橋崇雄・東洋文庫研究員
草野佳矢子・法政大学大学院兼任講師
山田太造・東京大学史料編纂所助教
渡辺浩一・国文学研究資料館教授

【Outline and objectives】

Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below. (1) What's an archives? (2) What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4) What are the skills of an archivist working for an archives? Students' questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by the professors.

CUM500B4

記録史料学研究 I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

主に地方文書の保存・調査（整理）・管理の実践的知識について習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「記録史料学研究 I」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「記録史料学研究 I」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

記録史料管理の理論と方法について下記のような計画で授業を進める。具体的には、古文書の書札礼や様式論を踏まえ、実物の古文書の初歩的・入門的な解説、古文書の取り扱いに関する手法、調査台帳の作り方や目録作成方法の基礎の習得が中心となる。講義・実習・発表を取り交えた授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	記録史料調査の理論と方法	目的 計画 etc
第 2 回	記録史料管理の歴史と現在 (1)	資料管理の歴史と現在
第 3 回	記録史料管理の歴史と現在 (2)	現在の史料管理の課題 各種の資料管理の実情
第 4 回	記録史料の範疇 (1)	社会組織と記録史料（身分・家・家業）
第 5 回	記録史料の範疇 (2)	地方文書 町方文書 武家文書 寺社文書
第 6 回	記録史料の範疇 (3)	古文書と古記録 古文書の種類
第 7 回	記録史料の範疇 (4)	古文書と古記録 古記録の種類
第 8 回	記録史料の取り扱い (1)	古文書 1
第 9 回	記録史料の取り扱い (2)	古文書 2
第 10 回	記録史料の取り扱い (3)	古記録 1
第 11 回	記録史料の取り扱い (4)	古記録 2
第 12 回	記録史料群の保存と調査	調査台帳の作成方法
第 13 回	記録史料群の調査・整理	調査台帳の作成方法
第 14 回	記録史料群の整理・管理	調査台帳と文書目録

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）。

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 % / 研究発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

古文書をながめる時間をたくさん持つことが大事です。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史
〈研究テーマ〉都市論、記憶論
〈研究業績〉「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83 巻 1 号、2017 年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88 号、2017 年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学演習 I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

記録史料学研究 I の内容を踏まえ、より深く地方文書の保存・調査（整理）・管理について実践的に習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「記録史料学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「記録史料学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

古文書学およびアーカイブズ学の成果ないし方法に基づき、実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するかを学ぶ。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。こうしたことを実践的に学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	史料群とは何か	目的 計画 etc
第 2 回	史料群構造の理解 (1)	史料群 1
第 3 回	史料群構造の理解 (2)	史料群 2
第 4 回	史料群構造の理解 (3)	史料群 3
第 5 回	記録史料の取扱い (1)	古文書 1
第 6 回	記録史料の取扱い (2)	古文書 2
第 7 回	記録史料の取扱い (3)	古文書 3
第 8 回	記録史料の取扱い (4)	古文書 4
第 9 回	記録史料の調査 (1)	史料 1
第 10 回	記録史料の調査 (2)	史料 2
第 11 回	記録史料の調査 (3)	史料 3
第 12 回	記録史料の調査 (4)	史料 4
第 13 回	検索システムの構築 (1)	目録整備 1
第 14 回	検索システムの構築 (2)	目録整備 2

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）。

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 % / 発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史
〈研究テーマ〉都市論、記憶論
〈主要研究業績〉「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83 巻 1 号、2017 年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88 号、2017 年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学研究Ⅱ

岩壁 義光

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治以降、近代日本の天皇・皇族の事蹟を記録化した資料として「実録」が編纂されている。本講義では、アジアに於ける実録編纂の歴史の中でも、日本において独自の歩みを遂げてきた天皇実録の編纂目的、編纂過程を考察し、日本の実録が記録史料として持つ意味を多角的な視点から理解する。

【到達目標】

実録の編纂がどのように計画されたのかを公文書から読み解く力を付ける
編纂のため、どのような記録史料がなぜ選択され、どのように用いられて編纂が進められたかを分析する能力を身につける
日本の実録の編纂方法から、実録の記録史料としての意味を理解する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「記録史料学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「記録史料学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は、「孝明天皇紀」編纂史料を中心に画像を多用し、配付テキストを用いて講義形式を中心とするが、受講生には適宜配付する原文複写史料の講読など、積極的な参加を求める。配付資料は、原則、授業支援システムにアップするので各自ダウンロードして利用すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介および各授業の講義内容について紹介
第2回	明治期に於ける実録編纂の開始 1	太政官の「維新史」編纂とその変容
第3回	明治期に於ける実録編纂の開始 2	内務省文部省の歴史編纂
第4回	宮内省の編纂事業 1	編纂組織の変遷と編纂関係者 - 金石文とは何か -
第5回	宮内省の編纂事業 2	宮内省の歴史編纂と「殉難録稿」
第6回	宮内省の編纂事業 3	幕末国事執掌調査と史談会
第7回	孝明天皇紀編纂 1	- 先帝取調掛の設置と宮内公文書館蔵「先帝御事蹟取調録」
第8回	孝明天皇紀編纂 2	- 孝明天皇紀編纂と先帝取調掛 - 図書寮私文書 -
第9回	孝明天皇紀編纂 3	編修松浦辰男と編纂関係諸意見書 (公文書としての意見書の取り扱われ方)
第10回	孝明天皇紀編纂 4	- 孝明天皇紀附図の編纂 絵画資料 -
第11回	孝明天皇紀編纂 5	孝明天皇紀附図の理解
第12回	孝明天皇紀編纂 6	東山御文庫と天皇文書
第13回	皇統譜と実録編纂	皇統譜の編纂と完成
第14回	明治後期の実録編纂	「天皇実録義例」と明治天皇実録の編纂構想

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前には配付する原文資料は必ず読解し読めるようにする。

配付資料は、日本の古文書に限らない。

金石文など読解の難易度の高いものもあるので、必ず事前に予習する事。事前に予習をしないと講義を十分に理解できない。

また、実録全体を扱った単行本はほとんどないので、参考論文を事前に適宜紹介する。受講した内容は復習をすること。

【テキスト（教科書）】

テキストは下記を利用するが、開講後に支援システムにより配付する。

具体的には、IWAKABE YOSHIMITSU "The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition" (ACTA ASIATICA bulletin of the institute of easternculture 114 TOHOGAKKAI 2018)

【参考書】

岩壁義光『大正天皇実録 補訂版』1~3 (ゆまに書房)

宮内庁『明治天皇紀』1~13(吉川弘文館)

宮内庁『昭和天皇実録』(東京書籍)

明治神宮『昭憲皇太后実録』上下 (吉川弘文館)

【成績評価の方法と基準】

講義時に課す小レポートおよび、史料講読および講義時の質疑応答により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生には事前に連絡用のメールアドレスを公開する。授業改善などの必要があればメールにより受け付け、対応する。

【学生が準備すべき機器他】

特にないが、くずし字読解辞典、漢和辞典などの用意は望ましい。

【日本近代史】

<専門領域>

近代日本政治史

<研究テーマ>

実録研究

<主要研究業績>

・IWAKABE YOSHIMITSU "The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition" (ACTA ASIATICA bulletin of the institute of easternculture 114 TOHOGAKKAI 2018)

・(資料紹介) 岩壁義光「宮内公文書館所蔵『御逸事』について」(『神國』18 2017)

・岩壁義光補訂『大正天皇実録 補訂版』第二巻&三巻 2018 (ゆまに書房)

【Outline and objectives】

Emperor's chronicles ("JITUROKU") were compiled in Asia.

In Japan, the Emperor's chronicles, Komei tenno ki, Meiji tenno ki, Taisho tenno-ki, showa tenno ki, were compiled again since Meiji era by various historical materials.

At this lecture, you learn the reason for compilation, compilation process, and, you understand the feature of a chronicle of Japan.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅱ

岩壁 義光

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治以降、近代日本の天皇・皇族の事蹟を記録化した資料として「実録」が編纂されている。本講義では、アジアに於ける実録編纂の歴史の中でも、日本において独自の歩みを遂げてきた天皇実録の叙述と編纂史料について、演習を通じて多角的な視点から理解する。

【到達目標】

「明治天皇紀」の講読を通じて歴史叙述の方法と内容を正確な理解する能力を高める

典拠として使用されている諸資料の選定理由を理解し、歴史研究の問題解決に必要な史料の選定能力を付ける

難解な典拠資料の原本を解説する能力を向上させる

原典資料の分析能力を向上させる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「記録史料学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「記録史料学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は公開「明治天皇紀」を主テキストに「大正天皇実録」「昭和天皇実録」を交え、関連資料を用いて演習形式で行う。受講生には天皇紀から記録史料に関わる課題を与えるので、授業時間内にレポートすること。報告後、疑問点について討論し、解決方法を探る。また、教室に於ける講義の外、現地見学を行い多角的に記録史料を理解出来るよう進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介および各授業の講義内容について紹介
第2回	明治天皇紀の編纂（講義）	明治天皇紀の講読の基礎知識と編纂概要
第3回	明治天皇紀と編纂記録の公文書①	「編修事業録」から見た天皇紀編纂の主旨と目的の変遷
第4回	明治天皇紀と編纂記録の公文書②	「編修事業録」から見た天皇紀編纂方法（史料蒐集と資料稿本）
第5回	明治天皇の践祚	明治天皇紀から明治天皇の践祚と暗殺問題（写本私文書と談話記録）
第6回	天皇の即位礼① 明治維新と儀式	明治天皇の即位に関する諸儀式と内容
第7回	天皇の即位礼② 皇室令下の儀式	大正天皇の即位と「皇室登極令」（明治41年制定）
第8回	明治天皇の地方巡幸 - 巡幸の計画と実施 -	太政官「巡幸雜記」（国立公文書館）の利用と分析
第9回	宮中と西南戦争	宮内省記録の中の西南戦争 - 「西南征討録」から見た西南戦争 -
第10回	外交と庭園（校外授業）- 社交空間としての庭園 -	浜離宮見学（延遠館・中島茶屋・鴨場）
第11回	主馬寮の誕生	「明治天皇紀」のなかの御料馬と御獵場の歴史的展開
第12回	天皇と大本営	「明治天皇紀」と「明治天皇御伝記史料明治軍事史」から見た大本営における天皇
第13回	側近の談話から見る天皇 - オーラルヒストリーの活用 -	「談話筆記」や「御逸事」のなかの天皇
第14回	天皇の崩御（講義）	明治天皇崩御と「明治天皇紀」「大正天皇実録」「昭和天皇実録」の叙述、公刊天皇紀・天皇実録の問題点と課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業支援システムにより事前には配付した原文資料がある場合には、必ず読解し読めるようにする。

与えられたテーマに即した資料を探し出し、天皇紀の叙述とあわせて報告するように準備する。資料については教員に相談することは当然可。報告には、研究史を簡単に紹介し、自分の報告の独自性をアピールできるように準備すること。また、問題点の抽出のため、報告に先立ちレジュメを教員・受講生に事前に配布することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

テキストは「明治天皇紀」等のほか、IWAKABE YOSHIMITSU "The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition" (ACTA ASIATICA bulletin of the institute of easternculture 114 TOHOGAKKAI 2018) を利用する

【参考書】

岩壁義光『大正天皇実録 補訂版』1～3（ゆまに書房）

宮内庁『明治天皇紀』1～13（吉川弘文館）

宮内庁『昭和天皇実録』（東京書籍）

明治神宮『昭憲皇太后実録』上下（吉川弘文館）

【成績評価の方法と基準】

講義時のレポートおよび、史料講読および講義時の質疑応答により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生には事前に連絡用のメールアドレスを公開する。授業改善などの必要があればメールにより受け付け、対応する。

【日本近代史】

<専門領域>

近代日本政治史

<研究テーマ>

実録研究

<主要研究業績>

・IWAKABE YOSHIMITSU "The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition" (ACTA ASIATICA bulletin of the institute of easternculture 114 TOHOGAKKAI 2018)

・（資料紹介）岩壁義光「宮内公文書館所蔵『御逸事』について」（『神園』18 2017）

・岩壁義光補訂『大正天皇実録 補訂版』第二巻&三巻 2018（ゆまに書房）

【Outline and objectives】

Emperor's chronicles ("JITUROKU") were compiled in Asia.

In Japan, the Emperor's chronicles, Komei tenno ki, Meiji tenno ki, Taisho tenno-ki, showa tenno ki, were compiled again since Meiji era by various historical records.

Through this exercise lesson, you learn their description method and historical records of a chronicle, and you understand the feature of a chronicle of Japan.

LIN500B4

外書講読Ⅰ

池本 今日子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア・東欧史の諸問題に関するロシア語文献ないし史料を読み、研究の深化につながる読み方を身につける。

【到達目標】

ロシア史に関する理解を深める。
論文作成に必要な、ロシア語文献の読解能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読。テキストについては、ロシア・東欧に関する外国語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。たとえば、次のような文献を候補にしているが、柔軟に対応する。История внешней политики России. (Конец XV - 1917 г.). (5 томов). М.:Международ. отношения, 1998-1999. 文献に基づく研究報告を適宜予定する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキスト決定など
第2回	講読①	講読、質疑、解説
第3回	講読②	講読、質疑、解説
第4回	講読③	講読、質疑、解説
第5回	講読④	講読、質疑、解説
第6回	講読⑤	講読、討論
第7回	講読⑥	講読、討論
第8回	講読⑦	講読、質疑、解説
第9回	講読⑧	講読、質疑、解説
第10回	講読⑨	講読、質疑、解説
第11回	講読⑩	講読、質疑、解説
第12回	講読⑪	講読、質疑、解説
第13回	講読⑫	講読、討論
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読テキストの予習。各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講読テキストは教員が準備する。

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ロシア史
＜研究テーマ＞外交、憲法、ポーランド問題
＜主要研究業績＞『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To read documents on russian history in Russian.

LIN500B4

外書講読Ⅱ

池本 今日子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア・東欧史の諸問題に関するロシア語文献ないし史料を読み、研究の深化につながる読み方を身につける。

【到達目標】

ロシア史に関する理解を深める。
論文作成に必要な、ロシア語文献の読解能力を高める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読。テキストについては、ロシア・東欧に関する外国語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。たとえば、次のような文献を候補にしているが、柔軟に対応する。История внешней политики России. (Конец XV - 1917 г.). (5 томов). М.:Международ. отношения, 1998-1999. 文献に基づく研究報告を適宜予定する

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの決定など
第2回	講読①	講読、質疑、解説
第3回	講読②	講読、質疑、解説
第4回	講読③	講読、質疑、解説
第5回	講読④	講読、質疑、解説
第6回	講読⑤	講読、討論
第7回	講読⑥	講読、討論
第8回	講読⑦	講読、質疑、解説
第9回	講読⑧	講読、質疑、解説
第10回	講読⑨	講読、質疑、解説
第11回	講読⑩	講読、質疑、解説
第12回	講読⑪	講読、質疑、解説
第13回	講読⑫	講読、討論
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読テキストの予習。各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講読テキストは教員が準備する。

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ロシア史
＜研究テーマ＞外交、憲法、ポーランド問題
＜主要研究業績＞『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To read documents on russian history in Russian.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏の出自
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏の財源
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏の政治的位置
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏設置の歴史的意義
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制の特徴
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国との比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文書書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として」『漢字文獻情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整をへて1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	聖徳太子信仰の形成
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	聖徳太子信仰の展開
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	聖徳太子信仰の史料論
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	聖徳太子信仰の歴史的意義
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使との比較
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	人姓とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	複姓氏族の検討
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	舎人の語原
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	舎人氏族の実態
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文書書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として」『漢字文獻情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professor and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関係する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関係する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史
<研究テーマ>日中間係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関係する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関係する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史
<研究テーマ>日中間係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学術雑誌への投稿をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料採訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をもて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をもて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な企画・構想力、批判力および表現力を養う。そのために、研究発表や質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会などを行う。

【到達目標】

以下の5点を達成する動機付けおよび手掛かりを得る。

- 1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。
- 2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。
- 3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。
- 4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。
- 5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的発言力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、日本近現代史研究に関わる新刊図書を中心に課題図書を定め、受講生一人ひとりが発表を行い、それについて教員が講評すると共に、参加者一同による自由質疑を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要説明。
第2回	課題図書紹介（1）	課題図書の提示とねらいの説明（1）
第3回	課題図書に関する発表（1）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（1）
第4回	課題図書紹介（2）	課題図書の提示とねらいの説明（2）
第5回	課題図書に関する発表（2）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（2）
第6回	課題図書紹介（3）	課題図書の提示とねらいの説明（3）
第7回	課題図書に関する発表（3）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（3）
第8回	課題図書紹介（4）	課題図書の提示とねらいの説明（4）
第9回	課題図書に関する発表（4）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（4）
第10回	課題図書紹介（5）	課題図書の提示とねらいの説明（5）
第11回	課題図書に関する発表（5）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（5）
第12回	課題図書紹介（6）	課題図書の提示とねらいの説明（6）
第13回	課題図書に関する発表（6）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（6）
第14回	受講生の研究計画発表（1）	受講生の博士論文作成に向けた企画・構想および計画の発表と自由質疑（1）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習として課題図書を読み、関連文献を調査し読んでおくこと。授業内自由質疑における話題・意見・疑問・質問などをまとめておくこと。復習として博士論文作成に向けて活用し得るポイントをまとめること。博士論文作成に向けた行程表を作成すること。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

Marius B. Jansen, *The Making of Modern Japan*, Harvard University Press, 2002

【成績評価の方法と基準】

出席、発表、質疑など授業への参加度を中心に平常点 100 % で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

双方向的授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板に、毎回授業の要点を記すので、それを参照する IT 機器（PC、スマートフォン、タブレットなど）。

【その他の重要事項】

・史学特殊演習 A II との継続履修が望ましい。史学特殊演習 B I と同一内容である。

・オフィスアワーは、毎週月曜日 13 時 30 分～14 時 50 分長井研究室（ポアソナード・タワー 15 階 1505 室）。複数の申し込みがある場合には、スケジュールを調整することがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

『河野広中覚書（上）（下）』（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

『韓国をめぐる河野広中の周辺』（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

『中国をめぐる河野広中の周辺』（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」2018 年）

【Outline and objectives】

This is a class for the PhD candidates. The object of this class is to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review by every student.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な企画・構想力、批判力および表現力を養う。そのために、研究発表や質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会などを行う。

【到達目標】

以下の5点を達成する動機付けおよび手掛かりを得る。

- 1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。
- 2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。
- 3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。
- 4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。
- 5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的発言力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、日本近現代史研究に関わる新刊図書を中心に課題図書を定め、受講生一人ひとりが発表を行い、それについて教員が講評すると共に、参加者一同による自由質疑を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要説明。
第2回	課題図書紹介（1）	課題図書の提示とねらいの説明（1）
第3回	課題図書に関する発表（1）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（1）
第4回	課題図書紹介（2）	課題図書の提示とねらいの説明（2）
第5回	課題図書に関する発表（2）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（2）
第6回	課題図書紹介（3）	課題図書の提示とねらいの説明（3）
第7回	課題図書に関する発表（3）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（3）
第8回	課題図書紹介（4）	課題図書の提示とねらいの説明（4）
第9回	課題図書に関する発表（4）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（4）
第10回	課題図書紹介（5）	課題図書の提示とねらいの説明（5）
第11回	課題図書に関する発表（5）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（5）
第12回	課題図書紹介（6）	課題図書の提示とねらいの説明（6）
第13回	課題図書に関する発表（6）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（6）
第14回	受講生の研究計画発表（1）	受講生の博士論文作成に向けた企画・構想および計画の発表と自由質疑（1）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習として課題図書を読み、関連文献を調査し読んでおくこと。授業内自由質疑における話題・意見・疑問・質問などをまとめておくこと。復習として博士論文作成に向けて活用し得るポイントをまとめること。博士論文作成に向けた行程表を作成すること。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

Marius B. Jansen, *The Making of Modern Japan*, Harvard University Press, 2002

【成績評価の方法と基準】

出席、発表、質疑など授業への参加度を中心に平常点 100 % で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

双方向的授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板に、毎回授業の要点を記すので、それを参照する IT 機器（PC、スマートフォン、タブレットなど）。

【その他の重要事項】

・史学特殊演習 A I との継続履修が望ましい。史学特殊演習 B II と同一内容である。

・オフィスアワーは、毎週月曜日 13 時 30 分～14 時 50 分長井研究室（ポアソナード・タワー 15 階 1505 室）。複数の申し込みがある場合には、スケジュールを調整することがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」（『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月）

「田中光顕関係文書紹介」（一）～（十三続）（『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年）

『山県有朋関係文書』第 1～3 巻（山川出版社、2004～2007 年）

『木戸孝允関係文書』第 1～4 巻（東京大学出版会、2006～2009 年）

『河野広中』吉川弘文館（2009 年）、

「河野広中覚書（上）（下）」（『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月）

「韓国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月）

「中国をめぐる河野広中の周辺」（『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月）

『棚橋小虎日記・昭和 20 年』（法政大学大原社会問題研究所、2009 年）

『棚橋小虎日記・昭和 17 年』（法政大学大原社会問題研究所、2011 年）

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」（『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月）

「A Year in America」（『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月）

「明治日本と日本人」（独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」2018 年）

【Outline and objectives】

This is a class for the PhD candidates. The object of this class is to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review by every student.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

後藤 篤子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学会発表やその活字化、後進の指導、ラテン語読解能力のさらなる向上など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を形成・強化する。

【到達目標】

- (1) 研究会や学会で積極的に研究発表を行い、その報告原稿を活字化する。
 - (2) 自分がこれまでに修得した専門的知識を生かして、修士課程在籍者に対する指導経験を積む。
 - (3) 後進の指導を通じて、自らのラテン語読解能力もさらに向上させる。
- 以上の3点を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

主として受講者による研究の現状報告、学術雑誌掲載に向けた論文原稿作成とそれに対する指導を中心に、授業を進める。最後の数回は修士課程科目「西洋史学演習 I」と合同授業とし、博士課程在籍の受講者から修士課程在籍者に対し、ラテン語史料の読み方などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の進捗状況について	受講者による研究の現状報告と討議
第2回	研究内容の活字化に向けて(1)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議(1)
第3回	研究内容の活字化に向けて(2)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議(2)
第4回	研究内容の活字化に向けて(3)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議(1)
第5回	研究内容の活字化に向けて(4)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議(2)
第6回	研究内容の活字化に向けて(5)	受講者が提出した修正原稿に関する討議(1)
第7回	研究内容の活字化に向けて(6)	受講者が提出した修正原稿に関する討議(2)
第8回	研究内容の活字化に向けて(7)	論文原稿を学術雑誌に投稿可能な形に完成させる
第9回	博士論文作成に向けて	博士論文完成に向けて、残っている課題の整理と討議
第10回	後進への指導経験を積む(1)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(1)
第11回	後進への指導経験を積む(2)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(2)
第12回	後進への指導経験を積む(3)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(3)
第13回	後進への指導経験を積む(4)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(4)
第14回	研究の今後に向けて	夏期休暇中の研究計画と教員からの助言

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、学会での口頭発表や学術雑誌論文の形でまとめる。後進の『ガリア戦記』読解を補助するにあたっての予習と復習。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、Caesar, *The Gallic Wars*, tr. by H. J. Edwards (Loeb Classical Library 72).

【参考書】

後進の指導については、カエサル『ガリア戦記』、國原吉之助訳、講談社学術文庫、1994年。ガイウス・ユリウス・カエサル『ガリア戦記』、石垣憲一訳、平凡社ライブラリー、2009年。『カエサル戦記集 ガリア戦記』、高橋宏幸訳、岩波書店、2015年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（研究の活字化に向けての自主的努力 70%、ラテン語読解補助の予習も含めた後進の指導に向けての準備 30%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史
<研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

- ①「ローマ帝国における『異教』とキリスト教」、歴史学研究会編『地中海世界史1 古代地中海世界の統一と変容』青木書店、2000年
- ②（共訳）エドワード・ギボン『図説ローマ帝国衰亡史』東京書籍、2004年
- ③（分担執筆・史料邦訳）歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』岩波書店、2012年

【Outline and objectives】

Preparations to become an independent researcher and teacher, such as the enhancement of the abilities to read and comprehend the historical sources in Latin, to make presentations concerning one's own research, and to help younger students in their researches.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

後藤 篤子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学会発表やその活字化、ラテン語読解能力のさらなる向上など、博士論文を完成させ、研究者として自立的に活動していくための基盤を強化する。

【到達目標】

- (1) 研究会や学会で積極的に研究発表を行い、博士論文を完成に近づける。
 - (2) ラテン語読解能力をさらに向上させる。
- 以上の2点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者による研究報告とその内容に関する討議を中心に授業を進め、ラテン語史料講読については、受講者が使用する予定の史料を中心に精読・討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の現状報告	受講者が夏期休暇中に進めた研究内容についての報告と討議
第2回	博士論文の完成に向けて(1)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議(1)
第3回	博士論文の完成に向けて(2)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議(2)
第4回	博士論文の完成に向けて(3)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議(3)
第5回	新たな学会発表に向けて(1)	博士論文完成のために残されている課題の検討
第6回	新たな学会発表に向けて(2)	新たな学会発表の概要報告と質疑応答・討議
第7回	新たな学会発表に向けて(3)	発表原稿草案の検討と討議
第8回	新たな学会発表に向けて(4)	ラテン語史料の読解に関する質疑応答
第9回	新たな学会発表に向けて(5)	発表レジュメと発表原稿の最終的確認
第10回	新たな論文発表に向けて(1)	学術雑誌への投稿用にまとめ直した原稿とラテン語史料読解に関する討議
第11回	新たな論文発表に向けて(2)	投稿原稿の最終的確認
第12回	博士論文の完成に向けて(4)	博士論文で使用予定のラテン語史料を改めて読み直す(1)
第13回	博士論文の完成に向けて(5)	博士論文で使用予定のラテン語史料を改めて読み直す(2)
第14回	博士論文の完成に向けて(6)	博士論文完成に向けたタイムスケジュールの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、研究内容を口頭発表や雑誌論文の形でまとめる。授業で読むラテン語史料の読解を自分で進め、授業時の質疑応答や指摘を踏まえて、自分の読解を見直す。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

授業で読むラテン語史料については、受講者と相談のうえで決定する。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（自主的研究の進捗と内容 80 %、ラテン語読解の精度 20 %）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【その他の重要事項】

史学特殊演習 A I（後藤）から継続して履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史

<研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

① *The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, Studia Patristica, Vol.XCIII (2017).*

②（分担執筆・史料邦訳）歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012年

③シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91編10号（1982年10月）

【Outline and objectives】

Preparations to complete a doctoral thesis and the enhancement of the abilities necessary for an independent researcher.

HIS500B4

日本史学特殊講義 A I

阿部 朝衛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を理解し、各自が保有する資料へ適用し、課題・問題点の把握を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料に方法を適用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第2回	編年研究の基礎 1	型式学の前提、属性の抽出と操作方法
第3回	編年研究の基礎 2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第4回	編年研究の基礎 3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第5回	実践的研究の検討 1	モンテリウスの研究 1
第6回	実践的研究の検討 2	モンテリウスの研究 2
第7回	実践的研究の検討 3	セリエーション 1
第8回	実践的研究の検討 4	セリエーション 2
第9回	論文の検討 1	旧石器時代論文
第10回	論文の検討 2	縄文時代論文
第11回	論文の検討 3	弥生時代・他論文
第12回	資料の検討 1	旧石器時代資料
第13回	資料の検討 2	縄文時代資料
第14回	資料の検討 3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの熟読、課題に関する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 *The Theory and Practice of Archaeology*. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 *Archaeology: Theories, Methods, and Practice*. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50%）とレポート（50%）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009年 新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of the chronology in the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to make chronology of their own archaeological materials.

HIS500B4

日本史学特殊講義 A II

阿部 朝衛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理、方法を理解し、それを各自が保有する資料に十分適用できる能力の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	春学期の課題・方法の整理
第2回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第3回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第4回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第5回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第6回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第7回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第8回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第9回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第10回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第11回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第12回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第13回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第14回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50%）とレポート（50%）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』II 2009年 新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年

「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

【Outline and objectives】

This course deals with the chronological and typological methods and theories of the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to understand many kinds of the methods and theories, and apply them to the participants' materials.

HIS500B4

日本史学特殊講義 B I

山口 英男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」
平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式で行います。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組みなおす場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	平安時代史研究と政務・儀式関係史料	平安時代史の理解にとって、政務・儀式関係史料が持つ意義を解説します。
第3回	平安時代政務・儀式史料概説	平安時代の政務関係史料、儀式関係史料について概説します。
第4回	行政実務関係史料の検討（儀式書・法制史料）	行政実務に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第5回	行政実務関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第6回	行政実務関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第7回	行政関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第8回	文芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	文芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第9回	文芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第10回	文芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第11回	文芸関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第12回	武芸関係史料の検討（儀式書・法制史料）	武芸に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第13回	武芸関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第14回	武芸関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

事前に印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、『大日本古記録』など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編
『訳注延喜式』上・中・下
『駒牽関係史料』（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編集担当）
『駒牽と相撲』（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

2019年度より授業担当者交代のため該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本古代史（奈良・平安時代史）
<研究テーマ>

古代史科学（正倉院文書の〈書類学〉）

古代の社会と行政機構

牧と駒牽をめぐる諸問題

<主要研究業績>

『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年

『正倉院文書に見える「口状」について』（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』

吉川弘文館、2018年）

『正倉院文書と古代史科学』（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本史学特殊講義 B II

山口 英男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマ「平安時代の政務・儀式関係史料の研究」

平安時代の政治・社会・文化を明らかにする上で有力な手掛かりとなる政務・儀式関係史料への理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

平安時代史研究の展開の中で、政治・社会・文化を明らかにするための有力な手掛かりとして注目されるのが政務・儀式関係史料です。その読解と検討のための基礎作業を学び、身に付けること、それを通じて政務・儀式への具体的な理解を深めることが目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

儀式書・法制史料・古記録・編年史料などを中心に、平安時代の個別の政務・儀式ごとに関係史料を精確に読解し、政務・儀式の内容・構造と時代的変遷について把握を進めることで、平安時代の国家体制の特徴や、政治史・政策史・文化史・社会史に関する知見を抽出していきます。演習形式で行います。取り上げる政務・儀式や、授業で扱う史料については、受講者の希望も踏まえて選択します。それに応じて授業計画を組み合わせる場合があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方について説明します。
第2回	仏事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	仏事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第3回	仏事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第4回	仏事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第5回	仏事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第6回	神事関係史料の検討（儀式書・法制史料）	神事に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第7回	神事関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第8回	神事関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第9回	神事関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第10回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式書・法制史料）	朝廷儀礼に関わる政務・儀式について儀式書・法制史料から検討します。
第11回	朝廷儀礼関係史料の検討（古記録・編年史料）	同じく古記録・編年史料から検討します。
第12回	朝廷儀礼関係史料の検討（儀式・政務次第の整理）	それらの政務・儀式の内容・次第を整理・検討します。
第13回	朝廷儀礼関係儀式・政務の歴史的位置付け	それらの政務・儀式の時代的変遷を整理し、歴史的特質を検討します。
第14回	平安時代の政務・儀式の展開と特質	平安時代政務・儀式の展開と特質について、得られた成果を総括します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当以外の場合も授業で取り扱う史料には必ず事前に目を通して出席してください。

【テキスト（教科書）】

担当教員が作成した印刷物を配布します（「延喜式」「儀式」「内裏式」「西宮記」「北山抄」、「大日本古記録」など）。

【参考書】

『大日本史料』第1・2・3編

『訳注延喜式』上・中・下

『駒牽関係史料』（『山梨県史 資料編3』山梨県、2001年、山口英男編纂担当）

『駒牽と相撲』（『山梨県史 通史編1』2004年、山口英男執筆担当）

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的参加、報告の発表内容、作成資料、討議への関与、レポートの内容などから総合的に判定します（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

2019年度より授業担当者交代のため該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史（奈良・平安時代史）

<研究テーマ>

古代史科学（正倉院文書の〈書類学〉）

古代の社会と行政機構

牧と駒牽をめぐる諸問題

<主要研究業績>

『日本古代の地域社会と行政機構』吉川弘文館、2019年

『正倉院文書に見える「口状」について』（佐藤信編『史料・史跡と古代社会』

吉川弘文館、2018年）

『正倉院文書と古代史科学』（『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、2016年）

【Outline and objectives】

To acquire the ability to read and understand historical materials on the imperial court ritual of the Heian period.

HIS500B4

日本史学特殊講義C I

末柄 豊

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明2年（1470）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	概要の説明、分担箇所の決定
第2回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外も、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松園斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論

<主要研究業績>

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

「畠山義経と三条西実隆・公条父子—紙背文書から探る—」（『加能史料研究』22号、2010年）

【Outline and objectives】

Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本史学特殊講義 C II

末柄 豊

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

室町時代の日記を読む

【到達目標】

室町時代の日記の読解法を習得するとともに、室町時代の政治・社会・文化・宗教等について理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

室町時代中後期の貴族甘露寺親長の日記『親長卿記』文明2年（1470）条を講読する（ただし、テキストについては、受講者との相談により変更することもありうる）。演習形式でおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	輪読1	担当者の報告、質疑応答、解説
第2回	輪読2	担当者の報告、質疑応答、解説
第3回	輪読3	担当者の報告、質疑応答、解説
第4回	輪読4	担当者の報告、質疑応答、解説
第5回	輪読5	担当者の報告、質疑応答、解説
第6回	輪読6	担当者の報告、質疑応答、解説
第7回	輪読7	担当者の報告、質疑応答、解説
第8回	輪読8	担当者の報告、質疑応答、解説
第9回	輪読9	担当者の報告、質疑応答、解説
第10回	輪読10	担当者の報告、質疑応答、解説
第11回	輪読11	担当者の報告、質疑応答、解説
第12回	輪読12	担当者の報告、質疑応答、解説
第13回	輪読13	担当者の報告、質疑応答、解説
第14回	輪読14	担当者の報告、質疑応答、解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当者は、担当日条について詳細に調査検討するのはもちろん、関連する史料・先行研究を渉猟し、十全な報告を目指す。担当者以外にも、当該日条について予習することが求められる。

【テキスト（教科書）】

『親長卿記』（史料大成または史料纂集）

【参考書】

元木泰雄・松岡斉編『日記で読む日本中世史』（ミネルヴァ書房、2011年）の12章「親長卿記」（末柄執筆）ならびに同章末尾の参考文献

【成績評価の方法と基準】

報告内容および討論への参加（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>室町時代の政治史・文化史・史料論

<主要研究業績>

「応仁・文明の乱」（『岩波講座日本歴史』8・中世3、2014年）

「禁裏文書にみる室町幕府と朝廷」（『ヒストリア』230号、2012年）

「畠山義総と三条西実隆・公条父子一紙背文書から探る」（『加能史料研究』22号、2010年）

【Outline and objectives】

Diary of the Muromachi period

HIS500B4

日本史学特殊講義 D I

白川部 達夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近世社会は、明治維新以後、急速な近代化を達成した歴史的前提を蓄積した時代でした。本講義はこうした近世社会の特徴を東アジアの近世と比較しながら学ぶようにします。

【到達目標】

日本の近世社会の特徴を東アジアと比較しながら説明することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では、参考文献を読み、これを要約して発表することで、論文の読み方を学びます。また各自のテーマの研究発表、教員の講義などを交えて行い、これについてデスカッションしながら進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の説明、論文講読の割り当て
第2回	須田努他編『比較史的にみた近世日本』（東京堂出版、2011年）第1章講読・討論	深谷克己「東アジアにおける近代移行期の君主・神観念」
第3回	同上、第2章講読・討論	宮嶋博史「東アジア世界における日本の『近世化』」
第4回	同上、第3章講読・討論	宮嶋博史「朝鮮史からみた『近世』日本」
第5回	同上、第4章講読・討論	深谷克己「東アジア世界の再序列化と近世日本」
第6回	同上、第5章講読・討論	若尾政希「近世日本の思想的な位置」
第7回	学生の研究発表	学生の研究発表と討論
第8回	同上、第6章講読・討論	藪田貴「『女大学』のなかの『中国』」
第9回	同上、第7章講読・討論	久留島浩・三野行徳「幕末維新期の武士」
第10回	同上、第8章講読・討論	井上勝生「幕末・維新変革とアジア」
第11回	同上、第9章講読・討論	須田努「江戸時代中期 民衆の心性と社会文化の特徴」
第12回	同上、第10章講読・討論	山田賢「東アジア『近世化』の比較史的検討」
第13回	同上、第11章講読・討論	趙景達「朝鮮の民本主義と民衆運動」
第14回	講義	「近世日本の百姓の所持と東アジア」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読文献を必ず読むこと、また復習としてレジュメなどを読んでまとめること。

【テキスト（教科書）】

須田努他編『比較史的にみた近世日本』（東京堂出版、2011年）

【参考書】

特にありません。

【成績評価の方法と基準】

論文講読の担当によるレジュメ作成能力（40%）、発表能力（20%）、討論の積極性（20%）、研究発表（20%）として評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<日本近世史>

<近世民衆社会意識論>

<『近世質地請戻し慣行の研究』塙書房、2012年>

【Outline and objectives】

In this lecture we will examine the society of the Tokugawa period compared with East Asia.

HIS500B4

日本史学特殊講義 D II

白川部 達夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近世社会は、明治維新以後、急速な近代化を達成した歴史的前提を蓄積した時代でした。本講義では、明治維新の思想と社会について検討します。

【到達目標】

明治維新の思想と社会について説明できるようになります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では、参考文献を読み、これを要約して発表することで、論文の読み方を学びます。また各自のテーマの研究発表、教員の講義などを交えて行い、これについてディスカッションしながら進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の説明、講義の割り当て
第2回	明治維新研究会編『講座明治維新・10巻、明治維新と思想・社会』（有志舎、2016年）総論の講義・討論	小林文広「総論」
第3回	同上、第1章の講義・討論	若尾政希「近世後期の政治常識」
第4回	同上、第2章の講義・討論	桐原健真「『帝国』言説と幕末日本」
第5回	同上、第3章の講義・討論	谷山正道「幕末の社会情勢と地域知識人」
第6回	同上、第4章の講義・討論	斉藤洋一「維新前後の身分意識をめぐる葛藤」
第7回	学生の研究発表	学生の発表と討論
第8回	講義と討論	近世民衆社会意識論の意義
第9回	講義と討論	百姓の世界意識の構造
第10回	同上、第5章の講義と討論	白川部達夫「世直しと土地所有意識の変容」
第11回	同上、第6章の講義と討論	八嶽友広「民衆教育における明治維新」
第12回	同上、第6章の講義と討論	石居人也「衛生観の生成と医学・医療の近代化」
第13回	講義と討論	百姓の世界の解体—窮民の成立
第14回	講義と討論	世直しと貧富の観念

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義文献を必ず読むこと、また復習としてレジュメなどを読んでまとめること。

【テキスト（教科書）】

明治維新研究会編『講座明治維新・10巻、明治維新と思想・社会』（有志舎、2016年）

【参考書】

特にありません。

【成績評価の方法と基準】

論文講義の担当によるレジュメ作成能力（40%）、発表能力（20%）、討論の積極性（20%）、研究発表（20%）として評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィールドバックできません。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【担当教員の専門分野等】

<日本近世史>

<近世民衆社会意識論>

<『近世實地請戻し慣行の研究』塙書房、2012年>

【Outline and objectives】

In this lecture we will examine the thought and society of the Meiji Restoration period.

HIS500B4

日本史学特殊講義 E I

森田 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、法律・経済・社会・教育の多角的な観点から明治期の日本について検討し、史料に基づき論点を構成することを目的とする。

【到達目標】

明治期の日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②関連する文献を読み、研究史を理解する能力、③論点を構成する能力を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第2回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第4回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第5回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第6回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第7回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第8回	史料読解と研究発表	教育（1）
第9回	史料読解と研究発表	教育（2）
第10回	史料読解と研究発表	教育（3）
第11回	史料読解と研究発表	経済（1）
第12回	史料読解と研究発表	経済（2）
第13回	史料読解と研究発表	経済（3）
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

【テキスト（教科書）】

教場で、適宜プリントを配布する。

【参考書】

教場で、適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度（50%）、報告内容（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

時間割を変更しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代史

<研究テーマ>土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子『華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合』（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子『不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容』（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various points.

HIS500B4

日本史学特殊講義 E II

森田 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、法律・経済・社会・教育の多角的な観点から明治期の日本について検討し、史料に基づき論点を構成することを目的とする。

【到達目標】

明治期の日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②関連する文献を読み、研究史を理解する能力、③論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第2回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第4回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第5回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第6回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第7回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第8回	史料読解と研究発表	教育（1）
第9回	史料読解と研究発表	教育（2）
第10回	史料読解と研究発表	教育（3）
第11回	史料読解と研究発表	経済（1）
第12回	史料読解と研究発表	経済（2）
第13回	史料読解と研究発表	経済（3）
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

【テキスト（教科書）】

教場で、適宜プリントを配布する。

【参考書】

教場で、適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度（50%）、報告内容（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

時間割を変更しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代史

<研究テーマ>土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子『華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合』（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子『不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容』（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various points.

HIS500B4

東洋史学特殊講義 A I

大島 誠二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。今期は、偃師商城と殷墟の部分を輪読する。どのように都市が形成されたのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

文物や遺跡など、物的資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究方法を身につける。

都市の成立過程を学ぶことにより、中国文明の特性について理解を深める。都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式。基本的に受講者の発表によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	古代中国の都市の機能と発展	古代中国において都市の機能と役割について問い直す。
第2回	偃師商城考古発現①	「偃師商城的晩期大城遺址」を読み、偃師商城遺跡の規模を確認する。
第3回	偃師商城考古発現②	「偃師商城的早期大城遺址」を読み、偃師商城の成立過程を理解する。
第4回	偃師商城考古発現③	「宮城東部の宮廟建築遺址」を読み、偃師商城の中核施設の状況を理解する。
第5回	偃師商城考古発現④	「宮城西部的宮廟建築遺址」を読み、偃師商城の中核施設の状況を理解する。
第6回	偃師商城考古発現⑤	「居民区和手工業遺址」を読み、偃師商城内の住民の居住区と工房の分布を確認する。
第7回	偃師商城的布局形制①	「偃師商城第一期布局形制」を読み、偃師商城の形成過程を考える。
第8回	偃師商城的布局形制②	「偃師商城第二期布局形制」「偃師商城第三期布局形制」を読み、偃師商城の変遷過程を考える。
第9回	関于宮城布局形制变化問題①	「関于宮城布局形制变化問題」を読み、中国各時代の宮城の配置との比較をおこなう。
第10回	関于宮城布局形制变化問題②	「関于宮城布局形制变化問題」を読み、偃師商城における宮城配置の特質を考える。
第11回	殷墟発掘簡史①	「中国近代考古学的産生」を読み、中国考古学史の中で殷墟発掘が果たした役割について考える。
第12回	殷墟発掘簡史②	「甲骨文の発現及殷墟の考証」を読み、殷墟の時代同定の中で甲骨文の果たした役割を考える。
第13回	殷墟発掘簡史③	「殷墟考古歷程」を読み、中華民国時代の殷墟発掘過程をたどる。
第14回	殷墟発掘簡史④	「殷墟考古歷程」を読み、中華人民共和国成立以降の殷墟発掘過程をたどる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016年1月
最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003年（2011年重印）

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、レポート課題 50 %

【学生の意見等からの気づき】

映像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国古代史、中国考古学

<研究テーマ>秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究

<主要研究業績>

『秦の東進と陝東社会』『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996 年
『侯馬喬村墓地の変遷について』『アジア史における社会と国家』中央大学出版部 2005 年

『咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－』『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008 年

【Outline and objectives】

*Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities.**As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Yanshi Shengcheng" and "Yinxu". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".*

HIS500B4

東洋史学特殊講義 A II

大島 誠二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この講座では、古代中国における都市について考察する。都市の変遷は、政治、経済の発展と深いつながりがあり、国家の性格を示す指標でもある。新発見が相次いでいる考古学資料を用いて、中国古代の中核都市の発展経過をたどり、中国の都市の特質について考察する。テキストとして劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻を用いる。後期は、「殷墟都邑布局」を輪読する。どのように殷墟が構成され成立したのか、その過程を追い、「都市の発展と古代国家の成立」の問題を考えてみたい。

【到達目標】

文物や遺跡など、物的資料の分析を通して、社会の在り方を考察する研究手法を身につける。

都市の成立過程を学ぶことにより、中国文明の特性について理解を深める。都市の機能と構造を復元することにより、当時の社会の特質を考察し、多角的な視座で古代中国像を構築できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式。基本的に、受講者の発表によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	殷墟都邑布局①	「殷墟的自然環境」を読み、殷墟が成立した時代の自然環境の復元を考察する。
第 2 回	殷墟都邑布局②	「殷墟的布局」を読み、殷墟遺跡の全体像を把握する。
第 3 回	殷墟都邑布局③	「殷墟宮殿宗廟区」「a. 建築基址」を読み、中核となる建物群の位置と構造を理解する。
第 4 回	殷墟都邑布局④	「殷墟宮殿宗廟区」「b. 池苑遺址」を読み、宮殿宗廟区内の水利について理解する。
第 5 回	殷墟都邑布局⑤	「殷墟宮殿宗廟区」「c. 作坊遺址」を読み、宮殿宗廟区内の製作工房について理解する。
第 6 回	殷墟都邑布局⑥	「殷墟宮殿宗廟区」「d. 小屯宮殿宗廟区内発現的墓葬」を読み、宮殿宗廟区内の墓葬の分布について理解する。
第 7 回	殷墟都邑布局⑦	「殷墟宮殿宗廟区」「e. 宮殿宗廟区内的甲骨坑」を読み、宮殿宗廟区内での甲骨の出土状況について理解する。
第 8 回	殷墟都邑布局⑧	「王陵区」を読み、大墓群の分布と付属する陪葬坑、祭祀坑の状況について理解する。
第 9 回	殷墟都邑布局⑨	「一般族邑」を読み、殷墟周辺の集落址の分布と全体像を把握する。
第 10 回	殷墟都邑布局⑩	「一般族邑」「a. 居住址群」を読み、殷墟周辺の集落址の具体像を理解する。
第 11 回	殷墟都邑布局⑪	「一般族邑」「b. 灰坑、水井、窖穴等生活施設」を読み、生活施設の分布状況と内容を把握する。
第 12 回	殷墟都邑布局⑫	「一般族邑」「c. 家族墓地」を読み、殷墟周辺の墓地の分布とその内容を理解する。
第 13 回	殷墟都邑布局⑬	「殷墟手工業作坊の分布」「a. 鑄銅作坊」を読み、殷墟における青銅器生産の状況を把握する。
第 14 回	殷墟都邑布局⑭	「殷墟手工業作坊の分布」「b. 製骨作坊」を読み、殷墟における骨器生産の状況を把握する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博物館、美術館に足を運び、実際に考古学的資料を見る目を養ってほしい。

【テキスト（教科書）】

劉慶柱主編『中国古代都城考古発現與研究』上巻 社会科学文献出版社 2016 年 1 月

最初の時間に、詳細を説明します。

【参考書】

中国社会科学院考古研究所『中国考古学 夏商卷』中国社会科学出版社 2003年（2011年重印）
中国社会科学院考古研究所『中国考古学 两周卷』中国社会科学出版社 2004年（2011年重印）

【成績評価の方法と基準】

発表 50%、レポート課題 50%

【学生の意見等からの気づき】

映像資料なども利用し、できるだけわかりやすく進めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中国古代史、中国考古学
<研究テーマ>秦国を中心とした、春秋戦国時代から秦漢帝国成立までの社会研究
<主要研究業績>
「秦の東進と陝東社会」『アジア史における制度と社会』 刀水書房 1996年
「侯馬喬村墓地の変遷について」『アジア史における社会と国家』中央大学出版部 2005年
「咸陽周辺の住民に関する一考察－周辺墓葬の分析から－」『池田雄一教授古稀記念アジア史論叢』白東史学会発行 2008年

【Outline and objectives】

Using archaeological data, we will follow the development process of an ancient Chinese city and consider the characteristics of Chinese cities. As the text, we used Liu Qingzhu, the editor-in-chief, "The Archaeological Discovery and Research of Ancient Chinese Capital" first volume. In this term, we read the part of "Yinxu". We would also like to follow the formation process of the city, and consider the problems regarding the "Development of the city and the formation of an ancient state".

HIS500B4

東洋史学特殊講義 B I

水上 和則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶器史と関連する東アジア交易

【到達目標】

中国陶器の名品を生み出した諸窯について学び、陶器の鑑賞能力を獲得する。中国陶器が東アジアに向けて広く交易されていた事を、出土資料から理解する。生産技術から、考古資料を読み解く能力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代よりわが国への貿易陶器の中心は、中国であった。各諸窯を中心に実物瓷片等から理解を深めてゆく。さらに古窯址の発掘報告書、中国の関係古文書、わが国での研究成果の報告書類を読んでゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	中国陶器交易入門
第2回	唐代の陶器	唐三彩と白瓷の完成 河南省白瓷窯としての鞏県窯と、河北省ケイ州窯を出土品の化学分析から違いを理解する。
第3回	宋代の陶器	宋代は諸窯が林立し、大量生産の始まる時期であった。 宋代名窯の古窯跡探査の紹介と、各窯の製品伝搬を出土品から理解する。
第4回	越州窯 1	越州窯の青瓷生産と秘色瓷 唐代秘色瓷と宋代秘色瓷を、両者の違いを文献から推察し、各地出土品から検証してゆく。
第5回	越州窯 2	青瓷の発展と甌窯・越窯 浙江省青瓷生産の中心地としての甌窯と越窯を、出土品から両窯の違いを学ぶ。
第6回	越州窯 3	諸外国への技法伝搬と周辺諸窯 朝鮮や日本、ベトナムに貿易された越窯製品は、現地に陶器文化を開花させる。
第7回	長沙窯 1	湖南省長沙窯は、内陸にあるにも関わらず、唐代には大量の瓷器を生産し、国内のみならず海外にも貿易した。古窯址から実態を探る。
第8回	長沙窯 2	長沙窯とイスラム文化系諸国との関係は、唐代から密接なものがみいだせる。ここでは文様を中心に調べてゆく。
第9回	学外見学	東京国立博物館・東京藝術大学陶芸科など、学習にかかわる施設の見学を行う。
第10回	耀州窯 1	華北の青瓷生産と耀州窯 職人移動が確認できる唯一の窯としての耀州窯を学び、技法伝搬の具体的な姿を学ぶ。
第11回	耀州窯 2	石炭燃料使用と徳応侯碑 窯神廟と徳応侯碑について学び、当時の生産組織を共に考え推察してゆく。
第12回	定窯 1	定窯窯址の発見について 小山富士夫によって発見された定窯窯址の最新発掘成果を紹介し、理解を深める。
第13回	定窯 2	定窯白瓷の装飾技法 陶器の装飾法について理解し、その発展を装飾法の伝搬から学んでゆく。
第14回	定窯 3	定窯白瓷と遼の白瓷 遼の白瓷生産は未だ謎のままである。ここでは流通経路から、その謎を追ってゆく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予め講義資料の配布を行うので、授業に関係する箇所を読んでおくことを求める。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

【参考書】

越窯関係

『上林湖越窯』

定窯関係

小山富士夫『定窯窯址の発見について』

詳細は、授業の進行に沿って随時伝える。

【成績評価の方法と基準】

実物資料を時間を掛けて詳細に見る事、より深い理解を重視する。あわせて、各回テーマ毎の基本文献の正確な読解を評価する。ときに提出物を要求する。これ等平常の学習を 100%として、成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

東京藝術大学への陶芸実技見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶磁史

<研究テーマ>

唐宋時代の陶磁技法の研究

<主要研究業績>

(1)「中国釉下彩陶磁の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002 年

(2)「宋元代景德鎮窯業における素地土配合の研究」『亜州古陶磁研究 IV』2009 年

(3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97 号』2015 年

(4)「景德鎮調合原料の成形不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018 年

(5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第 90 号』法政大学史学会・2018 年

【Outline and objectives】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

HIS500B4

東洋史学特殊講義 B II

水上 和則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国陶磁史と関連する東アジア交易

【到達目標】

中国陶磁の名品を生み出した諸窯について学び、陶磁器の鑑賞能力を獲得する。中国陶磁が東アジアに向けて広く交易されていた事を、出土資料から理解する。生産技術から、考古資料を読み解く能力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代よりわが国への貿易陶磁の中心は、中国であった。各諸窯を中心に実物瓷片等から理解を深めてゆく。さらに古窯址の発掘報告書、中国の関係古文書、わが国での研究成果の報告書類を読んでゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	磁州窯	漳河の氾濫と巨鹿城 現地出土品の様々な陶磁器を取り上げ、観台鎮磁州窯の生産品を推察する。
第 2 回	北宋官窯 1	清涼寺窯址の発見と官窯青瓷 汝官窯と呼ばれる青瓷の美しい色合いと、名宝と呼ばれる理由を学ぶ。
第 3 回	北宋官窯 2	汝官窯と秘色瓷の系譜 官窯には伝統の色合いがある。六朝期に始まり南宋官窯に繋がる青瓷の伝統的色合いを理解する。
第 4 回	北宋官窯 3	耀州窯と高麗青磁 越窯・耀州窯から北宋官窯・高麗青磁までを、貿易品を中心に港岸遺跡や沈船遺物から学ぶ。
第 5 回	建窯 1	建窯窯址と J. M. プラマー 水吉建窯窯址の発見と出土する天目碗を、調査発掘の報告書から学んでゆく。
第 6 回	建窯 2	進盞・供御の茶碗 杭州出土の曜変天目から、南宋宮廷と強く結びつく生産窯について学ぶ。
第 7 回	景德鎮窯 1	景德鎮窯と青白瓷生産 景德鎮窯を紹介し、宋代までの景德鎮製品を学んでゆく。
第 8 回	景德鎮窯 2	原料枯渇と工房移転 景德鎮は独自の生産組織を生み出してゆく。ここではその理由を、共に考えてゆく。
第 9 回	景德鎮窯 3	青花瓷生産と貿易陶磁 青花瓷生産の始まりと、貿易発展の様子を歴史資料から学ぶ。
第 10 回	景德鎮窯 4	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく。
第 11 回	景德鎮窯 5	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく。
第 12 回	景德鎮窯 6	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく。
第 13 回	景德鎮窯 7	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく。
第 14 回	景德鎮窯 8	ダントルコール『中国陶磁見聞録』（東洋文庫）を輪読し、必要な技術的解説を行ってゆく。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予め講義資料の配布を行うので、授業に関係する箇所を読んでおくことを求める。

【テキスト（教科書）】

プリント配布

【参考書】

建窯関係

『建窯窯址発掘初探』

景德鎮窯関係

ダントルコール『中国陶瓷見聞録』東洋文庫
その他授業の進行に沿って随時紹介する。

【成績評価の方法と基準】

実物資料を時間を掛けて詳細に見る事、より深い理解を重視する。あわせて、各回テーマ毎の基本文献の正確な読解を評価する。ときに提出物を要求する。これ等平常の学習を100%として、成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

今後順次対応してゆく。

【その他の重要事項】

博物館・美術館への中国陶瓷器見学を予定する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国陶瓷史

<研究テーマ>

唐宋時代の陶瓷技法の研究

<主要研究業績>

(1)「中国釉下彩瓷釉の研究」『東洋陶磁 Vol.31』2002年

(2)「宋元代景德鎮窯における素地土配合の研究」『亞州古陶磁研究 IV』2009年

(3)「青花瓷生産黎明期の景德鎮窯業」『専修人文論集 97号』2015年

(4)「景德鎮調合原料の成形性不良と胴継ぎ技法の始まり」『中近世陶磁器の考古学 第八巻』株式会社 雄山閣・2018年

(5)「曜変天目再現研究の調査報告」『法政史学 第90号』法政大学史学会・2018年

【Outline and objectives】

History of Chinese ceramics. In addition, related East Asia trade.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 A I

松原 俊文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。論じられているテーマに関して自主的に調べ、批判的に考えることができる。古代ローマ史上の問題とそれに対する取り組み方を理解した上で、自分の論点を立てることができる。以上を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを予習し、内容を把握しておく必要があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第2回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第3回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第4回	文献講読 3	第一節講読
第5回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第6回	文献講読 5	第二節講読
第7回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第8回	文献講読 7	第三節講読
第9回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第10回	文献講読 9	第四節講読
第11回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第12回	文献講読 11	第五節講読
第13回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第14回	春学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。Blackwell Companions to the Ancient World シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストをプリントして配布します。

【参考書】

Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), Oxford Classical Dictionary (4th ed.), Oxford, 2012.

Bagnall, R. S., et al. (eds.), The Encyclopedia of Ancient History, Malden, MA, 2012.

Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), Brill's New Pauly, Leiden, 2002-2010.

パウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994年
松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010年

【成績評価の方法と基準】

平常点100%（英文読解の精度と内容理解度50%、議論の背景と史料の把握度50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回英和辞書を持ってくること。辞書の指定はありませんが、収録語句20万語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

古代ローマ史

<研究テーマ>

ギリシア・ローマの歴史叙述

<主要研究業績>

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of *Kodai*, 2015.
2. 「ブルタルコス『英雄伝』のコンテクスト」、『西洋古典学研究 LXIV』日本西洋古典学会、2016 年
3. (翻訳) ヘイドン・ホワイト「歴史的な出来事」、ヘイドン・ホワイト／上村忠男監訳『実用的な過去』、岩波書店、2017 年

【Outline and objectives】

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 A II

松原 俊文

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代ローマ史に関する英文文献の講読を通じて、英語で書かれた西洋史関連の研究文献の精読力と速読力を身につける。

【到達目標】

英文学術文献を正確かつ速く読むことができる。論じられているテーマに関して自主的に調べ、批判的に考えることができる。古代ローマ史上の問題とそれに対する取り組み方を理解した上で、自分の論点を立てることができる。以上を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

古代ローマの政治・社会・文化に関する英文文献を講読します。テキストは通史や特定の問題に絞った論文ではなく、政治制度や属州経営といったテーマを包括的に扱った文献から、受講者の希望も加味した上で決定します。授業は任意の受講者にテキストを和訳してもらい、適宜解説を行う形で進めます。また内容や英文に関して全受講者に質問を行い、正しく把握しているか確認します。したがって全員が前もって英文テキストを予習し、内容を把握しておく必要があります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	テキスト決定・予習方法の説明
第 2 回	文献講読 1	問題の背景説明・イントロダクション講読
第 3 回	文献講読 2	イントロダクションの解説と質疑
第 4 回	文献講読 3	第一節講読
第 5 回	文献講読 4	第一節の解説と質疑
第 6 回	文献講読 5	第二節講読
第 7 回	文献講読 6	第二節の解説と質疑
第 8 回	文献講読 7	第三節講読
第 9 回	文献講読 8	第三節の解説と質疑
第 10 回	文献講読 9	第四節講読
第 11 回	文献講読 10	第四節の解説と質疑
第 12 回	文献講読 11	第五節講読
第 13 回	文献講読 12	第五節の解説と質疑
第 14 回	秋学期の総括	文献の論点整理と討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に指定された英文テキストの箇所を充分に下読みしておくのは言うまでもなく、固有名詞・事項・専門用語などで不明なものについてもできる限り調べておくこと。授業後は、誤読していた箇所を重点的に読み直して、論旨を再確認すること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。*Blackwell Companions to the Ancient World* シリーズから、古代ローマ史を扱ったテキストをプリントして配布します。

【参考書】

Hornblower, S., Spawforth, A. (eds.), Oxford Classical Dictionary (4th ed.), Oxford, 2012.

Bagnall, R. S., et al. (eds.), The Encyclopedia of Ancient History, Malden, MA, 2012.

Cancik, H., Schneider, H. (eds.), Salazar, C. F. (Eng. ed.), Brill's New Pauly, Leiden, 2002-2010.

パウダー編、小田謙爾他訳『古代ローマ人名事典』原書房、1994 年
松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（英文読解の精度と内容理解度 50%、議論の背景と史料の把握度 50%）で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【その他の重要事項】

毎回英和辞書を持ってくること。辞書の指定はありませんが、収録語句 20 語以上の辞書（リーダーズ英和辞典、ジーニアス英和大辞典、研究社新英和大辞典等）、もしくはそれに相当する電子辞書が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

古代ローマ史

<研究テーマ>

ギリシア・ローマの歴史叙述

<主要研究業績>

1. 'Out of Many, One? An Aspect of the Public Rôle of Roman Historiography', *Kodai: Journal of Ancient History* 16, Editorial Board of *Kodai*, 2015.
2. 「ブルタルコス『英雄伝』のコンテクスト」、『西洋古典学研究 LXIV』日本西洋古典学会、2016年
3. (翻訳) ヘイドン・ホワイト「歴史的な出来事」、ヘイドン・ホワイト／上村忠男監訳『実用的な過去』、岩波書店、2017年

【Outline and objectives】

The course offers tutorials on reading ancient Roman history in English. It is primarily designed for students specialised in Western history who wish to improve their reading fluency and efficiency of academic English.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 B I

池本 今日子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア・東欧史の諸問題とその研究方法を学ぶ。

【到達目標】

ロシア・東欧・北欧史に関する理解を深める。
論文作成に必要な、外国語文献の読解能力を高める。
論文作成のために役立てる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読と研究報告。講読と報告の回数は柔軟に対応する。テキストは、ロシア・北欧・東欧に関する英語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。たとえば、次のような文献を候補にしているが、柔軟に対応する。*Hugh Ragsdale(ed.), Imperial Russian foreign policy, Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 1993.*

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	テキストの決定など
第2回	講読①	講読、質疑、解説
第3回	講読②	講読、質疑、解説
第4回	報告①	報告、質疑応答
第5回	講読③	講読、質疑、解説
第6回	講読④	講読、討論
第7回	報告②	報告、質疑、応答
第8回	講読⑤	講読、質疑、解説
第9回	講読⑥	講読、質疑、解説
第10回	報告③	報告、質疑、応答
第11回	講読⑦	講読、質疑、解説
第12回	講読⑧	講読、質疑、解説
第13回	報告④	報告、質疑、応答
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読テキストの予習。報告の準備。各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講読テキストは教員が準備する。

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ロシア史

<研究テーマ>外交、憲法、ポーランド問題

<主要研究業績>『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To learn the problems of Russian and East European history and the research methods.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 B II

池本 今日子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ロシア・東欧史の諸問題とその研究方法を学ぶ

【到達目標】

ロシア・東欧・北欧史に関する理解を深める。
論文作成に必要な、外国語文献の読解能力を高める。
論文作成のために役立つ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

外国語文献の講読と研究報告。講読と報告の回数は柔軟に対応する。テキストは、ロシア・北欧・東欧に関する英語論文や史料の中から、受講者全員の希望を聞いて、全体として相応しいものを選ぶ予定である。たとえば、次のような文献を候補にしているが、柔軟に対応する。*Hugh Ragsdale(ed.), Imperial Russian foreign policy, Washington, D.C.: Woodrow Wilson Center Press, 1993.*

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入、テキストの決定	テキスト等に関する受講者の希望を聞く
第 2 回	講読①	講読、質疑、解説
第 3 回	講読②	講読、質疑、解説
第 4 回	報告①	報告、質疑応答
第 5 回	講読③	講読、質疑、解説
第 6 回	講読④	講読、討論
第 7 回	報告②	報告、質疑、応答
第 8 回	講読⑤	講読、質疑、解説
第 9 回	講読⑥	講読、質疑、解説
第 10 回	報告③	報告、質疑、応答
第 11 回	講読⑦	講読、質疑、解説
第 12 回	講読⑧	講読、質疑、解説
第 13 回	報告④	報告、質疑、応答
第 14 回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講読テキストの予習。報告の準備。各人の専門分野について広く文献を渉猟すること。外国語運用能力を身につけること。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。講読テキストは教員が準備する。

【参考書】

特に定めない

【成績評価の方法と基準】

各回の課題の遂行、平常点による（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ロシア史

<研究テーマ>外交、憲法、ポーランド問題

<主要研究業績>『ロシア皇帝アレクサンドル一世の外交政策——ヨーロッパ構想と憲法』2006年12月、風行社。

【Outline and objectives】

To learn the problems of Russian and East European history and the research methods.

HIS500B4

西洋史学特殊講義 C I

宮崎 亮

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では前4世紀の二つの法廷弁論、すなわちアンドキデース『弁論』第1番およびリュシアース『弁論』第6番を取り上げ、演習形式で読み進める。二次文献（研究文献）ではなく一次文献（原史料）に当たることによって、受講者各人はアテナイ社会に接近するための自分なりの確かな足場を作ってもらいたい。

【到達目標】

前4世紀アテナイの法廷弁論について、辞書がなくとも大体内容がつかめる程度にギリシア語の読解能力を伸ばし、当時の民主政社会、さらにはポリス社会について、最新の研究成果を学び取ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式でギリシア語テキストを読み進める。訳読はアト・ランダムに指名する。また文法事項についても質問するから、十分に予習してくる。さらに、テキストから当時のアテナイ社会について何が読み取れるか、報告者を指名して発表してもらう回を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の進め方の説明；テキストの配布
第 2 回	テキスト読解 (1)：アンドキデース『弁論』第1番	ペロポネソス戦争末期のアテナイ
第 3 回	テキスト読解 (2)：アンドキデース『弁論』第1番	エレウシースの秘儀と秘儀冒瀆事件
第 4 回	テキスト読解 (3)：アンドキデース『弁論』第1番	ヘルメース柱像破壊事件
第 5 回	テキスト読解 (4)：アンドキデース『弁論』第1番	アンドキデースの密告について
第 6 回	テキスト読解 (5)：アンドキデース『弁論』第1番	大赦令について：その実効性
第 7 回	テキスト読解 (6)：アンドキデース『弁論』第1番	引用部分の信憑性；近年の議論
第 8 回	テキスト読解 (7)：アンドキデース『弁論』第1番	何を記憶し、何を忘却するのか、という問題について
第 9 回	テキスト読解 (8)：アンドキデース『弁論』第1番	市民団の和解・融合；いかにして可能か
第 10 回	小報告	希望するテーマに沿って 30 分程度の報告をしてもらう。
第 11 回	テキスト読解 (9)：リュシアース『弁論』第6番	アンドキデースの相手側について；告発の意図
第 12 回	テキスト読解 (10)：リュシアース『弁論』第6番	市民的倫理と大赦令
第 13 回	テキスト読解 (11)：リュシアース『弁論』第6番	宗教的要素の強調
第 14 回	まとめ	ペロポネソス戦争末期から前4世紀初頭のアテナイ社会についてのディスカッション

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業は参加者がギリシア語テキストを毎回事前に読んできていることを前提に進める。ギリシア語の文法的な事項から書かれている内容についてまで、可能な限り下調べをすること。個人差はあろうが、1回の授業につき、予習には最低でも5時間は必要であろう。

【テキスト（教科書）】

M.R. Dilts and D.J. Murphy (eds.), *Antiphontis et Andocidis Orationes* (Oxford, 2018)

C. Carey (ed.), *Lysiae Orationes cum Fragmentis* (Oxford, 2007)

D.M. MacDowell (ed.), *Andokides: On the Mysteries* (Oxford, 1962)

いずれも購入の必要はない。

【参考書】

膨大である。授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

基本的に訳読のできばえ（50%）、ディスカッションへの貢献（50%）だが、特にディスカッションにおいては、最新の研究文献を読んでそれらを紹介することが求められる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

ギリシア語の読解にかなりの不安を感じているものの、参加を希望する者は、授業初日に担当講師に申し出ること。事情を聞いた上で判断を下す。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ギリシア社会史
<研究テーマ>ギリシア・ボリスにおける規範・規律と社会、その身体性
<主要研究業績>「シュコファンテスをどう捉えるか」『歴史学研究』661（1996）

【Outline and objectives】

This seminar class aims at providing opportunities to enhance the reading skill of Greek as well as to learn about the Athenian society in the classical period. Students are required to read the Greek text (i.e. the Attic Orators) prior to the class and participate in discussion.

HIS500B4

西洋史学特殊講義C II

宮崎 亮

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では前4世紀アテナイの法廷弁論代作者イサイオスの作品を取り上げ、演習形式で読み進める。二次文献（研究文献）ではなく一次文献（原史料）に当たることによって、受講者各人はアテナイ社会に接近するための自分なりの確かな足場を作ってもらいたい。

【到達目標】

前4世紀アテナイの法廷弁論について、辞書がなくとも大体内容がつかめる程度にギリシア語の読解能力を伸ばし、当時の民主政社会、さらにはボリス社会について、最新の研究成果を学び取ること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式でギリシア語テキストを読み進める。訳読はアト・ランダムに指名する。また文法事項についても質問するから、十分に予習しておくこと。さらに、テキストから当時のアテナイ社会について何が読み取れるか、報告者を指名して発表してもらう回を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方の説明；テキストの配布
第2回	テキスト読解(1)：イサイオス『弁論』第3番	相続訴訟の全般的特徴
第3回	テキスト読解(2)：イサイオス『弁論』第3番	アンキステアとは何か
第4回	テキスト読解(3)：イサイオス『弁論』第3番	ディアディカシア裁判とディアマルテュリア
第5回	テキスト読解(4)：イサイオス『弁論』第3番	結婚と嫁資
第6回	テキスト読解(5)：イサイオス『弁論』第3番	養子縁組（生前養子と死後養子）をめぐる問題
第7回	テキスト読解(6)：イサイオス『弁論』第3番	社会結合体としてのオイコス、フラトリア、区（デーモス）
第8回	テキスト読解(7)：イサイオス『弁論』第3番	相続問題における女子の位置
第9回	小報告	テキストの内容に関し、希望のテーマで30分程度の小報告を行なってもらう。
第10回	テキスト読解(8)：イサイオス『弁論』第5番	葬儀と相続権
第11回	テキスト読解(9)：イサイオス『弁論』第5番	「悪女」というレトリック
第12回	テキスト読解(10)：イサイオス『弁論』第5番	富裕市民とアテナイ民主政
第13回	テキスト読解(11)：イサイオス『弁論』第5番	ボリスが相続に介入することの意味：オイコスは誰のもの？
第14回	まとめ	アテナイは訴訟社会か？（ディスカッション）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業は参加者がギリシア語テキストを毎回事前に読んできていることを前提に進める。ギリシア語の文法的な事項から書かれている内容についてまで、可能な限り下調べをすること。個人差はあるが、1回の授業につき、予習には最低でも5時間は必要であろう。

【テキスト（教科書）】

Th. Thalheim (ed.), Isaeus. Orationes (Leipzig, 1903).

W. Wyse, The Speeches of Isaeus (Cambridge, 1904).

いずれも購入の必要はない。

【参考書】

膨大である。授業で指示する。

【成績評価の方法と基準】

基本的に訳読のできばえ（50%）、ディスカッションへの貢献（50%）だが、特にディスカッションにおいては、最新の研究文献を読んでそれらを紹介することが求められる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

ギリシア語の読解にかなりの不安を感じているものの、参加を希望する者は、授業初日に担当講師に申し出ること。事情を聞いた上で判断を下す。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ギリシア社会史

<研究テーマ>ギリシア・ポリスにおける規範・規律と社会、その身体性

<主要研究業績>「シュコファンテスをどう捉えるか」『歴史学研究』661(1996)

【Outline and objectives】

This seminar class aims at providing opportunities to enhance the reading skill of Greek as well as to learn about the Athenian society in the classical period. Students are required to read the Greek text (i.e. the Attic Orators) prior to the class and participate in discussion.

HIS700B4

史学特殊演習 A I

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】

・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	先史社会研究の意義
第2回	構想発表（1）	受講者の目指す論文構想
第3回	構想発表（2）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第4回	学史的論文の検討（1）	主に1990年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第5回	学史的論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第6回	学史的論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第7回	近年の研究論文の検討（1）	2000年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第8回	近年の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第9回	近年の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第10回	最新の研究論文の検討（1）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第11回	最新の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第12回	最新の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第13回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の抽出
第14回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

当該分野の諸研究に関する論文集成および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70％・必須）、レポート（30％・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS700B4

史学特殊演習 A II

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置づけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】

- ・ 諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
- ・ 受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
- ・ 集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
- ・ 分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第2回	研究テーマの学史的検討(1)	先行研究の展開過程
第3回	研究テーマの学史的検討(2)	研究史上の転換点・画期
第4回	研究テーマの学史的検討(3)	現状の研究の方向性と展望
第5回	資料集成(1)	資料集成の目的と方向性
第6回	資料集成(2)	目的にもとづく資料集成方法の検討
第7回	資料の分析(1)	資料のもつ諸属性の理解
第8回	資料の分析(2)	観察視点と属性抽出方法
第9回	資料の分析(3)	資料分析の実践と問題
第10回	資料の分析(4)	分析結果の処理
第11回	分析結果の読み取り(1)	分析結果の提示・表現方法
第12回	分析結果の読み取り(2)	分析結果の解釈と考察
第13回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第14回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者のテーマに関連する研究論文の渉猟、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70％・必須）、レポート（30％・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告(1)	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談(1)	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談(2)	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談(3)	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表(1)	研究報告と議論
第6回	論文相談(4)	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談(5)	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談(6)	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表(2)	研究報告と議論
第10回	論文相談(7)	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談(8)	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談(9)	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表(3)	研究報告と議論
第14回	研究現状報告(2)	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50％、学期末レポート点50％の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本中世史

<研究テーマ>日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

大塚 紀弘

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本中世史に関係する論文の構成や内容について個別に相談する。また、希望に応じて研究発表をする機会を設ける。

【到達目標】

日本中世史に関係する論文を執筆し、学術雑誌等に公表することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

演習形式で進める。事前に提出された論文の草稿またはレジュメに基づいて議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究現状報告（1）	研究計画の提示と相談
第2回	論文相談（1）	論文草稿の提示と議論
第3回	論文相談（2）	論文草稿の提示と議論
第4回	論文相談（3）	論文草稿の提示と議論
第5回	研究発表（1）	研究報告と議論
第6回	論文相談（4）	論文草稿の提示と議論
第7回	論文相談（5）	論文草稿の提示と議論
第8回	論文相談（6）	論文草稿の提示と議論
第9回	研究発表（2）	研究報告と議論
第10回	論文相談（7）	論文草稿の提示と議論
第11回	論文相談（8）	論文草稿の提示と議論
第12回	論文相談（9）	論文草稿の提示と議論
第13回	研究発表（3）	研究報告と議論
第14回	研究現状報告（2）	研究計画の提示と相談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自身の研究を進め、論文の草稿を執筆する。また、レジュメを作成する。授業後に論文を修正して完成させる。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、学期末レポート点50%の合計で評価する予定である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世史
<研究テーマ> 日中関係史・日本仏教史

【Outline and objectives】

Individual consultation on the composition and content of papers related to Japanese medieval history.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整を経て1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏の出自
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏の財源
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏の政治的位置
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏設置の歴史的意義
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国との比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本古代史
<研究テーマ>
日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界―城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後―FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習BⅡ

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整を経て1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	聖徳太子信仰の形成
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	聖徳太子信仰の展開
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	聖徳太子信仰の史料論
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	聖徳太子信仰の歴史的意義
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使との比較
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	人姓とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	複姓氏族の検討
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	舎人の語原
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	舎人氏族の実態
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010 年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008 年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008 年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007 年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker による Database の Web 公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。それをもとに博士論文作成を進めるための力量を培い、独自の研究の確立につなげていく。

【到達目標】

・先史社会の内実を物質資料の分析に基づいて検討し、批判を加えつつ建設的な展望を提示することができる。
・先史社会に関する特定のテーマをもとにした論文を多面的に構成するための能力が高まる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者が関心を寄せる先史時代の社会に関する先行研究を講読し、受講者の研究テーマを設定するために検討と討論を重ねる。関連する諸研究を横断しながら、研究の現状と課題を明らかにし、受講者の問題意識の形成につなげ、資料の分析方法を見通していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	先史社会研究の意義
第 2 回	構想発表（1）	受講者の目指す論文構想
第 3 回	構想発表（2）	現状の論文構想の課題と問題の検討
第 4 回	学史的論文の検討（1）	主に 1990 年代までの研究分野をリードしてきた先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 5 回	学史的論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 6 回	学史的論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 7 回	近年の研究論文の検討（1）	2000 年代以降の研究分野を形成した先史社会研究のテーマと目的に関する検討
第 8 回	近年の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 9 回	近年の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 10 回	最新の研究論文の検討（1）	当該分野における最新研究のテーマと目的に関する検討
第 11 回	最新の研究論文の検討（2）	上記論文の資料と操作方法に関する検討
第 12 回	最新の研究論文の検討（3）	上記論文の考察と展望に関する検討
第 13 回	先史社会研究の発達過程と多面的な方向性	受講者の掲げたテーマの有効性と問題点の抽出
第 14 回	総括	研究テーマと方針の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

当該分野の諸研究に関する論文集成および研究史の概要把握。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70 %・必須）、レポート（30 %・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の方法にもとづいて物質文化から再構成される社会について検討する。この授業では受講者の研究テーマを先行研究の中に確実に位置づけたうえで、資料の実践的な検討と考察を行い、博士論文作成に資することとする。

【到達目標】

- ・諸研究を総合的に検討することで受講者自身が新たな研究の方向を展望できる。
- ・受講者自身の研究テーマにもとづく資料集成を実践できる。
- ・集成した資料の分類と分析を一定の基準の下で実践できる。
- ・分析を元にした考察をまとめ、新たな展望を得ることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者の設定した研究テーマの学史的背景と妥当性を検討するとともに、対象となる資料の分析視点を絞り込んでいく。次いで資料の分類と分析に進み、その手順と理解の妥当性を検討する。最終的に考察された内容が資料にもとづいて正確になされているかについて討論し、最新の研究成果との相関性や先進性について理解を深めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	先史社会研究の実戦に向けた諸段階
第2回	研究テーマの学史的検討(1)	先行研究の展開過程
第3回	研究テーマの学史的検討(2)	研究史上の転換点・画期
第4回	研究テーマの学史的検討(3)	現状の研究の方向性と展望
第5回	資料集成(1)	資料集成の目的と方向性
第6回	資料集成(2)	目的にもとづく資料集成方法の検討
第7回	資料の分析(1)	資料のもつ諸属性の理解
第8回	資料の分析(2)	観察視点と属性抽出方法
第9回	資料の分析(3)	資料分析の実践と問題
第10回	資料の分析(4)	分析結果の処理
第11回	分析結果の読み取り(1)	分析結果の提示・表現方法
第12回	分析結果の読み取り(2)	分析結果の解釈と考察
第13回	成果の検討	研究テーマと結論の相関性および最新研究との関連性の検討
第14回	総括	研究論文の内容と構成の策定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者のテーマに関連する研究論文の渉猟、考古学的方法論に関する理解。

【テキスト（教科書）】

用いない。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業内の発表・討論（70％・必須）、レポート（30％・必須）によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write doctoral dissertations by students doing research presentations in Japanese archeology.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

後藤 篤子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学会発表やその活字化、後進の指導、ラテン語読解能力のさらなる向上など、研究者・教育者として自立的に活動していくための基盤を形成・強化する。

【到達目標】

- (1) 研究会や学会で積極的に研究発表を行い、その報告原稿を活字化する。
 - (2) 自分がこれまでに修得した専門的知識を生かして、修士課程在籍者に対する指導経験を積む。
 - (3) 後進の指導を通じて、自らのラテン語読解能力もさらに向上させる。
- 以上の3点を目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

主として受講者による研究の現状報告、学術雑誌掲載に向けた論文原稿作成とそれに対する指導を中心に、授業を進める。最後の数回は修士課程科目「西洋史学演習Ⅰ」と合同授業とし、博士課程在籍の受講者から修士課程在籍者に対し、ラテン語史料の読み方などについて、教員と共に指導してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の進捗状況について	受講者による研究の現状報告と討議
第2回	研究内容の活字化に向けて(1)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議(1)
第3回	研究内容の活字化に向けて(2)	受講者がまとめた論文原稿に関する討議(2)
第4回	研究内容の活字化に向けて(3)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議(1)
第5回	研究内容の活字化に向けて(4)	論文で使用するラテン語史料の読解に関する討議(2)
第6回	研究内容の活字化に向けて(5)	受講者が提出した修正原稿に関する討議(1)
第7回	研究内容の活字化に向けて(6)	受講者が提出した修正原稿に関する討議(2)
第8回	研究内容の活字化に向けて(7)	論文原稿を学術雑誌に投稿可能な形に完成させる
第9回	博士論文作成に向けて	博士論文完成に向けて、残っている課題の整理と討議
第10回	後進への指導経験を積む(1)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(1)
第11回	後進への指導経験を積む(2)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(2)
第12回	後進への指導経験を積む(3)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(3)
第13回	後進への指導経験を積む(4)	ラテン語初心者の『ガリア戦記』読解を補助する(4)
第14回	研究の今後に向けて	夏期休暇中の研究計画と教員からの助言

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、学会での口頭発表や学術雑誌論文の形でまとめる。後進の『ガリア戦記』読解を補助するにあたっての予習と復習。

【テキスト（教科書）】

後進の指導については、Caesar, *The Gallic Wars, tr. by H. J. Edwards* (Loeb Classical Library 72).

【参考書】

後進の指導については、カエサル『ガリア戦記』、國原吉之助訳、講談社学術文庫、1994年。ガーイウス・ユリウス・カエサル『ガリア戦記』、石垣憲一訳、平凡社ライブラリー、2009年。『カエサル戦記集 ガリア戦記』、高橋宏幸訳、岩波書店、2015年。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ（研究の活字化に向けての自主的努力70％、ラテン語読解補助の予習も含めた後進の指導に向けての準備30％）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史

<研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題

<主要研究業績>

- ①「ローマ帝国における『異教』とキリスト教」、歴史学研究会編『地中海世界史1 古代地中海世界の統一と変容』青木書店、2000年
 ②(共訳)エドワード・ギボン『図説ローマ帝国衰亡史』東京書籍、2004年
 ③(分担執筆・史料邦訳)歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』岩波書店、2012年

【Outline and objectives】

Preparations to become an independent researcher and teacher, such as the enhancement of the abilities to read and comprehend the historical sources in Latin, to make presentations concerning one's own research, and to help younger students in their researches.

HIS700B4

史学特殊演習BⅡ

後藤 篤子

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

学会発表やその活字化、ラテン語読解能力のさらなる向上など、博士論文を完成させ、研究者として自立的に活動していくための基盤を強化する。

【到達目標】

- (1)研究会や学会で積極的に研究発表を行い、博士論文を完成に近づける。
 (2)ラテン語読解能力をさらに向上させる。
 以上の2点を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講者による研究報告とその内容に関する討議を中心に授業を進め、ラテン語史料講読については、受講者が使用する予定の史料を中心に精読・討議する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の現状報告	受講者が夏期休暇中に進めた研究内容についての報告と討議
第2回	博士論文の完成に向けて(1)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議(1)
第3回	博士論文の完成に向けて(2)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議(2)
第4回	博士論文の完成に向けて(3)	受講者の既発表の雑誌論文に関する質疑応答と討議(3)
第5回	新たな学会発表に向けて(1)	博士論文完成のために残されている課題の検討
第6回	新たな学会発表に向けて(2)	新たな学会発表の概要報告と質疑応答・討議
第7回	新たな学会発表に向けて(3)	発表原稿草案の検討と討議
第8回	新たな学会発表に向けて(4)	ラテン語史料の読解に関する質疑応答
第9回	新たな学会発表に向けて(5)	発表レジュメと発表原稿の最終確認
第10回	新たな論文発表に向けて(1)	学術雑誌への投稿用にまとめ直した原稿とラテン語史料読解に関する討議
第11回	新たな論文発表に向けて(2)	投稿原稿の最終確認
第12回	博士論文の完成に向けて(4)	博士論文で使用予定のラテン語史料を改めて読み直す(1)
第13回	博士論文の完成に向けて(5)	博士論文で使用予定のラテン語史料を改めて読み直す(2)
第14回	博士論文の完成に向けて(6)	博士論文完成に向けたタイムスケジュールの確認

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

博士論文に向けた研究を自主的に進め、研究内容を口頭発表や雑誌論文の形でまとめる。授業で読むラテン語史料の読解を自分で進め、授業時の質疑応答や指摘を踏まえて、自分の読解を見直す。

【テキスト(教科書)】

特に指定しない。
 授業で読むラテン語史料については、受講者と相談のうえで決定する。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

平常点のみ(自主的研究の進捗と内容 80%、ラテン語読解の精度 20%)で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施科目につき該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>古代ローマ史
 <研究テーマ>帝政後期ローマの歴史と社会、ローマ帝国の「キリスト教化」の問題
 <主要研究業績>

- ① *The 'conversion' of Constantine the Great: his religious legislation in the Theodosian Code, Studia Patristica, Vol.XCIII (2017).*
 ②(分担執筆・史料邦訳)歴史学研究会編『世界史史料1・古代のオリエントと地中海世界』、岩波書店、2012年

③シドニウス・アポリナリスにおける「ローマニズム」、『史学雑誌』91 編 10 号 (1982 年 10 月)

【Outline and objectives】

Preparations to complete a doctoral thesis and the enhancement of the abilities necessary for an independent researcher.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な企画・構想力、批判力および表現力を養う。そのために、研究発表や質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会などを行う。

【到達目標】

- 以下の5点を達成する動機付けおよび手掛かりを得る。
- 1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。
 - 2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。
 - 3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。
 - 4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。
 - 5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的発言力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、日本近現代史研究に関わる新刊図書を中心に課題図書を含め、受講生一人ひとりが発表を行い、それについて教員が講評すると共に、参加者一同による自由質疑を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要説明。
第2回	課題図書紹介（1）	課題図書の提示とねらいの説明（1）
第3回	課題図書に関する発表（1）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（1）
第4回	課題図書紹介（2）	課題図書の提示とねらいの説明（2）
第5回	課題図書に関する発表（2）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（2）
第6回	課題図書紹介（3）	課題図書の提示とねらいの説明（3）
第7回	課題図書に関する発表（3）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（3）
第8回	課題図書紹介（4）	課題図書の提示とねらいの説明（4）
第9回	課題図書に関する発表（4）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（4）
第10回	課題図書紹介（5）	課題図書の提示とねらいの説明（5）
第11回	課題図書に関する発表（5）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（5）
第12回	課題図書紹介（6）	課題図書の提示とねらいの説明（6）
第13回	課題図書に関する発表（6）	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑（6）
第14回	受講生の研究計画発表（1）	受講生の博士論文作成に向けた企画・構想および計画の発表と自由質疑（1）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習として課題図書を読み、関連文献を調査し読んでおくこと。授業内自由質疑における話題・意見・疑問・質問などをまとめておくこと。復習として博士論文作成に向けて活用し得るポイントをまとめること。博士論文作成に向けた行程表を作成すること。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

Marius B. Jansen, The Making of Modern Japan, Harvard University Press, 2002

【成績評価の方法と基準】

出席、発表、質疑など授業への参加度を中心に平常点 100 % で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

双方向的授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板に、毎回授業の要点を記すので、それを参照する I T 機器（P C、スマートフォン、タブレットなど）。

【その他の重要事項】

・史学特殊演習BⅡとの継続履修が望ましい。史学特殊演習AⅠと同一内容である。

・オフィスアワーは、毎週月曜日 13 時 30 分～14 時 50 分長井研究室（ボアソナード・タワー 15 階 1505 室）。複数の申し込みがある場合には、スケジュールを調整することがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」(『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月)

「田中光顕関係文書紹介」(一)～(十三続)(『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年)

「山県有朋関係文書」第 1～3 巻(山川出版社、2004～2007 年)

「木戸孝允関係文書」第 1～4 巻(東京大学出版会、2006～2009 年)

「河野広中」吉川弘文館(2009 年)。

「河野広中覚書(上)(下)」(『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月)

「韓国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月)

「中国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月)

「棚橋小虎日記・昭和 20 年」(法政大学大原社会問題研究所、2009 年)

「棚橋小虎日記・昭和 17 年」(法政大学大原社会問題研究所、2011 年)

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」(『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月)

「A Year in America」(『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月)

「明治日本と日本人」(独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」2018 年)

【Outline and objectives】

This class is for the PhD candidates. The object of this class is to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review by every student.

HIS700B4

史学特殊演習 BⅡ

長井 純市

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

日本近現代史に関わる博士論文の作成に必要な企画・構想力、批判力および表現力を養う。そのために、研究発表や質疑応答、最先端の研究に関わる新刊書の合評会などを行う。

【到達目標】

以下の 5 点を達成する動機付けおよび手掛かりを得る。

- 1) 先行研究の動向を把握し、問題の所在を発見する。
- 2) その上で課題を設定し、課題解決の論理を、史実・史料の取捨選択を行いつつ、構成する。
- 3) 最終的に自分の独自性や独創性を主張し、当該研究分野における業績たり得る歴史像を相当の分量で著述する。
- 4) 日本近現代史研究に関わる英語文献の読解力を養成し、高める。
- 5) 歴史学における博士の学位にふさわしい歴史観と社会的発言力を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、日本近現代史研究に関わる新刊図書を中心に課題図書を定め、受講生一人ひとりが発表を行い、それについて教員が講評すると共に、参加者一同による自由質疑を行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要説明。
第 2 回	課題図書紹介(1)	課題図書の提示とねらいの説明(1)
第 3 回	課題図書に関する発表(1)	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑(1)
第 4 回	課題図書紹介(2)	課題図書の提示とねらいの説明(2)
第 5 回	課題図書に関する発表(2)	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑(2)
第 6 回	課題図書紹介(3)	課題図書の提示とねらいの説明(3)
第 7 回	課題図書に関する発表(3)	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑(3)
第 8 回	課題図書紹介(4)	課題図書の提示とねらいの説明(4)
第 9 回	課題図書に関する発表(4)	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑(4)
第 10 回	課題図書紹介(5)	課題図書の提示とねらいの説明(5)
第 11 回	課題図書に関する発表(5)	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑(5)
第 12 回	課題図書紹介(6)	課題図書の提示とねらいの説明(6)
第 13 回	課題図書に関する発表(6)	担当受講生による課題図書に関する発表、教員の講評、参加者一同による自由質疑(6)
第 14 回	受講生の研究計画発表(1)	受講生の博士論文作成に向けた企画・構想および計画の発表と自由質疑(1)

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

予習として課題図書を読み、関連文献を調査し読んでおくこと。授業内自由質疑における話題・意見・疑問・質問などをまとめておくこと。復習として博士論文作成に向けて活用し得るポイントをまとめること。博士論文作成に向けた行程表を作成すること。

【テキスト(教科書)】

授業時に指示する。

【参考書】

Marius B. Jansen, *The Making of Modern Japan*, Harvard University Press, 2002

【成績評価の方法と基準】

出席、発表、質疑など授業への参加度を中心に平常点 100 % で成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

双方向的授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板に、毎回授業の要点を記すので、それを参照する IT 機器(PC、スマートフォン、タブレットなど)。

【その他の重要事項】

・史学特殊演習B Iとの継続履修が望ましい。史学特殊演習A IIと同一内容である。
・オフィスアワーは、毎週月曜日 13 時 30 分～14 時 50 分長井研究室（ボアソナード・タワー 15 階 1505 室）。複数の申し込みがある場合には、スケジュールを調整することがあります。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本近現代政治史

<研究テーマ>

日本近現代史における政治指導者、明治国家における地方制度整備をめぐる政治過程

<主要研究業績>

「杉原夷山宛田中光顕書翰紹介」(『法政大学文学部紀要』第 66 号、2013 年 3 月)

「田中光顕関係文書紹介(一)～(十三続)」(『法政大学文学部紀要』第 52～65 号、2005～2012 年)

「山県有朋関係文書」第 1～3 巻(山川出版社、2004～2007 年)

「木戸孝允関係文書」第 1～4 巻(東京大学出版会、2006～2009 年)

「河野広中」吉川弘文館(2009 年)、

「河野広中覚書(上)(下)」(『法政史学』第 72 号、2009 年 9 月、同 73 号、2010 年 3 月)

「韓国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 74 号、2010 年 9 月)

「中国をめぐる河野広中の周辺」(『法政史学』第 76 号、2011 年 9 月)

「棚橋小虎日記・昭和 20 年」(法政大学大原社会問題研究所、2009 年)

「棚橋小虎日記・昭和 17 年」(法政大学大原社会問題研究所、2011 年)

「杉原夷山宛田中光顕書翰について」(『日本歴史』第 761 号、2011 年 10 月)

「A Year in America」(『法政大学文学部紀要』第 71 号、2015 年 10 月)

「明治日本と日本人」(独立行政法人国立公文書館「平成 30 年秋の特別展躍動する明治図録」2018 年)

【Outline and objectives】

This class is for the PhD candidates. The object of this class is to obtain and enhance critical thinking ability and the skill of writing a PhD dissertation on the topic of the Japanese modern history through a presentation of his/her research, discussion, and a book review by every student.

HIS700B4

史学特殊演習 B I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第 2 回	研究発表(1)	研究テーマの学術上の位置づけ
第 3 回	研究発表(2)	研究テーマの史料論的分析
第 4 回	研究発表(3)	研究テーマの可能性
第 5 回	研究発表(4)	研究テーマのひろがり
第 6 回	研究発表(5)	学術雑誌への投稿をめざして
第 7 回	論文講読(1)	研究史上の位置づけ
第 8 回	論文講読(2)	論文構成の方法
第 9 回	論文講読(3)	史料批判
第 10 回	論文講読(4)	論理展開の仕方
第 11 回	論文講読(5)	研究視野の拡大
第 12 回	研究計画発表(1)	今後の方針
第 13 回	研究計画発表(2)	史料探訪にむけて
第 14 回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト(教科書)】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をもて、平常点 100% で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」(『社会経済史学』83 巻 1 号、2017 年)、「江戸における公儀地の論理」(『法政史学』88 号、2017 年)ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

HIS700B4

史学特殊演習 B II

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①査読付学術雑誌に論文を複数掲載する。
- ②博士論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等を見て、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞日本近世史

＜研究テーマ＞都市論、記憶論

＜主要研究業績＞「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation and writing an article.

GEO500B5

地形学研究 I

前杵 英明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形・地質学的方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】

地震、火山噴火、曲隆・曲降など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的方法によりアプローチした研究論文を読解できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	地球規模からみた世界の変動帯
第2回	活動的な地殻変動（1）	アメリカ西海岸の活構造
第3回	活動的な地殻変動（2）	造陸運動とプレート内部の活動
第4回	活動的な地殻変動（3）	活断層評価と災害
第5回	活動的な地殻変動（4）	褶曲に関連する活断層
第6回	活動的な地殻変動（5）	活構造と河川の沖積作用
第7回	活動的な地殻変動（6）	海岸の変動地形
第8回	活動的な地殻変動（7）	山麓での変動地形
第9回	活動的な地殻変動（8）	活構造の研究法と地球表層プロセス
第10回	活動的な地殻変動（9）	古地震研究と活構造
第11回	活動的な地殻変動（10）	活構造プロセスの測地学的研究
第12回	活動的な地殻変動（11）	年代測定法
第13回	活動的な地殻変動（12）	地震災害に関する地質学的研究
第14回	活動的な地殻変動（13）	火山災害とアセスメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

Active Tectonics, National Academy Press, 1986

Tsunamiites, Elsevier, 2008

The Geology of Earthquakes, Oxford University Press, 1997

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション 50%、討論 40%、態度・意欲 10%

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前杵英明ほか (2005) : 沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.
Maemoku, H. et al. (1997) : Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et al. (2012) Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Tectonic geomorphology

GEO500B5

地形学研究Ⅱ

前杢 英明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形・地質学的方法による活動的な地殻変動の解明

【到達目標】

地震、火山噴火、曲隆・曲降、活断層など活動的な地球変動のメカニズムについて、地形・地質学的方法による新たな研究テーマを設定できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	変動地形および地殻変動研究の動向
第2回	活断層研究(1)	日本の活断層研究(1)
第3回	活断層研究(2)	日本の活断層研究(2)
第4回	活断層研究(3)	世界の活断層研究(1)
第5回	活断層研究(4)	世界の活断層研究(2)
第6回	活断層研究(5)	世界の活断層研究(3)
第7回	津波研究(1)	津波の海洋学的研究
第8回	津波研究(2)	津波堆積物研究(1)
第9回	津波研究(3)	津波堆積物研究(2)
第10回	津波研究(4)	津波巨礫研究
第11回	広域的地殻変動研究(1)	日本の海成段丘研究
第12回	広域的地殻変動研究(2)	世界の海成段丘研究
第13回	広域的地殻変動研究(3)	造山運動研究
第14回	広域的地殻変動研究(4)	造盆地運動研究

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

プレゼンテーション準備、レジュメ作成を行う際に、参考書やネットで公開されている情報を幅広く検索し、担当するテーマそのものだけでなく、関連する分野の知識も同時に身に付けることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

学術雑誌または論文集の研究論文を使用する

【参考書】

Active Tectonics, National Academy Press, 1986

Tsunamiites, Elsevier, 2008

The Geology of Earthquakes, Oxford University Press, 1997

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション 50%、討論 40%、態度・意欲 10%

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象科目ではないため該当しない。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクター、パソコン、スクリーン

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前杢英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.
Maemoku, H. et al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et al. (2012) Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Tectonic geomorphology

GEO600B5

地形学演習Ⅰ

前杢 英明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】

修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

研究課題に関する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	研究テーマの設定1	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換1
第3回	研究テーマの設定2	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換2
第4回	研究内容の紹介1	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション1
第5回	研究内容の紹介2	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション2
第6回	研究内容の紹介3	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション3
第7回	研究内容の紹介4	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション4
第8回	受講生の研究内容1	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論1
第9回	受講生の研究内容2	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論2
第10回	受講生の研究内容3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論3
第11回	受講生の研究内容4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論4
第12回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導1	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導1
第13回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導2	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導2
第14回	修士論文の課題と方向性についての議論と指導3	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導3

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

とくに指定しない。自然地理学に関連する内外の文献を使用する。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容(50%)や議論への積極的な参加など(50%)を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前李英明ほか (2005) : 沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.
 Maemoku, H. et.al. (1997) : *Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.*
 Maemoku, H. et.al. (2012) *Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.*

[Outline and objectives]

Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science

GEO600B5

地形学演習 II

前李 英明

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

地形学や第四紀学に関わる修士論文作成のための研究指導

【到達目標】

修士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を熟成・完成させることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容1	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論1
第3回	受講生の研究内容2	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論2
第4回	受講生の研究内容3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論3
第5回	受講生の研究内容4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論4
第6回	受講生の研究内容5	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論5
第7回	受講生の研究内容6	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論6
第8回	受講生の研究内容7	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論7
第9回	受講生の研究内容8	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論8
第10回	受講生の研究内容9	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論9
第11回	受講生の研究内容10	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論10
第12回	受講生の研究内容11	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導11
第13回	受講生の研究内容12	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導12
第14回	受講生の研究内容13	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導13

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

つねに図書館などで関連する内外の文献を目を通しておくこと。

【テキスト (教科書)】

とくに指定しない。自然地理学に関連する内外の文献を使用する。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容 (50%) や議論への積極的な参加など (50%) を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代水床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前杵英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.
 Maemoku, H. et.al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et.al. (2012)Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.

【Outline and objectives】

Research instruction for master thesis on Geomorphology or Quaternary Science

GEO500B5

気候学研究 I

山口 隆子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学・生気象学を研究していくうえで必要となる環境気候学を学ぶ。

【到達目標】

環境と気候のとらえかたを学び、気候学に関する研究テーマを設定できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生との講義内容に関する意見交換
第2回	温暖化とは（1）	温暖化研究の流れ
第3回	温暖化とは（2）	二つの温暖化の実態
第4回	地球温暖化の仕組みと実態（1）	温室効果ガス収支の観測（1）
第5回	地球温暖化の仕組みと実態（2）	温室効果ガス収支の観測（2）
第6回	地球温暖化の仕組みと実態（3）	地球温暖化の仕組み（1）
第7回	地球温暖化の仕組みと実態（4）	地球温暖化の仕組み（2）
第8回	地球温暖化の仕組みと実態（5）	数値モデルによる気候変動研究（1）
第9回	地球温暖化の仕組みと実態（6）	数値モデルによる気候変動研究（2）
第10回	地球温暖化の仕組みと実態（7）	気候変動の実態（1）
第11回	地球温暖化の仕組みと実態（8）	気候変動の実態（2）
第12回	地球温暖化の仕組みと実態（9）	温暖化と水循環（1）
第13回	地球温暖化の仕組みと実態（10）	温暖化と水循環（2）
第14回	まとめ	地球温暖化の仕組みと実態に関するまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】

甲斐憲次編著(2012)：『二つの温暖化—地球温暖化とヒートアイランド—』。成山堂書店,298p.

【参考書】

講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学・気候学・生気象学

<研究テーマ>

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

<主要研究業績>

山口隆子(2009)：『ヒートアイランドと都市緑化』, 成山堂書店, pp. 1 - 128.

山口隆子(2006)：日本における百葉箱の歴史と現状について。天気, Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.

山口隆子(2004)：生気象学的観点からみた気圧変動について。日本生気象学会誌, Vol.40, No.5, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Learn the environmental climatology that is necessary for studying climatology and biometeorology.

GEO500B5

気候学研究Ⅱ

山口 隆子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学・生気象学を研究していくうえで必要となる環境気候学を学ぶ。

【到達目標】

人間環境と気候及び気候利用について学び、気候学に関する研究テーマを設定できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

専門書や研究論文を読み、プレゼンテーションと議論を行う形式を中心とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義内容に関する意見交換
第2回	ヒートアイランドの仕組みと実態（1）	ヒートアイランドの仕組み（1）
第3回	ヒートアイランドの仕組みと実態（2）	ヒートアイランドの仕組み（2）
第4回	ヒートアイランドの仕組みと実態（3）	数値モデルによるヒートアイランド研究（1）
第5回	ヒートアイランドの仕組みと実態（4）	数値モデルによるヒートアイランド研究（2）
第6回	ヒートアイランドの仕組みと実態（5）	東京のヒートアイランド
第7回	ヒートアイランドの仕組みと実態（6）	体感気候
第8回	ヒートアイランドの仕組みと実態（7）	温暖化のダウンスケーリング
第9回	温暖化の政策と展望（1）	低炭素社会に向けて動き出した世界
第10回	温暖化の政策と展望（2）	気候政策の課題と展望
第11回	温暖化の政策と展望（3）	名古屋市の地球温暖化対策
第12回	温暖化の政策と展望（4）	環境共生型建築・地域を目指して
第13回	温暖化の政策と展望（5）	建設業としてのヒートアイランド対策の取り組み
第14回	まとめ	二つの温暖化の関係

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

プレゼンテーション準備、レジュメ作成に際し、周辺分野についても幅広く取り扱うようにすること。

【テキスト（教科書）】

甲斐憲次編著(2012)：『二つの温暖化ー地球温暖化とヒートアイランドー』。成山堂書店,298p.

【参考書】

講義内でその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、気候変動等の取組について講義していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学・気候学・生気象学

<研究テーマ>

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

<主要研究業績>

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』、成山堂書店、pp. 1 - 128.

山口隆子（2006）：日本における百葉箱の歴史と現状について。天気、Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.

山口隆子（2004）：生気象学的観点からみた気圧変動について。日本生気象学会誌、Vol.40, No.S, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Learn the environmental climatology that is necessary for studying climatology and biometeorology.

GEO600B5

気候学演習 I

山口 隆子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】

研究テーマ設定、既存研究論文紹介、研究手法について発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の進め方について
第2回	研究テーマの設定（1）	研究テーマに関する意見交換（1）研究目的
第3回	研究テーマの設定（2）	研究テーマに関する意見交換（2）研究計画
第4回	研究内容の紹介（1）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（1）気候学（国内）
第5回	研究内容の紹介（2）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（2）気象学（国内）
第6回	研究内容の紹介（3）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（3）気候学（海外）
第7回	研究内容の紹介（4）	研究テーマにかかわる既存研究論文の紹介（4）気象学（海外）
第8回	研究手法の検討（1）	研究手法の報告、議論（1）対象地域
第9回	研究手法の検討（2）	研究手法の報告、議論（2）対象期間
第10回	研究手法の検討（3）	研究手法の報告、議論（3）対象データ
第11回	研究手法の検討（4）	研究手法の報告、議論（4）解析手法
第12回	研究の方向性（1）	研究の方向性に関する議論
第13回	研究の方向性（2）	研究の方向性に関する指導
第14回	まとめ	修士論文の中間発表及び今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』、古今書院、120 p.

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学・気候学・生気象学

<研究テーマ>

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

<主要研究業績>

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』、成山堂書店、pp. 1 - 128.

山口隆子（2006）：日本における百葉箱の歴史と現状について、*天気*、Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.山口隆子（2004）：生気象学的観点からみた気圧変動について、*日本生気象学会誌*、Vol.40, No.5, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Research guidance for preparing master's thesis related to climatology.

GEO600B5

気候学演習 II

山口 隆子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

気候学に関わる修士論文作成のための研究指導。

【到達目標】

観測・解析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、修士論文を仕上げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

各自の研究テーマに関する手法・解析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	本演習の進め方
第2回	研究内容の報告（1）	研究の進捗状況報告（研究目的）
第3回	研究内容の報告（2）	研究の進捗状況議論（研究目的）
第4回	研究内容の報告（3）	研究の進捗状況報告（研究手法）
第5回	研究内容の報告（4）	研究の進捗状況議論（研究手法）
第6回	研究内容の報告（5）	研究の進捗状況報告（対象地域）
第7回	研究内容の報告（6）	研究の進捗状況議論（対象地域）
第8回	研究内容の報告（7）	研究の進捗状況報告（対象期間）
第9回	研究内容の報告（8）	研究の進捗状況議論（対象期間）
第10回	研究内容の報告（9）	研究の進捗状況報告（対象データ）
第11回	研究内容の報告（10）	研究の進捗状況議論（対象データ）
第12回	研究内容の報告（11）	研究の進捗状況報告（解析結果）
第13回	研究内容の報告（12）	研究の進捗状況議論（解析結果）
第14回	まとめ	修士論文の最終発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究テーマに関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。

【参考書】

泉岳樹・松山洋（2017）：『卒論・修論のための自然地理学フィールド調査』、古今書院、120 p.

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン

【その他の重要事項】

地方公務員（技術職）として、環境施策の立案・実施の経験を活かし、自然環境全般の実践的な課題への取り組み方を指導していきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学・気候学・生気象学

<研究テーマ>

ヒートアイランド現象と都市緑化（公園緑地・屋上緑化・壁面緑化）を中心とした緩和対策、生気象学的観点からアプローチする地球温暖化影響

<主要研究業績>

山口隆子（2009）：『ヒートアイランドと都市緑化』、成山堂書店、pp. 1 - 128.

山口隆子（2006）：日本における百葉箱の歴史と現状について、*天気*、Vol.53, No.4, pp. 3 - 13.山口隆子（2004）：生気象学的観点からみた気圧変動について、*日本生気象学会誌*、Vol.40, No.5, pp. 293 - 302.

【Outline and objectives】

Research guidance for preparing master's thesis related to climatology.

GEO500B5

水文学研究Ⅰ

小寺 浩二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業概要：水循環の定量的評価と水資源の持続可能な利用
 ・授業の目的・意義：水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し、水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。

【到達目標】

環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について、存在量と循環速度を評価することができるようにする。

異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について、水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。

水文学・陸水学分野において修士論文を書く学生に対しては、テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。

他の分野を主とする学生に対しても、水文学分野の事例をもとに、基本的な研究能力の育成を図る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生の研究課題に結びつくテーマを中心に、論文講読、受講生による発表、討議を中心に進めることにより、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	地球上の水の量と循環	資源としての水の再検証
第2回	水収支要素の算出手法	水の地域配分の決定事項
第3回	水収支の変化と要因	降水量と蒸発散量の評価
第4回	降雨-流出過程	降雨に伴う河川の応答
第5回	直接流出と基底流出	ハイドログラフの解析
第6回	地下水と河川水の交流	流域における水の挙動
第7回	閉塞湖の地下水漏出	湧水涵養源としての湖水
第8回	課題発表と討論	プレゼンテーション実施
第9回	陸水の水温特性	水の熱的特性と水溫構造
第10回	水質形成の自然的要因	溶存成分の起源・由来
第11回	水質形成の人為的要因	水質と人間活動
第12回	水質の変動機構	水域の富栄養化
第13回	水質汚染の解明手法	水質の時系列変化
第14回	水循環の定量的評価	滞留時間の算定

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し、研究対象地域の水文特性、調査研究手法、および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので、事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】

森 和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説 日本の湖」, 朝倉書店。
 市川正巳【編】（1990）：「水文学-総観地理学講座 8-」, 朝倉書店。

【成績評価の方法と基準】

発表 30%, 討議参加 20%, レポート 50%。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の質疑応答の結果を見ながら、適宜講義内容を修正する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>水文学・陸水学・自然地理学
 <研究テーマ>人間活動に伴う水文環境の変化

【Outline and objectives】

The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.

The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.

GEO500B5

水文学研究Ⅱ

小寺 浩二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

・授業概要：水環境の保全と水資源の統合管理
 ・授業の目的・意義：水環境保全の解決手法を理解し、今日の課題としての水資源の統合管理について学ぶ。

【到達目標】

・陸水の水理化学的特性とその変動機構、水文環境と気候変動との因果関係について評価することができる。

・水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方、流域単位の水管理について理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生の研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより、水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。論文講読、受講生による発表、および全員での討議を中心に進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	水温による水の追跡	温度が語る水の履歴
第2回	放射性同位体の応用	トリチウム
第3回	安定同位体の応用	酸素 18, デューテリウム
第4回	気候変動と水賦存量	水温上昇が与える影響
第5回	地球温暖化と水文環境	貧酸素層の形成
第6回	都市の水文環境	地下水環境の変化
第7回	水資源の持続可能性	水資源の開発と適正利用
第8回	課題発表と討論	プレゼンテーション実施
第9回	親水環境の創造	親水環境の創造
第10回	総合治水と流域管理	治水と治山
第11回	日本の水利用と課題	地下水の人工涵養
第12回	国際社会の水資源問題	途上国の水資源と水環境
第13回	水文環境の保全	「名水」の提唱と保存
第14回	風土としての水	自然地理学からみた水

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマと内容に則した論文を事前に検索し、研究対象地域の水文特性、調査研究手法、および結果と考察に関する要約を簡潔に文書化する。論文講読による準備学習の成果を授業中の質疑応答と討議の際の重要な素材とするので、事前の学習活動と主体的に取り組むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として授業中に配布する。

【参考書】

新井 正（2004）：「地域分析のための熱・水収支水文学」, 古今書院。
 山本荘毅・高橋 裕（1988）：「図説 水文学-水文学講座 2-」, 共立出版。

【成績評価の方法と基準】

総合的に判断する。
 発表 30%, 討議参加 20%, レポート 50%。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の研究分野、興味の対象に応じ、毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>水文学・陸水学・自然地理学
 <研究テーマ>人間活動に伴う水文環境の変化

【Outline and objectives】

The basic ability is trained about a research work, investigation method, an analytical method, an analysis method and thesis writing from theme setting to the student who writes a master thesis in hydrology and the land water science field.

The case which is the hydrology field to the student who makes the other fields the center, too, and, I plan for upbringing of basic research capability.

GEO600B5

水文学演習 I

小寺 浩二

【Outline and objectives】

A member of a class plans for upbringing of the basic ability to gather a research result as a thesis by an analysis of field survey method and survey result and the thing from which an announcement by a member of a class and discussion are advanced to the center about an analysis method and how to gather focusing on the theme related to a research task of a member of a class.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

水文学の根幹を成す水循環を定量的に評価する手法について理解し、水資源の持続可能な利用への応用を学ぶ。

環境および資源として人間生活と密接な関わりを持つ陸水について、存在量と循環速度を評価することができるようにする。異なる時空間尺度における水温・水質の分布特性について、水循環の過程におけるあり方を理解することができるようにする。

水文学・陸水分野において修士論文を書く学生に対しては、テーマ設定から研究・調査方法・分析手法・解析手法・論文執筆について基本的な能力を養成する。他の分野を主とする学生に対しても、水文学分野の事例をもとに、基本的な研究能力の育成を図る。

【到達目標】

受講生の研究課題に結びつくテーマを中心に、現地調査方法、調査結果の分析・解析方法、まとめ方などについて、受講生による発表、討議を中心に進めることにより、受講生が研究結果を論文としてまとめる基礎的能力の育成を図る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

初年時の学生は、卒論について発表し、受講生全員で議論しながら、修論への展開について指針を示す。2年次以降の学生は修論に関わる調査結果を発表し、主にデータ解析について受講生全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	卒論・修論発表①	テーマ・キーワード・研究目的について
第2回	卒論・修論発表②	研究方法・地域概略について
第3回	卒論・修論発表③	結果・考察について
第4回	卒論・修論発表④	まとめ・文献・要旨について
第5回	文献検索法	国内外の文献について
第6回	研究法・調査法	研究理論と現地調査方法
第7回	水質分析法①	一般水質
第8回	水質分析法②	安定同位体・環境同位体
第9回	データ解析法①	一般解析（相関・重回帰など）
第10回	データ解析法②	GIS解析（小流域原単位法・SWATモデルなど）
第11回	データ解析法③	様々な解析法（クラスター・主成分など）
第12回	主題図作成法①	水文誌
第13回	主題図作成法②	統計地図・水質分布図
第14回	まとめ	総合的な考察

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマと内容に則し、ほぼ毎回、受講生の研究テーマに沿った発表を求めるので、事前に準備して望むこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を指示する。

【参考書】

森 和紀・佐藤芳徳（2015）：「図説 日本の湖」, 朝倉書店。

市川正巳 [編]（1990）：「水文学－総観地理学講座 8－」, 朝倉書店。

【成績評価の方法と基準】

授業内での発表、討議を踏まえて、提出論文をもとに、総合的に評価する。発表 30%、討議参加 20%、レポート 50%。

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義に対する学生の反応をもとに適宜修正しながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、プレゼンテーションが必要であるため、必ずノートパソコンを用意すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学・水文学・陸水学

<研究テーマ>

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネジメント

GEO600B5

水文学演習Ⅱ

小寺 浩二

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

水環境保全の解決手法を理解し、今日的課題としての水資源の統合管理について学ぶ。

陸水の理化学的特性とその変動機構、水環境と気候変動との因果関係について評価することができるようにする。水圏・大気圏・岩石圏の複合領域において存在する地球上の水のあり方、流域単位の水管理についても理解することができるようにする。

受講生が、それぞれのテーマにしたがって、実際に論文が執筆できる能力の育成を図る。

【到達目標】

受講生の研究課題に結びつくテーマを可能な限り取り上げることにより、水をキーワードとする自然地理学の研究法を議論し、受講生自身の研究の向上に資するよう心がける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

初年次の学生は、「水文学演習Ⅰ」の結果をもとに修論の構想を発表し、予備調査の結果について報告する。2年次以降の学生は、仮の論文を提出し発表して、受講生全員で内容の吟味を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究の構成	先行研究・目的・研究方法など
第2回	調査計画	対象地域選定・観測頻度など
第3回	現地調査法①	利用機材・設置方法など
第4回	現地調査法②	現地との連携・許可申請など
第5回	論文の構成①	形式について
第6回	論文の構成②	図表の配置について
第7回	論文の構成③	文献・要旨など
第8回	論文の推敲①	文章の長さ
第9回	論文の推敲②	文章表現
第10回	論文の推敲③	文章のバランス
第11回	投稿先選定	学会誌毎の特徴
第12回	編集委員とのやりとり	投稿規定など
第13回	査読者とのやりとり	修正要求への返答法
第14回	まとめ	実際に論文を完成させ、投稿

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の具体的なテーマに応じて、実際に論文を作成し、学会誌に投稿する段階まで指導するので、事前に調査結果などを精査し、解析しておくこと。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用せず、関連する文献を教材として利用する。

【参考書】

新井 正 (2004) : 「地域分析のための熱・水収支水文学」, 古今書院。
山本莊毅・高橋 裕 (1988) : 「図説 水文学-水文学講座 2-」, 共立出版。

【成績評価の方法と基準】

総合的に判断する。

発表 30 % , 討議参加 20 % , レポート 50 % 。

【学生の意見等からの気づき】

毎回の講義に対する学生の反応を基に、修正を加えながら授業を進める。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、必ずプレゼンテーションが必要なので、ノートパソコンを持参すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>自然地理学・水文学・陸水学

<研究テーマ>

- 1) 水循環に伴う物質循環
- 2) 人間活動に伴う水環境変化と保全
- 3) GISを用いた流域水・物質循環解析と環境マネージメント

【Outline and objectives】

Solution methodology of water environment protection is understood and it's learned about integrated management of water resources as a present-day problem.

I make sure that it'll be possible to estimate about the physics and chemistry-like special quality of the land water, the fluctuation organization and causality with hydrological environment and variation in climate. I make sure that it'll be also possible to understand about water management of the state of the water and the basin unit on the earth which exists in compound territory in hydrosphere, atmosphere and a lithosphere.

A member of a class plans for upbringing of the ability with which a thesis can be written actually with the respective themes.

GEO500B5

第四紀学研究 I

藁谷 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地球システムの見方を基礎にして、気候変動の仕組みや第四紀における自然環境の変動について、スライドやビデオなどを活用して講義する。この中で地形発達は重要なキーワードであることから、地形図による地形判読実習も併用して、そのスキルを身につける。また、気候変動の影響が大きい雪氷圏を対象に、氷床・氷河の発達や近年の気候変化に伴う地形災害について講義する。

【到達目標】

人類の進化と現在の自然環境の成立にとって、極めて関連深い第四紀の環境とその変動について総合的に理解することを目標とする。このため、自然環境をシステムという観点からとらえ、気候変動に伴う自然環境、とりわけ第四紀における雪氷圏の変動をテーマとして、総合的知識の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は講義、既往文献のレビュー、発表などを総合した形式で進める。取り上げる主要テーマは「授業計画」の通りである。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	地球システムの見方・考え方	地球をシステムとして捉えて自然環境を観察することの重要性を講義する。
2	第四紀の定義と環境	第四紀の定義および地形・地質環境に関する基本的な事項を講義する。
3	気候変動の仕組み	ミランコビッチサイクルなど、気候変動の原因について講義する。
4	第四紀の気候と海水準の変動	氷期サイクルとそれが地形形成に与える効果について講義する。
5	第四紀の地形と地質（1）	完新統からなる地形とその地形判読。
6	第四紀の地形と地質（2）	更新統以降の地質からなる地形とその地形判読。
7	第四紀の気候と植生・土壌	第四紀の気候、植生、土壌環境に関する基本的な事項を講義する。
8	アントロポセン（人新世）における気候システムの変化	産業革命以降の気候システムの変化について講義する。
9	大陸氷床・山岳氷河の形成と分布	氷床、氷河などの分布やそれらの形成過程を講義する。
10	氷河の作用と氷河地形	氷河の作用と山岳氷河がつくりあげる地形について講義する。
11	周氷河プロセスと周氷河地形	周氷河作用と周氷河地形について講義する。
12	氷河湖の形成と決壊洪水	近年の気候変化に伴う氷河湖の拡大と氷河湖決壊洪水について講義する。
13	巨大崩壊による堰止湖の形成とその影響	カラコラム山脈における巨大崩壊を事例にして、河道閉塞に伴う堰止湖の形成過程を講義する。
14	まとめ	講義内容を総括し、レポート等により受講生の到達度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考書にあげた専門書や担当教員の論文等を事前に読み、関連知識を深めてください。また、講義後には関連研究やインターネットなどを通じて理解しにくかった基礎的部分を解消するように努めてください。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しないが、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布。

【参考書】

龍瀬良明『大学テキスト 地図読解入門』古今書院、2009年
鈴木隆介『建設技術者のための地形図読解入門-第1～4巻-』古今書院、1997年
岩田修二『氷河地形学』東京大学出版会、2011年
遠藤・山川・藁谷編『極圏・雪氷圏と地球環境』二宮書店、2010年
その他、講義の際に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、授業中の意見や質問などの授業参画度、理解度を考慮し総合的に評価する：討論参加 40%、発表 30%、レポート 30%

【学生の意見等からの気づき】

大学院は、学問のすそ野を広げるところでもあります。自分の専門にこだわらず、様々な知識を獲得して自身の研究に活かすようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、PC とパワーポイントを利用します。教員室から PC を借り、教室にセットしてください。

【その他の重要事項】

最初の授業で担当教員の連絡先（メールアドレス）を伝えます。授業後に質問等が生じた場合に利用してください。

【担当教員の専門領域】

地形学、岩石風化

【研究テーマ】

1. 岩石の風化と風化プロセスに関する研究
2. カンボジア・アンコール遺跡を構成する石材の風化特性に関する研究
3. パキスタン・カラコラム山脈に発達する氷河の変動に関する研究

【主要研究業績】

1. 衛星画像及び DEM を用いたカラコラム山脈フンザ川流域の氷河台帳と氷河分布図、(2013) 地図、Vol. 51(3), p.1 - 16.
2. 遠藤・山川・藁谷編『極圏・雪氷圏と地球環境』朝倉書店、(2010)
3. 2010年1月にパキスタン北部・アタバードで発生した巨大崩壊と堰止湖の拡大、(2011) 地学雑誌、120, 993-1002

【Outline and objectives】

Based on the viewpoint of the earth system, we learn the mechanism of climate change and the change of natural environment in the Quaternary. Since geomorphic development is an important keyword in this lecture, students can learn map reading techniques using topographical maps. In addition, the students learn on the development of ice sheet and glacier and geomorphological disasters caused by climate change in recent years, targeting the cryosphere with large influence of climate change.

GEO500B5

第四紀学研究Ⅱ

藁谷 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

第四紀における人類の進化と拡散を俯瞰し、乾燥帯や熱帯など異なる自然地域における環境の重層的関係を地形、地質、気候、植生、土壌などの環境条件から講義する。また、人類の活動がこれら自然環境に与える様々な影響について指摘し、人間と自然との共生関係を考察するための事例を示す。アントロポセン（人新世）が提唱される背景を意識することで、第四紀における自然環境の成立を包括的に理解する。

【到達目標】

現在みられる自然環境は、人類が第四紀に入って進化、拡散しながら自然の改変を進めてきた結果であることを理解する。このため、異なる自然地域における自然条件の重層的関係、および人間活動の自然環境に与える連鎖的影響などをおもなテーマとして、包括的知識の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は講義、既往文献のレビュー、および発表などを総合した形式で進める。取り上げる主要テーマは「授業計画」の通りである。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	第四紀における人類の進化と拡散	化石や遺伝的近縁関係などから、人類の進化と拡散を俯瞰する。
2	乾燥帯の気候とそこに分布する地形、地形発達	乾燥気候の特徴とそこに発達する地形、地形発達について講義する。
3	オーストラリア大陸の多様な自然環境	白亜紀以降孤立してきたオーストラリア大陸の自然環境の構成要素に関する概要を講義する。
4	オーストラリア大陸の乾燥地に発達する地形と先住民の痕跡	長期にわたって風化、侵食作用を被ってきたオーストラリア大陸に見られる地形の特徴を講義する。
5	オーストラリア大陸の河川と自然改変	オーストラリア大陸東部の主要河川の特徴や人為的な自然環境改変に伴う影響について講義する。
6	ブッシュファイヤーとオーストラリア先住民	ブッシュファイヤーの発生とその影響、および自然環境と共生する先住民の暮らしについて講義する。
7	熱帯の気候とそこに分布する地形、地形発達	熱帯気候の特徴とそこに発達する地形や地形発達について講義する。
8	インドシナ半島の自然環境	モンスーンの影響を強く受ける湿潤なインドシナ半島の自然環境について講義する。
9	インドシナ半島沿岸の三角州と酸性硫酸塩土壌の形成	マングローブ、三角州の人工改変、酸性硫酸塩土壌の発生などについて講義する。
10	インドシナ半島における熱帯林の消滅	商業伐採や農地転用などによって減少する熱帯林の現状について講義する。
11	カンボジア・アンコール遺跡の成立とその後の環境変化	世界遺産に指定されたアンコール遺跡の周辺に暮らす人々と遺跡との関わりを講義する。
12	アンコール遺跡に見られる風化と風化速度	アンコール遺跡を事例に、熱帯気候下の風化プロセスについて講義する。
13	アンコール遺跡の保全とその影響	熱帯気候下における石造文化財の劣化と保存・修復活動を講義する。
14	まとめ	講義内容を総括し、レポート等により受講生の到達度をチェックする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考書にあげた専門書や担当教員の論文に事前に目を通し、自然環境に関する知識を深めてください。また、講義後には関連研究やインターネットなどを通じて理解しにくかった基礎的部分を解消するように努めてください。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しないが、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布。

【参考書】

小泉武栄・赤坂憲雄編『自然景観の成り立ちを探る（フィールド科学の入口）』玉川大学出版部、2013年
大塚友美編著、藁谷哲也 [ほか] 著『人類の歩み（21世紀の分岐点）』文眞堂、2017年
貝塚爽平『発達史地形学』東京大学出版会、1998年
その他、講義の際に紹介する。

【成績評価の方法と基準】

レポートに加え、授業中の意見や質問などの授業参画度、理解度を考慮し総合的に評価する：討論参加 40%、発表 30%、レポート 30%

【学生の意見等からの気づき】

大学院はすそ野を広げるところでもあります。自分の専門にこだわらず、様々な知識を獲得して自身の研究に生かすようにしてください。

【学生が準備すべき機器他】

毎回、PCとパワーポイントを利用します。教員室からPCを借り、教室にセットしてください。

【その他の重要事項】

最初の授業で担当教員の連絡先（メールアドレス）を伝えます。授業後に質問等が生じた場合に利用してください。

【担当教員の専門領域】

地形学、岩石風化

【研究テーマ】

1. 岩石の風化と風化プロセスに関する研究
2. カンボジア・アンコール遺跡を構成する石材の風化特性に関する研究
3. パキスタン・カラコラム山脈に発達する水河の変動に関する研究

【主要研究業績】

1. アンコール・ワットを構成する砂岩およびラテライトの風化環境と風化プロセス、(2005) 地形, 26(3), 239-257.
2. The effect of rock strength on weathering rates of sandstone used for Angkor temples in Cambodia. (2016) Engineering Geology, 207, 24-35.

【Outline and objectives】

We look at the evolution and diffusion of the human race in the Quaternary and learn on the multilayered relationship of different natural environment areas such as arid zone and tropical zone. In addition, we point out various influences to natural environments by mankind's activities, and show examples for considering the symbiotic relationship between humans and nature. By understanding the background of the Anthropocene, we comprehensively understand the formation of the natural environment in the Quaternary.

GEO500B5

自然地理学文献講読 I

前空 英明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】

自然地理学のうち、年度によって水文・地形・気候分野の文献を講読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。

また、外国語（英語）による論文執筆の基礎についても学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。年度によって、水文・地形・気候学の一般論を扱った洋書を精読する予定である。ただし、課題図書を精読するうちに、受講者が特に関心を持った文献が見つかった場合は、途中でその文献を優先させて紹介させる可能性もありうる。

また、各自の卒論・修論を英訳し、英語論文執筆の基礎的能力を育成する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入・授業概略	本講義の扱う内容や進め方に関して説明し、質疑応答を行う。 その上で、用意した欧文図書の中から、受講生と相談の上で、対象図書を決定する。
第2回	欧文図書輪読（1） 文献検索法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 J-Stage を用いた検索法について学ぶ。
第3回	欧文図書輪読（2） 文献検索法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 CiNii を用いた検索法について学ぶ。
第4回	欧文図書輪読（3） 文献検索法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 その他の検索法について学ぶ。
第5回	欧文図書輪読（4） 文献講読法（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「タイトル」を中心に質疑応答。
第6回	欧文図書輪読（5） 文献講読法（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「キーワード」を中心に質疑応答。
第7回	欧文図書輪読（6） 文献講読法（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「要旨」を中心に質疑応答。
第8回	欧文図書輪読（7） 文献講読法（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献リスト」を中心に質疑応答。
第9回	欧文図書輪読（8） 文献講読法（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 「文献引用法」を中心に質疑応答。
第10回	欧文図書輪読（9） 英文論文執筆の基礎（1）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のレビューを行う。
第11回	欧文図書輪読（10） 英文論文執筆の基礎（2）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文のタイトルとキーワードについて議論する。
第12回	欧文図書輪読（11） 英文論文執筆の基礎（3）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Abstract について議論する。
第13回	欧文図書輪読（12） 英文論文執筆の基礎（4）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Introduction について議論する。
第14回	欧文図書輪読（13） 英文論文執筆の基礎（5）	分担者の翻訳をもとに輪読する。 英文論文の Conclusion について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

適宜、図書館に配架している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。

【テキスト（教科書）】

自然地理分野の欧文論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形・水文の各分野である。詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】

その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、受講生の状況を見て判断し、次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

電子辞書

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代水床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前空英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et al. (1997)：Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.

Maemoku, H. et al. (2012) Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in *Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.*

【Outline and objectives】

Training for English reading skill of text book or journal to improve reading and writing skill of English

GEO500B5

自然地理学文献講読Ⅱ

前巻 英明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自然地理学関連の欧文の文献を精読し、当該研究分野の国際的動向を探るとともに、専門分野の欧文文献を読みこなす語学力を養成する。

【到達目標】

自然地理学のうち、受講者それぞれの研究対象分野に応じた文献を精読し、外国語（英語）の読解力を高め、国際的に評価が高い外国文献から広く情報収集できる能力を身に付けることを目標とする。

また、外国語（英語）による論文の執筆法についても学び、具体的な論文を執筆する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

自然地理関係の欧文文献の内容を正確に読み取れるように、受講者が精読した上で内容に関する討議を踏まえて講義を進める。年度によって、水文・地形・気候学の一般論を扱った洋書を精読する一方、受講者が関心に応じた文献を選定し、レビューし発表する中で、内容について討議する。

また、各自の卒論・修論等を英訳した上で、英語論文として仕上げる方法についても学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入・授業概略	レビューの方法、授業の進め方について説明する。
第2回	文献検索法（1）	文献目録集や国内の検索サイトを用いた検索について
第3回	文献検索法（2）	文献目録集や海外の検索サイトを用いた検索について
第4回	文献講読法（1）	タイトル・キーワードを中心に
第5回	文献講読法（2）	Abstract をを中心に
第6回	文献講読法（3）	文献引用法を中心に
第7回	英語論文執筆法（1）	邦文の英訳
第8回	英語論文執筆法（2）	対訳による検証
第9回	英語論文執筆法（3）	英語論文としての修正
第10回	英語論文執筆（1）	レビュー
第11回	英語論文執筆（2）	タイトルとキーワード
第12回	英語論文執筆（3）	Abstract
第13回	英語論文執筆（4）	Introduction
第14回	英語論文執筆（5）	Conclusion

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

適宜、図書館に配架している洋雑誌を閲覧して、欧文の文献に関心を払って欲しい。

【テキスト（教科書）】

自然地理分野の欧文図書・論文を扱う予定。その分野とは主に、気候・地形・水文の各分野である。ただし、詳細は第一回目の導入時に受講者と相談のうえで決定したい。

【参考書】

その他適宜授業で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

発表担当以外も、必ず事前に読み込んでくること。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、学生の状況を見て次回以降の内容を修正する。

【学生が準備すべき機器他】

電子辞書

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代氷床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前巻英明ほか(2005)：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et al. (1997) : *Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.*

Maemoku, H. et al. (2012) *Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.*

【Outline and objectives】

Training for English reading skill of text book or journal to improve reading and writing skill of English

HUG500B5

人文地理学研究Ⅰ

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人文地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、人文地理学的方法についての深い理解を目指します。具体的には人文地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができるようにします。

【到達目標】

人文地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く人文地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「人文地理学研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の環境論Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「序章」	「序章 地理学を学ぶために」の報告と討議
第3回	テキスト「第1章」	「第1章 都市のなりたち」の報告と討議
第4回	テキスト「第2章」	「第2章 変動する農村の社会」の報告と討議
第5回	テキスト「第3章」	「第3章 景観をつくる人々」の報告と討議
第6回	テキスト「第4章」	「第4章 農業と食のネットワーク」の報告と討議
第7回	テキスト「第5章」	「第5章 工業立地変動のダイナミズム」の報告と討議
第8回	テキスト「第6章」	「第6章 流通システムの消費生活の基盤」の報告と討議
第9回	テキスト「第7章」	「第7章 地政言説から政治を読む」の報告と討議
第10回	テキスト「第8章」	「第8章 観光空間を文化的に理解する」の報告と討議
第11回	テキスト「第9章」	「第9章 地域文化について考える」の報告と討議
第12回	テキスト「第13章」	「第13章 地理学の公共政策への応用」の報告と討議
第13回	テキスト「第14章」	「第14章 環境問題への地理学のかかわり」の報告と討議
第14回	まとめ	まとめ 授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前、テキストの該当箇所を読んでおくことはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】

竹中克行編（2015）『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房

【参考書】

山崎 朗ほか著（2016）『地域政策』中央経済社

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討議：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討議は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論

<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

<主要研究業績>

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72 - 3、2017年
4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年
5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005年
6. 「木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006年
7. 「水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－」ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

I aim at deep understanding about human geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of human geography were written. A target, theory, methodology and research approach of human geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.

HUG500B5

人文地理学研究Ⅱ

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。今年度は「地方都市の地方活性化」をテーマに行います。人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。

【到達目標】

人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。こうした作業を通じて、自らの調査能力のスキルアップを目指し、修士論文作成時の分析能力の向上を到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「人文地理学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の環境論Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。アンケート票の作成は学生が行います。その後、具体的にアンケート調査を実施します。調査地域は学生が相談の上決定します。現地へ出向き、調査を共同で実施し、より多くの調査票の回収を目指します。授業の後半では、回収された調査票を集計し、その後、単純集計、クロス集計の分析を行います。最後に各自で報告書を作成します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	調査目的と調査方針の決定
第2回	社会調査の基本の説明	社会調査の基本の説明
第3回	アンケート票作成時のルール (1)	フェイスシートの作成
第4回	アンケート票作成時のルール (2)	質問項目の作成
第5回	アンケート票作成時のルール (3)	回答項目の作成
第6回	現地調査のマナーの説明	現地調査のマナーの説明
第7回	アンケート票の作成 (1)	アンケート票の形式の作成
第8回	アンケート票の作成 (2)	質問項目の選定
第9回	アンケート票の作成 (3)	アンケート票の完成
第10回	アンケート票の分析 (1)	データ打ち込み
第11回	アンケート票の分析 (2)	単純集計
第12回	アンケート票の分析 (3)	クロス集計
第13回	報告書の作成 (1)	作成手順の説明
第14回	報告書の作成 (2)	完成書の提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めますが、作業は授業外でも行うことになります。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

作業：50%、報告書：50%

【学生の意見等からの気づき】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めます。

【学生が準備すべき機器他】

授業では必ずパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論
 <研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
 <主要研究業績>
 1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
 2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018年
 3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴 - 韓国4大河川再生事業を事例に - 」『地理科学』72 - 3、2017年

4. 『検証：岐阜県史問題 - なぜ御高産廃問題は掲載されなかったのか - 』ユニテ、2005年
5. 『水資源開発の論理 - その批判的検討 - 』成文堂、2005年
6. 『木曾川水系の水資源問題 - 流域の統合管理を目指して - 』成文堂、2006年
7. 『水資源計画の欺瞞 - 木曾川水系連絡導水路計画 - 』ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A questionnaire survey is performed at this session. We decide about an investigation theme, survey item and investigation method, etc. first. Next a questionnaire vote is made. After that a questionnaire survey is put into effect specifically. Survey result is totaled by the tuition's second half; it's analyzed and a report is made. "Activation in a local city" is made a theme this fiscal year. And We aim at a rise of the investigation ability about the human geography.

HUG600B5

人文地理学演習 I

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「人文地理学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心にを行います。教員は論文の作成方法を説明します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ゼミガイダンス	春学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定
第 2 回	論文の作成技法	論文の作成技法の講義
第 3 回	文献検索方法	文献検索方法の講義
第 4 回	修士 2 年生の発表 (1) - 発表レジュメ	修士 2 年生の研究テーマ発表と発表レジュメの解説
第 5 回	修士 2 年生の発表 (2) - 日本語の文法	修士 2 年生の研究テーマ発表と日本語の文法の説明
第 6 回	修士 2 年生の発表 (3) - 引用文献の表示	修士 2 年生の研究テーマ発表と引用文献の表示方法の説明
第 7 回	修士 1 年生の発表 (1) - 参考文献の表示	修士 1 年生の研究テーマ発表と参考文献の表示方法の説明
第 8 回	修士 1 年生の発表 (2) - 注の付け方	修士 1 年生の研究テーマ発表と注の付け方の説明
第 9 回	修士 1 年生の発表 (3) - 構成表の作り方	修士 1 年生の研究テーマ発表と構成表の作り方の説明
第 10 回	修士 2 年生二度目の発表 (1) - 理論の考え方	修士 2 年生二度目の研究テーマ発表と理論の考え方の説明
第 11 回	修士 2 年生二度目の発表 (2) - 方法論の選択	修士 2 年生二度目の研究テーマ発表と方法論の選択の説明
第 12 回	修士 2 年生二度目の発表 (3) - 説明順序	修士 2 年生二度目の研究テーマ発表と説明順序の説明
第 13 回	夏季休暇のフィールドワーク準備 (1) - 調査マナー	調査マナーの説明
第 14 回	夏季休暇のフィールドワーク準備 (2) - 調査方法	調査方法の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論

<研究テーマ> 木曽川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

<主要研究業績>

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）

2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018年

3. 「韓国の水辺環境改善事業の特徴－韓国 4 大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017年

4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御高産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年

5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005年

6. 「木曽川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006年

7. 「水資源計画の欺瞞－木曽川水系連絡導水路計画－」ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

HUG600B5

人文地理学演習Ⅱ

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「人文地理学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	秋学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定をします
第2回	修士2年生の発表と研究題名	修士2年生の研究テーマ発表と「疑問文で成り立つ題名」の説明をします
第3回	修士2年生の発表と研究目的	修士2年生の研究テーマ発表と研究目的における「オリジナリティの必要性」について説明します
第4回	修士2年生の発表と方法論(1)	修士2年生の研究テーマ発表と経済地理学の方法論について説明します
第5回	修士2年生の発表と方法論(2)	修士2年生の研究テーマ発表と方法論「地域事例の理論」について説明します
第6回	修士2年生二度目の発表と先行研究(1)	修士2年生の研究テーマ発表と理論をたどる先行研究の重要性について説明します
第7回	修士2年生二度目の発表と先行研究(2)	修士2年生の研究テーマ発表と先行研究の類型化の重要性について説明します
第8回	修士2年生二度目の発表と説明順序の説明(1)	修士2年生の研究テーマ発表と説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明します
第9回	修士2年生二度目の発表と説明順序の説明(2)	修士2年生の研究テーマ発表と説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明します
第10回	修士1年生の発表と構成表の説明(1)	修士1年生の研究テーマ発表と構成表による「全説明事項の見える化」の重要性について説明します
第11回	修士1年生の発表と構成表の説明(2)	修士1年生の研究テーマ発表と構成表による「ボリュームの見える化」の重要性について説明します
第12回	修士1年生の発表と日本語の説明	修士1年生の研究テーマ発表と論文を支える日本語の文法的重要性について説明します
第13回	修士1年生の発表と結論の説明	修士2年生の研究テーマ発表と結論中の「提案と願望」について説明します
第14回	論文を支える問題意識の説明	研究を支える「熱い心と冷静な頭」の重要性について説明します

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論

<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

<主要研究業績>

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017年
4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御高産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年
5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005年
6. 「木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006年
7. 「水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－」ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

HUG500B5

社会経済地理学研究 I

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年春学期の授業では、主として経済や社会・文化に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「社会経済地理学研究 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の産業風土 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	都市に関する理論・概念の概観 (1)	都市に関する理論・概念についての整理
第 2 回	都市に関する理論・概念の概観 (2)	都市に関する理論・概念についての関係性
第 3 回	経済からみた都市の理論・概念 (1)	経済からの理論・概念に関する講読 (1)
第 4 回	経済からみた都市の理論・概念 (2)	経済からの理論・概念に関する講読 (2)
第 5 回	経済からみた都市の理論・概念 (3)	経済からの理論・概念に関する講読 (1)
第 6 回	経済からみた都市の理論・概念 (4)	経済からの理論・概念に関する講読 (3)
第 7 回	経済からみた都市の理論・概念 (5)	経済からの理論・概念に関する講読 (4)
第 8 回	経済からみた都市の理論・概念 (6)	経済からの理論・概念に関する講読 (2)
第 9 回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (1)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (1)
第 10 回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (2)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (2)
第 11 回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (3)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (1)
第 12 回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (4)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (3)
第 13 回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (5)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (4)
第 14 回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (6)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50%、ディスカッション：50%で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学研究 II」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土 II」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories and concepts about economy, society and culture.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG500B5

社会経済地理学研究Ⅱ

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年秋学期の授業では、主として都市計画や都市開発に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「社会経済地理学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の産業風土Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観(1)	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観(2)	都市に関する理論・概念についての関係性
第3回	都市計画からみた都市の理論・概念(1)	都市計画からの理論・概念に関する講読(1)
第4回	都市計画からみた都市の理論・概念(2)	都市計画からの理論・概念に関する講読(2)
第5回	都市計画からみた都市の理論・概念(3)	都市計画からの理論・概念に関する議論(1)
第6回	都市計画からみた都市の理論・概念(4)	都市計画からの理論・概念に関する講読(3)
第7回	都市計画からみた都市の理論・概念(5)	都市計画からの理論・概念に関する講読(4)
第8回	都市計画からみた都市の理論・概念(6)	都市計画からの理論・概念に関する議論(2)
第9回	都市開発からみた都市の理論・概念(1)	都市開発からの理論・概念に関する講読(1)
第10回	都市開発からみた都市の理論・概念(2)	都市開発からの理論・概念に関する講読(2)
第11回	都市開発からみた都市の理論・概念(3)	都市開発からの理論・概念に関する議論(1)
第12回	都市開発からみた都市の理論・概念(4)	都市開発からの理論・概念に関する講読(3)
第13回	都市開発からみた都市の理論・概念(5)	都市開発からの理論・概念に関する講読(4)
第14回	都市開発からみた都市の理論・概念(6)	都市開発からの理論・概念に関する議論(2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50%、ディスカッション：50%で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学研究Ⅰ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅰ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories and concepts about urban planning and urban development.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG600B5

社会経済地理学演習Ⅰ

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを旨とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「社会経済地理学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第2回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第3回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第7回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第11回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第14回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対する発表準備をしっかりと行うことが求められます。また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項について課題を出すことがあり、その課題について取り組むことが求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%、討論内容（発言等）：50%で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

HUG600B5

社会経済地理学演習Ⅱ

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを旨とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「社会経済地理学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対する発表準備をしっかりと行うことが求められます。また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項について課題を出すことがあり、その課題について取り組むことが求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%、討論内容（発言等）：50%で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

HUG500B5

文化地理学研究Ⅰ

中俣 均

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代の文化地理学の概要について学ぶ。基本的には、指示するテキストの講読という形で、1980年代以降大きな変貌を遂げた「新しい文化地理学」の内容を知り、その批判的受容につとめることを目的とする。

【到達目標】

古典的（＝平板！）なイメージをもたれがちな文化地理学が、近年どのように装いを新たにしてきているかを概観し、そこから自分なりの問題意識をもってテーマを立てられるようになることを目指したい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に留意しなくてもよい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキストの各章をみて、あらましを把握する
第2回	テキスト第1章を読む①	「文化地理学から新しい文化地理学へ」その①
第3回	テキスト第1章を読む②	「文化地理学から新しい文化地理学へ」その②
第4回	テキスト第2章を読む①	「認識としての文化」その①
第5回	テキスト第2章を読む②	「認識としての文化」その②
第6回	テキスト第3章を読む①	「認識としての文化」その①
第7回	テキスト第3章を読む②	「認識としての文化」その②
第8回	テキスト第4章を読む①	「現代メディア空間と地理学」その①
第9回	テキスト第4章を読む②	「現代メディア空間と地理学」その②
第10回	テキスト第5章を読む①	「空間の政治学に向けて」その①
第11回	テキスト第5章を読む②	「空間の政治学に向けて」その②
第12回	テキスト第6章を読む①	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その①
第13回	テキスト第6章を読む②	「変わりゆく文化・人間概念と人文地理学」その②
第14回	テキスト第7章を読む①	「民俗文化のゆくえ」その①

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前にテキストの担当部分を詳しく読んで、自分なりの疑問点や問題点を析出しておくこと。

【テキスト（教科書）】

中俣均編(2011)：『空間の文化地理—シリーズ・人文地理学7』（朝倉書店）を用いる。このシリーズは人文地理学を学ぶ大学院生用のテキストを提供することを目的の一つとしているものだが、中身はなかなか難解なものである。個人的に取り組むのもよいが、一緒に議論しながら読んでいくことで、その難解な内容がいくらかでも理解しやすくなるであろう。

なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に留意しなくてもよい。

【参考書】

上記テキスト各章末にあげられている参考文献を適宜利用する。

【成績評価の方法と基準】

口頭発表時の準備状況と問題設定（50%）、議論の内容（50%）を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化地理学、島嶼地理学、沖縄地域研究など
<研究テーマ>日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全
<主要研究業績>

中俣均(2014):『渡名喜島—地割制と歴史的集落景観の保全—』(古今書院)
中俣均編著(2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学7。(朝倉書店)
中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学9。(朝倉書店)
中俣均訳(2018)『S.ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

In this course we are going to study how we should “do Cultural Geography”.

HUG500B5

文化地理学研究Ⅱ

中俣 均

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

島嶼地理学について総観的に記されたテキストを講読する。人類の生活空間の一部である島嶼のもつ特殊性、そこを舞台として展開される地理学の実相、そして島嶼があらゆる人文地理学的関心の集中する場であることを実感する。

【到達目標】

世界の島嶼についての知識を得るとともに、それを基軸にして地球大の人間の生活空間を認識する視点を獲得することを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

下記に指示するテキストを精読する。学生があらかじめ担当部分を読み、授業でそれを口頭発表し、担当者がそれに適宜解説を加えながら、議論していく。今年度はテキストの後半5章分を読んでいく。なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に留意しなくてもよい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキスト前半部分の復習
第2回	テキスト第5章①	読解と発表、議論①
第3回	テキスト第5章②	読解と発表、議論②
第4回	テキスト第6章①	読解と発表、議論③
第5回	テキスト第6章②	読解と発表、議論④
第6回	テキスト第6章③	読解と発表、議論⑤
第7回	テキスト第7章①	読解と発表、議論⑥
第8回	テキスト第7章②	読解と発表、議論⑦
第9回	テキスト第8章①	読解と発表、議論⑧
第10回	テキスト第8章②	読解と発表、議論⑨
第11回	テキスト第9章①	読解と発表、議論⑩
第12回	テキスト第9章②	読解と発表、議論⑪
第13回	テキスト第10章①	読解と発表、議論⑫
第14回	テキスト第10章②	読解と発表、議論⑬

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前の文献読み込みが必須である。それをもとに授業で不明な個所などを読み解き理解してゆく。

【テキスト（教科書）】

Stephen Royle(2001)“A Geography of Islands : small island insularity.” (Routledge). 著者は北アイルランド・Queens University の名誉教授。英語で書かれた島嶼の地理学の概説書であり、理解しやすい。原著は地理学科図書室に配架あり。

なお、テキストについては、受講者と相談のうえで変更することもあり得るので、初回授業時に留意しなくてもよい。

【参考書】

特に指定はしない。

【成績評価の方法と基準】

口頭の発表時の準備状況と問題設定（50%）、授業時の議論の内容（50%）を斟酌して判断・評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化地理学、島嶼地理学、沖縄地域研究など
<研究テーマ>日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全
<主要研究業績>

中俣均(2014):『渡名喜島—地割制と歴史的集落景観の保全—』(古今書院)
中俣均編著(2011):『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学7。(朝倉書店)
中俣均編著:『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学9。(朝倉書店)
中俣均訳(2018)『S.ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

In this course we are going to study how we should “do cultural geography”.

HUG600B5

文化地理学演習Ⅰ

中俣 均

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、文化地理学に含まれる論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かっている論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】

春学期に行なわれるこの授業では、下記概要の①および②を中心に進め、修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業方針の説明と各受講生の修士論文作成スケジュールの確認
第2回	論題の表明	全受講生による方針の発表
第3回	論題の確立	受講生相互で議論し、論題を確定させる
第4回	研究内容の報告①	各受講生の発表と質疑応答①
第5回	研究内容の報告②	各受講生の発表と質疑応答②
第6回	研究内容の報告③	各受講生の発表と質疑応答③
第7回	研究内容の報告④	各受講生の発表と質疑応答④
第8回	研究内容の報告⑤	各受講生の発表と質疑応答⑤
第9回	研究内容の報告⑥	各受講生の発表と質疑応答⑥
第10回	研究内容の報告⑦	各受講生の発表と質疑応答⑦
第11回	研究内容の報告⑧	各受講生の発表と質疑応答⑧
第12回	研究内容の報告⑨	各受講生の発表と質疑応答⑨
第13回	研究内容の報告⑩	各受講生の発表と質疑応答⑩
第14回	全体的整理	全体的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次回の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

さまざまな「論文の書き方」についてのマニュアルなどを適宜活用してほしい。

【成績評価の方法と基準】

発表の仕方と内容（50%）と質疑応答の内容（50%）。自分の関心を他人に的確に説明し、その学問的意義を主張できることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化地理学・島嶼地理学・沖縄地域研究など
 <研究テーマ>日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全
 <主要研究業績> 中俣均 (2014) 『渡名喜島－地割制と歴史的集落景観の保全－』(古今書院)
 中俣均編著 (2011) 『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7. (朝倉書店)
 中俣均編著 (2004) 『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9. (朝倉書店)
 中俣均訳 (2018) 『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help student acquire some fundamental bases for his/hers master's thesis.

HUG600B5

文化地理学演習Ⅱ

中俣 均

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、文化地理学に含まれる論題を用意した受講生が、修士論文を完成させるための、①テーマの設定とそれを練り上げる作業、②練り上げたテーマに沿った調査研究の実施状況を報告し、他の受講生と議論を交わす中間発表、③最終的な論文完成に向かっている論点の整理、といった過程を進めるためのものである。

【到達目標】

秋学期に行なわれるこの授業では、下記概要の②および③を中心に進め、修士論文の概略を固めることを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

論題を抱えた受講生の発表と、それに対する討論を中心にして、授業を進めてゆく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容の説明と各受講生の論文作成スケジュールの確認
第2回	研究内容の報告①	受講生の発表と質疑①
第3回	研究内容の報告②	受講生の発表と質疑②
第4回	研究内容の報告③	受講生の発表と質疑③
第5回	研究内容の報告④	受講生の発表と質疑④
第6回	研究内容の報告⑤	受講生の発表と質疑⑤
第7回	研究内容の報告⑥	受講生の発表と質疑⑥
第8回	研究内容の報告⑦	受講生の発表と質疑⑦
第9回	研究内容の報告⑧	受講生の発表と質疑⑧
第10回	研究内容の報告⑨	受講生の発表と質疑⑨
第11回	研究内容の報告⑩	受講生の発表と質疑⑩
第12回	研究内容の報告⑪	受講生の発表と質疑⑪
第13回	最終執筆指導①	論文内容の相互チェックと形式的整理－全体的検討
第14回	最終執筆指導②	論文内容の相互チェックと形式的整理－最終的整理

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の発表時に与えられた指摘やコメントに対して、誠実かつ主体的に対処し、次回の発表に備えること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

さまざまな「論文作成のためのマニュアル」類を適宜活用してほしい。ただし、マニュアルはそれをなぞるためではなく、精神をくみ取ることが大切である。

【成績評価の方法と基準】

発表のしかたとその内容（50%）および質疑応答への内容（50%）とを評価対象とする。自分の関心を他者に的確に説明し、その学問的意義を主張できることが重要である。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化地理学・島嶼地理学・沖縄地域研究など
 <研究テーマ>日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全
 <主要研究業績> 中俣均 (2014) 『渡名喜島－地割制と歴史的集落景観の保全－』(古今書院)
 中俣均編著 (2011) 『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学 7. (朝倉書店)
 中俣均編著 (2004) 『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学 9. (朝倉書店)
 中俣均訳 (2018) 『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help student acquire some fundamental bases for his/hers master's thesis.

HUG500B5

地域社会論研究Ⅰ

片岡 義晴

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

農家や農業生産法人が労働力を如何に確保しているかを把握することによって、日本農業の実態に迫っていきます。特に外国人技能実習生に関わる問題点を考えていきます。

【到達目標】

農家労働力の高齢化、減少が顕著である中で、農業労働力確保が日本農業維持の上で差し迫った問題となりつつあります。雇用労働力の確保も現実問題として喫緊の課題となっています。外国人技能実習生の確保による問題も各地で報告されています。この授業では技能実習生を含め、農業労働力問題に関する文献を読み、日本農業の一側面を把握していきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

関連文献を読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	文献の紹介、発表担当者の決定
第2回	日本農業の変容	変容の諸局面
第3回	日本の農業労働力(1)	日本農業の労働力問題
第4回	日本の農業労働力(2)	農業労働力の減少
第5回	日本の農業労働力(3)	農業労働力の現状
第6回	日本の農業労働力(4)	農業労働力の高齢化
第7回	日本の農業労働力(5)	常雇いと臨時雇い
第8回	日本の農業労働力(6)	雇用型農業経営の展開
第9回	日本の農業労働力(7)	外国人技能実習制度の成立と技能実習生の活用
第10回	日本の農業労働力(8)	外国人技能実習制度の改正
第11回	アジアの外国人労働力確保制度	韓国、台湾
第12回	外国人技能実習生送り出し国の実態	タイ
第13回	外国人技能実習制度の課題	制度と実態の乖離
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。それを各自が読むことを前提にして発表、討論していきます。

【テキスト（教科書）】

読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。

【参考書】

上林千恵子（2015）『外国人労働者受け入れと日本社会』東京大学出版会

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、討論 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 農業経済地理学

<研究テーマ>

集落共同製茶の諸問題、
農業の雇用労働力と外国人技能実習制度

【Outline and objectives】

Agricultural Trainees in Japan.

HUG500B5

地域社会論研究Ⅱ

片岡 義晴

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では国際労働力移動問題を踏まえて、日本の外国人労働力問題を検討していきます。

【到達目標】

2016年、日本の外国人労働力については100万人を突破し、約108万人、2017年には128万人に達しました。そして2018年末には「特定技能」という新たな留資格を設けることが国会で審議され、国会を通過しました。2019年4月からの運用を目指そうと調整が続けられています。実質的な「移民」であるのに「移民でない」と言い張り、要するにウソをつき続けているのが今の日本政府です。

授業では国際労働力移動問題を整理し、難民と移民の類似点・相違点を検討します。その上で労働力の質的变化、とりわけ家事労働力としての女性移民問題を検討します。それらを踏まえて、日本の外国人労働力問題、技能実習制度の変更点について検討していきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

関連文献を読み、それを踏まえて受講生による報告と討議を中心にして授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	文献の紹介、発表担当者の決定
第2回	労働力移動問題	日本の経験、外国の動向
第3回	高度経済成長期の出稼ぎ労働力	階級同盟としての一側面
第4回	労働力の国際移動	歴史的展開
第5回	難民問題と日本	受身の難民対策
第6回	移民労働力問題	受入国の問題、送出し国の問題
第7回	移民の質的变化	男性中心から女性へ
第8回	女性移民の増加と家事労働力需要	家事労働力需要の拡大
第9回	日本からの移民送り出し	移民送出しの史的展開
第10回	移民受け入れに関する日本政府の公式見解	単純労働力受け入れ拒否と生産現場の労働力需要拡大
第11回	日系人労働力	日系人という「幻想」
第12回	外国人労働力と外国人技能実習制度	技能移転という「幻想」と実態の乖離
第13回	外国人労働力と外国人技能実習制度の2016年改正と問題点	受入部門の拡充と滞在期間の延長
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。それを各自が読むことを前提にして発表、討論していきます。

【テキスト（教科書）】

読むべき文献を事前に配布もしくは指示します。

【参考書】

堀口健治編著（2017）『日本の労働市場開放の現況と問題点』筑波書房

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、討論 50 % で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 農業経済地理学

<研究テーマ>

集落共同製茶の諸問題、
農業の雇用労働力と外国人技能実習制度

【Outline and objectives】

Immigrant Workers in Japan.

HUG600B5

地域社会論演習Ⅰ

片岡 義晴

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の作成をめざします。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「地域社会論演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	修士論文のテーマ(1)	テーマの発表
第3回	修士論文のテーマ(2)	テーマの検討
第4回	研究目的	修士論文研究目的の検討
第5回	修士論文目次(1)	目次の提示
第6回	修士論文目次(2)	目次の検討
第7回	実態調査(1)	調査内容の検討
第8回	実態調査(2)	調査計画の検討
第9回	統計資料(1)	基礎的な統計資料の確認
第10回	統計資料(2)	統計資料の整理
第11回	図表の作成	図表の作成計画
第12回	研究構想の再検討	研究構想の再検討、修正
第13回	中間報告	中間報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

具体的な資料整理、分析だけでなく、大きな問題意識、議論の枠組み（論理）を意識的に考えて下さい。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

宮本常一・安溪遊地（2008）『調査されるという迷惑－フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版

【成績評価の方法と基準】

発表 50%、討論 50%で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 農業経済地理学
<研究テーマ>

集落共同製茶の諸問題、
農業の雇用労働力と外国人技能実習制度

【Outline and objectives】

Completing master's thesis.

HUG600B5

地域社会論演習Ⅱ

片岡 義晴

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の完成をめざします。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「地域社会論演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	調査結果報告	夏季休暇時の調査結果報告
第3回	テーマの再確認	修士論文テーマの再確認
第4回	研究目的	研究目的の再確認
第5回	目次	目次の再検討
第6回	資料	必要資料の再確認
第7回	補足調査	補足調査の必要性の再確認
第8回	目次の最終決定	目次の再検討と最終決定
第9回	図表の完成	完成図表の確認
第10回	参考・引用文献	参考・引用文献の最終確認
第11回	完成原稿の予定枚数	完成原稿予定枚数の確認
第12回	進捗状況の発表	進捗状況の発表
第13回	最終報告	最終報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

議論の枠組み（論理）と資料整理を踏まえた具体的議論の整合性を検討して下さい。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

宮本常一・安溪遊地（2008）『調査されるという迷惑－フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版

【成績評価の方法と基準】

発表 50%、討論 50%で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 農業経済地理学
<研究テーマ>

集落共同製茶の諸問題、
農業の雇用労働力と外国人技能実習制度

【Outline and objectives】

Completing master's thesis.

HUG500B5

空間構成論研究 I

山本 健児

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

空間構成の空間とは、大は地球規模の空間から、小は例えば都市の一街区に至るまで様々なスケールがある。どのスケールの空間を扱うにせよ、空間構成諸要素は何か、それら諸要素がどのような関係にあるかを研究することによって、取り扱う空間の全体像を理解することができる。この授業ではドイツ語圏諸国や日本における地域経済の発展を考察する。あわせて、院生にも独自に取り組んでいる研究テーマでの報告を求める。

【到達目標】

国よりも小さなスケールの地域の経済発展に関する理論を理解する能力を身につけ、これを踏まえて具体的な地域に関する現実に関する分析能力を身につけることが到達目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

最初の数回分の授業で、地域経済の発展に関する理論に関する講義を山本が行う。これを踏まえて、参加院生は、自身が関心を持つ地域の経済発展に関する報告を行い、これを踏まえてディスカッションを行う。また、山本がここ数年研究してきたドイツ語圏の諸地域や日本の諸地域の経済発展を具体的に講義する予定であるが、その際には、山本が書いた論文を発行母体のリポジトリなどから、自身でダウンロードし、事前に読んでおくことが必要となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	世界経済の構成—中核・周辺—半周辺—	ウォラーステインの世界システム論を講義する。
第2回	産業構造と地域間格差	一国内部や、国との間の経済格差を説明する要因としての産業構造論について講義する。
第3回	D.C. North の移出ベース理論	地域経済発展の原動力を移出産業に求める考え方を講義する。
第4回	improvisation と innovation を重視する J. Jacobs の所説	都市経済の発展は、都市内部の多様性に依存すると主張する Jacobs の理論について考察する。
第5回	生産諸要素の空間的流動と地域間格差の変動	資本と労働という生産要素の空間的流動がどのようなものであり、これが地域間格差の変動にどのように影響するかを考察する。
第6回	知識創造と企業家精神	イノベーションの実現の基礎をなす知識創造と、イノベーションの担い手である企業家の精神との関係を考察する。
第7回	日本における地域間格差の変動	日本国内における地域間格差の変動について検討する。
第8回	日本における周辺地域に立地する製造業中小企業のイノベーション	産業集積に関する理論と、日本における周辺の地域での中小企業の現実とを比較考察する。
第9回	欧州における地域間格差の変動	欧州レベル及び欧州主要国の内部での地域間格差の変動について考察する。
第10回	オーストリア、フォアールベルクの経済発展	繊維工業特化地域からバランスの取れた経済地域に変貌したフォアールベルクの経済発展の原動力を考察する。
第11回	ドイツ、エムスラントの経済発展	ドイツの貧民窟と呼ばれるほど貧しい農村地域だったエムスラントがドイツの平均を上回る経済水準を達成し、かつ平均を上回る経済成長率を 21 世紀において示しているのは何故かを考察する。
第12回	スイス、シャフハウゼンの経済発展	スイスきっての重工業地域という側面を持っていたシャフハウゼンが、1980～90 年代の経済危機を克服して経済再活性化に成功した理由を考察する。
第13回	院生の報告	授業のテーマにかかわる院生自身の研究報告とこれをもとにしたディスカッションを行う。
第14回	総合ディスカッション	13 回の授業を振り返って、総合的な討論を参加者全員で行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に臨む前に、テキストを読み、理解困難な部分があるか否かを明確にすること。復習として、授業中に提示する文献を読むことが求められる。

【テキスト（教科書）】

- ・山本健児（2005）『経済地理学入門 新版』原書房。
- ・山本健児（2018a）「ドイツ経済復活の鍵としてのミッテルシュタントと地域経済」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 84 巻、第 5・6 合併号、pp.51-86。
- ・山本健児（2018b）「地域経済の 4 つの支柱とシュタントオルトポリティークの意義」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 85 巻、第 1 号、pp.1-26。
- ・山本健児（2018c）「地域経済の構造転換と「場所に関する戦略的経営」—オーストリア・フォアールベルク州の事例—」、『経済学研究』（九州大学経済学会）第 85 巻第 4 号、印刷中。

【参考書】

- ・経済地理学会編（2018）『キーワードで読む経済地理学』原書房。
- ・Aoyama, Y., J.T. Murphy and S. Hanson (2011) *Key Concept in Economic Geography*. London: Sage Publications Ltd.
- ・Bathelt, H. und J. Glueckler (2012) *Wirtschaftsgeographie. 3., vollstaendig ueberarbeitete und erweiterte Aiflage*, Stuttgart: Verlag Eugen Ulmer.
- ・Barnes, T. J. and B. Christophers (2018) *Economic Geography. A Critical Introduction*. Oxford: John Wiley & Sons Ltd.

【成績評価の方法と基準】

授業に臨む姿勢、即ちディスカッションへの参加程度 (50 %) とレポートの内容 (50 %) で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

質問の発出や院生自身の研究に関する報告など、積極的な参加が求められます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 社会経済地理学

<研究テーマ> 周辺的地域における経済発展、移民と都市

<主要研究業績>

- ・山本健児『現代ドイツの地域経済—企業の立地行動との関連—』法政大学出版局、1993 年。
- ・山本健児『国際労働力移動の空間—ドイツに定住する外国人労働者—』古今書院、1995 年。
- ・山本健児『産業集積の経済地理学』法政大学出版局、2005 年。
- ・山本健児・平川一臣（編）『朝倉世界地理講座 第 9 巻 中央・北ヨーロッパ』朝倉書店、2014 年。

【Outline and objectives】

This lecture deals with economic development of regions, which consist of a nation state such as Japan, Germany and Austr. Attending students should report his or her own research theme at least once within a semester.

HUG500B5

空間構成論研究Ⅱ

山本 健児

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

空間構成の空間とは、大は地球規模の空間から、小は例えば都市の一街区に至るまで様々なスケールがある。どのスケールの空間を扱うにせよ、空間構成諸要素は何か、それら諸要素がどのような関係にあるかを研究することによって、取り扱う空間の全体像を理解することができる。この授業では、諸都市が織りなす空間と、個別の都市内部構成を考察対象とする。あわせて、院生にも独自に取り組んでいる研究テーマでの報告を求める

【到達目標】

都市とはどのような存在であるかを理解するために、諸都市が構成する空間と、個々の諸都市内部の空間構成に関する理論を理解し、その理論が現実の空間理解のために役にたつか否かを批判的に考察する能力を身につけることが到達目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

最初に、都市という概念、諸都市が構成する空間、個別都市内部の空間構成などに関する諸理論を山本が講義する。それを踏まえて、輪読課題論文あるいは参加院生が自ら探索して推薦する文献の内容を順番に報告する。いずれにしても、1コマの授業時間の最後3分の1は、ディスカッションにあてる。なお、学術雑誌に掲載された論文で雑誌発行大学のリポジトリなどからダウンロードできるものについては、院生自身でダウンロードし、事前に読むことが必要となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	都市の概念	都市論の古典をもとに、都市の概念について考察する。
第2回	都市形成力としての経済的統合様式	カール・ボランニーが考案した「経済的統合様式」という概念について講義する。
第3回	市場交換と W. Christaller の中心地理論	市場交換の原初的形態である買い物行動をもとに、都市の規模・数・地理的分布に関する法則を講義する。
第4回	巨大都市と経済的中枢管理機能	中心地理論では説明できない巨大都市形成の論理を考察する。
第5回	国家システムと都市の階層性	政治的な国家システムの多様性と都市の階層性との関係について検討する。
第6回	文化と都市の階層性	経済や政治とは別の独自要因としての文化が都市の階層性形成にどのように関わるかを考察する。
第7回	日本の都市システム	日本の都市システムの変遷について考察する。
第8回	アメリカの都市システム	アメリカの都市システムの変遷について考察する。
第9回	ドイツの都市システム	ドイツの都市システムの変遷について考察する。
第10回	フローの空間と場所の空間	Manuel Castell の都市論を再検討する。
第11回	都市内の空間的セグレーション	欧米の大都市における問題としての階級間、民族間の居住隔離問題を考察する。
第12回	EUの都市政策を活用する問題地区再活性化	1990年代から推進されてきたEUによる都市政策の意義とドイツの代表的都市の政策を考察する。
第13回	院生による報告	この授業のテーマに則した、院生による研究報告とする。
第14回	総合ディスカッション	13回の授業を振り返って、総合的な討論を参加者全員で行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に臨む前に、テキストを読み、理解困難な部分があるか否かを明確にすること。復習として、授業中に提示する文献を読むことが求められる。

【テキスト（教科書）】

・山本健児『経済地理学入門 新版』原書房、2005年、第4章「都市システムと経済的空間的連関」。
 ・山本健児（2005）「フローの空間」における「場所の空間」としてのミュンヘンとベルリン、『経済志林』（法政大学経済学会）第72巻第4号、pp.87-180。
 ・山本健児（2007）「ドイツの都市政策における「社会的都市プログラム」の意義」、『人文地理』第59巻、pp.205-226。

・山本健児（2009）「ドイツの都市内社会的空間的分極化は激化したか？—ドルトムント市の事例—」、『地理学評論』第82巻、pp.1-25。
 ・山本健児（2010）「EUによる都市政策“URBAN Community Initiative”の実態—デュースブルク市マルクスロー地区の事例—」、『経済志林』第77巻第4号、pp.47-105。
 ・山本健児（2019）「ドイツにおける都市空間整備と移民の背景を持つ人々—ミュンヘン市における「社会的都市プログラム」の事例—」、『都市計画』336号、印刷中。

【参考書】

・Castells, Manuel (1989) *The Informational City. Information Technology, Economic Restructuring, and the Urban-Regional Process.* Oxford: Basil Blackwell Ltd.
 ・Haeussermann, H., D. Laepple und W. Siebel (2008) *Stadtpolitik. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.*

【成績評価の方法と基準】

授業に臨む姿勢、即ちディスカッションへの参加程度（50%）とレポートの内容（50%）で評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

質問の発出や自らの研究に関する報告など、積極的な参加が求められます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会経済地理学

<研究テーマ>周辺地域における経済発展、移民と都市

<主要研究業績>

・山本健児『現代ドイツの地域経済—企業の立地行動との関連—』法政大学出版局、1993年。
 ・山本健児『国際労働力移動の空間—ドイツに定住する外国人労働者—』古今書院、1995年。
 ・山本健児『産業集積の経済地理学』法政大学出版局、2005年。
 ・山本健児、平川一臣（編）『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語— 第9巻 中央・北ヨーロッパ』朝倉書店、2014年。

【Outline and objectives】

This lecture deals with urban system and intra-city structure in developed countries such as Japan, USA, Germany and so on. Attending students should report his or her own research theme at least once within a semester.

HUG500B5

歴史地理学研究 I

米家 志乃布

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本における地図の歴史とその研究方法を学ぶ（1）

【到達目標】

歴史地理学専攻のオーソドックスな研究素材である古地図を取り上げて、日本における古地図研究の流れについて、各時代の主要な古地図を取り上げて、その概要を把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「歴史地理学研究 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「地図の文化誌 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 古代～近代日本における絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、新しい個別研究の可能性を模索する。
2. 日本における地図史研究の方法論の展開を踏まえながら、地図史全体の方法を議論する。
3. 歴史地理学における地図史研究の新しい展開について、日本で複製・出版された様々な地図を見ながら学習する。実際の絵図・地図を数多く見ながら、それについての文献を読む。
4. 近年の若手研究者による新しい地図史研究に関する論文を紹介し、新たな方法についても把握する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、出席者の確認をする。
2	日本の地図史概説①	班田図、荘園図、行基図について学ぶ。
3	日本の地図史概説②	天竺図、世界・日本図屏風について学ぶ。
4	日本の地図史概説③	江戸時代に作成された「国絵図」について学ぶ。
5	日本の地図史概説④	江戸時代に作成された「伊能図」について学ぶ。
6	日本の地図史概説⑤	明治時代の測量図について学ぶ。
7	江戸時代の地図について学ぶ①	刊行日本図の種類と特徴を学ぶ。
8	江戸時代の地図について学ぶ②	刊行都市図の種類と特徴を学ぶ。
9	江戸時代の地図について学ぶ③	江戸幕府による地図作製を学ぶ。
10	江戸時代の地図について学ぶ④	江戸幕府による地域調査や地誌作成と地図の関係について学ぶ。
11	地図史研究の論文を読む①	地理学分野の日本における最新の研究動向を把握する。
12	地図史研究の論文を読む②	日本史分野の最新の研究動向を把握する。
13	地図史研究の論文を読む③	地図史関係の単行本を選び、最新の研究動向を把握する。
14	地図史研究の論文を読む④	各大学の紀要類から最新の研究動向を把握する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各地の博物館や美術館で開催されている地図展や風景画展などの常設および企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

織田武雄『地図の歴史・日本編』講談社新書、1974年。
上杉和央『地図から読む江戸時代』ちくま新書、2015年。

【参考書】

授業内に適宜、関連文献を紹介し、必要があれば地図をコピーして配布したり、個人では手に入りにくい各地図の複製やアトラス類なども授業内で閲覧、閲覧する時間も設けます。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席 50 %、発表 30 %、議論 20 %

「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

テキストや論文での勉強だけではなく、本物の古地図を閲覧したり、複製品やコピーを配布して、古地図を利用した研究のイメージをつくるのが大切です。いろいろな地図を見る機会をつくり、留学生の方々、地理学専攻以外の学生も大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ>蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究

<主要研究業績>

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015年など

【Outline and objectives】

studying history of cartography in Japan (1)

HUG500B5

歴史地理学研究Ⅱ

米家 志乃布

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究
＜研究テーマ＞蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
＜主要研究業績＞
「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015年など

【Outline and objectives】

studying history of cartography in Japan (2)

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本における地図の歴史とその研究方法を学ぶ（2）

【到達目標】

歴史地理学研究のオーソドックスな研究素材である古地図を取り上げて、日本における「蝦夷地」（現在の北海道）をめぐる地域像の特徴、地図史研究の流れおよびその論点について学び、「蝦夷地」の古地図研究の動向について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「歴史地理学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「地図の文化誌Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 近世日本における「蝦夷地」を描いた絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、新しい個別研究の可能性を模索する。
2. ヨーロッパやロシアにおける「蝦夷地」を描いた絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、新しい個別研究の可能性を模索する。
3. 歴史地理学における地図史研究において、「蝦夷地」の地図史研究の新しい展開について、日本で作製・出版された様々な地図を見ながら学習する。実際の絵図・地図を数多く見ながら、それについての文献を読む。
4. 近年の新しい「蝦夷地」の地図史研究に関する論文を紹介し、新たな方法についても把握する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、出席者の確認をする。
2	古地図にみる蝦夷地①	日本北辺地図の特徴について概観する。
3	古地図にみる蝦夷地②	日本における初期の北辺地図の特徴について学習する。
4	古地図にみる蝦夷地③	欧州航海者やロシアの蝦夷地の地図について学習する。
5	古地図にみる蝦夷地④	日本における北辺地図作製の進展について学習する。
6	古地図にみる蝦夷地⑤	北辺地図の探求、間宮林蔵の地図について学習する。
7	古地図にみる蝦夷地⑥	幕末期の蝦夷地地図について学習する。
8	受講者による発表①	松前藩の地図作製について調べて発表する。
9	受講者による発表②	東北諸藩の地図作製について調べて発表する。
10	受講者による発表③	松浦武四郎の地誌・地図作製について調べて発表する。
11	受講者による発表④	江戸幕府の探検成果による地図作製について調べて発表する。
12	受講者による発表⑤	開拓使による地図作製について調べて発表する。
13	受講者による発表⑥	受講者各自の研究テーマのなかで、どのように地図史の研究方法を生かせるか議論する。
14	受講者による発表⑦	受講者各自の研究テーマのなかで、どのように歴史地理学的な研究方法を生かせるか議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各地の博物館などで開催されている地図展や常設展示のなかの「蝦夷地」に関わる部分をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

米家志乃布『近世日本と蝦夷地・古地図にみる北海道』法政大学出版局、2018年予定。

【参考書】

秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1999年。その他は適宜、授業内に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

出席点：50%、発表50%

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

歴史的用語や専門用語も丁寧に解説し、理解できるようにします。留学生の方々と地理学専攻以外の人も遠慮なく履修してください。

HUG600B5

歴史地理学演習 I

米家 志乃布

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（1）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法・分析方法について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「歴史地理学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 歴史地理学の論文を読み、筆者の主張や学史における位置づけを読みとる訓練を行う。
2. 歴史地理学的研究を行ううえでの史料収集の方法や史料読解の技術を身につけるため、実際の史料を読む練習を行い、該当分野のテキストを読んで学習する。
3. 歴史地理学の論文内でのデータの利用方法や処理の仕方を学習する。
4. 具体的な史料やデータを用いて、歴史地理学的な論理構成を考える訓練を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	出席者の確認、授業の概要について説明する。発表の順番を決める。
2	歴史地理学の論文の収集方法	テキストを読みながら、歴史地理学的テーマとは何かを把握し、それらに関連する論文の収集方法について学ぶ。
3	歴史地理学の論文の読み方①	論文の著者の主張について十分に理解する。
4	歴史地理学の論文の読み方②	論文中での図表の効果的な扱い方について、先行研究をもとに学ぶ。
5	歴史地理学の論文の読み方③	統計資料や行政の報告書類を用いた研究方法について、先行研究をもとに議論する。
6	史料の収集方法①	図書館における史料収集の方法を学ぶ。
7	史料の収集方法②	地方の文書館や博物館における史料収集の方法を学ぶ。
8	史料の読解練習①	古地図の読解方法について学ぶ。
9	史料の読解練習②	文書史料の読解方法について学ぶ。
10	データの処理方法①	史料をもとに、どのようなデータが論文作成に必要なかを学ぶ。
11	データの処理方法②	歴史地理学的な研究テーマに即した効果的なグラフや表を作成する。
12	データの処理と論文構成①	先行研究をもとに、収集・処理したデータと論文構成の関係について分析する。
13	データの処理と論文構成②	先行研究をもとに、データと論旨の関係について把握する。
14	データの処理と論文構成③	自分の研究テーマに即したデータの処理方法と構成について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の発表前には、図書館における事前の文献調査は十分に行うようにしてください。また、テキストなどのわからない（読めない）専門用語などは事前に各自で調べてから授業に参加してください。

【テキスト（教科書）】

有薗正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

授業内において適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 30 %、討論への参加 20 %

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

オリジナリティの高い論文が作成できるように、少人数で丁寧に指導するようにします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部の人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ>蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
<主要研究業績>

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015年など

【Outline and objectives】

writing a paper on historical geography (1)

HUG600B5

歴史地理学演習 II

米家 志乃布

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（2）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法、分析方法について、自分の関心あるテーマを選んで、発表し、論文作成の手順について学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「歴史地理学演習 II」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習 II」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 春学期の歴史地理学演習 I の授業内容を踏まえ、各自の関心にもとづいて、歴史地理学的研究テーマを選ぶ。
2. 受講者が先行研究の紹介、史料収集、データ処理と分析を行い、それを発表し、授業内で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	受講者を確認し、発表の順番を決める。
2	先行研究の紹介①	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
3	先行研究の紹介②	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
4	先行研究の紹介③	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
5	先行研究の紹介④	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
6	史料紹介①	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
7	史料紹介②	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
8	史料紹介③	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
9	史料紹介④	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
10	研究報告①	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
11	研究報告②	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
12	研究報告③	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
13	研究報告④	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
14	まとめ	受講者による研究報告を踏まえて、歴史地理学的研究の今後の展開について議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の発表の前に、内容を事前に十分に準備してください。

【テキスト（教科書）】

有菌正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

各自のテーマに即して、適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 50 %

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

先行研究の読み込みや論文の書き方など、少人数で丁寧に指導いたします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部の人文地理学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究

＜主要研究業績＞

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015年など

【Outline and objectives】

writing a paper on historical geography (2)

HUG500B5

人文地理学文献講読 I

中俣 均

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、人文地理学に関連する英語文献を精読することで、同分野に関する理論や概念、海外の研究動向を把握するとともに、英文読解能力を養成するものです。今年度は、「場所」についての初歩的な教科書を参加者と一緒に講読します。

【到達目標】

本授業では人文地理学に関する英語文献の読解を通じて、同分野の理論や概念、海外の研究動向を把握できるようになること、英語の読解力を高めること、文献の内容を適切に要約できるようになること、そして十分なディスカッション能力を修得することを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業においては、受講者は事前に文献を読んでおき、各回の担当者がその文献に関するプレゼンテーションを行い、それを踏まえて討論を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	文献および各回の担当者の決定／「場所」についての基本概念
第2回	文献の読解と検討(1)	担当者による発表とそれに基づく討論
第3回	文献の読解と検討(2)	担当者による発表とそれに基づく討論
第4回	文献の読解と検討(3)	担当者による発表とそれに基づく討論
第5回	文献の読解と検討(4)	担当者による発表とそれに基づく討論
第6回	文献の読解と検討(5)	担当者による発表とそれに基づく討論
第7回	文献の読解と検討(6)	担当者による発表とそれに基づく討論
第8回	文献の読解と検討(7)	担当者による発表とそれに基づく討論
第9回	文献の読解と検討(8)	担当者による発表とそれに基づく討論
第10回	文献の読解と検討(9)	担当者による発表とそれに基づく討論
第11回	文献の読解と検討(10)	担当者による発表とそれに基づく討論
第12回	文献の読解と検討(11)	担当者による発表とそれに基づく討論
第13回	文献の読解と検討(12)	担当者による発表とそれに基づく討論
第14回	まとめ	全体の総括ならびに補足

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業は、各回のテーマに関連する英語文献を読み、それに基づいて討論を展開することになるので、各回の発表者だけでなく、受講者全員が文献を精読しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

本授業は、各回のテーマに関連する英語文献を読み、それに基づいて討論を展開することになるので、各回の発表者だけでなく、受講者全員が文献を精読しておくことが求められます。テキストは、Cresswell, Tim (2004) : *Place : A Short Introduction* (Blackwell Pub) を用います。授業開始時にコピーを渡します。

【参考書】

各回の発表に関連する文献については、適宜、授業の中で紹介します。

【成績評価の方法と基準】

担当時における発表内容：50%、討論内容（発言など）：50%で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、英文の読解の程度ならびにプレゼンテーションの内容について評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を展開するよう心掛けます。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化地理学、島嶼地理学、沖縄地域研究など
<研究テーマ>日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全
<主要研究業績>

中俣均 (2014): 『渡名喜島一地割制と歴史的集落景観の保全』(古今書院)
中俣均編著 (2011): 『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学7。(朝倉書店)
中俣均編著: 『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学9。(朝倉書店)
中俣均訳 (2018) 『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

This course aims to brush up students' ability in English, and also to know new current themes and topics in western Human Geography.

HUG500B5

人文地理学文献講読 II

中俣 均

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、人文地理学に関連する英語文献を精読することで、同分野に関する理論や概念、海外の研究動向を把握するとともに、英文読解能力を養成するものです。今年度は、「場所」についての初歩的な教科書を参加者と一緒に講読します。

【到達目標】

本授業では人文地理学に関する英語文献の読解を通じて、同分野の理論や概念、海外の研究動向を把握できるようになること、英語の読解力を高めること、文献の内容を適切に要約できるようになること、そして十分なディスカッション能力を修得することを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業においては、受講者は事前に文献を読んでおき、各回の担当者がその文献に関するプレゼンテーションを行い、それを踏まえて討論を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	文献および各回の担当者の決定／都市地理学の基本概念
第2回	文献の読解と検討(1)	担当者による発表とそれに基づく討論
第3回	文献の読解と検討(2)	担当者による発表とそれに基づく討論
第4回	文献の読解と検討(3)	担当者による発表とそれに基づく討論
第5回	文献の読解と検討(4)	担当者による発表とそれに基づく討論
第6回	文献の読解と検討(5)	担当者による発表とそれに基づく討論
第7回	文献の読解と検討(6)	担当者による発表とそれに基づく討論
第8回	文献の読解と検討(7)	担当者による発表とそれに基づく討論
第9回	文献の読解と検討(8)	担当者による発表とそれに基づく討論
第10回	文献の読解と検討(9)	担当者による発表とそれに基づく討論
第11回	文献の読解と検討(10)	担当者による発表とそれに基づく討論
第12回	文献の読解と検討(11)	担当者による発表とそれに基づく討論
第13回	文献の読解と検討(12)	担当者による発表とそれに基づく討論
第14回	まとめ	全体の総括ならびに補足

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業は、各回のテーマに関連する英語文献を読み、それに基づいて討論を展開することになるので、各回の発表者だけでなく、受講者全員が文献を精読しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

Tim Cresswell (2004): *Place : A Short Introduction*. (Blackwell)
参加者にコピーを配布します。

【参考書】

各回の発表に関連する文献については、適宜、授業の中で紹介します。

【成績評価の方法と基準】

担当時における発表内容：50%、討論内容（発言など）：50%で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、英文の読解の程度ならびにプレゼンテーションの内容について評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を展開するよう心掛けます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文化地理学、島嶼地理学、沖縄地域研究など
<研究テーマ>日本および東アジアの島嶼における文化景観の形成と保全
<主要研究業績>

中俣均 (2014): 『渡名喜島一地割制と歴史的集落景観の保全』(古今書院)
中俣均編著 (2011): 『空間の文化地理』シリーズ・人文地理学7。(朝倉書店)
中俣均編著: 『国土空間と地域社会』シリーズ・人文地理学9。(朝倉書店)
中俣均訳 (2018) 『S. ロイル 島の地理学』(法政大学出版局)

【Outline and objectives】

This course aims to brush up students' ability in English, and also to know new current themes and topics in western Human Geography.

GEO600B5

地理学現地研究Ⅰ

専任教員が担当

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地へ赴いて多くの地理的事象を直接・観察・観測し、適切に理解することを目標にする。

【到達目標】

現地へ赴いて、地理学的な事象を目にした際、的確に自分の「マナコ」で理解可能な力の養成をすることに、この科目の主目標を据えている。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究Ⅰ（Ⅰ単位＝2泊3日以上）、および地理学現地研究Ⅱ（Ⅰ単位＝2泊3日以上）の合計2単位の取得が必要です。年次の初めに必ず履修登録をしてください。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施教員を通じて伝達する予定である。なお、現地研究を実施する担当教員やそのテーマによっては、海外で行なう場合もあるので、その点に関して予め断わっておきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

通年

回	テーマ	内容
1	本科目の概要説明	年度始めに実施予定の担当教員とテーマを公表する予定である。
2以降	集中的に実施する	現地での調査研究手法を学び、修士論文につなげる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日頃から、年度の実施予定内容を念頭に入れ、その事象が現場ではどのような状況にあるのかを考慮しながら、関連文献に目を通して欲しい。

【テキスト（教科書）】

個々の実施教員が、その都度、適切な文献の紹介や地理的事象への補足的な説明をする。

【参考書】

各実施教員が、その都度、適切な文献を紹介する。

【成績評価の方法と基準】

各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して、その理解度などを中心に評価を行なう。目安として参加に伴う平常点 60%、レポート 40%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

GEO600B5

地理学現地研究Ⅱ

専任教員が担当

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教室内での講義内容を踏まえた上で、実際に現地へ赴き、多くの地理的事象を実際に観察・観測し、適正に理解することを目標にする。

【到達目標】

「地理学現地研究Ⅰ」を参照のこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

地理学専攻修士課程においては必修科目であり、修了までに地理学現地研究Ⅰ（Ⅰ単位＝2泊3日以上）、および地理学現地研究Ⅱ（Ⅰ単位＝2泊3日以上）の合計2単位の取得が必要です。年度の初めに必ず履修登録をしてください。個々の現地研究の実施などに関しては実施の都度、実施担当教員を通じて伝達する予定です。なお、現地研究を担当する教員によっては、そのテーマの内容から海外で実施する場合もありうることを予め断わっておきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

通年

回	テーマ	内容
1	現地研究に関する概要説明	当該年度に実施予定の現地研究を公表する
2以降	集中的に実施する	現地で調査研究手法を学び、修士論文作成につなげる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「地理学現地研究Ⅰ」を参照のこと。

【テキスト（教科書）】

「地理学現地研究Ⅰ」を参照のこと。

【参考書】

「地理学現地研究Ⅰ」を参照のこと。

【成績評価の方法と基準】

各教員が個々に実施した現地研究への参加学生に対して評価をおこなう。目安として参加に伴う平常点 60%、レポート 40%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

HUG700B5

地理学特別演習 I

前奈 英明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】

博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成させることを目標とする。またその過程において、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	研究テーマの設定1	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換1
第3回	研究テーマの設定2	受講生の研究テーマの開陳と研究内容への意見交換2
第4回	研究内容の紹介1	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション1
第5回	研究内容の紹介2	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション2
第6回	研究内容の紹介3	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション3
第7回	研究内容の紹介4	研究テーマに関連する既存研究論文のプレゼンテーション4
第8回	受講生の研究内容1	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論1
第9回	受講生の研究内容2	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論2
第10回	受講生の研究内容3	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論3
第11回	受講生の研究内容4	受講生の修士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論4
第12回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導1	受講生の修士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導1
第13回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導2	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導2
第14回	博士論文の課題と方向性についての議論と指導3	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導3

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献になることには違いない。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容（50%）や議論への積極的な参加など（50%）を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

自然地理学、(変動) 地形学、第四紀学

<研究テーマ>

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代水床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

<主要研究業績>

前奈英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究. 地理科学, vol.60-3, pp.136-142.

Maemoku, H. et.al. (1997) : *Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.*

Maemoku, H. et.al. (2012) *Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.*

【Outline and objectives】

Research instruction for doctor thesis on Geomorphology and Quaternary Science

HUG700B5

地理学特別演習 II

前奈 英明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

地形学や第四紀学に関わる博士論文作成のための研究指導

【到達目標】

博士論文の研究テーマに沿って、既存の研究論文を熟読し、さらなる科学としての課題を抽出する。その上で、受講生が調査・分析した研究成果を発表し、議論を重ねることによって、博士論文を熟成・完成させることを目標とする。またその過程において、まとまった研究課題ごとに、学術雑誌等に投稿する準備をすることも本授業の目標の一つとする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連

【授業の進め方と方法】

研究課題に関連する既存の研究論文の読み込みと、そこから抽出した新たな課題について発表する。また自分の研究テーマに関する調査・分析結果について発表し、参加者全体で議論を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス授業	本演習の趣旨の説明
第2回	受講生の研究内容1	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論1
第3回	受講生の研究内容2	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論2
第4回	受講生の研究内容3	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論3
第5回	受講生の研究内容4	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論4
第6回	受講生の研究内容5	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論5
第7回	受講生の研究内容6	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論6
第8回	受講生の研究内容7	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論7
第9回	受講生の研究内容8	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論8
第10回	受講生の研究内容9	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論9
第11回	受講生の研究内容10	受講生の博士論文にかかわる調査・研究の進捗状況を報告、議論10
第12回	受講生の研究内容11	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導11
第13回	受講生の研究内容12	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導12
第14回	受講生の研究内容13	受講生の博士論文の進捗状況をふまえた、今後の課題や方向性についての議論と指導13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

つねに図書館などで関連する内外の文献に目を通しておくこと。

【テキスト（教科書）】

特に指定しない。自然地理学に関連ある内外の文献になることには違いない。

【参考書】

「日本の地形1-7」東京大学出版会

「建設技術者のための地形読図入門1-4」古今書院

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーションの内容（50%）や議論への積極的な参加など（50%）を評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

PowerPoint

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

自然地理学、(変動)地形学、第四紀学

＜研究テーマ＞

プレート沈み込み帯における地震性地殻変動に関する地形・地質学的研究、新生代水床変動に関する地形・地質学的研究、環境変化と人間社会に関する自然地理学的研究

＜主要研究業績＞

前奈英明ほか（2005）：沈み込み帯沿岸の地殻変動を記録する古潮位計としての完新世暖温帯石灰岩に関する予察的研究。地理科学。vol.60-3。pp.136-142.

Maemoku, H. et al. (1997) : *Stratigraphy of the Late Quaternary raised beach deposits in the northern part of Langhovde, Lutzow-Holm Bay, East Antarctica. The Proceedings of NIPR Symposium Antarctic Geoscience, 10, 178-186.*

Maemoku, H. et al. (2012) *Geomorphological constraints on the Ghaggar River regime during the Mature Harappan period, in Climates, Landscapes, and Civilizations, Geophys. Monogr. Ser., vol. 198, edited by L. Giosan et al., 97 - 106, AGU, Washington, D. C.*

【Outline and objectives】

Research instruction for doctor thesis on Geomorphology and Quaternary Science

PSY600B6

心理学研究法演習 I

吉村 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知心理学領域での研究の立案を進める方法を習得します。

【到達目標】

受講者が関心を持つ認知心理学領域での研究テーマについて、オリジナリティある研究立案が行えるようになることを目標にします。知覚研究に限らず、広く認知研究がテーマであれば、受講可能です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行い、受講者が関心を持つテーマに基づいて、心理学実験を立案する工程を、この授業を通して支援していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの確立	受講者が取り組もうとする研究領域の確定。
第2回	日本語文献の検索	研究遂行に必要な日本語文献の検索と収集を行う。
第3回	日本語文献講読 (1)	選出した日本語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第4回	日本語文献講読 (2)	選出した日本語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第5回	日本語文献講読 (3)	選出した日本語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第6回	英語文献の検索	研究遂行に必要な英語文献の検索と収集を行う。
第7回	英語文献講読 (1)	研究遂行に必要な英語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第8回	英語文献講読 (2)	研究遂行に必要な英語文献を受講者の主導のもとに講読する。
第9回	研究計画の立案	講読した文献に基づき、自らの研究計画を立案する。
第10回	仮説の検討	計画した研究で検討する仮説を実証的に検証できるものとして構築する。
第11回	オリジナリティの検討	計画する実証的研究の中に、どのようなオリジナリティがあるか、またそのオリジナリティにどのような価値があるかを検討する。
第12回	計画した研究に対する文献の精査	実施しようとする研究に対し、これまでの研究文脈ではどのように扱われているかを把握し、これから行おうとしている研究を当該研究領域の中に位置づける。
第13回	分析方法の検討	計画している研究で得られるであろうデータをどのような統計的手法で分析するかをシミュレーションする。
第14回	倫理審査に向けての研究計画の整備	計画している研究を実施するにあたり、研究倫理の面から問題がないかを検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テーマ選定に始まり、文献渉猟・講読、実験プログラムや刺激の作成など、研究実施に向けての全工程に対し、授業中に出された指示に基づき、授業外に受講者自らが学習します。特に、2回目から8回目までの文献の読み込み自体は授業時間外に各自が行い、授業時間中は読み込みが難しい箇所集中して講読することになります。9回目の実験立案以降においても、原則的にそれらの作業は授業外に各自が行い、授業時には受講者が提案する案に対してクリティカルに検討していきます。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いません。

【参考書】

選択したテーマの研究実施に必要な資料は、授業時に適宜指摘します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%、授業での検討結果を受けての成果 50% で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

一面的な捉え方でなく、受講している他の学生も含め計画している研究を多面的に検討し、さまざまな可能性を探る機会を提供する授業になるよう心がけていきます。

【その他の重要事項】

重複履修が可能です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 知覚・認知心理学

<研究テーマ>

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

<主要研究業績>

・吉村浩一 2006 運動現象のタキソノミー：心理学は“動き”をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049-1056.

・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students perform an experimental study in the field of cognitive psychology.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

吉村 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知心理学領域での研究の遂行方法を学びます。

【到達目標】

受講者が立案した研究を実施し分析し考察する能力を身につけることを目標にします。知覚研究に限らず、広く認知研究がテーマであれば、受講可能です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行い、受講者が計画した実証的研究を実施する工程を、この授業を通して支援します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	予備実験のデータの収集	本実験に先立ち、少人数に対して予備的に実験を実施し、データの現れ方を検討する。
第2回	問題点の洗い出しと修正	予備実験の結果、予想外なことや未検討などがあるかどうかを確認する。
第3回	本実験計画の完成	予備実験での検討課題を修正し、実験計画を完成させる。
第4回	文献講読（1）	データ収集と並行して、考察に必要な関連文献の検討を行う。
第5回	文献講読（2）	データ収集と並行して、考察に必要な関連文献の検討を行う。
第6回	文献講読（3）	データ収集と並行して、考察に必要な関連文献の検討を行う。
第7回	データ分析（1）	統計的検定を中心に、収集したデータの分析を行う。
第8回	データ分析（2）	統計的検定を中心に、収集したデータの処理を行う。
第9回	実験結果の考察（1）	立てた仮説に照らし、得られたデータがどのように位置づけられるかを検討する。
第10回	実験結果の考察（2）	データ解釈の可能性を多面的に検討する。
第11回	論文作成（1）	行った事実の記述、すなわち「方法」と「結果」を記述する。
第12回	論文作成（2）	「問題」と「考察」を対応させながら論理的に記述する。
第13回	論文作成（3）	「問題」から始まり、「引用文献」に至る各節を完成させる。
第14回	論文の推敲	授業担当者の添削に基づき、受講者本人が論文推敲を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

問題点の洗い出しに始まり、文献渉猟・講読、実験プログラムや刺激の作成など、研究の全工程に対し、授業中に出された指示に基づき、授業外に受講者自らが作業を進めます。特に、4回目から6回目までの文献の読み込み自体は授業時間外に各自が行い、授業時間には読み込みが難しい箇所集中して講読していきます。7回目のデータ分析以降についても、原則的に作業は授業外に各自が行い、授業時には受講者による報告に対する検討を行います。

【テキスト（教科書）】

テキストは用いません。

【参考書】

選択したテーマの研究実施に必要な資料は、授業時に適宜指摘します。

【成績評価の方法と基準】

平常点50%、授業での検討結果を受けての成果50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

一面的な捉え方でなく、受講している他の学生も含めた多面的検討により、さまざまな可能性を探る機会となる授業を心がけていきます。

【その他の重要事項】

重複履修が可能です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 知覚・認知心理学
<研究テーマ>

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

<主要研究業績>

・吉村浩一 2006 運動現象のタキソノミー：心理学は“動き”をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. *Perception*, 36, 1049-1056.

・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students perform an experimental study in the field of cognitive psychology.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

高橋 敏治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、修士論文作成に必要な知識やスキルをゼミ形式で議論します。

【到達目標】

1. 論文作成のための実験計画法を自分で作成できるようにします。
2. 生理心理学の実験を計画・遂行・分析が自分でできるようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

生理心理学の実験論文を抄読し、その論文のレジメを発表していきます。付随する生理心理学の実験手法（脳波、P300、脳波の周波数解析、心電図からの自律神経活動、パフォーマンスなど）について、検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	テーマや内容について希望を聞きます。
第2回	演習での進め方例示	発表の方法やレジメの書き方や議論の方法を検討し、順番を決めます。
第3回	抄読会 1	参考論文の発表、生理指標と心理的指標の設定の仕方
第4回	抄読会 2	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（脳波）
第5回	抄読会 3	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（脳波の周波数分析）
第6回	実験計画法とスキルの習得 1	実験機器ボリメイトやテレメーターの使用の仕方
第7回	抄読会 4	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（眼電図・心電図）
第8回	抄読会 5	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（心電図周波数解析）
第9回	抄読会 6	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（自律神経解析）
第10回	実験計画法とスキルの習得 2	心電図の周波数解析ソフトの操作や解析の仕方
第11回	抄読会 7	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（P300の原理）
第12回	抄読会 8	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（P300の応用）
第13回	抄読会 9	参考論文のレジメ発表、生理心理学指標（P300の分析の仕方）
第14回	総括まとめ	課題レポートの検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 回目：自己紹介と自分の希望をレポートで提出
- 2 回目：生理心理学の雑誌から論文を選択
- 3 回目～5 回目：脳波発表レジメの作成
- 6 回目：脳波発表レジメ修正版の作成（方法・分析・結果部分）
- 7 回目～9 回目：心電図発表レジメの作成
- 10 回目：心電図発表レジメ修正版の作成（方法・分析・結果部分）
- 11 回目～13 回目：P300 発表レジメの作成
- 14 回目：課題レポートの作成

【テキスト（教科書）】

特に用いません。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る—. 培風館.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）50%、発表25%、レポート課題25%

【学生の意見等からの気づき】

2人の受講者のうち2名から回答を頂きました。大学院のゼミなので詳細は省きますが、週3時間以上の課外授業学習が100%と自主的に自分の修論作成に取り組んでくれたようです。ぜひこのまま秋学期も続けましょう。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>睡眠、精神保健学

<研究テーマ>眠気とパフォーマンス

<主要研究業績>

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

高橋敏治（2014）. 概日リズム睡眠障害—3）時差型の病態—. 睡眠医療 8, 197-201.

高橋敏治（2012）精神疾患による不眠. 千葉茂編, 意識と睡眠. 脳とこころのプライマリケア 5. (株)シナジー, 東京, 571-579.

【Outline and objectives】

In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

高橋 敏治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、修士論文作成に必要な知識やスキルをゼミ形式で議論します。

【到達目標】

1. 論文作成のための実験計画法を自分で作成できるようにします。
2. 生理心理学の実験を計画・遂行・分析ができるようにします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

生理心理学の実験論文から、その論文のレジュメを発表してもらいます。付随する生理心理学の実験手法（脳波、P300、脳波の周波数解析、心電図からの自律神経活動、パフォーマンスなど）について、検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	テーマや内容について希望を聞きます。
第2回	演習での進め方例示	発表の方法や議論の方法を検討します、発表の振り返りレポートの必要性や順番を決めます。
第3回	実験計画の発表 1	自分の春学期レポートの発表 1
第4回	実験計画の発表 2	自分の春学期レポートの発表 2
第5回	実験計画の発表 3	自分の春学期レポートの発表 3
第6回	実験計画法のとまとめ	問題点や修正点の議論
第7回	生理指標のデータ取得（脳波）1	脳波記録のデータ取得と周波数解析の実際
第8回	生理指標のデータ取得（脳波）2	脳波結果の表示・論文の作成
第9回	生理指標のデータ取得（心電図・血圧）1	心電図データから自律神経データの解析の実際
第10回	生理指標のデータ取得（心電図・血圧）2	自律神経データの結果の表示・論文の作成
第11回	生理指標のデータ取得（P300の分析の仕方）1	P300の分析の仕方
第12回	生理指標のデータ取得（P300の分析の仕方）2	P300の結果の表示・論文の作成
第13回	論文作成の注意点	論文での生理指標の方法・分析の注意点
第14回	総括まとめ	課題レポート作成と検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 回目：自己紹介と自分の希望をレポートで提出
- 2 回目～5 回目：レポート発表の作成
- 6 回目：発表後の修正版の作成
- 7 回目～8 回目：脳波データの課題レポート
- 9 回目～10 回目：心電図データの課題レポート
- 11 回目～12 回目：P300 データの課題レポート
- 13 回目～14 回目：課題レポートの作成

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。

【参考書】

堀忠雄（2008）. 生理心理学—人間の行動を生理指標で測る. 培風館.

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）50%、発表25%、レポート課題25%

【学生の意見等からの気づき】

授業は、履修してよかった（100%）で、週4時間以上の授業外学習を実施していました。授業を履修して感じたことについては、専門的知識やスキル、応用力、判断力、論文作成のヒントなどのよかった項目が挙げられていました。授業の進め方については、授業目標の明示、授業構成、成績基準、院生の交流、モチベーションの高める工夫などで高い評価を頂きました（前年度分を掲載）。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。内容については、受講生の希望や興味のある領域に合わせて、変更していく場合がありますので最初の授業には必ず出席して下さい。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>睡眠、精神保健学

<研究テーマ>眠気とパフォーマンス

<主要研究業績>

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

高橋敏治（2014）. 概日リズム睡眠障害—3）時差型の病態—. 睡眠医療 8, 197-201.

高橋敏治（2012）精神疾患による不眠. 千葉茂編, 意識と睡眠. 脳とこころのプライマリケア 5. (株)シナジー, 東京, pp571-579.

【Outline and objectives】

In this class, we will discuss the knowledge and skills necessary for master thesis preparation in seminar form.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

渡辺 弥生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学研究に関連した課題をもとに、実践につながる演習を行う。乳児期から高齢期までを含めて生涯発達の視点に立って、これまでの研究の流れを理解するとともに、まだ明らかにされていないリサーチクエスチョンを各自追求していく。先行研究で明らかにされていることから応用できることや、フィールドで求められている専門性など双方向からの研究態度を身につけ、社会に貢献できることをめざす。

【到達目標】

- (1) 発達心理学研究におけるテーマと研究の特徴及び背景について理解する。
- (2) 発達心理学研究の研究論文を批判的に読む力を養う。
- (3) 先行研究を批判し改善策を練った具体的な研究計画を行い実行できる力を育む。
- (4) 研究計画、研究内容、その成果を発表する技術を習得する。
- (5) 社会に貢献できる展望をもつ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	展望論文をもとに読む（和文）（1）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
4	展望論文をもとに読む（和文）（2）	読解の力を養う。発達研究を展望する。
5	論文をもとに発表と討議	先行研究の流れを理解し、さらにどのような研究が積み重ねられるべきかを考える。
6	共通論文をもとに発表と討議 問題意識に焦点を当てる	レビュー論文の書き方や、留意点について学ぶ。
7	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（1）	各院生が興味のある領域について、文献のリストをつくり、研究の流れをまとめる。
8	自分の興味のある領域の文献リストをつくる（2）	文献リストをつくるとともに、年別、あるいは内容別の観点から、研究の流れをつかみ、批判する。
9	論文をもとに発表と討議 理解（1）	各院生が自分の研究につながる論文を選び、研究の内容を理解する。
10	論文をもとに発表と討議 理解（2）	選んできた論文の優れたところと批判点を明らかにし、レジュメをつくり、発表する。
11	研究計画を立てる（1）	選んできた論文の批判点をもとに、改善点を考え、新しい研究を考える。
12	研究計画を立てる（2）	考えた研究が実行可能であるか目的や方法論の観点から再考する。
13	研究計画を立てる（3）	結果が得られた場合の、分析方法について予測する。
14	研究計画を立てる（4）	結果が得られた場合の分析方法を予測し、その方法論を習得しているか確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の収集やリストアップ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、プレゼンを実施するための準備をする。後半は、特に、発達心理学領域における方法論についての理解が深まるように、研究目的を検討するためにどのようなスキルが必要かについて考える。和文および英文の最先端の研究にチャレンジする。最終的に、各自研究計画を立てるスキルを獲得する。

【テキスト（教科書）】

こちらで準備する。授業時に紹介。
査読付き雑誌のレビュー論文を用いる。

【参考書】

発達心理学領域についておおざっぱに理解しておくため、渡辺弥生編著『発達心理学』（北大路書房）『子どもの「10歳の壁」とは何か？』（光文社）といった基礎的な発達心理学や教育心理学、発達臨床心理学系の本を読んでおくことを求める。

【成績評価の方法と基準】

毎回課されている課題をこなすことを前提として、ミニレポートの完成（80%）及びプレゼンテーション（20%）

【学生の意見等からの気づき】

活発な演習ができていたが、そこで得た課題や気づきをもとに、実行していくことがさらに求められる。具体的に各自の作業が進行しているかを Dropbox やペーパーの形で確認し、実行力の強化につとめる。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントと DVD を用いることもある。授業支援システムが用いることもあるので、随時チェックすることを習慣づけてほしい。パソコンを用いることが多くなる。

【その他の重要事項】

文献検索などは自身で活発に行うことが前提。課題提出の時間厳守。

【担当教員の専門分野等】

ホームページ参照 <https://sites.google.com/site/emywata/Home>
 <専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
 <研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開
 <主要研究業績>

- (1) 世界の学校予防教育 2013 金子書房
- (2) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社
- (3) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店
- (4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

【Outline and objectives】

Based on issues related to developmental psychological research, we will conduct a practicum connected with actual practice. From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, we will attempt to understand the flow of research to date and pursue research questions that have not been previously clarified. We will aim to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.

心理学研究法演習Ⅱ

渡辺 弥生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学研究に関連した課題をもとに、実践につながる演習を行う。乳児期から高齢期までを含めて生涯発達の視点に立って、これまでの研究の流れを理解するとともに、まだ明らかにされていないリサーチクエストを各自追求していく。さらに、この問題提起をもとに研究を実行し、さらに論文を投稿できるように書くことに焦点を当てる。

【到達目標】

- (1) 発達心理学研究におけるテーマと研究の特徴及び背景について理解する。
- (2) 先行研究を批判し改善策を練った具体的な研究計画を実行できる力を育む。
- (3) 投稿論文を書く力を養う。
- (4) 論文の投稿を実行する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

発達心理学領域における理論や特徴を体系的に理解したうえで、具体的な研究論文を読み、理解し、自身で研究を計画できるスキルを獲得する。具体的な方法としては、そのトピックの流れを支えてきた主要な研究をリストアップする。その際、批判に値する点を考え、改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考える。そのうえで、発達研究の方法論を駆使して具体的に実行する計画を立てる。可能であれば並行して実践する。さらに、それを投稿できるように論文を書くことにチャレンジする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	研究の体系（マクロ）と各研究論文（ミクロ）をメタ的に考え、実行する研究の意義を考える	適当なトピックをもとに、各研究者の論文と各トピックの研究の体系との関係について考える。
3	問題と目的を書く(1) 構造を考える a	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
4	問題と目的を書く(2) 構造を考える b	パラグラフの構造を考え、プランニングする。
5	問題と目的を書く(1) 肉付けをする a	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
6	問題と目的を書く(2) 肉付けをする b	引用文献の必要性を意識し、フルに書いていく。
7	グループワーク(1) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう a	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。
8	グループワーク(2) 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう b	グループワーク 全体で各自の問題の流れを互いに評価しあう。
9	適切な方法論を考え、書く(1)	具体的な方法についての書き方を修得し、実際に書く。
10	適切な方法論を考え、書く(2)	具体的な方法についての書き方を修得し、実際に書く。
11	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ(1)	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
12	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ(2)	モデル論文の結果と考察を材料に、書き方を学ぶ。
13	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ(1)	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。
14	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ(2)	投稿論文の形式やエントリー方法を学ぶ。投稿論文の形式を各自調べ、発表する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

演習であることから、目的をよく理解し、文献研究の収集やリストアップ。論文を読み、理解し、まとめることの積み重ねを求める。各研究の問題と目的、方法、分析結果、考察を自身で追試できるレベルでの理解が求められる。そのうえで、批判できるところ、それを改善するにはどのような研究を積み重ねる必要があるかについて考え、準備をする。後半は和文および英文の最先端の研究をモデルに、「書く」イメージをもち、実際にチャレンジする。

【テキスト（教科書）】

こちらで準備する。授業時に紹介。

【参考書】

日本発達心理学会 編岩立志津夫・西野泰広 責任編集『発達科学ハンドブック 2 研究法と尺度』など。発達科学ハンドブック、児童心理学の進歩などレビュー雑誌を読んでおく。英語によるメールの書き方などの本を読んでおく。

【成績評価の方法と基準】

平常点 100%（単に出席という意味ではなく、毎回自分の意見を述べることを基準とする）

【学生の意見等からの気づき】

時間を引き延ばすエクスキューズがないように、立てた計画をつねに実行していくようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パソコンを使用することが多い。授業支援システムに入る。

【その他の重要事項】

文献検索などは自身で活発に行うことが前提。学会に参加したり、研究者にメールを出したり、実際の研究活動を体験していく。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home>

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学

<研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開

<主要研究業績>

- (1) 世界の学校予防教育 2013 金子書房
- (2) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社
- (3) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店
- (4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

【Outline and objectives】

We will conduct a practicum connected with actual practice, based on issues related to developmental psychological research. From the viewpoint of lifelong development, including from infancy to elderly, we will attempt to understand the flow of research to date and pursue research questions that have not been previously clarified. We will aim to contribute to society by acquiring bidirectional research attitudes from both what can be applied from what has been clarified in the previous research and expertise required in the field.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

福田 由紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語心理学に関連するテーマを選択し、その先行研究群を批判的に概観して、展望論文を作成する。

【到達目標】

- ①自分の興味にあった言語心理学に関するテーマを選択できる。
- ②当該のテーマに関連する先行研究群を柔軟に検索できる。
- ③当該の先行研究群を批判的に読み、問題点や改善点を指摘できる。
- ④③を受けて、新しい提案ができる。
- ⑤当該のテーマに関連した展望論文を作成する。
- ⑥論文を的確に評価することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業の最初に展望論文の作成の仕方について、討議を行う。それを受けて、前半の授業では、自分の興味に合ったテーマに関連する先行論文群を精読し、発表する。そして、論文を作成し、ピアレビューを通して完成度の高い展望論文を完成させる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第 2 回	展望論文の概説	展望論文の特性について理解を深める。
第 3 回	種論文の発表 1	自分のテーマにあった、核となる論文を各自発表する。
第 4 回	種論文の発表 2	自分のテーマにあった、核となる論文を各自発表する。
第 5 回	種論文から派生した論文の発表 1	種論文から派生した論文の発表をする。
第 6 回	種論文から派生した論文の発表 2	種論文から派生した論文の発表をする。
第 7 回	種論文から派生した論文の発表 3	種論文から派生した論文の発表をする。
第 8 回	先行研究群の問題点・改善点の発表 1	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第 9 回	先行研究群の問題点・改善点の発表 2	先行研究群の問題点・改善点の発表をする。
第 10 回	展望論文の骨子に関する発表 1	展望論文の骨子に関する発表する。
第 11 回	展望論文の骨子に関する発表 2	展望論文の骨子に関する発表する。
第 12 回	展望論文の発表 1	作成された展望論文をピアレビューする。
第 13 回	展望論文の発表 2	作成された展望論文をピアレビューする。
第 14 回	修正展望論文の講評	修正された展望論文を講評し、全体で討議する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第 1 回 モデルとなる展望論文を精読し、その特性に関してレジユメを作成する。
- 第 2・3 回 自分にあつたテーマの種論文を精読し、発表の準備を行う。
- 第 4~6 回 種論文から検索できる先行研究群を精読し、発表の準備を行う。
- 第 7・8 回 先行研究群の問題点・改善点についてレジユメにまとめ、発表の準備を行う。
- 第 9・10 回 展望論文作成のための骨子をレジユメにまとめ、発表の準備を行う。
- 第 11・12 回 展望論文を作成する。
- 第 13 回 第 11・12 回におけるピアレビューを受け、展望論文を修正する。

【テキスト（教科書）】

特になし。適宜、紹介する。

【参考書】

福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門 培風館

【成績評価の方法と基準】

発表 20%、発表への質問・コメント 20%、討論への積極的な参加 20%、展望論文の提出 40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

自分で考え、工夫して発表する形式の授業のせいか、好評です。ぜひ、考えて考え抜いて、自分の研究活動をやっていきましょう。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割
<主要研究業績>

- ①福田由紀・種原遥・菊池理紗 (2018). 言語心理学で何を学べるか？—言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.
- ②福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？読書科学, 59,161-171.
- ③福田由紀・土清水咲菜・荒井弘和 (2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？法政大学文学部紀要, 73,99-108.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn how to write a review paper. Students will be expected to select theme they are interested in and critically reads previous papers, writes a review paper.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

福田 由紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語心理学に関連するテーマを選択し、実験・調査の計画・実施・発表・論文の作成を通して、心理学の研究のプロセスを実践的に学ぶ。

【到達目標】

- ①自分の興味にあった言語心理学に関するテーマを選択できる。
- ②当該のテーマに関して、適切な実験・調査計画を立てることができる。
- ③自分の計画を実際に行うことができる。
- ④実験・調査結果を適切に分析・考察できる。
- ⑤分析・考察したことを的確に他者に伝達できる。
- ⑥論文を作成できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

自分の興味にあったテーマに関して研究計画を立て、授業で発表をする。ピアレビューを通して、仮説の設定、変数の決定、統制の仕方、材料の収集、分析手法を洗練していく。その研究計画にそった実験・調査を実施する。その結果を発表し、完成度の高い実証的な論文を完成させる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	研究テーマの設定	研究テーマを発表する。
第3回	実験・調査立案における注意1	仮説、変数、統制の仕方、材料の収集の仕方を発表し、全員で討議する。
第4回	実験・調査立案における注意2	具体的な分析方法を発表し、全員で討議する。
第5回	研究計画申請書の発表	法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会宛の書式にそった研究計画申請書を発表し、全員で討議する。
第6回	実験・調査の実施1	実験・調査を遂行し、その進捗状況を発表し、全員で討議する。
第7回	実験・調査の実施2	実験・調査を遂行し、その進捗状況を発表し、全員で討議する。
第8回	データの分析	分析結果を発表し、全員で討議する。
第9回	考察	結果と先行研究の知見を利用して論理的に考えられる考察を発表し、全員で討議する。
第10回	要旨の作成	学会発表で求められる要旨を作成し、ピアレビューをする。
第11回	論文の作成	学術論文の書き方について確認する。
第12回	成果発表1	与えられた時間内に効果的に発表し、全員で討議する。
第13回	成果発表2	与えられた時間内に効果的に発表し、全員で討議する。
第14回	論文の提出と総括	実証的な方法を使って学術論文を作成し、提出し、そのプロセスに関して振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 自らの研究テーマの発表の準備を行う。
- 第2・3回 自分の目的にあった実験・調査計画を立て、発表の準備を行う。
- 第4回 研究計画申請書を作成し、発表の準備を行う。
- 第5～6回 実験・調査を実施する。
- 第7回 データを分析し、発表の準備を行う。
- 第8回 分析結果をもとに考察を行い、発表の準備を行う。
- 第9回 要旨を作成し、発表の準備を行う。
- 第10回 論文を作成する。
- 第11・12回 成果発表の準備を行う。
- 第13回 提出する論文の作成・見直しをする。

【テキスト（教科書）】

特になし。適宜、紹介する。

【参考書】

福田由紀（編）(2012). 言語心理学入門 培風館

【成績評価の方法と基準】

発表 20%、発表への質問・コメント 20%、討論への積極的な参加 20%、論文の提出 40%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

週3時間以上の予習・復習。がんばりました！また、自由記述を読むと、他の受講生の発表等へのコメントの際のポイントをつかんだようです。よかったです。他の人へのコメントは、その人にとってどれだけ有用なコメントをするかが、重要でしたね。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割

<主要研究業績>

①福田由紀・菰原遥・菊池理紗 (2018). 言語心理学で何を学べるか？—言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

②福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？読書科学, 59,161-171.

③福田由紀・土清水咲葉・荒井弘和 (2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？法政大学文学部紀要, 73,99-108.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the process of psychological study practically. Students will be expected to plan their research and do their experiment, make a presentation, write a paper.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

島宗 理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、就職する人も博士課程に進学する人も、それぞれ仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：標的行動を具体化し、測定方法を定めること、標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、実験計画書を作成し、発表すること、実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、本実験を実施し、データを分析し、まとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。

これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究方法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。**M1** 次には修論の準備として予備的な研究に取組みます。**M2** 次には修論の本実験を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	全員： 授業内容与方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第 2 回	実験計画の発表 I	全員： 独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などを学びます。 M1 次生： 自分の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進めます。 M2 次生： 各自、実験計画を発表し、討論します。 GO サインがでたら予備実験に移れるように、実験計画は「概要」ではなく、刺激や記録用紙なども用意してプレゼンして下さい。
第 3 回	実験計画の発表 2	同上
第 4 回	実験計画の発表 3	同上
第 5 回	予備実験の報告 I	全員： データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などを学びます。 M1 次生も M2 次生も、予備実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。
第 6 回	予備実験の報告 2	同上
第 7 回	予備実験の報告 3	同上
第 8 回	先行研究をまとめる I	全員： 先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけます。研究のストーリーをまとめてあげる方法について解説します。
第 9 回	先行研究をまとめる 2	同上
第 10 回	先行研究をまとめる 3	同上

第 11 回 本実験の報告 I

全員：

データの分析、視覚化、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（継続実験の計画）などをさらに学びます。

M1 次生も **M2** 次生も、本実験の結果を分析し、発表して、討論します。データの分析から「わかったこと」「わからなかったこと」をまとめて、伝えて、話し合う練習をします。

第 12 回 本実験の報告 2

同上

第 13 回 本実験の報告 3

同上

第 14 回 まとめ

全員：

全課題を振り返り、討論します。

各自、自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。修論のストーリーを端的に伝える練習をします。

M1 次生は予備実験、**M2** 次生は本実験のレポートを提出します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。

○興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案するための資料を作成する。

○実験計画について予測する結果を作図する。

○5つ以上の先行研究を表にまとめる。

【テキスト（教科書）】

島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

【参考書】

研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介し、（以下はシングルケースデザイン法に関する参考書の例）。

○ *Alberto, P., & Troutman, A. C. (1999). Applied behavior analysis for teachers. Prentice Hall.* (アルバート, P. A. ・トルートマン, A. C. 佐久間 徹・谷 晋二・大野裕史 (監訳) はじめての応用行動分析 日本語版 第 2 版 (2004) 二瓶社)

○ *Barlow, D. H., & Hersen, M. (1984). Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change. Pergamon.* (バーロー, D. H. ・ハーセン, M. 高木俊一郎・佐久間 徹 (監訳) 一事例の実験デザイン ― ケーススタディの基本と応用 ― 二瓶社)

○ *Cooper, J. C., Heron, T. E., & Heward, W. L. (2007). Applied Behavior Analysis. Pearson Education.* (クーパー, J. C., ヘロン, T. E., & ヒューワード, W. L. 中野良顕 (訳) (2013) 応用行動分析学 明石書店)

○ 岩本隆茂・川俣甲子夫 (1990). シングル・ケース研究法 ― 新しい実験計画法とその応用 ― 勁草書房。

【成績評価の方法と基準】

・授業への参加 (40%)、課題遂行 (40%)、レポート提出 (20%) から成績を評価します。

・出席が全授業日数の 2/3 未満だと自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2018 年度の授業改善アンケートより)

2 人中 2 人が回答してくれました (100%)。そのうち 2 人が「この授業を履修してよかった」と回答してくれました (100%)。

大学院は研究法に関する知識や技能が受講生によってばらばらで、これが授業運営を難しくさせていると実感します。

【その他の重要事項】

この科目は **M1** 次生と **M2** 次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますので、**M1** 次と **M2** 次には同じ教員の授業を受講してください。

☆研究テーマは受講生の興味を最優先して決めます。行動分析学は研究対象を限定しません。基本的に何でも研究できると考えて下さい。ただし、大学院生活のほとんどをかけて取り組む研究ですから、自分の得意なこと、興味があること、これだけは人に負けないぞと自信があること、そういう自信をつけたいことなどを選んで下さい。こんなことでも実験できるのだろうか？ と思いきまらず、ぜひ一度相談して下さい。修論ですから、大がかりな実験はできませんが、世界に二つとない実験を共につくりましょう。

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 島宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学

新曜社

② 島宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 島宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

島宗 理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、**M1** 次生は予備実験の報告書と修士論文の実験計画書、**M2** 次生は修士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です：自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、実験から得られたデータを分析し、わかったこと、わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを提案すること。わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。詳細な規定にきめ細かく対応した校正を行うこと。締切から逆算して計画をたて、遂行すること。自分では解決できない問題について仲間や指導教員から助言をもらうこと、助言すること。

これらはすべて研究にとって必要な技能や知識ですが、修了後に就職してからも皆さんの職場で必ず役に立つものです。修論のためだけの研究方法ではなく、この機会に、一生使える心理学の専門性を習得してください。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「**DP1**」「**DP2**」「**DP3**」「**DP4**」「**DP5**」「**DP6**」に関連

【授業の進め方と方法】

毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。**M1** 次には心理学研究法演習Ⅰで行った予備実験と次年度に行う修論実験を題材に課題に取り組みます。**M2** 次には各自の修論研究を題材に課題を進めます。ゼミの時間の大半を発表や討論の練習に使いますので積極的に参加して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	全員： 授業内容と方法、約束事を説明します。 M1 次生は予備実験、 M2 次生は修論実験の内容を1分間でプレゼンする練習をします。
第2回	論文を書く： アウトラインを書く	全員： アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。日本心理学会「執筆・投稿の手引き」の参照方法も解説します。 M1 次生は予備実験のレポートを執筆します。 M2 次生は修論実験を論文にしていきます。
第3回	論文を書く： データの視覚的な提示	全員： 実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。 M1 次生は予備実験のレポートを執筆します。 M2 次生は修論実験を論文にしていきます。
第4回	論文を書く： 推敲する(1)	全員： 方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。方法の章で最も重要なのは読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうかです。読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。 M1 次生は予備実験のレポートを執筆します。 M2 次生は修論実験を論文にしていきます。
第5回	論文を書く： 事実を書く	全員： アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。

第6回	論文を書く： 先行研究をまとめる	全員： 先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。
第7回	論文を書く： 研究を位置づけるアウトラインを書く	全員： 第6回でまとめた先行研究の展望を活かし、また前期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法（段落をトピック文とサポート文で構成する手法）を解説し、練習します。
第8回	論文を書く： 推敲する(2)	全員： 第5回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。
第9回	論文を書く： 推敲する(3)	全員： パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。日本語の作文技術について確認し、推敲の練習をします。さらに、チェックリストを使って、「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。
第10回	論文を書く： 執筆ルールに基づいて校正する	全員： 引用文献一覧を作成します。「執筆・投稿の手引き」にそうように推敲します。また、本文と見合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。
第11回	論文を書く： 推敲する(4)	全員： 小実験レポート、修論のゼミ内提出の前の最終確認とチェックリストを使った推敲の練習をします。また、自分で書いた文章を自分で推敲するのは困難であることを自覚するために、他の受講生の修論を校正する練習もします。校正に使う一般的な記号を習得しましょう。
第12回	研究計画(1)	M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。 M2 次生： 修論を推敲し、提出します。
第13回	研究計画(2)	M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。 M2 次生： 修論の要旨を作成して提出します。要旨は修論のストーリーをわかりやすく伝える文章です。セールスポイントの抽出と伝達、文字数が限られている場合の推敲方法について解説し、練習します。
第14回	まとめと研究計画(3)	全員： 授業全体を振り返り、討論します。 M1 次生： 次年度に行う修論の実験計画を発表し、討論します。 M2 次生： 修論発表会に備え、修論研究の発表練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい。以下、いくつかの課題を例示します。

- 春学期に実施した実験の発表資料を作成し、練習をする。
- 自分の研究の社会的意義を示す資料を収集し、発表資料としてまとめる。
- 日本心理学会の「執筆・投稿の手引き」およびゼミの論文推敲チェックリストを用いて、「結果」の章を推敲し、提出する。

【テキスト（教科書）】

テキストはありませんが、研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付し、参考文献などを紹介します。

【参考書】

倉島保美(2012) 論理が伝わる世界標準の「書く技術」 講談社

【成績評価の方法と基準】

- ・授業への参加(40%)、課題遂行(40%)、レポート提出(20%)から成績を評価します。
- ・欠席が4回以上になると自動的にE評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2017年度授業改善アンケートより)

4人中4人が回答してくれました(100%)。そのうち4人が「この授業を履修してよかった」と回答してくれました(100%)。

「教室が遠いです」という意見がありました。大学院生は運動不足になりがちですからちょうど良いと思います。歩いて下さい(笑)。

【その他の重要事項】

この科目は *M1* 次生と *M2* 次生の合同授業となります。重複履修を原則としていますが、*M1* 次と *M2* 次には同じ教員の授業を受講してください。
 オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学
 <研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

- ① 鳥宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社
- ② 鳥宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社
- ③ 鳥宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including evaluation of single-case design data with visual inspection, and interpretation of functional relationship between dependent and independent variables. Student will also aim to master how to write a research paper, by learning about paragraph writing, Japanese Psychological Association's publication manual, and other miscellaneous rules in academic writing.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

越智 啓太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要
 主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第 2 回	研究報告と討論（おもに文献収集）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 3 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 4 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 5 回	研究報告と討論（おもに文献文の読解 3）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 6 回	研究報告と討論（おもに文献の読解 4）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 7 回	研究報告と討論（おもに文献の読解のまとめと整理統合 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 8 回	研究報告と討論（主に文献の読解のまとめと整理統合 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 9 回	研究報告と討論（おもに先行研究のメタ分析）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 10 回	研究報告と討論（主に研究計画の立案 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 11 回	研究報告と討論（おもに研究計画の立案 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 12 回	研究報告と討論（おもに研究計画のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 13 回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論 1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第 14 回	研究報告と討論（おもに研究計画の評価と討論 2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（40%）。
 他人の研究について適切なコメントができたか（60%）。
 授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 犯罪心理学
<研究テーマ> 犯罪捜査への心理学の応用
<主要研究業績> 「犯罪捜査の心理学」(化学同人)

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

越智 啓太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要
主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告のプレゼンテーション）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の図表表示）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論（おもに実験結果の報告の論文記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもに結果の分析手法）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもに結果の分析の問題点）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（主に結果の分析の論文記載）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（おもに理論的な問題点の吟味）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（おもに考察）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに研究のリミテーションとその記述）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論（おもに投稿準備）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論（おもに論文のフォーマット）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論（まとめ）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。特に毎回のテーマ（おもに～と記載されている部分）について重点的に準備しておくこと

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（40%）。
他人の研究について適切なコメントができたか（60%）。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

修士論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 犯罪心理学
<研究テーマ> 犯罪捜査への心理学の応用
<主要研究業績> 「犯罪捜査の心理学」(化学同人)

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

PSY600B6

心理学研究法演習 I

藤田 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

記憶を中心とした認知心理学および、主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する先行研究を批判的に読み、研究目的とそれを達成する方法論および分析法について議論をすることを通じて、自分の研究計画の基礎とする。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

1. 個々の先行研究の方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることができる。
2. 個々の先行研究の分析および結果の解釈に関する問題点・改善点もしくは優れている点を挙げることができる。
3. 上記1, 2の内容をふまえて、より適切な研究計画を提案することができる。
4. 上記1, 2, 3の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
5. 他者の発表に対して、的確なコメントをすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

先行研究について正確に理解した上で、その研究方法・分析方法・論理の首尾一貫性について口頭で説明することを具体的な作業課題として設定した演習である。

研究論文の構成について教員が解説した上で、受講生自身が実際に発表し、全員で討論を行う。

具体的な授業の進め方は次の通りである。毎回の授業の前半で、一人の受講生が自分の興味ある研究領域の論文を読んでレジюмеを作成し、その内容を説明する。その際には単に論文に沿って紹介するだけでなく、批判的な目を持って、問題点や改善点を指摘することに重点を置く。もし問題点・改善点に気づかない場合には、その研究方法の優れている点を指摘することとする。毎回の授業の後半では、発表された内容について受講生全員で討論を行い、その議論を踏まえて、発表した研究と同じテーマで、より適切な研究を行うための研究計画を各自が提案する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法の説明
第2回	論文の構成とは	論文を読む際に留意すべきポイントを担当教員が説明する
第3回	議論の進め方	担当教員が発表の例示をし、議論の進め方について説明する
第4回	論文発表1	一人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第5回	論文発表2	二人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第6回	論文発表3	三人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第7回	論文発表4	四人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第8回	論文発表5	五人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第9回	論文発表6	六人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第10回	論文発表7	七人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第11回	論文発表8	八人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第12回	論文発表9	九人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第13回	論文発表10	十人目の発表者が論文の内容を紹介し、全員で討論
第14回	総括	授業の到達目標の確認、授業で習得できたことの振り返り、成績評価について、今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 自分の興味ある研究テーマを明確にして、文献検索のためのキーワードを準備する
- 第2回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する
- 第3回 先行研究の熟読、レジюмеによる発表の準備

第4回～第13回各自が、よりよい研究計画を考案して、授業支援システムの掲示板に掲載する

第14回この授業で学んだことを振り返り、研究計画上の留意点を集約する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %…授業へ参加し、他者の発表へコメントすることを評価対象とする。

論文発表 30 %…発表の内容、発表資料の質、問題点・改善点等の指摘を評価対象とする。

改善計画の提案 20 %…毎回の発表に関連した、改善された研究計画案を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

5人中4人から「履修してよかった」で5をもらえました。授業外学習の時間は3人が3時間未満でしたが、少し足りていない人もいます（長ければよいというわけではないのですが）。うまく時間をやりくりをして、自分にとって有意義な学びを積み上げてください。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

オフィスアワーは、木曜日の13:30～14:30、場所はBT11階のスタディルーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也(2006). 心理学を活かした教育実践のために 井上智義(編)視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也(2010). 記憶過程と学習 三宮真智子(編)教育心理学 2章 学文社, pp.22-37.

【Outline and objectives】

In this class, students critically read papers of cognitive psychology focusing on memory and papers of educational psychology focusing on learning process. Through discussing the research goal, the methodology, and analytical method, students acquire the fundamental skills to develop their research plans.

心理学研究法演習Ⅱ

藤田 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

記憶を中心とした認知心理学および、主に学習過程に焦点を当てた教育心理学に関連する特定分野の複数の先行研究を批判的に読み、オリジナリティのある研究目的を達成するための適切な研究計画を考案します。修士課程2年生はその計画に沿って研究を実施した上で、結果を分析し考察します。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

<修士課程2年生>

1. 自分の関心ある研究領域について、検討すべき理論上あるいは方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げるができる。
2. 上記1の内容をふまえて、独自性のある新たな研究計画を立て、研究を実施することができる。
3. 得たデータに適した正しい分析を行うことができる。
4. 上記1, 2, 3の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
5. 他者の発表に対して、的確なコメントをすることができる。

それ以外の受講生:

1. 自分の関心ある研究領域について、方法上の問題点・改善点もしくは優れている点を挙げるができる。
2. 自分の関心ある研究領域について、蓄積された知見や提唱された理論に関する問題点・改善点もしくは優れている点を挙げるができる。
3. 上記1, 2の内容をふまえて、独自性のある新たな研究計画を提案することができる。
4. 上記1, 2, 3の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
5. 他者の発表に対して、的確なコメントをすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

心理学の特定の領域に関連した一連の先行研究を概観した上で、一般的に用いられているパラダイムを吟味し、自分自身の研究計画に反映させることを具体的な作業課題として設定した演習である。

研究論文の構成について教員が解説した上で、受講生自身が実際に2回発表し、全員で討論を行う。

具体的な授業の進め方は次の通りである。修士課程2年生は、修論研究の中間発表と最終発表の2回を通して、研究計画から結果の分析及び解釈まで、自分自身の研究について論旨の一貫性を向上させる。それ以外の受講生は、自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューし、新たな問題提起を行い、自分自身の研究計画を2回発表する。毎回の授業で、発表された研究（計画）について受講生全員で討論を行い、より適切な研究を行うための方法論上のアドバイスを各自が行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法の説明
第2回	研究計画上の留意点	研究計画を立てる上で留意すべきポイントを担当教員が説明する
第3回	発表の準備	各自がレジュメとパワーポイントを用いた発表準備を行う
第4回	修論中間発表	M2の受講生が研究の分析結果を発表し、全員で討論
第5回	研究計画発表1	M2以外の一人目と二人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第6回	研究計画発表2	M2以外の三人目と四人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第7回	研究計画発表3	M2以外の五人目と六人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第8回	研究計画発表4	M2以外の七人目と八人目の受講生が研究計画を発表し、全員で討論
第9回	修論最終発表	M2の受講生が研究全体の構成を発表し、全員で討論
第10回	研究計画発表5	M2以外の一人目と二人目の受講生が2回目の研究計画を発表し、全員で討論
第11回	研究計画発表6	M2以外の三人目と四人目の受講生が2回目の研究計画を発表し、全員で討論

第12回	研究計画発表7	M2以外の五人目と六人目の受講生が2回目の研究計画を発表し、全員で討論
第13回	研究計画発表8	M2以外の七人目と八人目の受講生が2回目の研究計画を発表し、全員で討論
第14回	総括	授業の到達目標の確認、授業で修得できたことの振り返り、成績評価について、今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 自分の興味ある研究領域の複数の論文をレビューする
 第2回 複数の論文をレビューし、新たな問題設定を行う
 第3回 レジュメおよびパワーポイントのスライド作成
 第4回～第13回 各自が、発表者の修論研究や研究計画を改善するためのアドバイスを授業支援システムの掲示板に記載する
 第14回 この授業で学んだことを振り返り、研究実施の際の留意点を集約する

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房
 そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %…授業へ参加し、他者の発表へコメントすることを評価対象とする。

研究計画発表 30 %…研究目的の設定、研究方法・分析方法の適切さ、発表資料およびスライドの質を評価対象とする。

研究計画改善の提案 20 %…毎回の計画発表に対して行われた、改善のためのアドバイスを評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

(2017年度実施のアンケートから) 全員、「履修して大変よかった」と回答してくれ、毎週3時間以上の授業外学習時間を当てていたようで、自分の発表時だけでなく他の受講生の発表に対しても積極的に掲示板等で意見交換していた様子がうかがえます。毎年書いていますが、授業を離れても、自主的に院生相互で意見交換するような学習環境を作ってくれることを期待しています。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

オフシアワーは、木曜日の13:30～14:30、場所はBT11階のスタディールーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2章 学文社, pp.22-37.

【Outline and objectives】

n this class, students will critically read several prior studies in the fields of cognitive psychology focusing on memory and educational psychology focusing on learning process. Reflecting that, students will propose appropriate research plans to achieve original research objectives. The master's course second grader conducts research according to the plan and analyzes and discusses the results.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

関心のある心理学研究分野の研究史を作成し、研究計画の立案する。

【到達目標】

自分が関心のある研究テーマについて先行研究を調査し、研究史をまとめ、未解決の問題を追究するための研究計画を立てることを春学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文やプレゼンとしてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。春学期は、研究テーマに関する先行研究の知識を深めるための研究史（レビュー）を執筆したり、独自の研究の内容を記述した研究計画書を作成したりする。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため、学生による活動報告やディスカッションが主体となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、達成目標の設定
2	研究テーマの設定 (1)	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
3	研究テーマの設定 (2)	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
4	文献の検索・講読 (1)	先行研究の検索・講読、研究史の作成
5	文献の検索・講読 (2)	先行研究の検索・講読、研究史の作成
6	研究史としての文献の発表	研究史の発表
7	研究史の見直し	他者からのフィードバックの検討
8	修正研究史発表	修正版の研究史の発表
9	問題の設定	問題意識と研究目的の設定
10	変数の整理、仮説の設定	従属変数・独立変数の整理、目的に沿った研究仮説の設定
11	研究計画の立案	研究の目的・方法・予想される結果の検討、研究計画書の書き方、倫理審査のための準備
12	研究計画書の発表	研究計画書の発表
13	研究計画書の見直し	他者からのフィードバックの検討
14	修正研究計画書発表、総括	修正版の研究計画書の発表、春学期のまとめ、今後の展望

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回までに研究を進めさせる。進捗状況を授業にて報告するための資料を準備する。

【テキスト（教科書）】

テキストは特にない。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）(2001). 心理学研究法入門 一調査・実験から実践まで一 東京大学出版会.

高野陽太郎・岡 隆（編）(2004). 心理学研究法 一心を見つめる科学のまなざし一 有斐閣アルマ.

松井豊（2006）. 心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために― 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%、進捗状況報告 25%、発表（研究史・研究計画書）50%の割合で評価する。原則として出席が授業の2/3に満たない場合または発表を怠った場合は単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

回答者2名全員が、「履修してよかったか」「理解できたか」「工夫されていたか」という間に「5」で回答してくれました。授業外学習時間については1名が2～3時間、1名が3時間以上と回答していました。自由記述欄も肯定的なコメントが多かったです。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知心理学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 音声分析ソフトウェア *Praat* を用いた聴取実験：*F0* 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, *67*, 345-350.

田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, *69*, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, *123*:397-413.

[Outline and objectives]

In this course, students will conduct a thorough literature review and construct a research agenda in a topic of their interest in the field of psychology.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分で設定した研究計画に沿った研究を実施し、研究成果の発表および研究論文の執筆を行う。

【到達目標】

春学期に立てた研究計画に従って研究を実施し、論文やプレゼンとしてまとめることを秋学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文としてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。秋学期は、研究計画書に沿って研究を実施し、必要なデータを収集・分析・解釈した上で、研究論文の執筆や効果的なプレゼンといった形で成果をまとめることを目指す。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式なので、学生による活動報告やディスカッションが主体となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	研究計画の確認、進捗状況報告
2	研究の実施 (1)	研究の実施、経過報告
3	研究の実施 (2)	研究の実施、経過報告
4	研究の実施 (3)	研究の実施、経過報告
5	データの整理・分析 (1)	データの入力・整理
6	データの整理・分析 (2)	データの入力・整理
7	記述統計量の計算	記述統計量の算出、効果的な図表の作り方
8	中間報告	研究結果に関する中間報告・討論
9	推測統計の適用	適切な検定の適用、検定結果の解釈
10	論文の執筆 (1)	研究論文の書き方、「方法」「結果」の書き方
11	論文の執筆 (2)	「導入」「考察」の書き方
12	論文の執筆 (3)	タイトルのつけ方、参考文献の書き方、原稿の推敲
13	口頭発表の仕方 (1)	口頭発表の心得、効果的な発表資料の作り方
14	口頭発表の仕方 (2)、総括	論文提出、最終成果発表の準備、質疑への準備、秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業で報告するための資料を準備する。

【テキスト（教科書）】

テキストは特にない。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）(2001). 心理学研究法入門 ―調査・実験から実践まで― 東京大学出版会.

高野陽太郎・岡 隆（編）(2004). 心理学研究法 ―心を見つめる科学のまなざし― 有斐閣アルマ.

松井豊（2006）. 心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために― 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%、進捗状況報告 25%、発表 50%の割合で評価する。原則として出席が授業の 2/3 に満たない場合または発表を怠った場合は E 評価となる。

【学生の意見等からの気づき】

2017 年度秋学期は、「積極的な工夫がされていた」「理解できた」「受講してよかった」のいずれも 2 名とも「5」と回答してくれました。授業外学習の時間は 2 名とも「週 2 時間以上 3 時間未満」という回答でした。自由記述はありませんでした。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 音声分析ソフトウェア *Praat* を用いた聴取実験：*F0* 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.
 田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.
 Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will carry out research based on their research agenda, and summarize the results into a coherent presentation and research paper.

PSY600B6

心理学研究法演習 I

荒井 弘和

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究課題を明確にして、研究計画を立てることをテーマとします。

【到達目標】

授業の到達目標は、以下の 3 点です。1) 先行研究を概観して、研究の課題を整理することができる。2) 研究の課題を解消するための研究計画を立てることができる。3) 以上 2 点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

(1) 研究論文を読んで発表したり、(2) 意見交換をしたりして、研究課題や研究計画を具体化できるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	自分の関心を洗い出す (1)	関心のあるテーマを出し合う。その内容について、意見交換を行う。
第 2 回	自分の関心を洗い出す (2)	関心のあるテーマを出し合う。その内容について、意見交換を行う。
第 3 回	先行研究を読み、内容をまとめる (1)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 4 回	先行研究を読み、内容をまとめる (2)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 5 回	先行研究を読み、内容をまとめる (3)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 6 回	先行研究を読み、内容をまとめる (4)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 7 回	先行研究を読み、内容をまとめる (5)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 8 回	先行研究を読み、内容をまとめる (6)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 9 回	先行研究を読み、内容をまとめる (7)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 10 回	先行研究を読み、内容をまとめる (8)	関心のあるテーマに関連する研究論文を読み、資料を作成して発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 11 回	研究計画を立てる (1)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 12 回	研究計画を立てる (2)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 13 回	研究計画を立てる (3)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。
第 14 回	研究計画を立てる (4)	研究計画を作成し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究計画を立て直し、再度発表する。その内容について、意見交換を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 文献検索、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 作成したレポートや発表の内容が 60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学に特化せず、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 スポーツ心理学、健康心理学
 <研究テーマ>
 アスリートの支援、生涯スポーツの普及
 <主要研究業績>

Arai, H. (2017). *The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). *Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). *Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

It will be focused on the relationship between sports psychology or sports psychology and other psychology fields. Then, the students will clarify their own research topics and to plan on the research.

PSY600B6

心理学研究法演習Ⅱ

荒井 弘和

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

スポーツ心理学、または、スポーツ心理学と他の心理学分野との関連性に焦点を当てます。そして、研究を実践し、その結果を研究論文として執筆することをテーマとします。

【到達目標】

授業の到達目標は、以下の 3 点です。1) 研究計画に沿って研究を実践することができる。2) その結果を研究論文として執筆することができる。3) 以上 2 点について、他の受講生と論理的な意見交換を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

(1) データ分析の結果を報告したり、(2) その解釈について意見交換をしたりして、論文を執筆することができるようになることを目指します。授業中に行うことは、(1) 発表と意見交換、(2) グループワークです。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	研究計画の実施経過を報告する	実施経過を報告し、その内容について、意見交換を行う。
第 2 回	データを分析する (1)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。データを再分析して、再度発表する。
第 3 回	データを分析する (2)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。データを再分析して、再度発表する。
第 4 回	データを分析する (3)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。データを再分析して、再度発表する。
第 5 回	データを分析する (4)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。データを再分析して、再度発表する。
第 6 回	データを分析する (5)	集めたデータを分析し、発表する。その内容について、意見交換を行う。データを再分析して、再度発表する。
第 7 回	研究論文を完成させる (1)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究論文を書き直し、再度発表する。
第 8 回	研究論文を完成させる (2)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究論文を書き直し、再度発表する。
第 9 回	研究論文を完成させる (3)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究論文を書き直し、再度発表する。
第 10 回	研究論文を完成させる (4)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究論文を書き直し、再度発表する。
第 11 回	研究論文を完成させる (5)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究論文を書き直し、再度発表する。
第 12 回	研究論文を完成させる (6)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究論文を書き直し、再度発表する。
第 13 回	研究論文を完成させる (7)	研究論文を執筆し、発表する。その内容について、意見交換を行う。研究論文を書き直し、再度発表する。

第14回 研究内容を口頭発表する 研究論文を元に発表資料を作成し、口頭発表を行う。
その後、質疑応答を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 研究の実施（データ収集やデータの分析も含む）、(2) 授業中に提示された課題、(3) 発表資料の作成に取り組みます。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 作成したレポートや発表の内容が60%、(2) 意見交換やグループワークへの参加状況が40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、スポーツ心理学に特化せず、受講生の関心に沿って授業を展開します。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
スポーツ心理学、健康心理学
<研究テーマ>
アスリートの支援、生涯スポーツの普及
<主要研究業績>

Arai, H. (2017). *The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences.* *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). *Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support.* *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). *Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes.* *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

It will be focused on the relationship between sports psychology or sports psychology and other psychology fields. Then, the students will implement their research and write a research paper.

PSY500B6

学習心理特論

藤田 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の学習活動を支えている「記憶」について、主に記憶の測定法という観点から捉える。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

1. 人間の記憶を測定する方法（実験のパラダイム）について、説明ができる程度に理解する。
2. その測定法上の工夫や留意点を、記憶以外の心理学領域に一般化できる。
3. 上記1、2をふまえて、自分自身の興味・関心のある領域で、実験・調査・観察等の研究計画を立てることができる。
4. 研究計画を、第三者にも正確に伝えることができるような、客観的で適切な文章で記述できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

短期記憶および作動記憶の性質を検討する上での二重課題法、意味記憶の構造を明らかにするための間接プライミング、エピソード記憶の伝統的な測定である再生・再認について、理論的背景と実験手続との関連から、実際に使用する際の注意点を説明する。さらに、無意識的であるが故に測定が困難であった潜在記憶の測定である直接プライミングをはじめとした、近年の記憶研究の動向にも触れる予定である。測定法が妥当であるかどうかについて判断を下すためには、理論との整合性が重要であることから、様々な種類の記憶のモデルについても理解を深めることになる。とりわけ長期記憶においては、符号化と検索の過程の一致度が重要であることを強調する。

半期の前半の授業では、主に講義形式によって、上記の内容について解説を行う。後半の授業では、授業で得た知識を活用して、各自が研究計画を立て、それを発表し、教員と受講生全員で討論を行うという形式をとる。最終的には、学術論文執筆を念頭に置き、研究方法を適切な文章で記述したものをレポートとして作成し、提出することになる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法を担当者が説明する
2	記憶の分類	短期記憶 vs. 長期記憶、手続記憶 vs. 宣言記憶、意味記憶 vs. エピソード記憶について担当者が説明する
3	作動記憶の測定法	作動記憶のモデルおよび、そのモデルの根拠となっている研究の詳細を担当者が説明する
4	反応時間からわかること	反応時間とモデルによる解釈、意味記憶研究における間接プライミング効果を担当者が説明する
5	再生と再認	再生と再認の実施法、再生と再認の違いを担当者が説明する
6	再生と再認の理論	自由再生の二段階説、符号化特定性原理、再認の二過程説を担当者が説明する
7	潜在記憶の定義・測定法	潜在記憶とは何か、潜在記憶が我々の認知に及ぼす影響を担当者が説明する
8	記憶法則の一般性	記録材料と記憶法則の関係、記憶テストと記憶法則の関係、実験手続の違いと記憶成績の関係を担当者が説明する
9	この授業での課題	「模擬実験計画」のポイント、レポートのポイントを担当者が説明する
10	模擬実験計画：発表1	受講生が発表を行い、その内容に、これまでの授業内容が反映されているか全員で討論する
11	模擬実験計画：発表2	受講生が発表し、発表された実験計画の内容を、より適切なものにするように全員で討論する
12	模擬実験計画：発表3	受講生が発表し、その研究方法が、研究目的から見て妥当かどうかを全員で討論する
13	総括+レポート作成	記憶分野の知識の復習と整理を行い、研究法として学んだことの復習と確認、発表の総括をする

14 レポート提出

成績評価基準の説明を担当者が行い、各自で確認し、授業内容の応用に向けてのアドバイスを担当者が行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 以前に学んだことのある「記憶」研究について復習
 第2回 それぞれの記憶が、日常生活のどのような場面で活用されているのかを考え、理解を深める
 第3回 作動記憶の測定法を、自分の研究分野や自分自身の認知活動・学習活動に当てはめて考える
 第4回 反応時間を指標にする際の注意点をまとめ、具体的な研究計画に活かす
 第5回 自分の研究で再生あるいは再認を用いる場合の、得られる結果の違いについて考える
 第6回 自分の研究に、再生と再認のいずれを用いるべきかを理論的に説明できるように考える
 第7回 潜在記憶が自分の日常生活のどのような現象に関わっているのかを考える
 第8回 これまでの授業内容を総括的に復習し、疑問点を整理する
 第9回 自分なりの問題設定と発表準備
 第10回 自分の発表の振り返り、他者の発表に対するコメント整理、発表の準備
 第11回 自分の発表の振り返り、他者の発表に対するコメント整理、発表の準備
 第12回 自分の発表の振り返り、他者の発表に対するコメント整理、発表の準備
 第13回 レポート作成
 第14回 レポートの見直しと修正

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

- 藤田哲也（1999）. 潜在記憶の測定法 心理学評論, 42, 107-125.
 藤田哲也（2001）. 潜在記憶と行為の記憶に関する研究 風間書房
 藤田哲也（2006）. 「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究 太田信夫（編）記憶の心理学と現代社会 有斐閣
 その他、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ参加し、他者の発表へコメントすることを評価対象とする。
 授業内での発表 30 %…発表の内容、発表資料における記述のしかた、発表のしかたを評価対象とする。
 レポート 30 %…レポートの内容、学術論文としての体裁（書式）を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

「履修してよかった」は 4.86 と高水準でした。「理解度」は 4.71 で、4 点の人が 7 名中 2 名いました。昨年よりは改善しましたが、もっと知識面の定着を図れるよう働きかけをしたいと感じました。自由記述を読んでいる限り、皆、修論へつながる感触を得てくれているようでしたので、この授業で学んだことを、どんどん自分の研究に反映させてもらえたらと思います。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。
 オフィスアワーは、木曜日の 13:30～14:30、場所は BT11 階のスタディールーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

記憶

<研究テーマ>

様々な記憶の測定法と、その理論

<主要研究業績>

- 藤田哲也（1999）. 潜在記憶の測定法 心理学評論, 42, 107-125.
 藤田哲也（2001）. 潜在記憶と行為の記憶に関する研究 風間書房
 藤田哲也（2006）. 「無意識」に踊らされるあなた－日常記憶としての潜在記憶研究 太田信夫（編）記憶の心理学と現代社会 有斐閣

【Outline and objectives】

In this class, students understand "memory" that supports human learning activities mainly from the viewpoint of measurement method of memory.

PSY500B3

音声言語科学特論

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語学の基礎を学ぶ。

【到達目標】

母語話者として言葉を操るには、その言語の音（音声学、音韻論）、語彙（形態論）、文の作り方（統語論）、語句の意味（意味論）、他者との対話の中での言葉づかい（語用論）など、様々な知識が必要である。この言語知識を科学的な観点から追究する言語学の諸分野について、基礎概念を学び、問題を解く能力を身に付けることを本授業の目標とする。授業では言語学を初めて学ぶ学生を想定しているが、受講生の既有知識に応じて進度を適宜調整する。授業終了時には、言語に関する様々な現象や疑問について吟味・解決できるようになることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「音声言語科学特論」においては「DP1」「DP2」に関連、心理学専攻「音声言語科学特論」においては「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連する。

【授業の進め方と方法】

人間に特有の能力とされる言語がどのような原理によって成立しているのかを科学的に追究する言語学について概観する。言語学の諸分野の中でも音声学、音韻論、形態論、統語論の中から適宜重要なトピックを取り上げる予定である。日本語や英語などの諸言語から様々な具体例を検討し、問題を実際に解く作業を通して、言語学の基礎概念や分析方法を身に付ける。また、音声学分野で広く利用されているフリーソフト *Praat* の実習を行う。授業は、教員による講義と、出題された問題に対する回答についての討論とを織り交ぜながら進める予定である。授業後半では、言語に関連する学術論文を学生が自ら選定し、その内容を授業にて発表する機会を設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入、言語と言語学	シラバスの説明、言語学とは？、言語学の諸分野、二種類の言語
2	形態論：形態素、語形成	心内辞書と一般辞書、形態論と形態素、形態素の種類、偶発的な語形成、少し規則的な語形成
3	形態論：複合、派生	主要部、複合語の種類、複合語の意味、派生語の樹形図
4	形態論：屈折、形態素解析	屈折と活用、形態素解析の方法、練習問題
5	統語論：導入、カテゴリー、意味役割、マージ	構成素、句構造、句の主要部、文を作り上げるための材料：カテゴリー、項と意味役割、文を組み立てる仕組み：マージ、様々な種類の句
6	統語論：文の組み立て	英語の文・日本語の文の組み立て、動詞句の組み立て、屈折辞と格、一般的な句の構造
7	統語論：補文	動詞句の拡張、補部と指定部、文の中の文＝補文
8	音声学・音韻論：母音と子音	発話のメカニズム、母音、子音
9	音声学・音韻論：音素	音素、音素分析
10	実験音声学：音声分析	<i>Praat</i> を使った音声の録音・可視化・編集・分析・ラベリング
11	実験音声学：音声合成	<i>Praat</i> を使った音声の再合成
12	実験音声学：音声知覚	<i>Praat</i> を使った音声知覚実験
13	論文発表 (1)	言語に関わる学術論文の発表
14	論文発表 (2)、総括	言語に関わる学術論文の発表、授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(1) 毎回、テキストの指定範囲を読み、課題に取り組み、次回の授業で議論をするための準備をすること。(2) 学期の後半では言語に関わる学術論文を各自選定し、学期末にその内容について発表すること。

【テキスト（教科書）】

以下の文献の一部を授業で使用する予定。

西光義弘（編集）（1999）. 日英語対照による英語学概論：増補版 くろしお出版。

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）. 音声学を学ぶ人のための *Praat* 入門 ひつじ書房。

【参考書】

参考書は適宜授業内にて紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 35%、課題 30%、発表 35%の割合で評価する。言語学は知識の段階的な学習とともに、問題を解く能力の習得が求められるので、出席と課題を重視する。原則として、出席・課題の提出が授業回数の 2/3 に満たない場合、または論文発表を行わなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2018 年度春学期は、回答者 4 名全員が「履修してよかったか」「工夫されていたか」「理解できたか」という間に「4」か「5」で回答してくれました。授業外学習時間については「週 1~2 時間」が 2 名、「週 2~3 時間」が 2 名でした。コメント欄への記入はあまりありませんでしたが、「PRAAT の使い方が身につけてよかった」という感想をいただきました。

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 音声分析ソフトウェア Praat を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.

田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. Journal of the Acoustical Society of America, 123:397-413.

【Outline and objectives】

This course introduces students to the fundamentals of linguistics.

PSY500B6

社会心理特論

越智 啓太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要：

テーマ 社会問題とその解決について：心理学の観点から

心理学の専門家として、社会問題についての従来の研究とエビデンスを効果的に収集し、決められた時間内に効果的にプレゼンテーションを行う演習である。受講にあたっては、心理学の基本的知識、データ収集の知識、数値的なデータの分析・解析技術、パワーポイントの使用、心理学の外国語文献の読解能力が必要である。

授業の意義：

この講義を受講することによって以下のことを達成できるようにする。

- ①社会問題について心理学の専門家の立場から適切に分析できる
- ②社会問題について心理学の専門家の立場から適切にコメントできる
- ③社会問題について心理学の専門家の立場から議論できる
- ④社会問題について心理学の専門家の立場から自分の主張をプレゼンテーションできる

【到達目標】

- (1) 主張したい問題についての分析
- (2) エビデンスの収集
- (3) エビデンスの比較と分析
- (4) 自分の意見の構成
- (5) 自分の意見の主張の構成
- (6) 効果的なプレゼンテーション
- (7) 他人のプレゼンテーションへの批判・質問スキル
- (8) 他人のプレゼンテーションの評価ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は各自があらかじめ、選択したテーマについて60分間でプレゼンテーションを行い、それについて受講者全員でディスカッションする形式で行う。発表内容についての知識を深めるだけでなく、プレゼンテーションの方法や、質問に対する答え方、プレゼン時の動作などについても訓練を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業についての説明
第2回	発表と討論（1）発表形式に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第3回	発表と討論（2）発表時の振る舞いに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第4回	発表と討論（3）パワーポイントの内容に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第5回	発表と討論（4）議論の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第6回	発表と討論（5）質問に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第7回	発表と討論（6）質問対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第8回	発表と討論（7）反論に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第9回	発表と討論（8）反論のエビデンス提示に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第10回	発表と討論（9）反論対応に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第11回	発表と討論（10）まとめに重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第12回	発表と討論（11）発表の進め方に重点を置く	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第13回	発表と討論（12）総合評価（1）	受講生の発表と討論、それについてのコメント
第14回	発表と討論（13）総合評価（2）	受講生の発表と討論、それについてのコメント

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の発表に際しては、事前調査と発表の準備（50時間程度）
他人の発表に際してはその予習（数時間程度）が必要。

【テキスト（教科書）】

使用しない

【参考書】

発表者が指定する

【成績評価の方法と基準】

評価基準 授業におけるプレゼンテーション 50%、授業における討論の質と量 50%

自分の発表時でなくても積極的に発言しないと、後者の50%の加点は得られない。たとえば、自分の発表がパーフェクトでも授業中の自発的な発言があり、かつそれが有益なものでない限り単位は得られない。すべての回に出席しても貢献度が少ないと単位は得られない。

【学生の意見等からの気づき】

例年、プレゼン能力や質問能力がついたというポジティブな評価をいただいています。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを授業時に持参すること。
授業中にインターネットなどを参照しながら授業に参加すること

【担当教員の専門分野等】

専門領域 犯罪心理学、社会心理学

研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用

主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ 犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学 実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学 北大路書房；越智啓太 2008 犯罪捜査の心理学 化学同人；越智啓太ほか 2008 自伝的記憶の心理学 北大路書房

【Outline and objectives】

Discuss social issues based on research results of social psychology

PSY500B6

読書心理特論

平山 祐一郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本という媒体を使って行われる心理的活動が「読書」である。その「読書」という行為はどのような心理的過程を通じて行われるのか、そして「読書」という行為の結果、人間の心理的活動がどのような影響を受けるのかについて考察する。また、教育現場では「読書離れ」が問題視され、様々な対応がなされている。そもそも「読書離れ」とはどのような現象なのか、そして、その読書離れへの有効な対応策にはどのようなものが考えられるのかについて具体的に議論する。さらに、近年、電子書籍が登場し、従来の「読書」という心理的活動が変貌することが予想されている。電子書籍が人間にどのような影響を与えるのか、その長所・短所について予測する。受講者は以上の課題に対して、適切な議論や考察、予測ができるようになることを目的とする。

【到達目標】

この授業では、講義と議論により、心理学的観点から「読書」について理解を深める。この授業に積極的に参加することにより、受講者には以下の力がつく可能性が高まる。

- ①読書という活動やその作用について、心理学的に説明できる。
- ②読書離れの原因と対策について、心理学的観点から言及できる。
- ③電子書籍の影響について、心理学的に予測できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、発表者を決め、授業計画に沿ったテーマで発表を行う。この発表に対し、出席者全員が議論する。その中で【到達目標】の3点の達成を目指す。具体的には【成績評価の方法と基準】を参照すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	オリエンテーションとして、授業の目的・方法・成績評価・注意事項を詳しく説明する。発表担当者を決定する。イントロダクションとして、読書に関する小講義を行う。
第2回	【教育と医学】第56巻1号 2008年 特集「読書離れにいどむ」①	特集論文全体の概要を把握する。
第3回	【教育と医学】第56巻1号 2008年 特集「読書離れにいどむ」②	前回の概要把握に基づいて、詳細な内容把握を行う。
第4回	【教育と医学】第56巻1号 2008年 特集「読書離れにいどむ」③	前々回、前回をもとに、議論を行う。
第5回	【読書科学】第52巻第4号 2009年 特集論文「私の読書論・読書教育論」①	特集論文全体の概要を把握する。
第6回	【読書科学】第52巻第4号 2009年 特集論文「私の読書論・読書教育論」②	前回の概要把握に基づいて、詳細な内容把握を行う。
第7回	【読書科学】第52巻第4号 2009年 特集論文「私の読書論・読書教育論」③	前々回、前回をもとに、議論を行う。
第8回	【児童心理】第72巻第4号 2018年 特集「読書好きな子を育てたい」①	特集論文全体の概要を把握する。
第9回	【児童心理】第72巻第4号 2018年 特集「読書好きな子を育てたい」②	前回の概要把握に基づいて、詳細な内容把握を行う。
第10回	【児童心理】第72巻第4号 2018年 特集「読書好きな子を育てたい」③	前々回、前回をもとに、議論を行う。
第11回	「ネット時代の読書論」2008年～2010年（全24回）【指導と評価】①	連載全体の概要を把握する。

- 第12回 「ネット時代の読書論」 2008年～2010年（全24回）『指導と評価』②
 第13回 「ネット時代の読書論」 2008年～2010年（全24回）『指導と評価』③
 第14回 授業のまとめ
- 前回の概要把握に基づいて、詳細な内容把握を行う。
- 前々回、前回をもとに、議論を行う。
- 授業全体に関して、受講者からの質問をもとに議論する。まとめとしての小講義も行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業後に、次回の授業で提出する課題を出す。主に、受講者が①授業内容を要約する、②授業の中で生じた「問い」へ解答する、などのミニレポートを予定している。

【テキスト（教科書）】

法政大学図書館にある書籍や雑誌論文を使用する予定である。そこのない文献等は、授業担当者が用意する。3000円前後を目安として、受講生が購入すべき書籍等が生じた場合は、授業で説明する。

【参考書】

参考になる書籍等は必要に応じて、授業内で紹介する予定である。

【成績評価の方法と基準】

上記【到達目標】の①～③の達成をめざすため、以下の要素（観点）と配分（%）により、成績評価を行う。[1]発表 50% ①質の高いレジュメを作成し、わかりやすく、簡潔な発表をしたか。②議論を呼び起こす発表をしたか。[2]議論 30% ①積極的に議論に参加したか。②適切な質問をしたか。③斬新な問いを立てられたか。④建設的な意見表明をしたか。⑤発見的な考察ができたか。[3]提出物 20% ①要約が適切か。②問いに的確に答えているか。※【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】を参照。

【学生の意見等からの気づき】

毎年の授業アンケートや受講者の感想から、議論を多く取り入れた授業であることが好評であることがわかった。今季も議論の中から、大小いくつもの発見があるような授業を運営したい。ただし、議論は白熱すると本題から離れる場合があるので、その舵取りを工夫したい。

【学生が準備すべき機器他】

発表に使う機材（パソコン等）。準備が難しい場合は授業担当者に相談。

【その他の重要事項】

シラバスは状況に応じて変更する。授業やメールなどで連絡・説明する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉教育心理学
 〈研究テーマ〉読書心理、作文・表現の心理、学習指導と評価
 〈主要研究業績〉①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所 ②平山祐一郎 2009 これからの大学生の読書について考える 読書科学,52,200-204. ③平山祐一郎 2015 大学生の読書の変化-2006年調査と2012年調査の比較より- 読書科学,56,55-64.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to provide participants with some points of view about effects or impacts of reading books in the psychological context. Main topics are as follows: what kind of psychological process is necessary for reading books? or what kind of effect happens by electronic books? In addition to these, we will consider the cause of increase in the number of non-readers.

PSY500B6

教育心理特論

平山 祐一郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教育心理学には少なくとも2つの目的がある。①教育という活動に心理学の光を当て、深く理解すること。②心理学の知見を教育活動に反映させ、質の向上をはかること。この授業では、受講者はそれらに加えて、学校心理士という資格とその活動から見てくる教育にも知識を深める。

【到達目標】

この授業に積極的に参加することにより、受講者には以下の力がつく可能性が高まる。①国内外の教育課題を多面的に把握し、心理学的に説明できる。②教育課題に関して、証拠に基づいた原因分析と対策立案ができる。③学校心理士という資格とその活動について述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、発表者を決める。発表に対して出席者全員が議論する。具体的には、【テキスト（教科書）】欄に記載されている教科書を用いて、【授業計画】欄の内容に沿って授業を進める。発表者は各回のテーマに関して、①教科書の内容を深めること、②教科書の資料や考え方を最新のものにすること、③具体例を集めること、に留意しレジュメを作成する。毎回の発表と議論を通じて、【到達目標】の3点の達成を目指す。具体的には【成績評価の方法と基準】を参照すること。※月刊「教育と医学」（慶應義塾大学出版会）及び月刊「児童心理」（金子書房）から論文を選択し、その発表も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション（教育心理学の目的と課題）	授業の目的・方法を提示する。イントロダクションとして、教育心理学の歴史と今後の課題について、学校心理学と関連づけて講義する。
第2回	心理教育的援助サービスのモデル①&「教育と医学」及び「児童心理」から発表	「4種類のヘルパー論」について概略を講義した上で、「ボランティアのヘルパー」「役割的ヘルパー」について検討・議論する。
第3回	心理教育的援助サービスのモデル②&「教育と医学」及び「児童心理」から発表	「4種類のヘルパー論」について、「複合的ヘルパー」「専門的ヘルパー」「被援助志向性」について検討・議論する。
第4回	心理教育的援助サービスのモデル③&「教育と医学」及び「児童心理」から発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「1次的援助サービス」について現代的課題を含め、多面的に検討・議論する。
第5回	心理教育的援助サービスのモデル④&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「2次的援助サービス」について多面的に検討・議論する。
第6回	心理教育的援助サービスのモデル⑤&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	「三段階の心理教育的援助サービス」の「3次的援助サービス」について最新の資料を収集しつつ、検討・議論する。
第7回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために①&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	子どもの抱える問題を捉えるために各種資料を収集し、援助案の作成等を行うための「アセスメント」について学ぶ。
第8回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために②&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	子どもの発達を促進するために、子どもや保護者へ直接的に行われる援助サービスが「カウンセリング」である。その方法と注意点を学ぶ。
第9回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために③&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	子どもの発達を促進するために間接的に行われる「コンサルテーション」について、「問題解決型」「研修型」「システム介入型」の3つを理解する。
第10回	学校生活の質を高め、子どもの発達を促進するために④&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	援助の必要性が高い子どもに、学校内の援助資源（養護教諭等）を用いたり、学校外の資源（相談機関等）と連携したりすることを「コーディネーション」という。その事例検討等を行う。

第 11 回	子どもの問題状況を解消に導くチーム援助の在り方①&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	チーム援助とは複数のメンバーにより子どもを多面的に捉え、共通方針を持ち役割分担し、相補関係を築きながら援助を行うことである。そのバリエーションを知る。
第 12 回	子どもの問題状況を解消に導くチーム援助の在り方②&「教育と医学」及び「児童心理」からの発表	チーム援助の主たる構成メンバーである教師や保護者へのコンサルテーションを意識し、成功事例・失敗事例等を分析的に検討する。
第 13 回	教育心理学と倫理① &「教育と医学」及び「児童心理」から発表	教育心理学の研究者・実践家、学校心理士が研究や調査を行う際の配慮事項や成果の公開方法について、人権の尊重や秘密保持の厳守等の観点から、具体例を扱いつつ検討を行う。
第 14 回	教育心理学と倫理②&まとめ	教育心理学の実践家や学校心理士がその活動において配慮すべき人権尊重や秘密厳守、責任保持について具体例を交えて議論する。また、研修や自己研鑽の必要性について考える。最後に授業全体をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業後に、次回の授業で提出する課題を出す。主に、受講者が①授業内容を要約する、②授業の中で生じた「問い」へ解答する、などのミニレポートを予定している。

【テキスト（教科書）】

①「よくわかる学校心理学」(水野治久・石隈利紀・田村節子・田村修一・飯田順子編著、ミネルヴァ書房、2400 円+税)を使用予定。《注意》ただし、変更する可能性もある。指示があるまで購入しない。②月刊「教育と医学」(慶應義塾大学出版会)及び月刊「児童心理」(金子書房)の論文をもとにした発表を求める。《注意》法政大学図書館で閲覧するため、購入する必要はない。

【参考書】

参考になる書籍等は必要に応じて、授業内で紹介する予定である。

【成績評価の方法と基準】

【到達目標】に従い、以下の要素(観点)と配分(%)により、成績評価を行う。[1] 発表 50% ①質の高いレジュメを作成し、わかりやすく、簡潔な発表をしたか。②議論を呼び起こす発表をしたか。[2] 議論 30% ①積極的に議論に参加したか。②適切な質問をしたか。③斬新な問いを立てられたか。④建設的な意見表明をしたか。⑤発見的な考察ができたか。[3] 提出物 20% ①要約が適切か。②問いに的確に答えているか。*【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】を参照。

【学生の意見等からの気づき】

毎年の授業アンケートや受講者の感想から、議論を多く取り入れた授業であることが好評であることがわかった。今季も議論の中から、大小いくつもの発見があるような授業を運営したい。ただし、議論は白熱すると本題から離れる場合があるので、その舵取りを工夫したい。

【学生が準備すべき機器他】

発表に使う機材(パソコン等)。準備が難しい場合は授業担当者に相談。

【その他の重要事項】

シラバスは状況に応じて変更する。授業やメールなどで連絡・説明する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉教育心理学(研究テーマ)①読書の心理②作文・表現の心理③学習指導と評価(主要研究業績)①平山祐一郎 2008 大学生の読書状況に関する教育心理学的考察 野間教育研究所②平山祐一郎 2009 これからの大学生の読書について考える 読書科学,52,200-204.③平山祐一郎 2015 大学生の読書の変化-2006 年調査と 2012 年調査の比較より- 読書科学,56,55-64.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to give participants the basic knowledge and the practical skills of educational psychology. It is especially important to develop psychological ways to deal with the matters that concern to education and to know the application of psychological findings to educational activities for the improvement of those qualities.

犯罪心理特論

越智 啓太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の目的：

この授業では、犯罪心理学の計量的な研究(とくにプロファイリングに関する論文)を集中して読解し、現在の研究水準を理解する。本年度はとくに大量殺人とスクールシューティングの論文を読解する。

授業の概要：

本講義では、高度な多変量解析技法を用いた犯罪心理学研究を中心として、最先端の研究論文を集中して読解する。なるべくたくさんの論文を読むことを目的とするため、英語(犯罪心理学の英語専門論文を読解する能力)、数学(多重応答分析などの MDS 系手法、ロジスティック回帰分析)、心理学、犯罪者プロファイリングに関する基礎的な知識については習得済みであるという前提で授業を進める。多専攻の方の受講もその専攻が許せば可能であるが、実質的に単位取得は困難であることを了解して受講されたし。

【到達目標】

大量殺人についての専門論文を 30~50 本程度読解する。大量殺人に関する最先端の研究の現在の到達水準について説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

大量殺人に関連した、海外の専門論文を各自が 1 論文 30 分程度で要約して説明し、ディスカッションを 10 分程度行う。毎回、2~5 論文を読解し、合計 50 論文を読むことを目的とする。論文はこちらであらかじめ指定した中から選択する。ひとつの論文は、10~40 ページ程度の英文である。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション、犯罪捜査への心理学の応用	オリエンテーション、プロファイリング研究の現状についての講義
2	大量殺人：大量殺人についてのレビュー論文 1	論文の読解と議論
3	大量殺人：大量殺人についてのレビュー論文 2	論文の読解と議論
4	大量殺人：大量殺人の動機についての研究論文 1	論文の読解と議論
5	大量殺人：大量殺人の動機についての研究論文 2	論文の読解と議論
6	大量殺人：大量殺人犯人の行動パターンについての研究 1	論文の読解と議論
7	大量殺人：大量殺人犯人の行動パターンについての研究 2	論文の読解と議論
8	大量殺人：大量殺人犯人の行動パターンについての MDS 研究 1	論文の読解と議論
9	大量殺人：大量殺人犯人の行動パターンについての MDS 研究 2	論文の読解と議論
10	学会参加とその内容についてのレポート	学会参加
11	大量殺人：ロジスティック回帰分析などを用いた行動予測研究 1	論文の読解と議論
12	大量殺人：ロジスティック回帰分析などを用いた行動予測研究	論文の読解と議論
13	大量殺人：マルチレベル分析を用いた行動予測研究	論文の読解と議論
14	大量殺人：年間読解論文のまとめ	論文の読解と議論

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

毎週 2~5 本の英語論文を読んでいく。受講者の人数によるが、基本的に毎週 1 本程度の論文を読解し、レジュメを作成することが必要となる。毎週、上記のテーマにしたがった論文を探して準備し、十分に精読してレジュメを作成してくること。

【テキスト（教科書）】

すべて専門雑誌論文を使用する。読解予定論文リストは授業時に配布する。

【参考書】

犯罪心理学についての専門雑誌論文を参照する。具体的には授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

(1) 授業での発表

論文を正確に読み解き、要点をまとめて適切にレジュメ化し、手際よく発表する能力について、それぞれ評価する（25%）

(2) 発表論文の選択

多数の論文の中から、興味深い論文を選択できたかどうか評価する（20%）

(3) 授業の参加

授業時における質疑、応答の量と質を評価する（15%）。自発的な発言がないと点数を与えない。

(4) レポート

授業期間内に自分の読んだ(授業内外)論文のレジュメを提出するその量と質で評価（40%）

【学生の意見等からの気づき】

プロファイリングについての最新の知識を習得できるのは日本の大学ではこの授業が唯一であり、受講者の意欲と満足度は非常に高い。

【担当教員の専門分野等】

専門領域 犯罪心理学、社会心理学

研究テーマ 犯罪捜査への心理学的手法の応用

主要研究業績 越智啓太 2015 ワードマップ 犯罪捜査の心理学；越智啓太 2015 恋愛の科学 実務教育出版；越智啓太 2014 ケースで学ぶ犯罪心理学 北大路書房；越智啓太 2008 犯罪捜査の心理学 化学同人；越智啓太ほか 2008 自伝的記憶の心理学 北大路書房

【Outline and objectives】

Read papers on profiling and discuss its contents

PSY500B

学習指導特論

藤田 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学校教育場面はもちろんのこと、現代社会の様々な場面における、情報・知識・技術の他者への伝達を念頭に置き、適切に学習指導を進める際に有益となる学習心理学に関する諸理論について理解を深める。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、この授業の具体的な到達目標である。

1. 記憶・認知に関する理論を理解した上で、実践的な学習指導の計画を立てることができる。
2. 動機づけに関する理論をふまえた上で、実践的な学習指導の計画を立てることができる。
3. 協同学習の考え方を取り入れた、実践的な学習指導の計画を立てることができる。
4. 適切な教育評価の方法を反映させた、学習指導の計画を立てることができる。
5. 上記1～4の要素をふまえた学習指導の計画に沿って、効果的に学習指導を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

前半の授業は主として講義形式であり、取り上げる理論は記憶・認知や動機づけ、協同学習に関するものが中心となるが、ただ理論について概説するというよりも、諸理論を実践的に応用する観点について強調する予定である。それと同時に、学習指導を行う上での、適切な教育評価情報の取り扱いなどの実際的な技術や留意点について習得し、「教えること」と「学ぶこと」を多面的かつ客観的に捉えるために必要な知識や考え方について解説する。

後半の授業で中心となるのは、具体的な学習場面として、高等教育（大学・短期大学）・中等教育（高校・中学）における授業を題材にした模擬授業を行うことである。行う模擬授業の学校の種別や教科は受講生の興味に合わせて比較的自由に選択可能とする予定である。ただし、学習指導特論の授業の教育目標に照らして、単に教科に関する知識を増やすような準備の仕方をするのではなく、授業の方法上の工夫を凝らすことに焦点を当てて準備をすることを求める。

毎回の模擬授業の直後に授業検討会を行い、受講生全員で、当該の模擬授業のよかった点や改善すべき点などを心理学的な視点から討論する。これらによって、各自の教育現場での実践に活かせるような観点を養う。受講生一人につき、一回の模擬授業を行う予定だが、受講生数が多い場合には変更する可能性もある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション：教授・学習心理学をふまえた授業作り	教授・学習心理学の視点から授業を構成することの意義を中心に、この授業の概要と到達目標、評価方法について、担当者が説明する
2	授業計画・指導案について	多様な学習方法を導入し、個人差に配慮した授業計画・授業案作りについて担当者が説明する
3	学習指導のポイント：記憶・認知編	記憶・認知の理論に基づいた教授法の考え方について担当者が説明する
4	学習指導のポイント：動機づけ編	動機づけ理論を応用した授業運営の実践例について担当者が説明する
5	学習指導のポイント：集団作り編	協同学習の考え方に基づいたグループ学習法について担当者が説明する
6	構想発表 1	受講生の構想発表に対して、教科内容と教育目標との整合性についての討論を全員で行う
7	構想発表 2	受講生の構想発表に対して、教材および課題を心理学の理論から見直し、改善の可能性を全員で討論する
8	構想発表 3	受講生の構想発表に対して、学習者の達成度を把握し授業計画を修正するための評価の方法についての討論を全員で行う
9	模擬授業 1	受講生が実際に模擬授業を行い、教育目標が明確に伝わったか、教育目標は適切だったかを全員で討論する
10	模擬授業 2	受講生が実際に模擬授業を行い、個別の指導上の工夫について、理論的な視点から改善策を全員で討論する

発行日：2019/5/1

11	模擬授業3	受講生が実際に模擬授業を行い、授業者と学習者の双方の視点から授業のよい点・要改善点を全員で討論する
12	模擬授業4	受講生が実際に模擬授業を行い、教育目標が明確に伝わったか、教育目標は適切だったかを全員で討論する
13	模擬授業5	受講生が実際に模擬授業を行い、個別の指導上の工夫について、理論的な視点から改善策を全員で討論する
14	総括	この授業全体および各回の教育目標の到達度の確認を行い、この授業の評価について担当者が説明する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 自分の行う模擬授業についての構想案を作成
- 第2回 自分の行う模擬授業に関連した、通年・学期を通した授業計画を作成
- 第3回 本時の内容を、自分自身の模擬授業の計画に反映させるための構想を練る
- 第4回 動機づけに関連した具体的な授業上の工夫を、自分自身の模擬授業のために考案する
- 第5回 模擬授業のための構想発表の準備
- 第6回 模擬授業を行う教科に関する知識・情報の収集、教育目標の見直し
- 第7回 模擬授業内で用いる教材と課題の改善
- 第8回 模擬授業の教育目標と対応した、具体的な評価方法の考案
- 第9回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第10回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第11回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第12回 既発表者は指導案の見直し、修正。未発表者は模擬授業の準備と改善
- 第13回 自分の行った模擬授業の振り返りと、他者の模擬授業からの気づきを整理
- 第14回 今後の多様な教育活動に、この授業で学んだことを活用できるよう、習得したことを振り返る

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也 (2005). 動機づけ理論をふまえた授業運営—京都光華女子大学における導入教育—
溝上慎一・藤田哲也 (編) 心理学者、大学教育への挑戦 第3章 ナカニシヤ出版, pp.79-114.
藤田哲也 (2006). 心理学を活かした教育実践のために 井上智義 (編) 視聴覚メディアと教育方法
ver.2 北大路書房
藤田哲也 (編) (2007). 絶対役立つ教育心理学—実践の理論、理論を実践—
ミネルヴァ書房
その他、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 60 %…授業へ参加し、他者の構想発表・模擬授業に対してコメントすることを評価対象とする。
構想発表 10 %…発表の内容、発表後の質疑応答を評価対象とする。
模擬授業 30 %…授業自体の質、指導案の内容、授業検討会での質疑応答を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

(2017 年度実施のアンケートから) 授業への参加者は 6 名でしたが、正規の履修者は 3 名でした。各自、「教える」という活動を、現在の自分の活動に照らして多くの気づきを得てくれたようで何よりです。特に授業運営についての改善要望はなかったもので、2019 年度も変更なしで望もうと思います。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。
オフィスアワーは、木曜日の 13:30～14:30、場所は BT11 階のスタディールーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

学習指導、教育評価

<研究テーマ>

高等・中等教育における学習指導の在り方について

<主要研究業績>

藤田哲也 (2005). 動機づけ理論をふまえた授業運営—京都光華女子大学における導入教育—
溝上慎一・藤田哲也 (編) 心理学者、大学教育への挑戦 第3章 ナカニシヤ出版, pp.79-114.
藤田哲也 (2006). 心理学を活かした教育実践のために 井上智義 (編) 視聴覚メディアと教育方法
ver.2 北大路書房
藤田哲也 (編) (2007). 絶対役立つ教育心理学—実践の理論、理論を実践—
ミネルヴァ書房

【Outline and objectives】

In this class, students understand various theories concerning learning psychology, which is useful in promoting appropriate teaching with the communication of information, knowledge and technology to others.

PSY500B6

知覚運動論演習

吉村 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知心理学、特に知覚を扱う研究を実施する方法を学びます。

【到達目標】

各自選定した研究テーマに対し、研究文献の講読から始まる研究全体を多角的に捉え、批判に耐えうる研究を実施していくための能力の習得を目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業担当教員が行っている研究テーマとその研究方法の紹介を出発点に、演習形式で各受講者が自らの研究を実施していくプロセスを示し、受講者全員がその進行過程についてクリティカルに議論していくことで授業を構成します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	授業概要の説明	授業の構成と、受講するに当たっての心構えの説明。
2	研究例の紹介	教授者の行っている研究を例に、研究の進め方の解説を行う。
3	研究テーマの検討 (1)	受講者が行おうと考える研究の提示と授業担当者によるコメント。
4	研究テーマの検討 (2)	前回のコメントを踏まえ、研究テーマの確定。
5	関連研究のレビュー (1)	受講者による研究レビューの発表。
6	関連研究のレビュー (2)	受講者による研究レビューの発表。
7	研究法の検討 (1)	方法的観点からの研究実現性の検討。
8	研究法の検討 (2)	方法的観点からの研究実現性の検討。
9	予備実験の計画作成 (1)	小規模実験の実施に向けての計画作成。
10	予備実験の計画作成 (2)	小規模実験の実施に向けての計画作成。
11	予備実験の関連研究の検討 (1)	予備実験の内容に関連する文献の解説。
12	予備実験の関連研究の検討 (2)	予備実験の内容に関連する文献の解説。
13	予備実験の結果の検討 (1)	データの整理と結果の評価。
14	予備実験の結果の検討 (2)	データの整理と結果の評価。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者が行おうとする 3 回目から 8 回目までの研究に関する文献の読み込みと、9 回目から 14 回目までの予備実験の実施は授業時間外の学習として各自が行います。また、授業での発表の準備も授業時間外に行います。

【テキスト（教科書）】

教科書は用いません。

【参考書】

受講者の研究に関連する研究資料の紹介を授業時に適宜行います。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、授業時のディスカッションでの発言 50 %で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

他の受講生の研究について関心を持ち、議論に積極的に関わるための環境作りに努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 知覚・認知心理学

<研究テーマ>

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

<主要研究業績>

- ・吉村浩一 2006 運動現象のタキソノミー：心理学は“動き”をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版
- ・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049-1056.
- ・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

This course deals with perceptual studies and the aim of this course is to help students perform their own study.

PSY500B3

音声言語科学演習

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間は言語を「話す」または「聞く」能力を 3-4 歳までにある程度習得するが、「読む」または「書く」能力はより時間と労力を要する。また、人間同様に流暢に会話ができるコンピュータは未だ完成していない。これはなぜだろうか？ 本授業ではこのような疑問を出発点に、音声言語の認知処理過程について学ぶ。

【到達目標】

音声言語が話し手にどのように産出され、音としてどのような特徴を持ち、聞き手にどのように知覚されるのかについて、説明できるようになることが目標である。また、音声分析ソフトを使って音声言語の特徴を分析できるようになることも目標である。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「音声言語科学演習」においては「DP1」「DP2」に関連、心理学専攻「音声言語科学演習」においては「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連する。

【授業の進め方と方法】

音声言語の発話と知覚の仕組み、音声の物理的な特徴、乳幼児による母国語の知覚能力の発達、成人による外国語音声の学習などについて、言語心理学や音声科学の知見を学ぶ。授業は基本的に講義形式で行うが、音声分析ソフト *Praat* を使った課題や演習を盛り込む予定である。授業の内容や進め方については受講生の人数や理解度・要望に応じて変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、音声言語と文字言語、「言葉の鎖」
2	音声とは	音声の確実性と速さ、音声産出のメカニズム、母音と子音
3	音響音声学の基礎 (1)	音の正体、音の種類、音を可視化する方法、音声のデジタル化
4	音声の音響分析	<i>Praat</i> を使った音声の録音・可視化・編集・分析
5	音響音声学の基礎 (2)	フィルタ、音声産出の音源フィルタ理論、基本周波数、フォルマント周波数
6	母音の知覚	聴覚器官、母音の特徴と知覚、母音の正規化
7	子音の知覚 (1)	音響的不変性の欠如、ローカス理論、音声の符号化
8	音声の再合成	<i>Praat</i> を使った音声の録音・分析・再合成
9	子音の知覚 (2)、カテゴリー知覚	調音点の知覚、声の有無の知覚、分節音と韻律、カテゴリー知覚とは、同定と弁別
10	音声知覚の実験	同定課題と弁別課題の演習
11	音声知覚の発達	生得と学習、乳児の音声知覚、満 1 歳までに起こる変化
12	外国語の音声知覚	成人による外国語音の学習、知覚と産出の関係、外国語音の知覚的同化
13	文脈の影響	トップダウン処理とボトムアップ処理、音声知覚と単語認知のモデル
14	音声知覚言語と社会的認知、総括	話し方と対人認知の関係、授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業にて指示されたテキストの範囲を読み、復習問題に回答し、次の授業にて提出すること。また、音声分析用フリーソフト *Praat* を使った課題を学期中に数回課すので、課題を行い成果を提出すること。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

ジャック・ライアルズ（著）、今富撰子他（訳）（2003）、音声知覚の基礎 海文堂、石川圭一（2005）、ことばと心理 くろしお出版、川崎恵里子（編著）（2005）、ことばの実験室 プレーン出版、重野 純（2003）「音の世界の心理学」ナカニシヤ出版、北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳（2017）、音声学を学ぶ人のための *Praat* 入門 ひつじ書房。

【成績評価の方法と基準】

平常点 20%、課題 40%、期末レポート 40%の割合で評価する予定。原則として、出席が授業の 2/3 に満たない場合、期末レポートの提出がなかった場合、あるいは *Praat* を使った課題の提出がなかった場合は、単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

2017 年度秋学期は、「積極的な工夫がされていた」「理解できた」「受講してよかった」のいずれも 2 名とも「5」と回答してくれ、大変嬉しく思います。授業外学習の時間は 2 名とも「週 2 時間以上 3 時間未満」という回答でした。自由記述はありませんでした。

【その他の重要事項】

授業の内容や運営方法の詳細について説明しますので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学
<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一 (2011). 音声分析ソフトウェア *Praat* を用いた聴取実験：*F0* 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋圭一・川上紗代子 (2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, 123.397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn about the cognitive mechanisms that underlie the processing of spoken language.

PSY500B6

精神生理特論

高橋 敏治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、生理心理学の基礎と、研究論文作成過程で用いられるさまざまな生理指標について、実習も入れて学びます。

【到達目標】

各生理指標が反映する心理状態と、生理指標を心理学で用いることのメリットについての知識を身に付け、生理指標を実際に測定することができるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

生理心理学の基本的なアプローチである、電気生理機器の構造や方法を学びます。実際に機器を使用して、心理状態による各生理指標の変化を体験・確認してもらいます。また講義では、生理指標の応用方法や、各指標の発生機序についても説明します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	生理心理学の基礎と授業の概要についての説明
第 2 回	機器説明	多用途脳波計 (ポリメイト) の説明
第 3 回	心理生理的測定法	心理生理的測定指標の基礎的説明、
第 4 回	脳波	脳波についての基礎的説明、脳波の電極の付け方 (国際 10-20 法) と測定法
第 5 回	脳波測定 1	脳波の測定、脳波パターンと行動の関連についての検討 1
第 6 回	脳波測定 2	脳波の測定、脳波パターンと行動の関連についての検討 2
第 7 回	脳波測定 (周波数解析)	脳波の周波数と意識レベルの関連についての検討
第 8 回	眼球運動図の測定	眼電位法を用いた目の動きの測定
第 9 回	心電図の測定	心電図から心拍数などの測定
第 10 回	心電図から自律神経の解析 1	心電図の R-R 間隔からパワースペクトラム解析の考え方
第 11 回	心電図から自律神経の解析 1	心電図の R-R 間隔からパワースペクトラム解析の実際
第 12 回	事象関連電位 P300 の測定 1	P300 の考え方
第 13 回	事象関連電位 P300 の測定 2	P300 測定の実際
第 14 回	総括まとめ	課題レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

脳波、周波数解析、眼電図、事象関連電位 P300 に関するレポートを課します。各回の授業後には、配布した資料に再度眼を通すとともに、紹介した文献を参考にして、各指標に関する理解を深めること。また、理解できなかった点に関しては、質問できるようにしておくこと。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しません。授業時に必要に応じてプリントを配付します。また、課題に必要な文献はその都度配布します。

【参考書】

堀雄雄著 心理学の世界 基礎編 12 生理心理学、培風館、2008 年
宮田洋 新生理心理学 1~3 巻 北大路書房 1997

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %、レポート課題 50 %により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

7 人の受講者のうち 7 名から回答を頂きました。4 - 5 の段階が、授業の工夫では 100 %、理解できたかで 86 %、履修してよかったかは 100 %と比較的高い評価をしてきていました。課題が多かったので、週 2 時間以上の授業外学習が 72 %と頑張って課題に取り組んでくれたようです。自由記述では、「生理指標を経験できて本当に勉強になった」「公務員試験のことも考えて実習を組んでくださったのもありがたかった」など。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で授業を開催することが多いので注意して下さい (BT1113)。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
睡眠科学
精神保健学
<研究テーマ>

概日リズム睡眠障害
眠気とパフォーマンス
〈主要研究業績〉

高橋敏治 (2017) . 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

高橋敏治 (2014) . 概日リズム睡眠障害 - 3) 時差型の病態 - . 睡眠医療 8, 197-201.

高橋敏治 (2013) 概日リズム睡眠障害-時差型 (時差障害) -. 日本臨床, 71 巻増刊号 5, 416-419.

高橋敏治 (2012) 時差障害, 交代制勤務障害. 野沢胤美編, 睡眠医学アトラス-検査と臨床-. 東興交易 (株) 医書出版部, 東京, pp42-48.

高橋敏治 (2012) 精神疾患による不眠. 千葉茂編, 意識と睡眠. 脳とこころのプライマリケア 5. (株) シナジー, 東京, pp571-579.

Takahashi T, Kuwabara Y, Funai A, Matunaga N, Okuro M, Nishino S. (2009) Effects of Intermittent Bright Light Exposure during Daytime on Daytime Sleepiness, Cognition, and Performance. Sleep 32, A415.

【Outline and objectives】

In this lesson, we will learn about the fundamentals of physiological psychology and various physiological indicators used in the process of preparing research papers, with practical training.

PSY500B6

認知学習過程演習

藤田 哲也

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

記憶を中心とした認知心理学および、主に学習過程に焦点を当てた教育心理学の知見を活かして、的確な先行研究の概観と批判的な読み方を学び、効果的にプレゼンテーションを行う。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

1. 多数の先行研究を読んだ上で、その分野における研究課題を明確に指摘できる。
2. 個々の先行研究を批判的に読むことで、問題点・改善点を挙げることができる。
3. 上記1, 2の内容を、適切でわかりやすい方法で他者に伝達できる。
4. 他者の発表に対して、即応的に的確な評価を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

自分自身および先行研究における研究成果を、学術論文として発表することと、口頭でプレゼンテーションすることを具体的な作業課題として設定した演習である。

質の高い研究を行うために必要な、先行研究の批判的な読み方、研究課題の設定のしかたについて教員が解説した上で、受講生自身が実際に発表し、全員で討論を行う。

具体的な授業の進め方は次の通りである。まず最初の5回の授業で、文献の探し方や発表のしかたについて教員が説明を行う。次に、受講生各自が興味を持っている研究領域の論文を複数読んだ上で、その領域のレビューを行い、発表を行う。その際には単に論文紹介するだけでなく、批判的な目を持って、自分自身の視点でレビューすることが求められる。発表後の質疑応答の時間に、論文の読み方、レビューを行う上での注意点、発表のしかたなどの技能的な面についても教員から随時アドバイスをを行うが、受講生相互で活発にコメントし合うことも期待している。最終的に、各自がレビュー発表によって明確になった研究課題を修士論文の構想として発展させ、それを発表する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	この授業の概要と到達目標、評価方法の説明
2	文献の探し方 (図書館ガイダンス)	法政大学図書館における蔵書検索と、書庫の活用方法について
3	発表のしかた: レジューメ	認知心理学の知見をふまえたレジューメの作り方について
4	発表のしかた: プレゼン	発表のしかた、パワーポイントの使い方、発表に対する自己評価、現時点での構想発表
5	レビュー発表に求めること	レビュー発表のポイント、批判的思考、発表の準備
6	発表準備	評価用紙を用いた評価の方法、発表の準備
7	レビュー発表1	レビュー発表、発表に対する質疑応答、発表に対する評価・コメント
8	レビュー発表2	レビュー発表、発表に対する質疑応答、発表に対する評価・コメント
9	レビュー発表3	レビュー発表、発表に対する質疑応答、発表に対する評価・コメント
10	レビュー発表4	レビュー発表、発表に対する質疑応答、発表に対する評価・コメント
11	修論構想発表1	修論構想発表、発表に対する質疑応答、発表に対する評価・コメント
12	修論構想発表2	修論構想発表、発表に対する質疑応答、発表に対する評価・コメント
13	修論構想発表3	修論構想発表、発表に対する質疑応答、発表に対する評価・コメント
14	総括	授業の到達目標の確認、授業で修得できたことの振り返り、成績評価について、今後の課題

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

第1回 自分の興味ある研究テーマを明確にして、文献検索のためのキーワードを準備する

第2回 自分の興味ある研究テーマの文献を収集する

第3回 先行研究の熟読、レジューメの構想を練る

第4回 先行研究の熟読、レジューメとパワーポイントによる発表の準備

- 第5回 発表の構想の見直し・確認、発表準備
 第6回 自分の発表に対する事前の自己評価、発表準備
 第7回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備、未発表者はレビュー発表の準備
 第8回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備、未発表者はレビュー発表の準備
 第9回 既発表者は発表の振り返りおよび修論構想発表の準備、未発表者はレビュー発表の準備
 第10回 レビュー発表の振り返り、修論構想発表の準備
 第11回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正、未発表者は修論構想発表の準備
 第12回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正、未発表者は修論構想発表の準備
 第13回 既発表者は発表の振り返りと修論構想の修正、未発表者は修論構想発表の準備
 第14回 発表全体の振り返りと修論構想の修正

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房
 そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 %…授業に参加した上で、他者の発表にコメントしたり、掲示板に書き込むことを評価対象とする。
 レビュー発表と修論構想発表 30 %…発表の内容、発表資料の質、発表のしかた、発表後の質疑応答を評価対象とする。
 他者の発表への評価 20 %…他者の発表に対して批判的に・的確に評価できているかどうかを評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

2017年度は「履修してよかった」「授業の工夫」「理解度」いずれも 5.00 満点だったが、2018年度は7名中1名が満点をくれませんでした。そのこと自体はもちろん事実として受け止めるのですが、どこが不足していたのか、自由記述などでわかるように書いてもらえると助かります。読んだ限り、要改善点が把握できませんでした。それはさておき、残りの人からは高評価を得てよかったです。授業外学習時間も全員が2時間以上、4名は3時間以上でした。この授業は終わりましたが、掲示板での積極的な議論をスタディールームでも続けてもらえたらと思います。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。
 オフィスアワーは、木曜日の 13:30～14:30、場所は BT11 階のスタディールーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2章 学文社, pp.22-37.

【Outline and objectives】

In this class, students critically review and review prior research by applying cognitive psychology focusing on memory and knowledge of educational psychology focusing mainly on learning process. Also, students will learn how to make effective presentations.

PSY500B6

臨床心理特論

中村 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

概要：主な臨床心理学のアプローチについて、報告・質疑応答形式で講義を行う。また具体的な事例を通して、心理・教育的支援について検討を行う。さらに学校との協働や他機関との連携をふまえ、校内支援チームの構築やケアマネジメントについても理解を深める。

目的：臨床心理学の知識や技術を用いた児童・生徒に対する支援について、具体的な事例をもとに検討することにより、学校現場における心理・教育的支援の方法を習得する。

【到達目標】

目標：臨床心理学を用いた児童生徒・保護者の支援、教員や専門機関との連携について学習する。

- ①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる。
- ②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
- ③上記2点について、考察したことを表現し、記述することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

講義及び授業内の発表を通して学習する。理解を深めるための演習も適宜とり入れていく。演習後にはリアクションペーパーの記述を求める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	臨床心理学とは
第2回	臨床心理学の倫理・学校現場における臨床心理学	臨床心理学の実践における倫理について学ぶ。
第3回	学童期・思春期の心と行動	児童・生徒が抱えやすい学童期・思春期の問題とについて学ぶ。
第4回	精神分析的アプローチ	精神力動的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。また、事例を提示し、その適用法についても考察する。
第5回	ロジャーズ学派	来談者中心的アプローチについて報告・質疑応答形式で理解を深める。傾聴について体験的に学ぶ。
第6回	行動理論	行動理論について報告・質疑応答形式や事例を通して理解を深める。
第7回	認知行動療法	認知行動療法について報告・質疑応答形式で理解を深める。また、認知的再体制化のプロセスについて事例を通して学ぶ。
第8回	交流分析理論	交流分析理論について報告・質疑応答形式で理解を深める。
第9回	アセスメントの方法	アセスメントの目的・内容・方法と検査倫理について学ぶ。
第10回	ケアマネジメントと校内チーム支援	学校現場におけるチームアプローチについて、事例を通して理解する。
第11回	児童生徒に対する支援—発達障害、不登校の事例	学校現場における支援の実際について、事例を通して学ぶ。
第12回	他機関との連携—児童虐待の事例	学校と他機関との連携の必要性について、事例を通して学ぶ。
第13回	心理教育的プログラムの実践 コミュニケーション・スキルの習得・いじめの防止	学校現場で有用な心理教育的アプローチについて、事例を通して学ぶ。
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 配布された資料を事前に読む
- 発表担当の際は、文献を読み発表資料を作成する。
- 演習を行った際はミニレポートを提出する。

【テキスト（教科書）】

教場で資料を配布する

【参考書】

氏原寛・成田善弘（1999）. 臨床心理学①カウンセリングと精神療法 培風館

乾吉佑・亀口憲治・東山紘久・氏原寛（編）（2005）. 心理療法ハンドブック 創元社

鐘幹八郎・名島潤慈 (2010). 心理臨床家の手引き 誠信書房

【成績評価の方法と基準】

- ①臨床心理学の知識や技術を活用した児童生徒・保護者の支援について考えることができる
 - ②臨床心理学の知識や技術を活用し、支援に必要な教員との協働について考えることができる。
 - ③上記2点について、考察したことを表現し、記述することができる。
- 3つの到達目標に対する成績評価は主に以下とする。
- ①②平常点・グループ討議への参加態度(40%)、文献報告の内容と作成資料(30%)
 - ③ミニレポート課題(30%)

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【臨床心理学】

- <専門領域>教育心理学
- <研究テーマ>中学校における心理教育的プログラムの開発・実施
- <主要研究業績>
- 中学校におけるいじめ抑止を目的とした心理教育的プログラムの開発とその効果の検討/教育心理学研究 62 - 2 /日本教育心理学会/共著/2014
- 「傍観」に着目したいじめ介入プログラムの開発とその効果の検討/早稲田大学/単著/2017.01

【Outline and objectives】

Overview: The lecturer will explain major approaches of clinical psychology. Each participant would make his/her presentation, and questioning and answering would follow. Participants would consider how to give effective psychological and educational support by analyzing particular cases.

PSY500B6

発達心理特論

渡辺 弥生

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

心理学研究において発達の視点をもつことにどのような意義があるかについて理解する。そのために、これまでの発達心理学研究の体系的な流れを捉える。特に、乳幼児期、児童期、青年期に焦点を当てるとともに、学校心理士の資格に必要な基盤としての発達心理学および、認知・思考、自己意識、社会性の発達を重点的に理解する。その上で、各自の今後の研究へのリサーチクエストを考える。

【到達目標】

- 上記の授業テーマの枠組を意識した上で、
- ①発達心理学研究史に残る著名な理論を理解し説明することができる。
 - ②身につけた知識をもとに発展的な課題について討議することができる。
 - ③知識や理解をもとに自分の研究に応用できるよう計画することができる。
- を到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

従来の先行研究で取り上げられてきた主要テーマのもとに、著名な理論を理解していく。さまざまな理論がどのような研究者によって、どういった方法で提唱されるに至ったのかを詳しく理解することが求められる。本講義では、発達心理学の中でも特に人間の行動の発達に関する理論と研究に焦点を当てる。毎回、ある研究者に焦点を当て、研究の経緯、方法など背景となる点を紹介する。発表担当者は、参考文献や自身で調べた内容を取り入れ、その研究者の研究を他の受講者に説明する。全受講者が自身の研究や経験を重ねながらいくつかのトピックで討議する。これにより、各自が研究知識を広げ、研究態度を学び具体的な研究計画が立てられる力を獲得する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。 自己や対人関係のあり方については、各時間で言及する。
2	認知の発達 <i>Cognitive Facets</i>	<i>Piaget & Inhelder(1969)</i> : <i>Crain(2011)</i> の6章をもとに認知発達の理論を理解し、討議する。
3	初期の対人関係 <i>Early Relationships</i>	<i>Bowlby(1982)</i> : <i>Crain(2011)</i> の3章をもとに、乳幼児期の愛着理論を理解し、討議する。
4	成熟に関する理論 <i>Maturation</i>	<i>Gesell(1952)</i> : <i>Crain(2011)</i> の2章をもとに、子どもを育てることと成熟の関係を理解し、討議する。
5	発達と教育との関係 <i>Early Education in the Home</i>	<i>Montessori(1949):Crain(2011)</i> の4章をもとに、モンテッソリー教育をもとに教育との関係を考える。
6	学習理論 <i>Learning Theory</i>	<i>Pavlov(1928), Watson(1936), Skinner(1953) Crain(2011)</i> の8章をもとに人間の行動のメカニズムを考える。
7	道徳性の発達 <i>Moral Development</i>	<i>Kohlberg(1958): Crain(2011)</i> の7章をもとに、道徳性の判断や行動の発達について討議する。
8	社会的学習理論の理解 <i>Social Learning Theory</i>	<i>Bandura(1962):Crain(2011)</i> の9章をもとに、どのように攻撃性や向社会的行動が獲得されるか理解する。
9	記憶、言語、遊びの発達 <i>Social-Historical Theory</i>	<i>Vygotsky(1930): Crain(2011)</i> の10章をもとに、心理学的な道具と行動の関係について学ぶ。言語の役割について考える。
10	精神分析理論と発達 <i>Psychoanalytic Theory</i>	<i>Freud(1910):Crain(2011)</i> の11章をもとに、精神分析理論における発達理論を学ぶ。
11	ライフサイクル <i>The Eight Stage of Life</i>	<i>Erikson(1968):Crain(2011)</i> の12章をもとに、生涯発達の視点から人間の一生を考える。
12	分離と固体化 <i>Separation / Individuation</i>	<i>Mahler(1968) :Crain(2011)</i> の13章をもとに、母親からの分離について考え、討議する。
13	友だち関係と友情 <i>Friendships and Peers</i>	<i>Hartup(1998):</i> プリントをもとに、友情の発達や友だち関係の形成について考える。

- 14 親密な関係の形成
Close Relationship Collins & Sroufe(1999):プリントを
もとに、人間の性の発達や親密な関係
について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1. プレゼンテーションの準備：必ず上記理論提唱者についてプレゼンができるよう準備する。必要な内容は、a. 理論やアイデア、b. 個人の生き方と研究の関係、c. 各理論が反映された最近の研究紹介、d. 学問の応用について、e. 発達についての個人の考え（キーとなるポイント）。事前に、担当教員にメールで提出しておく。当日の発表の要約（A4 2枚以内）。ただし、昨年と同じ発表方法にせず、今年は新しいスタイルを考える。

2. 担当していない週では、その週のトピックに関する討論に参加できるようにテキストや論文を読んでおく。また、最終的に提出するレポート課題を適宜準備しておく。

【テキスト（教科書）】

Crain, W. (2011). *Theories of Development: Concepts and Applications* およびプリント。受講者の人数や専門によって選ばれる発達理論は異なる。他の研究者の自伝を活用する可能性はある。

【参考書】

渡辺弥生他(編)(2008). 原著で学ぶ社会性の発達 ナカニシヤ出版
二宮克美・渡辺弥生(編)(2017)『発達心理学』北大路書房

【成績評価の方法と基準】

平常点（単に出席という意味ではなく、毎回自分の意見を述べることを基準とする）を
80%、担当した部分のレジュメ作成とパワーポイントでの発表を20%とする。

【学生の意見等からの気づき】

評価も高く時間外の勉強を動機づけることができたと考えられるが、発表内容の厚みについて個人差が見られた。また、発表者が集団で討論できるようになりサーチャクエスションを見つけていない場合があることから、単に調べたことを発表するというのではなく、批判的な視点や発展的な意識をもち、討論できるような水準で発表できるよう支援していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。毎回機器を授業に間に合うよう準備することを徹底したい。

【その他の重要事項】

シラバスの内容を変更する場合もある。授業で説明する。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home>

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開
<主要研究業績>

- (1) 世界の学校予防教育 2013 金子書房
- (2) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011 光文社
- (3) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店
- (4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版
- (5) 幼児・児童における分配の公正さに関する研究 1992 風間書房、など。

【Outline and objectives】

We will attempt to understand the significance of having a developmental perspective in psychological research. Therefore, we will attempt to understand the systematic flow of developmental psychology research to date. In particular, we will focus on infancy, childhood and adolescence, and emphasize developmental psychology and development of cognition/thinking, self-consciousness, and social competence as the basis necessary for the qualification of school psychologist. Based on this, students will consider research questions related to their future research.

PSY500B6

障害児心理特論

奥田 健次

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間は、対人的なかかわりを通して、人間らしい社会的関係を生み出し、社会でよりよく生きるために調整する力が育てられる。しかし、自閉症スペクトラムなどの障害のある子どもは、適切な対人関係をもつことに大きな問題をかかえることが多い。障害のある子どもをもつ家族に対する支援や指導、学校に対する支援やコンサルテーションなどが、当事者と当事者を取り巻く人々に対する包括的な支援について考える。

【到達目標】

障害のある子どもの知的発達、社会性の発達、行動情緒の問題について、実践的な視点から具体的に論じることができる。
アセスメントの方法、実際の支援の方法について、具体的事例を通じて実践的な方法を討議し、いくつかのケース課題のワークショップを通して心理学的援助の方法を検討し、発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

「障害がある」とはどういうことか。逆に「障害がない」とはどういう状態のことをいうのか。これだけでも、大きなテーマであるといえる。しかし、哲学的な考察を深めるような授業ではなく、現実的な課題となっている「専門的支援」について、実践的に役立つ知識と技能を具体的な事例を通して学ぶ。そのために、基本的には講義形式で進められるが、グループワークや発表、討論の機会を設けて、受講者に能動的な学習ができるようはたらきかける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	障害の概念と特別な教育ニーズおよび合理的配慮	「障害」とは何か、国際障害分類の定義について説明する。また、特別な教育ニーズについて具体例を挙げながら説明する。「合理的配慮」について具体事例を挙げて検討する。
第2回	知的障害児の発達と心理	知能の定義、知的障害について説明し、教育や発達の支援について説明する。また、支援方法についてのワークを行う。
第3回	視覚障害・聴覚障害児の発達と心理	視覚障害および聴覚障害について、発達的な特徴と教育方法を説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第4回	肢体不自由・病虚弱児の発達と心理	肢体不自由・病虚弱について、発達的な特徴と教育方法を説明する。また、特別支援や家族支援上の課題について説明する。
第5回	自閉症児の発達と心理	自閉症について、発達的な特徴と教育方法の変遷について説明する。支援の具体的な方法や課題についてのワークを行う。
第6回	高機能自閉症・アスペルガー障害の発達と心理	高機能自閉症・アスペルガー障害について、発達的な特徴と教育方法を説明する。また、青年期問題や就業支援について説明する。
第7回	LD・ADHD 児の発達と心理	LD・ADHDについて、発達的な特徴と教育方法を説明する。学校教育上の教育支援や家族支援上の課題について説明する。
第8回	特別支援教育とは	特別支援教育について、従来の特殊教育からの変遷や目的・特徴の差違について説明する。また、ガイドラインのねらいについて説明する。
第9回	実態把握と相談支援	特別支援教育において行われる実態把握と相談支援の具体的な方法について説明する。支援システムの構築の実例について発表する。
第10回	個別の指導計画と個別的教育支援計画	個別の指導計画と個別的教育支援計画について実際の計画案から説明する。また、問題のある計画の改善についてのワークを行う。
第11回	校内委員会と支援体制	校内委員会と支援体制について、機能的な組織の在り方について説明する。また、学校と家庭の連携・協働における課題について説明する。

第12回	特別支援教育（児童期の支援事例）	小学校における特別支援教育の支援事例を説明し、仮想事例から支援計画を検討して発表する。
第13回	特別支援教育（青年期の支援事例）	中学校における特別支援教育の支援事例を説明する。また、高等学校における特別な教育ニーズのある生徒への支援課題について説明する。
第14回	学校コンサルテーション、まとめ	特別支援教育で専門的な支援者に求められる学校コンサルテーションについて説明する。また、これまでの講義のまとめと講評を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日常生活上の「障害」について、具体的な実例を考えておく。知的障害、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由・病虚弱の教育支援方法について調べておく。自閉症についての発達的な特徴について調べておく。学校で求められる合理的配慮の実例を考えておく。文部科学省「特別支援教育」ガイドラインの目次部分を、各自で準備し、調べておく。個別の指導計画と個別の教育支援計画の見本を、教科書や専門サイトなどから、各自で準備し、調べておく。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。

【参考書】

奥田健次（編著）教師と学校が変わる学校コンサルテーション。金子書房。2018年。

【成績評価の方法と基準】

集中講義であるため出席基準（4/5以上の出席）を満たしていることを前提に、授業参加40%、グループ発表30%、テーマ毎に実施するミニクイズ30%

【学生の意見等からの気づき】

授業改善のための意見を聞かせて下さい。

【学生が準備すべき機器他】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

応用行動分析学、特別支援教育、行動療法

<研究テーマ>

自閉症児への応用行動分析学による指導、自閉症児の「心の理論」、特別支援教育と学校コンサルテーション、家族支援とペアレントトレーニング、行動コーチング

<主要研究業績>

仁藤二郎・奥田健次（2013）嘔吐不安を訴えるひきこもり男性の食事行動への介入：エクスポージャーにおける行動アセスメントと介入の評価。行動分析学研究, 27(2), 80-91.

奥田健次（2012）メリットの法則－行動分析学・実践編。集英社。

奥田健次・小林重雄（2009）自閉症児のための明るい療育相談室－親と教師のための楽しいABA講座。学苑社。

奥田健次（2006）症例研究の方法。河合伊六（監修）、辻下守弘・小林和彦（編）、リハビリテーションのための行動分析学入門（pp.37-49）。医歯薬出版株式会社。

奥田健次（2005）不登校を示した高機能広汎性発達障害児への登校支援のための行動コンサルテーションの効果－トークン・エコノミー法と強化基準変更法を使った登校支援プログラム－。行動分析学研究, 20(1), 2-12.

奥田健次（2001）認知発達と言語行動：「心の理論」研究から。日本行動分析学会（編）、浅野俊夫・山本淳一（編）、ことばと行動：言語の基礎から臨床まで（pp. 189-210）。ブレン出版。

【Outline and objectives】

Children with disabilities such as Autism Spectrum Disorder (ASD) often have serious problems in human interpersonal relationships. Think about support for people surrounding the parties, such as support for families with children with disabilities, support and consultation to schools, and so on.

PSY500B6

人格心理特論

大森 美香

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人格（パーソナリティ）は、行動にみられる個人差を説明する概念であり、パーソナリティ理解は、教育・産業・臨床など生活のあらゆる場面での個人理解に必要不可欠である。本授業の目的は、以下の2点にある。1）人間の心理・行動の個人差およびそのメカニズムに関するアプローチを理解する、2）パーソナリティ特性と個人の行動、自己形成、また精神的健康の関連について最新の知見に触れ考察する。この目的に到達するため、古典的なパーソナリティ理論に加え、パーソナリティに関する最新の人間科学、社会科学、自然科学のアプローチについても学習する。授業は、学生によるプレゼンテーションの形式を中心に講義および討論を行いながら進める予定である。パーソナリティについてさまざまな角度からアプローチしながら、人間行動に関する関心、個人の尊厳、現代において個人がよりよく生きるとはどのようなことかについての考察を深めていただきたい。

【到達目標】

授業の主要な到達目標は、以下の2点である。1）代表的なパーソナリティ理論およびアプローチを理解すること、2）パーソナリティや人間行動に関する広い視野を獲得し考察すること、3）授業を通して、ライティングやプレゼンテーション、討論において、自分の考えをわかりやすく伝える技術を獲得すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

学生による発表と討論を中心に、講義を交えながら、授業を進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス パーソナリティ理論の概観	授業概要説明：パーソナリティとは何か：パーソナリティの主要理論の概観
第2回	パーソナリティ心理学：人間科学、自然科学、社会科学的アプローチ	パーソナリティについての、心理生物社会的アプローチについて理解する
第3回	パーソナリティ理論(1)：心理療法への応用	パーソナリティの3大理論の心理療法にどのように応用されているのかレビューする。
第4回	パーソナリティ理論(2)：類型論と特性論	類型論と特性論の差異：パーソナリティ理論の歴史的展開
第5回	パーソナリティを「測る」	心理学的測定法、心理検査法（質問紙法、投影法）
第6回	パーソナリティの物語的把握	ナラティブアプローチによるパーソナリティ理解
第7回	生命現象としてのパーソナリティ	パーソナリティに関する生物学的規定因
第8回	パーソナリティの発達的な変化	パーソナリティの発達的な変化に関する最新の知見をレビューする
第9回	パーソナリティの相互作用論	パーソナリティに関する遺伝と環境の要因の相互作用
第10回	認知・感情・動機とパーソナリティ(1)：認知・感情とパーソナリティ	感情および認知的特徴に及ぼすパーソナリティの影響
第11回	認知・感情・動機とパーソナリティ(2)：動機とパーソナリティ	動機づけに及ぼすパーソナリティの影響
第12回	文化・社会とパーソナリティ	社会文化的要因がパーソナリティに及ぼす影響
第13回	さまざまな生活領域（家庭、学校、職場）や健康とパーソナリティ	各受講生の研究関心領域とパーソナリティの関連についての学生の発表
第14回	まとめ	進度調整および統括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業該当箇所のテキストの購読、課題への対応、発表準備、

【テキスト（教科書）】

『パーソナリティ心理学』榎本博明・安藤寿康・堀毛一也〔著〕有斐閣

【参考書】

『ヒルガードの心理学』（金剛出版（16版が最新ですが、図書館などで入手可能な版で結構です）

【成績評価の方法と基準】

平常点30%、発表40%、期末レポート30%

【学生の意見等からの気づき】

これまでの授業で、毎回の授業で扱う範囲が多いとの意見がありました。大学院では、既存の知識や理論のインプットにとどまらず、批評的にとらえ考察を深化することが求められ、そのため概略を理解しておくことは必須と考えています。大学院での少人数での演習形式の授業では、知識理解はもちろんのこと、討論や発表スキルを確実に高めることが期待できます。

【学生が準備すべき機器他】

発表時の配布資料

【その他の重要事項】

受講にあたっては、学部の大綱レベルの心理学の授業を受講済みであることを前提としています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>健康心理学

<研究テーマ>健康行動、ボディイメージ、食行動

<主要研究業績> Omori, M., Yamazaki, Y., Aizawa, N., de Zoysa, P. (2016). *Thin-ideal internalization and body dissatisfaction in Sri Lankan adolescents. Journal of Health Psychology. Online First.*
Omori, M., Yamawaki, N., & McKyer, E.L. (2015). *A Comparative study of smoking in American and Japanese adolescents: Self, social influences, and health beliefs. International Journal of Adolescent Mental Health and Addiction.13, 345-360.*

【Outline and objectives】

Personality pertains to individual difference in human behaviors. In order to understand individuals in academic, industrial, and clinical setting, it is inevitable to understand personality. Objectives of this course are twofold: 1) to understand fundamental theories on individual differences underlying psychological processes and behaviors; 2) to learn and discuss most updated findings on associations between personality and self-perception, behaviors, and mental health. In order to accomplish these objectives, this course covers recent theories and findings of personality from biopsychosocial perspectives as well as traditional theories. Classroom activities involves both students' presentations and lectures.

PSY500B6

言語心理特論

福田 由紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

読解力とは何か？それを伸ばすために何をしたらよいか？について、心理学的な観点から検討することが本授業のテーマである。具体的には、文章読解のプロセスやそれに影響する要因について学習をする。また、日本やそれ以外の国で行われている指導法について、模擬授業を通して体感する。それらをもとに読解力を高めるためにどのようにしたらよいかを考える。

【到達目標】

- ①文章読解のプロセスを理解し、説明できる。
- ②文章読解に影響する要因に関する文献を探すことができる。
- ③文章読解に影響する要因について理解し、説明できる。
- ④日本とそれ以外の国で行われている読解力向上の指導法を理解し、説明できる。
- ⑤読解力向上のための指導法を開発する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業の前半は日本とUKで使用されている学習指導方法にそって、模擬授業を行う。その後、読解のプロセスや読解力の定義、読解力に影響を与える要因に関する文献を講読し、発表を行う。授業の最終段階では、各自が考える読解力の定義とそれを向上させるための指導方法を発表する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。グループ分け。
第2回	日本式模擬授業1	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第3回	日本式模擬授業2	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第4回	UK式模擬授業1	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第5回	UK式模擬授業2	指導本にしたがって、模擬授業を行う。最後に、読解力のどの側面を伸ばす意図があるのかを発表する。
第6回	読解力を伸ばすための指導法の日英比較の発表	模擬授業を通して実感したUKと日本の目指している読解力の相違点と共通点を比較検討した結果を発表する。
第7回	読解力に影響する要因に関して考える1：読解力の発達の様相	読み書きの発達の様相に関する論文を全員が読み、担当者が説明する。
第8回	読解力に影響する要因に関して考える2：語彙量、ワーキングメモリ	読解力に影響を与える要因として語彙量とワーキングメモリを取り上げる。具体的には、それらの要因がどのように読解力に影響を与えるかの概略を担当者が説明する。
第9回	読解力に影響する要因に関して考える3：認知・思考の発達	読解力に影響を与える要因として認知・思考を取り上げる。具体的には、文章理解時にどのような推論をしているのか、発達の観点に関して概略を担当者が説明する。
第10回	読解力に影響する要因に関して考える4：文書の理解	読解力に影響を与える要因として非連続型テキストである文書の理解を取り上げる。具体的には、文書の理解と文章の理解の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第11回	読解力に影響する要因に関して考える5：PISAの読解力	PISAが提案している読解力と、日本の教育で目指している読解力の相違や共通点に関して概略を担当者が説明する。
第12回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表1	読解力の定義を明確にし、それを伸ばすための方法を発表する。その際、対象はだれか、具体的な方法を発表する。
第13回	私が考える読解力の定義とその伸ばし方についての発表2	読解力の定義を明確にし、それを伸ばすための方法を発表する。その際、対象はだれか、具体的な方法を発表する。
第14回	講評会	12回と13回で行った発表に関して全員で講評する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回～第4回 模擬授業を行うための準備を行う。
 第5回 指導法の日英比較発表の準備を行う。
 第6回～第10回 発表者は論文の発表準備を行う。それ以外の院生は、発表予定の論文を読み込んでくる。
 第11回・第12回 次週の発表の準備を行う。
 第13回 授業での発表や議論を振り返り、講評を作成する。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しない。毎授業時にプリントを配付する。また、課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】

福田由紀（編）（2012）. 言語心理学入門 培風館
 大村彰道（監修）（2001）. 文章理解の心理学 北大路書房

【成績評価の方法と基準】

発表 40%、発表への質問・コメント 30%、討論への参加 30%などを総合的に評価する。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

2017年度の授業改善アンケートより。

この授業では、今まで自分が受けてきた国語の授業を振り返り、「読解力とは何か？」ということをも自分なりにまとめて発表しました。振り返る際に、国語の指導案に沿った模擬授業と UK の指導案に沿ったそれを模擬授業として体験してもらいました。同じ国語の授業でも、読解力のとらえ方が異なっていることに驚いたのではないのでしょうか。当たり前と思っていることが、そうでもないことと批判的に考えるきっかけになるのでは？ 自分で考え、工夫して発表する形式の授業はどれも好評です。

【その他の重要事項】

グループ分けや発表論文の割り当てをするので、受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

なお、心理学専攻の大学院生は、この授業の履修単位を学会連合資格「学校心理士/補」の受験資格として申請できます（領域：「3. 発達心理学の領域」）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割
 <主要研究業績>

①福田由紀・菟原遥・菊池理紗（20018）. 言語心理学で何を学べるか？—言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

②福田由紀・佐藤志保（2017）. ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.

③福田由紀・土清水咲菜・荒井弘和（2016）. 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？ 法政大学文学部紀要, 73,99-108.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

What is the text comprehension? What should I do to lengthen it? It is the theme of this class to examine from a psychological point of view. Students will be expected to perform a trial lesson and make a presentation about methods to promote text comprehension.

PSY500B6

精神保健特論

高橋 敏治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

1. 学校精神保健に必要なそして基本的な基礎知識を習得します。
2. 学校現場で生じる具体的なケースを通したメンタルな問題の見分け方やアプローチの仕方を学びます。精神科医として 35 年以上活動している臨床現場での経験をもとに、学生が知っておくべき臨床の知識、対処法や予防法を取り上げます。

【到達目標】

1. ライフサイクルと学校精神保健の関係を説明し、学校精神保健と関連する法律や関係機関との連携機関の仕方を具体的に述べるができるようになること。
2. 臨床場面でもっとも使用頻度の高い DSM-V を各障害について調べて、その診断基準を使用し、運用方法について具体例を通してながら実際に示すことができるようにすること。
3. 学校心理士の実践的な活用に向けた精神保健学の知識や技能を習得し、具体例に即して対策や解決策を提示できるようにすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

学校保健学や精神保健学での基本問題を、具体的な症例などを交えながら、障がいの理解と同時に関連機関との連携の仕方を学びます。特に学童期に顕在化しやすい不安障害、パニック障害、強迫障害、摂食障害、解離性障害、そして青年期後期以降の統合失調症、気分（うつ病）性障害、人格障害、ストレス関連障害などをライフサイクルの観点から取り上げます。自殺、不登校、いじめ、児童虐待、引きこもりなどのトピックスについても理解を深め、具体例を通して実際の運用に触れながら学びます。その過程で学校精神保健の現場でのケース、実際の場面での困難事例などの話を取り混ぜながら、実践に即した対策や解決策を考えて行きます。その過程で学校精神保健の現場でのケース、実際の場面での困難事例などの検討をし、実践に即した対策や解決策を個人、あるいはグループで考えて行きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーションと学校精神保健の基礎	授業の目的と方法の確認します。精神保健学の歴史・基礎知識・現状や問題点を、担当者が説明します。
第2回	学校教育の基盤としての精神保健学的なアセスメントと援助について	心理面・行動面の問題で学校生活の困難をもつ児童生徒が、良質の学校生活を送れるように、アセスメントの仕方と援助の方法の概要を、担当者が説明します。
第3回	精神保健学の症候とその見かた—表情・行動・思考—	実際にこころと行動の問題がどのように分類・整理されるかを DSM-V を用いながら表情・行動・思考などの面を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第4回	精神保健学の症候とその見かた—感情・記憶・意識—	実際にこころと行動の問題がどのように分類・整理されるかを DSM-V を用いながら感情・記憶・意識などの面を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第5回	学校における児童生徒の問題—家庭内暴力・虐待—	学校現場で児童生徒の問題としてよくみられる家庭内暴力・虐待の問題について、分担と決めて発表し、全員で検討します。
第6回	学校における児童生徒の問題—不登校、いじめ、非行—	学校現場で児童生徒の問題としてよくみられる不登校、いじめ、非行の問題について、分担と決めて発表し、全員で検討します。
第7回	学校における精神保健の実際の問題点—発達障害・注意欠陥障害—	DSM-V のテキストとケースを基に、学校でみられる発達障害・注意欠陥障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第8回	学校における精神保健の実際の問題点—不安障害・適応障害—	DSM-V のテキストとケースを基に、学校でよくみられる不安障害・身体表現性障害・適応障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。
第9回	学校における精神保健の実際の問題点—素行障害・人格障害—	DSM-V のテキストとケースを基に、学校でみられる素行症や人格障害を分担と決めて発表し、全員で検討します。

- 第10回 学校における精神保健の
実際の問題点—統合失調
症・気分障害—
- 第11回 多様な臨床心理学的アプ
ローチ精神分析的（力動
的）アプローチ、来談者
中心的（パーソンセン
タード）アプローチなど
- 第12回 多様な臨床心理学的アプ
ローチ認知行動論的アプ
ローチ、システム論的ア
プローチ、マインドフル
ネスなど
- 第13回 学校・家庭・地域におけ
る精神保健活動の連携・学
校・家庭・地域における
精神保健活動の実際・連
携の仕方
- 第14回 実際の学校現場のケース
を基に問題点のアッセ
シメント・症状のとらえ方・
専門機関の連携の仕方、
まとめ
- DSM-Vのテキストとケースを基に、
学校でみられる統合失調症・気分障害
を分担と決めて発表し、全員で検討し
ます。
主な心理療法の枠組みをきちんと理解
し、児童生徒の学校生活での困難の要
因の理解と援助の枠組みを検討しま
す。今回の対象は精神分析的（力動
的）アプローチ、来談者中心的（パ
ーソンセンタード）アプローチなど
であり、グループ発表を行ない、全員で
検討します。
前回に引き続き、主な心理療法の枠組
みをきちんと理解し、児童生徒の学校
生活での困難の要因の理解と援助の
枠組みを検討する、今回の対象は認知
行動論的アプローチ、システム論的ア
プローチ、マインドフルネスなどあり、
グループ発表を行ない、全員で検討し
ます。
学校・家庭・地域における精神保健活
動の実際・連携の仕方を担当者から説
明し、その際に生じる問題点などを検
討します。
実際の学校現場のケースを基に問題点
のアセスメント・症状のとらえ方・専
門機関の連携の仕方をグループを決め
て発表し、全体で検討します。授業を
振り返ってのまとめの議論をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1. 精神保健についての基礎知識、今後の学びたいことについてレポート課題を実施し、それを参考に今後の授業を内容を決めます。
2. 実際の症例問題で DSM-V に関するレポート課題を行います。
- 3～7. 授業内容に関する所見を実際の症例を学習しながら要点をレポートとしてまとめます。
- 8～11. 授業内容に関する実際の症例から診断やケア上の問題点をレポート提出します。
- 12～13. 授業内容に関する臨床心理学的アプローチをグループ学習し授業内で発表とともにレポートにまとめます。
14. レポート課題の際には、問題点のアセスメント・症状のとらえ方・専門機関の連携の仕方を必ず自分の学習した視点で記述し、提出します。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しません。毎授業時に適宜プリントを配付します。

【参考書】

米国精神医学会（編） 日本精神神経学会（監修） DSM-V 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院 2014 年
高橋 三郎（著） DSM-V ケースファイル 医学書院 2015 年

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、個人及び集団課題発表と報告および発表への質問やコメントなど討論への参加姿勢 30 %、期末レポート（内容評価） 30 %などを総合的に評価します。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視します。

【学生の意見等からの気づき】

10名の受講者のうち1名の受講者の回答結果でした。授業の進め方では、授業目標の明示、授業目標の達成、成績の評価基準、教材や資料の適切性などの評価を頂きました。授業の履修して感じたことでは、専門知識の獲得、基礎力、新しい発見、論文作成のためのヒントに評価を頂きました。自由記述では、「DSM-Vの資料」作成の基準をもっと明確に示してもらった方が助かるとのコメントがあり、この点は資料の作成の仕方を業できちんと明示しながら授業を進めたいと思います（前年度分を掲載）。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。必要に応じパワーポイントを使用します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 睡眠、精神保健学

<研究テーマ> 眠気とパフォーマンス

<主要研究業績>

高橋敏治（2017）. 時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

高橋敏治（2014）. 概日リズム睡眠障害 - 3）時差型の病態 - 睡眠医療

8, 197-201.

高橋敏治（2012）精神疾患による不眠. 千葉茂編, 意識と睡眠. 脳とこころのプライマリケア 5. (株) シナジー, 東京, pp571-579.

【Outline and objectives】

1. We will learn the basic knowledge necessary for school mental health.
2. We will learn how to identify mental problems and how to approach through concrete cases occurring at the school site.

PSY500B6

学校カウンセリング演習

渡辺 弥生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「学校」における生徒理解と対応としてのカウンセリングのあり方について理解するとともに実際に実施できる力量を獲得する。さらに、学校心理士の資格に必要な学校カウンセリング・コンサルテーション基礎実習を履修する。具体的には、かかわりづくりに関するグループでの実習や、基本的な傾聴技法を身につけるほか、カウンセリングのプロセスを理解し、コンサルテーション、コーディネーションを含む幅広い活動能力を学ぶ。

【到達目標】

- (1) 学校内で生じる児童生徒の問題や原因について理解する。
- (2) 学校心理学や学校にかかわる基礎知識を獲得する。
- (3) 個別、小集団、スクールワイドという3段階に対応する知識と対応方法を学ぶ。
- (4) こうした知識や理解をもとに具体的な実践を行い、実際のフィールドに出られるコンピテンスを獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

今年度は、集中授業とする。学校現場で生じる問題は年代とともに変化しているが、さまざまである。それらの現状を理解するとともに、なぜそのような問題が生じるのか背景を理解する。そのうえで、どういった対応が求められているか、また、具体的にどのように対応すればよいのか、について実習を通して実践的な能力を獲得する。授業は、15コマのうち10コマを実習に当てる。集中講義であるため、実習を中心に行う。そのため、基礎的な知識は事前に理解しておくことが求められる。アクティブラーニングを基本とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業のテーマ、到達目標、進め方を説明する。
2	カウンセリングに必要な自己分析など基本的な実習	カウンセリングの難しさ 自己理解のための実習する。
3	カウンセリングに必要な態度および技法の理解	生徒とラポールを形成するためにどのようにかかわっていけばよいか、「傾聴」をキーワードに理解する。
4	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習1	傾聴のための技法の理解 ペアワーク1
5	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習2	傾聴のための技法の理解 ペアワーク2
6	カウンセリングの基本的な態度や技法の理解と実習3	実際の場面を想定したロールプレイング（グループワーク）
7	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの理解	構成的グループエンカウンター、ストレスマネジメント、ソーシャルスキルトレーニング、などの理解
8	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習1 - つなぐ -	構成的グループエンカウンターの理論と実際1
9	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習2 - つなぐ -	構成的グループエンカウンターの理論と実際2
10	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習3 - 知る -	ストレスマネジメントの理論と実際
11	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習 - 獲得する -	ソーシャルスキルトレーニングの理論と実践1
12	かかわりづくりに必要なサイコエデュケーションの個別の理解と実習1 - 獲得する -	ソーシャルスキルトレーニングの理論と実践2 指導案の作成

- 13 かかわりづくりに必要な
サイコエデュケーション
の個別の理解と実習2－
獲得する－ ソーシャルスキルトレーニングの理論
と実践3
実際の応用
- 14 学校危機予防の現状と
対応について考える 自然災害、自殺、いじめ、犯罪など学
校現場で生じる
コンサルテーションと 学校危機予防対策について考える。
コーディネーションの実
習1

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

実習が多いため、実習に取り組むことができる予備知識やポイントを事前におさえておく必要がある。実習の目標、必要なもの、どのような動きが求められるか等予習復習が求められる。範囲が広いことから、各自、カウンセリングの基本的な知識やグループワーク、ソーシャルスキルトレーニング、構成的グループエンカウンター、ピアサポートなどの支援方法について学習しておく。集中授業であるため、文献を事前に読んでおく。

【テキスト（教科書）】

「学校だからできる生徒指導・教育相談」渡辺弥生ら編著 北樹出版 改訂する可能性から変更する場合もあり。

【参考書】

「子どもの感情表現ワークブック」 明石書店
「10代を育てるソーシャルスキル教育」 北樹出版
「中学生・高校生のためのソーシャルスキルトレーニング」明治図書

【成績評価の方法と基準】

平常点（単に出席という意味ではなく、積極的な授業態度や実習内でのプレゼンテーションを基準とする）100%。特にトレーニング要素が強いいため、出席重視。

【学生の意見等からの気づき】

各自グループカウンセリングを学校で実施する授業案をつくり、実際に模擬授業を実施し、基本的なスキルやテクニックを獲得しているが、さらに社会貢献ができる実践力を身につけるよう改善していく。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

具体的な実習資料は、適宜配布する。フィールドに出る機会に恵まれれば学外に行く可能性あり。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home> <専門領域> 発達心理学、
発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ> 社会性の発達といじめなどの予防教育の展開
<主要研究業績>
(1) 世界の学校予防教育 2013 金子書房
(2) 子どもの10歳の壁とは何か？ 乗り越えられる発達心理学 2011
光文社
(3) 子どもの感情表現ワークブック 2011 明石書店
(4) 10代を育てるソーシャルスキル教育 2009 北樹出版

【Outline and objectives】

We will learn about student understanding in "school" and counseling as a response as well as acquire the capabilities to put learned skills into actual practice. In addition, the fundamental school counseling and consultation practical training necessary for the qualification of school psychologist will be implemented. Specifically, in addition to acquiring practical training in groups on the creation of relationships, students will study basic learning techniques, understand the counseling process, learn a wide range of activity ability including consultation and coordination, etc.

PSY500B6

発達行動特論

島宗 理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会の問題や個人の悩みは、よくよく考えてみると何らかの行動の問題であることが多いものです。心理学は行動の科学として“行動の予測と制御”に関わる法則を見いだしてきました。こうした法則をうまく適用すれば、社会の問題を解決し、個人の悩みを解消することも可能です。この授業では、社会的・個人的に重要な課題を行動問題としてとらえ、個人攻撃の罠に陥らず、環境を整備しながら問題を解決していく行動分析学の考え方を学びます。

【到達目標】

行動分析学の基礎的な概念を理解し、人や動物の発達や認知に関する様々な現象を、強化や弱化的随伴性を分析することで解釈できるように学びます。基礎的な概念を説明できるようになり、それらの概念を応用して、社会や学校、家庭における行動問題の解決方法を立案できるようになること、そうした解決方法を基礎的な概念を使ったコミュニケーションを介して討議し、協調すること、さらに、課題分析やABC分析、行動の観察・記録法を実施できるようにすることを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎週、教科書の指定された章を読んで、関連する課題を行い、それについて授業中に討論したり、演習します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期	回	テーマ	内容
	1	オリエンテーション	行動分析学の概説、教科書の紹介、プロジェクトについての話し合いなど。
	2	好子、嫌子とは	好子、嫌子、行動随伴性の定義や具体例について学ぶ（教科書、第1-2章）：行動の定義、死人テスト、医学モデル、説明のレベル、循環論。
	3	強化と弱化的	基本的な4つの随伴性について学ぶ（教科書3-5章）：PTSDや汚言症の治療における強化、社会的悪循環、科学における節約性、自閉症の療育における代替行動の分化強化、社会的妥当性、学級経営のための集団随伴性、反応コストとタイムアウト。
	4	消去と復帰、分化強化と分化弱化的	消去と復帰、分化強化と分化弱化的について学ぶ（教科書6-7章）：精神科病棟での問題行動修正、夜泣きの消去、パーストと自発的回復、自閉症児の自己刺激行動、消去と忘却の区別、スポーツのコーチング、課題分析、カウンセラーによる無意識の条件づけ、創造性。
	5	シェイピング、強化スケジュール	シェイピングと強化スケジュールについて学ぶ（教科書8-9章）：失語症の行動療法、部分強化と連続強化、累積記録、FI、FR、VI、VR、消去抵抗、強化スケジュールによって生じる反応パターン。
	6	生得性好子、生得性嫌子、特殊な確立操作、習得性好子、習得性嫌子	行動分析学における「動機づけ」について学ぶ（教科書10-12章）：遮断化と飽和化、確立操作、行動内在的随伴性と付加的随伴性、ブリマックの原理、多飲症、攻撃行動と攻撃性好子、依存性好子、妄想を減らす行動療法、価値変容の原理、トークンエコノミーシステム。
	7	刺激弁別、刺激般化、概念形成、模倣	弁別学習や概念学習、模倣による学習について学ぶ（教科書13-15章）：弁別刺激、概念の行動的定義、読字指導、刺激性制御、学習障害、機械利用型指導法、直感、プロンプトとフェイディング、遅延誘導手続き、リダクション、模倣と般化模倣。
	8	阻止による強化、阻止による弱化的、並立随伴性	回避行動、選択行動について学ぶ（教科書16-18章）：姿勢の矯正プログラム、自閉症における視線合わせ、警告刺激、ADHD、非両立行動の分化強化、対応法則。

9	刺激反応連鎖と反応率随伴性、レスポナント条件づけ	複雑な行動の学習、レスポナント条件づけについて学ぶ(教科書 19-20 章)：逆行連鎖化、順行連鎖化、総課題提示法、トイレットトレーニング、自立訓練、早食いの抑制、恐怖症とその治療、高次条件づけ、系統的脱感作法。
10	言語行動	言語行動論について学ぶ(教科書 21 章)：マンド、タクト、イントラバーバル、エコイック、テクスチャル、書き取り、聞き取り、書き写し、オートクリティック、私的刺激。
11	強化モドキ、ルール支配行動	直接効果的随伴性、間接効果的随伴性について学ぶ(教科書 22-23 章)：拒食症の治療、随伴性形成行動、ルール支配行動、コミュニティ心理学、イメージトレーニング、パフォーマンス・マネジメント、自己管理。
12	ベイ・フォー・パフォーマンス、道徳と法による行動の制御	ルール支配行動によるマネジメントについて学ぶ(教科書 24-25 章)：作文指導、就労支援プログラム、銀行におけるベイ・フォー・パフォーマンス、法律と道徳(倫理)、宗教、性同一性障害。
13	行動の維持、行動の転移	学習した行動を維持させ、転移させる要因について学ぶ(教科書 26-27 章)：行動の異、般化を促進させる要因、自己教示。
14	研究法	行動分析学における研究法、特にシングルケースデザインについて学ぶ(教科書 28 章)：社会的妥当性、観察法、観察の信頼性、反転法、多層ベースライン法、基準変化法、条件交替法、内的妥当性、外的妥当性。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

毎回、次の週の授業で討論する具体的なテーマに関する予習課題を提示するので、受講生は関連する教科書の章を読み、予習課題に取り組み、討論の準備をすること。

【テキスト(教科書)】

『行動分析学入門』(杉山・鳥宗・佐藤・マロット・マロット、産業図書、1998)

【参考書】

『ワードマップ：応用行動分析学』(鳥宗、2019)他。適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

・授業参加点 50%、課題点(最終レポート含む) 50%で成績を評価します。
・欠席が 4 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2018 年度の授業改善アンケートより)

今学期は正規の受講生が 1 名しかいなかったわけですが、その 1 人中 1 人が回答してくれました(100%)。そのうち 1 人が「この授業を履修してよかった」と回答してくれました(100%)。

個人的には受講生さんたちの(愛すべき)キャラクターを満喫させていただいた一学期でした。楽しかったです。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室(富士見坂校舎 6F9 号室)です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 鳥宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学

新曜社

② 鳥宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 鳥宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to master basic principles, procedures, and research methods pertaining to applying behavior analysis in schools or in other educational or therapeutic settings. Focus will be placed on knowledge and skills in applying basic concepts of learning to interpret behavioral phenomena in real-world educational or societal settings.

PSY500B6

生徒指導特論

小澤 真

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

生活指導、教育相談、キャリア教育、発達障害への対応など、生徒指導に関わる様々な局面で、それらが有効に機能するために教師に求められる役割とは何かについて考察する。あわせて、そうした役割を果たしていくための教師自身の自己理解、自己成長についても論及する。

【到達目標】

- ①生徒指導の意義と役割について基本的な概念を説明できること。
- ②教育相談やキャリア教育、生活指導等の活動を通じて果たすべき教師の役割とその方策について理解し、独自の考えを具体的に述べること。
- ③生徒理解の方法について理解を深め、自分なりの工夫やアイデアを提案できること。
- ④青年の自己の確立とは何かについて、教育相談やキャリア教育、生活指導との関連で記述するとともに、自己理解や自己成長にも応用できること。
- ⑤広汎性発達障害、ADHD 等の発達障害についてその概要を説明し、その対応策を案出できること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

生徒指導の意義を理解し、教師の役割と効果的な方策を学習することが本科目の主たる目的である。各回のテーマについての理論的な概説や事例の提供を小澤による講義、または課題についての発表により行った後、全員で討論することにより、生徒指導に関わるさまざまな場面において、その本質を踏まえて、教師としていかにして効果的に対応するかを検討し、理解を深める。その際には、心理的な動きを中心とした生徒の内面の理解ばかりでなく、受講生自身の教師としての自己理解を深めることも大切である。また折に触れて教師と生徒の効果的なコミュニケーションについて交流分析の視点からの理論的な検討も加える。これにより、生徒指導のための具体的な方法を指導者として考える力が養われるとともに、受講生の自己成長がはかれることが期待される。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション/生徒指導とは	授業の目的と方法の確認。生徒指導の概念、意義と方法についての概説を担当者が行う。
2	生徒指導の体制と諸問題	生徒指導の学校分掌上の位置づけ、学校内外との連携、およびそこで生じる諸問題について担当者が説明し、全員で討論する。
3	生徒理解と生徒指導	青年期の発達課題の理解を踏まえて、生徒指導における生徒理解の意義について担当者が説明する。
4	生徒指導における教師と生徒とのコミュニケーション	前回の内容をさらに展開し、生徒とのコミュニケーション把握および改善するための方法、教師の自己理解と成長について担当者が説明する。
5	教育相談の意義	他の領域の臨床心理学的援助との異同を踏まえながら、学校教育相談の意義と特質について担当者が説明する。
6	教育相談の体制と構造	教育相談の学校分掌上の位置づけ、ハード、ソフト両面の構造、校外諸機関との連携等について担当者が説明する。
7	教育相談の具体的な展開(1)社会的ひきこもりの理解と対応	担当者が社会的ひきこもりについての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
8	教育相談の具体的な展開(2)反社会的問題への対応	担当者が反社会的問題についての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
9	教育相談の具体的な展開(3)心身症の理解と対応	担当者が心身症についての概説を行った後、具体的な事例を提示し、全員でその対応について話し合う。
10	生徒の心のケアと学校の役割	学校内外で緊急事態が発生した際の生徒の心のケアについて、担当者が具体的な事例を提示し、教師の役割について全員で話し合う。
11	発達障害の基本理解	広汎性発達障害、ADHD 等の発達障害について発表を行い、担当者が説明する。

12	発達障害への対応	広汎性発達障害、ADHD等の発達障害を持つ生徒に対する教師としての対応について全員で話し合う。
13	キャリア教育の意義と内容／具体的な展開	青年期の発達課題の理解を踏まえて、キャリア教育の具体的な方法を発表し、全員で討論する。
14	まとめ／生徒指導とは	これまでの学習を踏まえて、生徒指導の意義や教師の役割について全員で討論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 教育基本法、学習指導要領を調べ、生徒指導の位置づけについてレポートする。
- 第2回 自らが生徒として生徒指導を受けた体験をもとに、そこから生じる諸問題についてレポートする。
- 第3回 エリクソンの発達課題を中心に、青年期の発達課題についてレポートする。
- 第4回 自らが陥りやすい、適応的でないコミュニケーションパターンを振り返りレポートする。
- 第5回 他の領域の臨床心理学的援助と学校教育相談との異同についてレポートする。
- 第6回 各自が学校内の相談室の理想的な構造を考え、レポートする。
- 第7回 社会的ひきこもりの問題に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。
- 第8回 生徒の反社会的問題に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。
- 第9回 生徒の心身症に対して教育相談の立場からどのように対応するかについて方策を考え、レポートする。
- 第10回 PTSDについてレポートする。
- 第11回 発達障害についてレポートする。
- 第12回 発達障害に対する対応例についてレポートする。
- 第13回 キャリア教育の具体例をレポートする。
- 第14回 なし

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。授業で使用する文献・資料はその都度配布する。

【参考書】

- 佐々木雄二・笠井仁（編）(2010). 図で理解する生徒指導・教育相談 福村出版。
- 稲垣應顕・犬塚文雄（編）(2004). わかりやすい生徒指導論改訂版 文化書房博文社。
- 石隈利紀（1999）. 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房

【成績評価の方法と基準】

討論参加 20% 発表 40% 期末レポート 40%。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の積極的な参加によってディスカッションが活発になされ、お互いにとって良い刺激となとなっている。その状況をさらに促進するため、それぞれの受講生の研究テーマを生かせるような授業展開を心がけたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>臨床心理学
<研究テーマ>交流分析理論の実証的な研究
<主要研究業績>

- *小澤 真 (2010). 対人関係にアプローチする—交流分析— 佐々木雄二・笠井仁（編） 図で理解する生徒指導・教育相談 第15章。福村出版。
- *小澤 真 (2000). 生徒理解のための交流分析の活用—高校生の学校ストレス認知とエゴグラム— 交流分析研究,25(2),117-123.
- *小澤 真 (2000). 学校も家もつまらない—不応の心理 古川聡（編） 教職に活かす教育心理—子どもと学校の今— 第12章。福村出版。

【Outline and objectives】

In this class, we consider the role of teachers to work effectively in the various aspects involved in student guidance for life coaching, counseling, career education, developmental disabilities, or else. On the other hand, to fulfill such a role, we mention on teachers' self-understanding and self-growth.

PSY500B6

言語心理演習

福田 由紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本年度は、「読む・書く」といった言語行動に明示的および、暗示的に影響を与えている「自己」を中心に取り上げる。例えば「昨日、新宿に行った」と書かれた日記の文章は「私」が新宿に行ったことを暗示している。また、文章を読む際には、自分の体験をうまく利用することによりコストを低減できる。このような「自己」の影響を検討する。

【到達目標】

本授業の到達目標は、以下の通りである。自ら問題発見をし、それを仮説に定義し直し、発表できるようにする。

- ①言語活動に関わる自己の影響に関する今までの知見を学ぶ。
- ②知見に基づき、「読む・書く」といった言語行動における自己について、自ら仮説を設定する。
- ③自らの仮説を実証的に検討する研究計画を立てる。
- ④研究計画について発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

本授業の目的は、「読む・書く」といった言語活動に影響をあたえる「自己」の心理的実在を自ら実証することである。そのために、授業の前半では目的に関連した先行研究を精読し、発表をする。次に、実証できる仮説を設定し、実際に研究を行う。その際、実証研究のためのスキルを確認し、よりよい方法を模索し、実行する。その結果に関して、効果的なプレゼンテーションを行う。授業は受講生による発表で主に進めていく。それを受けて全員でディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	読み・書きに対する自己の影響に関する文献の説明
第2回	読みに対する自己の影響の発表1	読みに対する自己の影響の発表と討論1
第3回	読みに対する自己の影響の発表2	読みに対する自己の影響の発表と討論2
第4回	書きに対する自己の影響の発表1	書きに対する自己の影響の発表と討論1
第5回	書きに対する自己の影響の発表2	書きに対する自己の影響の発表と討論2
第6回	実験・調査の注意点の確認	言葉を扱う研究実施における注意点の確認をする
第7回	実験・調査の立案	実験・調査の素案に関する討論
第8回	研究計画の発表	実施計画の発表と討論
第9回	研究計画の修正発表	修正した実施計画の発表と討論
第10回	ポスター発表の仕方	自分の実験・調査の効果的なポスター発表と討論
第11回	口頭発表の仕方	自分の実験・調査の効果的な口頭発表と討論
第12回	読み書きに対する自己の影響の発表1	読み書きに対する自己の影響の発表と討論1
第13回	読み書きに対する自己の影響の発表2	読み書きに対する自己の影響の発表と討論2
第14回	講評会	発表に対する全員で講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回～第4回 次週の発表の準備
第6回 先行研究における様々な方法の収集
第7回～第12回 次週の発表の準備
第13回 講評の準備

【テキスト（教科書）】

特になし。適時、周知する。

【参考書】

- 福田由紀 (2012). 言語心理学入門 培風館
郡司隆男・坂本勉 (1999). 言語学の方法 岩波書店

【成績評価の方法と基準】

発表 40%、発表への質問・コメント 30%、討論への参加 30%などを総合的に評価する。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

「論文作成にあたって有益な授業でした。」というコメントをもらいました。私もいろいろと考えさせられ、自らの論文作成に有益でした。ありがとうございました。その中でも文章作成にとって、論の展開がとても重要ですね。それを忘れずに、今後ともがんばっていきましょう！

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席をしてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割

<主要研究業績>

①福田由紀・菟原遥・菊池理紗 (2018). 言語心理学で何を学べるか？—言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

②福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.

③福田由紀・土清水咲菜・荒井弘和 (2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？ 法政大学文学部紀要, 73,99-108.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the effect of "self" on language activities. Students will be expected to make a presentation about the effect of "self" on language activities by individual literature study and deepen their comprehension of it.

PSY500B6

学校コンサルテーション特論

島宗 理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

学校心理学の基本的な概念と学校コンサルテーションの実践について学ぶ。特に発達障害や知的障害をもった児童や生徒の指導に関する小中高特別支援学校教員へのコンサルテーションを念頭におき、心理学の専門家として教育の現場で仕事をするための知識と技術の習得を目指す。コンサルテーションに活用できる指導方法や支援方法に関する情報を研究論文から読み取り、教員や保護者に伝えるコミュニケーションスキルを練習しながら、実務的な注意点などを講義で補足する。

【到達目標】

- ①学校心理学の全体像を学校コンサルテーションに必要な知識や技能として説明できる。
- ②心理教育的援助サービスのモデルについて説明できる。
- ③学校心理士の役割や活動を具体的に述べられる。
- ④教師・保護者らとのチームによる援助の実例について、具体例を述べられる。
- ⑤学校心理士の倫理について注意すべき点を列記できる。
- ⑥相談されている事例について学校コンサルテーションに活用できる支援方法、指導方法を調べ、わかりやすく説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業の前半は、教科書を用い、学校心理学と学校コンサルテーションの基礎について学ぶ。受講生は事前に提示される学習目標にそって教科書を読み、授業中の発表と討論に参加して理解を深める。コンサルテーションの演習科目であることから、発表者は聞き手が学校教員や保護者であると想定し、わかりやすく話をする、質問にもわかりやすく、丁寧に回答することを繰り返し練習する。授業の後半では、学校コンサルテーションに活用できる指導方法や支援方法に関する研究論文を検索し、読み、発表する。ここでも、発表者は聞き手が学校教員や保護者であると想定し、研究成果を実践現場に還元するためのコミュニケーションの方法を練習する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーションと学校心理学の全体像	授業の目的と方法の確認。学校心理学の全体像（3つの柱）、心理教育的サービスの実例などについて担当者が講義する。
第2回	心理教育的援助サービスのモデル	外部専門家の役割（援助者の種類）や学校内部の組織づくり（校内の運営委員会や支援委員会）、援助サービスの段階（一次、二次、三次）について学ぶ。
第3回	学校心理士の活動	アセスメント、コンサルテーション、コーディネート、カウンセリングについて、それぞれ具体例を元に特色と違いを学ぶ。
第4回	教師とのチーム援助 (1)	教師とチームを形成して問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第5回	教師とのチーム援助 (2)	教師とチームを形成して問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第6回	保護者や地域とのチーム援助	保護者や地域とチームを形成して問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第7回	学校や地域全体の支援	学校全体や地域ぐるみで問題解決に取り組むモデルについて学ぶ。
第8回	学校心理士の倫理	人権の尊重、秘密保持の厳守、責任の保持、研修の責務、研究と公開について、学校心理士の倫理綱領を元に学ぶ。
第9回	特別支援教育における学校コンサルテーション (1)	特殊教育から特別支援教育への移行、それに伴う、校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの配置、巡回指導や専門家によるコンサルテーションの導入などについて学ぶ。
第10回	特別支援教育における学校コンサルテーション (2)	特別支援教育における学校コンサルテーションの事例を学ぶ。
第11回	学校コンサルテーションに活用できる指導法や支援法 (1)	学校コンサルテーションに活用できる指導法や支援法に関する応用、実践、臨床研究論文を読み、発表し、討論する。
第12回	学校コンサルテーションに活用できる指導法や支援法 (2)	同上。

- 第13回 学校コンサルテーション 同上。
に活用できる指導法や支援法(3)
- 第14回 まとめと総括、討論。 学期中に学んだことを振り返り、まとめ、質疑応答および討論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業外に行うべき学習活動

- 第1回 教科書#1の1、2、6章を読み、課題を行う。
第2回 教科書#1の3、4、5章を読み、課題を行う。
第3回 教科書#1の11、12章を読み、課題を行う。
第4回 教科書#2の3、4章を読み、課題を行う。
第5回 教科書#2の5、6章を読み、課題を行う。
第6回 教科書#2の7、8章を読み、課題を行う。
第7回 教科書#2の9章を読み、課題を行う。
第8回 教科書#1の17、18章を読み、課題を行う。
第9回 教科書#2の1、2章を読み、課題を行う。
第10回 教科書#1の10、11、12章を読み、課題を行う。
第11回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
第12回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
第13回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
第14回 論文を検索し、読み、発表資料をまとめる。
第15回 なし

【テキスト（教科書）】

#1【講座 学校心理士-理論と実践】(学校連合資格「学校心理士」認定運営機構 企画・監修, 北大路, 2004)
#2【特別支援教育を支える行動コンサルテーション】(加藤・大石〔編〕, 学苑社, 2004)

【参考書】

『教師と学校が変わる学校コンサルテーション』 奥田健次編著(金子書房, 2018)、他。適宜、紹介します。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加(課題の発表や討論)30%, 教科書の学習目標に関する課題の遂行40%, 講読した論文の発表30%として評価する。

【学生の意見等からの気づき】

(2018年度は未開講でした)

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の4限、秋学期は火曜日の2限、場所は研究室(富士見坂校舎6F9号室)です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

- ① 鳥宗 理(2018). 学校コンサルテーションの意義 奥田健次(編著) 教師と学校が変わる学校コンサルテーション 金子書房 pp. 10-18.
② 鳥宗 理(2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社
③ 鳥宗 理・永富 大輔・八木 絵梨奈(2015). 知的障害のある生徒がメモをとるように指導する—ガイド付きノートの効果— 行動分析学研究, 86-93.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn the basic concepts of school psychology and the practice of school consultation. Focus will be placed on special education and consultation for the teachers working with children who have developmental disabilities and intellectual disabilities. Students will read relevant research papers, design behavioral treatment plans, and in role-play situations with other students, practice presenting their treatment plans to consultees, guide discussions, and finalize concrete and informed plans. Academic as well as practical advices will be provided by the lecture.

PSY500B6

心理教育アセスメント特論

杉山 崇

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学的測定の原理・原則、および心理・教育的アセスメントの方法、効果的な活用法と施行倫理を学ぶ

【到達目標】

- (1) 心理測定の原理・原論とその活用スキルを身につける。
(2) 心理アセスメント(心理査定)と教育評価の方法と使い方を身につける。
(3) アセスメントの結果に基づいた本人および教師・父兄へのコンサルテーションを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

本演習では、個人のパーソナリティおよびストレス反応のアセスメント、教育評価、学級・学校のアセスメントなど、心理職が活躍する現場における心理アセスメントの手法を学ぶ。

授業計画にあるように、個人のアセスメントから学校・学級という組織・集団のアセスメントまで、学校現場で行われている心理学的なアセスメント法の理論と実際を学び、学校現場で機能できるようにコンサルテーションを想定した報告書作成の実習を行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	心理教育的アセスメントの概要	学校で求められている心理教育アセスメントの特徴を理解する。
2	学校と心理測定	学校で心理測定がどのように活用され、どのように受容されてきたか理解する。
3	心理教育的アセスメントの倫理	事例から学校における心理測定のメリットとデメリットを理解し、倫理的配慮の必要性を学ぶ。
4	心理検査学概論	心理検査はどのようなグランドデザインで構成されて、どのような方法へと分化したか学ぶ。
5	絵画法①	学校で良く用いられる、バウム法、HTPを学ぶ。
6	絵画法②	風景構成法の施行法と実際に体験的に学ぶ。
7	質問紙法①	質問紙で実施できる心理尺度の作成方法、実施方法、結果の活用法を学ぶ
8	投影法①	人間関係や社会的な問題が浮上ると言われている絵画統覚検査(TAT)を体験的に学ぶ。
9	投影法②	P-Fスタディを体験し、実施における留意点を学ぶ。
10	知能検査	学校における知能検査データの使い方の配慮について検討する。
11	学級アセスメント	学校風土に基づいた学級アセスメントの理論と技法を学ぶ。
12	学校アセスメント	学校アセスメントの理論と実際を学ぶ。
13	教育評価	教育評価の技法と心理学的教育評価の実際を学ぶ。
14	教師へのコンサルテーション	アセスメント結果の報告書の作成とコンサルテーションの実際を学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回2時間の予習、2時間の復習を課す。

- 第1回 学校を見学するなど、学校を体験することが望ましい。
第2回 心理測定の基本的考え方の資料を読んでくる。
第3回 臨床心理学の倫理規定を読んでくる。
第4回 教材論文を読んでくる。
第5回 事前に2人1組で相互にバウムテストを試行し合う。
第6回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
第7回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
第8回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
第9回 当該技法を事前に実施し、スコアリングを行う。
第10回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
第11回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
第12回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
第13回 当該技法に関する教材論文をレポートする。
第14回 当該技法に関する教材論文をレポートする。

【テキスト（教科書）】

教科書は特に指定しない。毎授業時に資料や課題を指示する。また、課題に必要な文献はその都度伝える。

【参考書】

『必携 臨床心理アセスメント』金剛出版

【成績評価の方法と基準】

発表 40%、出席・発表への質問・コメント 30%、討論への参加 30%などを総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

自己理解、他者理解を通じた査定法の習得が有益であることがわかったので、この機会を増やす方向を検討している。

【学生が準備すべき機器他】

PC、課題資料

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>臨床心理学。精神医療施設、中学校、高等学校、公立教育相談室、などで、25年、心理アセスメント・心理カウンセリングを担当する心理職に就き、また、特別支援学校などで教師へのコンサルテーションの活動を行っている。

公式 WebPage : <http://www.sugys-lab.com/>

<研究テーマ>

1) 心理臨床実務における活用性の高い心理尺度の作成・改訂

2) アセスメントを活用した教育臨床、病院臨床、産業臨床

<主要研究業績>

杉山崇・前田泰宏・坂本真士 (2007) 『これからの心理臨床』ナカニシヤ出版
坂本真士・杉山崇・伊藤絵美 (2010) 『臨床に活かす基礎心理学』東京大学出版会

伊藤絵美・杉山崇・坂本真士 (2011) 『事例でわかる心理学のうまい活かし方』金剛出版

山島圭輔・杉山崇 (2012) 『カウンセリングと援助の実際』北樹出版

杉山崇 (2015) 『入門！産業社会心理学』北樹出版

SUGIYAMA.T., (2008) 'Assessments of Depressive-Process and Personality for Cognitive Behavior Therapy: Theory and Practice of Client Centered Cognitive Behavior Therapy,' 1st Asian Conference of CBT Papers. Asian Conference of CBT.

杉山崇 (2007) 「抑うつ心理臨床に向けたロールシャッハ法、TAT、SCTと各種質問紙法の実施法および臨床的利点：投影法、質問紙法の臨床活用とテストバッテリーに向けた一考察」, 山梨英和大学紀要

【Outline and objectives】

Learn the principles and principles of psychological measurement, methods of psychology / educational assessment, effective application methods and enforcement ethics

PSY500B6

心理教育アセスメント演習

熊 仁美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

検査を通じて対象児の特性を的確に把握し、支援計画の策定に役立つよう解釈しまとめる知識と技術の習得を目的とする。心理検査の概要や発達障害の基礎知識を学んだあと、療育支援の現場に校外学習にむき、個別心理検査の実習を行う。検査を実施し、結果を解釈し、結果に基づいて指導案を作成する。今年度は、ウェクスラー式知能検査WISC-IIIを使用する予定である。

【到達目標】

- (1) WISC IIIを実施できるようになる
- (2) WISC IIIの検査結果を解釈できるようになる
- (3) WISC IIIの検査結果に基づいて、指導案を作成できるようになる。
- (4) 発達に遅れや偏りのある児童に分かりやすい関わり方の基礎を習得する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

前半は、大学にて検査の概要に関する講義とロールプレイによる実技演習を行います。発達障害や応用行動分析学に基づくかわり方の基礎も学んでいただきます。後半は、福祉施設に校外実習に向かいます。発達障害のある小学校低学年のお子さんにご協力を頂いて実際に検査をとる練習をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】**春学期集中**

回	テーマ	内容
第1回	WISC III検査演習	第1セッション1 内容 検査の実施に関する説明と諸注意。
第2回	WISC III検査演習	第1セッション2 教室内で受講者同士がペアとなり、模擬的に検査を実施する。
第3回	WISC III検査演習	第1セッション3 同上
第4回	WISC III検査演習	第2セッション1 上記の模擬検査について全検査IQ、言語性IQ、動作性IQ、4種の群指数を算出し、回検査のプロフィールを合わせて解釈し、それに対するフィードバックを受ける。
第5回	WISC III検査演習	第2セッション2 同上
第6回	WISC III検査演習	第2セッション3 同上
第7回	WISC III検査演習	第3セッション1 同上 上記の模擬検査に基づき、個別の指導計画などに組み込める具体的な指導案を作成し、フィードバックを受ける。
第8回	WISC III検査演習	第3セッション2 同上
第9回	WISC III検査演習	第3セッション3 同上
第10回	WISC III検査実習1	校外の福祉施設に向き、実際に障害のある子どもを対象に、スーパーバイズを受けながら検査を実施する。
第11回	WISC III検査実習2	同上
第12回	WISC III検査実習3	同上
第13回	WISC III検査実習1	同上
第14回	総括	上記の検査で得られた結果を解釈し、指導案を作成してレポートとして提出する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

集中講義開始前までにテキストを読んでおくこと（心理学準備室に用意してあります）。履修者が決定したら、授業支援システムを使ってレポートの分担を送ります。割り振られた分担箇所について、各自レポートにまとめてもらい、授業当日に発表をして頂きます。

【テキスト（教科書）】

日本語版WISC-III知能検査法 日本版IWSC-III刊行委員会 訳編著 1998年 日本文化科学社

WISC-IIIアセスメント事例集 理論と実際 藤田和弘・前川久男・大六一志・上野一彦・石隈利紀 2005年 日本文化科学社

【参考書】

軽度発達障害のアセスメント WISC-III の上手な利用と事例 上野一彦 2005年 日本文化科学社

【成績評価の方法と基準】

実習なので、全セッションへの出席と参加が評価の前提となる。成績はレポートを100点満点で採点し、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

実習前に対象児童のプロフィールや生活の見通しをより詳しく伝達することで、検査実施の意味や結果の活用についての考察を深めることができる。

【学生が準備すべき機器他】

プロジェクタ・スクリーンが使える状態にしておくこと。検査器具を部屋に運んでおくこと。

【その他の重要事項】

動きやすい服装で参加してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>発達心理学・応用行動分析学<研究テーマ>大学における研究やNPO法人における臨床活動を通して、自閉症スペクトラム障害児に対する早期療育支援やペアレントトレーニング、セラピスト養成や共同注意などの前言語コミュニケーションに関する研修に取り組んできた。

<主要研究業績>

熊仁美・竹内弓乃・原由子・直井望・山本淳一・高橋甲介・飯島啓太・齊藤宇開・渡邊倫・服巻繁・

ボンディ アンディ (2010). 自閉症とコミュニケーション (公開講座：わが国における最新の研究と

実践), 行動分析学研究, 24(1), 85-105.

熊仁美・直井望・山本淳一 (2010). 自閉症児の共同注意とコミュニケーション：発達初期コミュニケーション尺度を用いた分析 — 人間と社会の探求：慶應義塾大学大学院社会学

研究科紀要,

69, 131-144.

熊仁美・山本淳一 (2014). 自閉症児の要求音声言語の獲得と拡張に及ぼす PECS の効果, 特殊

教育学研究, 51(5), 407-419.

熊仁美 (2016) 自閉症スペクトラム障害における共同注意と社会的参照行動. 慶應義

塾大学大学院社会学研究科博士論文 (未公開)

■取得研究費

熊仁美 (2016) 「エビデンスに基づいて保護者とともに取り組む発達障害児の早期療育モ

デルの実装」 国立研究開発法人科学技術振興機構 28 年度戦略的創造研究推進事業 研究

開発成果実装支援プログラム 2,100 万円

【Outline and objectives】

The purpose of this lecture is to master knowledge and skills to understand and interpret the characteristics of children with disabilities through psychological examinations accurately and to interpret and help to formulate support plans. After learning the outline of psychological examination and basic knowledge of developmental disorders, we will practice out-of-school learning at the site of care support and conduct individual psychological examinations. After practical training, interpret the examination result and prepare a teaching plan based on the result. This fiscal year we plan to use the Weisser type intelligence test WISC - III.

PSY500B6

スポーツ心理特論

雨宮 怜

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業のテーマは、スポーツ心理学のテーマ（スポーツ・運動・身体活動への心理学的アプローチ）を実践的に学習することです。

【到達目標】

運動やスポーツを含む身体活動は、私たちの「こころ」と深い関わりをもっています。スポーツ心理学の研究や知見を理解することによって、「こころの仕組み」に関する理解を深め、身体活動・運動・スポーツ場面において心理学的な支援を実践できるようになることを目標とします。

また、各受講生が専門とする心理学領域と、スポーツ心理学との関連に着目します。そして、両者の発展可能性を明確にすることができるようにすることも目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

この授業では、運動学習や運動の習慣化に関連する理論モデルから、メンタルトレーニングアスリートにおける心理的問題とその予防・改善方法まで、幅広い内容を扱います。さらに、欧米で注目されている最新のトピックや、実際のスポーツ場面で生じた事例についても触れます。

以上のことによって、現代社会においてスポーツ心理学が果たす役割について具体的に考え、心理学的な支援を実践できるようになることを目指します。

この授業では、講義だけでなく、講義内容に基づくワークを毎回行います。授業の後半では、受講生による発表・意見交換を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	スポーツ心理学とは何か？ を学ぶ	スポーツ心理学の全体像を理解し、説明できるようになる。
第 2 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 1) スポーツメンタルトレーニングを学ぶ	メンタルトレーニングのスキルを理解し、実践し、活用できるようになる。
第 3 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 2) スポーツメンタルトレーニングの技法を学ぶ	アスリート個人に対するメンタルトレーニングの技法の背景理論および実践法を理解し、活用できるようになる。
第 4 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 3) スポーツメンタルトレーニングのチームに対する技法を学ぶ	チームに対するメンタルトレーニングの技法の背景理論および実践法を理解し、活用できるようになる。
第 5 回	競技スポーツの心理学を学ぶ 4) スポーツメンタルトレーニングを活用する	特定事例を読み解き、メンタルトレーニングの技法の背景理論および実践法をもとに活用するロールプレイを行う。
第 6 回	健康スポーツの心理学を学ぶ 1) 運動の心理的・身体的効果を学ぶ	運動の心理的・身体的効果について学習する。
第 7 回	健康スポーツの心理学を学ぶ 2) 運動嫌いをどう克服するか？ を考える	個人差や環境の影響によって運動嫌いとなった人に対する、身体活動増加のためのアプローチについて学習する。
第 8 回	健康スポーツの心理学を学ぶ 3) 運動の効果的な学習法について考える	運動学習の理論や研究に基づいた、効果的な運動学習法について学習し、活用できるようになる。
第 9 回	健康スポーツの心理学を学ぶ 4) 運動の習慣化	行動変容理論に基づいた、身体活動の習慣化について学習する。
第 10 回	アスリートの心理的健康 1) バーンアウトや摂食障害などの理解	アスリートが陥りやすい心理的健康問題について学習する
第 11 回	アスリートの心理的健康 2) ヘルピングスキルのトレーニング	心理的健康問題に陥っているアスリートの支援法について学習する
第 12 回	アスリートの心理的健康 3) 事例に基づいた支援	特定事例を読み解き、心理サポート法の背景理論および実践法をもとに活用するロールプレイを行う。
第 13 回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える (1)	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う
第 14 回	自分の研究分野とスポーツ心理学との関連を考える (2)	各受講生の研究分野とスポーツ心理学との関連性について、担当者が発表を行い、意見交換を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容を実践・活用できるようになることを目指して、毎回の授業中に提示されるレポート課題に取り組めるよう、事前に学習を行ってください。

【テキスト（教科書）】

テキストは設定しません。必要に応じて、資料配付・文献紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

1) 授業の到達目標と対応した期末レポートが 60%、2) 授業中に実施する課題、プレゼンテーション、グループワーク、意見交換への参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が低下します。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の意見に鑑みて、受講生の専門領域にスポーツ心理学の知見を活かす方法を提供します。

【学生が準備すべき機器他】

授業内容によって、PC や発表用資料が必要となります。その際は、事前にアナウンスします。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。グループワークを行いますので、協力的な姿勢で授業に参加することを期待します。

【Outline and objectives】

The aims in this class are to learn the theory and application of sports psychology (psychological approach to sports, exercise, physical activity).

PSY500B6

心理研究法特論

吉村 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教授者自身が一研究者としてこれまで用いてきたさまざまな研究法を解説しますので、受講生の皆さんは、それを自分が利用する可能性もある方法として受けとめ、それぞれの方法に対する利用可能性とその方法のもつ問題点とを考えていきます。

【到達目標】

現在の心理学で用いられているさまざまな研究法を知ることを通して、自らの研究で用いる方法的可能性を、頭を柔軟にして広げる姿勢を身につけることを到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

教授者自身が一研究者としてこれまで実際に使用してきたさまざまな研究法を体験し、受講者自身がそれぞれの研究法を自らの研究に活用できる可能性を探ります。毎回、異なる研究法を学習し、最後の数回では各受講者が興味をもった、あるいは使用経験のある研究法について、可能性と問題点を自覚する方向性で検討を加え、発表・解説します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
1	はじめに	授業全体の概要説明。
2	心理学研究法の類型化	さまざまな研究法を類型化し、受講者自身がこれまで取ってきた俵給法をその中に位置づける作業を行う
3	心理学実験とは	「準実験」という考え方の理解と研究の生態学的妥当性について考える
4	実験計画法	分散分析法が利用されるに至った経緯と現在の利用状況
5	反応時間	心理学実験で広く用いられてきた従属変数としての反応時間の位置づけ
6	多変量解析法 (1)	MDS と一対比較法
7	多変量解析法 (2)	因子分析と主成分分析
8	質的データ (1)	インタビューデータの分析方法
9	質的データ (2)	KJ 法とアイデアプロセッサの利用
10	新しい方法を考案する姿勢	PAC 分析を例に
11	実験変数と交絡変数	反応の固執を例に、実験変数と交絡変数のダイナミックな関係について解説する
12	受講者による発表 (1)	受講者が自ら行っている、またはこれから採用したい研究法について考察を含めた紹介を行う
13	受講者による発表 (2)	受講者が自ら行っている研究を研究法という観点から俯瞰する発表を行う。授業の総括と受講者の発表内容についての討論
14	まとめ	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に取り上げた研究法について、受講者自身の研究に活用できる可能性を検討する作業を授業時間外の学習として行います。特に、12 回目以降に行う発表・解説に向け、2 回目から 11 回目までの授業で取り上げた研究法を自らが活用できる可能性について検討する作業を毎回の授業時間外学習とします。

【テキスト（教科書）】

使用しません。

【参考書】

各回のテーマごと、受講者の興味・関心・問題意識に応じて、毎回紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%と、「受講者による発表」内容 50%で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

受講者による成果発表では、受講生が取り組んでいる研究の方法について見つけ直し深められるような形の発表を喚起します。

【その他の重要事項】

心理学が用いるさまざまな研究法を広く紹介するので、受講者の研究領域にかかわらず、広く受講することを奨めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 知覚・認知心理学
<研究テーマ>

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

<主要研究業績>

- ・吉村浩一 2006 運動現象のタキソノミー：心理学は“動き”をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版
- ・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. *Perception*, 36, 1049-1056.
- ・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

This course deals with some topics using various kinds of psychological methods that the instructor use so far. Students are required to brush up the methods assuming to use them in their own research.

PSY500B6

応用心理統計 I

山際 勇一郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義は心理統計の理論を学習し、また実践の使用を可能にするスキルを学ぶことを重くとする。すなわち、①多変量解析などの応用的解析方法につながる理論的な基礎事項を再確認する。

② *R* を用いてさまざまな解析方法を実習し習得する。

【到達目標】

研究に心理統計が使用できるようになること。

使用できるというのは、①研究計画時に適切な方法を選択しながら、計画を立てることができること、②収集したデータを適切に分析処理できること、③結果を論文に記載できること、④他の研究論文を適切に読めること、の4点をいう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

心理統計解析の基礎理論の再確認および応用的実践的手法を *R* を用いて実習する。

一般的な進め方：各テーマについて数理的な視点からの解説を *SPSS* を用いながら行う。次に、受講生が *R* を用いて、その内容などを解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	基本的な統計的検定などの知識の確認	基礎知識の確認
第2回	統計解析の基礎①	ベクトル, 行列, 行列式, 固有値問題など
第3回	統計解析の基礎②	<i>R</i> の基本操作
第4回	統計解析の基礎③	最大, 最小問題と微分方程式
第5回	統計解析の基礎④	統計関数と分布
第6回	平均の比較①	分散分析
第7回	平均の比較②	多重比較と事後検定
第8回	平均の比較③	3要因以上の分散分析
第9回	回帰分析	回帰分析と重回帰分析
第10回	カテゴリカルデータの解析①	カイ二乗検定など基礎的な検定方法
第11回	カテゴリカルデータの解析②	対数線形モデル
第12回	カテゴリカルデータの解析③	二項ロジスティック回帰分析
第13回	カテゴリカルデータの解析④	多項ロジスティック回帰分析
第14回	最新のトピックについて	マルチレベル分析, 階層的回帰分析など

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

シラバスを確認し、各回の統計解析に関する基礎的な知識を確認しておくこと。

【テキスト（教科書）】

なし。各テーマごとにレジュメを配布。

【参考書】

各テーマごとに紹介する。

ただし、基礎数学（線形代数）に関しては各自が理解しやすいと思う参考書等を補助資料として用意すること。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：授業での発表と課題 (50%)、授業への取り組み (50%)

「評価基準」：基本的な知識が習得されていること、*R* を用いてデータを適切に解析できること

【学生の意見等からの気づき】

改善アンケートからの参考になる記述は特になし。

授業において各テーマの終了後ではなく短い間隔で発表を行う。

学生の自主的な学習に期待できないので、課題を多くするなどが必要である。

【学生が準備すべき機器他】

カテゴリカル分析を行う際には、*SPSS* : *Categories* のプロダクトがインストールされている *PC* を用意すること。

【その他の重要事項】

発表用のレジュメとシミュレーションデータは前日までに提出し、また受講生全員に配布すること

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会心理学

<研究テーマ>社会的行動に影響を及ぼす人間関係と文化の影響

<主要研究業績>

嫉妬感情の強さと行動について 2008年 日本心理学会第72回大会
*The difference of evaluation apprehension among diverse cultures. 2008
 29th International Congress of Psychology*
 嫉妬感情と行動の関連について 2007年 日本心理学会第71回大会

【Outline and objectives】

*This course will help you to acquire the advanced data-analysis skill for
 psychological research by using R.*

PSY500B6

応用心理統計Ⅱ

山際 勇一郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義は心理統計の理論を学習し、また実践の使用を可能にするスキルを学ぶことを重くとする。すなわち①多変量解析などの応用的解析方法を学ぶ。②Rを用いてさまざまな解析方法を実習し習得する。

【到達目標】

研究に心理統計が使用できるようになること。
 使用できるというのは、①研究計画時に適切な方法を選択しながら、計画を立てることができること、②収集したデータを適切に分析処理できること、③結果を論文に記載できること、④他の研究論文を適切に読めること、の4点をいう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

心理統計解析の基礎理論の再確認および応用的実践的手法をRを用いて実習する。

一般的な進め方：各テーマについて数理的な視点からの解説をSPSSを用いながら行う。次に、受講生がRを用いて、その内容などを解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	量的尺度の関連と構造の分析	①主成分分析
第2回	量的尺度の関連と構造の分析	②因子分析
第3回	量的尺度の関連と構造の分析	③判別分析
第4回	量的尺度の関連と構造の分析	④クラスター分析
第5回	量的尺度の関連と構造の分析	⑤多次元尺度構成法
第6回	名義尺度の関連と構造の分析	⑥単純相関分析
第7回	名義尺度の関連と構造の分析	⑦多重相関分析
第8回	共分散構造分析	①理論的基礎
第9回	共分散構造分析	②確認的因子分析
第10回	共分散構造分析	③パス解析
第11回	共分散構造分析	④多母集団因子分析
第12回	共分散構造分析	⑤平均共分散構造分析
第13回	その他の解析法	最新のトピックの紹介
第14回	その他の解析法	最新のトピックの紹介

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

春学期の学習内容の再確認を行っておくこと。
 また、各回の内容の復習は必ず行うこと。

【テキスト（教科書）】

なし。各テーマごとに発表者がレジメを配布する。

【参考書】

各テーマごとに紹介する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：授業での発表と課題 (50%)、授業への取り組み (50%)
 「評価基準」：基本的な知識が習得されていること、Rを用いてデータを適切に解析できること

【学生の意見等からの気づき】

改善アンケートからの参考になる記述は特になし。
 授業において各テーマの終了後ではなく短い間隔で発表を行う。
 学生の自主的な学習に期待できないので、課題を多くするなどが必要である。

【学生が準備すべき機器他】

カテゴリカル分析を行う際には、SPSS : Categories のプロダクトがインストールされているPCを用意すること。

【その他の重要事項】

発表用のレジメとシミュレーションデータは前日までに提出し、受講生全員に配布すること

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>社会心理学
 <研究テーマ>社会的行動に影響を及ぼす人間関係と文化の影響
 <主要研究業績>
 嫉妬感情の強さと行動について 2008年 日本心理学会第72回大会

The difference of evaluation apprehension among diverse cultures. 2008
29th International Congress of Psychology
 嫉妬感情と行動の関連について 2007年 日本心理学会第71回大会

【Outline and objectives】

This course will help you to acquire the advanced data-analysis skill for psychological research by using R.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

福田 由紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的な意義があり、かつ自分の興味に沿った言語心理学的研究を行うためのスキルを習得する。

【到達目標】

- ①言語心理学的研究を行うための知見収集できる。
- ②収集した知見をレビュー論文としてまとめることができる。
- ③言語心理学的研究を行うための実験を計画し、実施できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

前半は、①と②の目標に沿って、先行研究を精読し、自分の研究に必要な知識を蓄積し、論文化するためワークを行う。後半は、③の目標に沿って、先行研究に基づいた実験を計画し実施する。授業は受講生の発表で構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	自分の研究目的とキーワード3つを発表する。	院生による発表。
第3回	キーワード1に関する先行研究を発表する。	院生による発表。
第4回	キーワード2に関する先行研究を発表する。	院生による発表。
第5回	キーワード3に関する先行研究を発表する。	院生による発表。
第6回	先行研究のまとめを発表する。	院生による発表。
第7回	先行研究のまとめを論文化するための構成の検討。考えるためのスキルを学ぶ。	院生による発表。
第8回	思考ツールを用いてレビュー論文を内省する。	院生による発表。
第9回	レビュー論文の要約をまとめて、発表する。	院生による発表。
第10回	先行研究の方法だけを取り出し、その吟味をする。	院生による発表。
第11回	先行研究の材料の選定方法を取り出し、その吟味をする。	院生による発表。
第12回	自分の研究のための材料の選定プロセスの発表し、討議をする。	院生による発表。
第13回	実験計画を立て発表する。	院生による発表。
第14回	実験実施進捗状況を発表することと授業の総括。	院生による発表。研究者としてのスキル獲得に関して総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回～第4回 自分の研究の元になる先行研究を検索し、精読し、発表するための準備を行う。
 第5回～第8回 レビュー論文の要約を作成し、発表するための準備を行う。
 第9回～第11回 実験準備発表の準備を行う。
 第12回・第13回 実験計画発表を行うための準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特に無し。適時、周知する。

【参考書】

特に無し。適時、周知する。

【成績評価の方法と基準】

発表40%、発表への質問・コメント30%、討論への参加40%などを総合的に評価する。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

院生とのやり取りの中で、自分の研究活動を多々振り返りました。ありがとうございました。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語心理学

<研究テーマ>読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割
<主要研究業績>

①福田由紀・穉原遙・菊池理紗 (2018). 言語心理学で何を学べるか？—言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

②福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？ 読書科学, 59,161-171.

③福田由紀・土清水咲菜・荒井弘和 (2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？ 法政大学文学部紀要, 73,99-108.

<HP>

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn research skills to study language of psychology by oneself.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

福田 由紀

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的な意義があり、かつ自分の興味に沿った言語心理学的研究を社会に発表するためのスキルを習得する。

【到達目標】

- ①実際に実験をした結果を日本語で口頭発表できる。
- ②実際に実験をした結果を英語で口頭発表できる。
- ③実際に実験をした結果を論文化する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

前半は、①と②の目標に沿って、実施した実験結果を学会発表形式で日本語と英語で発表を行う。後半は、実施した実験結果を論文化する。授業は受講生の発表で構成される。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認。
第2回	実施した実験結果や考察の確認。	院生による発表。
第3回	発表にあたり、発表論文集形式の要約を日本語で作成。	院生による発表。
第4回	学会形式に沿って日本語で口頭発表する。	口頭発表における初注意に関する講義と院生による発表。
第5回	学会形式に沿って日本語でポスターを作成する。	ポスター発表における初注意に関する講義と院生による発表。
第6回	学会形式に沿って日本語でポスター発表する。	院生による発表。
第7回	発表にあたり、発表論文集形式の要約を英語で作成する。	院生による発表。
第8回	学会形式に沿って英語で口頭発表する。	口頭発表における初注意に関する講義と院生による発表。
第9回	学会形式に沿って英語でポスターを作成する。	院生による発表。
第10回	学会形式に沿って英語でポスター発表する。	ポスター発表における初注意に関する講義と院生による発表。
第11回	論文作成のためのスキルを獲得する。	論文作成のためのスキルの講義。
第12回	論文構成の各要素を作成するためのスキルを獲得する。	思考ツールを使用した論文作成のためのグループワーク。
第13回	論文の構成を発表する。	院生による発表。
第14回	修正した論文の構成を発表することと授業の総括。	院生による発表。研究者としてのスキル獲得に関して総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回～第3回 日本語での口頭発表のための様々な準備を行う。
- 第4回・第5回 日本語でのポスター発表のための様々な準備を行う。
- 第6回・第7回 英語での口頭発表のための様々な準備を行う。
- 第8回・第9回 英語でのポスター発表のための様々な準備を行う。
- 第10回・第11回 論文の構成を発表するための準備を行う。
- 第12回・第13回 論文の要約等発表のための準備を行う。

【テキスト（教科書）】

特に無し。適時、周知する。

【参考書】

特に無し。適時、周知する。

【成績評価の方法と基準】

発表 40%、発表への質問・コメント 30%、討論への参加 40%などを総合的に評価する。特に、討論への積極的な参加姿勢を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

自分の研究内容を、分かりやすくかつ正確に伝えるのは難しいですね。より良い方法を見つけるためには、考え続けること、練習することしかないかなと、この授業を通して感じました。

【その他の重要事項】

受講希望者は初回の授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞言語心理学

＜研究テーマ＞読みと感情、コミュニケーションにおける言語活動の役割

＜主要研究業績＞

①福田由紀・菟原遥・菊池理紗 (2018). 言語心理学で何を学べるか？一言語学との学問イメージ比較—法政大学文学部紀要, 76,115-127.

②福田由紀・佐藤志保 (2017). ポジティブな文章を読むと気分が良くなるのか？読書科学, 59,161-171.

③福田由紀・土清水咲葉・荒井弘和 (2016). 状況モデルの更新回数は物語の面白さを促進するのか？法政大学文学部紀要, 73,99-108.

＜HP＞

「ことばのこころ研究室」<http://www.zc.em-net.ne.jp/~psy-language/>

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn presentation skills effectively.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

島宗 理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。受講生は、それぞれ自分の問題意識から研究テーマを選び、標的となる行動を決め、その制御変数を実験によって見つけながら、この方法論を習得します。博士論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、修了後、それぞれの仕事に役立つ技術を習得することを目指します。

【到達目標】

この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。

- (1) 標的行動を具体化し、測定方法を定めること、
- (2) 標的行動の制御変数に関する先行研究を調べること、
- (3) 制御変数の候補を複数推定し、その中から実験で検討する変数を選び、実験計画を立案すること、
- (4) 実験計画書を作成し、発表すること、
- (5) 実験装置や測定システムなどを準備し、予備実験からそれを改善すること、
- (6) 本実験を実施し、データを分析すること、
- (7) 実験結果をまとめて図表や文章、口頭発表などでコミュニケーションすること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

受講生各自の博論の進捗にあわせ、毎週、課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業内容与方法、約束事を説明します。実験計画のプレゼン方法、注意すべきこと、研究倫理（倫理委員会に提出する書類など）について解説します。
第 2 回	実験計画の発表 1	独立変数と従属変数、変数の統制、実験計画法、行動の観察と記録、仮説の立案や変数の探索などについて、博論実験の計画をしながら討論します。
第 3 回	実験計画の発表 2	博論の研究テーマについて討論し、予備実験の準備を進め、報告します。
第 4 回	実験計画の発表 3	博論の予備実験の準備を進めます。刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
第 5 回	予備実験の報告 1	予備実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（本実験の計画）などについて討論します。
第 6 回	予備実験の報告 2	予備実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話しているかどうかを評価し、フィードバックします。
第 7 回	予備実験の報告 3	次の予備実験あるいは本実験の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
第 8 回	先行研究をまとめる 1	先行研究や参考書、統計資料などを読み、現在の研究の流れや社会のニーズの中に自分の実験を位置づけます。
第 9 回	先行研究をまとめる 2	先行研究の中に本実験をどのように位置づけるかを話し合い、討論します。
第 10 回	本実験の準備	本実験の準備を進め、予備実験から改訂した刺激や装置、教示や記録用紙など、具体的な材料を持ち寄り、確認と質疑応答をします。
第 11 回	本実験の報告 1	本実験の結果を報告し、データ視覚化と分析、傾向や変動の判断、データに基づいた改善（次の実験計画）などについて討論します。

- 第12回 本実験の報告2 本実験の結果をまとめ、プレゼンします。データから「わかったこと」「わからなかったこと」をわかりやすく、見て伝わる資料を作成できているか、相手にわかるように話せているかどうかを評価し、フィードバックします。
- 第13回 次の実験の計画 次の実験計画についてプレゼンし、話し合います。
- 第14回 まとめ 自分の研究のセールスポイントを抜き出し、これを伝える題目を考えて発表します。博論のストーリーを端的に伝える練習をします。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。
○興味がある実験について標的行動（従属変数）、介入方法（独立変数）、実験計画法の3つを考え、提案する資料を作成する。

【テキスト（教科書）】

島宗理(2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社

【参考書】

- 以下、シングルケースデザイン法に関する参考書です。
○ Barlow, D. H., & Hersen, M. (1984). *Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change*. Pergamon. (パーロー, D. H.・ハーセン, M. 高木俊一郎・佐久間 徹 (監訳) 一事例の実験デザイン—ケーススタディの基本と応用— 二瓶社)
○ Cooper, J. C., Heron, T. E., & Heward, W. L. (2007). *Applied Behavior Analysis*. Pearson Education. (クーバー, J. C., ヘロン, T. E., & ヒューワード, W. L. 中野良顯 (訳) (2013) 応用行動分析学 明石書店)

【成績評価の方法と基準】

授業への参加 (6 点 x 14 週)、週間課題 (10 点 x 14 週)、計画と報告 (6 点 x 14 週)、学期課題 (倫理申請セットや学会発表など学期のはじめに決定 50 点) の総計のうちの獲得得点割合 (%) で成績を評価します。欠席が 4 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2018 年度の授業改善アンケートでは回答がなかったので個人的な気づきです) 今年度は企業からの研修生を迎え、博士ゼミ生 1 名、企業研修生 1 名、計 2 名で授業を行いました。それぞれ、行動分析学の研究という点では共通しているものの、片や言語行動に関する基礎研究、片や企業における実践研究ということで、興味の方向や既存の知識が大きく異なり、自分の研究を相手に伝える技術には磨きがかかったのではないかと思います。

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学
<研究テーマ>
組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発
<主要研究業績>

- ① 島宗理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学 新曜社
② 島宗理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社
③ 島宗理・若松克則 (2016). 会計事務所働くパート従業員を対象とした参加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to learn and master research methods in behavior analysis, including functional analyses of behavior, systematic observation and recording procedures, single-case designs, and visual inspection of time series data to evaluate effectiveness of an intervention. Students will select their own research topic, conduct a literature review, develop a research proposal, and run experiments.

心理学特殊研究Ⅱ

島宗理

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

社会的・個人的に重要な行動問題の解決策を科学的に発見、開発する方法論として、行動分析学の研究法を学びます。この授業では、博士論文の実験計画書や研究論文を書き上げ、発表するまでを支援しますが、その過程で、論理的な文章作成や根拠に基づいた提案、プレゼン、討論の練習をしていきます。

【到達目標】

- この授業で主に目指すのは以下の知識や技術の習得です。
1) 自分の実験を社会的、学術的な文脈に位置づけること、
2) 実験から得られたデータを分析し、わかったこと、
3) わからなかったことを整理し、わからなかったことはどうすればわかるようになるかを実験計画として提案すること、
4) わかったことを数量化し、図表にまとめ、読み手や聞き手にわかりやすいように発表すること、
5) 論理的に一貫した、読みやすい文章を書くこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎週、受講生各自の博論研究の進捗にあわせた課題を出します。授業はゼミ形式で、課題の発表と討論を中心に進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業内容と方法、約束事を説明します。 博論実験の内容を1分間でプレゼンする練習をします。
第2回	論文を書く： アウトラインを書く	アウトラインを書いてから本文を書く方法を解説します。「方法」の章を使って練習をします。
第3回	論文を書く： データの視覚的な提示	実験の中心的なデータを選び、それを視覚的に伝える図を描きます。独立変数と従属変数の関係性がわかりやすく提示できているかどうか、「手引き」やゼミの「チェックリスト」にそっているかどうかを確認します。
第4回	論文を書く： 推敲する (1)	方法の章の完成版を提出し、チェックリストに基づいて推敲します。読み手がその実験を追試できるように書かれているかどうか、読み手の立場から自分の論文を読み直して推敲する練習をします。
第5回	論文を書く： 事実を書く	アウトラインから書く方法を結果の章を使って練習します。読み手に自分の研究のセールスポイントをわかりやすく伝えるために、順序や論理展開を工夫する練習です。
第6回	論文を書く： 先行研究をまとめる	先行研究をまとめて表にし、「手引き」に即した作表方法を学びます。先行研究を紹介する段落を書き、文献引用の作法を練習します。
第7回	論文を書く： 研究を位置づけるアウトラインを書く	第6回でまとめた先行研究の展望を活かし、また春学期に作成したストーリーを振り返り、序論のアウトラインを作成します。パラグラフ・ライティング法を解説し、練習します。
第8回	論文を書く： 推敲する (2)	第5回で作成したアウトラインに肉付けをして結果の章をまとめます。データの分析や統計が適切に、かつ充分に行われているかどうかを確認します。
第9回	論文を書く： 推敲する (3)	パラグラフ・ライティング法を使って序論を完成させます。チェックリストを使って推敲する練習を続けます。
第10回	論文を書く： 執筆ルールに基づいて校正する	引用文献一覧を作成します。本文と見合わせて、引用の方法が適切かどうかを確認します。

- 第 11 回 論文を書く： 研究論文の初稿を用い、推敲の練習
推敲する (4) をします。また、自分で書いた文章を
自分で推敲するのは困難であることを
自覚するために、他の受講生の論文を
校正する練習もします。
- 第 12 回 論文を投稿する： 論文を学術雑誌へ投稿する手順やそ
学術雑誌への投稿手順 の後のやりとりについて解説します。
- 第 13 回 研究計画 (1) 次年度に行う実験の計画を発表し、
討論します。
- 第 14 回 研究計画 (2) 次年度に行う実験の計画を発表し、
討論します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、課題をだしますので、各自取り組み、提出して下さい（以下に一例）。
○日本心理学会の『執筆・投稿の手びき』およびゼミの『論文執筆チェックリ
スト』を用いて「結果」の章を推敲し、提出する。

【テキスト（教科書）】

テキストはありませんが、研究テーマや課題に応じて、適宜、資料を配付
し、参考文献などを紹介します。

【参考書】

以下、パラグラフライティング法に関する参考書です。
○倉島保美 論理が伝わる世界標準の「書く技術」ブルーバックス
○野田直人 小論文・レポートの書き方—パラグラフ・ライティングとアウ
トラインを鍛える演習帳— 有限会社人の森

【成績評価の方法と基準】

授業への参加 (6 点 x 14 週)、週間課題 (10 点 x 14 週)、計画と報告 (6
点 x 14 週)、学期課題 (倫理申請セットや学会発表など学期のはじめに決定
50 点) の総計のうちの獲得得点割合 (%) で成績を評価します。
欠席が 4 回以上になると自動的に E 評価になります。

【学生の意見等からの気づき】

(2017 年度は未開講でした)

【その他の重要事項】

オフィスアワーは春学期は金曜日の 4 限、秋学期は火曜日の 2 限、場所は
研究室（富士見坂校舎 6F9 号室）です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 行動分析学

<研究テーマ>

組織行動マネジメント、広告・消費者行動、教材開発

<主要研究業績>

① 鳥宗 理 (2019). ワードマップ 応用行動分析学

新曜社

② 鳥宗 理 (2015). リーダーのための行動分析学入門 日本実業出版社

③ 鳥宗 理・若松克則 (2016). 会計事務所で働くパート従業員を対象とした参
加型マネジメント 行動分析学研究, 31, 2-14.

【Outline and objectives】

*The purpose of this course is to learn and master research methods
in behavior analysis, including evaluation of single-case design data
with visual inspection, and interpretation of functional relationship
between dependent and independent variables. Student will also aim
to master how to write a research paper, by learning about paragraph
writing, Japanese Psychological Association's publication manual, and
other miscellaneous rules in academic writing.*

PSY700B6

心理学特殊研究 I

藤田 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として博士後期課程の院生が、各自で研究を遂行できるようになるため
に必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。そのために必要な
研究活動を自分自身で計画し、実行し、成果を自己評価して、次の計画に活
かすという PDCA サイクルを体得する。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授
業の具体的な到達目標となる。

- 的確に自分自身の研究能力を現状分析できること。
- 博士後期課程全体の目標、各年度での中期目標、セメスター単位での小目
標を合理的に立案できる。
- 上記 a, b の内容をふまえて、具体的な行動計画および達成指標を考案で
きる。
- 上記 a, b, c の内容をふまえて、実際に行動する。
- 上記 a, b, c, d の内容をふまえて、セメスター単位での到達度を適正に
自己評価できる。
- 上記 e の自己評価を、次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力
を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習
成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に
関連

【授業の進め方と方法】

まず最初に、博士後期課程を通じての自分自身の目標を、複数の観点から
立てる。次に、その全体目標を達成するための中目標として、当該学年での
目標を立てる。さらに、小目標として当該学期（セメスター）での目標を立て
る。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること
自体が課題である。

発表は 3 種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定、2. 目標を達成
するために各自が設定した課題（複数回）、3. 目標達成度に対する自己評価と
今後の改善策。

授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして、自己評価基準の
適正化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要および各自課題の説明
第 2 回	目標設定の発表	学位論文作成に向け、現状分析を踏ま えた春学期の各自の目標
第 3 回	各自課題 1 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 1 巡目の第 1 回 (2 人発表)
第 4 回	各自課題 1 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 1 巡目の第 2 回 (2 人発表)
第 5 回	各自課題 1 - 3	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 1 巡目の第 3 回 (2 人発表)
第 6 回	各自課題 1 - 4	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 1 巡目の第 4 回 (2 人発表)
第 7 回	各自課題 2 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 2 巡目の第 1 回 (2 人発表)
第 8 回	各自課題 2 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 2 巡目の第 2 回 (2 人発表)
第 9 回	各自課題 2 - 3	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 2 巡目の第 3 回 (2 人発表)
第 10 回	各自課題 2 - 4	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 2 巡目の第 4 回 (2 人発表)
第 11 回	各自課題 3 - 1	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 3 巡目の第 1 回 (3 人発表)
第 12 回	各自課題 3 - 2	春学期の目標達成に向けて各自が設定 した課題に関する発表の 3 巡目の第 2 回 (3 人発表)

- 第13回 各自課題3-3 春学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の3巡目の第3回（3人発表）
- 第14回 目標達成度の自己評価 達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

3種類の発表について以下の通りに授業前に準備をすることを求める。
 また、「現状分析と目標設定」については、発表後に授業時間内の議論を踏まえて修正を加え、提出することを求める。
 「各自課題」は、各自が目標を達成するために設定し、発表の準備が必要となる。
 「目標達成度に対する自己評価と今後の改善策」は事前の発表準備に加え、授業後に修正版を作成し提出することを求める。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配布プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版 - 充実した大学生活をおくるために - 北大路書房
 そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。
 各自課題 30 %…発表の仕方（プレゼン技術）、発表の内容、発表資料の質を評価対象とする。
 目標設定発表 20 %…発表の仕方、目標設定の水準および適切さ、目標の実現可能性、現状分析の適切さを評価対象とする。
 自己評価発表 10 %…発表の仕方、期末の自己評価の妥当性を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

対象となる回答がなかったため記載はありません。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。
 心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。
 この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。
 オフィスアワーは、木曜日の 13:30～14:30、場所は BT11 階のスタディールーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
 認知心理学、教育心理学
 <研究テーマ>
 単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。
 <主要研究業績>
 藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版 - 充実した大学生活をおくるために - 北大路書房
 藤田哲也(2006). 心理学を活かした教育実践のために 井上智義(編) 視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.
 藤田哲也(2010). 記憶過程と学習 三宮真智子(編) 教育心理学 2章 学文社, pp.22-37

【Outline and objectives】

The goal of this class is to improve the various powers necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out their own research. For that purpose, students will acquire the PDCA cycle to plan and execute research activities, self-evaluate results, and make use of it in the next plan.

心理学特殊研究Ⅱ

藤田 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主として博士後期課程の院生が、各自で研究を遂行できるようになるために必要な諸々の力を向上させることが授業の目的である。年度当初（春学期）に立てた各年度の中期目標を達成するために、秋学期の小目標を立て、具体的な研究活動を計画、実行し、成果を自己評価して、次の年度の計画に活かすという PDCA サイクルを体得する。なお、自分の研究領域の先行研究と自分自身の研究の関係を明確にするために、レビューを行うことを課題に含める。

【到達目標】

春学期に引き続き、秋学期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。
 a. 的確に自分自身の研究能力を現状分析できること。
 b. 博士後期課程全体の目標、各年度での中期目標、セメスター単位での小目標を合理的に立案できる。
 c. 上記 a, b の内容をふまえて、具体的な行動計画および達成指標を考案できる。
 d. 上記 a, b, c の内容をふまえて、実際に行動する。
 e. 上記 a, b, c, d の内容をふまえて、自分の研究を先行研究の中に適切に位置づけることができる。
 f. 上記 a, b, c, d, e の内容をふまえて、セメスター単位での到達度を適正に自己評価できる。
 g. 上記 f の自己評価を、次の目標設定に活かすことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

春学期の「心理学特殊研究Ⅰ」において、博士後期課程を通じての自分自身の目標を、複数の観点から立てた。次にその全体目標を達成するための中目標として、当該学年での目標を立てた。春学期の成果をふまえて、新たな小目標として当該学期（セメスター）での目標を立てる。何をどのようにすれば各レベルの目標が達成できるのかを考えること自体が課題である。
 発表は 4 種類の趣旨のものになる。1. 現状分析と目標設定、2. 目標を達成するために各自が設定した課題、3. 自分の研究領域における先行研究の概観（レビュー）、4. 目標達成度に対する自己評価と今後の改善策。
 授業ではそれぞれの発表に対して全員で意見交換をして、自己評価基準の適正化を図る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要および各自課題、レビュー発表の説明
第2回	目標設定の発表	学位論文作成に向け、現状分析を踏まえた秋学期の各自の目標
第3回	各自課題1	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の第1回
第4回	各自課題2	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の第2回
第5回	各自課題3	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の第3回
第6回	各自課題4	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の第4回
第7回	各自課題5	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の第5回
第8回	各自課題6	秋学期の目標達成に向けて各自が設定した課題に関する発表の第6回
第9回	レビュー発表1	各自の研究領域に関するレビュー発表の第1回
第10回	レビュー発表2	各自の研究領域に関するレビュー発表の第2回
第11回	レビュー発表3	各自の研究領域に関するレビュー発表の第3回
第12回	レビュー発表4	各自の研究領域に関するレビュー発表の第4回
第13回	レビュー発表5	各自の研究領域に関するレビュー発表の第5回
第14回	目標達成度の自己評価	達成指標に基づいた目標達成度の自己評価と改善案の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

3種類の発表について以下の通りに授業前に準備をすることを求める。
 また、「現状分析と目標設定」については、発表後に授業時間内の議論を踏まえて修正を加え、提出することを求める。

「各自課題」は、各自が目標を達成するために設定し、発表の準備が必要となる。

「レビュー発表」では、先行研究論文を多数読み、独自の視点から問題意識を構築し、発表するための準備を求める。

「目標達成度に対する自己評価と今後の改善策」は事前の発表準備に加え、授業後に修正版を作成し提出することを求める。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配布プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。

各自課題 30 %…発表の仕方（プレゼン技術）、発表の内容、発表資料の質を評価対象とする。

目標設定発表 20 %…発表の仕方、目標設定の水準および適切さ、目標の実現可能性、現状分析の適切さを評価対象とする。

自己評価発表 10 %…発表の仕方、期末の自己評価の妥当性を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

対象となる回答がなかったため記載はありません。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。

心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

オフィスアワーは、木曜日の 13:30～14:30、場所は BT11 階のスタディルーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也（編）(2006). 大学基礎講座 改増版－充実した大学生活をおくるために－ 北大路書房

藤田哲也（2006）. 心理学を活かした教育実践のために 井上智義（編）視聴覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のために 8章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也（2010）. 記憶過程と学習 三宮真智子（編）教育心理学 2章 学文社, pp.22-37

【Outline and objectives】

The objective of this class is to improve the various abilities necessary for graduate students of Doctoral Course to be able to carry out research. In order to achieve the middle-term goals of each fiscal year established at the beginning of the spring semester, students set small goals for the fall semester and acquire the PDCA cycle on research activities. In order to clarify the relationship between the previous research and the student's own research, students review the preceding research.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

高橋 敏治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生理心理学の関連論文の抄読と、それをもとに自分の研究成果の学会発表・論文作成の方法を学び、その過程を繰り返しながら博士論文の成果としてまとめます。

特に生理心理学の手法・操作に精通し、必要なデータを採取し、解析ができるようになります。

【到達目標】

1. 生理心理学手法を駆使し、適切なデータ解析・図表の説明・考察などを通して関係する学会への発表、および論文投稿を行います。

2. 特に学会発表の場合は、エントリーから実際の発表までの過程やスケジュールの調整などを学びます。

3. 論文作成の場合は、投稿誌の選び方、投稿雑誌へ調整、査読への返し方などを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

演習のため、発表を繰り返す行い、発表時のコメントなどをアクションペーパーにまとめて提出します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	生理心理学手法の習熟程度の把握や授業内容や範囲の希望をすり合わせます。発表可能な学会の検索、学会スケジュール、準備すべきものを確認します。
第 2 回	春学期の学会発表の検討	自分の研究に関係の深い論文・成書の抄読します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「問題点提起」に焦点を当てまとめます。
第 3 回	先行研究の抄読会 (1) 日本語論文を中心に	自分の研究に関わり合いの深い論文・成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。
第 4 回	先行研究の抄読会 (2) 日本語論文を中心に	自分の研究に関係の深い論文・成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「対象・方法」に焦点を当てまとめます。
第 5 回	先行研究の抄読会 (3) 日本語論文を中心に	自分の研究に関係の深い論文・成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「分析」に焦点を当てまとめます。
第 6 回	先行研究の抄読会 (4) 日本語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い論文・成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
第 7 回	先行研究の抄読会 (5) 日本語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い論文・成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「考察」に焦点を当てまとめます。

第 8 回	先行研究の抄読会 (6) 日本語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い論文・成書を抄読します。 疑問点や問題点を検討します。 パワーポイントで発表原稿を作成します。 先行研究の「文献」の書き方に焦点を当てまとめます。
第 9 回	学会発表の準備 (1) 日本語での発表を中心に	学会発表への準備をします。 抄録の作成のためのデータ解析を行います。 抄録のエントリー時に必要な情報の確認をします。 学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用いて作成します。
第 10 回	学会発表の準備 (2) 日本語での発表を中心に	学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用いて作成します。
第 11 回	学会発表の準備 (3) 日本語での発表を中心に	学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用いて作成します。 発表時間や発表の仕方に合わせて練習をします 発表がポスターの場合は、ポスター作製の操作を習熟します 今までの抄読会や学会発表の成果を通して論文にまとめます。 投稿する論文を言語、難易度などを考慮し雑誌を選定します。 雑誌の投稿要領を検討します。
第 12 回	論文の作成 (1) 日本語論文を中心に	投稿論文に関係の深い論文・成書を抄読します。 投稿原稿を作成する上での疑問点や問題点を検討します。 先行研究の「文献」に焦点を当てまとめます。
第 13 回	論文の作成 (2) 日本語論文を中心に	レポート課題の作成し精査します。
第 14 回	統括・まとめ	

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回：レポート課題として文献を英文・日本語論文としてリスト化
第 2 回：レポート課題として生理心理学・睡眠関係の学会をリスト化
文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備。
第 3 回～7 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
(それぞれ「対象・方法」「図」「表」「考察」「文献」次回の授業で焦点を当てる項目を綿密に準備)
第 8 回～10 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第 11 回～14 回：論文原稿準備、繰り返し推敲
第 14 回：論文を完成させレポートとして提出（雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査）

【テキスト（教科書）】

特に指定しません。適宜プリントなどを配布します。

【参考書】

堀忠雄 (2008)。生理心理学—人間の行動を生理指標で測る。培風館。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業態度、授業内での活発な議論など）30%、発表（学会も含む）30%、事前の課題（論文も含む）40%

【学生の意見等からの気づき】

自分の博士論文の研究を見させて、「論文化のタイミング」「研究の転機となるようなアンテナの貼り方」「研究推進の困難さに直面した時」「研究を含めた人とのつながり」など講義の中で受け取ってもらっていることを感じました。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。事前に案内しますが、実施場所については注意してください。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは、実情に応じて適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>睡眠、精神保健学
<研究テーマ>眠気とパフォーマンス
<主要研究業績>

高橋敏治 (2017)。時差ぼけと光環境 睡眠医療, 11, 525-530.

高橋敏治 (2014)。概日リズム睡眠障害—3) 時差型の病態—。睡眠医療 8, 197-201.

【Outline and objectives】

We will learn how to read papers related to physiological psychology and how to prepare academic presentations / papers of their own research results. We will summarize the results of doctoral dissertation by repeating the process.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

高橋 敏治

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

生理心理学の関連論文の抄読と、それをもとに自分の研究成果の学会発表・論文作成の方法を学び、その過程を繰り返しながら博士論文の成果としてまとめます。
特に生理心理学の手法・操作に精通し、必要なデータを採取し、解析ができるようにします。
それらの成果を英文で発表できるようにします。

【到達目標】

1. 生理心理学手法を駆使し、適切なデータ解析・図表の説明・考察などを通して関係する学会への発表、および論文投稿を英語で行います。
2. 特に学会発表の場合は、海外での発表を意識し、エントリーから実際の発表までの過程やスケジュールの調整などを学びます。
3. 英語論文で、投稿誌の選び方、査読への返し方などを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

演習のため、発表を繰り返し行い、発表時のコメントなどをアクションペーパーにまとめて提出します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	生理心理学手法の習熟程度の把握や授業内容や範囲の希望をすり合わせます。海外での発表可能な学会の検索、学会スケジュール、準備すべきものを確認します。
第 2 回	秋学期の学会発表の検討	自分の研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「問題点提起」に焦点を当てまとめます。
第 3 回	先行研究の抄読会 (1) 英語論文を中心に	自分の研究に関わり合いの深い英語論文・英語成書の抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「対象・方法」に焦点を当てまとめます。
第 4 回	先行研究の抄読会 (2) 英語論文を中心に	自分の研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「分析」に焦点を当てまとめます。
第 5 回	先行研究の抄読会 (3) 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
第 6 回	先行研究の抄読会 (4) 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「図」「表」に焦点を当てまとめます。
第 7 回	先行研究の抄読会 (5) 英語論文を中心に	学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。前回の抄読で得た成果をどのように取り入れるかを検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「考察」に焦点を当てまとめます。

- 第 8 回 先行研究の抄読会 (6) 英語論文を中心に
学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。疑問点や問題点を検討します。パワーポイントで発表原稿を作成します。先行研究の「文献」の書き方に焦点を当てまとめます。
- 第 9 回 学会発表の準備 (1) 英語での発表を中心に
海外での学会発表への準備をします。抄録の作成のためデータ解析を行います。抄録のエントリー時に必要な情報を確認します。学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い発表原稿を英語で作成します。
- 第 10 回 学会発表の準備 (2) 英語での発表を中心に
海外での学会発表研究に関係の深い英語論文・英語成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い英語で作成します。英語論文の校閲の受け方を学びます。
- 第 11 回 学会発表の準備 (3) 英語での発表を中心に
海外での学会発表研究に関係の深い論文・成書のまとめ、発表原稿をパワーポイントを用い英語で作成します。発表時間や発表の仕方に合わせて練習します。発表がポスターの場合は、ポスター作製の操作を習熟します。
- 第 12 回 論文の作成 (1) 英語での発表を中心に
今までの抄読会や学会発表の成果を通して英語論文にまとめます。投稿する論文を言語、難易度などを考慮し雑誌を選定します。雑誌の投稿要領を検討します。
- 第 13 回 論文の作成 (2) 英語での発表を中心に
投稿論文に関係の深い英語論文・英語成書を抄読します。投稿原稿を作成する上での疑問点や問題点を検討します。先行研究の「文献」に焦点を当てまとめます。
- 第 14 回 論文の作成 (3) 英語での発表を中心に
今までの抄読会や学会発表の成果を通して英語で論文にまとめます。投稿する英語論文を推敲します。雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査します。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

- 第 1 回：レポート課題として文献を英文・日本語論文としてリスト化
第 2 回：レポート課題として生理心理学・睡眠関係の海外での学会をリスト化文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表原稿準備
第 2 回は「問題点提起」に焦点を当てまとめます。
第 3 回～7 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、発表英語原稿準備 (それぞれ次回の授業で焦点を当てる項目を綿密に準備)
第 3 回は「対象・方法」に焦点を当てまとめます。
第 4 回は「分析」「結果」に焦点を当てまとめます。
第 5 回は「図」「表」に焦点を当てまとめます。
第 6 回は「考察」に焦点を当てまとめます。
第 7 回は「文献」の示し方に焦点を当てまとめます。
第 8 回～10 回：文献を抄読しパワーポイントにまとめ、英語原稿を準備
第 11 回～14 回：英語論文原稿準備、繰り返し推敲
第 14 回：英語論文を完成させレポートとして提出 (雑誌の投稿要領に合わせ内容を精査)

【テキスト (教科書)】

特に指定しません。適宜プリントなどを配布します。

【参考書】

堀忠雄 (2008)。生理心理学—人間の行動を生理指標で測る。培風館。

【成績評価の方法と基準】

平常点 (授業態度、授業内の活発な議論など) 30 %、発表 (学会も含む) 30 %、事前の課題 (論文も含む) 40 %

【学生の意見等からの気づき】

自分の博士論文の研究を見すえて、「論文化のタイミング」「研究の転機となるようなアンテナの貼り方」「研究推進の困難さに直面した時」「研究を含めた人とのつながり」など講義の中で受け取ってもらっていることを感じました。

【学生が準備すべき機器他】

脳波室で実験機器を用いることがあります。事前に案内しますが、実施場所については注意してください。

【その他の重要事項】

学会の要旨・発表原稿・論文の作成などは、実情に応じて適宜抄読する論文に代えて順序を入れ替えて実施します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 睡眠、精神保健学
<研究テーマ> 眠気とパフォーマンス
<主要研究業績>

高橋敏治 (2016) 睡眠のトピックス 2 —入眠障害の新たな指標による実験的検討を中心に—。 *Neuroscience 2015* 弘前神経科学研究所紀要, 79-87。

高橋敏治 (2014)。概日リズム睡眠障害— 3) 時差型の病態—。 *睡眠医療* 8, 197-201。

【Outline and objectives】

We will learn how to read papers related to physiological psychology and how to prepare academic presentations / papers of their own research results. We will summarize the results of doctoral dissertation by repeating the process.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

越智 啓太

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>犯罪心理学
<研究テーマ>犯罪捜査への心理学の応用
<主要研究業績>「犯罪捜査の心理学」(化学同人)

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論(おもに文献検討)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論(おもに内容)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論(主に分析)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論(おもに論理展開)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論(おもに理論)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論(おもに全体構成)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論(おもに論文フォーマット)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論(まとめ1)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論(おもに実験計画)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論(おもに実験の実施法)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論(おもに実験手続き)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論(おもに実験実施上の問題点)	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論(まとめ2)おもに	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。各回のテーマ(おもに〜と記載されているもの)をとくに重視してまとめること

【テキスト(教科書)】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進行できたか(40%)。
他人の研究について適切なコメントができたか(60%)。
授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

学会発表のためのサポートを充実させるとともに統計手法についてのコメントをより詳細なものにします。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業をとるものは、この授業の参加をほかのすべての行事よりも優先すること。

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

越智 啓太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業概要

主に犯罪心理学を専攻する大学院生への研究指導

【到達目標】

自分の研究テーマに従い実験を行い、結果を分析し、まとめて、学会発表を行うとともに、論文にまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式で、各自の研究報告と全員でのディスカッション、研究指導を中心に行う。毎回各自の研究の進展状況について、レジュメとパワーポイントで説明する。学会前には、学会発表演習を行う。論文投稿に際しては読み合わせを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の研究計画について具体化する。
第2回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第3回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第4回	研究報告と討論（おもにデータ分析の実習3）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第5回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究報告と討論（おもにデータ分析についての討論、実習、問題点の修正2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第8回	研究報告と討論（おもにプレゼンテーションの準備2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第9回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価1）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第10回	研究報告と討論（おもに研究のプレゼンテーションとその相互評価2）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第11回	研究報告と討論（おもに研究プレゼンテーションの修正と実習）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	研究報告と討論（おもに学会発表の準備、実習）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究報告と討論（おもに論文執筆の準備）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第14回	研究報告と討論（年間の研究業績の発表と討論）	各自の研究の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、各自で自分の計画に従って、研究のレビュー、実験計画、実験の実施、分析、学会発表、論文執筆を行う。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

自分の研究計画に沿って研究を進行できたか（40%）。他人の研究について適切なコメントができたか（60%）。授業中に自発的に有益な発言がないといくら学術的に有益な研究を行っていたとしても、単位は与えられないので注意すること。

【学生の意見等からの気づき】

論文指導に関しては、論文の読み合わせ、口頭発表のシミュレーションなどを充実させます。

【学生が準備すべき機器他】

各自、自分が使用しているパソコンを持参して、授業に臨むこと。

【その他の重要事項】

毎回、すべての報告が終わるまで時間を延長する。学会発表前には、授業期間外にも補講を行う。この授業受講者は他のすべての行事よりもこの授業への参加を優先すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>犯罪心理学

<研究テーマ>犯罪捜査への心理学の応用

<主要研究業績>「犯罪捜査の心理学」（化学同人）

【Outline and objectives】

Do research on criminal psychology

PSY700B6

心理学特殊研究 I

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

高水準の研究を行うためのプロセスとして、自分が研究したい分野の研究史の作成と、研究計画の立案を行う。

【到達目標】

自分が関心のある研究テーマについて先行研究を調査し、研究史をまとめ、未解決の問題を追究するための研究計画を立てることを春学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文やプレゼンとしてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。春学期は、研究テーマに関する先行研究の知識を深めるための研究史（レビュー）を執筆したり、独自の研究の内容を記述した研究計画書を作成したりする。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式のため、学生による活動報告やディスカッションが主体となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入	シラバスの説明、達成目標の設定
2	研究テーマの設定 (1)	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
3	研究テーマの設定 (2)	キーワードの選定、先行研究の検索・講読
4	文献の検索・講読 (1)	先行研究の検索・講読、研究史の作成
5	文献の検索・講読 (2)	先行研究の検索・講読、研究史の作成
6	研究史としての文献の発表	研究史の発表
7	研究史の見直し	他者からのフィードバックの検討
8	修正研究史発表	修正版の研究史の発表
9	問題の設定	問題意識と研究目的の設定
10	変数の整理、仮説の設定	従属変数・独立変数の整理、目的に沿った研究仮説の設定
11	研究計画の立案	研究の目的・方法・予想される結果の検討、研究計画書の書き方、倫理審査のための準備
12	研究計画書の発表	研究計画書の発表
13	研究計画書の見直し	他者からのフィードバックの検討
14	修正研究計画書発表、総括	修正版の研究計画書の発表、春学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業にて報告するための資料を準備する。

【テキスト（教科書）】

テキストは特になし。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）. 心理学研究法入門 一調査・実験から実践まで— 東京大学出版会.
高野陽太郎・岡 隆（編）（2004）. 心理学研究法 一心を見つめる科学のまなざし— 有斐閣アルマ.
松井豊（2006）. 心理学論文の書き方—卒業論文や修士論文を書くために— 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%、進捗状況報告 25%、発表（研究史・研究計画書）50%の割合で評価する。原則として出席が授業の 2/3 に満たない場合または発表を怠った場合は単位が授与されないものとする。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程科目につき授業改善アンケートを実施せず

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学
<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究
<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一（2011）. 音声分析ソフトウェア *Praat* を用いた聴取実験：*F0* 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, *67*, 345-350.
田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, *69*, 147-158.
Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. *Journal of the Acoustical Society of America*, *123*:397-413.

【Outline and objectives】

To develop a high-quality research program in psychology, students will conduct a thorough literature review and construct a research agenda in their area of specialization.

PSY700B6

心理学特殊研究 II

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

高水準の研究を行うためのプロセスとして、自分で設定した研究計画に沿った研究の実施と、研究成果の発表および研究論文の執筆を行う。

【到達目標】

春学期に立てた研究計画に従って研究を実施し、論文やプレゼンとしてまとめることを秋学期の目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

心理学に関わる問題を自ら設定し、研究を実施し、論文としてまとめ上げるプロセスを始めから終わりまで体験することで、研究を行うためのノウハウを実践的に学ぶ。秋学期は、研究計画書に沿って研究を実施し、必要なデータを収集・分析・解釈した上で、研究論文の執筆や効果的なプレゼンといった形で成果をまとめることを目指す。特に担当教員の専門分野である話し言葉・音・音楽・視聴覚などのテーマについてはよりきめ細かな指導が受けられるであろう。授業は演習形式なので、学生による活動報告やディスカッションが主体となる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	研究計画の確認、進捗状況報告
2	研究の実施 (1)	研究の実施、経過報告
3	研究の実施 (2)	研究の実施、経過報告
4	研究の実施 (3)	研究の実施、経過報告
5	データの整理・分析 (1)	データの入力・整理
6	データの整理・分析 (2)	データの入力・整理
7	記述統計量の計算	記述統計量の算出、効果的な図表の作り方
8	中間報告	研究結果に関する中間報告・討論
9	推測統計の適用	適切な検定の適用、検定結果の解釈
10	論文の執筆 (1)	研究論文の書き方、「方法」「結果」の書き方
11	論文の執筆 (2)	「導入」「考察」の書き方
12	論文の執筆 (3)	タイトルのつけ方、参考文献の書き方、原稿の推敲
13	口頭発表の仕方 (1)	口頭発表の心得、効果的な発表資料の作り方
14	口頭発表の仕方 (2)、総括	論文提出、最終成果発表の準備、質疑への準備、秋学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

研究の流れに沿って、ほぼ毎回何らかの達成目標を設定し、次の回までに研究を進展させる。進捗状況を授業で報告するための資料を準備する。

【テキスト（教科書）】

テキストは特になし。参考書などは適宜授業で紹介する。

【参考書】

南風原朝和・市川伸一・下山晴彦（編）（2001）. 心理学研究法入門 ―調査・実験から実践まで― 東京大学出版会.

高野陽太郎・岡 隆（編）（2004）. 心理学研究法 ―心を見つめる科学のまなざし― 有斐閣アルマ.

松井豊（2006）. 心理学論文の書き方―卒業論文や修士論文を書くために― 河出書房新社.

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%、進捗状況報告 25%、発表 50%の割合で評価する。原則として出席が授業の 2/3 に満たない場合または発表を怠った場合は E 評価となる。

【学生の意見等からの気づき】

博士後期課程科目につき授業改善アンケートを実施せず

【その他の重要事項】

授業計画や運営方針の説明などをしますので、受講者は初回授業に必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一（2011）. 音声分析ソフトウェア Praat を用いた聴取実験：F0 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.

田嶋圭一・川上紗代子（2010）. 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と間の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. Journal of the Acoustical Society of America, 123:397-413.

【Outline and objectives】

To maintain a high-quality research program in psychology, students will carry out research based on their research agenda, and summarize the results into a coherent presentation and research paper.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文作成に向け、必要な能力と実績を上げることを目指します。

【到達目標】

博士論文を作成するに当たっては、博士論文作成作業自体の工程を進めるとともに、論文投稿や学会発表などの業績を積むことが必要です。本授業を通して、それらの実績を作ることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行うが、受講者は常時、制作中の論文を保有していることを前提に、授業を進める。それらの論文の作成過程と修正過程について、ディスカッションを重ねることで、よりよい論文として完成させていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	当該年度の各受講者の目標を明確にする。
第2回	学会発表の実践 (1)	現在発表を予定している学会発表の発表論旨の検討を行う。
第3回	学会発表の実践 (2)	現在発表を予定している学会発表のデータ内容の検討を行う。
第4回	学会発表の実践 (3)	現在発表を予定している学会発表のレジュメの検討を行う。
第5回	投稿論文の作成 (1)	現在投稿を予定している論文の論旨の検討を行う。
第6回	投稿論文の作成 (2)	現在投稿を予定している論文のデータの検討を行う。
第7回	投稿論文の作成 (3)	現在投稿を予定している論文の文章の作成を行う。
第8回	投稿論文の作成 (4)	現在作成している論文の文章校閲を行う。
第9回	博士論文作成のためのデータ収集 (1)	博士論文を作成するのに必要な研究のデータ収集計画について検討する。
第10回	博士論文作成のためのデータ収集 (2)	上記データ収集計画の見直しを行う。
第11回	博士論文作成のためのデータ収集 (3)	新たに収集したデータの統計的処理についての検討を行う。
第12回	博士論文作成のためのデータ収集 (4)	統計処理したデータの評価を行う。
第13回	博士論文作成のためのデータ収集 (5)	データ処理を受けて、そのデータを論文作成のために位置づける作業を行う。
第14回	まとめ	半期間の研究のまとめと今後の研究活動の計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の検討に提示する文章の作成そのものは、授業時間外に行う。また、吟味したデータ収集計画に基づいたデータ収集の実施も授業外の活動として行う。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

必要に応じて適宜、提示する

【成績評価の方法と基準】

学会発表や投稿論文の作成などの業績活動に向けての進捗状況の評価を50%、博士論文作成に向けての進捗状況の評価を50%として、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 知覚・認知心理学

<研究テーマ>

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

<主要研究業績>

・吉村浩一 2006 運動現象のタキソノミー：心理学は“動き”をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049-1056.

PSY700B6

心理学特殊研究 II

吉村 浩一

・吉村浩一 2009 直交3軸のうち1軸反転が生み出す形・動き知覚の歪み—不可能図形と影絵の回転による検討— アニメーション研究, 10A, 27-36.

【Outline and objectives】

The aim of this course is to help students write their doctoral thesis.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期と同様、博士論文作成に関し、必要な能力と実績を上げることを目指します。

【到達目標】

博士論文を作成するに当たっては、博士論文作成作業自体の工程を進めるとともに、論文投稿や学会発表などの業績を積むことが必要です。本授業を通して、それらの実績を作ることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業は演習形式で行うが、受講者は常時、制作中の論文を保有していることを前提に、授業を進める。それらの論文の作成過程と修正過程について、ディスカッションを重ねることで、よりよい論文として完成させていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	春学期の研究活動の業績を総括し、今学期に行う研究計画を立てる。
第2回	学会発表の実践 (1)	現在発表を予定している学会発表の発表論旨の検討を行う。
第3回	学会発表の実践 (2)	現在発表を予定している学会発表のデータ内容の検討を行う。
第4回	学会発表の実践 (3)	現在発表を予定している学会発表のレジュメの検討を行う。
第5回	投稿論文の作成 (1)	現在投稿を予定している論文の論旨の検討を行う。
第6回	投稿論文の作成 (2)	現在投稿を予定している論文のデータの検討を行う。
第7回	投稿論文の作成 (3)	現在投稿を予定している論文の文章の作成を行う。
第8回	投稿論文の作成 (4)	現在作成している論文の文章校閲を行う。
第9回	博士論文作成のためのデータ収集 (1)	博士論文を作成するのに必要な研究のデータ収集計画について検討する。
第10回	博士論文作成のためのデータ収集 (2)	上記データ収集計画の見直しを行う。
第11回	博士論文作成のためのデータ収集 (3)	新たに収集したデータの統計的処理についての検討を行う。
第12回	博士論文作成のためのデータ収集 (4)	統計処理したデータの評価を行う。
第13回	博士論文作成のためのデータ収集 (5)	データ処理を受けて、そのデータを論文作成のために位置づける作業を行う。
第14回	まとめ	半期間の研究のまとめと今後の研究活動の計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の検討に提示する文章の作成そのものは、授業時間外に行う。また、吟味したデータ収集計画に基づいたデータ収集の実施も授業外の活動として行う。

【テキスト（教科書）】

使わない

【参考書】

必要に応じて適宜、提示する

【成績評価の方法と基準】

学会発表や投稿論文の作成などの業績活動に向けての進捗状況の評価を 50%、博士論文作成に向けての進捗状況の評価を 50% として、評価する。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 知覚・認知心理学

<研究テーマ>

逆さめがね着用などによる変換された視覚世界への順応過程の研究。心理学研究法。アニメーションにおける動きの研究。博物館・科学館における科学的思考を促すイベントの開発。

<主要研究業績>

・吉村浩一 2006 運動現象のタキシノミー：心理学は“動き”をどう捉えてきたか ナカニシヤ出版

・Yoshimura, H. and Tabata, T. 2007 Relationship between frames of reference and mirror-image reversals. Perception, 36, 1049-1056.

PSY700B6

心理学特殊研究 I

荒井 弘和

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の大学院生が、主体的に研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】

- (1) 研究テーマに関連する先行研究のシステムティックレビューを行うことができる。
- (2) 研究計画申請書を作成することができる。
- (3) 研究を実施してデータを収集することができる。
- (4) 論文を作成して、投稿することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得ていたいかが明確にする。
第2回	先行研究のシステムティックレビュー (1)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第3回	先行研究のシステムティックレビュー (2)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第4回	先行研究のシステムティックレビュー (3)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第5回	先行研究のシステムティックレビュー (4)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第6回	研究計画申請書の作成 (1)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第7回	研究計画申請書の作成 (2)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第8回	研究の実施状況の報告 (1)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第9回	研究の実施状況の報告 (2)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第10回	研究の実施状況の報告 (3)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第11回	研究の実施状況の報告 (4)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第12回	研究の実施状況の報告 (5)	研究の実施報告を行い、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第13回	投稿論文の作成	投稿論文を作成して発表し、意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第14回	目標の振り返り	授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 発表の内容が 60%、(2) 意見交換への参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生のキャリアに応じて、詳細な研究計画立案の支援を行うことが好評なようですので、今後も継続してゆきます。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学、健康心理学

<研究テーマ>

アスリートの支援、生涯スポーツの普及

<主要研究業績>

Arai, H. (2017). *The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences*. *European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). *Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support*. *Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). *Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes*. *Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

Supporting graduate students of doctoral course to implement psychological research, write a research paper, submit and defend the paper until acceptance.

PSY700B6

心理学特殊研究 II

荒井 弘和

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の大学院生が、主体的に心理学的研究を行い、論文を作成して投稿し、その論文が受理されるまでの一連の過程を実践できるようになることを目的とします。

【到達目標】

- (1) 論文を作成して、投稿することができる。
- (2) 査読を受け、それに対して回答し、論文を受理してもらうことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回の授業では、各受講生の研究に関する発表と、それに対する意見交換を行います。受講生が将来、自立した研究者として活動することができるよう、主体的な活動を求めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	各自の目標設定	この授業の受講を終えたとき、どのような成果を得ていたいかが明確にする。
第2回	投稿論文の作成 (1)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第3回	投稿論文の作成 (2)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第4回	投稿論文の作成 (3)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第5回	投稿論文の作成 (4)	先行研究のシステムティックレビューを行い、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第6回	投稿論文の作成 (5)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第7回	投稿論文の作成 (6)	研究計画申請書を作成し、発表して意見交換を行う。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第8回	査読に対する回答 (1)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第9回	査読に対する回答 (2)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第10回	査読に対する回答 (3)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第11回	査読に対する回答 (4)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第12回	査読に対する回答 (5)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第13回	査読に対する回答 (6)	査読結果を吟味し、それに対する回答を検討する。他の受講生の発表を聞き、意見交換を行う。
第14回	目標の振り返り	授業開始時の目標を振り返り、今後の自らの研究活動を展望する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、(1) 授業中に提示された課題、(2) 発表資料の作成に取り組みます。

【テキスト（教科書）】

テキスト・参考書は用いません。必要に応じて、資料の配付・書籍や文献の紹介を行います。

【参考書】

必要・希望に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

(1) 発表の内容が 60%、(2) 意見交換の参加状況が 40%です。欠席・遅刻をした場合は評価が下がります。

【学生の意見等からの気づき】

受講生のキャリアに応じて、詳細な研究計画立案の支援を行うことが好評なようですので、今後も継続してゆきます。

【学生が準備すべき機器他】

ありません。

【その他の重要事項】

今後の予定を立てるためにも、初回の授業には必ず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

スポーツ心理学、健康心理学

<研究テーマ>

アスリートの支援、生涯スポーツの普及

<主要研究業績>

Arai, H. (2017). *The effect of romantic relationships on collegiate athletes' lives with special attention to gender differences. European Journal of Physical Education and Sport Science*, 3(7), 38-50.

Arai, H., Suzuki, F., & Akiba, S. (2016). *Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research*, 3(4), 12-24.

Arai, H. (2015). *Outcome expectancies for collective psychological performance among collegiate athletes. Journal of Physical Education and Sport*, 15, 64-69.

【Outline and objectives】

Supporting graduate students of doctoral course to implement psychological research, write a research paper, submit and defend the paper until acceptance.

大学教員心理学基礎講座

藤田 哲也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士後期課程の院生が、将来大学教員になったときに知っておくべき知識や、身につけておくべきスキルを獲得することが授業の目的である。具体的には、授業担当以外に行うべき「大学教員の職務」について理解すること、関連して現在の大学および大学教員が求められていることを示した「大学設置基準」の読み解き方や、大学教育の在り方に大きく影響を及ぼす「中央教育審議会の答申等」の概要把握を踏まえた適切な「シラバス」の書き方、公募において自分自身の研究・教育上の展望・特長を魅力的に伝えるための「自己PR」「模擬授業」を修得することなどを含む。大学教員になった後に行うFD（ファカルティ・ディベロップメント）の大学院生版であり、大学教員となった際に不適応に陥らないための職能開発を行う。

【到達目標】

半期の授業が終了した時点で、以下の各要素を身につけていることが、授業の具体的な到達目標となる。

- 現在の大学および大学教員が職務を遂行する上で知っておくべき諸概念を自分の研究・教育活動の中で説明できる。
- 半期の授業計画を適切に立てることができる。
- 高い教育効果を見込める方法を取り入れた授業を行うことができる。
- 目標に対する到達度について、受講生相互に的確な評価を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的な授業の進め方は、各回のテーマについて事前に予習をし、自分で理解したことをふまえて授業内で出される課題に取り組み、発表や討論を行うというものである。すなわち、受動的に知識を獲得するのではなく、自主的な理解と他者への説明活動を通じたアクティブ・ラーニングが授業の中核をなす。

具体的に取り組む課題としては、複数種類の「シラバスの作成」、公募での自己PRを想定した「大学教員としての抱負の文章化」および「履歴書・研究業績表の作成」の、また、人事選考面接を想定した「15分間の模擬授業の実施」を予定している。授業ではそれぞれの発表に対して、全員で評価者の視点からの討論を行い、改善への方向性を明確にする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要および各課題の説明
第2回	大学教員の基礎知識 1	大学設置基準～FD、三つのポリシー、自己点検・評価活動、キャリア教育
第3回	大学教員の基礎知識 2	中教審の答申～学士課程教育、初年次教育、アクティブ・ラーニング
第4回	シラバス作成 1	内容に関する留意点、書式・表現上の留意点
第5回	シラバス作成 2	「心理学概論」シラバス相互チェック
第6回	シラバス作成 3	「専門の講義」シラバス相互チェック
第7回	公募書類作成 1	「履歴書・業績表」作成上の留意点、「自己PR・就職後の抱負」ですべきこと
第8回	公募書類作成 2	公募書類相互評価
第9回	公募書類作成 3	修正版公募書類相互評価
第10回	模擬授業 1	模擬授業に反映させるべきこと、技術的な留意点
第11回	模擬授業 2	模擬授業実施と相互評価 1
第12回	模擬授業 3	模擬授業実施と相互評価 2
第13回	模擬授業 4	模擬授業実施と相互評価 3
第14回	総括	授業の振り返りと各自の今後の課題の明確化

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

この授業では、授業時間外に次のことを行うことを求める。

心理学概論および、各自の専門領域の講義科目を想定した「シラバス」を作成すること、他の受講生の作成したシラバスに対して改善点等を指摘すること。

公募での自己PRを想定した「大学教員としての抱負」を文章化し、「履歴書・研究業績表」を作成すること、それらの書類について、他の受講生に対して改善のアドバイスをを行うこと。

人事選考面接を想定した「15分間の模擬授業」の準備をすること。

【テキスト（教科書）】

教科書は指定しない。授業は配付プリントに沿って行う。

【参考書】

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版 - 充実した大学生活

をおくるために - 北大路書房

そのほか、各回の授業内容に関連した書籍や論文を授業内で紹介

する。

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %…授業へ出席し、討論に参加していること自体を評価対象とする。

専門の講義のシラバス 20 %…「授業の概要と目的」「到達目標」「授業の進め方と方法」「授業計画と授業時間外学習」「成績評価の方法と基準」の記載内容を評価対象とする。

公募書類 15 %…「自己PR および着任後の抱負」の体裁と記載内容を評価対象とする。

模擬授業 25 %…「授業の概要と目的及び本時の到達目標」「授業の進め方と方法」「授業内容の明示」「授業内容の水準の適切さ」「時間配分」を評価対象とする。

【学生の意見等からの気づき】

対象となる回答がなかったため記載はありません。

【その他の重要事項】

授業の運営方針や教育目標について説明を行うとともに、発表の割り当てを行うので、受講希望者は初回の授業に必ず出席すること。

心理学専攻以外の所属で受講を希望する者は、必ず事前に相談すること。

この授業は、複数年度にわたって重複履修することが可能である。

オフィスアワーは、木曜日の 13:30～14:30、場所は BT11 階のスタディールーム。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

認知心理学、教育心理学

<研究テーマ>

単なる経験則に終わらない、研究技能の獲得と研究成果の伝達を目指す。

<主要研究業績>

藤田哲也(編)(2006). 大学基礎講座 改増版 - 充実した大学生活をおくる

ために - 北大路書房

藤田哲也(2006). 心理学を活かした教育実践のために 井上智義(編) 視聴

覚メディアと教育方法 ver.2 認知心理学とコンピュータ科学の応用実践のため

に 8章 北大路書房, pp.135-155.

藤田哲也(2010). 記憶過程と学習 三宮真智子(編) 教育心理学 2章

学文社, pp.22-37

【Outline and objectives】

n this class, graduate students of Doctoral Course acquire knowledge to know and skill to be acquired when becoming a university faculty member. The content of this lesson is a graduate edition of FD (Faculty Development).

PSY500B6

心理学英語論文作成指導

田嶋 圭一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学分野の英語論文を自分で執筆するための知識やスキルを学ぶ。

【到達目標】

1. 論文の着想から投稿・査読・採択までの具体的な流れを把握する。2. 日本語論文との比較を通して英語論文の特徴をつかむ。3. 英語学術雑誌に投稿可能な高水準の論文を執筆するためのノウハウを習得する。4. 論文にふさわしい英語表現のレパートリーを可能な限り蓄積する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的には講義より学生による演習およびグループまたは全体でのディスカッション、教員からのフィードバックを中心に授業を進める。講義では、論文執筆のプロセス、英語論文の特徴や具体的な書き方などについて解説を行う。演習では、受講生に英語表現や論文執筆に関する課題に取り組んでもらう。時間があれば、実際に受講生が執筆中あるいは執筆準備中の論文に取り組んでもらうことも考えられる。英語論文作成の経験量や熟達度は個人差があることが予想されるため、受講生の進度に応じた指導を行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期集中

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の目的と計画の説明、受講生の英語レベルの確認
第2回	英語論文の特徴	論文とは、英語論文の特徴、着想から投稿・採択まで、英語論文作成のメリット
第3回	英語表現演習(1)	機能語と内容語
第4回	英語表現演習(2)	表現英訳、全文英訳
第5回	英語タイトルの特徴	英文タイトルの特徴
第6回	英語タイトル表現演習	英語タイトル課題の復習
第7回	英語アブストラクトの特徴	英語アブストラクトの特徴、読み方
第8回	英語アブストラクト表現演習(1)	導入・方法の英訳
第9回	英語アブストラクト表現演習(2)	結果・考察の英訳
第10回	英語アブストラクト表現演習(3)	演習問題に関するディスカッション・フィードバック
第11回	自分の研究の英語表現演習(1)	自分の研究を日本語で表現
第12回	自分の研究の英語表現演習(2)	自分の研究を英語で表現
第13回	自分の研究の英語表現演習(3)	自分の研究を英語で表現、演習問題に関するディスカッション・フィードバック
第14回	授業の総括	授業全体のまとめ、フィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業で指定された課題に取り組み、次の授業に備えること。

【テキスト（教科書）】

英語論文作成に関しては多数の書籍が出版されています。心理学に特化したものもあればより一般的なものもあります。以下にその一部を記載します。本授業では特に1番の書籍を参考に講義を行う予定です。購入は必須ではありませんが、今後の研究活動に役立つ可能性があるという意味では買って置いて損はないかもしれません。

- 坂本真士、大平英樹(2013). 心理学論文道場—基礎から始める英語論文執筆 世界思想社.
- 羽生和紀(2014). 心理学のための英語論文の書き方・考え方 朝倉書店.
- 高橋雅治、デイビッドシュワープ、バーバラ・シュワープ(2013). 心理学のための英語論文の基本表現 朝倉書店.
- 崎村耕二(1991). 英語論文によく使う表現 創元社.
- 安原和也(2013). 基本例文200で学ぶ英語論文表現—アウトプット練習問題集 三修社.
- エディテージ(著)、熊沢美穂子(訳)(2016). 英文校正会社が教える英語論文のミス100 ジャパンタイムズ.

【参考書】

【テキスト（教科書）】の項目を参照。

【成績評価の方法と基準】

平常点40%、課題60%の割合で評価する予定。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程の集中講義でしたが、独自にアンケートを実施したので気づきを書きます。回答者4名中3名が「履修してよかったか」「工夫されていたか」「理解できたか」という間に「4」「5」で回答してくれました。自分の研究に英語アブストラクトを書く作業を中心に、文法・体裁・内容の相互チェックや教員によるライブ添削を行いました。色々各自が疑問に思っていたことが解決できたという肯定的なコメントもありましたが、一方で3日間の集中講義形式には限界があり、仮に来年以降もこの授業形態を維持しつつも論文本体の執筆にも取り組むのであれば、事前に受講希望者の熟達度チェックや課題などを導入する必要があるかも知れないことに気づきました。

【その他の重要事項】

集中講義をより充実した内容にするために事前課題を課す可能性があります。詳細は適宜大学院 ML などでお知らせします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 言語学・音声学・認知科学

<研究テーマ> 音声言語の知覚・産出・学習に関する実証的研究

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一(2011). 音声分析ソフトウェア Praat を用いた聴取実験：FO 再合成による刺激作成と実験の制御 日本音響学会誌, 67, 345-350.
田嶋圭一・川上紗代子(2010). 依頼に対する回答の仕方が話し手の性格印象に与える影響：回答表現の直接性と問の取り方に注目して 法政大学文学部紀要, 69, 147-158.

Tajima, K., Kato, H., Rothwell, A., Akahane-Yamada, R., and Munhall, K. G. (2008). Training English listeners to perceive phonemic length contrasts in Japanese. Journal of the Acoustical Society of America, 123:397-413.

【Outline and objectives】

In this course, students will learn and develop skills to write a publishable-quality English research paper in the field of psychology.

PSY500B6

発達心理学特殊講義

渡辺 弥生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

発達心理学において重要なトピックからいくつか選び出し、その研究の背景と課題、方法論について理解する。その上で、現在の社会問題に貢献するためにどのような研究が必要かを検討し、具体的に計画するとともに発表する。

【到達目標】

- (1) 学術的に子どもにかかわる事実や現象をマクロに認識する。
- (2) 子どもの発達を学んでいくための発達心理学の役割について認識を深める。
- (3) 子どもを通して人間や社会のいろいろな問題に気づき、深めていくことができることを、それぞれの領域における研究事例から学ぶ。
- (4) 授業者としても発達心理学を教えられるスキルを学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

最初の時間に、この講義の進め方を説明する。発達心理学の学問体系を理解し、大学の授業を実施するにあたって必要な知識およびスキルを習得する。選んだトピックについての基本と最新の知見をリサーチし、大学生に伝える必要がある内容をまとめ、課題の設定や、説明の仕方などの体験をするため、授業のシミュレーションを実施する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	生涯発達心理学という学問が指すものと体系の理解、発達という概念、方法論など。
第2回	生涯発達についての著名な理論にはどのようなものがあるか？ また方法論は？	Freud, Erickson, Piaget, Kohlberg など。 縦断的研究、横断的研究、観察、調査、実験、コホートなど。
第3回	どのような研究がなされてきたのか。	胎児期、乳児期、幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期
第4回	発達研究の選択	様々な研究分野の中から、この授業で発表するトピックスを選ぶ。テキスト参考。
第5回	リサーチ1	先行研究の問題意識の流れを知る。
第6回	リサーチ2	先行研究の問題意識の流れを知る。
第7回	ノートづくり1	教えるための知見をまとめる。誰に、どのくらいの質と量の知見を伝えるか考える。
第8回	ノートづくり2	教えるための知見をまとめる。誰に、どのくらいの質と量の知見を伝えるか考える。
第9回	今後の課題	この分野の研究課題をまとめる。
第10回	新しい研究の検討	どのような研究が重ねられる必要があるか、具体的に考える。
第11回	授業シミュレーション	大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
第12回	授業シミュレーション	大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
第13回	授業シミュレーション	大学での発達心理学の講義をシミュレーションした形でプレゼンをする。
第14回	総括	全体の反省と今後の課題

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

いずれの回も課題を明確にして、次の授業につなげられるよう、予習と復習をする。

【テキスト（教科書）】

授業において適宜紹介する。

【参考書】

適宜紹介する。

二宮克美・渡辺弥生編著 発達心理学 北大路書房

【成績評価の方法と基準】

各授業での貢献度 (50%) および最終的なプレゼンテーション (25%) と課題の提出 (25%)。

【学生の意見等からの気づき】

初めての講義なので、特に無し。

【学生が準備すべき機器他】

授業時に説明する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ> 社会性と感情の発達および、学校危機予防教育
<主要研究業績>

<https://sites.google.com/site/emywata/Home> 参照。

【Outline and objectives】

We will select several important topics in developmental psychology and attempt to understand the background, challenges, and methodology of related research. Based on this understanding, students will examine what kind of research is necessary to contribute to current social problems, formulate concrete plans, and present them.

PSY500B6

犯罪心理学特殊講義

越智 啓太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

心理学の専門家として、一定時間であるテーマ（犯罪心理学、本年度は特に少年犯罪についてのテーマを扱う）についての情報をリサーチし、自分の意見を作り、それをプレゼンテーションして、質疑応答に答えられるようにする

【到達目標】

限られた時間での専門的情報収集について経験を積む
限られた時間でのプレゼンテーション作成についての経験を積む
自分の意見についての質疑応答についての経験を積む

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

オリエンテーションを行ったあと、各自、リサーチとプレゼンテーション準備を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の目的と方法の確認
第2回	リサーチ	リサーチをおこなう
第3回	リサーチ	リサーチをおこなう
第4回	リサーチ	リサーチをおこなう
第5回	リサーチ	リサーチをおこなう
第6回	プレゼン作成	プレゼンを作成する
第7回	プレゼン作成	プレゼンを作成する
第8回	プレゼン作成	プレゼンを作成する
第9回	プレゼン作成	プレゼンを作成する
第10回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う
第11回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う
第12回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う
第13回	プレゼンと質疑応答	プレゼンと質疑応答を行う
第14回	総括	全体を総括する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時間外もリサーチ、プレゼンの作成をある程度の時間をとってすることが必要

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

なし

【成績評価の方法と基準】

リサーチの適切さ、網羅性（25%）、プレゼンの内容と質、論理構成、論理展開（25%）、プレゼン自体の表現力（25%）、質疑応答（25%）

【学生の意見等からの気づき】

新規授業のために記述する内容はあります。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

犯罪心理学

【Outline and objectives】

As an expert in psychology, research information about a theme, make your own opinion, make presentation

PSY700B6

心理学特殊研究 I

渡辺 弥生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の発達の様態や可変性を心理学研究の視点から捉え理解し、人間の発達のメカニズムを学び、発達心理学に深く関連する教育や臨床に貢献できる研究方法を学ぶ。

【到達目標】

人間の発達の様態や可変性などマクロな視点から理解する。つぎに、心理学研究が着目してきた研究の流れを把握した上で、どういった研究テーマがあるかを理解する。そのうえで、自分の研究テーマを決定し、独自の研究方法を考案し、データの取りかたや、予測できる分析のしかたを学ぶとともに、分析した結果の考察の重要性を理解する。前期のなかで研究者としての研究行動（学会発表、論文投稿、研究費の獲得など）についても理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。前期は、特に自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるか俯瞰できるようにする。毎回、レジュメとパワーポイントで説明できるようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	春学期の本授業の目標と具体的な予定について理解する。
第2回	発達心理学および発達臨床心理学、学校心理学などの体系について理解する。	ハンドブックなどをもとに、研究をマクロな視点から理解する。
第3回	マクロな視点から自分の興味あるテーマを考える。	自分の興味が、これまでの研究の流れのなかでどのような位置にあるかを理解する。
第4回	自分の興味あるテーマに関する文献のリストアップ	キーワードを駆使して、自分の興味ある研究テーマの論文をリストアップし、可能な論文は入手する。
第5回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する(1)。	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。
第6回	研究テーマに関する興味ある論文を発表する(2)。	自分の興味のある論文を発表し、全員でディスカッションを行う。
第7回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる(1)。	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。
第8回	研究テーマに伴うさまざまな意見をまとめる(2)。	同じテーマでも対立する考えを見出し、まとめてみる。
第9回	貢献できるフィールドを調べて見学する。	自分の研究テーマがによって将来貢献できるフィールドを考える。発表する。
第10回	貢献できるフィールドを調べて見学する。	自分の研究テーマがによって将来貢献できるフィールドを調べて、訪問する。できれば発表する。
第11回	大枠でリサーチエッセイを考え、研究計画を練る(1)。	各自の進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第12回	大枠でリサーチエッセイを考え、研究計画を練る(2)。	各自進捗状態を報告し、全員でディスカッションを行う。
第13回	研究構想を発表と討論(1)。	研究構想を発表し合い、ディスカッションする。
第14回	緩急構想の発表と討論(2)。	継続して、研究構想を発表し、ディスカッションする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

レビューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、長期的な展望のなか学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実施していく。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。ただし、4月までに良書が紹介できたら、授業の開始時に伝える。

【成績評価の方法と基準】

毎回の活動目的を遂行しているか（80%）。
実際の研究活動をポートフォリオでチェックし、実行できているか（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

つねに、何が必要かどうかすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な機器を準備する。

【その他の重要事項】

この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案できるようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。

【担当教員の専門分野等】

<https://sites.google.com/site/emywata/Home> <専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ> 社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や学校での危機問題の予防
Homepage 参考

【関連論文1】

児童の感情リテラシーは教育しうるか—発達のアウトラインと支援のありか
たー エモーション・スタディーズ
第2巻第1号 pp. 16—24 2016年

【関連論文2】

健全な学校風土をめざすユニバーサルな学校予防教育—免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソーシャル・エモショナル・ラーニング 教育心理学年報 Vol.54,126-141. 2015年8月25日

【関連論文3】

「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理学研究 2014年12月20日第25巻、第4号,422-431.

【関連論文4】

School psychology research and practice in East Asia: Perspectives on the past, present, and future directions of the field. School Psychology International, 1-26. doi: 10.1177/014034316671354. (with Brown, J.A., Lee, D.H., & McIntosh, K.)

【Outline and objectives】

We will attempt to understand the diversity and variability of human development from the viewpoint of psychological research, study the mechanisms of human development, and learn about research methods that can contribute to educational and clinical research deeply related to developmental psychology.

PSY700B6

心理学特殊研究Ⅱ

渡辺 弥生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人間の発達の多様性や可変性を心理学研究の視点から捉え理解し、人間の発達のメカニズムを学び、発達心理学に深く関連する教育や臨床に貢献できる研究方法を学ぶ。

【到達目標】

心理学特殊研究Ⅰをさらに発展させ、具体的な研究目標のもとに研究を発表し、研究論文を執筆することを目標とする。研究論文の多様性や求められていること（研究分野、執筆要項の特徴、研究評価の観点など）を明確に理解し、発表のスキルと執筆スキルを獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」「DP6」に関連

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式とする。各自が積極的に研究を報告しディスカッションする。後期は自分の研究テーマが発達心理学研究のどのような立ち位置にあり、どういった研究の貢献が可能であるかを明確にし、毎回アウトプットできるようにする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	秋学期の本授業の目標と具体的な予定について理解する。
第2回	学術研究論文の特徴と執筆要項を学ぶ	関連する学術雑誌の特徴と執筆要項について理解し、発表する。
第3回	注目している和文の文献をレポートする（1）。	各自注目している和文の文献をまとめてレポートし、全員でディスカッションする。
第4回	注目している和文の文献をレポートする（2）。	各自注目している和文の文献をまとめてレポートし、全員でディスカッションする。
第5回	注目している英文の文献をレポートする（1）。	各自注目している英文の文献をまとめてレポートし、全員でディスカッションする。
第6回	注目している英文の文献をレポートする（2）。	各自注目している英文の文献をまとめてレポートし、全員でディスカッションする。
第7回	研究を発表する（学会発表スキル）（1）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第8回	研究を発表する（学会発表スキル）（2）	学会発表をするための具体的な行動を学ぶ。
第9回	研究論文を執筆する（1）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルを考える。
第10回	研究論文を執筆する（2）。	自分の研究したいことをまとめられるようにスキルをアップする方法を考える。
第11回	研究論文を執筆する（3）。	先行研究の技術を発見する。
第12回	研究論文を執筆する（4）。	実際に執筆してみる。
第13回	互いに査読しあう（1）。	どのようなことが研究するに必要かを体感できるようにする。
第14回	互いに査読しあう（2）。	さらにチャレンジできるように総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

レビューとなる研究論文や書籍を読破するとともに、常に最新の研究論文をチェックし、問題と目的を明確にし、研究計画をたて実施し、分析し、考察することをデフォルトにできるようにする。また、長期的な展望のなかで学会発表や論文の投稿を計画し毎回自主的に実施していく。

【テキスト（教科書）】

使用しない。その都度文献を紹介する。

【参考書】

使用しない。

【成績評価の方法と基準】

毎回の活動目的を遂行しているか（80%）。
実際の研究活動をポートフォリオでチェックし、実行できているか（20%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業では全体指導であるが、それに関連する個別のサポートを明確にし、互いに連動できるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

つねに、何が必要かどうかすれば研究が進むかをメタ認知し、必要な機器を準備する。

【その他の重要事項】

この授業の参加を優先すること。自分からやりたいことを提案できるようにモチベーションを高くもてるようレジリエントになること。英語論文の書き方、また海外の学会参加及び発表の仕方も伝える。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 発達心理学、発達臨床心理学、学校心理学
<研究テーマ> 社会性、道徳性、感情のメカニズムの解明と社会や学校での危機問題の予防

Homepage 参考

<https://sites.google.com/site/emywata/Home>

【関連論文 1】

児童の感情リテラシーは教育しうるか—発達のアウトラインと支援のありかた— エモーション・スタディーズ
第 2 巻 第 1 号 pp. 16 — 24 2016 年

【関連論文 2】

健全な学校風土をめざすユニヴァーサルな学校予防教育—免疫力を高めるソーシャル・スキル・トレーニングとソーシャル・エモショナル・ラーニング 教育心理学年報 Vol.54,126-141.
2015 年 8 月 25 日

【関連論文 3】

「学校予防教育に必要な『道徳性・向社会的行動』の育成」発達心理学研究
2014 年 12 月 20 日 第 25 巻, 第 4 号,422-431.

【関連論文 4】

School psychology research and practice in East Asia: Perspectives on the past, present, and future directions of the field. *School Psychology International*,1-26. doi: 10.1177/014034316671354.

(with Brown, J.A., Lee, D.H., & McIntosh, K.)

【Outline and objectives】

We will attempt to understand the diversity and variability of human development from the viewpoint of psychological research, study the mechanisms of human development, and learn about research methods that can contribute to educational and clinical research deeply related to developmental psychology.

OTR600B7

国際日本学演習 I

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程 1 年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程 2 年次生は春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第 1 回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明
第 2 回	研究課題の紹介（2 年次生）①	修士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告
第 3 回	研究課題の紹介（2 年次生）②	同上
第 4 回	研究課題の紹介（2 年次生）③	同上
第 5 回	関心対象の紹介（1 年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える
第 6 回	関心対象の紹介（1 年次生）②	同上
第 7 回	修士課程の中間報告（2 年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第 8 回	修士課程の中間報告（2 年次生）②	同上
第 9 回	研究動向の確認（1 年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討
第 10 回	先行研究の論旨の整理（2 年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討
第 11 回	先行研究の論旨の整理（2 年次生）②	同上
第 12 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）①	同上
第 13 回	先行研究の論旨の整理（1 年次生）②	同上
第 14 回	夏期休暇中の作業計画立案	各自が行うべき作業の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 5 分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50 %、討論への参加等の平常点 50 %。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績>

- ①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
- ②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏・篳篥《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真探》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
- ③「工尺譜の起源をめぐって—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

国際日本学演習のネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかねばならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。修士課程1年次生（や研修生）は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。修士課程2年次生は秋学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を行く。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	修士論文構想の報告（2年次生）①	修士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第3回	修士論文構想の報告（2年次生）②	同上
第4回	先行研究の紹介と整理（1年次生）①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）②	同上
第6回	修士課程の中間報告（1年次生）①	国際日本学合同演習の中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第7回	修士課程の中間報告（1年次生）②	同上
第8回	修士論文の中間報告（2年次生）①	修士論文執筆の進捗状況に関する報告
第9回	修士論文の中間報告（2年次生）②	同上
第10回	修士論文の構想発表（1年次生）①	学術的な論理展開に基づき、修士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第11回	修士論文の構想発表（1年次生）②	同上
第12回	修士論文提出前の総点検（2年次生）	論文構成、要旨、英文要旨、参考文献などについて点検を行う
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ	1年次生は春季休暇中の作業課題に関する計画を示し、2年次生は提出論文について報告し、講評を受ける

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 夏期休暇中の研究成果をまとめる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など

<主要研究業績>

- ①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）
- ②「『秘曲尽くし』再現—『文机談』に見える秘曲を聴く—」（磯水絵編『今日一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》
- ③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆フローラ、2009年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their master's thesis under the instructor's supervision. It is also open to students from other seminars who are interested in methodological issues involved in the study of the performing arts of Japan. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR600B7

国際日本学演習 I

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<日本>をキーワードに多様な人文的アプローチを行う。

【到達目標】

上記のテーマにそって、学生一人一人が各自の学問的関心を深め論文作成の基礎を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初に上記テーマの意味を概説し、その後は学生各自の学問的関心によって演習形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	<日本>研究の意味と課題	<日本>研究の方法と視点について概説する。
第2回	同前	同前
第3回	同前	同前
第4回	各自個別研究の課題	各自の個別研究の課題を確認する。
第5回	同前	同前
第6回	発表演習	各自の個別研究課題にそって演習発表を行う。
第7回	同前	同前
第8回	同前	同前
第9回	同前	同前
第10回	同前	同前
第11回	同前	同前
第12回	同前	同前
第13回	同前	同前
第14回	まとめ	<日本>研究の意義と春学期到達点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究課題にそって基礎資料の収集、分析を行う。

【テキスト（教科書）】

特に定めない。

【参考書】

必要に応じて授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%

「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003年）「亡き人に逢える鳥—万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011年）

【Outline and objectives】

We will take various humanities research methods with a focus on Japan.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<日本>をキーワードに多様な人文的アプローチを行う。

【到達目標】

上記のテーマにそって、学生一人一人が各自の学問的関心を深め論文作成を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初に上記テーマの意味を概説し、その後は学生各自の学問的関心にそって演習形式で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	<日本>研究の意味と課題	<日本>研究の方法と視点について概説する。
第2回	同前	同前
第3回	同前	同前
第4回	各自個別研究の課題	各自の個別研究の課題を確認する。
第5回	同前	同前
第6回	発表演習	各自の個別研究課題にそって演習発表を行う。
第7回	同前	同前
第8回	同前	同前
第9回	同前	同前
第10回	同前	同前
第11回	同前	同前
第12回	同前	同前
第13回	同前	同前
第14回	まとめ	<日本>研究の意義と秋学期到達点を確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の研究課題にそって基礎資料の収集、分析を行う。

【テキスト（教科書）】

特に定めない。

【参考書】

必要に応じて授業時に指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分（%）」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%
「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学
<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究
<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥—万葉集巻一・六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

We will take various humanities research methods with a focus on Japan.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

小秋元 段

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は長門本『平家物語』を扱う。

【到達目標】

長門本『平家物語』を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

この授業は、読み本系『平家物語』の一異本、長門本をテキストとして、履修者が各種の工具書、資料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は麻原美子ほか編『長門本平家物語—』（勉誠出版、2004 年）より 1 頁を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに重点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	作品解説 1	『平家物語』の成立について講義する。
第2回	作品解説 2	『平家物語』の諸本について講義する。
第3回	作品講読 1	長門本巻一「二代后事」前半の講読。
第4回	作品講読 2	長門本巻一「二代后事」後半の講読。
第5回	作品講読 3	長門本巻一「額打論事」の講読。
第6回	作品講読 4	長門本巻一「清水寺炎上事」前半の講読。
第7回	作品講読 5	長門本巻一「清水寺炎上事」後半の講読。
第8回	作品講読 6	長門本巻一「殿下乗合事」前半の講読。
第9回	作品講読 7	長門本巻一「殿下乗合事」後半の講読。
第10回	作品講読 8	長門本巻一「成親謀叛事」前半の講読。
第11回	作品講読 9	長門本巻一「成親謀叛事」後半の講読。
第12回	作品講読 10	長門本巻一「鹿谷酒宴事」前半の講読。
第13回	作品講読 11	長門本巻一「鹿谷酒宴事」後半の講読。
第14回	作品講読 12	長門本巻二「師高焼弘温泉寺事」の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

麻原美子ほか編『長門本平家物語—』（勉誠出版、2004 年）

【参考書】

延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈第一本（巻一）』（汲古書院、2005 年）
大津雄一ほか編『平家物語大事典』（東京書籍、2010 年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70%）、討論への貢献（30%）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【Outline and objectives】

In this course, we will read Nagatobon Heike-Monogatari.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小秋元 段

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学を学ぶためには、文学史的な知識をもつだけでなく、研究対象とする作品を原文で読む力をもつことが不可欠である。この授業では主に留学生の皆さんが古文の読解に慣れるよう、基礎的な力を養う。今学期は『古今著聞集』を扱う。

【到達目標】

『古今著聞集』を読み、古典文学読解の基礎力を身につける。具体的には、中世の古典文学作品の本文に適宜注釈を施し、語義を明らかにしながら適切に現代語訳できる力を養う。その過程で、様々な同時代の文学作品、国語資料、歴史史料の存在を知り、その活用方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

この授業は、『古今著聞集』をテキストとして、履修者が各種の工具書、資料料を使って注釈を施し、現代語訳する形式で進める。履修者は岩波書店・日本古典文学大系本より適宜の分量を分担し、注釈・現代語訳をレジュメにまとめ、発表するものとする。どのような文献を使えば古典が深く読め、問題点を発見することができるのか、ということに力点を置いて進めたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	作品解説1	『古今著聞集』の概要について講義する。
第2回	作品解説2	『古今著聞集』の研究法について講義する。
第3回	作品講読1	p.509～p.512の講読。
第4回	作品講読2	p.513～p.516の講読。
第5回	作品講読3	p.517～p.520の講読。
第6回	作品講読4	p.521～p.524の講読。
第7回	作品講読5	p.525～p.528の講読。
第8回	作品講読6	p.529～p.532の講読。
第9回	作品講読7	p.533～p.536の講読。
第10回	作品講読8	p.537～p.540の講読。
第11回	作品講読9	p.541～p.544の講読。
第12回	作品講読10	p.49～p.52の講読。
第13回	作品講読11	p.53～p.56の講読。
第14回	作品講読12	p.57～p.60の講読。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

分担箇所の語釈・口語訳の作成。

【テキスト（教科書）】

永積安明・島田勇雄校注、日本古典文学大系『古今著聞集』（岩波書店、1966年）

【参考書】

西尾光一・小林保治校注、新潮日本古典集成『古今著聞集』上・下（新潮社、1983・86年）

【成績評価の方法と基準】

発表の完成度（70%）、討論への貢献（30%）

【学生の意見等からの気づき】

初心者にもわかりやすいように、調査・研究の方法について具体的に講義してゆきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学、書誌学
<研究テーマ> 筆記物語、古活字版
<主要研究業績> 小秋元段『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）、小秋元段『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）

【Outline and objectives】

In this course, we will read Kokonchomonju.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では文献を通じて日本文学とその周辺各分野の研究法を学び、その要件を考える。江戸～明治時代をおもな対象とし、文学・美術・芸能・思想など諸分野の論考を取りあげる。

【到達目標】

- (1) 各分野の研究アプローチの方法や要件を知り、またそれらに共通する点を考える。
- (2) 文献から論点を探し、研究を進展させる視点を見出す力をきたえる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

毎回、教員指定の文献または学生推薦の文献を素材とする。各自が事前に読んでくることを前提とし、担当者が文献について内容と論点をまとめて発表し、全員でその論点について、また当該分野の研究アプローチの特徴について討議する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	研究とは	学際研究の課題
第2回	授業の進め方	一文献を例に本授業の発表方法についての理解を共有する。
第3回	文献講読1 A	文学篇①
第4回	文献講読1 B	同上
第5回	文献講読2 A	文学篇②
第6回	文献講読2 B	同上
第7回	文献講読3 A	美術篇
第8回	文献講読3 B	同上
第9回	文献講読4 A	芸能篇
第10回	文献講読4 B	同上
第11回	文献講読5 A	思想篇
第12回	文献講読5 B	同上
第13回	文献講読6 A	歴史篇
第14回	文献講読6 B	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前の週に配られた文献を読んでくること。

【テキスト（教科書）】

コピーを配布する。

【参考書】

渡辺浩『日本政治思想史 十七～十九世紀』（東京大学出版会 2010年）
矢内賢二編『明治、このフシギな時代1～3』（新典社、2016・17・19年）

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告50%、授業中の質疑などの参加態度50%によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の関心に即して文献を選択するようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・日本近世文化
<研究テーマ> 大田南畝・江戸狂歌を中心とする近世中期文学・文化の研究
<近年の主要著書>

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル 2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（共著 笠間書院 2014）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編 共著 笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（江戸狂歌研究会編 共著 笠間書院 2014）

『別冊太陽 歌麿決定版』（共著 平凡社 2016）

【Outline and objectives】

Learning difference of disciplines to approach Tokugawa-Meiji period cultures by reading essays from various fields including literature, art history, performing arts, history etc.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、受講生相互の研究分野についての発表を通じて、学際的な日本研究をいかに意義づけるかについて、多様な視点から考える。

【到達目標】

(1) 日本近世・近代文化研究の広がりや視点のさまざまを身近な事例から学ぶ。
(2) 受講生が広い視野で自らの研究の位置づけを見なおす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

前半は受講生が自らの研究において最重要と考える文献を紹介することを通じて、事例に則して「いい論文」とは何かを考える。後半は受講生相互の研究発表とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	研究をどう意義づけるか（講義）
第2回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（1）
第3回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（2）
第4回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（3）
第5回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（4）
第6回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（5）
第7回	文献講読 先行研究に学ぶ	受講生各自の研究分野の重要文献を紹介する（6）
第8回	中間まとめ 討論	「いい論文」「いい研究」とは？
第9回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論1
第10回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論2
第11回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論3
第12回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論4
第13回	研究発表	受講生相互の研究発表と討論5
第14回	まとめ	全体をふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配付された文献を読んでみるようにしましょう。

【テキスト（教科書）】

適宜配付します。

【参考書】

随時紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 50 %、授業中の質疑などの参加態度 50 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の積極的な討論を期待します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・文化
<研究テーマ> 近世中期文学・文化の研究

<近年の主要論文>

「書籍を模倣する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から一」『京都語文』26号 2018

「奇々羅金鶏＝実在の訛次郎郎」『山東京伝全集第13巻月報』ペリかん社 2018

「山東京伝の地方読者へのまなざし」『文学（隔月刊）』17巻4号 2016

「鈴木芙蓉の唐土憧憬」『太平詩文』70号 2016

「近世日本の異国絵本の愉楽と陥穽」『文学（隔月刊）』16巻6号 2015

「江戸狂歌の地方普及」『日本文学誌要』91号 2015

【Outline and objectives】

Thinking how to attach significance to your inter-disciplinary study/dissertation in a field of Japanese Studies

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際日本学として、日本史を客観的に見ようとするとき、一つの重要な視点として、「日本のなかの異文化」を検討するという方法がある。とくに日本古代という時代は、中央の地方に対する異文化観が強いので、そうした分析の格好の舞台である。この演習では、日本古代における「日本のなかの異文化」を分析する素材として『陸奥話記』を選ぶこととする。その著者は北方史について相当の見識を有していたものと思われ、その内容を、演習形式で原典史料をじっくりと読み解いていくこととしたい。春学期は第12話までの検討を行う。

【到達目標】

中央史料から北方世界の実態をどのように読み取るのか、その方法論を取得することを目標とする。
あわせて、自力で日本史を客観的に分析する能力を身につけることをも目標とする。
またディベート能力の向上も目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は、受講者による文献の精読・発表、教員による補足・講義、全員での討論を織り交ぜて行う。
また適宜パソコンを用いて、デジタルテキスト検索実習や用語解析などの実習も行う。

本演習参加者には、あらかじめ担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本演習に臨むことを期待する。事前に最低限行うこととしては、本文の書き下し、現代語訳、語句註解、論点の整理、先行研究のまとめ、自分の見解などである。発表原稿の作成の仕方は、第1回目の講義で詳しく説明する。なお第1回目の講義において、実際の参加者のレベルや興味に応じて、素材を一部変更することもあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	陸奥話記講読(1)	1 俘囚長安倍頼良叛す
第3回	陸奥話記講読(2)	2 追討將軍源頼義の登場
第4回	陸奥話記講読(3)	3 安倍頼良帰順す
第5回	陸奥話記講読(4)	4 阿久利川の事件
第6回	陸奥話記講読(5)	5 頼義、平永衡を切る
第7回	陸奥話記講読(6)	6 巨理経清の離反
第8回	陸奥話記講読(7)	7 頼義重任し征討に努む
第9回	陸奥話記講読(8)	8 黄海の戦い
第10回	陸奥話記講読(9)	9 佐伯経範の奮戦
第11回	陸奥話記講読(10)	10 藤原景季の忠死
第12回	陸奥話記講読(11)	11 和氣致輔・為清らの奮戦
第13回	陸奥話記講読(12)	12 藤原茂頼の忠節
第14回	春学期のまとめ	陸奥話記前半部の内容整理と陸奥話記史観の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストは難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

新編日本古典文学全集本（小学館）

【参考書】

特に指定しない。発表に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 55 %、討論への参加 30 %、期末レポート 15 %
現地側の視点を明確に読み取り、中央側の視点と比較できたかどうかを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

新教材につき比較対象なし

【学生が準備すべき機器他】

資料のデジタル分析をするので携帯できる電子機器を持参できることが望ましい。
所有していない場合はこちらでゼミ室のパソコンなどを使用できるように留意する。

【その他の重要事項】

受講希望者の専門は問わないが、大学学部史学科卒業程度の知識は最低限でも持っていることを前提に演習を進めていく。また古文・漢文を読解する能力は必須である。

【担当教員の専門分野等】

(専門領域)

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

(研究テーマ)

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

(主要研究業績)

2010年、『古代末期・日本の境界—城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』(編著)、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、「『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後—FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In this lecture, in order to learn a new analytical method of Japanese ancient history, we introduce the method of international Japanese study. We will study the classic "Mutsumaki" on Japanese ancient northern world. We will read until the 12th episode this time.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際日本学として、日本史を客観的に見ようとするとき、一つの重要な視点として、「日本のなかの異文化」を検討するという方法がある。とくに日本古代という時代は、中央の地方に対する異文化観が強いいため、そうした分析の格好の舞台である。この演習では、日本古代における「日本のなかの異文化」を分析する素材として『陸奥話記』を選ぶこととする。その著者は北方史について相当の見識を有していたものと思われ、その内容を、演習形式で原典史料をじっくりと読み解いていくこととしたい。秋学期は第24話までの検討を行う。

【到達目標】

中央史料から北方世界の実態をどのように読み取るのか、その方法論を取得することを目標とする。

あわせて、自力で日本史を客観的に分析する能力を身につけることをも目標とする。

またディベート能力の向上も目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は、受講者による文献の精読・発表、教員による補足・講義、全員での討論を織り交ぜて行う。

また適宜パソコンを用いて、デジタルテキスト検索実習や用語解析などの実習も行う。

本演習参加者には、あらかじめ担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本演習に臨むことを期待する。事前に最低限行うこととしては、本文の書き下し、現代語訳、語句註解、論点の整理、先行研究のまとめ、自分の見解などである。発表原稿の作成の仕方は、第1回目の講義で詳しく説明する。なお第1回目の講義において、実際の参加者のレベルや興味に応じて、素材を一部変更することもあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	陸奥話記講読(1)	13 平国妙捕らわる
第3回	陸奥話記講読(2)	14 頼義苦境を訴う
第4回	陸奥話記講読(3)	15 清原光頼に援を頼む
第5回	陸奥話記講読(4)	16 頼義軍容を整う
第6回	陸奥話記講読(5)	17 小松の柵攻略
第7回	陸奥話記講読(6)	18 官軍霖雨に遭い飢えに悩む
第8回	陸奥話記講読(7)	19 貞任勢の反撃。武則勝利を予言す
第9回	陸奥話記講読(8)	20 官軍奮戦して大勝す
第10回	陸奥話記講読(9)	21 頼義負傷者を見舞う
第11回	陸奥話記講読(10)	22 武則奇襲し貞任勢を破る
第12回	陸奥話記講読(11)	23 衣川の関を攻略
第13回	陸奥話記講読(12)	24 鳥海の柵を攻略
第14回	春学期のまとめ	陸奥話記中間部の内容整理と陸奥話記史観の再検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストは難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

新編日本古典文学全集本（小学館）

【参考書】

特に指定しない。発表に応じてその都度指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表 55 %、討論への参加 30 %、期末レポート 15 %

現地側の視点を明確に読み取り、中央側の視点と比較できたかどうかを重視する。

【学生の意見等からの気づき】

新教材につき比較対象なし

【学生が準備すべき機器他】

資料のデジタル分析をするので携帯できる電子機器を持参できることが望ましい。

所有していない場合はこちらでゼミ室のパソコンなどを使用できるように留意する。

【その他の重要事項】

受講希望者の専門は問わないが、大学学部史学科卒業程度の知識は最低限でも持っていることを前提に演習を進めていく。また古文・漢文を読解する能力は必須である。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010年、『古代末期・日本の境界―城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録]のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢学文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In this lecture, in order to learn a new analytical method of Japanese ancient history, we introduce the method of international Japanese study. We will study the classic "Mutsuwaki" on Japanese ancient northern world. We will read until the 24th episode this time.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	春学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定
第2回	論文の作成技法	論文の作成技法の講義
第3回	文献検索方法	文献検索方法の講義
第4回	修士2年生の発表(1)－発表レジュメ－	修士2年生の研究テーマ発表と発表レジュメの解説
第5回	修士2年生の発表(2)－日本語の文法－	修士2年生の研究テーマ発表と日本語の文法の説明
第6回	修士2年生の発表(3)－引用文献の表示－	修士2年生の研究テーマ発表と引用文献の表示方法の説明
第7回	修士1年生の発表(1)－参考文献の表示－	修士1年生の研究テーマ発表と参考文献の表示方法の説明
第8回	修士1年生の発表(2)－注の付け方－	修士1年生の研究テーマ発表と注の付け方の説明
第9回	修士1年生の発表(3)－構成表の作り方－	修士1年生の研究テーマ発表と構成表の作り方の説明
第10回	修士2年生二度目の発表(1)－理論の考え方－	修士2年生二度目の研究テーマ発表と理論の考え方の説明
第11回	修士2年生二度目の発表(2)－方法論の選択－	修士2年生二度目の研究テーマ発表と方法論の選択の説明
第12回	修士2年生二度目の発表(3)－説明順序－	修士2年生二度目の研究テーマ発表と説明順序の説明
第13回	夏季休暇のフィールドワーク準備(1)－調査マナー－	調査マナーの説明
第14回	夏季休暇のフィールドワーク準備(2)－調査方法－	調査方法の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉 水資源研究、資源環境論、地域経済論

〈研究テーマ〉 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

〈主要研究業績〉

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）

2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018年

3. 『韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－』『地理科学』72-3、2017年
4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御高産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005年
5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005年
6. 『木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006年
7. 『水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生は修士論文の作成経過を報告し、討論をすることによって、修士論文の完成を目指します。同時に論文作成に必要な諸項目を学びます。他の受講生は発表に対して、質問、意見を提出することによって、発表の内容を高めることを目指し、同時に自らの修士論文作成の学びとします。

【到達目標】

適切な修士論文の完成を目指します。具体的には、修士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した修士論文の作成が授業のテーマとなります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の発表を中心に行います。教員は論文の作成方法を説明します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	秋学期のゼミ概要の説明とゼミ方針の決定をします
第2回	修士2年生の発表と研究題名	修士2年生の研究テーマ発表と「疑問文で成り立つ題名」の説明をします
第3回	修士2年生の発表と研究目的	修士2年生の研究テーマ発表と研究目的における「オリジナリティの必要性」について説明します
第4回	修士2年生の発表と方法論(1)	修士2年生の研究テーマ発表と経済地理学の方法論について説明します
第5回	修士2年生の発表と方法論(2)	修士2年生の研究テーマ発表と方法論「地域事例の理論」について説明します
第6回	修士2年生二度目の発表と先行研究(1)	修士2年生の研究テーマ発表と理論をたどる先行研究の重要性について説明します
第7回	修士2年生二度目の発表と先行研究(2)	修士2年生の研究テーマ発表と先行研究の類型化の重要性について説明します
第8回	修士2年生二度目の発表と説明順序の説明(1)	修士2年生の研究テーマ発表と説明順序「単純ストーリー」の重要性について説明します
第9回	修士2年生二度目の発表と説明順序の説明(2)	修士2年生の研究テーマ発表と説明順序「クロスストーリー」の重要性について説明します
第10回	修士1年生の発表と構成表の説明(1)	修士1年生の研究テーマ発表と構成表による「全説明事項の見える化」の重要性について説明します
第11回	修士1年生の発表と構成表の説明(2)	修士1年生の研究テーマ発表と構成表による「ボリュームの見える化」の重要性について説明します
第12回	修士1年生の発表と日本語の説明	修士1年生の研究テーマ発表と論文を支える日本語の文法の重要性について説明します
第13回	修士1年生の発表と結論の説明	修士2年生の研究テーマ発表と結論中の「提案と願望」について説明します
第14回	論文を支える問題意識の説明	研究を支える「熱い心と冷静な頭」の重要性について説明します

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文は授業以外での努力が圧倒的に求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討論：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な説明に心がけます。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論
 ＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017年
4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御高産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年
5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005年
6. 「木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006年
7. 「水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡水路計画－」ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A member of a class aims at completion of a master thesis by reporting and discussing. Other members of a class learn his thesis by questioning and submitting an opinion to an announcement. The several items necessary to thesis making are learned at the same time.

OTR600B7

国際日本学演習 I

米家 志乃布

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（1）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法・分析方法について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 歴史地理学の論文を読み、筆者の主張や学史における位置づけを読みとる訓練を行う。
2. 歴史地理学的研究を行ううえでの史料収集の方法や史料読解の技術を生につけるため、実際の史料を読む練習を行い、該当分野のテキストを読んで学習する。
3. 歴史地理学の論文内でのデータの利用方法や処理の仕方を学習する。
4. 具体的な史料やデータを用いて、歴史地理学的な論理構成を考える訓練を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	出席者の確認、授業の概要について説明する。発表の順番を決める。
2	歴史地理学の論文の収集方法	テキストを読みながら、歴史地理学的テーマとは何かを把握し、それらに関連する論文の収集方法について学ぶ。
3	歴史地理学の論文の読み方①	論文の著者の主張について十分に理解する。
4	歴史地理学の論文の読み方②	論文中での図表の効果的な扱い方について、先行研究をもとに学ぶ。
5	歴史地理学の論文の読み方③	統計資料や行政の報告書類を用いた研究方法について、先行研究をもとに議論する。
6	史料の収集方法①	図書館における史料収集の方法を学ぶ。
7	史料の収集方法②	地方の文書館や博物館における史料収集の方法を学ぶ。
8	史料の読解練習①	古地図の読解方法について学ぶ。
9	史料の読解練習②	文書史料の読解方法について学ぶ。
10	データの処理方法①	史料をもとに、どのようなデータが論文作成に必要なかを学ぶ。
11	データの処理方法②	歴史地理学的な研究テーマに即した効果的なグラフや表を作成する。
12	データの処理と論文構成①	先行研究をもとに、収集・処理したデータと論文構成の関係について分析する。
13	データの処理と論文構成②	先行研究をもとに、データと論旨の関係について把握する。
14	データの処理と論文構成③	自分の研究テーマに即したデータの処理方法と構成について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の発表前には、図書館における事前の文献調査は十分に行うようしてください。また、テキストなどのわからない（読めない）専門用語などは事前に各自で調べてから授業に参加してください。

【テキスト（教科書）】

有蘭正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

授業内において適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 30 %、討論への参加 20 %
 評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

オリジナリティの高い論文が作成できるように、少人数で丁寧に指導するようにします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部の人文学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究
<研究テーマ> 蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究
<主要研究業績>

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015年）
「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015年など

【Outline and objectives】

writing a paper on historical geography (1)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

米家 志乃布

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

歴史地理学の論文の作成方法（2）

【到達目標】

歴史地理学の論文を作成するための先行研究の読み方やデータの収集方法、分析方法について、自分の関心あるテーマを選んで、発表し、論文作成の手順について学ぶことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 春学期の歴史地理学演習Ⅰの授業内容を踏まえ、各自の関心にもとづいて、歴史地理学的研究テーマを選ぶ。
2. 受講者が先行研究の紹介、史料収集、データ処理と分析を行い、それを発表し、授業内で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	受講者を確認し、発表の順番を決める。
2	先行研究の紹介①	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
3	先行研究の紹介②	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
4	先行研究の紹介③	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
5	先行研究の紹介④	受講者による研究テーマにもとづいた先行研究の紹介およびそれについての議論を行う。
6	史料紹介①	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
7	史料紹介②	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
8	史料紹介③	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
9	史料紹介④	受講者が、各自で収集した史料の面白さや研究上の重要性などを紹介する。
10	研究報告①	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
11	研究報告②	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
12	研究報告③	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
13	研究報告④	受講者各自が研究報告を行い、それにもとづいて議論する。
14	まとめ	受講者による研究報告を踏まえて、歴史地理学的研究の今後の展開について議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各自の発表の前に、内容を事前に十分に準備してください。

【テキスト（教科書）】

有蘭正一郎ほか『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2007年。授業で使う該当部分を各自でコピーしていただきます。適宜授業内で指示します。

【参考書】

各自のテーマに即して、適宜、授業内で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、平常点 50 %

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

先行研究の読み込みや論文の書き方など、少人数で丁寧に指導いたします。

【その他の重要事項】

歴史地理学分野で修士論文（学術論文）を作成する受講生向けの演習です。大学院および学部の人文学・歴史地理学分野の関連科目（講義等）は事前に履修するか、合わせて履修するなど、基礎的な知識や方法は学んでおいてください。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞歴史地理学 地図史研究

＜研究テーマ＞蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究

＜主要研究業績＞

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015年など

【Outline and objectives】

writing a paper on historical geography (2)

OTR600B7

国際日本学演習 I

水野 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

20世紀末から進展してグローバル化と日独のゼロ金利が経済および政治に与えた功罪を研究する。2008年のリーマンショック後、グローバル化のマイナス面のほうが大きくなってきており、その象徴的事例が2016年に起きた英国のEU離脱や米大統領選挙でのトランプ勝利である。

近代システムと資本主義は元来グローバル化する性向があるため、グローバル化の本質について考察することによって、21世紀のありうるべき姿や国際秩序を考察することが可能となる。

【到達目標】

修士1年生の到達目標は、グローバル化の功罪を先進国と新興国の視点からとらえ、それを踏まえたうえで、先進国と新興国の対処法を研究する。

修士2年生の到達目標は、グローバル化した21世紀の近代システムと資本主義の抱える問題点を考察し、どうすべきかを考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は複数の課題図書の中から、各自が最も関心のあるテーマに近い図書を選び、毎回、受講生が発表し、参加者で討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	この講義の全体的な流れを説明
第2回	グローバル化概念をめぐる論争	（教科書①第1章）5つの定義の検討
第3回	グローバル化は新しい現象か	（教科書①第2章）先史時代以来のグローバル化の歴史
第4回	グローバル化の経済的次元	（教科書①第3章）貿易・金融の国際化、多国籍企業のパワー
第5回	グローバル化の政治的次元	（教科書①第4章）近代国民国家システム、国民国家の終焉？
第6回	グローバル化の文化的次元	（教科書①第5章）グローバル文化—画一的か、差異化か、メディアの役割、文化的価値観と自然環境の悪化
第7回	グローバル化のイデオロギイ的次元	（教科書①第6章）5つの主張
第8回	グローバル化と領域的民主主義（1）	（教科書②第1章）グローバル化と領域的民主主義
第9回	グローバル化と領域的民主主義（2）	（教科書②第1章）グローバル化と領域的リベラル・デモクラシーの転換
第10回	困難な時代にある民主主義（1）～経済的グローバル化とリベラル・デモクラシーの限界～	（教科書②第3章）経済と民主主義、経済的グローバル化とその帰結
第11回	困難な時代にある民主主義（2）～第10回と同じ～	（教科書②第3章）経済的グローバル化がもたらす社会的分極化という帰結を覆すことは可能か、実質的民主主義の条件
第12回	欧州連合（1）～国民国家を超えた民主主義の再編成～	（教科書②第8章）グローバル化とリージョナリズム、民主的なヨーロッパか？
第13回	欧州連合（2）～国民国家を超えた民主主義の再編成～	（教科書②第8章）EUの民主化
第14回	民主主義は国境を超えるか	（教科書②第10章）グローバル化と領域的民主主義、民主主義再考

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。

【テキスト（教科書）】

①『グローバル化』マンフレッド・B・ステューガー、櫻井公人他訳、岩波書店、2005年

②『変容する民主主義～グローバル化のなかで～』A・マッグルー編、松下烈訳、日本経済評論社、2003年

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50% 討論：50% 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代日本経済論、グローバル経済論
<研究テーマ> グローバル化が経済に及ぼす影響、資本主義の課題
<主要研究業績>

1. 『100年デフレ 21世紀はバブル多発型物価下落の時代～』日本経済新聞社、2003年
2. 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞出版社、2003年
3. 『終わりのなき危機 君はグローバル化の真実を見たか』日本経済新聞出版社、2011年
4. 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014年
5. 『資本主義の終焉、その先の世界』詩想社新書、榊原英資共著、2015年
6. 『株式会社の終焉』ディスカバー 21、2016年
7. 『閉じてゆく帝国と逆説の21世紀経済』集英社新書、2017年

【Outline and objectives】

This course introduces the cause of deflation and zero interest rate, and effect of globalization, and the problem of poverty to students of master course taking this course.

Student can consider the pluses and minuses of Capitalism in the 21st century and a subject modern society.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

水野 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

グローバル化と近代システム・資本主義の関係について考察した国際日本学演習Ⅰをうけて、国際日本学研究Ⅱでは前半で、グローバル化と帝国の関係について学ぶ。

後半でゼロ成長とゼロ金利が長期化し、格差が拡大する日本経済はグローバル化の行き着いた一つの到達点か否かを学ぶ。

【到達目標】

グローバル化がもつ二面性を学ぶ。すなわち、グローバル化は近代および資本主義と相性がいいと同時に帝国システムにも欠かせないイデオロギーでもあることを理解する（1年生の目標）。

日本の例を参考にグローバル化の行き着く先を考え、それにどう対処するかを学ぶ（2年生の目標）。格差拡大と帝国システムとの関連性についても学ぶ（2年生の目標）。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は複数の課題図書の中から、各自が最も関心のあるテーマに近い図書を選び、毎回、受講生が発表し、参加者で討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	この講義の全体的な流れを説明
第2回	誰が帝国主義者か	(教科書①の第1章)
第3回	陸の帝国 (1)	(教科書①の第2章)
第4回	陸の帝国 (2)	(教科書①の第2章)
第5回	海の帝国 (1)	(教科書①の第3章)
第6回	海の帝国 (2)	(教科書①の第3章)
第7回	帝国の終焉と余波	(教科書①の第4章)
第8回	帝国を研究し判断を下すこと	(教科書①の第5章)
第9回	雑種・普遍主義・日本	(教科書①の解説)
第10回	『A Farewell to Alms』(Gregory Clark) (1)	(教科書②) Preface
第11回	『A Farewell to Alms』(Gregory Clark) (2)	(教科書②) Economic History of the World (1)
第12回	『A Farewell to Alms』(Gregory Clark) (3)	(教科書②) Economic History of the World (2)
第13回	『ゼロ成長～脱出の条件』(下村治) (1)	(教科書③の第1章) 減速期を迎えた日本経済
第14回	『ゼロ成長～脱出の条件』(下村治) (2)	(教科書③の第3章) いわゆる「インフレ問題」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。

【テキスト（教科書）】

- ① 『帝国』ステイーヴン・ハウ、見市雅俊訳、岩波書店、2003年
- ② 『A Farewell to Alms』(Gregory Clark)
- ③ 『ゼロ成長～脱出の条件』下村治、東洋経済新報社、1976年

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50% 討論：50% 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代日本経済論、グローバル経済論
<研究テーマ> グローバル化が経済に及ぼす影響、資本主義の課題
<主要研究業績>

1. 『100年デフレ 21世紀はバブル多発型物価下落の時代～』日本経済新聞社、2003年
2. 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞出版社、2003年
3. 『終わりのなき危機 君はグローバル化の真実を見たか』日本経済新聞出版社、2011年
4. 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014年
5. 『資本主義の終焉、その先の世界』詩想社新書、榊原英資共著、2015年

- 6.『株式会社の終焉』ディスカバー 21、2016 年
 7.『閉じてゆく帝国と逆説の 21 世紀経済』集英社新書、2017 年

[Outline and objectives]

This course introduces the cause of deflation and zero interest rate, and effect of globalization, and the problem of enegy to students of master course taking this course.

Student can consider the pluses and minuses of Capitalism in the 21st century and a subject modern society.

OTR600B7

国際日本学演習 I

島田 雅彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次作品の制作を行う。

【到達目標】

修士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。同時にゼミ生共通のテーマでの研究発表会も行う予定。今年度は日本語の表現力向上のためのワークショップを行う予定。具体的にはエッセイや創作の実践。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

上記に並行して修士論文の指導を行うが、院生各自のテーマに即し、最終的に論文としての体裁を完璧に整えてもらい、それをメイン・コンテンツと位置付ける。同時に研究テーマ関連のコンテンツ制作は論文執筆の豊かな副産物となることを望む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	はじめに：春学期の計画 および論文執筆計画	春学期のメニューを確認 ゼミ生の希望調査 各人の論文テーマの紹介
第 2 回	計画：論文執筆指導 1	論文執筆の方法論の確認と指導
第 3 回	計画：論文執筆の副産物の可能性	研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第 4 回	共同研究：テーマ設定 分担	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに焦点を当て、その功罪を検証する。
第 5 回	共同研究：発表	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに焦点を当て、その功罪を検証する。
第 6 回	共同研究：発表	「この人を見よ」（仮）それぞれの研究テーマに関連したキーパーソンに焦点を当て、その功罪を検証する。
第 7 回	共同研究：発表	日本映画鑑賞とレビューの執筆
第 8 回	共同研究：発表	日本映画鑑賞とレビューの執筆
第 9 回	実践：各種コンテンツ作り	サブ・コンテンツ作りの計画
第 10 回	実践：各種コンテンツ作り	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評の執筆
第 11 回	実践：各種コンテンツ作り	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評の執筆
第 12 回	実践：発表	論文の一章、あるいは補足になるような小論文、書評の執筆
第 13 回	実践：中間発表	目次案の提出
第 14 回	論文指導：中間発表	個別指導を通じ、論文の進行状況のチェック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題をこなすこと、論文執筆の進捗状況を随時報告すること

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017
 ほかに授業内で指示

【参考書】

授業内で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点 20 %、サブコンテンツ 20 %、論文進行状況 30 %、論文完成度 30 %とする。

【学生の意見等からの気づき】

遅刻厳禁

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史
 <研究テーマ>

小説論 サブカルチャー研究
 <主要研究業績>
 小説作法ABC 新潮選書2008
 徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009
 悪貨 講談社2010
 傾国子女 文藝春秋2013
 ニッチを探して 新潮社2013
 往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014
 暗黒寓話集 文藝春秋2014

【Outline and objectives】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

島田 雅彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

批評な知性が人文科学には欠かせない。単に時代のニーズに対応するだけでなく、より広範囲の文化現象に有効な批評のスタイル、理論、形式を開発する必要がある。サブカルチャー全盛の時代にあっても、文学や映画の古典にはまだリサイクルの可能性が残っている。忘れられた名作の発掘に努め、その潜在的な価値を前面に押し出すための批評的コンテンツの開発は急務である。この課題を共有し、批評と二次産品の制作を行う。

【到達目標】

修士論文の副産物をたくさん生み出せるように進める。同時にゼミ生共通のテーマでの研究発表会も行う予定。今年度は日本語の表現力向上のためのワークショップを行う予定。具体的にはエッセイや創作の実践。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

上記に並行して修士論文の指導を行うが、院生各自のテーマに即し、最終的に論文としての体裁を完璧に整えてもらい、それをメイン・コンテンツと位置付ける。同時に研究テーマ関連のコンテンツ制作は論文執筆の豊かな副産物となることを望む。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	はじめに：秋学期の計画	秋学期のメニューを確認 夏休みの課題の提出
第2回	立案：コンテンツ制作計画	各人の新たな制作テーマの紹介
第3回	指導：論文執筆指導2	論文執筆の方法論の確認と個別指導
第4回	立案：論文執筆の副産物の生産	新たな研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第5回	立案：論文執筆の副産物の生産	新たな研究のサブテーマの設定、およびサブ・コンテンツ作りの計画
第6回	実践：各テーマに基づく小論文	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第7回	実践：各テーマに基づく小論文	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第8回	実践：各テーマに基づく小論文	小論文執筆および関連コンテンツの制作
第9回	共同研究2：共通テーマによる研究、小論文、各種コンテンツ作り	論文に関連した書物、先行研究に対する批評
第10回	共同研究2：共通テーマによる研究、小論文、各種コンテンツ作り	論文に関連した書物、先行研究に対する批評
第11回	共同研究2：共通テーマによる研究、小論文、各種コンテンツ完成	論文要旨の確認
第12回	論文指導：討議	論文指導、修正
第13回	論文指導：発表	論文指導、修正
第14回	論文指導：発表	論文指導、個別面談

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

折々の課題をこなすこと、論文執筆の進捗状況を随時報告すること

【テキスト（教科書）】

『深読み日本文学』島田雅彦著 集英社インターナショナル新書 2017
 ほか授業内で指示

【参考書】

授業内で指示

【成績評価の方法と基準】

小論文、サブコンテンツ、共同制作の貢献度、論文完成度など総合的に判断。評価基準は平常点 20%、サブコンテンツ 20%、論文進行状況 30%、論文完成度 30%とする。

【学生の意見等からの気づき】

遅刻厳禁

【担当教員の専門分野等】

創作 日本近代文学 日本戦後史 日欧交流史
 <研究テーマ>
 小説論 サブカルチャー研究
 <主要研究業績>

小説作法ABC 新潮選書2008
徒然王子全2巻 朝日新聞出版2009
悪貨 講談社2010
傾国子女 文藝春秋2013
ニッチを探して 新潮社2013
往生際の悪い奴 日本経済新聞社2014
暗黒寓話集 文藝春秋2014
虚人の星 講談社2015

【Outline and objectives】

Critic intelligence is indispensable to humanities. In addition to simply responding to the needs of the times, we need to develop criticism style, theory, and format effective for a wider range of cultural phenomena. Even in the age of subculture, the possibility of recycling still remains in the classics of literature and movies. It is an urgent matter to develop critical content to strive to find forgotten masterpieces and push their potential values to the front. Share this issue and make critiques and produce secondary products.

OTR600B7

国際日本学演習 I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

- ①研究論文を理解することができる。
- ②史料を理解することができる。
- ③学会発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究テーマの学術上の位置づけ
第3回	研究発表（2）	研究テーマの史料論的分析
第4回	研究発表（3）	研究テーマの可能性
第5回	研究発表（4）	研究テーマのひろがり
第6回	研究発表（5）	学会発表をめざして
第7回	論文講読（1）	研究史上の位置づけ
第8回	論文講読（2）	論文構成の方法
第9回	論文講読（3）	史料批判
第10回	論文講読（4）	論理展開の仕方
第11回	論文講読（5）	研究視野の拡大
第12回	研究計画発表（1）	今後の方針
第13回	研究計画発表（2）	史料採訪にむけて
第14回	まとめ	研究者の姿勢

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読にあたっては、事前にその論文を読んでおくこと。また、その著者の他の論文も目を通すと良い。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等をもて、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、受講生が日本近世史についての研究能力を高め、個々が有する研究テーマを深めていくことを目的とする。

【到達目標】

論文を執筆することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

個人による研究発表をおこなう。発表者は各自の研究テーマについてレジュメを作成し、発表する。論文講読は、事前に割り当てを決め、担当者が発表し、これを全員で批評するかたちをとる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業概要の説明、発表順の決定
第2回	研究発表（1）	研究史との格闘
第3回	研究発表（2）	論理展開の仕方
第4回	研究発表（3）	史料の読みの深さ
第5回	研究発表（4）	表の効果的使用
第6回	研究発表（5）	他流試合のなかで
第7回	論文講読（1）	分野の選定
第8回	論文講読（2）	表現力の問題
第9回	論文講読（3）	史料引用の恣意性
第10回	論文講読（4）	先行研究の曲解
第11回	論文講読（5）	結論の妥当性
第12回	研究計画発表（1）	今後の進め方
第13回	研究計画発表（2）	史料収集のすすめ
第14回	まとめ	つぎのステージへむけて

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文講読においては、事前に当該論文を読んでおくこと。各自で研究を進めること。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

『岩波講座日本歴史』ほか

【成績評価の方法と基準】

発表内容、授業への参加度等を見て、平常点100%で成績評価する。

【学生の意見等からの気づき】

教室について配慮したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史

<研究テーマ>都市論、記憶論

<主要研究業績>「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the early modern history of Japan. It also enhances the development of student's skill in making oral presentation.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

謝 荔

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業を通して目指すのは、(1) 受講生の研究テーマにアプローチするための研究分野の視点を理解し、文献の講読を通じて先行研究の研究手法と成果に対する理解を高め、これらを研究発表と論文の作成に生かしていくこと、(2) 文献資料の収集からフィールドワークまで自ら実践しながらそのテクニックを身につけ、文献調査と現地調査の成果を結びつけて修士論文を書き上げることである。

【到達目標】

1年次生は研究背景、問題提起、テーマ設定を明確にし、先行研究の論点を整理する。2年次生は自らの調査データを文章化すると同時に、先行研究を吟味しながら執筆作業を進め、修士論文を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生による文献の講読および発表・討議を中心に行う。先行研究の視点、研究方法、データ、結論について議論を交わし、自らの調査データや文献資料の整理・分析結果を発表することを主な内容とする。具体的なスケジュールは受講生の研究の進捗状況に基づいて決めたい。

なお、受講者の状況によって授業計画の一部変更、中国語による補足説明もありうる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介、研究テーマや論文構想、2年次生の研究の進捗状況の報告、授業の進め方と評価方法の説明、発表スケジュールの確認
第2回	課外学習	博物館での見学・文献調査
第3回	個人発表	文献の講読・討議
第4回	個人発表	文献の講読・討議
第5回	個人発表	文献の講読・討議
第6回	個人発表	文献の講読・討議
第7回	個人発表	文献の講読・討議
第8回	個人発表	文献の講読・討議
第9回	個人発表	文献の講読・討議
第10回	個人発表	研究発表
第11回	個人発表	研究発表
第12回	個人発表	研究発表
第13回	個人発表	研究発表
第14回	課題レポートと質疑応答	課題レポートと質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布する文献を読み、自分の意見や質問を準備しておくこと。積極的に自分の研究テーマに関連する文献資料を調べる。

【テキスト（教科書）】

文献のプリントを配布する。

【参考書】

授業中に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表内容、ディスカッションなど）は50%、レポートは50%である。

【学生の意見等からの気づき】

議論の内容と研究指導のポイントを整理すること。提出物などの期限を厳守すること。

【学生が準備すべき機器他】

【その他の重要事項】

非日本語話者はチューターによる日本語指導をしっかりと受け、完成度の高い日本語の文章を提出すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

文化人類学、現代中国と日本社会の生活文化の比較

<研究テーマ>

グローカリゼーションにおける地域文化の変容

<主要研究業績>

- ① 2017 年、「グローバル化における新たな地域表象の生成——雲南のコーヒー文化の現状を事例に」『法政大学多摩論集』第 33 号
 ② 2015 年、「グローバル化における祝祭日の再構築——中国端午節の文化変容を事例に」、韓敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集③）風響社
 ③ 2012 年、「端午節儀式活動伝承主体的社会変化——以中国嘉興市端午民俗文化節与日本相模原市児童節為例」『文化遺産』2012 年 03 期、中山大学中国非物質文化遺産研究中心

【Outline and objectives】

The students are instructed about the planning of study schedule, the way of collecting data, the way of doing the research and summarizing the results of research.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

謝 荔

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業を通して目指すのは、(1) 受講生の研究テーマにアプローチするための専門分野の視点を理解し、文献の講読を通じて先行研究の研究手法と成果に対する理解を高め、これらを論文の作成に生かしていくこと、(2) 文献資料の収集からフィールドワークまで自ら実践しながらそのテクニックを身につけ、文献調査と現地調査の成果を結びつけて修士論文を書き上げることである。

【到達目標】

1 年次生は研究背景、問題提起、テーマ設定を明確にし、先行研究の論点を整理する。2 年次生は自らの調査データを文章化すると同時に、先行研究を吟味しながら執筆作業を進め、修士論文を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生による研究報告と文献の講読および発表・討議を中心に行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	秋学期のガイダンス	夏期休暇の研究成果の報告、発表スケジュールの確認
第 2 回	個人発表	文献の講読・討議
第 3 回	個人発表	文献の講読・討議
第 4 回	個人発表	文献の講読・討議
第 5 回	個人発表	文献の講読・討議
第 6 回	個人発表	中間発表の予行演習
第 7 回	個人発表	中間発表の予行演習
第 8 回	個人発表	文献の講読・討議
第 9 回	個人発表	文献の講読・討議
第 10 回	個人発表	文献の講読・討議
第 11 回	個人発表	文献の講読・討議
第 12 回	個人発表	論文内容の発表
第 13 回	個人発表	論文内容の発表
第 14 回	個人発表	論文内容の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布する文献を読み、議論するための自分の意見や質問を準備しておくこと。文献資料のポイントや調査データを整理し文章化すること。

【テキスト（教科書）】

文献のプリントを配布する。

【参考書】

授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表内容、ディスカッションなど）は 50 %、レポートは 50 %

【学生の意見等からの気づき】

議論の内容と研究指導のポイントを整理すること。提出物などの期限を厳守すること。

【その他の重要事項】

非日本語話者はチューターによる日本語指導をしっかり受け、完成度の高い日本語の文章を提出すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

文化人類学、現代中国と日本の生活文化の比較

<研究テーマ>

グローカリゼーションにおける地域文化の変容

<主要研究業績>

- ① 2017 年、「グローバル化における新たな地域表象の生成——雲南のコーヒー文化の現状を事例に」『法政大学多摩論集』第 33 号
 ② 2015 年、「グローバル化における祝祭日の再構築——中国端午節の文化変容を事例に」、韓敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』（国立民族学博物館論集③）風響社
 ③ 2012 年、「端午節儀式活動伝承主体的社会変化——以中国嘉興市端午民俗文化節与日本相模原市児童節為例」『文化遺産』2012 年 03 期、中山大学中国非物質文化遺産研究中心

【Outline and objectives】

The students are instructed about the planning of study schedule, the way of collecting data, the way of doing the research and summarizing the results of research.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを旨とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ゼミガイダンス	ゼミ概要の説明／方針の決定
第2回	研究テーマの発表	全受講生による発表
第3回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第7回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第11回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第14回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対する発表準備をしっかりと行うことが求められます。また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項について課題を出すことがあり、その課題について取り組むことが求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%、討論内容（発言等）：50%で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、受講生が各自の修士論文の研究内容について報告し、それら報告に基づいて討論をすることで、各自の研究を進捗させていくことを授業の目的とします。また、受講生自身の研究を進めるだけでなく、他者の報告を聞き、討論を行うことを通じて、社会経済地理学的な考え方やモノの見方を修得することを旨とします。

【到達目標】

本授業を通じて、受講生が適切な修士論文を完成すべく各自が研究を進捗させるとともに、社会経済地理学的な思考・観点を修得できるようになることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業は受講生の発表とそれに基づく討論を中心に展開していきます。また、適宜、各受講生の発表テーマに関連する分野についての課題を設定し、その課題について検討を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	研究テーマの発表	全受講生による研究の進捗状況の報告
第2回	研究内容の報告(1)	担当者の発表と質疑応答
第3回	研究内容の報告(2)	担当者の発表と質疑応答
第4回	研究内容の報告(3)	担当者の発表と質疑応答
第5回	研究内容の報告(4)	担当者の発表と質疑応答
第6回	研究テーマに関する課題の検討(1)	関連分野についての説明と討論
第7回	研究テーマに関する課題の検討(2)	関連分野についての説明と討論
第8回	研究テーマに関する課題の検討(3)	関連分野についての説明と討論
第9回	研究テーマに関する課題の検討(4)	関連分野についての説明と討論
第10回	研究内容の報告(5)	担当者の発表と質疑応答
第11回	研究内容の報告(6)	担当者の発表と質疑応答
第12回	研究内容の報告(7)	担当者の発表と質疑応答
第13回	研究内容の報告(8)	担当者の発表と質疑応答
第14回	総合討論	まとめ／包括的な討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対する発表準備をしっかりと行うことが求められます。また、適宜、授業内容（発表内容）に関連する事項について課題を出すことがあり、その課題について取り組むことが求められます。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しません。

【参考書】

各担当者の発表や討論に関連する文献については、適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

発表内容：50%、討論内容（発言等）：50%で評価します。発表については十分な準備が大前提となり、問題の所在・背景や論点を明確にした発表を高く評価します。また、討論については、疑問点・問題点を整理しつつ、論拠を提示した上で自身の考えを表明する発言を高く評価します。

【学生の意見等からの気づき】

討論が活発になるように授業を進めることを心掛けます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

<研究テーマ>

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

The aims of this course are to help students make progress each master theses and acquire the ability to consider various phenomena geographically. The students taking this course need to make presentations and discuss each researches in this course in order to achieve these aims.

OTR600B7

国際日本学演習 I

間宮 厚司

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の研究方法について学びます。この授業では、上代・中古・中世における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的にした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	上代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	上代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	上代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	上代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	中古文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	中古文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	中古文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	中古文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	中世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	中世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	中世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	中世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

春学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の受講生が、年々多くなっているため、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』(笠間書院、2005年)

『万葉異説』(森話社、2011年)

『沖縄古語の深層/増補版』(森話社、2014年)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

間宮 厚司

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to have a presentation about what we learn in the class related to Japanese Language and a question and answer session.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学の方法について学びます。この授業では、近世・近代・現代における文学作品について言語学的に考え、正しく解釈する方法を学ぶことを目的にします。

【到達目標】

日本語研究に関する調査・分析・考察を学び、プリントを作成して発表する。時代を問わず、様々な視点から自分なりの論を立てられるようになることを目的とした授業です。修士論文の作成に役立つ知識やスキルを身につけることが到達目標です。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生による研究発表を中心に行います。発表者はプリントを人数分準備、配布して発表し、発表後に質疑応答や助言などを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	近世文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第3回	近世文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第4回	近世文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第5回	近世文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第6回	近代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第7回	近代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第8回	近代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第9回	近代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説
第10回	現代文学作品の言語学的研究（1）	問題となる言語表現の説明と次回の課題
第11回	現代文学作品の言語学的研究（2）	課題の発表と次回の課題
第12回	現代文学作品の言語学的研究（3）	課題の発表と小レポートの説明
第13回	現代文学作品の言語学的研究（4）	小レポート提出と解説と大レポートの説明
第14回	まとめ	大レポート提出と総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布し、テキストは指定しません。

【参考書】

『新編日本古典文学全集』（小学館）など、研究テーマにそって、そのつと紹介します。

【成績評価の方法と基準】

秋学期における発表とレポートを各 50 % で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の受講生が、年々多くなっているので、わかりやすい授業を心がけるようにします。加えて、100分授業における発表者数についても工夫します。

【担当教員の専門分野等】

日本古典語学・日本語史

<研究テーマ>

『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究

<主要研究業績>

『おもしろさうしの言語』(笠間書院、2005年)

『万葉異説』(森話社、2011年)

『沖繩古語の深層 / 増補版』(森話社、2014年)

OTR600B7

国際日本学演習 I

川崎 貴子

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフィーズ)』くろしお出版。(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認する。様々なテーマの論文を読むことを通して、テーマの立て方、仮説検証の仕方を学び、学生それぞれが研究テーマを見つけ、研究計画を組み立てる。

【到達目標】

本授業では、第一言語習得、および第二言語習得の主な研究を紹介することにより、言語習得の理論研究がどのように進んできたのかを学ぶ。また、様々な論文で用いられている実験方法を比較し、第二言語習得の研究手法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

論文を読み、毎回全員で発表・議論していく。言語習得、主に第二言語習得に関する論文を読み、発表することにより、言語習得の分野での問いの立て方、検証方法を確認し、取り上げられている問題に対して、どのような実験を行っているかを学ぶ。その後、各自、1年間で実行可能な研究テーマを設定し、それぞれのテーマの先行研究を読み、研究計画を構築していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりませながら議論する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	Orientation	授業内容の説明
2	人の言語能力	第一言語習得
3	言語習得研究 1	第一言語習得と第二言語習得
4	言語習得研究 2	L2 研究の歴史
5	言語獲得と言語習得	Learning & Acquisition
6	研究計画発表 1	修士 2 年生による研究計画発表・進捗状況の報告
7	研究計画発表 2	修士 1 年生による研究テーマ発表
8	エラーに関する研究 1	transfer エラー・developmental エラー
9	エラーに関する研究 2	Error Analysis
10	学びと注意 1	暗示的・明示的学び
11	学びと注意 2	気づき仮説
12	学生による発表 1	レビュー論文
13	学生による発表 2	実験による仮説検証
14	研究法	研究手法比較と研究計画の作成

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト (教科書)】

授業内で必要に応じて論文を指定します。

【参考書】

授業内にてその都度、指定します。

【成績評価の方法と基準】

<修士課程学生>
 授業参加点：40%
 授業内発表：30%
 研究計画書：30%

【学生の意見等からの気づき】

受講生の基礎知識、興味の内容が大きく異なるため、それぞれの興味に応じて扱う題材を調整していきたいと思えます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 音韻論、第二言語習得
 <研究テーマ> 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など
 <主要研究業績>
 川崎貴子・田中邦佳「L 2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)
 川崎貴子「カタカナ代用による第 2 言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)
 Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

川崎 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語話者の英語習得、および第二言語としての日本語習得の研究を読み、議論することを通して、自らの論文の基礎となる第二言語習得の理論、研究方法を学ぶ。

【到達目標】

一音韻論、及び *SLA* の音韻・語彙分野の基礎文献を読みつつ、第二言語習得・教育の分野での調査手法を学ぶ。
 一 *SLA* の音韻習得・語彙習得の論文を読み、習得・音韻理論への理解を深める。
 一自らの研究計画を策定、研究を遂行し、論文の形にすることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「*DP2*」「*DP3*」「*DP4*」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「*DP1*」「*DP2*」「*DP3*」「*DP4*」に関連する。

【授業の進め方と方法】

春学期に続き、指定文献を読み、毎回全員で発表・議論していく。担当者は担当箇所の核になるデータ、及びその分析方法をまとめ、批判をおりませながら議論すること。修士論文執筆の際に役立つよう、おもに研究法・論文の構成・データ分析などについて学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション 第一言語習得と第二言語習得	授業内容の説明・母語の影響
2	修士2年生の研究発表	研究の進捗状況発表（2年生）
3	修士1年生・研修生の研究発表	研究の進捗状況の発表（1年生、および研修生）
4	習得理論 1	<i>Noticing</i>
5	習得理論 2	<i>input</i> と <i>output</i>
6	習得順序 1	処理可能性理論
7	習得順序 2	セイリエンス
8	第二言語習得の研究手法	学生による実験論文の発表
9	データの分析・可視化 1	データ分析・統計処理
10	データの分析・可視化 2	データ分析・統計処理（ハンズオンデータによる実習）
11	論文構成	論文の構成・書式について学ぶ
12	1年生による修論計画発表	1年生は研究計画・先行研究リスト・今後のプランなどを発表。
13	2年生による修論発表	2年生による修士論文の概要・目的・方法・結果の発表
14	博士後期課程学生による論文発表・講評	博士後期課程学生による論文の発表・発表の講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前に指定された範囲の論文を読むこと。そして、担当箇所については、発表の準備を十分に行うこと。

【テキスト（教科書）】

特に設定しない。必要に応じて授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

<修士課程>

授業発表...40%

授業内での発言・議論への貢献...30%

学期末アブストラクト...30%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 音韻論、第二言語習得

<研究テーマ> 音韻対比の音声的影響、第二言語学習者の音韻習得など

<主要研究業績>

川崎貴子・田中邦佳「L2 英語摩擦音の知覚における高周波数帯域情報の利用」『法政大学文学部紀要』第 65 号 pp. 63-70. (2012)

川崎貴子「カタカナ代用による第二言語音知覚調査」『法政大学文学部紀要』第 63 号 pp. 29-37. (2011)

Takako Kawasaki, John Matthews, and Kuniyoshi Tanaka "Processability of Acoustic Cues in the Perception of L2 Speech." Paper presented at 12th International Symposium on Processability Approaches to Language Acquisition, Ghent University, Ghent, Belgium. (2012)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得（第二言語習得モノグラフィーズ）』くろしお出版。(2017)

【Outline and objectives】

The aim of this course is to deepen the students' understanding of theories of SLA and research methodologies in the field.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

椎名 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には英語で書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をする。しかし、その場合の「スタイル」の定義とはなんだろうか？その定義を出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していく。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とする。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テキストは担当者を決めて、発表してもらいます。その後、みんなでコメントを交換し、ディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	「文体・スタイル」とは何か？
第2回	文体と選択 (1)	文体の領域、文体と中身
第3回	文体と選択 (2)	文体の意味
第4回	文体、テキスト、頻度 (1)	スタイルの計測
第5回	文体、テキスト、頻度 (2)	規範と逸脱
第6回	文体の分析方法 (1)	言語学的・文体論的チェックリスト
第7回	文体の分析方法 (2)	文体のパリエーション
第8回	分析方法の例 (1)	D.H. ロレンス、J. コンラッドの小説の分析の練習
第9回	分析方法の例 (2)	ヘンリー・ジェイムズの小説の分析の練習
第10回	文体のレベル (1)	認知的コードとしての言語について
第11回	文体のレベル (2)	メッセージと現実のモデル
第12回	文体のレベル (3)	意味論的レベルと統語論的レベル
第13回	文体のレベル (4)	書記的レベルと音韻論的レベル
第14回	文体論的分析の方法論についてのまとめ	これまで読んできたことをふりかえってまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者でなくても、かならずテキストを読んで予習をしてきてください。

【テキスト（教科書）】

Geoffrey Leech and Mick Short (2007) *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose, second edition, New York: Routledge.*

【参考書】

適宜、指示します。

【成績評価の方法と基準】

レポート (50%) に加え、授業中の参加の度合、貢献度 (50%) を考慮し、総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】

面談が評判がよいので、指導は授業と面談とのコンビネーションで進めていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、コミュニケーション論
<研究テーマ> 英語の呼称について、日本語のベネファクティブとポライトネスについて
<主要研究業績> 「させていただく」という問題系『日本語語用論フォーラム 2』2017, ひつじ書房, 他

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

椎名 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

英語学特殊研究で学ぶのは、基本的には英語で書かれたテキスト分析の方法である。書かれた言葉であれ、話された言葉であれ、それを一つのテキストとみなし、そのスタイルを、英文法、文体論、語用論の観点から分析する訓練をする。しかし、その場合の「スタイル」の定義とはなんだろうか？その定義を出発点として、狭い意味での言語的構築物のみならず、広い意味での言語活動、コミュニケーション全体を射程に入れて、一つ一つのテキスト分析の方法を確認していく。

【到達目標】

この授業は英語学の諸分野の内、テキスト分析に関わる基本的なトピックを扱った論文を読み、英語学の研究方法を身につけるとともに、自分が扱う英語学の課題を検討し、論文を執筆する応用力をつけることを目的とする。学生には、英語学の課題、問いの立て方、それを追求していく視点を獲得してもらうことをめざす。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

担当者がテキストについて発表し、その後、みんなでコメントを交わしてディスカッションをします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	文体分析の方法について
第2回	文体の2つのアスペクト (1)	言語と虚構の世界
第3回	文体の2つのアスペクト (2)	現実のスピーチと虚構におけるスピーチ
第4回	マインド・スタイル (1)	3つのマインドスタイル
第5回	マインド・スタイル (2)	通常とは異なるマインドスタイル
第6回	テキストのレトリック (1)	テキストとディスコースのレトリック
第7回	テキストのレトリック (2)	文の単純さと複雑さ
第8回	ディスコースとディスコース・シチュエーション (1)	文学におけるディスコース・シチュエーション
第9回	ディスコースとディスコース・シチュエーション (2)	視点の問題
第10回	小説における会話 (1)	スピーチ・アクトとインプリカチャー
第11回	小説における会話 (2)	語用論
第12回	スピーチと思考の表現方法 (1)	スピーチの表現方法
第13回	スピーチと思考の表現方法 (2)	思考の表現方法
第14回	文体論的研究の今後の課題	タームを振り返って、問題点を議論する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

担当者もそれ以外の人も、全員、テキストを読んで予習をして来てください。

【テキスト（教科書）】

Geoffrey Leech and Mick Short (2007) *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose, second edition, New York: Routledge.*

【参考書】

特になし

【成績評価の方法と基準】

レポート (50%) に加え、授業中の参加の度合、貢献度 (50%) を考慮し、総合的に判断する

【学生の意見等からの気づき】

面談が指導に有効で良かったと言われているので、授業と並行して、定期的に面談を行い、一人一人の論文作成を進めて行きます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、コミュニケーション論
<研究テーマ> 英語の呼称問題、日本語のベネファクティブとポライトネス
<主要研究業績> 「させていただく」という問題系、『日本語語用論フォーラム 2』（ひつじ書房）2017 他

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

OTR600B7

国際日本学演習 I

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

認知言語学の入門として様々な基礎概念を概観しながら、「捉え方」がいかに言語に反映されているのかということ学ぶ。また、それらがどう言語分析に活かせるのかを皆で検討しながら授業を進めていく。

【到達目標】

この授業では、言語学一般および認知言語学の基礎概念を紹介し、受講生がそれらの概念を用いて日本語の様々な文法・意味に関する問題についての的確に説明できるようになることを目的とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

入門的な内容も多く盛り込んだが、基本的には演習形式で行う。発表者はレジュメを準備し、それ以外の者は、分かりにくい点を容赦なく質問する。発表者はそれに答えられるよう、常に十分な準備をして望むこと。徹底的に議論してもらうため、リアクションペーパーは用いない。質問はその場で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	認知言語学研究の流れと現在	言語学史における認知言語学の位置づけについて
第2回	カテゴリー化とプロトタイプ	言語知識とカテゴリー化について
第3回	メタファー	認知能力の反映としてのメタファーについて
第4回	メトニミーとシネクドキー	認知能力の反映としてのメトニミーおよびシネクドキーについて
第5回	イメージ・スキーマ	ことばの意味についてイメージスキーマの観点から考える
第6回	類像性	ことばの意味について類像性の観点から考える
第7回	文法化	言語変化と文法化について考える
第8回	主体化	言語変化と主体化について考える
第9回	品詞の捉え方	品詞の定義とその境界について考える
第10回	構文（1）	構成性の原理について考える
第11回	構文（2）	構文のネットワークについて考える
第12回	認知言語学とコーパス（1）	コーパスの種類と利用法について紹介する
第13回	認知言語学とコーパス（2）	コーパスを用いた事例研究を紹介する
第14回	まとめ	総括を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社、2014年）を毎週1章ずつ読み、分からない概念・用語などを先に調べておくこと（2時間程度）。さらに、A4容姿1枚の要約を作成・提出すること（1時間程度）。加えて、発表担当者となっている者は、発表用のレジュメを作成すること（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社、2014年）

【参考書】

参考書・参考資料等

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明徳・秋本守英編著、明治書院）
『日本語学研究事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）
『語用論キータム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）
『日本語研究のための認知言語学』（初山洋介著、研究社）
『認知意味論：言語から見た人間の心』（ジョージレイコフ著、紀伊国屋書店）
『認知意味論のしくみ』（初山洋介著、研究社）
『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』（谷口一美著、研究社）
『概念化と意味の世界 認知意味論のアプローチ』（深田智・仲本康一郎著、研究社）

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート（40%）、小レポート（30%）、プレゼンテーション（30%）

【学生の意見等からの気づき】

留学生が多いので、日本語の用例が多いテキストを採用した。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）

「構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ」（共著、研究社、2011年）

【Outline and objectives】

The objectives of this class are to understand the basic concepts of Cognitive Linguistics and to understand how conceptualizer's "construal" is reflected in the language expressions we usually use.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、（認知）言語学的な研究手法を学ぶことができる雑誌記事・学術論文を読む。論文ごとに担当者を決め、担当者には、論文の要旨を分かりやすくレジュメにまとめたものを授業で配付し、口頭でレポートしてもらう。その後、質疑応答・ディスカッションを行い、論文の分析手法について批判的に検討する。

【到達目標】

(1) 論文における主張と根拠を的確に理解し、分かりやすく要約してレポートができるようになる。

(2) 言語学の諸概念が言語分析においてどのように応用されているのかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式で行う。発表者はレジュメを作って、論文の内容を分かりやすく伝える。それ以外の受講者は、論文の不明点や欠点について容赦なく質問し、発表者とひたすらディベートを行う。最後に皆でその論文の欠点と改善点について考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	論文レポート(1)	名詞の多義について
第2回	論文レポート(2)	動詞の多義について
第3回	論文レポート(3)	形容詞の多義について
第4回	論文レポート(4)	接続詞の多義について
第5回	論文レポート(5)	言いさし文と文法化について
第6回	論文レポート(6)	モダリティ副詞と文法化について
第7回	論文レポート(7)	接続詞の文法化について
第8回	論文レポート(8)	談話標識について
第9回	論文レポート(9)	若者言葉と対話表現について
第10回	論文レポート(10)	待遇表現について
第11回	論文レポート(11)	活用の変化について
第12回	論文レポート(12)	新語の発生について
第13回	論文レポート(13)	コーパスについて
第14回	まとめ	総括をする

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

使用しない。（必要に応じて、教員が資料を配付する。）

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）
『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）
『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）
『言語学大辞典』（三省堂）
『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）

【成績評価の方法と基準】

学期末レポート（40%）、小レポート（30%）、プレゼンテーション（30%）

【学生の意見等からの気づき】

論文の書き方が具体的に理解できた、というコメントが多かったので、今年度の実際に多くの論文を取り上げる予定である。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）

「接続詞ケドの手続き的意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）

『構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

OTR600B7

国際日本学演習 I

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三木清の著作『哲学的人間学』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。

【到達目標】

- ・三木清の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- (1) 受講者全員に三木清の『哲学的人間学』の担当箇所を割り当てる。
- (2) 担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- (3) その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	三木清『哲学的人間学』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『哲学的人間学』『人間学の概念』①	第一章「人間学の概念」の検討の第一回目 pp.127-147（『三木清全集』18巻の頁数表記）
第3回	「人間学の概念」②	「人間学の概念」の検討の第二回目 pp.138-161 （前週の復習も含めての検討）
第4回	「人間学の概念」③	「人間学の概念」の検討の第三回目 pp.161-175
第5回	「人間学の概念」④	「人間学の概念」の検討の第四回目 pp.175-186
第6回	『哲学的人間学』『人間存在の歴史性』①	第二章「人間存在の歴史性」の検討の第一回目 pp.187-213
第7回	「人間存在の歴史性」②	「人間存在の歴史性」の検討の第二回目 pp.214-229
第8回	「人間存在の歴史性」③	「人間存在の歴史性」の検討の第三回目 pp.229-246
第9回	『哲学的人間学』『人間存在の状況性』①	第三章「人間存在の状況性」の検討の第一回目 pp.247-266
第10回	「人間存在の状況性」②	「人間存在の状況性」の検討の第二回目 pp.266-296
第11回	『哲学的人間学』『人間存在の表現性』①	第四章「人間存在の表現性」の検討の第一回目 pp.297-330
第12回	「人間存在の表現性」②	「人間存在の表現性」の検討の第二回目 pp.330-345
第13回	「人間存在の表現性」③	「人間存在の表現性」の検討の第三回目 pp.345-355 第四章全体のまとめも含む
第14回	『哲学的人間学』『人間存在の社会性』	第四章「人間存在の社会性」の検討と、全体のまとめ pp.356-386

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

三木清『哲学的人間学』（『三木清全集』第十八巻）
現在、古本屋などで安価で入手可能であるので出来得る限り各自入手することが望ましいが、入手できなかった場合でもコピーを講義担当教員が準備する。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、三木清の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては赤松常弘『三木清——哲学的思索の軌跡』（ミネルヴァ書房、1994年）が三木の思想の全体像を把握するに際しては有益である。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。

講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないの、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。

紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすいように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。

パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ> 京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

① 「『ひと』であること、「私」であること——三木清の「哲学的人間学」をめぐって——」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）

② 『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）

③ 「『三河物語』における譜代意識の根底——「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から——」（『倫理学紀要 第24輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of the concept "philosophical anthropology" through reading thoroughly "Philosophical anthropology" by Miki Kiyoshi. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

国際日本学演習Ⅱ

西塚 俊太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

三木清の著作『構想力の論理』を読み進めることを通じて、日本近代哲学において西洋思想が受け容れられていく過程を把握していく。特に、日本近代において一体何が問われていたのか、日本の近代性とは一体いかなるものであったのか、などの点に関する理解を目指していく。今年度は第三章「技術」の序盤までの検討を予定している。

【到達目標】

- ・三木清の著作を中心に、日本近代の哲学のテキストを読み解くことが出来る。
- ・哲学的思索や考察内容を自身の言葉として語ることが出来る。
- ・議論を通じて、自身の思考内容を深めることが出来る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- （1）受講者全員に三木清の『構想力の論理』の担当箇所を割り当てる。
- （2）担当者は該当箇所に関するレジュメを作成し、講義で発表をする。
- （3）その発表に基づいて、テキスト解釈について参加者全員で議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	三木清『構想力の論理』に関する概要の説明と、講義内容や進め方および評価方法の説明。
第2回	『構想力の論理』第一章「神話」①	「序」および第一章「神話」の検討の第一回目 pp.3-19（『三木清全集』8巻の頁数表記）
第3回	「神話」②	「神話」の検討の第二回目 pp.19-36
第4回	「神話」③	「神話」の検討の第三回目 pp.36-55
第5回	「神話」④	「神話」の検討の第四回目 pp.55-74
第6回	「神話」⑤	「神話」の検討の第五回目 pp.74-98 第一章の総まとめ
第7回	『構想力の論理』第二章「制度」①	『構想力の論理』第二章「制度」の検討の第一回目 pp.99-119
第8回	「制度」②	「制度」の検討の第二回目 pp.120-136
第9回	「制度」③	「制度」の検討の第三回目 pp.137-150
第10回	「制度」④	「制度」の検討の第四回目 pp.151-164
第11回	「制度」⑤	「制度」の検討の第五回目 pp.164-184 第二章の総まとめ
第12回	『構想力の論理』第三章「技術」①	『構想力の論理』第三章「技術」の検討の第一回目 pp.185-202
第13回	「技術」②	「技術」の検討の第二回目 pp.203-221
第14回	「技術」③	「技術」の検討の第三回目と、全体の総まとめ pp.221-238

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の該当箇所を熟読した上で講義に参加することが必須である。特に、発表担当者は担当箇所を幾度も綿密に読み込んだ上でレジュメを作成することが強く求められる。

【テキスト（教科書）】

三木清『構想力の論理』（『三木清全集』第八巻）

現在、古本屋などで安価で入手可能であるので出来る限り各自入手することが望ましいが、入手できなかった場合でもコピーを講義担当教員が準備する。

【参考書】

まずは参考書などを参照せず、三木清の原典そのものにあたって入念に読み込むことが先決である。そこで理解しきれなかった点を、講義内の議論を通じて深めていくことになる。

参考文献は講義内で適宜指示していくが、さしあたっては赤松常弘『三木清——哲学的思索の軌跡』（ミネルヴァ書房、1994年）が三木の思想の全体像を把握するに際しては有益である。

【成績評価の方法と基準】

発表担当時の発表内容（レジュメの水準を含む）（60%）と、講義内での発言や講義への参加姿勢（40%）によって評価する。

講義においては毎回の発言・質問を「必須」として求め、発言・質問しなかった場合は出席したものとは見なさないの、事前学習として事前に該当箇所を読み込んだ上で講義に出席することが必要である。

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につき、特になし。

【学生が準備すべき機器他】

発表担当の際には必ずレジュメを作成し配布すること。

紙媒体のレジュメが望ましいが、パワーポイントを使用する場合においても、議論を展開しやすくように重要箇所はなるべく文章形式を採用すること。

パワーポイントの使用を希望する際には、前の週までに講義担当教員にその旨を連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代哲学・日本思想史

<研究テーマ>京都学派を中心とした日本近代哲学の研究、ならびに日本思想史（神・儒・仏・物語・武士道など）の研究

<主要研究業績>

①「『ひと』であること、「私」であること—三木清の「哲学的人間学」をめぐって—」（『日本倫理思想論究 第2号』、2014）

②『科学技術の倫理学Ⅱ』（勢力尚雅 編共著、2015）

③『『三河物語』における譜代意識の根底—「慈悲」と「情」と「武辺」との関係から—』（『倫理学紀要第24輯』、2017）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire an understanding of the concept "Einbildungskraft (in German)" in other words "imagination (in English)", through reading thoroughly "The logic of imagination" by Miki Kiyoshi. By the end of this course, students should be able to fully grasp the background of Japanese thought in modern times.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<日本をどう論じるか>

日本を他とは違うものと見なすこと、そのことは恐らく間違ったことではありません。ただその時とかく伴うのが、いたずらな自虐か、そうでなければ、いたずらな自賛です。その両者を免れているまれな例の一つが、丸山真男の仕事です。授業では、丸山がなにを見たのか以上に、どのように、そしてなぜ見たのかに注目して、丸山の『日本の思想』の前半を学んでいきます。

【到達目標】

a. 代表的な〈日本論〉での著者の主張を正確に理解します。

b. 代表的な〈日本論〉での著者の主張にあえて批判を試みます。

c. グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本論〉はどんなレゾナントを持つのかを考えます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。
第2回	第1章 日本の思想 (1)	議論の理解と批判
第3回	第1章 日本の思想 (2)	議論の理解と批判
第4回	第1章 日本の思想 (3)	議論の理解と批判
第5回	第1章 日本の思想 (4)	議論の理解と批判
第6回	第1章 日本の思想 (5)	議論の理解と批判
第7回	第1章 日本の思想 (6)	議論の理解と批判
第8回	第1章 日本の思想 (7)	議論の理解と批判
第9回	第1章 日本の思想 (8)	議論の理解と批判
第10回	第2章 近代日本の思想と文学—ひとつのケース スターディーとして— (1)	議論の理解と批判
第11回	第2章 近代日本の思想と文学—ひとつのケース スターディーとして— (2)	議論の理解と批判
第12回	第2章 近代日本の思想と文学—ひとつのケース スターディーとして— (3)	議論の理解と批判
第13回	第2章 近代日本の思想と文学—ひとつのケース スターディーとして— (4)	議論の理解と批判
第14回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。

【テキスト（教科書）】

丸山真男『日本の思想』（岩波新書、1961）

【参考書】

苅部直『丸山真男—リベラリストの肖像』（岩波新書）

竹内洋『丸山真男の時代—大学・知識人・ジャーナリズム』（中公新書）

水谷三公『丸山真男—ある時代の肖像』（ちくま新書）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 % で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

- 国際日本学

- 哲学

< 研究テーマ >

- 明治の日本近代思想の再評価

- 西洋思想の近代日本への導入の問題

< 主要研究業績 >

- *Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan* (共著、*Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008*)

- 「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」(『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第 10 号、2013 年 3 月 29 日、法政大学国際日本学研究所)

- 「西周と軍人勅諭」(『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究所叢書 17、2013 年 3 月、法政大学国際日本学研究所)

- *La philosophie japonaise* (共著、Vrin, 2013)

【Outline and objectives】

< *How to discuss Japan* >

To regard Japan as a different thing, that is probably not wrong. Just at the same time, it is mischievous self-torture, otherwise it is mischievous self-confidence. One of the rare examples of escaping both is Masao Maruyama's job. In the class, we will learn the work of Maruyama focusing on how and why Maruyama saw more than what he saw.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

< 日本をどう論じるか >

日本を他とは違うものと見なすこと、そのことは恐らく間違ったことではありません。ただその時とかく伴うのが、いたずらな自虐か、そうでなければ、いたずらな自賛です。その両者を免れているまれな例の一つが、丸山真男の仕事です。授業では、丸山がなにを見たのか以上に、どのように、そしてなぜ見たのかに注目して、丸山の『日本の思想』の後半を学んでいきます。

【到達目標】

a. 代表的な〈日本論〉での著者の主張を正確に理解します。

b. 代表的な〈日本論〉での著者の主張にあえて批判を試みます。

c. グローバリゼーションが進む現代世界において〈日本論〉はどんなレゾンデートルを持つのかを考えます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

毎回、定められたテキスト箇所についてまとめと解釈のレジュメ発表を当番が行い、その後発表者の問題提起に従って、全員参加で討論を行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	授業の進め方を確認し、テーマについて概要の説明を行います。
第 2 回	第 2 章 近代日本の思想と文学—ひとつのケーススタディーとして—	議論の理解と批判
第 3 回	第 2 章 近代日本の思想と文学—ひとつのケーススタディーとして—	議論の理解と批判
第 4 回	第 2 章 近代日本の思想と文学—ひとつのケーススタディーとして—	議論の理解と批判
第 5 回	第 3 章 思想のあり方について	議論の理解と批判
第 6 回	第 3 章 思想のあり方について	議論の理解と批判
第 7 回	第 3 章 思想のあり方について	議論の理解と批判
第 8 回	第 3 章 思想のあり方について	議論の理解と批判
第 9 回	第 3 章 思想のあり方について	議論の理解と批判
第 10 回	第 4 章 「である」ことと「する」こと	議論の理解と批判
第 11 回	第 4 章 「である」ことと「する」こと	議論の理解と批判
第 12 回	第 4 章 「である」ことと「する」こと	議論の理解と批判
第 13 回	第 4 章 「である」ことと「する」こと	議論の理解と批判
第 14 回	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回予定のテキスト箇所は下調べをし、読み、理解した上で授業に参加します。またとくに当番に当たったときは、当該箇所について、解釈と問題提起のレジュメを作成して授業に参加します。学期末にはまとめのレポートを作成します。

【テキスト（教科書）】

丸山真男『日本の思想』（岩波新書、1961）

【参考書】

河部直『丸山真男一リベラリストの肖像』（岩波新書）
 竹内洋『丸山真男の時代 大学・知識人・ジャーナリズム』（中公新書）
 水谷三公『丸山真男 ある時代の肖像』（ちくま新書）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 40 %、学期末レポート 20 % で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、テキストの理解 30 %、テキストの批判 30 %、日本人論の評価 40 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 >

- 国際日本学

- 哲学

< 研究テーマ >

- 明治の日本近代思想の再評価

- 西洋思想の近代日本への導入の問題

< 主要研究業績 >

- *Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan* (共著、
Hosei University Center of International Japanese Studies,
 2008)

- 「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際
 日本学研究所研究成果報告集第 10 号、2013 年 3 月 29 日、法政大
 学国際日本学研究所）

- 「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、
 国際日本学研究所叢書 17、2013 年 3 月、法政大学国際日本学研究所）

- *La philosophie japonaise* (共著、Vrin, 2013)

【Outline and objectives】

< How to discuss Japan >

To regard Japan as a different thing, that is probably not wrong. Just at the same time, it is mischievous self-torture, otherwise it is mischievous self-confidence. One of the rare examples of escaping both is Masao Maruyama's job. In the class, we will learn the work of Maruyama focusing on how and why Maruyama saw more than what he saw.

OTR600B7

国際日本学合同演習

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

それぞれのゼミに属する学生が一堂に会して、ともに日本学について知見を広め、話題を共有する。

【到達目標】

国際日本学インスティテュートに在籍する修士課程学生（および博士後期課程学生で希望する者）が、国際日本学に関する共通の知識を得、互いの研究を知り、その土台の上で議論を深めることで互いに研鑽することを目標にする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

国際日本学インスティテュート修士課程に在籍する学生は 2 年間にわたって国際日本学合同演習を受講し、合計 4 単位を取得しなければならない。この授業は 3 種の企画から構成される。すなわち、

① 国際日本学入門：国際日本学研究に必要な「姿勢」とは何か、国際日本学研究の「論文」とはどういうものか、共同研修を行う。4 月 14 日に実施する。

② 講師による日本文化に関する講演（あるいは実演）：原則として 2 回実施する（5 月、10 月予定）。講演の細目については開講時に発表する。

③ 修士論文・博士論文中間発表会：国際日本学インスティテュートに在籍するすべての修士課程および博士後期課程の学生が、自己の研究活動の状況について報告し、他の学生からの質問と教授たちからレビューを受け、それを修士・博士論文に生かす。実施時期は博士後期 3 年が 6 月、修士 2 年が 7 月（2 回）、修士 1 年が 11 月（2 回）、博士後期 1・2 年が 12 月（2 回）。

国際日本学合同演習は、土曜日 5 時限および 6 時限を利用し、2 時限単位で実施される。

国際日本学合同演習は修士の学位を取得するために必要不可欠な授業である。2 年間にわたって、必ず履修登録し、単位を取得する必要がある。この授業の実施にかかわる細目は国際日本学インスティテュートの掲示板（大学院棟 3 階）、および国際日本学インスティテュート専攻室入り口に公示するので注意すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

通年

回	テーマ	内容
第 1 回	国際日本学入門	共同研修 4 月 13 日（土）5、6 時限に実施
第 2 回	国際日本学合同演習講演会①	未定 5 月 18 日（土）に実施予定
第 3 回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会①	博士後期 3 年 6 月 15 日（土）5、6 時限に実施
第 4 回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会②	修士 2 年 7 月 13 日（土）5、6 時限に実施
第 5 回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会③	修士 2 年 7 月 20 日（土）5、6 時限に実施
第 6 回	国際日本学合同演習講演会②	未定 10 月の土曜日（5、6 限目）に実施予定
第 7 回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会④	修士 1 年 11 月 9 日（土）5、6 時限に実施
第 8 回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会⑤	修士 1 年 11 月 16 日（土）5、6 時限に実施
第 9 回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会⑥	博士後期 1・2 年 12 月 7 日（土）5、6 時限に実施
第 10 回	国際日本学インスティテュート論文中間発表会⑦	博士後期 1・2 年 12 月 14 日（土）5、6 時限に実施

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・講演者によって参考文献が提示された場合はそれを読んでくる。
 ・中間発表会における配付資料の準備。

【テキスト（教科書）】

・国際日本学入門および講演会については、各講師が準備したものを授業時に配付する。
 ・中間発表に際しては、報告者は、学生委員会の指示に従い、A4 判 1 枚の資料を作成し、授業時に配付できるよう準備する。

【参考書】

国際日本学入門および講演会については、講師が事前に参考文献を指示することがある。

【成績評価の方法と基準】

出席態度（80%）、リアクションペーパーの内容（20%）

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【Outline and objectives】

Every student is supposed to give a presentation on his/her study and discuss the problems on Japanese Studies. The objective of this class is to share a variety of problems on Japanese Studies.

ASR500B7

世界の日本論と日本学 I

リネベ・アンドレ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋の日本論における著名な文献をもとに、日本論の歴史と、キーとなるコンセプトを検討する。そのうえで現代の日本学の可能性を考える。春学期にはルース・ベネディクトの名著『菊と刀』を精読し、ベネディクトの「文化の型」という方法論を検討する。

【到達目標】

- ・国際日本論のコンセプトとそのコンセプトの歴史を理解できる
- ・現代の日本学の可能性と、現代的な意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

- ・授業内の講読（「close reading」の方法による）
- ・授業内の発表
- ・レポート提出

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	イントロダクション	授業の概要、学習方法の説明
第 2 回	背景（1）	日本論の研究へのアプローチ
第 3 回	背景（2）	日本論の歴史
第 4 回	文献講読（1）	ベネディクトの『菊と刀』の評判と批判について；「菊と刀」を読む：第 1 章
第 5 回	文献講読（2）	『菊と刀』を読む：第 2 章
第 6 回	文献講読（3）	『菊と刀』を読む：第 3 章
第 7 回	文献講読（4）	『菊と刀』を読む：第 4 章
第 8 回	文献講読（5）	『菊と刀』を読む：第 5 - 6 章
第 9 回	文献講読（6）	『菊と刀』を読む：第 7 - 8 章
第 10 回	文献講読（7）	『菊と刀』を読む：第 9 章
第 11 回	文献講読（8）	『菊と刀』を読む：第 10 - 11 章
第 12 回	文献講読（9）	『菊と刀』を読む：第 12 章
第 13 回	文献講読（10）	『菊と刀』を読む：第 13 章
第 14 回	総括	レポートの締め切り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・授業内で指示した文献を読み、歴史的・思想史的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する
- ・授業の出席前に前回の授業のノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

- ・『菊と刀』の英語の原文はコピーを配布
- ・ベネディクト、ルース；長谷川松治・訳（2005）『菊と刀—日本文化の型』、講談社（講談社学術文庫 1708）。

【参考書】

- ・エドワード・W・サイド（1993）『オリエンタリズム』平凡社。
- ・Bayumi, M.; Rubin, A.(ed.). *The Edward Said Reader. New York: Vintage 2000.*
- ・船曳健夫（2003）『日本人論』再考』NHK 出版。
- ・青木保『日本文化論』の受容—戦後日本の文化とアイデンティティ—中央公論新社。
- ・Benedict, Ruth. *Patterns of Culture. Mariner Books 2013.*
- ・ルース・ベネディクト（2008）『文化の型』講談社。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点（30 %）
- ・授業内でのプレゼンテーション（20 %）
- ・レポート（50 %）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

- ・授業計画はあくまで計画であるため、適宜変更する可能性がある
- ・春学期・秋学期合わせての履修を推奨する

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世政治思想史
<研究テーマ>日本政治思想史

<主要研究業績> Sorais "Mitmenschlichkeit" (jin). Ein Auszug aus dem Benmei (1717). Übersetzt und annotiert, in: Japonica Humboldtiana, vol. 13 (2009): 5-25. ; Yamaga Soko on Urban Planning. Political Theory and the Challenge of Urban Government in Early Modern Japan" (submitted)

[Outline and objectives]

This course offers students an introduction into classical writings of Western Japanese studies. It is designed to give an overview of key concepts of Western discourses about Japanese culture and thought in historical perspective.

The summer course will focus on book "The Chrysanthemum and the Sword" (1946) by Ruth Benedict (1887-1948).

ASR500B7

世界の日本論と日本学Ⅱ

リネベ・アンドレ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋の日本論における著名な文献をもとに、日本論の歴史と、キーとなるコンセプトを検討する。そのうえで現代の日本学の可能性を考える。

秋学期には新渡戸稲造（にとべいなぞう）の名著『*Bushido-The Spirit of Japan*』（1900）を精読し、日本近代の武士道論とその西洋の受容について検討する。

【到達目標】

- ・国際日本論のコンセプトとそのコンセプトの歴史を理解できる
- ・現代の日本学の可能性と、現代的な意義などを説明することができる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

- ・授業内の講読（「close reading」の方法による）
- ・授業内の発表
- ・レポート提出

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概念、学習方法の説明
第2回	文献講読(1)	「序」と第1章
第3回	文献講読(2)	第2章
第4回	文献講読(3)	第3~4章
第5回	文献講読(4)	第5~6章
第6回	文献講読(5)	第7章
第7回	文献講読(6)	第8章
第8回	文献講読(7)	第9章
第9回	文献講読(8)	第10~11章
第10回	文献講読(9)	第12章
第11回	文献講読(10)	第13~14章
第12回	文献講読(11)	第15章
第13回	文献講読(12)	第16~17章
第14回	総括	総まとめ；レポートの締め切り

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・授業内で指示した文献を読み、歴史的思想史的背景について調べる
- ・プレゼンテーションを準備する
- ・授業の出席前に前回の授業のノートを読み返し、復習する

【テキスト（教科書）】

- ・『*Bushido*』の英語の原文はコピーを配布
- ・新渡戸稲造；矢内原忠雄・訳（2018）『武士道』岩波書店（岩波文庫・青1181-1）。

【参考書】

- 苅部直・片山龍（2010）『日本思想ハンドブック』
- 和辻哲郎（2011）『日本倫理想史』、4巻、岩波書店。
- 丸山眞男（2012）『忠誠と叛逆』筑摩書房。
- 相楽亨（2004）『武士の思想』ペリかん社。
- 山本博文（2001）『『業隠』の武士道—誤解された「死狂ひ」の思想』PHP新書。
- 官能覚明（2006）『武士道の逆襲』講談社現代新書。
- 笠谷和比古（1997）『士（さむらい）の思想—日本型組織と個人の自立』岩波書店。
- 佐伯真一（2004）『戦場の精神史—武士道という幻景』日本放送出版協会。

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点（30%）
- ・授業内でのプレゼンテーション（20%）
- ・レポート（50%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

- ・授業計画はあくまで計画であるため、適宜変更する可能性がある
- ・春学期・秋学期合わせての履修を推奨する

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>日本近世政治思想史
- <研究テーマ>日本政治思想史
- <主要研究業績>

Sorais "Mitmenslichkeit" (jin). Ein Auszug aus dem Benmei (1717).
Übersetzt und annotiert, in: Japonica Humboldtiana, vol. 13 (2009):
5-25. ; "Yamaga Soko on Urban Planning. Political Theory and the
Challenge of Urban Government in Early Modern Japan" (submitted)

[Outline and objectives]

This course offers students an introduction into classical writings of
Western Japanese studies. It is designed to give an overview of key
concepts of Western discourses about Japanese culture and thought in
historical perspective.

The winter course will focus on the book "Bushido - The Spirit of
Japan" (1900) by Nitobe Inazo (1862-1933) and examines the conceptual
foundations of the modern discourse about samurai ethics in Japan and
in the West.

ASR500B7

アジアと日本 I

王 敏

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国文化に学び、輸入した漢字に国字、平仮名・片仮名まで加えて表現の幅を広げた日本。日本製品を使い、漫画・アニメに親しんで、「萌え」「かわいい」を逆輸入する中国。両国の交流と相互理解はますます進んでいるように見えるが、日本企業で働くアジア人の離職率が高い。一方、アジア、中国人の考え方を知らないことで悩む日本人が増えていると聞く。「同文同種」の底にあるのは実は相互誤解かもしれない。季語・季題、謝罪会見、熟年離婚——等々、両国の類似性よりそれぞれの独自性に着目した現場に役立つ比較文化の新展開を、講師の名著『日本と中国 相互誤解の構造』（中公新書）をテキストに講じる。

【到達目標】

- ①異文化の発見
- ②日本的とは・中国的とは
- ③文化の受容と発信力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

日本の文化、中国の文化、アジアの文化を再考する機会になればというのが希望です。学生の皆さんはなんでもいいですから一つ、テーマをもって受講してほしいものです。わかりやすい、視覚的な授業になるよう心がけ、パワーポイントを使います。疑問が浮かびましたら質問ください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第 1 回	事例研究 1	重陽・日中文化関係の再発見
第 2 回	事例研究 2	和魂漢才の知恵
第 3 回	事例研究 3	戦前の中国人留学生と翻訳革命
第 4 回	事例研究 4	美意識——日本とアジア
第 5 回	事例研究 5	「やさしさ」と「厳しさ」
第 6 回	事例研究 6	表現形式の違い
第 7 回	事例研究 7	自然感覚の違い
第 8 回	事例研究 8	季節文と魯迅の『两地書』そして『詩経』『呂氏春秋』
第 9 回	発表と討論 1	未完成の課題・同文同種への問いかけ
第 10 回	発表と討論 2	代表的な模索
第 11 回	事例研究 9	比較文化の『武士道』
第 12 回	事例研究 10	日本文化の二重性と『菊と刀』
第 13 回	事例研究 11	日本文化の発信・宮沢賢治
第 14 回	発表と討論 3	日中文化の未来・相互補完の可能性

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当者は事前に報告内容を整理し、日本語ペーパーを作成する。

【テキスト（教科書）】

『日本と中国 相互誤解の構造』（中公新書）

【参考書】

授業内で指示。

【成績評価の方法と基準】

成績の評価においては、受講姿勢（50%）および課題作業の履行の努力（50%）を基準とする。

【学生の意見等からの気づき】

学生による授業改善アンケートからは、意思疎通の重要性が感じられた。これまで以上に、学生それぞれの個性にあわせた指導を行っていきたい。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクタ

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較文化

<研究テーマ> 日本における治水神・禹王信仰の研究 アジアの文化関係研究 比較文化研究 宮沢賢治研究

<主要研究業績>

90年に中国優秀翻訳賞、92年に山崎賞、97年に岩手日報文学賞賢治賞を受賞、2009年に文化長官表彰。

『禹王と日本人』（NHK出版）『周恩来たちの日本留学』（三和書籍）『宮沢賢治シルクロードに翔ける夢』（岩波書店）『漢魂と和魂』（中国・世界知識出版社）

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語） I

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦学意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第2回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第3回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：伝達の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第4回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚と認識の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第5回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：段落構成	文法：使役・被害等の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第6回	文法：基本動詞の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：存在の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第7回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現① 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第8回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：変化の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第9回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：時の表現② 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第10回	文法：分詞形容詞と形容詞構文の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：叙述の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第11回	文法：名詞相当語句の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：「もの・こと」の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第12回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1段落）	文法：比較の表現① 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第13回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現② 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第14回	文法：数量表現の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：数量の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1 英語による簡単な自己紹介を用意

2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出

3～14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など<主要研究業績> 【英語関連】

① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (pipa / biwa) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

② “Pitch, scale and mode in early gagaku and shōmyō.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

③ “Court and Buddhist music (1): history of gagaku and shōmyō” / “Court and Buddhist music (2): music of gagaku and shōmyō.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., *The Ashgate Research Companion to Japanese Music*. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline and objectives】

This class in academic writing in English aims to increase the students' writing skill by means of two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they themselves have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text. Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

BSP500B7

国際日本学論文作成実習（英語）Ⅱ

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院レベルの英語読解・表現力を主題とする。

【到達目標】

人文科学系の英文文献を正確に読み、および誤解を招かない英文で論文要旨を作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

国際日本学を拠点に研究しようとする者には、正確な日本語で文章を書く能力はもちろんのこと、他の言語で情報と知識を獲得し、また日本について自分自身の紡いだ言葉で自国語や外国語で説明する能力も求められる。いずれは中国語や韓国語の重要性が増してくるだろうが、国際日本学の現状からして当面においては英語の力が最も重要と思われる。本授業では、専門分野の英文文献を正確に読む能力と、自分自身が作成した論文の要旨を英語で作成する能力を身に付けてもらうのが主たる目標となる。授業は、教員による講義、及び全員での討論を織り交ぜて行なう。3回目以降、苦学意識を克服して正確な英語を書くための文法解説、及び受講者の作成した英文要旨等の添削・評価が中心になる。受講者は作成した英文を事前に提出し、授業後には誤りなどの指摘を受けて訂正したものを再提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業履修の確認 自己紹介、授業の進め方の説明
第2回	英語の日本学	日本学関係の英文著作・論文の検索法などに関する講義
第3回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨の整理	文法：感情の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第4回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・英語の論理構造	文法：感覚・認識・判断の表現 作文：教員が選んだ文章（和文）の英文要旨作成
第5回	文法：接続の用法 自由英作文：段落構成	文法：原因・理由の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（1段落）
第6回	文法：接続の用法 自由英作文：文章構成（複数段落）	文法：目的・程度・様態の表現 作文：教員が指定したテーマに関する自由英作文（3段落）
第7回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：譲歩・仮定・条件の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第8回	文法：基本動詞の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：許可・勧誘・提案の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第9回	文法：名詞修飾の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：詞修飾の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第10回	文法：品詞転換の技法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成	文法：品詞転換の表現 作文：各自が選んだ論文の英文要旨作成
第11回	文法：強調の用法 英文要旨作成：論旨整理	文法：強調の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第12回	文法：否定の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（1段落）	文法：否定の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第13回	文法：比較の用法 英文要旨作成：論旨整理・文章構成（複数段落）	文法：比較の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成
第14回	文法：時・態の用法 英文要旨作成：文章構成（仕上げ）	文法：時と受身の表現 作文：各自の研究テーマに関する要旨作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 1 英語による簡単な自己紹介を用意
- 2 各自の研究テーマに関する紹介文（英文 100 語前後）及びキーワードのリストを事前提出
- 3～14 文法：解答を用意。作文：課題を事前提出、授業後訂正版を再提出

【テキスト（教科書）】

担当教員作成のテキストとプリントを配付する。

【参考書】

小田麻里子・味園真紀著『英語論文すぐに使える表現集』（ベレ出版、1999）

【成績評価の方法と基準】

平常点 30 %、課題 70 %。各自が作成した英文課題、再提出のものを中心に評価する。言い換えれば、授業で指導を受けて、誤解を招かない正確な英文を書く力がどれだけ付いたかが評価の鍵を握る。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【その他の重要事項】

科目名でわかる通り、これは国際日本学論文作成実習（英語）Ⅰの続きとして作成された内容であり、Ⅰの単位をとってからの履修を勧める。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績> 【英語関連】

① “Issues in the interpretation of notation for East Asian lutes (pipa / biwa) as preserved in scores of the eighth to twelfth centuries.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

② “Pitch, scale and mode in early gagaku and shōmyō.” (『日本音楽史研究』8、上野学園大学日本音楽史研究所、2012)

③ “Court and Buddhist music (1): history of gagaku and shōmyō” / “Court and Buddhist music (2): music of gagaku and shōmyō.” (Tokita, Alison, and David Hughes, ed., The Ashgate Research Companion to Japanese Music. Hants [U.K.]: Ashgate Publishing Ltd, 2008.)

【Outline and objectives】

This class in academic writing in English aims to increase the students' writing skill by means of two approaches. The first half of each class comprises remedial treatment of English grammar and sentence structure, focussing on a different aspect of English grammar each week. There is a textbook edited by the instructor, distributed in class free of charge. In the second half of each class, students are divided into groups and asked to examine texts of between one and three paragraphs in length that they themselves have drafted and submitted in advance. The instructor distributes versions of these texts with indications of parts that need to be corrected. He then lets the students discuss the problems and possible solutions, before assisting the students in getting the texts into their final form. Each student then submits a final, revised version of their own text. Grading is based on each student's portfolio of revised versions.

OTR600B7

国際日本学演習 I

伊海 孝充

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本講義では、江戸時代までに編まれた能（謡曲）の注釈書を読んでいく。能の作品研究をしていくためには、様々な能楽資料を使いこなさなければならない。また、能の詞章（謡本）だけを吟味するだけではなく、現代までの注釈書類も参照する必要がある。これらの中には言葉の解釈だけでなく、作品の趣向に関わるような興味深い問題提起も含まれている。この資料を通して、能の作品研究の基礎を学んでいく。

【到達目標】

本講義では、能（謡曲）の注釈書の詳細な分析を通して、能楽の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とする。自分自身の研究を進めるためには、論文で論じるための問題点を見つけ方、それを掘り下げるための手法を身につける必要がある。本講義ではこの二点を意識して、当該資料を分析していく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	受講生の自己紹介と半期の計画を相談。
第2回	能の作品研究概説	主要な作品研究の先行論文を読み、研究手法を概説する。
第3回	能楽資料概説①	能の作品研究に用いる資料を概説する（謡本編）。
第4回	能楽資料概説②	能の作品研究に用いる資料を概説する（注釈書編）。
第5回	「養老」①	担当者による資料分析。
第6回	「養老」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第7回	「頼政」①	担当者による資料分析。
第8回	「頼政」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第9回	「野宮」①	担当者による資料分析。
第10回	「野宮」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第11回	「班女」①	担当者による資料分析。
第12回	「班女」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第13回	「野守」①	担当者による資料分析。
第14回	「野守」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に能楽鑑賞に行くことを勧める。能楽だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってみよう。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%
講義での発言 30%
レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

能楽研究は特殊な知識を必要とするが、専門外の学生もついてこられるようフォローしていく。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学。特に能楽。

<研究テーマ> 能の作品研究。謡本研究。

<主要研究業績>

『切合能の研究』（槍書店、2011年）。『玉屋謡本の研究（4）玉屋謡本の節付表記をめぐる試論』（『能楽研究』42号、2018年3月）

【Outline and objectives】

In this lecture, we will read the commentary on Noh (Kayo) that was edited by the Edo period. In order to do research on the work of Noh, we have to master various Noh play materials. Moreover, it is necessary not only to examine only the lyric chords of Noh (utaibon), but also to refer to annotation documents up to the present age. Among these, not only interpretation of words but also interesting questions related to ideas of the work are included. Through this material, we will learn the fundamentals on study of Noh.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

伊海 孝充

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期同様に江戸時代までに編まれた能（謡曲）の注釈書を用いた能の作品研究を行なっていく。秋学期からの出席者を考慮し、まず前期に学んだ能の作品研究の基礎を確認した上で、当該資料を用いた作品研究を行なっていく。

【到達目標】

本講義では、春学期同様に能（謡曲）の注釈書の詳細な分析を通して、能楽の基本的知識と研究手法を正確に理解することを目標とするが、それが一定程度身に付いた出席者には他の資料も紹介し、主要な能楽資料に関する知識も広げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式によって進める。参加者は当該資料から興味のある曲を選択し、資料分析とともに作品解釈を行なっていく。また発表者は自分自身の問題意識を提示してもらい、参加者で討論していく。専門外の者は、別な方法での発表も考える。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	春学期発表分の振り返り。秋学期からの参加者への概要説明。
第2回	「蟻通」①	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第3回	「蟻通」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第4回	「清経」①	担当者による資料分析。
第5回	「清経」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第6回	「西行桜」①	担当者による資料分析。
第7回	「西行桜」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第8回	「盛久」①	担当者による資料分析。
第9回	「盛久」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第10回	「鞍馬天狗」①	担当者による資料分析。
第11回	「鞍馬天狗」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第12回	「舟弁慶」①	担当者による資料分析。
第13回	「舟弁慶」②	担当者による資料を用いた作品研究の発表。
第14回	総括	謡曲の注釈書のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自主的に能楽鑑賞に行くことを勧める。能楽だけでなく、歌舞伎・人形浄瑠璃にも観劇に行ってほしい。

【テキスト（教科書）】

授業内に指示する。

【参考書】

授業内に指示する。

【成績評価の方法と基準】

講義での発表 50%
講義での発言 30%
レポート 20%

【学生の意見等からの気づき】

注釈書だけでなく、できる限り多くの能楽資料を紹介する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学。特に能楽。
<研究テーマ> 能の作品研究。謡本研究。
<主要研究業績>

『切合能の研究』（繪書店、2011年）。『玉屋謡本の研究（4）玉屋謡本の節付表記をめぐる試論』（『能楽研究』42号、2018年3月）

【Outline and objectives】

As well as the spring semester we will do research on annotations of Noh edited by the Edo period. Considering attendees from the fall semester, we will first conduct a work research using the materials after confirming the fundamentals of the work of Noh studied in the previous term.

BSP500B7

日本語論文作成実習Ⅰ

山中 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。専門分野の論文を書くための日本語表現や、明確な文章を書くための論理構造を身につけることが目的です。

【到達目標】

- ①助詞や自動詞・他動詞等、基礎的な文法のミスを減らす。
- ②論文にふさわしい文体を維持する。
- ③論理展開の明確な文章が書けるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として教室でディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業のガイダンス	授業の進め方や参考書の紹介。受講者の専門分野の確認。
第2回	論文の文体	論文にふさわしい文体を学ぶ。
第3回	ねじれない文	主部と述部が論理的に対応している文を書く。
第4回	間違いやすい文法事項のチェック① 短文作り	留学生が間違いやすい助詞や自動詞他動詞、受け身の言い方などを確認しながら短文を作る。
第5回	間違いやすい文法事項のチェック② 添削とフィードバック	前回の続き。受講者が書いて教員に送った例文を材料にして間違いやすい箇所を確認。
第6回	文章の要約① 短めの文章の要約	短い文章を読み、表現を学ぶ。要約を宿題にして次回までに提出。
第7回	文章の要約② 添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第8回	文章の要約③ 長めの文章の要約	第6回より長めの文章を教室で読み、理解したうえで、要約を宿題にし、次回までに提出。
第9回	文章の要約④ 添削とフィードバック	受講者の要約例を材料に、グループに分かれ、文法的な間違いのチェックやより良い要約の仕方を学習。
第10回	条件を比べる①	いくつかの条件を比べて優劣や差異を述べる文を書くため、材料となる文章を読んで理解する。グループディスカッションで予想される反論を知る。
第11回	条件を比べる②	学生が自宅学習で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分等を集めて全員で検討する。
第12回	要約とコメント①	授業では第8回よりもさらに長い文章を読んで表現を学び、各自がその要約と自分のコメントを書いて提出する。
第13回	要約とコメント②	提出された要約とコメントの例を材料に、グループに分かれ、文法的な誤りをチェックし、よりよい表現の仕方を学ぶ。
第14回	まとめ	学習した事項の復習とまとめ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

教室で学んだ表現や語彙を辞書等で調べ直し、理解を確実にする。宿題の作文を毎回書き、期限内に提出する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】

二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（東京大学出版会、2009年）

【成績評価の方法と基準】

作文の提出率（60%）とその成績（40%）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

レベルの高い学生には初めの文法事項の確認は退屈なことがあるようです。実際の学生のレベルを見て、特にレベルの高い学生がいる場合は個別に対処します。

【その他の重要事項】

自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。
作文の添削はメールでおこないます。PCでメールのやりとりができるような環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究
<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
<主要研究業績>

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93巻3号・2016年3月

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐって—」『文学』16巻2号・2015年

★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著）檜書店 2009年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to acquire Japanese language ability to write academic papers in Japanese. The students will read a lot of Japanese articles and write many essays.

BSP500B7

日本語論文作成実習Ⅱ

山中 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では日本語の文章を多く読み、受講生には多くの作文を書いてもらい、添削していきます。自分の研究内容について論文を書く力を身につけることが目的です。

【到達目標】

- ①論文にふさわしい語彙や文体を身につける。
- ②各自の論文作成に必要な表現を数多く知る。
- ③自分が間違いやすい文法事項を知る。
- ④わかりやすい論理展開ができるよう、接続詞の使い方や段落のまとめ方を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

作文をメール（添付ファイル）で提出してもらい、添削してそれぞれに返すとともに、授業ではみなさんの文章から「よくある間違い」をピックアップして説明します。作文の準備として教室でディスカッションをおこなうこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	論文にふさわしい表現を確認する	春学期の復習も兼ねて、論文にふさわしい表現を確認。宿題は、学習した表現を使った短文作り。
第2回	論文にふさわしい表現—短文の添削とフィードバック	提出された短文を材料に、文法的な誤りや、使えるケース・使えないケースを確認。
第3回	文章の論理構造① 接続語の整理	論理的な文章を書くために、文と文を適切な接続語でつなぐ練習をする。
第4回	文章の論理構造② 練習問題	前回の続き。練習問題を用いて、文章の論理構造を確認する作業も行う。
第5回	文章の要約とコメント	前期よりも長い文章を読み、内容を要約したうえでコメントを付ける。グループディスカッションにより異なる意見を知ったうえでコメントに活かす。
第6回	文章の要約とコメント—要約例の添削とフィードバック	受講者の要約例とコメント例を材料に、間違いやすい表現のチェックをし、要約文やコメントのブラッシュアップをめざす。
第7回	統計資料を見て書く	表やグラフに基づいてことがらを述べる際の表現を学ぶ。
第8回	絵や写真を見て書く	目の前にある絵や写真から見て取れることを書く際の表現（特に文末表現）を学ぶ。
第9回	比較して書く① ディスカッション	複数の事象を比べてその内容を叙述し、優劣や順位を述べる文を書くため、材料となる資料を用いて討議し、意見の相違を確認する。
第10回	比較して書く② 添削とフィードバック	学生が自宅で書いて提出した文章を材料に、文法的な間違いや表現の不十分な部分を集めて検討。
第11回	比較して書く③ 予想される反論	優劣・順位について他のメンバーの異なる意見を踏まえたうえでそれに再反論する文章を書く
第12回	意見を述べる① 材料となる文章の読解	教室では論文作成に有益な表現や文体を学ぶ。読んだ文章について、3～4段落程度の意見を説得力のある形で書く（宿題）。
第13回	意見を述べる② 添削とフィードバック	提出された文章を材料に、間違いやすい表現や論理展開を確認する。
第14回	まとめ	全体に間違いやすい文法事項の確認と復習。各学生のウイークポイントの確認。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

書く練習自体は教室ではあまりできませんから、宿題をきちんとやって期限内に提出してください。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは使いません。資料は授業中に配布します。

【参考書】

二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（東京大学出版会、2009年）

【成績評価の方法と基準】

作文の提出率（60%）とその成績（40%）によって総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

レベルの高い学生には初めの文法事項の確認は退屈なことがあるようです。実際の学生のレベルを見て、特にレベルの高い学生がいる場合は個別に対処します。

【その他の重要事項】

自分のレベルにあったクラスで学べるよう、授業開始前のレベルチェックは必ず受けてください。

作文の添削はメールでおこないます。PCでメールのやりとりができるような環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究
<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
<主要研究業績>

★「能〈通小町〉遡源」『国語と国文学』93巻3号・2016年3月

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐって—」『文学』16巻2号・2015年

★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著）檜書店 2009年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is to acquire Japanese language ability to write academic papers in Japanese. The students will read a lot of Japanese articles and write many essays.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A I

幸田 佳子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学で必要なレポートや論文の書き方を学ぶ。

【到達目標】

レポートに必要な書き言葉のルールを学ぶ。

段落構成を習得する。

文章全体の章立てで構成を習得する。

参考資料の引用の仕方を学ぶ。

本論で使う文章展開の方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

レジュメプリントの導入は講義形式だが、調べたことや自分の文は発表してもらおう。提出後の添削してから、みんなで直しの検討。よくかけたモデル文をみる。共通の間違いを直していく。質疑応答。直しの提出はPCでメール提出とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	自己の研究テーマ紹介	授業のガイダンス クラス内で研究テーマを話す。
第2回	書き言葉のルール①	話し言葉と書き言葉 丁寧体と普通体 文体について調べる
第3回	書き言葉のルール②	物事視点にして、主語が変わること。 名詞句の使い方を見る。文章を書いてみる。
第4回	書き言葉のルール③	構成を立てながら一段落の文を書く。
第5回	段落内の構成	論の展開 逆接と添加 構成を考えながら、文を書く。
第6回	二段落の構成の展開	二段落で事実と意見の文を書く。
第7回	現象などの事実と意見	アウトラインをpptにして、要約を発表。その後文章化する。
第8回	引用の意味と目的を学ぶ。 その表現方法を見る。	モデル例の引用の仕方を見る。資料の要約の仕方とそのあとの引用方法まで、行う。
第9回	引用—先行研究の提示	自分の専門の研究の本の要約紹介をする。
第10回	引用—事実と意見文	事実や現象に引用を入れる。
第11回	論証の仕方①	事実、意見、理由の構成を立てて、文を書いていく。
第12回	論証の仕方②	意見と理由を説得できるか検討する。 統計資料を使って文を書く。
第13回	論証の仕方③	与えられたテーマで現象、意見、理由の構成をたてて、文章を書く。
第14回	まとめ	みんなの文章の推敲と評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に書き終えなかったものは、次週までに提出。書き直しは、PCでメール提出する。授業の終わりに必要な資料の検索を指示するので、調べておくこと。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。コピーとレジュメを配布する。

【参考書】

『留学生のためのここが大切文章表現のルール』石黒圭 スリーエーネットワーク

『留学生のための論理的な文章の書き方』二通信子 スリーエーネットワーク

『大学で学ぶ日本語ライティング』佐々木瑞枝 The Japan Times

『Good Writing へのパスポート』田中真理 くらしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50%（遅れた場合は8割となる） 学期末のレポート 30%（既習の到達度から見る） 平常点 20%（授業参加、発表、質問など）

【学生の意見等からの気づき】

早口で、先生の出した指示がわからないという指摘を受けたので、意識してゆっくり話すようにする。板書の字がわかりづらいと言われ、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】

必要時にパソコン持参などの指示

【その他の重要事項】

提出遅れは 80%になる。期限内に遅れないこと。
 欠席した場合は、クラスメートに聞いて補っておくこと。特に提出物は注意してください。
 出席は全出席が前提。5 回以上の欠席は不可とする。

【日本語学】

<専門領域>日本語学
 <研究テーマ>文法と日本語教育
 <主要研究業績>

- ①『「わけがない」「わけではない」「わけにはいかない」について』1994『語学教育研究論叢』11号 大東文化大学
- ②「副詞「一応」について」2002『語学教育研究論叢』19号 大東文化大学
- ③「接尾辞「がち」「ぎみ」について」2011『語学教育研究論叢』28号 大東文化大学
- ④2016「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」『語学教育研究論叢』34号 大東文化大学

【Outline and objectives】

This class learns how to write necessary report, article at a university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A II

中島 久朱

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを身につける。
 段落構成の仕方を身につける。
 レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
 論理的な文章の構成力を身につける。
 適切な参考資料の引用方法を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	授業概要の説明
第 2 回	文体と書き言葉①	日本語の表記 書き言葉にふさわしい文体
第 3 回	文体と書き言葉②	書き言葉にふさわしい語と表現
第 4 回	段落構成①	文章の構成
第 5 回	段落構成②	段落内容の構成
第 6 回	課題の提示①	課題の提示の展開とパターン
第 7 回	課題の提示②	問題の指摘と研究行動の提示のための 文型と表現
第 8 回	目的の提示①	問題の提示の展開とパターン
第 9 回	目的の提示②	研究テーマと先行研究の紹介、研究の 目的を示すための文型と表現
第 10 回	定義と分類①	研究方法の説明、定義と分類のための 文型と表現
第 11 回	定義と分類②	用語の定義と考察の対象の選択の練習
第 12 回	図表の提示	図表の提示のための文型と表現 図表を使った説明の練習
第 13 回	引用の仕方	適切な引用の仕方 参考文献の引用の練習 期末レポートのテーマの選定とアウト ラインの作成
第 14 回	レポート作成	レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をしますので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語②作文編』アルク
 アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語④論文作成編』アルク

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40%、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内での作文時間を可能な限りとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC
 作成したデータを保存する USB メモリ等

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、原点の対象となる。
 欠席する場合は、必ず連絡をし、欠席回の内容を確認して次週の授業までに自習してくること。
 欠席が5回を超えた場合は不可とする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学
 <研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策
 <主要研究業績>

中島久朱 (2008)「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱 (2008) 「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第 14 号

中島久朱 (2009) 「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会 20 周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱 (2011) 「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline and objectives】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A Ⅱ

幸田 佳子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学で必要なレポートや論文の書き方を学ぶ。

【到達目標】

レポートに必要な書き言葉のルールを習得する。
段落構成を習得する。
文章全体の章立てをつけた構成方法を習得する。
参考資料の引用を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

レジュメプリント導入後、調べたことやよくできた作文等は発表してもらう。課題提出後、添削した作文の書き直しを行う。共通の間違いや表現を取り上げる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	春学期の復習	秋学期のガイダンス
第 2 回	表現の方法①	定義の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第 3 回	表現の方法②	分類の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。
第 4 回	表現の方法③	原因・理由の意味、表現等を学ぶ。簡単な文を書く。
第 5 回	表現の方法④	結果の意味、表現などを学ぶ。簡単な文を書く。
第 6 回	本論の展開の方法を見つめる。	モデル文でどんな展開をしているかみる。その後各自の論の展開方法を考える。
第 7 回	レポートの語彙表現	語彙や決まり句を調べてみる。
第 8 回	レポート作成の流れ	全体をとらえてから、一つずつ見ていく。
第 9 回	問題提起と目標規定	資料を調べる。メモの取り方を指導。
第 10 回	アウトラインの作成	自分レポートの構成を考えて、要点を ppt で表す。発表
第 11 回	アウトラインから文章化	各自のアウトラインの評価。良いものを見せる。
第 12 回	序章の段落の書き方の提示本論の論証の仕方	段落の構成と常套句を使って書く。
第 13 回	結論、参考文献の書き方	全体を仕上げる。
第 14 回	全員で読み合わせ、推敲	各自の評価、他者の文を読んで評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中書き終えなかった物は次週までに提出。書き直しはメール提出すること

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使用しない。

【参考書】

『留学生のためのここが大切文章表現』 石黒圭 スリーエーネットワーク
『留学生のための論理的な文章書き方』 二通信子 スリーエーネットワーク
『大学で学ぶ日本語ライティング』 佐々木瑞枝 *The Japan Times*
『Good Writing へのパスポート』 田中真理 くらしお出版

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物 50% 学期の末のレポート 30% 平常点 20%

【学生の意見等からの気づき】

知識を深めるために、話し合いも行うようにする。添削の字がわかりづらいとの指摘があったので、丁寧に書くようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン持参については事前に指示する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本語学
<研究テーマ> 文法と日本語教育
<主要研究業績>

- ① 「『わけがない』『わけではない』『わけにはいかない』について」 1994 『語学教育研究論叢 11』 大東文化大学
- ② 「副詞『一応』について」 2002 『語学教育論叢』 19 号 大東文化大学
- ③ 「接尾辞『がち』と『ごみ』について」 2011 『語学教育論叢』 28 号 大東文化大学
- ④ 「教師主導型から活動型授業への改善の考察—脱タスクを目指して—」 2012 年度 web 版実践研修フォーラム報告

- ⑤「活動型授業への展開」2014『教育推進開発機構紀要』5号 國學院大學
 ⑥「日本語の中上級クラスにおける論文作成指導とその問題点」2016『語学教育研究論叢』第34号

【Outline and objectives】

This class learns how to write necessary report, article at a university.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 A IV

中島 久朱

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを学ぶ。
 段落構成の仕方を学ぶ。
 レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
 論理的な文章の構成力を身につける。
 適切な参考資料の引用方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
 あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	変化の形容①	変化を表す図表の提示のための文系と表現
第2回	変化の形容②	データの説明と分析の練習
第3回	対比と比較①	データの対比と比較のための文系と表現
第4回	対比と比較②	データからわかる事実の対比と比較の練習
第5回	原因の考察①	データが表す事実の原因の考察と予測のための文型と表現
第6回	原因の考察②	データを使用した原因の考察の練習
第7回	列挙	要点の列挙のための表現
第8回	同意と反論①	他者の意見についての同意と反論のための文型と表現
第9回	同意と反論②	論述分の引用とそれに対する同意と反論の練習
第10回	帰結①	筆者自身の見解を表す表現
第11回	帰結②	断定の度合いと使い分けの練習
第12回	結論の提示①	結論を述べるための文型と表現
第13回	期末レポート作成準備	期末レポートのテーマの選定とアウトラインの作成
第14回	期末レポート作成	期末レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語②作文編』アルク
 アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語④論文作成編』アルク

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40%、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

本授業は文章作成能力を高めることを目的とするため、授業時間内でも可能な限り作文作業の時間をとるようにしています。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用する PC

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
 授業内で書き上げた文章は、PCで清書して提出すること。
 欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してこようこと。
 欠席が5回を超えた場合は不可とする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学
 <研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策
 <主要研究業績>

中島久朱(2008)「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱 (2008) 『イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育』、『国際教育』第 14 号

中島久朱 (2009) 『英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育』、『日本国際教育学会 20 周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱 (2011) 『現代イギリスの多文化主義と社会統合 — 公教育における多様性の容認と平等の問題 —』、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline and objectives】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎 B I

高野 愛子

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

大学院で研究する上で必要な日本語の学術的文章表現について学ぶ。

【到達目標】

- (1) 論文らしい文体の日本語が書けるようになる。
- (2) 正確な文法・表現で書けるようになる。
- (3) 様々な機能語・接続表現が使えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、基本的な文法・表現について学習しながら、論文を書く際に必要なことを確認し、練習する。随時、決められたトピックに沿った文章 (400-600 字) を書き、提出する。添削された作文は、返却後 word 等で清書し、添付ファイルでメール提出する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1 回目	研究テーマに関する表現	各自の研究テーマについて書く。
2 回目	文章・文体の種類	論文らしい文体について学ぶ。
3 回目	辞書の使い方	適切な語を選択するための辞書の使い方について。
4 回目	作文実践 1	資料をもとに、事実文・説明文を書く。
5 回目	表記の仕方	ひらがなと漢字のバランス、カタカナについて学ぶ。
6 回目	助詞の使い方	間違いやすい助詞について学ぶ。
7 回目	文末表現の使い分け	意見を述べる文末表現を学ぶ。
8 回目	作文実践 2	資料をもとに、説明文・意見文を書く。
9 回目	言葉の形の使い分け	形容詞・副詞など形の使い分けを学ぶ。
10 回目	自動詞・他動詞・受け身	論文らしい動詞の表現を学ぶ。
11 回目	専門用語の選び方	研究に特有な専門用語を確認する。
12 回目	呼応表現	ペアになる呼応表現について学ぶ。
13 回目	引用の仕方	適切な引用表現・文献の書き方について学ぶ。
14 回目	作文実践 3	事実・意見・引用を適切に書き分ける。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

課題ごとにそのテーマについて下調べをしたり、資料を準備する。また、自分の研究テーマに関連した文章も書くので、常に専門書や論文を読んで知識や表現を蓄えておく。添削された作文は、word 等で清書し、返却後一週間以内に添付ファイルでメール提出する。

【テキスト (教科書)】

テキストは使用せず、毎回資料を配布する。

【参考書】

石黒圭・筒井千絵『留学生のための ここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク (2009)

二通信子・他『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会 (2009)

アカデミック・ジャパニーズ研究会『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語 ③ 論文読解編』アルク (2015)

アカデミック・ジャパニーズ研究会『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語 ④ 論文作成編』アルク (2015)

【成績評価の方法と基準】

作文：40% 宿題：20% 平常点：20% 期末試験：20%

【学生の意見等からの気づき】

実際に書かれた良い例・不適切な例を紹介する予定。討論の時間も設けたい。

【学生が準備すべき機器他】

大学貸与のノート PC、または各自のノート PC を持参すること。

【その他の重要事項】

秋学期開講 (日本語論文作成基礎 B III) と合わせての履修が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本語教育学

<研究テーマ> 文体論

<主要研究業績>

・「日本語教育における文体指導 用語の扱われ方をめぐる諸問題」2011 年 3 月 (大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第 28 号)

・「レポート・論文の文体に関する学習者の認識 - 許容範囲を探るために -」2011 年 3 月 (東京外国語大学『留学生日本語教育センター論集』第 37 号)

・「接続詞『だから』をめぐる文体差」2012 年 3 月 (東京外国語大学『留学生日本語教育センター論集』第 38 号)

・「程度副詞『ちょっと』をめぐる文体差」2016年3月（大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第33号）
 ・「和語・漢語をめぐる文体差－『すべて／全部』の場合－」2016年3月（大東文化大学『外国語学部学会誌』第45号）
 ・高野愛子・上村圭介「レジスター別出現頻度に基づく順接接続詞の文体差の評価－現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）の用例分析から－」2017年3月（大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第34号）
 ・高野愛子・石田恵里子「日本語学習者の文章表現にみられる伝聞『そうだ』の分析－論説文引用マーカ－としての文体的適切性－」2017年3月（東京外国語大学『留学生日本語教育センター論集』第43号）
 ・科研費（2017～2018年度）：挑戦的研究（萌芽）課題番号17K18489 研究代表者「類義表現のレジスター別文体的特徴に関する研究」

【Outline and objectives】

To acquire competence in writing academic reports and papers in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎B II

中島 久朱

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを学ぶ。
 段落構成の仕方を学ぶ。
 レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
 論理的な文章の構成力を身につける。
 適切な参考資料の引用方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業内容の説明
第2回	文法・文型 助詞の使い方①	「で」と「を」 「を」と「に」 「を」と「が」
第3回	文法・文法 助詞の使い方②	複合助詞 「は」と「が」
第4回	言葉の形の使い分け①	適切な形の選択
第5回	言葉の形の使い分け②	時間表現
第6回	自動詞・他動詞	自動詞と他動詞の形のルール 自動詞と他動詞の使い分けのルール
第7回	受身	受け身表現の使い方のルール
第8回	呼応	呼応表現の使い方
第9回	文末表現	文末表現の調整
第10回	文字・表記①	ひらがなと漢字の使い分け カタカナ表記のルール
第11回	文字・表記②	漢字の選択と誤変換 読点の打ち方
第12回	文体と書き言葉①	書き言葉らしさ 表現のかたさ
第13回	文体と書き言葉②	意味の似ている表現 名詞化、する動詞化 専門用語の選び方
第14回	ミニ・レポート作成	ミニ・レポート作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で出された課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出する。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

石黒圭・筒井千絵「留学生のためのここが大切文章表現のルール」スリーエーネットワーク
 佐々木瑞江、細井和代、藤尾喜代子「大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで」The Japan Times

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40%、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。
 文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用するPC

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
 授業内で書き上げた文章は、PCで清書して提出すること。
 欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してこること。
 欠席が5回を超えた場合は不可とする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学
 <研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策

<主要研究業績>

中島久朱 (2008) 「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1
 中島久朱 (2008) 「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第14号
 中島久朱 (2009) 「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会20周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社
 中島久朱 (2011) 「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美編、明石書房

[Outline and objectives]

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎BⅡ

高野 愛子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で研究する上で必要な日本語論文の作成法を学ぶ。

【到達目標】

- (1) 論文の構成について理解する。
- (2) 日本語で学術的な文章が書けるようになる。
- (3) 日本語で要約文が書けるようになる。
- (4) 日本語で意見文（考察）が書けるようになる。
- (5) 適切な引用ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

「論文」の構成・体裁・書き方について学ぶ。記事・評論文・学術論文等を読んで、その「要約」と論文の考察にあたる「意見文」を書く。また、必要な資料や先行研究を用い適切に「引用」できるよう練習する。添削された作文は、返却後 word 等で清書し、添付ファイルをメール提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1 回目	論文の構成	論文の構成について学ぶ。
2 回目	要約の仕方	要約の仕方について学ぶ。
3 回目	意見文（考察）の書き方	意見文（考察）の書き方について学ぶ。
4 回目	要約文（1）	新聞記事を要約する。
5 回目	意見文（1）	新聞記事に関する意見文を書く。
6 回目	要約文（2）	評論文を要約する。
7 回目	意見文（2）	評論文に関する意見文を書く。
8 回目	要約文（3）	論文を要約する。
9 回目	意見文（3）	論文に関する意見文を書く。
10 回目	先行研究（1）	先行研究に関する論文を要約する。
11 回目	先行研究（2）	先行研究に関する考察を書く。
12 回目	研究計画（1）	序論を書く。
13 回目	研究計画（2）	序論を 800 字に要約する。
14 回目	研究計画（3）	推敲する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

課題ごとにそのテーマについて下調べをしたり、資料を準備する。また、自分の研究テーマに関連する作文を書くので、常に専門書や論文を読んで知識や表現を蓄えておく。添削された作文は、word 等で清書し、返却後一週間以内に添付ファイルでメール提出すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

『留学生のための ここが大切 文章表現のルール』スリーエーネットワーク (2009)

『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会 (2009)

『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語 ③論文読解編』アルク (2015)

『改訂版 大学・大学院 留学生の日本語 ④論文作成編』アルク (2015)

【成績評価の方法と基準】

作文：40% 宿題：20% 平常点：20% 期末試験：20%

【学生の意見等からの気づき】

実際に書かれた良い例・不適切な例を紹介する予定。討論の時間も設けたい。

【学生が準備すべき機器他】

大学貸与のノート PC、または各自のノート PC を持参すること。

【その他の重要事項】

春学期開講〈日本語論文作成基礎BⅠ〉と合わせての履修が望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本語教育学

<研究テーマ> 文体論

<主要研究業績>

・「日本語教育における文体指導 用語の扱われ方をめぐる諸問題」2011年3月（大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第28号）

・「レポート・論文の文体に関する学習者の認識—許容範囲を探るために—」

2011年3月（東京外国語大学『留学生日本語教育センター論集』第37号）

・「接続詞「だから」をめぐる文体差」2012年3月（東京外国語大学『留学生日本語教育センター論集』第38号）

・「程度副詞「ちょっと」をめぐる文体差」2016年3月（大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第33号）

・「和語・漢語をめぐる文体差－『すべて／全部』の場合－」2016年3月（大東文化大学『外国語学部学会誌』第45号）
 ・高野愛子・上村圭介「レジスター別出現頻度に基づく順接接続詞の文体差の評価－現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）の用例分析から－」2017年3月（大東文化大学語学教育研究所『語学教育研究論叢』第34号）
 ・高野愛子・石田恵里子「日本語学習者の文章表現にみられる伝聞『そうだ』の分析－論説文引用マーカーとしての文体的適切性－」2017年3月（東京外国語大学『留学生日本語教育センター論集』第43号）
 ・科研費（2017～2018年度）：挑戦的研究（萌芽）課題番号17K18489 研究代表者「類義表現のレジスター別文体的特徴に関する研究」

【Outline and objectives】

To acquire competence in writing academic reports and papers in Japanese.

BSP500B7

日本語論文作成基礎BⅣ

中島 久朱

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

大学院で必要となるレポートや論文の書き方を学ぶ

【到達目標】

書き言葉のルールを学ぶ。
 レポート、論文に必要な文章表現を身につける。
 論理的な文章の構成力を身につける。
 適切な参考資料の引用方法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DPI1」に関連

【授業の進め方と方法】

教員の講義および、ペアワーク、ディスカッション、各自での文章の作成など。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	文書・談話①	文の長さ読みやすさ
第2回	文書・談話②	読み手に配慮した文の書き方
第3回	指示詞による文の接続	文脈指示と接続
第4回	接続詞と文章の構成	接続詞による文章の接続と構成
第5回	意見と事実の提示	自身の意見を表す表現 他者の意見や事実を表す表現
第6回	レポート・論文の作成①	複雑な内容を説明する場合の内容の整理 段落構成
第7回	レポート・論文の作成②	導入部の書き方 定義と例示
第8回	レポート・論文の作成③	データの提示と整理
第9回	レポート・論文の作成④	引用の方法と引用文の作成
第10回	レポート・論文の作成⑤	対比と比較の方法
第11回	レポート・論文の作成⑥	同意と反論の述べ方
第12回	レポート・論文の作成⑦	考察と結論の述べ方 期末レポートのテーマの検討
第13回	期末レポート準備	期末レポートのアウトラインの作成と資料の整理
第14回	期末レポート作成	期末レポートの作成

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業内で出す課題が終わらない場合は、授業終了後に各自で仕上げ、指示された期日までに提出することとする。授業前に準備が必要な場合は、その都度指示をするので、授業までに各自で準備を終えてくること。

【テキスト（教科書）】

毎回ハンドアウトを配布する。

【参考書】

石黒圭・筒井千絵「留学生のためのここが大切文章表現のルール」スリーエーネットワーク
 佐々木瑞江、細井和代、藤尾喜代子「大学で学ぶための日本語ライティング 短文作成からレポート作成まで」The Japan Times

【成績評価の方法と基準】

提出課題：40%、期末レポート：20%、平常点（授業参加、発表等）：40%

【学生の意見等からの気づき】

文章作成のための授業ですので、実際に文章を書いて表現力を身につけるため、授業内でも作文の時間を多めに設けています。
 文法については、要望により適宜説明の時間を増やしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

自習の際に使用するPC

【その他の重要事項】

教員の指示をよく聞き、課題の内容、提出期限等は厳守すること。指示した内容が守られない場合は、減点の対象となる。
 授業内で書き上げた文章は、PCで清書して提出すること。
 欠席する場合は、欠席した回の内容を各自で確認して次週の授業までに自習してこること。
 欠席が5回を超えた場合は不可とする。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本語教育学、比較教育学
 <研究テーマ>マイノリティ教育、教育政策
 <主要研究業績>
 中島久朱（2008）「グローバル化と公教育—教育基本法「改正」の論議と日本における多文化教育の可能性—」、『多言語多文化—実践と研究』vol.1

中島久朱 (2008) 「イギリスにおける『コミュニティの結束』政策と公教育」、『国際教育』第 14 号

中島久朱 (2009) 「英国における『コミュニティの結束』政策とエスニック・マイノリティの教育」、『日本国際教育学会 20 周年記念年報 国際教育学の展開と多文化共生』、学文社

中島久朱 (2011) 「現代イギリスの多文化主義と社会統合—公教育における多様性の容認と平等の問題—」、『国際移動と教育』、江原裕美 編、明石書房

【Outline and objectives】

This course aims to help students develop their academic writing skills in Japanese. During this course, students will have opportunities to study and discuss examples of Japanese academic writing.

At the end of this course, students will be able to write a structured academic paper in Japanese.

LIN500B7

日本語の性格 I

滝浦 真人

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学的な日本語の性質のみならず、地政学的・歴史的な事情の中で育まれてきた日本語“らしさ”に対するアプローチを行う。母語話者にとっては、日常の当たり前を問い直す作業であり、学習者にとっては、なぜ・どう違うのかを主題的に考察する機会となる。春学期は言語学・日本語学的解説から落ちやすい言語機能論的トピックを取り上げる。

【到達目標】

- (1) 日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解する。
- (2) 日本語の音声をコミュニケーションの観点で理解する。
- (3) 語構成や表現の構成における日本語的嗜好を理解する。
- (4) 「は」と「が」を語り方の構えの相違として理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。考察においては、グループ・ディスカッションも取り入れる。受講者は、それと関連した小課題を授業内で提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	日本語の「性格」とはどのようなことを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第 2 回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第 3 回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを考え、漢字使用の日本語らしさを見出す。
第 4 回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を探る。
第 5 回	日本語のリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるかを考察する。
第 6 回	日本語のアクセント	語アクセントと句アクセントの相違を理解し、アクセントの機能的側面を考察する。
第 7 回	日本語と音象徴	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第 8 回	日本語のオノマトペ	日本語の擬音・擬態語がもっている語構成的な特徴を探り、その機能を考察する。
第 9 回	日本語の語構成	日本語の形態論における語構成的特徴を理解した上で、機能的側面から考察する。
第 10 回	連濁と日本語	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起／不生起環境の考察から見出す。
第 11 回	語彙の意味分析	語種の多さもあって日本語に多い、類義語の使い分けを知るための方法を実践する。
第 12 回	比喩と日本語	比喩は文化的事象であることを理解し、比喩における日本語らしさを考察する。
第 13 回	「は」の語り	日本語の特徴である助詞「は」を取り上げ、それを語り方の構えとして考察する。
第 14 回	「が」の語り	「は」と対比的に用いられる「が」を取り上げ、語り方の構えとして比較考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 40 %
期末レポート 60 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語学・語用論・コミュニケーション論

<研究テーマ>ポライトネス、日本語語用論

<主要研究業績>

滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

LIN500B7

日本語の性格Ⅱ

滝浦 真人

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学的な日本語の性質のみならず、地政学的・歴史的な事情の中で育まれてきた日本語“らしさ”に対するアプローチを行う。母語話者にとっては、日常の当たり前を問い直す作業であり、学習者にとっては、なぜ・どう違うのかを主観的に考察する機会となる。秋学期は、日本語の語用論的側面を取り上げ、日本語における対人関係表現を軸とした考察を行う。

【到達目標】

- (1) 日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
- (2) ポライトネスの考え方を理解し説明することができる。
- (3) 対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
- (4) 現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。考察においては、グループ・ディスカッションも取り入れる。受講者は、それと関連した小課題を授業内で提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはどのようなことを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の格律をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第3回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第4回	ポライトネス	ポライトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライトネス的性格を考察する。
第5回	呼称	対人関係専用手段として呼称をとらえ、理論的と具体的な両面から考察する。
第6回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第7回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第8回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の1つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第9回	褒め／褒められ・フェイスワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第10回	標準語と日本語	近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。
第11回	敬語（意味論）	対人関係専用手段として敬語を取り上げ、まずその意味機能の捉え方を考察する。
第12回	敬語（語用論）	敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。
第13回	指示詞	日本語の指示詞が、対人的な心理的距離の表現として機能しているさまを考察する。
第14回	終助詞	終助詞が、事柄をマークする仕方において対人的距離感を伝えているさまを考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

滝浦真人・大橋理枝（2015）『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 40 %
 期末レポート 60 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語学・語用論・コミュニケーション論

<研究テーマ>ポライトネス、日本語語用論

<主要研究業績>（参考書に挙げたもの以外で）

滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店

滝浦真人（2005）『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』大修館書店

CUA500B7

伝統文化と民衆世界 I

URBANOVA Jana

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学びます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。

【到達目標】

この授業は次のことを目指します

1. 代表的な文学作品、表現、修辞法について学び、その文化や歴史的な背景に関する理解を深めること
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を深めること
3. 学んだことや気付いたことについて各自の意見交換、議論、プレゼンテーション、自由考察力を養うこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。また、最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第 2 回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本古典文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第 3 回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い
第 4 回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第 5 回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観。日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観の特徴と比較
第 6 回	和歌の修辞法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割。日本の歌と西洋の詩における伝統技法の特徴
第 7 回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介
第 8 回	紫式部と清少納言	平安時代女流歌人である紫式部、清少納言の生涯の紹介。彼女らが生きた時代の背景や代表的な作品『源氏物語』、『枕草子』の紹介
第 9 回	沖縄の言葉	琉球語の中にある沖縄語、琉歌の言葉と表記法について
第 10 回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏等）、古典音楽と民謡
第 11 回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な二人の女流歌人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第 12 回	和歌と琉歌の表現に見られる類似点	和歌から影響を受けた琉歌における表現、和歌の改作琉歌
第 13 回	和歌と琉歌の表現に見られる特徴	和歌と琉歌に共通する表現におけるそれぞれの観念の違い。たとえば「雪」について
第 14 回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマの議論。エッセイの提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】

嘉手苺千鶴子（2003）『おもしろ琉歌の世界』森話社

(1996)『岩波講座日本文学史第15巻 琉球文学、沖縄の文学』岩波書店
 外間守善 (1995)『南島の抒情－琉歌』中央公論社
 鈴木一雄編 (1990)『日本文学新史 古代Ⅱ』至文堂
 久保田淳、上野理 (1979)『概説日本文学史』有斐閣
 他の参考書については授業の進行にそって、そのつと紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー等、約30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学、沖縄の文学、

<研究テーマ>

琉歌の表現研究－和歌やおもろとの比較

<主要研究業績>

- ・「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）
- ・「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）
- ・ *The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs.*（「沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のおもろとの比較－」）（『*Studia Orientalia Slovaca (SOS)*（スロバキアの東洋研究）』第15巻1号、*Comenius University, Department of East Asian Studies*（コメニウス大学東アジア研究学科）、2016年）
- ・「琉歌の表現研究－和歌・おもろとの比較から－」（森話社、2015年）
- ・「おもろと琉歌における「大和」のイメージ」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか－江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年）

【Outline and objectives】

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

CUA500B7

伝統文化と民衆世界Ⅱ

横山 泰子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代から日本で知られている怪談の代表作を読み、古典文学研究の基礎を学びます。具体的には江戸東京の怪談の典型である、「牡丹灯籠」などをテキストに、作品の読み方、用語の調べ方などを学び、DVDを鑑賞することで古典芸能の表現にふれます。また、作品に関する討論により、日本語によるコミュニケーション能力の向上をはかります。

【到達目標】

*日本の怪談は古くから中国種であることが多く、東アジアの文化圏の中で作品を位置づける、比較文化的な視点をも身につけることができます。
 *落語や歌舞伎など古典芸能の表現について学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

教員の講義ならびに授業内での学生の議論

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	江戸東京の怪談文化の基礎	教材についての基礎的説明
第2回	「牡丹灯籠」	中国の原話の読解
第3回	「牡丹灯籠」	三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の読解
第4回	「牡丹灯籠」	三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の読解
第5回	「牡丹灯籠」	三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の読解
第6回	「牡丹灯籠」	ラフカディオ・ハーンの抄訳との比較
第7回	落語のDVD鑑賞	テキストの内容を前提に、DVDを鑑賞し、議論
第8回	様々な牡丹灯籠	『江戸怪談を読む「牡丹灯籠」』における論文の読解
第9回	様々な牡丹灯籠	『江戸怪談を読む「牡丹灯籠」』における論文の読解
第10回	「怪談乳房榎」	三遊亭円朝の『怪談乳房榎』の読解
第11回	「怪談乳房榎」	三遊亭円朝の『怪談乳房榎』の読解
第12回	「怪談乳房榎」	三遊亭円朝の『怪談乳房榎』の読解
第13回	「怪談乳房榎」	DVD鑑賞と議論
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、下調べをすることが求められます。

【テキスト（教科書）】

必要な文献はコピーを渡しますので、特に教科書を購入する必要はありません。

【参考書】

『怪談牡丹灯籠 怪談乳房榎』角川ソフィア文庫
 『江戸怪談を読む 牡丹灯籠』白澤社

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント、レポート50パーセント

授業中に積極的に発言しているかどうかを、重視します。

【学生の意見等からの気づき】

フィールドワークは近年学生の人数が多くなり、行っていません。今年度も現状では予定に組み込むことができませんので、授業中に情報提供をすることでかえたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません

【その他の重要事項】

オフィスアワー 授業前後に講師控室で対応します

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文学

<研究テーマ>近世・近代の怪談文化

<主要研究業績>『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』（風間書房）『江戸歌舞伎の怪談と化け物』（講談社）『妖怪手品の時代』（青弓社）

【Outline and objectives】

The goal of this course is to obtain basic knowledge about the famous horror stories of Tokugawa Japan. It also enhances the development of students'skill in research and making oral presentations. Not only literal texts but also DVD of Rakugo and Kabuki are used to help students'understanding of classical Japanese folk entertainment.

PHL500B7

日本の思想・西欧の思想 I

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈日本と中国〉

近代以降、自らを律するのに西洋と自らを引き比べることを当たり前としてきた日本のなかで、日本とアジア、とくに日本と中国との関係を根底において、日本の文化と社会、政治の問題を考究し続けた竹内好の『日本とアジア』を批判的に読解し、グローバル化下の日本の過去と現在と未来を問い直します。春学期には同書の前半を扱います。

【到達目標】

- アジアを参照点に、政治と文化の関係において、現在の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、過去の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、世界では何が問題であるのかを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では毎回扱うテキスト範囲ごとに担当者を決め、担当者の解説と問題提起に基づいて、全員参加で議論を行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入	授業の進め方を確認し、竹内氏の仕事の説明を行います。
2	1. 中国の近代と日本の近代	テキストの読解・批判的分析と討論
3	2. 日本人の中国観	テキストの読解・批判的分析と討論
4	3. 東洋人の日本観	テキストの読解・批判的分析と討論
5	4. 二つのアジア史観	テキストの読解・批判的分析と討論
6	5. 日本人のアジア観	テキストの読解・批判的分析と討論
7	6. アジアのナショナリズムについて	テキストの読解・批判的分析と討論
8	7. ナショナリズムと社会革命	テキストの読解・批判的分析と討論
9	8. アジアのナショナリズム	テキストの読解・批判的分析と討論
10	9. アジアにおける進歩と反動	テキストの読解・批判的分析と討論
11	10. 近代の超克 (1)	テキストの読解・批判的分析と討論
12	11. 近代の超克 (2)	テキストの読解・批判的分析と討論
13	12. 戦争責任について	テキストの読解・批判的分析と討論
14	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(a) 毎回授業で取り上げられるテキスト箇所事前に目を通すこと、また、(b) 輪番でテキスト解釈と問題提起のレジュメ発表を行うこと、さらに、(c) 学期末に、授業内容への考察を盛りこんだレポートを提出すること、を行います。

【テキスト（教科書）】

竹内好『日本とアジア』（ちくま学芸文庫、1993）

【参考書】

松本健一『竹内好論』（岩波現代文庫）

鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』（岩波現代文庫）

孫歌『竹内好という問い』（岩波書店）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 30 %、学期末レポート 30 % で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、現在の問題の理解 40 %、過去の問題の理解 30 %、世界の問題の理解 30 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、とくにできるだけわかりやすく進めることを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学

-哲学

<研究テーマ>

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

-*Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan* (共著、Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第 10 号、2013 年 3 月 29 日、法政大学国際日本学研究所）

-「西周と軍人勲論」（『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究所叢書 17、2013 年 3 月、法政大学国際日本学研究所）

-*La philosophie japonaise* (共著、Vrin, 2013)

【Outline and objectives】

< Japan and China >

Yoshimi Takeuchi, differently from many others, in place of comparing Japan with the West, studied the problems of Japanese culture, society and politics based on the relationship between Japan and Asia, especially Japan and China. Critically reading his "Japan and Asia", we will question Japan's past, present and future under globalization, from this Asian point of view.

PHL500B7

日本の思想・西欧の思想Ⅱ

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈日本と中国〉

近代以降、自らを律するのに西洋と自らを引き比べることを当たり前としてきた日本のなかで、日本とアジア、とくに日本と中国との関係を根底において、日本の文化と社会、政治の問題を考究し続けた竹内好の『日本とアジア』を批判的に読解し、グローバル化下の日本の過去と現在と未来を問い直します。秋学期には同書の後半を扱います。

【到達目標】

- アジアを参照点に、政治と文化の関係において、現在の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、過去の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、世界では何が問題であるのかを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では毎回扱うテキスト範囲ごとに担当者を決め、担当者の解説と問題提起に基づいて、全員参加で議論を行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	授業の進め方を確認し、竹内氏の仕事を改めて説明します。
2	13. 戦争体験論雑感	テキストの読解・批判的分析と討論
3	14. 戦争体験の一般化について	テキストの読解・批判的分析と討論
4	15 「戦争体験」雑感	テキストの読解・批判的分析と討論
5	16. 日本とアジア	テキストの読解・批判的分析と討論
6	17. 日本のアジア主義	テキストの読解・批判的分析と討論
7	18. 孫文観の問題点	テキストの読解・批判的分析と討論
8	19. 胡適とデューイ	テキストの読解・批判的分析と討論
9	20. タゴールと中国	テキストの読解・批判的分析と討論
10	21. 岡倉天心	テキストの読解・批判的分析と討論
11	22. 北一輝	テキストの読解・批判的分析と討論
12	23. 東亜同文会と東亜同文書院	テキストの読解・批判的分析と討論
13	24. 方法としてのアジア	テキストの読解・批判的分析と討論
14	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(a) 毎回授業で取り上げられるテキスト箇所事前に目を通すこと、また、(b) 輪番でテキスト解釈と問題提起のレジュメ発表を行うこと、さらに、(c) 学期末に、授業内容への考察を盛りこんだレポートを提出すること、を行います。

【テキスト（教科書）】

竹内好『日本とアジア』（ちくま学芸文庫、1993）

【参考書】

松本健一『竹内好論』（岩波現代文庫）

鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』（岩波現代文庫）

孫歌『竹内好という問い』（岩波書店）

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、レジュメ発表 30 %、学期末レポート 30 % で評価します。さらにそれぞれの方法において、到達目標 3 点の達成を、現在の問題の理解 40 %、過去の問題の理解 30 %、世界の問題の理解 30 % の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、とくにできるだけわかりやすく進めることを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学

-哲学

<研究テーマ>

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

-*Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan* (共著、

Hosei University Center of International Japanese Studies,

2008)

「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」（『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第 10 号、2013 年 3 月 29 日、法政大学国際日本学研究所）

「西周と軍人勅諭」（『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究所叢書 17、2013 年 3 月、法政大学国際日本学研究所）

-*La philosophie japonaise* (共著、Vrin, 2013)

【Outline and objectives】

< Japan and China >

Yoshimi Takeuchi, differently from many others, in place of comparing Japan with the West, studied the problems of Japanese culture, society and politics based on the relationship between Japan and Asia, especially Japan and China. Critically reading his "Japan and Asia", we will question Japan's past, present and future under globalization, from this Asian point of view.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅰ

片岡 義晴

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の作成をめざします。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	修士論文のテーマ(1)	テーマの発表
第3回	修士論文のテーマ(2)	テーマの検討
第4回	研究目的	修士論文研究目的の検討
第5回	修士論文目次(1)	目次の提示
第6回	修士論文目次(2)	目次の検討
第7回	実態調査(1)	調査内容の検討
第8回	実態調査(2)	調査計画の検討
第9回	統計資料(1)	基礎的な統計資料の確認
第10回	統計資料(2)	統計資料の整理
第11回	図表の作成	図表の作成計画
第12回	研究構想の再検討	研究構想の再検討、修正
第13回	中間報告	中間報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

具体的な資料整理、分析だけでなく、大きな問題意識、議論の枠組み（論理）を意識的に考えて下さい。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

宮本常一・安溪遊地（2008）『調査されるという迷惑－フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、討論 50 % で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 農業経済地理学
<研究テーマ>

集落共同製茶の諸問題、
農業の雇用労働力と外国人技能実習制度

【Outline and objectives】

Completing master's thesis.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

片岡 義晴

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

修士論文の完成をめざします。

【到達目標】

修士論文作成の作業段階を踏まえて、完成をめざします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生の修士論文テーマについて、発表と討論を中心に授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の進め方
第2回	調査結果報告	夏季休暇時の調査結果報告
第3回	テーマの再確認	修士論文テーマの再確認
第4回	研究目的	研究目的の再確認
第5回	目次	目次の再検討
第6回	資料	必要資料の再確認
第7回	補足調査	補足調査の必要性の再確認
第8回	目次の最終決定	目次の再検討と最終決定
第9回	図表の完成	完成図表の確認
第10回	参考・引用文献	参考・引用文献の最終確認
第11回	完成原稿の予定枚数	完成原稿予定枚数の確認
第12回	進捗状況の発表	進捗状況の発表
第13回	最終報告	最終報告
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

議論の枠組み（論理）と資料整理を踏まえた具体的議論の整合性を検討して下さい。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

宮本常一・安溪遊地（2008）『調査されるという迷惑－フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版

【成績評価の方法と基準】

発表 50 %、討論 50 % で成績評価します。

【学生の意見等からの気づき】

特にありませんでした。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 農業経済地理学
<研究テーマ>

集落共同製茶の諸問題、
農業の雇用労働力と外国人技能実習制度

【Outline and objectives】

Completing master's thesis.

HIS500B7

史料から読む琉球とアジア I

得能 壽美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球史料の講読をしつつ考察する。前近代琉球を考えるためには、その歴史的環境から、中国・日本の史料、当然ながら琉球の史料にあたらなくてはならない。史料講読は琉球史料を中心に進める。

【到達目標】

琉球史料を中心に史料講読を進め、一定程度の理解と読解能力を身に付け、琉球史を考える眼を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その解読方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的には講義だが、史料講読に際しては、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	授業内容の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる。
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違。
3	古琉球期史料にみる対外関係（中国・日本古代史料）	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係（歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料）	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係（島津関係史料）	1609年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係（琉球史料・歴代宝案）	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読 中山世譜・中山世鑑	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた。
8	史料講読 羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読 羽地仕置	史料講読。近世琉球の成立
10	史料講読 御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
11	史料講読 御教条	史料講読。近世琉球に生きた人々
12	史料講読 御教条	史料講読。琉球における儒教的支配の成立
13	史料講読 伊江親方日々記	史料講読。対島津関係
14	史料講読 伊江親方日々記	史料講読。琉球内政関係

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全体的に下記で示す参考書を読む。史料講読については、事前に複写を配布するので、予習をする。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫 岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉 吉川弘文館（歴史文化ライブラリー 47）
『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『沖縄入門－アジアをつなぐ海域構想』浜下武志 ちくま新書

【成績評価の方法と基準】

出席点 40 % 平常点 30 % レポート 30 %
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】

多様な研究、あるいは新しい研究分野の創出につながるよう、最新の研究成果をとりこむ。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 琉球史 近世史

<研究テーマ> 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論

<主要研究業績>

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と鳥々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007年 316頁）

「中山政権と宮古・八重山」（財団法人沖縄県文化振興会史料編集室『沖縄県史 各論編第三巻 古琉球』沖縄県教育委員会 2010年 240～259頁）

「移動するナマコと変化するその役割－近世八重山ナマコの行方－」『琉球・沖縄研究』3（早稲田大学琉球・沖縄研究所 2010年 115～140頁）

【Outline and objectives】

I will consider the history of relations with East Asia seen from the Ryukyus while reading the Ryukyu historical materials. Subscription for historical materials mainly focuses on Ryukyu historical materials.

HIS500B7

史料から読む琉球とアジア II

得能 壽美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使用した史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。

【到達目標】

史料について理解を身に付けられるようにする。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、新たな研究テーマの創成を考えられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、近世琉球の生産と税制、物流を、具体的な産物を取りあげて、東アジアにおよぶ広がりを見る。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する
2	近世琉球産品の由来と島産化 I	東アジアにおける技術などの移動
3	近世琉球産品の由来と島産化 II	琉球国内の島産化の展開と商品流通
4	ナマコ I	琉球関係史料にみる生産と上納
5	ナマコ II	薩摩・幕府への献上と中国との貿易
6	海入草	近世琉球の専売制、近現代における生産・流通
7	上布	人頭税と八重山上布
8	木綿 I	伝搬と栽培の広がり
9	木綿 II	近世における利用と商品としての展開
10	ジュゴン	近世の税制・捕獲・信仰
11	イノシシ	近世における害獣駆除と利用
12	牛馬	近世の利用と規制
13	アダン	近世における上納と民衆生活での利用
14	パインナップル	近代の導入事情と展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全体的に下記で示す参考書を読む。

【テキスト（教科書）】

「移動するナマコと変化するその役割」（得能、『琉球・沖縄研究』第3号）など、それぞれのテーマに関連した論文のコピーを配布する。

【参考書】

『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編）吉川弘文館（日本の同時代史 18）
『近世八重山の民衆生活史』得能壽美 榕樹書林

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %
毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、それぞれの研究テーマに即しつつ、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認する。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。多様な研究、新しい研究分野を考えるために、最新の研究成果をみる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 琉球史 近世史
<研究テーマ> 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
<主要研究業績>
『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007年 316頁）
『日本近世生活総引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）
『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（石垣市教育委員会 2015）

【Outline and objectives】

We will consider the historical relationship with East Asia seen from the Ryukyus while confirming the historical materials used in concrete thesis. We will also give lectures on specific cases, setting tasks for preparing papers, the method of survey of historical materials, and the location of historical materials.

HIS500B7

戦後沖縄と対外関係 I

明田川 融

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

沖縄戦（1945年）から70年、そして沖縄の「本土復帰」（1972年）から半世紀ちかくがたつ。沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして日本本土の構造的差別は消え去っていないむしろ、2015年後半からの、日本政府による名護市辺野古への米海兵隊普天間飛行場移設強行のようすをみると、そうした差別は、より執拗になってきているように思われる。

本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。「戦後」とはさしあたり、プロローグとしての沖縄戦から冷戦期までを扱う。

【到達目標】

近年、戦後沖縄をめぐる研究は、外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目ざましい進展を示している。それらの研究業績を踏まえながら、学生諸君が戦後日本の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことを期待する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するトピックを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	なぜ沖縄戦は開かれたか	日米両国の戦略における沖縄の位置づけを探る。
2	恩賜の民権／恢復民権	沖縄と本土における初期占領政策を比較研究する。
3	沖縄とマッカーサーの「平和」憲法	制憲過程のウラにある「沖縄要塞化」構想について考察する。
4	昭和天皇「沖縄メッセージ」の深淵	昭和天皇にとって「沖縄」とは何であり、何でなかったのかを考える。
5	講和問題のなかの沖縄	対日講和をめぐる噴出する帰属論の位相を整理する。
6	「潜在主権」論	対日講和条約第3条の前提をなす「潜在主権」とは誰が何のために発案したのか検討する。
7	海兵隊と核の島の形成	冷戦期を象徴する「海兵隊と核の島」＝沖縄は、どのように形成されたのか跡づける。
8	軍用地問題の生起と展開	「土地を守る四原則」（立法院請願決議）を軸に軍用地問題とは何であったのか考えてみる。
9	沖縄の「赤狩り」	極東の軍事拠点沖縄で起こった人民党非合法化の動きは、沖縄戦後史ばかりでなく冷戦史の文脈でいかなる意味をもつのか検討する。
10	南と北の領土問題	日ソ国交回復交渉に対して米国は、「日本が二島返還でソ連に譲歩するなら米国は沖縄をもらう」と干渉した。この北と南の領土問題の形成過程を調べてみる。
11	沖縄と安保改定	沖縄という視点から60年安保改定を捉えなおす。
12	沖縄返還交渉の公約・違約・密約	外務省による「いわゆる密約」調査の結果も踏まえながら、沖縄返還交渉を検証してみる。
13	沖縄が怒った日	1970年12月におこったコザ騒動とは戦後沖縄にとって何であったのか考える。
14	「安保」から「同盟」への変容と沖縄	「安保」が「同盟」へと変容するなか、日本の役割も基地提供に「行動」や「思いやり予算」を伴うものへと変わっていくが、沖縄については何が変わり、何が変わらなかったのか。この問題を検討してみたい。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設予定地としている名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じることが望ましい。平良好利先生の「戦後沖縄と対外関係Ⅱ」を履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976年）、および新崎『沖縄現代史』（岩波書店、2005年）、ならびに宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法—1945-72年』（東京大学出版会、1975年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交—日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994年）、宮里『日米関係と沖縄—1945-1972』（岩波書店、2000年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地「受容」と「拒絶」のはざま—1945-1972年』（法政大学出版局、2012年）、および中島琢磨『沖縄返還と日米安保体制』（有斐閣、2012年）を挙げておきます。近年の示唆にとり研究成果として、島山淳『沖縄 基地社会の起源と相克 1945-1956』（勁草書房、2013年）および大野光明『沖縄闘争の時代 1960 / 70』（人文書院、2014年）ならびに櫻澤 誠『沖縄現代史—米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保—米軍基地をめぐる相克』吉川弘文館、2016年もぜひ一読されたい。

【参考書】

拙著『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島』（みすず書房、2008年）。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器（貸与パソコン等）

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史
<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程
沖縄と日米安保体制の歴史
日本と核兵器との関係史

<主要研究業績および刊行物>

・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞〔社会科学部門〕受賞）。
・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017年。
・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。
・『核兵器と『国民の特殊な感情』1—6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。
・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。
・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。
・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ 「バックス・アメリカーナ」か「バックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。
・『占領期年表 1945-1952年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。
近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授ならびに河野康子・法政大学名誉教授による監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline and objectives】

Seventy years have passed from the battle in Okinawa, and nearly fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations I, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war

HIS500B7

戦後沖縄と対外関係Ⅱ

平良 好利

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、冷戦終結後の「沖縄米軍基地問題」を考察すると同時に、この問題を通じて冷戦終結後の日米関係の持続と変容について考察する。

【到達目標】

冷戦終結後の「沖縄米軍基地問題」について説明でき、しかも冷戦終結後の日米関係の変容についても説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

「沖縄米軍基地問題」を扱った文献を学生の皆さんとともに決め、それを毎回読み進めながら討議していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	本授業の進め方を説明し、文献を決める。
2	米ソ冷戦と日米安保体制	米ソ冷戦の生成過程と日米安保体制とは何かについて検討する。
3	米ソ冷戦と沖縄	米ソ冷戦時代のアメリカ極東軍事戦略と沖縄基地の役割について検討する。
4	冷戦終結と日米安保体制の変容	冷戦の終結過程と日米安保体制の変容過程について検討する。
5	米軍基地の整理・縮小を求めて：1995年	1995年の少女暴行事件を契機に浮上した沖縄における基地の整理・縮小を求める動きについて検討する。
6	普天間基地移設問題の始動：1996年～1998年	普天間基地移設問題をめぐると日米両政府と沖縄側の動きについて検討する。
7	普天間基地移設問題の展開：1998～2009	名護市辺野古への移設をめぐる日米両政府と沖縄側の動きについて検討する。
8	米軍再編とは？	アメリカの軍事戦略と米軍再編について検討する。
9	民主党政権と普天間基地移設問題	2009年に誕生した民主党政権の普天間基地移設問題への対応について検討する。
10	普天間基地移設問題に対する沖縄側の変化	沖縄内部が「県内移設反対」の方向に大きく舵を切ったプロセスについて検討する。
11	「抑止力」とは？	在沖米軍の「抑止力」について検討する。
12	安倍政権と普天間基地移設問題	安倍政権の普天間基地移設問題への対応について検討する。
13	沖縄政治の構造変化	沖縄政治の構造変化と日本政治との関係を検討する。
14	沖縄の「自治」「自立」論	沖縄の「自治」「自立」論について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に臨むにあたって毎回指定された参考文献を読むこと。授業後は参考文献を再読すること。

【テキスト（教科書）】

初回のガイダンス時に決める。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（70%）、レポート課題（30%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本政治外交史、日米関係論、沖縄政治史

<研究テーマ> 「沖縄問題」と日米沖関係

<主要研究業績>

・『戦後沖縄と米軍基地—「受容」と「拒絶」のはざま—1945～1972年』（法政大学出版局、2012年）
・「冷戦終結と日本の安全保障—防衛問題懇談会の議論を中心として」河野康子・渡邊昭夫編『安全保障政策と戦後日本 1972～1994—記憶と記録の中の日米安保』（千倉書房、2016年）
・『沖縄と本土の溝—政治空間の変遷と歴史認識』五百旗頭薫他編『戦後日本の歴史認識』（東京大学出版会、2017年）

【Outline and objectives】

In this class, we will examine the U.S. military base issue in Okinawa after the end of the Cold War, and examine the continuation and transformation of the U.S.-Japan relations after the end of the Cold War.

ART500B7

仏教思想と仏教美術 I

高橋 悠介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〔《東征伝絵巻》を読む〕

《東征伝絵巻》は、奈良・唐招提寺の開祖・鑑真（688-763）の、剃髪から入滅までを描く絵巻で、永仁6年（1298）に極楽寺の忍性によって唐招提寺に施入された。鑑真が、数度にわたる渡航の失敗や困難を乗り越え、日本に渡る経緯が描かれている。ここでは、《東征伝絵巻》を、『唐大和上東征伝』などの鑑真伝と比較しながら、読み解いていきたい。

【到達目標】

- ・寺院圏で成立し享受された文献・絵画の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
- ・仏教文化についての基礎知識を身に付け、理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

最初は、《東征伝絵巻》に関する概要と、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を行う。続いて、講読担当を決め、受講者による報告と討議という形式で進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第2回	《東征伝絵巻》と『唐大和上東征伝』『鑑真和上三異事』	《東征伝絵巻》の概要及び、本絵巻と関わりの深い鑑真の伝記資料について講義。
第3回	《東征伝絵巻》と忍性	《東征伝絵巻》を施入した忍性と、その文化環境について講義。
第4回	展覧会見学	授業のテーマとも関わる鎌倉時代の仏教美術の展示を見学。
第5回	《東征伝絵巻》巻一冒頭～第四段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第6回	《東征伝絵巻》巻一第五段～第六段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第7回	《東征伝絵巻》巻二第一段～第四段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第8回	《東征伝絵巻》巻二第五段～第七段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第9回	《東征伝絵巻》巻三冒頭～第五段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第10回	《東征伝絵巻》巻三第六段～第七段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第11回	《東征伝絵巻》巻四第一段～第二段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第12回	《東征伝絵巻》巻四第三段～第五段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第13回	《東征伝絵巻》巻四第六段～第七段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第14回	《東征伝絵巻》巻五・総括	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読した上で、全体を総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講師作成のプリントを配布。

【参考書】

『日本の絵巻 15 東征伝絵巻』（中央公論社、1988年）、『新修日本絵巻物全集 21 東征伝絵巻』（角川書店、1978年）、その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表50%、授業への参加度50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

・『禪竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）

・「荒神の図像について—如来荒神を中心に—」（仏教美術論集第二巻『図像学 I—イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5月）

・「律院称名寺と聖徳太子伝一釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52号、2017年9月）

【Outline and objectives】

Reading of the biographical picture scroll of Ganjin (688-763) .

ART500B7

仏教思想と仏教美術Ⅱ

高橋 悠介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【山王の靈驗伝承と図像】

近江坂本に鎮座する山王権現をめぐる靈驗譚を集めたのが『日吉山王利生記』である。この『日吉山王利生記』を、関係する説話集や図像類と比較しつつ、講読する。『山王絵詞』をはじめ、中世の神仏説話との比較の中から『日吉山王利生記』を考えてみたい。

【到達目標】

- ・寺院圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
- ・天台系の神仏をめぐる伝承と造形についての基礎知識を身に付け、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

最初は、『日吉山王利生記』をはじめとした日吉山王をめぐる文献と絵画資料の概要、また講読にあたって必要な基本的知識について、講義形式で授業を進める。その中で、担当を決め、演習形式で受講者による報告と討議を行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション・研究史概観	講義の概要・進め方について説明。
第2回	日吉山王をめぐる文献資料と絵画資料	日吉山王をめぐる文献資料と絵画資料について、講読の前提として講義。
第3回	『日吉山王利生記』と山王関係書	演習形式で講読するテキストとその関係資料について講義。
第4回	展覧会見学	中世の神仏文化と関わる展覧会を見学。
第5回	『日吉山王利生記』3巻1～2	当該段の講読・討議。
第6回	『日吉山王利生記』3巻3～4	当該段の講読・討議。
第7回	『日吉山王利生記』3巻5～6	当該段の講読・討議。
第8回	『日吉山王利生記』3巻7～8	当該段の講読・討議。
第9回	『日吉山王利生記』4巻1～2	当該段の講読・討議。
第10回	『日吉山王利生記』4巻3～4	当該段の講読・討議。
第11回	『日吉山王利生記』4巻5～6	当該段の講読・討議。
第12回	『日吉山王利生記』5巻1～2	当該段の講読・討議。
第13回	『日吉山王利生記』5巻3～4	当該段の講読・討議。
第14回	総括	講読の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講師作成のプリントを配布。

【参考書】

講義内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表50%、授業への参加度50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）

・「荒神の図像について―如来荒神を中心に―」（仏教美術論集第二巻『図像学Ⅰ―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5月）

・「律院称名寺と聖徳太子伝一釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52号、2017年9月）

[Outline and objectives]

The Narration and Image about Sanno (the guardian deity of the Tendai sect) .

CUA500B7

越境時代の日本文化 I

湯本 豪一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 1、主題は「江戸、明治期における妖怪文化の広がり」とする。
- 2、「妖怪」に関わるさまざまな資料を取り上げ、その位置づけと意義を検討する。
- 3、日本のユニークな文化としての「妖怪」についての諸相を検討する。

【到達目標】

妖怪文化の広がりを把握し、その背景や影響を検討して妖怪文化を位置づける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

- 1、「妖怪」文化の展開についての検討
 - 2、「妖怪」資料についての把握
 - 3、「妖怪」資料の内容の検討
 - 4、「妖怪」のビジュアル化とその資料の把握
 - 5、明治期における新聞での妖怪記事の検討
 - 6、「妖怪」文化広がりにおける上記項目の位置づけと意義
- * 「妖怪」資料を把握するために可能な限り原資料を見てもらいながら議論をすすめていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業の概要について	全 14 回の授業の概要と進め方について
第 2 回	「妖怪」文化とは	妖怪文化という概念の把握
第 3 回	「妖怪」文化の諸相と広がり	妖怪文化の広がりについてさまざまな視点から考察
第 4 回	「妖怪」資料についての概要	妖怪資料の概要把握
第 5 回	多様な「妖怪」資料の把握	妖怪資料の具体的把握
第 6 回	絵巻資料の概要	妖怪資料のなかから絵巻についての全体像把握
第 7 回	絵巻資料の検討	絵巻資料の具体的事例を提示
第 8 回	木版技術の発達と「妖怪」文化	木版技術の発達と妖怪文化の広がりについての把握
第 9 回	錦絵資料の検討	錦絵について資料をもとに検討
第 10 回	版本資料の検討	版本について資料をもとに検討
第 11 回	その他の資料の検討	絵巻、錦絵、版本以外の資料を検討して妖怪文化の広がりを検証
第 12 回	近代と「妖怪」	明治における妖怪文化の特徴を把握
第 13 回	明治期における「妖怪」記事の検討	新聞の妖怪記事を検討
第 14 回	「妖怪」文化の広がりについての把握と総括 授業のまとめ	前回までの検討を通して妖怪文化の広がりを把握 授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

妖怪に関する展覧会など、機会があったら妖怪資料を直に見てください。

【テキスト（教科書）】

とくにありません。資料は授業で配布します。

【参考書】

とくにありません。授業で必要に応じて提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業での質疑等の受講状況 60 % 期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

原資料の検討に今まで以上に時間をあてたい。

【担当教員の専門分野等】

専門領域：怪異・妖怪文化研究、日本漫画史研究
研究テーマ：妖怪文化の広がりについて、明治～大正期の漫画
主要研究業績：『明治期怪異妖怪記事資料集成』（国書刊行会 2009 年）
『百鬼夜行絵巻』（小学館 2005 年）
『東京漫画会——岡本一平を中心に——』（『大正期美術展覧会の研究』東京文化財研究所 2005 年）

【Outline and objectives】

*Study about Japanese Yokai culture from Edo era to Meiji era
Research about Japanese Yokai materials(Picture scroll, Woodblock print, Book and so on)*

CUA500B7

越境時代の日本文化Ⅱ

湯本 豪一

【Outline and objectives】

Study about Japanese Manga from 17th century to 20th century.

Research about Manga culture (EDo era, Meiji era , Tisho era, Showa era)

Research about Manga materials(Book, Magazine, Woodblock print and so on)

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 1、主題を「日本漫画史における各時代の特徴について」とする。
- 2、江戸時代から第二次世界大戦直後までの各時代における漫画の特徴を抽出する。
- 3、各時代における特徴についての考察を行い、その後への影響について検討する。
- 4、漫画の記録性についても考察する。

【到達目標】

日本の漫画文化の広がりや歩みを資料で確認しながら、漫画の歴史をそれぞれの時代背景とともに把握する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

- 1、日本漫画史の流れを把握する。
- 2、各時代の特徴を探る。
- 3、それぞれの特徴の背景を検討する。
- 4、各時代の漫画作品に当たりながら特徴を考察する。
- 5、描かれた内容の把握を行い、読み解き方について検討する。
- 6、漫画の持つ記録性について検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	日本漫画史の流れについて	古代から近代までの漫画の流れを把握
第2回	各時代についての概要	各時代の漫画の流れや特徴について把握
第3回	江戸時代の漫画の展開についての検討	江戸時代の漫画の特徴を検討
第4回	木版技術の発達と漫画について検討	木版技術の発達と漫画の新しい展開について検討
第5回	戯画の展開について検討	江戸時代の戯画について把握、検討
第6回	諷刺画の成立と展開についての検討	諷刺画の成立の背景と展開について把握、検討
第7回	幕末における漫画の新たな展開の検討	幕末における開港による漫画の新しい展開について把握、検討
第8回	明治時代の漫画の特徴を考察	明治時代の漫画の特徴について具体的に検討
第9回	明治時代における諷刺画の考察	漫画史における明治時代の諷刺漫画の位置づけについて検討
第10回	大正時代の漫画の特徴を考察	明治時代との比較において大正時代の漫画の特徴を検討
第11回	昭和戦前期の漫画についての考察	明治、大正時代を経て昭和戦前期の漫画はどのような展開をしたかについて検討
第12回	戦争と漫画についての考察	第二次世界大戦を中心とした戦争との関わりから漫画を考察
第13回	漫画の持つ記録性についての考察	漫画だからこそその記録性について検討
第14回	各時代の漫画の特徴についてのまとめ 授業のまとめ	各時代の特徴とその後への影響について考察 授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

展覧会などで漫画資料が見られる機会があったら見ておいてください。

【テキスト（教科書）】

とくにありません。資料は授業で配布します。

【参考書】

とくにありません。必要に応じて提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業での質疑等の受講状況 60 % 期末レポート 40 %

【学生の意見等からの気づき】

原資料の検討に今までよりも時間をあてたい。

【担当教員の専門分野等】

専門領域：日本漫画史、怪異・妖怪文化研究

研究テーマ：明治～大正期における漫画、妖怪文化の広がりについて

主要研究業績：「東京漫画会——岡本一平を中心に——」（『大正美術展覧会』の研究）東京文化財研究所 2005年）

『百鬼夜行絵巻』（小学館 2005年）

『明治期怪異妖怪記事資料集成』（国書刊行会 2009年）

PRI500B7

データ分析法 I

田中 邦佳

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】

- (1) *Excel* を使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
- (2) *Excel* を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
- (3) テーマに応じて適切なデータの処理・分析ができるようになる。
- (4) 上記の 3 つの項目を踏まえて、何らかのテーマを設定してデータ処理を行い発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、*Excel* を用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	Introduction	授業の進め方の説明
第 2 回	データの入力	<i>Excel</i> を使いデータの入力、注意点について
第 3 回	データの数値化 1	平均値
第 4 回	データの数値化 2	中央値・最頻値
第 5 回	データの数値化 3	標準偏差
第 6 回	データの集計	集計結果のまとめ方
第 7 回	データの可視化 1	棒グラフ・折れ線グラフ
第 8 回	データの可視化 2	ヒストグラム
第 9 回	データの可視化 3	複数の要素が含まれたグラフ
第 10 回	データの可視化 4	散布図
第 11 回	研究テーマに沿った分析	テーマに合った分析と可視化
第 12 回	総合演習	データ分析・可視化のまとめ
第 13 回	発表 1	参加者による発表
第 14 回	発表 2	第 13 回「発表 1」で指摘され問題を解決した発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析・作図課題を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

50%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

50%: レポート課題

欠席回数が通算 4 回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

2 回目以降の授業では、PC を使って演習を行います。貸与パソコン（学内で使用可能です）を利用するなどして用意して下さい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための Praat 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2 音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得 (第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版 (2017)

PRI500B7

データ分析法Ⅱ

田中 邦佳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかの基礎的な統計的手法の仕組みを知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】

- (1) 基本的な統計手法の仕組みについて理解する。
- (2) 数値の意味を理解する。
- (3) テーマに応じて適切な統計的分析ができるようになる。
- (4) 上記の3つの項目を踏まえて、何らかのテーマを設定してデータに統計的分析を行い発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、Excelなどを用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違いについて
第3回	データのバラツキ1	平均・分散・標準偏差
第4回	データのバラツキ2	正規分布
第5回	データの数値化3	標準偏差
第6回	カイ2乗検定	カイ2乗検定について
第7回	t検定1	t検定（対応なし）
第8回	t検定2	t検定（対応あり）
第9回	分散分析1	分散分析（1要因）
第10回	分散分析2	多重比較
第11回	分散分析3	分散分析（2要因）
第12回	分散分析4	交互作用
第13回	ことばでの報告	統計結果のことばでの報告
第14回	発表	参加者による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

50%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

50%: レポート課題

欠席回数が通算4回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

分析課題を行う時間をより多く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

2回目以降の授業では、PCを使って演習を行います。貸与パソコン（学内で使用可能です）を利用するなどして用意して下さい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のためのPraat入門』ひつじ書房(2017)

川崎貴子・マッシュューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版(2017)

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basic statistical methods.

LIT500B7

サブカルチャー論Ⅰ

岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ポール・ホドキンソン『メディア文化研究への招待—多声性を読み解く理論と視点』(土屋武久訳、ミネルヴァ書房、2016)を共通テキストとして読みながら、映画、ドラマ、マンガ、アニメーション、演劇、2.5次元ミュージカル、SNS、ファンアートなど、具体的な表象分析を行い、サブカルチャー論を理解するために必要な知識や手法について学ぶ。

【到達目標】

- (1) 共通テキストを正確に読み、具体例を示しながら、ディスカッションを行うことができる。
- (2) サブカルチャー論における理論を理解し、修士課程での研究と繋ぐことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

・毎回、1～2名の発表者が、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要と計画、受講者の自己紹介、各章の説明と担当者の決定。
第2回	第1章「メディアが先か、文化・社会が先か？」	社会とメディア表象の関係、コミュニケーションの理論を全員で読んできて意見交換、各章の説明と担当者の決定。メディア論の展開、テクノロジー決定論とその批判
第3回	第2章「メディアテクノロジー」	メディア論の展開、テクノロジー決定論とその批判
第4回	第3章「メディア産業」	メディアの一極集中化、思考の多様性の確保、政府と規制
第5回	第4章「メディアコンテンツ」	記号論、ナラティブ分析、ジャンル分析、ディスコース分析
第6回	第5章「メディアユーザー」	オーディエンス研究、カルチュラル・スタディーズ、メディアと暴力
第7回	第6章「メディアが操作する？」	マルクス主義とイデオロギー、消費主義の神話、消費者による抵抗
第8回	第7章「ニュースの解剖学」	作られた世界の表象としてのニュース、ニュースの情報娯楽番組化
第9回	第8章「公共サービスか、個人のための娯楽か？」	公共放送、検閲、新自由主義における商業化
第10回	第9章「国民的メディアの衰退」	公共圏、想像の共同体、グローバリゼーション
第11回	第10章「メディア・エスニシティ・ディアスポラ」	人種差別とナショナルリズム、ステレオタイプな表象、文化様式の多様化
第12回	第11章「メディア・ジェンダー・セクシュアリティ」	フェミニズム、異性愛主義批判、クィア・リーディング
第13回	第12章「メディアコミュニティ」	ファン・アート、ファン・グループ、コミュニティとアイデンティティ
第14回	第13章「メディアによる飽和・集団の流動性・意味の喪失」	ポストモダンのメディア論、「事実」と「虚構」、リアリティの行方

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・担当者は、必要な参考文献を調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

・受講者は、共通テキストを正確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

【テキスト（教科書）】

ポール・ホドキンソン『メディア文化研究への招待—多声性を読み解く理論と視点』土屋武久訳、ミネルヴァ書房、2016。定価4,000円＋税。

【参考書】

毎回の講義で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当回の発表60%、期末レポート40%で総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

書き込み式の設問が付されている入門書なので、その形式を十分に使用できればよかった。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本現代文学、クィア・スタディーズ

<研究テーマ>近現代日本文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究

<主要研究業績>

・「クエアな自伝—映画「ムーンライト」と古谷奈月「リリース」をつないで」『早稲田文学増刊女性号』2017年9月、pp.436-444.

・「ポピュラー・カルチャーと歴史認識—清家雪子「月に吠えらんねえ」における裂け目」西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える—批評・小説・ポップカルチャーをめぐって』ひつじ書房、2017年4月、pp.110-128.
・「pixivという未来—「クエア・アダプテーション」としての二次創作」押野武志編著『日本サブカルチャーを読む：銀河鉄道の夜からAKB48まで』北海道大学出版会、2015年4月、pp.88-199.

[Outline and objectives]

This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about Media studies. We will focus on the works of Paul Hodkinson. We will examine social and historical issues. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of the important theories on subculture. Coursework will include weekly reading of Media, culture and society : an introduction (SAGE Publications Ltd; 1 edition, 2010) in Japanese translation.

LIT500B7

サブカルチャー論Ⅱ

岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、テッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』（田代素子訳、岩波現代文庫、2014）、ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（白石隆、白石さや訳、書籍工房早山、2012）の2冊を共通テキストとして読み、メディア、記憶、歴史認識、グローバル化、越境、文化的多様性といった主題について批判的に分析を行い、様々な研究領域でメディアに関する理論を応用できるようにする。

【到達目標】

(1) 共通テキストを精確に読み、具体例を示しながら、ディスカッションを行うことができる。

(2) 現代社会において重要なトピックをメディアに関する理論と繋ぎ、独自の分析を行うことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

・毎回、1～2名の発表者が、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要と計画、受講者の自己紹介、鍵となる概念についての説明。
第2回	『過去は死なない』(1)	第1章「過去は死んでいない」
第3回	『過去は死なない』(2)	第2章「想像したい過去—歴史小説の地平」
第4回	『過去は死なない』(3)	第3章「レンズに映る影—写真という記憶」
第5回	『過去は死なない』(4)	第4章「活動写真—歴史を映画化する」
第6回	『過去は死なない』(5)	第5章「視覚—漫画の見る歴史」
第7回	『過去は死なない』(6)	第6章「ランダム・アクセス・メモリー—マルチメディア時代の歴史」
第8回	『過去は死なない』(7)	第7章「歴史への真摯さ」の政治経済学に向かって」
第9回	『定本 想像の共同体』(1)	「I序」「II 文化的根源」を全員で読んできて議論を行い、担当者を決定する。
第10回	『定本 想像の共同体』(2)	「III 国民意識の起源」、「IV クレオールの先駆者たち」
第11回	『定本 想像の共同体』(3)	「V 古い言語、新しいモデル」、「VI 公定ナショナリズムと帝国主義」
第12回	『定本 想像の共同体』(4)	「VII 最後の波」、「VIII 愛国心と人種主義」
第13回	『定本 想像の共同体』(5)	「IX 歴史の天使」、「X 人口調査、地図、博物館」
第14回	『定本 想像の共同体』(6)	「XI 記憶と忘却」、「旅と交通『想像の共同体』の地伝について」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・担当者は、必要な参考文献を調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備すること。

・受講者は、共通テキストを精確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

【テキスト（教科書）】

・テッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』田代素子訳、岩波現代文庫、2014。定価 1,360 円＋税。

・ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや訳、書籍工房早山、2012。定価 2,000 円＋税。

【参考書】

毎回の講義で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当回の発表 60%、期末レポート 40%で総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

修士課程でのレジュメ作成やレポートの書き方を向上させることができる授業を行いたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本現代文学、クエア・スタディーズ

<研究テーマ>近現代日本文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究

<主要研究業績>

・「クシアな自伝—映画「ムーンライト」と古谷田奈月「リリース」をつないで」『早稲田文学増刊女性号』2017年9月、pp.436-444。

・「ポピュラー・カルチャーと歴史認識—清家雪子「月に吠えらんねえ」における裂け目」西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える—批評・小説・ポップカルチャーをめぐって』ひつじ書房、2017年4月、pp.110-128。
・「pixiv という未来—「クシア・アダプテーション」としての二次創作」押野武志編著『日本サブカルチャーを読む：銀河鉄道の夜からAKB48まで』北海道大学出版会、2015年4月、pp.88-199。

【Outline and objectives】

This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about Media studies and nationalism. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of important theories about the relationships of nationalism, history and mass media. Coursework will include weekly reading of The Past Within Us: Media, Memory, History, (Verso, 2005) and Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism (Verso: 1st edition, 1983) in Japanese translation.

BSP500B2

日本文学・国際日本学基礎演習

阿部 亮太

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本に関する各種の文献を読み、その内容を要約し、それに対する自分自身の見解を小論文形式の文章にまとめることで、日本研究に求められる基礎的能力を養う。

【到達目標】

- 1、日本の言語・文学・歴史・文化・社会等に関する論文を読み、その内容・着眼点・意義等について理解する。
- 2、文献の内容を要約する作業を通して、読解力と文章力を高める。
- 3、自分自身の見解を小論文形式でまとめ、学術論文に相応しい文章を書くようにする。
- 4、修士論文執筆のための研究計画を具体的にし、文章化する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学・国際日本学基礎演習」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本文学・国際日本学基礎演習」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

まず日本の各分野（言語・文学・歴史・文化・社会等）に関する論文を読み、その内容を400字程度の文章で要約し、自分自身の見解を800字程度の小論文にまとめます。さらに、履修者同士で小論文を読み合い、論文の内容について討論を行います。

また、履修者は修士論文執筆に向けた研究計画書の作成を行います。

なお、履修者が執筆した要約・小論文・研究計画書には、担当教員がすべて添削を行い、返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業の進め方	授業の進め方について説明する。
第2回	図書館の利用法・文献検索の方法	法政大学市ヶ谷図書館の利用法・文献の検索方法等を学ぶ。
第3回	課題論文 A1（日本語）	課題論文 A を読み、要約する。
第4回	課題論文 A2	課題論文 A に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第5回	課題論文 A3	課題論文 A2 で書いた小論文をもとに、履修者同士で討論を行う。
第6回	課題論文 B1（日本史）	課題論文 B を読み、要約する。
第7回	課題論文 B2	課題論文 B に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第8回	課題論文 B3	課題論文 B2 で書いた小論文をもとに、履修者同士で討論を行う。
第9回	課題論文 C1（日本文化）	課題論文 C を読み、要約する。
第10回	課題論文 C2	課題論文 C に関する自分自身の見解を小論文形式でまとめる。
第11回	課題論文 C3	課題論文 C2 で書いた小論文をもとに、履修者同士で討論を行う。
第12回	研究計画の検討 1	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第13回	研究計画の検討 2	履修者による研究計画の報告と、それに関する討論を行う。
第14回	研究計画の発表	履修者による研究計画の発表を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

宿題として作文を課す場合があります。また、第12回（履修者の研究計画の検討）までに、各自で A4 用紙 3 枚以上の研究計画書を準備する必要があります。

【テキスト（教科書）】

プリントを配付します。

【参考書】

授業時に適宜紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎回の提出物：50 %
研究計画書の内容：50 %

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【その他の重要事項】

この科目は外国人留学生を対象とします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中世文学
<研究テーマ>軍記物語

<主要研究業績>「崇徳関連話群の再検討—延慶本『平家物語』の編集意図—」(大橋直義氏編『アジア遊学 根来寺と延慶本『平家物語』 勉誠出版 2017年6月)、「認識としての「保元・平治」—物語は院政期の動乱をいかに捉え直すか—」(『国語と国文学』94巻4号 2017年4月)、「天理本『梅松論』と古活字本『平家物語』—行巻の編集を考える—」(『太平記』国際研究集会編『太平記をとらえる』笠間書院 2014年11月)、「古活字本『保元物語』 編者考—『壺囊鈔』を用いた評論群を中心に—」(『文学・語学』207号 2013年11月)

【Outline and objectives】

Reading various literatures on Japan, summarizing the contents, and summarizing your own opinion on it in essay-style sentences, develop the basic abilities required for Japanese studies.

BSP500B2

日本文学・国際日本学論文作成基礎実習

金子 広幸

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

先行研究の閲覧から自らの研究課題の明確化を行い、研究活動における手法・手順・発表などを学ぶ。あわせてその過程から自らの日本語の問題点についての解決策を導く。

【到達目標】

1. 研究の方向性を明確化する。具体的には、その研究課題について、何を明らかにするかを表明できるようになる。
2. 研究の手法・手順を学び、日本語の能力向上と併せて、進めることができるようになる。
3. 自らの研究課題などを他者に明確に伝えることができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学・国際日本学論文作成基礎実習」においては「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本文学・国際日本学論文作成基礎実習」においては「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 研究課題・計画を精緻化する。
2. 先行研究の文献・研究手法についての発表をする。
3. 学期中に「ミニ調査（パイロット調査）」を行い、方向性を探る材料とする。
4. 後半日程には、研究の進捗について成果の発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	参加者の研究の課題を確認、学期全体の進め方とスケジュールを決める。
第2回	私の研究課題1	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する
第3回	私の研究課題2	それまでに構築した研究課題をクラスで共有・検討する。
第4回	私の研究課題3	【自らの日本語の問題点を探る】 研究課題を振りかえって何が学べたかを総括する。 【発表時に必要な日本語について模索する】 【参考文献の引用などの扱い方、発表レジュメの書式などを学ぶ】
第5回	研究手法1	研究の過程で必要な手法について学ぶ。
第6回	研究手法2	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【研究・調査時に必要な日本語について学ぶ。連絡のメールや、調査依頼など】
第7回	研究手法3	研究の過程で必要な手法について学ぶ。 【ミニ調査のガイダンス】
第8回	先行研究発表1	各自が探した先行研究について発表する。 【要旨をまとめる時の日本語の使い方を学ぶ】
第9回	先行研究発表2	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第10回	先行研究発表3	各自が探した先行研究について発表する。 【ミニ調査の進捗状況・テーマを確認する】
第11回	先行研究発表4	各自が探した先行研究について発表する。 【調査報告書への反映】
第12回	先行研究発表5	各自が探した先行研究について発表する。 【スライドの作り方を学ぶ】
第13回	成果発表1	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【研究論文の目次を作ってみる】 これは最終課題となる。
第14回	成果発表2 今後の課題を意識化する	本調査・ミニ調査の結果発表及び本調査での進捗状況を報告する。 【前週に発表が終わっているものは反映点を明らかにする】

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

1. 研究の方向性を明確にするために、常に文献を探し、クラスで簡単に発表できるように要点をまとめておくこと。
2. クラスでは問題を共有し、積極的に手法等について工夫を重ねること。

3. 日本語能力については、とくにスタイルや表現の選択を中心とした、「研究時に必要な日本語」を究明すること。

【テキスト（教科書）】

研究課題明確化が主目的なので教科書は使用しません。

【参考書】

金子広幸 (2014) 『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』
<http://www.ask-books.com/books/?p=174>
 敬語に関する知識・練習が足りない人は自主学習として使用してください。大学図書館の資料を参照のこと。

【成績評価の方法と基準】

提出物（研究計画書 発表時のレジュメ 他日本語に関する宿題など）30 %
 発表参加 20 %
 発表完成度 20 %
 日本語小試験（2 回程度実施）10 %
 平常点 20 %
 成績評価は 100 点満点で採点。60 点以上が合格。

【学生の意見等からの気づき】

参加者の皆さんへ。

- 毎回参加者の発表があり、それについての教師のコメントや参加者の参加討議でクラスが進みます。準備をお願いします。
- 参加人数にもよりますが、1 学期あたり、4 回程度の発表があります。
- スライドやレジュメの作成、先行研究を採ることなど、様々な課題があります。
- 準備してきた資料を読むだけでは、いい発表にはなりません。準備をさらに充実させて、視覚資料を使ったり、わかりやすく研究テーマを説明できるように、教師といっしょに方法を探しましょう。もちろん自宅で発表の練習をしてください。

【学生が準備すべき機器他】

クラスでは多くの回でスライドなどを使用します。プロジェクターの準備などを進んで協力してください。

【その他の重要事項】

日本語が不十分であることを恥じることはありませんが、しっかりと挑戦してください。

オフィスワークの時間は、金曜日の 16 時 30 分から 17 時 30 分は、相談の時間として設定しています。連絡はメールで、予約を取ってください。

他なんでも相談してください。

hirokyu.kaneko.75@hosei.ac.jp

【担当者の研究背景】

<専門領域> 日本語教育学 社会言語学 地理学 歴史学 日本文化
 <研究テーマ> 敬語など待遇表現 日本語クラス活動 地域日本語支援 留学生相談業務 日中言語比較
 <主要研究業績>

- ① 『初級が終わったら始めよう にほんご敬語トレーニング』（アスク 2006 年）
- ② 『初級が終わったら始めよう 新・にほんご敬語トレーニング』（アスク 2014 年）
- ③ 『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』（アスク 2005 年）
- ④ 『日中漢字音対照研究の成果と今後の教学応用への可能性の模索』基礎研究その 1（『日中学院紀要教学』 2008 年）
- ⑤ 『初級日本語クラスで使用する絵の要素の分析』（桜美林大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文 2012 年）

【Outline and objectives】

The students clarify their research tasks from viewing previous research and learn methods, procedures, presentation skills etc. in research activities. And together, they lead solutions on their own Japanese language problems in that process.

LIT500B7

近代の文芸批評 I

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の近代文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず近代文学における批評の役割を理解すること、次に日本の近代文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸批評史 A」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「近代の文芸批評 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。

まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。

また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内的な理解を目指します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の近代文学について	近代ヨーロッパと近代日本を比較して、近代文学全体について概説します。
第 2 回	坪内逍遙と二葉亭四迷	坪内逍遙「小説神髓」と二葉亭四迷「小説総論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	島崎藤村と自然主義の誕生	島崎藤村「千曲川のスケッチ」を読み、日本における自然主義文学のはじまりについて解説します。
第 4 回	北村透谷『透谷選集』を読む	本文芸批評の出発点として、北村透谷「北村透谷選集」について発表してもらいます。
第 5 回	1910 年と石川啄木	日本の近代文学史における 1910 年の状況を解説し、石川啄木「時代閉塞の現状」を読みます。
第 6 回	佐藤春夫の評論文を読む	印象批評の例として、佐藤春夫の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	平塚らいてうと与謝野晶子	平塚らいてう「元始女性は太陽であつた」と与謝野晶子「母性偏重を排す」を読み、その意義を理解します。
第 8 回	小林秀雄の出發	日本の文芸評論の誕生を告げる、小林秀雄の前期の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	白樺派の登場と私小説の完成	生田長江「自然主義前派の跳梁」と武者小路実篤「新しき村に就て」を読み、その意義を理解します。
第 10 回	中野重治の批評	プロレタリア文学以降のもっとも重要な成果の一つである、中野重治の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	谷崎潤一郎と芥川龍之介	谷崎潤一郎「饒舌録（抄）」と芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な（抄）」を読み、その意義を理解します。
第 12 回	平野謙の登場	戦後文学の代表的な文芸時評家である、平野謙の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	中村光夫と 1945 年	中村光夫「『近代』への疑惑」を読み、1945 年の敗戦にいたるまでの日本文学の状態を概括します。
第 14 回	江藤淳の出發	戦後文学を問い直す視点を提示しつつ、江藤淳の評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の近代文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[明治・大正篇] および[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。
まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができてきているか、を授業態度から判断します。
また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。
〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese modern literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B7

近代の文芸批評Ⅱ

田中 和生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の戦後文学における文芸批評の歴史を、個々の文芸評論家の文章と批評自体の流れから概観します。

【到達目標】

まず戦後文学における批評の役割を理解すること、次に日本の戦後文学史を相対化する視点を手に入れることが目標になります。理想としては、文芸評論家の文章を要約・分析・模倣することを通じ、自らのうちに一つの批評眼を確立したいと思います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸批評史B」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「近代の文芸批評Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と発表を組み合わせて進めます。
まず講義では、具体的な評論文を読みながら批評自体の流れについて解説します。次に発表では、個々の文芸評論家の文章について、内容と文体の両面から紹介・解説・考察を加えてもらいます。
また個々の文芸評論家について理解が深まったところで、レポート提出を求めることがあります。レポートでは、文芸評論家の文章を模倣して自ら文芸批評を実践することによって、批評というものの内面的な理解を目指します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第 1 回	日本の戦後文学について	欧米と日本を比較して、現在までつづく戦後文学の空間について概説する
第 2 回	伊藤整と横光利一	伊藤整「新心理主義文学」と横光利一「純粋小説論」を読み、その意義を理解します。
第 3 回	萩原朔太郎と保田與重郎	萩原朔太郎「日本への回帰」と保田與重郎「文明開化の論理の終焉について」を読み、その意義を理解します。
第 4 回	吉本隆明の登場	戦後文学の空間を超える普遍的な視点を提供しようとしてつづけた、吉本隆明の評論文について発表してもらいます。
第 5 回	川端康成と三島由紀夫	敗戦による 1945 年の断絶に注意しつつ、川端康成「横光利一弔辞」と三島由紀夫「重症者の兇器」を読みます。
第 6 回	福田恒存の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、福田恒存の評論文について発表してもらいます。
第 7 回	戦後文学の空間と戦後派の登場	敗戦後に登場した戦後派の作家たちについて概括し、戦後文学のあり方の特徴を理解します。
第 8 回	秋山駿の批評	戦後文学の代表的な文芸評論家である、秋山駿の評論文について発表してもらいます。
第 9 回	第三の新人と戦後文学批判	戦後文学のあり方に抵抗するように登場した第三の新人について概括し、吉本隆明や江藤淳による戦後文学批判の視点を理解します。
第 10 回	柄谷行人の出版	ポストモダン派の代表的な文芸評論家である、柄谷行人の評論文について発表してもらいます。
第 11 回	構造主義とテキスト論	20 世紀後半以降の構造主義思想の意義について考察し、その文学版であるテキスト論に対する理解を深めます。
第 12 回	加藤典洋の登場	江藤淳を批判しつつ戦後文学を相対化する視点を提供した、加藤典洋の評論文について発表してもらいます。
第 13 回	フェミニズム文学論	1980 年代以降の日本のフェミニズム思想について考察を加え、その文学的意義を理解します。
第 14 回	現代文学の批評	現代文学に対して重要な論点を提供しているものを選び、その評論文について発表してもらいます。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日本の戦後文学史についての基礎的な知識を確認して授業を受けてください。また授業で取り上げられる作家や評論家の代表作に目を通してから授業に臨むことが望まれます。発表の対象となる文章は、ぜひ全員が読んで参加することで活発な議論が起きることを期待します。

【テキスト（教科書）】

千葉俊二／坪内祐三編『日本近代文学評論選』[昭和篇]（岩波文庫）

【参考書】

必要に応じて授業で指示します。

【成績評価の方法と基準】

成績は平常点 4 割、発表およびレポート 6 割で総合的に評価します。
まず平常点では、きちんと出席しているか、授業内容に積極的に取り組んでいるか、授業外の学習ができてきているか、を授業態度から判断します。

また発表では、発表対象の評論文についてしっかり理解できているか、発表の仕方とレジュメの内容は適切か、ただの解説にとどまらず分析から考察まで行おうとしているか、を発表内容から判断します。加えてレポートでは、積極的に取り組んでいるかどうかを判断します。

【学生の意見等からの気づき】

発表の内容を受講生の研究テーマに応じて修正しました。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近・現代文学、文芸評論
〈研究テーマ〉

現在の主な関心は、日本の近代文学の特質を明らかにすること、そこから現代文学の条件を考えること、同時に詩・物語・批評といった言葉の機能から文学について論じる方法を探ることである。具体的には戦後文学史の検証、北村透谷・小林秀雄についての研究、新しい近代文学史の切り口を準備している。
〈主要研究業績〉

- 1、『江藤淳』（慶應義塾大学出版会）2001 年
- 2、『あの戦場を越えて——日本現代文学論』（講談社）2005 年
- 3、『新約太宰治』（講談社）2006 年
- 4、『吉本隆明』（アーツアンドクラフツ）2014 年
- 5、『震災後の日本で戦争を引きうける』（現代書館）2017 年

【Outline and objectives】

Acquire an overview of the history of literary criticism in the Japanese postwar literature through the writings of each critic and the stream of criticism.

LIT500B7

神話と歌 I

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代日本語の文字表記の状況を理解する。文字と出会うことで文学はどのように展開していったのか、日本の文化にとってどのような意味があったのかなどを理解する。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸原典研究A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「神話と歌I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

古事記、日本書紀を資料に、古代日本のことばと文字の出会いの意味を考察する。

古代日本においてどのように〈やまと的〉〈日本的〉なものが生まれ展開していったのかを、具体的な資料に即して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	講義概説	古事記、日本書紀の成立について検討する。
第 2 回	古事記冒頭神話論	古事記冒頭の神話の特長について文体論的に検討する。
第 3 回	古事記冒頭ムスヒ神論	古事記冒頭の神話の形成過程を検討する。ムスヒ神の独自性を文体論的に検討する。
第 4 回	古事記冒頭高天原神話論	古事記における高天原の意味について文体論的に検討する。
第 5 回	イザナキ、イザナミ神話論	古事記におけるイザナキ、イザナミ神話の意味について文体論的に検討する。
第 6 回	国生み神話論	古事記における国生み神話の意味について文体論的に検討する。
第 7 回	アマテラス、ツクヨミ、スサノヲ神話論	古事記における 3 貴子誕生の意味について文体論的に検討する。
第 8 回	アマテラス・スサノヲ神話論	古事記における当該 2 神の意味について文体論的に検討する。
第 9 回	ウケヒ神話論	アマテラスとスサノヲの問題を文体論的に検討する。
第 10 回	岩屋戸神話論	同前。
第 11 回	ラロチ神話論	古事記における出雲神話の問題を文体論的に検討する。
第 12 回	大国主神話論	同前。
第 13 回	根の国神話論	同前。
第 14 回	まとめ	上記の検討を踏まえ、古事記・日本書紀のことばと文字の関係を文学成立の問題として確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

古事記上巻、日本書紀巻 1・2 を活字テキストによって読み進める。

【テキスト（教科書）】

古事記、日本書紀（ともに日本古典文学大系、岩波文庫その他、原文のついでのもの）

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30 % リポート 30 %

「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

実施していない。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉上代文学

〈研究テーマ〉古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

〈主要研究業績〉

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える鳥—万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

In this course, we will explore the writing systems of old Japanese. Their impact on the development of literature and Japanese culture would also be examined.

LIT500B7

神話と歌Ⅱ

坂本 勝

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

古代日本語の文字表記の状況を理解する。文字と出会うことで文学はどのように展開していったのか、日本の文化にとってどのような意味があったのかなどを理解する。

【到達目標】

上代文献の基礎的な読解法、研究法を学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸原典研究B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「神話と歌Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

万葉集を資料に、古代日本のことばと文字の出会いの意味を考察する。古代日本においてどのように〈やまと的〉〈日本的〉なものが生まれ展開していったのかを、具体的な資料に即して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	講義概説	万葉集の成立について検討する。
第2回	初期万葉	初期万葉の特徴について文体論的に検討する。
第3回	同前	同前。
第4回	同前	同前。
第5回	同前	同前。
第6回	柿本人麻呂と持統朝	柿本人麻呂を中心に持統朝の文学状況について検討する。
第7回	同前	同前。
第8回	同前	同前。
第9回	同前	同前。
第10回	同前	同前。
第11回	柿本人麻呂歌集	柿本人麻呂歌集の特徴について文体論的に検討する。
第12回	同前	同前。
第13回	同前	同前。
第14回	まとめ	初期万葉と持統朝の文学状況を文字化の問題を中心に確認する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

初期万葉作品、柿本人麻呂を中心とする持統朝の作品を活字テキストによって読み進める。

【テキスト（教科書）】

万葉集（講談社文庫、塙書房版萬葉集本文編その他、原文のついているもの）

【参考書】

必要に応じて教室で指示する。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：平常点 40% 発表 30% リポート 30%

「評価基準」：平常点は出席状況を基準とする。発表、リポートは十分な調査に基づいているか、成果の完成度などによって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 上代文学

<研究テーマ> 古事記・万葉集を中心とする上代文学研究

<主要研究業績>

『古事記の読み方』（岩波新書 2003 年）「亡き人に逢える島—万葉集巻一六・筑前国志賀白水郎歌を読む」（『法政大学文学部紀要』2008 年）「鴨山と石川の詩心—柿本人麻呂臨死自傷歌群について—」（『日本文学誌要』2008 年）「都市の大物主」（『日本文学誌要』2011 年）

【Outline and objectives】

In this course, we will explore the writing systems of old Japanese. Their impact on the development of literature and Japanese culture would also be examined.

LIT500B7

平安時代の物語Ⅰ

加藤 昌嘉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』の精読&注釈
- ◆『源氏物語』『夢浮橋』巻を、写本の影印を使って精読します。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
- A、くずし字（変体仮名）を解説する力
- B、古文を正確に訳出する力
- C、語法や典拠を調査する力
- D、明快なプレゼンテーションをおこなう力
- E、問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸演習A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「平安時代の物語Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- ◆保坂本「夢浮橋」巻（鎌倉時代写）を注釈してゆきます。
- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。それを元に、全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	「夢浮橋」	薫、帰京
2	「夢浮橋」	使者小君
3	「夢浮橋」	小君、来訪
4	「夢浮橋」	僧都の手紙①
5	「夢浮橋」	僧都の手紙②
6	「夢浮橋」	浮舟の反応①
7	「夢浮橋」	浮舟の反応②
8	「夢浮橋」	薫の手紙①
9	「夢浮橋」	薫の手紙②
10	「夢浮橋」	論文検討①
11	「夢浮橋」	論文検討②
12	「夢浮橋」	浮舟の反応①
13	「夢浮橋」	浮舟の反応②
14	「夢浮橋」	巻末

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「浮舟」「蜻蛉」「手習」巻を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

- ◆保坂本『源氏物語』：WEB サイト《e 国宝》

【参考書】

- ◆以下の現代語訳・注釈書を推薦します。
- ◎大塚ひかり 訳『源氏物語（6）』（ちくま文庫）
- ◎『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夢浮橋』（至文堂）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『『源氏物語』前後左右』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT500B7

平安時代の物語Ⅱ

加藤 昌嘉

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- ◆『源氏物語』の精読&注釈
- ◆『源氏物語』『滯標』巻を、写本の影印を使って精読します。

【到達目標】

- ◆以下の5点を身に付けることが目標です。
- A、くずし字（変体仮名）を解説する力
- B、古文を正確に訳出する力
- C、語法や典拠を調査する力
- D、明快なプレゼンテーションをおこなう力
- E、問題点を見つけ、ディスカッションする力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本古代文芸演習B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「平安時代の物語Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- ◆飯島本「滯標」巻（室町時代写）を注釈してゆきます。
- ◆発表担当者は、くずし字を翻刻し、整定本文を立て、正確な現代語訳を作ります。それを元に、全員で議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	「滯標」	光源氏、復権
2	「滯標」	朱雀院
3	「滯標」	朧月夜
4	「滯標」	冷泉帝
5	「滯標」	政権交代
6	「滯標」	頭中将
7	「滯標」	夕霧
8	「滯標」	明石の姫君
9	「滯標」	宿曜の予言
10	「滯標」	相人の言
11	「滯標」	論文検討
12	「滯標」	乳母選定
13	「滯標」	乳母、明石へ
14	「滯標」	紫の上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ◆「須磨」「明石」巻を読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

- ◆池田和臣 編『飯島本源氏物語（3）』（笠間書院）

【参考書】

- ◆以下の現代語訳・注釈書を推薦します。
- ◎林望 訳『謹訳源氏物語（3）』（祥伝社文庫）
- ◎『源氏物語の鑑賞と基礎知識 滯標』（至文堂）

【成績評価の方法と基準】

- ◆発表の出来70%。ディスカッション参加度30%。
- ◆上記【到達目標】の5点に注目して評価します。

【学生の意見等からの気づき】

- ◆議論しやすい雰囲気作りを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

- ◆専門領域：日本古典文学
- ◆研究テーマ：平安時代の物語
- ◆主要研究業績：著書『揺れ動く『源氏物語』』（勉誠出版）

【Outline and objectives】

This course deals with "The Tale of Genji" and the manuscripts.

LIT500B7

書誌学と文献学 I

阿部 真弓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目標とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は、日本人にとっては身近でなじみの深い、しかし今なお謎の多い歌集『百人一首』を注釈し、鑑賞します。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辞等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世以降、『百人一首』がどのように享受、解釈されてきたか、理解する。
- ③簡単なくずし字を読むことができる。
- ④プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑤ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本中世文芸原典研究A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「書誌学と文献学I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

写本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、『百人一首』を精読します。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳していきます。編者・歌人の問題や歴史的背景、また研究史等についても勘案しながら、日本文芸史上、この作品がどのように位置付けられるか、考察を深めていきます。また『百人一首』の古注釈を参照し、中世・近世ではどのように解釈されていたかについても検討します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業計画の説明をし、発表順序等を決定する
2	作品の概要について	『百人一首』に関する問題を整理し、説明する
3	編者、歌人について	『百人一首』編者の問題や、収載された和歌の作者たちについて解説する
4	『百人一首』研究史について	中世から現代に至るまでの研究史を概観する
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する
6	変体仮名について	変体仮名について解説する
7	変体仮名解読練習	変体仮名解読の練習を行う
8	受講生による発表と討論	翻刻について
9	受講生による発表と討論	歌人について
10	受講生による発表と討論	注釈について
11	受講生による発表と討論	解釈について
12	受講生による発表と討論	歴史的背景について
13	受講生による発表と討論	文学史上の問題について
14	まとめ	春学期の内容に関する総括を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密な準備を行うこと。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞむこと。発表後は、討論によって得た課題もあわせて、さらに考察を深め、レポートにまとめて下さい。

【テキスト（教科書）】

笠間文庫 04 <影印シリーズ> 『百人一首 宮内庁書陵部蔵』（樋口芳麻呂編、笠間書院、2005年）

その他、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布します。

【参考書】

『日本文学新史 中世』（小山弘志編、至文堂、1990年）

ちくま新書 182 『百人一首への招待』（吉海直人、筑摩書房、1998年）

『百人一首 王朝和歌から中世和歌へ』（井上宗雄、笠間書院、2004年）

角川ソフィア文庫『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 百人一首（全）』（谷知子、角川学芸出版、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、レポート、討論への参加度を考慮し、総合的に判断します。

なお、配分は発表内容 40%（到達目標①②③④）、レポート 40%（到達目標①②⑤）、討論への参加度 20%（到達目標⑤）とします。

【学生の意見等からの気づき】

一度に複数の和歌を担当・発表する形ではなく、一首ずつ丁寧に読み進めます。また、受講者のレベルに合ったプリント教材を適宜配布し、くずし字を読む練習を行います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本古典文学

<研究テーマ>日記文学、鎌倉期の歌壇

<主要研究業績> 『「とはすがたり」の恋一物語る二条』（『文学』8巻5号、2007年9月）、『「弁内侍日記」論一糾える言葉の連鎖一』（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、『「嵯峨のかよひち」考一藤原為家の涙一』（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline and objectives】

This course deals with the waka anthology Hyakunin Isshu (one hundred waka poems by one hundred poets). The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.

LIT500B7

書誌学と文献学Ⅱ

阿部 真弓

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は、中世の文芸作品を緻密に読み解き、理解を深めることを目標とします。中世文芸の基礎的な研究方法を学ぶとともに、プレゼンテーション能力・ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことを目指します。

今年度は春学期 A に引き続き、『百人一首』を一首ずつ注釈し、鑑賞します。また、そうした精読作業を踏まえた上で、『百人一首』をめぐる問題を検討し、和歌史にどのように位置づけられる作品であるのか考察を試みます。

【到達目標】

- ①適切に文献を調査し、歌語や修辞等の和歌表現、また歌人についての確かつ精緻な注釈を施し、和歌を読み解く能力を身につける。
- ②中世以降、『百人一首』がどのように享受、解釈されてきたか、理解する。
- ③研究テーマを見出し、文学作品・諸事象を分析する力、論理的に考察する能力を身につける。
- ④くずし字を読むことができる。
- ⑤プレゼンテーション能力を身につける。
- ⑥ディスカッション能力を身につけ、他者との討論から新たな研究課題を見出すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

春学期 A 同様、写本の影印をテキストとし、受講生の発表・討論と教員の講義を取り混ぜながら、中世文芸作品を精読します。影印本を翻刻し、的確かつ詳細に注釈を施して現代語に訳します。編者・歌人の問題や歴史的背景、また研究史等についても勘案しながら、日本文芸史上、その作品がどのように位置づけられるか、考察を深めていきます。

その他、希望があれば、受講者が注釈作業を通して発見した問題点について研究した成果を発表してもらい方も設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業計画の説明をし、発表順序等を決定する
2	作品をめぐる問題	『百人一首』成立に大きく関わる『百人秀歌』について考察する
3	編者をめぐる問題	中世・近世の『百人一首』解釈や、「和歌の家」の問題について考察する
4	中世文芸史上の問題	『百人一首』が後世に与えた影響等について考察する
5	発表の方法について	発表にあたって調査すべき文献、注釈項目を説明する
6	くずし字について	変体仮名や漢字のくずし字について説明する
7	くずし字解読練習	変体仮名や漢字のくずし字を読む練習をする
8	受講生による発表と討論	翻刻について
9	受講生による発表と討論	歌人について
10	受講生による発表と討論	注釈について
11	受講生による発表と討論	解釈について
12	受講生による発表と討論	歴史的背景について
13	受講生による発表と討論	文芸史上の問題について
14	まとめ	秋学期の内容に関する総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前には参考書等を読み、『百人一首』に関する基礎的な知識を身につけておいて下さい。発表にあたっては、担当者はわかりやすく、不備のない資料を作り、要を得た説明ができるよう、綿密な準備を行うこと。それ以外の受講者はテキスト、また注釈書等を確認し、どのような問題点のある和歌なのか予習をした上で、授業にのぞむこと。発表後は、討論によって得た課題もあわせて、さらに考察を深め、レポートにまとめて下さい。

【テキスト（教科書）】

笠間文庫 04 <影印シリーズ> 『百人一首 宮内庁書陵部蔵』（樋口芳麻呂編、笠間書院、2005年）

その他、担当教員が作成した印刷物を授業にて配布します。

【参考書】

『日本文学新史 中世』（小山弘志編、至文堂、1990年）
ちくま新書 182 『百人一首への招待』（吉海直人、筑摩書房、1998年）
『百人一首 王朝和歌から中世和歌へ』（井上宗雄、笠間書院、2004年）
角川ソフィア文庫『ビギナーズ・クラシックス 日本の古典 百人一首（全）』（谷谷子、角川学芸出版、2010年）

【成績評価の方法と基準】

発表内容、レポート、討論への参加度を考慮し、総合的に判断します。なお、配分は発表内容 40%（到達目標①②③④⑤）、レポート 40%（到達目標①②③⑥）、討論への参加度 20%（到達目標⑥）とします。

【学生の意見等からの気づき】

一首ずつ丁寧に読み進めます。秋学期 B では、『百人一首』以外の資料も用いて、くずし字解読練習を行います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本古典文学

<研究テーマ> 日記文学、鎌倉期の歌壇

<主要研究業績> 『「とはすがたり」の恋物語二条』（『文学』8巻5号、2007年9月）、『「弁内侍日記」論一糾える言葉の連鎖—』（『日本古典文学研究の新展開』2011年、笠間書院）、『「嵯峨のかよひぢ」考—藤原為家の涙—』（『日本文学誌要』89号、2014年3月）

【Outline and objectives】

This course deals with the waka anthology Hyakunin Isshu (one hundred waka poems by one hundred poets). The aim of this course is to help graduate students acquire an understanding of the characteristics of the Medieval Japanese Literature and the fundamentals of the study of waka poetry.

LIT500B7

能と楽劇 I

山中 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本最古の演劇である能楽についての基本情報・基本文献を紹介し、特に観阿弥・世阿弥時代の能作品に注目してその劇構造・レトリック・演出上の工夫などがどのように作られていったのかを考える。能の作品研究の方法を身につけるとともに、作品の魅力や特色を深く理解することをめざす。

【到達目標】

- ①古写謄本の翻刻や小段分けなど、能の作品研究に必要な基礎作業に習熟する。
- ②能の作品研究をする際に確認すべき項目やそのために参照すべき資料について習熟する。
- ③現在では当たり前のように見える能独特の構造や演出上の工夫が、どのように形成されてきたのかを考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「能楽作品研究A」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「能と楽劇I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本事項に関する講義（第1～3回）の後、能楽研究所蔵の文献資料を利用したワークショップ形式ですすめていく。作業の分担を通して諸本校合や小段分けの技術はしっかり身につけてもらうが、テキストの精読・解釈については教員側で対応のサポートをする。通常の演習のように各担当者が責任をもってひとまとまりの発表をするような形はとらない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業のガイダンス。能楽概説。	授業の進め方について説明し、必要があれば現代の能に関する基本情報を確認する。
第2回	基本文献および能楽研究所資料の紹介	能楽作品研究の基本文献および能楽研究所の古写本利用法の紹介。
第3回	古作の能の一覧と概説	世阿弥以前の作品にどのようなものがあるか、概観する。
第4回	世阿弥自筆本〈雲林院〉 (1) 自筆本をめぐる問題	世阿弥自筆本〈雲林院〉のテキストを写真で読み、自筆本をめぐる問題点を確認する。
第5回	世阿弥自筆本〈雲林院〉 (2) 古作の鬼能	世阿弥自筆本〈雲林院〉における鬼の描かれ方を確認し、古作の鬼能について考える。
第6回	世阿弥自筆本〈雲林院〉 (3) 改作をめぐる諸問題	後場の改作、自筆本の紙継ぎなどをめぐる諸説を見渡し問題点を整理する。
第7回	ワークショップ：現行 〈雲林院〉の検討 (1) 諸本の校合	現行版〈雲林院〉後場を対象に、古写謄本の翻刻・校合の仕方を学ぶ
第8回	ワークショップ：現行 〈雲林院〉の検討 (2) 後場の精読・解釈	自筆本と大きく異なる後場の詞章を精読・解釈。
第9回	ワークショップ：〈松山鏡〉の古写本翻刻	古作鬼能の影響が大きい〈松山鏡〉の古写本を分担して翻刻する。
第10回	ワークショップ：〈松山鏡〉の諸本校合（前場）	〈松山鏡〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、前場の校訂本文を作成する。
第11回	ワークショップ：〈松山鏡〉の諸本校合（後場）	〈松山鏡〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、後場の校訂本文を作成する。
第12回	ワークショップ：〈松山鏡〉の精読（前場）	完成した校訂本文により〈松山鏡〉の詞章を精読し、分担して前場各小段の注釈を行う。
第13回	ワークショップ：〈松山鏡〉の精読（後場）	前回と同様に〈松山鏡〉の後場の各小段について、分担して注釈を行う。
第14回	まとめ	現在残る古作の能作品と、推定される鬼能との関係について。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指定された関連論文を次回までに読んで、疑問点があればまとめておく。

授業で扱う作品について、能楽研究所蔵の古写謄本の翻刻や注釈などを分担して準備する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは用いず、能研蔵の資料を利用する。

【参考書】

日本古典文学大系（旧版）『謡曲集上（下）』（岩波書店）

新潮日本古典集成『謡曲集上（中・下）』（新潮社）

【成績評価の方法と基準】

ワークショップで担当した翻刻・注釈等の基礎作業の達成度（60%）と、他人の発表の際の質問やコメント（40%）等、授業への貢献度を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度の授業では能楽の魅力を広く伝えることに重きを置きすぎた結果、レベルの低下を招いたとの実感があるので、今年度は、能の作品研究に必要な技術、とくに古写謄本の記号の読み方や小段分けの方法などをしっかり身につけてもらうことを目指しつつ、古作の能についての知識を増やしていくようにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究
<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究
<主要研究業績>

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐる—」・『文学』16巻2号・2015年3月

★「天女舞」応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞— 『中世文学と隣接諸学』7（竹林舎 2012年）

★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著）繪書店 2009年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is

1) to acquire many different techniques of studying Noh plays

2) to understand the characteristic feature of Noh plays.

LIT500B7

能と楽劇Ⅱ

山中 玲子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本最古の演劇である能楽についての基本情報・基本文献を紹介し、特に同じ素材による複数の作品の関係について考える。能の作品研究の方法を身につけるとともに、作品の魅力や特色を深く理解することをめざす。

【到達目標】

- ①古写謄本の翻刻や小段分けなど、能の作品研究に必要な基礎作業に習熟する。
- ②能の作品研究をする際に確認すべき項目やそのために参照すべき資料について習熟する。
- ③同じエピソードや人物を素材にしながらまったこととなった形で演じられる複数の能作品が存在することの意味を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「能楽作品研究B」においては「DP1」「DP2」に関連する、国際日本学インスティテュート「能と楽劇Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本事項や関連作品に関する講義と能楽研究所蔵の文献資料を利用したワークショップを合わせてすすめていく。作業の分担により、諸本校合や小段分けの技術は身につけてもらうが、通常の演習のように各自の責任でまとまりのある発表をするような形にはしない。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	井阿弥の作風	井阿弥の作風に関する先行研究および、〈静〉が現行どの作品にあたるのか、諸説の紹介。
第2回	ワークショップ：〈吉野静〉の古写本翻刻	井阿弥作〈静〉の候補の一つである〈吉野静〉の古写本を分担して翻刻する。
第3回	ワークショップ：〈吉野静〉の諸本校合（前場）	〈吉野静〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、前場の校訂本文を作成する。
第4回	ワークショップ：〈吉野静〉の諸本校合（後場）	同じく〈吉野静〉後場の校訂本文を作成する。
第5回	ワークショップ：〈吉野静〉の精読（前場）	完成した校訂本文により〈吉野静〉の詞章を精読し、前場各小段を解釈する。
第6回	ワークショップ：〈吉野静〉の精読（後場）	同じく〈吉野静〉の後場各小段につき、解釈していく。
第7回	〈二人静〉と〈吉野静〉	井阿弥作の〈静〉と両作品の関係を考える。
第8回	音阿弥の演じた能	記録に残る音阿弥関係の能や音阿弥の活動歴を確認する。
第9回	ワークショップ：〈安達静〉の古写本翻刻（前場）	室町後期の作と思われる〈安達静〉の古写本を分担して翻刻する。
第10回	ワークショップ：〈安達静〉の諸本校合（前半）	〈安達静〉の諸本を校合し古写謄本の系統を確認した上で、前半の校訂本文を作成する。
第11回	ワークショップ：〈安達静〉の諸本校合（後半）	同じく〈安達静〉後半の校訂本文を作成する。
第12回	ワークショップ：〈安達静〉の精読（前半）	完成した校訂本文により〈安達静〉の詞章を精読し、前場各小段の注釈を行う。
第13回	ワークショップ：〈安達静〉の精読（後場）	前回と同様に〈安達静〉の後場の各小段について、分担して注釈を行う。
第14回	まとめ	類似のエピソードによる複数の作品が存在する他の例についても触れる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指定された関連論文を次回までに読んで、疑問点があればまとめておく。

授業で扱う作品について、能楽研究所蔵の古写謄本の翻刻や注釈などを分担して準備する。

【テキスト（教科書）】

特定のテキストは用いず、能研蔵の資料を利用する。

【参考書】

日本古典文学大系（旧版）『謡曲集上（下）』（岩波書店）

新潮日本古典集成『謡曲集上（中・下）』（新潮社）

【成績評価の方法と基準】

ワークショップで担当した翻刻・注釈等の基礎作業の達成度（60%）と、他人の発表の際の質問やコメント（40%）等、授業への貢献度を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

前年度、広く能の魅力伝えることに重点を置きすぎ、レベルの低下を招いたとの実感があるので、今年度は、能楽研究所の資料を活かし、実際に論文作成に役立つ基礎作業の方法をしっかりと学ぶことをめざす。

【学生が準備すべき機器他】

なし。

【その他の重要事項】

春学期・秋学期合わせての履修を推奨する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 能楽研究

<研究テーマ> 能の作品研究・演出研究

<主要研究業績>

★「〈檀風〉「孝養」の習事—死者を悼む演技をめぐって—」・『文学』16巻2号・2015年3月

★「天女舞」応用の一形態—神と遊女が舞った菩薩の舞— 『中世文学と隣接諸学』7（竹林舎 2012年）

★『能を面白くする工夫—小書演出の歴史と諸相』（共著） 檜書店 2009年

【Outline and objectives】

The purpose of this class is

1) to acquire many different techniques of studying Noh plays

2) to understand the characteristic feature of Noh plays.

江戸の文芸と文化 I

小林 ふみ子

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、18世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙 I 作品を取りあげ、読み解く。本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら、江戸の人びとの感覚に迫りたい。春学期は中国の仙人尽くしを趣向とした山東京伝『艶哉女遷人』（寛政元・1789年刊）をとりあげる予定。

最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。注釈はないので、一からの解説となる。

【到達目標】

- (1) 作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読む力をつける。
- (2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本近世文芸原典研究 A」においては「DP2」「DP3」に関連する国際日本学インスティテュート「江戸の文芸と文化 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	時代状況と出版界、黄表紙とは
第 2 回	講義 1	作者と画工について
第 3 回	講義 2	注釈の基本・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

『山東京伝全集』第 2 巻（ベリかん社、1993）から『艶哉女仙人』をコピーで配布する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ> 大田南畝・江戸狂歌・戯作

<著書>

【単著】

『へんちくりん江戸挿絵本』（集英社インターナショナル、2019）

『大田南畝 江戸に狂歌の花咲かす』（岩波書店 2014）

『天明狂歌研究』（汲古書院 2009）

『吉原狂歌本三種』（太平書屋 2002）

【共著】

『別冊太陽 歌麿決定版』（平凡社 2016）

『日本人は日本をどうみてきたか—江戸から見る自意識の変遷』（田中優子編、笠間書院 2015）

『化物で楽しむ江戸狂歌』（笠間書院 2014）

『別冊太陽 北斎決定版』（平凡社 2010）

『江戸見立本の研究』（汲古書院 2006）

LIT500B7

江戸の文芸と文化Ⅱ

小林 ふみ子

【Outline and objectives】

Reading illustrated comic novels to learn how to deeply read those kind of works from 18-19th century Edo.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、18世紀後半の江戸で人気を博した絵入り小説である黄表紙 I 作品を取りあげ、読み解く。本文だけでなく挿絵の趣向も分析しながら、江戸の人びとの感覚に迫りたい。秋学期は、仙人尽くしに異国めぐりの趣向を絡めた山東京伝『福徳果報兵衛伝』（寛政 5・1793 年刊）を取りあげる。最初に時代状況や当時の戯作や出版界の情勢、また作者について、また注釈の基本を講義する。以後、受講生が分担して担当し、順にそれぞれの担当箇所の翻刻を確認しながら注釈を付け、意味をとりながら作品を読み進める。注釈はないので、一からの解説となる。

【到達目標】

- (1) 作品の翻刻を点検し、注釈を施しながら読む力をつける。
- (2) 近世における基本的な知識、情報を調査するための文献に習熟する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本近世文芸原典研究 B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「江戸の文芸と文化Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式で学生の分担によって進行する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	概説	寛政期の黄表紙の変質
第 2 回	講義 1	異国めぐりの趣向の系譜について
第 3 回	講義 2	注釈の基本のみなおし・序文を読む
第 4 回	学生の発表	上巻 1
第 5 回	学生の発表	上巻 2
第 6 回	学生の発表	上巻 3
第 7 回	学生の発表	中巻 1
第 8 回	学生の発表	中巻 2
第 9 回	学生の発表	中巻 3
第 10 回	学生の発表	下巻 1
第 11 回	学生の発表	下巻 2
第 12 回	学生の発表	下巻 3
第 13 回	学生の発表	補足
第 14 回	まとめ	作品を評価する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎週、次回のテキストを読んでくる。
発表担当者は語釈・解釈の発表を用意する。

【テキスト（教科書）】

『山東京伝全集』第 3 巻（ベリかん社、2001 年）よりコピーで配付する。

【参考書】

黄表紙については鈴木俊幸『江戸の本づくし 黄表紙で詠む江戸の出版事情』（平凡社、2011、平凡社新書 566）参照

【成績評価の方法と基準】

毎回の出席は当然の前提とした上で、報告 70 %、授業中の質疑などの参加態度 30 %によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

翻刻の確認を通じて、おもに仮名のくずし字が読解できるようになるようにします。

各分野の参考文献を紹介することで、江戸の事物を調べるための基本的な知識が得られるようにします。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸・日本近世文化

<研究テーマ>大田南畝・江戸狂歌・戯作

<近年の論文・その他書き物>

【論文】『書籍を模倣する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から一』『京都語文』26号 2018

【一般誌】『江戸の名所は、都市の発達と行楽文化の成熟とともに変化した』『歴史 REAL 大江戸の都市力』洋泉社 MOOK 2018

【論文】『山東京伝の地方読者へのまなざし』『文学（隔月刊）』17巻 4号 2016

【一般誌】『歌麿が描いた江戸、描かなかった江戸』『別冊太陽 歌麿決定版』2016

【一般誌】『国芳時代の絵師ビジネス』『芸術新潮』2016年 4月号

【研究ノート】『欲望のありがちな矛盾―男が詠う春本の女歌』『アジア遊学』195号 2016

【論文】『江戸狂歌の地方普及』『日本文学誌要』91号 2015

LIT500B7

江戸の思想史 I

高木 元

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である注釈的読解に必要な参考資料群を紹介しつつ、具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見識を育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読し、固有名詞を中心とした語句の注釈が適切に出来るようになる。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけではなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと言う点の解明に及ぶ必要がある。これらの、原テキストに拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本近世文芸演習A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「江戸の思想史I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

年度始めに受講生の顔ぶれとその専攻する分野を見きわめつつ、採り上げるに相応しいテキストを複数提示する。その後、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的な位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを読んでおくことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えておく。発表者の注釈の可否については事前に調べてこない論じられない。

また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業の進み具合を受講者の理解度にそくして、適宜かえてみる。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本十九世紀文学

<研究テーマ>絵入小説史の書誌学的研究

<主要研究業績>『江戸読本の研究 - 十九世紀小説様式攷 -』（べりかん社 1995/10）、『中本型読本集』（国書刊行会 1988/1）ほか。 <https://fumikura.net> 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

LIT500B7

江戸の思想史Ⅱ

高木 元

<研究テーマ> 絵入小説史の書誌学的研究

<主要研究業績> 『江戸読本の研究 - 十九世紀小説様式攷 -』(ベリかん社 1995/10)、『中本型読本集』(国書刊行会 1988/1)ほか。 <https://fumikura.net> 参照

【Outline and objectives】

Learn the skills to read and understand Japanese modern literature annotatively.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、日本の近世文芸を読み理解するに際して不可欠である具体的なテキストを注釈的に読解する演習を通じての読解力の養成と、その文学史における評価に際して要求される見通しを育成することをめざす。

【到達目標】

近世期の板本に使用されている所謂崩し字を判読力をつける。参考図書を活用して語句の注釈が適切に出来るようにする。この場合の注釈とは文脈上の語句の意味だけでなく、作者が如何なる典拠を用いていたかと云う点の解明に及ぶ必要がある。これらの原本に拠る注釈的な読解を踏まえて、近世文学史における位置や、その意義について問題設定をして論じることが出来るようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本近世文芸演習B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「江戸の思想史Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生の専攻する分野を見きわめつつ、受講生の希望を聞きつつ採り上げるテキストを決定する。テキストが決まったら、研究史における文学史的な位置付けと、参考資料を提示しつつ概説的講義をする。その後、テキストを巻ごとに区切って発表担当者を決定した上で、毎回担当院生による注釈と現代語訳、そして担当部分から発見した問題点に関する発表と討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	テキストの決定	受講生の専攻する分野を聞きつつ、扱うテキストを選ぶ。
第2回	テキストに関する研究史概観	決まったテキストに関する研究史を踏まえた概説をする。
第3回	テキストの文学史的概括	テキストの近世文学史における位置について概観する。
第4回	第一巻注釈	第一巻の受講生による注釈
第5回	第一巻をめぐる諸問題	第一巻の受講生による問題提起ならびに討議
第6回	第二巻注釈	第二巻の受講生による注釈
第7回	第二巻をめぐる諸問題	第二巻の受講生による問題提起ならびに討議
第8回	第三巻注釈	第三巻の受講生による注釈
第9回	第三巻をめぐる諸問題	第三巻の受講生による問題提起ならびに討議
第10回	第四巻注釈	第四巻の受講生による注釈
第11回	第四巻をめぐる諸問題	第四巻の受講生による問題提起ならびに討議
第12回	第五巻注釈	第五巻の受講生による注釈
第13回	第五巻をめぐる諸問題	第五巻の受講生による問題提起ならびに討議
第14回	総括とまとめ	第一巻から第五巻を通じた問題点の整理と討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストを読んできたことは当然として、研究史を踏まえた問題の所在について考えてくる。発表者の注釈の可否については事前に調べてこないことと論じられない。

また、授業で扱う範囲における問題の所在について検討してから授業に臨むことが不可欠である。

【テキスト（教科書）】

テキストが決定的次第、原本（板本）のコピーを用意する。

【参考書】

二回目以降の授業で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表の水準を基準として、議論への参加の度合いを加味する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

受講生の理解度を見ながら授業の進行速度を調整する。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本十九世紀文学

LIN500B7

日本語の歴史と現在 I

竹林 一志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本古典文学の言語表現は如何なるものか、それをどのように解析すればよいのか、ということ学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。一字一句をゆるがせにせず、古典本文を丁寧に読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 日本古典文学の言語表現の特徴について、特定の作品の具体例を挙げつつ説明することができる。
2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語・日本文学の基礎A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本語の歴史と現在 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、古代・中世・近世の文学作品を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに講義形式で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える
第2回	古典文法	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する
第3回	表現解析の方法	日本古典文学の表現解析法について概説する
第4回	『古今和歌集』所収歌の読解（先行研究についての検討）	『古今和歌集』『春歌上』の和歌（特に16番歌）について先行研究の論を検討する
第5回	『古今和歌集』所収歌の読解（新たな解釈の提示）	『古今和歌集』『春歌上』の和歌（特に16番歌）の表現を解析する
第6回	『枕草子』冒頭部の読解（先行研究についての検討）	『枕草子』冒頭部について先行研究の論を検討する
第7回	『枕草子』冒頭部の読解（新たな解釈の提示）	『枕草子』冒頭部の表現を解析する
第8回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（先行研究についての検討）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現について先行研究の論を検討する
第9回	『大鏡』『平家物語』の重層表現（新たな解釈の提示）	『大鏡』『平家物語』における謎の表現を解析する
第10回	『徒然草』第89段の読解（先行研究についての検討）	『徒然草』第89段について先行研究の論を検討する
第11回	『徒然草』第89段の読解（新たな解釈の提示）	『徒然草』第89段の表現を解析する
第12回	松尾芭蕉の俳句の読解（先行研究についての検討）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」について先行研究の論を検討する
第13回	松尾芭蕉の俳句の読解（新たな解釈の提示）	松尾芭蕉の病中吟「旅に病んで…」の表現を解析する
第14回	テスト	本授業の要点の理解度を確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院、2009年、2,200円（税別）

【参考書】

『徒然草抜書』小松英雄、講談社
『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

テスト（上記の到達目標に関連する問題を出す）：60%
平常点（提出物・受講姿勢）：40%

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本語における文の原理』くろしお出版、2008年

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年

『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』いのちのこば社、2014年

【Outline and objectives】

In this class we study about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to improve the skills for reading Japanese classical literature. We try not to neglect any word or phrase in the texts. This class is mainly intended for overseas students.

LIN500B7

日本語の歴史と現在Ⅱ

竹林 一志

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『伊勢物語』第1段～第15段を丁寧に読み解きながら、日本古典文学の言語表現と、その解析法について学ぶ（本授業は、おもに留学生を対象とする）。仮名文の性質を理解し、ディスコースの中で表現を読み解けるようになることを目指す。

【到達目標】

1. 『伊勢物語』の言語表現の特徴について、具体例を挙げつつ説明することができる。

2. 日本古典文学の言語表現を的確に解析するための方法・姿勢を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語・日本文学の基礎B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「日本語の歴史と現在Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

いわゆる「古典文法」の基礎知識を確認した後、『伊勢物語』第1段～第15段を対象として表現解析を行う。授業は、テキストと配付プリントを用い、おもに演習形式で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	本授業の全体像を伝える
第2回	古典文法（助詞・助動詞）	助詞・助動詞を中心に古典文法の基礎知識を確認する
第3回	第1段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「昔、をとこ」～「心地まどひにけり」の表現を解析する
第4回	第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第1段「をとこの着たりける」～「雅をなむしける」の表現を解析する
第5回	第2段・第3段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第2段・第3段の表現を解析する
第6回	第4段・第5段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第4段・第5段の表現を解析する
第7回	第6段～第8段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第6段～第8段の表現を解析する
第8回	第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「昔、をとこありけり」～「ほとびにけり」の表現を解析する
第9回	第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「行き行きて」～「しほじりのやうになむ、ありける」の表現を解析する
第10回	第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第9段「なほ行き行きて」～「こそぞりて泣きにけり」の表現を解析する
第11回	第10段～第12段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第10段～第12段の表現を解析する
第12回	第13段～第15段の読解	先行研究を検討しながら『伊勢物語』第13段～第15段の表現を解析する
第13回	総括	本授業のまとめを行う
第14回	テスト	本授業の要点の理解度を確認する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業までに、所定のテキスト箇所を一読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『伊勢物語の表現を掘り起こす』小松英雄、笠間書院、2010年、1,900円（税別）

【参考書】

『日本古典文学の表現をどう解析するか』竹林一志、笠間書院

『みそひと文字の抒情詩』小松英雄、笠間書院

【成績評価の方法と基準】

平常点（発表・提出物・受講姿勢）：60%

テスト（上記の到達目標に関連する問題を出す）：40%

【学生の意見等からの気づき】

専門的な内容を分かりやすく解説するように努めます。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

春学期科目「日本語・日本文学の基礎A」（「日本語の歴史と現在Ⅰ」）を受講していることが望ましい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本語文法、日本古典文学の表現、三浦綾子文学

<研究テーマ>

文の本質、助詞・助動詞の意味・用法、文学表現の解析など

<主要研究業績>

単著：

『日本語における文の原理』くろしお出版、2008年

『日本古典文学の表現をどう解析するか』笠間書院、2009年

『聖書で読み解く『氷点』『続 氷点』いのちのこば社、2014年

【Outline and objectives】

In this class we carefully read 'The tale of Ise' (from chapter 1 through 15) for studying about the linguistic expressions of Japanese classical literature and the methods of analyzing them. The aim of the class is to understand the characteristics of classical texts written in kana and interpret the linguistic expressions precisely in the context. This class is mainly intended for overseas students.

LIN500B7

現代日本語のしくみ I

間宮 厚司

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は演習形式で、日本語研究の様々な問題点について考え、学びます。

【到達目標】

日本語とは、どのような言語なのか。敬語・語彙・語義・表記・方言・文法という点から、日本語を論理的に考える思考力を養います。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語学特講A」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「現代日本語のしくみI」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

日本語に関する諸問題についてプリントを使用し、受講生全員に課題について考え、答えてもらいます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業内容・受講の仕方・成績評価等についての説明
第2回	日本語の敬語の問題について(1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第3回	日本語の敬語の問題について(2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第4回	日本語の語彙について(1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第5回	日本語の語彙について(2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第6回	日本語の語義について(1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第7回	日本語の語義について(2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第8回	日本語の表記について(1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第9回	日本語の表記について(2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第10回	日本語の方言について(1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第11回	日本語の方言について(2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第12回	日本語の文法について(1)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第13回	日本語の文法について(2)	最初にプリントを配布し、ある程度の時間を与え、課題について、全員に答えてもらう。
第14回	まとめ	春学期の授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

図書館を大いに活用し、日本語研究に関する本を多く読みましょう。必要に応じて、研究相談に来て下さい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、プリントを配布して、授業を行います。

【参考書】

町田健編『日本語学のしくみ』（研究社、2001年）
前田直子ほか『やさしい日本語のしくみ』（くろしお出版、2003年）
加藤重広・吉田朋彦『日本語を知るための51題』（研究社、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点100%で、評価します。

【学生の意見等からの気づき】

初めて担当する授業のため、ありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
日本古典語学・日本語史
<研究テーマ>
『万葉集』や『おもしろさうし』等の言語研究
<主要研究業績>
『おもしろさうしの言語』（笠間書院、2005年）
『万葉異説』（森話社、2011年）
『沖縄古語の深層 / 増補版』（森話社、2014年）

【Outline and objectives】

This course will be an interactive lecture. In this course, you are going to learn about the problems of Japanese Language Studies.

LIN500B7

現代日本語のしくみⅡ

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語の文法および意味の研究について知識を獲得することを目的とする。論文を講読することで具体的な研究方法を学び、全体でのディスカッションを通じてその理解を深める。

【到達目標】

日本語の文法論・意味論に関する学術論文が読み、主張とその根拠だけでなく問題点を指摘できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本語学特講B」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「現代日本語のしくみⅡ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

学生による発表（プレゼンテーション）に基づいて進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション、資料の配付	授業の進め方・履修要件などについての確認、および参考資料の配付を行う。
第2回	論文講読・要約およびプレゼンテーションのポイント	論文講読・要約およびプレゼンテーションの方法について、説明し、練習を行う。
第3回	論文講読「日本語の発見構文」	論文「日本語の発見構文」についてのプレゼンテーションを行う。
第4回	「日本語の発見構文」に関する討議	論文「日本語の発見構文」の内容に関して討議を行う。
第5回	論文講読「日本語恩恵構文の意味の拡がり」	論文「日本語恩恵構文の意味の拡がり」についてのプレゼンテーションを行う。
第6回	「日本語恩恵構文の意味の拡がり」に関する討議	論文「日本語恩恵構文の意味の拡がり」の内容に関して討議を行う。
第7回	論文講読「受益構文の意味拡張」	論文「受益構文の意味拡張」についてのプレゼンテーションを行う。
第8回	「受益構文の意味拡張」に関する討議	論文「受益構文の意味拡張」の内容に関して討議を行う。
第9回	論文講読「構文推意の成立と拡張」	論文「構文推意の成立と拡張」についてのプレゼンテーションを行う。
第10回	「構文推意の成立と拡張」に関する討議	論文「構文推意の成立と拡張」の内容に関して討議を行う。
第11回	論文講読「イ落ち構文における主語の有無」	論文「イ落ち構文における主語の有無」についてのプレゼンテーションを行う。
第12回	論文講読「イ落ち構文における主語の有無」	論文「イ落ち構文における主語の有無」についての討議を行う。
第13回	論文講読「構文としての日本語連体修飾構造」と討議	論文「構文としての日本語連体修飾構造」についてのプレゼンテーションおよび討議を行う。
第14回	本学期的まとめ	本学期に読んだ論文について意見交換し、各自の最終レポートについて議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

論文中の知らなかった概念について、事前に全て調べておく。（参考書欄の書籍を参照してください。）さらに、発表担当者は、担当箇所の発表準備（2～4時間）。また、発表担当者以外の学生にも、毎回、論文要約の課題が与えられる（1～2時間程度）。

【テキスト（教科書）】

天野みどり・早瀬尚子（編）『構文の意味と拡がり』くろしお出版、3700円（+税）、ISBN: 978-4-87424-744-0

【参考書】

- ・『言語学大辞典（第6巻 術語編）』（三省堂）
- ・『日本語文法大辞典』（明治書院）
- ・『日本語大事典』（朝倉書店）
- ・『日本語学研究事典』（明治書院）
- ・『語用論キータム事典』（開拓社）
- ・『意味論キータム事典』（開拓社）
- ・『ことばの認知科学事典』（大修館書店）
- ・『日本語学キーワード事典』（朝倉書店）
- ・『新編 認知言語学キーワード事典』（研究社）
- ・『現代日本語文法 1～7巻』（くろしお出版）

【成績評価の方法と基準】

論文要約レポート（25%）、論文内容発表（25%）、発言・質問（25%）、期末レポート（25%）

【学生の意見等からの気づき】

グループ・ディスカッションによるピア・ラーニングが好評なので、できるだけ頻度を増やしたいと思っています。できる限り休まず出席してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

<研究テーマ>

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

<主要研究業績>

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）

「接続詞ケドの手続きの意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）

「構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ」（共著、研究社、2011年）

【Outline and objectives】

We will read some papers on Japanese syntax and semantics to study the way we analyze language structures and semantic properties.

LIT500B7

沖縄文芸史 I

竹内 重雄

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

折口信夫『古代研究（国文学篇）』と沖縄古代文学（民俗）との関係を丁寧に読み解き、考えていく。

方法としては1994（平成6）年刊行の『折口博士記念古代研究所紀要 別冊資料集 第二輯』収録の「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分（1）を題材として、新たな局面を切り開いていく。このメモは折口信夫が構想していたとされる『日本文学の発生』を書くためのものとされているが、折口の戦前に行った3回の沖縄調査と東京での沖縄出身研究者からの取材・調査、ならびに『古代研究』（国文学篇、民俗篇）の内容とからなる。折口の文学発生論が組みあがっていく過程を考える重要な手掛かりになると考えられる資料でもあり、古代文学史を研究するための大きな手掛かりになるはずである。

【到達目標】

・日本古代文学史研究の原点ともされる折口信夫の文学理論の組み立てを考察する。

・「日本古代の鏡」と考えられていた沖縄の文学・文化に対する評価・批判ができるようにする。

・現代の沖縄文学・文化研究の正確な位置付けをできるようにすることで、自らの文学・文化研究の参考とする。

・折口以降の古代文学史研究の足跡を追うことで、自らの文学史構築の方法を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「沖縄文芸史A」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「沖縄文芸史I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

・講義を中心に行う。

・問題点については受講者とともに考え、討議する。

・意見の相違は、次のステップにつながるものであるため、自由に語り合える環境を大事にする。

・問題理解が容易なように映像等の資料を用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	沖縄文学概観	沖縄文学の概説
第2回	沖縄文学史・研究史概観	沖縄文学史・研究史について民俗学研究と合わせて概説する。
第3回	折口信夫の沖縄学研究概説	前後3回の沖縄調査、東京での沖縄出身研究者との交流を考える。
第4回	折口信夫『古代研究』の中の沖縄文学影響調査1	『古代研究』国文学篇講読
第5回	折口信夫『古代研究』の中の沖縄文学影響調査2	『古代研究』国文学篇講読
第6回	折口信夫『古代研究』の中の沖縄文学影響調査3	『古代研究』国文学篇講読
第7回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討1	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第8回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討2	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第9回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討3	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第10回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討4	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第11回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討5	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第12回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分メモ内容の検討6	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第13回	受講生研究発表1	受講生のテーマに基づく研究発表
第14回	受講生研究発表2	受講生のテーマに基づく研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・折口信夫『古代研究』は各自揃えること。

・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分については、入手困難なためコピーして配布。各回のゼミで取り上げる部分については、各自検討して参加すること。

【テキスト（教科書）】

・折口信夫『古代研究』

・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のコピー（配布）

【参考書】

授業開始後指示します。

【成績評価の方法と基準】

・自己の研究課題と当ゼミの研究内容との整合性をつけること（100%）。

・評価は「受講者研究発表」の内容に基づいて行う。

【学生の意見等からの気づき】

・沖縄文学の特殊性が理解できるように、授業の流れを意識して組み立てて行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代文学と沖縄文学との比較研究

<研究テーマ>

古事記と沖縄文学との比較研究

日本古代歌謡と南島古謡との比較研究

<主要研究業績>

①「おもろさうしの叙事性」（法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』42号 2015年3月）

②「鷲の皮の衣服を着けた神－少名毘古那神、『礼記』『冊封』との関わりから－」（沖縄文化協会『沖縄文化』44巻2号 2010年11月）

③「古代田植え歌謡の姿－古代歌謡と南島歌謡との比較研究－」（沖縄学研究所紀要『沖縄学』第2号 1998年4月）

【Outline and objectives】

In this course we will read and analyze Orikuchi Shinobu's "Kodai kenkyuu" and study about Okinawan ancient literature and folklore. Then, we will compare ancient Japanese literature and ancient Okinawan literature(epic songs).

Analyzing Orikuchi's work we will learn about his thought about the origins of literature, which he half got from its analysis of the ancient Okinawan literature and folklore.

I will provide you with Orikuchi Shinobu's research notes copy(published), where he discussed openly about his thoughts on the origin of literature.

LIT500B7

沖縄文芸史Ⅱ

竹内 重雄

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

折口信夫『古代研究（国文学篇）』と沖縄古代文学（民俗）との関係を丁寧に読み解き、考えていく。

方法としては1994（平成6）年刊行の『折口博士記念古代研究所紀要 別冊資料集 第二輯』収録の「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分（1）を題材として、新たな局面を切り開いていく。このメモは折口信夫が構想していたとされる『日本文学の発生』を書くためのものとされているが、折口の戦前に行った3回の沖縄調査と東京での沖縄出身研究者からの取材・調査、ならびに『古代研究』（国文学篇、民俗篇）の内容とからなる。折口の文学発生論が組みあがっていく過程を考える重要な手掛かりになると考えられる資料でもあり、古代文学史を研究するための大きな手掛かりになるはずである。

【到達目標】

- ・日本古代文学史研究の原点ともされる折口信夫の文学理論の組み立てを考察する。
- ・「日本古代の鏡」と考えられていた沖縄の文学・文化に対する評価・批判ができるようにする。
- ・現代の沖縄文学・文化研究の正確な位置付けをできるようにすることで、自らの文学・文化研究の参考とする。
- ・折口以降の古代文学史研究の足跡を追うことで、自らの文学史構築の方法を考える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「沖縄文芸史B」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「沖縄文芸史Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

- ・講義を中心に行う。
- ・問題点については受講者とともに考え、討議する。
- ・意見の相違は、次のステップにつながるものであるため、自由に語り合える環境を大事にする。
- ・問題理解が容易なように映像等の資料を用いる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	沖縄文学概観	沖縄文学の概説
第2回	沖縄文学史・研究史概観	沖縄文学史・研究史について民俗学研究と合わせて概観する。
第3回	春学期に引き続き、「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討7	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第4回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討8	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第5回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討9	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第6回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討10	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第7回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討11	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第8回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討12	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分の分析
第9回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察1	沖縄叙事文学史構築を構想する
第10回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察2	沖縄叙事文学史構築を構想する
第11回	「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察3	沖縄叙事文学史構築を構想する

第12回 「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のメモ内容の検討を踏まえた上での新たな文学史構築の可能性の考察4

第13回 受講生研究発表1 受講生の研究テーマに基づく研究発表

第14回 受講生研究発表2 受講生の研究テーマに基づく研究発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・折口信夫『古代研究』は各自揃えること。
- ・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分については、入手困難なためコピーして配布。各回のゼミで取り上げる部分については、各自検討して参加すること。

【テキスト（教科書）】

- ・折口信夫『古代研究』
- ・「沖縄探訪記」収録手帳全集未収録部分のコピー（配布）

【参考書】

授業開始後指示します。

【成績評価の方法と基準】

- ・自己の研究課題と当ゼミの研究内容との整合性をつけること（100%）。
- ・評価は「受講者研究発表」の内容に基づいて行う。

【学生の意見等からの気づき】

- ・沖縄文学の特殊性が理解できるように、授業の流れを意識して組み立てを行う。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代文学と沖縄文学との比較研究

<研究テーマ>

古事記と沖縄文学との比較研究

日本古代歌謡と南島古謡との比較研究

<主要研究業績>

- ① 「おもしろさうしの叙事性」（法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』42号 2015年3月）
- ② 「鶯の皮の衣服を着けた神—少名毘古那神、『礼記』『冊封』との関わりから—」（沖縄文化協会『沖縄文化』44巻2号 2010年11月）
- ③ 「古代田植え歌謡の姿—古代歌謡と南島歌謡との比較研究—」（沖縄学研究所紀要『沖縄学』第2号 1998年4月）

【Outline and objectives】

In this course we will read and analyze Orikuchi Shinobu's "Kodai kenkyuu" and study about Okinawan ancient literature and folklore. Then, we will compare ancient Japanese literature and ancient Okinawan literature(epic songs).

Analyzing Orikuchi's work we will learn about his thought about the origins of literature, which he half got from its analysis of the ancient Okinawan literature and folklore.

I will provide you with Orikuchi Shinobu's research notes copy(published), where he discussed openly about his thoughts on the origin of literature.

LIT500B7

女性文学 I

藤木 直実

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問いつつ作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「女性文学A」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「女性文学I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説
第2回	河野多恵子「蟹」①	担当者による報告と受講生による討議
第3回	河野多恵子「蟹」②	前回明らかになった課題の検討
第4回	田辺聖子「感傷旅行」①	担当者による報告と受講生による討議
第5回	田辺聖子「感傷旅行」②	前回明らかになった課題の検討
第6回	津村節子「玩具」①	担当者による報告と受講生による討議
第7回	津村節子「玩具」②	前回明らかになった課題の検討
第8回	大庭みな子「三匹の蟹」①	担当者による報告と受講生による討議
第9回	大庭みな子「三匹の蟹」②	前回明らかになった課題の検討
第10回	吉田知子「無明長夜」①	担当者による報告と受講生による討議
第11回	吉田知子「無明長夜」②	前回明らかになった課題の検討
第12回	郷静子「れくいえむ」①	担当者による報告と受講生による討議
第13回	郷静子「れくいえむ」②	前回明らかになった課題の検討
第14回	まとめ	春学期の学修内容と各自の課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する。

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50%）に加えて、報告の内容と水準（30%）、授業中の貢献度（20%）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評
<研究テーマ>森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績>『(妊婦)アート論』(共編著)、『日本文学の「女性性」』(共著)

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

LIT500B7

女性文学Ⅱ

藤木 直実

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

男女を再生産する文化構造、および性差そのものの見直しなど、性の制度に対する根本的な再審の潮流は、いわゆる第二波フェミニズムを画期として世界規模で広がった。日本においても、戦後の新体制と教育環境の中で成人した女性たちが、女性としての存在、身体性、関係性などを問いつつ作業のなかから、男性作家主導の戦後文学の理念や方法への批評性にもとづいた新たな文学世界を拓いていった。これらの新しい表現は、男性文学を本流として前提する「女流文学」ではなく、「女性文学」として再定位されるのにふさわしい。以上の視座に立ち、現代女性作家の作品を具体的に検討することで、女性による文学表現やその基盤となった女性文化の評価、また女性文学がそなえる性差を変容し越境する志向などの論理化を、演習形式で実践する。

【到達目標】

この授業においては、現代の女性作家による文学テキストを取り上げ、精読を行う。現代日本のジェンダー規範を確認し、それらの規範と女性の文学との交渉の様相を具体的な作品に即して読み、書き手のジェンダーが作品や表現にどのような影響を及ぼすかを考える。また、近代女性文学史の流れを適宜参照し、把握に努める。これらの作業を通して、女性文学を精読するための視点と技術と方法を身につけ、実社会にもつながる課題や自身の研究への示唆を、受講者それぞれが発見し、考える、きっかけとなることを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「女性文学B」においては「DP2」「DP3」に関連する、国際日本大学インスティテュート「女性文学Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式による。担当者はあらかじめ対象作家作品にかかわる調査をハンドアウトにまとめて報告し、それにもとづいて受講生全員で討議をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の目的、計画、方法についての概説、春学期の振り返り
第2回	山本道子「ベティさんの庭」①	担当者による報告と受講生による討議
第3回	山本道子「ベティさんの庭」②	前回明らかになった課題の検討
第4回	林京子「祭りの場」①	担当者による報告と受講生による討議
第5回	林京子「祭りの場」②	前回明らかになった課題の検討
第6回	重兼芳子「やまあいの煙」①	担当者による報告と受講生による討議
第7回	重兼芳子「やまあいの煙」②	前回明らかになった課題の検討
第8回	森禮子「モッキングバードのいる町」①	担当者による報告と受講生による討議
第9回	森禮子「モッキングバードのいる町」②	前回明らかになった課題の検討
第10回	吉行理恵「小さな貴婦人」①	担当者による報告と受講生による討議
第11回	吉行理恵「小さな貴婦人」②	前回明らかになった課題の検討
第12回	加藤幸子「夢の壁」①	担当者による報告と受講生による討議
第13回	加藤幸子「夢の壁」②	前回明らかになった課題の検討
第14回	まとめ	秋学期の学修内容と各自の課題の確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【予習】報告者は、担当の作家作品について調査と考察を行い、ハンドアウトを作成する。他の受講生は、対象作家作品を読み、必要事項を確認して、私見をまとめておく。

【復習】授業での討議や教員のコメントを踏まえて、対象作品への調査考察を深める。

【テキスト（教科書）】

開講時に指示する。

【参考書】

岩淵宏子・北田幸恵編著『はじめて学ぶ日本女性文学史【近現代編】』（ミネルヴァ書房、2005）、岩淵宏子・北田幸恵・長谷川啓編『編年体近代現代女性文学史』（至文堂、2005）、与那覇恵子『後期20世紀女性文学論』（晶文社、2014）、その他、授業時に適宜指示する。

【成績評価の方法と基準】

期末レポート（50%）に加えて、報告の内容と水準（30%）、授業中の貢献度（20%）を勘案し、総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

学生の興味関心を広げるための話題提供につとめる。学生の意見を尊重し、その発想に学問的裏付けが得られるようサポートし、自由に発言しやすい環境をつくる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近代文学、フェミニズム・ジェンダー批評

<研究テーマ>森鷗外と女性、女性文学

<主要研究業績>『〈妊婦〉アート論』（共編著）、『日本文学の「女性性」』（共著）

【Outline and objectives】

We will focus our scrutiny on works of literature by contemporary female authors. After ascertaining Japan's contemporary gender norms, we will attempt to discern aspects of the interplay between these norms and women's literature in line with specific works, reflecting on how the gender of the writer has influenced their works and expressions. In addition, making references as appropriate, we shall work to apprehend the historical course of modern women's literature. Through these tasks, we seek to provide students with the opportunity to master the perspectives, techniques, and methods for critical reading of women's literature. In doing so, students will discover and think about challenges that are also relevant to today's society, as well as suggestions for their own research.

ART500B7

文学と映画 I

越川 道夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて。映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、参考作品を鑑賞し、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文芸と視聴覚芸術A」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と映画I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	内容の概説
第2回	講義1／現場からの報告①	講師による講義
第3回	講義2／現場からの報告②	講師による講義
第4回	講義3／現場からの報告③	講師による講義
第5回	講義4／現場からの報告④	講師による講義
第6回	参考作品①／鑑賞	参考作品①の鑑賞
第7回	参考作品①／ディスカッション①	参考作品①についてのディスカッション
第8回	参考作品①／ディスカッション②	参考作品①についてのディスカッション
第9回	講義5／現場からの報告⑤	講師による講義
第10回	参考作品②／鑑賞	参考作品②の鑑賞
第11回	参考作品②／ディスカッション①	参考作品②についてのディスカッション
第12回	参考作品②／ディスカッション②	参考作品②についてのディスカッション
第13回	講義6／現場からの報告⑥	講師による講義
第14回	春学期のまとめ	春学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要に応じて提示する。授業で指示した映画作品を見ること。

【テキスト（教科書）】

講師が選定する。授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて提示する。資料としてのプリント等を配布する。

【成績評価の方法と基準】

研究発表（50%）、授業参加度等（50%）によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>映画

<研究テーマ>映画

<主要研究業績>『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

ART500B7

文学と映画 II

越川 道夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

実際に映画を制作、監督している担当講師との対話、ディスカッション、作品の研究発表を通じて。映画と文学の関係、「映画」とは「文学」とは何か、そして、それぞれの基盤となる身体との関係について各自の考えを深めていく。

【到達目標】

担当講師の作品だけでなく、参考作品を鑑賞し、さまざまな角度から検証し、作品の生成過程に触れ、「映画」と「文学」の比較によって、「映画」とは何か、「文学」とは何かを考え、講師とともに研究への視点を掘り下げていく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文芸と視聴覚芸術B」においては「DP1」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と映画II」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

担当講師の講義、場合によっては実際の映画製作現場の見学、参考作品についてのディスカッションと、学生のゼミナール方式の研究発表によってすすめる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	講義1／現場からの報告①	講師による講義
第2回	研究発表に関するディスカッション	第3回から始まる研究発表と課題について対話、討論する
第3回	研究発表①	研究発表とディスカッション
第4回	研究発表②	研究発表とディスカッション
第5回	研究発表③	研究発表とディスカッション
第6回	講義2／現場からの報告②	講師による講義
第7回	研究発表④	研究発表とディスカッション
第8回	研究発表⑤	研究発表とディスカッション
第9回	研究発表⑥	研究発表とディスカッション
第10回	講義3／現場からの報告③	講師による講義
第11回	参考作品①／鑑賞	参考作品①を鑑賞する
第12回	参考作品①／ディスカッション	参考作品①についてのディスカッション
第13回	講義4／現場からの報告④	講師による講義
第14回	秋学期のまとめ	秋学期の講義を概括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

必要に応じて提示する。授業で指示した作品、またはそれぞれの研究対象となる作品を見ておくこと。

【テキスト（教科書）】

講師が選定する。授業内で指示する。

【参考書】

必要に応じて提示する。資料のプリント等を配布する。

【成績評価の方法と基準】

研究発表（50%）、授業参加度等（50%）によって、総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

初年度のため特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>映画

<研究テーマ>映画

<主要研究業績>『アレノ』（監督・脚本／2015）

『海辺の生と死』（監督・脚本／2017）

『月子』（監督・脚本／2017）

『二十六夜待ち』（監督・脚本／2017）

またプロデューサーとして『海炭市叙景』『楽隊のうさぎ』『かぞくのくに』『ゲゲの女房』『私は猫ストーカー』『ドライブイン蒲生』『白河夜船』など多くの映画を制作する。

LIT500B7

文学と風土 I

高橋 博史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

さまざまな場所を舞台とした作品（短編小説）をいくつか選んで、その土地の風土との関わりに注意しながら、読み進めていく。それぞれの作品について、受講者全員で討論しながら、読みを深める。
本文を緻密に読み込んでいくことで、作品の奥行きを浮かび上がらせ、作品についての論を構築する力を養う。また、互いの読みを交換しあうことを通じてコミュニケーション能力を身につける。

【到達目標】

受講者各自が授業で取り上げる作品について自身の論を用意し、討論を通じて深めた後、論文としてまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文学と風土A」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と風土I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式。割り振られた作品について、発表者が自分の作品理解を示し（レジュメを配布する）、発表をもとに受講者がそれぞれの読みを聞かせる。一つの作品におおむね2回の授業をあてる予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方についてのガイダンスと、受講者それぞれがどんな問題意識を持っているか、共有する。担当する作品を割り振る。
第2回	さまざまな土地の光景	国木田独歩「忘れ得ぬ人」(1)
第3回	さまざまな土地の光景	国木田独歩「忘れ得ぬ人」(2)
第4回	都市の変貌	田山花袋「少女病」(1)
第5回	都市の変貌	田山花袋「少女病」(2)
第6回	都会の光景	夏目漱石「変な音」(1)
第7回	都会の光景	夏目漱石「変な音」(2)
第8回	京都の街	梶井基次郎「檸檬」(1)
第9回	京都の街	梶井基次郎「檸檬」(2)
第10回	江戸の町	谷崎潤一郎「刺青」(1)
第11回	江戸の町	谷崎潤一郎「刺青」(2)
第12回	江戸時代の京都	森鷗外「高瀬舟」(1)
第13回	江戸時代の京都	森鷗外「高瀬舟」(2)
第14回	まとめ	授業全体を総括する全体討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回作品を読み込み、各自の作品理解を準備した上で授業に臨むこと。各自が発表者の立場になり、先行研究等を参照しつつ、自説を練り上げることが望ましい。
最終的には論文（30～40枚）たり得るレポートを最低1本を提出する。

【テキスト（教科書）】

取り上げる作品を網羅した書籍はない。文庫本等で、各自取り上げる作品を入手すること（入手方法については、必要があれば相談に応じる）。

【参考書】

必要に応じてその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業時の討論（30%）、発表（30%）、レポート（40%）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より担当するため記載すべきことはない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学。特に20世紀前半の小説
<研究テーマ> 日本近代文学に描かれた労働
<主要研究業績> 『芥川文学の達成と摸索』（至文堂）、「蟹工船」論（『国語と国文学』）

【Outline and objectives】

We'll discuss several novels set in various places.

LIT500B7

文学と風土 II

高橋 博史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

さまざまな場所を舞台とした作品（短編小説）をいくつか選んで、その土地の風土との関わりに注意しながら、読み進めていく。それぞれの作品について、受講者全員で討論しながら、読みを深める。
本文を緻密に読み込んでいくことで、作品の奥行きを浮かび上がらせ、作品についての論を構築する力を養う。また、互いの読みを交換しあうことを通じてコミュニケーション能力を身につける。

【到達目標】

受講者各自が授業で取り上げる作品について自身の論を用意し、討論を通じて深めた後、論文としてまとめる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「文学と風土B」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「文学と風土II」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

演習形式。割り振られた作品について、発表者が自分の作品理解を示し（レジュメを配布する）、発表をもとに受講者がそれぞれの読みを聞かせる。一つの作品におおむね2回の授業をあてる予定。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業全体についてのガイダンス
第2回	地方都市の外れ	宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」(1)
第3回	地方都市の外れ	宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」(2)
第4回	江戸川のはとり	伊藤左千夫「野菊の墓」(1)
第5回	江戸川のはとり	伊藤左千夫「野菊の墓」(2)
第6回	蜜柑畑のある村	芥川龍之介「トロッコ」(1)
第7回	蜜柑畑のある村	芥川龍之介「トロッコ」(2)
第8回	北海道の原野	有島武郎「カインの末裔」(1)
第9回	北海道の原野	有島武郎「カインの末裔」(2)
第10回	山峡の工事現場	葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」(1)
第11回	山峡の工事現場	葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」(2)
第12回	半島	川端康成「伊豆の踊子」(1)
第13回	半島	川端康成「伊豆の踊子」(2)
第14回	まとめ	授業全体を総括する全体討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

受講者は毎回作品を読み込み、各自の作品理解を準備した上で授業に臨むこと。各自が発表者の立場になり、先行研究等を参照しつつ、自説を練り上げることが望ましい。
最終的には論文（30～40枚）たり得るレポートを最低1本を提出する。

【テキスト（教科書）】

取り上げる作品を網羅した書籍はない。文庫本等で、各自取り上げる作品を入手すること（入手方法については、必要があれば相談に応じる）。

【参考書】

必要に応じてその都度紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業時の討論（30%）、発表（30%）、レポート（40%）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度より担当するため記載すべきことはない。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近代文学。特に20世紀前半の小説
<研究テーマ> 日本近代文学に描かれた労働
<主要研究業績> 「芥川文学の達成と摸索」（至文堂）、「蟹工船」論（『国語と国文学』）

【Outline and objectives】

We'll discuss several novels set in various places.

LIT500B2

表現と社会

内藤 裕之

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「偉大なる創造は模倣から生まれる」。この言葉の真の意味を理解し、先行する表現者の成果の上に、後進の者として何を積み上げることが、新たなる創造につながるのかを考える。何を守り、何に注意しなければならないのか、実際の表現例や知的財産をめぐる訴訟例を検討しながら、正解を求めるのではなく、考える道筋を獲得することを重視する。

【到達目標】

知的財産としての「創作」物について、①編集者、会社員、②研究者、③創作者、の三つの立場から検討し、先行する創作者、創作物に対する尊敬の念と、知的財産を保護する姿勢を身につける。「盗用」「剽窃」「盗作」など、知的財産権の侵害につながる危険のあるものは、さまざまな「差別」と同様に、語彙や表現の類似に目を奪われてしまうと、本質部分を見逃してしまう。表層的な部分に惑わされることなく、意味するところの本質を理解する姿勢との能力を身につけ、社会生活において、危険回避出来る考え方を獲得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「表現と社会」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「表現と社会」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

概念や定義を講義の後、実際に判決の出ている知的財産権侵害の裁判に対する院生による発表形式を取る。判例に顕れた課題点提出、疑義、解析、と、自身が裁判官であると仮定して、どのような視点から、どういった判決を出すのかをシュミレートする。これを受けての補足説明、全体討議。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	知的財産	知的財産とは何か？ 著作権、著作 者人格権とは何か？
第2回	知的財産と関わる三つの 立場	知的財産を守るため、創作者、編集者 (会社員)、研究者の三つの立場からア プローチする。
第3回	著作権侵害はなぜ起こ る？	創作における資料・史料とは何か。 「盗作」「盗用」「剽窃」の差異。「公刊 された事実」と「選択された事実」
第4回	体験した事例から考察す る。	法律論ではなく、編集者としての体験 から表現と著作権について考える。
第5回	表現と社会①――週刊誌 編集者としての体験から	FRIDAY編集者としての実例か ら、表現と社会を考える。
第6回	表現と社会②――男性 ヴィジュアル総合誌編集 者としての体験から	PENTHOUSE編集者としての実 例から、表現と社会を考える。
第7回	表現と社会③――文芸誌 編集者としての体験から	「群像」「小説現代」、単行本、文庫本編 集者としての体験から。
第8回	表現と社会④――文芸分 野責任者としての体験か ら	現場の立場と責任の取り方を例とし て、何が守られるべきかについて考察 する。
第9回	知的財産をめぐる訴訟例 を検討する。	実例の分析。写真表現、立体表現、絵 画表現、言語表現など表現方法・分野 による差異を考える。
第10回	院生①による解析	関心を持った知的財産訴訟について、 担当者①が課題や疑問点の提出。判決 への賛否、分析、説明、討論。
第11回	院生②による解析	関心を持った知的財産訴訟について、 担当者②が賛否、分析、説明、討論。
第12回	院生③による解析	関心を持った知的財産訴訟について、 担当者③が賛否、分析、説明、討論。
第13回	SNS 時代の新たな危険	電子書籍、SNS と知的財産権。SNS に潜む危険。 犯罪者とならないために。
第14回	総括	知的財産を守る立場での総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講座後半においての院生発表に向けて、知的財産権裁判の中から自身の関心のある事例探し。

【テキスト（教科書）】

特に使用しません。

【参考書】

参考書は指定しません。インターネット、TV、新聞等で、知的財産に關するニュース、記事について関心を持ち、よく理解して注意深く考える。ヘッドラインのみでなく、記事本文を読み込み、判らない単語、知識について、調べておく。日常生活の中にある、さまざまな知的財産を見つけ出す。

【成績評価の方法と基準】

平常点30点、発表50点、発表や討議における積極的な参加20点。

【学生の意見等からの気づき】

座学に陥らないよう注意し、常に問いかけを行う。

【学生が準備すべき機器他】

自宅その他のインターネット環境。

【その他の重要事項】

週刊誌や総合ビジュアル誌の編集者、文芸・文庫分野の現場、あるいは編集責任者として、数々の著作権侵害、知的財産権や差別表現等の現場を経験しており、法律家とは違った現場での対応や判断とその基準を示すことが出来る。これはメディア業界はもとより、一般企業においても、現場レベルから求められる日常的な判断力の育成について指針を示すことが出来、法律論から来る判断とはしばしば対立する企業としての論理、決断について、伝えることで、社会人としての第一歩に資することが出来る。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域（現職）> 日本文化を海外に発信するべく、若い世代の文化交流と海外の日本語教育の普及、支援に努める公益財団法人国際文化フォーラム代表理事 常務理事。

前職は文芸分野（フィクション）を統括する講談社文芸局長。

<主要研究業績（経歴）>

群像編集部、PENTHOUSE 編集部、FRIDAY 副編集長、小説現代副編集長、文庫出版部次長、文庫出版部長、文芸局次長兼文芸図書第二出版部長、文芸局長、文芸局長兼文芸文庫出版部長、文芸局長兼群像編集長。

【Outline and objectives】

Pablo Picasso, who is the one of great artist, painter, said " Good artists copy, Great artists steal". Can we say, that we understand what his meaning. We must respect the author and writer, in their expression methods they already have done and the word they have chosen. What is a plagiarism ?

In the expression, which is it to steal ? I don't want you to learn the correct answer. We should study the process of thinking, how not to infringe on rights in literature, in scenario, in photo, in music, in painting, etc.

LIT500B2

編集理論

仲俣 暁生

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「編集」という行為がもつ創造的機能をさまざまな現代日本の雑誌の事例をもとに理解する。

【到達目標】

「編集」という行為の価値を理解することを通して、日本における出版メディアの現代史についての基礎的な知識を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「編集理論」においては「DPI」「DP3」に関連する、国際日本学インスティテュート「編集理論」においては「DPI」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義を中心としつつも、各自が課題を設定しての研究レポートや討論をおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	「編集」（エディターシップ）とは何か	この講義において取り扱う「編集」の範囲について確定し、全体のオリエンテーションとする。
第2回	編集されたメディアとしての「雑誌」	「雑誌」というメディアを編集という観点から概観する。
第3回	雑誌における「編集者」とはなにか	雑誌において「編集者（ <i>editor</i> ）」が担うさまざまな機能を理解する。
第4回	「雑誌」のケーススタディ①～文芸誌／論壇誌の場合	おもに文芸、論説などをあつかう雑誌を「編集」という観点から分析する。
第5回	「雑誌」のケーススタディ②～ビジュアル雑誌の場合	グラフィカルな要素をもつ雑誌を「編集」という観点から分析する。
第6回	「雑誌」のケーススタディ③～ジャンル雑誌の場合	特定のジャンルに根ざした雑誌を「編集」という観点から分析する。
第7回	「雑誌」のケーススタディ④～ミニコミ、ジンの場合	ミニコミやジンと呼ばれる「小さなメディア」を「編集」という観点から分析する。
第8回	「雑誌」における編集についての中間まとめと討議	ケーススタディ①から③までを受けて学生をまじえてディスカッションを行う。
第9回	「編集」の拡散	出版以外の世界に「編集」という行為が広がっていることを理解する。
第10回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ①～ワールドワイドウェブの登場	インターネット上における「編集」行為の場としてのWWWのもつ意義を理解する。
第11回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ②～ウェブ2.0以後	「ウェブ2.0」以後に起きたWWWの変質について「編集」という観点から理解する。
第12回	デジタルメディアにおける「編集」のケーススタディ③～ソーシャルメディア	ソーシャルメディア勃興による「編集」の危機について理解する。
第13回	あらたな「編集」に向けての討議	これまでの講義を受けて、現在のメディア環境のなかでどのような「編集」が可能かを討議する。
第14回	総まとめ	講義全体のまとめとレポートについてのガイダンスを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内で培った「編集」への問題意識をもとに、身のまわりの出版物やメディア環境をとらえかえすこと。具体的な出版物（雑誌や書物、ウェブサイト）およびそれを編集している人物（編集者）や出版主体について、つねに関心を抱くことが望まれる。

【テキスト（教科書）】

必要な教材は講義の際に配布する。とくに教科書は指定しないが、参考図書には自発的に目を通すことを推奨する。

【参考書】

・外山滋比古『新・エディターシップ』（みすず書房、2009）
 ・佐藤卓己編『青年と雑誌の黄金時代——若者はなぜそれを読んでいたのか』（岩波書店、2015）
 ・野中モモ、ばるぼら『日本のZINEについて知ってることすべて：同人誌、ミニコミ、リトルプレス—自主制作出版史1960～2010年代』（誠文堂新光社、2017）

・赤田祐一、ばるぼら『20世紀エディトリアル・オデッセイ：時代を創った雑誌たち』（誠文堂新光社、2014）

・仲俣暁生『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

・岡本真、仲俣暁生編『ブックビジネス2.0～ウェブ時代の新しい本の生態系』（実業之日本社、2010）

【成績評価の方法と基準】

講義に対する姿勢＝30%、自主課題への取り組み＝30%、最終レポート＝40%

【学生の意見等からの気づき】

今季からの講義のため現時点ではなし。

【学生が準備すべき機器他】

とくになし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>出版論、メディア論

<研究テーマ>雑誌研究、メディア環境論、現代日本文学論

<主要研究業績>

①『再起動せよと雑誌はいう』（京阪神エルマガジン社、2011）

②編著『「電子社会」誕生～日本語ワープロからインターネットまで』（晶文社、1998）

③『極西文学論』（晶文社、2004年）

【Outline and objectives】

To understand the creative function of "editorship" through the case studies of various magazines in modern Japan.

LIN500B7

英語発音法 I

高橋 豊美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「英語発音法 A/B」・「英語発音法 I / II」の目的は、個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶことである。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

この「英語発音法 A」・「英語発音法 I」では、分節音の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。
 ・分節音の体系、分布、音声変化について、理論的に説明できる。
 ・発話を聞いて、分節音を発音記号で正確に書き取ることができる。
 ・発音記号を適切な発音で読むことができる。
 ・与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「英語発音法 A」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「英語発音法 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語を主な対象とし、個々の分節音の調音的・音響的特徴、分節音の体系について学んだ上で、授業計画に示すように分節音がかかわるさまざまな音声現象の仕組みを理解する。

配付資料を使用して理論の解説を行い、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聞き取り、発音記号による発話モデルの作成などの練習などを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 01 回	授業案内	授業の概要／参考文献
第 02 回	音声の基礎	発声・聴覚・音響の仕組み
第 03 回	母音と子音	音素論／母音の調音的特徴／子音の調音的特徴／音声の分類
第 04 回	音節の機能	分節音と超分節音／リズムの基本単位／分節音現象の構造記述
第 05 回	音節構造	音声変化／押韻／リズム
第 06 回	音配列	音節構造と音声分布／音節区分
第 07 回	音節の変化	音節子音／音節圧縮
第 08 回	母音の変化	弱化／中和／短縮
第 09 回	弱形	引用形と弱形／弱形の種類
第 10 回	連結と脱落	語境界を挟む音のつながり／子音の連続における発音の簡略化
第 11 回	交替と挿入	語境界を挟む子音の同化／歯茎破裂音の挿入
第 12 回	地域的な音声変化	母音体系／声門音化／r の現れ方
第 13 回	総括	前回までの授業内容のまとめと考察
第 14 回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。
 この授業では、10 回の課題が設けられている。この課題は発音モデルの作成をとおして知識の定着を図るとともに応用力を伸ばすことを目的とする。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用して丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。
 授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聞き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary* (third edition). London: Longman.
 ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.

・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English* (8th edition). London: Routledge.

・BBC Learning English: Pronunciation Tips < <http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/grammar/pron/> >

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み (35 %)、課題 (35 %)、試験 (30 %) を基準とし総合的に成績を評価する。

・授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

授業中に課題へのフィードバックの時間が十分にとれなかったため、次年度は事前に音声教材を配信して、反転授業の形式を部分的に取り入れることを考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育

<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston / Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・Toyomi Takahashi (2008). Unique Path. 『音韻研究』2008 (第 11 号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 『弁別素性理論』. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 『音韻理論ハンドブック』. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). *Constraint interaction in Aranda stress*. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins*. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

Together with English Pronunciation B (English Pronunciation II), English Pronunciation A (English Pronunciation I) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses segmental aspects of English pronunciation. Its topics include the articulatory features of individual sounds, their accentual variations, the syllable structure, the distribution of sounds, and connected speech phenomena (lenition, alteration and insertion). These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

LIN500B7

英語発音法Ⅱ

高橋 豊美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「英語発音法A/B」・「英語発音法Ⅰ/Ⅱ」の目的は、個人の力量に依存する「習うより慣れる」という方法ではなく、「十分に習ってから慣れる」ことで効率良く発音・聞き取りの技能を高める方法を学ぶことである。これにより、履修者自身の英語コミュニケーション・スキルの向上が期待できる。また、英語教員を志す学生には、効果的な発音・リスニングの教材を準備するための知識を得る機会にもなるはずである。

<講義題目>

英語音声の記述・分析と発音の実践的知識・技術の習得

【到達目標】

この「英語発音法B」・「英語発音法Ⅱ」では、韻律の特徴を理解し、その知識を実践に反映できる技術の習得を目指す。到達目標は次のとおりである。

- ・音節の強さと発音の特徴、強勢の配置と役割、イントネーションのパターンと機能について、理論的に説明できる。
- ・発話を聞いて、強勢とイントネーションを含めて発音記号で正確に書き取ることができる。
- ・発音記号を適切な発音で読むことができる。
- ・与えられた英文について、音声変化を予測し、発音モデルを示すことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「英語発音法B」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「英語発音法Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業では、英国標準英語（*Received Pronunciation*）を主な対象とし、日本語との比較を適宜行いながら、リズムが形成される仕組みと、イントネーションの形式と機能を学び、韻律を含めた基本的な発話モデルの組み立てや、談話分析の方法を理解する。

配付資料を使用して理論の解説を行い、さらに、その理解を実際に応用できる力を身につけるために、音声教材を使用した発音・聞き取りの練習、発音記号で発話モデルを提示したり発話を書き取ったりする練習などを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業案内/語・句強勢	授業概要/参考文献/強勢の音声的特徴/複合語と句の強勢
第2回	文強勢（理論）	強勢移動/文強勢の配置/韻脚
第3回	文強勢（実践）	文強勢モデルの記述と実践
第4回	イントネーション概説	イントネーションの形式と機能/音調アクセント
第5回	イントネーション理論(1)：声調	イントネーション句の構成/核声調
第6回	イントネーション理論(2)：調性	イントネーション句の機能
第7回	イントネーション理論(3)：核配置	イントネーション句の焦点/核配置と焦点領域
第8回	イントネーション理論(4)：音調曲線	イントネーション句の頭部と核声調の組合せ
第9回	イントネーションの意味(1)：下降声調	下降声調の表す意味と用法
第10回	イントネーションの意味(2)：非下降声調	非下降声調の表す意味と用法
第11回	イントネーションの連続	複文・重文の音調曲線/対照的な要素を含む文の音調曲線
第12回	イントネーションの定型	慣習的な音調曲線
第13回	課題報告、試験	音声現象の理論的記述と実践
第14回	展望	課題と試験の解説/韻律のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

資料は事前に配布されるので、授業に臨む前に内容を確認すること。この授業では、10回の課題が設けられている。この課題は発音モデルの作成をおして知識の定着を図るとともに応用力を伸ばすことを目的とする。配布資料と授業内容をしっかりと復習した上で、最初は何も資料等を参照しないで取り組み、それから資料や辞書を利用して丁寧に見直しを行うこと。その際、最初に間違えたり記入できなかったところは、赤字で訂正・加筆をすることが望ましい。（訂正・加筆箇所の多寡は評価に影響しない。）提出された課題は担当教員がチェックと評価を行った上で返却される。チェックを受けた部分をよく確認し、作成したモデルの発音練習を行うこと。

授業で学ぶ知識と技術を実践で活かすには課外の積極的な取組が不可欠である。上記課題のほかに、授業で適宜示す参考資料やウェブサイトを利用するなどして、発音・聞き取りの練習を重ねることが望ましい。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用せず、配布資料にそって授業を進める。

【参考書】

・Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
 ・Tench, Paul (2011) *Transcribing the Sound of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
 ・Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary (third edition)*. London: Longman.
 ・Cruttenden, Alan (2014) *Gimson's Pronunciation of English (8th edition)*. London: Routledge.

【成績評価の方法と基準】

授業への取り組み (35%)、課題 (35%)、試験 (30%) を基準とし総合的に成績を評価する。

・授業への取り組みでは、練習問題の解答や小テストの成績と、授業中の発言・質問の頻度と内容を、総合的に評価する。授業外の学習活動（授業に臨むための準備）を欠かさず、積極的な姿勢で授業に臨むこと。

・課題では、授業で学んだ基礎を発展させて発話モデルを示す力を評価する。授業内容を十分に確認しながら、また、辞書で丁寧に発音を調べながら取り組むこと。

・試験では、授業で学んだ知識の定着度と技術の修練度を評価する。実技を含むので、毎回の授業を時間をかけて復習しておくこと。

【学生の意見等からの気づき】

授業中に課題へのフィードバックの時間が十分にとれなかったため、本年度は事前に音声教材を配信して、反転授業の形式を部分的に取り入れることを考えている。

【その他の重要事項】

この授業は「英語発音法A」・「英語発音法Ⅰ」の内容を前提としている。「英語発音法A」・「英語発音法Ⅰ」を履修していない場合は、授業が始まるまでに、参考書に挙げた Tench (2011) の Part 1 をよく読んで理解しておくこと。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

音声学、音韻論

<研究テーマ>

音韻理論、英語音声学・音韻論、日本語音声学・音韻論、英語教育

<主要研究業績>

・Toyomi Takahashi (2014). *Identity avoidance in the onset*. Nasukawa, Kuniya & Henk van Riemsdijk (eds.) *Identity Relations in Grammar*. Boston/Berlin: De Gruyter Mouton. 101-120.

・Toyomi Takahashi (2008). *Unique Path*. 『音韻研究』2008 (第11号). 3-10.

・高橋豊美 (2005). 弁別素性理論. 西原哲雄・那須川訓也 (編著) 音韻理論ハンドブック. 英宝社. 131-142.

・Toyomi Takahashi (1999). *Constraint interaction in Aranda stress*. In Hannahs, S. J. & Mike Devenport (eds.) *Issues in Phonological Structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 151-181.

【Outline and objectives】

The goal of this course is to acquire practical knowledge and skills of English pronunciation through studying the features of spoken English as well as practicing its models.

Together with English Pronunciation A (English Pronunciation I), English Pronunciation B (English Pronunciation II) aims to study an effective and efficient method of improving oral/aural communication skills by well understanding the English sound system prior to practical exercises.

This course discusses prosodic aspects of English pronunciation. Its topics include the location and interpretation of stress in different domains (word/phrase/sentence), the components of intonational phrase and their pitch patterns, the location of nuclear accents and their focusing function, and the types and usage/meaning of tunes. These topics are first theoretically explained and then this knowledge is put into practice by describing and analysing recorded materials and by practicing pronunciation exercises.

This course should enable students to observe and improve their own pronunciation skills. For those who aspire to be English teachers, this course should provide background knowledge useful for preparing effective materials to teach pronunciation/listening skills as well as teaching tips and techniques.

LIN500B7

行動科学方法論 I

石川 潔

<主要研究業績>

<http://www.i.hosei.ac.jp/~kiyoshi/research.html> を参照。

【Outline and objectives】

An introduction to research methodology in linguistic sciences, covering:

- Scientific construction and evaluation of theories

- Experimental design and statistical data analysis

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

言語研究の方法論としての以下の2つの入門的な把握を目指す。

・物理学と同じ意味における理論の科学的構築法および評価法

・実験設計およびデータの統計処理

<講義題目> 言語科学の研究に必要な方法論の修得

【到達目標】

自分の疑問を「科学」として追及可能な形にし、可能な複数の答え（仮説）を、初歩的な実験および統計学的な検定で比較できるようになること

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「言語科学方法論A」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「行動科学方法論I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義および（パソコン）実習

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	科学って何？	仮説、予測
第2回	経験科学で「証明」があり得ない理由	「仮説通りのデータ」は何を意味しないか
第3回	因果関係の主張の方法	科学的基準として要求されること
第4回	統計学の必要性	注目していない要因の効果の除去
第5回	統計学的検定の基本1	帰無仮説および対立仮説、有意性
第6回	統計ツール	Excel、ANOVA4、SPSS、R、etc.
第7回	統計学的検定の基本2	帰無仮説、有意性
第8回	記述統計	代表値、分散・標準偏差、など
第9回	実験計画の基本	被験者内要因と被験者間要因
第10回	t検定（その1）	被験者間要因の場合
第11回	t検定（その2）	1サンプルのt検定
第12回	t検定（その3）	被験者内要因
第13回	その他の検定法	初歩的な他の検定法の概観
第14回	fixed vs. random factor	subject/participant analysis & item analysis

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

パソコンの基本的な操作法の知識は事前に得ておくことが望ましい。わからない箇所は教員や周囲に質問すること。

また、身の回りの事柄（新聞やニュースなどで出てきた話も含む）を、授業内容を参照しつつ、見つめなおしてみる。

【テキスト（教科書）】

授業支援システムでハンドアウトおよびデータ・セットを配布。

【参考書】

A. F. Chalmers. (1976/1999). *What is this thing called Science?* (3rd ed.) Hackett.

大村 平. (1984). 実験計画と分散分析のはなし. 日科技連.

Howell, D. C. (2006). *Statistical Methods for Psychology*.

(6th ed.) Wadsworth.

Field, A. (2005). *Discovering Statistics Using SPSS*. Sage.Baayen, R. H. (2008). *Analyzing Linguistic Data*. Cambridge

University Press.

その他、適宜指示。

【成績評価の方法と基準】

学期末試験 100%

【学生の意見等からの気づき】

「有益な内容なので履修してよかった」と言っていただけなのは、授業の設置趣旨から言ってもありがたかったです。理解度をもっと上げられるように頑張ります。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムには、自分が普段アクセスするメールアドレスを登録しておくこと。

【その他の重要事項】

この授業は英文学専攻の言語系の院生全員が履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

理論言語学（統語論、意味論）、心理言語学（音声知覚、文理解）

<研究テーマ>

音声知覚の単位と様式、アスペクトの実時間処理、読みにおける視覚処理と音韻処理の関係

LIT500B7

西欧比較文学 I

山下 敦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

＜講義題目＞“世界文学”をめぐる考察
近年において音楽における“ワールド・ミュージック”観念の文学版として成立した“世界文学”とは、いかなる概念であるのかをまず把握する。そして、地球規模に広範な文学作品を受容するために把握すべき様々な心得を見出す。また、多くの地域で成立した文学作品に共通する背景及び構造の基本型を把握する方法を考察し、実例としての作品の講読を通じてそれらを確認する試みを行なう。

【到達目標】

この授業は、英語圏を含む外国の文学を世界文学という観点から読み解き、文学を通じて様々な国・地域のもつ文化の多様性を理解する能力を育成することを目的とする。そのために、文学作品を解釈するために知るべき基礎的な考察の方法と、実際の解釈の仕方について、実例の精読とともに学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「比較文学研究A」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「西欧比較文学I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業開始時に受講生間で担当を決めて、担当はその箇所の内容の正確な理解に努め、レジュメとともに報告をする。受講生は各自の理解に基づいて互いに検討を加える。その上で、著者の思考をより包括的に理解する。なお、扱うテキストは日本語訳による。いわば教員・受講者の協同作業を通じた日本語による立体的な“読書”を試みる。

なお授業全体の把握と理解のために比較文学研究A・Bを通年で履修することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	テキストの紹介とテーマ、授業の進め方についての説明
第2回	世界文学の概念	ダムロッシュ『世界文学とは何か?』の紹介
第3回	世界文学と流通	『ギルガメシュ叙事詩』をめぐる考察
第4回	世界文学と翻訳	メヒティルト『神性の流れる光』をめぐる考察
第5回	世界文学と生産	バヴィチ『ハザール事典』をめぐる考察
第6回	世界文学と21世紀	ダムロッシュ講演録
第7回	外国文学の読み方	神話・聖書・童話
第8回	英語文学読解のヒント1	シェイクスピア劇の影
第9回	英語文学読解のヒント2	洗礼・水と死と再生
第10回	世界文学に関する論のあり方	[対談] 世界は文学でできている
第11回	世界文学を読んでみる1	受講生による世界文学作品解釈1
第12回	世界文学を読んでみる2	受講生による世界文学作品解釈2
第13回	世界文学を読んでみる3	受講生による世界文学作品解釈3
第14回	まとめ	受講生による解釈の検討と反省

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に扱うテキストを熟読し、内容を把握した上で、それぞれが自身の理解を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』国書刊行会
トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』白水社
沼野充義『世界は文学でできている』光文社
辻原登『東京大学で世界文学を学ぶ』集英社文庫

【成績評価の方法と基準】

授業中の参加の度合い（30%）と期末レポート（70%）による

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ドイツ語圏の文学と芸術

＜研究テーマ＞世紀転換期ウィーンの文化

＜主要研究業績＞「アドルフ・ロースの感性 ― ウィーン世紀末建築家の内包した現代感覚と装飾 - 付：《翻訳》アドルフ・ロース『装飾と犯罪』」（共立女子大学総合文化研究所神田分室『研究叢書』2001年2月）

【Outline and objectives】

The students study the “world literature”. We read the several chapters of David Damrosch *What is world literature? intensively to understand this concept “world literature”, and then discuss about the thema, how to accept the foreign literatures in translation. The purpose of the class is to understand the diversity of the world-cultures through literary works.*

【Outline and objectives】

The students study the “world literature”. We read the several chapters of David Damrosch *What is world literature? intensively to understand this concept “world literature”, and then discuss about the theme, how to accept the foreign literatures in translation. The purpose of the class is to understand the diversity of the world-cultures through literary works.*

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<講義題目> “世界文学”をめぐる考察

“世界文学”とはいかなる概念であるのかをまず把握し、翻訳によって出会う文学への対処と意義を考察する。そして、広範な文学作品を受容するための心得を見出し、多くの地域で成立した文学作品に共通する背景及び構造の基本型を把握する方法を考察する。その後、実例としての作品の講読を通じてそれらを確認する試みを行なう。

【到達目標】

この授業は、英語圏を含む外国の文学を世界文学という観点から読み解き、文学を通じて様々な国・地域のもつ文化の多様性を理解する能力を育成することを目的とする。そのために、文学作品を解釈するために知るべき基礎的な考察の方法と、実際の解釈の仕方について、実例の精読とともに学ぶ。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

英文学専攻「比較文学研究B」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「西欧比較文学Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業開始時に受講生間で担当を決めて、担当はその箇所の内容の正確な理解に努め、レジュメとともに報告をする。受講生は各自の理解に基づいて互いに検討を加える。その上で、著者の思考をより包括的に理解する。なお、扱うテキストは日本語訳による。いわば教員・受講者の協同作業を通じた日本語による立体的な“読書”を試みる。

なお授業全体の把握と理解のために比較文学研究A・Bを通年で履修することが望ましい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方についての説明
第2回	翻訳文学の時間と空間	ダムロッシュ「ありあまるほどの世界と時間」
第3回	世界文学と流通	カノンの拡大
第4回	世界文学と翻訳	カフカの変容
第5回	世界文学と生産	世界の中の英語
第6回	外国文学の読み方1	リービ英雄 × 沼野充義：越境文学の冒険
第7回	外国文学の読み方2	リービ英雄『ヘンリー たけし レウィツキーの夏の紀行』
第8回	英語文学読解のヒント1	地理・南・季節
第9回	英語文学読解のヒント2	階級・アイロニー
第10回	世界文学に関する論	多和田葉子『エクソフォニー』
第11回	世界文学を読んでみる1	受講生による世界文学解釈1
第12回	世界文学を読んでみる2	受講生による世界文学解釈2
第13回	世界文学を読んでみる3	受講生による世界文学解釈3
第14回	まとめ	受講生による解釈の検討と反省

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回に扱うテキストを熟読し、内容を把握した上で、それぞれが自身の理解を準備して授業に臨むこと。

【テキスト（教科書）】

未定

【参考書】

デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』国書刊行会
トーマス・C・フォスター『大学教授のように小説を読む方法』白水社
沼野充義『世界は文学でできている』光文社
辻原登『東京大学で世界文学を学ぶ』集英社文庫
多和田葉子『エクソフォニー』岩波書店

【成績評価の方法と基準】

授業中の参加の度合い（30%）と期末レポート（70%）による

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ドイツ語圏の文学と芸術

<研究テーマ>世紀末ウィーンの文化

<主要研究業績>「アドルフ・ロースの感性 — ウィーン世紀末建築家の内包した現代感覚と装飾 - 付:《翻訳》アドルフ・ロース『装飾と犯罪』」(共立女子大学総合文化研究所神田分室『研究叢書』2001年2月)

OTR600B7

国際日本学演習 I

遠藤 星希

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『史記』精読】

司馬遷の『史記』を精読する。『史記』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、『源氏物語』にもその影響が色濃く見えるのみならず、その後の日本文学にも影響力を持ち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（三家注や瀧川資言『史記會注考證』等）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ、『史記』巻八十六「刺客列伝」を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深め、そこに描かれた人々の英知を吸収すると同時に、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『史記』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に類出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『史記』本文を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣA」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『史記』の本文を数行ずつ区切ってそれぞれ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『史記』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	ガイダンス（3）	「史」とは何か——『史記』から窺える本来の「史」観
第4回	『史記』精読（1）	担当者による発表と討論（1）
第5回	『史記』精読（2）	担当者による発表と討論（2）
第6回	『史記』精読（3）	担当者による発表と討論（3）
第7回	『史記』精読（4）	担当者による発表と討論（4）
第8回	『史記』精読（5）	担当者による発表と討論（5）
第9回	『史記』精読（6）	担当者による発表と討論（6）
第10回	『史記』精読（7）	担当者による発表と討論（7）
第11回	『史記』精読（8）	担当者による発表と討論（8）
第12回	『史記』精読（9）	担当者による発表と討論（9）
第13回	『史記』精読（10）	担当者による発表と討論（10）
第14回	『史記』精読（11）	担当者による発表と討論（11）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当部分について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめておく。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・点校本二十四史修訂本『史記』（中華書局、2014）
 - ・瀧川資言『史記會注考證』（松雲堂、1935）
 - ・吉田賢抗〔ほか〕著『史記』1-15（明治書院、1973-2014）
 - ・小川環樹〔ほか〕訳『史記列伝』（岩波文庫、1975）
 - ・小竹文夫、小竹武夫訳『列伝』1-4（ちくま学芸文庫、1995）
 - ・武田泰淳『司馬遷 史記の世界』（講談社文芸文庫、1997）
 - ・宮崎市定『史記を語る』（岩波文庫、1996）
- その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、講義内容の一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

時間意識・空間意識という側面からの分析を通じた、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討

<主要研究業績>

「唐代伝奇『定婚店』をめぐる一考察」（『青山語文』46号、2016・3）

「遣臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中国學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read Sima Qian's Shiji (The Records of the Grand Historian). Shiji is one of the most familiar Chinese classics that not only exerted strong influence on the Tale of Genji but also had enduring effects on the subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in literary Chinese (So-called Sanjia Zhu — three standard commentaries — and Shiki kaichu kosho by Sukenobu Takigawa). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and absorb wisdom of people described therein through close reading of Chapter 86, Biographies of Assassins, of Shiji, and develop basic skills for close reading of Chinese classic writings.

OTR600B7

国際日本学演習Ⅱ

遠藤 星希

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【『文選』精読】

梁の昭明太子が編纂した『文選』所収の詩を精読する。『文選』は平安時代の貴族にとって最も馴染み深い漢籍の一つであり、その後も日本文学に影響力をもち続けた。本授業では、漢文で書かれた注（李善注や五臣注など）を参照しながら、既存の翻訳を批判的に検討しつつ『文選』所収の詩を精読することを通して、古代中国の社会・文化に対する理解を深めつつ、漢文資料を読解するための基礎的なスキルを養う。

【到達目標】

1. 『文選』についての基礎的な知識を習得する。
2. 漢文資料を読解するために必要な基本的スキルを身につける。具体的には、漢文に頻出する語法について習熟し、参照すべき工具書（辞典・目録など）やデータベースにどのようなものがあるのかを把握する。
3. 漢文で書かれた注を参照しながら既存の訳を批判的に検討し、『文選』所収の詩を独自に解釈・鑑賞する力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文芸特殊研究ⅣB」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

最初の数回のみ講義形式、残りは演習形式で行う。『文選』所収の詩の中から比較的有名なものを精選し、一首ずつ担当者を決める。担当者はレジュメと資料を準備して発表し、その内容を元にして全員で討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス（1）	『文選』についての概説、参考文献の紹介および担当者の決定
第2回	ガイダンス（2）	発表の方法と文献・資料の調べ方についてのレクチャー
第3回	『文選』精読（1）	漢高祖「大風歌」
第4回	『文選』精読（2）	班婕妤「怨歌行」
第5回	『文選』精読（3）	謝靈運「登江中孤嶼」
第6回	『文選』精読（4）	「古詩十九首」より
第7回	『文選』精読（5）	曹操「短歌行」
第8回	『文選』精読（6）	陶淵明「雜詩」
第9回	『文選』精読（7）	潘岳「悼亡詩」より
第10回	『文選』精読（8）	阮籍「詠懷詩」
第11回	『文選』精読（9）	鮑照「東武吟」
第12回	『文選』精読（10）	謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」
第13回	『文選』精読（11）	無名氏「長歌行」
第14回	『文選』精読（12）	曹植「箜篌引」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表担当者はその準備、その他の受講者は発表者の担当する詩について予習し、事前に内容を把握した上で、疑問点や検討を要する箇所について整理しておく。授業後には討論で得た情報と意見を自分なりにまとめる。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）は使用しない。プリントを配布する。

【参考書】

- ・『文選』（上海古籍出版社、1986）
 - ・『文選』（中華書局、1977）
 - ・『六臣注文選』（浙江古籍出版社、1999）
 - ・小尾郊一・花房英樹『文選』（集英社、1974-1976）
 - ・内田泉之助・網祐次〔ほか〕『文選』（明治書院、1963-2001）
 - ・斯波六郎・花房英樹『文選』（筑摩書房、1963）
 - ・興膳宏・川合康三『文選』（角川書店、1988）
 - ・高橋忠彦・神塚淑子『文選』（学習研究社、1985）
- その他、適宜授業中に指示する。

【成績評価の方法と基準】

担当者としての発表内容（70%）、討論への参加度・貢献度・積極性（30%）。

【学生の意見等からの気づき】

授業中の討論にほとんど参加せず、聞いているだけの受講者が毎回確認できたので、質問や問題提起をしやすいような雰囲気を作り、場合によっては教員から受講者に質問して回答やコメントを求めるなど、全員参加型の授業となるように工夫をする予定である。

【その他の重要事項】

授業の進み具合によっては、事前に受講者に説明をした上で、講義内容を一部変更する可能性がある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

中国古典文学

<研究テーマ>

時間意識・空間意識という側面からの分析を通じた、中国文学・思想史上における李賀の定位の再検討

<主要研究業績>

「唐代伝奇『定婚店』をめぐって一考察」（『青山語文』46号、2016・3）

「遺臣のゆれる心——杉浦梅潭における主君の交代」（『明海大学教養論文集 自然と文化』25号、2014・12）

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」（『日本中国學會報』65集、2013・10）など

【Outline and objectives】

In this course, we will closely read poetry contained in the anthology Wen Xuan, which was compiled by Xiao Tong, a Crown Prince of the Chinese Liang Dynasty. Wen Xuan was one of the most familiar Chinese classics for aristocrats in the Heian period and has been influential in subsequent Japanese literature. In this course, we will critically examine existing translations in reference to commentaries written in Literary Chinese (Li Shan and Commentaries by Five Officials). In so doing, we seek to deepen our understanding on ancient Chinese society and culture and while developing basic skills for reading Chinese classical writings through close reading of poetry contained in Wen Xuan.

PHL500B7

西欧の思想 I

松井 久

【Outline and objectives】

This course introduces the history of philosophy. Its aim is to help students acquire the basic concepts and principles of philosophy indispensable to the specialized research.

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、古代から近現代にいたる、西洋の主要な哲学者たちの思想を学ぶ。専門的な哲学研究のための基礎的知識の修得が目的である。

【到達目標】

西洋哲学が取り組んできた諸問題とそれらに対する様々な解答を理解する。哲学の基礎概念を説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

哲学専攻「哲学基礎研究Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「西欧の思想Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講生との議論を重視しながら、講義形式で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	授業の概要と進め方
第2回	古代ギリシアの哲学(1)	ソクラテスとプラトン(1)
第3回	古代ギリシアの哲学(2)	ソクラテスとプラトン(2)
第4回	古代ギリシアの哲学(3)	アリストテレス
第5回	中世の哲学	アウグスティヌスとトマス・アクイナス
第6回	近世の哲学(1)	デカルト
第7回	近世の哲学(2)	スピノザ
第8回	近世の哲学(3)	ライプニッツ
第9回	イギリス経験論	ロック、バークリー、ヒューム
第10回	批判哲学とドイツ観念論	カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル
第11回	実証哲学	コント、ミル、リトレ
第12回	生成の哲学	ニーチェ、バルクソン、ドゥルーズ
第13回	現代の科学哲学	分析哲学、フランスのエピステモロジー
第14回	まとめ	授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

原典、参考書等を読んで適宜準備。

【テキスト（教科書）】

資料を配布。

【参考書】

さしあたり以下の入門書、事典をあげておろが、授業内で適宜紹介する。

入門書

伊藤邦武『物語 哲学の歴史 自分と世界を考えるために』、中公新書、2012年
 熊野純彦『西洋哲学史—古代から中世へ』、岩波新書、2006年
 熊野純彦『西洋哲学史—近代から現代へ』、岩波新書、2006年
 哲学事典
 『岩波哲学・思想事典』、岩波書店、1998年

【成績評価の方法と基準】

授業内で扱った問題についてのレポートを学期末に提出してもらおう。上記「到達目標」で示した達成度を、授業での議論への参加(30%)、学期末レポート(70%)によって総合的に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>生物学の哲学、19世紀哲学
 <研究テーマ>生物学における個性性、環境概念の歴史的考察
 <主要研究業績>

論文

« *L'individualité biologique chez Bergson* », *Implications philosophiques, Bergson ou la science (Ebook)*, 2013, p. 8-26.

« *La "métaphysique positive" de Bergson et la pensée positive en France au 19e siècle* », *Tetsugaku : International Journal of the Philosophical Association of Japan*, vol. 1, 2017, p. 58-72.

« *Bergson dans l'histoire de la pensée biologique du milieu* », *フランス哲学・思想研究* 22号, 2017, p. 231-241.

翻訳

バルクソン『創造的進化』（合田正人氏と共訳）、筑摩書房、2010年

バディウ『推移的存在論』（近藤和敬氏と共訳）、水声社、2018年

PHL500B7

西欧の思想Ⅱ

上野 修

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

西洋一七世紀近世哲学の合理論プロジェクトを紹介します。具体的にはデカルト、ホッブズ、スピノザ、ライブニッツの哲学を扱います。近現代哲学の黎明期に存在したさまざまな試みの持つポテンシャルに気づくことが目的です。

【到達目標】

哲学的教養をふまえた哲学の基礎的なセンスを持てるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

哲学専攻「哲学基礎研究Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「西欧の思想Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と討議

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	一七世紀と哲学
第2回	デカルト（1）	確実性を求めて：『方法序説』『規則論』
第3回	デカルト（2）	方法的懐疑：『省察』
第4回	ホッブズ（1）	仮言推論（シミュレーション）の哲学：『物体論』
第5回	ホッブズ（2）	『契約』の論理：『市民論』『リヴァイアサン』
第6回	スピノザ（1）	真理の中で目覚める：『知性改善論』『短論文』
第7回	スピノザ（2）	外なき現実：『エチカ』
第8回	スピノザ（3）	倫理と道徳：『神学政治論』
第9回	ホッブズとスピノザ	国家論：反ユートピア論の二つの形態
第10回	ライブニッツ（1）	上の三人との対決
第11回	ライブニッツ（2）	充足理由：『形而上学叙説』
第12回	ライブニッツ（3）	表現システムとしての世界：『モノドロジー』
第13回	17世紀哲学と様相	現実概念の諸相：可能・不可能・必然・偶然
第14回	まとめと討議	近世哲学のポテンシャルについて討議

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の配布資料による予習と復習。最終レポートの準備。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

上野修『哲学者たちのワンダーランド―様相の十七世紀』（講談社 2013 年）

【成績評価の方法と基準】

最終レポート「近世哲学のポテンシャル」（100%）

【学生の意見等からの気づき】

本年度新規科目につきアンケートを実施していません

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 哲学哲学史
<研究テーマ> 西洋近世哲学
<主要研究業績>

『デカルト、ホッブズ、スピノザ―哲学する十七世紀』（講談社学術文庫）、『スピノザ『神学政治論』を読む』（ちくま学芸文庫）、『哲学者たちのワンダーランド 様相の十七世紀』（講談社）

【Outline and objectives】

Introduction to the 17th century philosophy. To understand various forms of Rationalism: Descartes, Hobbes, Spinoza and Leibniz.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播Ⅰ－1

阿部 朝衛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学の基礎である編年研究の方法を修得することを目的とする。

【到達目標】

編年研究の基礎的方法を理解し、各自が保有する資料へ適用し、課題・問題点の把握を目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅰ－1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テキストの型式学、層位学、編年に関する課題を日本語訳し、実践例を検討して、各自の保有する資料に方法を適用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	授業方針と基礎的方法論の説明
第2回	編年研究の基礎1	型式学的前提、属性の抽出と操作方法
第3回	編年研究の基礎2	地層累重・地層同定の法則を利用した遺構・遺物の時間軸上での配列
第4回	編年研究の基礎3	型式学、層位学、絶対年代測定値を基にした地域編年
第5回	実践的研究の検討1	モンテリウスの研究1
第6回	実践的研究の検討2	モンテリウスの研究2
第7回	実践的研究の検討3	セリエーション1
第8回	実践的研究の検討4	セリエーション2
第9回	論文の検討1	旧石器時代論文
第10回	論文の検討2	縄文時代論文
第11回	論文の検討3	弥生時代・他論文
第12回	資料の検討1	旧石器時代資料
第13回	資料の検討2	縄文時代資料
第14回	資料の検討3	弥生時代資料

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストの熟読、課題に関連する論文・各自の保有する資料の検討を求める。

【テキスト（教科書）】

Patterson, T. C. 1994 *The Theory and Practice of Archaeology*. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.

上記テキストは複写して配布する。

【参考書】

Renfrew, C. and Barn, P. 1991 *Archaeology: Theories, Methods, and Practice*. Thames and Hudson, London.

【成績評価の方法と基準】

発表（50%）とレポート（50%）をもとに評価。

【学生の意見等からの気づき】

日本語訳を基にした検討は、若干、早めに行う。院生の理解度に応じ、細かな課題を設定する。すでに履修した大学院生の場合、最初の授業で、授業の進め方の検討を行う。

【その他の重要事項】

資料の検討では、各自が保有する資料に主眼をおいて検討する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

『旧石器時代人の利き手の研究法』『日本考古学』23号 2007年

『道具の原材料と組織化』『考古学ジャーナル』560号 2007年

『石器のメンテナンス』『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

『石器製作の技能』『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年

六一書房

『遺跡形成における子供の役割』『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年 新潟県考古学会

『新潟県南部における石器材料資源環境』『帝京史学』25号 2010年

『子ども考古学の誕生』上下 『考古学雑誌』97-1・2 2012・2013年

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of the chronology in the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to make chronology of their own archaeological materials.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播 I - 2

阿部 朝衛

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

春学期で検討した各課題・方法に関連した資料の検討によって、課題・方法の有効性・援用方法を深く理解することを目的とする。

【到達目標】

春学期の課題における基礎的原理、方法を理解し、それを各自が保有する資料に十分適用できる能力の修得を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播 I - 2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

各自の保有する考古学資料に対して、春学期の課題・方法を適用して検討する。あるいは春学期の課題・方法をもとに論文書評を行う。その結果を従来の成果と比較し、課題・方法の意義を討議して考察する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	導入	春学期の課題・方法の整理
第 2 回	資料・論文の検討 1	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 1
第 3 回	資料・論文の検討 2	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 2
第 4 回	資料・論文の検討 3	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 3
第 5 回	資料・論文の検討 4	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 4
第 6 回	資料・論文の検討 5	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 5
第 7 回	資料・論文の検討 6	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 6
第 8 回	資料・論文の検討 7	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 7
第 9 回	資料・論文の検討 8	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 8
第 10 回	資料・論文の検討 9	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 9
第 11 回	資料・論文の検討 10	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 10
第 12 回	資料・論文の検討 11	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 11
第 13 回	資料・論文の検討 12	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 12
第 14 回	資料・論文の検討 13	課題・方法およびその適用の妥当性を討議 13

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

上記の課題・方法に関する資料を収集し、検討を加える。

【テキスト（教科書）】

春学期のテキストと同じ。

【参考書】

春学期の参考書と同じ。

【成績評価の方法と基準】

討議（50%）とレポート（50%）を基に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

各課題の原理・方法を大学院生の資料をもとにより集中的に討議する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本旧石器時代、縄文時代

<研究テーマ>

先史時代における技術伝承と社会化、子ども考古学、先史時代における石材利用形態

<主要研究業績>

「旧石器時代人の利き手の研究法」『日本考古学』23号 2007年

「道具の原材料と組織化」『考古学ジャーナル』560号 2007年

「石器のメンテナンス」『縄文時代の考古学』6 2007年 同成社

「石器製作の技能」『芹沢長介先生追悼考古・民族・歴史学論叢』2008年 六一書房

「遺跡形成における子供の役割」『新潟県の考古学』Ⅱ 2009年 新潟県考古学会

「新潟県南部における石器材料資源環境」『帝京史学』25号 2010年
「子ども考古学の誕生」上下 『考古学雑誌』97・1・2 2012・2013年

[Outline and objectives]

This course deals with the chronological and typological methods and theories of the archaeological materials. At the end of the course, participants are expected to understand many kinds of the methods and theories, and apply them to the participants' materials.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播Ⅱ－1

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようになる。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅱ－1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術を高める必要がある。本講義では考古学資料から情報を引き出すための方法論について、資料調査（整理・修復）・講読と発表を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

- 1) 考古学資料の整理・修復等の方法に関する実践・検討
- 2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の概要把握	対象資料の選定と資料整理に関わる予備調査
第3回	資料整理の実践（1）	土器の拓本
第4回	資料整理の実践（2）	土器の断面実測
第5回	資料整理の実践（3）	写真撮影
第6回	資料整理の実践（4）	事実記載
第7回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第1章）講読（1）
第8回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第1章）講読（2）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第2章）講読（1）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第2章）講読（2）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第3章）講読（1）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第3章）講読（2）
第13回	考古学資料の見学	博物館等での考古学資料の見学と解説
第14回	成果（レポート）提出と講評	実習成果レポートの提出、授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- 第1回 自己の実習計画の立案
- 第2回 選定した考古学資料に関する学習と整理方針のまとめ
- 第3回～第6回 実習内容の復習 用具・用材の特性の理解
- 第7回～第12回 テキスト指定箇所の精読と発表資料の作成
- 第13回 見学対象資料についての事前学習
- 第14回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（実習・講読への積極的な参加・平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30%（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」『法政考古学』第30集（法政考古学会 2004年）

「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第61号（法政大学史学会 2004年）

「小シールと日本考古学の黎明期」『小シールと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第40集記念論文集（法政考古学会 2014年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第43集（法政考古学会 2017年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS500B7

東北アジアの文化伝播Ⅱ-2

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

考古学資料を扱って研究を行うための理論と方法について実践的に学び身につけることを目標とする。実物資料から情報を引き出すこと、その情報から考古学的知見をいかに引き出すかがテーマとなる。

【到達目標】

物質文化に表象される人間集団を検討する際に、多面的な見方によって説明できるようにする。

実際の遺跡から出土した資料から必要な情報を引き出し、論文ならびに発掘調査報告書に必要な水準で記録することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学特殊研究Ⅳ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅱ-2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

近年における考古学資料の増加と検討の進行によって、原始・古代の全体像は大きく変わりつつある。物質文化によって復原される当時の社会を認識するためには、資料に対する見方や検討方法を一層整備することが求められる。また、研究論文を作成するためには、資料を表現する技術も高める必要がある。本講義では考古学資料から得られる情報を表現するための方法について、資料実測・文献講読と発表等を通じて実践・検討する。各テーマにおける受講者の実習・発表・討論を基礎とする。

1) 考古学資料の整理・作図の方法に関する実践・検討

2) 考古学の方法論に関する論文・書籍の講読

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第2回	実習資料の検討	対象資料の概要把握と整理方法の検討
第3回	資料整理の実践（1）	土器の実測
第4回	資料整理の実践（2）	石器の実測
第5回	資料整理の実践（3）	資料のトレース
第6回	資料整理の実践（4）	デジタルトレースの概要と実技
第7回	資料整理の実践（5）	挿図・図版の構成
第8回	考古学方法論に関する文献講読（1）	『考古学の方法』（第4章）講読（1）
第9回	考古学方法論に関する文献講読（2）	『考古学の方法』（第4章）講読（2）
第10回	考古学方法論に関する文献講読（3）	『考古学の方法』（第5章）講読（1）
第11回	考古学方法論に関する文献講読（4）	『考古学の方法』（第5章）講読（2）
第12回	考古学方法論に関する文献講読（5）	『考古学の方法』（第6章）講読（1）
第13回	考古学方法論に関する文献講読（6）	『考古学の方法』（第6章）講読（2）
第14回	成果（レポート）提出と	実習成果レポートの提出、授業の総括講評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 自己の実習計画の立案

第2回 発掘調査報告書等からみる報告計画のまとめ

第3回～第4回 実習内容の復習

第5回～第7回 トレースの復習と図化の完了

第8回～第13回 テキスト指定箇所精読と発表資料の作成

第14回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

V.G. チャイルド／近藤義郎訳（1981）『考古学の方法』河出書房新社

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林

ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社

その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力も求める。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20%（実習・講読への積極的な参加・平常点）

個別発表の水準 30%（発表資料の完成度、発表態度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解）

討論の成果 20%（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）

期末レポート（成果報告）30%（資料整理技術の精度、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、報告文の完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても検討・解説する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本考古学

〈研究テーマ〉

東日本弥生文化の研究

〈主要研究業績〉

「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」『法政考古学』第 30 集（法政考古学会 2004 年）

「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第 61 号（法政大学史学会 2004 年）

「小シールボルトと日本考古学の黎明期」『小シールボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to provide the students with knowledge on the theory of studies and the methods of archaeology.

HIS600B7

東北アジアの文化伝播Ⅲ－1

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅲ－1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

考古学資料を用いた実践研究の成果を受講者各々が発表し、内容について検討する。受講者は研究論文の体裁と形式をふまえたうえで、具体的な考古学資料を提示するとともに考古学の方法にもとづいて発表内容を作成する。実際の発表においてはレジュメをまとめ、研究の詳細を報告するものとする。次いで全員での討論に移り、発表者の研究目的と問題の所在がいかなるところにあり、設定された問題が適切であるかどうかを検討し、さらに取り扱う資料群の全体が議論にふさわしいものであるのか、提示された方法が適切であるか、考察および結論が正しいか等についても検討する。

また、本授業では各自の研究に関連する課題論文の講読も合わせて行うこととする。受講者は研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

これらの後に、自らの論文の構想発表指導を行う。

上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語るための準備を充分に行うことを期待する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 3 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 4 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 5 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 11 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 12 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 13 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 自己の学習計画の立案

第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習

第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習

第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末レポート（成果報告） 30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※〔実務経験のある教員による授業〕：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉
「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」『法政考古学』第 30 集（法政考古学会 2004 年）
「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第 61 号（法政大学史学会 2004 年）
「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）
「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）
「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠（壕）論集刊行会 2015 年）
「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS600B7

東北アジアの文化伝播Ⅲ－２

小倉 淳一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本考古学分野においてより専門的な論文を執筆する能力を身につけることを目標とする。実践的な研究発表を行い、なおかつ専門的な論文の内容について理解し検討することがテーマとなる。
考古学研究を実践的に行うことで、受講者の目指す論文の作成につながる視点と方法を涵養する。

【到達目標】

受講者の実践研究の発表の機会を通じて、修士論文の水準を理解するとともに、その執筆のために十分な方法上の実力が備わる。
先行研究を実践的に検討することで、研究方法や成果の提示方法を習得する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本考古学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東北アジアの文化伝播Ⅲ－２」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

考古学の分野で自らの論文を執筆する受講者に対して、論文構想の提示、研究上の最重要文献の講読、実践研究の報告などを行う。まず、自らの論文構想を提示し、具体的な資料検討状況についても報告し、それにもとづいた討議を行う。

次いで、今後の研究の核となる先行研究の成果について論文をもとに報告し、研究論文を読解してレジュメをまとめ、報告する。論文の主題、研究史、展開、資料操作、考察、結論などについて批判的かつ建設的な議論を展開することとする。

さらに、受講者それぞれの研究状況を具体的に報告し、討議を行う。上記のように各回を演習形式で行うので、発表者の扱う主題や内容については事前に予告するとともに受講者全員の予習を求め、活発な議論の展開を望む。扱う資料は考古学資料であり、各自が資料に語るための準備を充分に行うことを期待する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第 1 回	授業概要	概要紹介・授業計画の提示
第 2 回	論文構想発表（1）	受講者による論文構想の発表と討議（1）
第 3 回	論文構想発表（2）	受講者による論文構想の発表と討議（2）
第 4 回	論文構想発表（3）	受講者による論文構想の発表と討議（3）
第 5 回	論文構想発表（4）	受講者による論文構想の発表と討議（4）
第 6 回	論文講読発表（1）	受講者による論文講読の成果発表と討議（1）
第 7 回	論文講読発表（2）	受講者による論文講読の成果発表と討議（2）
第 8 回	論文講読発表（3）	受講者による論文講読の成果発表と討議（3）
第 9 回	論文講読発表（4）	受講者による論文講読の成果発表と討議（4）
第 10 回	研究実践発表（1）	受講者による実践研究の発表と討議（1）
第 11 回	研究実践発表（2）	受講者による実践研究の発表と討議（2）
第 12 回	研究実践発表（3）	受講者による実践研究の発表と討議（3）
第 13 回	研究実践発表（4）	受講者による実践研究の発表と討議（4）
第 14 回	成果提出と講評	期末レポートの提出と授業の総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第 1 回 自己の学習計画の立案
第 2 回～第 5 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第 6 回～第 9 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は指定文献の精読と関連分野の事前学習
第 10 回～第 13 回 発表者は発表資料の作成と発表準備、他の受講者は関連分野の事前学習
第 14 回 成果レポートの執筆・作成

【テキスト（教科書）】

発表形式の授業のため、特に指定しない。

【参考書】

コリン・レンフルー、ポール・バーン／池田裕ほか訳（2007）『考古学 理論・方法・実践』東洋書林
ブルース・G・トリッガー／下垣仁志訳（2015）『考古学的思考の歴史』同成社
その他、授業内で適宜指示する。関連文献を渉猟する能力は必須である。

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な貢献 20 %（平常点）
個別発表の水準 30 %（発表資料の完成度、発表態度、個別研究の完成度、文献要約の精度、問題点の指摘、総合的な理解・考察の程度）
討論の成果 20 %（指摘した問題点や読解にもとづく議論の展開、新たな視点・論点の提示、議論全体の総括）
期末レポート（成果報告） 30 %（問題設定の妥当性、研究史の扱い、資料解釈と関連資料の適切な位置づけ、考察の水準、学術文献としての完成度）

【学生の意見等からの気づき】

前年度実績なし（本科目では授業改善アンケートを実施しなかった）。

【その他の重要事項】

※受講人数や到達度によっては授業内容を変更することもあるので注意すること。

※【実務経験のある教員による授業】：担当者は博物館学芸員としての実務経験を有しており、授業では物質資料からの情報の引き出し方、それをもとにした研究の方法についても実践的に解説・指導する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉
日本考古学
〈研究テーマ〉
東日本弥生文化の研究
〈主要研究業績〉

「宮ノ台式土器にみる回転結節文の分布と変遷」『法政考古学』第 30 集（法政考古学会 2004 年）

「宮ノ台式土器にみる櫛描文の地域的変遷—印旛沼周辺地域の概要理解のために—」『法政史学』第 61 号（法政大学史学会 2004 年）

「小シーボルトと日本考古学の黎明期」『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』（同成社 2011 年）

「印旛沼周辺地域の宮ノ台式土器出土遺跡の変遷—壺形土器を中心として—」『法政考古学』第 40 集記念論文集（法政考古学会 2014 年）

「関東地方における弥生時代の溝」『論集 環濠集落の諸問題 2015』（環濠論集刊行会 2015 年）

「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営時期」『法政考古学』第 43 集（法政考古学会 2017 年）

【Outline and objectives】

The aim of this course is to acquire the ability to write a master's thesis by students doing research presentations on Japanese archeology.

HIS600B7

東アジアの律令文化 I - 1

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料（律や類聚三代格）、あるいは関連古文書などからわかる実例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけでなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史演習Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化Ⅰ-1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

春学期は第 21 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (1)	田令第 21 条六年一班条集解 A 部分の論理展開
第 3 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (2)	田令第 21 条六年一班条集解 B 部分の論理展開
第 4 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (3)	田令第 21 条六年一班条集解 C 部分の論理展開
第 5 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (4)	田令第 21 条六年一班条集解 D 部分の論理展開
第 6 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (5)	田令第 21 条六年一班条集解の条文構成の検討
第 7 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (6)	田令第 21 条六年一班条集解古記による大宝令の復原をめぐる (1)
第 8 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (7)	田令第 21 条六年一班条集解古記による大宝令の復原をめぐる (2)
第 9 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (8)	「六年一班」の解釈をめぐる (1)
第 10 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (9)	「六年一班」の解釈をめぐる (2)
第 11 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (10)	条里制の施行をめぐる
第 12 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (11)	班田制施行の実態
第 13 回	田令集解第 21 条六年一班条講読 (12)	虎尾説と明石説の比較検討
第 14 回	班田収授法のまとめ	半年間の講読を踏まえて班田制とは何かについて意見交換を行う。修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『新訂増補国史大系 令集解』（吉川弘文館）
鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』（岩波書店）、国立歴史民俗博物館 蔵 貴重典籍叢書〈歴史篇〉 第一巻～第六巻『令集解』。
その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家の間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているの
で頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

(専門領域)

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

(研究テーマ)

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

(主要研究業績)

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』(編著)、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMaker
による Database の Web 公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B7

東アジアの律令文化 I - 2

小口 雅史

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。基本史料としては土地法である田令について、その注釈書の集大成である、「田令集解」を、順次、条文配列に従って読み解いていく。その際に、六国史などの正史や他の法制史料(律や類聚三代格)、あるいは関連古文書などからわかる事例についても、おりにふれて考えていく。

【到達目標】

日本古代史の基本史料の一つである『令集解』を自力で読解し、研究に十分に活用できる能力を養うとともに、法制史料から社会の実態を読み取る方法を取得したり、中国の社会の実態と比較する方法を取得することを目的とします。単に発表者の報告を聞くだけでなく、常に報告者とは違った見方を試みて討論に持ち込む習慣を身につけてもらいます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

史学専攻「日本古代史演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化 I - 2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

秋学期は第 22 条より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の諸写本間の校合、書き下し、現代語訳、語句註、大宝令文の復原、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見などである。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】
なし / No

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第 2 回	田令集解第 22 条還公田条講読 (1)	田令第 22 条還公田条集解 A 部分の論理展開
第 3 回	田令集解第 22 条還公田条講読 (2)	田令第 22 条還公田条集解古記による大宝令の復原
第 4 回	田令集解第 22 条還公田条講読 (3)	田令第 22 条還公田条の意味
第 5 回	田令集解第 23 条班田条講読 (1)	田令第 23 条班田条集解 A 部分の論理展開
第 6 回	田令集解第 23 条班田条講読 (2)	田令第 23 条班田条集解 B 部分の論理展開
第 7 回	田令集解第 23 条班田条講読 (3)	田令第 23 条班田条集解 C 部分の論理展開
第 8 回	田令集解第 23 条班田条講読 (4)	田令第 23 条班田条集解 D 部分の論理展開
第 9 回	田令集解第 23 条班田条講読 (5)	田令第 23 条班田条集解古記による大宝令の復原
第 10 回	田令集解第 23 条班田条講読 (6)	校田とは何か
第 11 回	田令集解第 24 条授田条講読 (1)	田令集解第 24 条授田条集解 A 部分の論理展開
第 12 回	田令集解第 24 条授田条講読 (2)	田令集解第 24 条授田条集解古記による大宝令の復原
第 13 回	田令集解第 24 条授田条講読 (3)	課役とは何か
第 14 回	班田収授法のまとめ (2)	半年間の講読を踏まえて班田制とは何かについて意見交換を行う。修論執筆に資する内容にする。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

テキストはかなり難解なので、発表者はいうまでもないが、他の参加者も事前に必ず担当テキストを熟読しておくこと。

【テキスト(教科書)】

『新訂増補国史大系 令集解』(吉川弘文館)

鷹司本令集解マイクロフィルム紙焼

【参考書】

『日本思想大系 律令』(岩波書店)、国立歴史民俗博物館蔵 貴重典籍叢書〈歴史篇〉 第一巻～第六巻『令集解』。

その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表が中心となるが、難解な田令集解を構成する諸法家の説を正しく理解できたか、諸法家間の論点の違いを明確に示せたか、それにもとづいて田制についての論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているので頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

(専門領域)

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

(研究テーマ)

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

(主要研究業績)

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』(編著)、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文书研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録]のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

We will study the fundamental historical code "Deryo" and its annotation "Denryo-Shuge" in turn.

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅱ－1

小口 雅史

【授業の概要と目的(何を学ぶか)】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度との比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公開された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

史学専攻「日本古代史演習Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化Ⅱ－1」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本年度は田令集解第21条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

なし / No

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説。修論にむけての準備も含まれます。
第2回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(1)	日本田令第21条相当条文の比定と配列(1)
第3回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(2)	日本田令第21条相当条文の比定と配列(2)
第4回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(3)	日本田令第21条相当条文の比定と配列(3)
第5回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(4)	日本田令第21条相当条文の比定と配列(4)
第6回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(5)	日本田令第21条相当条文と対応しない理由(1)
第7回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(6)	日本田令第21条相当条文と対応しない理由(2)
第8回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(7)	日本田令第21条相当条文と対応しない理由(3)
第9回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(8)	日本田令第21条相当条文と対応しない理由(4)
第10回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(9)	均田制との比較(1)
第11回	天聖田令(日本令第21条相当)講読(10)	均田制との比較(2)
第12回	天聖田令(日本令第14条相当)講読(11)	均田制との比較(3)
第13回	天聖田令(日本令第14条相当)講読(12)	武徳霊、開元7年令と均田制
第14回	春学期の総括	唐代均田制と日本古代班田制の比較についての討論。修論テーマとの関わりについても指導します。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。

【テキスト(教科書)】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下(中華書局、2006年10月)

【参考書】

唐令拾遺(仁井田陞著、東京大学出版会)

唐令拾遺補(池田温編、東京大学出版会)

その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表70%、討論への参加30%。

発表が中心となるが、天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【その他の重要事項】

ゼミでの成果を何らかの形で活字化し学界へ公開することを検討しているの
で頑張ってください。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2008年、『エミシ・エブ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、「近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって」『古文書研究』66

2007年、「[在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録]のその後 - FileMakerによる Database の Web 公開の一例として」『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS600B7

東アジアの律令文化Ⅱ-2

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

東アジア古代世界では、社会の分析に際して、租税制度とならんで土地制度の分析が非常に重要な位置を占める。日本古代史研究においては、さらにそのモデルとなった唐の諸制度との比較が必須である。そこでこの演習では、日本の土地制度の直接の母法となった唐田令を、近年発見されて公刊された天聖令に基づいて比較研究することとする。今年度も併行して講読している田令集解に対応する天聖令部分を引き続き検討する。

【到達目標】

日本の田令は中国の田令を母法として作成されているので、どこが丸写しでどこが日本的なのかを、両者を比較しながら識別する能力を身につける。単に報告者の発表を聞くだけではなく積極的に自分の意見を述べるディベート能力を身につける。海外史料を自力で読み解く技術を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史演習Ⅳ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」「DP5」に関連、国際日本学インスティテュート「東アジアの律令文化Ⅱ-2」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本年度は田令集解第22条に対応する天聖令より開始する。あらかじめ条文ごとに担当を指定するので、上記の目標をふまえて事前に十分予習してから本研究に臨むことを期待する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整、概説
第2回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（1）	日本田令第22条相当条文の比定と配列
第3回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（2）	日本田令第22条相当条文の読解
第4回	天聖田令（日本令第22条相当）講読（3）	日本田令第22条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論テーマについての報告会を兼ねます。
第5回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（1）	日本田令第23条相当条文の比定と配列
第6回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（2）	日本田令第23条相当条文の読解（1）
第7回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（3）	日本田令第23条相当条文の読解（2）
第8回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（4）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（1）
第9回	天聖田令（日本令第223条相当）講読（5）	日本田令第21条相当条文と武徳令・開元7年令との比較（2）
第10回	天聖田令（日本令第23条相当）講読（6）	日本田令第23条相当条文と武徳令・開元7年令との比較。修論完成にむけての報告会を兼ねます。
第11回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（1）	日本田令第24条相当条文の比定と配列
第12回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（2）	日本田令第24条相当条文の読解
第13回	天聖田令（日本令第24条相当）講読（3）	日本田令第24条相当条文と武徳令・開元7年令との比較
第14回	秋学期の総括	唐代の田種と吐魯番文書にみえる田制実例との比較を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に取り組んでおく研究内容としては、対象条文の復原根拠となった関連史料間の異同の確認、書き下し、現代語訳、語句註、日本令との比較、唐令拾遺の成果との比較、対象条文に基づく論点整理、先行研究の紹介、自分なりの意見のまとめなどが要求される。

【テキスト（教科書）】

天一閣博物館・中国社会科学院歴史研究所天聖令整理課題組校證『天一閣藏明鈔本天聖令校證 附 唐令復原研究』上・下（中華書局、2006年10月）

【参考書】

唐令拾遺（仁井田陞著、東京大学出版会）

唐令拾遺補（池田温編、東京大学出版会）

その他、条文内容に応じて随時指示する。

【成績評価の方法と基準】

出席 20%、発表 50%、討論への参加 30%。

発表が中心となるが、天聖令の正確な理解ができたか、日本令との違いを明確に示せたか、それにもとづいて土地制度についての唐代の論理を正しく構築できたかを重視する。また討論においては自主的な発言の内容を重視する。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし

【学生が準備すべき機器他】

とくになし

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

日本古代史・法制史・北方史・国際日本学

〈研究テーマ〉

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

〈主要研究業績〉

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、『近時の在吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文书研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

In the ancient East Asia, when analyzing the society, analysis of the land system occupies a very important position.

We will study the fundamental historical code "Deryo", while complying with the corresponding Old Chinese code "Tensei-Denrei".

HIS500B7

王権の政治文化 I

春名 宏昭

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「平安時代と貴族社会」と題して講義します。平安前期の改革の時代の国家・政治のあり方、貴族たちのあり方を理解するようつとめます。

【到達目標】

平安時代の貴族社会のあり方の把握を目指します。基礎的な知識を得、その上でそれぞれの事象に興味を持ってアプローチし、国家・政治の本質を理解できる能力を身につけることができます。平安時代の官僚のあり方は現代の日本にも通じるオンタイムの問題ですから、現代の政治が抱える問題点も理解できるようになるでしょう。そのような視点から課題レポートにも取り組んで下さい。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史研究 I」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「王権の政治文化 I」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

平安前期の改革の時代から平安中期の王朝貴族の時代への移行期間に関しては、嵯峨天皇・藤原良房・藤原基経・宇多天皇に注目して国家・政治のあり方の変化を見ていきます。この授業では、一般啓蒙書に書かれることのない貴族たちのあり方を見ていきます。

講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組む必要があります。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	ガイダンス	授業の概要の説明
第 2 回	平安前期の改革	光仁朝～嵯峨朝
第 3 回	もうワンランク上の国家	新しい国家の目指すもの
第 4 回	官人の性格変化	摂関政治への序奏
第 5 回	嵯峨天皇（1）	良吏政治
第 6 回	嵯峨天皇（2）	太上天皇制の改変
第 7 回	藤原良房（1）	摂関政治
第 8 回	藤原良房（2）	安定の時代へ
第 9 回	藤原基経（1）	陽成天皇の廃位
第 10 回	藤原基経（2）	光孝天皇の擁立
第 11 回	藤原基経（3）	阿衡の紛議
第 12 回	摂関時代（1）	貴族の時代
第 13 回	摂関時代（2）	推移と展開
第 14 回	平安時代概観	これまでの授業をふまえて平安時代を概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

平安時代に関して問題意識を持つには、その前提として平安前期・中期の知識が必要ですし、奈良時代から平安時代への推移についても概括的な理解が必要です。それらを得るためには、どれでもいいですから参考書（該当巻）を読んでみましょう。ただし、著者の理解・興味関心によって内容は必ずぶん違います。

この講義では、現在の通説的理解がいかに不十分（言葉足らず）かということ述べます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。また、講義の対象とする嵯峨朝の前の時代を知るには私の『平城天皇』（吉川弘文館人物叢書）を、延喜年間以降については『岩波講座日本歴史』第5巻の「摂関時代と政治構造」を読んで下さい。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

中央公論社（文庫）・小学館（文庫）・集英社・講談社（文庫）から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波書店の『シリーズ日本の古代史』（新書）、『岩波講座日本歴史』の該当巻。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。

基準は平常点 30 %、レポート 70 %です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史
〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制
〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』(吉川弘文館)

『平城天皇』(吉川弘文館)

【Outline and objectives】

This lecture is attended under the heading of "The Heian period and the aristocracy". We try to understand how should be the nation and aristocrats in the former term of the Heian period when the political innovation was extensively carried out.

HIS500B7

王権の政治文化Ⅱ

春名 宏昭

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「続日本紀の史科学」と題して講義を行ないます。八世紀の日本は、当時先進の文化を誇った中国のような国家建設を目標に掲げて邁進していました。『続日本紀』を題材に史料への取り組み方を学び、日本古代史における歴史の流れ、あり方の把握を目指します。

【到達目標】

続日本紀の記事を数点取り上げ、史料へのアプローチの仕方を習得することができる。この授業を通して、奈良時代の基礎的な理解を身につけ、他の史料に対してもつねに興味を持って臨めるようになり、それを論理的に解析し正しい理解に到達できる技能を身につけられる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本古代史研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「王権の政治文化Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

取り上げた記事を糸口に、その背後にある問題点を探り出し検証していきます。講義ですが、聴いているだけでは話が耳を通り抜けていきますから、問題意識をもって授業に取り組むことが必要です。授業を聴いて問題意識をもった後、参考書等をあらためて読み直すと新しい理解が見えてきます。就職活動や教育実習等あるでしょうが、十分な聴講（もちろん遅刻は含まず）が最低限の必須条件です。心して下さい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	講義の概要の説明
第2回	天平二年の太政官奏(1)	続日本紀の3つのテキスト
第3回	天平二年の太政官奏(2)	天平二年六月甲寅朔条の紹介
第4回	天平二年の太政官奏(3)	関連史料の検討
第5回	税司主鑑(1)	大宝令施行直後の地方政治
第6回	税司主鑑(2)	大宝二年二月乙丑条の紹介
第7回	税司主鑑(3)	関連史料の検討
第8回	皇太妃と中宮職(1)	大宝元年七月壬辰条の紹介
第9回	皇太妃と中宮職(2)	天皇のキサキ(妃と夫人・嬪)
第10回	慶雲元年の公廩銀(1)	慶雲元年七月庚子条の紹介
第11回	慶雲元年の公廩銀(2)	関連史料の検討
第12回	衛士の代易(1)	和銅四年九月甲戌条の紹介
第13回	衛士の代易(2)	関連史料の検討
第14回	奈良時代史概観	これまでの授業内容をふまえて奈良時代を概観

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

取り上げた記事が含む意味を理解するためには、それぞれの記事に現れた事象の時代背景を知る必要があります。そのためには、どれでもいいですから参考書（奈良時代該当巻）を読んでみて下さい。著者の理解・興味関心によって内容はずいぶん違います。

この講義では、現在の通説的理解がいかにも不十分（言葉足らず）かということ述べていきます。それを確認するためにも参考書（該当巻）を読んでおいて下さい。

【テキスト（教科書）】

特に定めません。授業に必要な史料はプリントして配布します。

【参考書】

岩波書店・新日本古典文学大系『続日本紀』が基本です。他に一般啓蒙書として、中央公論社(文庫)・小学館(文庫)・集英社・講談社(文庫)から出版された『日本の歴史』や、吉川弘文館の『日本の時代史』・『日本古代の歴史』、東京大学出版会の『日本史講座』、岩波新書『シリーズ日本の古代史』、『岩波講座日本歴史』の該当巻があります。

【成績評価の方法と基準】

平常点とレポートで評価します。基準は平常点30%、レポート70%です。レポートで取り上げるテーマは学生各人で選んでよいことにしていますが、どのようなテーマを選んでも授業の理解の度合いはおのずとレポートの内容にあらわれます。

【学生の意見等からの気づき】

板書は教師の書いたものをただ写すだけでは身につけません。人物名・事象名・年号や学術用語などのキーワードを書きますから、それらも含めて、自分で工夫して自分なりのノートを作って下さい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本古代政治史
〈研究テーマ〉日本古代の皇権と官制
〈主要研究業績〉

『律令国家官制の研究』(吉川弘文館)
『平城天皇』(吉川弘文館)

[Outline and objectives]

This lecture is attended under the heading of "The world of Shokunihongi". In the way of taking up some descriptions of Shokunihongi, we were to learn how to grapple with problems in order to understand how Japan changed in the ancient regime.

HIS500B7

日本の歴史と宗教

及川 亘

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

日本中世後期の貴族の旅行記を読む。

【到達目標】

中世人の旅行について学ぶとともに、古記録を読む基礎的な能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

史学専攻「日本史学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の歴史と宗教」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

「言継卿記」弘治二年(1556)の読解を輪読によって進める。参加者に担当箇所を割り当て、担当者の準備した史料読解や解説について討議する。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業方法と使用テキストとに関する説明。輪読担当箇所の決定。
第2回	「言継卿記」弘治二年九月十一日条を読む	担当者による報告と討論
第3回	「言継卿記」弘治二年九月十一日条を読む(続き)	担当者による報告と討論
第4回	「言継卿記」弘治二年九月十二日条を読む	担当者による報告と討論
第5回	「言継卿記」弘治二年九月十三・十四日条を読む	担当者による報告と討論
第6回	「言継卿記」弘治二年九月十五・十六日条を読む	担当者による報告と討論
第7回	「言継卿記」弘治二年九月十七・十八日条を読む	担当者による報告と討論
第8回	小括	第7回までの読解について討論
第9回	「言継卿記」弘治二年九月十九・二十日条を読む	担当者による報告と討論
第10回	「言継卿記」弘治二年九月二十一日条を読む	担当者による報告と討論
第11回	「言継卿記」弘治二年九月二十二日条を読む	担当者による報告と討論
第12回	「言継卿記」弘治二年九月二十三日条を読む	担当者による報告と討論
第13回	「言継卿記」弘治二年九月二十四日条を読む	担当者による報告と討論
第14回	まとめ	まとめの討論

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

報告担当者は、担当箇所について語彙や背景知識を十分に調査検討し、表面的な読解にとどまらず、論理的に踏み込んだ解釈を試みる事が求められる。もちろん担当者以外にも予習することが求められる。

【テキスト (教科書)】

刊本『言継卿記』第三(続群書類従完成会)

※必要箇所については初回にプリントを配布する。

【参考書】

『静岡県史』資料編7・8、高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世 史料の機能、日本とヨーロッパ』(東京大学出版会、2017年)、今谷明『言継卿記』(そしえて、1980年)、同『戦国大名と天皇』(講談社学術文庫、2001年)

【成績評価の方法と基準】

平常点による(100%)。

【学生の意見等からの気づき】

単に大体の内容が分かるという大雑把な解釈ではなく、一語一語を大切に丁寧に丁寧な解釈を行うとともに、関連史料の紹介などを通じて、史料に記述された内容の社会的な背景までイメージできるようにしたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本中・近世史

<研究テーマ>

中世・近世の都市・流通史研究、中近世移行期の社会経済変動の研究

<主要研究業績>

論文「旅行者と通行証—関所通過のメカニズム」高橋慎一郎・千葉敏之編『移動者の中世—史料の機能、日本とヨーロッパ—』(東京大学出版会、2017年)
編著『薬師寺の中世文書』東京大学史料編纂所研究成果報告2015-3、2016年
論文「中世の戦争と商人」(高橋典幸編『生活と文化の歴史学5 戦争と平和』竹林舎、2014年)

論文「町の経済—算用帳にみる京都の人的結合—」（高橋慎一郎・千葉敏之編『中世の都市—史料の魅力、日本とヨーロッパ—』東京大学出版会、2009年）
論文「戦国期の薬師寺と唐招提寺」（勝俣鎮夫編『寺院・検断・徳政—戦国時代の寺院史料を読む—』山川出版社、2004年）

【Outline and objectives】

Reading of a Travel Journal Written by an Aristocrat in Medieval Japan

HIS500B7

古文書から読む江戸社会・入門編 I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

近世史研究において、くずし字の読解能力を身につけていることは、研究の幅を大きく広げると同時に、学問をより深めるものとなる。本授業は、基礎的な読解能力を養成することを目的とする。あわせて基本的な近世文書の種類を覚えていってもらいたい。

【到達目標】

- ①くずし字の読解能力を身につける。
- ②基本的な近世文書の種類を覚える。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近世史科学研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「古文書から読む江戸社会・入門編Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

講義と演習を併用するかたちをとる。古文書のコピーを配布するので、まずは自力で読解に取り組む。授業時に割り当てるので、学生はこれを板書し、答え合わせをする。教師は当該古文書について解説する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	くずし字の辞典について
第2回	古文書解読入門	近世史科学講義
第3回	検地帳読解（1）	数字を覚えよう
第4回	検地帳読解（2）	単位を覚えよう
第5回	武家屋敷組合名簿読解（1）	名前を覚えよう
第6回	武家屋敷組合名簿読解（2）	通称を覚えよう
第7回	領地宛行状読解	大名家領の安堵
第8回	年貢割付状読解	年貢請求書
第9回	年貢皆済目録読解	年貢領収書
第10回	宗門人別改帳読解	江戸時代の家族
第11回	五人組帳前書読解	百姓への規制
第12回	変体仮名読解	俳句をよむ
第13回	金子借用証文読解	年貢滞納
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に、配布された古文書のコピーを辞書を引きながら予習すること。事後には、読めなかった字を必ず復習すること。とにかく古文書をながめる時間をたくさんとること。

【テキスト（教科書）】

なし。プリントを配布する。

【参考書】

『新編古文書解読字典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）など
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90%）、平常点（10%）

【学生の意見等からの気づき】

まずは自分で辞書をひきながら読むことが大事です。

【その他の重要事項】

学部合同科目であり、文学部史学科専門科目「日本近世史学Ⅰ」と同一内容である。本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史
〈研究テーマ〉都市論、記憶論
〈主要研究業績〉「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B7

古文書から読む江戸社会・入門編Ⅱ

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多様な近世史料の読解能力を養うことを目的とする。さまざまなくずし字を解読すると同時に、読解した史料の意味を理解することが重要となる。

【到達目標】

- ①くずし字を解読することができる。
- ②読解した史料の意味を理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

本授業は古文書から読む江戸社会・入門編Ⅰを履修済みであることを前提として授業を進める。古文書解読の中級編として、近世の行政文書のほか、書状や発句など書体の異なる史料も対象とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	発句読解	変体仮名
第2回	離縁状読解	三行半
第3回	触書読解（1）	ベリー来航
第4回	触書読解（2）	株仲間再興
第5回	武家文書読解（1）	御堀の管理
第6回	武家文書読解（2）	橋梁の管理
第7回	武家文書読解（3）	三方領地替（前半）
第8回	武家文書読解（4）	三方領知替（後半）
第9回	漢詩読解	七言絶句
第10回	書状読解（1）	松平容保書簡（前半）
第11回	書状読解（2）	松平容保書簡（後半）
第12回	日記読解（1）	自家年譜（前半）
第13回	日記読解（2）	自家年譜（後半）
第14回	試験とまとめ	解説

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に配布された古文書のコピーを、辞書を使って自力で読むこと。事後には、必ず復習すること。多くの古文書に触れることが重要である。

【テキスト（教科書）】

なし。プリントを配布する。

【参考書】

『新編古文書解読辞典』（柏書房）
『くずし字用例辞典』（東京堂出版）
辞書は必須。毎回持参のこと。

【成績評価の方法と基準】

期末試験（90%）、平常点（10%）

【学生の意見等からの気づき】

筆の動きをみるのが、古文書読解能力向上のためのポイントです。

【その他の重要事項】

学部合同科目であり、文学部史学科専門科目「日本近世史科学Ⅱ」と同一内容である。本授業担当者は学芸員の業務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に関する実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等に関する情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近世史
<研究テーマ> 都市論、記憶論
<主要研究業績> 「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83巻1号、2017年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88号、2017年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the historical documents of early modern Japan. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

HIS500B7

江戸の地方文化Ⅰ

西沢 淳男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である関東代官竹垣直道の日記を講読します。個人の日記の中から幕臣としての多様な交遊や社会・文化を読み解いて行きます。

【到達目標】

日本近世史社会における幕臣の諸様相を学びながら、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近世史特殊研究Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「江戸の地方文化Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

幕末期の江戸幕府代官であった竹垣直道の日記を講読します。江戸在住の関東代官であった直道を通して、江戸時代における幕臣の交流や社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がりには、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	代官竹垣直道と竹垣日記	教員による代官制度と竹垣直道及び日記についての概要講義
第3回	「竹垣直道日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第4回	「竹垣直道日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第5回	「竹垣直道日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第6回	「竹垣直道日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第7回	「竹垣直道日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第8回	「竹垣直道日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第9回	「竹垣直道日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第10回	「竹垣直道日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第11回	「竹垣直道日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第12回	「竹垣直道日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第13回	「竹垣直道日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第14回	「竹垣直道日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日記の講読は、各々の分担について、①原本と校合、②日記上の人物・事項の解説、③史料解釈、④関連研究の紹介、⑤史料内容の発展です。十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男「関東代官竹垣直道日記」(4)(高崎経済大学『地域政策研究』第17巻第1号、2014年) < CiNii PDF オープンアクセス >、西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)

【参考書】

「大坂代官竹垣直道日記」1~4
(www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book07.pdf、
[/book10.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book10.pdf)、[/book15.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book15.pdf)、[/book20.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book20.pdf))
その他は、別途授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加（50%）、レポート（30%）、平常点（20%）

【学生の意見等からの気づき】

少人数のため特にはありませんが、より日記の内容が理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

特にはありません。

【その他の重要事項】

受講生の能力と意欲により、「竹垣直道日記」(東京大学史料編纂所)の原本を読みます。

【担当教員の専門分野等】

<http://www.tcue.ac.jp/college/rp/faculty/nishizawa.html>

【Outline and objectives】

I read the Diary of Naomichi Takegaki, Local Magistrate of the Kanto Region.

I read and decipher a variety of association and community, culture.

HIS500B7

江戸の地方文化Ⅱ

西沢 淳男

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸幕府の地方行政官である関東代官竹垣直道の日記を講読します。個人の日記の中から幕臣としての多様な交遊や社会・文化を読み解いて行きます。

【到達目標】

日本近世史社会における幕臣の諸様相を学びながら、各自の問題関心を高め、個々の研究テーマに対する研究能力を高めていきます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近世史特殊研究Ⅳ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「江戸の地方文化Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

幕末期の江戸幕府代官であった竹垣直道の日記を講読します。江戸在住の関東代官であった直道を通して、江戸時代における幕臣の交流や社会・文化を読み解いて行きます。史料で読み解く史実の広がり、各自の研究を進める上でも役立つでしょう。発表は輪読・発表・討議形式で進めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介、授業方法の説明、史料講読の範囲と発表順序の決定、その他
第2回	代官竹垣直道と竹垣日記（省略する場合があります）	教員による代官制度と竹垣直道及び日記についての概要講義
第3回	「竹垣直道日記」(1)	日記の講読と質疑・応答
第4回	「竹垣直道日記」(2)	日記の講読と質疑・応答
第5回	「竹垣直道日記」(3)	日記の講読と質疑・応答
第6回	「竹垣直道日記」(4)	日記の講読と質疑・応答
第7回	「竹垣直道日記」(5)	日記の講読と質疑・応答
第8回	「竹垣直道日記」(6)	日記の講読と質疑・応答
第9回	「竹垣直道日記」(7)	日記の講読と質疑・応答
第10回	「竹垣直道日記」(8)	日記の講読と質疑・応答
第11回	「竹垣直道日記」(9)	日記の講読と質疑・応答
第12回	「竹垣直道日記」(10)	日記の講読と質疑・応答
第13回	「竹垣直道日記」(11)	日記の講読と質疑・応答
第14回	「竹垣直道日記」(12)	日記の講読と質疑・応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

日記の講読は、各々の分担について、①原本と校合、②日記上の人物・事項の解説、③史料解釈、④関連研究の紹介、⑤史料内容の発展ですので、十分準備すると共に、担当以外の部分も各自読み込んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

西沢淳男「関東代官竹垣直道日記」(5)(高崎経済大学『地域政策研究』第18巻第1号、2015年) < CiNii PDF オープンアクセス >、西沢淳男『代官の日常生活』(角川ソフィア文庫、2015年)

【参考書】

「大坂代官竹垣直道日記」1～4
(www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book07.pdf、
[/book10.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book10.pdf)、[/book15.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book15.pdf)、[/book20.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/naniwa/publication/book20.pdf))
その他は、別途授業時に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

各自の報告と討論参加(50%)、レポート(30%)、平常点(20%)

【学生の意見等からの気づき】

少人数のため特にはありませんでしたが、日記の内容がより理解できるように、図版等も積極的に提示していきたい。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません。

【その他の重要事項】

受講生の能力と意欲により、「竹垣直道日記」(東京大学史料編纂所)の原本を読みませす。

【担当教員の専門分野等】

<http://www.tcue.ac.jp/college/rp/faculty/nishizawa.html>

【Outline and objectives】

I read the Diary of Naomichi Takegaki, Local Magistrate of the Kanto Region.

I read and decipher a variety of association and community, culture.

HIS500B7

日本文化と西洋文化Ⅰ

森田 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について検討し、史料から論点を構成する。

【到達目標】

明治期の日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②関連する文献を読み、研究史を理解する能力、③論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近代史特殊研究Ⅲ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本文化と西洋文化Ⅰ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第2回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制(1)
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制(2)
第4回	史料読解と研究発表	官僚制(1)
第5回	史料読解と研究発表	官僚制(2)
第6回	史料読解と研究発表	軍隊(1)
第7回	史料読解と研究発表	軍隊(2)
第8回	史料読解と研究発表	教育(1)
第9回	史料読解と研究発表	教育(2)
第10回	史料読解と研究発表	教育(3)
第11回	史料読解と研究発表	経済(1)
第12回	史料読解と研究発表	経済(2)
第13回	史料読解と研究発表	経済(3)
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

【テキスト（教科書）】

教場で、適宜プリントを配布する。

【参考書】

教場で、適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

授業への参加度(50%)、報告内容(50%)。

【学生の意見等からの気づき】

時間割を変更しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代史

<研究テーマ>土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（槇書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直助編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various points.

HIS500B7

日本文化と西洋文化Ⅱ

森田 貴子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治期の日本について、法律・経済・社会・教育など、多角的な制度変革の観点から、近代社会の形成について検討し、史料から論点を構成する。

【到達目標】

明治期の日本の諸制度について、①史料を自力で収集し、史料批判を行う技術、②関連する文献を読み、研究史を理解する能力、③論点を構成する能力、を習得することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「日本近代史特殊研究Ⅳ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本文化と西洋文化Ⅱ」においては「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テーマと史料は、第1回目に提示する。受講者は関心のあるテーマを選び、第2回目以降、各自、担当したテーマについて、研究課題を設定し、文献・史料を調査し、研究史上における意味、問題点を提示し、論点を発展させて報告する。

受講者の人数により、適宜、各自の研究テーマに関する研究発表を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業について。報告担当者の決定など。
第2回	史料読解と研究発表	近代天皇制（1）
第3回	史料読解と研究発表	近代天皇制（2）
第4回	史料読解と研究発表	官僚制（1）
第5回	史料読解と研究発表	官僚制（2）
第6回	史料読解と研究発表	軍隊（1）
第7回	史料読解と研究発表	軍隊（2）
第8回	史料読解と研究発表	教育（1）
第9回	史料読解と研究発表	教育（2）
第10回	史料読解と研究発表	教育（3）
第11回	史料読解と研究発表	経済（1）
第12回	史料読解と研究発表	経済（2）
第13回	史料読解と研究発表	経済（3）
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回の授業で取り上げる基本史料について、各自あらかじめ読み、論点を考えてくる。

【テキスト（教科書）】

教場で、適宜プリントを配布する。

【参考書】

教場で、適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

演習への参加度（50%）、報告内容（50%）。

【学生の意見等からの気づき】

時間割を変更しています。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近現代史

<研究テーマ>土地制度、近現代経済史、近代都市史

<主要研究業績>

森田貴子『近代土地制度と不動産経営』（塙書房、2007年）

森田貴子『三野村利左衛門と益田孝——三井財閥の礎を築いた人びと』（山川出版社、2011年）

森田貴子「華族資本の形成と家政改革——岡山池田家の場合」（高村直樹編『明治前期の日本経済——資本主義への道』日本経済評論社、2004年）

森田貴子「不動産——岡山藩池田家大崎下屋敷の変容」（伊藤毅・吉田伸之編『伝統都市3 インフラ』東京大学出版会、2010年）

【Outline and objectives】

This course aims for students to study Japan of the Meiji era from diverse perspectives, including laws, economy, society, education, and to discuss various points.

HIS500B7

日本の近代と国際社会Ⅰ

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日露戦争後の明治時代の政治史を学ぶ。20世紀初頭の日露戦争での勝利を経て、世界の列強の注目する軍事力を有ることとなったが、その一方、経済・産業・生活における後進性の克服に努める日本の姿を学ぶ。

【到達目標】

日露戦争後の政治、とりわけ桂閣体制と称される政治状況について知識を得る。次に、当該期の経済・産業・文化・生活の発展・向上に関わる知識を得る。さらに、そうした知識習得を通して今日の日本の在り方に連続するもの、あるいはそれと断絶するものを見出し、20世紀の日本全体を歴史的に考察する手がかりを得る。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義形式である。ただし、授業中に配付する資料に記載されている史料を受講生に読ませ、当該期の理解に必要な史料の読解スキル修得を促す。また、取り上げる史実に関する質問を発し、受講生の応答、グループでの討議・応答を促す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要紹介。
第2回	帝国議会と国会	帝国議会開設から今日の国会までの歴史を理解するビデオの視聴。
第3回	第22回帝国議会の状況	第22回帝国議会の状況・争点。
第4回	第22回帝国議会後の社会情勢	第22回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第5回	第23回帝国議会の状況	第23回帝国議会の状況・争点。
第6回	第23回帝国議会後の社会情勢	第23回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第7回	第24回帝国議会の状況	第24回帝国議会の状況・争点。
第8回	第24回帝国議会後の社会情勢	第24回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第9回	第25回帝国議会の状況	第25回帝国議会の状況・争点。
第10回	第25回帝国議会後の社会情勢	第25回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第11回	第26回帝国議会の状況	第26回帝国議会の状況・争点。
第12回	第26回帝国議会後の社会情勢	第26回帝国議会終了後の経済・産業・社会・国民生活。
第13回	第27回帝国議会の状況と明治時代の終焉	第27回帝国議会の状況・争点と明治末年の諸情勢
第14回	期末試験	期末試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

予習として事前に配布された資料を読んでおき、質問事項を考慮しておく。復習として配布資料を読み直し、次回の授業における質問を考慮しておき、また参考文献などを利用して自ら疑問点の解消を図る。さらに、参考文献を読み、知識や理解の拡充・深化に努める。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）に代わるものとして、印刷物を配付する。

【参考書】

佐々木隆『日本の歴史21 明治人の力量』（講談社）

小風秀雅『日本の時代史23 アジアの帝国国家』（吉川弘文館）

飯塚一幸『日本近代の歴史3 日清・日露戦争と帝国日本』（吉川弘文館）

宮田昌明『英米世界秩序と東アジアにおける日本』（錦正社）

【成績評価の方法と基準】

平常点40%、期末試験60%。特別な事情がなく授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受験しない場合には、不合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

日本近代史に関する基礎的な知識が十分でない受講生がいることから、授業内容の理解に資する質疑応答を積極的に行い、受講生の授業参加の動機付けや積極性を引き出すことに努める。

【学生が準備すべき機器他】

WEB 授業支援システムの掲示板に、毎回の授業の要点や質問事項に対する応答を記述するので、それを利用することが出来る機器。

【その他の重要事項】

学部合同科目（「日本近代史」）である。秋学期の「日本の近代と国際社会Ⅱ」（学部合同科目「日本近代史科学」）との継続履修が望ましい。

【Outline and objectives】

This class has two main points. The first point is to study the politics of Japan in the early 20th century, from the end of the Russo-Japanese War to the end of the Meiji Era. The second one is to study how Japan developed economy, industry, or life style in the above period as one of the Great Powers.

HIS500B7

日本の近代と国際社会Ⅱ

長井 純市

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

テーマは、史料を通して日本近代史の諸相を学ぶことである。毎回、日本近代史研究上の史料に関するトピックを取り上げ解説する。

【到達目標】

日本近代史研究に関わる史料について、史料所蔵機関及び古文書（複写物）を通して学び、史料の調査・収集及び読解の技法を習得する。また、それを通して日本近代史における政治・経済・外交・軍事・社会についての理解を深め、さらに自ら史料所蔵機関を利用し、学習を深める姿勢を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義形式である。受講生の能動的学習を促すために、質疑応答や作業学習、グループディスカッションを採り入れ、双方向的な授業運営に努める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業全体の概要説明。
第2回	独立行政法人国立公文書館	機能と所蔵史料の解説。
第3回	外務省外交史料館	機能と所蔵史料の解説。
第4回	防衛省防衛研究所戦史研究センター	機能と所蔵史料の解説。
第5回	アジア歴史資料センター	機能と所蔵史料の解説
第6回	国立国会図書館憲政資料室	電子展示と所蔵史料の解説。
第7回	古文書読解（1）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第8回	古文書読解（2）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第9回	古文書読解（3）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第10回	古文書読解（4）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第11回	古文書読解（5）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング。
第12回	古文書読解（6）	毛筆・草書体史料の読解トレーニング
第13回	英文史料読解	米国立公文書館の機能とインターネット公開史料の利用解説。
第14回	期末試験	期末試験

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、受講前に授業テーマに関するウェブサイトを見たり、配布資料を読んだりしておくこと。また、授業後には配布資料をもう一度読み直し、授業中に得た知識の定着を図ること、さらに授業中に示された参考文献や、その他の関連文献を読むこと。その上で、授業中の質疑応答の際の質問を考えておくこと。授業内容については、主に復習用として、授業支援システムの掲示板に毎回要点やコメントなどを記すので、読むようにすること。

【テキスト（教科書）】

テキスト（教科書）に代わる印刷物を配布する。

【参考書】

『日本近代の歴史』（吉川弘文館）全6巻
各史料所蔵機関および日本アーカイブズ学会のウェブサイト

【成績評価の方法と基準】

平常点 40 %、期末試験 60 %として成績評価を行う。なお、特別の事情がなく、授業への参加度が不良と判断された場合、あるいは期末試験を受けない場合には不合格の評価とする。

【学生の意見等からの気づき】

基礎的な知識の不足や古文書読解スキルの不足を感じる受講生がいることから、受講生との質疑応答を活用し、受講生の基礎的な理解の度合いやスキルのレベルに合わせた授業の進行・運営を図るようにする。

【学生が準備すべき機器他】

授業支援システムの掲示板に、毎回授業の要点を記すので、それを参照するIT機器（PC、スマートフォン、タブレットなど）。

【その他の重要事項】

学部合同科目（「日本近代史科学」）である。春学期の「日本の近代と国際社会Ⅰ」（学部合同科目「日本近代史」）との継続履修が望ましい。

【Outline and objectives】

This class has three main points. The first point is to study archives in the Japanese modern history. The second one is to get an academic skill for reading old documents written in cursive style of Chinese characters. The third is to study the Japanese modern history through reading those old documents.

CUA500B4

沖縄学入門 I

マルコ・ティネッロ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、世界史における琉球・沖縄の歴史と文化（近現代）について学ぶ。14世紀以降の東アジアにおける琉球国の成立と貿易活動をはじめ、琉球・沖縄と中国・日本との伝統的な関係を学ぶことで、中心＝大国（中国・日本）だけではなく、その周辺（琉球・沖縄）の視点からも東アジアの歴史を認識する。特に、琉球・沖縄の歴史と文化をより国際的な観点から考察するために、沖縄の歴史と韓国やサンマリノ、ハワイなどの歴史との比較を行い、明治政府による琉球併合（「琉球処分」）をグローバルな観点で捉えなおし、世界的な角度から沖縄の基地問題をみるアプローチも行う。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身に付ける。沖縄をはじめ日本・中国・東アジアの歴史を国際的・グローバルな視点から考察し、説明することができる。自分が生まれた国の歴史・文化の知識の重要性を理解した上で、他国の歴史・文化を理解し、それを自分の研究のために生かすことができる。現代日本が諸隣国と直面する領土問題などを歴史的な文脈に即して考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「沖縄学入門 I」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「沖縄学入門 I」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に講義形式で進めるが、各授業の後半において紹介した課題に関する議論のための時間も設けたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要と目的・到達目標・評価方法等について説明し、講義の全体像を紹介する。
第2回	グローバルの中の東アジア	世界史的な視点から東アジアの世界秩序を検討する。
第3回	琉球・沖縄の文化	日本の中でも個性的な地域の一つである沖縄について、その文化の特徴を紹介する。
第4回	琉球統一国家の成立と文化	先史・グスク・三山時代について考察する。
第5回	琉球と中国の関係	琉球と中国の朝貢関係について検討する。
第6回	琉球と日本との関係	近世時代における琉球と日本（薩摩藩と徳川幕府）の関係について考察する。
第7回	琉球使節の江戸参府	琉球・薩摩・幕府のそれぞれの視点から琉球使節の江戸参府を検討する。
第8回	近世東アジアの行列	琉球使節の江戸参府、朝鮮通信使、参勤交代の大名行列などをとりあげ、東アジアの外交について検討する。
第9回	琉日関係の隠蔽政策	近世時代における清朝に対する琉球と日本との関係の隠蔽政策について考察する。
第10回	米国・仏国・蘭国（西欧列強）と琉球の開国	幕末において米・仏・蘭国と「修好条約」が締結された際の琉球側の対応について検討する。
第11回	日本の開国	国際的な視点から日本の開国をとりあげる。
第12回	日本の開国と琉球	琉球に対する幕府の外交政策の変化について説明する。
第13回	明治維新と琉球所属問題	ヨーロッパの舞台から琉球の所属問題について考察する。
第14回	まとめ及び補足	まとめ、また補足を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読む

【テキスト（教科書）】

「参考書」

【参考書】

沖縄の怒：日米への抵抗、ガバン・マコーマック、乗松聡子著、京都：法律文化社、2013年

【成績評価の方法と基準】

平常点（40%）、実証レポート（60%）

【学生の意見等からの気づき】

得になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【日本史】

近世史

徳川幕府と明治政府の外交

『世界史からみた「琉球処分」』榕樹書林、2017年。

【Outline and objectives】

This course presents an overview of Japanese-Ryukyuan relations from both an East Asian and global perspectives. It examines the Sinocentric interstate system in East Asia and its collapse after the arrival of the Western powers in the mid-19th century. We will also explore the changing nature of Japanese diplomacy toward Ryukyu and East Asia from the premodern time to the contemporary era.

CUA500B4

沖縄学入門Ⅱ

マルコ・ティネッロ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、世界史における琉球・沖縄の歴史と文化（近現代）について学ぶ。14世紀以降の東アジアにおける琉球国の成立と貿易活動をはじめ、琉球・沖縄と中国・日本との伝統的な関係を学ぶことで、中心＝大国（中国・日本）だけではなく、その周辺（琉球・沖縄）の視点からも東アジアの歴史を認識する。特に、琉球・沖縄の歴史と文化をより国際的な観点から考察するために、沖縄の歴史と韓国やサンマリノ、ハワイなどの歴史との比較を行い、明治政府による琉球併合（「琉球処分」）をグローバルな観点で捉えなおし、世界的な角度から沖縄の基地問題をみるアプローチも行う。

【到達目標】

琉球・沖縄の歴史と文化について基礎的な知識を身に付ける。沖縄をはじめ日本・中国・東アジアの歴史を国際的・グローバルな視点から考察し、説明することができる。自分が生まれた国の歴史・文化の知識の重要性を理解した上で、他国の歴史・文化を理解し、それを自分の研究のために生かすことができる。現代日本が諸隣国と直面する領土問題などを歴史的な文脈に即して考察することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「沖縄学入門Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「沖縄学入門Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に講義形式で進めるが、各授業の後半において紹介した課題に関する議論のための時間も設けたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概要と目的・到達目標・評価方法等について説明し、講義の全体像を紹介する。
第2回	琉球処分	琉球併合（「琉球処分」）について考察する。
第3回	サンマリノと沖縄	サンマリノの歴史から「琉球処分」を先行研究と異なる視点から考察する。
第4回	ハワイ・サイパン・グアム・朝鮮と沖縄	ハワイ・サイパン・グアム・韓国の歴史と沖縄の歴史について比較することで、「琉球処分」の特徴について検討する。
第5回	1872年の琉球国王の「藩王」任命	西洋列強の史料から1872年の明治天皇による琉球国王の「藩王」任命について考察する。
第6回	台湾出兵と琉球の進貢問題	国際的な角度から1874年の台湾出兵と1875年の琉球の進貢問題を検討する。
第7回	1878年の西洋列強に対する琉球側の請願書	1878年の東京滞在琉球人による各国公使への請願書と米・仏公使の対応について考察する。
第8回	前米大統領グラントの調停役割	グローバルな視点からグラントの調停役割について検討する。
第9回	近代の沖縄	明治政府の沖縄県に対する政策について考察する。
第10回	沖縄戦	沖縄戦への道、沖縄戦の経過などについて検討する。
第11回	アメリカ統治時代	米軍支配下の沖縄について考察する。
第12回	沖縄の基地問題	国際的な視点から沖縄の基地問題を考察する。
第13回	尖閣・Diaoyu 問題	歴史的な視点から尖閣問題を検討する。
第14回	沖縄の未来を考える	沖縄の歴史、沖縄の文化、沖縄学、沖縄の基地問題などという課題から沖縄の未来について議論を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読む

【テキスト（教科書）】

参考書

【参考書】

沖縄の怒：日米への抵抗、ガバン・マコーマック、乗松聡子著、京都：法律文化社、2013年

【成績評価の方法と基準】

平常点（40%）、実証レポート（60%）

【学生の意見等からの気づき】

特になし

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

<研究テーマ>

<主要研究業績>

【日本史】

近世史

徳川幕府と明治政府の外交

『世界史からみた「琉球処分」』榕樹書林、2017年。

【Outline and objectives】

This course presents an overview of Japanese-Ryukyuan relations from both an East Asian and global perspectives. It examines the Sinocentric interstate system in East Asia and its collapse after the arrival of the Western powers in the mid-19th century. We will also explore the changing nature of Japanese diplomacy toward Ryukyu and East Asia from the medieval times to the contemporary era.

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅰ

渡辺 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文書館で実務を行なうための前提として、アーカイブズ学の考え方を学ぶ。アーカイブズとは、組織や個人が活動していくなかで授受作成し蓄積した記録のなかで、永久に保存し公開される文書を意味する。あるいはアーカイブズを管理・公開する組織や施設のことを意味する。

【到達目標】

アーカイブズ学の基本概念を理解する。特に歴史学との根本的な違いを理解し、アーカイブズ学としての思考ができる基礎を築く。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「アーカイブズ学Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学大学院「アーカイブズ学Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

アーカイブズ学総論、アーカイブズ認識論、アーカイブズ管理論。講義と質問。最後の授業で、自らの研究で分析している史料が含まれる史料群全体について、概要記述を個々に発表してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	アーカイブズ学とは何か
第2回	アーカイブズ学総論1	記録のライフサイクル
第3回	アーカイブズ学総論2	記録連続体論
第4回	認識論1	現代における記録管理—日本政府と市民団体
第5回	認識論2	日本における伝統的記録管理—古代から近世まで
第6回	認識論3	日本近世における個別町の記録管理
第7回	認識論4	日本近世における組合町・株仲間・講の記録管理
第8回	認識論5	記録管理の近代への移行
第9回	管理論1	アーカイブズの記述と編成—国際標準
第10回	管理論2	アーカイブズの記述と編成—シリーズとサブ・フォンド
第11回	管理論3	アーカイブズ構造論—日本政府と地方自治体
第12回	管理論4	アーカイブズ構造論—近現代個人文書
第13回	管理論5	アーカイブズ構造論—近世・近代の家文書
第14回	管理論6	フォンドレベルの概要記述

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第14回の授業では、各自が文書群を選んでそれぞれにアーカイブズ記述の国際標準に従って文書群の概要記述を発表してもらうため、その準備にはかなりの時間を要することになる。

【テキスト（教科書）】

特になし

【参考書】

国文学研究資料館史料館編『アーカイブズの科学』上・下（柏書房、2003年）
国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』（思文閣出版、2013年）
渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）

【成績評価の方法と基準】

平常点（100%）、特に授業最後の質疑、および第14回の発表内容。

【学生の意見等からの気づき】

明確にしゃべる。

【学生が準備すべき機器他】

講義ではパワーポイントを多用する予定。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>社会的結合、災害

<主要研究業績>

渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）、『近世日本の都市と民衆—住民結合と序列意識—』（吉川弘文館、2000年）、「災害対応と文書行政—江戸の二つの水害から」（『歴史評論』760,2013年）、「災害復興をめぐる近世都市政策と地域社会」（『歴史評論』797,2016年）

CUM500B4

アーカイブズ学Ⅱ

渡辺 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

アーカイブズ学の体系的理解とは何かを考える。

【到達目標】

アーカイブズ学の基本概念を用いて思考できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「アーカイブズ学Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学大学院「アーカイブズ学Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

テキストを輪読し討論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の方法を説明し、報告の担当を決める。また、テキストの序論を説明する。
第2回	アーカイブズ機関における編成記述の動向と課題	都道府県文書館の目録と検索システムの状況
第3回	アーカイブズ編成・記述の原則再考	オーストラリアからのシリーズ・システムの可能性
第4回	日本近世・近代在地記録史料群の階層構造分析方法について	原則の柔軟な適用について考える
第5回	商家文書の史料群構造分析	松代八田家文書について検索手段の編成を考える
第6回	名主家文書における文書認識と目録編成	分散管理と情報共有の視点から考える
第7回	近現代個人文書の特性と編成記述	可変的なシリーズ設定のあり方について考える
第8回	組織体の機能構造とアーカイブズ編成	大学アーカイブズを事例として考える
第9回	転封にみる領知支配と記録	近世大名家文書の編成記述のための歴史学的アプローチの可能性について考える
第10回	近現代組織体の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第11回	海外の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第12回	近世組織体の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第13回	中世組織体の文書管理に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択
第14回	正倉院文書に関する論文	受講者自身の研究テーマと関連付けて選択

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

輪番で報告の準備。

【テキスト（教科書）】

国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2013年

【参考書】

国文学研究資料館編『社会変容と民間アーカイブズ—地域の持続へ向けて—』勉誠出版、2017年

【成績評価の方法と基準】

報告と討論（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

歴史学の議論にならないように気を付けること。

【その他の重要事項】

教科書は、受講者の専門の構成によっては参考文献に変更する可能性がある。また、2019年8月までに、より適切な図書が刊行された場合、変更の可能性がある。

さらに、後半数回で輪読する論文は例示である。例えば、日本古代史専門の大学院生が受講者のなかにいない場合には「正倉院文書」に関する論文は取り上げない。なお、いうまでもなく外国史の大学院生も歓迎する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世史およびアーカイブズ学

<研究テーマ>社会的結合、災害

<主要研究業績>

渡辺浩一『日本近世都市の文書と記憶』（勉誠出版、2014年）、「近世日本の都市と民衆一住民結合と序列意識一」（吉川弘文館、2000年）、「江戸の『六ヶ所』高札場と都市社会」（『日本歴史』745, 2010年）、「災害対応と文書行政一江戸の二つの水害から」（『歴史評論』760, 2013年）

CUM500B4

文書館管理研究Ⅰ

齋藤 勝、青木 直己、葦名 ふみ、新井 浩文、岩壁 義光、富塚 一彦

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本および各国の文書館の歴史と現在について学びます。なお、この授業は、文書館管理研究Ⅱ（秋学期）と連続して受講することを必須とします。

【到達目標】

日本の文書館管理制度について、アーキビストに相応しい知識と認識を深めます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「文書館管理研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学インスティテュート「文書館管理研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は、文書館の成立から現在に至る歴史、ならびに、現在における史料の収集・保存・管理・閲覧、また、対象とした文書館に特徴的な事業について講義し、文書館の仕事についての認識を深めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション (04/10)	授業の計画と心構え
第2回	宮内庁書陵部 1 (04/17 岩壁義光)	「皇室」アーカイブズの概要
第3回	宮内庁書陵部 2 (04/24 岩壁義光)	公文書の構造と公開
第4回	宮内庁書陵部 3 (05/08 岩壁義光)	歴史的資料の保存
第5回	外務省外交史料館 1 (05/15 富塚一彦)	外交史料館所蔵記録の概要と記録公開の現状
第6回	外務省外交史料館 2 (05/22 富塚一彦)	外務省記録および日本外交文書の歴史学的利用
第7回	国立国会図書館憲政資料室 1 (05/29 葦名ふみ)	憲政資料室の概要（歴史と現状）
第8回	国立国会図書館憲政資料室 2 (06/05 葦名ふみ)	憲政資料室の実務
第9回	とらや文庫 1 (06/12 青木直己)	企業アーカイブズの歴史
第10回	とらや文庫 2 (06/19 青木直己)	企業における記録史料の収集と管理
第11回	とらや文庫 3 (06/26 青木直己)	企業アーカイブズの利用
第12回	埼玉県立文書館 1 (07/03 新井浩文)	概論：公立文書館の歴史と運営
第13回	埼玉県立文書館 2 (07/10 新井浩文)	公文書等の保存と運営
第14回	埼玉県立文書館 3 (07/17 新井浩文)	公文書等の公開と活用

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

可能な限り、近隣の公立文書館を訪れてみてください。その他は各々の授業の際に指示します。

【テキスト（教科書）】

授業の当日、資料ないしプリントを配布します。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985年）
高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997年）
安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館、1998年）
青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50% 試験（レポート） 50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

〈現職〉

青木直己・元とらや文庫研究主幹
葦名ふみ・国立国会図書館利用者サービス部政治史料課憲政資料係長
新井浩文・埼玉県立歴史と民俗の博物館学芸主幹
岩壁義光・元宮内庁書陵部編修課長
富塚一彦・外務省外交史料館課長補佐

【Outline and objectives】

Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below. (1)What's an archives? (2)What's an archivist? (3)What's the mission of an archives and an archivist? (4)What's the skills of an archivist working for an archives? Student's questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by professors.

CUM500B4

文書館管理研究Ⅱ

長井 純市、青木 睦、赤松 道子、石橋 崇雄、草野 佳矢子、山田 太造、渡辺 浩一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本および各国における文書館の歴史と現在、そして実務を学ぶ。

【到達目標】

文書館管理制度の実務に関する知識を習得し、アーキビストとして必要とされる基礎・基盤を確立する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「文書館管理研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学大学院「文書館管理研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

文書館の歴史、史料の収集・保存・管理・展示・利用などの実務、さらに文書館特有の事業について複数の教員が講義形式（オムニバス形式）で解説する。担当教員と受講生との質疑応答を利用し、授業の活性化に努め、受講生の能動的学習をはかる。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	秋学期の授業について (09/25 長井純市)	イントロダクション～授業の概要と受講上の諸注意～
2	東京大学史料編纂所 1 (10/02 山田太造)	史料編纂所とコンピュータシステム～総論～
3	東京大学史料編纂所 2 (10/09 山田太造)	史料編纂所のDB・テキスト系DBとメタデータ
4	東京大学史料編纂所 3 (10/16 山田太造)	史料編纂所のDB・複製史料の画像系DB
5	中国の文書館 1 (10/23 石橋崇雄)	中国の図書館と檔案館 (1)
6	中国の文書館 2 (10/30 石橋崇雄)	中国の図書館と檔案館 (2)
7	ロシアの文書館 1 (11/06 赤松道子)	ロシアの文書管理と資料の分類①連邦アルヒーフ
8	ロシアの文書館 2 (11/13 赤松道子)	ロシアの文書管理と資料の分類②外交文書館など
9	ロシアの文書館 3 (11/20 草野佳矢子)	ロシアの文書資料の検索と利用
10	アーカイブズ記述編成の方法 (11/27 渡辺浩一)	I S A D (G)「記録史料記述の国際標準」を学ぶ
11	アーカイブズ記述編成の実際 (12/04 渡辺浩一)	日本近世の文書を対象に I S A D (G) を実際に使ってみる
12	国文学研究資料館 1 (12/11 青木睦)	戦後の史料保存運動と史料保存の原則
13	国文学研究資料館 2 (12/18 青木睦)	史料のための保存環境と劣化の予防
14	国文学研究資料館 3 (01/08 青木睦)	アーカイブズ建築・設備と災害対策

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

可能な限り、史料所蔵機関を訪ね、調査・利用し、その管理に関する実務に触れてみる。その他、担当各教員が授業中に指示する。

【テキスト（教科書）】

授業の当日、資料プリントを配布する。

【参考書】

安澤秀一『史料館・文書館学への道』（吉川弘文館、1985年）
高野修『日本の文書館』（岩田書院、1997年）
安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館、1998年）
青山英幸『アーカイブズとアーカイバル・サイエンス』（岩田書院、2004年）

【成績評価の方法と基準】

平常点 50%、試験（レポート）50%を基準として、成績評価を行う。

【学生の意見等からの気づき】

双方向型授業運営に努める。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【その他の重要事項】

春学期授業科目「文書館管理研究Ⅰ」との継続履修が強く望まれる。

【担当教員の専門分野等】

< 現職 >

青木 睦・国文学研究資料館准教授
赤松（梶）道子・法政大学大学院兼任講師
石橋崇雄・東洋文庫研究員
草野佳矢子・法政大学大学院兼任講師
山田太造・東京大学史料編纂所助教
渡辺浩一・国文学研究資料館教授

[Outline and objectives]

Students of this class can get practical and basic knowledge and skills as to four points below. (1) What's an archives? (2) What's an archivist? (3) What's the mission of an archives and an archivist? (4) What are the skills of an archivist working for an archives? Students' questions, comments and discussion on the contents of this class are welcomed by the professors.

CUM500B4

記録史料学研究 I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

主に地方文書の保存・調査（整理）・管理の実践的知識について習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「記録史料学研究 I」においては「DP1」「DP2」に関連、国際日本学大学院「記録史料学研究 I」においては「DP1」「DP2」に関連する。

【授業の進め方と方法】

記録史料管理の理論と方法について下記のような計画で授業を進める。具体的には、古文書の書札札や様式論を踏まえ、実物の古文書の初歩的・入門的な解説、古文書の取り扱いに関する手法、調査台帳の作り方や目録作成方法の基礎の習得が中心となる。講義・実習・発表を取り交えた授業とする。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	記録史料調査の理論と方法	目的 計画 etc
第 2 回	記録史料管理の歴史と現在 (1)	資料管理の歴史と現在
第 3 回	記録史料管理の歴史と現在 (2)	現在の史料管理の課題 各種の資料管理の実情
第 4 回	記録史料の範疇 (1)	社会組織と記録史料（身分・家・家業）
第 5 回	記録史料の範疇 (2)	地方文書 町方文書 武家文書 寺社文書
第 6 回	記録史料の範疇 (3)	古文書と古記録 古文書の種類
第 7 回	記録史料の範疇 (4)	古文書と古記録 古記録の種類
第 8 回	記録史料の取り扱い (1)	古文書 1
第 9 回	記録史料の取り扱い (2)	古文書 2
第 10 回	記録史料の取り扱い (3)	古記録 1
第 11 回	記録史料の取り扱い (4)	古記録 2
第 12 回	記録史料群の保存と調査	調査台帳の作成方法
第 13 回	記録史料群の調査・整理	調査台帳の作成方法
第 14 回	記録史料群の整理・管理	調査台帳と文書目録

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）。

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 % / 研究発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

古文書をながめる時間をたくさん持つことが大事です。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史
〈研究テーマ〉都市論、記憶論
〈研究業績〉「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83 巻 1 号、2017 年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88 号、2017 年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学演習 I

松本 剣志郎

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代の記録史料（古文書・古記録）調査の理論と方法について学ぶ。

【到達目標】

記録史料学演習 I の内容を踏まえ、より深く地方文書の保存・調査（整理）・管理について実践的に習得することを到達目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「記録史料学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「記録史料学演習 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

古文書学およびアーカイブズ学の成果ないし方法に基づき、実際の記録史料群をいかに構造的に理解し、有効な検索システムを構築するかを学ぶ。そのためには個々の史料を理解し、それを史料群全体に位置づけるという作業が必要となる。このとき史料群を生み出した人ないし組織への理解が必要不可欠となる。こうしたことを実践的に学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第 1 回	史料群とは何か	目的 計画 etc
第 2 回	史料群構造の理解 (1)	史料群 1
第 3 回	史料群構造の理解 (2)	史料群 2
第 4 回	史料群構造の理解 (3)	史料群 3
第 5 回	記録史料の取扱い (1)	古文書 1
第 6 回	記録史料の取扱い (2)	古文書 2
第 7 回	記録史料の取扱い (3)	古文書 3
第 8 回	記録史料の取扱い (4)	古文書 4
第 9 回	記録史料の調査 (1)	史料 1
第 10 回	記録史料の調査 (2)	史料 2
第 11 回	記録史料の調査 (3)	史料 3
第 12 回	記録史料の調査 (4)	史料 4
第 13 回	検索システムの構築 (1)	目録整備 1
第 14 回	検索システムの構築 (2)	目録整備 2

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

安藤正人『記録史料学と現代——アーカイブズの科学をめざして——』（吉川弘文館、1998 年）は共通の認識を得るための貴重な成果であるので、これをあらかじめ読んでおくこと。

【テキスト（教科書）】

文学部史学科所蔵の古文書。

【参考書】

安藤正人『記録史料学と現代』（吉川弘文館）
日本歴史学会編『概説古文書学』近世編（吉川弘文館）
国文学研究資料館編『アーカイブズの科学』（柏書房）。

【成績評価の方法と基準】

平常点 80 % / 発表 20 %

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【その他の重要事項】

本授業担当者は学芸員の実務経験を有しており、古文書を中心とした史料の整理や活用に一定の実践経験をもつ。このことを活かして実際の古文書の取り扱いや保存管理等についての情報も織り交ぜながら授業を展開する。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本近世史
〈研究テーマ〉都市論、記憶論
〈主要研究業績〉「江戸の公共負担組合と大名家」（『社会経済史学』83 巻 1 号、2017 年）、「江戸における公儀地の論理」（『法政史学』88 号、2017 年）ほか

【Outline and objectives】

This course deals with the basic concepts and principles of early modern Japanese archives. It also enhances the development of student's skill in decipherment of cursive-style writing.

CUM500B4

記録史料学研究 II

岩壁 義光

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

明治以降、近代日本の天皇・皇族の事蹟を記録化した資料として「実録」が編纂されている。本講義では、アジアに於ける実録編纂の歴史の中でも、日本において独自の歩みを遂げてきた天皇実録の編纂目的、編纂過程を考察し、日本の実録が記録史料として持つ意味を多角的な視点から理解する。

【到達目標】

実録の編纂がどのように計画されたのかを公文書から読み解く力をつける
編纂のため、どのような記録史料がなぜ選択され、どのように用いられて編纂が進められたかを分析する能力を身につける
日本の実録の編纂方法から、実録の記録史料としての意味を理解する

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

史学専攻「記録史料学研究 II」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連、国際日本学インスティテュート「記録史料学研究 II」においては「DP1」「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は、「孝明天皇紀」編纂史料を中心に画像を多用し、配付テキストを用いて講義形式を中心とするが、受講生には適宜配付する原文複製史料の講読など、積極的な参加を求める。配付資料は、原則、授業支援システムにアップするので各自ダウンロードして利用すること。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	自己紹介および各授業の講義内容について紹介
第 2 回	明治期に於ける実録編纂の開始 1	太政官の「維新史」編纂とその変容
第 3 回	明治期に於ける実録編纂の開始 2	内務省文部省の歴史編纂
第 4 回	宮内省の編纂事業 1	編纂組織の変遷と編纂関係者 - 金石文とは何か -
第 5 回	宮内省の編纂事業 2	宮内省の歴史編纂と「殉難録稿」
第 6 回	宮内省の編纂事業 3	幕末国事執筆調査と史談会
第 7 回	孝明天皇紀編纂 1	- 先帝取調掛の設置と宮内公文書館蔵公文書 - 「先帝御事蹟取調録」
第 8 回	孝明天皇紀編纂 2	- 孝明天皇紀編纂と先帝取調掛 - 図書寮私文書 -
第 9 回	孝明天皇紀編纂 3	編修松浦辰男と編纂関係諸意見書（公文書としての意見書の取り扱われ方）
第 10 回	孝明天皇紀編纂 4	- 孝明天皇紀附図の編纂 絵画資料 -
第 11 回	孝明天皇紀編纂 5	孝明天皇紀附図の理解
第 12 回	孝明天皇紀編纂 6	東山御文庫と天皇文書
第 13 回	皇統譜と実録編纂	皇統譜の編纂と完成
第 14 回	明治後期の実録編纂	「天皇実録義例」と明治天皇実録の編纂構想

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前には配付する原文資料は必ず読解し読めるようにする。
配付資料は、日本の古文書に限らない。
金石文など読解の難易度の高いものもあるので、必ず事前に予習する事。事前に予習をしないと講義を十分に理解できない。
また、実録全体を扱った単行本はほとんどないので、参考論文を事前に適宜紹介する。受講した内容は復習をすること。

【テキスト（教科書）】

テキストは下記を利用するが、開講後に支援システムにより配付する。
具体的には、IWAKABE YOSHIMITSU『The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition』(ACTA ASIATICA bulletin of the institute of easternculture 114 TOHOGAKKAI 2018)

【参考書】

岩壁義光『大正天皇実録 補訂版』1~3（ゆまに書房）
宮内庁『明治天皇紀』1~13（吉川弘文館）
宮内庁『昭和天皇実録』（東京書籍）
明治神宮『昭憲皇太后実録』上下（吉川弘文館）

【成績評価の方法と基準】

講義時に課す小レポートおよび、史料講読および講義時の質疑応答により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生には事前に連絡用のメールアドレスを公開する。授業改善などの必要があればメールにより受け付け、対応する。

【学生が準備すべき機器他】

特にないが、くずし字読解辞典、漢和辞典などの用意は望ましい。

【日本近代史】

<専門領域>

近代日本政治史

<研究テーマ>

実録研究

<主要研究業績>

・IWAKABE YOSHIMITSU "The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition" (ACTA ASIATICA bulletin of the institute of eastern culture 114 TOHOGAKKAI 2018)

・(資料紹介) 岩壁義光「宮内公文書館所蔵『御逸事』について」(『神園』18 2017)

・岩壁義光補訂『大正天皇実録 補訂版』第二巻&三巻 2018 (ゆまに書房)

【Outline and objectives】

Emperor's chronicles ("JITUROKU") were compiled in Asia.

In Japan, the Emperor's chronicles, Komei tenno ki, Meiji tenno ki, Taisho tenno-ki, showa tenno ki, were compiled again since Meiji era by various historical materials.

At this lecture, you learn the reason for compilation, compilation process, and, you understand the feature of a chronicle of Japan.

CUM500B4

記録史料学演習Ⅱ

岩壁 義光

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

明治以降、近代日本の天皇・皇族の事蹟を記録化した資料として「実録」が編纂されている。本講義では、アジアに於ける実録編纂の歴史の中でも、日本において独自の歩みを遂げてきた天皇実録の叙述と編纂史料について、演習を通じて多角的な視点から理解する。

【到達目標】

「明治天皇紀」の講読を通じて歴史叙述の方法と内容を正確な理解する能力を高める

典拠として使用されている諸資料の選定理由を理解し、歴史研究の問題解決に必要な史料の選定能力を付ける

難解な典拠資料の原本を解説する能力を向上させる

原典資料の分析能力を向上させる

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

史学専攻「記録史料学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「記録史料学演習Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は公刊「明治天皇紀」を主テキストに「大正天皇実録」「昭和天皇実録」を交え、関連資料を用いて演習形式で行う。受講生には天皇紀から記録史料に関わる課題を与えるので、授業時間内にレポートすること。報告後、疑問点について討論し、解決方法を探る。また、教室に於ける講義の外、現地見学を行い多角的に記録史料を理解出来るよう進める。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介および各授業の講義内容について紹介
第2回	明治天皇紀の編纂 (講義)	明治天皇紀の講読の基礎知識と編纂概要
第3回	明治天皇紀と編纂記録の公文書①	「編修事業録」から見た天皇紀編纂の主旨と目的の変遷
第4回	明治天皇紀と編纂記録の公文書②	「編修事業録」から見た天皇紀編纂方法 (史料蒐集と資料稿本)
第5回	明治天皇の踐祚	明治天皇紀から明治天皇の踐祚と暗殺問題 (写本私文書と談話記録)
第6回	天皇の即位礼① 明治維新と儀式	明治天皇の即位に関する諸儀式と内容
第7回	天皇の即位礼② 皇室令下の儀式	大正天皇の即位と「皇室登極令」(明治41年制定)
第8回	明治天皇の地方巡幸 - 巡幸の計画と実施 -	太政官「巡幸雜記」(国立公文書館)の利用と分析
第9回	宮中と西南戦争	宮内省記録の中の西南戦争 - 「西南征討録」から見た西南戦争 -
第10回	外交と庭園 (校外授業) - 社交空間としての庭園 -	浜離宮見学 (延遠館・中島茶屋・鴨場)
第11回	主馬寮の誕生	「明治天皇紀」のなかの御料馬と御猟場の歴史的展開
第12回	天皇と大本営	「明治天皇紀」と「明治天皇御伝記史料明治軍事史」から見た大本営における天皇
第13回	側近の談話から見る天皇 - オーラルヒストリーの活用 -	「談話筆記」や「御逸事」のなかの天皇
第14回	天皇の崩御 (講義)	明治天皇崩御と「明治天皇紀」「大正天皇実録」「昭和天皇実録」の叙述、公刊天皇紀・天皇実録の問題点と課題

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

授業支援システムにより事前には配付した原文資料がある場合には、必ず読解し読めるようにする。

与えられたテーマに即した資料を探し出し、天皇紀の叙述とあわせて報告するように準備する。資料については教員に相談することは当然可。

報告には、研究史を簡単に紹介し、自分の報告の独自性をアピールできるように準備すること。また、問題点の抽出のため、報告に先立ちレジュメを教員・受講生に事前に配布することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

テキストは「明治天皇紀」等のほか、IWAKABE YOSHIMITSU "The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition" (ACTA ASIATICA bulletin of the institute of eastern culture 114 TOHOGAKKAI 2018) を利用する

【参考書】

岩壁義光『大正天皇実録 補訂版』1～3（ゆまに書房）

宮内庁『明治天皇紀』1～13（吉川弘文館）

宮内庁『昭和天皇実録』（東京書籍）

明治神宮『昭憲皇太后実録』上下（吉川弘文館）

【成績評価の方法と基準】

講義時のレポートおよび、史料講読および講義時の質疑応答により評価する。

【学生の意見等からの気づき】

受講生には事前に連絡用のメールアドレスを公開する。授業改善などの必要があればメールにより受け付け、対応する。

【日本近代史】

<専門領域>

近代日本政治史

<研究テーマ>

実録研究

<主要研究業績>

・IWAKABE YOSHIMITSU "The Compilation of Imperial Annals by the Imperial Household Ministry since the Meiji Era: The Creation of a New Tradition" (ACTA ASIATICA bulletin of the institute of eastern culture 114 TOHOGAKKAI 2018)

・(資料紹介) 岩壁義光「宮内公文書館所蔵『御逸事』について」(『神園』18 2017)

・岩壁義光補訂『大正天皇実録 補訂版』第二巻&三巻 2018（ゆまに書房）

【Outline and objectives】

Emperor's chronicles ("JITUROKU") were compiled in Asia.

In Japan, the Emperor's chronicles, Komei tenno ki, Meiji tenno ki, Taisho tenno-ki, showa tenno ki, were compiled again since Meiji era by various historical records.

Through this exercise lesson, you learn their description method and historical records of a chronicle, and you understand the feature of a chronicle of Japan.

HUG500B7

日本の環境論 I

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人文地理学の基本的な方法論、研究分野の書かれたテキストを読み、発表することによって、人文地理学的方法についての深い理解を目指します。具体的には人文地理学の目標、理論、方法論、研究アプローチを取得し、自らの研究遂行時にそれらを使うことができますようにします。

【到達目標】

人文地理学に関する知識の蓄積、思考力、解決能力のアップを目指します。具体的にはテキストの内容を適切に理解すること、テキストの内容を適切にまとめること、テキストの内容を適切に発表すること、その上でテキストを通じてより広く人文地理学の専門内容を理解すること、そして、自らの研究テーマに関わらせて、それをより深めることをテーマとします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「人文地理学研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の環境論Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は受講生による報告と討議、教員の解説等を中心に行います。さらに受講生の関心領域、研究テーマと関係した論文や著書の紹介等を通じて、授業内容の深化に努めます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	授業方針の決定
第2回	テキスト「序章」	「序章 地理学を学ぶために」の報告と討議
第3回	テキスト「第1章」	「第1章 都市のなりたち」の報告と討議
第4回	テキスト「第2章」	「第2章 変動する農村の社会」の報告と討議
第5回	テキスト「第3章」	「第3章 景観をつくる人々」の報告と討議
第6回	テキスト「第4章」	「第4章 農業と食のネットワーク」の報告と討議
第7回	テキスト「第5章」	「第5章 工業立地変動のダイナミズム」の報告と討議
第8回	テキスト「第6章」	「第6章 流通システムの消費生活の基盤」の報告と討議
第9回	テキスト「第7章」	「第7章 地政言説から政治を読む」の報告と討議
第10回	テキスト「第8章」	「第8章 観光空間を文化論的に理解する」の報告と討議
第11回	テキスト「第9章」	「第9章 地域文化について考える」の報告と討議
第12回	テキスト「第13章」	「第13章 地理学の公共政策への応用」の報告と討議
第13回	テキスト「第14章」	「第14章 環境問題への地理学のかかわり」の報告と討議
第14回	まとめ	まとめ 授業において得たもの、得られなかったものの確認

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業前、テキストの該当箇所を読んでおくことはもちろん、該当箇所のテーマに沿った論文や本を読み、理解をより深める努力をします。

授業後、関連文献を読むことによって、自らの知識を高めます。

【テキスト（教科書）】

竹中克行編（2015）『人文地理学への招待』ミネルヴァ書房

【参考書】

山崎 朗ほか著（2016）『地域政策』中央経済社

【成績評価の方法と基準】

発表：50%、討議：50%

十分な準備が大前提となります。問題、論点の明確化された発表の評価が高く、討議は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行うことが望ましいです。

【学生の意見等からの気づき】

丁寧な議論に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論

<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72 - 3、2017年
4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年
5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005年
6. 「木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006年
7. 「水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－」ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

I aim at deep understanding about human geography by reading and releasing the text on which basic methodology and research field of human geography were written. A target, theory, methodology and research approach of human geography are acquired and makes sure that it'll be possible to use those at the time of the study execution.

HUG500B7

日本の環境論Ⅱ

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。今年度は「地方都市の地方活性化」をテーマに行います。人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。

【到達目標】

人文地理学に関する調査能力のアップを目指します。授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。その後、具体的にアンケート調査を実施し、授業の後半では調査結果を集計し、分析し、報告書を作成します。こうした作業を通じて、自らの調査能力のスキルアップを目指し、修士論文作成時の分析能力の向上を到達目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「人文地理学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の環境論Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業の最初に調査テーマ、調査項目、調査方法等を決定し、アンケート票を作成します。アンケート票の作成は学生が行います。その後、具体的にアンケート調査を実施します。調査地域は学生が相談の上決定します。現地へ出向き、調査を共同で実施し、より多くの調査票の回収を目指します。授業の後半では、回収された調査票を集計し、その後、単純集計、クロス集計の分析を行います。最後に各自で報告書を作成します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロ	調査目的と調査方針の決定
第2回	社会調査の基本の説明	社会調査の基本の説明
第3回	アンケート票作成時のルール(1)	フェイスシートの作成
第4回	アンケート票作成時のルール(2)	質問項目の作成
第5回	アンケート票作成時のルール(3)	回答項目の作成
第6回	現地調査のマナーの説明	現地調査のマナーの説明
第7回	アンケート票の作成(1)	アンケート票の形式の作成
第8回	アンケート票の作成(2)	質問項目の選定
第9回	アンケート票の作成(3)	アンケート票の完成
第10回	アンケート票の分析(1)	データ打ち込み
第11回	アンケート票の分析(2)	単純集計
第12回	アンケート票の分析(3)	クロス集計
第13回	報告書の作成(1)	作成手順の説明
第14回	報告書の作成(2)	完成書の提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めますが、作業は授業外でも行うことになります。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

別途、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

作業：50%、報告書：50%

【学生の意見等からの気づき】

授業時間内に十分な説明を行い、作業時間の確保に努めます。

【学生が準備すべき機器他】

授業では必ずパソコンを使用します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ 水資源研究、資源環境論、地域経済論

＜研究テーマ＞ 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

＜主要研究業績＞

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64 - 2、2018年
3. 「韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72 - 3、2017年

4. 『検証：岐阜県史問題－なぜ御嵩産廃問題は掲載されなかったのか－』ユニテ、2005年
 5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005年
 6. 『木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006年
 7. 『水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A questionnaire survey is performed at this session. We decide about an investigation theme, survey item and investigation method, etc. first. Next a questionnaire vote is made. After that a questionnaire survey is put into effect specifically. Survey result is totaled by the tuition's second half, it's analyzed and a report is made. "Activation in a local city" is made a theme this fiscal year. And We aim at a rise of the investigation ability about the human geography.

HUG500B7

日本の産業風土 I

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年春学期の授業では、主として経済や社会・文化に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「社会経済地理学研究Ⅰ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の産業風土Ⅰ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観 (1)	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観 (2)	都市に関する理論・概念についての関係性
第3回	経済からみた都市の理論・概念 (1)	経済からの理論・概念に関する講読 (1)
第4回	経済からみた都市の理論・概念 (2)	経済からの理論・概念に関する講読 (2)
第5回	経済からみた都市の理論・概念 (3)	経済からの理論・概念に関する議論 (1)
第6回	経済からみた都市の理論・概念 (4)	経済からの理論・概念に関する講読 (3)
第7回	経済からみた都市の理論・概念 (5)	経済からの理論・概念に関する講読 (4)
第8回	経済からみた都市の理論・概念 (6)	経済からの理論・概念に関する議論 (2)
第9回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (1)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (1)
第10回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (2)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (2)
第11回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (3)	社会・文化からの理論・概念に関する議論 (1)
第12回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (4)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (3)
第13回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (5)	社会・文化からの理論・概念に関する講読 (4)
第14回	社会・文化からみた都市の理論・概念 (6)	社会・文化からの理論・概念に関する議論 (2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50%、ディスカッション：50%で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

秋学期開講の「社会経済地理学研究Ⅱ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅱ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論

＜研究テーマ＞

都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories and concepts about economy, society and culture.

The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG500B7

日本の産業風土Ⅱ

小原 文明

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業は、都市に関する様々な理論・概念について学ぶものです。また、それら都市に関する理論や概念に対する理解を通じて、地理学の立場から都市の特徴や機能、役割などについて学びます。本年秋学期の授業では、主として都市計画や都市開発に関わる都市の理論や概念について考えていきます。

【到達目標】

都市に関する基礎的な知識を修得するとともに、都市に関する理論や概念に対する理解を深め、都市の特徴や機能、役割などについて考える力を身に付けることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「社会経済地理学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「日本の産業風土Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

本授業では授業テーマに関する概念整理など基礎的な事項についての講義を踏まえた後、都市の理論や概念に関する文献講読の発表およびディスカッションを中心に授業を展開します。各回のテーマに合わせて、あらかじめ文献を読み、関連する内容について理解しておくことが求められます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	都市に関する理論・概念の概観(1)	都市に関する理論・概念についての整理
第2回	都市に関する理論・概念の概観(2)	都市に関する理論・概念についての関係性
第3回	都市計画からみた都市の理論・概念(1)	都市計画からの理論・概念に関する講読(1)
第4回	都市計画からみた都市の理論・概念(2)	都市計画からの理論・概念に関する講読(2)
第5回	都市計画からみた都市の理論・概念(3)	都市計画からの理論・概念に関する講読(1)
第6回	都市計画からみた都市の理論・概念(4)	都市計画からの理論・概念に関する講読(3)
第7回	都市計画からみた都市の理論・概念(5)	都市計画からの理論・概念に関する講読(4)
第8回	都市計画からみた都市の理論・概念(6)	都市計画からの理論・概念に関する講読(2)
第9回	都市開発からみた都市の理論・概念(1)	都市開発からの理論・概念に関する講読(1)
第10回	都市開発からみた都市の理論・概念(2)	都市開発からの理論・概念に関する講読(2)
第11回	都市開発からみた都市の理論・概念(3)	都市開発からの理論・概念に関する講読(1)
第12回	都市開発からみた都市の理論・概念(4)	都市開発からの理論・概念に関する講読(3)
第13回	都市開発からみた都市の理論・概念(5)	都市開発からの理論・概念に関する講読(4)
第14回	都市開発からみた都市の理論・概念(6)	都市開発からの理論・概念に関する講読(2)

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業では文献講読の発表、およびそれに基づくディスカッションを中心に展開することから、あらかじめ各回のテーマに関する文献を読むとともに、関連する内容について理解を深め、自身の意見・見解を整理しておくことが求められます。

【テキスト（教科書）】

概説ならびに発表・討論で使用する文献・資料は授業内にて決定します。

【参考書】

授業の中で、適宜関連する文献を紹介します。

【成績評価の方法と基準】

プレゼンテーション：50%、ディスカッション：50%で評価します。具体的には、文献講読におけるプレゼンテーションの内容や方法、それぞれのディスカッションにおける討論内容・姿勢によって総合的に評価します。

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションが深まるように心掛けます。

【その他の重要事項】

春学期開講の「社会経済地理学研究Ⅰ」（地理学専攻科目）・「日本の産業風土Ⅰ」（国際日本学インスティテュート科目）も併せて受講することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞
 人文地理学（都市地理学、経済地理学、社会地理学）、都市開発論
 ＜研究テーマ＞
 都市開発、都市形成、土地利用、土地所有

【Outline and objectives】

This course introduces various urban theories and concepts to students taking this course. Especially, this course deals with the urban theories and concepts about urban planning and urban development. The goals of this course are to be able to understand the urban theories and to acquire the ability to consider characteristics, functions and roles of urban area.

HUG500B7

地図の文化誌 I

米家 志乃布

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本における地図の歴史とその研究方法を学ぶ（I）

【到達目標】

歴史地理学研究のオーソドックスな研究素材である古地図を取り上げて、日本における古地図研究の流れについて、各時代の主要な古地図を取り上げて、その概要を把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「歴史地理学研究 I」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「地図の文化誌 I」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 古代～近代日本における絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、新しい個別研究の可能性を模索する。
2. 日本における地図史研究の方法論の展開を踏まえながら、地図史全体の方法を議論する。
3. 歴史地理学における地図史研究の新しい展開について、日本で作製・出版された様々な地図を見ながら学習する。実際の絵図・地図を数多く見ながら、それについての文献を読む。
4. 近年の若手研究者による新しい地図史研究に関する論文を紹介し、新たな方法についても把握する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、出席者の確認をする。
2	日本の地図史概説①	班田図、荘園図、行基図について学ぶ。
3	日本の地図史概説②	天竺図、世界・日本図屏風について学ぶ。
4	日本の地図史概説③	江戸時代に作成された「国絵図」について学ぶ。
5	日本の地図史概説④	江戸時代に作成された「伊能図」について学ぶ。
6	日本の地図史概説⑤	明治時代の測量図について学ぶ。
7	江戸時代の地図について学ぶ①	刊行日本図の種類と特徴を学ぶ。
8	江戸時代の地図について学ぶ②	刊行都市図の種類と特徴を学ぶ。
9	江戸時代の地図について学ぶ③	江戸幕府による地図作製を学ぶ。
10	江戸時代の地図について学ぶ④	江戸幕府による地域調査や地誌作成と地図の関係について学ぶ。
11	地図史研究の論文を読む①	地理学分野の日本における最新の研究動向を把握する。
12	地図史研究の論文を読む②	日本史分野の最新の研究動向を把握する。
13	地図史研究の論文を読む③	地図史関係の単行本を選び、最新の研究動向を把握する。
14	地図史研究の論文を読む④	各大学の紀要類から最新の研究動向を把握する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各地の博物館や美術館で開催されている地図展や風景画展などの常設および企画展をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

織田武雄『地図の歴史・日本編』講談社新書、1974年。
 上杉和央『地図から読む江戸時代』ちくま新書、2015年。

【参考書】

授業内に適宜、関連文献を紹介し、必要があれば地図をコピーして配布したり、個人では手に入りにくい各地図の複製やアトラス類なども授業内で回覧、閲覧する時間も設けます。

【成績評価の方法と基準】

「配分 (%)」：出席 50 %、発表 30 %、議論 20 %
 「評価基準」：平常点

【学生の意見等からの気づき】

テキストや論文での勉強だけではなく、本物の古地図を閲覧したり、複製品やコピーを配布して、古地図を利用した研究のイメージをつくるのが大切です。いろいろな地図を見る機会をつくります。留学生の方々、地理学専攻以外の学生も大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ> 蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究

<主要研究業績>

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』、笠間書院、2015年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』、2015年など

【Outline and objectives】

studying history of cartography in Japan (1)

HUG500B7

地図の文化誌Ⅱ

米家 志乃布

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本における地図の歴史とその研究方法を学ぶ（2）

【到達目標】

歴史地理学研究のオーソドックスな研究素材である古地図を取り上げて、日本における「蝦夷地」（現在の北海道）をめぐる地域像の特徴、地図史研究の流れおよびその論点について学び、「蝦夷地」の古地図研究の動向について把握することを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

地理学専攻「歴史地理学研究Ⅱ」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連、国際日本学インスティテュート「地図の文化誌Ⅱ」においては「DP2」「DP3」に関連する。

【授業の進め方と方法】

1. 近世日本における「蝦夷地」を描いた絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、新しい個別研究の可能性を模索する。
2. ヨーロッパやロシアにおける「蝦夷地」を描いた絵図・地図を取り上げ、個別の絵図・地図に関する研究史を概観し、新しい個別研究の可能性を模索する。
3. 歴史地理学における地図史研究において、「蝦夷地」の地図史研究の新しい展開について、日本で作製・出版された様々な地図を見ながら学習する。実際の絵図・地図を数多く見ながら、それについての文献を読む。
4. 近年の新しい「蝦夷地」の地図史研究に関する論文を紹介し、新たな方法についても把握する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	授業内容の説明、出席者の確認をする。
2	古地図にみる蝦夷地①	日本北辺地図の特徴について概観する。
3	古地図にみる蝦夷地②	日本における初期の北辺地図の特徴について学習する。
4	古地図にみる蝦夷地③	欧州航海者やロシアの蝦夷地の地図について学習する。
5	古地図にみる蝦夷地④	日本における北辺地図作製の進展について学習する。
6	古地図にみる蝦夷地⑤	北辺地図の探求、間宮林蔵の地図について学習する。
7	古地図にみる蝦夷地⑥	幕末期の蝦夷地地図について学習する。
8	受講者による発表①	松前藩の地図作製について調べて発表する。
9	受講者による発表②	東北諸藩の地図作製について調べて発表する。
10	受講者による発表③	松浦武四郎の地誌・地図作製について調べて発表する。
11	受講者による発表④	江戸幕府の探検成果による地図作製について調べて発表する。
12	受講者による発表⑤	開拓使による地図作製について調べて発表する。
13	受講者による発表⑥	受講者各自の研究テーマのなかで、どのように地図史の研究方法を生かせるか議論する。
14	受講者による発表⑦	受講者各自の研究テーマのなかで、どのように歴史地理学的な研究方法を生かせるか議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各地の博物館などで開催されている地図展や常設展示のなかの「蝦夷地」に関わる部分をこまめにチェックし、機会をつくって足を運んでいただくことをおすすめします。

【テキスト（教科書）】

米家志乃布『近世日本と蝦夷地-古地図にみる北海道』法政大学出版局、2018年予定。

【参考書】

秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1999年。その他は適宜、授業内に紹介します。

【成績評価の方法と基準】

出席点：50%、発表50%

評価基準：平常点

【学生の意見等からの気づき】

歴史的用語や専門用語も丁寧に解説し、理解できるようにします。留学生の方々や地理学専攻以外の人も遠慮なく履修してください。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 歴史地理学 地図史研究

<研究テーマ> 蝦夷地・北海道の歴史地理学、日本・ロシアの地図史研究

<主要研究業績>

「人びとにとっての近世日本のかたち」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか』笠間書院、2015年）

「近世日本図の北辺・『蝦夷地』表象」『文学』2015年など

【Outline and objectives】

studying history of cartography in Japan (2)

OTR700B7

国際日本学研究 I

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞る、どのような手続きをとっていかなければならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程1年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程2・3年次はそれぞれ秋学期と春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究I」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を交えて行う。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	自己紹介（全員）、教員による授業の進め方の説明
第2回	研究課題の紹介（2・3年次生）①	博士論文のテーマをすでに決めている学生の研究報告
第3回	研究課題の紹介（2・3年次生）②	同上
第4回	研究課題の紹介（2・3年次生）③	同上
第5回	関心対象の紹介（1年次生）①	関心対象について、学術研究の可能性を考える
第6回	関心対象の紹介（1年次生）②	同上
第7回	博士後期課程の中間報告（2・3年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第8回	修士課程の中間報告（2・3年次生）②	同上
第9回	研究動向の確認（1年次生）	先行研究の調査に基づいた文献目録の提示と検討
第10回	先行研究の論旨の整理（2・3年次生）①	先行研究の状況を調査し、論旨を整理した上、各自の研究テーマの研究史上の意義を検討
第11回	先行研究の論旨の整理（2・3年次生）②	同上
第12回	先行研究の論旨の整理（1年次生）①	同上
第13回	先行研究の論旨の整理（1年次生）②	同上
第14回	夏期休暇中の作業計画立案	各自が行うべき作業の検討

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 5分程度の自己紹介を用意し、授業に期待することが述べられるように考えてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現一『文机談』に見える秘曲を聴く一」（磯水絵編『今日一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏楽《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真探》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・篳篥・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「工尺譜の起源をめぐって—唐代の文字譜との関係—」（磯水絵編『論集文学と音楽史—詩歌管絃の世界—』、和泉書院、2013年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR700B7

国際日本学Ⅱ

スティーヴン・G・ネルソン

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本研究（特に古典音楽、伝統芸能、古典文学など）の在り方と方法

【到達目標】

ネルソン・ゼミは、さまざまな国籍の、さまざまな研究分野に関心をもつ学生が所属するので、「日本研究」をするに当たり、どのような研究テーマを選び、どのように焦点を絞り、どのような手続きをとっていかねばならないかを、参加学生それぞれに即して、指導していく場とする。学生の学年によって到達目標は異なってくる。博士後期課程1年次生は研究課題を明確にし、先行研究を十分に調査・精読し、秋学期の中間発表等を経て論文の構想を十分に練ること。博士後期課程2・3年次生はそれぞれ秋学期、春学期の中間発表に備え、授業や中間発表会等における指摘を受け止め、十分に練った目次案に従い、余裕を持って論文を執筆すること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的に学生の研究発表を中心に、質疑応答、全員での討論、指導教員の講評等を行く。以下に一応の授業計画を示してみたが、具体的な内容・スケジュールは、参加学生の人数・関心対象・学習意欲・予備知識などを鑑みて、第1回のガイダンスの際に決めたいと考えている。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	夏期休暇の成果報告	秋学期スケジュールの確認 院生全員による夏期休暇中の研究成果報告
第2回	博士論文構想の報告（2・3年次生）①	博士論文の構想を説明し、作成作業の進捗状況を報告
第3回	博士論文構想の報告（2・3年次生）②	同上
第4回	博士論文構想の報告（2・3年次生）③	同上
第5回	先行研究の紹介と整理（1年次生）①	研究課題に関する先行研究を調査・精読し、学術論文の作成方法、論理展開、文体や体裁の特徴を学ぶ
第6回	先行研究の紹介と整理（1年次生）②	同上
第7回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）①	中間発表会に向けた配布資料・読み上げ原稿の準備
第8回	博士後期課程の中間報告（1・2年次生）②	同上
第9回	博士論文の中間報告（2年次生）①	博士論文執筆の進捗状況に関する報告
第10回	博士論文の中間報告（2年次生）②	同上
第11回	博士論文の構想発表（1年次生）①	学術的な論理展開に基づき、博士論文の目次案を立て、各章の内容について概要を記す
第12回	博士論文の構想発表（1年次生）②	同上
第13回	担当教員による年末講義	担当教員自身の、本年度の研究活動に関する講義
第14回	まとめ	春季休暇中の作業課題に関する計画を示す

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

第1回 夏期休暇中の研究成果をまとめてくる。
以後 各自の研究を意欲的に進める。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

必要に応じて授業内や個人指導の際に指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表・各種作成資料の内容 50%、討論への参加等の平常点 50%。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本音楽史学

<研究テーマ> 日本の楽譜、初期の講式（漢文訓読体の声明の一種）と平家語りの音楽構成法、平安時代の年中行事と音楽、声歌／唱歌～越殿楽謡物～箏組歌の系譜、『源氏物語』・『平家物語』の音楽、日本古典文学の英訳など
<主要研究業績>

①「唐代伝来の音楽とその再現」（『唐代音楽の研究と再現 資料集』上野学園大学日本音楽史研究所、2014年）

②「『秘曲尽くし』再現一『文机談』に見える秘曲を聴く一」（磯水絵編『今日一日、方丈記』新典社、2013年）◇付録CD「『秘曲尽くし』再現」（秘曲再現監修）に次の雅楽秘曲の復元演奏を収録：箏《小調子》、笙《平調入調》、琵琶《大常博士楊真操》、箏《千金調子》、琵琶《石上流泉》、琵琶《上原石上流泉》、箏《由加見調子》、琵琶《啄木》、笛・箏・笙・太鼓（陵王）《荒序》

③「蘇る平安の音」（神野藤昭夫・多忠輝監修『越境する雅楽文化』、書肆ワローラ、2009年）

【Outline and objectives】

This is a postgraduate seminar in Japanese studies, mainly for students writing their doctoral dissertation under the instructor's supervision. The class centers on presentations given by students on their research and other related topics.

OTR700B7

国際日本学研究 I

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文の完成を目指す。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究I」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第2回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第3回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第4回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第5回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第6回	共同調査（1）	フィールドワークを行う
第7回	共同調査（2）	フィールドワークを行う
第8回	共同調査（3）	フィールドワークを行う
第9回	共同調査（4）	フィールドワークを行う
第10回	共同調査（5）	フィールドワークを行う
第11回	共同調査（6）	フィールドワークを行う
第12回	研究内容の報告（5）	受講生の発表
第13回	研究内容の報告（6）	受講生の発表
第14回	研究内容の報告（7）	受講生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対しての準備をしっかり行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50% 討論：50% 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論
<研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済

<主要研究業績>

1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018年
3. 「韓国の水辺環境改善事業の特徴－韓国4大河川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017年
4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御高産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年
5. 「水資源開発の論理－その批判的検討－」成文堂、2005年
6. 「木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－」成文堂、2006年
7. 「水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－」ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A member of a class will report on a thesis for a doctorate. A member of a class aims at completion of a thesis for a doctorate by discussing. A joint investigation is put into effect at the same time.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

伊藤 達也

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の博士論文テーマを報告し、討論をすることによって、博士論文の完成を目指す。受講生は基本的に授業内で博士論文の構想、準備状況を発表する。同時に共同調査を実施する。

【到達目標】

適切な博士論文の完成を目指す。具体的には、博士論文を作成するための適切な知識の獲得、適切な説明論理の獲得、適切なオリジナリティを有した博士論文の作成を目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は受講生の発表と共同調査を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	ゼミの運営についての議論
第2回	研究内容の報告（1）	受講生の発表
第3回	研究内容の報告（2）	受講生の発表
第4回	研究内容の報告（3）	受講生の発表
第5回	研究内容の報告（4）	受講生の発表
第6回	共同調査（1）	フィールドワークを行う
第7回	共同調査（2）	フィールドワークを行う
第8回	共同調査（3）	フィールドワークを行う
第9回	共同調査（4）	フィールドワークを行う
第10回	共同調査（5）	フィールドワークを行う
第11回	共同調査（6）	フィールドワークを行う
第12回	研究内容の報告（5）	受講生の発表
第13回	研究内容の報告（6）	受講生の発表
第14回	研究内容の報告（7）	受講生の発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究課題に対する準備をしっかりと行うこと。具体的には、先行研究の読破、説明論理の獲得、分析手段の獲得、調査の実施、調査結果のとりまとめと分析などである。

【テキスト（教科書）】

テキストは使用しない。

【参考書】

別途、授業内で提示する。

【成績評価の方法と基準】

発表：50% 討論：50% 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価が高い。討論は、単純な質問、意見に対する疑問の提示、反論を丁寧に分けて行われることが望ましい。

【学生の意見等からの気づき】

十分な議論の時間の確保に努めます。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域> 水資源研究、資源環境論、地域経済論
 <研究テーマ> 木曾川水系の水資源問題、地域資源の持続可能な利用、地域経済
 <主要研究業績>
 1. 「国土利用」（共著岡橋秀典・伊藤達也）（経済地理学会編『キーワードで読む経済地理学』原書房、2018年）
 2. 「利根川の利水問題」『経済地理学年報』64-2、2018年
 3. 「韓国の水辺環境改善事業の特徴－韓国4大川川再生事業を事例に－」『地理科学』72-3、2017年
 4. 「検証：岐阜県史問題－なぜ御高産廃問題は掲載されなかったのか－」ユニテ、2005年
 5. 『水資源開発の論理－その批判的検討－』成文堂、2005年
 6. 『木曾川水系の水資源問題－流域の統合管理を目指して－』成文堂、2006年
 7. 『水資源計画の欺瞞－木曾川水系連絡導水路計画－』ユニテ、2008年

【Outline and objectives】

A member of a class will report on a thesis for a doctorate. A member of a class aims at completion of a thesis for a doctorate by discussing. A joint investigation is put into effect at the same time.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅰ

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整を経て1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅰ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整。
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	賜姓源氏の出自
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	賜姓源氏の財源
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	賜姓源氏の政治的位置
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	賜姓源氏設置の歴史的意義
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	渤海とは何か
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	日渤海交渉の歴史定義
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	日渤海交渉の変質
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	外交儀礼の特徴
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	日本古代の駅制とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	日本古代駅制の特質
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	駅伝制の検討
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	中国との比較
第14回	春学期の総括	これまで発表した成果について相互批判する

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき特になし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
 日本古代史
 <研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatebaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小口 雅史

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

課程博士としての論文を仕上げるために、その構想から執筆、全体の調整を経て1つにまとめていく過程全体を徹底的に支援してもらうための演習である。

【到達目標】

最終的に博士論文をまとめるために、年に最低でも2本程度（できれば3本の脱稿を目指す）の論文を執筆出来るように努力する。ときおり高度な模範論文を輪読して、論理的な論文の書き方を会得することも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

基本的には博士課程の院生が輪番で毎回論文文化したい一つのテーマを選び、先行研究のまとめ、利用する史料とその解釈を紹介しながら、一つの論文になるよう報告してもらう。ときおり名著とされる日本古代史関係の古典的論文を取り上げて、参加者全員で輪読することも実施する。また既修了者による論文構想過程についても紹介してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	自己紹介、授業方法の説明、報告担当の調整
第2回	博士課程院生による論文発表(1)	聖徳太子信仰の形成
第3回	博士課程院生による論文発表(2)	聖徳太子信仰の展開
第4回	博士課程院生による論文発表(3)	聖徳太子信仰の史料論
第5回	博士課程院生による論文発表(4)	聖徳太子信仰の歴史的意義
第6回	博士課程修了者による論文発表(1)	外交儀礼の日唐比較
第7回	博士課程修了者による論文発表(2)	外交儀礼の歴史的意味
第8回	博士課程修了者による論文発表(3)	渤海と新羅の比較
第9回	博士課程修了者による論文発表(4)	遣唐使との比較
第10回	博士課程院生による論文発表(5)	人姓とは何か
第11回	博士課程院生による論文発表(6)	複姓氏族の検討
第12回	博士課程院生による論文発表(7)	舍人の語原
第13回	博士課程院生による論文発表(8)	舍人氏族の実態
第14回	秋学期の総括	発表者による相互批判と論文文化の成果報告

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

事前に発表要旨を配布してもらうので、それを熟読してから参加すること。

【テキスト（教科書）】

使用しない。

【参考書】

その都度指定する。

【成績評価の方法と基準】

最終的に脱稿した論文の完成度によって評価する。

演習中における他の発表者への指摘内容についても考慮することがある。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につきとくになし。

【学生が準備すべき機器他】

特になし

【その他の重要事項】

特になし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本古代史

<研究テーマ>

日本古代社会経済史・日中比較律令法史・古代中世北方史

<主要研究業績>

2010年、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』

2008年、『エミシ・エゾ・アイヌ』（編著）、岩田書院

2008年、『近時の在欧吐魯番出土漢文文書の整理・公開等をめぐって』『古文書研究』66

2007年、『在ベルリン吐魯番出土漢文世俗文書総合目録』のその後－FileMakerによるDatabaseのWeb公開の一例として』『漢字文献情報処理研究』8

【Outline and objectives】

To finish the research as a doctorate in the course, Professors and seminar students repeatedly discuss the subjects.

OTR700B7

国際日本学研究 I

椎名 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

語用論関連の最新の文献を読み、批判的読解をしながら、自分の論文に反映させていきます。

<講義題目>

談話分析と文体論の手法を学ぶ

【到達目標】

自分が博士論文で扱うテキストのジャンルを選択し、そのジャンルに適した分析方法の基礎的技術が身に付けられる文献を読みます。また、パイロットスタディーとして、そのテキストのサンプルを分析し、その分析結果を発表します。発表についての他の人からのフィードバックを受けて、分析のレベルを向上させながら、博士論文の完成を目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究I」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

完全な個人指導によって、学生のニーズに合わせた授業を進めていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	教員による授業の解説、受講生の研究テーマの発表により今後の発表分担の決定
2	テキストにそって2チャプターずつ進みます。 A1: Context and co-text B1: Analysing the discourse in context	担当の受講生による発表とディスカッション
3	C1: Context D1: Context, knowledge, repetition, reference	担当の受講生による発表とディスカッション
4	A2: Speech acts	担当の受講生による発表とディスカッション
5	B2: Using speech acts C2: Exploring speech acts D2: Speech acts and power	担当の受講生による発表とディスカッション
6	A3: Conversation B3: The pragmatics of conversation	担当の受講生による発表とディスカッション
7	C3: The analysis of conversation D3: Conversation and race	教員による論文の中間指導 各自の研究テーマの中間発表
8	学生による研究の中間発表	学生による研究発表と教員による論文指導
9	A4: The cooperative principle B4: Cooperation and relevance	担当の受講生による発表とディスカッション
10	C4: Following the cooperative principle D4: Relevance and indirectness	担当の受講生による発表とディスカッション
11	A5: Politeness B5: The principle of politeness	担当の受講生による発表とディスカッション
12	C5: Applying politeness D5: Reading in politeness	担当の受講生による発表とディスカッション
13	A6: Corpora and communities B6: Corpora and communities	担当の受講生による発表とディスカッション
14	C6: Corpora and communities D6: Corpora and language teaching	担当の受講生による発表とディスカッション、および総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自分の研究テーマについて中間発表を繰り返しながら、論文完成を目指す。関連学会で学会発表をして、フィードバックをもらい、論文の内容を向上させる。

【テキスト（教科書）】

Joan Cutting (2008) Pragmatics and discourse: A resource book for students (2nd edition), London and New York: Routledge.

テキストは、受講生と相談して最終的に決定するので、ガイダンスが終わるまでは購入しないでください。

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況で評価します。

【学生の意見等からの気づき】

論文の進捗状況が受講生によってかなり異なるため、全員に同じ指導をしても有効ではないので、なるべく多くの機会に、論文の中間発表をしてもらうことにしています。また、一人の学生に必要な文献をみんなで読んだりもしています。

今年度も、この中間発表によって自分がどこまでできているのか、今後何をすべきかなどについて、きちんと把握できるようにしていきます。

自分の研究テーマについて深く考え、他の受講生からのフィードバックも参考にしながら、期末レポートに反映し、ひいては論文完成につながるようにしていきます。

【学生が準備すべき機器他】

論文の提出は基本的にはハードコピーをお願いします。その他の場合は、こちらで各自に指示を出しますので、それに従ってください。

【その他の重要事項】

日本英文学会、日本英語学会、日本英語教育学会、日本語用論学会、日本語コーパス学会などの学会への参加をお勧めします。法政大学英文学会での発表も積極的に行うとよいと思います。

オフィスアワーは火曜4限ですが、授業後の時間も可能です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡しておいてもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、社会言語学、

<研究テーマ> 近代英語の歴史語用論的研究

<主要研究業績>

(1) 「呼びかけ語」の機能——歴史語用論的アプローチ」(2010)、川端朋広他編『秋元実治教授退職記念論文集』、ひつじ書房。

(2) 「歴史語用論の新展開:方法と課題」(2009)『月刊言語』2009年2月号、大修館書店 pp. 66-73.

(3) 'Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics',

(2008) *Bulletin of the Faculty of Letters, No. 56, Hosei University, pp. 29-48.*

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

椎名 美智

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

自分のテーマにそったテキスト分析をし、学術論文を書きあげることを目指します。自分のテーマに沿って論文を執筆し、中間発表をしながら、セメスター終了時には論文の何章かが仕上がることを目標とします。

<講義題目>

談話分析と文体論の基本的概念とテキスト分析の手法を学ぶ

【到達目標】

自分が博士論文で扱うテキストのジャンルに適した分析方法の基礎的技術が身に付けられる文献を読みます。また、パイロットスタディーとして、サンプルテキストを分析し、その分析結果を発表します。発表についての他の人からのフィードバックを受けて、分析のレベルを向上させながら、博士論文の完成を目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

全て個人指導によって、他の研究者の論文を読んだり、面談によって論文の指導をしたり、添削指導をします。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】**秋学期**

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	教員による授業の解説、受講生の研究テーマの発表により今後の発表分担の決定
2	Introduction	担当の受講生による発表とディスカッション
3	Style and choice (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
4	Style and choice (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
5	Style, text and frequency (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
6	Style, text and frequency (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
7	学生による中間発表	学生による研究の中間発表と、教員による論文指導
8	A method of analysis and some examples (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
9	A method of analysis and some examples (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
10	Levels of style (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
11	Levels of style (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
12	Language and the fictional world (1)	担当の受講生による発表とディスカッション
13	Language and the fictional world (2)	担当の受講生による発表とディスカッション
14	Mind style	担当の受講生による発表とディスカッション、および総括

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

セメスターを通じて、以下に留意して授業に臨んでください。

1：各自の過去の学術論文、研究のまとめと今後の研究計画を立てる。

2：自分の担当した箇所をきちんと読み、プレゼンテーションができるように予習・準備をする。

3：自分に必要な参考文献を集めて、読む。

4：各自、自分の研究テーマについて中間発表を繰り返しながら、論文完成を目指す。

【テキスト（教科書）】

Geoffrey Leech and Mick Short (2007) Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose, Second edition, London: Pearson Longman.

テキストは、受講生と相談して最終的に決定するので、ガイダンスが終わるまでは購入しないでください。

【参考書】

上記以外の文献は、必要に応じて紹介します。

【成績評価の方法と基準】

論文の進捗状況、内容によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

論文の進捗状況が受講生によってかなり異なるため、全員に同じ指導をしても有効ではないので、昨年度から、なるべく多くの機会に、論文の中間発表をしてもらうことになっています。また、自分に必要な文献をみんなで読んだりもしています。

今年度も、この中間発表によって、自分がどこまでできているのか、これから何をすべきかなどについて、きちんと把握できるようにしていきます。自分の研究テーマについて深く考え、他の受講生からのフィードバックも参考にしながら、期末レポートに反映し、ひいては論文完成につながるようにしていきます。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出は基本的にはハードコピーをお願いします。その他の場合は、こちらで各自に指示を出しますので、それに従ってください。

【その他の重要事項】

日本英文学会、日本英語学会、日本英語教育学会、日本語用論学会、日本英語コーパス学会などの学会への参加をお勧めします。法政大学英文学会での発表も積極的に行うとよいと思います。

オフィスアワーは火曜日4限、または授業後の時間です。論文指導の場合は、事前に原稿を教員に渡してもらえると、効率的なコンサルテーションになると思います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 語用論、文体論、社会言語学、

<研究テーマ> 近代英語の歴史語用論的研究

<主要研究業績>

(1) 「呼びかけ語」の機能——歴史語用論的アプローチ」(2010)、川端朋広他編『秋元実治教授退職記念論文集』、ひつじ書房。

(2) 「歴史語用論の新展開:方法と課題」(2009)『月刊言語』2009年2月号、大修館書店 pp. 66-73。

(3) 'Positioning and Functioning of Vocatives: A Case Study in Historical Pragmatics',

(2008) *Bulletin of the Faculty of Letters, No. 56, Hosei University, pp. 29-48.*

【Outline and objectives】

The purpose of this course is to have an overview of pragmatics and discourse analysis so that students can apply methodologies and theories in their own research.

OTR700B7

国際日本学研究 I

水野 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『21世紀の資本』（トマ・ピケティ）を通じて、欧米で起きている「新しい世襲資本主義」が日本でも該当するか否かを検証する。また、2000年間経済を貫いてきた「 r （資本収益率） $>$ g （経済成長率）」の結果、世界中で富の集中が生じた結果、どのような弊害が生じているかを把握することができる。21世紀の資本主義の在り方について自分の意見を持つことができる。

【到達目標】

『21世紀の資本』は欧米の長期データを駆使しながら、資本の本質を明らかにした。欧米で起きている経済現象を日本のデータで確認することで、日本も欧米と同様の問題を抱えていることを確認できる。利率率ゼロの意味に関して、ケインズの解釈とマルクスの解釈でまったく異なる結論を導くことができることを理解することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究I」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

『21世紀の資本』を輪読すると同時に、本書のなかでも用いられている欧米のデータに該当する日本のデータを収集し、比較検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】**春学期**

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション、 『21世紀の資本』の「はじめに」	授業の進め方の説明、「はじめに」の説明
第2回	『21世紀の資本』の第1章	所得と産出、資本/所得比率の理解、資本主義の第一法則
第3回	『21世紀の資本』の第2章	経済成長-幻想と現実
第4回	『21世紀の資本』の第3章	資本の変化
第5回	『21世紀の資本』の第4章	古いヨーロッパから新世界へ
第6回	『21世紀の資本』の第5章	長期的にみた資本/所得比率、資本主義の第二基本法則
第7回	『21世紀の資本』の第6章	21世紀における資本と労働の分配
第8回	『21世紀の資本』の第7章	格差と集中—予備的な見直し
第9回	『21世紀の資本』の第8章	二つの世界
第10回	『21世紀の資本』の第9章	労働所得の格差
第11回	『21世紀の資本』の第10章	資本所得の格差
第12回	『21世紀の資本』の第11章	長期的にみた能力と相続
第13回	『21世紀の資本』の第12章	21世紀における世界的な富の格差
第14回	『21世紀の資本』の第13章	21世紀の社会国家

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究テーマと毎回のテーマとの関連づけを事前に予習しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『21世紀の資本』トマ・ピケティ、山形浩生他、みすず書房（あるいは、英語版）

【参考書】

ケインズ『一般理論』塩野谷 祐一訳、東洋経済新報社、1995年

【成績評価の方法と基準】

発表：50% 討論：50% 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価を高くする。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、演習の終わりに演習の進め方について意見を聞く。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代日本経済論、グローバル経済論

<研究テーマ> グローバル化が経済に及ぼす影響、資本主義の課題

<主要研究業績>

1. 『100年デフレーション 21世紀はバブル多発型物価下落の時代～』日本経済新聞社、2003年
2. 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞出版社、2003年
3. 『終わりなき危機 君はグローバリゼーションの真実を見たか』日本経済新聞出版社、2011年
4. 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014年
5. 『資本主義の終焉、その先の世界』詩想社新書、榊原英資共著、2015年
6. 『株式会社の終焉』ディスカバー 21、2016年
7. 『閉じていく帝国と逆説の 21 世紀経済』集英社新書、2017年

【Outline and objectives】

This course introduces the cause of deflation and zero interest rate, and effect of globalization, and the problem of poverty to students of doctor course taking this course.

Student can consider the pluses and minuses of Capitalism and the essentials of Capital in the 21st century and a subject modern society.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

水野 和夫

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

『21世紀の不平等』（アンソニー・アトキンソン、東洋経済新報社）を参考にして、世界的に生じている不平等の原因を探ることができる。本書は『21世紀の資本』の格差拡大の原因分析をうけて、15の解決策を提案しているため、21世紀の政策課題を学ぶことができる。

【到達目標】

本書と国際演習Ⅰで取り扱った『21世紀の資本』を合わせて研究することで、21世紀の資本主義が抱える問題とその解決策を学ぶことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

授業は複数の課題図書の中から、各自が最も関心のあるテーマに近い図書を選び、毎回、受講生が発表し、参加者で討議を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方の説明
第2回	『21世紀の不平等』のはじめに	本書全体の概要
第3回	『21世紀の不平等』第1章	議論の基礎
第4回	『21世紀の不平等』第2章	歴史から学ぶ
第5回	『21世紀の不平等』第3章	不平等の経済学
第6回	『21世紀の不平等』第4章	技術変化と対抗力
第7回	『21世紀の不平等』第5章	将来の雇用と賃金
第8回	『21世紀の不平等』第6章	資本の共有
第9回	『21世紀の不平等』第7章	累進課税
第10回	『21世紀の不平等』第8章	万人に社会保障を
第11回	『21世紀の不平等』(p.275~280)	不平等を減らす 15の提案
第12回	『21世紀の不平等』第9章	パイの縮小?
第13回	『21世紀の不平等』第10章	グローバル化のせいで何もできないか?
第14回	『21世紀の不平等』第11章	予算は足りるだろうか?

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

自らの研究テーマと毎回のテーマとの関連づけを事前に予習しておくこと。

【テキスト（教科書）】

『21世紀の不平等』（アンソニー・アトキンソン、山形浩生、森本正史訳、東洋経済新報社

【参考書】

『時間かせぎの資本主義』シュトレック、ヴォルフガング、鈴木直訳、みすず書房、2016年

【成績評価の方法と基準】

発表：50% 討議：50% 十分な準備が大前提となる。問題、論点の明確化された発表の評価を高くする。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、演習の終わりに演習の進め方について意見を聞く。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 現代日本経済論、グローバル経済論

<研究テーマ> グローバル化が経済に及ぼす影響、資本主義の課題

<主要研究業績>

1. 『100年デフレーション 21世紀はバブル多発型物価下落の時代～』日本経済新聞社、2003年
2. 『人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか』日本経済新聞出版社、2003年
3. 『終わりなき危機 君はグローバリゼーションの真実を見たか』日本経済新聞出版社、2011年

4. 『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書、2014年
5. 『資本主義の終焉、その先の世界』詩想社新書、榊原英資共著、2015年
6. 『株式会社の終焉』ディスカバー 21、2016年
7. 『閉じていく帝国と逆説の21世紀経済』集英社新書、2017年

[Outline and objectives]

This course introduces the cause of deflation and zero interest rate, and effect of globalization, and the problem of poverty to students of doctor course taking this course.

Student can consider the pluses and minuses of Capitalism and the essentials of Capital in the 21st century and a subject modern society.

OTR700B7

国際日本学研究 I

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文に向けて発表を重ねて研究を進める。

学期に1論文をしあげることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究I」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

学生の報告と議論で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第2回	学生の報告1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第3回	学生の報告2	同上
第4回	学生の報告3	同上
第5回	学生の報告4	同上
第6回	学生の報告5	同上
第7回	学生の報告6	同上
第8回	学生の報告7	同上
第9回	学生の報告8	同上
第10回	学生の報告9	同上
第11回	学生の報告10	同上
第12回	学生の報告11	同上
第13回	学生の報告12	同上
第14回	学生の報告13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

ひたすら論文執筆と学会報告準備をすること。

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸、文化

<研究テーマ>戯作と挿絵、絵本、江戸東京

<直近の主要研究業績>

『へんちくりん江戸挿絵本』インターナショナル新書、集英社インターナショナル、2019年

『書籍を模擬する遊び―「見立絵本」にかんする疑問、から―』『京都語文』26号、58-71頁、2018年

みなさんがかんばって書きましょう！

【Outline and objectives】

Reporting and discussing each student's academic activities

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小林 ふみ子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

受講生の関連分野の研究動向を分析しながら、各自の研究の意義と進捗を確認する。

【到達目標】

受講生各自が自身の研究の意義を考えつつ、博士論文に向けて発表を重ねて研究を進める。

学期に1論文を書くことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

学生の報告と議論で進める。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	現状の確認	各自が現状と今年度の論文執筆目標を報告しあう。
第2回	学生の報告1	研究の現状と課題を報告し、助言しあう
第3回	学生の報告2	同上
第4回	学生の報告3	同上
第5回	学生の報告4	同上
第6回	学生の報告5	同上
第7回	学生の報告6	同上
第8回	学生の報告7	同上
第9回	学生の報告8	同上
第10回	学生の報告9	同上
第11回	学生の報告10	同上
第12回	学生の報告11	同上
第13回	学生の報告12	同上
第14回	学生の報告13	同上

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

ひたすら論文執筆と学会報告準備をすること。

【テキスト（教科書）】

適宜助言する。

【参考書】

適宜助言する。

【成績評価の方法と基準】

論文執筆状況で評価する（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。互いに率直に意見しあうのは大歓迎です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本近世文芸、文化

<研究テーマ>最近近世日本の日本と異国表象も

<近刊予定>

4項目を寄稿した『〈奇〉と〈妙〉の江戸文学史』も近日出版予定です。

みなさんががんばって、楽しんで書きましょう！

【Outline and objectives】

Reporting and discussing each student's academic activities

OTR700B7

国際日本学研究Ⅰ

小秋元 段

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の執筆に向けた各種研究について錬磨する。

【到達目標】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の完成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅰ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講者の口頭発表・討論を行うとともに、原稿の添削指導も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今期の授業の進め方について打ち合わせを行う。
第2回	基礎発表1	『太平記』諸本論に関する発表・討論。
第3回	基礎発表2	『太平記』における漢籍受容に関する発表・討論。
第4回	基礎発表3	『平家物語』における漢籍受容に関する発表・討論。
第5回	基礎発表4	石敢當に関する発表・討論。
第6回	学会発表指導1	『太平記』諸本論に関する学会発表指導。
第7回	学会発表指導2	『太平記』における漢籍受容に関する学会発表指導。
第8回	学会発表指導3	『平家物語』における漢籍受容に関する学会発表指導。
第9回	学会発表指導4	石敢當に関する学会発表指導。
第10回	学会誌投稿論文指導1	『太平記』に関する学会誌投稿論文添削指導。
第11回	学会誌投稿論文指導2	『太平記』における漢籍受容に関する学会誌投稿論文添削指導。
第12回	学会誌投稿論文指導3	『平家物語』における漢籍受容に関する学会誌投稿論文添削指導。
第13回	学会誌投稿論文指導4	石敢當に関する学会誌投稿論文添削指導。
第14回	夏期休業に向けての研究計画指導1	『太平記』研究に関する今後の研究計画についての指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

基礎発表、学会発表、学会誌投稿論文の準備。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

基礎発表（12.5%）、学会発表（37.5%）、学会誌投稿論文（50.0%）の完成度。

【学生の意見等からの気づき】

授業時間以外の場でも指導の時間を設けるので、積極的に取り組んでもらいたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中世文学、書誌学

<研究テーマ>軍記物語、中世～近世初頭の出版

<主要研究業績>『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）、『校訂京大本太平記』（共編、勉誠出版、2011年）、『太平記をとらえる』第1～3巻（共著、笠間書院、2014～16年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）

【Outline and objectives】

In this course, I will advise graduate students on there thesis.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

小秋元 段

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の執筆に向けた各種研究について錬磨する。

【到達目標】

博士論文およびその過程における学会発表原稿、投稿論文原稿の完成。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

受講者の口頭発表・討論を行うとともに、原稿の添削指導も行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今期の授業の進め方について打ち合わせを行う。
第2回	基礎発表1	『太平記』諸本論に関する発表・討論。
第3回	基礎発表2	『太平記』における漢籍受容に関する発表・討論。
第4回	基礎発表3	『平家物語』における漢籍受容に関する発表・討論。
第5回	基礎発表4	石敢當に関する発表・討論。
第6回	学会発表指導1	『太平記』諸本論に関する学会発表指導。
第7回	学会発表指導2	『太平記』における漢籍受容に関する学会発表指導。
第8回	学会発表指導3	『平家物語』における漢籍受容に関する学会発表指導。
第9回	学会発表指導4	石敢當に関する学会発表指導。
第10回	学会誌投稿論文指導1	『太平記』諸本論に関する学会誌投稿論文添削指導。
第11回	学会誌投稿論文指導2	『太平記』における漢籍受容に関する学会誌投稿論文添削指導。
第12回	学会誌投稿論文指導3	『平家物語』における漢籍受容に関する学会誌投稿論文添削指導。
第13回	学会誌投稿論文指導4	石敢當に関する学会誌投稿論文添削指導。
第14回	夏期休業に向けての研究計画指導1	『太平記』研究に関する今後の研究計画についての指導。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

基礎発表、学会発表、学会誌投稿論文の準備。

【テキスト（教科書）】

なし。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

基礎発表（12.5%）、学会発表（37.5%）、学会誌投稿論文（50.0%）の完成度。

【学生の意見等からの気づき】

授業時間以外の場でも指導の時間を設けるので、積極的に取り組んでもらいたい。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉日本中世文学、書誌学
〈研究テーマ〉軍記物語、古活字版
〈主要研究業績〉『太平記・梅松論の研究』（汲古書院、2005年）、『校訂京大本太平記』（共編、勉誠出版、2011年）、『太平記をとらえる』第1～3巻（共著、笠間書院、2014～16年）、『増補太平記と古活字版の時代』（新典社、2018年）

【Outline and objectives】

In this course, I will advise graduate students on their thesis.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅰ

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈博士論文指導〉
この授業は博士後期課程に在学中で、博士論文を準備中の学生を対象としています。定められた年限で博士論文を完成させていくことができるように、この授業では、基本的には個別に、計画的に、論文指導が行われていきます。

【到達目標】

- 研究対象である文献・資料の把握と理解とを前進させます。
- 先行研究についての知識と理解とを前進させます。
- 研究テーマそのものについての理解と考察を前進させます。
- 博士論文の執筆の作業を前進させます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅰ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

毎回の授業をどう進めるのかを決めること自身が、授業の内容となります。そこから始めて、研究の直接の対象である主要文献と先行研究の諸文献とを読解していくこと、また、博士論文そのものを各章ごとに執筆していくことが、計画的に行われていくように、毎週の授業ではそのチェックと指導が、基本的には個人的に、行われていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	参加者の博士論文準備の状況と内容に応じて、授業の進め方を話し合います。
第2回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの内容を改めて確認します。
第3回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの価値を改めて確認します。
第4回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献1を検討します。
第5回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献2を検討します。
第6回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献3を検討します。
第7回	執筆	準備されている博士論文の執筆状況を確認します。
第8回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献1を検討します。
第9回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献2を検討します。
第10回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献3を検討します。
第11回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究1を検討します。
第12回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究2を検討します。
第13回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究3を検討します。
第14回	執筆	準備されている博士論文のその後の執筆状況を確認します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文の準備を、主要文献について、補助文献について進めるとともに、先行研究にも適宜触れていきます。並行して、論文の執筆自体も進めます。

【テキスト（教科書）】

準備されている博士論文が扱う主要文献。

【参考書】

準備されている博士論文が扱う補助文献、およびそのテーマの先行研究が見いだされる諸資料。

【成績評価の方法と基準】

主要文献や補助文献および先行研究の扱いでどれほどの前進があったか（50%）、また、テーマの研究がどれほど進み、執筆がどれほど進んだのか（50%）、に応じて、平常点で評価を行います。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉

-国際日本学
-哲学
<研究テーマ>
-明治の日本近代思想の再評価
-西洋思想の近代日本への導入の問題
<主要研究業績>

-*Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan*(共著、*Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008*)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」(『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所)

-「西周と軍人勅諭」(『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所)

-*La philosophie japonaise* (共著、Vrin, 2013)

【Outline and objectives】

< Doctor thesis instruction >

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〈博士論文指導〉

この授業は博士後期課程に在学中で、博士論文を準備中の学生を対象にしています。定められた年限で博士論文を完成させていくことができるように、この授業では、基本的には個別に、計画的に、論文指導が行われていきます。

【到達目標】

- 研究対象である文献・資料の把握と理解とを前進させます。
- 先行研究についての知識と理解とを前進させます。
- 研究テーマそのものについての理解と考察を前進させます。
- 博士論文の執筆の作業を前進させます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

毎回の授業をどう進めるのかを決めること自身が、授業の内容となります。そこから始めて、研究の直接の対象である主要文献と先行研究の諸文献とを読み解いていくこと、また、博士論文そのものを各章ごとに執筆していくことが、計画的に行われていくように、毎週の授業ではそのチェックと指導が、基本的には個人的に、行われていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	参加者の博士論文準備の状況と内容に応じて、授業の進め方を話し合います。
第2回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの内容を改めて確認します。
第3回	テーマ	準備されている博士論文のテーマの価値を改めて確認します。
第4回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献4を検討します。
第5回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献5を検討します。
第6回	主要文献	準備されている博士論文の主要文献6を検討します。
第7回	執筆	準備されている博士論文の執筆状況を確認します。
第8回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献4を検討します。
第9回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献5を検討します。
第10回	補助文献	準備されている博士論文の補助文献6を検討します。
第11回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究4を検討します。
第12回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究5を検討します。
第13回	先行研究	準備されている博士論文の先行研究6を検討します。
第14回	執筆	準備されている博士論文のその後の執筆状況を確認します。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文の準備を、主要文献について、補助文献について進めるとともに、先行研究にも適宜触れていきます。並行して、論文の執筆自体を進めます。

【テキスト（教科書）】

準備されている博士論文が扱う主要文献。

【参考書】

準備されている博士論文が扱う補助文献、およびそのテーマの先行研究が見いだされる諸資料。

【成績評価の方法と基準】

主要文献や補助文献および先行研究の扱いでどれほどの前進があったか（50%）、また、テーマの研究がどれほど進み、執筆がどれほど進んだのか（50%）、に応じて、平常点で評価を行います。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、日本語の運用能力の改善ができるだけ図られる授業運営を行っていきます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学
-哲学
<研究テーマ>
-明治の日本近代思想の再評価
-西洋思想の近代日本への導入の問題
<主要研究業績>

-*Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan*(共著、*Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008*)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」(『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所)

-「西周と軍人勅諭」(『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所)

-*La philosophie japonaise* (共著、*Vrin, 2013*)

【Outline and objectives】

< Doctor thesis instruction >

OTR700B7

国際日本学研究 I

尾谷 昌則

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

現代日本語研究で博士論文を書くための知識および研究方法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論・語用論・統語論の基礎概念を理解し、適切な具体例を用いて説明できるようになる。(2) それらの分野における様々な研究・分析・論証の方法を理解し、自身でも実践できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

日本文学専攻「日本文学特殊演習A」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究I」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、言語学における基礎概念や分析方法について学ぶ。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	論文について	論文の構成について
第2回	論文リポート1 名詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第3回	論文リポート2 動詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第4回	論文リポート3 形容詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第5回	論文リポート4 接続詞の意味拡張	受講生による発表・討論
第6回	論文リポート5 語用論と意味論	受講生による発表・討論
第7回	論文リポート6 語用論推論	受講生による発表・討論
第8回	論文リポート7 ポライトネス	受講生による発表・討論
第9回	論文リポート8 インポライトネス	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート9 対人的モダリティ	受講生による発表・討論
第11回	論文リポート10 対事的モダリティ	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート11 若者ことば	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート12 文末表現	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート13 ネットスラング	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと (2時間程度)。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと (1時間程度)。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく (1時間程度)。

【テキスト (教科書)】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『新編 認知言語学キーワード事典』(辻幸夫、研究社)
『ことばの認知科学事典』(辻幸夫編集、大修館書店)
『日本語学キーワード事典』(小池清治ほか編著、朝倉書店)
『言語学大辞典』(三省堂)
『日本語文法大辞典』(山口明徳・秋本守英編著、明治書院)
『日本語学研究事典』(飛田良文ほか編著、明治書院)
『語用論キータム事典』(今井邦彦監訳、開拓者)

【成績評価の方法と基準】

発表 30% 発言等受講態度 30% 期末レポート 40%

【学生の意見等からの気づき】

博士論文のテーマだけに絞らず、言語学全般についての理解・知識が深められるコースワークになるよう、幅広い内容の研究論文を取り上げるよう心がけている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学

＜研究テーマ＞

認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク

＜主要研究業績＞

「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）

「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）

「接続詞ケドの接続的意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）

『構文ネットワークと文法 ―認知文法論のアプローチ』（共著、研究社、2011年）

【Outline and objectives】

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

OTR700B7

国際日本学研究Ⅱ

尾谷 昌則

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代日本語の意味を分析するための手法を学ぶ

【到達目標】

(1) 意味論の専門用語・諸概念について理解し、説明できる。(2) 意味を研究するための様々な分析手法を理解し、実践できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

日本文学専攻「日本文学特殊演習B」においては「DP1」「DP2」「DP3」「DP4」に関連する、国際日本学インスティテュート「国際日本学研究Ⅱ」においては、「DP1」「DP2」「DP3」「DP5」に関連する。

【授業の進め方と方法】

学会誌などに掲載された学術論文を精読し、意味研究における基礎概念や分析方法について学ぶ。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	はじめに	意味を分析する上での諸注意
第2回	論文レポート1 多義	受講生による発表・討論
第3回	論文レポート2 メタファー	受講生による発表・討論
第4回	論文レポート3 メトニミー	受講生による発表・討論
第5回	論文レポート4 スキーマとプロトタイプ	受講生による発表・討論
第6回	論文レポート5 意味ネットワーク	受講生による発表・討論
第7回	論文レポート6 拡張と動的用法基盤モデル	受講生による発表・討論
第8回	論文レポート7 文法化と意味変化	受講生による発表・討論
第9回	論文レポート8 主体化と文法化	受講生による発表・討論
第10回	論文レポート9 語用論的強化と文法化	受講生による発表・討論
第11回	論文レポート10 接続詞と文法化	受講生による発表・討論
第12回	論文レポート11 接尾辞と文法化	受講生による発表・討論
第13回	論文レポート12 否定表現の拡張	受講生による発表・討論
第14回	論文レポート13 コーパスと定量的分析	受講生による発表・討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回課題となる学術論文を読み、分からない概念・専門用語について事前に調べておくこと（2時間程度）。論文の根幹である問題提起・主張・根拠が分かるように、要約をA4用紙一枚に書くこと（1時間程度）。当日の授業で質問できるように、論文への反論・疑義・その他不備と思われる点をまとめておく（1時間程度）。

【テキスト（教科書）】

読む論文のリストは初回授業で配布する。

【参考書】

『認知言語学研究の方法 ―内省・コーパス・実験』（辻幸夫監修、ひつじ書房）
『日本語教育のためのコーパス調査入門』（李在鎭・石川慎一郎・砂川有里子著、くろしお出版）

『新編 認知言語学キーワード事典』（辻幸夫、研究社）

『ことばの認知科学事典』（辻幸夫編集、大修館書店）

『日本語学キーワード事典』（小池清治ほか編著、朝倉書店）

『言語学大辞典』（三省堂）

『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編著、明治書院）

『日本語学事典』（飛田良文ほか編著、明治書院）

『語用論キータム事典』（今井邦彦監訳、開拓者）

【成績評価の方法と基準】

発表 30% 発言等受講態度 30% 期末レポート 40%

【学生の意見等からの気づき】

論文の具体的な書き方が理解できるよう、また博士課程らしい専門性が身につけられるよう、言語（意味）変化について深く理解するための研究論文を取り上げるよう心がけた。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞

現代日本語における意味論、文法論、語用論、認知言語学
 <研究テーマ>
 認知言語学からみた意味拡張、文法化、構文ネットワーク
 <主要研究業績>
 「アマルガム構文としての『全然』+肯定」に関する語用論的分析（『言葉と認知のメカニズム』pp.103-115. ひつじ書房、2008年）
 「構文文法の歴史的背景と今後の展望」（『人間情報学研究』第11巻、pp.25-43. 2006年）
 「接続詞ケドの連続的意味」（『語用論研究』第7号、pp.17-30. 2005年）
 「構文ネットワークと文法 —認知文法論のアプローチ」（共著、研究社、2011年）

[Outline and objectives]

We will read the academic papers on (cognitive) linguistics, semantics and pragmatics. The objectives of this class are as follows. (1) To understand the outline of the paper and make a summary of it. (2) To understand how to use the linguistic concepts or theory for the linguistic analysis.

ASR500B7

国際日本学特殊講義 A I

王 敏

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

中国文化に学び、輸入した漢字に国字、平仮名・片仮名まで加えて表現の幅を広げた日本。日本製品を使い、漫画・アニメに親しんで、「萌え」「かわいい」を逆輸入する中国。両国の交流と相互理解はますます進んでいるように見えるが、日本企業で働くアジア人の離職率が高い。一方、アジア、中国人の考え方を知らないことで悩む日本人が増えていくと聞く。「同文同種」の底にあるのは実は相互誤解かもしれない。季語・季題、謝罪会見、熟年離婚——等々、両国の類似性よりそれぞれの独自性に着目した現場に役立つ比較文化の新展開を、講師の名著『日本と中国 相互誤解の構造』（中公新書）をテキストに講じる。

【到達目標】

- ①異文化の発見
- ②日本的とは・中国的とは
- ③文化の受容と発信力

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

日本の文化、中国の文化、アジアの文化を再考する機会になればというのが希望です。学生の皆さんはなんでもいいですから一つ、テーマをもって受講してほしいものです。わかりやすい、視覚的な授業になるよう心がけ、パワーポイントを使います。疑問が浮かびましたら質問ください。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

なし / No

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期集中

回	テーマ	内容
第1回	事例研究 1	重陽・日中文化関係の再発見
第2回	事例研究 2	和魂漢才の知恵
第3回	事例研究 3	戦前の中国人留学生と翻訳革命
第4回	事例研究 4	美意識——日本とアジア
第5回	事例研究 5	「やさしさ」と「厳しさ」
第6回	事例研究 6	表現形式の違い
第7回	事例研究 7	自然感覚の違い
第8回	事例研究 8	季節文と魯迅の『两地書』そして『詩経』『呂氏春秋』
第9回	発表と討論 1	未完成の課題・同文同種への問いかけ
第10回	発表と討論 2	代表的な模索
第11回	事例研究 9	比較文化の『武士道』
第12回	事例研究 10	日本文化の二重性と『菊と刀』
第13回	事例研究 11	日本文化の発信・宮沢賢治
第14回	発表と討論 3	日中文化の未来・相互補完の可能性

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告担当者は事前に報告内容を整理し、日本語ペーパーを作成する。

【テキスト（教科書）】

『日本と中国 相互誤解の構造』（中公新書）

【参考書】

授業内で指示。

【成績評価の方法と基準】

成績の評価においては、受講姿勢（50%）および課題作業の履行の努力（50%）を基準とする。

【学生の意見等からの気づき】

学生による授業改善アンケートからは、意思疎通の重要性が感じられた。これまで以上に、学生それぞれの個性にあわせた指導を行ってきたい。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクタ

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 比較文化
 <研究テーマ> 日本における治水神・禹王信仰の研究 アジアの文化関係研究 比較文化研究 宮沢賢治研究
 <主要研究業績>

90年に中国優秀翻訳賞、92年に山崎賞、97年に岩手日報文学賞賢治賞を受賞、2009年に文化長官表彰。

『禹王と日本人』（NHK出版）『周恩来たちの日本留学』（三和書籍）『宮沢賢治シルクロードに翔ける夢』（岩波書店）『漢魂と和魂』（中国・世界知識出版社）

【Outline and objectives】

LIN500B7

国際日本学特殊講義 B I

滝浦 真人

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学的な日本語の性質のみならず、地政学的・歴史的な事情の中で育まれてきた日本語「らしさ」に対するアプローチを行う。母語話者にとっては、日常の当たり前を問いただす作業であり、学習者にとっては、なぜ・どう違うのかを主眼的に考察する機会となる。春学期は言語学・日本語学的解説から落ちやすい言語機能論的トピックを取り上げる。

【到達目標】

- (1) 日本語が漢字をどのように取り入れたかを理解する。
- (2) 日本語の音声をコミュニケーションの観点で理解する。
- (3) 語構成や表現の構成における日本語的選好を理解する。
- (4) 「は」と「が」を語り方の構えの相違として理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。考察においては、グループ・ディスカッションも取り入れる。受講者は、それと関連した小課題を授業内で提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはということかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	日本語の表記	漢字・ひらがな・カタカナを併用することの意味を、それぞれの経緯に遡って考える。
第3回	漢字と日本語	日本語が漢字をどのように取り入れたかを考え、漢字使用の日本語らしさを見出す。
第4回	日本語の語種	日本語の語彙を構成する和語・漢語・外来語という語種のもつ機能的相違を採る。
第5回	日本語のリズム	モーラと音節の相違を理解した上で、日本語のリズムがどう構成されるかを考察する。
第6回	日本語のアクセント	語アクセントと句アクセントの相違を理解し、アクセントの機能的側面を考察する。
第7回	日本語と音象徴	日本語で好まれる擬音・擬態語を支える音象徴を普遍と特殊の側面から考察する。
第8回	日本語のオノマトペ	日本語の擬音・擬態語がもっている語構成的な特徴を探り、その機能を考察する。
第9回	日本語の語構成	日本語の形態論における語構成的特徴を理解した上で、機能的側面から考察する。
第10回	連濁と日本語	連濁が音声現象に見えてそうではないことを、生起/不生起環境の考察から見出す。
第11回	語彙の意味分析	語種の多さもあって日本語に多い、類義語の使い分けを知るための方法を実践する。
第12回	比喩と日本語	比喩は文化的事象であることを理解し、比喩における日本語らしさを考察する。
第13回	「は」の語り	日本語の特徴である助詞「は」を取り上げ、それを語り方の構えとして考察する。
第14回	「が」の語り	「は」と対比的に用いられる「が」を取り上げ、語り方の構えとして比較考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

授業内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 40 %
期末レポート 60 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語学・語用論・コミュニケーション論

<研究テーマ>ポライトネス、日本語語用論

<主要研究業績>

滝浦真人（2016）『日本語リテラシー』放送大学教育振興会

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

LIN500B7

国際日本学特殊講義 B II

滝浦 真人

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語学的な日本語の性質のみならず、地政学的・歴史的な事情の中で育まれてきた日本語「らしさ」に対するアプローチを行う。母語話者にとっては、日常の当たり前を問直す作業であり、学習者にとっては、なぜ・どう違うのかを主眼的に考察する機会となる。秋学期は、日本語の語用論的側面を取り上げ、日本語における対人関係表現を軸とした考察を行う。

【到達目標】

- (1) 日本語を語用論的に見るための基礎知識を理解する。
- (2) ポライトネスの考え方を理解し説明することができる。
- (3) 対人関係の表現に関わる諸現象を考察することができる。
- (4) 現代日本語の成立事情を理解し他言語と比較考察できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

毎回、考察のための素材を配布し、受講者自身による考察と講師の解説とを組み合わせながら進行する。考察においては、グループ・ディスカッションも取り入れる。受講者は、それと関連した小課題を授業内で提出する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	導入	日本語の「性格」とはということかを考え、授業の趣旨や目標を明確にする。
第2回	語用論の基本	グライスの協調の原理と会話の格律をはじめ、語用論の基礎知識を再確認する。
第3回	効率と配慮	伝達効率と対人配慮が反比例の関係にあることを確認し、具体的に考察する。
第4回	ポライトネス	ポライトネスの理論的枠組みを理解し、日本語のポライトネス的性格を考察する。
第5回	呼称	対人関係専用手段として呼称をとらえ、理論的と具体的の両面から考察する。
第6回	あいさつ	あいさつという行為の意味に立ち返り、あいさつの意味論と語用論を考察する。
第7回	感謝・謝罪	非常に基本的な言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第8回	依頼・勧誘と応諾・断り	典型的な言語行為の1つを取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第9回	褒め／褒められ・フェイスワーク	フェイスに直接関わる言語行為を取り上げ、他言語とも対照しつつ日本語らしさを考察する。
第10回	標準語と日本語	近代日本語の成立事情による影響を確認し、日本語のありかたについて考える。
第11回	敬語（意味論）	対人関係専用手段として敬語を取り上げ、まずその意味機能の捉え方を考察する。
第12回	敬語（語用論）	敬語は人間関係の像を表現するとの考えに立った上で、敬語の語用論を考察する。
第13回	指示詞	日本語の指示詞が、対人的な心理的距離の表現として機能しているさまを考察する。
第14回	終助詞	終助詞が、事柄をマークする仕方において対人的距離感を伝えているさまを考察する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参考書の内容は事前に確認しておき、授業内容に関係の深い箇所について、授業前・授業後に読んで理解を深める習慣をつける。授業時に配布される資料についても、さらなる考察の出発点として振り返る。

【テキスト（教科書）】

教科書という形では使用しない。毎回授業時に配布する資料を用いる。

【参考書】

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社

滝浦真人・大橋理枝（2015）『日本語とコミュニケーション』放送大学教育振興会

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業内での課題やディスカッション等） 40 %
期末レポート 60 %

【学生の意見等からの気づき】

学問する楽しさを伝えられる授業にしたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

授業資料を印刷すると大部になるため、クラスの共有フォルダを作成し、そこにアップされたファイルを資料として見てもらいながら授業を進めます。受講の際は、パソコンやスマホなど、インターネットに接続できる機器を持参してください。

【その他の重要事項】

昨年度と基本的に同内容なので、去年履修した人は取れません（ゴメン！）。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>言語学・語用論・コミュニケーション論

<研究テーマ>ポライトネス、日本語語用論

<主要研究業績>（参考書に挙げたもの以外で）

滝浦真人（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店

滝浦真人（2005）『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』大修館書店

CUA500B7

国際日本学特殊講義C I

URBANOVA Jana

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本の古典文学と和歌、沖縄の琉歌から読み取れる日本の伝統文化について考えていきます。日本の文学と沖縄の文学の比較だけでなく、東洋と西洋の文学、文化、考え方も紹介し、それぞれの特徴について学びます。グローバル世界に置かれている日本の伝統文化の位置付けに関する意識を深め、考察力を促します。

【到達目標】

この授業は次のことを目指します

1. 代表的な文学作品、表現、修辭法について学び、その文化や歴史的な背景に関する理解を深めること
2. 日本と沖縄、また東洋と西洋の文化、文学、世界観の特徴に関する知見を深めること
3. 学んだことや気付いたことについて各自の意見交換、議論、プレゼンテーション、自由考察力を養うこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

プリントや映像資料を使用した講義形式での授業を基本としますが、コースの後半において、受講生には、各自が学んだ知識を最大限に活用し、関心のある関連分野について考察した成果を発表してもらう機会を設けます。最終回には授業で取り上げたテーマに関してのエッセイを提出して頂きます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	授業の概略、受講の心構え、成績評価の方法、発表の日程についての説明
第2回	日本文学の概要	奈良時代と平安時代を中心とした日本文学の代表的な作品やその時代背景の紹介
第3回	日本人の自然観	自然を愛する日本人、四季の意味、陰陽思想。自然に見る日本および西洋の文化・考え方の違い
第4回	日本美意識における主要な概念	兼好法師による『徒然草』から読み取れる日本文化や文学における美意識の四つの主要な概念
第5回	日本の神話世界	『古事記』に見られる古代日本の世界観。日本の神話、ギリシャ神話、聖書から伝わるそれぞれの世界観の特徴と比較
第6回	和歌の修辭法	和歌の序詞、枕詞、掛詞の役割。日本の歌と西洋の詩における伝統技法の特徴
第7回	物語の世界	作り物語（『竹取物語』）と歌物語（『伊勢物語』）を中心に物語というジャンルの紹介
第8回	紫式部と清少納言	平安時代女流歌人である紫式部、清少納言の生涯の紹介。彼女らが生きた時代の背景や代表的な作品『源氏物語』、『枕草子』の紹介
第9回	沖縄の言葉	琉球語の中にある沖縄語、琉歌の言葉と表記法について
第10回	琉歌の世界	琉歌の特徴（言葉、形式、作者、伴奏等）、古典音楽と民謡
第11回	恩納なべと吉屋つる	琉歌の伝説的な二人の女流歌人の生涯と代表的な琉歌の紹介
第12回	和歌と琉歌の表現に見られる類似点	和歌から影響を受けた琉歌における表現、和歌の改作琉歌
第13回	和歌と琉歌の表現に見られる特徴	和歌と琉歌に共通する表現におけるそれぞれの観念の違い。たとえば「雪」について
第14回	まとめ	これまでの授業で取り上げたテーマの議論。エッセイの提出

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前回の授業で学んだことを復習し、授業内に行われる発表および最後に提出するエッセイを書くための十分な考察を進めて頂きたい。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定せず、プリントを使用します。

【参考書】

嘉手苺千鶴子（2003）『おもろと琉歌の世界』森話社

（1996）『岩波講座日本文学史第15巻 琉球文学、沖縄の文学』岩波書店
 外間守善（1995）『南島の抒情－琉歌』中央公論社
 鈴木一雄編（1990）『日本文学新史 古代Ⅱ』至文堂
 久保田淳、上野理（1979）『概説日本文学史』有斐閣
 他の参考書については授業の進行にそって、そのつど紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業への参加、毎時提出するリアクションペーパー等、約30%）、発表（40%）、エッセイ（30%）により評価します。

【学生の意見等からの気づき】

本年度授業担当者変更によりフィードバックできません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学、沖縄の文学、

<研究テーマ>

琉歌の表現研究－和歌やオモロとの比較

<主要研究業績>

- 「琉歌における「雪」について（中）」（『沖縄文化』122号（第51巻2号）、沖縄文化協会、2018年3月）
- 「琉歌における「雪」について（上）」（『沖縄文化』121号（第51巻1号）、沖縄文化協会、2017年8月）
- *The Four Seasons in Okinawan Ryūka Poetry – Comparison with Classical Waka Poetry and Old Okinawan Omoro Songs.*（『沖縄の歌である琉歌における四季について－古典の和歌と沖縄のオモロとの比較－』）（『*Studia Orientalia Slovaca (SOS)*（スロバキアの東洋研究）』第15巻1号、*Comenius University, Department of East Asian Studies*（コメニウス大学東アジア研究学科）、2016年）
- 『琉歌の表現研究－和歌・オモロとの比較から－』（森話社、2015年）
- 「オモロと琉歌における「大和」のイメージ」（田中優子編『日本人は日本をどうみてきたか－江戸から見る自意識の変遷』笠間書院、2015年）

【Outline and objectives】

This course focuses on the characteristics of Japanese and Okinawan approach mainly in classical poetry, prose and culture. The topic will be further highlighted by discussing differences in Eastern and Western world views, and by encouraging students to develop and present their own ideas on importance and position of Japanese traditional culture in the global world.

CUA500B7

国際日本学特殊講義 C II

横山 泰子

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

江戸時代から日本で知られている怪談の代表作を読み、古典文学研究の基礎を学びます。具体的には江戸東京の怪談の典型である、「牡丹灯籠」などをテキストに、作品の読み方、用語の調べ方などを学び、DVD を鑑賞することで古典芸能の表現にふれます。また、作品に関する討論により、日本語によるコミュニケーション能力の向上をはかります。

【到達目標】

*日本の怪談は古くから中国種であることが多く、東アジアの文化圏の中で作品を位置づける、比較文化的な視点を身につけることができます。
*落語や歌舞伎など古典芸能の表現について学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

教員の講義ならびに授業内での学生の議論

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	江戸東京の怪談文化の基礎	教材についての基礎的説明
第2回	「牡丹灯籠」	中国の原話の読解
第3回	牡丹灯籠	三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の読解
第4回	牡丹灯籠	三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の読解
第5回	「牡丹灯籠」	三遊亭円朝の『怪談牡丹灯籠』の読解
第6回	「牡丹灯籠」	ラフカディオ・ハーンの抄訳との比較
第7回	落語の DVD 鑑賞	テキストの内容を前提に、DVD を鑑賞し、議論
第8回	様々な牡丹灯籠	『江戸怪談を読む「牡丹灯籠」における論文の読解
第9回	様々な牡丹灯籠	『江戸怪談を読む「牡丹灯籠」における論文の読解
第10回	「怪談乳房覆」	三遊亭円朝の『怪談乳房覆』の読解
第11回	「怪談乳房覆」	三遊亭円朝の『怪談乳房覆』の読解
第12回	「怪談乳房覆」	三遊亭円朝の『怪談乳房覆』の読解
第13回	「怪談乳房覆」	DVD 鑑賞と議論
第14回	まとめ	まとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

文献を事前に読み、下調べをすることが求められます。

【テキスト（教科書）】

必要な文献はコピーを渡しますので、特に教科書を購入する必要はありません。

【参考書】

怪談牡丹灯籠 怪談乳房覆 角川ソフィア文庫
『江戸怪談を読む 牡丹灯籠』白澤社

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント、レポート50パーセント
授業中に積極的に発言しているかどうかを、重視します。

【学生の意見等からの気づき】

フィールドワークは近年学生の人数が多くなり、行っていません。今年度も現状では予定に組み込むことができませんので、授業中に情報提供をすることでかえりたいと思います。

【学生が準備すべき機器他】

特にありません

【その他の重要事項】

オフィスアワー 授業前後に講師控室で対応します

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>文学

<研究テーマ>近世・近代の怪談文化

<主要研究業績>『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』（風間書房）『江戸歌舞伎の怪談と化け物』（講談社）『妖怪手品の時代』（青弓社）

【Outline and objectives】

The goal of this course is to obtain basic knowledge about the famous horror stories of Tokugawa Japan. It also enhances the development of students' skill in research and making oral presentations. Not only literal texts but also DVD of Rakugo and Kabuki are used to help students' understanding of classical Japanese folk entertainment.

PHL500B7

国際日本学特殊講義 D I

安孫子 信

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

<日本と中国>

近代以降、自らを律するのに西洋と自らを引き比べることを当たり前としてきた日本のなかで、日本とアジア、とくに日本と中国との関係を根底において、日本の文化と社会、政治の問題を考究し続けた竹内好の『日本とアジア』を批判的に読解し、グローバル化下の日本の過去と現在と未来を問い直します。春学期には同書の前半を扱います。

【到達目標】

- アジアを参照点に、政治と文化の関係において、現在の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、過去の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、世界では何が問題であるのかを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では毎回扱うテキスト範囲ごとに担当者を決め、担当者の解説と問題提起に基づいて、全員参加で議論を行っていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	導入	授業の進め方を確認し、竹内氏の仕事の説明を行います。
2	1. 中国の近代と日本の近代	テキストの読解・批判的分析と討論
3	2. 日本人の中国観	テキストの読解・批判的分析と討論
4	3. 東洋人の日本観	テキストの読解・批判的分析と討論
5	4. 二つのアジア史観	テキストの読解・批判的分析と討論
6	5. 日本人のアジア観	テキストの読解・批判的分析と討論
7	6. アジアのナショナリズムについて	テキストの読解・批判的分析と討論
8	7. ナショナリズムと社会	テキストの読解・批判的分析と討論
9	8. アジアのナショナリズム	テキストの読解・批判的分析と討論
10	9. アジアにおける進歩と反動	テキストの読解・批判的分析と討論
11	10. 近代の超克 (1)	テキストの読解・批判的分析と討論
12	11. 近代の超克 (2)	テキストの読解・批判的分析と討論
13	12. 戦争責任について	テキストの読解・批判的分析と討論
14	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

(a) 毎回授業で取り上げられるテキスト箇所に事前に目を通すこと、また、(b) 輪番でテキスト解釈と問題提起のレジュメ発表を行うこと、さらに、(c) 学期末に、授業内容への考察を盛りこんだレポートを提出すること、を行います。

【テキスト（教科書）】

竹内好『日本とアジア』（ちくま学芸文庫、1993）

【参考書】

松本健一『竹内好論』（岩波現代文庫）
鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』（岩波現代文庫）
孫歌『竹内好という問い』（岩波書店）

【成績評価の方法と基準】

平常点40%、レジュメ発表30%、学期末レポート30%で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標3点の達成を、現在の問題の理解40%、過去の問題の理解30%、世界の問題の理解30%の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、とくにできるだけわかりやすく進めることを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学

-哲学

<研究テーマ>

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

-*Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan*(共著、Hosei University Center of International Japanese Studies, 2008)

-「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」(『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第10号、2013年3月29日、法政大学国際日本学研究所)

-「西周と軍人勅諭」(『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究所叢書17、2013年3月、法政大学国際日本学研究所)

-*La philosophie japonaise* (共著、Vrin, 2013)

【Outline and objectives】

< Japan and China >

Yoshimi Takeuchi, differently from many others, in place of comparing Japan with the West, studied the problems of Japanese culture, society and politics based on the relationship between Japan and Asia, especially Japan and China. Critically reading his "Japan and Asia", we will question Japan's past, present and future under globalization, from this Asian point of view.

PHL500B7

国際日本学特殊講義D II

安孫子 信

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

<日本と中国>

近代以降、自らを律するのに西洋と自らを引き比べることを当たり前としてきた日本のなかで、日本とアジア、とくに日本と中国との関係を根底において、日本の文化と社会、政治の問題を考究し続けた竹内好の『日本とアジア』を批判的に読解し、グローバル化下の日本の過去と現在と未来を問い直します。秋学期には同書の後半を扱います。

【到達目標】

- アジアを参照点に、政治と文化の関係において、現在の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、過去の日本で何が問題であるのかを学びます。
- アジアを参照点に、現在の日本の政治と文化を問うのに必要なこととして、世界では何が問題であるのかを学びます。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

授業では毎回扱うテキスト範囲ごとに担当者を決め、担当者の解説と問題提起に基づいて、全員参加で議論を行っていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	導入	授業の進め方を確認し、竹内氏の仕事について改めて説明を行います。
2	13. 戦争体験論雑感	テキストの読解・批判的分析と討論
3	14. 戦争体験の一般化について	テキストの読解・批判的分析と討論
4	15 「戦争体験」雑感	テキストの読解・批判的分析と討論
5	16. 日本とアジア	テキストの読解・批判的分析と討論
6	17. 日本のアジア主義	テキストの読解・批判的分析と討論
7	18. 孫文親の問題点	テキストの読解・批判的分析と討論
8	19. 胡適とデュイイ	テキストの読解・批判的分析と討論
9	20. タゴールと中国	テキストの読解・批判的分析と討論
10	21. 岡倉天心	テキストの読解・批判的分析と討論
11	22. 北一輝	テキストの読解・批判的分析と討論
12	23. 東亜同文会と東亜同文書院	テキストの読解・批判的分析と討論
13	24. 方法としてのアジア	テキストの読解・批判的分析と討論
14	総括	参加者からの問題提起を受けて、全体で総括の討論を行います。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

(a) 毎回授業で取り上げられるテキスト箇所事前に目を通すこと、また、(b) 輪番でテキスト解釈と問題提起のレジュメ発表を行うこと、さらに、(c) 学期末に、授業内容への考察を盛りこんだレポートを提出すること、を行います。

【テキスト (教科書)】

竹内好『日本とアジア』(ちくま学芸文庫、1993)

【参考書】

松本健一『竹内好論』(岩波現代文庫)

鶴見俊輔『竹内好 ある方法の伝記』(岩波現代文庫)

孫歌『竹内好という問い』(岩波書店)

【成績評価の方法と基準】

平常点40%、レジュメ発表30%、学期末レポート30%で評価します。さらにそのそれぞれの方法において、到達目標3点の達成を、現在の問題の理解40%、過去の問題の理解30%、世界の問題の理解30%の割合で勘案します。

【学生の意見等からの気づき】

留学生の参加があった場合には、とくにできるだけわかりやすく進めることを心がけます。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

-国際日本学

-哲学

<研究テーマ>

-明治の日本近代思想の再評価

-西洋思想の近代日本への導入の問題

<主要研究業績>

-*Japanese Studies: seen from Europe, seen from Japan*(共著、Hosei University Center of International Japanese Studies,

2008)

- 「明治啓蒙思想家の中国理解—西周と福沢諭吉」(『国際日本学』国際日本学研究所研究成果報告集第 10 号、2013 年 3 月 29 日、法政大学国際日本学研究所)

- 「西周と軍人勅諭」(『日本のアイデンティティを<象徴>するもの』、国際日本学研究所叢書 17、2013 年 3 月、法政大学国際日本学研究所)

- *La philosophie japonaise* (共著、Vrin, 2013)

【Outline and objectives】

< Japan and China >

Yoshimi Takeuchi, differently from many others, in place of comparing Japan with the West, studied the problems of Japanese culture, society and politics based on the relationship between Japan and Asia, especially Japan and China. Critically reading his "Japan and Asia", we will question Japan's past, present and future under globalization, from this Asian point of view.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 E I

得能 壽美

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

琉球からみた東アジアとの関係史を、琉球・中国・日本の基本的な史料講読を中心に考察する。

【到達目標】

前近代琉球を考えるためには、その歴史的環境から、中国・日本の史料、当然ながら琉球の史料にあたらなくてはならない。史料講読は琉球史料を中心に進め、一定程度の理解と読解能力を身に付け、琉球史を考える眼を養う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

前半は琉球史の概括的な理解と、史料の全体的な把握にあたる。後半は、琉球史料から、その読解方法を学びつつ、東アジアにおける関係史をみる。基本的には講義だが、史料講読に際しては、習熟度によっては担当部分を決めて報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の紹介と、琉球・中国・日本の関係史を概括的にみる
2	日本史と琉球史の史料論	日本史研究と琉球史研究における史料論と、その相違
3	古琉球期史料にみる対外関係 (中国・日本古代史料)	古代の琉球をめぐる中国と日本の史料について
4	古琉球史料にみる対外関係 (歴代宝案・朝鮮王朝実録・琉球史料)	中世の琉球をめぐる中国・朝鮮・琉球の史料について
5	近世琉球史料にみる対外関係 (島津関係史料)	1609 年以降の島津による琉球統治関係史料について
6	近世琉球史料にみる対外関係 (琉球史料)	いわゆる日中両属に関する琉球史料について
7	史料講読 中山世譜・中山世鑑・球陽	史料講読。首里王府編纂史料にみる近世琉球のありかた
8	史料講読 羽地仕置	史料講読。羽地朝秀の施策にみる琉球の立場と政治的転換
9	史料講読 御教条	史料講読。蔡温の琉球史の認識と立場
10	史料講読 農務帳と絵画史料	史料講読。近世琉球の農業政策と絵画にみる農業
11	史料講読 尚家文書	史料講読。王家文書の概要と利用
12	史料講読 評定所文書	史料講読。首里王府最高議決機関の史料
13	史料講読 琉球家譜史料	史料講読。琉球士族の家譜を読む
14	史料講読 地方史料と在 台湾琉球関係史料	史料講読。琉球内政関係と、台湾で確認されている琉球関係史料について

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

全体的に下記で示す参考書を読む。毎回の授業では史料等を配布する。該当する史料の概要について、事前に調べる。

【テキスト (教科書)】

教科書は使用しない。史料等を配布する。

【参考書】

『沖縄からアジアが見える』比嘉政夫 岩波ジュニア新書
『アジアのなかの琉球王国』高良倉吉 吉川弘文館 (歴史文化ライブラリー 47)
『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
『沖縄入門—アジアをつなぐ海域構想』浜下武志 ちくま新書

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %

毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極的にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、それぞれの研究テーマに即しつつ、琉球史からみた対外関係史の理解度を確認し、さらに史料による考察を加えてほしい。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方などを基礎から説明する。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 琉球史 近世史
< 研究テーマ > 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
< 主要研究業績 >

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007年 316頁）
 『日本近世生活総引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）
 『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（沖縄県石垣市教育委員会 2015）

【Outline and objectives】

We look at the history of relations with East Asia seen from the Ryukyus, focusing on reading basic materials of Ryukyu, China and Japan.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 E II

得能 壽美

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

琉球からみた東アジアとの関係史を、具体的な論考で使用した史料を確認しつつ考察を進める。論文作成のための課題設定、史料調査の方法、史料の所在なども、具体的事例をもとに講義する。

【到達目標】

史料について理解と読解能力を身につけられるようにする。日本史とは異なる琉球史の方法と史料によって、新たな研究テーマの創成を考えられるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

具体的な論考に使用した史料を講読しつつ、近世琉球の生産と税制、物流を、具体的な産物を取りあげて、東アジアにおよぶ広がりを見る。史料講読から新たな研究テーマを創成し、その報告を求めることも考えたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	琉球史入門	講義の概要と、琉球・中国・日本の関係史を概説する
2	近世琉球産品の由来と島産化 I	東アジアにおける技術などの移動
3	近世琉球産品の由来と島産化 II	琉球国内の島産化の展開と商品流通
4	ナマコ I	琉球関係史料にみる生産と上納
5	ナマコ II	薩摩・幕府への献上と中国との貿易
6	海人草	近世琉球の専売制、近現代における生産・流通
7	上布	人頭税と八重山上布
8	木綿 I	伝搬と栽培の広がり
9	木綿 II	近世における利用と商品としての展開
10	ジュゴン	近世の税制・捕獲・信仰
11	イノシシ	近世における害獣駆除と利用
12	牛馬	近世の利用と規制
13	アダン	近世における上納と民衆生活での利用
14	パインナップル	近代の導入事情と展開

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

全体的に下記で示す参考書を読む。

【テキスト（教科書）】

『移動するナマコと変化するその役割』（得能、『琉球・沖縄研究』第3号）など、それぞれのテーマに関連した論文のコピーを配布する。

【参考書】

『琉球王国』高良倉吉 岩波新書
 『琉球・沖縄史の世界』豊見山和行（編）吉川弘文館（日本の同時代史 18）
 『近世八重山の民衆生活史』得能壽美 榕樹書林

【成績評価の方法と基準】

平常点 50 % レポート 50 %

毎回の史料の性格と内容が異なり、当該史料から解説を繰り返すことがないので、出席を重視する。平常点は、史料講読に積極にあたること、授業の内容にとって有益な議論や質問を用意できること、史料批判や史料に即した議論ができることなどを考慮する。レポートでは、琉球史から見た対外関係史の理解度を確認するとともに、新たな研究テーマについて提案してほしい。

【学生の意見等からの気づき】

毎回、時間の許す限り、史料の読み方を解説する。

【学生が準備すべき機器他】

パソコン、プロジェクター

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 琉球史 近世史
 <研究テーマ> 八重山地域史、生業と民衆生活史、史料論
 <主要研究業績>

『近世八重山の民衆生活史－石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク－』単著（榕樹書林 2007年 316頁）
 『日本近世生活総引 奄美・沖縄編』編集・分担執筆（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター 2014）
 『八重山の歴史と文化、自然』分担執筆（石垣市教育委員会 2015）

【Outline and objectives】

We will consider the historical relationship with East Asia seen from the Ryukyus while confirming the historical materials used in concrete thesis.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 F I

明田川 融

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

沖縄戦（1945年）から70年、そして沖縄の「本土復帰」（1972年）から半世紀ちかくがたつ。沖縄に対する米国の軍事植民地意識、そして日本本土の構造的差別は消え去っていないむしろ、2015年後半からの、日本政府による名護市辺野古への米海兵隊普天間飛行場移設強行のようすをみていくと、そうした差別は、より執拗になってきているように思われる。

本授業では、沖縄・日本本土・米国の、ときに引き合い、ときに反撥し合う力学が、戦後沖縄の形成にどのような影響を及ぼしたかを解き明かす糸口を学生とともに探りたい。「戦後」とはさしあたり、プロローグとしての沖縄戦から冷戦期までを扱う。

【到達目標】

近年、戦後沖縄をめぐる研究は、外交文書をはじめとする史料公開によって実証的に目ざましい進展を示している。それらの研究業績を踏まえながら、学生諸君が戦後日本の対外関係について新たなイメージを紡ぎだすことを期待する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

以下に列挙するトピックを道標に、基本文献と史資料の精読、および学生中心の討論によって進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	なぜ沖縄戦は開かれたか	日米両国の戦略における沖縄の位置づけを探る。
2	恩賜の民権／恢復民権	沖縄と本土における初期占領政策を比較研究する。
3	沖縄とマッカーサーの「平和」憲法	制憲過程のウラにある「沖縄要塞化」構想について考察する。
4	昭和天皇「沖縄メッセージ」の深淵	昭和天皇にとって「沖縄」とは何であり、何でなかったのかを考える。
5	講和問題のなかの沖縄	対日講和をめぐる噴出する帰属論の位相を整理する。
6	「潜在主権」論	対日講和条約第3条の前提をなす「潜在主権」とは誰が何のために発案したのか検討する。
7	海兵隊と核の島の形成	冷戦期を象徴する「海兵隊と核の島」＝沖縄は、どのように形成されたのか跡づける。
8	軍用地問題の生起と展開	「土地を守る四原則」（立法院請願決議）を軸に軍用地問題とは何であったのか考えてみる。
9	沖縄の「赤狩り」	極東の軍事拠点沖縄で起こった人民党非合法化の動きは、沖縄戦後史ばかりでなく冷戦史の文脈でいかなる意味をもつのか検討する。
10	南と北の領土問題	日ソ国交回復交渉に対して米国は、「日本が二島返還でソ連に譲歩するなら米国は沖縄をもらう」と干渉した。この北と南の領土問題の形成過程を調べてみる。
11	沖縄と安保改定	沖縄という視点から60年安保改定を捉えなおす。
12	沖縄返還交渉の公約・違約・密約	外務省による「いわゆる密約」調査の結果も踏まえながら、沖縄返還交渉を検証してみる。
13	沖縄が怒った日	1970年12月におこったコザ騒動とは戦後沖縄にとって何であったのか考える。
14	「安保」から「同盟」への変容と沖縄	「安保」が「同盟」へと変容するなか、日本の役割も基地提供に「行動」や「思いやり予算」を伴うものへと変わっていくが、沖縄については何が変わり、何が変わらなかったのか。この問題を検討してみたい。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

百聞は一見に如かず。米空軍嘉手納基地、同海兵隊普天間飛行場、キャンプ・ハンセン、日米両政府が普天間飛行場の代替施設建設予定地としている名護市辺野古崎など、沖縄基地問題の現場を各自が実際に訪れ、感じる事が望ましい。平良好利先生の「戦後沖縄と対外関係Ⅱ」を履修することが望ましい。

【テキスト（教科書）】

古典のなかの古典といえますが、さしあたり手ごろな通史として中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波書店、1976年）、および新崎『沖縄現代史』（岩波書店、2005年）、ならびに宮里政玄ほか編著『戦後沖縄の政治と法—1945-72年』（東京大学出版会、1975年）を、また、沖縄をめぐる日米関係史について書かれた研究として、河野康子『沖縄返還をめぐる政治と外交—日米関係史の文脈』（東京大学出版会、1994年）、宮里『日米関係と沖縄—1945-1972』（岩波書店、2000年）、沖縄国際大学公開講座委員会編集・発行『基地をめぐる法と政治』（2006年）、我部政明『戦後日米関係と安全保障』（吉川弘文館、2007年）、平良好利『戦後沖縄と米軍基地「受容」と「拒絶」のはざま—1945-1972年』（法政大学出版局、2012年）、および中島琢磨『沖縄返還と日米安保体制』（有斐閣、2012年）を挙げておきます。近年の示唆にとり研究成果として、島山淳『沖縄 基地社会の起源と相克 1945-1956』（勁草書房、2013年）および大野光明『沖縄闘争の時代 1960 / 70』（人文書院、2014年）ならびに櫻澤 誠『沖縄現代史—米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』（中央公論新社、2015年）、さらに野添文彬『沖縄返還後の日米安保—米軍基地をめぐる相克』吉川弘文館、2016年もぜひ一読されたい。

【参考書】

拙著『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島』（みすず書房、2008年）。

【成績評価の方法と基準】

出席状況や授業中のコメントなどによる平常点（100%）。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート対象外につき該当なし。

【学生が準備すべき機器他】

情報機器（貸与パソコン等）

【その他の重要事項】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日米関係史、日本政治外交史

<研究テーマ> 日米地位協定の成立過程

沖縄と日米安保体制の歴史

日本と核兵器との関係史

<主要研究業績および刊行物>

・『日米行政協定の政治史—日米地位協定研究序説—』法政大学出版局、1999年。
・『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島—』みすず書房、2008年（第30回沖縄協会・沖縄研究奨励賞〔社会科学部門〕受賞）。

・『日米地位協定—その歴史と現在—』みすず書房、2017年。

・波多野澄雄・河野康子監修（明田川補）『沖縄返還関係資料』（第1回配本分、全7巻）現代史料出版、2017年。

・『核兵器と『国民の特殊な感情』1—6（雑誌『みすず』に2013年6月号より2015年8月まで不定期連載）。

・ジョン・ハーシー『ヒロシマ 増補版』法政大学出版局、2003年（共訳）。

・ジョン・W. ダワー著『昭和 戦争と平和の日本』みすず書房、2010年（監訳）。

・ジョン・W. ダワー／ガバン・マコーマック著『転換期の日本へ 「バックス・アメリカーナ」か「バックス・アジア」か』NHK出版、2014年（共訳）。

・『占領期年表 1945-1952年 沖縄・憲法・日米安保』創元社、2015年（監修）。

近年、広島・長崎・ビキニを経験した日本の核兵器に対する「国民感情」と政府の安全保障政策との連関について研究をまとめるべく、資料収集や分析視覚の検討を行っている。

また、1950年代半ばの沖縄で米軍により強行された土地強制収用にさいして、住民代表である立法院（県議会のような組織）がなしたと、なしえなかったことの実証にも取り組んできた。

現在は、波多野澄雄・筑波大学名誉教授ならびに河野康子・法政大学名誉教授による監修で刊行が進められている沖縄施政権返還交渉関係資料集の編集補佐がおもな仕事となっている。

【Outline and objectives】

Seventy years have passed from the battle in Okinawa, and nearly fifty years from the reversion of Okinawa. Okinawa still seems to be under U.S. military colonialism. It suffers structural discrimination by the people of Japan proper as well. In post-war Okinawa and foreign relations I, we consider and discuss the dynamism that formed post-war Okinawa. In this class, post-war means the period from the battle in Okinawa to the end of the cold war.

HIS500B7

国際日本学特殊講義 F II

平良 好利

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本授業では、冷戦終結後の「沖縄米軍基地問題」を考察すると同時に、この問題を通じて冷戦終結後の日米関係の持続と変容について考察する。

【到達目標】

冷戦終結後の「沖縄米軍基地問題」について説明でき、しかも冷戦終結後の日米関係の変容や日米両国の外交・安全保障政策についても説明できる。また、これらのことを冷戦期の史的展開も考慮に入れて、より深く説明できる。さらに、「沖縄米軍基地問題」の考察を通じて、近代主権国家とは何か、近代民主主義国家とは何かについても説明できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

「沖縄米軍基地問題」を扱った文献を学生の皆さんとともに決め、それを毎回読み進めながら討議していく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
1	ガイダンス	本授業の進め方を説明し、文献を決める。
2	米ソ冷戦と日米安保体制	米ソ冷戦の生成過程と日米安保体制とは何かについて検討する。
3	米ソ冷戦と沖縄	米ソ冷戦時代のアメリカ極東軍事戦略と沖縄基地の役割について検討する。
4	冷戦終結と日米安保体制の変容	冷戦の終結過程と日米安保体制の変容過程について検討する。
5	米軍基地の整理・縮小を求めて：1995年	1995年の少女暴行事件を契機に浮上した沖縄における基地の整理・縮小を求める動きについて検討する。
6	普天間基地移設問題の始動：1996年～1998年	普天間基地移設問題をめぐると沖縄側の動きについて検討する。
7	普天間基地移設問題の展開：1998～2009	名護市辺野古への移設をめぐる日米両政府と沖縄側の動きについて検討する。
8	米軍再編とは？	アメリカの軍事戦略と米軍再編について検討する。
9	民主党政権と普天間基地移設問題	2009年に誕生した民主党政権の普天間基地移設問題への対応について検討する。
10	普天間基地移設問題に対する沖縄側の変化	沖縄内部が「県内移設反対」の方向に大きく舵を切ったプロセスについて検討する。
11	「抑止力」とは？	在沖米軍の「抑止力」について検討する。
12	安倍政権と普天間基地移設問題	安倍政権の普天間基地移設問題への対応について検討する。
13	沖縄政治の構造変化	沖縄政治の構造変化と日本政治との関係を検討する。
14	沖縄の「自治」「自立」論	沖縄の「自治」「自立」論について検討する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業に臨むにあたって毎回指定された参考文献を読むこと。授業後は参考文献を再読すること。

【テキスト（教科書）】

初回のガイダンス時に決める。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

平常点（80%）、レポート課題（20%）

【学生の意見等からの気づき】

該当なし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本政治外交史、日米関係論、沖縄政治史

<研究テーマ> 「沖縄問題」と日米沖縄関係

<主要研究業績>

・『戦後沖縄と米軍基地—「受容」と「拒絶」のはざま—1945～1972年』（法政大学出版局、2012年）

・『冷戦終結と日本の安全保障—防衛問題懇談会の議論を中心として』河野康子・渡邊昭夫編『安全保障政策と戦後日本 1972～1994—記憶と記録の中の日米安保』（千倉書房、2016年）

・「沖繩と本土の溝—政治空間の変遷と歴史認識」五百旗頭薫他編『戦後日本の歴史認識』（東京大学出版会、2017年）

【Outline and objectives】

In this class, we will examine the U.S. military base issue in Okinawa after the end of the Cold War, and examine the continuation and transformation of the U.S.-Japan relations after the end of the Cold War.

ART500B7

国際日本学特殊講義 G I

高橋 悠介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

〔《東征伝絵巻》を読む〕

《東征伝絵巻》は、奈良・唐招提寺の開祖・鑑真（688-763）の、剃髪から入滅までを描く絵巻で、永仁6年（1298）に極楽寺の忍性によって唐招提寺に施入された。鑑真が、数度にわたる渡航の失敗や困難を乗り越え、日本に渡る経緯が描かれている。ここでは、《東征伝絵巻》を、『唐大和上東征伝』などの鑑真伝と比較しながら、読み解いていきたい。

【到達目標】

- ・寺院圏で成立し享受された文献・絵画の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
- ・仏教文化についての基礎知識を身に付け、理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

最初は、《東征伝絵巻》に関する概要と、講読にあたっての基本的な知識について、講義形式で授業を行う。続いて、講読担当を決め、受講者による報告と討議という形式で進めていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要・進め方について説明。
第2回	《東征伝絵巻》と『唐大和上東征伝』『鑑真和上三異事』	《東征伝絵巻》の概要及び、本絵巻と関わりの深い鑑真の伝記資料について講義。
第3回	《東征伝絵巻》と忍性	《東征伝絵巻》を施入した忍性と、その文化環境について講義。
第4回	展覧会見学	授業のテーマとも関わる鎌倉時代の仏教美術の展示を見学。
第5回	《東征伝絵巻》巻一冒頭～第四段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第6回	《東征伝絵巻》巻一第五段～第六段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第7回	《東征伝絵巻》巻二第一段～第四段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第8回	《東征伝絵巻》巻二第五段～第七段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第9回	《東征伝絵巻》巻三冒頭～第五段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第10回	《東征伝絵巻》巻三第六段～第七段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第11回	《東征伝絵巻》巻四第一段～第二段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第12回	《東征伝絵巻》巻四第三段～第五段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第13回	《東征伝絵巻》巻四第六段～第七段	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読。
第14回	《東征伝絵巻》巻五・総括	当該の詞書と絵を、『唐大和上東征伝』等と対照しながら講読した上で、全体を総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講師作成のプリントを配布。

【参考書】

『日本の絵巻 15 東征伝絵巻』（中央公論社、1988年）、『新修日本絵巻物全集 21 東征伝絵巻』（角川書店、1978年）、その他、授業の中で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表50%、授業への参加度50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

・『禪竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）

・「荒神の図像について—如来荒神を中心に—」（仏教美術論集第二巻『図像学 I—イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5月）

・「律院称名寺と聖徳太子伝一釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52号、2017年9月）

【Outline and objectives】

Reading of the biographical picture scroll of Ganjin (688-763).

ART500B7

国際日本学特殊講義G II

高橋 悠介

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

【山王の靈験伝承と図像】

近江坂本に鎮座する山王権現をめぐる靈験譚を集めたのが『日吉山王利生記』である。この『日吉山王利生記』を、関係する説話集や図像類と比較しつつ、講読する。『山王絵詞』をはじめ、中世の神仏説話との比較の中から『日吉山王利生記』を考えてみたい。

【到達目標】

- ・寺院圏で成立し享受された文献の性格を学び、これを読解する技術を習得する。
- ・文献と図像資料を複合的に読解する技術を身につける。
- ・天台系の神仏をめぐる伝承と造形についての基礎知識を身に付け、日本の仏教文化に関する理解を深める。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

最初は、『日吉山王利生記』をはじめとした日吉山王をめぐる文献と絵画資料の概要、また講読にあたって必要な基本的知識について、講義形式で授業を進める。その中で、担当を決め、演習形式で受講者による報告と討議を行っていく。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション・研究史概観	講義の概要・進め方について説明。
第2回	日吉山王をめぐる文献資料と絵画資料	日吉山王をめぐる文献資料と絵画資料について、講読の前提として講義。
第3回	『日吉山王利生記』と山王関係書	演習形式で講読するテキストとその関係資料について講義。
第4回	展覧会見学	中世の神仏文化と関わる展覧会を見学。
第5回	『日吉山王利生記』3巻1～2	当該段の講読・討議。
第6回	『日吉山王利生記』3巻3～4	当該段の講読・討議。
第7回	『日吉山王利生記』3巻5～6	当該段の講読・討議。
第8回	『日吉山王利生記』3巻7～8	当該段の講読・討議。
第9回	『日吉山王利生記』4巻1～2	当該段の講読・討議。
第10回	『日吉山王利生記』4巻3～4	当該段の講読・討議。
第11回	『日吉山王利生記』4巻5～6	当該段の講読・討議。
第12回	『日吉山王利生記』5巻1～2	当該段の講読・討議。
第13回	『日吉山王利生記』5巻3～4	当該段の講読・討議。
第14回	総括	講読の総括。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に言及する参考書を読むこと。

【テキスト（教科書）】

講師作成のプリントを配布。

【参考書】

講義内で指示する。

【成績評価の方法と基準】

発表50%、授業への参加度50%

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本中世文学・中世宗教思想史・書誌学

<研究テーマ> 中世仏教文学・芸能・寺院資料論

<主要研究業績>

- ・『禅竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会、2014年）
- ・「荒神の図像について―如来荒神を中心に―」（仏教美術論集第二巻『図像学Ⅰ―イメージの成立と伝承（密教・垂迹）』竹林舎、2012年5月）
- ・「律院称名寺と聖徳太子伝一釋了敏の写本を中心に」（『説話文学研究』52号、2017年9月）

【Outline and objectives】

The Narration and Image about Sanno (the guardian deity of the Tendai sect) .

CUA500B7

国際日本学特殊講義 H I

湯本 豪一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 1、主題は「江戸、明治期における妖怪文化の広がり」とする。
- 2、「妖怪」に関わるさまざまな資料を取り上げ、その位置づけと意義を検討する。
- 3、日本のユニークな文化としての「妖怪」についての諸相を検討する。

【到達目標】

妖怪文化の広がりを把握し、その背景や影響を検討して妖怪文化を位置づけるとともに自らの知見に基づく視点を確立する。
新たな視点のもとに独自の論点を展開する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

- 1、「妖怪」文化の展開についての検討
 - 2、「妖怪」資料についての把握
 - 3、「妖怪」資料の内容の検討
 - 4、「妖怪」のビジュアル化とその資料の把握
 - 5、明治期における新聞での妖怪記事の検討
 - 6、「妖怪」文化広がりにおける上記項目の位置づけと意義
- * 「妖怪」資料を把握するために可能な限り原資料を見てもらいながら議論をすすめていきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	授業の概要について	全14回の授業の概要と進め方について
第2回	「妖怪」文化とは	妖怪文化という概念の把握
第3回	「妖怪」文化の諸相と広がり	妖怪文化の広がりについてさまざまな視点から考察
第4回	「妖怪」資料についての概要	妖怪資料の概要把握
第5回	多様な「妖怪」資料の把握	妖怪資料の具体的把握
第6回	絵巻資料の概要	妖怪資料のなかから絵巻についての全体像把握
第7回	絵巻資料の検討	絵巻資料の具体的事例を提示
第8回	木版技術の発達と「妖怪」文化	木版技術の発達と妖怪文化の広がりについての把握
第9回	錦絵資料の検討	錦絵について資料をもとに検討
第10回	版本資料の検討	版本について資料をもとに検討
第11回	その他の資料の検討	絵巻、錦絵、版本以外の資料を検討して妖怪文化の広がりを検証
第12回	近代と「妖怪」	明治における妖怪文化の特徴を把握
第13回	明治期における「妖怪」記事の検討	新聞の妖怪記事を検討
第14回	「妖怪」文化の広がりについての把握と総括 授業のまとめ	前回までの検討を通して妖怪文化の広がり把握 授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

妖怪に関する展覧会など、機会があったら妖怪資料を直に見てください。

【テキスト（教科書）】

とくにありません。資料は授業で配布します。

【参考書】

とくにありません。授業で必要に応じて提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業での質疑等の受講状況 50 % 期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

原資料の検討に今まで以上に時間をあてたい。

【担当教員の専門分野等】

専門領域：怪異・妖怪文化研究、日本漫画史研究
研究テーマ：妖怪文化の広がりについて、明治～大正期の漫画
主要研究業績：『明治期怪異妖怪記事資料集成』（国書刊行会 2009年）
『百鬼夜行絵巻』（小学館 2005年）
『東京漫画会——岡本一平を中心に——』（『大正期美術展覧会の研究』東京文化財研究所 2005年）

【Outline and objectives】

Study about Japanese Yokai culture from Edo era to Meiji era.

国際日本学特殊講義Ⅱ

湯本 豪一

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

- 1、主題を「日本漫画史における各時代の特徴について」とする。
- 2、江戸時代から第二次世界大戦直後までの各時代における漫画の特徴を抽出する。
- 3、各時代における特徴についての考察を行い、その後への影響について検討する。
- 4、漫画の記録性についても考察する。

【到達目標】

日本の漫画文化の広がりや歩みを資料で確認しながら、漫画の歴史をそれぞれの時代背景とともに把握するとともに自らの知見に基づいた視点を確立する。新たな視点のもとに独自の論点を展開する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

- 1、日本漫画史の流れを把握する。
- 2、各時代の特徴を探る。
- 3、それぞれの特徴の背景を検討する。
- 4、各時代の漫画作品に当たりながら特徴を考察する。
- 5、描かれた内容の把握を行い、読み解き方について検討する。
- 6、漫画の持つ記録性について検討する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

回	テーマ	内容
第1回	日本漫画史の流れについて	古代から近代までの漫画の流れを把握
第2回	各時代についての概要	各時代の漫画の流れや特徴について把握
第3回	江戸時代の漫画の展開についての検討	江戸時代の漫画の特徴を検討
第4回	木版技術の発達と漫画について検討	木版技術の発達と漫画の新しい展開について検討
第5回	戯画の展開について検討	江戸時代の戯画について把握、検討
第6回	諷刺画の成立と展開についての検討	諷刺画の成立の背景と展開について把握、検討
第7回	幕末における漫画の新たな展開の検討	幕末における開港による漫画の新しい展開について把握、検討
第8回	明治時代の漫画の特徴を考察	明治時代の漫画の特徴について具体的に検討
第9回	明治時代における諷刺画の考察	漫画史における明治時代の諷刺漫画の位置づけについて検討
第10回	大正時代の漫画の特徴を考察	明治時代との比較において大正時代の漫画の特徴を検討
第11回	昭和戦前期の漫画についての考察	明治、大正時代を経て昭和戦前期の漫画はどのような展開をしたかについて検討
第12回	戦争と漫画についての考察	第二次世界大戦を中心とした戦争との関わりから漫画を考察
第13回	漫画の持つ記録性についての考察	漫画だからこそその記録性について検討
第14回	各時代の漫画の特徴についてのまとめ 授業のまとめ	各時代の特徴とその後への影響について考察 授業のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

展覧会などで漫画資料が見られる機会があったら見ておいてください。

【テキスト（教科書）】

とくにありません。資料は授業で配布します。

【参考書】

とくにありません。必要に応じて提示します。

【成績評価の方法と基準】

授業での質疑等の受講状況 50 % 期末レポート 50 %

【学生の意見等からの気づき】

原資料の検討に今までよりも時間をあてたい。

【担当教員の専門分野等】

専門領域：日本漫画史、怪異・妖怪文化研究
研究テーマ：明治～大正期における漫画、妖怪文化の広がりについて
主要研究業績：「東京漫画会——岡本一平を中心に——」（『大正期美術展覧会の研究』東京文化財研究所 2005年）
『百鬼夜行絵巻』（小学館 2005年）

『明治期怪異妖怪記事資料集成』（国書刊行会 2009年）

【Outline and objectives】

Study about Japanese Manga from 17th century to 20th century.

Research about Manga culture(Edo era, Meiji era, Taisho era, Showa era).

Research about Manga materials(Book, Magazine, Woodblock print and so on).

PRI500B7

国際日本学特殊講義 J I

田中 邦佳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて分析し、その結果を可視化（グラフ化）して示す必要がある。本授業では演習を通じ、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か、データ化や可視化における注意点について学ぶ。

【到達目標】

- (1) *Excel* を使用して基本的なデータの処理ができるようになる。
- (2) *Excel* を使用してデータの適切なグラフ化ができるようになる。
- (3) テーマに応じて適切なデータの処理・分析ができるようになる。
- (4) 上記の3つの項目を踏まえて、何らかのテーマを設定してデータ処理を行い発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、*Excel* を用いたデータ処理や作図する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	データの入力	<i>Excel</i> を使いデータの入力、注意点について
第3回	データの数値化1	平均値
第4回	データの数値化2	中央値・最頻値
第5回	データの数値化3	標準偏差
第6回	データの集計	集計結果のまとめ方
第7回	データの可視化1	棒グラフ・折れ線グラフ
第8回	データの可視化2	ヒストグラム
第9回	データの可視化3	複数の要素が含まれたグラフ
第10回	データの可視化4	散布図
第11回	研究テーマに沿った分析	テーマに合った分析と可視化
第12回	総合演習	データ分析・可視化のまとめ
第13回	発表1	参加者による発表
第14回	発表2	第13回「発表1」で指摘され問題点を解決した発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析・作図課題を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

50%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

50%: レポート課題

欠席回数が通算4回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

具体的なデータを用いた分析演習の時間をより長く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

2回目以降の授業では、PCを使って演習を行います。貸与パソコン（学内で使用可能です）を利用するなどして用意して下さい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための *Praat* 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響的手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

[Outline and objectives]

In this course, students will learn the basic approach to summarizing data and methods for visualizing data.

PRI500B7

国際日本学特殊講義 K I

田中 邦佳

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究を進める上で様々な機関が発表している数値データを利用したり、実験を実施して得たデータを使用することがある。そのようなデータは、研究テーマに合わせて統計学的分析を行う必要がある。本授業では演習を通じ、いくつかの基礎的な統計的手法の仕組みを知り、分析の目的によってどのような手法を用いるのが適切か学ぶ。

【到達目標】

- (1) 基本的な統計手法の仕組みについて理解する。
- (2) 数値の意味を理解する。
- (3) テーマに応じて適切な統計的分析ができるようになる。
- (4) 上記の3つの項目を踏まえて、何らかのテーマを設定してデータに統計的分析を行い発表する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP1」「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

講義と演習形式で行う。

参加者は、*Excel* などを用いたデータ処理や統計に関する演習を行い、データの解釈やまとめ方についてディスカッションを行う。授業の最終目標の発表に向け、各自が考えたデータ分析のテーマや可視化の手法について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	Introduction	授業の進め方の説明
第2回	記述統計と推測統計	記述統計と推測統計の違いについて
第3回	データのバラツキ1	平均・分散・標準偏差
第4回	データのバラツキ2	正規分布
第5回	データの数値化3	標準偏差
第6回	カイ2乗検定	カイ2乗検定について
第7回	t検定1	t検定（対応なし）
第8回	t検定2	t検定（対応あり）
第9回	分散分析1	分散分析（1要因）
第10回	分散分析2	多重比較
第11回	分散分析3	分散分析（2要因）
第12回	分散分析4	交互作用
第13回	ことばでの報告	統計結果のことばでの報告
第14回	発表	参加者による発表

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

参加者は、各種データの分析を行う。

【テキスト（教科書）】

プリントを配布します。

【参考書】

山田剛史, & 村井潤一郎. (2004). よくわかる心理統計. ミネルヴァ書房.

【成績評価の方法と基準】

50%: 平常点（授業への積極的な参加度・課題）

50%: レポート課題

欠席回数が通算4回に達した者は単位取得の資格を失う。また授業に積極的に参加する姿勢が見られない場合、欠席と同等の扱いとする。

【学生の意見等からの気づき】

分析課題を行う時間をより多く設定します。

【学生が準備すべき機器他】

2回目以降の授業では、PCを使って演習を行います。貸与パソコン（学内で使用可能です）を利用するなどして用意して下さい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

第二言語習得

<研究テーマ>

第二言語の音韻習得やリーディングについて

<主要研究業績>

北原真冬・田嶋圭一・田中邦佳『音声学を学ぶ人のための *Praat* 入門』ひつじ書房 (2017)

川崎貴子・マシューズジョン・田中邦佳「L2音韻カテゴリーの構築過程における音響の手がかりの利用と抑制—日本語母語話者による英語摩擦音習得—」白畑知彦・須田孝司 編『名詞句と音声・音韻の習得(第二言語習得モノグラフシリーズ)』くろしお出版.(2017)

【Outline and objectives】

In this course, students will learn the basic statistical methods.

LITA500B7

国際日本学特殊講義 L I

岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、ポール・ホドキンソン『メディア文化研究への招待—多声性を読み解く理論と視点』（土屋武久訳、ミネルヴァ書房、2016）を共通テキストとして読みながら、映画、ドラマ、マンガ、アニメーション、演劇、2.5次元ミュージカル、SNS、ファンアートなど、具体的な表象分析を行い、サブカルチャー論を理解するために必要な知識や手法について学ぶ。

【到達目標】

- (1) 共通テキストを精確に読み、具体例を示しながら、ディスカッションを行うことができる。
- (2) サブカルチャー論における理論を理解し、博士課程での研究と繋ぐことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

・毎回、1～2名の発表者が、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要と計画、受講者の自己紹介、各章の説明と担当者の決定。
第2回	第1章「メディアが先か、文化・社会が先か？」	社会とメディア表象の関係、コミュニケーションの理論を全員で読んできて意見交換、各章の説明と担当者の決定。
第3回	第2章「メディアテクノロジー」	メディア論の展開、テクノロジー決定論とその批判
第4回	第3章「メディア産業」	メディアの一極集中化、思考の多様性の確保、政府と規制
第5回	第4章「メディアコンテンツ」	記号論、ナラティブ分析、ジャンル分析、ディスコース分析
第6回	第5章「メディアユーザー」	オーディエンス研究、カルチュラル・スタディーズ、メディアと暴力
第7回	第6章「メディアが操作する？」	マルクス主義とイデオロギー、消費主義の神話、消費者による抵抗
第8回	第7章「ニュースの解剖学」	作られた世界の表象としてのニュース、ニュースの情報娯楽番組化
第9回	第8章「公共サービスか、個人のための娯楽か？」	公共放送、検閲、新自由主義における商業化
第10回	第9章「国民的メディアの衰退」	公共圏、想像の共同体、グローバリゼーション
第11回	第10章「メディア・エスニシティ・ディアスポラ」	人種差別とナショナリズム、ステレオタイプな表象、文化様式の多様化
第12回	第11章「メディア・ジェンダー・セクシュアリティ」	フェミニズム、異性愛主義批判、クィア・リーディング
第13回	第12章「メディアコミュニティ」	ファン・アート、ファン・グループ、コミュニティとアイデンティティ
第14回	第13章「メディアによる飽和・集団の流動性・意味の喪失」	ポストモダンのメディア論、「事実」と「虚構」、リアリティの行方

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・担当者は、必要な参考文献を調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備する。
- ・受講者は、共通テキストを精確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

【テキスト（教科書）】

ポール・ホドキンソン『メディア文化研究への招待—多声性を読み解く理論と視点』土屋武久訳、ミネルヴァ書房、2016。定価 4,000 円＋税。

【参考書】

毎回の講義で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当回の発表 60%、具体的な表象分析と理論への理解が書かれた期末レポート 40%で総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

本年度から授業担当者変更によりフィードバックはありません。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本現代文学、クィア・スタディーズ

<研究テーマ>近現代日本文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究

<主要研究業績>

- ・「クィアな自伝—映画「ムーンライト」と古谷田奈月「リリース」をつないで」『早稲田文学増刊女性号』2017年9月、pp.436-444.
- ・「ポピュラー・カルチャーと歴史認識—清家雪子「月に吠えらんねえ」における裂け目」西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える—批評・小説・ポップカルチャーをめぐる』ひつじ書房、2017年4月、pp.110-128.
- ・「pixivという未来—「クィア・アダプテーション」としての二次創作」押野武志編著『日本サブカルチャーを読む：銀河鉄道の夜からAKB48まで』北海道大学出版会、2015年4月、pp.88-199.

【Outline and objectives】

This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about Media studies. We will focus on the works of Paul Hodkinson. We will examine social and historical issues. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of the important theories on subculture. Coursework will include weekly reading of Media, culture and society : an introduction (SAGE Publications Ltd; 1 edition, 2010) in Japanese translation.

LITA500B7

国際日本学特殊講義 L II

岩川 ありさ

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、テッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』（田代素子訳、岩波現代文庫、2014）、ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（白石隆、白石さや訳、書籍工房早山、2012）の2冊を共通テキストとして読み、メディア、記憶、歴史認識、グローバル化、越境、文化的多様性といった主題について批判的に分析を行い、様々な研究領域でメディアに関する理論を応用できるようにする。

【到達目標】

- (1) 共通テキストを精確に読み、具体例を示しながら、ディスカッションを行うことができる。
- (2) 現代社会において重要なトピックをメディアに関する理論と繋ぎ、博士課程における研究に応用することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」「DP3」に関連

【授業の進め方と方法】

・毎回、1～2名の発表者が、論点整理、具体的な事例の分析、ディスカッションのための問題提起を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	講義の概要と計画、受講者の自己紹介、鍵となる概念についての説明。
第2回	『過去は死なない』(1)	第1章「過去は死んでいない」
第3回	『過去は死なない』(2)	第2章「想像しがたい過去—歴史小説の地平」
第4回	『過去は死なない』(3)	第3章「レンズに映る影—写真という記憶」
第5回	『過去は死なない』(4)	第4章「活動写真—歴史を映画化する」
第6回	『過去は死なない』(5)	第5章「視覚—漫画の見る歴史」
第7回	『過去は死なない』(6)	第6章「ランダム・アクセス・メモリー—マルチメディア時代の歴史」
第8回	『過去は死なない』(7)	第7章「歴史への真摯さ」の政治経済学に向かって」
第9回	『定本 想像の共同体』(1)	「I序」「II 文化的根源」を全員で読んできて議論を行い、担当者を決定する。
第10回	『定本 想像の共同体』(2)	「III 国民意識の起源」、「IV クレオール先駆者たち」
第11回	『定本 想像の共同体』(3)	「V 古い言語、新しいモデル」、「VI 公定ナショナリズムと帝国主義」
第12回	『定本 想像の共同体』(4)	「VII 最後の波」、「VIII 愛国心と人種主義」
第13回	『定本 想像の共同体』(5)	「IX 歴史の天使」、「X 人口調査、地図、博物館」
第14回	『定本 想像の共同体』(6)	「XI 記憶と忘却」、「旅と交通『想像の共同体』の地伝について」

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・担当者は、必要な参考文献を調べた上で、議論を喚起する形で発表できるように準備すること。

・受講者は、共通テキストを精確に読み、自分が気になった点については調べ、問題意識を持ちながら議論に参加できるようにすること。

【テキスト（教科書）】

・テッサ・モーリス・スズキ『過去は死なない—メディア・記憶・歴史』田代素子訳、岩波現代文庫、2014。定価 1,360 円＋税。

・ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』白石隆、白石さや訳、書籍工房早山、2012。定価 2,000 円＋税。

【参考書】

毎回の講義で紹介する。

【成績評価の方法と基準】

担当回の発表とディスカッションへの参加度 60%、期末レポート 40%で総合的に判断する。

【学生の意見等からの気づき】

博士課程でのプレゼンテーションや論文作成に活かせる授業を行いたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>日本現代文学、クア・スタディーズ

<研究テーマ>近現代日本文学やサブカルチャーにおけるトラウマと記憶の研究

<主要研究業績>

・「クアな自伝—映画「ムーンライト」と古谷田奈月「リリース」をつないで」『早稲田文学増刊女性号』2017年9月、pp.436-444。

・「ポピュラー・カルチャーと歴史認識—清家雪子「月に吠えらんねえ」における裂け目」西田谷洋編『文学研究から現代日本の批評を考える—批評・小説・ポップカルチャーをめぐる』ひつじ書房、2017年4月、pp.110-128。

・「pixivという未来—「クア・アダプテーション」としての二次創作」押野志志編著『日本サブカルチャーを読む—銀河鉄道の夜からAKB48まで』北海道大学出版会、2015年4月、pp.88-199。

【Outline and objectives】

This course aims at enabling students to acquire a broad range of knowledge about Media studies and nationalism. By the end of this course, students will develop a deeper understanding of important theories about the relationships of nationalism, history and mass media. Coursework will include weekly reading of The Past Within Us: Media, Memory, History, (Verso, 2005) and Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism (Verso: 1st edition, 1983) in Japanese translation.

